

シャーレ活動備忘録

あすと

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Q. 生徒のことどれくらい好きか教えて？

A. 先生「いっぱいいちゆき……」

ハピエン厨の先生が生徒達の笑顔を胸に頑張るサクセスストーリーです。

目次

Prologue

終局の回帰 | 1

箱舟の在処 | 11

愛した出会い達 | 17

正しいと言ってくれた君へ | 26

貴方を待っていた | 34

今一度、約束を | 42

純白の罪 | 50

断章 I

閑話／思想（潜在）犯 | 58

幕間 I

最果ての星 | 65

花束を抱えて | 74

貴方を信じている | 82

何時迄も、貴方を想っているから（前） | 90

何時迄も、貴方を想っているから（後） | 97

Vol. 1 アビドス対策委員会【星に手を伸ばした日】

白銀の狼 | 105

三叉路の先 | 113

篡奪の砂塵 | 120

勝利、疑問 | 128

強襲作戦 | 137

貴方は理解していない | 145

残滓 | 154

便利屋、始動	162
黒見セリカの最悪な1日	171
空に映る	179
対峙	187
暗がりからの逃避	196
うたかたの	204
無垢の罰	213
定例会議	220
黄金の中庸	230
便利屋来訪	237
ほどけた指先	245
ブラックマーケットにて	253
縁を食む	262
最速の銀行強盗	271
銀行終了のお知らせ	283
その足を踏み出した	290
不快、腐海	299
花に蝶を	307
滅びの前日譚	314
神の知識 (ザフキエル)	321
Gun, or Death	330
反撃	339
ゲヘナ風紀委員、参戦	346
決着	354
思惑、交差	362

ゲヘナ学園風紀委員長	369
最強の証明	377
間に合わなかった少女	385
代償	393
貴方の守り方	400
忍び寄る悪意	407
不和	415
虚の道	422
連鎖する悪意	432
残照、暁を呑む	441
真昼の太陽	448
誰が影を追い	456
悪意の主	464
皇帝の場	472
大人VS大人	486
貴方の怒り	493
凜然	501
堕ち逝く星に	507
末期の祈りを	514
秘匿	524
最後の嘘	531
ホシに届かなくて	540
星(きみ)を離さない	547
先を生きる	555
聖戦	563

違いを痛感する静観の理解者	569
神秘、証明	577
其は、命へ至る輝き	584
主の権能／空の星を、この手に	592
■、■、■	600
天命の元に	608
メサイアの条件	616
夜明けの太陽	623
夢の続き	631
幕間Ⅱ	
鯨の転寝	639
新たな始まりを告げて	650
誰かを迎える花	659
或る記憶	667
Vol. 2 時計じかけの花のパヴァーヌ【ユア・ネーム・イズ】	
Let's Go New Game!	677
不思議の国の目覚め	689
その名はアリス	698
世界の色彩を知る	709
光の剣	716
廃墟の国	730
鏡を求めて	745
Cleaning&Clearing	761
勇者の条件	777
終わらない戦い	791

約束された勝利（ダブルオー）

掴み取った未来

会合

輝かしい日々

アリスの冒険

斬刑

ビッグシスターの決断

童話のお終い（めでたしめでたし）

理屈ではなく

作戦会議

その果てが地獄でも

エリドゥ突入作戦

歪む生命論

要塞都市の所以

神髄

死の淵に立ち

それでも、前へ

明日の行方

罪を見上げて

誰かの為の

悲劇の最少化

危機

黄金を穿つ

零の先

チエツクメイト

807

818

831

839

845

863

875

884

892

906

913

921

928

934

947

954

960

967

974

982

992

1002

1013

1027

1043

激戦の観測者

逆転の契機

託した者、託された者

その手は誰かを

境界線の上に立ち

束の間の

結末に至る一

撃鉄が下ろされる時

駆ける場所

原初の怒り

足掻いて、足掻いて

花を食む

Over Count 00

瓦解する完全性

終焉へ向かう疾走

コールサイン、約束された勝利（ダブルオー）

誰かの願い

繋いだ手が離れても

己が心に決着を

亡き王女のためのパヴァーヌ I

亡き王女のためのパヴァーヌ II

亡き王女のためのパヴァーヌ III

亡き王女のためのパヴァーヌ IV

亡き王女のためのパヴァーヌ V

亡き王女のためのパヴァーヌ VI

大切な君（アリス）へ
鍵ではない君（ケイ）
明けない夜を超えるために
少女達の旅路はいつまでも（めでたしめでたし）

幕間Ⅲ

最強の会合

— I —

ビッグシスターの不可解な一日 I

ビッグシスターの不可解な一日 II

四十八月の深夜、貴方の隣にアイリスが咲く

布石

雨傘の咲く6月、私は貴方に愛を送る I

雨傘の咲く6月、私は貴方に愛を送る II

雨傘の咲く6月、私は貴方に愛を送る III

雨傘の咲く6月、私は貴方に愛を送る IV

雨傘の咲く6月、私は貴方に愛を送る V

何でもない、ある日

断章Ⅱ

閑話／哀歌（ラメント）

VOI3. エデン条約編【天から零落する救世主】

虚無はもういないあの子の夢を見るか

第一の落陽、楽園の証明

Prologue

終局の回帰

キヴオトスとは箱舟である。

少女達という希望を送り届けるための学園都市であり、此処ではない何処かへ旅立つための機構だ。

キヴオトスとは箱庭である。

神秘を観測するためのメガロポリス規模のモデルケース。崇高の器、ゲマトリアが目指したソレに最も近い存在が住まう場所だ。

キヴオトスとは楽園である。

危ない事はあるが、毎日を笑顔で生きている少女達がいる。

現在のキヴオトスは――。

地獄であった。

アビドス高等学校は洪水に沈んだ。

アリウス分校は地割れに飲み込まれた。

ヴァルキューレ警察学校は嵐に消えた。

ゲヘナ学園は硫黄と火に焼き尽くされた。

山海経高級中学校は氷河に覆われた。

トリニティ総合学園は暗黒に呑まれた。

百鬼夜行連合学院は酸の雨で溶かされた。

ミレニアムサイエンススクールは塩の柱になった。

レッドウィンター連邦学園は灰に埋もれた。

SRT特殊学園は蝗に食られた。
連邦生徒会は流星で滅ぼされた。

無論、これらの学校だけではない。キヴオトスに存在する数千の学校全てが血に濡れた。生き残った生徒はごく僅か。この学園都市に住まう多くの生徒たちは大きな意志の身勝手な失望に嬲り殺された。とは言っても、初めからここまで絶望的な状況ではなかった。キヴオトス戦役と名付けられたこの動乱は、最初の内は不利程度だったのだ。崇高の器の失敗作、悪性偽典のレプリカをインストールされた堕ちた偽神の軍勢は空を焼く程であったが……それでも、強力な神秘を宿した生徒達ならば勝てない相手ではなかった。

そして。
『私は、最期まで君達の味方として——ここで戦う。ここで抗う』

キヴオトスで生徒と親交を深めたシャーレの先生がこのように宣言した事が大きかったのだろう。ミレニウムが、ゲヘナが、トリニティが、アリウスが——悉くの学校と生徒が彼の言葉に呼応し、響を並べた。更に先生の指揮も合わさり、無限に轟く不滅の軍勢を相手に平衡状態まで持ち直したのだ。

力を合わせれば、どんな困難だって乗り越えられる。先生がいれば何度だって立ち上がれる。生徒達は誰もがそう思い、輝く青春を取り戻そうと必死になって前を向いていた。

故に、過去を振り向いていた少女に誰も気づかなかった。

——先生を殺害すればキヴオトスから手を引く。

そんな取引を持ち込まれた彼女は、戦線で重傷を負った親友がいたのだ。命は助かったものの昏睡状態で、いつ目を覚ますか分からないその姿に自分の将来を重ねてしまい——その決断に至った。

深夜の2時にシャーレへ忍び込み、戦術を練っていた先生に銃口を向けた。ヘイローもない、一発の銃弾で死んでしまう彼に過剰な暴力は不要だ。9mm口径で容易く旅立てる。ガタガタと不恰好に震える銃のサイトの先には、少女を優しく見つめる先生がいた。

先生は彼女の事を決して責めなかった。キヴオトスの安全を、親友

を選択した少女の判断を心の底から尊重していたのだ。

『自分の命一つでキヴオトスの安全が手に入るなら上等だよ』と。

『君をここまで追い詰めてしまつてごめん』と。

『君の心を傷つけたこと、君の大切な友達を守れなかったこと……その全てに謝罪させてほしい』と。

別に少女は先生に謝つてほしいわけではなかった。この戦線が先生の尽力により成立している事はよく分かつている。死者を出さず、負傷者のみで抑えている彼の手腕には感服しているし、以前の日常生活で助けられたこともあつた。故に、感謝こそあれど恨みなんて欠片もなかった。

ただ、彼の命よりも、親友が喪われる痛みが————終わりが見えない戦いへ身を投じる恐怖が上回つただけで。

泣きじやくりながら謝る少女に『君は悪くない、君は何も悪くないんだよ』と何度も優しく赦して、溶かして。

先生にも、やり残した事はある。後悔も未練もある。だからこそ、迷いはなかった。

先生とは『先を生きる者』だ。先を生きる以上、先に死ぬのは自然の摂理。次世代を生きる幼年期を終えたばかりの少女達は輝く美しい世界を、夢を描くと信じていた。先立としてその礎になれるなら本望だつた。

それに加えて、彼は大人のカードの使用により既に先は長くなかつたのだ。保つてあと一週間の段階まで寿命を消費していた彼は『潮時だろう』と己の命を諦めた。あまりにも、呆気なく。

少女が疑われないようにアリバイを作成し、帰らせて。その後、『希望を持たせてしまった責任』を取るべく、自身の身辺整理を行なつた。この命でできる最後の仕事をしよう。

今後の動きや戦術指揮の案、シャールレの先生としての権限全てをリオンに委託する旨を書いた————滅びに抗う道の提示。

キヴオトスからの脱出方法————滅びから逃げる道の提示。

最期に遺書と生徒をケアする目的を含んだ手紙を認めてからペンを置き————そして。

「——黒服」

「はい、先生」

返事はすぐに帰ってきた。闇に溶けるような黒を見た先生は、口元を少し緩めて。

「あの子に持ち掛けた契約、貴方の仕業だろう？ 私の生徒の手を血で染めさせようとしたその魂胆、気に食わないな」

「そこは申し訳ないです。ただ、我々も余裕がなく……」

そう言う黒服には確かに疲れが見えた。彼は彼で色々奔走していたのだろう。妙に人間味の溢れた仕草が少し可笑しかった。

だが、黒服のその疲れも一瞬で——直ぐに、真剣な表情へと切り替わった。

「——先生」

「ああ、いいよ。出来るんだろう？ なら、頼むよ」

黒服の提案は先生の遺体という最上の聖遺物を使って奇跡を起こす事だった。

これが果たされればキヴオトスに巢食う問題は薙ぎ払われる。生徒に流血を強いずに済む。

「マエストロとゴルゴнда、デカルコマニーはなんて言っていた？」

「貴方の決断を尊重する、と」

「そっか」

先生は少しだけ顔を綻ばせる。存外、ゲマトリアには信頼されて、高く買われていたようだ。

——生徒の為と嘯きながら命を終わらせる己を。こんな、私を。

「必要なのは貴方の心臓です。それ以外は貴方の一存に委ねますが……どの様に？ 生徒に引き渡しますか？ それとも、我々が？」

「弔いの話かい？」

「ええ。どちらを選んでも貴方は丁重に埋葬されるでしょう。あとは好みの問題です。我々か、子供達か」

「でしようって……まさか」

その危惧を黒服は肩を竦めながら。

「ええ。私も貴方と共に消えます」

「……驚いた。まさかそんな選択をするとはね」

「貴方に絆されたのかもしれない。存外、心地の良いものですね」

2人の間に流れる旧友の様な空気。それが、最後だった。



朝、先生は黒服に持ち掛けられた契約を全て話した。

生徒は当然の如く猛反対した。

住民は『先生とは言え、1人の犠牲で戦いが終わるなら』と消極的な賛成を見せた。

彼と敵対した事のあるカイザーは大いに賛成したが、それが生徒や黒服の逆鱗に触れたのか本社が吹き飛んだ。

連邦生徒会は満場一致の大反対。彼をよく思わず、シャーレを排除しようとしたカヤですら猛反対した。

だが——彼は止まらなかつた、止まれなかつた。彼が何よりも欲したのは、自分が生徒と共に歩める明日ではなく、生徒達の明日であつたから。生徒達の景色の先に自分が居なくても良かったのだ。

それから彼は一人一人生徒を説き伏せて、納得させて、最期の別れを済ませて——リンの承認を貰つた。泣きじやくりながら判を押した彼女の顔を、行かないでと縋つた彼女を彼は生涯忘れないだろう。

斯くして、先生の心臓は世界に捧げられた。救世主の心臓という至高の聖遺物が為した奇跡は世界の救済。戦いに塗れていた日々が嘘だったかのようになり日常が戻つて来た。

敵はいない。悪意はない。殺意はない。だが、彼もいない。

明日を求める心が、平和を望む心が彼を殺した。キヴオトスの民意が彼を殺してしまった。

確かに、それが彼の望みだったのかもしれない。優しい彼は自分よりも他の誰かの幸福を喜んだ。誰かの為に尽くすことを望んだ。生徒を心の底から愛するが故に、自身の先を閉ざす事を選んだ。

自分達はそれを止められなかった。たった一人、世界の為に身を捧げる彼を。本当の最期、その命を天に返そうとしたその時誰かが言った。「やめてください。こんな話、ふざけている」と。でも彼は。

「でも、私は逃げないよ。できるだけ遅く会いに来てね」

「じゃあね、皆」

そう言つて、逝つて。

式は厳かに、シスターフッドを中心にして行われて——その最中、ずつと気丈に、敬虔なシスターとして振る舞っていたマリイが崩れ落ちた。火葬場に向かう彼の遺体に向けて「行かないで」と遅すぎる後悔を口にして。

特に聖園ミカの慟哭は凄まじかった。彼に『私の大切なお姫様』と面と向かつて言われ、彼女の罪を少しでも軽くするために東奔西走していた——王子様が突然失われた。

先生に思いを寄せる生徒は多くいるが、彼女ほど熱烈な恋心を抱いている人はいないだろう。『あの人の全部に恋してる』と頬を赤らめて幸せそうに笑つた彼女は、その恋の行方と届け先を亡くしてしまつた。

エデン条約の件で見せた涙よりも数段悲痛で、深い絶望に彼女は囚われていた。か細い声で『いや、いや……先生、置いていかないで』と泣きじやくる少女。幼馴染のナギサも彼女を慰める言葉を持たず、ただ一緒に泣くことしかできなかった。

お姫様は王子様のキスで目覚める事は出来ても、その逆は無理だった。精々、その涙で視力を取り戻す事くらいしか出来ず——失われた命は戻せない。寧ろ、ミカ自身が彼のために流した涙で盲目になつてしまう程だった。それはまるでラプンツェルのように。

彼女達は皆、先生の暖かさを知っている。その手の温もりを、その眼差しの優しさを、全てを許すあの微笑みを。

それが失われた。二度と手が届かないものになつてしまった。棺に入れられている彼は凍えそうなほど冷たい。シャーレに訪れた時、優しい顔を向けてくれた彼はもういない——その事実が認められないほど、悍ましくて。誰もが悲しみで一杯だった。

でも、それでも彼が命を捧げて守った『先』を台無しにしないために、遠くに行つてしまった彼に呆れられないように日々を送っていた少女達に突き付けられたのは『お前達はいらぬ』という、上位者の声だった。

善意が神意によつて無価値となり、悪意はより加速する。

全て、初めから夢だったようにキヴオトスの輪郭が崩れ始めた。

こうして、少女達の箱庭は滅んだ。先生の死からほんの2ヶ月で生徒の為に死んだ先生は結局の所、大量死の引き金にしかならなかった。悲しみと怒りと憎しみは伝染病のように駆け巡り、皆が愛した美しい箱庭は地獄を煮詰めたような場所へ変貌した。

その後、7つの嘆き———その中の一つ、終局の七が訪れてキヴオトスは末期の夢すら見ることも無く闇に消えた。

それが、この回帰の結末であつた。



キヴオトスには滅びがある。それも、単一ではなく複数。星の運航を正常にする為にキヴオトスにプリセットされたソフトウエア……それこそが、先生が『滅び』や『終末装置』と呼ぶものの正体であつた。

ジェリコの古則、七つの嘆き———先生がキヴオトスに来る際の対価にして契約。

十の災い———キヴオトスの契機になったもの。

デカグラマトン 神名十文字———神の存在証明の為のシステム。

アンチ・デカグラマトン 邪悪十文字———神の不在証明の為のシステム。

七つの災い、七つの封印、七つのラツパ———四の騎士。

最後に訪れる666と、テトラグラマトン 聖四文字。

これらは全てキヴオトスに予めインストールされた自壊システム。先生が回帰の果てに見つけ出した忌々しい終焉ども。

神秘を扱う箱庭を跡形もなく滅ぼす為のリセットボタン。

彼が心の底から愛した少女達の笑顔と居場所を奪う不倶戴天の怨

敵だ。必ず解体すると心に誓い、そしてそれは終ぞ果たされなかった。

「——ああ」

先生は真っ白な空間にいた。次の回帰のまでのインターバル。救えなかつた生徒達の死を見続け、悲鳴を聞き続ける……先生にとつては何よりも辛い責め苦。

とある小説の登場人物は『地獄はここにあります。頭のなか、脳みそのなかに。大脳皮質の襞のパターンに』と言った。

ならばこの光景こそが地獄なのだろう。目を閉じて、耳を塞いで逃れる事はできない。先生の脳に、魂に、クオリアにインストールされて……ずっと彼を苛み続けている。

守りたいものが掌から溢れていく感覚は何度味わっても死んでしまふようなほど苦しく、生徒達の顔が苦痛に歪むのが見ていられなくて。

この世の悪感情を全て煮詰めて濃縮したような表情で世界を眺めている彼に、不意に軽い衝撃が襲った。まるで天使の羽にぶつかったような、そんな優しい衝突。彼の視界の端で青空が踊った。

「アロナ」

彼はひどく愛おしそうに、その名前を呟いた。彼の腰に抱きつき声も出さず啜り泣いている少女は、ずっとそばにいてくれた頼れる相棒にして一番悲しませてしまった己の罪悪の象徴。

「ごめんなさい、先生……」

「いいんだ。今回も私が無能だっただけで……君が謝ることなんて一つもない」

先生は屈んで膝立ちになり、青い少女の顔を真正面から見つめる。彼女の愛らしい大きな瞳から溢れる涙を優しく拭いながら。

彼が言う通り、アロナが謝るべきことなんて一つもない。

キヴォトスに来てから最後までずっと、その傍らにいてくれた。ずっと味方をしてくれた。ずっと助けてくれた。ずっと守ってくれた。

そんな彼女に、少しでも恩返しができるように。

「先生……」

「アロナ、私はあとどれくらい保つかな？」

かひゆ、とアロナの口から悲鳴になり損ねた吐息が漏れた。そして目を伏せて俯く。彼の顔を直視できない。だけど。

「あと、一回……耐えられるか耐えられないか、です」

それは正しく余命宣告だった。彼に押し付けられたやり直しのチケットは既に底を尽きている。

この回帰を終えたら最後、彼は一人ぼっちの夜に行くことになってしまう。凡ゆる宗教で、神話で語り尽くされた全ての死後から外れて

——永遠の孤独に。

それが望んでもない回帰の代償であり対価。彼に与えられた運命であつた。

「……そうかい。教えてくれてありがとう」

その余りにも残酷な仕打ちを、彼は受け止めた。受け止めてしまった。

「……悲観、しないんですか？」

「しないさ。死んでも終わりがなかった方が不思議だったんだ。私は明確な死を与えられたことで……漸く他の生命と同じになれた。それは、きつと喜ばしいことだと思う」

——だからどうか、気に病まないで。君が泣いてしまうと、私も泣きそうになるんだ。

「それに、私はあの場所が好きなんだ。大人として、先生としてだけではなく……あの場所を愛して、生徒達に救われた一つの命として全ての滅びに抗う」

彼は生徒達を救い、心の底から愛した。それと同時に、生徒達もまた彼を救い、愛した。大人として、先生として、一人の人間として数多の生徒と向き合ってきた。

故に、この決断は必然であつた。

キヴォトスの滅びを天上の視座から見届け、決意と覚悟を更に固く。残骸に成り果てた灰の精神に火を灯し、傷だらけの心と体を前

へ、前へ、前へと動かす。

最後の回帰。最後の生命。果たせなかつた数多の約束を胸に、先生は終幕へと疾走する。

——全ては生徒達の笑顔が為に。彼女達と共に、輝く蒼穹の空を見上げたいから。

「私は燃え尽きるまで走り続ける。だからアロナ、もう一度だけ力を貸してほしい」

「勿論です！ このアロナ、最後まで、お側に」

——さあ、完膚無きまでのハッピーエンドを。

箱舟の在処

——我々は望む、七つの嘆きを。

——我々は覚えている、ジェリコの古則を。



「……私のミスでした」

白い構造体の中。眼前に座っているのはハイローを失った少女。真っ白な制服を汚す赤い血、脆弱な人の体。彼女はその超常性を失っていた。

2人の間を、紙飛行機がくるりくるりと飛んでいる。

夢を見るということはレム睡眠に付随する現象なのだろう。意識や精神活動は脳のニューロンの電氣的活動に基づいたものだが、意識が覚醒状態にある際の行動の大部分が意識には上らない……無意識の脳活動の影響を受けている。深い眠り……レム睡眠中の夢では自己意識はない。そういった夢の中で、自分は夢を見ていると自覚、認識することはごく稀なケースである。

だが、先生は『これは夢だ』と正しく認識していた。

目の前の少女は、彼を導いてくれた彼女はもういない。故に積み重ねてきた記憶のリフレインだと確信している。

明晰夢は特異なシチュエーションだ。レム催眠にあつて、覚醒まではいかなくても限りなくそこに近い場所になくってはならない、と実験から仮定されている。前頭葉の半覚醒状態とも。

揺蕩っているのだ。微睡みと現の狭間で、大脳皮質が作り出した悪夢の世界に囚われている。それに恐怖を感じるわけではない。

ふと視線を下げると、膝から下が無い右足と肩口から捻じ切れた左腕が目に入る。腹部は裂かれていて、内臓の毒々しい赤が彩度のきついコントラストを生んでいる。それを認識して初めて、『痛み』が襲ってきた。記憶から再現された信号は、本物と寸分違わぬリアリティを

以って彼に喰らいつく。

——これは、最初の回帰。その記憶だ。

こうやって彼女と一緒に逃避行をして——託された。未来を、生徒達を。

「私の選択、そしてそれによつて招かれたこの全ての状況。結局、この結果にたどり着いて初めて、あなたの方が正しかった事を悟るだなんて……」

懺悔にも、慟哭に見えた。逆光で窺い知れないその表情はきつと、後悔と自己嫌悪で一杯だろう。

君は悪くない、君は何も悪くない——そんな言葉が慰めにもならないなんて事は彼自身が一番分かっているのに、それでも叫ばざるを得なかった。

君の選択は誰にも否定させない。例えば君自身であろうと否定させない。その尊さを、誰よりも知っているから。

「今更凶々しいですが、お願いします——先生」

それは懇願。彼女が最後まで持っていた誇り、意地、プライド……そういったものを全て投げ捨てて行われる願ひ事。キヴオトスの為に、彼女は全てを差し出そうとしていた。

「きつと私の話は忘れてしまうでしょうが、それでも構いません。何も思い出せなくても、恐らくあなたは同じ状況で、同じ選択をされるでしょうから。ですから……大事なものは経験ではなく、選択。あなたにしかできない選択の数々」

先生が生徒を心の底から思っていることは彼女が一番よく知っていた。生徒に寄り添い、絆を深め、笑いあい……信頼された。故に彼は必ず同じ選択をする。決して道を違えないと確信していた。

「責任を負う者について話した事がありましたね。あの時の私には分かりませんでした……今なら理解できます」

彼女はふと、彼とした会話を思い出した。別に特異なシチュエーションだったわけではない。本当に、何でもない1日の中で、ロビーで交わした言葉。

「大人としての責任と義務。そして、その延長線上にあった、あなたの

選択。それが意味する心構えも」

——自分の存在を自分で肯定してあげる事が、責任の本質だと思ふよ。

彼の責任論が、彼女の両肩に重く乗る。彼がそういう意図で言ったわけではないのは重々承知しているが、その言葉は彼女を縊る帯になつてしまつた。

「ですから、先生。私が信じられる大人である、あなたになら、この捻れて歪んだ終着点とは、また別の結果を。そこへ繋がる選択肢は、きつと見つかるはずです」

楽園から最も遠かつた人、楽園の真実に最も近かつた人、キヴオトスにおいては異物だった人。それでも、この場所と住まう人達を心の底から愛してくれた。きつと、その善性で開ける道がある。

人を傷つける道具を決して握らない彼の両手は空いている。だから、誰かと手を繋げる。誰かを抱きしめられる。それが、彼の何よりの強さだと彼女はよく知っている。

「だから先生、どうか——」

その懇願に、先生は強く頷いた。紛れもなく、彼の意志で。その願いの対価は先生自身の全てである事も知っていて尚、彼女のキヴオトスを愛する心に応えたいと思っている。

彼女の愛を嘘にしたくない。

その信頼を無価値にしたくない。

生徒達を愛する心は、何よりも尊い真実だから。

故に、彼は自分自身を世界に差し出した。そこに後悔も未練もない。

『キヴオトスに、生徒達に輝く笑顔と明日を。どれだけ時間がかかっても、彼女達を救つてみせる』

彼女との契り。それは、彼の中のコンパスであり指針。何があつても揺らぐことがない彼の真実。

その言葉に嘘はない。ああ、だけど——。

『君の笑顔は、終ぞ見ることは叶わなかつたなあ——そんな思いを、彼は激痛と共に飲み込んだ。』

「い。——ください」

声が届く。誰かが自分を呼ぶ——鋭利な声色。

それに応じて意識が浮上する。遠くにあつた自我が肉体に引き戻されて、物質に過ぎなかった体が生命になるように。それは宛ら、『先生』と呼ばれる個体が再起動したようにも見えた。

「先生、起きてください」

目をゆつくりと開く。瞳孔が光量を調節し、ぼやけたピントが最適化されて正しい視覚情報を脳に伝達する。清潔感のあるオフィスのような部屋と眼前に立つ少女が、覚醒したばかりの脳に入り込む。

「起きてますか？ 先生」

「……ああ、起きていますよ」

睡眠——どちらかと言うと気絶の方が近いかもしれない——後の乾燥した喉から出た声が空気を震わせる。

「少々待っていて下さいと云いましたのに、お疲れだったみたいですね。少し目を離れた際に睡眠されるとは……」

「すまないね……ここは連邦生徒会のロビー……で、合っているかい？」

「はい。先生はそこでレム睡眠されていました」

先生のノイズ混じりの記憶の中から手繰り寄せた答えはどうやら合っていたらしく、目の前の少女から肯定の返答を貰えた。

それにしても、記憶の欠落が酷い。元々全ての記憶を引き継げる訳ではなかったが、今回は一段と忘却しているものが多い。これが回帰前にあの子が言っていた精神の摩耗というものだろう。何を覚えていて、何を忘れていたのかを後できちんと精査しなければならぬ。分かってはいたつもりだったが、こうも明確に突きつけられると思う所もある。断頭台に立っているような気分だ。

——酷い感傷だ。これから死ぬ自分に同情しないと決めただろう？

酷薄な自分と、それを嘲る自分を苦味と共に飲み干して、若干痺れた手をソファに突いて上体を起こす。そして、自分を呼んだ少女を視界に入れる。理知的な、大人びた美人。少し尖った耳と流麗な黒髪が特徴的な彼女は、何とも形容し難い——呆れを含んでいるのは分かる——表情で先生を見ていた。

「……リン、七神リン……」

彼はその名前を噛み締めるように呟く。呼び慣れた音、聞きなれた声。彼女の姿を見るだけで涙が溢れそうになる。だけど、先生に泣く権利はない。そんな弱さは随分前に捨て去ってしまった。

「はい、七神リンです……何か、夢でも見られていたんですか？」

恐る恐る、という言葉が似合うくらいにリンは彼に問いかける。踏み込んでいいものか、それとも……そんな逡巡が見え隠れする問いかけ。

眠っている彼は酷く辛そうな顔をしていた。酷く幸せそうな顔をしていた。矛盾する二項を同時に内包する彼の寝顔は次の瞬間にも消えそうな儚さを見せつけていた。

そのリンの疑問に、彼は少し笑って。

「……そう、だね。夢を見ていたんだ。きつと、いい夢を」

苦しく辛い記憶だが、それと同じくらい大切なものだと胸を張って。

一度もやらない方が良かったなんて思えなかった。キヴオトスに來なければよかった、なんて欠片も抱かなかった。

たとえば、最期は運命ロンギヌスに貫かれるとしても。

「そうですね。ですが、きちんと集中してくださいね。これから貴方には、沢山の仕事が待っていますので……状況説明は必要ですか？」
「いや、問題ないよ。ある程度は把握している」

四肢の感覚を確かめて立ち上がる。痛みはない。違和感はない。触覚も正常に機能している。靴底から伝わるリノリウムの感触。革のソファの手触り。

ふと、先生は窓の外を見る。青い、蒼い空。理路整然としたキヴオトス、学園都市。笑い合う生徒達。眼前に広がるそれらは平穏を享受

しており、とても美しい日常を紡いでいる。

——まだ、何処も赤くない。

拳を硬く握りしめ、『必ず成し遂げてみせる』と天に宣誓する。この居場所を、彼女達の心と体を絶対に守ってみせる。

愛した彼女達を救おう——今度こそ。

「落ち着いていますね。呼び出されたばかりというのに……」

「ある程度は慣れているよ。突発的な出来事も……そこから生まれるものも」

リンの疑問に、彼は朗らかに答えた。だが、実際は慣れているどころではない。彼は数えきれない程の回数、この出会いを繰り返してきた。

「そうですか……いえ、不要な詮索はしません。貴方は連邦生徒会長に選ばれた方ですから、事情も色々とお有りなのでしょう」

「ありがとう」

そういう優しさは変わらないね、と彼は心の中で思い、微笑む。その微笑を見て問題ないと判断したのか、リンは「こちらへ」と言って歩き出す。先生も彼女の半歩後ろにつく。目的地は数台あるエレベーターの一つ。この階に待機しているものがあった。

しなやかな指でボタンを押し込みドアを開けて、リンは先生の搭乗を促す。彼はそれに従って乗り込み、眼前に広がる少女達の方舟を眺めながら上層へ登っていく。

透明な表情で世界を見つめる彼にリンは一言、微笑みかけながら告げた。

「キヴォトスへようこそ、先生」

——貴方を此処の一員として歓迎します。

愛した出会い達

「ちよつと待って代行！ 見つけた、待っていたわよ！ 連邦生徒会長を呼んで来て！」

「主席行政官、お待ちしております」

「連邦生徒会長に会いに来ました。風紀委員長が現在の状況について納得のいく回答を要求されています」

「トリニティ自警団、守月スズミです。現状について連邦生徒会長の意見を聞きに参りました」

レセプションルームに到着した先生とリンを出迎えたのは、混乱した雰囲気と厳粛な対応を求める声だった。

ミレニアムサイエンススクール、セミナーの早瀬ユウカ。

トリニティ総合学園、正義実現委員会の羽川ハスミとトリニティ自警団の守月スズミ。

ゲヘナ学園、風紀委員の火宮チナツ。

ざわついている外野から代表するように声を上げたこの四人は、キヴォトス屈指のマンモス校の代表組織、あるいは治安維持組織に属している。ゆえに、ここで起きている未曾有の事態の責任を問いに来たのだろう。

連邦生徒会の首席行政官たるリンの到着に、彼女達を押しとどめ対応していた行政官の顔色が明るくなった。反面、リンは顔を顰めた。

「ああ……面倒な人達につかまってしまいましたね」

ポツリと呟き、ため息を一回。そして、リンは頭を切り替える。

「こんにちは、各学園から態々ここまで訪問してくださいました生徒会、風紀委員会、その他時間を持て余している皆さん。こんな暇そ……いえ、大事な方々が此処を訪ねてきた理由はよく分かっています。今、学園都市に起きている混乱の責任を問うために……でしよう？」

言葉の節々に毒と皮肉を混ぜつつ、確認を取る。それは言外に『お前達にかまっている時間と余裕はない』と言っているようであった。

尚、この場にいながら現状仲間外れの先生は『リンも中々この子タフだよ

ねえ』なんて、至極どうでもいい感想を抱いている。

「そこまで分かっているなら何とかしなさいよ！ その為の連邦生徒会なんですよ！ 数千もの学園自治区が混乱に陥ってるのよ！ この前なんか、うちの学校の風力発電所がシャットダウンしたんだから！」

「連邦矯正局で停学中の生徒達について、一部が脱走したという情報もありました」

「スケバンのような不良達が登校中のうちの生徒達を襲う頻度も、最近急激に高くなりました。治安の維持が難しくなっています」

「戦車やヘリコプターなど、出所のわからない武器の不法流通も200%以上増加しています、これでは正常な学園生活に支障が生じてしまいます」

ユウカ、チナツ、スズミ、ハスミの順で現状を口にする。学生の自治が、治安維持機能が完全に麻痺していることが痛いほどよく分かる惨憺たる状態だった。

電力というライフラインの途絶、キヴオトスの規範から外れてしまった生徒達、そしてそれらの危険な集団に武器という手段を提供する何か。

つまり、キヴオトスは割と崖っぷちであった。尤も、先生が知るエデン条約絡みの件等に比べれば随分可愛らしい火遊び程度であるが、それでもかなり不味い状況であるのには変わらない。

リンは無言で、彼女達の析出した不満に耳を傾けている。

「こんな状況で連邦生徒会長は何をしているの？ どうして何週間も姿を見せないの？ 今すぐに会わせて！」

「連邦生徒会長は今、席におりません。正直に言いますと、行方不明になりました」

キヴオトスの行政全てを一手に担い、運営している機関の最高責任者の不在。それはこの場にいる全生徒を驚愕させるには充分すぎる威力の爆弾であった。

「…………え!?!」

「…………!」

「やはりあの噂は……」

ユウカ、チナツ、ハスミは驚愕で目を見開く。スズミはその言葉がまだ真実か否かを判断しかねているようで、驚愕を表情に出さずリンに視線を向けた。『続きを』と。

「結論から言うと、サンクトウムタワーの最終管理者がいなくなったため、今の連邦生徒会は行政制御権を失った状態です。認証を迂回できる方法を探していましたが……先ほどまで、その様な方法は見つかっていませんでした」

「それでは、今は方法があるということですか、首席行政官？」

その言葉にリンは「はい」と肯定して、少し身体を横に移動させた。先生の姿を4名に見せるように。

「この先生こそが、ファイクサーになってくれるはずです」

「この方が？」

投げかけられた視線を先生は受け止め、リンの半歩後ろから……半歩前へ。物腰は柔らかに、紡ぐ言葉一つ一つに万感の思いをのせて。この出会いに祝福を。

「初めまして。私は連邦生徒会長から、とある部活の担当顧問を拝命した『先生』だよ。これからよろしくね」

先生を知らぬ君達へ送る、君達を知っている先生からの『はじめまして』。

「え、あ、はい……よろしくお願いします……」

ユウカは現在進行形で彼に掻き乱されていた。初対面のはずなのに、そうだとは思えない。彼を見ていると安心して、優しい気持ちになつて、でも涙が出るほど悲しくて、死んでしまいたいほど悔しくて……どうしようもないほど、愛おしくて。

差し出された右手。繋いだら何処までも連れて行ってくれそうな、優しく暖かい温度。ユウカは恐る恐る、その指先に触れようと手を伸ばし――。

「――じゃなくて！ 挨拶してる場合じゃ……！」

はっと正気に戻る。まるで自分が自分でなくなったような感覚だった。先生に酩酊したような、夢を見ていたような……そんな感

覚。

湧き出した感情を隠すように、触れようとした手を押さえるようにユウカは本題へと逃避した。先生を視界から意図的に外して、リンだけを見る。この状態で彼を見てしまうと——今度こそ、あの胸で泣いてしまいそうだったから。

先生が手を差し出してくれたのに握手しなかった事にユウカは罪悪感を覚えるものの、当の本人はあまり気にしていない様子で微笑んでいた。『握手はお預けだね』なんて思いながら。

「彼をバックドアとして、サンクトウムタワーの権限にアクセスします。先生は元々、連邦生徒会長が立ち上げたある部活の担当顧問として、此方に来る事になっていましたから可能なはずです」

「その部活は？」

「連邦捜査部、シャーレ。」

便宜上部活と呼称しておりますが、一種の超法規的機関です。所属は連邦組織になりますのでキヴォトスに存在する全ての学園の生徒たちを制限なく加入させる事が可能です。更に各学園の自治区で、制約なしで戦闘行動も許可されています。

なぜ、これだけの権限を持つ機関を、連邦生徒会長が作ったのかは分かりませんが……」

彼女の疑問は尤もだろう。言うなれば簡易的な連邦生徒会。しかもフットワークは比較的軽く、権力以外に武力も行使することができ。各学園の生徒会や治安維持部隊には良い顔はされないだろう。公的に治外法権が認められている組織なんて不信感しか抱かれないはずだ。

「シャーレの部室はここから30km離れた外郭地区にあります。今は殆ど何も無い建物ですが……連邦生徒会長の命令でその建物の地下にとある物を持ち込んでいます——先生を其処にお連れしなければなりません」

リンはそう言って、端末を取り出して連絡先をタップ。数コールした後、回線が繋がった。

「モモカ、シャーレの部室に直行するヘリが必要なんだけど……」

『シャーレの部室？ ……ああ、外郭地区の？ ……そこ、今大騒ぎだけど？』

「大騒ぎ？」

オウム返しのように呟かれた疑問の言葉。リンの知らない所で、既に事態は大きく動いていたのだ。

『矯正局を脱出した停学中の生徒が騒ぎを起こしたの。そこは今戦場になってるよ』

「……うん？」

事態がまだ飲み込めていない様子のリン……否、飲み込んでいるが故に、それを現実と認めたくないのだろう。それを認めるということはずつまり、解決しなければならぬ事件が一つ増えるということだから。

リンの眉間に皺が寄る。

『連邦生徒会に恨みを抱いて、地域の不良たちを先頭に周りを焼け野原にしているみたいなの。巡航戦車までどつかから手に入れて来たみたいだよ？ ……それで、連邦生徒会所有のシャーレ部室を占拠しようとしているみたいなの。まるでそこに大事なものがあるみたいなの動きだけだよ？』

「………」

『まあでも、とつくに滅茶苦茶な場所なんだから別に大した事な——
——あ、先輩！ ……頼んでいたお昼ご飯のデリバリーが来たから、また連絡するね！』

一方的に切られた通話。居心地の悪い沈黙が流れて、リンの持つ端末から画面が剥離する音と軋む音が聞こえた。集まった4人の生徒は、リンの余計な怒りを買わない様に少し距離を置いている。

特に罪はないが虐待されて現在進行形で悲鳴をあげているスマホに合掌しながら、先生は「大丈夫？」と穏やかに声をかけた。冗談抜きで、彼には彼女が心労で倒れて胃に穴が空いてしまいそうに見える。終わったらきちんと労ってあげなきゃ、と思って。

「……大丈夫です、少々問題が発生しましたが大したことではありません」

そう言つて、一步引いた4人をじつと見つめるリン。ユウカ達は面倒事の気配を感じた。

「……………?」

「な、何? どうして私達を見つめているの?」

「丁度此処に各学園を代表する立派で暇そうな方々がいるので、私は心強いです」

微笑みかけながらユウカ達を見るリンを見て、嫌な予感が見事的中したと悟った彼女達。心なしか顔が引き攣っているような気がする。

「……………えっ?」

「キヴォトスの正常化のために、暇を持て余した皆さんの力が今、切実に必要です。行きましよう」

「ちよ、ちよつと待って! ど、どこに行くのよ!」

事態が飲み込めていないユウカと、これまでの経験から全てを把握している先生を一瞥して、リンは晴れやかな口調で告げた。

「勿論、先生が行かなければならない場所……戦場の中心地です」



キヴォトス郊外の公道、暴徒と化した生徒達が占領する戦場が目的地だ。

交通手段は近場まで車、その後は徒歩。本来ならへりを使った方が良いのだが、チャーターするモモカがお昼休憩中だった事と万が一RPG等で撃墜されたら目も当てられない為、却下になった。

尚、先生と生徒4名を戦場まで送り届けたリンは「では、後は任せます。くれぐれも先生をお守りする様に。私は後程別働隊を率いて合流しますので」とだけ告げて、車ごと去ってしまった。

それを4人はぼかんと口を開けて、先生は「気をつけてね」と呑気に手を振りながら見送った。

車が見えなくなった位で4人は再起動する。

「……………何で私達が戦場に出ないといけないのよ!」

「サンクトウムタワーの制御権を取り戻すために部室の奪取は必須条件ですから……」

「そうだけど！ それは聞いたんだけど！ 何でミレニアムのセミナー所属の私が……」

気が立ち荒ぶるユウカと、それを宥めるチナツ。それなりに学園内で上のポストに就いているユウカはデスクワークがメインで、荒事に駆り出される経験はここ最近なかったのだ。別に戦闘行為が苦手なわけではないが、突然戦場のど真ん中に放り出されると流石に困ってしまう。

対する、ハスミとスズミはそこまで慌てる事なく戦闘準備をテキパキと進めている。それぞれ正義実現委員と自警団に所属している2人だ。きつと連邦生徒会の件を聞いた後は、鎮圧に協力するつもりだったのだろう。

その全てに『懐かしいな。愛おしいな』と思い、ユウカ達の方へ歩いていく。ブツブツと小言を呟いているユウカの手を握って、真っ直ぐその瞳を見て。

「ごめんね、巻き込んで。あとで埋め合わせはさせて貰うから、今は協力してほしい。連邦生徒会も人手が足りなくて形振り構ってられないんだ」

「——ッ！」

触れた手と手、そこから伝わる体温。35度台の少し冷たい彼の掌が、ユウカの手を優しく包み込む。鼻腔を擽るホワイトリリーは彼の香り。

「お願いだよ……頼めるかな？」

そう言っつて先生の顔が蠱惑的に歪んだ瞬間、ユウカの頭がくらりと熱くなった。

「わ、分かりました！ 協力すればいいんですね！ 連邦生徒会直々の頼みは元々断れませんし……キヴォトスの為の行為は、結果的にミレニアムのためになりますし！ それに、ここで先生に恩を売っておいた方が良いと合理的に判断したので！ ええ！」

その熱に浮かされたように矢継ぎ早に言い訳の様な言葉を並べる

ユウカに、先生は「ありがとう、助かるよ」と言いながら彼女の頭を優しく、形を覚えるように撫でている。ユウカも健康的な肌に少し茜を散らして、満更でもない様子だ。

チナツは若干引いていた。先程まで『私は反対です！ 嫌です！』と全身で表現していたのが嘘だったように絆されている。幾らなんでもチヨロすぎではないだろうか。その内詐欺に引っかかりそうだと変な心配をしていた。

ひとしきり撫で終わって満足したのか、先生はユウカの頭から手を離した。それを名残惜しそうに、ちよつと残念そうにユウカが見ていたのは錯覚ではないだろう。

ハスミは長銃を担いで先生の方を向く。頭の固いセミナーの生徒の意見を10秒も掛からずに曲げてみせた人心掌握術に感心しているのだろう。彼女の内側、僅かに燻っていた猜疑心は先程の先生の言動で消え去った。

——それに、この人を疑いたくないのだ。何故だか分からないが、この人は無条件で信頼していいと、心の奥が叫んでいる。「連邦生徒会所属ともなれば、主要な生徒は把握済みでしょうか？」

「ああ、えつと、自己紹介を。正義実現委員会の羽川ハスミです」

「ああ、えつと、ゲヘナ学園、風紀委員の火宮チナツです。よろしくお願います」

「トリニティ自警団の守月スズミです」

「わ、私は早瀬ユウカです。ご存知の様ですが」

「宜しくね。私の事は、気軽に『先生』と呼んでくれると嬉しいかな」
——この出会い達が愛おしいから、私は何度だって。

誰かを傷つけられない拳を固く握りしめて、この少女達は必ず守りきってみせると天に宣言する。

空の果てで嗤う悪意を越え、死線を越える鉄の決心。前人未踏の境地に足を踏み入れる第一歩。それが地獄への片道切符であろうと、数多の神話への挑戦だろうと——全て振じ伏せ踏破して見せよう。

「戦術指揮は私がやるよ。情けない事に銃弾一発で死ぬから、前線では戦えないし後方から無線越しにはなるけどね……ああ、安心して。」

こういった事は得意なんだ」

異なる世界で何度も死線を越えてきた仲間達だ。たとえ記憶が欠落してしようと、魂に刻まれた思い出達は消えはしない。彼女達のことは本当によく知っている。そして、これから戦う彼女たちの事も。

この指揮能力こそが己の全てだ。最初は素人もいい所だったが学習とループを経て、長所と呼べるものへ昇華した。例え、頼れる相棒がいなくても問題は無い。意識を拡張し、視座を高く。全てを第三者視点で見下ろし、リアルタイムで最適な戦闘手順を組み立てる。

ガラリと切り替わった雰囲気を感じ取って、生徒達も愛銃を握りしめる。この人ならば、或いは———と思っただらう。彼女達は力強く頷いてくれた。

「———了解しました、先生の指揮に従います」

「先生の言葉に従うのは自然な事、よろしくお願いします」
「信じます、先生」

「わ、分かりました……お願いします、先生！」

生徒達からの信頼が心地よい。まるでそよ風に背中を押さされているような気分だ。今だったら何だってできる気がする。

「———さあ、行こう」

勝利条件は、シャーレ部室の無傷での奪取。

敗北条件は、シャーレ部室の損壊、又は先生の死亡。

この世界で初の、先生の戦いの幕が切って落とされた。

正しいと言ってくれた君へ

『先程、こちらの騒動を起こした主犯格が判明しました』

そんなリンからの通信を先生が受け取ったのは、ユウカ達が道を塞いでいる不良達を粗方蹴散らし終わった後だった。

通りを一つ挟んだ向こう側に聳え立つ純白の塔。キヴオトスの中枢たるサンクトウムタワーほどの高さはないが、それでも周りのビルやマンションより頭一つ抜けて高いそれは、連邦捜査部シャーレ本部部室。何度もこうして足を運び、数多の自身の死に場所となった場所であり、生徒達との思い出を育んできた。

甘い思い出も苦い思い出も沢山詰まっている、これからの自分の運命を決定付けるそれを先生は何も言わずに眺めていた。逆光で表情で伺い知れないが、きつと――。

『先生？』

「……ああ、すまないね。少し考え事を。それで、主犯格の子は……」
リンの言葉で意識がこちら側に戻ってきて、慌ててその話の先を促す。少々不自然な先生の様子を訝し気に一瞥するが、即座に硬い表情に戻る。ホログラムに映るリンが眼鏡の位置を正し、重苦しく口を開く。

『名は狐坂ワカモ。現在停学中ですが、百鬼夜行連合学院の生徒です。年齢は18歳。矯正局を脱出した生徒であり、多くの前科を持ちます。戦闘能力もキヴオトスの上位に位置しているため、気を付けてください』

「……そうかい。ワカモ……君は……」

今でも鮮明に思い出せる。彼女はどんな時でも自分に付き従ってくれた。例えば生徒を生かす為にキヴオトスを殺す選択をしようと、全く勝ち目のない戦いに挑む時も。彼女はいつだって味方でいてくれて、自分を何度も看取ってくれた。

そのお面の下の素顔、好きなもの嫌いなもの。案外恥ずかしがりやで、可愛らしい側面があること。純情で、献身的で……沢山の物を

先生に与えてくれたのだ。

『貴方様、どうか迷わないでください。例え、貴方様がどれだけ窮地に立たされ、世界から孤立していても……貴方様は、ここにいてだけで正しいのです。貴方様の正しさに救われたこのワカモが、保証させていただきますわ』

いつかのループで彼女が送ってくれたこの言葉は、今でも先生の行動指針になっている。生徒を決して諦めない、悉くを救ってみせると誓えたのは彼女のおかげなのだ。

「……この世界の君は、どんな子なのかな」

戦場のど真ん中だというのに、先生の唇が吊り上がって微笑みが零れた。

「先生！ 前方に敵影！ あれは……ッ！」

チナツの報告に、先生は眼前の敵を双眸で捉える。シャーレへ続く道を封鎖するように広く展開している生徒達、数は凡そ30だろうか。制服はバラバラで統一感は全くないため、恐らく寄せ集めだろう。恐らくクライアントから好き勝手に暴れる、とかその程度の伝令しかされていない。協力や連携などは見込めないはずだ。

そして、展開している彼女達の最奥……白い狐のお面を見た。

「先生、彼女が主犯格のワカモです。何としても、捕えなければ……」
元より、キヴオトス中の生徒の名前と顔を全て覚えている先生が見間違えるはずもないが、ハスミの報告でそれはより補強される。

「あら……」

そして、先生の耳にはワカモの声が確かに聞こえた。彼我の距離は300m、余程の大声でもなければ音は届かない。そして、きつと、ワカモの声は呟くような……すぐ近くにいても聞き取れないほどの声量のはずだ。事実、先生以外の4人はその声は聞こえていない。

だがしかし、先生には聞こえた。まるで耳元で囁かれたように、はつきりと。

——幻聴か？ いや、しかし……。

だが、そんなことを考えている場合ではないと思考を切り替える。何としてでも、シャーレを奪還しなければならぬのだ。それを成し

遂げなければ、物語のスタートラインにすら立てず、『滅び』と相対する権利すら持てないのだ。

眼前の生徒達を見据える。既にワカモは姿を消しており、この場の指揮を任されたらしい少女が慌てている。彼女が敵前逃亡をするとは考えられないため、恐らく何かしらあるのだろう。ほかにやることや、罠だったり——この場から離脱してもどうとでもなるような隠し玉があるとか。

そして、恐らく向かった場所はシャーレの部室だろう。

「……突破しよう。ユウカはシールドを展開して相手のヘイトを。チナツはユウカのサポートを中心に。スズミは閃光弾を北東^Nへ投擲。ハスミは北東^Nへ狙撃、ポイントは袖看板のボルト。タイミングはスズミの投擲が終わった後。ワカモはこの場から離脱して、相手の指揮系統は乱れている。これなら人数差は関係ない。真正面から行こう」
「分かりました。ワカモはどうしますか?」

「彼女はリン達の別動隊に任せてしまおう。逃げた場所の見当は付いているから、余裕があつたら私達でやってもいいけどね」

即興の作戦概要を伝え、力強く頷いた。

——全く、頼もしい限りだ。

先生は不敵な笑みを浮かべて、告げる。

「では、行こう……攻撃開始」
ボジテイブ
「了解!」

その伝令と共に、四人の生徒は駆け出した。先頭はユウカ、シールドを展開し、殺到する敵の弾丸を全て無力化し、両手のSMGを振り回して暴れまわっている。近・中距離の相手はその圧倒的な弾幕の前に封殺し、それを何とか掻い潜ってきた相手もCCCでなぎ倒している。

そしてチナツはユウカのサポートをしながら、全体の戦況を把握的確な援護でもってユウカを戦い易くしている。

その戦闘能力と連係に怖気づいてしまったのか、数名の不良は逃げ出そうとするが……。

「スズミ、閃光弾を」

その逃走と、逃走経路を事前に掌握していた先生にそんな手は通じない。彼の指示に合わせて、スズミの閃光弾が炸裂する。着弾と同時に辺りに180デシベルの爆発音と100万カンデラ以上の光量がまき散らされる。視覚と聴覚を一瞬で機能不全にされた彼女達は立ち止まってしまい――。

「ハスミ、射撃」

事前に教えられた通りのポイントへ銃弾が向かう。経年劣化により錆付いたボルトは弾丸に焼き切られ、後は自重によって自由落下する。落下地点は勿論、先ほど閃光弾が爆発した場所。

金属がひしゃげる音とコンクリートが碎ける音が喧しいハーモニ―を生み出す。巻き込めた生徒は……6名ほど。彼女達はきつと何が起きたのかも分からないまま気絶しただろう。

「スズミはユウカのシールドで射線を切りながら、彼女が撃ち漏らした子を中心に。ハスミは2人の射程外の子を狙撃」

「はいっ！」

「了解！」

先生の指示を受け飛び出して行く2人を見送り、チナツが共有してくれているドローンのカメラ映像を見ながらリアルタイムで指示を飛ばす。

4人の潜在能力を全て引き出した結果、圧倒的な速度で相手を無力化し……辺りの銃声が一旦止んだのは、戦闘開始から約4分後だった。



「状況終了、お疲れ様。怪我はないかい？」

「4名全員無傷です。先生こそお怪我はありませんか？」

「皆が守ってくれたからね、この通り無事だよ」

彼女達を労いつつ、先生は周囲の状況を見る。辺りは酷い有様になっていて、抉れたアスファルトと、剥き出しになった配管、白いドラム缶が転がっている。修繕費を考えると頭が痛くなりそうだが、連

邦生徒会の資金ならばどうとでもなるだろう。ハスミは先生の近くに立ち狙撃や伏兵を警戒し、他の3人は倒した生徒達を歩道等の道路脇に移動させている。

3人の作業も滞りなく終了し、いざ目的地たるシャーレへ行こうとした瞬間——鼓膜を微かな振動が叩いた。

「……西、かな。建物奥」

「——総員警戒ッ！」

先生の呟きに即座にスズミは反応し、伝来する。先生を囲むように4人が四方を固め、各々が正面方向を確認しつつ彼が警戒した西方向へ最大限の警戒をする。

微かな振動は徐々に地鳴りになり、何かを砕く音と金属を引き摺る重厚な音が鮮明に聞こえ——その独特な機械音に心当たりがあるハスミが弾かれたように叫んだ。

「気をつけてください！ この音は恐らく——！」

ハスミの声は破砕音に掻き消された。廃墟と化していたコンクリート製の建物が大量の物に粉碎され、破片が舞う。搭載されたキヤタピラが瓦礫の山を踏み潰し、前へ、前へ……先生達の道を塞ぐように立ちはだかった。

「……こんな物^{オモチャ}まで用意するなんてね」

粉塵のヴェールが解かれ、いよいよその威容が明らかになる。

「クルセイダー巡航戦車 Mk. I!?! 不良がこんな物を持っているなんて……！」

十字軍の名を冠する機体にして、トリニティ総合学園で正式採用がされている戦車。

元はイギリス軍の戦車であり、同時期に並行で開発されていたカヴェナンターが問題点が多すぎる機体だったため主力機として北アフリカ戦線に投入された経歴を持つ。

当初は5人乗りの予定だったが様々な兼ね合いにより最終的な搭乗可能人数は3名という中途半端な人数になり、被弾によって搭載弾薬の装薬が誘爆・炎上しやすい点やエンジンの寿命が短い点、細かい砂で冷却系の摩耗する故障が多発する……乗員には『連続36時間重

大な故障が発生せず稼働すればそれは奇跡』と言われる機体であった。

だが、優れた前進速度を誇り、主砲も2ポンド砲を備え副砲に7.92mmベサ機関銃を持ち、装甲も50mmと厚い。

脳内からこれらの情報を即座に引つ張り出して、先生は生徒4人の装備を見る。SIG MPX、MCX、M1917エンフィールド、モーゼルM712。この中で50mmの装甲を貫けるのは……。

「ハスミ、徹甲弾は？」

「5発ほど。ですが、この口径で50mmは……」

「いや、貫かなくていい。あれを損壊できる可能性がある火力を見せればそれで十分だよ。あとは私が何とかする」

ちらり、と戦場を見る。損壊した道路からは水道管が露出し、地形もあまり良くない。辺りに転がっている容器の中身は――。

その内容物を見て、作戦が瞬時に組み上がった。何故こんな物が置いてあるのかは不明であるが、使わない手はないだろう。賭け要素も多少あるが、仮に失敗したとしてもリカバリーはできる。

「皆、聞いてほしい。少し危険ではあるけど作戦が組み上がった。プランは――」



「作戦、開始」

先生の号令と共に、ユウカが戦車の前に飛び出す。チナツはユウカの近くに聳える瓦礫を盾にしながらサポートをする。

「SMGじゃ、流石に厳しいわね……！」

9mmパラベラム弾は多少の凹みを作る程度で、その重厚な装甲を貫くには至らない。それに苛立ちを交えて吐き捨てるが、ユウカの役割は撃破ではなく囮なのだ。本命は――。

小気味の良い破裂音が聞こえた。それと同時に、クルセーダーに明確な傷が生まれた。貫くには至っていないが、それでもあの装甲を食い破る可能性を持つ脅威が現れたのだ。

主砲をぐるりと向けた3階建てのアパートの屋上には、ボルトアクシヨンの銃を構え、膝立ちで戦車を狙っているハスミがいた。あの脅威を取り除こうと、戦車はその主砲を発射しようとするが、射線が通りにくい事に気付いたのだらう。SMGを乱射しているユウカを無視してキヤタピラを稼働させ、ハスミを打ち抜けるポイントへ移動する。

「先生、移動しました」

『了解。こちらも次のフェーズへ移ろう。ユウカはそのまま戦車に張り付いて、ハスミはポジションを変更。チナツとスズミもポイント更新。チナツ、タイミングは任せるよ』

無線越しの通信を聴き、彼女達は即座に動く。ハスミは隣のアパートへ飛び移り、スズミは仕掛けのセッティングに奔走する。ユウカはそれらを悟らせないように注意を引き、チナツはタイミングを虎視眈々と見計らっている。

そして――。

「今ですねッ！」

先生が予期したポジションになった瞬間、瓦礫からチナツは飛び出して銃を構えた。その弾丸の行く末は――露出した水道管。彼女が狙いを外す訳もなく命中し、破裂した水道管からはスプリングラーのように膨大な水が噴き出てくる。ユウカは咄嗟にシールドを展開して降り注ぐ水を防いだが、戦車はその水を思いつきり被ってしまったために水浸しとなった。

『最終フェーズだよ。スズミ、お願いね』

「了解」

ハスミがいるアパートの、道路を挟んだ向こう側。4階建てのショッピングセンターの屋上には仕込みを終えたスズミが立っている……彼女の周りには数個の白い容器が転がっていた。彼女はこれを影で運んでいたのだ。ハスミの火力を本命だと思わせ、その罠がユウカだと思込ませ……戦車の搭乗員達の気を、本当の本命たるスズミから逸らさせたのだ。

『ユウカ、チナツ、離脱を』

戦車から比較的近距離にいた2人を引き戻し、2人の撤退指令が届いた瞬間、スズミはその白い容器達を蹴り飛ばした。彼女達の膂力はこの程度の質量の物を10m飛ばすのは余裕であり……白い容器達は全て戦車に直撃した。

『射撃』

狙いは——白い容器。

3名とも命中し、破裂した白い容器から液体が飛び出てくる。そして、それは戦車に触れた瞬間に白い煙を上げて気体となった。

白い容器の内容物は液体窒素。—196℃の液体が周囲の熱を根こそぎ奪いながら気化していく。先程浴びせられた水が全て氷となり、主砲や副砲、駆動系も超低温で悉く機能不全に陥らせていく。

十数秒もすれば戦車は氷漬けのオブジェと化した。仮に氷が解けたとしても二度と動かないだろう。また、搭乗員の3名は全員引き摺り出されて、ユウカ達によって意識を刈り取られた。

割と容赦なく銃器と肉体言語でボコボコにされていたため、うら若き乙女として見せてはいけない顔を晒してしまっているが……運が悪かったと言う外ないだろう。

何はともあれ、これにてワカモ以外の雑兵は全て片付け終わった。

先生は本当によく頑張ってくれた彼女達へ、初対面の自分を信じてくれた彼女達へ……いつもの微笑みを向けて。

「皆、ありがとう。本当に助かったよ」

そう言う先生に、4人もまた先生に微笑みと信頼を向けた。

貴方を待っていた

戦闘も終了し混乱していた事態も収束する兆しを見せてきた頃、先生の端末に一件の着信があった。先生の端末に登録してあるアドレスは現状一つしかない為確認するまでもない。当然、別働隊を呼びに行き、独自で動いていたリンである。

画面をタップし、回線を繋いだ。端末からホログラムが投射され、彼女の姿が空間上に展開される。そして数回視線を左右に動かし、状況を把握した彼女は口を開いた。

『先生、お疲れ様でした。どうやら掃討も終わったようですね』

「ありがとう。でも、彼女達が頑張ってくれたおかげだよ。現状、他の勢力は見当たらないよ。リン達側では何か反応をキャッチできた？」
『いえ、こちらでも特には見つかっていません。シャーレ奪還完了、と考えて良いでしょう。私もすぐに向かいます。先生は先にシャーレの中、地下スペースへ向かってください……詳しい話はそちらで落ち合ってからにしましょう』

プツリ、と通信が切れる。リンが何処にいるかは分からないが、恐らく30分程度で到着するであろうと当たりを付けて端末をしまう。

「では、私はシャーレの中へ行くよ。4人は地上で見張りの方を願っていたいけど……頼めるかな？」

「それは構いませんが……その、宜しいのですか？ 先程の戦闘ではワカモが見つかりませんでした。既にここから離脱している可能性も考えられますが、シャーレの部室にいた場合は……」

「うん。彼女が害意を以て私に銃口を向けた場合は間違いなく死ぬよ」

先生はその可能性を、自分が死ぬ可能性を何でもないことのように言い切った。

「では何故——！」

「少し確かめたい事もあってね……ああ、大丈夫だよ。君達が想定している事はきつと起きないさ。それに、危なくなったらちゃんと呼ば

せてもらうよ」

先生に武装はない。過去のループにて、アリウススクワッドの4人に叩き込まれたCCCやシラット等の格闘術は行使できるが、その武力を生徒相手に振るうつもりは毛頭ない。元より神秘を全く持たない己では擦り傷一つ負わせる事もできないだろう。

故に先生は本当の意味で、丸腰で敵が逃げた可能性がある場所に行こうとしているのだ。そして、先生はそれが可能性ではなく確定であることも分かっている。

「危険すぎますッ！　せめて護衛を1人……！」

先生の身を案じたチナツが叫ぶ。その言い分は尤もであり、単に自分の命が可愛いならその申し出に喜んで従うべきなのだろう。その上、先生はこれが最後なのだ。失敗も敗北も死も許されない。慎重になり過ぎたほうがよい。

だけど。

「シャーレはこれから多数の生徒が集う場所になる。ミレニウムもゲヘナもトリニティも問わず、学校やコミユニティという枠を超えてね。ある意味、キヴオトスの縮尺版になるんだ。そんな場所で、私は『自分の立場と異なる者だから』という理由で生徒を排除したくない」それは意思だった。それは誇りだった。世界に那由多の果てまで殺され、何度も滅びに打ちのめされた先生がたった一つ守り続けたプライド。

——何があろうと、自分は生徒に銃を向けない。

偽善だと嗤うだろう。ペテン師だと嘲るだろう。自分の手を直接汚さずとも、先生の意思で誰かを傷つけた事は沢山あるのだ。今回の戦闘だってそうで、先生の意思に従いユウカ達は不良達に銃を向けた。それなのに何を今更と彼自身ですら思ってしまうが——
——それでも。

「私達には言葉がある。思いを、意思を伝えるツールがある。君達が銃を武器とするように、私はこれを使うんだ。勿論傷つける道具ではなく、ね。誰かの心を聞きに来たのに、手元に人を傷つける道具があったら意味ないだろう？　ワカモが居たとしても私は言葉を尽く

してみるよ。駄目だったらまた考えるさ。逃げてみるのも良いかも
しれないね。そして時間をおいて、また顔を合わせて、何度も語りか
けてみるよ」

彼女達は、今しがた倒した子達は敵ではなく愛すべき生徒なのだ。
ワカモだって、愛すべき生徒の一人に変わりはない。

そんな風に、何処までも先生と生徒としての関係性を大切に。そし
て、お互いたった一つの命として対等に。

生徒達のあらゆる想いを、立場を、心を許してあげる存在こそが『先
生』なのだと……そう説いた。

「じゃあ、行ってくるよ」



「……連邦捜査部、シャーレ」

ワカモはシャーレの地下にいた。無人の其処には執務用の机や椅
子といった備品の山が形成されている。

その中で、一際目立つ異形の機械。用途も使用方法も見当が付かない
巨大な構造物……正式名称、クラフトチェンバー。連邦生徒会の切り
札の一つをじっと彼女は眺めていた。まるで主人を待ち続けている
ような空間はワカモの思いと孤独を包み込んで、優しく溶かしてい
た。

近くにあった一際大きい机に、ワカモはそつと手を置く。撫でるよ
うに、慈しむように。新品で汚れがない純白のソレに、積み重ねた想
いをのせるように。

目を閉じると鮮明に浮かび上がるあの日々。異なる世界、異なる未
来……其処で過ごした甘く溶けるような陽だまり達。物心付いた時
から覚えていた記憶であり、実体験。パラレルの世界での出来事をワ
カモは全て持っていたのだ。

その記憶の中で、一際輝く人こそが連邦捜査部シャーレの先生だっ
た。彼と過ごした全ての時間がワカモにとっては何よりも大切な宝
物。

彼が名前を呼んだら胸が弾んで。彼に触れると体温が高くなってしまつて。彼と二人でデートした記憶は、思い返す度に1日何も考えられないほど顔が赤くなつてしまつた。

———
ワカモ。

彼の言葉たつた3文字で、ここまで舞い上がり、満たされてしまつた。ワカモは世界を超えても、彼にずっと恋していて、愛していたのだ。けど同時に、彼女はこの恋は叶わないと知っていた。あの人は先生だから生徒一人を愛する事も、特別扱いもできない。彼は他の生徒の名前も呼ぶし、髪をそつと撫でるだろう。

愛した人の唯一になれない事は重々承知していたが、それでもよかつた。彼の視界に、心にワカモという彼に焦がれた少女を映せるなら。彼を心から愛せるならば。

でも、彼はいない。死んでしまつた。生徒の為に、礎となつて。少女の罪も悪も全て持って逝つたのだ。たつた一人、孤独に。

とは言つても、アレは異なる世界の出来事のため、この世界の彼は死んでいないだろう。きつとキヴオトスの外を探し回れば彼を見つめる事はできるはずだ。

だが、ワカモはそれをしなかつた。

自分が恋した、あの世界での彼が死んだからではない。ワカモは彼の全てに惚れたのだ。故に、彼と出会えば必ず溺れるような初恋をするだろう……何度でも。あの日々の続きを歩めるとなれば、それはこの世のどんな甘露よりも甘い誘いだ……その選択は、彼がキヴオトスに関わる事を指す。

キヴオトスに関わつてしまつた所為で彼の人生が歪んでしまつた事を知るワカモは、それを受け入れられなかつた。

本当に優しい彼のことだ。彼はきつとどんなに擦り切れても、生徒を諦める事をしない。故に何度でも同じ選択をして、同じように生徒の為に死ぬだろう。

それは駄目だと、ワカモの心が叫んだ。それだけは否定しなければならぬ。愛する人の死を、彼女は認めることなど出来なかつた。

草木や花を愛でる彼を知っている。料理をする彼を知っている。

寝坊をする彼を知っている。生徒を心から愛し信頼する彼を知っている。

本当に、何気ない日常の一片。其処で垣間見える純朴な等身大の青年こそが、先生だとワカモは分かってしまった。

そう——彼の本質とは『日常の象徴』なのだ。

何気ない一言で相手を癒し、戦いから遠く離れたところで帰りを待ち……戦う者は日常での彼の笑顔や何気ない一言を糧として帰るために奮起する。

そして非日常の牙が向いたとき、命を懸けてその牙から守り抜くと皆に決意させる。

そんな戦いとは全く無縁な普通の青年が、先生と呼ばれた彼の本来の在り方だったのだ。

だから硝煙弾雨飛び交うこの箱庭に来なくても、それでよかったのだ。彼がこの世界で幸せになって、陽だまりで笑ってくれるなら。

そうやって、見知った見知らぬ彼の平穏と生存、幸福を祈っていたワカモに『シャーレの先生赴任』という報告と、ある依頼が届いたのだ。

業腹だが、彼女はその依頼を受けた。シャーレを傷つける事はしなくなかったが、それでも——彼女にとって『先生』は、あの世界で微笑んで、愛を込めて名前を呼んでくれた彼一人なのだ。もし仮に、それ以外の俗物が赴任する位なら、いつそ自分の手で……そう思った。

そしてシャーレの部室前で、連邦生徒会の軍勢を待ち伏せていて……あの場所に、彼は来た。あの日々と寸分違わぬ姿と声と心で。

自分が先生と呼んでいた彼を見た時、正しく運命に射止められた気がしたのだ。

——ええ、分かっていましたわ。貴方様がそういう方である事は、とても良く。

ワカモは彼に銃を向けられる訳もなく、そのまま全部を丸投げして……そうして、此処で大切な人を待っている。

「……………」

彼女の耳がピクリと反応する。コツ、コツと靴底がリノリウムを叩く音が聞こえたのだ。早くもない、遅くもない、普通の歩きのペースで、一定間隔で。まるで自室に行くような軽い足取りで。無音のシャールレによく反響する音は徐々にワカモへ近づき……そして、止まった。

ワカモは優雅に後ろを振り返る。視界に飛び込んで来たのは、連邦生徒会の白と対を成すような黒の青年だった。スラックスも、ジャケットも、ネクタイも、シャツも、靴下や革靴まで全て黒で統一された丸腰の男。記憶と同じ姿。連邦生徒会の制服以外では、彼はこの黒に塗り潰されたような服を着ていたのだ……尤も、記憶の中では更にその上から連邦生徒会の刺繍とシャールレの腕章が施された白いコートを着ていたのだが……きつと、キヴォトスに訪れたばかりのため無いのだろう。

その青年は透徹した眼差しと、春の陽のような口調で彼女の名前を呼んだ。

「ワカモ」

「はい、狐坂ワカモですわ」

——ああ、とても狡い方。名前を呼ぶだけで、こんなにも多幸感で満たされてしまうなんて。

「シャールレの先生、貴方は何故、一人で此方に来られたのですか？

護衛もつけず、何も持たず……危険だと思わなかったんですの？」

「シャールレで争いたくないからね。危険なのは分かっているよ。だけど、これは私のささやかなプライドさ……私は生徒達に銃を向けたくない」

そう言つて真つ直ぐワカモを見る瞳には……愛と優しさに溢れていて。

「……貴方様は、やはりお変わりないのですね」

その言葉に、先生の目が見開かれた。彼の口から声になり損ねた吐息が漏れるが、ワカモはそれに気づかぬまま。

「いえ、お忘れくださいな。私の世迷言です。ですが……私の大切な方と、余りにもお姿と心が似ていたもので」

彼女はぽつりぽつりと語る。言霊に込められた感情は――
―世界を焼くほどの後悔と悲しみ。

「その方はとても残酷な運命をお持ちでしたが、決して諦めなかったのです。私達の手を決して離さず、最期まで側に居てくださいました。でも、あの方は本質的な所でずっと孤独だったのです。あの方にとって、私達は守るべき存在ではあっても……痛みを分かち合う存在ではありませんでした。一人ぼっちで、思い出を抱いて歩き続けて……。

あの方はこれまでに抱え込んだもの全てを飲み干してしまいました。孤独も、怒りも、哀しみも、愛も、痛みも。その残滓が夜毎に涙になっていたのです。私達の前で泣くことはなくても、分かっています。私を送った、『貴方は正しい』という言葉が呪いになっていないか……本当に、心配なのです」

そう言つて、悲しそうに目を伏せる少女に――先生は奥歯を噛み砕かんばかりに食いしばった。拳も硬く握りすぎて皮膚が破れそうだが……それが気にならないほど、自分に対する怒りで一杯だった。

――私は愛する生徒にこんな顔をさせない為に走つてきたのに。

本来ならば記憶を持っている事は誰にも言わないつもりだった。だけど、目の前で悲しんでいる少女を助けられなくて何が先生か。涙をそつと拭えなくて何が大人か。故に、彼は――。

「君は私にとっていつまでも大切な光だよ、ワカモ。君がいてくれたから、君が私を支えてくれたから……私は何度だって、立ち上がったんだ」

君にそんな顔は似合わない、と精一杯の笑顔と強がりでもワカモに感謝を送った。君の言葉は呪いではない、祝福なのだ。だから君は悲しまないでくれ。君が送ってくれたおかげで、今こうやって立っているのだ。だから、その花の様な笑顔を見せてほしい――。

「――あ」

ぽた、と雫が一つ。狐のお面で隠されたその瞳の奥から涙が零れ

た。ただの感謝、ただの言葉。それを、他ならぬ彼が言ってくれた。全てを覚えていた彼が、世界でたった一人のワカモに綴った――

――それだけで、彼女は救われたのだ。
「ありがとう、ワカモ。ずっと一緒に戦ってくれて。私を守ってくれて。君には何度も助けられたよ。海に行くって約束、破ってごめんね……だから今度一緒に行こう」

「はい……はい……はい……」

先生はワカモの方へ歩いて行き、そつと腰に手を回す。彼女の体に先生の体が重なり、体温と心臓の音が溶け合っていく。互いの胸に伝わる鼓動は命の証。例え打ちのめされて、何度も殺されても――
――その果てに喜びがあるという証明。

彼は彼女の顔を見て……そして、そつと微笑んだ。

「お面、退けていいかな？ 折角の再会なんだ、君の綺麗な顔が見たいな」

「本当に狡いお方……そんな風に頼まれたら断れせんわ」

先生は硝子細工を扱う様にそつとワカモの狐を模したお面を横にずらす。目尻に雫を溜めた、妖しく輝く金眼が先生を射抜いた。何度も見てきた彼女の素顔だが、本当に目が覚めるような美人だなと思っていたら……ワカモが視線を外した。

「あ、貴方様……その様に情熱的に見つめられると……その……」

「ああ、ごめんね、恥ずかしい思いをさせちゃって」

「いえ、貴方様に見つめられるのはとても幸せでしたわ」

少し赤くなつた顔と早まった鼓動を隠す様に、ワカモは先生の胸に顔を埋めた。安心するホワイトリリーの香りと少し低めの温度、狐の耳には彼の吐息が当たって少し擦りたい。ぎゅつと強く抱きしめると、同じ様に抱き締め返してくれて……何から何まで、全部見知った彼のまま。

今度こそ守り抜こう。この優しい彼が二度と苦しまない様に、笑える様に。彼の命と幸せと平穏を脅かす全てを踏み潰そう。彼を世界に奪われない様に――今度こそ。

――全ては、愛する貴方様のために。

今一度、約束を

先生とワカモは一頻り抱き合った後、少しだけ距離を取った。絡めた指先と重ねた鼓動が離れる事に彼女は少し寂しそうな顔をしたが、先生が「またいつでも抱き締めてあげるよ」と言うと、とても喜んでいたので問題ないだろう。

「貴方様も覚えていらつしやったんですね、あの日々を」

「勿論、私が君と過ごした思い出を忘れる訳がないよ」

そう言つて、先生は嘘を吐いた。全部覚えていない。寧ろ半分以上忘れていて、残りもかなり損傷してしまつてノイズが混じっている有様なのだ。無理に思い出そうとするとまるで脳を内側から切り開かれるような、形容しがたい激痛を伴うのだが……その程度の代償ならば安いものだと、笑っている。生徒との思い出は何よりも尊く美しいものだから。

そして、先生は佇まいを少し正して最も聞きたかつた事を訪ねた。

「ワカモ、君以外にも覚えている子はいるのかい？」

「……私が目の前にいるのに、他の女の話ですか……？ このワカモ、嫉妬で殺してしまいそうです」

「ごめんよ、でも大事なことなんだ。誰が記憶持ちなのか……それによつて今後の私の動きが変わってくる。場合によつては計画を大幅に修正する必要があるんだ」

先生の真つ直ぐな言葉にワカモは「冗談ですわ」と笑つて、顎に手を当てて考えた。

「恐らく、複数名。貴方様と特に親交が深かつた生徒、貴方様を愛している生徒、貴方様に直接救済された方が該当すると思われます。それに加えて、貴方様を目の前で失つた経験。この4つの条件を満たす方がホルダーになる可能性を持つ方かと。」

もしかしたらこれ以外にも何かしら条件があるかもしれませんが……私にこれ以上は」

「いや、充分だよ。ありがとう。それだけ分かっていたら、誰がホル

ダーかそれなりに絞り込める……本当、君には何度も助けられてばかりだよ」

先生はワカモが言っていた、『目の前で先生を失った経験』が部分的に異なっていると考えた。とても情けない事だが、ほぼ全生徒の前で1回は死んだ経験があるのだ。今回一緒に戦ったユウカに限っても目の前で死んだ回数は百を超える。だが、彼女は覚えていない様子だった。もしかしたら完全に覚えていなくても、断片的な何かを引き継いでいる可能性はあるため断定するには早計だろうが……彼女からワカモのようなアクションはなかった。

恐らく、千。仮に回数が条件だとしたら、そこがボーダーだろう。特に親交が深く、彼を愛し、彼に救済され……最低千回彼を目の前で惨殺された生徒。そして、その中で最も強烈な記憶を持ち越すのだろう。

そうになると、後は誰がホルダーに該当するかを考えなければならぬ。……幸いな事に、思い当たる生徒はそれなりにいる。

アビドスの小鳥遊ホシノ、砂狼シロコ。

ミレニアムの生塩ノア。

ゲヘナの空崎ヒナ、天雨アコ。

トリニティの聖園ミカ、白洲アズサ。

アリウススクワッドの四名全員。

この辺りの生徒達が記憶持ちに該当する可能性があるだろう。全員が全員でなくても、この中の一人、または二人はいると見て考えて動いた方がよい。

先生は今後の動きを頭の片隅でプランニングしながら、「そういえば」とワンテンポを置いて。

「ワカモ、今から連邦生徒会の主席行政官が来る。だから一旦……」

「はい、分かっております。此処で一先ずお別れ……ですわね」

「そんなに寂しそうな顔をしないで。前みたいな今生の別れじゃないんだ。またすぐ会えるよ」

先生は一步前に出て、ワカモの目尻に溜まった涙を指でそっと拭く。

「私の権限でワカモをシャーレ所属にするよ。反対意見は出るだろうけど全て押し伏せてみせる。だから、ワカモ……もう一度だけ、力を貸してほしい」

「はい、勿論でございます。この世界でも、ワカモは最期まで……貴方様のお側に」

彼の前で片膝を突き、頭を垂れる。それはまるで主君に忠誠を誓う騎士の様であった。

「ありがとう。これからよろしくね、ワカモ」

「はい。末長くよろしくお願いしますわ……では、私はそろそろ」

そう言つて、ワカモは階段ではなく緊急時の脱出路へ向かった。記憶を頼りにロックを解除し、全長1kmの地下路の入り口へ足を踏み入れようとして……ワカモは振り返つた。その表情は彼が思わず息を止めてしまうほど……綺麗な笑顔。

「貴方様の生き抜いた世界は、まだちゃんと私の中で息をしていますわ」

彼の命は決して無駄ではないと。例え滅びたとしても、遺されたものがあるのだと……ワカモはそう言つた。

だから——救えなかったなんて思わないで。

「……本当に、敵わないなあ」

先生は天井を見上げた。



「先生、お待たせしました」

「いや、さほど待ってないさ……リン」

ワカモが逃げた5分後に、リンはシャーレに訪れた。その間に裏口の施錠や使用経歴の初期化等も済ませ、彼とリン以外はまだ足を踏み入れていない空間を作成した。この作業の最中にリンと鉢合わせたらまた色々と面倒そうな事態になっていたな、と思いつつリンに返答する。無論、言い包める事自体は不可能ではないが、やらなくても良い手間は省くべきなのだ。

「ここに、連邦生徒会長が残した物が保管されています……ああ、幸い傷一つないようです」

リンはデスク脇のジュラルミンケースを手に取り、6桁×6桁のパスワードを解除し、その中身を先生に手渡した。

「受け取ってください、先生——これが、連邦生徒会長が先生に残した物……『シツテムの箱』です」

それはなんの変哲もない真っ白なタブレットだった。家電量販店に行けば同じような外装の物は山ほど売っているだろう。傷一つない新品で、汚れを知らないそれは——彼の為に残した、連邦生徒会長のシステム。

「——ああ、確かに受け取ったよ、リン」

暗い画面にそつと指を走らせる。タブレットを触る感触、というよりは先程ワカモにやったそれ……人の頭を撫でるような優しい手つき。

「市販のタブレットと外装は同じですが、中身は別物。正直、私達も実態を把握しておりません。製造会社も、OSも、システム構造も、動く仕組みそのものも……全てが不明」

まあ当然だろうと彼は内心苦笑する。これは一種のオーバーツであり、シンギュラリティなのだ。アーサー・C・クラークの第三の法則——充分に進んだテクノロジーは、魔法と区別がつかない——に習うのであれば、これは正に魔法だ。

特異現象捜査部に安易と侵入したデカグラマトンのハッキングすら受け付けない強固なファイアウォールと、システムでありながら外界に物理的に干渉可能な防御障壁。更にはキヴォトス全域のライフラインを手中に収めることが可能なハッキング能力を備えている。

先生が持つ最強の切り札。それがシツテムの箱だ。

「連邦生徒会長曰く、シツテムの箱は先生のもので……先生がこれでタワーの制御権を回復させられる筈だと云っていました」

「そうかい、彼女が」

「はい、私達では起動すら出来なかった代物ですが——」

タブレットを起動すると、白と青の画面が映し出される。何度も見

たログイン画面。そして、パスワードの要求。

「……ああ、分かっているとも」

——我々は望む、七つの嘆きを。

——我々は覚えている、ジェリコの古則を。

頭の中で唄う。使い慣れた起動詠唱、ランゲージ頭の中でずつと響いていた子守唄。それを文字に起こして入力し、システムの箱を拓く。

『システムの箱』へようこそ、先生。

生体認証及び認証書作成のため、メインオペレートシステム『A・R・O・N・A』に変換します。

その文字を認識した途端、意識が遠のく。命が肉になり、心がエーテルとなる……死ぬ時と酷似した感覚。だか、不思議と恐怖はない。まるで母の手招きに誘われるように、先生は瞼を閉じた。



宇宙を映したような蒼穹と、青い海。そこにポツリと存在する青い教室に、先生は立っていた。足元の深さ5cm程の水面は光と風でキラキラと揺らめいていて、空気を肺いっぱい吸い込むと何処までも吹き抜けるような清涼感を覚える。

爆撃を受けたように倒壊した壁と乱雑に重ねられた机。風化した学校の一室を切り取った空間の——その中で。

机に突っ伏して、眠っている青い少女がいた。

——
その姿を視界に入れた途端、彼は目を細めた。

再会の喜び、穢れを知らぬ事への安堵。

——
「ああ」

だが、それは即座に悪感情へ反転する。この子を此処に縛り付けてしまっている事への罪悪感と懺悔、後悔。もういなくなってしまった彼女に対する謝罪。そして——世界を焼き尽くしても尚余りある程の……彼自身に対する怒りと憎悪。

だが、この感情は彼の中に秘めておかなければならない——そ

れが約束なのだから。故に、その全てを表に出す事なく飲み干し……意を決して口を開いた。震えた喉が、様々な感情をごちゃ混ぜにして彼女の名前を紡いだ。

「アロナ」

愛しい、3文字。君に逢いたかった、君の名前を呼びたかった――

ただ、それだけなんだ。

「んにゃ……む、にゃ……ん……あ、ふえ……？」

先生の声に反応して、少女は机から上体を起こす。澄んだ水色……この空間そのものを体現するような髪と、特徴的な大きい白のリボン。

彼女の目覚めと同時にヘイローが頭上に浮かび上がり、寝ぼけ眼を擦って……声の主たる先生を見た。

「え？」

暫しフリーズ。そして、数回瞬きした直後に……。

「せ、先生!?! この空間に入ってきたっていうことは、ま、ま、まさか先生……!?!」

「ああ。連邦生徒会長より連邦捜査部シャーレの責任者を拝命した先生だよ」

「う、うわああ!?! そ、そうですね!?! もうこんな時間!?!」

そう言っただたふたとする彼女をまるで年の離れた妹を見るような、娘を見るような優しい目つきで眺めて……内心、齒噛みした。先程のワカモを見て、もしかしたらと思ったが……やはり、彼女は大部分が初期化されている。憶えているのは全ての起点……ループの基準軸となっている一回目のみだろう。

「うわ、わああ? 落ち着いて、落ち着いて……えつと……その……あつ、そうだ! まず自己紹介から! 私――」

「アロナ」

「そうです! この『シツテムの箱』に常駐しているシステム管理者であり、メインOS、そしてこれから先生をアシストする秘書――

――あれ?」

そこまで言っただ、アロナは気づいた。彼は彼女が名乗るよりも前

に、名前を知っていた事に。彼女が抱いた疑問は即座に驚愕に変貌して、愉快な百面相を目の前の彼に見せつけた。

「先生はもしかして……憶えていらっしやるのですか?」

「勿論。君の名前を、片時も忘れたことはないさ……また会えて嬉しいよ」

先生がそう言って微笑むと、アロナは分かりやすく顔を輝かせた。体から溢れんばかりの歓喜は、内心の様々な感情と混ざり合って、溶けていって――。

「アロナ、おいで」

彼は一言、そう言った。その言葉に誘われるまま彼女は歩いて……膝立ちになった彼に抱きついた。

「やつと――やつと、会うことができました! 私はずっと待ってたんです! ここで、先生を!」

「ああ、知ってるよ……ごめんね、長い間独りぼっちにしてしまった……随分と遅くなってしまった」

「い、いいえ! そんなこと――!」

手をぎゅつと握り、首をブンブン振って否定する彼女を、そつと抱きしめた。

この小さな体の彼女を……ずっと一人にしてしまったのだ。どれだけ寂しい思いをしただろうか。どれだけの夜を一人で越えたのだろうか。その内心を思うと、後悔の念が溢れて止まない。

だが、その孤独ももうお終い。これからは私がずっと側にいるから、と青い少女を抱きしめる。その行為にアロナの顔が緩むが――

――ちよつとの時間を置いてハツとした。

「そうだ! まずは先生、生体認証の方を……」

「そうだね、先に済ませてしまおうか」

再会の喜びを分かち合うよりも、先にシステム周りの事は済ませなければならぬ。アロナは背中に回していた右手を前に持ってきて、人差し指を立てた。その指に、彼は自身の指をそつと触れさせる。

電子情報ではあるがお互いに体温が伝わってきて、アロナははにかみ、先生は微笑んだ。

「まるで指切りして約束するみたいですね！」

「だね……針千本はキヴオトス風に言うとか鉛玉千発になるのかな？」

そう言うのアロナは苦笑いして「どっちにしても嫌ですね」なんて言って……それは確かに嫌だと、彼も苦笑した。

そうとも、これは約束だ——決して違えないと誓った、彼女達との縁。約束の炎は、彼の胸の中で今も燃えている。

「では、指紋で認証しますね！」

「お願いね」

「はい！ どれどれ……」

アロナは彼と重ねた指先をじっと見た。一分の綻びも偽装も許さない、0と1の集合たる電子世界に住まう彼女らしい真剣な眼差し。だが、それも長くは続かず、15秒したら「うう……」とか「なんかよく見え、ない……かも……？」と言って指を空に翳し……最終的には「まあこれでいいかな？」みたいな顔になった。

だが、適当と侮る事はできない。彼女のセキュリティは万全だ。過去のループに先生の死体から両眼と両手の指を切り落とし、システムの箱の生体認証を突破しようとした輩がいたが、失敗に終わったのだ。

「……はい！ 確認終わりました！」

「ありがとう、流石アロナだ」

「そ、そうですかね？ ……そうですね！ そうですとも！ ええ！」

これでも最先端なんです！ それに、このアロナ、先生の秘書ですからー！」

「エッヘン！」と言って薄い胸を張る彼女を見ると、妙に撫でたくなる。小動物のような愛くるしさがいい例だろう。

自慢げにしているアロナに向ける視線の色を真剣にして、彼は「さて」とワンクツションを挟んで。

「アロナ、私の方の話を聞いてもらってもいいかな？ 少し長くなるんだけど……」

「勿論です！ このアロナにお任せください！」

純白の罪

「なるほど、先生の大方の事情は分かりました……」

先生がアロナにある程度の現状を伝え終わると、彼女は難しそう
な、あまり似合っているとは言えない神妙な顔つきで「うーん……」と
唸っている。腕を組み、眉間に皺を寄せ、考える時のポーズとしての
テンプレートを全身で体現する彼女がちよつとだけ可笑しかった。

「連邦生徒会長が行方不明になって、その所為でサンクトウムタワー
を制御する手段がなくなった……むむむ」

「そう。だから今、外はかなりパニック状態だね……ああ、そうだ。連
邦生徒会長の行方は知っているかな？」

「いえ……連邦生徒会長についての情報は殆ど……どんな人柄で、今
どこに居るのかも……すみません」

しゅんとして、申し訳なきそうに話すアロナに「大丈夫だよ」と声
をかけて頭を撫でる。彼からすれば念の為の確認だったのだ。知っ
ている、と答えられた方が驚く様な、最初から否定される事を前提と
した質問。

立つ鳥跡を濁さず、を地で行く彼女が何かしらの……必要以上の痕
跡を残すとは思えない。仮に彼女の足跡が残っているとしたら、彼女
ですら消し忘れてしまう様なものか……敢えて残しておき、誰かに見
つけて欲しいメッセージとしての役割を果たすものかの2択だ。

彼女の事を憶えている彼だからこそ持っている信頼。彼女の人柄
が自分の知っている通りだと知って嬉しくなる……こんな思いを、
きつとワカモも抱いてくれたのだろうと考えると余計に。

「ですが、サンクトウムタワーの問題は私が何とか解決できそうです」
「お願いしてもいいかな、アロナ」

「はい！ 万事アロナにお任せください！ では、サンクトウムタ
ワーのアクセス権を修復しますね！」

「少々お待ちくださいね！」と言って片手間にサンクトウムタワーの
基幹システムに侵入するアロナ。強固なファイアウォールを突破し、

権限を改竄し、その全てを掌握し――。

「サンクトウムタワーのadmin権限を取得完了。先生、制御権を無事に回収できました！　今、サンクトウムタワーは私、アロナの統制下にあります！」

ものの数秒で、キヴォトスの中心地を掌握した。

『シャーレの権限が復活した……？』と、遠くから、脳に直接反響する様に聞こえた声の主人はリンであり……明かりがついた部屋と、タブレットにログインしてから虚になった先生を訝しげに交互に眺めている。その情報を置いてきた肉体に残留した聴覚と視覚から得て、無事に完了できたと把握する。

先生は「ふう」と息を吐いて、アロナを見る。彼女は胸を張って「どうですか！　凄いでしょ！　凄いですよね！　褒めてくださいー！」と言わんばかりの表情と態度をしている。本当に表情が豊かになつたな、と彼は笑を浮かべた。それはまるで、娘の成長を喜ぶ父親のようであった。

「今のキヴォトスは、先生の支配下にあるも同然です！」

「ありがとう、本当に助かったよ」

そう言つて彼女の頭をそつと撫でると、彼女の口元は緩んで「えへ……」と声が漏れた。

「先生が承認さえしてくだされば、サンクトウムタワーの制御権を連邦生徒会に移管できますが……どうされますか？」

「……………」

その問いに、彼は即答できなかつた。

普通に考えるならば移管した方が良い。ただでさえ、どの様な自治区でも自由に戦闘行為が行え、あらゆる生徒を際限なく所属させることができる超法規的組織だ。その時点でほぼ全ての組織に良い顔はされない。風化委員や生徒会に値する、その自治区の統治を任されている者達には特に。

更にその上、凡ゆるライフラインを掌握できる権限を持っているともなれば……間違いなく、先生が本来行いたいシャーレの活動に悪影響を及ぼす。最悪、キヴォトスの敵と見做されて殺されても文句は言

えないだろう。

しかし——ゲマトリアの事を考えると、素直に領けないのもまた現状だ。愛すべき生徒達が起こした騒動、それを発端にゲマトリアが参加した——神秘を巡る争い。悪意と恐怖、憎悪と激情が箱庭を駆け巡り、滅びた世界線もある。そして、デカグラマトンがタワーにハッキングを仕掛けて一時キヴォトス中の権限が失われたこともあった。

それらによって流れた血と涙を思うと、絶対に安全と言えるアロナに預けておく方が良いのではないかと思ってしまう。

だが、仮にその権限を持ったとして、それをどう扱うかという問題が発生する。先生はキヴォトスの支配者になりたい訳ではない。一応、彼にも政治的な手腕はあるが、別に専門ではない上に、シャーレは権利を振り翳す組織ではないのだ。

故に管理を行うならば、連邦生徒会が適切だろう。

身に余る力は自分自身を滅ぼす——ああ、よく知っているとも。

「ああ、大丈夫だよ。連邦生徒会に権限を譲渡してほしい。だけど、バレン様にはバックドアを仕込んでほしいんだ。有事の際に、アロナが即座に侵入できるような、ね。あとは、そうだね……」

何も馬鹿正直に全てを渡す必要はない。有事の際に全てこちらで制御できる様に手を加えて、膨大な力の中に針を仕込む。悪意を以てサントウムタワーに手を出した者に落ちる——裁きと罰を。



先生の意識が青い世界から戻ったタイミングで、席を外していたリオンが戻ってきた。手には携帯端末が握られている為、恐らく連絡をとっていたのだろう。

彼が「おかえり」と声をかけると彼女は佇まいを正して。

「連邦生徒会でも、サントウムタワーの制御圏が戻った事が確認で

きました。これで連邦生徒会長がいた頃と同じ様に業務を進められます……お疲れ様でした、先生」

「私が特段動いたわけではないよ……リン達の方が働いてくれたさ。お疲れ様」

混乱の渦に叩き込まれた現状が終息する為に必要なピースを揃え終わったからか、彼が労いの言葉を返すとリンは眉間に寄っていた皺を解いた。肩の力を抜き、ふう、とため息を吐く彼女。だが、それも一瞬ですぐに背筋を伸ばして、主席行政官の顔に戻った。

「折角です。シャーレをご案内します」



「ああ、リン。ちよつといいかな?」

シャーレの案内も終わり、リン側で纏めてくれた問題事のリストも受け取り、あとは別れるだけ……となったタイミングで、先生は思い出した様に声をかけた。何か伝え忘れたことや質問があるのかと、リンは先生の方に向き直って。

「どうされましたか?」

「リン側でクロノススクールにアポを取れるかな?」

その言葉にリンは面食らったような顔をした。

「取れますが……私側では他の業務もある為、少々遅くなってしまいます。先生の権限でも、充分可能な範囲ですが……」

「いや、連邦生徒会がシャーレの名前を出す事に意味があるんだ。シャーレが連邦生徒会に認可を受けた正式な独立組織であるって示すためにねー」

その言葉にリンの聡明な頭脳は先生の意図を全て理解した。確かにこれならば彼女達側でやった方が良いだろう。先生は連邦生徒会のお墨付きが欲しいのだ。

「なるほど……クロノススクールですと、シャーレのメディア発信ですか」

「ご明察。此処を可能な限り透明な組織にする。余計な疑念を抱かせ

たくないからね……ヴェリタスにアポが取れたらホームページも作ってもらおうと思ってるよ。行った仕事内容は機密に抵触しない範囲で文書で書き起こして、各種メディアで発信する」

何よりも先にまずは信頼を得ないとね、と先生は言って笑った。

全てはシャーレが生徒の味方である組織だという事を、言葉ではなく行動で知ってもらう為に。

「目指せ、SNSのフォロワー100万人……ってね」

冗談か冗談じゃないかよく分からない軽口を叩いた先生は、リンに微妙な表情で見られた。



「Flowerと天命、天理の礼装を最優先にしつつ……神秘否定対策の防壁プロトコルと、獣殺しと神殺し……パラドックス用の武装も必要か。いつ、何処で終末装置が起動するかわからない。取れる対策は全て取っておかないと。クラフトチェンバーはほぼ稼働させっぱなしかなあ」

先生はパソコンでtodorリストと、クラフトチェンバーで作成する物の設計図を組みながら、頭の中を整理する目的で独り言を呟く。

先生が羅列した「Flower」以外の物は、ミレニアムのエンジニア部やヴェリタス、特異現象捜査部の面々が作り上げた——滅びを打倒する為の兵器の設計図。過去のループにて提唱された決戦兵器を全て、先生は憶えていた。記憶を手繰り寄せ、彼女達の想いを継いで、この世界を救済する為の刃を錬成する。

「……………ふう」

クラフトチェンバーの作成順も組み上がり、初日にしては上々の滑り出しだと思っ、ぐつと背伸びをした。背中からパキパキと小気味のいい音が鳴り、それに伴いどつと疲れが押し寄せる。卓上のデジタル時計を見ると午前3時を表示していて、かなりの長時間作業していたんだなと他人事の様になってしまう。

先生は静かにシツテムの箱を起動させた。すると即座に世界の位相がズレて、青い世界に立っていた。

睡眠状態のアロナに「お疲れ様」と声をかけて、彼女が突っ伏している机の隣に椅子を持ってきて、腰をかけた。そして、彼女の髪を撫でながらゆつくりと語り出す。

「私は失敗をした。一回や二回じゃない。膨大な数、失敗を重ねて屍を積み上げた。涙を見た。悲鳴を聞いた。怒りに触れた。憎悪を撫でた。キヴオトスの悪性、穢れを知らぬ彼女だから……原罪を持っている天使だからこそその罪禍を、私はよく知っている」

エデンの園を追放された原初の人間達は知恵の実を食べてしまった事で原罪を持っていた。生まれた時点で罪を持つから救われない。当人に何の過失がなくとも、先祖から繋がる遺伝子の縛鎖が罪を雁字搦めにして離さないから……決して楽園には届かない。

だが、それも終わった。救世主、或いは神の子と呼ばれる人物。彼が、全ての人類の原罪を雪いだのだ。故に人間は楽園に手が届くようになり、より一層エデンに焦がれた。

そして、このキヴオトスには全ての原罪を持っていく存在がない。それがきつと契機なのだ。彼女達の原罪を全て背負い、十字架の上で運命の聖槍で貫かれることにより……このキヴオトスという楽園は完成する。

『楽園に辿り着きし者の真実を、証明することはできるのか』

ジェリコの古則、その五つ目。楽園のパラドックスは、彼女達が何よりエデンの園に焦がれている事の証左だ。このままでは決して届かない聖域、例えば目指したとしてもイカロスの様に燃え尽きるのが定めだとしても……それでも目指す彼女達。

——ならばこそ、己が救世主になろう。彼女達の罪も悪も罰も全て全て……持って行く。

「私は先生だ。生徒では……このキヴオトスに於いてはプレイヤーではない。フィクサー、とは言い得て妙だ。私はキヴオトスに於いて、当事者から遠い。故にどこまで行っても手が届かないものは出てきてしまう。悲劇は止まらず加速して、運命の車輪が根こそぎ蹂躪して

いく……その光景を、何度も見てきた」

何度手を伸ばしても、何を叫んでも……先生は無力だ。キヴオトスの中で最も脆弱な命であり、有事の際に自身の身を守ることすらもできない。己の弱さで守れなかったもの、取り溢してきたものを何度も見てきた。

プレイヤーではなくオブザーバー。インサイダーではなくアウトサイダー。先生はどこまで行っても楽園の部外者だ。アダムにもイヴにもリリスにも、聖四文字にも、唆す蛇にもなれない。

滅びを前に唇を噛み、涙を堪えるしかないとしても——それでも。

「だけど、私はそれを仕方のない事だと諦めたくない。悲劇も涙も罪も私が全て背負おう。みつともなく惨めに足掻いて、泥まみれで這い蹲りながらも、それでも大団円を望む」

誰にも、何も言わずにたった一人孤独に世界へ挑む……その苦行には地獄すら生温い激痛が付き纏う。

生徒には抱え込まないでほしい、一人で消えてしまわないで、一人で泣かないで。君に降る涙の雨に、そつと傘を差し出してずつと隣にいてあげるから。

だが、先生は一人で抱え込む。一人で消えて、泣くこともできないまま。生徒に弱さを見せることは決してなく、誰もが願った完璧な大人のペルソナを被り続ける。先生ではない、『彼』として生きることがもうない。自身の本名すら忘却の彼方へ追いやった。人並みの幸せを全て生徒に捧げたのだ。

その道に、後悔はない。だが、それによって生徒を何度も悲しませてしまったという自覚はあった。生徒が気づいた時には既に手遅れで、命の灯火が消える寸前の先生を見て……泣きながら後悔と謝罪を繰り返す彼女達。

そんな顔をしてほしくて戦ったわけではない、だから笑って——

——ああ、何と身勝手な物言いなのだろう。

そこで漸く気づいたのだ。自分が彼女達を大切に思っているように、彼女達からも大切に思われている事に。彼女達が笑える明日に

は、自分が必要なピースである……それを知れた。

死ぬ自分に同情はしない。だけど、命を最初から諦めることもしない。最後の最後、本当にどうしようもなかったら……その時に初めて、この命を天に返そう。

それまでは必ず——彼女達の側に。

「さあ、完膚なきまでのハッピーエンドを迎えに行こう」

始まりの誓いをもう一度、君が忘れても何度でも。私は君に契るよ。

断章I

閑話／思想（潜在）犯

陽の光が差し込む暖かい部屋だった。木を主として使用された内装は素朴な雰囲気を出しながらも、気品の高い高級感を演出する。

赤い火が点けられた暖炉は冬の寒さを優しく溶かし、まるで麗かな春の様な熱を部屋に灯していた。

スーツ姿の黒い男は本革の手帳を机に置いて、デスク裏の窓から庭を眺めている。庭に居るのは白く美しい毛並みの犬と、幼い女兒。噴水が鎮座している芝生の上で楽しそうに走り回っている彼女達は、飛沫によって生まれた虹を掴もうと手を伸ばし、跳ねている。それを母親がウッドデッキから見守り、ハーブティーを嗜んでいた。

彼女達の頭上には、くるくると廻るヘイローが浮かんでいる。寒さが厳しい冬のある日の、昼下がり。とても穏やかな午後であった。

「良い天気ですね。外遊びにはもってこいですよ。今日は然程冷え込みませんし、空が高く、青色に澄んでいる」

応接用のソファに腰掛けた青年が口を開いて、こう言った。彼は少し着崩したスーツと白のコートを整えて、妖艶に窓の外を見た。そして、すぐに本へ視線を戻す。

フランツ・カフカ、変身。毒虫になったグレゴール。まともな人付き合いがなくて、気苦労ばかり。父親にステッキと林檎で傷つけられ、最期は家族全員に見捨てられた。

誰が悪かったの？ グレゴール？ それとも世界？
「それは読んだことがありますね。面白いですか？」

「私は好きですよ。ですが、面白いかと言われると、それは貴方次第です。ハンニバル、羊達の沈黙、ドグラ・マグラ。この辺りのサイコホラーが好きなら、読んでみるのも良いかと」

ただ、少々不条理です、と青年は言つて本を閉じた。オルタナが普

及している現代であるにも関わらず、ハードカバーの実本だった。

「この本を読んでいると、過去の虐殺を思い出します」

「そういう内容なんですか？」

彼は優雅な所作でハーブティーを口に運び、喉を潤してからもう一度口を開いた。

「いえ。変身にその様な描写はありません。ただ、毒虫になったグレゴールが不条理に排斥される様子が、そういった虐殺を思い出させるんです。ジョージ・オーウエルの1984を読んだ時にも同じ感覚を味わいました」

「1984は読んだ事があります。反全体主義、反共産主義、反集産主義のバイブル。ビッグブラザーはテレスクリーンから全て見ている、我々も……貴方も。オーウエルの世界、1984のオセアニアはとても窮屈な世界です。アナキズムを徹底的に排斥した管理社会は、まるで闇夜の屠殺場……だから、それを想起したのですか？」

その言葉に彼は「ええ」と返して。

「ビッグブラザーから想起するとなると……カチンの森。ソ連政府によるポーランド人の虐殺。強制収容所から輸送された夥しい数の命がボルトアクションの銃で撃ち抜かれ、肉となって処理される光景を幻視してしまいます」

青年は本を開いて、パラパラとページを捲る。文字を追うのではなく、紙を捲る事を主目的とした動作。

「ふむ。まるでその場にいた様な口振りですね」

「以前、機密文書が保存されているサーバをハッキングした事があるので。その時にこっそりと」

スーツの男は青年の真正面のソファに座った。足を組み、彼の言葉を待っている。

「国連がジエノサイドと見做すケースは少ないのです。カチンの森はロシア政府が捜査を打ち切って、それっきり。ポルポト政権による原始共産主義を目指した知識人殺戮は、国内法廷。」

ダルフル紛争はジエノサイドに相当すると思いますが……これも中々難しいでしょう。国連の常任理事国であるアメリカと中国が、

それぞれ反乱軍と政府軍を支援している。ある種の代理戦争状態です。停戦協定が結ばれて、はいお終い。それ以上は踏み込めない。踏み込んだ場合、もつと莫大な血が流れる事になるから。安保理が機能しないことは昔からの教訓です。あんなものは紙切れよりも軽い……尤も、スレブレニツアの様に、彼らの鼻先で虐殺が起きればまた違いますが……」

青年は懐から手鏡を取り出す。辺りに映る背景と陽の光が乱反射して壁に影を作った。

「貴方は文化的なジエノサイド、文化浄化をご存知ですか？」

手鏡に彼が映る。見慣れた自身の顔と、見慣れない背景が溶け合って新たな絵画を形作った。

「何てことはありません。文化的、宗教的な存在や資産、人員を部分的に、もしくは全体を破壊する意図を持って成される破壊。それが文化浄化です。ラファエロ・レムキンはジエノサイドを構成するファクターの一つとも。言語破壊——使用されている言語を禁止し、その言語を用いた書物や記録、情報の破壊といった物もありますが、典型的な物としては像や遺産の破壊でしょうか。ああ、それと——」

青年は、とっておきの悪戯を思いついたように。

「^{ヘレム}聖絶。聖書、聖典、教会による宗教侵略も文化的なジエノサイドと言えるでしょう」

その言葉に、スーツの男の笑みが深くなった。パキパキと、何かが剥離する音が聞こえる。

「やはり、貴方は面白い。招き入れて正解でしたよ……彼女の反対を押し切ってまで振じ込んだ価値は大いにあります……ええ、その通りです。そして、そのジエノサイドはまだ続いている。十字の周りには争いが絶えません。思想が変われど、時代が変われど、実行者が変われど、形を変えて虐殺は続いている。」

それは旧時代から連綿と受け継がれるバトンです。この星は混沌から脱却できていません。故に、時折恋しくなってしまうのでしょうか。全てが決められた理路整然とした徹底的なディストピアが」

「まるで、隣の芝生が青く見えるように」

スーツの男は「ええ」と肯定して、腕を組んだ。だが、視線は変わらず手鏡を眺めている青年を捉えて離さない。

「時に、貴方は、デイストピアは好きですか？」

「いえ、私は全体主義は迎合していませんよ。これでも教育者ですから、個性の輝きを消してしまうのは好ましくありません。デイストピアは悲しい、ユートピアは寂しい……」

「ふむ、貴方らしい答えですね。確かにその通りです。ですが、個人主義にも全体主義にも悪性があります。どちらの悪性を選び取るか、それによってその思想が垣間見えます」

スーツの男は一旦言葉を区切り、「そういえば」と言つて。

「どうやら、カイザーコーポレーションの様子がおかしい様です。先程、ゴルコンダとデカルコマニーから連絡がありました」

「恐らく、本社が吹き飛ばされたのでしよう。巨大な民間軍事会社と言えど、戦術兵器には無力です。それに、彼らの大半はオートマタだ。ADS…… アクティブ・ダイナリアル・システムには抗えませんが」

その様子に、スーツの男……黒服の割れた様な目が細められる。遠い場所で、現在進行形で起こっている事を当然の様に把握している彼を興味深そうに見つめていた。

「何の力もない貴方が、何故そこまで早く情報を得れるのか……教えていただけませんか？ とても興味深い」

「ただの推察ですよ。カイザーが慌てふためくとなれば、ある程度は予想がつきます」

「なるほど……いえ、深く追求するつもりはありません。良い男には秘密があるものです」

黒服はそう言つて、窓の外を見た。青い空と、聳えるサンクトウムタワーは彼らを見下ろしている。それはまるで、ビッグブラザーのよう。

そして、青年は黒服の出したゴルコンダ、という名前に関連する物を挙げた。

「ハイローを破壊する爆弾は、確かゴルコンダの作品でしたよね？」

「ええ。彼の作品ですよ」

「ヘイローの破壊、とはよく言ったものですね。それは結果でしかない。アレの本質は神秘を失墜させる事にあります。僅かでも神秘を持つキヴオトスの住人なら猛毒になる、まさに神殺しの兵器だ」

「我々は神秘の探究者です。故に、それを否定する物をおいそれと認めるわけにはいきませんが……ええ、アレは良い物です」

黒服は、伽藍堂の瞳で青年を見つめる。

「キヴオトスとは聖典等神話に語られる存在達のモデルケースだと考えられます。

ゲヘナは悪魔、トリニティは神の使い。この箱庭は突き詰めてしまうと驚くほど単純な二項対立になっている。ミレニウムはどちらかと言うとトリニティ側ですが、必ずしも神の使いという訳ではありません。

ミレニウム、千年王国は国家である以上人間によって運営されま
す。人間ですから善にも悪にもなる。数式を扱うのもそれが特徴で
す。人間は数字と計算式によって神々を暴き、世界を解き明かしてき
たのですから。

アビドスは分かりやすい試練です。出エジプト……モーセの件で
非常に重要になってくる。百鬼夜行等は恐らく、此処にキヴオトスを
作成する上で安定させるために必要だった。神話、伝承……『神秘』と
いうものは信仰の産物です。

この都市は箱舟ではなく箱庭、神話の存在達を観測するメガロポリ
ス規模のモデルケースです」

黒服の語りを、青年は黙って傾聴している。ハーブティーを飲み、
本をパラパラと読みながら。手鏡はすでに胸ポケットの内側に仕舞
われていた。

「では、そこにおける先生の役割は何なのか。即ちそれは、神の子の代
理人、少女から原罪を奪い去るもの。彼が磔になったその暁に、彼女
達はこの箱庭の意味を理解するでしょう。彼を貫くロンギヌスこそ
が自身の罪を雪ぐ真実を。彼の遺体は分解され、各学院の最奥へと格
納される。それは宛ら奇跡を起こす聖遺物のように。そこからまた
信仰が生まれる。聖遺物信仰、神秘を持たぬ身でありながら神の子と

なつた奇跡の主。どうか、その善性で我らを救い給えと祈り――

――それによって厄災から守られるのです。

キヴオトスに存在する大きな意志は先生の死を望んでいる。そうした方がより長く、より良く、より強く繁栄できると知っているから。故に、彼はどんなに万全を期しても必ず何処かしらにつけ込まれる綻びが生まれる。それは彼の生存を許さない天上の神意であり、死因そのもの。

生徒個人が彼の生を望んでいようが関係ない。彼はキヴオトスにおいては生よりも死に重きを置かれているから、何をどうしようとして決して長く生きられない。多少の足掻きも精々余生を気休め程度に長くするだけ。

事象改変型プロトコル、^{アナザー・ジェネシス}覆せぬ終焉のXIII……通称、大人のカード。

先生がキヴオトスに赴任するタイミングで与えられたそれは、決して便利なツールではない。使用者の全てを骨の髄まで利用し尽くす為に、全てのリソースを無駄なく回収する為に考案されたシステムだ。

使用する度に運命力と時間、人生を消費し……その果てには、肉体そのものや身体の機能、記憶、果てには概念まで篡奪してしまう。

有形無形問わず、先生という個体の大切な物を奪い取る機構。それが大人のカードの正体。現に、先生はこのカードの使用によって自身の名前を、概念レベルで奪われている。

彼はこの箱庭に招き入れられた時点で詰みなのだ。

「いやはや、貴方も数奇な運命をお持ちだ……正しく、貴方はデバツガーです。ですが、例えば貴方が正常でも、貴方以外の全てが異常であれば……貴方はマイノリティになる。大勢が白といえ、黒でも白になつてしまう。キヴオトスの意志とは、そういうものです」

黒服はそう言つて、ソファから立ち上がった。背後にある本棚、そこに収納されている本の背表紙を撫でて紙の感触を楽しむ。そして、目的の本を見つけたのか手に取り、パラパラとページを捲り……ソファに座つたままの青年に差し出した。キエルケゴール、死に至る病。

「キヴオトスの意志……ええ、そうですね。キヴオトスには意志がある。続けようとする意志と、終わらせようとする意志。」

生徒や私、貴方達は続けようとする意志です。生徒はここで輝く青春を謳歌したい。楽しいこと、辛いこと……彼女達はあの場所で生きたい。

私はそんな少女達を見守りたい。辛かったら手を差し伸べたい、あの子達の笑顔を守りたい。

貴方達は私達を観察対象としているから、続けてもらわないと困る」

青年はその本を受け取った。

「私の本当の敵は、終わらせようとする意志だ。この箱庭に潜む最後の問い……鷄カミが先か、卵ヒトが先か。それを決めるブートストラップパドックス。それを踏破しなければ、ここに明日の光は訪れない。神秘を保有する彼女達は、鷄でありながら卵である……そのパドックスを適切な方法で切り抜ける。そのために、私は貴方達、ゲマトリアに加わった」

「ええ。素晴らしい選択です、思想犯シンカー。いえ、先生とお呼びした方が良いですか？」

その言葉に、思想犯シンカーと呼ばれたゲマトリアの一員たる青年……シャーレの先生は舌打ちをした。先程まで使っていた丁寧な所作をかなぐり捨てて。或いは、此方の方がゲマトリアに対する素なのかもしれない。

彼は座っていたソファから立ち上がり、服装を整える。シャーレの刺繍が施された白のコートが翻った。

「馴れ合うつもりはありませんよ。私は貴方達を使う、貴方達も精々私を上手く使ってください。全ては、あの場所にいる彼女達の為……その為に、私は貴方達という正義じゃあくを容認したのだから」

——ある回帰の会話より抜粋。

幕間 I

最果ての星

「ぶつちやけ、シャーレ^この制服ってカレーうどん食べるのに不向きじゃない?」

「何言ってるんですか先生?」

生徒や戦闘行為に関する事以外は頭がゆるふわな先生のよく分からない世迷言に律儀に反応しているのは、ミレニアムのセミナーに所属している早瀬ユウカ。

先生が赴任した直後に起きた騒動が終息して1週間が経った頃。シャーレの膨大な書類と、次々と舞い込んでくる細々とした依頼に忙殺されていた折に彼女は訪れてくれたのだ。

過去の経験から以前ほどデスクワークに忌避感を抱かなくなったとはいえ、嫌いで面倒な作業には変わりなく、『明日の私に全て丸投げして散歩でも行こうかな』と思っていた時の来訪。

ミレニアムはシャーレと友好関係を結びたい旨を伝えに来た彼女は、白いデスクに積まれている書類の束とレシート、領収書を見て仕事人魂に火が着き、「一緒にやりますよ」と声をかけてくれたのだ。先生には彼女が救いの女神に見えた。

だが、同時に彼女は悪魔でもあった。彼の微妙に手の行き届いていない書類管理に腹を立てて、彼を叱りつつテキパキと作業して……いつの間にか時刻は12時前。書類の山が半分ほど片付いた頃合いの会話だった。

「今お昼時だし、なんか食べたいものを頭の中に思い浮かべたら真っ先に来たんだよ、カレーうどんが。これは多分天啓だと思うんだ。この白さを汚さずに綺麗に食べる、って」

「随分下らない天啓ですね、先生。あと、手が止まっていますよ。動かしてください」

「はーい……」

ジト目で隣に座っている彼を見ると、苦笑いをして回していたペンをきちんと持ち、書類に手を掛けた。やつと真面目に仕事をしてくれる——そう思った刹那。

「あ、ユウカも一緒に行きたい？」

「先生？」

「ごめん」

真面目な雰囲気は1秒も保たず、即座に脱線した先生に、ユウカはそれはそれはとてもイイ笑顔を向けた。これ以上手を動かさずに茶番を続けたら冗談抜きで右手以外の骨をへし折られそうな凄みを前に、彼は即座に謝った。頭を下げるのは恥ではないのだ——と自己弁護をしながら。

尚、年下の女の子……自身が導くべき生徒にレシートの整理を手伝ってもらっているという、現在進行形で掻いている恥は『人には得手不得手があるから』と絶賛脳内で言い訳をしている。

総じて、普通にダメな大人であった。

そんな彼の様子を見兼ねたのか、ユウカは「はあ」とため息を吐いて。

「じゃあ、その束が終わったら昼食にしましょう」



「で、あれだけ言っていたカレーうどんは食べないんですね」

何故か裏切られたような気持ちになったユウカは、目の前で紙パツクの野菜ジュースと値引きされたコツペパンを食べる先生を微妙な目で見つめた。

ぶつちやけ、ユウカは彼がカレーうどんの話題を出した時、歓迎したのだ。彼は食事を疎かにしている。必要な栄養価は確実に取れていないだろう。ここ数日のレシートを見るに、彼はほぼ毎日このメニューしか食べていない。その上、一日3食はおろか一食も食べてない日もあり、健全な生活とはかけ離れているのだ。

故に、先生が数日ぶりにまともな食事を取ってくれる……と思った

ユウカの目に映ったのは、冷蔵庫から買い溜めしていた野菜ジュースとパンを取り出す彼だった。『は?』と言わなかったただけ偉いだろう。「万が一服が汚れたらクリーニング代は自腹だし……お給料まだだし……」

いつも通り、身一つでキヴオトスに放り込まれた先生の持ち金は少ない。財布に入っていた分と大人のカードクレジットカードで遣繰しなければならず、以前まで使っていたであろうネットバンクの口座にある預金はキヴオトスから引き出せなかったのだ。尚、この事実を突きつけられた時、先生は膝から崩れ落ち絶望した。幸いにも財布の中にはそれなりの手持ちがある為、切り詰めに切り詰めて生活する必要はないが、それでも無駄遣いしている余裕はないのだ。削れる場所は削らなければならず……そして、先生が削れる箇所は『食』のみだったのだ。

「はあ……それで体調を崩したらどうするんですか。もっと栄養がある物を食べてください」

「分かったよ……じゃあ次からはインスタントの袋麺を……」

「そうじゃありません! 全く……」

本当にこの人は、と思ってユウカは自作のお弁当を口に運ぶ。先生は「私の友人には口の中でインスタント麺を作る絶技の持ち主がいてね……」といつも通り変なことを口走っていた。

共にした数時間で分かったことは、先生は基本的にダメ人間だという事実。真面目な時はとことん真剣だが、そうでない時……今日のようなおフの日は超の付くほど頭が緩い。彼がいる所だけ緊張の2文字が消え去るレベルで、周囲に緩いオーラを撒き散らしている。オンオフの切り替えがしっかりしているのは良い事だが、ここまで二面性が強いと別人格を疑ってしまう。

ちらり、とユウカは先生のデスクを見る。紙の書類の束が山積みされた、どう考えても今日中で終わらない仕事量。これで特に仕事を貯めていた訳ではない、という事実が恐ろしくなってしまう。労働基準法違反で訴えられても文句は言えないレベルだ。

「シャーレの仕事は案外紙媒体が多いんですね」

「まあね。勿論電子媒体もあるけど、半分弱は紙だよ。キヴオトスで

は半分デッドメディアと化してるけど、これでも割と利点があるんだ」

先生は人差し指を立てて、解説を始めた。それは彼の教師としての顔。机はなく、椅子はソファ。ホワイトボードも黒板も使わない、先生と生徒が1対1の特別授業。

「二つはインフォオメーションセキュリティの高さ。何でもかんでもオルタナティブでネットワークを介していると、どこで情報が抜かれるか分かったものじゃない。ここには各学校の機密事項や、連邦生徒会関係の書類も流れてくるんだけど、そういったものは基本紙だ」

彼は2本目の指を立てて。

「もう一つは、燃やせば灰になる点。私のデスクに灰皿が置いてあるだろう？ 私は別に煙草を嗜んだりはしないけど、それでも置いてあるのは書類を燃やせるからだよ。お日様の元で見せられないような書類は、全部ライターで灰にするんだ」

「……それじゃあ、私が先生の書類を手伝っているのは不味いんじゃないんですか？」

「そこは勿論、ユウカに任せていい書類は選別しているよ……とまあ、紙ってメディアはとも信頼性が高いんだ。部外者に見せられない事やひそひそ話にはもってこいな、ね」

書類を選別する労力をもう少し別のことに回した方がいいんじゃないか、という言葉をユウカはぐっと飲み込んだ。別に彼に頼られて悪い気はしないのだ。寧ろ——少し、嬉しい。

「本当に、絆されていますね……」

「どうかした？」

「いえ、何でもありません。それよりも、先生はもつと私に感謝すべきですよ？ こんな風に領収書の整理を手伝ってくれる生徒なんて、本当に私くらいですから」

「そうだね……本当に、感謝してもし足りないよ」

彼は影を落とした微笑みを浮かべた。目を離れた次の瞬間、蜃気楼になって消えてしまいそうなほど儂い笑みだった。希薄な命、キヴオトスに住まう人々では決して作れない……生命の奇跡を体現するよ

うな微笑。

そんな笑顔を見せられたユウカは——いつの間にか先生の頭を撫でていた。

「……ユウカ？」

「……あつ」

彼の言葉でユウカは自分が何をしているか認識したようで、驚いたように手を離れた。成人男性が16歳の少女に頭を撫でられるという中々の羞恥プレイを味わった先生は若干引き攣ったような苦笑いを浮かべている。

——貴方はそんな表情もできるんですね。

彼の髪を触った掌からはホワイトトリリーが香る。1週間前と同じ物。

「……先生は、香水とかに拘っているんですか？」

「……まあ、少しね。昔、この香りを好きって言ってくれた子がいて……それ以来、ずっと使ってるんだ」

この世界で、君は元気でいるだろうか。その笑顔は曇ってないだろうか。いつか必ず会いに行こうと思って、先生は顔を綻ばせる。

「私もこの香りは好きです……落ち着くので……」

ユウカは立ち上がり彼の隣に腰掛けて、その肩に頭を乗せた。

「流石に無防備過ぎないかい？」

「先生にしかやらないので大丈夫ですよ」

彼は「そうかい」と言っ、懐から本を取り出した。

「……最近、夢を見るんです」

「どんな夢を？」

「貴方が——いえ、何でもありません。忘れてください」

——貴方に愛されて、貴方が目の前で殺される夢を見る……なんて、言えるわけがない。

甘い夢と、血が凍るような悪夢が同居している。頻度としては、3日に1回ほど。今日も夢を見た。現在、それが原因で寝不足になる等の支障は起きていないが、それでも嫌なものは嫌なのだ。だが、それらは全て夢のため目の前の彼にその鬱憤をぶつける訳にもいかない。

そんな事をして何の解決にならないし、ただの癩癩だ。

それに、何か——意識の深い所で、「思い出せ」と叫んでい
る……ような、気がする。

「そういえば、先生はSRT特殊学園の件は知っていますか？」
「勿論。連邦生徒会長が失踪したことによって、彼女達の軍事活動に
責任を負う存在がいなくなったから、ヴァルキューレと統合する形で
閉鎖する……そういう風に話が動いているね」

先生の視点で見ると、この動きはあまり好ましくなかった。SRT
特殊学園の生徒は戦闘のプロだ。ゲヘナの風紀委員やトリニティの
正義実現委員会のような単純明快な強さではなく、彼女達は戦争が巧
い。真正面からの撃ち合い、作戦考案、情報戦……大半の軍事行動で
彼女達の右に出るものは片手で数えられる程度であり、総合力で判断
すると間違いなくキヴォトス屈指の強力な部隊だ。

その機密性や特殊性、練度を例えるなら、陸自の特戦群や陸軍特殊
部隊群、ザスローン部隊、SAS等の各国最高の特殊部隊が該当する。
それを責任者の不在という理由で無くしてしまうのは、余りにも惜し
い。

その上、特殊部隊の人員というのは貴重だ。彼女達の働きを代替さ
せようと思うと莫大なコストと育成時間が必要になる。

カウントダウンは既に始まっている。砂時計はひっくり返らず、唯
重力に従い墮ちるのみ。『滅び』は常に、キヴォトスを地獄に叩き落と
す機会を虎視眈々と狙っているのだ。そんな状況で、彼女達を宙ぶら
りにしておく余裕などない。

それに、彼女達から愛着のある学舎を奪う事はしたくないのだ。
「現状まだ閉鎖が確定した訳ではないから、責任をシャーレで負うこ
とが出来ないか、掛け合ってみようと思っただけ。次の会議は私も出る
んだ。何とかして閉鎖は阻止したいけど……シャーレを連邦生徒会
の子達がどう見ているかによって決議が変わりそうだ」

シャーレを連邦生徒会から派生した機関だと考えている役員なら
ば、責任を負う場所がスライドする程度と認識し……賛成してくれる
可能性が高い。

だが、シャーレを何処にも所属していない超法規的組織と考えている場合は反対されるだろう。SRTのみを特別扱いするのは公平性に欠けるのではないか、と言われてしまうと反論することが難しくなってしまう。

「全員が全員、閉鎖に賛同してる訳ではないから、その子達を私側に引き入れてどうにか討論に持っていききたい。最大の懸念点はリンかな。彼女がどちら側に立っているかによって難易度が激変する。」

有事の際の軍事活動と、その責任を負う時以外では干渉しない……こんな感じで落とし所が作れるとベスト。SRTに肩入れし過ぎず、されど見捨てる事もしない、そのラインがこの辺り。この境界線を踏み越えると、シャーレとしての公平性を著しく欠いてしまう」

ユウカは彼を見直していた。政治的な手腕の練度がとても高い。自身の立ち位置、所属、権限からできる事を角が立ちにくい範囲で実行する能力と、それを支える思考力。戦術指揮をしている時にも思ったが、彼は頭の回転がとても早いのだ。最善手を最速かつ最高効率で選ぶ取る能力に長けている。

友好関係を結びたい旨を進言して良かった、とユウカは思った。仮にこの人を敵に回した場合、どの様な被害が出るか分かったものではない。最悪、20倍程度の戦力差なら余裕でひっくり返してきそうな予感があるのだ。

——まあ、先生が敵になるなんて思えないけど。

「……先生って本当に先生なんですね。見直しちゃいました」

「それ、どういう意味？」

苦笑いしてユウカを見る彼に、儂さはどこにもなかった。この世界で生きる命として、ちゃんとそこにある。それに何故——ここまで安心感を覚えてしまうのだろうか。

「そのままの意味ですよ。さ、先生！ 残りの仕事も終わらせちゃいましょー！」



「お疲れ様、ユウカ。本当に助かったよ、ありがとう」

「ありがとうございます、先生」

本日分の2人の仕事全て終了したのは、午後6時過ぎだった。ぐっと伸びをすると凝り固まった筋肉が伸びていく感覚があり、体に少々負荷をかけ過ぎてしまったと思う。

先生はユウカに労いの言葉を掛けて、ホットのカフェオレを手渡した。それを口に含むと心地の良い甘みが疲れた脳にスツと染み込んできて、今日一日の疲れが解れていくような気がする。目の前に置かれたお茶菓子のクッキーは……確か、トリニティのスイーツ部のアカウントで見た気がする。

「……美味しい」

「口に合った様で何よりだよ」

そう言って、先生は目の前のソファに座ってカフェオレで喉を潤した。ちらり、と外を見ると空は茜と宇宙色の美しいコントラストを描いていて、遠くに立つ白の塔がまるで境界線の様だった。

それから、2人は取り止めもない話をした。ユウカは学校の事、友人の事、セミナーの仕事。ゲーム部の話は中々に感情が籠っていて、彼女がどれ程大事にしているかがよく分かる口調だった。先生はそれに相槌を打ったり、時折茶々を入れたり質問をしたり。

——この時間が、ずっと続けばいいのに。

ユウカは彼と話している内にそんな事を思って、柄でもない頭を振って——でも、本当に楽しかったのだ。

そして時刻は7時を回って。

「今日はありがとうございます。クッキーまで頂いてしまっ……」

ユウカの左手に下げられている紙袋には、お茶請けとして出されたクッキーの缶が入っていた。流石にここまでやってもらって手ぶらで返すのは先生のプライドが許さなかったため、遠慮する彼女に半ば無理やり押し付けた。

「気にしないで。寧ろこの位しかお礼できなくてごめんね。お給料が入ったら、もう少し良いものを用意させてもらうからさ……今日はあ

りがとう。本当に助かったよ。気をつけて帰ってね」

ユウカは手を振る先生に一礼して、シャーレの敷地を超えて公道に出て——その時、彼の声が聞こえた。

「またおいで。別に書類なんて手伝ってくれなくていいから、さ。暇な時に遊びに来てくれると嬉しいな」

「……はい。また行かせていただきますね」

家に向かう足取りはいつもより軽かった。

花束を抱えて

静謐に包まれるシャールレで先生は目を開けた。どうやらいつの間にか寝てしまった様で、時計の針は最後に見た時刻から15分ほど進んでいる。惰性で天井を見上げると、明るい蛍光灯の光が網膜を焼いて視界がホワイトアウト。少し顔を顰める。だが、即座にピントが合って、見慣れた天井が視界いっぱいに映る。

書類の束が何も無い殺風景な机の上には冷めたブラックコーヒーが置いてあって、芳ばしい香りが意識の覚醒を促す。マグカップを持ち、冷えたソレを飲み干すと寝ぼけた頭が少しずつ冴えていく感覚。クオリアが目覚めるとも。どちらにせよ、先生という個体は覚醒した。

覚醒すると、今まで意識の外に追いやっていた事が気になってくる。例えば、付けっぱなしにしていたノートPCのバッテリー残量。僅かに皺になってしまった連邦生徒会の制服。寝汗。特に制服に関しては二日ほど替えていないため、衛生的とは言えないだろう。定期的に寝汗もそこまで掻いている訳ではないが、気になったものを再び意識の外に押し出すのは難しい。

クローゼットの中に替えのスーツとシャールレのコートがある事を思い出す。これなら数日は保つだろう。先生は使ったスーツ数着を纏めようと思い、チェアから立ち上がって――。

「……ッ」

くらりと立ちくらみがして、そのまま後ろに倒れ込む様にして椅子に座った。沈み込む様なクッションの感覚。長時間のデスクワークを行っても体に負荷が掛からないように人体工学に基づいて設計された椅子の快適さが、今は少し恨めしい。立ちくらみの原因には脱水や貧血等があるが、恐らく今回は疲労だろう。体に無理をさせ過ぎってしまった。自己管理が出来ない大人なんてみつともないにも程がある。

シャワーは落ち着いてから浴びようと思った。万が一シャワー

ルームで倒れて、全裸の姿を生徒に見られたら普通に死にたくない。尚、過去のループでは何度も見られている為、何を今更とも思うが、それはそれだ。

右手と左足を寸断され一人で日常生活を送ることすら難しくなった状態、介護の一環として入浴補助を行ってくれた時に味わった恥ずかしさと……自己管理を怠った結果倒れ、それで見られる恥ずかしさは違う。

先程の様に急にはなく、ゆっくりと立ち上がる。立ちくらは起きなかつた。もしかしたら酸欠だったのかもしれない。立ち上がったまま軽く伸びをすると、全身の骨がパキパキと悲鳴を上げた。整体に行ったら間違いなく怒られそうな体だな、なんて思っ苦笑する。

ぐるりとシャーレの室内を見渡すと、奥の方にあるホワイトボードを視界に収めた。見つけた途端、なんだか懐かしくなってしまった、近くまで行ってボード上にそつと手を置く。以前は此処に、空きスペースが無くなってしまっうほど生徒の落書きが綴られていたな――

――と思いながら。一番最初に書いたのはアリスだっただろう。か。ゲーム開発部の誰かだった筈だったが、細かい部分は思い出せない。記憶が破壊されている。

いつかこのボードも落書きで一杯になるんだろうな、と期待をして……彼はその足をエレベーターの方向に向けた。そのまま搭乗し、ボタンを押す。行き先は地下、クラフトチェンバーがある場所。カードリーダーにICを通すと、権限が認証されてエレベーターが動き出す。

数秒間、微弱な振動に体を預けると目の前のドアが開いた。寒色のライトで照らされた巨大な機械が一つ鎮座しているのみの薄暗い空間は、上階のシャーレと本当に同じ館の施設なのかと疑ってしまうほど異質だった。

コツコツと靴底で音を奏でながらクラフトチェンバーに近づく。目当ての生成物は既に出来ている。幅30cm、奥行き23cm、高さ20cmの、取手がついた白い直方体と……針なし、針ありが混じる、パッキングされた大量の注射器。

これが先生がクラフトチェンバーに作らせたもの。緊急時医療キット、Flower。脆弱な体のまま、戦場の最前線に立つために必要なお守りだ。

Flowerはその名の通り、全ての薬剤に花の名を冠している。

活性アンプルには鈴蘭、止血用血液凝固剤にはアネモネ、痛覚消去剤にはスノードロップ……他の効能を持つ薬にも全て花の名前がコードネームの様に与えられている。理由は――。

「……アツコ……」

アリウススクワッドの姫、秤アツコ。目を離せば何処か遠い所に行ってしまうような幻想的な彼女に依る所が大きい。花が好きな彼女に言われて、無機質なアルファベットと数字の羅列から、花の名前へと変更した。どれも彼女が好きな花で、フラワーシヨップや凶鑑で見ながら決めたのだ。『こっちの方がいい』と微笑む彼女を見て、思わず此方も笑みが零れた記憶は――まだ、憶えている。

「ノアみたいに記憶を書き記さないとね……いつまで覚えていられるか分からないし。大切なものは、仕舞って残しておかないと」

先生は一つ一つ薬剤を確認しながら白い箱へ、又はシャーレのコートの内ポケットに収納していく。この薬剤達はFlower、と随分可愛い名前が付けられているが……効能、離脱症状共にファンシーさが欠片も無い。劇薬と呼ぶに相応しいものだ。

幻聴、幻覚、記憶の混濁、強迫観念や不安で心が押し潰されそうになるのは当たり前。騙した神経が戻らなくなったり、穴という穴から血液が吹き出したり、指先等の末端が壊死したり……その場凌ぎ、命の前借りという言葉が相応しい代償が待っている。

さらに効果時間も1時間程度と短いため、使用後は超短期で決着を付けなければならぬ。重ねて服用した場合は最悪死ぬ上に、効果時間の延長もあまり見込めない。

一見、リスクとリターンが釣り合っていない様に思えるが……その実、先生にとってはリターンの方が大きい。この薬剤を使うだけで、心臓や脳を吹き飛ばされる等の致命攻撃以外はある程度無視できる。

硝煙弾雨が飛び交う戦場で指揮を取る先生にとって、これは何より

のメリツトだ。何せ、先生が斃れたら指揮系統が総崩れになる。そうなった場合は余程単騎での殲滅力に長けている——ヒナやツルギ、ミカ等のキヴオトス最強クラスの生徒以外は、本当にどうなるか分からない。

最悪、生徒のヘイローが破壊される可能性があるのだ。そのリスクをある程度軽減できる——利点と言わず何と言うか。

それに比べたら、地獄の様な副作用も甘んじて受け入れられる。

全ての整理が終了した後、先生は「ふう」と一息を吐いた。これがあれば、いざという時にある程度の無茶と無謀は押し通せる。勿論しない方がいいのは彼も重々承知しているが……生徒達が最前線で戦っているのに、自分だけが安全圏に居られるわけがないだろう。せめて、有事の際は命を張らなければ。

そんな事を考えながら、先生はクラフトチェンバーから背を向けた。



選別が終わった先生は、そのままシャールレのシャワールームで寝汗を流した。36度の生温い温度が自分の体にへばりついた淀みを洗い流してくれる様な心地がして、随分と長い時間、無心でシャワーを浴びていた。

麗らかな春先とはいえ湯冷めは風邪の原因になる為、手早くドライヤーやスキンケア等を済ませてスーツに着替える。連邦生徒会に對を成す黒、誰かの思い通りになんて染まらないという……決意の証明。

「らしく無い事を考えて……感傷的になっているのかい？ 私は」

夜はとても静かだから、独りぼっちだから、昼に考えないことが頭に浮かんでしまう。この分だと作業も手につかないだろう。気分転換に散歩でも行こうかと思った。

窓の外側には水滴が付着している。雨が降っているのだろうか。雨音は聞こえない。だから恐らく小雨だろう。ユウカが濡れずに帰

れたらいいな、なんて考えて。

傘を持ち、シャーレの外に出ると、やはり外は雨が降っていた。ポツポツと降る雨。ビニールの表面を撫でて、滑り落ちていく。

雨が奏でる音、ペトリコール。先生は夜の街が好きだった。眺めるのも、こうやって歩くのも。雨も好きだった。

水溜りの中に街灯りが反射してキラキラ光っている光景は幻想的で、夜の雨にしか魅せてくれない表情。そういった、限定的な条件でしか見られないものはきつと価値がある。

特に行き先はない。ぶらぶらと当てがなく歩いていく。直進、右折、左折。偶に戻ってみたり。

その中で先生は——見知った、見知らぬ少女を見つけた。



その少女に雨の中佇む理由を聞いても『理由なんてないよ』と返ってくるだろう。ただ、芽吹いた場所に咲く花の様に……ここにいます。雨が降っていてもそれは恵みで、心に溜まった弱い部分を洗い流してくれる様な。でも、少し冷たくて、寂しい。そんな夜。

いつも夜は悲しかった。4人皆で寝ていても仄暗い欠落と孤独は何処にも消えず、ただ意識が消えるその時まで暗い心と鬨ぎ合いをしないといけない。きつと全員同じ気持ちを抱えているのだろう。太陽が出ているときは、4人でいると孤独なんて感じない。でも、夜になると4人の仲間から、独りぼっちが4人集まっただけになるような気がしてならなかった。だから、夜はいつでも、寂しくて寒かった。その孤独は消えない。何度夜を重ねても薄れることはなくて、寧ろ補強されるばかり。

それが、もし消えるとすれば——。

「なんて、ね」

自嘲を孕んだ鈴の音のような声は夜に溶けた。消えない後悔と、時の雨。花瓶に水を灌ぐように、孤独はじつくりと満たされる——

——そう、思っていた。

「……？」

降り注いでいた冷たさが消えた。でも、雨が止んだわけではない。見上げると透明な膜が雨を遮っている。誰かが、彼女に傘を差し出した。

「風邪、引いちゃうよ」

声が聞こえた方へ、少女は俯いていた顔を上げる。優しい笑み、此方を心の底から慈しんでいることが手に取るように分かる表情。ユリとジャスミンが混ざった、花の香り。

「先生……？」

彼女がその名を呼ぶと、彼は雨空が晴れる様な陽だまりの笑顔を浮かべて。

「正解。私はシャーレの先生だよ、アツコ」

アリウススクワッドの姫、深窓の令嬢、ロイヤルブラッドの血統……秤アツコは先生と出会った。



先生はアツコを見た時、少し驚いた。恐らく、現在の時系列的にはベアトリーチェが彼女達アリウススクワッドを私兵化している頃だろう。エデン条約の締結阻止、という名目で彼女達を動かし……本命たる儀式をひた隠している。

ロイヤルブラッド、ユステイナ聖徒会の直系たるアツコはその計画の中核だ。そんな彼女が、仮面も付けずにこんな時間に一人で出歩いている……何かがあると勘繰るのも無理はないだろう。アリウススクワッドの誰かがいる場合は問題ないが、ベアトリーチェがいた場合……交戦は避けられない。

先生は懐にある世界大人のカードを覆す力をいつでも起動できる様にし、アロナに周囲の索敵を任せる。

「アツコは何でこんな所に？」

「……散歩？」

「そっか、私と一緒にだね」

——アロナから応答、周囲200m内でヘイロー及びゲマトリアの反応無し。その報告に先生は少し肩の力を抜いて、もう一度気を引き締めた。決して油断はできない。ベアトリーチェは他のゲマトリアと異なり、最初から先生を排除対象としている。仮に接敵した場合、間違いなく殺しに来るはずだ。そこに遊びも隙もない。

——アロナ。念の為、『天命』の準備をお願い。

滅びを滅ぼす刃の装填を済ませる。対ゲマトリアを想定した武装ではない上に、神秘を持たない己が振るったところで勝てるとは思わないが、時間稼ぎにはなる。上半身と下半身を真つ二つにすれば、ベアトリーチェでも暫く動けなくなるのは過去のループで確認済みだ。「でも、傘くらいは持つておかないとね。体は資本だからさ、風邪は引かない様にしないと」

「大丈夫。先生が持つてきてくれた」

そう言つて、ルビーのような真紅の瞳を向けてくれる彼女が何とも愛おしくて。

「……そうだね。確かに、そうだ」

「うん」

先生が差し伸べた手をアツコはしっかりと掴んで、立ち上がった。雨に濡れた彼女の温度は少し冷たかった。

「先生の手、あったかいね。安心する温度」

先生の実在を確かめる様に手を握るアツコと、されるがままの先生。アツコの表情は読み取りにくいが少し嬉しそうで、先生は苦い表情をしていた。

彼女が言つた、安心する温度。その言葉に胸が締め付けられる様な苦しみを覚えた。彼女達はこの暖かさがずっと与えられない環境にいたのだ。それを不幸と嘆く事も許されずに、兵器として在る事を望まれた。彼女の人生を大人が消費している。ただ、使えるからという理由で。彼女達はこの空の元、何処にでも飛べるはずなのに……それを心底身勝手な理由で閉じ込めているのだ。

——ああ、やはり私は貴方を許せないよ、ベアトリーチェ。「アツコはこれからどうするんだい？ 帰るのだったら傘はあげるけ

ど……」

彼女は少し考えて、「もう少し、此処にいる」と言った。先生は少し驚いた後、いつもの様に微笑んで。

「そっか……うん、分かった。じゃあ私も、アツコが帰るまでは此処にいるよ」

「優しいね、先生は」

そうして、2人は一つの傘で雨の中佇んでいた。会話はない。ただ、お互いの呼吸音と心臓の鼓動が、雨音に混ざるだけ。時折アツコは先生の横顔を眺めて、それに気づいた先生が微笑みかける。

雨夜に眠った街、2人きり。恋愛漫画で使い古された様なシチュエーション。流れる沈黙すら心地が良くて、まるで微睡の中にいるみたい。

「ねえ、先生」

その静寂を切り裂いたのは、意外なことにアツコの方で。

「先生は、今、幸せ？」

アツコの問いに、先生は少し驚いた様な顔をして——そして、直ぐに見惚れる様な笑顔を浮かべて。

「勿論、幸せだよ」

「そう……なら、良かった」

彼女は心底安心した様に微笑んだ。

貴方を信じている

その後、先生とアツコの間には会話はなかった。ただ、雨の中、2人でそこにいて。夜を過ごしていた。

そして雨が止んだ頃、先生はアツコに声をかけようとして——
——彼女が転寝している事に気づいたのだ。コートの袖を掴んで、彼の腕に撓垂れ掛るように。

気持ちよさそうに、穏やかに眠っている彼女を起こす気にはなれなくて、可能な限り振動を与えないように背負ってシャーレまで運んで、お風呂の準備をしていたら……彼女は起きた。キョロキョロと辺りを見渡しながら、ルベライトの綺麗な瞳を数回瞬かせて。

「ごめんね、先生」

「気にしないで、夜も遅かったんだ。眠くなるのも仕方ないよ……お風呂、使えるよ」

「何から何まで……ごめ——」
「アツコ」

その先はダメだよ、と言わんばかりに、先生はアツコの唇の前に人差し指を持ってきた。舌を少しでも出せば、唇を少しでも前にやったら触れそうな距離。アツコは少し驚いている。

「こういう時は、何て言えばいいか分かるかい？」

謝罪の言葉は使うべきではない、もっと他に相応しい言葉がある筈だと——先生は言って。

「うん。ありがとう、先生」

「どういたしまして。さ、風邪引いちゃいけないから、早く行ってきなさい。着替えはバスローブが備品である筈だからそれを使って。今着ているのはランドリーに入れてくれれば大丈夫だよ……ああ、浴場の場所は——」

「先生は一緒に入らないの？」

先生は固まった。そして、同時に納得して、感慨深くなった。ああ、アツコはこういう子だったなあ——と。

「色々と問題しか生まないし、入らないかなあ……」

その言葉を発した時、恐らく顔は若干引き攣っていただろうな、と先生は思った。



それからバスローブの着付けを手伝ったり、濡れた髪を乾かしたり。どちらも恐らくアツコ自身でできる筈だが、それでも先生にやってほしいとお願ひしたのは——単純に、彼と触れ合いたかったからだろう。

午前2時を過ぎると、また彼女は夢と現の境界線に立っていて、その狭間から現の方へ行かないように、彼はそつと彼女を横抱きにして——先生用の仮眠スペースへ向かった。

現在、アツコはベッドで眠っている。寝息は一定で、囁かされていない。白磁の様な肌と、サラサラと流れる紫の髪。本当に童話に出てくるお姫様のような。触れる事すら躊躇うような、完成された芸術品。先生は、そんな彼女が寝ているベッドの隅に腰掛けていて。理由は、彼の右手の人差し指と中指がアツコの手握られているから。ぎゅつと縋るように握りしめている彼女の手を解きたくなくて……こうして、彼女が目覚めるまで、夜明けまで待っている。

こうして穏やかな時間を過ごすのは久しぶりだと、先生は思った。何もやる事がなく、考える事もない時間は極めて貴重だ。

スマホもPCもない。タブレットはあるが、中のアロナは多分寝ている。暇つぶし用の本もない。

故に、先生は完全に世界から切り離された気分だった。いつもの様な溢れんばかりの情報が無い。あるのは指先から伝わるアツコの温度と、彼女の呼吸音。それは何処か浮世離れしていて、透明で。指先の温度から目を逸らせば、自分がいなくなったような気がして——

——終わりと始まりが近くて。

「……………」

先生は軽く頭を振った。雑念を追い出す様に。そして、ポツリと自

嘲気味に呟く。

「まるで死せる戦士^{エインヘリアル}じゃないか……」

死を重ねすぎた結果か分からないが、1人になると世界に溶ける感覚を味わう。希死念慮のような、甘い毒。じわりじわりと蝕んでいく死世界。これは良くない物だ、漠然と思う。

死に引つ張られているのだ。生に在りながらも、その実、絶命に瀕している。昨日の散歩も心の何処かで死に場所を探していたのかも知れない。あのままアツコに出会わなければ、ふらふらと海にでも行つて……身投げしていた可能性があるのだ。無意識下での自殺願望。思っているのか、思わされているのかは分からない。

後ろを振り向くと、救えなかつた生徒達の縋る手がある様な気がして、滅びた世界の残骸がある様な気がしてならなかった。勿論それらは幻覚。だけでも、それは目を閉じようとも消えてくれない瑕であり、彼が彼である限り背負わなければならない罪と罰。それらを抱いて生きると決めた。

先生は一度目を閉じて——そして、開眼する。渦巻いていた自己否定と破滅願望は消え去っていた。彼女の温度、呼吸音、心臓の鼓動……全て、伝わる。もう独りぼっちではない。それに安心感を覚えて——夜と孤独の残滓を飲み込んだ。いつか、誰にも見えない涙になる欠片達を。

「……本当に、どうしようもないなあ」
嘲を多分に含んだ言霊を呟きつつ、左手で前髪をくしやりと握つた。

ふと窓の外を見ると、空が白み始めていた。時刻は5時半過ぎ、夜明けだ。アツコはまだ寝ている。彼女を起こさないように、立ちあがろうとしたら——。

「んう……せん、せい……?」

鈴の音のような声が聞こえた。ベッドの方に視線を向けると、体を起こそうとしているアツコがいて——彼はそつと微笑んだ。

「まだ寝てていいよ……さあ、おやすみ。良い夢を」

先生が奇妙な起動詠唱^{ランゲージ}を呟き、左手でアツコの脛をそつと下ろす。

すると、彼女はまた夢の中へと送られた。すう、すう、と一定のリズムを刻んで。

——彼女がどんな環境で寝ているかは分からないが、恐らく良いものではないだろう。15歳の少女……思春期の女の子に、それは毒だ。だからシャールレにいる時くらいはゆつくり休んでほしい。此処には君を脅かす悪意も、君を傷つける敵意もないから。

「なんて、ね」

そう思うのは、きっと傲慢なのだ。彼女の人生は彼女のもので、選択の自由は彼女にある。彼女の心を決めるのは先生ではない。

先生に許された行為は彼女の選択を受け入れて、尊重して、意見を述べて、背中を押して——いつでも彼女の味方として存在し続けることだけ。

彼女を勝手に可哀想だと思つて施すのは、彼が持つ大人の美学に反する。例え根底にあるのが善意でも、他人の心を踏み躪ったり、尊重しない行為は悪意と何ら変わらないのだ。ベアトリーチエよりも醜悪な大人に成り下がりがたくない。

——彼女達は、自分で自分の道を選び取れる強さを持つているのだ。それを信じてやれなくて、何が大人か。何が先生か。

彼はアツコから離れた右手で、そつと彼女の頭を撫でる。いつか、彼女が握るものが銃ではなく——抱えきれないほどの花束になる事を祈つて。

彼は部屋を出た。



「先生？　どういう事が詳しく説明してくれませんか？」

「違うんですよ、ユウカ様……私は何もしてないんです……」

先生は正座をして仁王立ちのユウカを見上げていた。いつでも土下座に移行できる素晴らしき状態であるが、背後にドス黒いオーラのようなものが見えるユウカは切腹を命じて来そうな勢이었다。とても怖い。

事の発端は単純で、ユウカと先生が仕事している部屋にアツコが来たのだ。勿論バスローブ姿で。しかも、若干肌蹴ている状態。先生を見つめて妖艶に微笑む姿は、どう考えても事後だった。

そんなアツコを見た瞬間、ユウカは先生の視界を両手で塞ぎ、洗濯済みの彼女の服に着替えさせて……今に至る。

「何もしてないのにこんな可愛い女の子が来る訳ないでしょう！ 私が帰った後に何してたんですか!? 誑し込んだんですか!?!」

ぐうの音も出ない正論であった。

「先生、私は可愛いのか?」

「勿論。アツコは可愛いし、綺麗だよ」

正座している先生の隣でしゃがんでいるアツコに微笑みかけると……真正面のユウカの顔に青筋が奔った。

「先生? 私の前で口説くとはいい度胸ですね?」

「はい、すみません」

言うや否や、先生は即座に土下座した。ピシツとした見事な、美しい土下座であった。百鬼夜行の面々に鍛えられた姿勢の良さを活かしたものだだったが、ユウカのお気に召さなかったようである。

「で、なんでシャールレの仮眠室に女を連れ込んだんですか?」

「言い方に悪意ないかなあ!?!」

字面が酷いが、何も間違っていないのもまた事実だ。でも、もつとこの言葉のチョイスがあったらとうとう先生は思うが——悲しいことに、先生はユウカに逆らえない。完全に尻に敷かれている。側から見れば完全に夫婦漫才だ。

そんな2人を見ているアツコは、ふと何かを思い出した。そういうえば、ベッドのお礼を言っていなかった、と——。

「先生、ありがとう。一緒に寝てくれて」

ずつと側に来てくれてありがとう、おかげで寂しくなかったよ——

——彼女はそう言ったのだ。けども、ユウカには別の意味で捉えられてしまい——。

「はっ。」

ユウカの握っていたペンが握り潰され真っ二つにへし折れた。ま

るで先生の未来を暗示しているようなそれに合掌しつつ、『ああ、終わった』と思つて。

「誰か私を助けて……」

その声は多分震えていた。



「姫、戻ったのか」

「うん。ただいま、サツちゃん」

トリニティの地下墓地カタコンベに通じる迷宮のような回廊の一角、スクワッド専用スペースにいたのは、アリウススクワッドのリーダー……錠前サオリ。流麗な黒髪と、青のインナーカラーが目を惹く彼女はアツコの帰還を出迎えた。

「マダムを誤魔化すの、大変だったんだけど」

「そうですよ。本当にあのおばさん、しつこかったですよ……」

声の方を向くと、廊下の向こう側から歩いてくる少女2人が見えた。戒野ミサキと、槌永ヒヨリ。2人ともげんなりしていて、つい先ほどまでマダムやらおばさんやらと言われていた存在……ベアトリーチェと話していたのだろう。

「で、どこ行ってたの？」

「シャーレ」

アツコから、その言葉が出た瞬間——3人は息を呑んだ。

その可能性を考慮しなかった訳ではないが、アツコの口からシャーレというワードが出た事に衝撃を受けた。

そしてアツコは、3人が最も知りたかった事を告げて。

「先生は、あの人だったよ」

アリウススクワッド4名は、全員記憶ホルダー持ちだ。

「……そうか」

スクワッドという極少数のコミュニティとはいえ、その全員が回帰の記憶を持っているのは異常と言う他ない。超が幾つも付く特異現象だ。ワカモのように経験まで持っている訳ではないが……それで

もおかしい事には変わらない。

その起点になったのは、秤アツコ。彼女がこの異常極まる状態を作り出したのだ。原因はアツコの血統^{ロイヤルブラッド}、先生の主な死因^{ゲマトリア}が近くに居た事、彼女達の強固な絆が挙げられる。

本来ならばアツコのみが記憶を持っていたのだ。過去のループ、先生の死を目の当たりにした彼女はその記憶を物心ついた時から保有していた。

エデン条約と、それより後の物語。楽しすぎて泣いていた日常、辛すぎて笑っていた逆境。アリウスの外でも沢山の友達ができて、過ごした全ての記憶が宝石のようにキラキラと煌めいていて――
―その一切が血塗れになった惨劇。

その記憶が、伝播したのだ。サオリ、ミサキ、ヒヨリ……そして、此処にはいないアズサに。更に、ただ伝播した訳ではない。彼女達は自身が最も『悲劇』だと思いう記憶を取り戻したのだ。宛ら、アツコの神秘と繋いだ縁、絆を確固たるパスにして――世界のアーカイブにアクセスした様に。

故に、アツコを除く4名はそれぞれ異なるループの記憶を持っている。ベースとなるアツコの記憶と、彼女自身の記憶。そしてアツコは記憶のアクセス経路となった為、臃げではあるが他の4つの世界を保有している。

再現性は全くない、キヴオトスの中で唯一無二の血を持つアツコと、運命を共にしている彼女達だからこそ許された特権であった。

「先生、変わらなかつたよ。優しくて、暖かくて。でも、少し悲しい」「……そうか。あの人は……いや、そういう人だったな、貴方は。だから、私達は――」

この世界で前を向けそうなんだ、とサオリは苦笑した。

「私達は私達で歩いていけると証明する。だから、まずは――」

「ベアトリーチェを排除する」

ミサキの確固たる信念が籠った言葉に、「ああ」とサオリは肯定する。

何度もアツコを狙ったあの女は決して生かしておけない。何としても排除すべきアリウス全員の怨敵だ。

「アズサを怪しまれずにトリニテイへ送り出せたのは僥倖だった……お陰で、ティーパーティーの聖園ミカとコンタクトを取れた」

アズサをスパイと偽り、トリニテイへ送り込み……そこで、聖園ミカの協力を得られた。ミカもまた同様に記憶持ちだったため、かなりスムーズに話が進み……怪しまれないギリギリのラインで支援してもらっている。

「作戦はまだ煮詰まっていないが、決行は近い。それまで怪しまれないようにな。マダムは勿論、先生にも。だから、此処から作戦成功までは……先生と接触を禁止する」

「そうですよね。すぐ近くにいるのに会えないのは辛いですけど……バレたら、先生はきつと協力してくれますもんね、えへへ」

この作戦を考案した際、必ず守ると決めた掟——先生を決して巻き込まない。その掟は、先生が彼女達が知っている彼だと判明した先ほど……絶対に遵守すべき天則になった。

「先生に顔向けできる様にする。異なる世界とはいえ、私達は先生に多くを与えられた。もう餌を待つだけの雛鳥ではないんだ。全てを終えたその時、先生に会いに行こう」

vanitas vanitatum, et omnia vanitas.
空の空の虚しさ、いは空の虚しさ。

——そんな、諦めを肯定する言葉なんか頼らない。

く——彼が何度も送ってくれた言葉を、彼女達は紡ぐ。

「Per aspera ad astra」
苦難を乗り越えて星々の彼方へ
——きつと、祈りは届くはずだと。

何時迄も、貴方を想っているから（前）

——私は皆が好きなんだ。だから頑張れるんだよ。

そう笑った彼に、サオリ達は母性と父性を感じていた。

アリウスの貧民街出身の彼女達に両親はいない。身近にいる大人は兵士として、兵器としてしか見做さず、使い捨てる様に自分達を消費するだけ。そこには愛も執着もない。壊れたら捨てられるだけ。そんな時に、彼女達の手を引いて——闇から光に連れ出してくれた大人こそが、シャーレの先生だった。

勿論、最初は彼女達も混乱した。いきなり彼女達を取り巻く複雑な問題が解決の兆しを見せ、これまでの環境とは全く異なる場所……シャーレの居住区に放り込まれたのだ。保護観察処分、という名目で。

だが、それは何の強制力もなく、場所を探知できるGPSは体裁を気にしているから取り付けているだけ。彼がそれを使ってアリウススクワッドの行動を監視した事なんて一度もない。故に、やろうと思えば余裕で脱走もできたし、無防備な彼を背中から撃つ事だって……とても簡単だ。

勿論、サオリ達にそんな事を行う理由はない。彼女達は彼に多大な恩がある。きっと彼は『気にしないで。君達を助けるのは当たり前だよ』なんて言うだろうが……それでも恩は恩で、借りは借りだ。仇で返す事などしたくない。

それから、シャーレでの生活が始まった。4人用の大きい部屋が割り当てられたのだが、これは4人を纏めておく事で監視しやすくする——なんて理由は欠片もない。

大きく変わった環境で不安もあるだろうから、そういったものを分かち合えるように。仲の良い4人をバラバラにするのは忍びないから。狭い所が苦手なミサキが、少しでも安心できるように……そんな理由。

暖かいベッド、清掃が行き届いた部屋、生活に必要な家具は一通り

揃っていて、消耗品は下のコンビニで買える。朝、目が覚めると暖かい食事が用意されていて。昼食は先生の手作り弁当で、夜も暖かい食事。

勿論、唯甘やかしている訳ではない。新しい環境に慣れるまでの期間限定で、慣れ始めてきたら徐々に頻度を落としていき、最終的には全て自分自身でやって貰うつもりだったようだ。生徒を慈しみつつも、自分の足で立つ事を善しとする彼らしい指針。上辺だけの優しさではなく、相手の事を思い遣った優しさであり、善意。

それは、子どもの自立を促す父性。彼は自分の目で世界を見て、自分の足でこの世界に立ち……一つの命として、そこに在ってほしかったのだ。

そして、彼は父でありながら母の側面も持っていた。

ふとした時に見せる笑顔。それはまるでお日様のよう。或いは、夜寝る前の絵本。子供の頃から使っていたブランケット、ぬいぐるみ。何もかもを溶かして、解いて、許される感覚があった。魔性のような、とは口が裂けても言えない、聖女のような清廉さをもっている顔だった。全てを包み込む彼は、正しくサオリ達の母だった。

夜、見えない何かに押しつぶされて苦しくなっても、彼の腕の中なら穏やかに眠れたのだ。漠然とした不安や他者への恐怖心、未知への恐れが……彼に頭を優しく撫でられると、全て包容されて、消える。

する機会もなかった勉強、料理、洗濯、掃除。遊びも全力でやって、望めなかった友人もできて——本当に、楽しかった。

何よりも、すぐ近くに笑っている仲間がいて、隣には先生がいて。これが幸福なんだと漠然と思った。貴方が、私達の幸せを形作ってくれた。

こんな生活が、ずっと続けば良い——そう、思っていた。思っていたんだよ。

Vanitas vanitatum. Et omnia vanitas.

得ない。

——現実はいっだって悲劇だ。ハッピーエンドなんてあり

断頭台に吹き荒ぶ風が、先生を連れ去った。



「はあ……はあ……ぐう……」

黒い、暗い空間。そこに這いつくばっている少女はアリウススクワッドのサオリ。全身に傷を負っていて、頭から流れる血で右目が閉じられている。ヘイローも半壊していて、その超常性はすでに風前の灯火。だが——彼女は決して引かない。瞳の闘志は消えず、煌々と燃え盛っている。全ては、自分の後ろにいるミサキ達の為。サオリは気を失っている彼女達の盾になっていた。

「どうして、とは聞かないのですね」

そう言った女は、燃える様な赤い肌を持つ人型の怪物……ベアトリーチエ。最近までアリウスを手駒にしていたゲマトリアの1人、サオリ達の元マダム。

「当然だ。貴女が私達を生かしておく理由はない。今更そんな事を疑問には思わん」

そう言つて、サオリは血が混じつた唾を乱暴に吐き捨て、口を拭う。鮮血の赤が口紅の様に伸ばされた。

さて、どうするか——と、彼女は考える。状況は圧倒的に不利、残弾は少ない、逃げ場もない、増援も望めない。

詰みの2文字が脳裏を過ぎるが——まだ、負けてない。

「以前の貴女なら諦めていたでしょうに……生に執着する様になったのですね」

「はっ……先生は、どれだけ絶望的でも諦めなかった。何の力もないあの人が、だ」

銃口を眼前の悪意に向ける。決して引かぬ不退転の決意、死線を越える鉄の意志。死に体の彼女は、叡智^ゲの数秘術^{マトリア}に再び挑む。

「ならば、戦える力を持つ私が諦めるわけにはいかない……!」

この背中後ろにいる、大切な仲間達の為に。

「そうですか——では、死ね」

サオリの悲壮な決意に灰ほどの重みも感じないベアトリーチェは、無感情にサオリを殺そうとするが――。

「おや……」

ベアトリーチェの器官が、空間の微細な振動を捉えた。だが、その振動は徐々に巨大になり世界を震わせ――そして、ベアトリーチェが作っていた世界のテクスチャが木っ端微塵に破壊された。包んでいた暗黒、サオリ達をキヴオトスから切り離していた境界は消え、じめじめとした薄暗いカタコンベ――元いた場所へ戻ってる。勿論彼女だけでなく、後ろに倒れているミサキ達もちゃんという。

サオリは突然の変遷に驚いているが、対するベアトリーチェは眉ひとつ動かしていない。寧ろシナリオ通り、と言わんばかりの表情。待ち望んだ獲物が漸く掛かったことに歓喜していた。

「ええ――待っていましたよ、先生」

キィ、と軋む音がよく響いた。

「私の生徒に手を出すとは良い度胸をしているね」

春の陽だまりの様な優しい表情は何処にもない。ベアトリーチェを射抜く眼差しは絶対零度の殺意と敵意で満ち溢れている。手に持つは世界を歪ませる権能、背負うのは偽典の獣殺し。現状、先生が持つ全て。

「思った通りでした。生徒に手を出せば、貴方が出てくる――
――出て来ざるを得ない。それが罠だと分かっている。そして、相手が私ともなれば、貴方は迂闊に他の生徒を連れてくる事ができない――
――いい」

ベアトリーチェには神秘を殺す手段がある。そして、それを躊躇なく振るう精神性も有している。生徒を死地に送る事なんて先生にはできないから――
――こうして、彼単騎で来なければならぬ。何もかもがベアトリーチェのシナリオ通り。

だが――。

「そんな体で、よく私の前に来ましたね」

サオリのすぐ隣、ミレニアムのロゴが入った白い車椅子に座ってい

る先生を、ベアトリーチェは嘲笑った。

「これから死ぬ私の事なんてどうでもいいだろう？ ましてや、私と一緒に死ぬ貴方が気にするなんて、滑稽にも程がある」

その嘲笑に、彼は同じく嘲りを返して、嗤う。

先生は此処で——ベアトリーチェと差し違えて殺すつもりなのだ。もう先生は長くない。この空間を砕く際に支払った代償は彼の命に手を掛けるものだったから——あと、保って数分。

彼女は不愉快そうな顔をして「つまらない男だ」と吐き捨てた。

そして、サオリは——。

「——え……？」

信じられない言葉を聞いたような表情を浮かべていた。瞼が痙攣して、瞳孔が開いて、冷や汗が流れて——心臓が竦む。

「まっ、せんせ……死ぬ……嘘って……」

言葉が纏まらない。呂律が回らなくて、文としての体裁を保てていない。いつものような口調で『嘘だよ』って言ってほしいのに、彼はただ申し訳なさそうに微笑むばかり。

瞬きをした次の瞬間、消えてしまいそうな儂さは蜃気楼。ユリとジャスミンに混じる彼岸花——死の香り。

先生の死が覆せない結末である事を分かった——分かってしまった。

「ごめんね、サオリ。でも、君達を此処で終わらせないためには……こうするしかないんだ」

そう言つて、先生はサオリの頬を撫でる。最後の触れ合い、末期の温度。凍えそうなほど、冷たい手のひら。脈はない。鼓動はない。

——私は、どれだけ暗い顔をしていただろうか。

先生は大人のカードを起動させる。用途はサオリ達の転移。代償は先生の右腕。ぐちゃり、と湿っぽい音がして右腕が潰れる。多量の出血、車椅子の元にできる血溜まり。ワンテンポ遅れて激痛。

それらを平然とした顔で先生は飲み込んだ。この程度、慣れていると言わんばかりに。

そして、先生の補助によって彼女達のヘイローが高速で廻り、既存の物理法則を捻じ曲げつつ光を生む。此処ではない何処かへ、飛ぶために。

サオリが「待って」と叫んで手を伸ばしても——世界が断絶したように届かない。もう彼は彼女では決して触れない存在になっちゃった。

「生徒の神秘を否定すると同時に、全く異なる祈りをその身に抱かせる……正しく、悲劇を生み出す法則の否定、神の否定。或いは、世界からの自立。普遍的な善性、全ての願いを抱きしめる……ああ、なんて醜い」

ベアトリーチェは先生を見抜いていた。キヴオトスから求められた役割でなく——彼の魂、その本質を。ワカモが触れた彼の本质と同じものをベアトリーチェも得たのだ。だが、全く同じではない。ベアトリーチェはその日常を尊ぶ心を周囲を染め上げ、伝搬させる法則として見出した。

空の青さ、涼しい風、草原の緑、綺麗な茜空、大切な人と過ごした時間、夜寝る前の絵本、囲んだ食卓の暖かさ——そういった根源的な幸福を何よりも尊ぶ彼だからこそ持てる法則。

美しき日常を守り抜く、誰かがそれを知らないならば与えてみせる……という祈り。凡夫の極み、天を舞う生徒達に比べたら……ああ、なんと見窄らしく、つまらない。

「人の生涯を醜いの一言で片付ける……それが貴方の限界だよ、ベアトリーチェ。他のゲマトリアなら、そこに価値があると観測をしていたはずだ」

獣殺しが展開する。ミレニアムが開発した滅びを殺す兵装の中でも、最も火力と殺傷力に長けた——無限を殺す殲滅兵器。

先生ではなく生徒が使用する事を前提とした武装のため、彼には規格が合わず十全に払う事は出来ない。起動するだけでも有る筈のない器官が産む熱と激痛で狂死するのが関の山だが——

——先生はそれを、理屈もクソもない気合と根性で意識を繋ぎ止めている。

馬鹿げた意志力、規格外の精神性。気味が悪い、とベアトリーチェは吐き捨てた。誰が好き好んで、理解不能の化け物の相手をしたのか。こんな悍ましい生命、この世界に存在する事自体が許し難いのだ。

果てのない怒りと憎悪、嫌悪を抱いてベアトリーチェも同様に変身する。通常の変身ではなく、様々な因子を取り込んだ変貌——
——端的に言うならば、キヴォトスの神秘の集合体、寄せ集め、キメラ。
その姿を見て——先生は安堵したように微笑んだ。

「ああ——よかった。貴方はやはり、他のゲマトリアとは違う。他の方なら、此度の勝敗は些事として、決して本気を出さなかったでしょうが……貴方は重要だと認識して、持てる力を注ぎ込んでくれた。貴方の全開がそれであるならば——私の有りつ丈のリソースで以って殺し切れる」

ベアトリーチェが全力でなかったならば、まず間違いなく勝てなかった——先生はそう言ったのだ。生徒が作った兵器、これから自分ごとベアトリーチェを殺す墓標を愛しそうに、申し訳なさそうに撫でる。本来の使い方とは逸脱してしまったね、と思いながら。先生の肉体がリソースに変換される。エーテルになり、獣殺しの動力へと変貌し、代償として彼の存在が消失する。先生の持ち得る全てを対価とした刃が——ベアトリーチェの存在を、規模を捉えた。

「遺言くらいは聞いてやろう、シャールレの先生」

「ありませんよ——では、共に逝こうか。地獄界の教導者」

そして、場の殺意が臨界に達する——その直前。彼は後一秒もしたら転移が完了するサオリの方へ振り返り。

「サオリ」

——貴方は、いつもの調子で名前を呼んでくれて。

「後は、任せたよ」

——その笑顔が最期だなんて、認めたくなかったんだよ。

何時迄も、貴方を想っているから（後）

「……先生は、苦しんでいるの？」

「苦しむ主体が問題なのです」

ミサキの疑問に、医者は苦々しい表情のまま首を横に張って答えた。ミサキは医者を視界に入れてすらいない。見ているのは、ガラスの向こう側にあるベッド……そこに横たわっている先生。

先生をこの状態に追いやったのはデカグラマトンが一柱、イエソド。9番目のセフィラは突然ロックを変えて————避難誘導を行っていた先生にドローンを嚇しかけた。

アロナの防壁は僅かに間に合わず、ドローンの質量を活かした体当たり後、搭載されたアサルトライフルの掃射を1秒弱受けてしまい——
彼は一度死んだ。救急が着く前に自発呼吸が停止して、病院に到着する直前に心停止した。

だけど、先生はそこから甦った。適切な処置と、適切な機械。トリニティとミレニアムの意地、決して死なせないという決意は、先生を一度の死から引き上げたのだ。微細な出血はパッチで全て止め、傷を負った臓器は仮処置され、停止した心臓は再び動き出した。

ミサキはそれを見ている。いつものような表情で。悲しめなかったのだ。ミサキには余りにも死が日常すぎて、馴染み深い光景でありすぎた。慌てることなんてできやしない。彼女にとって死は隣人だった。

「そう……」

弱々しい声で呟いた後、医者には見向きもせずミサキは歩いて自身の病室に戻った。彼女自身も決して軽症とは言えない傷を負っていて、医者から安静を言われている。割り当てられたベッドに座り、天井を眺める。

世界はいつだって突然だ。今回だって、世界というものがそうあるべき唐突さを、改めて剥き出しにしたに過ぎない。ありふれた悲劇、その1ページ。

そして翌日、ミサキはもう一度先生の元へ行つた。昼は顔を合わせると面倒そうな人がいるから、夜中に。

常夜灯の灯りに導かれるように、病院内の迷路を突き進む。不思議なことに迷わなかった。まるで先生に手招きされているように、ミサキはICUまで辿り着いた。

沢山の管と、モニタ。チューブからは体の各部が不全になった先生を生かすための代替物質が注入されていて、肌の至る所に止血シートが貼られている。そして、そのシートの上や皮膚の上に直接ペンで書かれているのは電磁波の波長と周波数、使用する機械の名前。先生の機能が何処まで生きているのか、それらの個々の状態を忘れないようにするリマインダー。

どれくらいの間、先生のそんな姿を眺めていただろうか。どこかの時点で、「戒野ミサキさんですか？」と穏やかな声で聞かれて、彼女は振り返った。

「彼の担当医です」、と言って白衣の人物は自分の名前を名乗った。それをミサキはじつと見つめて、譫言のように。

「先生の状態は」

「多くの場所で内出血、骨折が起きています。幾つかの臓器はダメージを受けていて、機能を低下させていますが……それらは取り敢えず、テクノロジーが押さえ込んで生命に影響を及ぼさない範囲まで持っていています」

ミサキは『あの先生は生きているのか』と問い詰めたくなかったが……それをぐつと飲み込んだ。あそこで意識がなく横たわっている先生は果たして命なのか、ということとは。

「先生の意識は」

「意識があるかないか、というのは難しい問題です。先生は頭部にドローンの突撃を受けました。その際に頭部を地面に激しく打ち付け……その後の掃射によって一時的に脳に酸素と血液が回らなかったのです。故に、先生の脳は大きく損傷しています」

担当医は一度言葉を区切って。

「戒野ミサキさん。私達は先生の脳の機能モジュールの内、どの領域

が死んで、どの領域が生きているかを示す事ができません。ですが、どれだけのモジュールが残っていれば、それが意識と呼べるものなのか、それを経験する事ができないのです。死を経験できないのと同じように」

ミサキは病室に戻って考え続けた。先生が苦しんでいるのかどうか、苦痛を受ける主体が残っているのかどうか。あの場にあった先生の体に『先生』と呼べる自我が残っているのか、そして、その自我は苦痛を苦痛として認識できているのか。

脳死、と素直に言っただけ曖昧な領域が横たわっているなんて——
——知りたくなかった。

彼女は考えた。らしくもない事を。いつかの日、先生から借りた本の知識、彼の言葉。それらを使って、先生の命について、考えていた。そして——。

「——こんばんは、先生」

ミサキはICUの中、先生が横たわっているベッドに腰掛けた。手を握ると、暖かい。人の温度。これは自然なのか、人工なのか。

「苦しいよね……いや、私が貴方を苦しそうって思ったの。体に縛られている、先生の魂を憐れんだの。だから、悪いのは私。こうする事しか選べなかった私と——あの時、先生を守れなかった私達」

ミサキの手に握られている拳銃。2発しか装填されていない9mm口径、先生をこれから殺すもの。

「でも、1人は寂しいよね。だから、私も一緒に逝く」

一発目は普通の弾丸だが、二発目はハイローを殺す弾。先生を1人で逝かせない、ミサキができる最後の恩返し。先生が褒めてくれる事はないけど、それでも——彼にもう一度会いたいから。

「さよなら、先生。初恋だった——また、会おうね」

つう、と涙が頬を伝って——銃声が二発、病室に響いた。



ベアトリーチエに喉元を切り裂かれ、一瞬で絶命した先生を見て――ヒヨリは何を思っただろうか。絶望？ 怒り？ 憎悪？ 悲しみ？ どれも正解で、どれも違う。ヒヨリは人の死にそんな感情を今更抱けるほど純粹ではない。

その心にあつたのは、空虚。大切な宝物を壊されたような無常感。それが心を渦巻いていた。目と鼻の先で殺された彼の血を全身に浴びて、その暖かさに安堵を覚えて――それがもう届かないものになったと脳が認識した瞬間。

「ベアトリーチエ」

埋め尽くしたのは――。

「貴方を殺します」

殺意。殺意。殺意。殺意。他の感情が全て殺意で出力される。怒りも愛も憎しみも、全て殺意へ変換される。

薄ら笑いで、虚の瞳。流れる涙は赤い。全身を血で染め抜いた赫い悪鬼。卑屈な言動も、ネガティブな発言も此処には無い。ベアトリーチエへの殺意のみで動くキリングマシンがそこに居た。

それから、ヒヨリは戦い続けた。悪意と、自分達の敵と、先生の敵と。自壊さえ厭わない狂氣的な前のめり姿勢。肉体を全く顧みない、致命傷以外は全て無視する戦闘技法。ライフルを振り回し、銃弾が切れたら体術で以て敵を屠る――銃がなくても如何に多くの敵を殺せるかに着目したヒヨリ独自のスタイル。

四六時中銃を手放さず、休みなく戦場を渡り歩く。流した血と浴びた血は他の追隨を許さない。そうまでしてヒヨリが前に前に進むのは理由があつた。

「先生……」

ヒヨリは眼前の巨大な白い立方体と、それを取り囲むヒトガタを見て呟いた。白い立方体は震える。酷く生物的な動きで。

『P s e u d e p i g r a p h a ? j n l m w o――A
v e s t ā . あなたのつみをわたしはゆるします』

雑音。ノイズ。聞くに耐えない呪詛。しかも、それが先生の声で発

せられているとなると——腑が煮え繰り返るような怒りを覚える。

「ごめんなさい、先生。あの場で私が先生の体を取り返せなかったから、こんなことになっているんですよね。辛いつて、苦しいつて、痛いつて分かりますか？ 先生」

ベアトリーチェは先生の遺体を、徹底的に凌辱した。血液、肉片、臓器——全てを解剖し、先生と定義された個体を暴いた。その時に得られたデータを全て注ぎ込んだ物こそが目の前の白い立方体。生徒の心を折るために作られた悪趣味な舞台装置。

先生の脳を集積回路として利用した戦闘兵器は、多大な成果を挙げた。無意味な声を流すだけで、殺意が鈍る。攻撃ができない。

先生が死んでいる事、もうどこにも居ない事、目の前の敵は先生の残骸である事……生徒達も、そんなのは分かっている。だが、先生の残滓を感じられるから——撃てない。心のセーフティ。

『Gospel of Judas, Blut von Ischahriot——hhhhhhiiiiiiii……ヒヨリ』

どくん、と心臓が跳ねた。

「はい、先生……ヒヨリです。残骸とはいえ、もう一度名前を呼んでくれて嬉しいです……人生つて辛いことばかりですね。でも——

——私が終わらせてあげますから、えへへ」

その言葉を最後にヒヨリは口を噤んだ。人格が心の奥の方に追いやられ、戦闘に特化した思考が呼び出される。視界はクリアホワイト、武器に曇りもない——ここで、貴方を正しく死なせます。

合図もないのに、ヒヨリと残骸は同時に攻撃を仕掛けた。

2人の戦闘は苛烈を極めた。先生を埋葬するため全てを捨て去ったヒヨリと、戦闘指揮に常識を逸した才がある先生を利用したシステム。当初は残骸が有利だったが——ヒヨリが武装を解禁した段階で、天秤が傾いた。

ライフル以外にも戦車砲や手榴弾、ナイフやアサルトライフル等を持ち込んだ彼女はそのトリッキーな戦法で徹底的に攪乱し、数を減らし、防御障壁を突き破った。

そして――。

「辛いですよ、苦しいですよ。マダムに死後も利用されて――

――だから、先生。私は、貴方だったものを撃ちます」

ヒヨリの銃口は、剥き出しの脳髓に向いている。

『seawjnooofxswa――error, error, eeeeeeeアエ――』

やはり無意味なノイズだった。意味がない、ただ声紋が彼と一致しているだけの雑音。規格に合わない改造を施された彼は、既に死んでいるのだ。だからあれはゾンビに近い。それを正しく葬ってあげるのが、吊ってあげる事こそがヒヨリの望みだ。

そのはずなのに。

「おかしいですねえ……涙、止まらないです……えへへ……」

ぽたぽたと地面に水の花を作る。

でも、これが――最後の恩返しだから。逃げる事はできない。

目を逸らすこともできない。貴方の命の尊厳を守りたいから。

だから――ヒヨリは。

「本当に、ありがとうございます。先生がくれた幸せのおかげで、私はこうする事ができたんです」

最後の落涙と共に、引き金を引いた。



「先生、ありがとうございます。沢山の花をくれて」

「これくらいなんて事ないよ。アツコの学びを助けるのは当たり前だからさ」

午後10時過ぎ、先生とアツコは帰路に着いていた。様々な物を買に行き、フラワーショップで花を見て――充実した一日だった。アツコは先生を独占できたようで嬉しかったし、先生も彼女の笑顔が見れて嬉しかった。

2人が同じ感情を共有している空間というのはとても居心地が良く、あつという間に時間が過ぎ去ってしまったから――こう

して、予定の解散時間より2時間ほど遅れて帰宅している。

アツコの手には色とりどりの花達。抱えた花束を嬉しそうに見つめている。花束を抱く彼女は本当に芸術品のようで。でも、それ以上に、年相応の女の子だった。この子にはやはりこの顔が一番似合うな、なんて彼は思っている。

そうして、取り止めのない話をする——いつの間にか、アツコの拠点に着いていた。先生は彼女の指示に従って園芸用品を置いて、手に持った全ての荷物を片付ける。雑談混じり、声は絶えない。そして全てを終えて——。

「今日はありがとう、先生。とつても楽しかった」

「こちらこそ。私も楽しかったよ。また行こうね」

「うん、先生……実は、渡したいものがあるんだ——」

名残惜しいけど、これで終わり。本音を言うともつと話したかった、もつと一緒に居たかったけど、そうすると彼を困らせてしまうから。だから、今日はこれでお終い。

でも、また次の日会えるから——そう思っていたアツコを出迎えた彼は冷たかった。

半ばスラムと化している街の路地裏、キヴォトスの暴力の掃き溜めと称しても差し支えない場所に彼の体は転がされていた。左胸には穴と、そこに馴染んだ赤。白を穢すそれは彼の命が此処ではない何処かへ行ってしまった証拠。

ふらふらと、千鳥足で。何かに酩酊したように彼の元へと歩く。そして、座り込んで——そして、足元で水つぽい音がした。俯くように音の方を見ると、赤とは別の透明な液体が散乱している。

シリコンオイルだった。アツコが彼にあげたハーバリウムの中、花と共に円柱を満たしているもの。キラキラと輝くガラスの破片と、元の色とは別の赤に濡れた花達。

彼の為に、彼の為だけの花を。彼にとってもよく似合う花を敷き詰めた。昨日、彼に送ったもの。少し恥ずかしかったけど、日頃の感謝のお返しとして。受け取った時の彼の顔は、本当に空が晴れるような笑顔だった。見てる側ですら、自然と笑みが溢れてしまうような——

「うあ……」

もう、会えないんだね。

貴方はもう透明になってしまったんだね。

この花束は、貴方の墓標になってしまったんだね。

ずっと、遠くへ行ってしまったんだね。

「ありがとう、側に居てくれて……大好きだよ……」

アツコはそつと口付けをする。本当なら彼が生きている間に送れたかった言葉も添えて。初めてのキスは血の味がして、冷たかった。香る花は、彼のものか。それとも死臭か。分からない。

「でも、先生もこんな所じゃ寂しいよね」

アツコは流れる涙をそのままに、彼の身体を抱き抱える。いつかの彼がしてくれたような、お姫様抱っこ。たった21g軽くなっただけなのに、その重みが愛おしくなってしまう程に空虚で。

そして、少女は彼の傍らに小さな白を見た。

「花、咲いてるね……先生の側にも……」

少女の見つけた花は、一輪草。

花言葉は。

「追憶……」

——貴方を、何時迄も想っているよ。

日】

白銀の狼

やめてくれ、。もういいんだ……。

『System Error、System Error、System Error』

君が私の為に、そんなことをする必要はないんだ。お

願いだよ、分かってくれよ……。

『貴方の為、私は此処で、敵を止めます』

私の命にそんな価値はないんだ！ どうせ次がある

！ だから……！

「それでも、私は今ここにいる貴方に生きてほしいのです」

『あなたはずっと、わたしのそばに、いてくれた』

「——神秘、起動」



『先生〜！ 起きてくださーい！ 朝ですよ〜！』

「……んう……」

『起きて〜！』

端末から聞こえるアロナの声をガイドにして、肉体と意識を結ぶ。薄らと開いた視界から見えるのは真白いデスク、窓から差し込む太陽光。頭を乗せていた両腕は若干痺れている。緩慢とした動作で上体を起こした先生は数秒間、ぼうつと無人のシャーレを見て。

「おはよう、アロナ。モーニングコール、ありがとうね」

『はい。おはようございます、先生。何時も言っていますけど、ちゃんとベッドで、最低でもソファで寝てくださいいね？』

液晶に映るアロナは呆れを多く含んだ表情で頬を膨らませていた。

先生は「ごめん、次はちゃんとするよ」なんて言っているが、アロナは全く信じていない。

何せこの先生、キヴォトスに来て2週間経つが一回もベッドを利用していないのである。現状の利用者はアツコのみであり、先生は基本的に仕事をしながら寝落ちしている為、机と椅子が寝具になっている。さらに、睡眠時間も3時間未満と短く、不摂生の極み。先生はキヴォトスに来てから、自分の体を労った事が全くない。

そんな人間が『生活習慣を改める』なんて言っても——信じられるわけがない。ジト目で先生を見るアロナに、彼は少し居心地悪そうに、申し訳なさそうに笑った。

「最近はやる事が多くてね……」

『最近じゃなくて毎日じゃないですか。徹夜続きは体に悪いですよ？』

「分かってるさ。でも、現状シャーレは沢山の生徒がいる訳じゃないから、可能な限り私一人でも回さないよ。いつもユウカに迷惑をかけるわけにはいかないよ」

冗談めかした口調で「私があと10人位いれば楽をできるんだけどね」と先生は言って、紙束をペンで叩いた。処理しても終わりが見えないデスクワークの一片、これと同じ量のものが電子媒体にある……そう考えると中々気が滅入りそうであるが、泣き言は言ってられない。可能な限り仕事は前倒しにしてやっておかないと、臨時の仕事を詰め込める余裕を生めないのだ。

「アロナ、今日は誰か来たかい？」

『いえ。ユウカさんもワカモさんもいらしてませんよ。何か伝える事があるんですか？』

「いつもみたいに存在を感じないからさ。ちよつと気になっただけだよ……」

先生はデスクの引き出しからケースを取り出し、中に入っている錠剤を2つ掌に出して、口に放り込んで水と一緒に飲み込む。

ワカモの話……彼女をシャーレ所属にする件は中々に上手く運んでいる。後は最終決議で反対意見が出なければ、彼女は晴れて指名手

配犯でなくなるだろう。

それまで頑張らなければ、と決意をして――アロナに再び問いを投げかけた。

「何か変わった事は？」

『うーん、特にはないですね。各学校や団体、自治区の要望書や申請書、相談の類は多いですが……ゲヘナ学園の風紀委員会とトリニティ総合学園のティーパーティからの会談の申し出は届いてますけど、急ぎではないですし……』

アロナは様々な書類データをタブレット上に表示させて、『急ぎの要件はあったかなー？』と探っていると、突然、『あ！』と何かを思い出したような声を出した。

『そういえば手紙が一通届いていました！』

「手紙？」

オウム返しをすると、アロナは元氣よく『はい！』と返事をして。『デスク傍に便箋を置いておきました！。これは恐らく、先生が一度目を通して判断した方が良さそうなので……あ、爆発とかはしないですよ！。そこは抜かりなくスキャンしました！』

アロナの指差した方向に視線を向けると、そこには確かに一通の便箋があった。手紙を手元まで持ってきて、表面にそつと指を走らせる。

認めた人の性格が垣間見える丁寧な手紙と、その梱包。裏面の封に使われているのは、正三角形と日輪のシンボル。

「……だとすると」

先生は封を丁寧に切って中身を取り出すと、便箋3枚に渡って綴られた文字列に目を落とす。

連邦捜査部の先生へ

こんにちは。私はアビドス高等学校の奥空アヤネと申します。今回どうしても先生にお願いしたい事がありまして、こうしてお手紙を書きました。

単刀直入に言いますと、今、私達の学校は追い詰められています。

それも、地域の暴力組織によつてです。

こうなつてしまった事情は、かなり複雑ですが……どうやら、私達の学校の校舎が狙われている様です。

今はどうにか食い止めていますが、そろそろ弾薬などの補給が底を突いてしまいます……このままでは、暴力組織に学校を占拠されてしまいそうな状況です。

それで、今回先生にお願いできればと思いましたが、先生、どうか私達の力になつていただけませんか？

「……アビドス高等学校。ああ、君たちの事は——よく、知っているとも」

手紙の全文を読み終えた先生はポツリと呟いて、手紙を折り目に沿つて畳んでデスクの引き出しに仕舞う。

紙媒体の仕事は、期限が2週間以内のものは全て終了させた。電子媒体は10日以内のものは残つてないはず。この進捗ならばシャーレのオフィスを開けても問題ないだろう。

此処からが本番だ。決して失敗は許されない。キヴオトスの根の底、ゲマトリアの胎動する悪意が——本格的に始動した。

タブレットを手に取り、クラフトチェンバーのパラメータを見る。

弾薬等の各種補給物資——OK。

概念武装『天命』——完成率58%、擬似展開可能。

概念武装『天理』——完成率34%。

決戦礼装『獣殺し』——完成率13%。

決戦礼装『神殺し』——完成率2%。

アンチ・パラドックス——完成率48%。

神秘否定防壁プロトコル——完成率63%、擬似展開可能。

「まあ、こんなものか」

必要最低限の準備は出来ている。欲を言えばもう少し……最低でも礼装一柱が完全展開できれば良かったが、贅沢はできない。寧ろ、過去の例から鑑みてはかなり恵まれている方だ。この手札でも——

——充分戦える。

「アロナ、暫くシャールレを空けるから施錠を頼むよ」

『おおー！ もう出張されるんですね！ 凄い行動力です！』

画面の向こう側の青い少女は『このアロナに任せてください！』とビシツと敬礼して、シャールレの施錠に取り掛かった。その間に先生はユウカとワカモに暫く留守にする旨の連絡を送り、ホームページやSNSのアカウントでも同様のインフォメーションを記載する。

医療キットとタブレット、ペットボトルの水と軽食をバッグに放り込んで、着替えとシャールレのコートを取り出してシャワー室へ足を向けた。

「さて、ここからだ」

先生本人に指摘すると苦虫をダース単位で噛み潰したような顔をするだろうが——彼はベアトリーチエ以外のゲマトリアをそれなりに信頼している。無論、そこに友愛やら親愛といった感情は皆無だ。彼にとってゲマトリアは踏み越えるべき障害であり、生徒の為に倒すべき敵だ。間違っても握手をして仲良しこよしになる関係ではない。

だが、彼らの神秘を捉える感覚……所謂レーダーのようなものは、信頼と信用を置いている。神秘の探究者にして、キヴオトスの影に蠢く者。暗号数式によって神秘を暴く秘術者。表舞台には殆ど顔を出さない彼らが、目立つほど動いたということは——始まるのだ。キヴオトスの運命を決める聖戦が。

先生の勝ち目は那由多の彼方。そこに1が有るかすらも疑わしい領域にのみ、辛うじて勝機と呼べる何かがある。

「勝つのは私達だ」

それでも、可愛い教え子達は善い未来を描いてくれると——
彼は心の底から信じているのだ。



「今度はへりで行こう……」

最早呪詛のような謔言を溢す、純白の制服とコートに身を包んだ先生は絶賛後悔していた。朝早くにシャーレを発ち、アビドス自治区の最寄り駅に下車して——そこから徒歩での移動だった。どの方角を見ても同じ砂漠の景色が広がる広大な地を歩き続けて数日。最短ルートを突き進んでいる筈なのにまだ目的地には遠い、という現実を突きつけられた際に出た本音。今更引き返す事も出来ない割と最悪な状態だった。

先生はマップアプリが表示されたタブレットを片手に持ちながら、自販機で買ったドリンクを口に含んで——若干顔を顰めた。「捨てるほど不味いわけではないけど……」

鯖コーラ味。彼の好奇心がゴーサインを出して買ったゲテモノドリンクは、何とも形容し難い味をしていた。美味しくもないし、不味くもない。変わったものが好きなイズミ辺りに上げたら面白そうな味だった。

「それ、美味しいの？」

「リピートはしない味かなあ……」

「ん、そうなんだ」

彼は何とも言えない返事を聞いて、後ろを振り返った。

アビドスの校章を身につけた狼耳の銀髪の少女が、何とも表情で先生を見上げていた。読み取れる感情は物珍しさや好奇心だろうか。

——君はワカモのように覚えてはいないんだね。

何処に向けるべきでもない寂しさを呑み込んで、先生は穏やかな笑みを作る。感情の残滓は決して彼の表層に出ることはなく、心の廃棄孔に遺棄される。

そして、その笑みを向けられた少女——砂狼シロコは驚きで目をパチパチしていた。凧いだ水面のような微笑が先程までゲテモノを飲んでいたよく分からない大人から発生したものだと思えると、若干脳がバグリそうだった。

シロコが驚きでフリーズしていると、彼は「ああ」と何か納得したような声を上げて。

「そういえば、自己紹介がまだだったね。私は連邦捜査部シャーレの

先生。気軽に先生と呼んでくれると嬉しいな」

「私は砂狼シロコ。シャーレの先生って事は、もしかして――」

「お察しの通りだよ。私はアビドス高等学校に用事があって来たんだ」

「そっか、なら久々のお客様だ」

シロコはそう言って、微笑む。本当に久々なのだろう――
こうして、悪意や害意、敵意が欠片もない善性の塊のような人が此処に訪れるのは。

「で、意気揚々とシャーレを発つただけど……まあ、このザマでね」
彼は苦笑いして辺りを見渡す。着実にアビドスに近づいてはいるものの、絵面は完全に砂漠の遭難者だ。あと数日分食料と水の備蓄はあるが、ぶつちやけもうやりたくないのが本音だ。中高校生のようにバイタリテイに溢れているわけではなく、成人を迎えた大人なのだ。精神力は兎も角、体力は加速度的に削れていき、休んだとしても疲労は残る。

「此処は砂漠地帯だから。郊外の方に行けば市街地やお店、ホテルはあるけどちよつと遠いし」

「だねえ……シロコはこの後は学校かい？」

「ん、そうだよ」

その言葉に彼は『待つてました！』と言わんばかりに飛びついた。此処からアビドスまで残り200km、5km/hで歩いてても40時間掛かるのだ。徒歩が食傷気味になっている彼に――恥も外聞も無い。運んでもらう気であった。

「君さえ良ければ学校まで案内して欲しいんだけど、どうかな？」

「ん、全然大丈夫。歩ける？」

「ちよつと厳しいから、そのロードバイクの後ろに乗せて貰うか、背負ってくれるとありがたいんだけど……」

彼は「どうかな」と言ってシロコに打診する。

勿論、シロコとしても久しぶりのお客様を無碍にしたくはない。それもこのタイミングで来たという事は恐らくアヤネの手紙を読んで

きたのだろうか。既に生徒が殆ど残っていない学校と、そこにいる生徒達の為にたった一人で砂漠を歩いてきた彼を放置して進む事はそもそも選択肢に入っていない。

だが――。

「これ、1人用だから……背負って行くしかないし……」

「私はそこまで重くないから、君なら片手でも持てると思うけど……」

「えっと、さっきまでロードバイクに乗っていたから、その、沢山掻いた訳ではないけれど……汗が……」

「私は気にしないけど……」

シロコだつて年頃の女の子だ。汗の匂いは気にする。彼が、ではなく彼女が気にするのだ。そこまで汗臭くはないだろうが――

―それでも、恥ずかしいものは恥ずかしい。

そんな彼女の逡巡を感じ取った先生は。

「勿論、君が嫌ならこの話は――」

「……大丈夫。背負う」

彼は気にしないと云つてくれたし、無理に頼む事はなく最後はシロコの意味を尊重してくれた。彼女はそれで充分だった。

「ありがとう、シロコ。じゃあお言葉に甘えて……」

先生はシロコの肩に手を置いて、身体の重みを彼女の背に預ける。

シロコはその感触を確かめていた。自分とは違う、男性の体。細身の体から想像できていたが、体重は軽かった。身長を鑑みると、この重さはちゃんと食べているのか心配になる位に。背中から伝わる鼓動と、フローラルな香りに混ざる汗。ふと横を見ると、彼の顔がある。

総じて、結構背徳的であった。シロコの頬に茜が散る。

「それじゃ、しっかり捕まってる」

上がった体温と心拍数を隠すように、シロコは先生を背負ってアビドスへ駆け出した。

三叉路の先

アビドス高等学校、その一室。先生を背負ったまま校内へと入ったシロコは、そのままメンバーが集まっている部屋のドアを開け放った。

「ただいま」

「おかえり、シロコ先輩」

如何にも文芸部室と云った部屋の中には、ホワイトボードと長机、スチール棚にぎっしり詰まったファイル。時折、テーブルの上に見える弾薬と銃器が物騒ではあるもののキヴオトスでは一般的な風景だ。銃火器はキヴオトスに置いてはライフラインの一つであり、生活に欠かせない物である。自衛用の銃すら懐に忍ばせていない先生がキヴオトスでは異端も異端なのだ。

部屋の中には猫耳と黒髪のツインテールが特徴的な少女——黒見セリカと、赤縁の眼鏡を掛けた少女——奥空アヤネ、服の上からでも分かる抜群のプロポーシヨンと明るい髪色を持つ少女——十六夜ノノミ。

彼女達は仲間を出迎えようと顔を上げて——。

「——うわっ!? 何!? そのおんぶしているの誰!？」

シロコに背にもう1人いる事に最初に気づいたのはセリカ。彼女は背負われ脱力している大人の男を視界に収めて瞠目する。大切な友人が殺人犯（推定）になった瞬間であった。

「わあ、シロコちゃんが大人を拉致してきました!」

「拉致!? もしかして死体!? シロコ先輩、ついに殺っちゃったんですか……!?!」

「皆落ち着いて、バレなきや犯罪じゃないわ! 死体を隠す場所を探すわよ! 体育倉庫にシャベルがあるから、それで——」

セリカの声に2人の生徒が集まり、更に騒がしくなる。彼女達はシロコに背負われている先生に対して思い思いの反応を見せ、拉致だの死体遺棄だのとんでもない事を言い出し、何とか友人の罪を無かった事に出来ないかを模索している。これはこれで美しい友情なのかも

しれない。

そして、普段どんな目で見られているのか心配になる程の心ない扱いと言葉にシロコは何とも言えない表情を浮かべている。表情変化が少し分かりにくい彼女にしてはかなり珍しい、割と心外そうな表情であった。そんな彼女の愛らしい顔を特等席で眺めた先生は。

「……これ、死んだふりした方が面白い？」

「死体が喋った!？」

「言葉のナイフ鋭すぎないかなあ!？」

心無い言葉パート3である。矛先はシロコではなく先生であるが、切れ味はシロコの時よりも増している気がする。

なお、先生は那由多の果てまで屍を重ねているため死体扱いも強ち間違いではないのだが、それはそれだ。この世界の自分はまだちゃんと息をしている。

「いや……普通に生きている大人だから。死体でもないしゾンビでもない。うちの学校に用事があるって云われて」

シロコがそう言って訂正すると、3人の動きが示し合わせたようにピタツと止まった。そして、3人は彼女の発言内容を咀嚼し、恐る恐る口を開く。

「……えっ？ 死体じゃ、なかったのですか？」

「拉致ではなく、お客さん？」

「そうみたい」

シロコにおんぶされている彼がお客さんであると分かると、3人は顔を見合わせ……その後、先生を見つめる。視線の色は好奇心、興味、疑い……その他諸々。中には『いい加減降りたら?』と言わんばかりの視線もあったが、先生は見て見ぬふりをした。タイミングを見失ったんです、と言いつつ。

「びっくりしました。お客様がいらつしやるなんて、とつても久しぶりですね」

「そ、それもそうですね……でも、来客の予定なんてありませんたっけ……?」

「えっと、死体でもなくて拉致でもなかったとしたら、この人は一体誰

なの？」

「それは――」

続きの言葉を綴ろうとしたシロコを止めたのは、背負われている先生だった。彼は『自己紹介くらいは自分でやるよ』と言わんばかりにシロコの言葉を手で優しく遮り、彼女の背から降りる。少し乱れたスーツとコートを整え、胸ポケットに入れていたIDカードを晒して。

「初めまして。アビドス高等学校の方々。私は連邦捜査部シャーレの顧問だ。君達の手紙を頂き、此方に参った次第です――なん
て、ね。気軽に『先生』と呼んでくれると嬉しいな。よろしくね」

彼はその顔を耽美に歪めて、笑う。堅苦しい挨拶と、少し冗談めかした口調で雰囲気を柔らかく。首元で揺れるIDカードにはシャーレと連邦生徒会のロゴ、羽織っている白のコートもシャーレの刺繍が施されている。よく見ると、顔もクロノスクールがアップロードしていた動画に映っていた人物と一致している。

まず、間違いなく本物のシャーレ顧問……それが分かった瞬間、3人は驚き、手を取り合って歓喜した。

「え、ええっ!?! まさか!?!」

「連邦捜査部『シャーレ』の先生!?!」

「わあ! 支援要請が受理されたのですね! 良かったですね、アヤネちゃん!」

「はい! これ……弾薬や補給品の援助が受けられます!」

その喜びを見て、彼もまた顔を綻ばせた。彼女たちの孤独な戦いに一先ずピリオドを打てたことに喜びを感じて。特に、彼に手紙を出したアヤネは目じりに小粒の涙を浮かべていた。本当に、藁にも縋る思いだったのだろう。この笑顔達が見ただけでも彼の数日に渡る砂漠での移動の努力が報われる気がした。

「あ、早くホシノ先輩にも知らせてあげないと……」

そう言ってアヤネは部屋をキョロキョロと見渡すが……部屋には先生を含めて5人しかいない。ホシノと呼ばれる少女はこの部屋にはいなかった。

「あれ？ ホシノ先輩は？」

「委員長は隣の部屋で寝てるよ。私、起こして来る」

そう言つて部屋を出ていくセリカを見送り、アヤネは改めて先生に向き直る。彼は微笑を浮かべてセリカに「いつてらっしやい」と手を振つていて——視線に気づいたのか、アヤネの方を見る。

アヤネは手紙を読んでくれたことと、補給のお礼、そしてメンバーの紹介を行おうと口を開くが——それは叶わなかった。彼らの空気を鋭い音と硝煙が切り裂く。

「じゅ、銃声!？」

「……ッ！」

弾かれたように窓の外を見ると、視界に映ったのはヘルメットを被つた集団だった。彼女達の手には多種多様な重火器、爆発物が握られており、どう解釈しても友好的な集団とは言えないだろう。威嚇のつもりか空に向かって鉛弾をばら撒いている者もちらほらといた。

先生は浮かべていた微笑を消して、口元を真一文字に引き締める。

「ひゃーっはははは！」

「攻撃、攻撃だ！ 奴らは既に弾薬の補給を絶たれている！ 襲撃せよ！ 学校を占領するのだ！」

間違いなく両手両足の指では足りない人数の集団が、無秩序に校門へ殺到している光景を見て——シロコ達は露骨に顔を顰めた。

「わわっ!？」 武装集団が学校に接近しています！ カタカタヘルメット団のようです！」

「あいつら……！ 性懲りもなく！」

ギリツと歯を軋ませるシロコは愛銃たるSG550カスタムのセーフティを外し、即座に敵手を打ち倒すことができるようにしたとき——バン！ とドアが勢いよく開け放たれた。

「ホシノ先輩連れて来たよ！ 先輩っ、寝ぼけていないで、起きて！」
「むにゃ……まだ起きる時間じゃないよお〜」

セリカの腕の中には小柄なピンク髪の少女——小鳥遊ホシノが抱えられている。まだ半分以上夢の中にいるのか、言葉はふにやふにや、目は閉じられていて、四肢は脱力し切つていて、セリカに凭れ

掛るような体勢になっている。

「ホシノ先輩！ 襲撃、襲撃です！ ヘルメット団が攻めて来たんですよ！ あと、こちらはシャールレの先生です！」

「ありやくそりや大変だねえ……あ、先生？ よろしく……むにや……」

先生は柔和な笑みで「よろしくね」とホシノに挨拶したのち、再び表情を切り替える。アビドスの面々は、この切り替えのシームレスさに少し驚いたようだが……即座にそんな事をしてる場合ではないと判断。眠り姫ホシノを起こそうと、彼女へ向かって大声で捲し立てる。

「先輩、しっかりして！ 出動だよ、装備を持って！ 学校を守らないとっ！」

「ふああ……むにや……おちおち昼寝もできないじゃないか、ヘルメット団め」

その語気の強さにただ事ではないと気付いたのか、ホシノの両眼が開かれる。金と青のオッドアイが先生を一瞬射貫いて——それから、窓の外を見て恨み言を呟く。まだ眠そうなものの、きちんと自分の足で立っているため、及第点だろう。

そのまま彼女はふらふらとした足取りで自身の装備たるシヨットガンとバリステイクシールドを取りに行った。

「すぐに出るよ。補給は受けれるから、出し惜しみせず使い切る」

「はーい、みんなで出撃です☆」

「私がオペレーターを担当します。先生は此方でサポートをお願いしますー！」

アヤネがそう言うと、先生は柔らかい微笑みを浮かべた。嬉しかったのだ、彼女達に土壇場でのサポートを任せられる程度には信頼されていることが。

「ああ、任せて。君たちが戦いやすいように、場を整えよう……」

先生は既に戦闘オペレートシステムを立ち上げ、脳の思考も完全に切り替えている。現時点のアビドスの面々の戦闘力は熟知している。適性も戦い方も、全て全て——ああ、知っているとも。

校門へ駆け出した生徒達をアヤネと共に見送りながら、先生はカバ

ンの中を探り……目的の物を取り出した。

「アロナ、制御を頼むよ」

脳内に聞こえる『はい！ 任せてください！』という頼もしい言葉に安堵を抱いて、先生はドローンを飛ばす。

高性能カメラとマイクのみが搭載されたドローンは戦闘フィールド全域をその視野に収め、タブレット上に投影。既にシロコ達は戦場に降り立っていたが——その表情は芳しくなかった。単純明快に、人数が違いすぎるのだ。ざっと見て10倍近い差があるだろう。アヤネもディスプレイに映った光景に顔色を悪くしている。

だが——先生は全く焦っていない。必ず勝てるという確信がある。

なぜならば先生にも手札が多くあり、この場で切っても痛くないカードだつてある。そして、アビドスの面々は……とても強いのだ。故に、彼は約束された勝利を確信して脳内で戦術を組み立てる。

「数は43、特殊な装備も見当たらない……これなら問題はなさそうだ。量子波送受信機構、起動」

——掌握、完了。

先生の両眼が開かれる。眼球には幾何学模様————旧世界言語ヘブライ語が浮かび上がり、虹彩が青色に染まる。それはまるで——アロナがいる世界のような蒼穹の色だった。



アビドスの少女達のヒーローが僅かに燐光を帯びる。それと同時に視界が鮮明になり——。

「なに、これ……」

少女達の視界に映っているのは、文字通り戦場の全てだった。

自身のステータスは勿論の事、味方及び敵のステータス、敵の行動予測とその確率、敵味方の位置、詳細なマップ、起こりうる自然現象、各種環境データ——戦場において、戦闘において欲しい情報の全てが、ノイズにならない範囲で視界に投影されている。

アヤネに映る情報はもう少し戦場を俯瞰したものになっている。敵のステータスはなく、代わりに戦場の全体像を広く捉えた——指揮官向けの情報が与えられている。しかも、オルタナティブの表示がアヤネの眼鏡に搭載されている液晶ディスプレイと競合しないように配慮までされているのだ。

『私ができる精一杯のサポートさ。未来予測はあくまで予測で、事象の固定化ではないから過信しないようにね』

だが、当然フィードバックはある。情報をリアルタイムで共有しているという事は、完全に同期している事を指す。先生にはリアルタイムで5人分の視覚と聴覚、触覚を処理しつつ、更に接続している5人の負担を軽減するための演算もしなければならぬ。

アロナは演算に直接関わらず、常に余裕を持たせている為——彼は絶え間なく送られてくる莫大なデータを、外付けの演算機無し、文字通り脳一つで捌いているのだ。

常人ならまず間違はなく脳が焼き切れる情報量、ヒーローを持つ少女達でも耐えられない程であるが……先生はそれを平然とした顔で捌いている。過去のループにおいて脳髄を集積回路として利用された経験が活きているのだ。あまり思い出さたくない類の記憶と体験だが、使えるものは全て使うのが彼のモットー。己の全てを薪に焚べて、高く崇く——天を目指してイカロスの様に飛翔するのだ。蟬の翼が果てるまで。

故に、現在の先生……アロナと共にオペレーティングシステムを立ち上げている先生はほぼスパコンと呼んで差し支えない。演算力と情報処理能力は、キヴォトス全てを合算したモノと比較しても話にならないレベルだ。

『ああ、心配いらぬよ——全て、任せてくれ』

離れているはずなのに、シロコ達には彼の表情が見えた気がした。血が通っていないような透明な表情と、僅かに吊り上がった口角、瞳の温度は冷たい。

【OPEN COMBAT】

開戦の号砲が響き渡った。

篡奪の砂塵

開戦の合図が目のオルタナティブに表示されたと同時に、ホシノは銃のグリップを握りしめる。ベレッタ1301 Tactical、面制圧攻撃。そして、彼女の変化を表す……誰かを守るための盾。

彼女は、先生が嘗ての自分と似ていると思ったのだ。多く言葉を交わしたわけではない。寧ろ、挨拶を一回しただけの薄っぺらい関係性。だが、それでも……彼女は先生と同じだと感じた。

自身を顧みることがない、狂気的な前のめり姿勢。

果たせなかった約束を胸に抱いて、傷だらけになりながら歩き続ける姿。

そして、失ってしまった何かを狂おしいほど求める飢餓感。

現段階では信頼も信用もしていない。だが、過去と今のホシノを写す鏡のような彼は、決して裏切れないという確信があった。

だって、自分は最後まで裏切れなかったのだから。その重荷を投げ出すことなどできなかつたから。

だから、きつと。

彼は、これから信用も信頼もできる大人になる。

「ホシノ先輩、いけそう？」

「ん……ま、多分大丈夫でしょ。分断して各個撃破に専念しちゃえば、人数差なんてあつて無いようなものだし。それに、システム……なんだっけ……？ まあ、このオルタナもあるし。それに、作戦立案は先生がしてくれるっばいじゃん」

ホシノはにへら、と笑みを浮かべて金色の目を指す。戦いやすい、なんてレベルの話ではない。これさえあれば孤立無援でもある程度は戦えてしまうような、キヴオトスにおける戦闘の有利不利を根底から覆す劇物だ。戦い方さえ考えれば、この人数でも一個小隊とやりあえてしまうだろう。

敵に回つたら、と考えるだけでも恐ろしい。前線で撃ち合っている全員が戦場のすべての情報を得ているなんて悪夢以外の何物でもな

い。
「いやー、それにしても凄いね、これ。どんなスパコン使ってるんだろ」

「ん。欲しい情報全部ある。大人って凄いね」

「これはあの人が特別だと思うなく」

「じゃあ、先生が凄いつてこと?」

「そうだねえ」

視線を向けた先や注視した光景すらも即座に分析し、結果を出力する規格外の演算能力が先生の脳一つで賄われているなんて言っても、誰も信じないだろう。

彼女達は軽口を叩きながら、じつとオルタナを見ている。先生の指示だ。

反撃は最前線のヘルメット団がりロードするタイミングで、既にカウントは始まっている。取るべきポジション、予想される反撃、弾道予測。

秒刻みで流動する戦場の、必要なデータだけを得られる——
——全能に近い感覚。

狙うのは20m先にいる、スリーマンセルで固まっている不良達。その10m離れた場所にもツーマンセルで固まっている不良がいるが、彼女達は別動隊のターゲットだ。

倒す順番はもう分かっている。そして、予想される反撃も動作も——
——その後の行動も。

ホシノは乾いた唇を舌で舐めて、ショットガンと展開済みの盾を硬く握る。カウントの表示が2になり、1になり——。
そして、臨界^{ゼロ}へ。

『反撃開始』

「じゃあシロコちゃん、カバーお願いね」

「ん、任せて」

聞こえた先生の声と共に、ホシノは飛び出し——それにコンマ5秒遅れてシロコが追隨する。

「たった2人だ！ 囲めッ！」

「ん、ちよつと判断遅いんじゃないかな？」

飛び出したホシノに銃口を向け、その後ろのシロコに目を向けた不良達への——呆れにも近い言葉。

銃に加えてシールドまで持っているとは思えない初速と加速で一瞬で距離を詰めた彼女はほぼゼロ距離で不良にトリガー。セミオートのショットガンが一瞬で敵の意識を刈り取る。

「こいつツー！」

「惜しいね」

敵も負けじと反撃するが、銃弾は全てシールドに阻まれる。アサルトライフルの掃射すら防ぐ防御力を前に、不良は突破する手段を模索するが——彼女は気づかなかつた。いつの間にか、スリーマッセルから独りぼつちへ変わっていたことに。

「余所見は駄目」

その無防備な頭蓋に、シロコが銃弾を撃ち込む。強烈な衝撃は脳震盪を引き起こし、続く次弾で完全に意識を闇へ叩き落とした。

『ホシノ、30度西へ旋回と同時に射撃。その後は防御に専念して。シロコはホシノのシールドで射線を切りながら北東方向へ3秒掃射』

ホシノはぐるりと盾を振り回し、ノコノコと1人近づいてきた不良達を殴り飛ばす。そして先生の指定された角度で射撃を行うと、不良が持ち込んだ爆薬に引火して派手に5人ほど吹き飛んだ。そして、殴り飛ばした不良の喉元に銃を押し付けて引き金を引く。完全に沈黙した。

その間にもシロコは北東へ射撃を行っている。ホシノのシールドや不良を肉壁として用いて銃弾を防ぎ——次の一手のため、邪魔な障害を排除している。

「終わったよ」

『お疲れ様。じゃあ、2人とも倉庫の外壁を盾に待機ね』

『倉庫裏にホシノ先輩の替えのシールドと、予備の弾薬を置いておきました！』

そんなアヤネの通信が聞こえたと同時に、不意に聞き慣れたドローンの音が聞こえた。上空を見上げると何も持っていないドローンが

滞空している。恐らく既に荷物を置いてくれた後なのだろう。

ホシノはシールドの表面を見る。前回の戦闘から引き続き使用している為、損傷が激しい。このまま使用し続けると高い確率でシールドの役割を果たせなくなるだろうと判断。彼女は裏の替えマガジンを引っこ抜いて。

「これお土産ね〜」

思いつきりシールドを投擲した。その小さな体の何処にそんな力があるのか、と思わざるを得ないような速度で放たれた金属とカーボンの塊は離れた不良の胴体に突き刺さる。途轍もない衝撃によつてシールドは破損し、当然のように不良も気絶。通信越しにアヤネの『ええ……』という声が聞こえた。

そのまま2人は軽い足取りで倉庫の外壁を盾にする。作戦は第2段階へシフトした。2人が先行している部隊の頭を押さえてくれたお陰で随分射線が通るようになった。遮蔽物も少ない。これならば、彼女の武器を存分に活かせるはずだと確信して——名前を呼んだ。

『ノノミ、頼むよ』

「はい、お掃除の時間ですよ〜！」

その声と共に戦場に躍り出たのは十六夜ノノミ。抱える武器はM134ミニガン^{リトルマシンガンV}。リトルやミニ、という名前が付いているため可愛らしく見えるが、キヴォトスでも類を見ないほどの超火力武器だ。瞬間火力はミサキのFIM-92^{セイントブレードター}が勝るが、継続的な火力や制圧力だったらノノミの銃に軍配が上がるだろう。

主な用途は軍用ヘリの地上目標に対する制圧射撃用であり、間違っても生身の人間が振るう武器ではないものだ。地上でも三脚等を使用すれば使用できるが、複数人での使用を前提としており、歩兵1人の携帯火器としては非現実的であり反動等も人間が制御できるレベルのものではない。本体重量だけでも18kg、バッテリーや弾薬を含めれば100kgが想定される事も拍車を掛けている。

その実態は、6本の銃身から分間2000〜6000発の7.62mm NATO弾……バトルライフルや狙撃銃に用いられる銃弾……

を撃ち出す電動ガトリングガンであり、痛みを知覚する前に一瞬でミンチに成り果て絶命する事から無痛ガンとも呼ばれるシロモノ、バルカン砲の小型版。

その銃身が回転し——銃弾が放たれた。

「うわああああッ！」

弾丸の雨、暴力の嵐。そう形容するしかない圧倒的な火力が容赦なく不良達に振るわれた。遮蔽物へ逃げ込もうと動く敵から優先的に薙ぎ払う姿はアビドス対策委員会の面々からは頼りになり、不良からしてみれば悪魔だろう。トリガーを引いている最中、体幹は一切ブレずに満面の笑顔のままなもの——恐怖を掻き立てるスパイスにしかない。

キヴォトス屈指の火力による1分間の掃射によって消費された銃弾は約5000発、その成果は敵戦力の壊滅^{50%損耗}だった。圧倒的な人数差で以って擦り潰しに来たはずが、逆にその上から更なる暴力で叩き潰されるとは思ってもいなかったのだろう。明らかに敵の士気が下がっている事が分かる。シロコ達はこの場のイニシアチブがほぼこちら側に移ったことを確信していた。

『シロコは回り込む形で右翼を押さえて、立て直す隙を与えないように。ホシノはノノミの後退支援を。セリカは陽動としてシロコのカバーを』

矢継ぎ早に告げられる指示、背中を優しく押される感覚。それに従い、アビドスを狙う敵を撃とうとしたセリカの瞳に——全てを捨てて逃げ帰る不良の姿が映った。鋭敏になった、なり過ぎたと言っても過言ではない視覚は、遠く離れた敵手をくつきりと捕捉した。それを見て、セリカの頭がカツと熱くなり愛銃たるベレッタAR70/223^{テイ}を引き抜き、怒りのまま叫ぶ。

「逃すわけ——ッ！」

『セリカ』

その行動を諫めたのは先生であった。先程まで音楽を奏でるように戦場の指揮を取り、掌握していた人物から発せられたとは思えない優しい声音で——セリカを諭す。

『逃げてゐる子達は追わなくていいよ。深追いしたら、逆にこちら側の陣形が崩れる。逃したくない気持ちにはわかるけど——今は、抑えて』

ここで追つても意味がないと。此方の目標はあくまで退ける事で、敵の殲滅ではないのだと——1人2人倒した数を増やしても、君の怒りは収まらないだろうと、彼は言外に言っていた。

セリカもここで深追いし、人数差を更に作ったら折角の有利状況がどう転ぶか分からないと思つたのだろう。怒りのあまり周囲の状況が見えてなかつた、今回の勝利条件が何であつたのかを反芻して。

「分かつたわよ！……でも……！」

『ああ、再戦の機会は必ず設けるよ……さあ、向かつてくる子達にお灸を据えてあげよう』

悪戯っぽい声音が通信越しに聞こえて、少しだけ可笑しくなる。だけど緩んだ気を即座に引き締めて、眼前の敵を見据える。ほぼ勝ちみたいなものだが、まだ戦いは終わっていないのだ。

セリカはシロコが飛び出したのを目視してから、彼女の邪魔になる敵を撃ち抜いていく。取り付けられたスコープと彼女の腕前から放たれる銃弾は全て命中、1人たりとも撃ち漏らしはいない。ノノミやホシノと比べると派手さは無いものの、堅実な手法。

更に、弾丸は全て頭部にヒットしているため、1回の射撃で1人を確実に戦闘不能に追い込むワンショットワンキルを徹底している。

「セリカちゃん凄いいね。おじさんも負けてられないよ」

セリカの奮戦を見たホシノはそんな事を呟いて、此方に銃口を向けている敵を金眼に捉える。追隨する青の眼光、決意。

クラウチングスタートの要領で大地を蹴り抜いたホシノは小柄な体軀を活かした疾走で、距離を詰める。勿論そんな事をすれば敵の注目を集めてしまうが、ホシノの体はシールドで守られている。鈍い衝突音が断続的に響き、前進する足が僅かに鈍るが——関係ない。

そのまま盾を真正面に構えて、疾走、突撃。加速度と質量を活かしたシールドバツシユは不良の体を5m以上吹き飛ばし、間髪入れず抜

いたショットガンで追撃。その隙を狙って不良が銃口を向けるが――
――全て見えている。予定調和の如く。

彼女は最低限の動作でターンし、地面を蹴り上げる。サマーソルト。敵の銃口があらぬ方向へ逸れて、そこには隙だらけのガラ空きの胴体だけ。そこに撃ち込まれる9mmパラベラム弾。ノノミのサブウエポンがホシノの作った綻びを確実に撃ち抜いた。

「カバーありがとうね、ノノミちゃん」

「いえいえ。それより、もう大詰めですよですよ？」

ノノミが指差す方向には、シロコが立っただけ――何やら携帯端末を操作している。

「ん。先生、こんな感じで大丈夫？」

『ああ、完璧だよ』

先生の了承を得たシロコは画面の承認ボタンをタップ。システムチェックが入り、全てが正常である事が確認されると――彼女の奥の手が起動した。

シロコ達の猛攻に反撃の糸口さえ見つけ出せず、逃げるように土囊へ退避した不良達の耳に、何か聞きなれない音が届いた。小型のエンジン音だろうか。

「……………ん？　なんだこの音」

「あいつらが何かやったんすかね？」

首を傾げ、土囊から顔を出して見ても――前方には何も無い。ならば何処だとぐるりと見渡して、最後に上を見ると。

「――は？」

戦場の上空に現れたのは中型のドローンだった。白を基調としたカラーに黒とエメラルドグリーンが差し色として入っている機体。恐らくカスタム機だろう。左右に膨らんだコンテナボックスと、その上部に取り付けられたローター――あの様な機体は他に見たことがない。

そして、コンテナボックスが開く。中にぎっしりと詰め込まれているのは小型の誘導ミサイル。次いで、ロックが外れる音。点灯しているランプの色が変更される。

「ロックオン完了。発射」

左右4機ずつ、計8機の誘導ミサイルが発射された。白煙を尾に引きながら空気を切り裂く鋼の弾頭は隠れていた不良達に容赦なく着弾し爆発。派手に吹き飛ばしながら続々と敵を沈黙させていく。

爆炎と爆風をいつも通りの表情で眺めながら、シロコはぐるりと戦場を見渡す。もう大半が逃げの姿勢に徹している。まだ向かおうとしているのは、恐らく不幸にも殿を任された者達だろう。

「じゃあ、後はアイツらを倒して終わりってわけね！」

「最後まで気を抜きませんよ」

「ん。詰めもしっかりやるべき」

「おじさんも頑張りますかあ」

総崩れになった不良達に向かって、4人が駆け出した。

勝利、疑問

アヤネは別人と成り果てた先生を見つめながら支援を行なっていた。眼球に表示されるオルタナティブ。彼が圧倒的な不利を悉く覆していく様をリアルタイムで見せられたのだ。

先生が指先と言葉で戦火を奏でると、『その様に在れ』と言わんばかりに戦場が動く。秒刻みで有利になっていく。人数差が次々と埋まっていく。

フェーズ1。先行しているスリーマンセル部隊と、その後ろにいるツーマンセル部隊群の撃破。

フェーズ2。部隊の撃破により通った射線を活かしたノノミの制圧射撃で数を大幅に減らし、相手の士気を下げる。

フェーズ3。ノノミの後退支援、部隊立て直しの阻害を同時に行いつつシロコのドローンによる爆撃で遮蔽物に隠れた生徒の撃破。

そして、最後は士気がダダ下がりになり総崩れになった不良生徒を各個撃破。統率された抵抗も応戦も撤退もできなくなった生徒を、学校外まで追い回すアビドスの面々は割と楽しそうであった。散々煮湯を飲まされた間柄の為、報復の快感も大きいのだろう。

こんな筈ではなかったのに、とでも言いたげな不良達は負傷した仲間を背負いながら呆然とした表情で撤退していく。その様子を校門前で4人は肉眼で、先生とアヤネはドローン越しに見送った。

先生はドローンに搭載された全天スキャン機能で、戦場になったアビドスを隈なくチェックする。不発弾、地雷、IEDの類は見つからない。不良達もそれなりに遠く離れており、スナイパーは編成にいなかった。警戒を解いても良い頃合いだろう。

脳内で『アロナ、お疲れ様。ありがとう』と呟いて量子波送受信機構システム・メサイアを解除。生徒と先生を結んでいた糸が解けて、リンクが切断される。浮かんでいたヘブライ語と、空色の瞳が元の色彩に戻り——
一つ、息を吐く。

「カタカタヘルメット団残党、校外エリアに撤退中」

「状況終了。皆、お疲れ様」

アヤネの報告に次いで、先生が状況の終了を知らせる。先生がアヤネの方に視線を送ると、彼女は破顔した。彼はその笑顔に微笑みを返すと、彼女は少し恥ずかしくなったのか視線を逸らして――
外にいる4人に少し早口で告げる。

「皆さん、お疲れ様でした！ 一度、部室に帰還してください！ ヘルメット団に関しては――」

「私が手配済みだよ」

「だそうですので、そのままで大丈夫です！」

アヤネの説明に補足を入れて、先生は外を見る。開いた窓から心地の良い風が吹き込んで、前髪をくすぐる。問題が解決したわけではない。アビドスに巢食う闇は晴れておらず、大企業の暗躍とゲマトリアの蠢動は止まっていない。近いうちに必ず何かしらの動きは見せる筈だ。だから、この勝利に然程大きい意味はないが――それでも。

あんな風に喜んでいる彼女達に水を差す真似はできる筈がないのだ。共に勝利の喜びを分かち合おうとしている彼女達の優しさを踏み躪る事は……ああ、できるわけがない。

――この感傷も、君は笑い飛ばしてくれるのかい？

「なんて、ね」

近くて遠い、大切な誰かへ。彼は自嘲混じりの言霊を綴った。

『わあ☆私達、勝ちました！』

『あははっ！ どうよ！ 思い知ったか、ヘルメット団め！』

『うへへ疲れた〜』

『ん、一応警戒はしておく』

アヤネと先生の通信で現実から引き戻されたのか、4人は勝利を喜ぶ。彼等の通信が来るまでは若干現実感に乏しかったのだ。あの人数を相手にここまで余裕を持って、傷一つ負わずに、全てが上手くいって――勝利を手に入れた事が。

彼女達は軽い足取りで部室へ向かった。

「いや、まさか勝っちゃうなんてね。ヘルメット団もかなりの覚悟で仕掛けてきたみたいだったけど」

「まさか勝っちゃうなんて、じゃありませんよ、ホシノ先輩……勝たないと学校が不良のアジトになっちゃうじゃないですか……」

部室に戻ってきた前線部隊の4名は銃火器をガンラックに掛けて、簡素なパイプ椅子に深く腰をかけて、脱力した。戦闘時間は1時間にも満たないが、やはりその期間中ずっと神経を張り巡らせていけないともなれば、疲労は蓄積する。

シロコはステイックバーを頬張り、栄養補給中。セリカは思いつきり背もたれに体を預けて、ホシノは机に突っ伏しているが……顔は先生に向けている。ノノミとアヤネは3人の様子を見て微笑んでいる。

先生は給湯スペースで何かをやっていた。

「先生の指揮が良かったね。私達だけの時とは全然違った」

「そんなに褒めても何も出ないよ。私は無力な人間だからね……できる事なんて、これくらいさ」

先生はそう言つて、5人に紅茶を出した。事前にアヤネにカップとソーサーの使用許可を仰ぎ、全員が落ち着いた完璧なタイミングでの提供。茶葉は彼が持参したものであり、トリニティのティーパーティーでも飲まれる上等なもの。疲労を慰撫する香りは、するりと鼻腔を通り抜けて気持ちを落ち着かせる。

5人は先生にお礼を言つて、彼はそれに微笑みで返す。アビドスに来てからそこまで時間が経っていないのに、彼は完璧に溶け込んでいた。まるで、初めからそこにいたように。あるべきパズルのピースがピタリと嵌った感覚を覚えていた。或いは、懐かしいとも。

抗い難い安心感は彼を信用ならない大人ではなく、別の何かへ昇華しようとして——ホシノは頭を振った。まだそこまで心を許した訳ではない。悪意を見せてないだけの可能性は十分に考えられる。

この居場所は、何としてでも守り抜く。誰にも汚させない犯させな

い。その戒律に例外はない。

ホシノは彼から視線を外して、隣にいるシロコを見る。そして、顔を綻ばせて——冗談を言う準備を。

「今まで寂しかったんだね、シロコちゃん。パパが帰ってきてくれたおかげで、ママはぐっすり眠れまぢゅ」

「はーい、パパです。お眠なママの代わりです」

ホシノの冗談にノータイムで便乗し、悪ふざけとしか思えない言葉を緩い口調で紡いだ彼は、白い姿が執事服に見えるくらい奉仕活動に従事していた。ホシノ達に向けられた目は何処までも優しさと慈愛に溢れていて——目が合った。

そして彼は悪戯っぽく笑う。もしかしたら彼を少し困らせようとしていたのがバレたのかもしれない。そう思ってもう一度彼の顔を見ると、『ご破産だったね』なんて言われているような気がした。

「いやいや、変な冗談はやめて！ 先生も便乗しないで！ それに、委員長はその辺でしよっちゅう寝てるでしよー！」

「先生も案外ノリがいいんですね」

「あはは……少し遅れちゃいましたけど、改めてご挨拶します、先生」
アヤネは佇まいを正す。それに釣られて残りの4人も姿勢を少し良くして——

ああ、そういえば自己紹介もまだだったと思っただろう。中々に濃い時間を過ごしたが、彼がここに訪れてからまだ2時間程度しか経っていない。自己紹介も活動内容も、何も彼に説明していないのだ。

「私達はアビドス対策委員会です」

彼女は自身の大切な友人、仲間の紹介を始める。先生はそれ——
——窺い知れない温度で眺めて。

「私は、委員会書記とオペレーターを担当している1年の奥空アヤネ。こちらは同じく1年の黒見セリカ」
「どうも」

セリカは少しぶっきらぼうに。

「2年の十六夜ノノミ先輩と、砂狼シロコ先輩」

「よろしく願います、先生」

「さつき、道端で最初に会ったのが私……あ、別にマウントを取ってるわけじゃない」

ノノミは楽しそうに穏やかに、シロコに関しては必要か不必要かよく分からない補足を入れて。

「そして、こちらは委員長の3年の小鳥遊ホシノ先輩です」

「いやあくよろしく、先生……てか、先生ってもしかしくなくてもおじさん達の名前、把握してるよね？ さつきの戦闘でも当然のように名前を呼んでたし」

「勿論。これでもシャーレの責任者だ。生徒の名前くらいは把握しているよ。加えて、この現状も。全校生徒が君達5名の事、周辺地域に住民が殆どいない事、物資が枯渇寸前の事も。そして、君達がそれの対策を考える委員会……対策委員会である事」

先生はゆらりと笑顔を浮かべる。影のような、実態が掴めないそれは宛ら蜃気楼。だけど、何処までも突き抜けるような明瞭さを同時に併せ持つ。

そう——彼は全てを知っている。

彼女達が抱えている事情を、彼女達以上に把握している。アビドスで誰が何を求めて、何が起きようとしているのか——知っていると。——

「物資に関しては教室に運び込んでいるよ。これがリストだから、君達の目で確認しておいて。一応チェックはしたから、不足はない筈だけど……方が一があるからね」

先生はそう言っ、アヤネに一台のタブレットを渡す。家電量販店で売っている一般的なその画面には彼女達が使う弾丸等の消耗品、レーション、無線機器、ドローン、応急手当てキット、予備の銃火器……他にも多数。キヴオトスにおける戦闘に必要な物資の殆どがリストに記載されている。しかも、どれだけ潤沢に使っても1ヶ月は余裕で保つほどの量。これだけあれば暫く困らないと断言できるだろう。

「一体、どうやって……」

「キヴオトスに来て2週間強、私も無為に時間を過ごしてきた訳では

ないってことさ……それに、状況は把握しているんだ。対策を打つのは当然だよ」

手品のような彼の所業であるが、その実態はクラフトチェンバーの恩恵に肖ったものである。

設計図さえ割れていれば、生命以外の大抵のものを生み出せる——連邦生徒会に於いても主席行政官たる七神リン以外は権限不足で使用はおろか存在を把握する事すら許されていない、シャーレの秘密兵器。更に、アロナによってキヴオトスの座標へ干渉すれば、狙った空間に生成物を顕現させることも可能だ。

生成には当然何かしらの対価は必要であるが、その対価も非常に窓口が広い。こちらも生物以外の大抵のものを対価として差し出せるのだ。

彼の切り札2種を使った反則技に等しい行為だった。

「さて、では今度は私の番だ」

先生はそう言って、姿勢を正す。彼女達の眼の奥に、疑問が燻っていたのはずっと前から知っているのだ。だから、彼はそれに対して——

——一人の人間として向き合おうと。

「何か聞きたい事があったら——誠心誠意答えよう。私や連邦生徒会の機密に抵触しない範囲、という条件付きだが……それでも、君たちには一粒も？を吐かない」

彼の透徹した瞳には5人と青空が投影されている。何処までも、真っ直ぐと対峙しているのだ。彼は誤魔化さない——不思議と、そう思えるくらいには愚直で、純粹だった。

そして——ホシノがその小さな手を挙げた。

「じゃあ、私から一ついいかな、先生」

「ああ、勿論」

「あのオルタナティブって何？」

彼女は異なる色彩を持つ宝石のような両眼で先生を見つめて。周囲の温度が僅かに下がった気がした。

「あそこまで高性能なものなら……所謂PDPモデル、大量のスーパーコンピュータによる並列分散処理くらいしか思いつかない。で

も、先生の持ち物にそんな大掛かりなものはないよね。シャーレの何処かにシステムの根幹が部分置いてあって、遠隔通信で接続しているって線もあるけど……その所、どうなのかな？ おじさん気になっちゃってね〜」

彼女は未知のシステムが自分達に接続されていた事……それが気がかりなのだ。先程は余裕がなかった為受け入れていたが、デメリツトの如何によっては拒絶しなければならない。大切な仲間を守るために。

更にホシノは他者の思念が混入する可能性を考えた。視覚に影響を及ぼしている以上、脳に影響を及ぼさないとはい切れない。もし仮にシステム使用中に自分と他者の心が混ざって、自他の境界線が曖昧になったら———そんな事は考えるだけで身が竦む。

自分と他者が混ざる未知は恐怖でしかない。そんな恐ろしいものをあの人は自由に生徒に振るえるのか。

故にこの質問は必須であった。彼が嘘をつかないと言ったのは行幸だとすら思った。恐らく、彼は必ず誰かからこの問いが投げかけられると思っていたのだろう。掌で転がされている、とは思わない。

神秘的なホシノの瞳から———彼は決して視線を外さないで言葉を綴る。

「……驚いた。ホシノは鋭いね。あのオルタナは確かにPDPモデルと言えなくもないけど……その実態はもう少し前時代的で、マンパワで補われている。ほら、ここに無意識下で並列分散処理を行なっている演算機があるだろう？」

先生はそう言つて、自身の頭をペンで叩く。

「人間の脳を機械に接続して、思考力を拡張、高速化するシステムは割と前から理論提唱はされているんだ。誰もやりたがらなかつたのは、フィードバックで廃人になりうる可能性があつたから。でも私には少し特殊な経験と、可能な限りデメリツトを軽減できる手法があつた。

仮に30人以上接続すると、どうなるか分からないけど、それ以下ならば……ましてや片手で数えられる人数ならデメリツトなんて

あつてないようなものだよ」

ホシノは30人、という言葉が引つ掛かったが——彼は説明を続けて。

「君達に投影されたオルタナはヘイローを介しているんだ。ヘイローに視覚と聴覚、触覚があると仮定する。そして、その感覚器は君達のものと同じである……こんな感じでどんどんパスを繋いで、リンクを確立している。」

接続は私からしかなれないけど、切断は私からも君達側からもできるし、情報の取捨選択も自由自在。私側からできる事はオルタナの表示を含めた演算結果の出力だけ。他の干渉は一切できないから、君達は便利な外部演算装置が付いたと考えてもらって差し支えないよ。

詳しく理論を説明すると3日ぶつ通しでやってても終わらないくらいのヤツだから、このくらいで勘弁してもらいたいんだけど……」

彼は「ミレニアムの全知は凄いやね」なんて言つて苦笑する。それに釣られてホシノもいつもの笑みを浮かべて——張り詰めた空気が緩んだ。

「うへえ、そんなにかかるんだ……うん、でも聞きたい事は聞けたから、これでいいよ。ありがとうね」

「礼には及ばないさ。それに、ホシノの疑問は尤もだからね……あと、他に聞いておきたいことはあるかい？」

何はともあれ、ホシノは彼の解答に満足して、今後もその力を自分達に使用する許可をくれた。

彼はその信頼が嬉しくて。でも同時に——彼女達を戦いの道具として使っている自分自身に果てのない嫌悪感を覚えた。

「なさそう、かな？　じゃあ、堅苦しいお話は此処でお終いにしようか」

彼は「きつちりとするの、案外疲れるんだよね」と言つて、纏つていた少し硬い雰囲気をつん投げた。

生徒の疑問点に、先生が答える——BDで済まされるキヴォトスでは、失われて等しい先生を必要とする教育。太古から連綿と受け継がれる学びという文化——その再現。

教える人がいるとは、こういう事なんだと彼女は思っ

「ん、なんか本当に先生っぽいね」

「……別の子にも言われたんだよね、それ。そんなに私は先生っぽくないかい？」

いつかユウカに見せた笑みと同質のものを、彼は浮かべた。

強襲作戦

「取り敢えず、これで物資問題は解決しましたが……」

先生の質疑応答が終わり、場の空気を切り替える目的半分、現状の再把握目的を半分としてアヤネは口を開いた。

そう、まだ終わってなどいない。アビドスに巢食う問題は邪魔者を消して、はいお終いとは決して言えないほど——深い部分に根ざしている。

シロコとセリカはため息をついて、分かりやすく顔を強張らせる。辟易としたその表情には疲れや呆れ、怒りが見て取れた。

主な交通手段が徒歩の時点で察する事ができるが、此処はキヴオトスの中でも僻地に近い。そのため、ヴァルキューレ警察学校やトリニティ自警団といった、キヴオトス全体をターゲットにした治安維持部隊の手が回りにくい。彼女達もこんな辺鄙な場所より、より多くの人々が住まう中心地の治安に気を配らなければならない。

故に、多少の悪事は看過されてしまう。不良にとっては涙が出るほど有難い環境だろう。

「ん、一先ずあいつらは撃退できたけど、アレで全員じゃない。攻撃を止めるような奴らじゃないし、すぐ次が来ると思う」

「あー、確かに。しつこいもんね、アイツら」

シロコとセリカはそう吐き捨てた。確かに先ほどの軍勢は数こそ多かったものの、あれが全てというわけではあるまい。前哨基地や、本部基地には更に多くの人数が待機しているだろう。アビドス高等学校を手中に収める為に。

故にたった50人にも満たない部隊を壊滅させても、数日もすれば増援と補給が来て、性懲りも無くアビドスを狙うだろう。

「こんな消耗戦をいつまで続けなきゃいけないのでしょうか……ヘルメット団以外にも沢山問題を抱えているのに……」

アヤネはその様子が脳裏に鮮明に浮かんだのか、ため息混じりでボヤク。早ければ明日にでも、突撃してくる忌々しいヘルメットの不良

達の姿を見る事ができるだろう。

そんなアヤネを励ますように、ホシノは脱力していた体に力を入れて――。

「そういう訳で、ちよつと作戦を練ってみたんだ」

大胆不敵な笑みを浮かべて、そう宣言した。

「えっ!? ホシノ先輩が!」

「うそっ……!」

まさかの案が、予想だにできなかった人物が出た。その事実にはホシノは心外だな、なんて表情を浮かべている。表情をあまり表に出さないシロコですら眼を丸くしているのだ。何か変なものでも食べたのかと、4人はホシノ見つめていると――彼女を頬を掻いた。

「たはは」と笑いながら。

「いやあく、その反応はいくら私でもちよつと傷ついちゃうなあ。おじさんだって、偶にはちゃんとやるんだよ?」

「……それは、知っていますけど……ええ……」

「……で、どんな計画?」

セリカは壁に背を預け、腕を組みながらホシノを見る。どう考えても、あまり信頼していない眼だった。若干針の筈になっているホシノは、自身の考えを……ずっと前から考えてはいたものの、必要なピースが足りなくて実行できなかった作戦を開示する。

「ヘルメット団は数日もすればまた攻撃してくるはず。ここ最近。ずっとそのサイクルが続いているからね。だから、このタイミングでこつちから仕掛けて、奴らの前哨基地を襲撃しちやおうかなって。今こそ奴らが一番消耗しているだろうからね」

それは紛う事なき奇襲作戦だった。ずっと防衛戦をしていた相手に、此方側から打って出る……大胆な作戦。4人も驚きが隠せない表情でホシノを見つめている。

「い、今からですか?」

「そう。今なら先生もいるし、補給とか面倒な事も解決できるし」

足りなかったピースは、『その後』を気にしなくていい潤沢な物資と攻勢に出る為の余裕だった。その両方が同時に解決を見せ、更に強力

な指揮官がいる……考える限り最も良い状況だろう。それに対して、相手の基盤はガタガタ。攻撃しない理由がどこにもない。

意表を突く事こそが作戦の本懐だ。相手はアビドスが攻めてくるなんて夢にも思っていないからこそ——必ず刺さるという確信がホシノにはあった。

「なるほど。ヘルメット団の前哨基地はここから30kmくらいだし、今から出発しよっか」

「良いと思います。あちらも、まさか今から反撃されるなんて夢にも思っていないでしょうし」

「それはそうですが……」

うーん、とアヤネは唸る。ホシノの作戦にシロコやセリカ、ノノミは賛成であった。元より守りよりも攻める方が性に合っているのだろう。それに、散々煮湯を飲まされた相手に吠え面をかかせることが出来るともなれば乗り気にもなる。

だが、アヤネは前線で戦う人材ではないが故に慎重派だった。前のめりな4人に対するストッパーとも。此処で仕掛ける場合のリスクとリターンが頭の中で羅列されているだろう。

確かに、ホシノの言っている事は間違っていない。この作戦が成功すれば、暫く不良達の銃声を聞かない安心感を手に入れる事ができるだろう。だが、この作戦実行中にもう一度不良達が攻めてきたら……そんな事が頭を過ぎってしまう。

「先生は如何ですか？」

彼ならば、どのような選択をするのか。10倍近い人数差の中で尚、アビドスに勝利を齎したあの頭脳が出す答えが知りたくて——

——アヤネは問いかけた。

その言葉を受けて、黙ってホシノの作戦を傾聴していた先生は目を開く。そして、少し考える素振りをして。

「私個人の意見としては賛成かな。奇襲のタイミングとしてはベストだ。不良の子達も、今この段階で攻勢に出る余裕はないはず。アヤネの懸念は尤もだけど、その線は限りなく薄いと考えていい」

彼は「だけど」と言葉を区切って。

「最終的には皆の決定に従うよ。仮に行くならサポートと指揮、現地での作戦立案は任せてくれると嬉しいな」

彼はそう言つて、微笑む。アヤネは言葉に出していない心中を読まれた事に驚いていた。洞察力も優れているのか———と思いつながら。

アヤネも、彼が言うならば大丈夫だろうと納得し「私も賛成します」と頷く。ホシノは作戦決行に全員の賛同を得られた事を嬉しく思い、その手に再び銃を取った。皆の瞳に戦意の炎が灯る。

「先生のお墨付きも貰ったことだし、この勢いでやっちゃおつかう」
「善は急げってことだね」

「はい、それでは、しゅっぱーっ！」

前衛の4人は各々の銃を手に取り、アヤネはドローンと予備弾薬等のセットを慌ててバッグに入れて駆け出した。

先生はタブレットと専用のドローンを懐に入れて———彼女達の背を追いかけた。



「恐らくヘルメット団の数は100程度だと思うよ。勿論、全員が真正面から撃ち合えるわけ訳ではないから、実数値を考えるともう少し減少するけど……概ね間違つてないはずだ。」

作戦の概要としては、基本的に速攻を心掛けよう。真正面から馬鹿正直に戦う必要はない。交戦距離になったら、各自最高火力である子達を倒しに行く。弾薬や武器の保管庫はアヤネのドローンで押さえるから、4人は思いつき暴れておいで。

逃げる子はいえると思うけど、優先的に狙う必要はない。逃亡用の車両に機関銃とか取り付けてあった場合は破壊してほしいけど、非武装の場合は攻撃は不要だよ。向かってくる子達にトリガーを引けばいい」

先生はそう言つて作戦を組み立てる。混乱に乗じる、という事が今回の根幹を成す為、先程の戦闘……防衛戦よりは幾分かシンプルだ。

細やかなフェーズや、相手の状態によって動きを変えなければならぬ綿密な作戦は……考案者は勿論、実行役も中々に頭を使う。

故にシンプルであればある程、作戦は良い。

「あの、先生……」

良いのだが……。

「生徒に抱えられるのは、中々に不味いのでは……？」

主に、絵面的に。

キヴォトスにおいては虚弱の代名詞になり得る先生が、30kmという距離を彼女達と同等の速度で移動できる訳もなく、絶賛シロコにお姫様抱っこされている。

移動用の車両はつい最近破壊されたばかりであり、新しいものを買う資金的な余裕もあるはずもなくここに至るまで放置して――

――その代償を先生が体で支払っている最中だった。

生身で時速60km強は普通に怖い。安全装置のないジェットコースターに乗せられている気分だ。彼とて絶叫マシンの類は嫌いではないが、絶命マシンは話が違おうだろう、と。

故に彼は結構ガツチリとシロコにしがみついている。こんな所で死んだら末代までの恥だと思いつつながら。

「ん、大丈夫。それに、さつきも背負ったし」

「まあ、うん……私の身体能力じゃどう足掻いても君達の速度に追いつけないし……」

微妙に遠い目をしながら、先生は呟いた。きっと何やら色々と苦労した事が窺える声。アヤネは心の中で彼に合掌した。

「先生、もし辛かったら仰って下さいね？ 休憩を挟むだけの時間がありますし、シロコちゃんの抱っこが怖かったら私が代わりますから」

「ありがとう。でも大丈夫だよ。この程度は慣れてるから」

彼はそう言つて、ノノミに向けてふわりと微笑む。彼女の提案は非常にありがたいものだったが、抱えられているだけの己が弱音を言うのは違おうだろう。

それに、遠い過去……ネルに抱えられた時に比べれば幾分かマシンな

のだ。あの時は色々と後に引けず、状況も最悪に近かった為仕方のない部分もかなり多かつたのだが——ビルの側面を疾走し、そのまま三角飛びされた時には明確に死を意識した。速度は余裕で時速100kmを超えていただろう。

だから、その時に比べれば大丈夫——そうやって自分を鼓舞していた時。

「——ッ！」

彼は世界の法則を捉えた。

「どうしたの、先生？」

「……いや、何でもないよ」

何度も対峙してきた存在——その残滓。

勿論、完全ではない。パスも乱れている。至る道も開かれていない。仮にこの場に顕現したとしても、全能の一端が関の山だろう。

だが——それでも、神の領域に届き得る莫大な神秘の塊だ。

先生は奥歯を噛み砕かんばかりに食いしばった。やられた、と心の中で吐き捨てて。やはり現実というのは、想定した最悪の一步先を行くものだと——天を仰いだ。

その様子にアビドスの面々は不思議そうな顔をしたが、彼が何でもないと言うなら大丈夫だろうと判断し、この場で問い詰める様な真似はしなかった。

だって、彼女達は彼を——。

「ん、なにを心配してるか分からないけど、大丈夫。それに皆、先生の事を信頼してるから」

「そうですよー☆心配は無用です、先生」

「私達に手を差し伸べてくれた人は先生だけですから！ 勿論、信頼しています！」

「ま、まあ、指揮に関してはね！ それ以外は全然だから！」

信頼しているのだ。彼が同じ1人の人間として、信用に足る存在であると認識している。手を差し伸べてくれた優しさに打算はない。彼はただ放っておけなかったから、伸ばされた手を取ってくれた。

「んー、まあ……信頼してるよ、先生の事を。先生は悪い大人じゃない。試すような真似をしたり、疑ってごめんね」

ホシノは、そう言って申し訳なきように笑った。彼女はずっと戦っていた。唯一の3年生として、大人と、世界と、現実と。目に映る全てを疑い、信用せず、たった独りで。その小さな背中にどれほどの覚悟と悲しみを、怒りと涙を背負ったのだろうか——その思いを、彼は感じ取った。

「ホシノはそうやって、ずっとアビドスを背に戦ってきたんだろう？私を疑った君は正しいよ。だから、その想いを大切にね。君が頑張ったから、君達が諦めなかったから——私は今、此処に立っているんだ」

先生はそつと微笑む。誰かの想いに、願いに、覚悟に寄り添う表情。全ての心を愛しく慰撫するため、奏でられる言葉。

彼の言葉と表情は傷ついた、疲れた心にそつと染み込んで。

「たはは……先生、人を誑し込む才能あるね。そうやって何人の女の子を泣かせてきたの？」

赤くなつた頬を彼に見られないようにそつぽ向いて、照れ隠しをしながらホシノは言う。

彼を見ていると不思議な気分になる。心が掻き乱される。

なぜなぜなぜ——彼が生きているだけで、泣いてしまいうか。彼が血塗れになる光景を幻視してしまうのだろうか。分らない。貴方は何も教えてくれない。

「——そろそろ、かな」

彼はそう言って、シロコに抱えられたままタブレットを起動する。いつの間にか飛ばしていたドローンのカメラに写っている光景は、ヘルメット団の駐屯地。

「私とアヤネは此処からサポートをしよう……シロコ、運んでくれてありがとう」

シロコは短く、「ん」とだけ言って先生を下ろす。彼はそんな彼女の頭にいつもの癖で手を伸ばそうとしたが——そつと下ろす。

彼女は、己の知っている彼女ではないから。

「敵はまだ此方に気づいていません！ 今なら先手を取れます！」

「うーん……この配置なら陽動は必要ないかな。シロコ達は回り込んです、この位置から突入しよう」

彼はタブレットの画面を4人に見せる。ディスプレイのマーカーピンが突入位置だろう。ヘイローのシグナルも少ないため、襲撃するには絶好のポイントだ。

先生はオペレーティングシステムを起動させ、先程と同様のオルタナが目に表示される。

「作戦は道中に話した通りに運ぼう。ホシノは前衛で、倒す事よりも防御の方へ注力して。シロコとセリカは中衛、2人が主にヘルメット団の子達を撃破していこう。ノノミは後衛で、広範囲の制圧を主軸に」

彼の指示に、4人は強く頷く。彼はそれをしっかりと見て――

「では、作戦開始」

先生の号令と共に駆け出した4人を、彼とアヤネは見送った。

貴方は理解していない

カタカタヘルメット団のアジトへの強襲作戦は拍子抜けに思えるほど上手くいった。全体の人数としては50名強だったが、それは負傷者も引つくるめた総数であり、実際に戦える人数はその半分程度。

アビドスの奇襲を察知する事もできず、想定すらしていなかった予想外の攻勢は多大な戦果を上げた。組織だった行動は一切できず、1人また1人とアビドスの銃撃に倒れた。

作戦中、先の防衛戦で敗走した生徒達の姿が見えたものの、安全と思われた前哨基地が攻撃を受けている事に衝撃を受けたのか、攻撃すらずに踵を返した。唯一の懸念点だった『敵戦力の合流』が無くなった事で、アビドスの面々は更に苛烈に銃弾をばら撒き――

――呆気なく、制圧できてしまった。

攻撃らしい攻撃も殆どなく、銃弾の消費も想定よりずっと少なく――アビドスにしつこく攻撃を重ねてきた不良達の巢を潰してしまえた。

「敵の退却を確認……私達の勝利です！」

「状況終了、お疲れ様」

アヤネに続いて、先生が作戦終了の旨を告げる。タブレットに写る光景は、半壊した前哨基地と佇むアビドスの生徒達。

彼女達は破壊された、デッドウェイトにしかなくなっていない機関銃が搭載されたトラック数台を見つめている。撤退したヘルメット団がこれでもかと言うほど詰め込まれた車だ。おそらく彼女達は何処かの前哨基地か、本部基地に逃げ帰るのだろう。

先生の指示にあつた通り、逃げる者の追撃はしない。元より弱い者いじめや殲滅が目的ではなく、銃声を聞かない安全を手に入れたかっただけ。戦力に数えられない不良達を執拗に追い回すのは美学に反する。

『これで暫く大人しくなるはず』

『よーし、作戦終了。皆、先生、お疲れ〜』

「ホシノもお疲れ様。私とアヤネも、そちらに向かうよ」

シロコとホシノ、最後まで不良達を見送った2人の帰投を確認し、先生は通信を切断してオペレーティングを解除。その次の瞬間、僅かに立ちくらみがした。次いで、頭痛。間を置かない連続使用はそれなりの負荷になってしまったようで、内側から脳を切開されるような痛みが断続的に襲ってくる。

彼は懐から錠剤……痛み止めを取り出し、服用する。この程度の痛みならばオーバードーズする必要はない。時間が経てば痛みも引くだろう。

「アヤネもお疲れ様。サポート、ありがとう」

「いえー！ そんな……先生の方こそ、お疲れ様です。これで、暫くは安心できます」

そう言つて、胸を撫で下ろすアヤネを見ると――先生の表情も自然と柔らかくなる。

「じゃあ、皆と合流しようか」



「物資は可能な限り全部回収してしまおう。保管庫を探しつつ、周囲を警戒。シロコとアヤネはドローンで上空から視察を。ノノミは残党を警戒して出入り口で待機。セリカとホシノで物資の積載を」

アビドスの面々に指示を出しながら、先生はタブレットを片手に銃弾の嵐によって半ば瓦礫の山と化した前哨基地を歩く。ディスプレイに映るのは周辺地形と1つのマーカー。彼はポイントされたそこに一直線で向かっている。

彼が目指した場所は、何の変哲もない一室だった。足を踏み入れて――乱雑に置かれたデスクの一つ、その引き出しを開けた。

――あった」

彼が手に取ったものは1枚の紙だった。使用されている言語は、キヴオトスで使用されなくなつて久しいもの。現在、この言語を正しく扱える存在は先生と極一部の生徒を除くと――。

「ゲマトリア」

先生が排除すべき、神秘の探究者達に限定される。A4サイズの紙にびっしりと綴られた文字列に『読みにくい』と内心で文句を言いながら言葉を追っていく。

最後まで読解し終わると、アロナにテキストデータの保存を頼み、原本をライターで灰にした。

この手紙は不良達に宛てたものではない。キヴオトスの歴史に精通していなければ解読はおろか、書かれているものが文字であるから分からないものだ。不良生徒に宛てるには適切ではない。仮に暗号を使うにしてももつと分かりやすいものがあるだろう。

では、誰に宛てたものか。そんな事は言うまでもなく分かりきっている。

「全て想定通りって事かい？」

先生たる彼に他ない。ゲマトリア……黒服は、彼が此処に必ず訪れる事を知っていたのだ。

黒服は此方の動きを全て見ている。俯瞰している。神様気取りで、先生と生徒の劇を眺めているのだ。

それが、ただひたすらに――。

「ナメヤがって」

零れた言葉に籠った感情は、抑え難い嚇怒。絶対零度の激情は彼の肉体を駆け巡るが――それを飲み込んだ。らしくない、と頭を振って。

冷静さを失った結果、自分が死ぬのは許容できる。だが、生徒が傷つくのだけは受け入れ難い。

何はともあれ、用事は済んだ。彼は溜息を一つ吐き踵を返して、部屋を後にしようとして――部屋の出入り口に立っているアヤネと目が合った。どうやら今来たようで、先ほどまでの醜態は目撃していない様子であり……先生は安堵する。

「アヤネ、何か気になる事があったのかい？」

先生は何時もの表情に切り替えて、和やかに問いかける。聡明な彼女の事だ、きつと違和感を覚えたのだろう――そう、確信し

て。

「先生、何かおかしいと思いませんか？」

「……一介の不良に過ぎないカタカタヘルメット団が、此処まで潤沢な物資を保有している点が、かい？」

アヤネは「はい」と答えて、状況証拠と推論を交えて――
思考を言語化する。

「そして、その潤沢な物資をアビドスを攻め落とす為に使っている点もです。アビドスには目ぼしいものがそこまで多くあるわけではありません。廃墟や学校目当てで集まるのは理解できますが……」

「リスクとリターンが釣り合っていない。現状認識できている範囲に、ヘルメット団がアビドス高等学校に拘る理由が見当たらない。アヤネの懸念はそこだろうか？」

「そうなんです。それに、この廃墟も不良の棲家にしては随分行き届いています。清掃も、食事も……先生が来る前の私達よりも余程。」

この弾薬の出所も不明です。現在のアビドス地区周辺にここまで多くの物資を扱っている店はありません。だから、此処に運び込まれたと考える方が自然ですが、そこまでする理由が分からないんです」
先生はアヤネの推論に驚いていた。この限られた証拠の中で精度の高い考察を練れる頭脳に。彼女が述べた事は概ね真実だ。

だから、彼がやる事は――後押しをするだけ。

「アヤネは推理小説を読むかな？」

「推理小説ですか？ いえ、そこまでは……」

「推理小説の関連用語で、ハウダニット、ホワイダニット、フーダニットという言葉があるんだ。どうやって、なぜ、誰が。謎を解明する時、犯行方法、犯行動機、犯人……これらの中でどれを主軸に添えるのか、それを表す言葉。それが、さつき挙げた3つさ。」

ここをミステリーの舞台と考えてその3つを探っていこう。ハウダニットとフーダニットは既に分かっているから、残りはホワイダニット……犯行動機だけだ」

彼は近場のデスクに腰掛けて、言葉を紡いでいく。彼女の聡明な頭脳ならば即座に答えに至れるだろうと予想して。

「じゃあ、動機は何か。現状は不明だ。恐らく、この廃墟を隈なく探しても見当たらないだろう。そして、動機は隠されている訳でもない」
「……！　もしかして……」

やはり、彼女は非常に優秀だ——彼は微笑みを浮かべて。

「その通り。動機なんて無いのだろうね。少なくとも、彼女達には」

「ミステリー風に言うなら、真犯人は別にいるって事ですか？」

「そうだね。笑ってしまうほど陳腐なジョークだけど……恐らく、裏で糸を引いている人物は別にいるはずだ」

「では、黒幕がアビドスを狙っていて、不良達はそのための手駒……物資やこの場所も黒幕の手引きだとしたら、恐らく個人ではなく組織、それもかなり大きい規模の……」

アヤネはブーツと呟きながら考えを纏めていく。見えてこなかった糸口、アビドスを狙う悪意の一端をようやく掴めそうなのだ。思考は深く、鋭く、早く。

「先生。この物資の出所は探れると思いますか？」

「厳しいだろうね。十中八九、複数のバイヤーとルートを経由している筈だ。ブラックマーケットも使って徹底的に足がつかないように、ね。仮に見つけたとしてもそれは末端で、トカゲの尻尾切りの要領で切り捨てられて上流まで辿れないだろう」

先生がそう言うと、アヤネは「そうですね……」と呟いた。彼女も薄々そう思っていたのだろうが、断言されるとやはりショックなのだろう。だが、彼の言葉には続きがあつて。

「だけど、目の付け所は素晴らしいよ。百点満点だ、花丸も付けちゃおう。辿ろうとしている物資が弾丸とかの、キヴォトスで日常的にやり取りされているものだから難しいんだ。もう少し特異な物資を軸にすると、きつと黒幕へ辿り着けるはずさ」

先生は体重を預けていた机から離れて、アヤネの肩をポンと叩く。その小さくとも、確かな応援を受け取ったアヤネの顔は明るくなっていった。

「さて、じゃあ考察はこの程度にして皆の所へ戻ろうか。このままだと、サボってるって言われてセリカに怒られそうだ」

先生は苦笑しながら外を指さすと、セリカがキョロキョロと辺りを見渡している。恐らく2人を探しているのだろう。それを見てアヤネも微笑んで。

「はいー」

アヤネの返事と共に、2人は廃墟の一室から抜け出した。



物資は積載できるだけ積載し、水道や電気といったライフラインは徹底的に破壊。持ち運べない弾薬は使用不可能になるように細工し、仕上げと言わんばかりにプラスチック爆弾で廃墟を瓦礫の山に変える。

それらの作業が全て完了し、彼女達は学校へ戻ってきた。鹵獲したトラックから荷物を下ろし、車庫に入れ、漸く部室へ。

予定外の連戦で肉体的にも精神的にも疲労したのか、愛銃をガンラックに立て、皆が一人残らず椅子にへたり込んだ。

先生はバッグの中から疲労回復のハーブティーの茶葉を取り出して、数時間前と同じように執事の真似事に勤しんでいる。お湯を沸かしているガス代もきちんと払わないとな、なんて思いながら。

「ふいふ、おじさんもうクタクタだよ。疲れたあ」

「ホシノ先輩、お疲れ様です」

「アヤネちゃんも、サポートお疲れ」

余裕があるのはシロコくらいであり、残りの面々は椅子に深く腰掛けていている。ホシノに至っては完全に机に突っ伏していた。

「火急の案件だったカタカタヘルメット団の件が片付きましたね。これで一息つけそうです」

「そうだね。これでやっと、重要な問題に集中できる」

「うん！ 先生のおかげだね。これで心置きなく全力で借金返済に取り掛かれるわ！ ありがとう、先生！ この恩は忘れないからー」

まだ片付けなければならない問題はあるものの、一番目につくヘルメット団は一旦終わりを迎えた。これから暫くはアビドスの周辺で

銃声を聞かなくていいと思うと、疲労を重ねて打って出た甲斐があるだろう。

セリカは花が咲くような笑みで、先生に感謝を告げた。

「この程度、お礼を言われるものじゃないよ。皆が頑張ってくれた成果さ。私はそれをサポートしただけに過ぎない。今こうして君達が笑い合っているのは、アビドスが存続しているのは——君達が諦めずに頑張ってくれたからだよ」

そう言つて、彼は5人分のソーサーとカップを机に置く。

先生がした事なんて多少背中を押したただけだ。全ては彼女達が頑張ったから——その成果がこうして順当に実を結んだだけ。彼がいなくとも遅かれ早かれこの結末に至っただろう。

少なくとも、先生はそう思っている。

「それで……借金返済とは？」

「……あ、わわっ！」

先生がそう指摘すると、セリカは慌てて口を塞いだ。言葉は取り返しがつかない為、そんな事をして意味がないのだが——それでも塞がざるを得なかった。アビドスの明確な弱点を話してしまった。部外者に。

「そ、それは……」

「ま、待つて、アヤネちゃん！ それ以上は！」

先生に説明しようとしたアヤネをセリカが慌てて止める。彼女の瞳には消えかけていた敵愾心と猜疑心が復活していた。

「……いいんじゃない？ セリカちゃん。隠すような事じゃあるまいし」

「でも、態々話すような事でもないでしょ!？」

「別に罪を犯したとか、やましい事じゃないし……それに、先生は私たちを助けてくれた大人でしょ？」

ホシノは一旦言葉をそこで区切つて——先生を見る。

「それに、先生さ……ある程度把握しているでしょ？ 結構事細かに調べてきてくれたっほいし……借金の理由とか原因は知っているんじゃない？」

「……ああ、把握しているよ」

彼は肯定した。目を決して逸らさず、ホシノの視線を受け止めて。一粒の嘘も吐かないと言ったのだ——誤魔化す事は絶対にしない。

「やつぱりね。でも、先生は私達がこうやって話題に出すまで踏み込んで来なかった……それだけで、他の大人より信頼できると思うんだけどな〜」

この話題は彼から出たものではない。セリカが口を滑らせた結果なのだ。面倒事だからと避けていたわけではない。アビドスの根幹にある問題だから、彼女達の口から出ない限りは踏み込まないと決めていたのだろう。

「そ、そりゃそうだけど……先生だって結局部外者だし!」

「確かに先生がパパッと解決してくれるような問題じゃないけど、それでも話すだけ話してみようよ。この問題に唯一手を差し伸べてくれそうな大人だしさ」

ホシノはそう言つてセリカを諭す。実際、願つてもない好機なのだ。シャーレの顧問という立場ある人間が、こうしてアビドスまで態々足を運んで親身になって耳を傾けてくれている。過去を振り返つても例がないレベルで事態が好転する兆しを見せている。そして『助けて』と言えば、彼なら喜んで手を差し伸べてくれるだろう。彼はそういう人間だ。助けを求める手を振り払うことができない。その結果、自身にどれほどの不利益を齎そうとも。

「悩みを打ち明けてみたら何か解決法が見つかるかもよー? それとも、他に何かいい方法があるのかな、セリカちゃん?」

正論であった。紛れもない正しさであった。問題の解決を最優先に考えるなら、彼に頼る事は正解だろう。

「だけど——それで納得できる訳がない。」

「で、でも……さっき来たばかりの大人でしょ!?! 今まで大人達がこの学校がどうなるかなんて気に留めた事あった!? この学校の問題はずっと私達だけでどうにかしてきたじゃん! なのに、なのに今更大人が首を突っ込んでくるなんて……」

セリカは先生を睨め付けて。

「私は認めないッ！」

そう叫んで、セリカは部室を飛び出した。目尻に涙を溜めて――
――酷く、痛そうな表情を浮かべながら。

「セリカちゃん！」

ノノミはそう言って、ドアの向こう側に消えた友人の名前を叫ぶ。
そして、先生を見て申し訳なさそうに目を伏せた。

「ごめんなさい、折角来ていただいたのに……」

「私の事はいいよ。それよりも」

「はい。セリカちゃんの様子、見てきますね」

ノノミはセリカの後を追って部屋を出る。残された4人の間には
微妙な気まずい空気が流れるが、ホシノが「んー」と言って静寂を切
り裂いた。

「セリカちゃんも先生の事を信用していない訳じゃないけど……」

「分かっているよ。頑なになれるのは、真剣に問題と向き合ってきた
証拠さ。セリカはずっと頑張ってたんだろう？ この学校の一員
として。好きな場所が、誰かに奪われないように。その想いを汲み取
る事はすれど、踏み躪る事はしないよ」

ああ、だけど――少し、悲しい。

先生は目を伏せた。

残滓

セリカとノノミが去った教室。少しだけ寂しくなった空気を払拭するようには、ホシノは現状を話し始める。

「えーと、簡単に説明すると……この学校、借金があるんだ。まあ、ありふれた話だけどさ……」

「金額はどれくらいかな？」

無論、先生は正確な額を把握している。毎月の利子、元金、返済済みの金額に至るまで暗唱可能だ。だが、彼は問いかけた。かつての思い出達の輪郭をなぞる様に。

「えーつと……確か9億円くらいだっけ？　アヤネちゃん」

「……9億6235万、です」

「うへえ、また増えてるよ……」

げんなりとした口調でホシノが言うと、シロコの眉が露骨に下がり、アヤネは俯いた。加速度的に増加している額を現実として認識してしまい、気分が落ち込む。

「先ほどの金額が、アビドス……いえ、私達対策委員会が返済しなくてはならない金額です。これが返済できないと、学校は銀行の手に渡り、廃校手続きを取らざるを得なくなります」

アヤネは俯いた所為でズレたメガネを指で元の位置に戻しながら、目を背けられない現状を告げていく。

「ですが、実際に完済できる可能性は0%に近く……ほとんどの生徒は諦めて、この学校と街を捨て去ってしまいました」

「そして、私達だけが残った」

シロコは簡潔にそう言った。特に感情が籠っているわけではない。事実を脚色せずに、そのまま伝えただけ。

たった5人の全校生徒……それに思う事はあるが——先
生にこの感情は必要ないから、と。

「学校が廃校の危機に追いやられたのも、生徒がいなくなったのも、街がゴーストタウンになりつつあるのも……実はすべてこの借金の所

為です。理由の方は……恐らく先生もお分かりかと思えます。こちらにいらつしやるまで、ずっと砂漠地帯を歩いてきましたよね?」

彼が頷くと、アヤネは再び口を開いて。

「数十年前、この学校の郊外にある砂漠で砂嵐が起きたのです。元々この地域では頻繁に砂嵐が起きていたのですが、その時のものは想像を絶する規模の災害でした。学区の至る所が砂に埋もれ、砂嵐が去ってからでも砂が溜まり続けてしまい……復興のため、我が校は多額の資金を投入せざるを得ませんでした」

国の復興費用を行政機関が出した。こう捉えると分かりやすいだろう。だが、それは1つの学校で賄う事ができる規模の金額ではなかったのだ。更に、国連や支援団体、NPOといったものがキヴオトスには存在せず——行き着いた先は。

「しかし、このような片田舎の学校に巨額の融資をしてくれる銀行は中々見つからず……」

「結局、悪徳金融業者に頼るしかなかった」

先生の言葉にアヤネは「はい」と肯定する時のテンプレートを言う。「その通りです。最初のうちは、すぐに返済できる算段だったと思います。しかし、砂嵐はその後、毎年更に巨大な規模で発生し……学校の努力も虚しく、学区の状況は手がつけられないほど悪化の一途を辿りました」

先生が窓の外を見ると、学校の敷地の外側には見渡す限りの砂漠が広がっている。資料で見た数十年前までの面影はどこにもない。ポストアポカリプスのような光景。

「……そしてついにアビドスの半分以上が砂に吞まれて砂漠と化し、借金は加速度的に膨張して……私達の力だけでは、毎月の利息を返済するので精一杯で……弾薬も補給品も、底をついていました」

アヤネは「先生のおかげで当面の危機は去りましたけど」と言う。本当にギリギリだったのだろう。不良達を撃退するのにも弾丸が必要で、戦闘は基本的に消耗が激しい。それに、ヘイローを持つ少女達を気絶させようと思うと急所を正確に撃ち抜かない限り弾丸一発では足りない。

ずっと、瀬戸際の戦いだっただの。

「セリカがあそこまで神経質になつているのは、これまで誰もこの問題にまともに向き合わなかったから。話を聞いてくれたのは先生が初めて」

「……まあ、そういうつまらない話だよ。で、先生のおかげでヘルメツト団つて厄介な問題が解決したから、これからは借金返済に全力投球できるようになつたつてワケ」

現実的に考えると、あそこまで膨れ上がった借金を正規の手段で返済するのは不可能だ。学生の身分なら尚更だろう。

だから、近隣住民や彼女達以外の生徒は見限つたのだ。誰だつてほぼ沈没している船にいたくない。現実が見えていないのは今尚残つている対策委員会であり、逃げた者達ではない。だから、彼女達は誰かを責める事はしなかった。仕方がない事だから。誰のせいでもない。

「まあ、こんな感じだよ。廃校寸前の学校を捨てられなくて、何とかしようと足掻いている——私達の話は」

ホシノは少し戯けて言う。強がりなのは誰の目から見ても明らかだった。

「……もし、もしさ。先生がこの委員会の顧問になつてくれるとしても、借金の事は気にしなくていいからね。話を聞いてくれただけでもありがたいしさ」

「そうだね。先生はもう充分力になつてくれた。これ以上は迷惑をかけれない」

「いや——」

彼は己の心を告げる。真っ直ぐに、何処までも愚直に。先生は、何度だつて同じ選択をするのだ。生徒の為に。誰かの為に。

「見捨てるわけないよ。見捨てられるわけがない。私も協力する」

——私は、シャーレの先生殉教者だから。

彼はそう言つて笑う。聖母の様な貞淑さを携えた、見返りを求めない優しさに包まれる様な感覚。

アビドスの面々の顔が驚きで染まつた。

「えっ……それって……」

「一緒に頑張ろうね、皆」

「……ッ！ はい！ よろしくお願いします、先生！」

「へえ、先生も変わり者だね。こんな面倒な事に自分から首を突っ込むなんて」

呆れるほどの善性だ。損ばかりしてしまう様な人間性だ。誰かが救われる事が、自分への最大の報酬だと言わんばかりで——
それでいいのかと、思わず口に出そうになる。

「助けを求める手を振り払う事なんて出来ないよ。大人として、シャーレの先生として、人として」

「……そっか」

ホシノは納得と寂しさを覚えながら、噛み締める様に呟く。彼のあの澄み切ったような、誰かの為に立ち続ける姿が——痛ましくて仕方がない。彼があのように果てるまで、一体幾つの悲しみを超えてきたのだろうか。そう思わずにはいられない。

「良かった……シャーレが力になってくれるなんて……！ これで私達も、希望を持っていいんですよね？」

「そうだね。何か活路が見えてくるかもしれない」

ホシノの心中とは裏腹に、周りの雰囲気は明るかった。



「……」

「セリカちゃん……」

セリカとノノミは壁越しに一連の話を聞いていた。アビドスの未来は多少明るくなったはずなのに、彼女の顔は暗い。ノノミは心配そうな顔で、彼女を見つめている。

「分かってるわよ、私だって……でも、でも……」

「そうですよね。セリカちゃん、ずっと頑張っていましたから」

セリカは頑張ってきた。1年生でありながら誰よりも真剣にこの問題と向き合って、戦ってきた。この課題をなんとか解決したいと足

掻き続けてここまで来たのだ。

だから、納得できない。

書面上とはいえ、今まで見向きもしなかった連邦生徒会に属するシャーレの責任者が訳知り顔で手を差し伸べてくるのは……セリカのプライドが許せなかった。

今まで頑張ったね、だからもういいよ——なんて今更言われても、これ迄の努力を笑われているような気がしてならないのだ。彼にそんな意図がない事は重々承知している。寧ろ彼は今までの努力をきちんと受け止めた上で、一緒に苦労しようとしてくれているのだ。分かち合う為に、分かりあうために。

でも、でも、でも。

まだそれを受け止め切れる余裕が……セリカにはなかったのだ。

「セリカちゃん……」

ノノミは背中を丸めて部屋を出ていく少女を、唇を噛み締めながら見送った。



太陽が沈みキヴォトスに闇が落ちた頃、先生は砂漠地帯の一角に立っていた。風が吹き、砂塵が舞う。翻る白のコートと、靡く髪。影に隠れた表情は窺い知れない。

「流石に、目立つ痕跡は残していないか……」

先生はポツリと呟いた。システムの箱を片手に何かを探し——

——そして、見つからなかった。彼はそのままタブレットの中に視線を落とし、中にいる少女に声をかけた。

「アロナ、なにか分かるかい？」

「先生の予想通り、此処に降り立つ事は確定しています」

青い少女は俯いたまま、暗い表情で「ですが」と言葉を続ける。

「何番が、どういったアプローチを経て此処に降臨するのかが分かりません」

「うーん……回避は？」

「できないと思います」

「だよ。じゃあ近い未来、楽園の証明と対峙する事は必定か……」

先生はそう言って、脳内でシミュレーションを開始する。想定できる全てのパターンと状況変数。相手の手札すら予測して。

その演算を頭の片隅で行いながら、彼は「ありがとう」と言っ

「それが分かっただけでも上々だよ」

「ごめんなさい、あまりお力になれず……」

「いいんだ。アロナに分からないなら他の誰にも分からないよ。今回はそれだけゲマトリアが上手かっただけ。それに、こんな微量な残滓を捉えるだけでも凄いさ。流石アロナだよ」

「そうですね……」

俯いていた顔を上げると、月と星が天上に輝いている。煌びやかな中心都市ではまず見られない神秘的な星月夜。

そう——人は古来よりソラを仰ぐ。ソラに未知と神秘を

見出し、神が住まう場所と定義した。

だが、いつしか人はソラを解き明かすべき対象とした。

恐れず畏れず、天の階きざはしを登る為——ソラに手を伸ばした。

キヴォトスでも、それは変わらない。シリウスの光を彼女達は仰ぐのだ。

——彼女達もどこか遠い所でこの空を見上げてくれているだろうか。

「先生はどの状態で召喚されると思いますか？」

彼はアロナの言葉で現実に取り戻された。感傷は捨てられないな、と笑って。嗤って。

今、郷愁は必要ない。自分の弱さに蓋をして——投げかけられた問いについて少しだけ考えて、口を開く。

「馬鹿正直に叩き起こすよりも効果的な手を打ってくるよ、黒服は。恐らく、関係性が深いものを触媒にして本来の権能がある程度取り戻させた状態——全能の一端、神の御許に在るものとして対峙するはずだ」

「そうだった場合は……」

不安そうなアロナに追い打ちをかけてしまう事を申し訳なく思いながら——敵対者が齎し得る最大の破壊を話す。彼が知る敵のスペックが振るわれた場合、何が起きてしまうのか。

「最悪、アビドス全地区が半世紀は人の住めない死の大地になる。パスが正しく結ばれてない状態とはいえ、滅びは滅びだ。アビドスの……砂漠化が進行した土地なら余裕で殺せてしまう。何としてでもそれは避けないと。幸い打つ手はある。全能の一端如き、擬似展開でも確殺できるさ」

彼は礼装を最優先にしておいて良かったと心から思った。あの選択がなければこの時点で詰んでいた。確実にアビドスは死に絶え、連鎖的にキヴォトスも多大な流血を強いられてしまうだろう。

「仮に完全な状態で召喚されても幾つか切り札を使えば何とかなるはず。万が一詰みの状況になっても事象^大改変^人型^のプロトコル^{カー}を使えば、私の命を対価に絶滅は回避できるはずだ」

「先生……」

自分の命を対価として捧げることを当然のように想定している——それが、アロナは悲しかった。

確かに、過去に比べると状況自体は良くなっている。だが、その代わりに先生がかなり綱渡りになっているのだ。故に命を懸けなければならぬ場面は必ず来る。その理屈は理解できるが——
ああ、納得なんてしたくない。

何故、彼だけがこんなにも生存を否定されるのだろうか。アロナは泣いてしまいそうなほど、悲しくて辛かった。

先生はそんな健気な少女の——泣けない彼の代わりに泣いてしまいそうな表情に気付いて、そつと微笑んだ。

「死ぬ気はないよ。だが、最悪は常に考えて動かないと……アロナ、明日は一旦ここから離れて、ゲヘナとミレニアムへ行くよ」

「分かりました！ でも、どうしてですか？」

「あつちがその気なら、私も戦力を整えるまでだよ。便利屋と風紀委員、あとはワカモ、C&C……RABBIT小隊まで来てくれたら嬉しいけど、彼女達は少し厳しいかな。でも、一応声をかけてみるよ」

彼は「流石に風紀委員はアポを取っておかないと……」と言ってスマホでメール文を打っている。時刻は既に午後10時を回っている為、常識的に考えるならばこんな時間にメールを送るなんてマナー違反だろう。申し訳ないとは思いますが、先生もなりふり構っていられる場合でなくなつた。罵詈雑言は甘んじて受け入れようと思い――送信した。

「あと、天命とプロトコルは待機状態に。特に天命は現段階で使用できる最強のジョーカーだ。出し惜しみはしない。ここで滅びの駒を一柱潰すつもりで打って出る」

「駒、ですか……まるでゲームみたいですね」

「実際に盤面遊戯なんだろうね、ゲマトリアにとっては。形態としてはチェスに近いんじゃないかな。『私と貴方、どちらがシナリオを完成させるか勝負といきましょう』なんて宣う腹立たしい顔が鮮明に浮かぶよ……巫山戯やがって」

先生は怒りのまま、皮膚が破れんばかりに拳を握りしめた。昔から彼はそうだ。根本的に自分のためには怒れない。彼が怒りを露わにするのは決まって生徒の為。誰かの為にしか――彼は戦えない。

その性質は先生と呼ばれる彼の危うい所であり……同時に美德だと、アロナは思っている。

彼は用事は済んだ、と言わんばかりに踵を返す。

「何を企んでいるかは知らないが――全部ご破算にしてやる」

便利屋、始動

アビドスを取り巻く問題が激変した日から1日が経った。

砂漠に埋もれた住宅街、人の気配を殆ど感じないゴーストタウンを先生は歩いていた。風が吹くと砂塵が舞い、道の片隅に咲いていた花の花卉が散る。何処か風情を感じるその光景は、先生の目に焼き付いた。

先生はアビドス高等学校から近い……とは言ってもバイクで1時間以上かかるが……距離にあるビジネスホテルを活動拠点としている。本音を言うならば学校そのものに泊まりたかったが、そんなことをすれば不審者コース一直線の為、ぐつと我慢した。

今現在、先生はレンタルしたバイクを走らせてアビドス高等学校へ向かっている。彼は文明の利器に多大な感謝をしつつ、頭の中で本日の予定を整理。

まず、アビドスに顔を出す。本日は自由登校のため誰もいない可能性があるが……その時はその時だ。

次に、便利屋68の訪問。今朝アポを取ったのにトントン拍子で話が進み、今日の午後に面会をする事になった。十中八九、他に依頼が無くて暇だからだろう。

なお、C&Cは現在任務の最中のため会うことができず、RABBIT小隊は現在の先生の権限では動かせなかった。ゲヘナの風紀委員は多忙の身の為、昨日の今日ではスケジュールを組むことができず数日後に面会となった。

頼んでもない仕事が頻繁に舞い込んで来る風紀委員から30分もせずにメールが返ってきた事にも驚いたが、差出人が空崎ヒナ、天雨アコ、火宮チナツの連名だった事には更に驚いた。

書かれていた内容は面会ができない事に対する謝罪、代替案の提示、そして3人からの挨拶。特に3人の挨拶は作文かと思紛うほどの文字数と熱量で送られてきたため、若干彼も文字列に気圧されたのだ。

彼女達のメールを返信し終えた後は各方面の日程調節、ワカモへの連絡、持ち込んだ仕事を行っていたらいつの間にか午前6時。徹夜最長記録を絶賛更新中であつた。彼の心の中の似非お嬢様が『眠いですわ〜!』と叫んでいると——ふと、眼前に見慣れた影に気付いた。ブレーキを掛けて速度を緩めて、影の隣に陣取る。

「セリカ?」

「げっ……」

そこには『面倒な人に出会つた』と言わんばかりに露骨に顔を顰めている少女……セリカの姿があつた。昨日、彼等は喧嘩別れに等しい別れ方をしたため、セリカは若干気まずそうな雰囲気と、申し訳なさそうな顔をする。一方的に捲し立ててしまった事もあり、色々と思うところがあるのだろう。

「い、言いたいことがあるなら言いなさいよ……!」

彼女は警戒心を強めて言う。だが、眼前の彼は「言いたいことか……」と呟いて呑気に考え込んでいる。そして、彼は3秒もせず口を開いて。

「おはよう、セリカ」

柔らかな微笑みを浮かべて挨拶した。1日の始まりを告げるお手本のような声音と表情であつた。

小言が来るかもしれない、と身構えたセリカにとつて、それは拍子抜けするほどであり毒気を抜かれそうになつた。喉の手前まで上がってきた『おはよう』を咄嗟に飲み込んで、昨日と同じように彼を睨みつける。

「何が『おはよう』よ! 馴れ馴れしくしないでくれる! 私、まだ先生のこと認めてないから!」

「ふふっ……ああ、知ってるよ」

彼がそう言うと、セリカは「ふんっ」と鼻を鳴らす。単純に面白くないのだろう。対応が達観しすぎていて、彼が大人すぎて——

まるで自分が癩癩を起こした子どもの様に思えてしまう。彼の指揮能力等は認めているが、人間性は気に食わないのだ。

「セリカは学校に行くのかい?」

「別に、私が何しようがどこへ行こうが先生には関係ないでしょ？ それに、こんな朝っぱらからうろついて……シャーレの先生って暇なの？」

「手厳しいねえ」

彼は苦笑して肩を落とす。少し暗くなった表情にセリカは『少し言すぎたかも』と思う。彼女は基本的に善人であり、根っからの人情家だ。誰かの涙や悲しい表情は決して克服できない弱点になる。

だが、彼の暗い表情も直ぐに奥へ引込込む。飄々とした風いだ顔が彼に戻ったことに何処か安堵を覚えながらも――彼女は気丈に言い放つ。

「じゃあね！ 精々のんびりしてれば？ 私は忙しいのー！」

「学校に行くなら一緒に行かない？」

もう話す事はない、と言わんばかりに背を向けたセリカを引き止めたのは彼の能天気にも程がある申し出だった。先程まであれだけ邪険に扱われていたのにも関わらず、こんな事を言える凶太さは何なのだろうか。セリカは「はあ」と大きな溜息を吐いて。

「あのねえ……なんで私がアンタと仲良く学校に行かなきゃならないわけ？ それに今日は自由登校日だから、学校に行かなくてもいいんだけど」

「それは私も把握しているけど……じゃあ、どこに行くんだい？」

「アンタに教えるわけじゃないじゃないッ！」

セリカは怒気を込めて彼に言い放つ。ずっと彼の掌の上で転がされた様な感覚であった。面白くない、素直にそう思う。

そして今度こそ彼に背を向けて、目的地に向けて駆け出そうとした所で。

「気をつけてね〜」

気が緩む柔らかな声が聞こえて後ろを振り返ると、微笑みを携えて手を振っている彼の姿が見えたから。

「うっさい！ バーカー！」

セリカは砂埃を上げて全力疾走で駆け出した。

――ああ、もう……本当に調子が狂う。

「行っちゃったねえ」

『行っちゃいましたねえ』

先生とアロナは彼女が巻き上げた砂塵を眺めて、そう呟く。行き先は終始言ってくれなかったが、恐らくバイトだろう。

『先生、あれがツンデレというものでしょうか？』

「多分そうだと思うよ」

セリカがその場にいたらぶん殴られそうな会話を続けて、先生は再びバイクのエンジンを掛ける。タブレットのアロナにナビゲーションをお願いし、アクセルを踏むと咽せ返る様な砂埃が撒き散らされた。

今日用事がなかったら彼女のバイト先を聞き出して、冷やかに行って良かったのだが――生憎と今日は結構スケジュールがキツキツなのだ。楽しみはまたの機会に。

「では、私達も向かうとしよう」

アビドスへ顔を出し、細々とした連絡と雑談をひとしきり終えた後、彼は再び移動していた。

行き先はゲヘナ自治区、ビル街。絢爛な都心は甘い腐臭を放ちながら熟れる魅力的なパラダイス。自由と混沌を肯定する学園の自治区らしい様子であった。

「――ここか」

その一角、数多の企業のオフィスが点在する場所に便利屋68は窓口を構えている。テナント料金だけで頭痛の種になりそうな場所にオフィスを構えているため、きちんと生活できているのか心配になるが……強かな彼女達ならば恐らく大丈夫だろう。

自動ドアを潜って、エレベーターに乗り込み階層のボタンを押す。

微弱な振動を味わい、目的の階に着く。案内図に従い、足を進ませると――便利屋68の扉が見えた。

ドアの隣に備え付けられているテーブル、その上に鎮座している電話がインターホン代わりだろう。彼は受話器を持ち上げて、数コール。回線が繋がった。

『はい。便利屋68、陸八魔です』

「こんにちは。私は連邦捜査部シャーレの顧問です。本日、面会の約束で参りました」

『……かしこまりました。少々お待ちください』

そうして、回線が切れる。受話器を元の位置に戻すと、壁の向こうでバタバタしている音が聞こえた。

――ちよつとムツキ！ 本当にシャーレの先生だったじゃない！

――えく？ 私はもしかしたらイタズラ電話かもよ？ って言っただけなのにな。

――ア、アル様を困らせた……！ ここは私が先生を……！

――待って待って待って！ シャーレの先生の爆破はやめてっ！

――はあ……だから最低限準備はしておいた方がいいって言っただけけど……。

女三人寄れば姦しい、と言う言葉があるが実際その通りだろう。便利屋の生徒は3人ではなく4人のため人数の差異があるが些細な事だ。部屋の中はきつと愉快的事になっている。

何処の世界でも変わらない便利屋の彼女達に安心感を覚えながら先生は。

「……防音性に難あり、と」

スマホでビルのレビューを書いていた。付けた評価は5段階中3、何とも微妙であった。

あれから10分弱が経ち、ドアを恐る恐る開けた紫髪の少女――
―伊草ハルカに案内されてオフィスに足を踏み入れた。一日一悪の
スローガンが掲げられた室内、先生は懐かしいと思った。

「さあ、お掛けになってください」

便利屋68社長、陸八魔アルが妖艶な所作で言うが――彼
女にはあまり似合っていなかった。後ろの浅黄ムツキが笑いを堪えて
いるレベルで似合っていなかった。

先生はくすり、と小さく笑って。

「ありがとう。でも、もつとラフでいいからね？　実は、私は堅苦しい

のが苦手なんだ」

「そ、そう？　なら私も……」

アルはいつもの調子に戻る。やはりこちらの方が彼女らしい。先
生としても、下手に畏まった言い方をされると調子が狂うのだ。生徒
と先生であつても、関係は対等だ。

「では、改めて……面会してくれてありがとう。これ、細やかだけお
土産。皆で食べてね」

「え、あ、ありがとう、先生」

先生から紙袋を受け取ったアルは、そのまま後ろに控えている鬼方
カヨコに手渡した。中身は――。

「これ、有名なパティスリーの……」

「へえ、先生って案外お金持ち？」

「私個人はそこまでだよ。領収書を見せたら毎回怒られてるさ……で
もまあ、この程度はね」

先生は苦笑いする。彼の出費を管理しているユウカに無許可で
買ったため、次会った時何を言われるか分からないのだ。願わくばあ
んまり怒らないでほしい、必要経費だったのだから――と思
う。

彼は「ではそろそろ」と一拍置いて。

「私からの依頼について、お話ししようか」

先生の目の前に座るアルが息を呑んだ。優しい雰囲気はそのままに、何処か異物感を孕んだ……異質な空気。数多の戦場の轍を歩んだからこそ作り出せるもの。

「近々、君達に一件の依頼が来るはずなんだけど……それを断ってほしいんだ」

「依頼を断るのが、依頼……？」

「そう。勿論、報酬は出すよ」

彼は内ポケットの手帳を取り出し、ページを一枚切り取ってペンを走らせる。

「前金としてこれだけ」

「……ふえっ？」

「……1億」

1億。カヨコが何かの間違いかと思っただけでも、その表情は微笑んだまま。つまり、間違いではない。

「先生、質問」

「なにかな、カヨコ」

「前金って言ったよね。じゃあ実際に依頼を達成したら……」

「ああ。報酬として、断った依頼で提示された金額をそのまま私側で出そう」

埒外の依頼だった。報酬の金額は桁外れで、達成の難易度は容易。何せ、断るだけなのだ。それだけであり得ない金額を報酬としてもらえる。

故に、何か隠された意図があると疑るのは無理もない話であった。カヨコとムツキは訝しむ様な目が変わっている。アルは金額の大きさに若干フリーズしていて、ハルカはそんなアルを見てあたふたしている。

そして——彼も怪しまれる事は承知の上だった。

「まあ、こんなんでもない依頼が来ても普通は怪しんで受けてもらえないよね。仮に私が君達の立場にいたら、鼻で笑って突っぱねていたとも」

「ふーん……この反応も織り込み済みなんだね」

先生は「勿論」と返して、カヨコを見る。こういったデスク上での駆け引きは社長のアルや室長のムツキよりも彼女の方が勝る。とても冷静なのだ。恐らく彼女の脳内では既にリスクリターンの計算が行われている。

それから、先生は彼女達に些細を話した。断ってほしい依頼のクライアントがカイザーコーポレーションの理事長である事、その内容がアビドス高等学校の奪取である事、その他諸々。

彼の話を傾聴していた彼女達は其々思い思いに思考を走らせる。リスクリターン、疑問点のリストアップ等。

そして、一番最初に口を開いたのはカヨコだった。

「先生、質問だけど……なんで、カイザーが私達に依頼する事が分かったの？」

「あれだけの大企業なんだ。動く際に全く痕跡を残さない、前兆を見せない……なんて事は不可能さ。私はその隠し損ねた尻尾を掴んだまでだよ。元々、戦場の構築や駆け引き、情報戦は得意だね。

依頼される理由に因りただけ……元々カイザーはカタカタヘルメット団を雇っていたんだ。だけどアビドスの生徒達が彼女達の大半を撃退したから、現状戦力が大幅に削がれている」

「失った戦力の補填として私達に白羽の矢が立った。自社のPMCを使わずに」

彼は「その通り」と言っ

「気軽に使えて、勝手がいい組織の方が何かと便利だからさ。その上、カイザーの活動は犯罪に片足を突っ込んでいる。そんなブラックオプスに自社のツールは使えない。だから外部に頼るんだ。いざとなれば『関係ない』ってシラを切って捨てられる様に、ね」

辟易とした溜め息を吐く先生を見て——カヨコは彼の評価を数段階上げていた。これまでの話の筋はきっちり通っている。カイザーがアビドスを付け狙う理由に関しては不明だが、彼が説明しなかった事を鑑みるに学校の機密に抵触するのだろうか。

そして、彼の依頼は——便利屋68を守る意図も含まれている。恩着せがましくなるため話さなかったのだろうか……詳細を

聞いてしまえば否が応でも辿り着いてしまう真実だった。

——一応、悪い人ではないみたい。

彼女がそう結論付けた時、彼はソファから立ち上がった。

「と、まあ……ここまで色々話したけど、今依頼を受けるか否かは決めなくていいよ。考える時間は欲しいだろうし、今話したのは私側の……対立する二項の内の一方だ。もう一方の話は必ず近日中に舞い込んでくるから、それもちゃんと吟味して——結論を出してほしい」

先生はアルに一枚の紙を握らせた。書かれているのはアドレスや電話番号、SNSのIDだった。シャーレのものではなく、彼個人のもの。最も手っ取り早く彼にアクセスできる手段。

個人情報^の極みの様なものを渡されたアルは若干恐る恐る口を開く。あまり考えたくない話だが……社員の安全を預かる社長として、大切な友人としてif^{もしも}を想定しなければならぬから。

「仮に私達が先生の依頼を断ったら、どうするつもりかしら……？」

「？ 別にどうもしないよ。君達がどんな立場にしようが、私の大切な生徒に変わりはない。もし断られたら、それは私の信頼が足りなかっただけで……皆に落ち度はないさ」

陽だまりの様な笑みを浮かべた彼は踵を返し、ドアに手をかけて――

——振り返る。

「会ってくれて嬉しかったよ、ありがとう。今度はシャーレに遊びに来てね。いつでも待ってるから」

黒見セリカの最悪な1日

「いらっしやいませー！ 柴関ラーメンですー！」

比較的小さめな店内に響き渡る澆刺とした声。気持ちの良い来店
の挨拶をしているのは、アビドス高等学校1年の黒見セリカだった。
店指定の制服を見に纏い、三角巾を頭に付けている黒髪の少女は人
好きのする笑顔を客に振り撒きながら接客をしている。

柴関ラーメンはアビドス地区内で営業している飲食店だ。その店
舗名の通りラーメンや餃子、炒飯といったオーソドックスな中華料理
を提供しており、地区内ではかなり珍しい、現在でも営業中の店。来
店客からは『早い、安い、美味い』と評判になっており、時間によつ
ては店内もかなりの賑わいを見せる。

そんな店で、セリカはアビドス対策委員会に内緒でバイトを行なつ
ていた。店の看板娘の様な愛想と笑顔携えて訪れる客を歓待し、あつ
ちへ行きこつちへ行きと忙しく店内を駆け巡っている。

時刻は丁度夕飯時、ランチ帯と並んで飲食店が最も混雑する時間
帯。その様な事情も相まって柴関の店内は混み合っており、テーブル
席もカウンター席も満員一步手前の状態だ。

アビドスに残る数少ない飲食店、近隣住民の憩いの場。思い思いに
食事を楽しむ客を見て、セリカは確かなやり甲斐を感じている。

そして、不意に入り口が開く。新しいお客さんだ、と思い――
――セリカは笑顔を向ける。

「いらっしやいませー！ 柴関ラーメンで――」
「4名でお願いしま〜す☆」

店の引き戸を開けて入ってきたのはよく知った顔だった。見覚え
があるどころではなく、親友と言いつれれるほど関係性が深い仲間達。
その姿を視界に収めてセリカはフリーズする。目の前の光景を現実
と認めたくなくて、一瞬夢の国へ旅立ちそうになるが――――な
んとか持ち直して再起動する。手に持ったタブレットで顔の下半分
を覆い、驚愕で目を丸くして。

「わわッ……!」

「あ、はは……セリカちゃん、お疲れ……」

「お疲れ」

セリカを労いながら入店するアビドスの面々。物珍しそうに店内を見渡す彼女達に、セリカは愕然とした表情を浮かべる。

「み、皆……どうしてここを……!?!」

「うへへ、やっぱここだと思っただろ」

満を持して現れたのは、この冷やかしの案を作成した人物たる小鳥遊ホシノ。3人より若干遅れる形で入店した彼女は眠気を隠さない足取りでセリカの方に寄って行った。

「セリカちゃんのバイト先で考えられる場所っていえばここくらいしかないじゃん？ だから来てみたんだけど……大当たりだったね〜」
バイトをしている事自体は気づかれていただろうとセリカ自身も思っていた。だが、まさか勤務先まで予想されているのは完全に想定外だった。そして、こうしてメンバー総出で遊びにくる事も予想外だ。

そこで、ふと思った。そういえば人を小馬鹿にした様な微笑を浮かべた白服の男——先生がいない、と。

「先生も来ればよかったのにね〜」

「ん、用事があったから仕方ない。また今度誘おう」

ホシノとシロコがそんな恐ろしい計画を組み立てていた事は露知らず、セリカはノノミとアヤネと話し、呻き声を上げていた。

それと同時に厨房の奥からこの店の店長が顔を覗かせる。その姿はまさに芝犬であるが、二足歩行を当然の様に行い人語を話す——

——歴としたキヴォトスの住人だ。

「アビドスの生徒さんか！ セリカちゃん、おしゃべりはそれくらいにして注文受けてくれな〜!」

「あ、うう……はい、大将。それでは、テーブル席にご案内します……こちらへどうぞ……」

賃金が発生している時間に友人と談笑するのは褒められた行為ではない。セリカは意気消沈しながら、とぼとぼと案内を開始する。先

程までの澆刺とした笑顔は鳴りを潜め、恥ずかしい所を見られたと言わんばかりの表情だ。そんなセリカの後ろを4人は着いていく。シロコとホシノはいつも通り、ノノミは楽しそうに、アヤネは苦笑いして。

案内されたのは6人掛けのテーブル席。4人用の席は全て埋まっているため、現在案内できる場所はここしかなかったのだろう。

4人には少し広いスペースに座っている彼女達を見て、セリカは辟易とした溜息を吐く。

だが、彼女は知らなかった。この直後に、更に頭痛の種が増える事を。

「いらっしやいー！」

「2人です。席、空いていますか？」



新しい来客を出迎えに店舗入り口へ向かったセリカに待っていたのは――一番会いたくなかった人の顔だった。

「セリカ？」

僅かな驚きを交えてセリカの名前を呼んだのは、今朝エンカウンターしたシャーレの先生だった。彼の傍らにはおよそラーメン店には相応しくない着物姿の美少女が佇んでいる。

「なっなんでアンタが此処に……！」

「アビドスで評判良さそうな飲食店探したら此処に辿り着いたんだけど……セリカが働いているとはね」

彼は「偶然だねえ」なんて言って、苦笑する。先生としても偶々入った飲食店でセリカが働いていただけであり、冷やかしの目的はなかった。

元々、此処に来るつもりすらなかったのだ。シツテムの箱が捉えた厄介な存在を片付けるために、このまま食事を取らず夜通し動くつもりであったが……彼の健康を気遣ったワカモが「せめて食事だけでも」と嘆願し――この店に来店するに至った。

尚、ワカモは彼にだけ食事をさせるつもりで自身は食べるつもりはなかったため、手を引かれ店に連れられた時は驚いたが——彼と共に食事できる嬉しさの方が勝った。

「アンタまで来るなんて……」

「まで？……ああ、なるほど」

彼は奥の席で手を振るシロコ達に気づいて、手を振り返す。彼女達は純然たる冷やかし目的で来たのだろう。こんな所で会うとは、案外世界は狭いらしい。

「席はあの子達と一緒で大丈夫かな？」

「……貴方様の隣に座れるなら何処でも大丈夫ですわ」

「……だ、そうなので——案内、お願いできるかな？」

今日は厄日だ——セリカは素直にそう思った。



先生とワカモがアビドスの面々が座っている席に案内され、気を遣ったアヤネが移動して——ワカモは願った通り先生の隣にいる。

席の順番はノノミ、先生、ワカモ。その向かいにシロコ、ホシノ、アヤネが座っている。ワカモとアヤネが通路側だ。

シロコ達は和服姿の少女が誰なのか先生に聞きたかったが、後回しにした。彼と共にしているという事は、恐らく信用に足る人物なのだろうと思つて。

ノノミは賑やかになったテーブルを横目に、メニューとお盆を持って待機しているセリカを見た。

「セリカちゃん、バイトのユニフォームとっても可愛いです☆」

「いやあー、セリカちゃんってそっち系？ ユニフォームでバイト先決めちゃうタイプ？」

「ち、違つて！ 関係ないし！ ここは行きつけのお店だったのー！」「ユニフォーム姿のセリカちゃん、写真撮つとけば一儲けできそうだねー。どう？ 1枚買わない、先生？」

彼は「うーん……」と少し考えて。

「シャーレのコルクボードに貼るのもアリか。今は殺風景で寂しいし……」

「変な副業はやめてください、先輩……あと先生も買わないでください……」

写真がないコルクボードほど寂しいものはない。それを埋められる良い機会だったが、アヤネに止められたのならば仕方ないだろう。大人しく暁輪大祭等のイベントの時を待とう。

「貴方様は写真が欲しいのですか？ でしたら、この私が――

――」
「私が警 察ヴァルキユレの御用になる写真はやめてね？」

先生が慌てて釘を刺しても、ワカモは仮面の裏で妖艶に微笑んだまま。先生の背筋に冷たい汗が流れた。

公衆の面前でいちやついている2人を放って、アビドスの面々はセリカに興味本位の質問をぶつける。皆、この状況を心から面白がっていた。

「バイトはいつから始めたの？」

「い、1週間ぐらい前から……」

「そうだったんですね☆ 時々姿を消していたのは、バイトだったという事ですか！」

友人からの弄りに耐えかねたのか、セリカは顔を真っ赤にしながら声を張り上げる。

「も、もういいでしょ!?! ご注文はっ!?!」

『ご注文はお決まりですか?』でしょー? セリカちゃん、お客様には親切に接客しなくちゃー? ほら、笑顔笑顔〜」

超が付くほど迷惑な客であった。だが、根が真面目なセリカは自身の対応に問題があったと思い、赤い顔のまま丁寧な所作で注文を聞いていく。ホシノとノノミはそんなセリカの様子を楽しそうに眺めている。

ノノミはチャーシュー麺。シロコは塩ラーメン。アヤネは味噌ラーメン。ホシノは特製味噌ラーメンに炙りチャーシュートツピン

グ。

行き慣れた店なのだろうか、メニュー表も見ずに彼女達は各々食べたものを注文した。

「先生も遠慮しないでじゃんじゃん頼んでね。この店、めっちゃくちゃ美味しいんだよ！ アビドス名物、柴関ラーメン！」

「……うーん、どうする？」

ワカモに問いかけると、彼女は仮面の奥から笑顔を覗かせて。

「私はこの様なお店で食事をした経験がありませんので……貴方様と同じものを。折角ですし、貴方様と同じものを食べて美味しさを共有したいですわ」

「そっか、じゃあ……醤油でいいかな？」

「ええ、勿論ですわ、貴方様」

「という訳で、醤油ラーメンを2つ、お願いね」

全員分の注文をタブレットで取っていたセリカであったが、不意に問いを投げた。その表情は若干ジト目になっている。

「……ところで、皆はお金大丈夫なの？ もしかして、またノノミ先輩に奢ってもらうつもりじゃ——」

「私はそれでも大丈夫ですよ？ カードの限度額までまだ余裕はありますし……」

ノノミが懐から取り出したのはキヴオトスゴールドエキスプレスカード。キヴオトスで戦車すら購入可能などでもないクレジットカードの存在感は正に格別。アヤネが「眩しい！」と目を逸らすほど煌びやかな光を放つ黄金でノノミは会計を行おうとするが——

——ホシノはそれを静止した。

「いやいや、またご馳走になる訳にはいかないよ。きつと、先生が奢ってくれるはず——だよね、先生？」

ホシノは真正面に座っている先生に、ニヤつきながら言う。彼としては此処で会うのは完全に予想外で、奢るのはもっと予想外だ。

「初耳なんだけどなあ……」

先生はそう言つて、スマホのアプリで決済サービスの残高を確認する。恐らく大丈夫と言い切れるだけの金額が表示されている事を視

認した。

「あ、それ、ウチじゃ使えないわよ」

「……なるほど」

使えないものは仕方ない。財布を取り出して、現金を見る。つい数時間前、便利屋の生徒達に渡すお土産を買ったばかりのため、少々持ち合わせに不安が残るが——— 美食研究会のアカリのような量を頼まなければ大丈夫だろう。その代わり、先生が暫く節制をしなければならぬが。そしてユウカにも怒られなければならない。先生は未来の自分と財布の中身を悼んだ。

彼は溜息を飲み込んで、財布をテーブルの上に置いて——— それをホシノは素早く引っ張って自身の手元に持っていき、中身の物色を開始した。

「おう、大人のカードがあるじゃん。これの出番だね」

「人の財布の中身を勝手に見るのは宜しくないよ」

ホシノに見られて困るものは入っていないが、教育者として行為は咎めるべきだろう。先生はホシノに向かって手を伸ばして財布を取り返そうとしているが、巧みに躲し続けている。

「先生、最初からこうするつもりで一緒の席にしてくれたんですか……？」

「先生としてはカワイイ生徒達の空腹を満たしてやれる絶好のチャンスじゃーん？」

「別に奢るの自体は構わないんだけどね……あと、財布返して」

2人の不毛な攻防に掛かった時間が10秒を越えようとした所で——— ワカモがホシノの手から先生の財布を奪い取った。

「あまりこの方を困らせないでくださいな」

先生に財布を渡しながら、ワカモは悪戯っぽく言う。彼女もこれが戯れあいだと分かっているのだろう。先生を強く思うが故に、彼が絡むと暴走特急になりがちなワカモにしては——— かなり余裕のある対応だった。

尚、彼女のこの余裕は『この中で一番愛され、信頼され、見られているのは自分である』という自負から生まれているものである事を先

生は知らない。

それはともかく
閑話休題。

先生の意思は関係なく、ユウカに怒られる事と節制が決定したのだが——不意に彼の隣に座っているノノミが彼の袖を引っ張った。

「先生、こっそりこれで支払ってください」

ノノミは小さな声で先生に耳打ちした。机の下、彼女の手握られているのは一万円札が数枚。バレない様に彼のポケットに差し込もうとしている所だった。6人の食事としてはかなりの高額。これでも足りないということはまず起こり得ないだろう。寧ろ一枚だけでもお釣りが帰ってくるはずだ。

だが、彼はそれを受け取らず、そつとノノミの側に押し戻した。

「先生？」

「大丈夫だよ、ありがとう。この程度の出費で痛むような浅い懐じゃないさ」

そう言つて、彼は微笑む。大人として年下の少女からお金を受け取るのは色々と負けであり、彼にもそれなりにプライドは存在するのだ。

いつだつて生徒の為の先生でありたい——その誓いはこういつた日常生活でこそ果たされるべきであろう。

生徒の笑顔が先生の幸せだ。こうやって食事を共にする楽しさこそが先生の何よりの報酬である。支払う金額以上に価値のある輝くものをもらっているから、と彼は笑う。

「——ああ、本当に楽しいよ」

万感の思いが込められた言葉。それが聞こえたワカモは——
——そつと彼の手に自身の手を重ねて、握った。

空に映る

「いやあー！ ゴチでしたー、先生！」

「ご馳走様でした」

「うん。お陰様でお腹いっぱい」

先生が6人分の会計を済ませた頃には、既に太陽は地平線に沈んでいた。茜色から藍色に変わり始めた空の下、食事によって少々膨らんだお腹を摩ってホシノは先生にお礼を言う。シロコもホシノと同じ程度に膨らんだ腹部を満足そうに撫でる。

ノノミとアヤネは2人より食べる量は少なかった為、ボディラインに大きな変化はない。だが、彼女達は先生と共に食事をできた事に大きな充足感を覚えていた。

律儀にも6人を出入り口まで見送りに来たセリカは顔を真っ赤にして、忌々しそうに顔を歪める。その後、気丈に睨みつけて。

「早く出てって！ 二度と来ないで！ 仕事の邪魔だから！」

「あはは……セリカちゃん、また明日ね……」

「ホント嫌い！ 皆死んじゃえー！」

「あはは、元氣そうで何よりだねえ」

そう言つて笑うホシノの表情は心底楽しそうだ。悪戯が成功したような、思惑が上手くいったような。

先生はセリカの方を向いて——ふわり、と笑う。まるで天使の羽が落ちた様なそれを浮かべて。

「また来るね」

「もう来るなー！」

そう吐き捨てたセリカは引き戸を勢いよく閉めて、この傍迷惑な客達をシャットアウトした。最後まで怒っていたセリカを思い——

——少し揶揄いすぎたかな、と先生は反省する。

「随分と嫌われてしまったよ」

「んー、そうでもないと思うよ？ ただ、心が追いついていないだけ。それにあの言葉は全部照れ隠しだし……頑張ってる姿を見られるの

が恥ずかしいんだ」

優しい目で語るホシノ。後輩を心の底から慈しんでいる事がよく分かる、彼女らしい瞳と声音は夜空になりかけた空に響いた。

よく似ていると思った。セリカとホシノは性質の一部が酷似している。努力を見られたくない所、多くを抱え込む所、責任を重く受け止めている所。セリカがホシノの背を見続けてきた事——
それがよく分かる類似点。

この事を言うと、きつとホシノは照れながら笑うんだろうな——
——そう思った先生はくすり、と笑って。

「ああ、分かっているさ」

彼の返答に満足したのか、ホシノはいつもの弛んだ笑みを浮かべて

——「ねえ」とワンテンポ置いて話題を切り替えた。

「先生。ずっと気になってたんだけどさ」

ホシノは金銀妖目で、彼の隣に陣取っているワカモを見た。視線に気づいたワカモもまた、仮面に隠された煌びやかな金眼でホシノを見る。交差する視線はあまり友好的とは言えない温度。銃こそ抜かないものの、込められた敵意は弾丸の代わりになり得る。

ワカモは自身を鋭い視線で射抜いている彼女が『暁のホルス』だと気づいていた。アビドスにまだ残っているとは思わなかったが——

——随分丸くなった。墮落した、と言えるほど。だが、それは表面だけで皮一枚剥がせば冷徹な少女が覗くだろう。

彼は「ああ、紹介してなかったね」と言って、ワカモの目を見る。こくり、と彼女が頷いたのを確認して——先生は紹介を始めた。

「彼女はワカモ。狐坂ワカモ。私の大切な生徒だよ」

——そして先生と秘密を共有している現状唯一の生徒。
更に、彼の計画とその真意まで知っているのだ。間違はなくキヴオトスの中で最も彼を深く知る人物であると言える。彼女に及ぶのは聖園ミカ、空崎ヒナ程度であろう。

アヤネはその名前を聞いて、少し考えるような素振りをする。何処かで聞いたことがある名前だと思ったのだろう。脳内のライブラリ

を検索し——ヒットした。そして、サツと引く血の気。彼女は愕然とした表情で、先生の隣にいる少女を見た。

「狐坂ワカモ……!? まさか、災——」

「それ以上はよして下さいな。この方の前で、あまり物騒な名前を呼ばないで頂きたいですわ」

牙を隠し、冷えた温度の言葉で釘を刺す。彼の面前であるため撃つ真似はしない。そんな事をすれば、彼が悲しんでしまうから。その脅しが効いたのか、アヤネは黙って首肯し——ワカモは微笑んだ。聞き分けのいい人は嫌いじゃない。

「ワカモはシャーレ所属予定の生徒で、こうして私の側で護衛とかやってくれているんだ。今日は彼女と会う用事があったから、午後は席を外していたんだよ」

便利屋との面会を終えた彼はワカモと落ち合ったのだ。数日振りの再会をワカモは心待ちにしている、彼もまた同様に会える事を喜んだ。お互いの近況報告を行いながらシャーレへ向かい……医療キットを取りに行った。

全ては、全能の一端と対峙する運命にあるため。コートの内ポケットに数本汎用性に優れた薬剤を忍ばせているが、彼は足りないと判断した。彼女達と共に前線上に立って命を張るには。

「狐坂ワカモですわ。アビドスの皆様の事は、先生から伺っております」

それ以上の自己紹介は不要、と言わんばかりにワカモは口を噤む。彼女は先生以外に多くを語るつもりはないのだろう。彼女が此処へ来た目的は、アビドスの生徒と友達になるためではないのだから。

「まあ、よろしくね」

「ええ……」

互いに『妙な真似をしたら撃ち抜いてやる』と思つて簡易的な挨拶を交わす。銃口を喉元に突きつけ合っている様な最悪の雰囲気。

先生はこの段階でワカモとアビドスを引き合わせた事に後悔した。最低でもワカモの指名手配が解除されたと公になるまでは——

——彼女の存在を伏せるべきであった。

だが、もう後の祭りだ。せめて此処から更に状況が悪化しない様にしなければならぬ。ワカモに殺意を収めるようにアイコンタクトしつつ、彼は「そういえば」と切り出した。

「今日はこれでお開きかい？」

「ん、ま、そうだね。ご飯も食べたし、今日はもう帰ろっか？ おじさんも眠くなってきたし」

ホシノは可愛らしい欠伸をして、目尻に浮かんだ小粒の涙を指で拭う。ワカモに続いてホシノが矛を収めてくれた事により、場の殺意が和らいだ。先生はそつと胸を撫で下ろす。

尚、先生はホシノが一日何時間寝ているのか気になったが、またの機会に聞こうと思った。今聞いても適当にはぐらかされるだろうか。

「ん、じゃあ私は先生を送ってく」

「は？ 私がいるので必要ありませんが？」

「私も一緒にしますね！」

「ご一緒しないでくださいますか？」

涼しい顔で先生を見るシロコ。楽しそうな顔のノノミ。彼女達を忌々しそうに見つめるワカモ。一度取まった筈の火種が割とくだらない理由で再燃し、戦場になりかけているのを見て先生は。

「……きれいなそらだなあ」

「先生!？」

現実逃避をした。

▼
「お疲れ様でしたー！」

何時もの制服姿に着替えたセリカは頭を下げて、挨拶をして店を出る。アルバイトを終えた時間は午後10時を過ぎた頃。帰路の街灯は疎らであり見通しは良いといえない。人通りは全くなく、シャツターがされた店舗が点在しているだけ。

春といえど夜は冷え込む。確実に気温は一桁だろう。制服だけで

はさすがに寒く、アウターを持ってくればよかったとセリカは後悔した。

「はあ……やっと終わった。目まぐるしい一日だったわ」

誰の耳にも届くことはない眩きは疲労に塗れていた。1週間という時間はバイト先に慣れるには短く、セリカ自身が自覚できていない負担になっている。環境が変化したことによるストレス。特に、学校生活での変化は彼女が望まない変化であり、タイミングも急であった。

「皆で来るなんて……騒がしいったらありやしない。人が働いているのに、先生先生ってチャホヤしちゃって。ホント迷惑。なんなのアレ。先生だつて流されっぱなしで……」

バイトの愚痴を言いながら足早に進む。先生をチャホヤするアビドスの面々にも、それに流されっぱなしの先生にも苛立ちを覚えている。今日なんて見るからにヤバそうな着物の生徒を連れていたのに、何故あそこまで信頼しているのだろうか。

「……ふざけないで。私がそう簡単に認めると思ったら大間違いなんだから」

虚空をキツと睨みつけて、宣言する。

そう、まだ認めない。認められない。まだ、認められるような段階まで……心が追い付いていないのだ。

それから彼女は大きな溜息を吐いて、再び自宅に向けて歩を進めた。

「……」

それを見つめる、影2つ。

「あいつか？」

「そうです。アビドス対策委員会のメンバー、黒見セリカ」

フルフェイスのヘルメットに学校指定の制服という奇妙ないでたちをした彼女達は、つい先日アビドス対策委員会が撃退したカタカタヘルメット団の一員。

「準備はいいか？ 次のブロックで捕獲するぞ」

アビドスの夜闇の中で、マンハント人狩りが始まろうとしていた。

「…………ふう…………」

溜まった疲れを吐き出すように息を吐くと、セリカは足を止めた。過疎化が進んでいるアビドスは郊外から少し離れるだけで廃墟が点在するゴーストタウンに切り替わる。セリカが佇んでいるこの通りもゴーストタウンの一部で、砂漠化の煽りを受けて無人になっていた。聞こえる音は虫の鳴き声と砂が流れる音だけで、人々の生活音は皆無。世界から取り残されたような街をセリカは眺めていた。

「…………そういえば、この辺も随分人がいなくなつたなあ。前はここま
でじゃなかつたのに」

テナントビル、店舗、民家、マンション。数年前までこの場所で人々が生活を営んでいた証。その残滓を砂漠が飲み込み喰らっていく。人は天に勝てない、そんな当たり前の話。

「治安も悪くなつたみたいだし…………」

ビルの看板等にはスプレー缶で落書きが施されている。縄張りの主張なのか、自己顕示欲によるものなのかは分からない。セリカは不良の生息には詳しくないのだ。

「このままじゃ駄目。私達が、私が頑張らないと…………そして、学校を立て直さない…………」

この惨状の原因は天災に加えて、アビドスの力が弱まったことが挙げられる。如何に神秘を持つキヴオトスの生徒であつても砂漠そのものはどうしようもない。だから、学校に力を取り戻させて散り散りになったアビドスの生徒達を学校に呼び戻せば——また、この場所が活気に溢れると信じている。

「取り敢えずバイト代が入ったら利息の返済に充てて——」
「おい」

不意に、声を掛けられた。

声の主を視認するため慌てて振り向こうとして——
——高速で飛来する弾丸で撃たれた。

「……ッ！」

痛みで蹲るセリカ。使用された弾丸は対物ライフルなどに使用される。50BMG弾。不意打ちを食らい、膝を突きながらも——視線に込められた戦意は燃えている。

「カタカタ、ヘルメット団……！」

咄嗟に銃を引き抜き、安全装置を外したセリカは銃口を眼前の敵に向ける。そのままトリガーを引こうとするが——接近していた1人がセリカの手を蹴り、銃を弾き飛ばした。唯一の攻撃手段を失った彼女は頭を掴まれて、地面に勢いよく叩きつけられる。口に広がる鉄の味。

最悪、とセリカは心の中で吐き捨てた。

「黒見セリカだな」

「……だったら何よ。あれだけボコボコにされて、まだこの辺りをうるついでてるの？　もしかして馬鹿？」

「……」

ヘルメット団は何も答えない。セリカを押さえつける力が僅かに強くなった程度で、それ以外の変化はない。

セリカは視線を必死になって動かして、状況理解に努める。先ほど彼女を撃ち抜いた狙撃手の姿は当然見えない。彼女の後方には8人の気配。そして……闇夜に鈍く光る鋼鉄の兵器が見えた。

それはFlak41改。88mmの対空砲。用意している、という事は使う気だったのだろう。こんな場所で砲撃するつもりだったなんて正気の沙汰じゃない。

狙撃手を含めて最低でも11人、それに加えて対空砲。あまりの過剰戦力に絶句していたセリカは、眼前の不良を睨みつける。

「何が目的なの」

「お前が知る必要はない……落とせ」

その号令に従い、セリカを組み伏せていた不良は彼女の顔にスプレーを噴射する。咄嗟に目を閉じ、呼吸を止めたが僅かに吸い込んでしまったようにヘイローが点滅する。

——不味い、意識が……。

スプレーの中身が空になった頃、そこには倒れ伏したセリカがいた。ヘイローが消えているため意識はない。呼吸に伴い僅かに上下するだけで、それ以外の動きの一切を見せない。

「続けますか？」

「いや、生かさなければ意味がない。この程度でいいだろう。車に乗せろ。ランデブーポイントへ——」

「少し待ってほしいな」

まるで友人に声を掛かるような声音が、不良達の背から響いた。靴底がひび割れたコンクリートを叩く音が闇夜に反響して、不良達は息を呑む。

脅威はない。殺意はない。悪意はない。敵意はない。凡ゆるマイナス感情が皆無なのが逆に恐ろしかった。

連邦生徒会を示す純白のコートと施された青い刺繍、腕章。中に着ているスーツは一部の隙も無い黒一色。瞳は蒼穹色。発光するような青は闇夜によく映えている。

「こんばんわ、良い夜だね」

先生はヘルメット団の生徒達に微笑んだ。

対峙

闇の中から現れた先生は、不気味なほど穏やかな微笑を携えていた。細められた瞳から覗く青の燐光が夜の空気に尾を引き、残像のように見える。

人の身から放たれているとは思えないプレッシャー。圧倒的とすら言える覇者の気質。身体能力の強弱や武力の有無といった次元ではない、異質なもの。

その空気に？まれないように、ヘルメット団は気を奮い立たせて口を開く。すぐ後ろで仲間達が黒見セリカをトラックに詰め込んでいる事を確認しながら。

「私達に何の用だ」

「うーん、君達に用はないかな」

「……シャーレの先生だろうに、随分薄情だな。黒見セリカの奪還が目的ではないのか？」

「ああ、心配せずとも奪還そとはきつちりと果たすよ」

先生は「私はアビドス対策委員会の顧問だからね」と言って分かりやすく肩を竦めた。

そして、彼の隣に音もなく降り立った狐面の少女は狐坂ワカモ。銃剣を肩に担ぎ、仮面の奥からは憎悪にも似た感情が渦巻いている。

「セリカの奪還は確かに最重要だ。私も今すぐ助けたいのは山々だけど……我慢するしかない」

そう言った先生のすぐ隣、セリカを乗せたトラックが走り去った。舞い上がる砂塵が月光に煌めく。残されたのは先生とワカモ、不良1人と――後ろに控えている何か。

先生とワカモならばこの場でトラックを破壊して中のセリカを助け出すことは充分可能だ。不良程度ならばワカモの戦闘能力と先生の指揮が合わされば無傷で叩き潰せる。だが、彼らはそれを選択せずにトラックを見送った。

その理由は、今も不良達の後ろで微動だにしない――セリ

カがヘルメット団と誤認した存在達。万が一これを取り逃がした場合、アビドスは詰むと判断した。

「一応聞こうか……君達とアレを引き合わせたのは誰だ？」

先生は不良達の更に向こう側の存在に指さして問うが返答はない。だが、彼は構わず言葉を紡ぐ。

「カイザー理事長か。それとも黒服か。はたまたマエストロ本人か。まあ、誰だっついていいか。本題はそこじゃない」

彼は言葉を区切って、眼前の2人を見つめる。ヘルメットの奥に隠された感情は窺い知れない。

「聖歌隊……恐らく、グレゴリオ。だけど未完成品だ。廃棄予定だった何かの複製に、擬似偽典のネウマ譜を無理矢理インストールした失敗作。戯れの域を出ない、遊びの副産物。

君達に渡したのも恐らく実験だろう。不完全な状態で、どれだけの効果を期待できるか……それを確かめる為の」

憐れみの讃歌。

聖母マリアへの祈り。

神を褒め称える言葉。

この3つの祈りで構成されるグレゴリオ聖歌。本来ならば攻撃性は皆無なのだが——マエストロに手を加えられた聖歌隊は、歌を呪詛に変換している。

それは祈りの言葉を全て反転させた上で発動する、主への信仰が無い者を呪殺する聖歌。聴覚を防ごうが無関係なく聞こえる音色は魂で捉える死の旋律であり、防ぐ術がほぼ全く無い精神汚濁。仮に使用された場合、千単位で死者が出るであろう災害にも等しい兵器だ。

ただ、これは未完成品であるため、そこまでの効能はないだろう。精々、最後まで聞いた者の精神を木っ端微塵に破壊する程度。主の権能に直接アクセスし、その一部を振るう本来のカタチから考えると大幅に弱体化していると言える。

だが、もし仮に先生が居ない所でアビドスの面々が接敵した場合は

——明確な脅威になり得る。

「未完成品……」

「そう、未完成の失敗作だ。仮に完成状態で聖歌を歌われた場合、君達のポケットにある遮音装置は意味を成さない。歌を聞かないように工夫するだけで呪いの対象から外れる内はガラクタでしかないさ」

彼は「だけど」と言って——懐からタブレットを取り出す。「ガラクタと言えど放置するわけにはいかない。増殖されても面倒だ。この場で全部破壊する」

その刹那、ヘルメット団の所有する電子機器全てが沈黙した。それについて驚愕する間もなく、周囲一帯の街灯の光が途絶える。星と月の明かりしか光源がない闇の中、先生の声だけがやけに響く。

「聖歌隊を分散させていたのは君達の判断かい？ それとも、君達にこの作戦を提供した黒幕かい？」

「ッ！ 聖歌隊^{コーラス}——」

「遅いですわ」

闇夜に乗じて接近していたワカモの容赦ない一撃はヘルメット団の意識を容赦なく刈り取った。

先生は倒れ伏したヘルメット団の方へ向かい、ポケットの遮音装置を取り出して——気絶した少女に装着した。これで戦闘中に彼女が起きても大丈夫だろう。

「聖歌は私側でシャットアウトする。だから——」

「ええ。あの不愉快な作品を叩き潰してきますわ」

ワカモは聖歌隊を見つめる。彼と接続されているため、闇の中でも視界は良好だ。耳障りな歌も聞こえない。聖歌隊の壊し方も殺し方も心得ている。

先程——先生と共に此処に来る前に戦い、潰してきた聖歌隊は7人、この8人を加えて合計15人。

シツテムの箱の感知範囲であるアビドス全域で捉えた聖歌隊の人数と一致する。

「では——貴方達の仮初の生に幕を下ろしましょう」

黒い着物が夜空に舞った。



8人の聖歌隊を一方的に蹂躪する姿は、正に災厄の狐と呼ぶに相応しいものだった。個人ではなく災害と呼称した方が納得できる暴力の嵐は蟻を踏み潰すように敵を壊していく。

まるで踊っているようだった。和服を揺らし、銃撃音を奏でながら舞う姿は残虐性よりも美しさが目立つ。破壊の中に美がある様は正にワカモという少女性をよく表していて、目を逸らせない危険な熱を感じてしまう。

ワカモが戦闘とも呼べない蹂躪を行っている傍ら、先生は倒れた少女を安全な場所に運び————現在地を中心とした半径500m圏内に立ち入り禁止令を敷いていた。時刻は遅く、周囲もゴーストタウンのため人が入ってくる可能性は限りなく低いのだが————念には念を入れておく。

そのままタブレットを起動させ、マップ上のマーカーを撫でる。黒見セリカの現在地。リンク状態のため、各種バイタルも全て手に取るように分かる。

「まだ、意識は戻ってないか……まあ、こんなものを使われてはね……」

先生は呼吸を僅かに荒くして、右脇腹————セリカが狙撃銃で撃ち抜かれた場所に手を当てる。

システムで接続されている時に起こる、生徒の触覚のフィードバック。傷を生まず、ただ神経に直接痛みだけを与えてくる作用。

セリカはキヴオトスの生徒であるため狙撃銃で撃ち抜かれたとしても『痛い』で済んでいるが、彼は脆弱な人の身だ。

彼は現在進行形で、文字通り全身が千切れ絶命するような激痛をその身体で受けている。

「……っ……」

呻き声を1つ出して、先生は鞆の中から市販の鎮痛剤を取り出して患部に注射する。即効性はあるが、効果時間は短い。オーバードーズをしてもセリカ奪還までは持たないだろう。

そう思っていた先生の隣に、湿っぽい音と共に何か落下した。白

と赤のローブを纏い、虚な瞳で上空を見つめている。ワカモが破壊した聖歌隊だ。よく見ると下半身は存在せず、右腕は根本から吹き飛んでいる。全機能が停止していることは誰の目から見ても明らかだった。

「丁度良かった。聖歌隊の組成を調べさせてもらおうよ、マエストロ」

この先も聖歌隊と対峙する場面は必ずあるだろう。その時の戦闘を有利に運ぶために――彼は聖歌隊の神秘を暴こうとした。

「素体は、ユスティナ聖徒会。ネウマ譜はやはり偽典を擬似的に再現した粗末なものか。聖歌の作用方は――」

作成者のマエストロからすればあり得ないくらいに粗雑な作品。恐らく取引材料として嫌々作ったのだろう。

取引先は恐らくベアトリーチェ。彼女が黒服に性能テストの依頼をし、カイザー理事長を経由して不良の手に渡った――こんな流れだろう。

想定外の収穫はあったが、概ね予定通り。あとはワカモが全滅させるまで周囲の警戒を怠らないように――そう思っていた刹那。

「――ッ！」

視界が赤熱した。先生の視界ではない。共有しているワカモの視界が。彼女が狙われたのだ。ぞくり、と首筋に死神の手を当てられる感覚。

そこからの判断は早かった。

「接続解除ッ！」

ワカモに向いていた攻撃の矛先を無理やり自分に向けた上で、接続解除を宣言。彼の言葉と共に生徒達とのリンクが切れる。瞳の青が戻る。湿っぽい音、何かが潰れ破裂する音。涙とは異なる粘性のある液体が流れる。

アロナの悲鳴が脳内に反響し――その声によって先生は意識を繋ぎ止めた。

片膝を突き、荒い呼吸を繰り返す。赤く、紅く点滅する視界。激痛。右眼から大量の血が溢れて、視界と瞳を緋色に染める。

脳が沸騰する。大脳皮質が焼け焦げる。内側から切り崩される自己意識。

システムの演算に介入された。誰に？ ゲマトリアに決まってる。過度な情報を脳に直接流し、オーバーヒートを強制的に起こさせた。生徒の脳を焼き切る目的で。

だが、先生が身代わりとなったため、生徒へのダメージはない。間に合ってよかった、心からそう思う。ワカモもセリカも無事だ。

自身の脳の損傷は不明。右眼は恐らく失明には至ってないだろう。致命傷には程遠い。

「貴方様ッ！」

血を吐く様なワカモの悲鳴。それに応えるように彼もまた叫ぶ。

「私は大丈夫だッ！ それよりも、今は——！」

目元の赤を拭い、眼前の敵を見据える。派手に血を流したが、血管が幾つか破裂したただけの様で損傷は軽微。奥の手たる医療キットを使うまでもない。

「失せなさいッ！」

ワカモの怒号と共に放たれた一閃。それは神速で最後の聖歌隊の首を吹き飛ばし一瞬で機能停止に至らせた。

だが、ワカモは勝利を碌に確認もせず銃を放り投げて先生に駆け寄る。苦悶の表情を浮かべている彼は彼女が近づいた途端に優しい笑みを繕って。

「お、疲れ……様……ありがとう……」

「そんな事よりも、早く手当をッ！」

滲んだ涙を隠す事すら忘れて、先生のバッグの中からミネラルウォーター、コットン、細胞活性ナノマシン溶液を取り出す。

ワカモは膝立ちの彼の体勢を処置しやすいように変更。彼の頭を自身の膝の上に乗せる——所謂膝枕の姿勢。こんなシチュエーションでなければ本当に嬉しかったのに、とワカモは内心歯噛みする。

ペットボトルの蓋を開けて、患部に水を流していく。透明な水が血によって赤く濁り、肌を伝って地面に落ちる。赤が洗い流されて、ワ

カモが愛した彼の瞳の色が次第に戻っていった。

先生は左目を動かして、ワカモを見る。視界に飛び込んできたのは血で汚れた彼女の綺麗な和服。

「ワカモ、服が——」

「構いません。貴方様の方がずっと大事ですわ」

涙で滲んだ瞳。泣き顔を隠すように必死で取り繕った笑顔。

——また、こんな顔をさせてしまった。

自己嫌悪の念は募るばかりだ。何度繰り返しても、だれか皆を泣かせてしまう。

泣きそうなワカモの顔にそっと手を伸ばして、頬に触れる。存在を確かめるような手付き。彼女は彼の手を震えながら掴む。まだ暖かい。命の鼓動を鳴らしている。

「ごめんね」

胸が張り裂けそうな悲しみの音色を伴った声は、ワカモの耳に確かに届いた。

「君の、所為じゃないんだ」

回避不可能の攻撃であった。予測不可能のアプローチであった。先生もアロナもワカモも油断していたわけではない。ただ、相手が上手だっただけ。

だから、ワカモが自分自身を責める必要はない。寧ろ彼女はとても頑張ってくれた。先生もワカモに対する感謝はあれど、責めるつもりなんて欠片もない。

——ただ、それでワカモが自分を許せるかと言われれば、それは否だ。

今回も、ずっと前も——彼が傷つく姿を眺めることしかできなかつた。最早呪いだ。流れる血を何度も見てきてしまった。手当だつて何度も行つたから慣れている。

——それだけ、彼は傷を負い続けてきた。彼よりもずっと強い生徒じぶんがいるのにも関わらず。

ワカモの瞳から零れた涙が彼に伝う。その温度はとても冷たかつた。



「ありがとう、ワカモ」

「いえ……貴方様を守れず……」

「そんなこと言わないで。ワカモはずっと守ってくれたよ。君が君を許せなくても、君にずっと感謝しているから。それだけは、忘れないで」

そう言つて微笑む先生の右目には医療用の包帯が施されていた。

誰かに心配をかける事を極端に嫌う彼は、一目で『何かがあった』と勘付かれてしまう包帯処置には難色を示していたが、ワカモが説き伏せて着用させるに至った。

「それで、貴方様は——」

「ああ、勿論救出に行くよ。途中でリンクを切ってしまったから位置情報の更新はできてないけど……通ったルートから何処に行くかは簡単に割り出せる」

先生はタブレットを操作している。アビドスの面々に送るメールの文を書いているのだ。そんな彼の袖口をワカモはしなやかな指で掴んで、嘆願する。

「行かないでください、とは申しません。ですがせめて、傷が癒えてから……」

「……でも、そうすると——きつとセリカは不安になってしまふ。手が届く誰かを助けずに見過ごす事なんて、私には出来ない」
彼はタブレットを仕舞い、両手でワカモの手を包み込む。それから、しっかりと彼女の瞳を見て。

「ワカモの気持ちは嬉しい。嘘じゃない、本心だよ。でも、私は——
——セリカを助けに行く」

彼の宣言に、ワカモは端正な顔を歪めた。止められなかった。止まらなかった。例え誰が止めても、言葉を尽くしても——彼は決して意見を曲げないだろう。自傷行為のような、命と身を削る優しさに心が苦しくなる。

「……分かりました。ですが、約束してください。貴方様の護衛に私を置く事と、システムを使わない事を」

「……ああ、必ず守るよ」

裾が赤くなったシャーレのコートが夜風に靡いた。

暗がりからの逃避

時刻は午後11時前。セリカがカタカタヘルメット団に拉致されてから約40分が経過した。

先生とワカモはアビドス高等学校の正門前に佇んでいた。街灯は殆どなく、光源として頼りになるのは空から降り注ぐ明かりのみ。冷たい夜風が吹き抜ける此処は、彼が対策委員会の面々との待ち合わせに指定した場所。

先生はタブレットを見つめていた。ディスプレイに映るのはアビドスの或る一画。中型トラックが砂漠を走る映像。それを、ぼうっと眺めている。

「——来ましたわ」

ワカモの静かな、だが聞き取りやすい声に釣られて先生は顔を上げる。包帯を隠すように下した前髪に鬱陶しいと思っていると——

——夜闇の中から4人分の足音が響いた。ホシノ、シロコ、ノノミ、アヤネのもの。アビドス高等学校正門前を目指して全力で走っている彼女たちの視界に、白のコートと和服が映った。

「先生ッ！」

「こんばんわ。こんな夜遅くに呼び出してごめんね」

「気にしないでください。あんな文面を貰ったら居ても立っても居られないですよ」

「そう言ってくれて嬉しいよ……じゃあ、本題に入ろう」

先生は光が当たらない場所にいるため、表情の変化は分からないが——それでも、彼が今真剣な表情をしている事は直感できる。変質する雰囲気。硬化した空気にアビドスの少女の顔も強張った。

「本日22時過ぎ、セリカがカタカタヘルメット団に拉致された」

確定事項として告げられた情報に4人の少女達が息を呑んだ。彼は緊急時に冗談を口にする人ではない。これははれつきとした事実であり、現実であると改めて突き付けられた。

「先生はなんで分かったの？」

「アビドスに厄介な物が持ち込まれてね。それを処分するためにワカモと動いていたら、ヘルメット団の子達と会って……そこから聞き出した」

聞き出した訳でなく実際に攫う現場を見た、というのが真実であるが……それを指摘する者はいない。

「嘘かもしれない、と思つて念のため確認したら——この通り」
フラッシュ

彼はタブレットを操作し、画面表示を切り替える。新たに映したのは地図アプリ。差し出した画面を食い入るように見つめる生徒達。移動する赤いマークがやけに目立っていた。

「ここは……アビドスの端……ですよね？」

周囲一体が砂漠化が進行し、数年間人の手が全く入っていない場所。記憶を頼りに情報を言葉にしたノノミの疑問に彼は「ああ」と肯定して。

「そして、セリカの現在地でもある」

「ッ！……信憑性は？」

「高い。セリカの誘拐に使用されたトラックのナンバーと、ドローンで追跡中のトラックのナンバーが一致している。加えて、私の方で確認したセリカの現在地もここを示した」

そう言つて、先生は再びタブレットを操作する。今度は白黒の監視カメラの映像と、彼のドローンに搭載されているリアルタイムカメラ。確かにナンバーが一致している。

「プライバシーの侵害も甚だしいから、私の権限を使用した生徒の現在地表示機能はできれば使いたくなかつただけど……どうしても、確認しなければならぬ事項だった。その結果、普通じゃないポイントが表示された」

「セリカちゃんがかこんな場所に自分から足を運ぶわけがありません……」

アヤネの言葉に、シロコが唇を噛む。許せないのだろう。闇に紛れてセリカを攫つた卑怯な手段が。正面から戦うことを諦め、人質を使う恥知らずな所業が。そして、その怒りはシロコだけのものではない。ホシノも、ノノミも、アヤネも怒りを抱いていた。

「それに、セリカちゃんがいるこのエリア……以前危険要素の分析をした際にカタカタヘルメット団の主力が集まっていると確認できた場所です。住民も退去済みで、治安も悪く……不良が拠点を構えるにはうってつけです」

「……なるほどねー、帰宅途中のセリカちゃんを拉致して、自分たちのアジトにご案内——って訳か」

「前回の大攻勢で失敗したから、今度は人質で……って事？」

「詳しい意図は不明。交渉するためかもしれないし、戦力を削ぐ目的も考えられる……だけど、何方にせよ私がやるべき事は変わらない。最優先事項はセリカの安全の確保だ」

先生はタブレットを操作した直後、アビドスの面々の端末に一件の通知が来た。内容は——救出作戦概要。

「セリカを助けに行きたい。だから——協力してほしい」

暗がりから見える先生の眼差し。本気の熱量が灯った瞳に、シロコが頷く。ノノミとアヤネ、ホシノも釣られて頷き——ワカモは言わずもがな。この場にいる全員の了承を得た。

「ん、勿論。寧ろ私達がお願いする立場」

「はい！全面協力です☆」

仲間を助ける戦い、それに向けて皆が戦意を滾らせている中——

——ホシノは冷静だった。違和感を覚えていた。何かがおかしい、何度か見た彼とは決定的に異なる部分がある。その感じた不自然さを言語化し、先生にぶつける。

「ねえ、先生さ。なんで顔の右側を隠してるの？」

ホシノの疑問に、先生は微かに歪めた。やはり気付かれたか、と思っ

「……私が暈した『厄介なもの』を聞かないんだね」

「勿論『厄介なもの』ってのも気になるけど……おじさんは先生の事の方が気になる。ね、前髪上げて、見せて？」

静寂。1秒が途方もなく長く感じる無言の空気。ホシノのオッドアイと先生の左眼が交錯する。

それを切り裂いたのは先生の溜息であり、観念したように口を開

く。そして、ゆつくりと暗闇から光が当たる場所へとその足を踏み出した。

「分かったよ……全く、鋭いなあ」

悪戯がばれた様な口調で、苦笑を浮かべながら彼は前髪を上げた。

「——ッ——」

僅かに赤が滲む包帯は、血が完全に止まり切っていない証拠。月明かりに照らされた顔色も悪い。血が足りていないのだろうか。よく見ると、シャーレの制服に血痕が点在している。

ホシノは自分の想定より深い傷に歯噛みした。

「先生、目……」

「大丈夫だよ。失明はしていない。血管の幾つかが破裂しただけで、見た目よりはずっと軽傷さ。救出作戦に支障は……あるにはあるけど、大した事じゃない」

そういう問題じゃないです——そう叫ばなかった自分をノミは褒めてやりたかった。常識的に考えて、眼球というデリケートな部位を負傷して大丈夫な訳ないだろう。まず間違いなく彼が行くべき場所は医療機関であり、戦場ではない。

だが、そんな事は彼の隣にいるワカモが一番分かっているはずだ。先生が救出作戦を行おうとした時、きつと彼女は止めただろう。しかし、彼は彼女の反対を押し切つてここに立っている。その意味が分からないノミではなかったから——こうして、口を噤んだ。

今、自分達のやるべき事は一刻も早くセリカを救出する事だ。彼を病院に叩き込むのはその後。彼は自分の傷を押しまでセリカを、アビドスを優先してくれたのだ。

その善意を、踏み躪りたくない。

「支障はあるんだね、先生」

シロコの問いにワカモが「ええ」と答える。そして、先生にアイコンタクト。彼は頷く。『話していいよ』と。

「量子波送受信機構の使用を禁止させていただきました。なので、貴方達は先生のサポートは無線越しでしか受けられません。勿論、私は先生のお側で護衛をするため、貴方達と共に戦いません。そこはご留意

を」

条件が呑めないならこの場で撃ち殺してやる——ワカモは暗にそう言っていた。言葉に込められた莫大な殺意。カタカタヘルメット団が可愛く思える、圧倒的な存在感と単純明快な暴力。

場を満たしていた彼女の殺意は、彼が「ワカモ」と名前を呼ぶと霧散した。軽くなる空気、消えるプレッシャー。首筋に迫っていた魔手が下ろされる。

先生は上げていた前髪を下ろし、包帯をまた隠して。

「……ワカモが言ってくれた通りオルタナを介したサポートはできないけど、無線とドローンは変わらず使えるからアシストは任せて」

「……ん、色々と言いたい事はあるけど、全部終わってからにする」

「そうですね。私も先生に言いたい小言が山のように増えました」

「セリカちゃんを連れ戻したらお説教ですよ☆」

シロコ、アヤネ、ノノミが口々に言う。どれも耳が痛い内容であり、先生を思っているからこそ発せられるもの。

「……お手柔らかに」

「ん、それは無理じゃないかなあ」

「手厳しいなあ」

ホシノの容赦ない追い討ちに、先生は分かりやすく肩を落とした。セリカも必ず怒るため、これで最低でも5人の説教が確定してしまった。

だが、逃げる事はしない。潔く受け入れるべきだろう。

「では、今から5分後に出発しよう。それまでに準備を済ませて、また此処に集合ね」

「了解！」

彼の声に頼もしい返事を返し、シロコ、ノノミ、アヤネの3人は各々準備のため校内に入って行った。校門前に残されたのはホシノ、ワカモ、先生のみ。

「ホシノは大丈夫なの？」

「私はもう装備は持ってるから、あとは出発するだけ」

ホシノはそう言って、シールドとショットガンを持ち上げる。確か

にフル装備だ。弾薬等も準備済みで、いつでも戦地に赴けるような格好。

「そっか……私も包帯だけ替えておこうかな」

「私がやりましょうか？」

「包帯くらい自分で巻けるよ。ワカモの手を煩わせるまでもないさ」

彼はそう言っ、校内に入っていく。この場に残されたのはワカモとホシノのみ。

共通項があまり無い2人の間に作られた拮抗。それを崩したのはホシノの疑問だった。

「ねえ、先生は何を背負ってるの？」

ずっと、気になっていた事。彼の真実の一端、深淵に足を踏み入れようと——ホシノは決めた。

嘘偽りを許さない色を帯びた彼女に、ワカモは僅かに頭上の狐耳を動かして。

「——驚きました。貴方が、私に聞くなんて……ええ、ですが、お答えできません」

「理由は？」

「貴方が知っても如何しようもないからです。貴方だけではありません。他の方もそうです。私も例外ではありません。このキヴォトスで、あの方の抱えているものを解決できる存在は無いのです」

「如何しようもないなんて……」

ワカモは狐面を外し——金眼でホシノを見つめる。黄金を溶かしたような妖しい輝きは月夜によく映えていて。

「それだけ、あの方が背負っているものが重いという事です。軽くする事を選べたはずなのに、あの方は背負い続ける茨の道を選んでいきます。それが責務だと思っ、ご自身を許さなかった……」

「一緒に背負う道だっである筈なのに」

「あの方にとって私達は守るべき存在であつても、痛みを分かち合う存在ではありません。ホシノさん、貴方が思っているよりも——

——あの方と生徒達わたくしの溝はずつと深いのです」

ワカモは「故に」と言っ、目を伏せる。虹彩に映る表情は有り余

るほどの悲しみ。愛する人の苦しみを取り除けない自身に対する不甲斐なさ。

「だけど、だけど——それでも、何もしないのは諦めと同義だから。」

「私にできる事は、最後まであの方の味方でいることだけです」
「……」

何があるうと、誰が敵になろうと——自分だけは必ず側にいる。それがワカモの原初の誓い。世界が移ろっても変わらないと契った、己の戒律。いつだって磨り減る事だらけの彼に、いつだって笑っていてほしいから。

「無駄話もこの程度にしましょう。もうすぐあの方が戻ってきます」
「……最後に一つだけ、質問」

装着しようとした仮面を下ろし、前に踏み出していた足を止める。まだあるのか、と言わんばかりにワカモは後ろを向いた。

「——先生は味方？」
「当たり前です。あの方は何があっても生徒の味方です」

そう、彼は生徒の味方だ。彼が敵になった事は一度もない。彼が好んで力を振るった事は一度もない。そもそも、彼は根本から暴力が似合わないのだ。

彼の真意を理解できず、彼の敵を選んだのは——生徒達わたくしだった。

話は終わりだ、と言わんばかりにワカモは仮面をつける。既に彼女の中でホシノとの会話は終了しており、その意識は——別のものに向けられている。この会話を盗み聞きしている者達へ。

「盗聴はあまり良い趣味とは言えませんよ?」

和服から拳銃を抜き、校門へ向ける。トリガーを引く真似はしない。だが、その脅しは聞いたよう——校門の影から3人が出てきた。シロコ、ノノミ、アヤネ。

「ん、気になったし仕方ない」

「ですね」

「あはは……」

アヤネだけが申し訳なさそうな表情を浮かべて、シロコは涼やかな表情、ノノミは楽しそうな表情だ。2／3が反省していない現状にワカモは忌々しそうに鼻を鳴らす。

だが彼女の不機嫌そうな空気も一瞬で、此方に向かって走ってくる先生を見ると途端に雰囲気が柔らかくなった。

先生も帰還し、3人も戻ってきた。計6名、作戦メンバーは勢揃い。「全員、準備はいい？」

ホシノは周囲を見渡す。銃を構える3人と無言で頷く先生。ワカモは空を妖艶に見つめている。

全員、気合十分。ホシノは握りしめた小さな拳を空に向けて振り上げて。

「アビドス対策委員会——出撃！」

少女を救う戦いが、始まった。

うたかたの

「……ん……？」

大きな振動によつて、セリカは目を覚ました。

周囲は暗黒に閉ざされている。周囲の状況は何も分からない。分かるのは此処が自分の知る場所ではない事程度。頬と掌に伝わる冷たい温度、6方向を壁で囲まれた簡易的な牢獄と、一寸先すら定かではない暗闇は、目覚めたばかりのセリカを不安にさせるには充分なものだった。

「……、何処……」

まずは自身の置かれた状態を知るのが先決だ。心細いが、いつまでも蹲っているわけにはいかない。そう思い、立ちあがろうとして――

「ぐ、う……」

右脇腹を鈍痛が駆け巡った。それに伴い、鮮明になる意識と記憶。

――そうだ。柴関のバイト帰りに、ヘルメット団の連中に待ち伏せされて。それからライフルで撃ち抜かれて……ガスで眠らされて……。

「――ッ！」

全てを思い出したセリカは両目を見開き、立ちあがろうとするが失敗する。原因を探ろうと視線を下に向けると、鈍色の輝きが目に入った。ワイヤロープ。金属製の縄で両手足が固く縛られていた。ナイフで切断することすら難しそうな太さを前に、解こうとするだけ無駄だと悟り体を振る。

「これ、トラックの荷台よね……アイツら、私を何処へ……」

地面に伏せていた状態から仰向けへ。視界が広くなり、見えなかったものが見えてくる。床に散乱しているロープとボロボロの布、数発の弾丸。銃は見当たらなかった。

トラックの揺れが酷い。乱暴な運転に文句の一つも言いたくなる。硬い床に体を何度か打ちつけられながらも、セリカは壁の亀裂――

——陽の光が差し込む場所へ向かう。

太陽が照らしているという事は、既に夜が明けている事を指す。襲撃を受けた時刻は昨日の22時過ぎ。正確な時間は不明だが、日の出の時刻から逆算すると7時間から8時間は経過していると考えた方がいいだろう。

銃弾が貫通した事により出来たと思われる穴に目を当て、外を覗く。セリカの視界に飛び込んできたのは見慣れない光景だった。

「砂漠と——」

視界いっぱい広がる砂漠。埋もれた建築物。風化した民家。

そして——

「線路?」

それが、セリカが『見慣れない』と思つた原因であつた。所々砂漠に埋もれ、既に機能しなくなった列車のレールを見た途端——
——セリカの顔が青褪めた。

「線路って……まさか此処、アビドスの郊外の砂漠!？」

アビドス自治区はキヴオトスの中でも有数の広さだ。現在は砂漠に埋もれ見る影もないが、過去には地域も賑わいを見せ、オアシスで開かれる祭りには他の自治区からも訪れる人がいたほどだった。

そういった事情もあり、広大な土地に住む住民のため、或いは訪れる人のために移動手段として鉄道が引かれていたのだ。だが、砂漠化の進行による利用者の減少、または線路そのものが砂に埋もれた事による運行停止が相次ぎ、現在まで生きている路線はごく僅か。動いている線もまだ住民が残っている住宅街に集中している。

故に——利用されなくなつて久しい砂漠に埋もれたレールはアビドスの端の象徴であつた。アビドス高等学校はおろか、対策委員会全員の活動範囲から大きく離れているだろう。

その真実を認識した瞬間、セリカの体に入っていた力が急激に抜けてしまった。

「ぞ、そんな……これじゃどこにも連絡が取れない……もし脱出できたとしても、対策委員会の皆にどうやって報せれば……」

セリカは力無く、そう呟いた。近場に銃がないのは確認済み。もし

仮にあったとしてもこの状態では触れない。バッグもない。スマホも没収されている。そもそも、両手足を縛られた現状では身を振る程度しかできない。自力での脱出は困難であると断言する他なかった。セリカにできる事はない。助けを呼ぶことも、抗うことも。このままトラックで運ばれて、それから――。

「……………ッ」

思わず下唇を噛む。俯いた顔を上げられない。良い考えが浮かばない。明るい未来を思い描けない。

「……………このままどこかに埋められちゃうのかな。誰にも気づかれないように……………」

吐き出した弱音。現実味に溢れた言葉は誰にも聞かれることなく消えてゆく。

真正面から戦わず、一人一人闇夜に紛れて消す――戦術としてはとても理に適っている。いくら戦闘が強くてもアビドス対策委員会は5人の集団であり、セリカにやった襲撃を5回繰り返すだけで終わってしまう。

「連絡も途絶えて……………私も他の子達みたいに、街を去ったって思われるんだろうな……………」

いつだって別れは突然だった。昨日まで一緒に学校へ通っていた友人が何も言わずに街からいなくなってしまう体験をセリカは何度も重ねてきた。連絡しようとしても繋がらず、家に行っても蛻の殻。

何も言わずに学校から去った友人達に思うところはあるにはある。お別れの挨拶をできなかったのは寂しかったし、無言は悲しかったが――
何処かで元気になっているならそれでよかった。

だが、自分がその様になるのは――我慢ならない。

「裏切ったって、思われるかな……………」

じわじわと蝕むように学校から消えていく生徒達。蜃気楼のように街から去る住人達。別れと呼べない別れを繰り返し、幾たび現実を突きつけられて尚諦めず学校に残ったのが――対策委員会の5名。

苦楽を共にし、逆境に抗ってきた仲間達に――嫌われる。

罵られる。軽蔑される。疎まれる。冷めた視線で、裏切り者と言われ
る――。

「誤解されたまま、皆に会えないまま死ぬなんて……嫌だッ！」

それだけは嫌だ、と――セリカは叫んだ。折れかけていた
心に再び熱が灯り、手足の拘束を解こうと必死になって力を込めて引
き千切ろうと奮起する。

しかし、いくら力を入れても千切れてくれる気配は皆無だった。摩
擦で生まれた熱で手首の皮膚が赤くなりヒリつくだけ。ヘイローを
持つ少女達を拘束するために作られた金属縄は微動だにせず、セリカ
の体から自由を奪い続けている。

「そんなの……ヤダよ……」

再び力を入れて縛鎖を千切ろうと、枷を壊そうとするが結果は同
じ。酷薄な現実がセリカを嘲笑うように暗闇の中、鎮座している。

「う……うぐう……」

視界が滲む。涙が流れそうになる。現実には打ちのめされそうで、好
転しそうにない未来に潰されそうだった。

しかし、まだ泣くには早いだろう――そう思つて、ぎゅつ
と涙を堪える。無力でも、無駄でも、足掻かない理由にはならない。
奇跡は起きるものではなく掴むものだと思じているから――
――諦めない。

全ては、またあの文芸室で皆と笑い合う為に――！

一度で駄目なら二度、二度で駄目なら百でも千でも。思い通りにな
んてさせない、必ず此処から脱出してみせる。そう思つて再び心を奮
い立たせ、体に力を込めていたセリカだったが――刹那、巨
大な爆発音と振動がセリカを襲った。

「う、うわあああッ！」

まるで荷台ごとシェイクした様に揺れる車内。セリカはその振動
に体を預ける他なく、打ちどころが悪くならない様に最低限の方向転
換だけを心掛ける。床や壁に体をぶつけ、ようやく衝撃が止んだと
思つて目を開けたら――そこは暗闇ではなく、砂塵舞う大
地。

「カハッ、ケホッ……ケホッ……何なのよ、もう……！」

突然と言う他ない変遷。セリカを閉じ込めていた鋼鉄の牢獄はひしゃげ、外へ放り出された。あまりにも突然の出来事で、何が起きたのか脳が処理しきれずキョロキョロと辺りを見渡しているところ——
——聞き覚えのあるローター音と、見覚えのあるカラーのドロ——ン。

『セリカちゃん発見！ 生存確認しました！』

「あつ、アヤネちゃん!？」

「こちらも確認した。半泣きで拘束されてるセリカ発見!」

聞き覚えしかない、今一番聞きたかった人達の声が聞こえた。姿が見えた。助けが来たのだ。

「なにー!? うちの可愛いセリカちゃんが泣いてただと! そんなに寂しかったの? ママが悪かったわ、ごめんねー!」

「う、うわああ!!? う、うるさいっ! な、泣いてなんか!」

「嘘! この目でしっかり見た!」

「泣かないでください、セリカちゃん! 私たちがその涙を拭いて差し上げますから!」

「あーもう! うるさいってば! 違うったら違うの! 黙れーッ!」

続々と集まる見知った顔達。セリカの姿を見た途端に心底安心した様な表情を浮かべた彼女達。心配して此処まで来てくれた事実にとただ心が温かくなる。どうしようもなく嬉しくなる。

「いやー、元気そうでよかった。さ、あとはその拘束を外しちゃおう。シロコちゃん、ナイフ持ってる?」

「持ってるけど……流石にこの太さのワイヤロープは」

無理——そう続くはずだった言葉は、音もなく降り立ったワカモに遮られた。

彼女の登場にシロコとホシノの顔が強張る。急速に下がった空気にセリカも不安そうな顔を浮かべるが、ワカモはどこ吹く風で銃剣を構えた。鋒を向けた先は——
——地に伏せたセリカ。

「……ア、アンタ……」

「動かないでくださいな」

光、二閃。ワカモが銃剣を振るい、セリカを縛っていたワイヤロープを切断した。勿論、彼女には傷一つ付けずに。

それに瞠目したのは他ならぬセリカであった。どう見てもサブウエポンに過ぎない、銃身下部に取り付けられた刀剣であの太さの金属縄を切断するなんて——一体どれほどの技量が有れば可能な業なのだろうか。

自由になった手足に呆然としているセリカと、ワカモの一挙一動を監視していたアビドスの面々。そんな彼女達にワカモは背を向ける。

ワカモの居るべき場所は先生の隣で、その役割は護衛だ。だが、先生が『セリカの縛を解いてきてほしい』とワカモに願ったから——

——彼女は先行し、ここに来た。そして、その願いも無事に果たしたのだ。これ以上この場にいる理由はない。

昨夜の一件から彼の元を離れることがストレスになっていたワカモは、一刻も早く彼の側に待るために足を進めようとしたが——

——セリカの「あの」という声に一瞬歩みを止め、振り返った。

少し赤くなつた目を携え、セリカは仮面の少女を真つ直ぐ見据えて。

「ありがとう……」

「礼には及びませんわ。では、あとはお任せします」

ワカモは感情の読み取れない声で告げ、去って行った。彼女の在るべき場所、彼の元へ。

アビドスの面々はその姿を何とも言えない表情で見送り——

——そして、インカムを装着。銃を構えて戦闘態勢へ。そんな時に、声が響いた。

『セリカ』

先生の声だった。落ち着いた、でも何処か心配を滲ませる声音。3文字の名前を心底愛おしそうに呼ぶ彼の姿が脳裏に鮮明に浮かびそうだった。

「な、何よ……」

『無事でよかった』

無事を喜ぶ言葉に、咄嗟に返す言葉が浮かばなくて。

「うん……」

何に対する領きかも分からない、そんな声しか出せなかった。だがそれでも彼は満足してくれた様で、通信越しに小さな笑い声を零していた。

その少し緩んだ空気を引き締める様にシロコは「まだ油断は禁物」と言っ

「戦術サポートシステムで車両は制圧したけど、まだここは敵のど真ん中だから」

「だねー。人質を乗せた車両が破壊されたって知ったら、敵さん怒り狂って攻撃してくるよ」

『前方にカタカタヘルメット団の兵力、多数確認！ 更に巨大な銃火器も確認しました！ 徐々に包囲網を構築しています！』

アヤネの通信に車の影から顔を覗かせると、続々と集まってくるヘイローの影。ヘルメットの姿。相手も襲撃を考慮し、こうして対応できる様に兵力を配置していたようだ。

だが――。

『包囲網、と言えは聞こえはいいけど何点か穴がある。形成されても脱出できるけど、可能なら潰した方がいい。今端末に位置情報を送ったから、そこを一点突破で行こう』

数多の戦場を血みどろになりながら歩いてきた先生を相手に、それは悪手だった。統率が取れていない。連携が取れていない。この包囲網も現場指揮官が急造したものだろう。故に、探せば探すほど穴が見えてくる。

先生には勝利に至る道が、全員が無事に逃走できるルートが幾つも浮かんでいた。

だが、セリカには一つ懸念点があった。彼女が襲撃を受けた時、使用こそされなかったが持ち込まれていた対空砲――Flak 41改良型。対地有効射程14000mの高射砲。

そして、その装備はこの戦場でも健在だ。存在感のある88mmは10kmほど先から此方側を狙っている。明確な脅威と言う他ない

射程距離と威力。

無事に脱出するならば、あの兵器の破壊は必須条件だ。

「ん、ノノミのリトルで壊せる?」

「背面、もしくは側面なら壊せますね。正面は時間がかかり過ぎちゃいます」

「ノノミちゃんが釘付けになるなら、実質3人……」

先生が提示したプランに従い、形成されかけている包囲網を食い破る。その後、敵を蹴散らしながらノノミをFlak41改の元まで送り届け、彼女が破壊している間は3人で不良の軍勢の相手をしなければならぬ。

状況は不利——セリカはそう思っていたが、側にいるホシノはどうやら違う様で。彼女は大胆不敵な笑みを浮かべて、通信機の向こう側へ言葉を届ける。

「でも、何とかなる。そうでしょ? 先生」

ホシノの信頼に、先生は『ああ』と力強い肯定を返して。

『Flakは私達の方で対処するよ』

その言葉が聞こえた瞬間、Flak41改が爆発した。

「……………は?」

漏れ出た声音は誰のものか分からないが、全員の総意である事は疑いようがなかった。何せ、彼が言ったそばから脅威が粉碎されたのだ。笑ってしまうほど明確に、明瞭に、木っ端微塵に。

起きた出来事は単純だ。ワカモが先生の元に戻るついでに破壊した。先生にとって脅威だと判断したから壊した。

言葉にするとたったこれだけで説明できる事。だが、説明はできても理解は難しく、先生と共にいるアヤネを含めたアビドスの面々は勿論、カタカタヘルメット団すら何が起きたのか分からないだろう。

『これで遠距離からの砲撃は気にしなくても良くなった。カタカタヘルメット団の子達は突然の出来事に混乱中、結果として私がポイントした穴は更に大きくなった』

マップを見ると、素人目でも分かるほど明らかに穴があった。これなら突破するのは充分可能だろう。

新たに表示されたマーカーはアヤネ達との合流ポイント。ここに到着すればアビドスの勝ちだ。

「チャンスだねー、皆、準備は？」

「いつでも！」

ホシノの声に答え、皆が愛銃を構える。戦意は充分。脅威だった対空砲も破壊済み。敵の数こそ多いが実際に接敵するのはそこまで多くないだろう。

アビドスの皆と先生の力があれば――必ず勝てる。

「それじゃ――先生？」

ホシノが先生に語りかける。

それに応じる様に、彼は声を上げて。

『ああ。全員揃って、無事に帰ろう――行くよ、アビドス！』

無垢の罰

カタカタヘルメット団の包囲網を突破し、奇襲を仕掛けてきた別動隊を全て撃退し、再編成された本隊を蹴散らし——全員、大きな怪我もなく無事に学校まで帰還することができた。

最終的に倒したヘルメット団の団員は3桁に上るだろう。両手で数えられない回数接敵した上、相手は一步も引かなかったのだ。アビドスの面々の戦意と集中力よりも先に持つてきた弾薬の方が底を突きそうな勢いの軍勢は本拠点が近かった故なのか、それとも別の理由があるのか。

太陽が僅かに西に傾いた時間帯、アビドス高等学校の車庫。弾雨に晒されたことにより銃創塗れになった車両から最初に出てきたのは先の戦闘で前衛を務めた4名だった。それに続く形でアヤネが降り、最後に先生とワカモが降車した。

「うへ〜……おじさんもうクタクタだよ〜」

「ん、気持ちは分かるけどちゃんと歩いて」

「ホント、しつこかったわね……アイツ等」

「ですが、もう追ってきていないようですね☆」

「そうですね、私が確認できる距離に敵影はありません……先生はどうですか?」

銃撃にさらされた結果、半ばスクラップと化した車を見ていた先生はアヤネの言葉を受けてタブレットを操作して——微笑みを浮かべながら。

「半径20km圏内にはいないから、もう戦闘終了だね。お疲れ様、皆」

彼がそう言うと、アビドスの皆はやり切ったような笑みを浮かべる。だが、その笑みにも疲れが滲んでいた。ほぼ丸1日中戦場にいたのだ。無理はないだろう。

彼女達は早めに休ませてあげないと——彼はそう思いつつ、ずっと自分を守ってくれたワカモに視線を向けて。

「ワカモもありがとう」

「いえ、貴方様のためならば……このワカモはどのような時でも」

そう言つて優雅に微笑むワカモには疲れの色が見えないが――

――彼女をよく知る先生は疲労が溜まっている事が即座に分かつた。彼女は聖歌隊、カタカタヘルメット団と連戦に次ぐ連戦で、戦闘時間はアビドスの面々よりも更に長い。彼女も早く休ませるべきだろう。

彼がそう考えていると、ふと誰かに見られているような感覚を覚えた。心配の色を帯びた視線はセリカから向けられていて、おずおずとした様子で彼の顔――正確には、彼の右眼に巻き付いている包帯を指差した。

「……聞いてなかったけど、大丈夫なの……？」

「これ？ ああ、大丈夫だよ。幾つか血管が破裂しただけ。そろそろ修復も終わってるかな……」

先生はそう言つて、右眼に巻きつけられた包帯を解いていく。それを皆は見守り、眺めている。

そして全て解き終わると、彼は閉じられていた右眼をゆっくりと開いた。血の赤はどこにもない。瞳孔の収縮に支障はない。視界は良好。完治まではいかなくとも、日常生活に支障がないレベルまで治療が済んでいる。

規定量を超えて使用すると過剰回復により細胞がネクロシスを引き起こすデメリットこそあるものの、ナノデバイスは非常に優秀だ。頼り過ぎるのは良くないが、いざという時の保険、命を張るとき
の切り札には申し分ない。

「うん、問題ない」

「問題しかありませんよ」

「それについては全面的に同意しますわ」

自身の器官の経過観察を適極まる一言で終えた彼に鋭い言葉が突き刺さる。早く病院に行け、と言葉ではなく視線で訴えかけられている。その無言の圧力に、彼は苦笑いを返して。

「とは言つても、ナノデバイスが殆ど治療してくれたからね……今更

医療機関に掛かっても冷やかしと思われるだけだよ。バイタルもメンタルも正常値、私は健康体そのものだ」

彼は矢継ぎ早に言い訳じみた、だが歴とした真実を並べて、「それよりも」と言って生徒達を見た。

「私は皆の方が心配だよ。疲れてるだろう？ 部室に戻ったら先にシャワーを浴びてきて。私はその間に食事を作っているからさ」

「いえ、そんな……」

「好意には甘えるものだよ。それに、私は今回は殆どお荷物同然だったんだ。これくらいはさせてほしいな」

そう言って、彼は再びタブレットに視線を落とす。先日アビドスに持ち込んだレトルト食品、缶詰、冷凍食品、カップ麺をソートした表を見て頭の中で食事のメニューを考える。保存食という都合上、少々栄養が偏ってしまうが……1日ならいいだろう。果物の缶詰を使ってフルーツポンチでも作れば、不足した栄養価もある程度は補えるはずだ。

「へえ、先生って料理できるんだねえ」

「ある程度はね。でも、今回は出来合いの物を組み合わせるだけだから凝った料理じゃないよ」

ゲヘナ学園の給食部のフウカやジュリのようにには出来なくとも、先生とてそれなりのものは作れる。彼女達と共に4000人を捌くために必死になってフライパンを振ったのは良い思い出であり、それ以来、2人と料理をするイベントが時折起こるようになり――

――仲を深めることができた。

特にフウカに関しては彼に料理の全てを教えてくれた師匠のような存在だ。誰かのために料理ができる楽しさを教えてくれた、大事な生徒。

――彼女と一緒に握った包丁を、度々自決の道具に使ったことは今でも後悔している。

「皆は何食べたい？ なまもの 生物以外なら、ある程度はリクエストに応えられると思うよ」

「私はご飯が食べたいです……」

「おじさんはアヤネちゃんに賛成」

「私はなんでも大丈夫ですよ☆」

「ん、じゃあご飯系の何かを用意しておくよ。電子レンジとガスコンロ、使わせてもらうね」

先生は、凧いだ笑顔を浮かべた。



シャワーを浴び、怪我の手当てを済ませ、食事を摂った彼女達は――ベッドで熟睡していた。仰向けで寝ているシロコ。横になって寝ているセリカ、ノノミ、アヤネ。枕を抱いているホシノ。

ソファに座っている先生の膝枕を堪能し幸せそうな顔で寝ているワカモ。

穏やかな寝息を立てている彼女達と反するように、先生は起きて空を眺めていた。時折、ワカモの頭を撫でながら。

どれくらいの時が経つだろうか。キヴォトスの青い、遠い空を見上げていると――布が擦れる音が聞こえた。

「……ん……う……」

ベッドシートから出てきたのはセリカだった。眠気で霞んだ瞳を数回瞬かせて、教室を見渡し――ソファに座っている先生に視線を向けた。

「おはよう、セリカ。よく眠れたかい？」

「……ん」

「そっか……」

お互い、無言。先生は皆を起こすわけにはいかないという思い。セリカは起きたばかりで頭が回っていないのだろう。ヘイローが点滅している彼女は、まだ大脳皮質が生み出した夢と現実の狭間に立っている。

だが、暫くするとヘイローの点滅も収まり、実在に固定される。半覚醒状態から覚醒状態への遷移。くるくる廻るヘイローの円環。

彼女は少し覚束ない足取りでソファに向かい――先生の

隣へ座った。近くはない、遠くもない。そんな距離感。

彼女は少し居心地が悪そうに、俯きながら——小さな声で言葉を紡ぐ。

「……あの……」

「うん」

「えっ、と……」

「ゆっくりで良いよ。セリカのペースで大丈夫だから、落ち着いて。私は何処にも行かないよ」

先生は皆を起こさないように小さな声音でそう言うと、セリカは俯いていた顔を上げて彼の顔を真っ直ぐ見た。慈しむような、穏やかな顔でワカモの頭を優しく撫でている姿こそが、彼の本質なんだなと思つて。

「ちやんと、お礼を……言つてなかつたつて、思つて……」

セリカは立ち上がつて彼の真正面に立ち——頭を下げた。

45。の最敬礼、赤い顔のまま彼女は混じり気のない感謝の言葉を送つていく。

「ありがとう、色々……」

「ああ————どういたしまして」

酷く穏やかな声で、彼はそう言った。本来ならば御礼を言われるほどの事ではない。生徒を助けるのは先生の本懐であり、存在意義そのもの。

だが————こうして真摯に御礼の言葉を紡いでいるセリカに対して、『礼は要らない』なんて言うのは不粋だろう。

「でも、この程度で認められたなんて思わないでッ。この借りは必ず返すからッ」

「ふふっ……気長に待つてるよ」

「何が可笑しいのよ……全く、もう……」

言うべき事を言えたセリカは、真っ赤な顔を隠すように音を立てずドアまで歩いて行く。照れ隠し混じりの言動、後ろから見える耳まで朱に染まっていた。

「それじゃ、私は部室に戻るからッ」

彼は部屋を出て行ったセリカを見送り————タブレットを起動した。切り替わる世界、ズレる位相。先生はアロナの世界に降り立った。

青い教室に立つ先生に————アロナはとても心配そうな表情で話しかけた。

「先生……無理をしすぎかと思います。ナノマシンも鎮痛剤も万能ではありません」

「分かっているよ。だけど、今のうちにやっておかないと最悪に備えられない。そんなに心配しなくても大丈夫だよ。休める時が来たら、ちゃんと休むさ」

「ですが……」

「ラインは見極めてるよ。それに、あんまり無茶をすると救護騎士団や救急医学部がやってきてベッドに縛り付けられかねないからね……まあ、騙し騙しやっていくよ」

救護騎士団も救急医学部も、かなりメンツが濃い。銃を撃つよりもシールドバツシュの方が強そうな騎士団のミネ、助けを求める声があればシャーレのセキュリティすら突破するセリナ、救護に1mmも関係なさそうなチェーンソーを持っているハナエ、死体以外は興味ないと公言するセナ。

彼女達のお陰で無茶や無理を押し通せる場合もあるのだが、それはそれとして自制をしておかなければ後が怖い。誰だって包帯ぐるぐる巻きのミイラじみた姿にはなりたくないのだ。

先生は苦笑いを浮かべて、近場の机に腰掛ける。俯いた顔、重力に従って垂れ下がった前髪と横髪。他の人から見えないように表情を隠す所作、アロナにはそれが時折怖く見えた。

「いつか、遠い星を掴むため。青空を突き抜けた先、誰かの笑顔に託す希望の光を見つけるまで……それまでは、精一杯虚勢を張ってみせるさ」

アロナは知っていた。彼がよく言う『先』の話……全ての危機が去った後のキヴオトスに、彼の居場所が何処にもない事を。

「嫌です……そんなの。アロナには、そんなの……耐えられません

……」

アロナの懇願にも似た小さな嗚咽。先生は困ったような笑顔を浮かべて。

「……キヴオトスに居られなくなったら、外の世界を旅するのも良いかもね。もう忘れてしまった、どこにも残っていない私の……キヴオトスに来る前の世界を探して」

彼は否定しなかった。居場所がなくなる事も、シャーレが不要となる事も。だが、暗い未来を見るよりも——全てが終わったハッピーエンドを信じていたい。

「さ、この話はこれでお終い。本題は、プロジェクト・パラダイスロストについてなんだけど……」

プロジェクト・パラダイスロスト。

失樂園の名を冠するそれは、キヴオトス全体を巻き込む前人未到にして空前絶後の横紙破り。キヴオトスの前提そのものを覆す計画は——先生たる彼と、連邦生徒会長によって考案されたものだった。

彼女が望んだこと、彼が願ったこと。そして、彼と彼女の約束。先へ、先へ、ずっとどこまでも彼女たちの物語が続いていけるように。

シリウスの光に届くようにと希った彼等が描く、彼方へ向かう巡礼の旅。

そんな夢物語を実現させるために——彼と彼女は戦っている。

定例会議

「……それでは、アビドス対策委員会の定例会議を始めます」

セリカ救出作戦から二日経った日の午後、アビドス対策委員会の部屋にて。

丸一日以上休んだことにより体力が回復し、気持ちのリセットも済んだアビドス対策委員会の彼女達は長机を囲んでいた。

これだけならいつも通りの光景だったが、今回の会議には一つイレギュラーが存在している。机を囲んでいる人数が一人多いのだ。司会と進行を務めているアヤネは、新しく増えた人物たる先生に視線を送った。

「本日は先生にもお越し頂いたので、いつもより真面目な議論ができると思いますが……」

「よろしくね」

「はい☆」

「勿論」

「何よ、いつもは不真面目みたいじゃない……」

「うへ、よろしくね、先生」

思い思いに挨拶を済ませて、定位置にリラックスした状態で座る彼女達。先生も少々脱力した状態で会議に臨もうとしていた。

欠伸を噛み殺し、仮眠を取っておけばよかったと反省。ワカモは授業の課題をやってくれているだろうか、と関係のない事ばかりが頭の中で浮かんでは消える。

「早速議題に入ります。本日は、私達にとって非常に重要な問題……『学校の負債をどう返済するか』について、具体的な方法を議論します」

その議題に、全員が息を呑んだ。ようやく、この学校に巢食う根本的な問題に手を伸ばせるのだ。アヤネの「ご意見のある方は挙手をお願いします」という言葉に真っ先に食いついたのはセリカであり、身を乗り出して勢いよく挙手する。

「はいー。はいー」

「はい、1年の黒見さん。お願いします」

「……あのさ、まず名字で呼ぶの、やめない？　ぎごちないんだけど」

「セ、セリカちゃん……でも折角の会議だし……」

「いいじゃーん、おカタ〜い感じで。それに今日は珍しく、先生もいるんだし」

「珍しくというより、初めて」

「ですよね！　なんだか委員会っぽくてイイと思います☆」

「はあ……まあ、先輩達がそう言うなら……」

最初は他人行儀な呼び方に少々難色を示したものの、ホシノ達の言葉によって微妙そうな、納得のいつていないような顔で了承する。その後、セリカは両手で机を叩いて空気を仕切り直し。

「とにかく！　対策委員会の会計担当としては、現在我が校の財政状況は破産寸前としか言いようがないわッ！　このままじゃ廃校だよ！　皆、分かってるわよね？」

「うん、まあね〜。毎月の返済額は、利息だけで788万円！　私達も頑張つて稼いではいるけど、正直利息の返済も追いつかない」

「これまで通り指名手配犯を捕まえたり、苦情を解決したり、ボラントイアをするだけじゃ限度があるわ」

現状の再確認、通常の手段では返せない金額であると分かった上で
——彼女は何か秘策があるのか、びしっと人差し指を立てた。

「このままじゃ埒が明かないって事！　何かこう、でっかく一発狙わないとー！」

「でっかく……って、例えば？」

「宝くじ？」

「違うわよッ！」

先生の入れた茶々に律儀にツッコミを入れて、セリカは鞆の中を弄る。そして目的のものを見つけたのか、不敵な笑みを浮かべる。

「これこれ！　街で配ってたチラシ！」

「これは……!？」

アヤネはそのチラシを受け取った途端、驚愕で目を見開いた。だ

が、それは良い意味ではなく、どちらかと言うと『お前マジか』という方向性であった。

「どれどれ……」

アヤネの表情変化を見たホシノも訝しむような視線の色でチラシを見て……微妙そうな表情を浮かべる。

『ゲルマニウム麦飯石ブレスレットであなたも一攫千金』……ねえ……?」

「そうっ！　これでガツポガツポ稼ごうよ！」

アヤネとホシノの何とも言えない表情とは対照的に、もう一枚のチラシを持つセリカは満面の笑顔であった。真実を告げた結果、その顔が歪むと思うと申し訳なさを感じる程に良い笑顔なのだが……言わない訳にもいかない。

「この間、街で声をかけられて説明会に連れて行ってもらったの。運気を上げるゲルマニウムブレスレットってのを売ってるんだって！」

それに、身につけるだけで運氣が上がるんだって！」

当然、ゲルマニウムにその様な効能はない。半導体という性質を利用したトランジスタやダイオード、宇宙用の太陽電池に使われてはいるが、身につけるだけで運という不明瞭な概念が変動するトンデモ元素ではないのだ。

「で、これを周りの3人に売れば……」

意気揚々と話していたセリカは、そこで漸く自分を除く全員が芳しくない表情を浮かべている事に気付いた。折角の名案なのに、と思いつながら、何か自分の説明に不備があったのではないかと思いつり問いつける。

「皆、どうしたの？」

「はい、却下〜」

「えーっ!?!　何で!?!　どうして!?!」

「セリカちゃん……それ、マルチ商法だから……」

「儲かるわけがない」

詐欺の常套手段に見事に引つ掛かったセリカに告げられる言葉。逆に何か裏があるのではないか、と疑う位に分かりやすいマルチ商法

の罠に嵌った彼女は数回瞼を瞬かせて。

「へっ?」

「そもそも、ゲルマニウムと運氣アップって関係あるのかな……こんな怪しいところで、まともなビジネスを提案してくれるはずなんてないよ……」

「そっ、そうなの? 私、2個も買っちゃったんだけど!」

「セリカちゃん、騙されちゃいましたね。可愛いです☆」

鞆から取り出したブレスレットを見せた直後にノノミから告げられた止めの一撃で、セリカは希望を踏み潰されたような顔をした。

「……!」

「全く、セリカちゃんは世間知らずだね。気を付けないと悪い大人に騙されて、人生取り返しのつかないことになっちゃうかもよ?」
「そ、そんなあ……そんな風には見えなかったのに……折角お昼抜いて貯めたお金で買ったのに……」

「悪人は善人の皮を被るものだからねえ……次は気をつけて。こつち側でも駅前マルチの勧誘があるって警告アウンスを出しておくよ」

先生はそう言って、セリカの手に握られているチラシを回収し、ブレスレットを手を取った。如何にもそれっぽく繕ったブレスレットは、本当にゲルマニウムが含まれているのかすら怪しい。どう考えても詐欺であった。それも、引つ掛かる人の方が絶滅危惧種と断言できる程の。

「セリカちゃん、お昼、一緒に食べましょう? 私がご馳走しますから」

「ぐすっ……ノノミせんばあい……」

忌まわしいブレスレットを机に放ったセリカはノノミにぐずりながら縋りついていていた。包容力に満ちた笑みと優しい手つきで頭を撫でる彼女は年不相応な母性を持っている。

アヤネはそんな二人を微妙な表情で見つめながら、咳払いを一つ。最初の案が詐欺であった事に一抹の不安を覚えながら、再び発案を促した。

「えつと……それでは、黒見さんからの意見はこの辺りで……他にご意見のある方……」

「はい！ はい！」

「えつと……はい、3年の小鳥遊委員長。ちよつと嫌な予感がしますが……」

「うむうむ、えっへん！」

2番目の発言者は対策委員会の委員長たるホシノ。彼女から真面目な案が出るはずないと思っているアヤネはジト目で見るが、当の本人は薄い胸を自信満々に張っていた。

「我が校の1番の問題は、全校生徒がここにいる数人だけって事なんだよね。生徒の数イコール学校の力。トリニティやゲヘナみたいに、生徒数を桁違いに増やせば、毎月のお金だけでもかなりの金額になるはず」

「え……そ、そうなんですか？」

思いの外常識的な滑り出しであった事にアヤネは困惑しつつ、ホシノに先を促す。もしかしたら、ちゃんとした案が出るかもしれないと思いつながら。

「そういうことー！ だからまずは生徒数を増やさないとね。まずはそこからかな。そうすれば議員も輩出できるし、連邦生徒会での発言権も与えられるはずだから……そうだよ、先生？」

「その通りだよ。生徒数が多ければ多いほど資金が集まって学校のブランド力が上がり、それが呼水となって更に志望者が募る。数が全て、と言うつもりはないけど重要なファクターであるのは事実だ」

そこで先生はいったん言葉を区切って。

「議席が獲得できればそれだけアビドスに有利な案を通しやすくなるし、コンスタントに議席を獲得し続ける事ができれば長期的な安定に繋がり、指定の席や推薦権も得られる。トリニティやゲヘナ、あとはミレニアムもこうやってマンモス校になっているんだよ」

「鋭いご指摘ですが……でもどうやって……」

結局の所、『どうやって』という言葉に行き着いてしまう。人を呼び込もうにも魅力になるものがないのだ。全校生徒はたった5人、これ

といった実績が近年にある訳でもなく、交通便も悪い。あるのは見渡す限りの砂漠と半ば定期イベントと化してしまったカタカタヘルメット団の襲撃。

冷静に考えて人が来るはずがなかった。だが、ホシノは不敵な笑みを浮かべたまま。

「簡単だよー、他校のスクールバスを拉致ればオツケー！」

「……はい!？」

「登校中のスクールバスをジャックして、うちの学校への転入学書類にハンコを押さないとバスから降りれないようにするのー。うへー。これで生徒数がグンと増えること間違いなーし！」

「それ、興味深いね」

一歩間違えれば学校間の戦争になりかねない案に食いついたのはシロコであった。スマホの画面から顔を離れた彼女の表情は真剣そのもので、冷やかし目的でないことは明らかだ。

「ターゲットはトリニティ？ それともゲヘナ？ ミレニアム？ 狙いをどこに定めるかによつて、戦略を変える必要があるかも」

「お？ ……えーつと、うーん……そうだなあ、トリニティ？ いや、ゲヘナにしようつと！」

乗り気なシロコの問いに、あまりにも適当な回答をしたホシノ。そのまま放置すれば本気で詳細な襲撃計画を企てかねないと思ったアヤネは慌てて待ったをかけた。

「ちよ、ちよつと待ってください！ そんな方法で転校とかがあってありませんか!? それに、他校の風紀委員が黙っていませんよ……」

「うへー、やっぱそうだよねー」

「やっぱそうだよねー、じゃありませんよ、ホシノ先輩……もつと真面目に会議に臨んでいただかないと……」

「——いい考えがある」

アヤネがホシノを注意している傍ら、静かに手を挙げたのはシロコであった。

「……はい、2年の砂狼シロコさん……」

アヤネはそう言つて、シロコの方を苦い顔で見やる。真面な案が出

るとは欠片も思っていない顔であった。絶対に何かとんでもない発言をするという確信、アヤネの口から溜息が漏れた。そんな疲れつたアヤネと対照的に、シロコは瞳に輝きと真剣さを灯している。

「銀行を襲うの」

「はいっ!？」

擁護不能の犯罪行為パート2であった。予想を遥かに超えるぶっ飛んだ案にアヤネの顔が驚愕一色に染まるが、シロコは得意げな顔で説明を続ける。

「確実かつ簡単な方法。ターゲットも選定済み。市街地にある第一中央銀行。金庫の位置、警備員の動線、現金輸送車の走行ルートは事前に把握しておいたから」

「さつきから一生懸命見てたのはそれですか!？」

「5分で1億は稼げる。はい、覆面も準備しておいた」

そうやって、鞆の中から取り出したのは色とりどりの覆面達。ピンク、青、緑、赤、黄色、黒の6枚。先生にも被らせるつもりであった。

アヤネの顔が露骨に引き攣る。この人、本気だ——背筋に冷や汗が伝った。

「いつの間にこんなものまで……」

「うわー、これ、シロコちゃんの手作りー?」

「わあ、見てください! レスラーみたいです!」

「いやー、いいねえ。人生一発でキメないと。ねえ、セリカちゃん?」

遊びなのか、本気なのか。ノノミは『3』と書かれた緑の覆面を、ホシノは『1』と書かれたピンクの覆面を被って騒いでいる。シロコは当然のように装着済みで、『2』と書かれた青の覆面姿になっている。先生はそんな彼女達を見て、心底楽しそうに笑っていた。

「そんなわけあるか! 却下! 却下ー!」

「そつ、そうです! 犯罪はいけません!」

「……むう」

「そんな膨れっ面してもダメなものダメです! シロコ先輩ツ!」

アヤネの有無を言わさない圧に屈したのか、渋々といった様子で覆面を外す。どんなに危機に陥っていても超えてはならない一線は存

在するのだ。銀行強盗計画を阻止できた事に安堵しつつ、溜息を一つ。案が3つも出たのに会議は全く進んでいなかった。

「はあ……みなさん、もうちよつとまともな提案をしていたただかないと……先生も笑ってないで止めてくださいよ……」

「ふふっ……ごめんごめん」

「あのー！ はい！ 次は私が！」

「はい……2年の十六夜ノノミさん。犯罪と詐欺は抜きでご意見をお願いします……」

「はい！ 犯罪でもマルチ商法でもない、とつてもクリーンかつ確実な方法があります！」

最後の発案者はノノミ。彼女こそ、と一握の希望に絶るようにアヤネは発言を促した。ノノミはその楽しそうな笑みを保ったまま、己のとつておきの案を披露する。

「アイドルです！ スクールアイドル！」

「ア、アイドル……!?!」

これまた予想外の案であったのか、アヤネは困惑の表情を浮かべている。だが、犯罪ではないため途中で止めるような真似はしない。一先ず最後まで聞くつもりであった。

「そうです！ アニメで見たんですけど、学校を復興する定番の方法はアイドルです！ 私達全員がアイドルとしてデビューすれば……」
「却下」

今日一番真面な案も、ホシノによって敢え無く却下された。些か現実味にかけるかもしれないが法に引つ掛からないクリーンな案を一考の余地すら与えられず一蹴されるとは思っていなかったのか、ノノミは意外そうにホシノを見た。

「あら……これも駄目なんですか？」

「なんで？ ホシノ先輩なら特定のマニアに大ウケしそうなのに」

「うへー、こんな貧相な体が好きとか言っちゃう輩なんて、人間としてダメっしょー。ないわー、ないない」

「決めポーズも考えておいたのに……」

ノノミはそう言って立ち上がり、全員に見える位置取りでポーズを

取った。

「水着少女団のクリスティーナでくす♣」

「何が『でくす♣』よ！ それに『水着少女団』って！ だっさい！」

「えー、徹夜で考えたのに……」

「あのう……議論が中々進まないんですけど……そろそろ結論を……」

「それは先生に任せちゃおう？」

突然話を振られた先生は、苦笑いに近しい表情を浮かべて。

「え？ ここで私かい？」

「ね、先生、これまでの意見でやるならどれがいい？」

「えっ!? これまでの意見から選ぶんですか!? も、もう少しまともな意見を出してからの方がいいのでは!？」

「大丈夫だよ。先生が選んだものなら間違いないって」

「ちよ、ちよつと待ってください！ 何でそう言い切れるんですか!？」

アヤネがストップをかけるが、時すでに遅し。決定権を押し付けられた先生の元に彼女達はずつと寄って行き、各々が望む案を提示した。

「まさかアイドルをやれなんて言わないよね？」

「アイドルで☆ お願いします♣」

「……」

アイドル以外、アイドル、無言の覆面装着。何を選んでも角が立つ三択であり、選択肢がどれもこれも酷いの一言に尽きる。だが、可愛い生徒達が一生懸命考えた案を無下にするつもりは欠片もない彼は、腕を組みながら吟味して——結論を出した。

「……この中からなら、スクールアイドルかなあ」

「ええ!? 本気ですか!？」

「犯罪行為、犯罪行為、アイドルの3択だったら、そりやアイドルを選ぶよ。これでも教育者だからね、可愛い生徒の手を犯罪で染めるわけにはいかないさ……何で水着なのかは分からないけど」

色々とツツコミ所はあるが、一番マシなのはスクールアイドルだ。他が酷すぎる、とも言う。一先ず結論を出した彼は組んでいた腕を解

き、優しい笑みを浮かべた。

そんな彼を見て、ノノミは「あ」と声を出し――名案を思
い付いたと言わんばかりの笑顔を向け、彼に提案する。

「もしよければ先生も加わりませんか？」

「却下で」

「え〜」

「え〜、じゃありません」

女子高生5人に混じる成人男性なんて普通に嫌だろう。どう繕つても絵面が酷い。それに、彼が加わった瞬間に『水着少女団』の『少女』の部分が崩壊する。色々な意味でアウトだった。

「あはははー！でも、何はともあれ決まりだね。それじゃ出発〜」

「きやあく☆ 楽しそうです！」

「ほ、ホントにこれでいいの……？」

「うへ〜、いいんじゃない？」

「計画は大胆なほどいい。でしよ、アヤネ？」

そして、不意に紙が潰される音が聞こえた。音の発生源は小さく肩を震わせているアヤネ。握りつぶされたのはセリカから受け取ったチラシ。

「い――――」

「い？」

「いい加減にして下さいッ！」

このあと全員怒られた。

黄金の中庸

悪ノリに悪ノリを重ねて收拾不可能になった場合はアヤネの怒りによって一旦リセットされ、一先ず全員が再び席に着く安定が齎された。ゲルマニウムブレスレットと覆面は各々の鞆に仕舞われ、碌な案が出なかつた議題は後日の自分達に丸投げ。折角事態が好転しているのに、とアヤネは心の中で落涙した。

「……では、次の議題に移ります」

そう——今回の定例会議の議題は1つではない。もう1件、非常に重要な議題が存在するのだ。

「カタカタヘルメット団の物資の出所についてです。先生がいらっしゃったときの戦闘、その後の奇襲作戦、セリカちゃん救出作戦……僅かな日数の間に3度も戦闘を行いました」

「そうだね、先生が来てから毎日が濃いよ」

いつもより少々長い会議が退屈なのか、それとも単純に疲れているのか眠いのか。ホシノは欠伸を噛み締めながら、机に上半身を乗せた。もう少し姿勢を良くしてください、とアヤネは内心で思いながらも突っ込んだらまた収集がつかなくなると思つて無視することにした。

「その3度の戦闘はどれも大規模でした。そして、私達は全て撃退し大きい損壊を与えることに成功していますが……相手に大きい疲弊が見られません。一度前哨基地を壊滅させているのに、その翌日にセリカちゃんを誘拐する余力があるのはどう考えてもおかしいんです。

それに加えて、先の戦闘で確認された対空砲と戦車……どちらも維持するコストが高い兵器ですが、それを複数台保有していました。練度は兎も角、学校の治安維持組織とほぼ遜色ない物資量です」

アヤネはそこでいったん言葉を区切つて。

「そこで、私は——カタカタヘルメット団の活動に第三者が関与していると考えました」

「ん……つまり、ヘルメット団にパトロンがいるってこと?」

「そうです。カタカタヘルメット団に此処を奪取するよう命令し、対価として物資等を提供する個人または組織が存在するのは間違いないかと。それに、証拠はこれだけではありません……先生、お願いします」

先生はタブレットを操作し、全員にpdfファイルを送付する。ページ数は10程であり、その全てに渡って表が記載されていた。

「先生、これは？」

「昨日、ヴェリタスとアヤネに協力してもらって纏めたデータだよ。不良達が使用していた型番の戦車がどのように市場で流通し取引されていたのかを……直近3ヶ月分。裏で行われた取引も可能な限り纏めたよ」

ユウカを通しヴェリタスに依頼を行い、集めた膨大なデータ。ミレニアム屈指のハッカー集団はブラックマーケットのセキュリティを容易く突破して見せたのだ。そのデータをアヤネと共に1日かけて吟味し、考察を行いながら文書データに纏めたものがこのファイルである。

「で、この取引の中に妙な履歴を見つけたんだ」

先生はそう言ってタブレットの画面を拡大し、それに連動していつの間にか接続していたプロジェクタースクリーンの画面が動く。

スクリーンいっぱいに表示されている取引データをアビドスの面々は食い入るように見つめて——一番最初に、不自然な点を発見したのはシロコだった。

「……これ、もしかして盪回しにされてる？」

「そうなんですか？」

「ん、だって……」

シロコはそう言って、スクリーンを指差す。

「一件前の取引で買い手だったマーケットが、次の取引で売り手に変わっている。それも、少しの期間で……先生が言っていた妙な履歴はこれ？」

「その通り。流石シロコだ」

彼がそう言うと、シロコは満足そうに「ん」と胸を張った。

「実際に流通した台数に比べて、取引の回数が不自然なほどに多いんだ。足がつかないようにやるにしても限度がある。このやり取りを斡旋した誰かさんは余程慎重なのか、それともバレたら不味い何かがあるんだらうね……例えば、この戦車が学校襲撃に使われているか」

足がつかないようにバイヤーやルートを経由すればするほどコストは嵩む。今回先生とアヤネが注目した取引は、いつそ病的と言われてしまうほど徹底的だった。バイヤーに別名義を態々使わせたり、誰も使わないレベルのルートを使用させたり……用心、と言うには行き過ぎている。

故に、何かがあると勘ぐるのは当然であった。

まず、コスト面。これだけ複雑な方法を使用しているのだ。発生するコストだけで余分に1台は戦車を買ってしまおうだろう。ただ足取りを掴ませたくないだけなら幾分か簡略化できるのにも関わらず、この方法を選択した。

相手はそのコストを度外視できるレベルの資産を保有しているのだろう。

そして、慎重なのは……この裏取引が発覚したら不味い立場にあるからであろうと推察できる。

「この問題は私達が考えているよりも、ずっと深刻かもしれません。このレベルの資産を運用できる個人はキヴオトスには存在しないため、組織による動きだと思われませんが……」

そこで、珍しくアヤネは言葉を詰まらせた。これを言ってもいいのか、という逡巡。確定ではない、妄想と呼んでも差支えないほど飛躍した考察結果をこの段階で皆に伝えることは……少々気が引けた。

「まず、この問題に関する進捗は以上です。今後は手に入れた部品の解析を進めて、詳細な流通ルートを割り出しを行います。引き続き先生と連携して進めていくので、何か進展があつたら報告しますね……先生は、何かありますか？」

アヤネの言葉に先生は「んー」と言って。

「特には無いかな。アヤネが持つ情報は私も持っているし……ああ、

そつだ。アヤネの考察、言つてみたらどうかな？」

「いえ、ですが……」

「あくまで現段階から出せる結論の一つだから、言つておいて損はないと思うよ。先入観を持たせてしまう危惧は尤もだけど……それでも、言う価値は大いにある」

先生の真摯な、優しい温度が籠つた視線と言葉に絆されたアヤネは「先生がそう言うなら……」と、自身の胸の内に留めておく筈だった考察を語り始めた。

「カタカタヘルメット団の背後の組織の詳細ですが……大企業や学校が存在すると考えています」

しん、と静まり返る室内。肌を刺すような静寂の中でアヤネは自身の考察の続きを紡ぐ。

「少し考察したんです。コストを度外視できる資産を持っていて、それでいてバレたら立場が危うくなる存在を……」

「その存在が大企業や学校だった……つてことだよねえ、アヤネちゃん？」

ホシノの言葉にアヤネは「はい」と返して。

「ですが、結局の所、『Why done it?』が分からないんです。大企業と学校、どちらが裏で手を引いていたとしても現状アビドスを狙う理由が不明瞭なので、絞り込みはできていないんですが……兎も角、背後に規模の大きい組織が存在すると考えています」

アヤネはそう言つて、考察を締めくくつた。予想以上に規模の大きい話になつたのか、ホシノと先生以外は上手く情報を呑み込めていないようだ。

取り敢えず、話さなければならぬ事は全て話し終えた。議題もこれ以上はないため、定例会議はこれにてお開き——そう思つていたアヤネを引き留めたのは「はい」の声だった。

「ホシノ先輩、どうされましたか？」

「ああ、いや、先生にちよつと聞きたいことがあつてねえ」

「私に、かい？」

自身に話が振られるとは思わなかつたのか、その目を少し驚きに染

めながら——しかし、暖かな温度でホシノを見つめる。

「先生はどつちだと思う？」

どつち、とは企業か学校か——そのどちらであるのか、という事だろう。現時点での先生の見解を聞きたいのだ。

そして、彼の意見が——ホシノが知っている真実の一端と一致しているか否かを確かめる意図も含まれている。

「どつち、か……ああ、学校ではないのは確かだよ」

先生は壁に背を預けながら、言葉を綴る。

「そこだけは断言できるとも。仮にアヤネの考察が正しい場合、提示された2択の中で解は企業の方になる」

「随分と自信満々だね、何か理由でもあるの？」

ホシノの真つ当な疑問に彼は「勿論」と言つて。

「学校が動いていた場合、私が知らない筈がないんだ。あと、この規模を動かせるとなるとゲヘナ、トリニティ、ミレニウムしか選択肢に上がらない。だけど、ゲヘナとトリニティはエデン条約締結前にそんな事をする余力はないし、ミレニウムは積極的に外部へ干渉しない。そもそも、3校ともアビドスを狙う理由が存在しない。それに、なによ——」

先生は遠くを見つめながら。

「私は先生だからね。生徒を疑う事なんて、絶対にしない。最期まで信じると誓ったんだ」

「……そっか」

先生の言葉に、ホシノは満足そうに笑つた。

——きっと大丈夫。もし自分が居なくなっても、彼がいるならアビドスは迷わない。



「……なんでまたウチに来たの」

若干呆れた様な目でそう言ったのは黒見セリカであり、その身はラーメン屋柴関の制服とエプロンに包まれていた。つまり、アビドス

の面々は数日前冷やかしに行つて怒られたのにも関わらず、性懲りもなく遊びに来たのだ。

違う点があるとすれば先生が初めからメンバーに入っている点と、ワカモがない点。それと、セリカの態度がかなり軟化している点だろう。

「いやあ、部室以外で集まれる場所なんて此処くらいでしょ？ それにお腹も減つてたし〜」

「人のバイト先を溜まり場扱いしないでよ、ホシノ先輩……」

セリカがジト目で見つめれば、ホシノは「たはは」と笑いながら箸でラーメンを掴んだ。

「はい、アヤネちゃんこつち向いて。お口拭きますよー」

「自分でできますから……」

ノノミは隣に座るアヤネを甘やかそうとして、若干空回りをしていった。先の会議で一回アヤネを怒らせてしまった事を気に病んでいるのだろう。

だが、アヤネは今現在怒っているわけではなかった。2つ目の議題はきちんと真面目に聞いてくれたため、部室の机をひっくり返すこともない。済んだ話、と割り切っている。次の定例会議できちんと真面目に案を出してくればよい——そう、思っている。

向かいの席に座る3人を微笑ましいものを見るような優しい目で見つめていた先生であったが、ふと袖を引っ張られた。白いコートを引っ張るしなやかな指の主は彼の隣に座すシロコであり、彼女はいつも通りの表情で。

「ん、先生はもつと私を見るべき」

折角隣に座つたのだからもつと構つてほしい、そんな愛らしい欲求。何をするにもストレートな表現をするシロコらしい一言。

「ふふっ……ああ、勿論」

「ん……」

先生は体を真正面から横に向け、シロコを見やすいように姿勢を変更し、シロコのオッドアイ……瞳孔の色が異なる瞳を眺めた。

妙な沈黙、妙な空気。それを生み出しているのは、大人の人に真正

面から見つめられるというキヴオトスでは貴重な経験を現在進行形でしているシロコ。どこか、恥ずかしいような。でも、やめてほしくない。甘い痺れのような、切ない感覚。

なおシロコを見つめている先生はいつも通りであり、恥じらいも何も無いフラットな心理状態である。

だが、そんな状態は長く続かない。蚊帳の外にされた3人と——
——何より、この店で働いているセリカが黙っているはずがなかった。

「ちよつと先生!?! こんな所でイチヤイチヤしないでツ！ シロコ先輩もツ！」

セリカの至極真つ当な怒りに、彼は「怒られちゃったね」と悪戯っぽく笑ってシロコから視線を外した。それに少し悲しそうな、残念そうな顔を浮かべていたことはシロコの真正面に座っていたノノミしか知らない。

顔を真つ赤にして怒るセリカに、彼は「ごめんごめん」と謝り宥めていると——不意に、入店のベルが鳴り響いた。

便利屋来訪

ランチと夕食の間、飲食店においては最も客入りが疎らになる時間帯の来訪客はこの辺りでは見ない顔の生徒であり、見慣れない制服を纏っていた。

おずおず、といった様子でドアを開けたのは紫髪の少女、伊草ハルカであり——便利屋の構成員の一人。彼女の姿を見た途端、セリカはアビドスグループが座っているテーブルから離れて来客を出迎えに行く。花が咲いたような笑顔を携えて。

「あ、あのう……」

「いらつしやいませ！ 何名様ですか？」

「……こ、ここで一番安いメニューって、お、おいくらですか？」

「一番安いのは580円の柴関ラーメンです！ 看板メニューなんです、美味しいですよ！」

「あ、ありがとうございます！」

セリカがそう言うと、ハルカは勢いよく頭を下げた。そして、ぞろぞろと店内に入る少女達。その人数はハルカを含めて4人。便利屋のメンバー勢揃いであった。

「えへへっ、やっと思つかった、600円以下のメニュー！」

「ふふふ。ほら、何事にも解決策はあるのよ。全部想定内だわ」

「そ、そうでしたか、さすが社長、なんでもご存知ですね……」

「はあ……」

嬉しそうな顔のムツキ、何故か自信満々の顔のアル、ハルカの顔も何処か嬉しそうだ。ただ、そんな3人に反するように頭の痛そうな、微妙な表情を浮かべているのはカヨコであり、溜息を吐きながら入店していた。

セリカは騒がしい便利屋の少女達に、内心『愉快な人達だな』と思しながら、笑顔で接客対応を行う。

「4名様ですか？ では、テーブル席へご案内します！」

「んーん、どうせ1杯しか頼まないし大丈夫」

「1杯だけ……？ でも……どうせならごゆっくりお席へどうぞ。今

は暇な時間なので、空いてる席も多いですし」

セリカが流し目で視界に入れた店内はかなり空いていた。テーブル席もカウンター席も使っていない箇所の方が多い。だから、例えば1杯でもゆつくりと過ごしても大丈夫——そんなセリカの親切心からの提案にムツキは嬉しそうな、人好きのする笑顔を浮べた。

「おー、親切な店員さんだね！　ありがとう、それじゃお言葉に甘えて」

ムツキは「あ」と声を出して、セリカの方へ振り返り。

「わがままのついでに、箸は4膳でよろしく。優しいバイトちゃん」

「えっ？　4膳ですか？　ま、まさか1杯を4人で分け合うつもり？」

ムツキのお願いにセリカは驚きの声を上げて——途端、ハルカが土下座でもするような勢いで頭を下げた。

「ご、ご、ごめんなさいッ。貧乏ですみません！　お金がなくてすみませんー！」

「あ、い、いや……！　その、別にそう謝らなくても……」

「いいえ！　お金がないのは首がないのも同じ！　生きる資格なんてないんです！　虫けらにも劣る存在なのです！　虫けら以下ですみません……！」

「はあ……ちよつと声デカいよ、ハルカ。周りに迷惑……」

ハルカから発せられる卑屈な謝罪の数々に、カヨコは溜息を吐きながらも宥めに行く。彼女達にとってハルカがこうなるのは日常であつた。

だが、初対面のセリカはそうではない。突然頭を下げられ、畳みかけるように浴びせられた謝罪の数々。しかも、お金がないことに対する謝罪。

お金がなくて困っているその様子がアビドスや自身の境遇と重なり、他人とは思えなくなってしまうたセリカは目を見開いて、力強く言葉を発した。

「そんな！　お金がないのは罪じゃないわよ！　胸を張って！」

「へ？　……はい!？」

「お金は天下の回りもの、ってね。そもそもまだ学生だし！　それで

も、小銭をかき集めて食べ物に来てくれたんでしょ？　そういうのが大事なのよ！」

「えー……つと……」

「もう少し待っててね。すぐ持ってくるから」

言うや否や、即座に厨房の方へ駆けていったセリカ。その瞳には使命感にも近い色が籠っていて止めるのも憚られた。

店の入り口で取り残された便利屋の少女達は嵐に見舞われたような顔をしながら、近くのテーブル席に腰を下ろした。

「……何か妙な勘違いをされてるみたいだけど？」

「まあ、私達はいつもはそんなに貧乏ってわけじゃないんだけどね？

つい最近、先生の達成報酬も貰ったし……強いて言えば、金遣いの荒いアルちゃんの所為だし」

便利屋は先生の依頼通り、カイザーからの依頼を突っぱねた。それに対する報酬は勿論支払い済みであったが……わずか数日で使い切ったのだ。過度な贅沢をしなければ便利屋全員が1年間何もせずに暮らしていけるほどの資金を。

それに加えて、アルは先生から提示された前金を受け取らなかったのだ。私のモットーに反する、と言って。成功報酬しか受け取らないと公言する彼女らしいが、中々に損な立ち回りをしているような気がする。

故に、便利屋はギリギリの生活を営んでいた。ラーメン1杯を4人で分け合わなければならぬレベルの。

「アルちゃん、じゃなくて社長でしょ？　ムツキ室長、肩書はちゃんと付けてよ」

「ん？　そもそも仕事しに来た訳じゃないじゃん？　ところで、社長のかせに社員にラーメン1杯奢れないなんて」

「ぐっ……」

「色々溜め込んだ支払いとか、装備とかを新調する為に報酬ほぼ全部使っちゃったし」

背もたれに身体を預けながらムツキはけらけら笑う。それとは対照的に、ムツキの前に座るアルの顔は苦かった。痛いところを突かれ

たのだろう。確かに、社員に夕食も奢れないような甲斐性なしな現状には思うところはあるが……それでも、余裕を携えた微笑みは崩さない。最もそれは虚勢であり、余裕ぶった顔のすぐ裏側には、所謂『アルらしい』顔が存在することは……便利屋の面々には周知の事実だった。

「ふふふ。でも、こうして実際ラーメンは口にできるわけでしょ？」

それくらい想定内よ」

「たったの1杯分じゃん。せめて4杯分のお金は確保しておこうよ……」

「ぶっちゃけ、忘れたんでしょ？　ねえ、アルちゃん。夕飯代取っておくの、忘れたんでしょ？」

「……ふふふ」

ムツキとカヨコが問いかけるものの、アルは明言せずただ微笑むばかり。どう考えても凶星であり、今の笑みはそれを隠すためのものだった。社員にカツコ悪い所を見せたくない、という年頃な少女らしいプライドは質問に対し黙秘権を行使した。

意味深に、似合わない微笑を浮かべているアルに対してカヨコは本日も度目か分からない溜息を零した。

「はあ……」

「でも、本当にあのお金を一瞬で使い切るなんてね。アルちゃん、もうちょっと計画立てたら？」

「うるさい！　じゃあ次の依頼が来て、報酬が手に入ったらすき焼きにするわ！」

ムツキの小馬鹿したような愛らしい棘とカヨコの溜息に刺されたアルは机を軽く叩きながらそう叫んだ。どう考えてもラーメン屋でする話ではないが、今回それを指摘する者はいない。隣のテーブルに座るアビドスの面々は絶賛先生をおもちゃにしている。

力強いアルの宣言に、ムツキとカヨコは目を白黒させながら顔を見合わせ——それからアルを見た。『そんな事言って後々後悔しない？』と思いながら。

一方、ハルカはアルの言う『すき焼き』なる料理が分からないよう

であり、おずおずと問いを投げかけた。

「すつ……すき焼きとはっ……!!? それは一体?!」

「大人の食べ物だね、すごく高価な……」

カヨコが代わりに答えると、ハルカは途端に目を輝かせた。

「う、うわあ……私なんか食べていいものなんでしょうか? 食べ

た後はハラキリですか……?」

「ふふふ、ウチみたいなのスゴイ会社の社員なら、それぐらいの贅沢はしないよね」

「へえ、やる気満々じゃん、アルちゃん。あれ以来、間違い電話しかかかってこないのに」

「アルちゃん、じゃなくて社長!」

「はい、お待たせいたしました! お熱いのでお気をつけて!」

4人で賑やかにしていると、セリカが注文の品たるラーメンを持つてきた。テーブルの中央に置き、伝票を端に置いた彼女は看板娘然とした笑顔を浮べた。

そして、注文した柴関ラーメン並盛は——どう考えても並盛の量ではない。大きな器に堆く盛り付けられたラーメンはフードファイターが番組の企画で注文しそうな分量であった。思わず、便利屋の4人は顔を驚愕に染め、声を上げる。

「ひえっ、何これ!! ラーメン超大盛りじゃん!」

「ぎっつと、10人前はあるね……」

「こ、これはオーダーミスなのでは? こんな食べるお金、ありませんよう……」

「いやいや、これで合ってますって。580円の柴関ラーメン並ですよね、大将?」

量に驚くムツキ、オーダーミスを疑うカヨコ、お金の心配をするハルカ。彼女達の内側に渦巻く疑念や不安といったものを払拭するようにセリカは声を上げて、笑顔で首を横に振って否定の意を表した。そして、セリカに呼ばれた大将は厨房から顔と右腕を覗かせてサムズアップ。とても良い笑顔であった。

「ああ、ちよつと手元が狂って量が増えちゃったんだ。気にしないで

くれ」

「大将もああ言ってるんだから、遠慮しないで！ それじゃ、ごゆつくりどうぞー！」

セリカはそう言っつて、厨房へ戻っていった。残されたのは推定10人前の麺に、これでもかとトッピングが盛られた柴関ラーメン。並盛という建前すら彼方に置いてきたカロリーモンスターを前に、便利屋の面々は露骨に顔を輝かせた。

「うわあ……」

「よく分かんないけど、ラッキー！ いっただきまーす！」

「……ふふふ、さすがにこれは想定外だったけど、ご厚意に甘えてありがたく頂かないとね」

「食べよっ！」

大将とセリカの好意に感謝しながら、便利屋の少女達はそれぞれ箸とレンゲ、取り皿を手元に寄せる。皿に取り分けたラーメンとスープからは暖かな湯気が立ち昇っており、鼻孔を良い香りが擦る。

シャーレの先生とカイザー。対立しているであろう2項の中心点に立つアビドスにどのような人物が所属しているのか物見遊山気分で見に来たのは良かったが、洗礼を受けるかの如く砂漠で遭難しかけた。その後、何とか住民がいる場所まで辿り着き、昼食を取ろうと思ったが金額オーバーの店しかなく。それから更に徒歩に徒歩を重ねて漸くこの店に行き着けたのだ。

そのような苦労も相まって、580円のラーメンが至高に見えてきた。アルは唾を呑み込み、熱々の麺をスープと共に一気に頬張る。

そして、その瞬間、アルの顔が驚愕で染まった。

「!!」

「お、おいしいっ！」

「なかなかイケるじゃん？ こんな辺鄙な場所なのに、このクオリティなんて」

アルに続く形で他の3人も口に運び、一様に驚きの声や表情を浮かべた。580円で食べられる食事のクオリティとは思えない美味しさに便利屋の面々が舌鼓を打っていると、ふと隣の席から声が掛かつ

た。

「でしよう、でしよう？ 美味しいでしよう？」

全員が声の方に顔を向ければ、そこには屈託のない満面の笑みを浮かべた少女が居た。通路の方に身体を向け、少し身を乗り出した彼女はとてもフレンドリーな様子で頷いている。

「あれ……？ 隣の席の……」

「うんうん、ここのラーメンは最高なんです。遠くから態々来るお客さんもいるんですよ」

「ええ、分かるわ。色んな所で色んなのを食べてきたけど、このレベルのラーメンは中々お目にかかれないもの」

アルがノノミの言葉に同意すると、その後ろからアヤネが嬉しそうな顔を覗かせた。他にもシロコとホシノも顔を覗かせており、2テーブルの間でアビドスとゲヘナの学園間交流が始まりそうになっていた。

「えへへ……私達、ここの常連なんです。他の学校の皆さんに食べていただけるなんて、なんか嬉しいですよ……」

「その制服、ゲヘナ？ 遠くから来たんだね」

「私、こういう光景を見たことがあります。一杯のラーメン、でしたっけ……」

「うへへ、それは一杯のかけそばじゃなかったっけ？」
「……」

アルとハルカ、アビドスの4人が楽しそうに話している傍ら、カヨコは無言を貫き——そつとムツキに小声で耳打ちした。

——連中の制服。

彼女達4名の胸に下げられている生徒証、太陽と正三角形の校章は紛れもなくアビドス高等学校のものであり、自身達が興味本位で見に来て、探せなかった存在達。別に協力するつもりも敵対するつもりもないが、こんな所で見つかるなんて。

——あれ、ホントだ。じゃあ、もしかして……。

そう思つて視線を奥の方に向けると——腕章が付けられた白のコートに身を包んでいる青年がいた。奥の方に座っている彼は、覗

き込まなければ視認できないだろう。

彼は2人の視線に気づくと、悪戯っぽい笑みを浮かべて人差し指を唇の前に立てた。

自身抜きで他学校との異文化コミュニケーションを楽しんでいる彼女達の邪魔をしたくない——そんな先生の心情。この状況を楽しんでいないと言えば嘘になるが、根底はそれである。だから、2人にも先生の存在は黙っていてほしいのだ。

そんな言葉として発せられていない先生の願いを受け取った彼女達は。

——先生も放置してるし、面白いから放っておこ。

——これでいいのかな……。

取り敢えず、黙っていることにした。

「うふふふっ！　いいわ、こんな所で気の合う人達に出会えるなんて。これは想定外だけど、こういう予測できない出来事こそ人生の醍醐味じゃないかしら」

とても楽しそうな笑みを浮かべるアルを尻目に、2人は目の前のラーメンを啜った。

ほどけた指先

「それじゃあ、気を付けてね！」

「お仕事、来るといいね！」

「あははっ、了解！ あなた達も学校の復興、頑張っつてね！ 私も応援しているから！ それじゃあ！」

ラーメンを食べ終え、会計を済ませて店を出たアル。心からの笑顔を浮かべながら手を振る彼女の先には、同じ笑顔を浮かべたアビドスの少女達が手を振り返している。

便利店とアビドスは会話を楽しみ、食事を共にした僅かな時間で友人になった。お互いの身の上の話や、その他諸々。アビドスは便利店を知り、便利店はアビドスを知る。先生が望んだ友人関係は瞬く間に構築された。

なお、結局アルは先生の存在に気付かなかつたため、カヨコは呆れ、ムツキは笑った。

視線の先、アビドスの少女達の背が見えなくなるまで手を振っていたアルは、満足げに笑顔を浮かべている。そして、完全に見えなくなつた後、少し寂しそうに、別れを惜しむように呟く。

「……いい人達だったわね……」

その声に答える者は居なかった。カヨコは『コイツまじか』と言わんばかりの微妙な表情を浮かべている。アル達の会計も纏めて行つてくれた彼の顔を見てないのかと。ムツキは満面の笑み、ネタばらし後のアルの表情が楽しみで仕方ないのしか言い様がないもの。

カヨコはムツキにアイコンタクト。もう頃合いだろう、と。その答えは悪戯っぽい笑み、即ち了承。カヨコはまた溜息を吐きながら、言葉をついでいく。

「社長……あの子達の制服と奥に座ってた人、気付いた？」

「えっ？ 制服？ 奥に座ってた人は私達の会計も纏めてしてくれた人よね？ 良いわよね、ああいうスマートな大人……アウトローではないけど、目指すべき大人って感じがするわ」

そう言って何処か満足げに頷くアルは本当に気付いていない様だった。お礼を言ったときに顔を見ていないのだろう。

「アビドスだよ、あの子達。社長の思い付きで今日探していた子達と一緒にいたのはシャーレの先生。私達に依頼してくれた人」

カヨコの呆れ交じりの言葉に、アルは目をぱちぱちしながら咀嚼し呑み込んでいく。

アビドス、先生……シャーレ……今日の、目的……。

そして、真実に辿り着いたアルは白目を剥いて叫んだ。

「なななな、なっ、何ですってー！？？」

「あははは、その反応ウケる〜！」

！！！！

「うるさっ……本当に気付いてなかったんだ」

「えっ、そ、それって今日私達を探していた方達ですよね……」

アルの絶叫は市街地ならば確実に近所迷惑になっていた声量であった。ハルカも気付いていなかったのか、その表情を驚きで染めている。

「う、嘘でしょ……あの子達がアビドス？ う、うう、なんて運命の悪戯……」

「何してんの、アルちゃん。これで目的は果たしたでしょ？ ほら、帰るよ」

「ちやんと『先生が与しているアビドス高等学校及び所属生徒の調査』は終えられたし、成果なしって結末にはならなかった。これ以上、私達がここに留まる理由はない」

カヨコはそう言って、「電車あるかな……」と呟きながらスマホに視線を落とす。過疎地帯ということもあり、電車の本数はかなり少ない。それこそ、この時間がラストの便ということもあり得るのだ。

公園でのテントを用いた野宿の経験はあるが、こんな砂漠地帯で野宿などしたくない。髪や肌、服が砂まみれになってしまう。顔が怖いのだの何だの言われるカヨコであるが、18歳の多感な少女。砂まみれは乙女的にNGであった。

——当初のアルの予定では『そう、貴方達が……先生の……』とアビドスの面々に意味深な事を言ってカツコつけるつもりだったの

だ。理由はなんかかつこよくてアウトローっぽいから、というアルにとってには非常に重要な、それ以外の少女達にとっては至極どうでもいい理由がある。

何はともあれ、アルの予定や計画通りとは行かないものの、無事にアビドスの面々と会え、交流を深め、その実情を把握することができた。成果としては上々だろう。

「でも、アルちゃん良かったね。カイザーの依頼受けてたら、あの子達と戦^やり合う羽目になったんだよ？ 先生の方に付いて正解じゃない？」

ムツキの言葉にアルは息を呑んだ。先生があの日に来なければ、きつとカイザーコーポレーションの依頼……アビドス高等学校襲撃を受けていたはずだ。そうなった場合、あの少女達……自由と混沌を肯定する問題児だらけの『ゲヘナ学園』の生徒だと知ってなお、優しく笑顔を向けてくれた彼女達と矛を交えなければならなかった。

善人しか形容する言葉が見当たらない少女達に、お金が無い自分達に気を遣ってラーメンを大盛りに出してくれた少女達に非情にも銃口を向け引き金を引く未来が、一歩間違えれば現実になっていた。想像するだけでも、アルの心は揺れ動いてしまう。あの人達に銃口を向けずに済んで良かったと、心から思う。

「それにしても、復興か……なんでカイザーはあの学校に拘るんだろうね」

「宝探しだよ。あの砂漠に沈んだオーパーツを見つけるのにアビドスが邪魔だった……そんな、身勝手極まる理由さ」

カヨコの疑問に答えた人物は、便利屋の真正面から現れた。春の陽のような、命の息吹を謳う口調。浮かべた微笑みは優しく、暖かい。真白いコートに身を包んだ青年は軽く手を振って。

「久しぶり……って、言うほどじゃないか」

「あ、先生だ。やつほく」

「先生!? いつからそこにいたの!？」

先生はにこやかな笑みのまま「さつき戻ってきたばかりだよ。人払いを終えて、ね」と言った。

彼の発言通り、ここは人払いが完了している。この場にいるのは先生と便利屋の少女達を除くとラーメン屋の店内にいる客と店員だけ。そして、店の中から外の音は聞こえない。

加えて、彼はアロナの能力を用いてこの場のあらゆる電子機器を一時的に機能停止に陥れた。言うなれば、電子的な空白地帯。全てのデータに残らない会合であった。

「……宝探し？ 大企業がそんなものに夢中になるなんて……」

「まあ、大事な物なんだろうね……彼等にとつては」

方舟は確かにキヴオトスの切り札になり得るだろう。だが、それを扱う彼等のスケールが小さい。視点が狭い。見戯と呼んで差支えない程度だ。支配者を気取るには器が足りていない。そも、武力と権力で敵を押し伏せる時点でもより大きな武力で叩き潰されるのは自然の摂理。新たな支配者になる手段として暴力を選択した時点で、彼等の敗北は決まっていた。

「まあ、権力ばかり手に入れた頭の足りない大人の誇大妄想だよ。そんなものは鼻で嗤ってあげるのが礼儀さ」

「随分辛辣だね。嫌いななの？」

「嫌い、というわけではないよ。手段も方法も思想も気に食わないけど、憎んでもいないし嫌ってもいない。興味がある訳でもないから……無関心、と言うのが正しいかな」

宝探し、なんて巫山戯た理由でアビドスとそこで過ごしている生徒達を狙う事には怒りを覚えるが……それまでだ。傍迷惑な特権階級への憧れに取り憑かれた唯の大企業に思考のリソースを割くほど、先生は暇じゃない。カイザーに割くくらいならば、その背後にいるゲマトリアについて思考した方がよほど建設的で価値があるだろう。

先生の吐き捨てるような発言に便利屋の面々は少し驚きながら、ハルカは「あ、あの……」と控えめに切り出した。

「せ、先生はどうして此处に……いえっ、も、勿論、悪いわけじゃないですけど……」

「そんなに卑屈にならないで。可愛い顔が台無しだよ、ほら笑顔笑顔」先生はそう言っつてハルカの近くまで歩いて行き、その頬にそつと触

れて——笑顔を作らせる。少し歪ながらもさっきの泣き
そんな、自身を責め立てるような顔よりもずっと綺麗で、ハルカらし
い顔。それを至近距離かつ真正面という特等席で見た先生は花が咲
いたような笑みを浮かべて、言う。

「うん、やっぱり君は笑顔が一番可愛いよ、ハルカ」

「……あ、うう……」

先生の殺し文句にハルカは顔を真っ赤にして俯いた。可愛いとか、
笑顔とか。そういった優しい言葉を投げかけられた経験なんてハル
カには数えるくらいしかない。しかも、こんな真正面から混じり気の
ない純粋な言葉を伝えられた経験なんて——皆無だった。
だから、どんな態度を取ればいいか、どんな言葉を伝えればいいか分
からなくて。

自身を救ってくれたアルと、唯一の居場所の便利屋。それ以外で、
自身の存在を無条件で肯定してくれる人がいるなんてハルカは思わ
なかった。自分にそんな資格なんてない、と思って俯いても彼は気を
全く悪くせずに微笑むばかり。瞳にこもる感情は溢れんばかりの慈
愛、触れる手の温度がそのまま彼の暖かさを表している。

そうやって俯きながら百面相しているハルカをただ穏やかに見て
いる先生に、アルは訝し気な視線を向けた。

「ちよつと先生？ 私の社員を口説かないでくれるかしら？」

「口説いたつもりはないんだけどなあ……」

彼はそう言っつてハルカの頬から手を放し、頭を一回撫でてからアル
達の方を見る。アルは自身の目の前で社員を口説かれたことに若干
顔を引き攣らせていて、ムツキは新しい玩具を見つけた様な表情。カ
ヨコは微妙な顔をしている。

3人はそれぞれ表情こそ異なるが、その内心にある一つの感情は共
通している。

——アレで口説いているつもりないってマジ？

この先生は思ったよりも重症かもしれない、主に生徒関係が……と
先生にとつては不名誉な、他人からみたら至極真つ当な事を思われて
いるとは露知らず、彼はハルカの疑問に答え始める。

「皆の顔を見にきたつてのが8割」

「8割がそれなんだ……」

「残りの2割は……便利屋に頼みたいことがあつてね」

先生は柔らかい表情から切り替える。冷たく、理知的で、真剣な――

――戦場に立つ、一人の戦士としての顔。

「便利屋に依頼つて形だけど、この依頼は私個人ではなくシャーレとしての物だ。だからこの依頼を君達が受託した場合、君たちは完了するまでシャーレ所属になる……とは言つても、何かが劇的に変わる訳じゃないよ。期間中に発生した費用全てがシャーレ持ちになるくらいかな?」

「シャーレとしての依頼……つまり、戦闘つてこと?」

彼は「察しが良いね、カヨコは」と言つて。

「現状だと、そうなる。私も何とかしようとしているけど……恐らく戦闘は避けられない。しかも、規模はかなり大きい」

「ふうん、どれくらいなの?」

「私側で動員しようとしているのは君達便利屋68、ゲヘナ風紀委員、C&C、セミナー、SRTのRABBIT、FOX小隊、狐坂ワカモ、アビドス対策委員会。まだ全員の賛同を得られている訳じゃないけど……取り敢えず、このくらい」

その羅列された戦力に4人は息を呑んだ。控えめに言つて過剰戦力だ。どの学校と戦争を始めるつもりなのか、と言いたくなるレベルの圧倒的な武力であるが……先生とアロナが算出した、この戦力で対峙した場合の勝率は50%前後。1/2を引き当てなければ勝てないのだ。勿論、失敗は許されない。必ず勝利しなければならない戦いだ。

加えて、此方側の切り札にして敵を殺し切れる唯一の礼装である『天命』は未完成品だ。機能面において完成版に劣る事はないが、相手の霊的装甲を貫く為の出力が不足している。そのため、礼装で貫ける段階まで、敵の装甲を削るアタッカーが必要となる。

「リスクはどうなっているのかしら?」

「高い。相手の攻撃に対する防御プロトコルは用意しているし、相手

の手札は全て分かっている。それでも勝てるか怪しいんだ」

「……勝てなかった場合は」

「私の死と戦場になるアビドス地域の滅亡は必定。最悪、キヴオトスが半壊する」

本日何度目かの驚愕。スケールが大きすぎるのだ。アビドスの滅亡？ キヴオトスの半壊？ 馬鹿げているだろう。妄想だと一蹴しそうになるが、先生の苦い表情が現実を突きつける。

それに加えて、先生の死。実際に起きてもない出来事なのに、何故だろうか。想像するだけで吐き気がする。胸を掻き窺いたくなる程の苦しみを覚える。泣き叫びたい程悲しくなる。

これまで語った話は全て本当だと————理屈ではなく、直感で理解した。

失敗したら彼は死ぬのだろう。アビドスも臨終するのだろう。もしかしたらキヴオトスは壊れてしまうのかもしれない。

その結末を覆す為に、彼は抗っている。必然だと、なるべくしてなる未来だと。だが、それでも————足掻くのだ。

故に、彼から求められたのは————世界を救う戦い。キヴオトスで最初に行われる聖戦。

アルは息を呑み、意を決して口を開く。

「……最後に質問していいかしら」

「勿論。なんでも聞いて」

先生の柔らかな笑みに背中を押されるように。

「先生は、失敗した事があるの？」

それは当然の疑問だった。だって、彼は余りにも用意周到過ぎる。声掛けも、攻撃手段も、防御手段も。何から何まで完璧過ぎる。知っている、にしては無理がある。ここまで完璧な対応は実際に対峙していないと不可能なはずだ。

そして、その対峙した結末。それは、きっと。

「……………」

アルの疑問に、先生は答えなかった。彼女の疑問に対して、沈黙を貫く————今の彼ができる解答。

肯定すれば後悔しか零れないから、否定すれば今までの歩みを無くしてしまうから。

この痛みは先生だけのものだ。この歩みは先生の旅路だ。この罰も罪も結末も——全て、先生が選んだ道。それを生徒に背負わせる事はできないから。

だから、黙したままに。残骸のような笑顔を浮かべる。

「——そう」

彼の沈黙こたえを受け取ったアルは悲しそうに目を伏せる。でも、それも一瞬で——その目にはいつも通りの輝きが宿っていた。

「私達便利屋68はシャーレの依頼を受託するわ」

「アルちゃん、本気？」

「……ッ！」

「ア、アル様の決定なら……わ、私、頑張ります」

その性急過ぎる決定にムツキとカヨコは驚いた。そして、この依頼を持ち掛けた先生でさえその表情を僅かに驚愕に染めている。

この場で参加を表明すると思っていなかったのだろう。彼としてはゆっくり考えた上で結論を出してほしかったが——こうなったアルは中々止められない。

「金さえ貰えばなんでもする、が私達のモットーよ。一度良くしてくれたクライアントがあんな風に頼み込んでいるのを無碍にするほど、私は鬼じゃないわ」

アルは「それに」と言っ

「世界を救う戦いって、すっごくアウトローじゃないかしら？」

ブラックマーケットにて

昇ったばかりの太陽が地平を照らす頃、先生は通り慣れたアビドスまでの道をバイクで走らせていたら――後ろから「先生」と呼ぶ声が聞こえた。エンジンを止め、振り返ったその先にいたのは、見慣れた制服を着たアヤネ。

「おはようございます」

「おはよう、アヤネ。随分と早いね。何処に行くのかい？」

「えっと、今日は利息を返済する日です……色々と準備があるんです。早めに登校してお金の整理もしないですし、今後の計画も見直さないとなので……」

先生は「なるほど……」と呟いて、思考を巡らせる。だが、この時点で特にできることがないと即座に思い至った彼は微笑みを浮かべて。「せっかくだし、学校まで一緒に行かない？」

そんな提案を持ち掛けた。



「お待ちせしました、変動金利等諸々適用し、利息は788万3250円です」

「えっと、ではこれで――」

「……はい、確認しました。788万3250円丁度、頂きます。全て現金でお支払い頂きました、今月は以上となります。カイザーローンとお取引頂き、毎度ありがとうございます。来月も宜しくお願いいたします」

スーツを隙なく着こなしたロボットは、顔の表情ディスプレイに笑顔のアイコンを浮かべて深々と一礼した。そのまま踵を返し、強固な守りを誇る現金輸送車へ乗り込みエンジン音を呻らせながら、砂埃を立てて去っていく。それを、アビドスの面々は苦々しい面持ちで見つめていた。

カイザーローンはアビドスが借金をしている金融企業であり、その

大本たるカイザーは何かと黒い噂が絶えない企業である。違法スレスレの取引や人身売買、その他諸々。だが、そのような噂は僻地たる此処まで届いていないのだろう。彼女達はいつも通りの手順で現金が入ったケースを従業員に手渡し、何とか今月の集金を滞りなく乗り切った。

現金輸送車が完全に視界から去った後、彼女たちは溜息を吐いて露骨に肩を落とした。

「……」

「……」

「はあ、今月も何とか乗り切ったね〜」

「……完済まであとどれくらい？」

「309年返済なので……今までの分を入れると……」

「言わなくていいわよ。正確な数字を出されると更にストレス溜まりそう……」

「だねえ〜」

月末の恒例行事である集金。この日を選び切る為に1ヶ月間バイト等を頑張ってきた彼女達であるが、集金後は基本的に愚痴を言いながらお菓子を食べる女子会になる。常に廃校の瀬戸際に立たされているアビドスの面々に溜まったストレスの発散。特にこの現状を良く思っていないセリカは不平不満を隠さずに、不貞腐れながら口を開く。

「どうせ死ぬまで完済できないんだし！ 計算しても無駄でしょ！」

「……」

「ところで、カイザーローンはなぜ現金でしか受け付けないのでしょうね？ 態々、現金輸送車まで手配して……」

ノノミの口から零れた疑問、その答えを先生は知っている。それは^{トレイサピリテイ}追跡可能性の排除だ。

紙や硬貨の価値がなくなったわけではないが、それでもキヴオトスに住まう限りは大抵端末決済とカードで済む。利便性やセキュリティの面でも見えない電子データ上のお金の方が上だ。

だが、現金にはそれらの電子決済に存在しない利点が存在する。そ

れが取引の秘匿性だ。電子決済は基本的に認証をしなければならず、取引のデータが残り続ける。何か不審な点が存在したら直ぐに追跡され、その全てを詳らかにされてしまう。

しかし、現金での遣り取りに認証は不要であり、取引データも残り難い。つまりは、追跡されないお金と取引。お前は誰だ、どんな取引をするんだ、と自己証明を要求しない現金は後ろ暗いトレードにとっても便利だ。

そして――現金輸送車というワードにシロコはハツとしたような表情を浮かべた。まるで天啓を受けた様な、なんで今まで気付かなかったんだと言わんばかりの顔。それに気付いたセリカはジト目でシロコを見つめて釘を刺す。多分止めなかったら確実にやっていただろうという妙な信頼を彼女に対して抱きながら。

「……現金輸送車」

「シロコ先輩、あの車は襲っちゃ駄目だよ」

「……うん、分かってる」

「計画もしちゃ駄目！」

「うん……」

しょんぼりとした顔のままシロコは頷く。バレなきや犯罪じゃない、と何処かの這い寄る混沌が言ったような台詞こそが彼女のスタンズだ。セリカが止めなければ、そう遠くない未来において確実にあの現金輸送車は鉄屑になっていただろう。特徴的な狼耳がぺたんと倒れている彼女を尻目に、ホシノとノノミは楽しそうに笑って。

「ま、取り敢えず先に解決するべきは、目の前の問題の方でしょ。兎に角教室に戻ろく」



「全員揃ったようなので始めます。まずは、1つの事案についてお話ししたいと思います」

アビドス対策委員会の部室。早朝の集金を終えた彼女たちはいつもの部屋のいつもの定位置に座っていた。先生は壁に背を預けてい

る。

定例会議ではなく、軽い情報共有程度の物。数分と掛からず終わられるミーティングはアヤネの声と共に開始された。

「セリカちゃんを襲ったヘルメット団の黒幕についてです」

「分かったの!?!」

弾かれたように立ち上がったセリカとは対照的に、アヤネは冷静な声で「はい」と肯定した。

「先の戦闘で手に入れた破片を分析した結果、現在は取引されていない型番だということが判明しました。生産が中止された型番を手に入れる方法は……キヴオトスではブラックマーケットしかありません」

「ブラックマーケット……とっても危ない場所じゃないですか」

「じゃあ、あの戦車はブラックマーケット産だったんだ」

ブラックマーケット——キヴオトスの中でも最大の規模を誇る、連邦生徒会に認可されていない非正規市場の1つ。表側では決して流通しない重火器や弾薬、戦車や軍事ヘリ、偽装の身分証、学生の情報売り物として買い手に提供されている場だ。更には、生物兵器や薬物、化学兵器といった危険物まで卸されている、なんて噂も流れている。他にも卒アルや古書も売っているらしいが、詳しい実態は不明だ。

連邦生徒会にとっても目の上のたん瘤となっており、早急な対処を求める声が各所で上がっている場所。それがブラックマーケットだ。どう考えても碌な場所ではないだろう。

「そうです。あそこでは中退、休学、退学……様々な理由で学校を辞めた生徒達が集団を形成していて、連邦生徒会の許可を得ていない非認可の部活も沢山活動していると聞きました」

「じゃあ、そのパーツが使われた戦車とかも……」

「はい。ブラックマーケットで組み立てられ、取引されたものだと思います。なので……今日はブラックマーケットで現地調査を行います」

あの場所に行けば、アビドスを着け狙う誰かの影を追えるかもしれ

ない。きつと大きな進展となるだろう。

アヤネの提案に異を唱える者はいなかった。全員の可決を受け取ったアヤネはリーダーたるホシノに視線を向ける。そして、彼女は不敵な笑みを浮かべて。

「よし、じゃあ決まりだね。ブラックマーケットを調べてみよう。意外な手掛かりがあるかもしれないしね。」

椅子から立ち上がり、握った小さな拳を空に突き上げてホシノはいつもの号令をかける。

「よし、それじゃあ、アビドス、しゅっぱーっ！」
「おー！」

▼
ブラックマーケット、入口。雑多な建物に囲まれ陽の光が当たりにくい此処は、文字通りキヴォトスの裏世界だ。だが、人の喧騒に満ちており活気がある。散乱する銃器と機械部品、ほのかに香る甘いエチレン、客同士の話。ゲヘナの自治区の治安を更に悪化させたような雰囲気のアビドスの面々は目を丸くしている。

剥き出しの人間性、とでも言うべき世界。響く声、聞こえる音、流れるアングラで怪しげな空気。どれもこれもアビドス自治区には存在しないものだ。

未知との会合は恐怖心を刺激する。少女達5人は自然と先生の方へ寄って行った。

「ここがブラックマーケット……」

「わあ☆すっごい賑わってますね」

「本当に。小さな市場を想像してたけど、街一つくらいの規模だなんて。連邦生徒会の手が及ばないエリアがここまで巨大化してるとは思わなかった」

シロコは辺りを物珍しそうに眺めている。実際、そうなのだろう。彼女を含めたアビドスの少女達は自治区の外に出ることは少ない。出たとしてもショッピンング等が目的のため、こういった人々の生活の裏側に根ざしている場所を見たことがないのだ。

「うへへ、普段私達はアビドスにいるからね。学区外は結構変な場所が多いんだよ」

「ホシノ先輩、ここに来たことあるの？」

「いんやー、私も初めてだね。でも、他の自治区にはへんちくりんなものが沢山あるんだって聞いてたんだ。ちよーデカい水族館もあるんだって。アクアリウムっていうの！今度行ってみたくなく。うへ、魚……お刺身……」

ホシノはそう言ってアクアリウムに思いを馳せる。煌びやかな熱帯魚や巨大魚、そして食用の魚。どうやら彼女は水槽を生け簀だと思っているようだ。

「よく分かんないけど、アクアリウムってそういうのじゃないかな……」

「なら、今度一緒に行こうか？色々片付いた後に、さ」

「えっ!? 良いの!?!」

先生がそんな提案をすると、ホシノは目を輝かせながら聞いてきた。それは年頃の少女としての顔。ようやく見せてくれた等身大の少女像に、彼は嬉しさを覚えながら「勿論」と答えて微笑んだ。

「皆さん、油断しないでください。そこは違法な武器や兵器が取引される場所です。何が起るかわからないんですよ」

「そうは言っても、先生がいるし……」

「先生がいるからこそ、です！先生は銃弾一発でも危ないんですから、本当に気をつけてください。何かあってからでは遅いですから！」

「ッ！　　そういえば、そうよね……」

先生と自分達は違う、という当たり前の事実を思い出したセリカは彼の死角になりうる方向を警戒して側に寄る。他の面々も同じように彼の傍を固めていつでも不測の事態に対応できるようにポジショニングする。

5人の少女達に守られている先生はキョロキョロと店を見渡ししながら、ポツリと呟いた。

「んー、幾つか見慣れない店が……名前を変えたのかな？　新規店、と

「いう訳じゃなさそうだ」

「先生は来たことあるの？」

「何度かね。連邦生徒会よりフットワークが軽い分、こういった所にも顔を出したりするんだ。行政官の子達をフォローするのも私の仕事さ」

そんな事を話しながらブラックマーケット内を歩いていると、唐突に聞き覚えのある音が聞こえた。乾いた炸裂音、薬莖が地面に転がる音、鼻腔をくすぐる火薬の匂い——即ち、銃声。

「ん、銃声」

シロコは銃のグリップを握り、射撃準備。既にセーフティは外されている。ぐるりと周囲を見渡すが敵はいない。少し離れた箇所の出来事だったようだが——油断はできない。

一方、ホシノはシールドを展開し、先生の盾となっていた。目を奪うような速さの防御は先生を失う恐怖心から咄嗟に生まれたもの。

「待てー！」

「う、うわああ！　まずっ、まずいですー！　っ、着いてこないでくださいー！」

「そうはいくかー！」

ふと、前方から声が聞こえた。追いかけている1人の生徒と、追いかけている2人の生徒。此処から彼女達までの距離は少々あるが、彼女達の身体能力を以てすれば即座に詰められる。故に、雑踏の隙間から——目立つ金髪の少女が見えた。纏っている制服は白。

「あれ、あの制服は……」

アヤネがそう呟いた時には、件の少女は既に目前に迫っていて——回避は不可能だった。

「わわわっ、そこどいてくださいー！」

シロコと少女が激突するが、転倒にも怪我にも至っていない。運動によって鍛えられたシロコの体幹は少女1人の体当たりを容易く受け止めたのだ。

「いたた……ご、ごめんなさいっ！」

「大丈夫……な訳ないか、追われてるみたいだし」

「そ、それが……」

少女が申し訳なきように続きを口にしようとした途端、目の前に現れたのは改造セーラー服を纏った2人の少女。如何にもスケバンという出立ちの2人は、少女を庇う様に立っているアビドスの面々に苛立ちを交えた視線を向けた。

「なんだお前らは。どけ！ アタシ達はそこのトリニティの生徒に用がある」

「あ、あうう……わ、私の方は特に用はないのですけど……」

「っ！ 思い出しました！ その制服……キヴォトス最大規模のマンモス校の1つ、トリニティ総合学園です！」

トリニティ総合学園。ゲヘナとは対極にあるような学園は真面目で善良な生徒が多く属しているため、限りなく黒に近いグレーであるブラックマーケットに近づく用事なんてなさそうであるが……何はともあれ、此処で出会ってしまったのだ。見捨てることなんてできるわけがない。

「そう！ そして、キヴォトスで一番金を持つてるお嬢様学校だから拉致して身代金をたんまり頂こうって訳さー」

「拉致って交渉！ 中々の財テクだろう？ くくくく……」

「どうだ、お前らも興味あるなら計画に乗るか？ 身代金の分け前は……」

不良達は計画を自信満々に解説していて————気づかなかったのだ。いつの間にか、ノノミとシロコが射撃のポジションに立っていた事と、追いかけていた少女を庇うように先生が立っている事に。

「——ノノミ、シロコ」

「ん」

「は〜い☆」

先生の静かな号令と共に、2人のトリガーが引かれる。シロコはWHITEFANG⁴⁶⁵SG550カスタムで、ノノミはメインウエポンたるリトルマシンガン^VM134ミニガンではなく、ハンドガン。

無慈悲に放たれた2発の弾丸は狙い外さず不良2人の頭部にク
リーンヒットした。

「うぎゃあッ!」

「あだッ!」

「悪人は懲らしめないです☆」

「うん」

「あ……えっ? えっ?」

一撃でノックアウトされた不良2人を前に————追いか
けられていたトリニテイ生、阿慈谷ヒフミは視線を右往左往した。

縁を食む

「あ、ありがとうございました。皆さんがいなかったら、学園に迷惑を掛けちゃうところでした……それに、こっさり抜け出してきたので何か問題を起したら……あうう……想像しただけでも……」

「お礼は彼女達に言っておいて。私は特に何もやってないさ」

何度もペコペコと頭を下げて、早口で事情を捲し立てるヒフミ。そんな彼女に対して、先生は薄く微笑みながら手をひらひら振っている。先生は今回特に何もしていないのだ。精々、シロコとノノミにアイコンタクトを送り、先制攻撃にGOサインを出しただけ。

「えつとー、ヒフミちゃんだっけ？ それにしても、トリニティのお嬢様がなんでこんな危ない場所に来たの？」

「あ、あはは……それはですね……実は、探し物がありました……もう販売されていないので買うこともできない物なのですが、ブラックマーケットでは密かに取引されているらしく……」

口癖を挟み、どこか困り顔で理由を口にするヒフミ。それに対して、アビドスの面々は思うところがあつたのか僅かに表情を動かした。探し物、それは既に販売されていない。そして、ブラックマーケットに態々足を運ぶほどのもの。お淑やかなお嬢様学校の生徒が欲しがるなんて、と思いつつながら――。

「もしかして……戦車？」

「もしくは違法な火器？」

「化学兵器とかですか？」

「教典？」

「えっ!? い、いいえ……えつとですね、ペロコ様の限定グッズなんです」

シロコ、ホシノ、ノノミ、先生がそれぞれ思い思いの品を羅列するが全て物騒極まりない代物だった。先生に至っては『教典』と云う訳のわからないものを挙げている。

そんなもの危ないものじゃない、とヒフミは首を振って否定した。

「ペロロ？」

「限定グッズ？」

「はい！ これです。ペロロ様とアイス屋さんがコラボした限定のぬいぐるみ！ 限定生産で100体しか作られていないグッズなんですよ」

ヒフミはそう言って鞆からぬいぐるみを取り出し――皆に見えるようにした。

そのぬいぐるみは、どう見てもアイスを無理やり口に突っ込まれている罰ゲームのような絵面のニワトリとも、ペンギンとも見える推定鳥類の人形だった。しかも、目の焦点が合っていない所為でアイスで窒息させられているようにも見える。

可愛い、といえば可愛いのかもれないが……キモ可愛い、というジャンルのような気がする。垂れ下がった舌と、上を向いた両眼、頬に付いているアイスが何とも言えない愛嬌を醸し出している。

総じて、万人受けはしないデザインのぬいぐるみだった。

「ね？ 可愛いでしょう？」

「……」

ホシノ、シロコ、アヤネ、セリカは満面の笑みで差し出されたペロロ様のぬいぐるみを見て言葉を詰まらせ顔を見合わせた。『可愛い……のか、これ？』とか『何かの拷問場面？』と、そんな事を思っている。

「わあ☆ モモフレレンズですね！ 私も大好きです！ ペロロちゃん可愛いですよねえ！ 私はミスター・ニコライが好きなんです！」

「分かります！ ニコライさんも哲学的なところがカツコよくて……最近出たニコライさんの本、『善悪の彼方』も買いましたよ！ それも初版で！」

「そうなんですか！ あれ？ 先生も『善悪の彼方』は以前読んでませんでしたっけ？」

「私が読んだのは『善悪の彼岸』だよ」

反し、ノノミはペロロ様の可愛さが理解できるようで、ヒフミと手を取り合って意気投合していた。そして、似たタイトルの本を偶々読

んでいた先生を交通事故のように巻き込んで3人でモモフレンズ
トークを開始する。ノノミとヒフミの熱量に先生が振り回されてい
る、という形で。

そんな3人の様子を取り残されたアビドスの4人の少女達は何と
も言えない微妙な表情で見守っていた。

「……いやあー、なんの話だか、おじさんにはさっぱりだなく」

「ホシノ先輩はこういうファンシー系に全く興味ないでしょ」

「ふむ、最近の若いやつにはついていけん」

「歳の差、ほぼないじゃん……」

17歳、華の女子高生の自称おじさんは口調をおじさんっぽくしな
がら戯けて頬を掻く。

モモフレンズ、という共通項で仲良くなり打ち解けた雰囲気となっ
たヒフミとノノミ。そして、アビドスの面々はヒフミの事情を……何
故追われたのか、その細かな経緯を聞く運びになった。

「——という訳で、グッズを買いに来たのですが、先ほどの人
達に絡まれて……皆さんがいなかったら今頃どうなっていたことや
ら……」

身代金、トリニティの問題児、停学、退学——そんなネガ
ティブなワードが頭を過ぎる。だけど、そんな事にはならず、アビド
スの少女達と先生が助けてくれたのだ。感謝の念は尽きない。

そして、ヒフミは「ところで」と切り出して——アビドス
側の事情を聞く。

「アビドスの皆さんと先生はなぜこちらへ？」

「私達も似たようなもんだよ。探し物があるんだ」

「そう、今は生産されていなくて手に入れにくい物なんだけど、ここに
あるって話を聞いて」

「そうなんですか、似たような感じなんですね」

少女達が話す傍ら、先生は目を閉じていた。どうしたのだろうか、
とノノミは思いながら彼に視線を向けると——徐に目を開

いた。幾何学的な文字列が廻る虹彩、青に染まった瞳は異界と深く接
続した証。

「——四方から武装集団。数は24。43秒後に接敵する。アヤネ、ドローンを飛ばして」

「ッ！ はい！」

「建物を迂回しつつ交戦。真正面から闘う必要はない。私側でも幾つかデコイを用意するから、それを盾にしながら数を減らそう——

——ヒフミ、協力してくれるかい？」

「えっ、あ、はい！ 勿論です！」

「ありがとう、助かるよ」

その返答を頼もしく思いながら、先生は量子波送受信機構システムメサイアを完全に起動させる。生徒の視界が切り替わり、戦場を掌握する機構が目映される。

アビドスの面々は複数回の戦闘で慣れたが、ヒフミは初めてだ。突然、オルタナが表示されてびっくりしているが——シロコ達シロコ達がアシストとフォローをしている。この分なら問題ないだろう。

凡ゆる戦場のデータが共有される。敵の数、武装構成、想定される戦闘スタイル、通るルート、残弾。戦場における全能、先生の『権能』が駆動する。

「アイツらだ！」

「よくもやってくれたな！ 痛い目に遭わせてやるぜ！」

「先ほど撃退したチンピラの仲間ようです！ 完全に敵対モードです！」

「望むところ」

「全く、なんでこんなのはっかり絡んでくるんだろうね？ 私達、何か

悪いことした？」

「愚痴は後にして、応戦しましょう、皆さん！」



スケバン達を片手間に撃退しながら逃走を選択した彼女達は、見事に撒くことに成功した。十数分の全力疾走をした生徒達であったが、その息に乱れはない。

息も絶え絶えなのは先生だけであり、途中からシロコに抱えられて

いた。仕方のない事ではあるが、割と情けない絵面だった。

「……………ここまで来れば大丈夫でしょう」

「ん……………此処をかなり危険な場所だつて認識してるんだね」

「えっ? と、当然です。連邦生徒会の手が及ばない場所の一つですから……………ブラックマーケットだけでも学園数個分の規模に匹敵しますし、決して無視はできないかと……………」

ヒフミは「それに」と言つて言葉を区切つて。

「様々な『企業』がこの場所で違法な事柄を巡つて利権争いをしていると聞きました。その上、ここ専用の金融機関や治安機関があるほどですから……………」

「銀行や警察があるつて事……………!? そ、それつて認可されていない違法な団体だよね!」

「はい……………そうです」

「スケールが桁違いですね……………」

「中でも特に治安機関は、とにかく逃げるのが一番です。騒ぎを起こしたらまずは身を潜めるべきかと……………」

これこそが、先の戦闘で逃走を選択した主な理由だ。マーケットガードと呼ばれる治安維持機構。先生をして『できれば相手をしたくない』と言わしめるオートマタ集団は兎に角数が多く、扱う銃の火力の高さは決して無視できるものではない。無論、勝てない相手ではない。だが、勝つてもメリットがない上に、戦闘した結果、近くの無関係な人が傷つく可能性があるのだ。無駄な戦闘と流血は避けるべきだろう。

「ふくん」

「ヒフミちゃん、此処のこと、意外に詳しいんだね」

「えっ? そうですか? 危険な場所なので、事前調査をしつかりしたせいでしょうか……………」

優等生のヒフミらしい回答だった。彼女はしっかり者で、他者の思いやりに溢れた優しい子。普通である、特徴がないと自身を卑下するが、その普通さに救われる人がいる。

——先生は、それを良く知っていた。

そうやって懐かしさに浸っていた先生であったが、ホシノの「よし」という声に現実を引き戻された。

「決めたく」

「……？」

「ヒフミちゃん、私達と一緒に行動してほしいんだけど、どうかな？」

助けてあげたお礼つてことで」

「え？ ええっ？」

突然言い渡された案内のお願いにヒフミは目を白黒させながら驚いた。ブラックマーケットについて特別詳しいわけでもなく、腕っぷしが強いわけでもない自分に頼んでくるとは思わなかったのだろう。だが、アビドスの面々は『名案だ』と言わんばかりの顔をしていて。

「わあ☆ いいアイデアですね！」

「なるほど、誘拐だね」

「はいっ!？」

「誘拐じゃなくて案内をお願いしたいだけでしょ？ 勿論、ヒフミさんが良ければだけど」

アビドスの面々の真摯なお願いに、ヒフミは「あ、あうう……」と声を漏らしながら視線を右往左往。ちらり、と先生を見ると——彼はヒフミに向かってウインクした。

込められた意味はヒフミの意志の尊重。『君の思うままに』と言外に伝えられた彼女は意を決して口を開く。

「私なんかでお役に立てるか分かりませんが……アビドスの皆さんにはお世話になりましたし、喜んで引き受けます」

「ありがとうございます。助かるよ」

「よし、それじゃあちよっとだけ同行頼むね」

こうしてアビドス対策委員会の5名と先生に加えて、トリニティのヒフミが同行する運びになった。



「はあ……しんど」

「もう数時間は歩きましたよね……」

「これは流石に、おじさんも参ったなく。腰も膝も悲鳴を上げてるよ
〜」

「えっ……ホシノさんはおいくつなのですか……?」

「ほぼ同年代ツ！ ほら、ホシノ先輩！ ちゃんと歩いて！」

セリカは項垂れているホシノの姿勢を強引に正して、ちゃんと前を
向かせる。苦節数時間歩き続けたが、特筆すべき新たな有力な情報は
入手できていない。強いて言えば、『隠されていること』が分かった程
度だ。あまり良い収穫とは言えないだろう。

数時間の徒歩による移動と、収穫の無さ。それによって彼女たちの
精神的な疲労が加速しているようで、歩く速度は目に見えて落ちてい
た。

「ん、先生は大丈夫？」

「少しキツイけど、まだ大丈夫。心配してくれてありがとう、シロコ」

生徒に甘えすぎるのは良くない。先生だって大人なのだ。故に疲
労で震える足を無理矢理奮い立たせて、歩んできた。だが、自身の限
界ラインを熟知している先生はこれ以上連続で歩き続けると翌日筋
肉痛で動けなくなる事を分かっていたため、休憩を提案しようと口を
開こうとしたが——彼よりも先にノノミが口を開いた。

「あらー あそこになりたい焼き屋さんが！」

「あれ、ホントだ。こんなところに屋台があるなんてね」

ノノミの指差す方角には、古き良きたい焼きの屋台が鎮座してい
た。風に乗って甘い香りが此方まで漂ってきて、無性に食欲を掻き立
てる。先生はちらりと腕時計を見る。時刻は昼前、軽食を挟むには
丁度良い時間だった。

「あそこでちよつと一休みしましょうか？ たい焼き、私にご馳走し
ますー！」

「えっ!? ノノミ先輩、またカード使うの!?!」

「先生の『大人のカード』もあるよ〜」

「ううん、私が食べたいからいいんですよ☆ 皆で食べましょう、ねっ
?」

ノノミはそう言つて先生の手首を優しく掴めば、皆が先生の方を見る。凶らずとも決定権を持った彼は。優しい笑顔を浮べて。
「そうだね、少し休憩しようか」



「まいど〜」

先生のプライド的にノノミに払わせる訳にはいかなかったため、7人分のたい焼きを現金で払った彼は『またユウカに怒られる……いや、5000円以下だからセーフか……?』と思ひながら街路樹を囲むブロックに座り、暫しの休憩を挟んでいた。先生の隣にいるシロコは目を輝かせながらたい焼きを頬張っている。

「美味しいー!」

「いやあ、丁度甘いモノが欲しかった所だったんだ〜」

「あはは……いただきます」

他の少女達はベンチに腰掛けながら、両手でたい焼きを持って休憩していた。ブラックマーケットで売られている食品ということもあり最初は恐る恐る口に運んでいたが、餡子の味と生地的美味しさに驚いている。特別美味しい、という訳ではないが価格と味、量を考えると破格だろう。

——たい焼きを見ると、いつも思い出してしまう。ハルナの事を。食を疎かにする私の手を引いて色々な店を回ってくれた。彼女は元気だろうか、あの花が咲いたような笑顔を浮べてくれているだろうか。

そんな事を考えていると、ふと袖を引っ張られた。顔を向けると、上目遣いで先生を見つめるシロコがいて。

「ほら……先生も」

「ああ、ありがとう」

シロコに促された彼はたい焼きを食べようとするが、彼女の何か言いたげな視線は消えてくれない。彼は流し目で彼女の方を見た。シロコの視線、掴んだままの袖、そして差し出されたシロコのたい焼き。

全てを察した彼は「……なるほど」と言つて、シロコの方に顔を近づけた。それに彼女は満足げな笑みを浮かべて。

「ん、先生。口開けて——あーん……」

「——うん、美味しい」

「ちよ、ちよつと何やつてんの!?!」

「わあ! シロコちゃん、大胆ですな〜」

シロコが差し出してくれたたい焼きを頬張っていると、ベンチに座っているセリカが声を荒げながら先生とシロコを指差した。反面、ノノミは楽しそうな笑みを浮かべたまま。

先生は苦笑いしながら、自身のたい焼きをシロコに差し出して。

「うーん、食べさせ合い?」

「それは見れば分かるの!」

「シロコがやりたそうな目をしてたし……」

ちらり、とシロコの方を見ると、頬を少し赤く染めながらも嬉しそうな雰囲気で彼が差し出したたい焼きを食べている。彼には生徒の頼みを断る機能がないのか、とセリカは呆れた。

その後は先生にたい焼きを食べさせようとするノノミ、それを阻止せんとするシロコ。セリカはどうにかして2人の争いを止めようとしながら。いつの間にか先生の膝の上に座り、悪戯っぽい笑みを浮かべているホシノ。ヒフミとアヤネは愉快的な百面相をしながら彼らの成り行きを見ている。

「暫しブレイクタイムだね」

少女達の渦中にいる先生は、呑気にそう呟いた。

最速の銀行強盗

たい焼きを食べ終え、少女達の可愛らしい小競り合いも終わった頃。先生は結局ノノミとホシノの手によって口にたい焼きを突っ込まれた。シロコはそれを若干不満げな表情で見っていたものの、『最初は私だったし』と思うことによつて心の平穏を保っている。

「あはは……皆さん、楽しそうですね。賑やかで、仲がよくて……」

「だねえ。いやあ、おじさんは付いていけないよ」

「ホシノ先輩もちゃんと渦中にいたじゃないですか……」

苦笑いを浮かべるヒフミに、からからと笑いながら返答するホシノ。その後ろでは微妙な表情のアヤネが誰にも聞こえない表情でポツリと呟いた。

休憩を終えた彼女達は再び情報収集を開始した。取引されたであろう店舗から話を聞いたり、またはブラックマーケットで活動している人から情報を買ったり。それらの交渉役は先生が請け負っており、彼の人心掌握術が活かされる事になったが……。

「———そうですか。ありがとうございます」

「良いつてことよ、兄ちゃん。あんま良い話できなくてごめんな」

「いえ、とんでもないです。貴重なお話でしたよ」

店主に向けて腰を折って一礼し、店から出てくる先生の表情は芳しくない。アヤネは「どうでしたか?」と聞くと彼は苦笑いで首を横に振った。

「全然。データ上はこの店で取引が行われているはずなのに、誰も知らなかったよ」

「此処まで情報がないなんてありえませんか……妙ですね」

「ヒフミさんもそう思いますか?」

アヤネがそう問いかけると、ヒフミは神妙な面持ちで「はい」と頷いた。

「お探しの戦車の詳細情報……絶対どこかにあるはずなのに、探しても探しても出てきません。通ったはずの販売ルートは全て外れ、保管

記録も何処にも残ってませんし……全て何者かが意図的に隠しているような、そんな気がします」

「そんな事、可能なの？」

「隠すこと自体は可能だと思います。規模が大きいとはいえ、お金と物が動いている市場なので……。ですが、いくら此処を牛耳っている企業でもここまで徹底してブラックマーケットを統制することは不可能なはず。どこかしらから情報は洩れるはずなのに、それすらないなんて……」

シロコの問いに答えながら、ヒフミはアヤネが操作する端末を覗き込む。表示されている情報はフェイク、隠された真実の示唆。明らかに隠蔽工作と偽装工作の結果だった。

「そんなに異常なことなの？」

「異常、と言うよりは……『普通ここまでやりますか？』という感じですね……。此処に集まっている企業は、ある意味開き直って悪さをしていますから、逆に変に隠したりしないんです」

ヒフミは「例えば」と言つてごく一般的な高層ビルを指差した。キヴオトスにありふれているビルの一棟ではあるが、ブラックマーケットの建物にしては清掃が行き届いており清潔な外見を保っている。正門には武装した警備員の姿があり、他にも巡回しているオートマタの姿が幾つか。他の施設よりも重厚な警備は何処か物騒な印象を感じる。

「あそこのビル。あれがブラックマーケットに名を馳せる闇銀行です」

「闇銀行？」

オウム返ししたセリカに、ヒフミは「はい」と首肯して。

「ブラックマーケットで最も大きな銀行の一つです。聞いた話だと、キヴオトスで行われる犯罪の15%の盗品があそこに流されているそうです。横領、強盗、誘拐などなど、様々な犯罪によって獲得した財貨が、違法な武器や兵器に変えられてまた他の犯罪に使われる。そんな犯罪循環が続いているんです」

犯罪の循環。ブラックマーケットの大きな意志が、それを望んでい

る。グロテスクなまでに利益を追求し、暴力を発注。全ての犯罪はブルックマーケットに通じる、と言われれば誰もが納得してしまう。構造的な暴力、理性的な犯罪。あるいは、表にいられなくなった存在達の逃げ場所。

想像よりも、キヴォトスに根差した闇市は深い。

「……そんなの、銀行が犯罪を煽っているようなものじゃないですか」
「その通りです。此処に黒くない企業はありません。銀行も犯罪組織の一角なんです」

「酷い話ですよね」

ノノミが悲しそうにそう呟くと、セリカが憤慨しながら拳を固く握りしめた。

「酷いじゃ済まないでしょ！ 連邦生徒会は何やってんの!？」

「理由は色々あるんだろうけどね。何処もそれなりの事情があるだろうからさ」

この人みたいに、そう思ってホシノは先生を見やる。

「現実には、思った以上に汚れているんだね。私達はアビドスばかりに気を取られ過ぎて、外のことを余りにも知らな過ぎたかも……」

自分達の知らない世界。手近な暴力と、そこに潜む闇。アビドスの面々は無知を痛感する。そんな皆を痛ましそうに見ていたヒフミであつたが——ふと、先生が遠くを見つめていることに気付いた。彼が見つめる先には幾つかの人型の影。武装した戦闘型のオートマタが、隊列を組んで歩んでいる。

「——マーケットガード。距離は離れている」

「マーケットガードですかッ!? 皆さん、隠れましょう！ こっちです！」

先生の呟きに顔を青くしながら叫んだヒフミは、近くにいたセリカとホシノの腕を掴んで咄嗟に路地裏に駆け込んだ。先生も同様にシロコ、ノノミ、アヤネと一緒にヒフミの後を追ひ、身を隠す。

ちらり、と外を覗くとはつきりとした姿が見えた。黒一色で固められた外部装甲、点灯している青のカメラ。大柄なオートマタを覆い隠せるほど巨大な分厚いシールドと高火力の銃器。かなり物々しい、一

目見ただけで友好的ではないことが分かる集団であった。

「あれが、マーケットガードですか？」

「はい。先ほどお話した、ここの治安維持機関の中でも最上位に位置する組織です」

「……つまり、此処の警察ってこと？」

「警察とは名ばかりだよ。頭からつま先まで犯罪に染まってる唯の武装集団が、治安維持を騙っているだけさ」

「先生の仰る通りです。此処では恐怖の象徴として扱われていますから……」

そう呟き、物陰から皆で隊列の行く先を見守る。表の警察機構とは比べ物にならないほど物騒であり、治安維持とは名ばかりの暴力装置であることがよく分かる出で立ちであった。

「パトロール中、でしょうか？　ですが……」

「ん、配置が変。何かを待っている……？」

「あの並び、もしかして護衛？」

そう呟いた刹那、真正面の道路を車が走っていった。重厚な車体。横に広い車体と膨らんだ後部からトラックであることは分かるが、至る所に取り付けられた追加装甲で非常にゴツゴツしている。側面には銃座すら見受けられるため、武装車両にも思えた。

用心深く周囲を確認しながらゆっくりと進むその様子は、襲撃等のイレギュラーを警戒している様にも見受けられる。

「——セリカちゃんが当たりっぽいねえ」

「成程、現金輸送車の護送だったんだ」

「——あの車両は……」

何かに気付いたアヤネは眼鏡の望遠機能を作動させ、注意深く車両を見る。もしかしたら、いやでも——そう考えているアヤネに、シロコが問いかける。

「アヤネ？」

「あの車両とナンバー、見覚えがあります。できればもっと近くに……」

望遠機能にも限界はある。これ以上詳細を知りたいなら近づくし

かない——そう思っているうちに、車両は先程ヒフミが説明した
閘銀行の前で止まり、検問を受けたのち正門から内部へ入っていつ
た。

「閘銀行に入りましたね」

「——もう少し近づいてみましょう」

「き、危険ですよ！　ここからの方が……」

「大丈夫です、あの路地なら」

アヤネが指差した先には、銀行近くにある路地。今隠れている場所
よりも狭いが、この人数でも隠れることはできるだろう。

シロコが先行し、周囲の安全を確認した後、此方に合図を送る。そ
して、それに続く様にセリカ、ホシノ、先生、ノノミ、アヤネの順で
路地裏に入っていった。ヒフミは右往左往しながら、最後はどうに
もなれと思つて飛び出した。

「——今月の集金です」

「ご苦勞様、早かったな。では、こちらの集金確認書類にサインを」

「はい」

「良いでしょう、確認しました」

「では、失礼します」

正門の奥は重厚なシャッターが下りており、左右を固めている警備
員の姿が見える。そして、輸送車の運転手が運転席から降りて、何か
の署名を行っている最中であつた。紙の書類、インフォメーションセ
キュリティは確保されている。

先生がタブレットの集音機能を行使しているため、音声もクリアに
聞こえていた。

「——さあ、開けてくれ。今月分の集金だ」

護衛が認証を行い、シャッターを上昇させる。地下に繋がるスロー
プ。あの先で現金の引き渡しが行われるのだろう。

完全に上昇しきつたあと、運転手は車両に戻り運転を開始する。

「視てください、あの人……」

「あれ……？　な、何で!?　あいつ、毎月ウチに来て利息受け取ってる
銀行員だよね!？」

「ん、本当だ」

アヤネに続いて、セリカが気付いた。書類にサインをして、運転席に乗り込んだ人物は……今朝集金に来ていたオートマタと同一個体であった。きな臭くなってきた、そう思っただビドスの面々は顔を歪める。

「……今、照合できました。車両の型番もナンバーも、今朝集金に来ていたカイザーローンのものと一致しています。ですが、なぜブラックマーケットに……」

「カ、カイザーローンですか!?!」

カイザーローンの名前を出した瞬間、ヒフミは目を見開いて驚愕した。その様子には彼女はカイザーローンについて何か知っているかと判断したホシノは冷静に問いかける。

「ヒフミちゃん、知っているの?」

「カイザーローンと云えば……かの有名なカイザーコーポレーションが運営する高利金融業者です……」

「有名な……? マズいところなの?」

「あ、いえ……カイザーグループ自体は犯罪を起こしていません。ただ……合法と違法の間のグレーゾーンで上手く振る舞っている多角化企業で……カイザーは私達トリニティの区域にもかなり進出しているのですが、生徒達への悪影響を考慮し『ティーパーティー』でも目を光らせている企業なんです」

『『ティーパーティー』……あの、トリニティの生徒会が、ね』

トリニティ総合学園は複数の学園が統合されて生まれたマンモス校であり、その生徒会ともなれば与える影響力は絶大である。その生徒会が目を見光らせている企業だ、どう考えても真面ではない。

「ところで皆さんの借金とはもしかして……アビドスはカイザーローンから融資を……?」

「借りたのは私達じゃないんですけど……」

「話すと長くなるんだよね。アヤネちゃん、さつき入っていった現金輸送車の走行ルート、調べられる?」

「今調べてるので、少し待ってください!」

ホシノの指示に先んじて調べていたアヤネはルートの逆算、解析を図るが、どうやってもヒットしない。監視カメラの映像も改竄されているのか、影すら追えない状態であった。突き付けられた結果にアヤネの顔が陰る。

「……ダメですね。全てのデータをオフラインで管理しているようです。全然ヒットしません」

「だろうね」

その反面、ホシノは気楽な声で答えた。予想はしていたのだろう。後ろめたい事をやるなら徹底的に、悪人の性根は嫌と言うほど分かっている。

「……そういえば、いつも返済は現金だけでしたよね。それはつまり……」

「私達が払った利息を、ブラックマーケットの闇銀行に流すため……？」

「じゃあ何？ 私達はブラックマーケットに、犯罪資金を提供していたってこと!?!」

「……まだはつきりと断定できません。証拠が足りませんし……」

先生は「証拠、か」と静かに呟いた。表情を変えず、シャッターの先を見つめている彼ならば、或いは——そう考えた彼女たちの期待に応えるように、彼は緩やかな笑みを浮べた。

「集金確認書類はどうか？ 押さええられたら証拠になると思うよ」

「おお、確かに」

「ん、ナイスアイディア、先生」

集金確認書類には恐らく取引日時、金額、所在地、区分、担当者の名称、顧客の名前は記載されているはずだ。それを入手できれば、運ばれてきたものの大体の動きは把握できる。仮にアビドス高等学校の名前が顧客に刻まれていれば、その時点で動かぬ証拠になる。連邦生徒会やヴァルキューレにでも突き出せば、企業にガサ入れが入るだろう。

先生の案に納得の表情を浮かべるホシノとシロコであったが、ヒフミは思いつきり首を横に振っていた。

「でも書類は既に銀行の中ですよ。忍び込もうにも、ブラックマーケットの中でも最も強固なセキュリティですし、あれだけの数のマーケットガードが目を光らせていますし……」

正門の左右を固めている2名、巡回しているのが4名。内部にはもつと多くのガードが控えているだろう。そして、通報されたら更に多くの兵士が回される。

幾ら戦闘力に優れるアビドスの面々でも、際限なく溢れる正規のマーケットガードを相手にするのは骨が折れるだろう。

「それ以外に現金輸送車の集金ルートを確認する方法は……ええつと、うーん……」

「ん、他に方法はないよ」

「えっ?」

他の平和的な案を模索しているヒフミの肩に置かれたシロコの手。自信満々な微笑みを浮かべている彼女に何かとても嫌な予感を覚えたヒフミであったが、多分気のせいだと自分に言い聞かせることにした。

シロコは微笑みを浮かべたままホシノの方を見やり、アイコンタクト。

「ホシノ先輩、ここは例の方法しか」

「なるほど、あれかー。あれなのかー」

「……ええっ?」

天を仰ぎ、「マジなのかー」と言って目を閉じる。だが、止めるつもりはない。他に案を思い付かないのもあるが、このチャンスを逃したくなかったのだ。

「あ……! そうですね、あの方法なら!」

「何? どういうこと? ……まさか、あれ? 私が思ってるあの方法じゃないよね?」

「まさかとは思いますが、もしかしてあれですか……?」

「え、ええ……?」

他のメンバーもシロコが提案する手段に思い至ったのだろう。ノミは楽しそうに、セリカとアヤネは恐る恐るシロコに問いかける。

「ん、これしかない」

「う、嘘?! 本気で!？」

「うわあ……はあ……」

力強い肯定。シロコの決意は変えられないだろう。それを悟ったセリカは驚愕し、アヤネは諦めた。もう何を言っても無駄であろう。

そして、一人話から置いて行かれていたヒフミは、それぞれ別の表情を張り付けているアビドスの面々に『あれ』について問いかけた。

「……あ、あのう。全然話が見えないんですけど……『あの方法』って何ですか？」

ヒフミの真つ当な疑問に、アビドスの皆が彼女を見る。

彼女は関係ないが、この場にいる以上、一緒に行動した方が良い。どうやっても騒ぎになるのだ。一緒に逃げられず、彼女だけ捕えられた、なんて後味の悪い結末にはしたくない。

「……先生、いいよね？」

「……本来は止めるべきなんだろうけど、道を示したのは私だ。何かあつたら責任は取るよ」

苦笑いを浮かべながら頷くと、シロコは満足げにヒフミの方を向いた。

「——残された方法はたった一つ」

重々しく告げられるのは、手に入れる手段。シロコは鞆から取り出した例のモノを頭に被った。

「銀行を襲うの」

青の覆面を被ったシロコは、いつそ清々しいほど澄み切った声音と表情で犯罪実行の旨を告げた。

ターゲットはブラックマーケット最大規模の闇銀行。目的は現金ではなく、集金確認書類。

勿論、シロコとて初めから襲うつもりはそこまできなかつた。だが、状況は一変したのだ。ここは銀行強盗をキメておくべきだろう。覆面を常備しておいて良かった——そう思い、シロコは満足げに胸を張った。

そして、『銀行を襲う』と云うワードを咀嚼し、呑み込み、理解した

ヒフミは数回目を瞬かせて——驚愕のあまり、思わず叫んだ。

「はいっ!?!」

「だよね。そういう展開になるよね」

「わあ☆ そしたら悪い銀行をやっつけるとしましょう!」

「マジで? マジなんだよね? ふう……それなら——とことんまでやるしかないか!」

「……はあ、了解です。こうなったら止めても聞く耳持たないでしょうし、どうにかなる、はず……」

慌てて辺りを見渡せば、アビドスの少女たちは全員覆面を装備し終えていた。額に振られた番号と目出し帽。表で歩いていたら間違はなくヴァルキューレの御用になっていたであろう姿は、銀行襲撃に最適な出で立ち。

目出し帽を被っていない生徒は自分だけだ。そして、現状反対しているのも自分だけ。

全員、本気だ——そう直感したヒフミは声を荒げながら、なんとか止めさせようと言葉を尽くす。

「ほ、本気ですか!?! 本当に銀行を襲うんですか!?! とうか、何で覆面なんか持つてるんですか!?!」

「ごめん、ヒフミ。貴方の分の覆面は準備がない」

「うへー、って事はバレたら全部トリニティのせいだつて言うしかないねえ」

「ええッ!?! そ、そんな、ふ、覆面……何で、えっと、だから、あ、あう……」

当たり屋もびっくりなトンデモ理論でこの場の罪を擦り付けられそうになったヒフミは、混乱しながら鞆をひっくり返して何かを探す。自分が何を探しているのすら分からないレベルで頭の中が混乱している彼女は涙目だ。それに気づいた先生がヒフミを宥めているが、彼女の頭の中は混乱しっぱなし。

こんな罪を被ったら学校にいられなくなってしま……あ、先生つて花の香りなんだ——と、焦りと雑念が混ざりあたふたする彼女の姿を見ていられなかったのか、ノノミは『そんな、悲しいのは駄目

です!』と言わんばかりに声を上げた。

「それは可哀そうですね! ヒフミちゃんだつて……あ、そうですね!」
妙案を思い付いたのか、ノノミは鞆から鋏と油性ペンを取り出し作業し——完成したものをヒフミに差し出した。

「ほらヒフミちゃん、取り敢えずこれをどうぞ☆」

「え、あ、えっ?」

「たい焼きの紙袋? おお、それなら大丈夫そう!」

「ちよ、え? ちよつと待つて下さい皆さん……あ、あうう……」

仲間外れは駄目だと思つたノノミの、微妙にずれていると言えなくもない厚意はたい焼きの紙袋だった。目の部分は丸くくり抜かれており、視界の確保はできている。たい焼きの甘い香りがヒフミの嗅覚を擽るが、馬鹿にされてるようにはか思えなかった。

「ん、完璧」

「ちゃんと番号も書いておきました、ヒフミちゃんは5番です!」

「見た目はラスボス級じゃない? 悪の根源だねー、親分だねー」

「えっ、あ、わ、私も御一緒するんですか!? 闇銀行の襲撃に!」

最早逃げれないことを悟つたヒフミは、それでも一握の希望に縋るように涙目で訴えると——ホシノが悪戯っぽく笑つた。

「さつき約束したじゃーん? ヒフミちゃん、今日は私達と一緒に行動するつて」

「う、うあああ……しましたけど、約束しましたけどお……うう……こんな事学校に知られてしまったら……わ、私、もう生徒会の人達に合わせる顔がありません……」

「問題ないよ! 私らは悪くないし! 悪いのはあっち! だから襲うの!」

「ん、それじゃあ先生、例の台詞を——」

全員が先生の方を見る。シャーレの白コートを脱ぎ、黒一色のスーツ姿になった彼は黒のi番の覆面を被り、タブレットを操作。万が一の保険をかけ終えた彼は宣言する——アビドスに巢食う悪意を暴くための、探求を。

「アビドス対策委員会とヒフミ、出撃!」

「あ、あうう……」
「おー！」

銀行終了のお知らせ

平日の昼下がり、閑散としている闇銀行内には数名の客がおり、その全員が浮かない顔をしていた。当然だろう、ブラックマーケットの悪名高い闇銀行に来る客には相応の事情がある。例えば、借金とか身売りとか。此処にいる全員は搾取に次ぐ搾取により疲弊しきつた社会的弱者であり、藁にも縋る思いで社会の暗い機構に頼ろうとしている。

持つ者が持たざる者を支配する典型的な社会構造、表でも裏でもそれは変わらない。ただ、表では人道の観点から設けられていた制限が、裏においては紙切れよりも軽い口約束未満の何かになっているだけで。

ブラックマーケット等が属する裏社会は『悪』なのか。この問いには多くの人が肯定するだろう。問題じゃない点を探すことの方が難しいほどであり、表沙汰になれば無事では済まない事件や事故を山ほど抱えている。

では、裏社会は『不要』なのか。これは難しい問いだろう。無闇矢鱈に肯定してしまえば、悪戯に搾取される誰かや犯罪を肯定してしまうことになる。否定してしまえば、表にいられなくなった誰かの逃げ場所を奪う事になってしまう。

悪は生まれるものではない。作り出されるものだ。これはその典型例。作り出された悪性、見て見ぬ振りをしてきた構造体。未熟な知性が構築した社会という機構を円滑に、効率的に運用するための必要悪。それこそがブラックマーケット等の裏社会の正体だろう。

それが分かっているから、連邦生徒会はブラックマーケットを邪魔だと思いつつ排除しない。あの機構を生み出したのは表で生を謳歌している自分達であるという自覚があるから。

完全な善はない。完全な悪はない。それはどこの世界でも、どの生命でも同じこと。善を求め、悪を成し、誰かに惜しまれて命を終える。矛盾と向き合って、一世紀の旅路を歩んでいくのが真つ当な人間だ。

自分の世界にないものは救えない。不平等は覆らない。生きていく以上優劣はあるし、優劣があれば特別は存在する。誰もが平等な社会なんてものは綺麗事を通り越して悍ましい。社会は基本的に下敷きになっているものを食い潰して成り立っている。それは誰にも否定できない現実であり、積み重ねてきた歴史が強固に裏打ちしている。きっとそれは醜悪な機構であり、醜悪な個人であり、醜悪な命なのだろう。

だが、それでも——誰かの犠牲の上で成り立っている醜悪な生であつても、恵まれているのなら笑つて受け入れなければ嘘になつてしまう。

つまり、この世界は存外醜いし、それと同じくらい美しいのだ。

闇銀行のロビーから溜め息が聞こえる。誰のものかは分からない。客か、それとも従業員のオートマタか、マーケットガードか。暗い空気と、憂鬱な呼吸音。自業自得、と言つてしまえばそれまでだが、それは余りにも残酷すぎる。酸素を吸って二酸化炭素を吐くだけの動作にも対価を求められそうで、明後日の事すら分からない。だが、それでも歩き続ける住民たちはきつと己の命と、生存と真に向き合っているのだろう。

繰り返すような1日、昨日と変わらない今日をこの場所も他と同じように歩んでいく——誰もが、そう思っていた。

しかし、その想定は一瞬で崩れ去る事になる。

何かが切断される音が聞こえた瞬間、辺りが闇で包まれた。

「な、何事ですか!?! 停電!?!」

「い、一体誰が!?! パソコンの電源も落ちているじゃないか!?!」

フロアを照らす灯り、仕事に必要な機材、外部に連絡する手段に至るまで全てが一瞬で沈黙したのだ。一寸先すら見えない闇の中、誰かが叫ぶ声が反響する。

外部からの攻撃をシャットアウトする堅牢な守りは、内部からの脱出を許さない牢獄へ早変わり。全ての電子的なシステムは掌握され、今や襲撃者の手の内にある。助けは来ない。そもそも連絡すらできない。武装自体は銀行内にも存在するが、この闇の中で銃は使用でき

ない。フレンドリーファイアは誰だつて怖いのだ。

加えて、監視カメラは誰かの手によつて『正常な映像』に移し替えられているため、この場で起きたことを事実であると証言できるのは今この瞬間現地にいる人のみ。外部にいる誰もが、『この銀行は通常業務を滞りなく行なっている』と思つている、思わされている。

そして——混乱に乗じて、数名の襲撃者が闇に紛れて従業員に襲いかかった。

「うわッ！ ああああッ！」

「うわああッ！」

「な、何が起きて——ぐあッ！」

1人、また1人と襲撃者の魔手により沈黙させられる。銃声は聞こえないため、恐らくは素手によるマーシャルアーツ。驚くべき速度と精密さ、手際で放たれる技は抵抗はおろか疑問に思う隙すら許さない。悲鳴と鈍い音、斃れる音が耳朵を擦る。暗闇という遺伝子にプリセットされた根源的な恐怖と合わさり、闇の中間こえる音全てが死神の足音のように思えた。

暗闇が続いた時間は1分にも満たない。精々、20秒かその程度。全ての音が止み数秒経つた後、漸くフロアに明かりが灯った。とは言つても非常電源を用いた緊急用の明かりであり、主電源は相も変わらず掌握されたまま。

薄暗いライトが照らす、フロアの中心ロビーに立っていたのは——

「全員その場に伏せなさい！ 持っている武器は捨てて！」

「言う事聞かないと痛い目に遭いますよ☆」

「あ、あはは……皆さん、怪我しちやいけないので……伏せてくださいね……」

僅か30秒にも満たない時間で、銀行内に駐屯していたマーケットガードを全員戦闘不能にした集団が立っていた。向けられる銃器のセーフティは外されており、先ほどの言葉が単なる脅しでないことは誰の目で見ても明らかだった。

余りにも現実離れした光景であったのか、オートマタはアイライン

を数回点滅させた後——その表情ディスプレイを怒り一色で染め上げた。

「非常事態発生！ 非常事態発生！」

「うへへ、無駄だよ。外部に通報される警備システムは掌握しちやつたからね。」

叫びながらタブレットを叩き割る勢いで操作するオートマタ。しかし、全ての基幹システムは先生が掌握済みだ。此処は既に電子的な空白地帯、凡ゆるネットワークから切り離されている。『無駄な抵抗は止めてね』と言わんばかりにホシノはショットガンで銀行員の顛顛を小突くと、腰を抜かして倒れこんだ。

「ひ、ひいッ！」

「いやあ、おじさん達も銀行員さんの耐久テストはしたくないからねえ。できれば大人しくしてほしいんだけど……」

そう言つて、ホシノは気楽そうな態度のまま——非常ベルを鳴らしに行こうとしている銀行員に鋭い視線を向けた。そのまま腰のホルスターからサブウェポンのハンドガンを引き抜き、流れるような動作でロックを外して銃口を突き付けた。

「今、何しに行こうとしたのかな？ ベル鳴らしに行こうとしたよね？ もしかして撃たれたいのかな？」

「ひッ！ ぐ、ぐめんなさい！ 撃たないでください！」

「ほら、そこ！ 伏せてってば！ 下手に動くとおの世行きだよ！」
残っていた銀行員と客を全員片っ端から地面に転がし、フロア一帯を流れるように制圧。この中で最も面制圧能力に優れているノノミがミニガンの銃口を光らせ、威圧する。少しでも不審な動きをすれば周りの人を巻き込んでスクラップになるだろう。極めて不本意だろうが、彼等は一蓮托生の仲となった。

その後、アヤネが全員から所持品を没収し、シロコが持っていた結束バンドで手首を縛り拘束。銀行員1名だけはこの後大事な仕事をしてもらう予定のため、地面に伏せさせるだけに留める。

この少女達、約一名以外ノリノリである。先生は苦笑いを浮かべながらシロコに問いかける。

「……皆、これ初犯だよな？ 妙に手慣れてないかい？」

「ん、初めて。でも、頭の中でシミュレーションしてたから、予習はばっちり」

「そっかあ」

何処か遠い目をしながら、先生は平均的な高さの天井を見上げた。予習がこうして活かされているのは教育者として喜ばしい……喜ばしい？ 事なのだろうが、如何せん方向性がぶっ飛んでいる。

「皆さん、お願いだからじっとしててください……あうう……」

「うへ、ここまでは計画通り！ 次のステップに進もうー！ リーダーのファウストさん、指示を！」

「えッ!? えッ!? ファウストって、わ、私ですか!? リーダーですか!? 私が!?!」

「リーダーです！ ボスです！ ちなみに私は……」

ノノミはそう言って、例の決めポーズを取って。

「覆面水着団のクリステイーナだお♫」

「うわ、何それ!? いつから覆面水着団なんて名前になったの!? それに、ダサすぎだし！」

「え……」

「うへ、ファウストさんは怒ると怖いんだよ？ 言うこと聞かないと怒られるぞ〜?」

「あう……リーダーになっちゃいました……これじゃあ、ティーパーティーの名に泥を塗っちゃいます……どうすればいいんでしょうか、先……ラメントさん……」

「ちゃんと責任は取るよ。だから、心配しなくても大丈夫」

作戦中に突然押し付けられたリーダーの役割。限りなく部外者に近かった筈なのに今や銀行強盗集団の首座に召し上げられたヒフミは涙目で先生をコールサインで呼んだ。そして、先生は安心させるような声音で、柔らかに言葉を紡ぐ。

それを見ていたセリカはふと気になったことを彼に問いかけた。

「……そういえば、ラメントって名前、何が由来なの？」

「ん……昔使っていたコードネームかな」

哀歌。^{ラメント} 嘆き歌、悲歌、挽歌とも呼ばれる。有名なものはイーリアス、オデュッセイアだろうか。或いは、旧約聖書のエレミアの哀歌。

芸術においては、救世主の哀悼が有名だろう。救世主の生涯からのよくあるテーマで、磔刑後、人々に悼まれる救世主の遺骸を描いたものである。

酷く後ろ向きな、自身の結末を皮肉ったコードネームだ。

「監視カメラの死角、警備員の動線、銀行内の構造、すべて頭に入ってる。無駄な抵抗はしないこと」

こつん、とシロコは銀行員に銃口を突き付ける。引き攣るアイライ
ン、微かに香る硝煙、火薬。

「さあ、そのの貴方。このバッグに入れて。少し前に到着した現金輸送車の……」

「わ、分かりました！ 何でも差し上げます！ 現金でも、債券でも、金塊でも、幾らでも持つてってください！」

「そ、そうじゃなくて……集金記録を……」

「ど、どうぞ！ これでもかと詰めました！ どうか命だけは！」
「あ……う、うーん……」

銀行員はバッグの中に近場にあった札束を溢れんばかりに詰め込む。それを見ていたシロコは微妙な表情をしていた。今回の目的は現金ではないのだ。重要なのは集金記録であり、紙のデータ。止めようか、と一瞬思ったが、手当たり次第に詰め込んでいる中身に集金記録が確認できたため、『まあいいか』とそのままにした。

そして、先生は「現金は荷物になるからいらさないんだけどなあ……」とぼやきながら、詰め込んでいる銀行員の近くまで歩いていき。

「ねえ、君。この顧客番号の取引履歴をあるだけ持つてきてくれないかい？ あとは……」

「は、はい！ かしこまりましたッ！ お持ちするので命だけはッ！」
アビドスを示す顧客ナンバーのやり取りと、ダミー用の適当な番号の取引データを幾つか。それを要求した途端、銀行員は血相を変えながら奥の保管所に向かい、慌ててシロコが後を追う。

10分弱経った頃、数冊のファイルを抱えた銀行員が息を切らしな

がら到着。割と重いファイルを受け取った先生は中身を見て、間違いない事を確認。そろそろ頃合いだろうと、シロコにアイコンタクトをすれば――彼女も頷いた。

「あの、シロコ……いい、いやブルー先輩！ ブツは手に入った？」

「あ、う、うん。確保した」

セリカが銀行員に銃口を突き付けながら叫ぶと、シロコはパンパンに膨らんだバッグを掲げる。目的の完遂された。もうここに留まる理由はない。

ホシノは先生が今しがたロックを解除した非常用出口を指差した。

「それじゃ逃げるよー！！ 全員撤収ー！！」

「アディオース☆」

「怪我人はいないようですし……すみませんでした、さよならッ！」

襲来も鮮やかならば、撤収も鮮やかだ。嵐のように現れ、去っていった少女達を茫然としながら眺め――それから怒り心頭と叫んだ。

「奴等を捕えろッ！ 道路を封鎖！ マーケットガードに通報だ！」

「一人も逃がすな！」

だが、彼らの叫びが誰かに届くことはない。少女達が通った出口は封鎖され、明かりも消えて闇銀行は再び無明に落ちた。最初から最後まで、闇銀行のシステムは先生の掌の上であり、何をするにも彼の思うがまま。

無論、良心の呵責はあったものの……それでも、止まる訳にはいかなかった。だから、ごめんなさい、と心の中で謝罪しながら逃走する。中々に矛盾している気がしなくもない。

牢獄と化した銀行のシステム権限が戻り、彼等が解放されたのは襲撃から1時間後であった。

その足を踏み出した

裏路地から裏路地へ。表の大通りには出ずに、遮蔽物が多い場所を追手の視線と射線を切るように駆け抜ける。

アヤネと先生が上空に飛ばし、周囲をスキャンしているドローンから得られた情報を元に最適な逃走経路を組み立て、ブラックマーケットを走り続けて約15分。闇銀行とマーケットガードの駐屯地から離れた場所で、一旦少女達は立ち止まった。

尚、身体能力が貧弱クソザコな先生は相も変わらずシロコに抱えられていた。

「はひー、息苦しい……もう脱いでいいよね？」

「のんびりしてらんないよ。急げ急げ、早めにブラックマーケットから出ないと」

「か、可能な限り早く離れないと……まもなく道路が封鎖されるはずですよ！」

息苦しさに限界を覚えたセリカが目出し帽を脱ぎ去り、大きく息を吸って吐き出す。全力疾走により赤くなった頬を伝う汗、張り付いた長い髪。それらを鬱陶しそうに拭って、もう一度息を吐く。

そんな彼女を見ながら、ホシノとヒフミは先を急ぐことを促していた。此処は彼等の庭のようなものだ。きつとすぐに道路封鎖が行われ、捜査網が敷かれるだろう。そうなれば発見されずに脱出できる確率は極めて低くなってしまう。だから、なるべく早くブラックマーケットから出ないと——そう思っていた。

だが、この銀行強盗に一枚噛んでいるのは神算鬼謀の先生なのだ。分かり切っている事に手を打っていないはずがない。ノノミは信頼に満ちた瞳で、シロコに抱えられながらタブレットを操作している先生を見た。

「ご心配なく。万全の準備を整えておきましたから☆ ですよ、先生！」

「勿論。内部のシステムは落としてあるし、監視カメラの映像は偽装済み。だから通報するためには堅牢なシャッターを突破してから、最

寄りの駐屯地まで走らなければならない。それから現場確認、道路封鎖までやろうと思つたら——最低でも1時間は必要だと思つよ」
「流石だね、先生」

先生の言葉に今すぐ追手が来る可能性は低いと考えたのか、シロコ以外の皆は目出し帽を脱いで大きく息を吸って吐いた。やはり息苦しいのだろう。先生もいつの間にか帽子を取っていて、見慣れた顔が視界に入った。

僅かな落ち着きを手に入れた皆であつたが、先生の「だけど」と云う言葉に現実に取り戻される。

「ブラックマーケットの構造は彼らの方が詳しい。人海戦術なんかされたらジリ貧になるから早めに脱出しないとね」

「……先生もそう言つてるし、早めに出よう。こつち、急いで」
「あの、シロコ先輩……覆面脱がないの？ 邪魔じゃない？」

セリカの指差した先には、先と変わらない目出し帽を被つたままのシロコ。ニット生地に覆われた狼耳が愛らしい彼女はきよとんとした表情を浮かべていた。それはまるで、『なんで脱ぐ必要があるの？』と言わんばかりだつた。そんな様子を見て、ホシノとノノミは……シロコの情操教育に一役買つていた少女達は楽しそうに笑う。

「天職を感じちゃつたっていうか、もう魂の一部みたいなものになつちやつて、脱ぎたくないんじゃない？」

「シロコ先輩はアビドスに来て正解だわ……他の学校だつたら物凄い事やらかしていたかも……」

例えば、美食研究会や温泉開発部といったテロリスト集団……もとい、部活動が席を置くゲハ学園。シロコが此処にいたらどうだろうか。多分、大惨事になる。集団に席を置くことはないだろうが、恐らく単独で何かをやるだろう。

次に、トリニティ。此処に彼女がいたら……多分、アズサと結託する。一緒にトラップを設置する仲になるであろう。

軽く引きながら見つめているセリカに、シロコはぼつが悪そうな視線を向けて——漸く、青の覆面を脱いだ。

「そ、そうかな……」

「うん……多分」

銀行強盗をキメた後とは思えないほど朗らかな空気のアビドスの少女達。だが、それに巻き込まれたヒフミはそうではなく——頭を抱えながら呻っていた。心なしか顔色も悪い気がする。

「あうう、ホントにやっちゃいました……紙袋を被ってましたが、バレちゃいませんかね……？」

「まあ、バレないと思うよ。プロトコルを走らせていたからね」
「プロトコル？」

先生は「そう」と頷いて。

「鏡面偽装プロトコル……まあ、相手に幻を見せるって言い換えたら分かりやすいかな」

先の襲撃、集金記録を手渡したオートマタには先生の姿が一般的なキヴオトスの住民に見えたのだ。だが、別のオートマタには先生の姿はヘイローを持つ生徒に見え、また別の誰かには屈強な戦闘職のガードに見えた。他の誰かに聞いても十人十色の答えが返ってくるだろう。同じものを観測しているはずなのに、解が一致しないバグを先のプロトコルは引き起こしている。

姿を隠すのではなく偽る。認識阻害に近い、権能に片足を突っ込んだプロトコルは見られる側ではなく見る側の視覚に干渉するのだ。勿論、万能ではなく穴はあるため、偽装のヴェールの奥を覗かれた可能性は十分に考えられる。その上、本来の……先生が想定した使い方とは異なる使用をしたのだ。あまり過信はできない。

「まあ、先を急ごう。此処も時機に安全じゃなくなるからね」



「封鎖予測地点を突破、この先は安全です」

ブラックマーケットと表の境界線。路地と路地を渡り歩き、開けた視界のその先は大通りに面しており、西に傾いた陽が照らす見慣れた街並みが広がっていた。

急いで歩道橋と横断歩道を渡り、ブラックマーケットの入り口から

離れた裏路地で少女達は大きな達成感を伴った息を吐く。

マーケットガードは正式な機構ではない。故に表での活動は出来ず、下手に動けばヴァルキューレ等に逮捕されるのだ。ブラックマーケットという自身の庭でのみ絶大な力を持つ点は他の学園自治区の治安維持機構と変わらない。

よって、表側の世界に帰れば——当面の安全は手に入れられる。

「本当にブラックマーケットの銀行を襲って、それも成功しちゃうなんて……ふう……」

「シロコちゃん、集金記録の書類はちゃんと持ってるよね？」

「う、うん……バッグの中に……」

その問いにシロコは微妙そうな顔をしながら頷き、バッグを手渡した。彼女の表情に何処か不安を覚えながらも受け取ったホシノは、その重さに少々驚いた。目的の集金確認書類以外の何かが入っている事は明らかであるが、取り敢えず確認しなければ何も始まらない。

皆が見やすいようにバッグを地面に落としてから、妙に膨れた重いバッグのファスナーを開けると——何やら、有ってはいけないものが見えた。

「……へ？ なんじゃこりや?! カバンの中に札束が……?!」

真つ先に視界に入った大量の札束に、ホシノは思わず絶叫する。その叫びに皆が驚き、ホシノを見ると100万円の束を複数手に持っていた。鞆からも大量の束が覗いており、どう考えてもあの銀行から奪った現ナマであろう。

本来の目的から逸脱した、完全に余分な犯罪行為に全員が顔を青くしてシロコを見る。

「うえええええッ?! し、シロコ先輩、現金盗んじやったの!」

「ち、違う、目当ての書類はちゃんとある。このお金は銀行の人が勘違いして入れただけで……」

無罪を証明するように首を勢い良く横に振り、バッグをひっくり返す勢いで底を探ると、目的の集金確認書類が出てきた。一応、目的の物は押さえているため作戦は成功であると言えるだろう。

だが、まさか目的以外の……それも現金を持つてくるとは思っていなかったのだろう。ホシノの顔が露骨に引き攣っている。

「ごめんね。本当ならバインダーを受け取ったタイミングで現金は置いてくるつもりだったけど、忘れてたよ……」

「いや、先生の所為って訳じゃ……」

「違わないさ。あの場でシロコと共にいたのは私だからね」

「……そういえば、あのバインダー達は」

こういった所……責任の所在に関しては驚くほど頑固な彼に、これ以上の言葉は届かないと悟ったホシノは話題を変えることにした。

バッグの中に鎮座しているバインダー類は何なのか、と聞かれた彼は「ああ」と言っただけ。

「アビドスの顧客番号の取引履歴だよ。1冊だけがアビドスで、残りは怪しまれないためのフェイクだけど……」

「そっか、証拠を……ありがとう、先生」

直近の集金確認書類だけでも証拠としては強力だが、これだけの取引履歴があれば更に信憑性は増すだろう。

取り敢えず先生の働きもあり、期待以上の証拠は集まった。後は、何故か鞆に突っ込まれたこの現金を何とかするだけ。唐突に増えた頭痛のタネに頭を悩ませつつ、ホシノはバッグの傍に屈み、札束を数える。

「どれどれ……うへ、軽く1億はあるね。本当に5分で1億稼いじやったよー」

呟いたホシノは肩を落とす、溜息を1つ。書類だけならばまだ本格的な、マーケットガードを総動員した捜査にはならない筈だった。だが、これだけの大金が盗み出されてしまったのだ。彼等にも面子がある。確実に黙っていないだろう。

思わぬ大誤算にホシノは頭を悩ませた。

「やったあ！ 何ぼーっとしてるの！ 運ぶわよー！」

「ちよ、ちよっと待ってください！ そのお金、使うつもりですか!？」

その反面、喜びに浮かれているのはセリカだった。彼女はその札束を見て歓喜し、学校の為に使おうとしていたのだ。アヤネが慌てて止

めようとするが、セリカの見解は変わらないようだ。

「アヤネちゃん、なんで？ 借金を返さなきゃ！」

「そんなことしたら本当に犯罪だよ、セリカちゃん！」

「は、犯罪だから何!? このお金はそもそも、私たちが汗水流して稼いだお金なんだよ！ それがあの闇銀行に流れてつたんだよ！ それに、そのままにしておいたら、犯罪者の武器や兵器に変えられてたかもしれない！ 悪人のお金を盗んで、何が悪いの!?!」

「——私はセリカちゃんの見解に賛成です。犯罪者の資金ですし、私たちが正しい使い方をした方がいいと思います」

どの様な事にも守らなければならぬルールは存在する。無論、セリカとしてそれは分かっている。銀行強盗が良くない事や、今自身が提案した方法が良くない事は。それらは全て、ルールを破る行為であると。

だが、最初にルールを破ったのはカイザー側であるため、自分達だけが馬鹿正直にルールの範疇で行動する必要はないだろう。

アヤネは反対。セリカは賛成。ノノミは賛成ではあるが、そこまで乗り気ではない。ホシノとシロコは苦い顔をしている。先生とヒフミは部外者であるため、口を噤んで行く末を見守っていた。

「ほらね！ これさえあれば、学校の借金をかなり減らせるんだよ!?!」
「んむ……それはそうなんだけど……シロコちゃんは どう思う?」

ノノミの賛成を得たセリカは難色を示すメンバーを説得しようとして口を開き、捲し立てる。ホシノは彼女の意見に『一理ある』と思いつつも——シロコの方を見た。彼女ならどう思うだろうか、と。

「……自分の意見を述べるまでもない、ホシノ先輩が反対するだろうから」

「へ!?!」

「さすがはシロコちゃん。私の事、分かっているねー」

驚いた表情のセリカに、ホシノは諭すように語り始める。

「私達に必要なのは書類だけ。お金じゃない」

「……でも……」

「今回の悪人の犯罪資金だからいいとして、次はどうする？ その

次は？ 借金を減らすためだから、悪人のお金を『正しく』使っているだけだから。そうやって自分に言い聞かせて、正当化しながら罪を重ねる。こんな方法に慣れちゃうと……ゆくゆくは、きつと平気で同じことをするようになるよ」

その言葉は、誰よりもアビドスの問題と真剣に向き合ってきたセリカに強く響いた。何か反論しようと思っても、口からは声になり損ねた吐息が零れるだけ。

彼女は唇を噛み、黙ってホシノの言葉を聞くことにした。

「そしたら、この先またピンチになった時、『仕方ないよね』とか言いながら、やっちゃいけないことに手を出すと思う。私達の選択肢に、犯罪が入り込んでくるんだよ。それに、このお金で借金を返したとしても結局闇銀行に流れるだけ。額面上の借金は減っても、犯罪者の資金になる現実は何も変わらないと思うな。最後に残るのは、目的の為に平気で他人を傷つけられるロクデナシと、血と罪に塗れた人生だけ」

ホシノは真剣そのものであった表情を緩ませ、いつもの様に笑って。

「うへへ、このおじさんとしては、カワイイ後輩がそうなっちゃうのはイヤだなー」

「……」

「そうやって学校を守ったって、何の意味があるのさ」

ホシノの意見にセリカは言葉を詰まらせた。紛れもない正論だったのだ。ずっと正しい方法で守ろうとしてきたのに、今になって外法に頼るのは——確かに嫌だ。心の奥でそう叫ぶ自分は否定できない。

だが、『はいそうですね。分かりました』と割り切るには金額があまりにも多くて。目の前に垂らされた糸に縋ってしまいたい気持ちが強くて。

セリカは俯きながら唇を噛んだ。

「こんな方法を使うくらいなら、最初からノノミちゃんが持つてる燥然と輝くゴールドカードに頼ってれば良かったんだ。その方がずつ

と私達らしいでしょ？ 少なくとも、そんなお金を使うよりは」
「……そうですね。ホシノ先輩は、私が提案した時に一番反対されてましたから」

そう言つて、ノノミは伏せていた顔を上げた。肩の力を抜いて、自然体に彼女は笑つてみせる。

「先輩の気持ち、わかります。幾ら頑張つたつて、きちんとした方法で返済をしない限り、アビドスはアビドスじゃなくなってしまふ……」
「うへ、そういうこと。だから、このバッグのお金は使わない。全部処分だよ。頂くのは必要な書類だけね。これは委員長としての命令だよー」

ホシノにはあまりにも似合わない委員長命令。対策委員会の主人としての命令に逆らえる人物も、逆らうつもり的人物も此処には居らず——セリカは地団駄を踏みながら叫んだ。

「うわああつ！ もどかしい！ 意味わかんない！ こんな大金を捨ててく!? 変なところで真面目なんだからー！」

「うん、委員長の命令なら」

「私はアビドスさんの事情をよく知りませんが……このお金を持つていると、何か他のに巻き込まれるかもしれません。災いの種、みたいなものでしょうから……」

「あは……仕方ないですよ。このバッグの処分は……お任せしても大丈夫ですか、先生？」

「勿論、任せて」

処分にはノノミが適任であつたのだが、一度は賛成してしまつた身の為、持つのは気が引けたのだろう。勿論、アビドスの少女達がそんな事を気にする訳もないのだが、彼女なりのケジメとして——
——先生に預ける事にした。

重たいバッグを手渡された先生は、少女達に緩く微笑む。彼女達を選択を心から尊重し、理解している瞳は愛と優しさに溢れていた。

「ねえ、先生は……この決断、どうかな？ 馬鹿だつて思う？」

何処か弱弱しいホシノの言葉に、先生は「まさか」と力強く言い放つて。

「立派な決断だよ。君達の選択は誰にも笑わせない。踏み留まってくれてありがとう」

先生はそう言って、心底嬉しそうに笑った。

不快、腐海

「なっ、何これ!? 一体どういうことなのっ!?」

勢いよく机を叩き、絶叫するセリカ。その瞳は、表情は明確に分かるレベルで怒りで塗りつぶされており、普段の快闊な様子は欠片もない。

ブラックマーケットの闇銀行を襲った後、ある程度追手を気にしながらアビドス高等学校まで戻った。その後、1時間ほど休憩を挟んだ後、奪取した書類を机に並べ、確認作業を行っていた。

果たして、そこには——アビドスに巢食う悪意の答えが記されていた。収めた利子の、その後の流れ。どの様なルートでやり取りされて、何があったのか。そして、それらを斡旋した担当責任者の流れ。アビドスの面々は勿論、先生やヒフミも険しい表情で記録を眺めていた。

「現金輸送車の集金記録にはアビドスで788万円集金したと記されている。私達の学校に来たあのトラックで間違いない」

シロコは「でも」と言っ、その下の記録を指でなぞる。

「……その後すぐにカタカタヘルメット団に対して、『任務補助金500万円提供』って記録がある」

「ということとは……それって……」

「私達のお金を受け取った後に、ヘルメット団のアジトに直行して任務補助金を渡したってことだよね!」

「任務だなんて……カタカタヘルメット団に……? ヘルメット団の背後にいるのは、まさか……カイザーローン?」

至った結論を『信じられない』と言わんばかりの表情で呟く。返済された利子を、顧客を攻撃する目的で利用するなどマッチポンプも甚だしいだろう。

それではまるで——。

「ど、どういうことですか?! 理解できません! 学校が破産したら、貸し付けたお金も回収できないでしょうに……どうしてそのような

事を……」

「ふーむ……」

愕然とした表情で首を横に振るノノミ。その隣では、ホシノが腕を組みながら思案顔を浮べている。

これにて証拠は出揃った。これから二転三転することはない。推理小説なら最終局面、といった所だ。

カイザーローンはブラックマーケットの仄暗い闇銀行を通じて犯罪行為に加担している。そして、これまで執拗に攻撃を繰り返していたカタカタヘルメット団の雇い主もカイザーローンだった。

アビドスから回収した利子を源泉としてカタカタヘルメット団に依頼を行い、その一環として設備や装備、兵器の提供を行っていたのだ。そう考えると、莫大な兵力、充実した装備、コストがかかり過ぎる兵器群にも納得がいく。巨大な多角企業なのだ、それ位は余裕でできてしまうだろう。

ブラックマーケットでの取引を隠すのも、その莫大な資金と人員を使用すれば可能のはずだ。ヴェリタスに取引データを引き抜かれ焦った彼らは僅か数日という時間でブラックマーケットにて根回しをし、徹底的な隠蔽を行いアビドスの捜査を攪乱したのだろう。

「この件、銀行単独の仕業じゃなさそうだね。カイザーコーポレーション本社の息がかかっているとしか思えない……」

「……はい。そう見るのが妥当ですね。ですが、何のために……」
「そうよー！ こんな事して何の得になるの!?! 返済を滞らせて、私達からより多くのお金をむしり取ろうって訳!?!」

先生は「んー」と言っただけ。

「だとしても、この方法は回りくどすぎる。手っ取り早く金銭が欲しいなら利子を引き上げるだけで済む。それに、800万弱の返済金に対して500万を補助金としてつき込んでいるから、手当とか物資の運送料とかを考えるとどう考えても採算が取れない。彼らはアビドスに関しては赤字だ」

「なのに、その赤字の依頼を続けている以上——仮に成功したら、赤字が覆るだけの何かがある。そういう事だよね、先生?」

彼は「そういう事さ」と言つて、安心させるように微笑んだ後——その表情を寒気がするほど透明で、冷徹な顔に変質させた。だが、それには誰にも気づかない。

「なら、カイザーローンの……いや、カイザーコーポレーションの狙いは——」

昔から連綿と続く、カイザーローンとのやり取り。どこかのタイミングでそこに悪意が介入し、暴力を発注するようになった。

貸し付けた莫大な借金を気にもしないような、学校を滅ぼすことを目的に置いた攻撃。回収した資金以上の労力、人員、資源を浪費し、今も尚執拗にアビドスを襲撃するカタカタヘルメット団とカイザー。その目的が、金銭だとは到底思えない。

したがって、カイザーが求めているのは——。

「アビドスが持つ『何か』。それが、彼等の狙いだと考えられます」



「皆さん、色々ありがとうございます」

アビドス高等学校、校門前。

ひよんなことから今日一日をアビドスの面々と行動していたヒフミは、取り敢えずトリニティ総合学園自治区へ帰ることとなった。深々とお辞儀をしたヒフミに対し、少女達5人は苦い顔をする。面倒な事に巻き込んでしまったのだ。寧ろお礼を言わなければならぬのは此方側だ、と言わんばかりにノノミは口を開く。

「私達の方こそありがとうございます。お陰で色々と知ることができました。それに、変な事に巻き込んでごめんなさい、ヒフミさん」

「あ、あはは……」

「今度遊びに行くから、その時はよろしく」

「はいっ！ 勿論です！」

ホシノの言葉に、ヒフミは笑って答える。保守的なトリニティの生徒、ともなれば学外の友人は多くない。学園の外に新しい友達ができたヒフミはとても嬉しそうだ。アビドスの面々からしても、便利屋に

続きヒフミとも交流を持って喜んでいる。

そして、トリニティの自治区はかなり賑わっている。アビドスからは離れているが、大型の施設や話題の店、娯楽施設が集っているため、行く価値は大きいだろう。遊びに行つたときはヒフミに案内をお願いしよう、ホシノは内心で笑つた。

「まだ詳しい事は明らかに成ってませんが……これはカイザーコーポレーションが、犯罪や反社会勢力と何かしらの関連があるという事実上の証拠になります。戻つたら、この事実をティーパーティーに報告します！ それと、アビドスさんの現在の状況についても……」

「まー、ティーパーティーはもう知つてると思うけどねー」

アビドスに単食う悪意を詳らかにしようと思つて息巻いていたヒフミに、申し訳なさそうにホシノは呟いた。

——そう、ティーパーティーはとつくの昔に知つていよう。アビドスが廃校寸前な事も、借金に喘いでいる事も。何せ、アビドスからトリニティに転校した生徒だつていなのだ。大まかな事情は必ず把握している。

把握した上で、無視する——それが、トリニティとしての決断だ。

「は、はいっ!?!」

「あれほどの規模を持つ学園の首脳部なら、それぐらいはもうとつくに把握してると思うんだよー。みんな、遊んでばかりじゃないだろうしき」

「そ、そんな……知つているのに、皆さんの事を……」

「うん、ヒフミちゃんも純真で良い子だねー。でも世の中、そんなに甘くないからさ」

阿慈谷ヒフミは良い子である。優しく、友達思いで、頼まれたことは断れず、誰に対しても手を差し伸べられる——分け隔てのない、本当に善い人。それは共に行動した時間でよく分かつていた。

先ほどの提案も『困つてる友達を助けたい』という——打算なんて欠片もない、唯の親切心によるものだ。差し伸べてくれた手を振り払うようで心苦しいが、アビドスという学校にとって、その提案は

到底受け入れ難い。

「ヒフミちゃんの気持ちはありがたいけど、そつちに知らせた所で、これといった打開策が出るわけじゃないし、却って私達がパニックになるような気がするんだよねー」

「そ、そうなんですか……？」

「ほら、今のアビドスって廃校寸前じゃん？ トリニティとかゲヘナみたいなマンモス校からのアクションをコントロールできる力がないんだよー。言ってる意味、わかるよね？」

敢えて続きを口にしなかったのは、根っからの善人たるヒフミにそんな言葉を聞かせたくなかったからか。それとも、他の理由があるのか。それはホシノしか分からない。

「……サポートするという名目で悪さをされてもそれを阻止できない……つてことですよね」

だが、聡明なヒフミは濁された言葉の続きをちゃんと把握していた。

アビドスにはマンパワーが不足している。たった5人しかいない全校生徒で、マンモス校たるトリニティの動きをコントロールする事なんて到底できない。援助、という名目で何かしらの仕事をされても阻止できず、好きに行動されてしまう可能性がある。

それに、相手はあのトリニティ。権力闘争の本拠地、とでもいうべき場所なのだ。頭脳戦では確実に相手の方に分がある。

更に『助けられた恩』というのはかなり重いのだ。仮にトリニティに一片の悪意が無くとも、今後の学校存続に大きな影を落とすことは間違いない。学校間に明確な序列を作ってしまう——それは避けたかった。

故にアビドスは、誰の手も借りられない。今この場に先生がアビドス側として立っているのは特例中の特例なのだ。

ヒフミはどこか悲しそうな声で「……そうですね」と呟いて。

「その可能性もなくはありません。あうう……政治って難しいです」
「だから、ヒフミちゃんがアビドスの現状を知って心を痛めてくれた、それだけで私達は嬉しいんだよ。元々、学校を何とかするのは私達の

役目だからね」

ひらひらと手を振るホシノ。これはきつと、誰のせいでもないのだ。だからヒフミが落ち込む必要はない——と言つても優しい彼女は落ち込んでしまうから、その想いを喜ぼう。心優しい彼女が、心を痛めて手を差し伸べてくれた事に。たとえ受け取れなくとも、ちゃんと想いは伝わっているのだと。

「でも……ホシノ先輩、悲観的に考え過ぎなのではないでしょうか？
本当に助けてくれるかもしれませんし……」

「うへへ、私は他人の好意を素直に受け取れない、汚れたおじさんになつちやつてねー」

ヒフミに気を遣つたアヤネのフォローに、すかさずホシノは言葉を挟む。彼女は頭の後ろで腕を組みながら、いつも通りの——だが、冷たさが滲む声音で。

『万が一』つてことをスルーしたから、アビドスはこの有様になつちやつたんだよー」

最年長のホシノは、この学校のために戦つてきた時間が一番長い。故に、他の——ノノミですら知らない過去を彼女は実体験として知っている。

アビドスを支え、戦い続けた彼女の砂漠と弾薬の記憶。その中にはきつと……信頼した誰かや何かに裏切られた事があつたのだろう。彼女の大人嫌いも、もしかしたらそこに起因するのかもしれない。

「では……えつと……皆さんの現状は伏せて、カイザーローンの事だけ伝えさせていただきます」

「ん……まあ、それ位ならいいと思うよ。多分、カイザーはアビドスだけじゃなくて他にも手を回していそうだし」

ヒフミの提案に、ホシノは笑つて頷いた。これがベストな落とし所だろう、と。

キヴォトスに住まう以上、多角的な大企業たるカイザーの影響力は無視できない。ティーパーティーにその危険性を伝えるだけでも、決定的な何かは避けられるだろう。

少なくとも、第二第三のアビドスは生まれなくて済むはずだ。

「本当に……1日で色んな出来事がありましたね」

「そうだね。凄く楽しかった」

「楽しかったのはシロコ先輩だけじゃないの？」

「セリカも割とノリノリだったよ？」

「ち、違うし！ あれは臨場感を出すためにやったの！」

「あ、あははは……私も楽しかったです。新鮮で……」

「いやあー、ファウストちゃん、お世話になったね」

「そ、その呼び方はやめて下さい！」

「よっ！ 覆面水着団のリーダーさん！」

それらの言葉に、ヒフミは勢い良く首を横に振った。流石に銀行強盗集団のリーダーなんて洒落にならない。

「皆さん……ヒフミさんが困ってるじゃないですか……」

「と、兎に角……これからも大変だとは思いますが、頑張ってくださいね。応援してます。それでは……皆さん、またお会いしましょう」

そう言って深々と一礼し、踵を返すヒフミだったが――先生の「待つて」の声で止められた。後ろを振り返った彼女の視界に入ったのはICカードキーを片手に持った彼だった。

「送っていくよ、ヒフミ」

「え、ですが……」

「気にしないで。元々、私が巻き込んだんだ。これくらいはさせてほしいな」

それでも尚申し訳なきような顔をするヒフミに対して、彼は「それに」と言つて。

「此処からトリニティまで遠いからね。土地勘がない広大な場所を一人歩く君を見過ごせないよ……ちよつと待つてて、バイク取ってくるから」

人好きのする笑みを浮かべた彼はバイクの鍵たるICを手元で弄びつつ、この後の事をアヤネに問いかける。

「――という訳で、ヒフミは私が責任を持ってトリニティまで送り届けよう。皆はこの後どうするんだい？」

「そうですね……今日はこれでお終いにしようと思います」

「そっか。では、私もヒフミを届けたらホテルに戻るとするよ。何かあったらまた連絡してね。すぐ駆けつけるから」

車庫に向かって歩いていく2人を見送り、アヤネは締めめの言葉を紡ぎ始める。

本当に、いろいろな事があつた1日だった。ブラックマーケットを練り歩き、友達ができて、銀行強盗をして——真実に一歩迫れた。

「皆さん、お疲れ様でした。今日はゆっくり休んで、明日改めて集まりましょう」

「それじゃ、解散〜」

花に蝶を

午前8時を少し過ぎた頃、先生がアビドス対策委員会の部室に顔を出すと、既にホシノとノノミがいた。

ノノミはソファに腰掛け、ホシノはそんな彼女の膝枕を堪能していた。その顔は緩み切っており、とても居心地がよさそうだ。猫は液体、とよく言うが……この分だとホシノも液体かもしれない。冗談抜きで、人体が溶けて見える。

先生は顔に微笑を浮かべ、手を軽く振って。

「2人ともおはよう」

「おはよう、先生」

「先生、おはようございます。今日は早いですね」

「目が覚めてね……二度寝する気分にもなれなくて」

そう言つて、先生は苦笑いを浮かべる。

鮮明に思い出せる今朝の事……誰だつて目が覚めたら隣にワカモが幸せそうな顔をして寝ていたらビビるだろう。当然、眠気なんて一瞬で消し飛んだ。

尚、どうやって鍵を開けたのか？ とか聞きたいことはあつたが、キヴオトスに常識は通用しないので気にしないことにした。

彼女が起床したタイミングで「一緒に寝るのは別にいいけど、せめて一言言つてね」と釘を刺したため、多分次は許可を取ってくれるだろう。ベッドに入り込むことには特に注意しなかつたため、彼も中々に染まっていると言える。慣れて怖い。

そもそも、キヴオトスにいる限り彼にプライバシーやプライベートなんてものは存在しないのだ。コタマには盗聴されているし、ヒマリには時折ドローンで観察されている。そうじゃなくても、様々な生徒に色々なものを握られているのだ。今更、寝顔の一つや二つなんて気にする程の事ではない。

その後、彼女と共にビジネスホテルを出て……今に至る。今頃、彼女はアビドスの何処かで先生の依頼を行っているだろう。

彼はノノミの太ももに顔を埋めているホシノを見て——何とも言えない微妙な顔をした。

「リラックスしてるね、ホシノ」

「うへへ、ノノミちゃんの膝枕は柔らかくてサイコーなんだよ。私だけの特等席だもんね」

「先生も如何です？ はい、どうぞ☆」

そう言つて、包容力に溢れた笑顔を浮べて両手を広げるノノミ。だが、彼女の膝枕を取られてしまう事を良しとしなかったホシノはノノミの膝枕にしがみつきながらいつもの笑みを浮べた。

「ダメだよ。ここは私の場所なんだから、先生はあつちの座り心地悪そうな椅子にでも座つてね」

「私の膝は先輩専用じゃないですよ……」

まるで幼子を宥めるような優しい口調で呟いたノノミは、ホシノの桃色の髪を手で優しく梳かしている。時折、擦ったそうに身を振りながらも——蕩けた表情はそのままの彼女はとても幸せそうだ。

そして、ノノミは先生の耳元に顔を寄せて……甘い声音で囁いた。

「——今度、誰もいない時にしましょうね、先生」

ノノミの提案に彼はくすりと笑い「ありがとう」と言つて、そのまま彼女の隣に腰掛けた。

それに目ざとく反応したホシノが悪戯っぽく笑みを浮かべて。

「よいしょっと」

「——っ」

ホシノはノノミの太ももに埋めていた頭を、徐に先生の膝の上に乗せた。先生は突然の行動に僅かに表情を変えるが、すぐに微笑みを浮かべる。

「うへへ、先生とノノミちゃんの膝枕を独占だ。いやあ、贅沢だねえ」

「わあ☆ こういうのも新鮮でいいですね！」

「だねえ……まあ、膝枕は慣れてるさ」

そう——膝枕は慣れている。される方向ではなく、する方向

で。正直に言ってしまうと、男の固い体のどこが好いのか甚だ疑問ではあるが……止めるつもりは全くない。自分の膝が生徒の安らぎに使えるのなら喜んで差し出そう。セツトで耳掃除と子守唄と頭なでなでが付いてきます——なんて、微妙なセールス。自分にはセンスがないらしい。

「……お、流石は大人。余裕の表情だねえ——わっ」

悪戯に成功したホシノであったが、続く言葉は遮られる。先生が彼女の頭を覚えるように、優しい手つきで撫でているのだ。それも、割れ物を扱うような、花に触れるような……そんな手。

頭上の彼の表情はとても穏やかで、嬉しそうな表情をしていて。男性である彼にこの表現は相応しくないかもしれないが、まるで聖母のようであった。

そんな彼があまりにも浮世離れして見えたからホシノは頬を若干赤く染めながら呟く。

「うへへ、何でそんなに嬉しそうな表情なのさ」

「そりゃあ嬉しいよ。だって、ホシノがこうして私に甘えてきてくれるんだから」

彼ははにかむように笑って。

「私がホシノにとつて安らげる場所に、宿木になれるなら——

——それは、とても幸せな事だよ。君の笑顔が見れて、私は嬉しいんだ」

「……先生って後ろから刺されそうな性格してるよね。何人の女の子をその顔と言葉で誑し込んできたのさ」

「そんなつもりはないんだけどなあ」

彼は微笑を苦笑いに変えて、返す。優しい手つきはそのまま、ホシノは気持ちよさそうに目を細めている。それを何処か羨ましそうな目でノノミが見ていた事は——先生しか気づかなかった。

こうやって頭を撫でられるのもいつ迄だろうか。ふと、そんな事が思い浮かんだ。この先に控えている戦いは損害無しでは済まない。手足の1、2本は覚悟しなければならぬはずだ。

幸せの賞味期限。自分はきつと、そう遠くない内に死ぬ。

そこまで考えて、先生は頭を軽く振った。今考えるべき事ではない

だろう。感傷的になるのは後でいい。今はやるべき事をやらなければ。

先生は話を変えるように、思考を切り替えるように「そういえば」と言ってる。

「今日は2人だけかい？」

「はい。のんびりできるのは久しぶりですから……今は皆、やりたい事をやっているんでしょうね」

「シロコちゃんはきつとトレーニングでしょうし、セリカちゃんは日雇のバイト、アヤネちゃんは学校の掃除と教室の整頓をしてくれたよねー。うへー、みんな真面目だなー」

「ホシノはここでノノミと一緒にいたのかい？」

先生の問いに、ホシノは「そうそう」と返す。それからぐつと背伸びをして、吐く息と共に脱力。本当に猫みたいだ、なんて思う。

「私はノノミちゃんの膝枕を堪能しながらダラダラしていたんだー」

「先輩も何かはじめてみてはどうでしょう？ アルバイトとか、筋トレとか」

「無理無理ー、おじさんは年齢的に無理が利かない体になっちゃったもんでねー」

「歳は私とほぼ変わらないですよ？」

「こういうのは体じゃなくて心の問題なんだよー」

そう言ったホシノは、2人の膝枕から降りる。気持ちよさそうな欠伸をしてから凝り固まった身体を伸ばして解し、その足を部室の入り口の方へ向ける。

「……さて、先生も来たし、皆もぼちぼち帰って来るでしょう。そんなじゃ、私はこの辺でドロロン」

「あら、先輩どちらへ？」

「今日のおじさんはオフなんでね。てきとーにサボっているから何かあったら連絡ちょうだい、ノノミちゃん。それじゃ先生もまたあとでねー」

ひらひらと手を振りながら、廊下に消えていくホシノ。それを先生

とノノミは同じように手を振りながら見送り……ドアが閉まった後、ノノミは何処か心配そうな表情を浮かべた。

「ホシノ先輩、何処に行かれるんでしょうか。またお昼寝でしょうか……」

「……だと、いいけど」

反面、先生の表情は見えなかった。顔を隠すように俯いているのだ。垂れ下がった前髪と横髪、作られる影。まるでのっぺらぼう。或いは伽藍堂。初めて見る彼の所作に、ノノミは胸を掻き毟りたくなるような苦しさを覚えた。

彼の俯いた顔は上げられ、そこには何時もの表情が浮かんでいる。人を無条件に安心させるような微笑。それにノノミも微笑みを返す。彼に苦しそうな顔なんて見せたくないから。

「会議はアヤネちゃんが進めてくれますし、今日は大きな議題はありませんから。偶にはお休みも大事です。この頃、ホシノ先輩はずっと頑張っていましたから……」

「そうだね。ホシノは、ずっと……」

——いつかの、ワカモとホシノの会話。それを聞いたノノミは彼が何かを抱えていることを知っている。それが彼にとって大切な何かで、絶対に捨てられない事も分かっている。でも、それでも……笑ってほしい。

そんな事を思っていると、彼は「でも」と口を開いた。

「ノノミも頑張ってると思うよ。だから、少し休んでもいいんじゃないかな」

「え？ 私も、ですか？」

「ああ、ノノミだって疲れているだろう？ なら、休むべきだよ。私の膝でよければ空いているから、さ」

先生の言葉に、ノノミは少し頬を赤らめた。彼の膝枕を味わっていたホシノを少し羨ましそうに眺めていた視線は……彼に見透かされていたのだ。

「……バレちゃってたんですね」

「ホシノにはバレてないと思うよ」

彼はそう言つて、その顔を蠱惑的に歪める。くらり、と熱くなる頭。確かにこれは劇薬だ、ノノミは改めてそう思う。

「おいで、ノノミ」

「では、失礼しますね……」

ノノミはその魔力に抗うことはせずに、彼の膝に頭を乗せた。



キヴオトス、某所。世界から弾き出されたような、淵のようなオフィスビルの一室。ガラス張りの窓の前に佇んでいるヒトガタは、大理石を一定の間隔で叩く音を聞き、興味深そうに割れた口を歪めた。

「……これはこれは」

ゆつたりとした動作で後ろを振り向くとドアは空いており、室内には小さな人影が1つ。敵愾心と憎悪と殺意に満ちた視線を向ける少女こそ、アビドス最強の神秘の持ち主であり——黒服の取引相手。

「お待ちしておりますよ。暁のホルス。小鳥遊ホシノさん」

「……黒服」

吐き捨てるように名前を呼んでも、黒服の余裕は崩せない。粘ついた嫌な空気はまるで蛇のようにホシノの体に纏わりついて離れない。生理的な嫌悪感、ホシノはこの場所も目の前にいる人物も心底嫌いだった。

「いやいや、キヴオトスにはまだ馴染めていなくて。こちらへどうぞ、ホシノさん」

「お前と馴れ合うつもりなんてない。早く要件を言え」

応接用のソファは最高品質であり、その真正面のデスクにはティーカップとソーサーが鎮座している。だが、ホシノはこんな所でアイスブレイクするつもりなんてない。さっさと要件を聞いて、一刻も早くアビドスに戻りたかった。

だが、黒服はそんな事はお構いなしに、愉快そうに喉を鳴らしている。不愉快極まりないホシノはもう一度舌打ちして、眼前の悪意を見

る。

「……ふふ、状況が変わりましたね。今一度、アビドス最高の神秘をお持ちのホシノさんにご提案をしようと思ひまして」

「提案？ 巫山戯るなッ！ それはもう……！」

「そう逸らないでください、ホシノさん」

今まで通り否を突き付けようとしたホシノを、黒服は窘める。そのまま彼は自身のデスクまで向かい、チェアに腰掛けて、語った。

「状況が変わった、と云うのは……ええ、イレギュラーが現れたのですよ」

「……」

「いずれ、磔刑になり世界へ捧げられる救世の神子……そんな存在が、観測されました。一度コンタクトを試みましたが、袖にされてしまいましたね。ですので、こうしてアプローチを変えています」

「……そんな救世主様と私に何の関係があるのさ」

「——連邦捜査部シャーレ」

黒服がその名前を出した途端、ホシノの顔が露骨に歪んだ。

「その責任者たる先生……私は彼を手に入れたいのですよ」

「お前ッ！」

叫び、銃を引き抜くホシノ。その銃口の先には不気味な貌を張り付けた黒服が佇んでいる。命を握っているはずなのに、余裕そうな表情は変わらず——この場のイニシアティブは覆らない。

「ですが、貴方には変わらず興味があります。彼と貴方、その差を検証するのもまた良い探求になりそうです……ええ、そうですね。お気に入りの映画の台詞がありまして、今回はそれを引用してみましよう」
冷や汗を浮かべ、目を見開いて怒りを顕わにするホシノ。その正面の黒服は腕を組みなおし——その表情を歓喜に歪めた。

「あなたに、決して拒めないであろう提案を一つ。興味深い提案だと思ひますので、どうかご清聴ください」

滅びの前日譚

強さとは何だろうか。

例えば、頭がいい人。例えば、腕っぷしが強い人。例えば、権力を持つ人。これらはとても分かりやすい、視覚的に捉えられる強弱だ。数値として計測でき、自身とも比較がし易いことから古来より重んじられてきた。

では、キヴオトスにおける普遍的な強さとはなんだろうか。その問いの答えは千差万別だろう。頭が良ければ、力が強ければ、権力があれば……と。置かれている環境、求められている役割によって、自身が何を尊ぶかによって変わるだろう。

故に、追及を諦めたのだ。普遍的な、絶対的な強者の条件を探求することを。代わりに相対的な、偏差値的な価値と強弱を計数し、比較し……社会を形成してきた。

そして、このキヴオトスに——探求者が現れた。そして彼は、この問いに一つの解を出したのだ。

「私はこれを、『神秘の量と質』と定義しました」

生徒が持つ神秘……これこそがキヴオトスを測るスケールである
と。

「もつと言ってしまえば、特権階級にアクセスできるだけの神秘を所有しているか……これこそが、キヴオトスにおける強者の条件です」
「……ふーん」

「ホシノさんは類稀なる神秘の持ち主です。総量も質も、共に最高水準。比類しうる存在はキヴオトスに10名といたないでしょう」

黒服は「ですが」と言っ、目を伏せる。

「貴方には出力が足りないのです。無意識下に抑えているのです。最も古く、最も偉大で、最も多様化した天空神……それを再現するには、貴方のストッパーは邪魔でしかありません」

ホシノは酷く不愉快そうな顔で、黒服を見る。月と太陽を象徴するオッドアイに射貫かれた彼は歓喜し、愉快そうに喉を鳴らす。

「ですから、見学をしてほしいのです。枷の外し方を、経路パスの開き方

天は主のものである

接続、 失敗。

接続、熾天使 失敗。

接続、智天使 失敗。

接続、座天使 失敗。

主よ、主よ、何故我を見棄て給うか。

権能縮小、神秘減衰。

接続、主天使 失敗。

接続、力天使 成功。

端末作成 完了。

権能讓渡 完了。

神秘転移 完了。

異端顕現 神の知識・D S。

滅びろ、出来損ないの救世主。

彼方にいる敵を殺すため、悪意の白翼が飛翔した。



「いっただきまーす！」

「ひ、1人につき一杯なんて……こんな贅沢しても良いのですか？」

「良いつてことよ、セリカちゃん達のお友達だろ？ 替え玉が欲しけ

りや言いな、サービスするぜ」

「……別に、友達つてわけじゃないけど……」

そう言つて、ラーメンを啜る便利屋の少女達。シャールからの依頼を受けた彼女達であったが、あれから特別変わったことはなく普段通りの毎日を送っている。今日、こうしてアビドスに足を運んでいるのは単純に柴関のラーメンを食べたくなつたからであり、それ以外の理由は特にない。

「こんなに美味しいのにお客さんが居ないなんて変な感じだね」

「立地が悪いんじゃないかしら？ 交通網はガタガタだし、近くには廃校寸前のアビドスしか学校がないし……それに、この近くには住宅

「街もないし」

アルの言葉に、『来てる時間帯も関係がありそうだけど』と心の中で思つてカヨコはラーメンを口に運ぶ。時刻は午前10時を少し回つた頃、昼食としては随分早い時間であつた。

「……まあ、人が少ない方が私達に都合がいいし、美味しいからいいんだけど——」

カヨコがそう言った刹那、入口のドアが不意に開いた。入店を知らせるベルと共に店内に入つてきたのは、真っ白なコートと制服に身を包んだ青年。彼は人好きのする笑みを浮かべながらひらひらと大将に向けて手を振つていた。

「大将、今は大丈夫かな?」

「ああ、今日も元気に営業中さ。好きな席にどうぞ」

そう言い残し、厨房の奥へとお冷を注ぎに行く大将。何処に座ろうか、と考えながら先生は店内を見渡し——便利屋の少女達と目が合った。

「せんせ、こつちこつちー!」

「……シャレーレの先生」

「あら、先生」

「せ、先生、お、おはようございます……」

元気そうに笑顔で手を振るムツキに、先生もまた微笑みを返して手を振り返し、彼女達の方に足を進める。

「おはよう、皆。今日はどうして此処に?」

「此処のラーメンをリピートしたくなつたのよ」

「そっか、柴関、美味しいもんね」

そう言つて、彼ははにかむように笑つた。微笑みや苦笑いとはまた異なる種類の笑顔は乙女心を刺激する劇薬だ。よく似合う、とは思ふ。見てるこつちが恥ずかしくなつてしまふくらいだ。

掻き乱された感情を隠すように、ムツキは彼の方を見る。彼女が浮かべている表情はいつもの悪戯っぽい、小悪魔のような愛らしい笑顔。

「ね、先生! 私達と一緒に食べよ!」

「いいのかい？」

「うん！ 勿論！ ね？ アルちゃん！」

唐突に話を振られたアルは丁度ラーメンを口に含んでいる最中であり——急いで咀嚼して飲み込み言葉を発する。アウトローを自称しているとは思えない行儀の良さだった。

「え、ええ。勿論良いけど……」

「先生はどうなの？」

「君達さえ良ければ、一緒に緒したいな」

「ほらほら、先生が座るから詰めて詰めて〜！」

ムツキは隣に座ってるアルを軽く押して、壁側の方へと誘導する。アルは「ちよ、ちよつとムツキー」と言いながら、ラーメンのスープが溢れないように器と自身を横にスライドさせて——1人座れる程度のスペースを確保した。

4人席に座っている関係上、3人が座るアル達側は少々手狭だが、ムツキはどうやらこの状況を楽しんでいるようで。

「くふふっ」

と、このように鈴が転がるような笑い声を奏でている。

それを先生は何処か懐かしむような、慈しむような……思い出を摘むような目で眺めている。ムツキだけではない。アルも、カヨコも、ハルカも、彼は全員をそんな目で眺めていた。

何処か、遠くを見るような。世界そのものを見渡しているような。或いは、未来を夢想している瞳。蜃気楼の如く、実態を持たない儚さは1回の瞬きの刹那で消えてしまいそう。

勿論、そんな事はない。彼の存在は連続性を保ったまま此処に在る。だが、ふと目を離れた瞬間にいなくなってしまうそう……そんな、不吉な予感消えてくれない。

「そういうええ、先生も朝食かしら？」

「そうだね。今日の朝食兼昼食、って感じかな」

アビドスの会議後、欠席していたホシノを除く面々で女子会を開催しようとしていたため、空気を読んだ先生は静かに退散し……『そういうええご飯食べてなかった』と思い、今に至る。

正直、朝からラーメンは中々に辛い気がするが、あつさりした物を頼めば大丈夫であると信じている。この体はまだ若いのだ。お兄さんを自称するつもりはないが、まだおじさんではない……と思いたい。

そうしている内に、先ほど注文したメニューが届いた。塩ラーメン、麺少なめ。良い香りが鼻孔を擦り、食欲を無性に駆り立てる。先生は「いただきます」と言いつて箸を手に取り、麺を口元に運ぶ。

——うん、やっぱり美味しい。

「……先生つて、この後暇？」

5人でラーメンに舌鼓を打っていると、ふとカヨコが問いかけてきた。先生は「うん、暇だよ」と笑って答える。

実際、暇なのだ。この後に控えているタスクはシャレーの仕事だけ。夜は別行動中のワカモに会いに行くつもりのため空いていないが……それより前であれば予定に融通は効く。

そもそも、生徒のお願い以上に優先すべき事柄なんてない。断るつもりなんて全くなかった。

「そう。それなら、先生に聞きたいことがあって」

「聞きたいこと、ね」

カヨコ「うん」と言つて——身を乗り出して対面に座る先生の耳に口を近づけ、語る。

「先生を含む私達が、この先相対する敵……それが、アビドスに伝わる怪談なのかって確認」

「……鋭いね。ああ、じゃあその辺りの話をしようか。場所は……私が泊つてるホテルでいいかい？」

先生がそう言うと、カヨコは黙って頷いた。

——アビドスに伝わる怪談。それに関する情報はあまりにも少ない。今から数十年前に初めて目撃された、と云うのがアビドスの上層部や連邦生徒会に保存されている情報であるが……実際は異なる。

その存在は、ずっと前からキヴオトスに牙を？いているのだ。それが分からなかったのは時代に応じて姿が変化しているから。ソフト

自体はずっと前から……それこそ、キヴォトス成立と同時期に『発生』しているだろう。

ソフトはそのままにハードを変えながら今も尚砂漠の下で目覚めを待つ莫大な神秘……それこそが、アビドスに伝わる怪談の正体だ。

「ん〜？ 2人とも何の話してるの？」

「ここで話すような内容じゃないから、詳しくは後で皆に話すよ。カヨコが知っていることも、知らない事も——ああ、全部話すさ。それよりも、皆は他に食べたいものはないかい？ 私が持つから好きに頼んでいいよ」

「そ、そんな……悪いですよ……」

「気にしないで。皆にまた会えて嬉しいんだ。だから、これくらいはやらせてよ」

朗らかに笑う先生に、真剣な表情をしていたカヨコは毒気を抜かれたように溜息を吐く。先ほどまで、真面目な話をしていたとは思えないくらい、雰囲気は緩かった。

そして、先生の「好きに頼んでいいよ」という言葉を受けた便利屋の少女達は暫くの逡巡後——メニュー表を手に取り、吟味を開始する。

「……それじゃあ、この——」

刹那——ラーメン屋は一瞬で圧壊した。

神の知識（ザフキエル）

閑静な砂漠地帯を1個中隊程度の人数が歩いていた。一目でアビドス自治区の生徒ではないと分かる出で立ち。黒い軍服のような荘厳な制服を纏う彼女達はゲヘナ学園の風紀委員。キヴオトス有数の強者たる空崎ヒナが委員長を務めている、不良にとっては悪夢よりも恐ろしい集団であった。

ゲヘナを拠点とする彼女達が僻地を歩いている理由は便利屋68にある。ざつくりと言ってしまうえば、タレコミを受けたのだ。便利屋68がアビドスで活動している——という内容の。

風紀委員会の中で便利屋68の危険度は然程高くない。他のテロリスト集団
部活動……例を挙げると美食研究会や温泉開発部といった面々がアレ過ぎるのもあるが、それでも便利屋はゲヘナの中では比較的大人しい方。それなのに、幹部2人に加えて中隊を仕向けるのは大きな理由があった。

——エデン条約。

大事な条約が控えているのに、万が一にも他の自治区で問題なんか起こしてほしくなかったのだ。廃校寸前の学校が相手とはいえ、外交問題になったら不味い。ゲヘナの信用問題に関わるのだ。

故に、彼女達に与えられた任務は便利屋68構成員の速やかな無力化及び捕縛。命令に忠実な彼女達は隊列を乱さずに、アル達がいる場所であるラーメン屋柴関に向かっていたのだが……。

「……………」

隊列の先頭を歩いていたイオリが唐突に足を止めた。それから彼女はキョロキョロと辺りを見渡すが——特に何も無い。気のせいだったか、と思い再び歩を進めようとする。

「どうしましたか、イオリ？」

そんな彼女の後ろからチナツが心配そうに問いかけた。何かあったのだろうか、と。イオリが任務中に他の事に気を取られるのはとても珍しい。

「何か聞こえた気がしたけど、気のせいだったみたい。このまま任務

を続行する」

「音、ですか……」

チナツはどうにも胸のざわめきが収まらず、タブレットを用いて周囲の状況を走査する。だが、住民の影ひとつないゴーストタウンが眼下いつぱいに広がるのみ。

やはり、イオリの言った通り気のせいなのだろう。そう思い込むことにして、再び目的地に向かおうとする刹那――。

『私の声が聞こえる全てに伝達する』

声が聞こえた。息も絶え絶えな、男の声。時折苦しそうにせき込むが、その声に宿る意志だけは煌々と燃えている。

「……この声は、まさか……！」

この声を、柔らかな春のような声を聴いたことがある。チナツは顔を不安一色に染め上げながら、走査範囲を拡大。お願いだから間違っていないほしい――。そう思った彼女を酷薄な現実が嘲笑う。この声の発生源はラーメン屋柴関であり、その中には民間人2人の反応。片方のバイタルは正常値であるが、もう一人は――危険域。彼女の顔が真っ青になった。

『これより本区域は連邦捜査部シャーレの管轄下に入る』

「シャーレって、あの……」

「ッ！ 救護班、各キットの準備を！ ラーメン屋柴関に急行します！」

叫ぶチナツと、突然の命令に困惑しながらも忠実に熟そうとする救護班の人員達。それを訝し気に見ていたイオリは彼女の叫んだ内容と、聞こえた声を元に情報を組み立て――。一つの結論に至った。

便利屋68がシャーレの先生をぶっ飛ばしたのではないか――。そんな疑念。仮にこれが正しかった場合、ゲヘナは多方面に敵を抱えることになる。

特に、長らく敵対していたトリニティのティーパーティーの1人はシャーレの先生に入れ込んでいると聞く上に、ミレニアムのセミナー生徒も頻繁にシャーレに出入りしているらしい。ゲヘナ生徒によつ

て先生が傷つけられたともなれば、間違いなくこの2校は敵に回る。
『大規模な戦闘行為が予想されるため、速やかに退避を』

誰かが息を呑む音が聞こえた。大規模とはどの程度なのか、それは分からない。だが、この放送が聞こえる範囲は戦地になる可能性があるのだろう。現在地からラーメン屋柴関まで直線距離5km——
——冗談ではない範囲だ。

『何としてでも、貴方達の命は守る』

その声を最後に、放送が途切れる。

鋼の意志、鉄の決意、死線を踏み越える不退転の宣誓。この身の全ては誰かを守るためにある——そう言わんばかりの声だった。



気力を振り絞り、最低限の避難勧告を終えた先生はタブレットを落とす。もう何かを持つ力が残っていないのだ。震える指先でそれを拾い、コートのポケットに仕舞って荒く呼吸をする。

今、こうして意識を保っているだけでも精一杯。本当に情けない事この上ない。

「はぁ……はぁ……カハッ……」

酷い痛みだった。まるで体の内側を蟲に啄まれているような激痛。視界が霞む。耳鳴りが酷い。緊急時医療キットはケースごと粉砕されたため、傷を誤魔化す手段はない。最低限、狙いを絞らせないためのデコイはばら撒いたが——焼け石に水だろう。気付いた個体は必ず^{先生}本体を狙う。

アロナの防御は正常に作動した。巡航ミサイルですら無傷で防ぎきる概念防御は先生とアル達、大将を包み込んだが——貫通された。

攻撃の位相をずらせなかったのだ。咄嗟に物理防御壁に切り替えなければアル達や大将は兎も角、彼は物言わぬ肉塊に成り果てていただろう。

『先生ッ！』

「あ、ろな……」

呼吸するだけで胸に激痛が走る。肋骨が折れたのだろう。だが、内臓には刺さっていない。

——いや、自分の傷なんてどうでもいい。死んでいなければ、それでいいのだ。

咄嗟に抱きしめたムツキに怪我は見当たらない。恐らく、軽い脳震盪を起こして気絶しているだけ。すぐに目を覚ますだろう。彼女を汚す赤い血は全て先生のものだ。

良かった、心からそう思う。守れた大切な温もりを確かめるようにもう一度強く抱きしめて、ゆっくりと地面に下して、寝かせる。そして、優しい手つきで髪を撫でて——その瞳を決意覚に染めた。

「先生ッ」

「カヨコ……」

この惨状を作り出した敵を排除すべく、傷だらけの体に鞭を打った先生の前に現れたのはカヨコだった。彼女は先生の状態を見て、息を呑む。彼女は端正な顔を歪ませ、駆け足で彼の元へと寄り、彼の状態をしつかりと観察した。

——重傷だ。右足は人体の構造上あり得ない方向に曲がっている。脇腹には棒状の何かが突き刺さり、貫通。白い制服は至る所が砂塵と血に塗れ、見る影もない。右腕は鈍い何かに切り裂かれたような傷跡、肉が抉れている。頭部からの出血もあり、油断は許されない。「出血が酷い。何か止血用の……」

カヨコは服のポケットを漁り、ハンカチを取り出す。心許ないが、何も無いよりはマシだ。傷口を固く縛ると彼が苦悶の声を上げ、咳込む。口元を覆った手の隙間から粘度の高い赤黒い血が零れて、砂漠に毒々しい華を咲かせた。

それを見て、カヨコは更に顔を歪ませた。内臓まで傷ついている。早く病院に行かないと。

逸る思考と五月蠅い心音を理性で封じ込めて、冷静を取り戻す。刻一刻と擦り減る先生の命、彼のタイムリミットは自身に左右されると分かってしまったから。

カヨコは周囲を見渡す。前方約300m先、人影。先生の権能により五感を拡張された彼女は目を凝らし、その詳細を捕えた。だが、それはあまりにも信じられないもので。

「なに、あれ……」

推定50体のヒトガタが伽藍堂の顔を一様に此方に向けていた。手もある。足もある。だが、顔に当たるパーツだけない。カヨコは恥も外聞も捨てて悲鳴を上げたくなった。生理的嫌悪、というべきだろうか。無条件で『駄目だ』と思ってしまうような。

「天使の眷属だよ……ある種の超自然現象さ」

「天使……」

譫言のようにカヨコが呟けば、先生は力なく笑って咳込む。湿っぽい、気道に詰まった血を吐き出すような音。咄嗟に背中をさすっても、状態は悪化するばかり。

「み、皆さん、ご無事で——」

「けほッ、ゴホッ！ な、何よこれ!? 何なの!? 誰の仕業よ!」

砂塵の中から現れたのはハルカとアルだった。彼女達も傷らしい傷は負っていない。彼女達は木端微塵になった辺りを見渡し——
—そして、血塗れの先生と、彼の応急処置をしているカヨコを視界に入れた。

「先生!? だ、大丈夫なの!? 血が、こんなに、あ、足も……」

「……大、丈夫だ、よ……あはは」

「喋らないで先生!」

どう考えても強がりだった。いつもの様な口調ではあるが、声音は落ち込んでいて顔色は悪い。そんな彼を見て、ハルカは奥歯をガタガタと震わせて——弾かれたように駆け寄り、恐る恐る彼に触れる。弱々しい脈、触れた掌にはべったりと濡れた血がこびり付いて、彼女は「ひッ!」と小さく悲鳴を上げた。

「ち、血がいつぱい……お医者様に、行か、行かないと……! 先生、死んじゃう……!」

そう、病院に急がなければならぬ。応急処置でお茶を濁せるような怪我ではないのだ。だが、どうやって? ここはアビドス。近くの

病院なんてない。それに、今は敵襲を受けている状況なのだ。大人しく逃がしてくれるとは思えない。次々と頭をよぎる悪い予想を強引に振り払うように、叫ぶ。

「ハルカ、多分店のカウンターに医療キットがあるはずだから取ってきて！ 社長は敵をッ！」

「えっ、ええ！ 分かったわ！」

「は、はいッ！」

カヨコの指示に従い、2人は弾かれたように飛び出す。全ては先生の安全のために。

アルは瓦礫に隠れながら射撃を行い敵を倒して行く。だが、敵の増殖スピードが速すぎる。倍々ゲームのように増えていく敵影に彼女の顔が青くなるが、それでも先生をここから逃がすために奮闘する。敵は全て倒さなくていい。ただ、彼を逃がすための時間稼ぎに徹すれば。

無論、それを加味しても状況は悪い。間違いなく便利屋史上最大の危機だろう。だが、未来の大事な経営顧問のために殿として壁となる決意は揺るがなかった。

ハルカはカウンターの瓦礫の山をひっくり返す勢いでキットを探し始める。半分泣きながら、頭を過る悪い未来を振り払うように。彼女の存在を無条件で肯定してくれた彼を、大切だと笑ってくれた彼を

失わないために。

「——んう」

その時、ムツキは目を覚ました。彼女は霞む視界で辺りを見渡す。粉々になったラーメン屋、吹き飛ばされた全て。そして——

「——せん、せ」

悲鳴にも、吐息にも似た声が漏れた。目の前の光景が現実であると信じたくなかったのだ。噎せ返る様な血の匂い、その裏側に燻る死臭。悪夢なら覚めてくれと願っても眼前の光景は消えてくれない。

体が硬直し、目が見開かれ——それから弾かれたように

トリックオアトリック
M G 5をバッグから引き抜いた。可愛らしい顔には青筋が浮かん

であり、先生を血濡れにした敵への憎悪と戦意を滾らせる。

「ムツキッ」

「分かつてる！ アルちゃんと一緒に敵をぶっ飛ばせば良いんでしょッ！」

ムツキは怒りのまま飛び出し、アルに加勢する。だが、多勢に無勢。目を覆いたくなるような劣勢である事に変わらない。そもそも、2人がこうしてあの軍勢を相手に『戦闘』を行えているのも先生のアシストに依る所が大きいのだ。彼との接続が途切れた瞬間、彼女達は磨り潰されるだろう。

「カヨコさんッ！ 先生ッ！」

「先生、無事かッ！」

此方に駆け寄ってくる影2つ。ハルカと大将だ。その手には救急箱が握られている。

受け取ったキットには包帯や止血用パッチが詰められており、使用期限も切れていない。万が一に備えて大将がこまめに交換してくれていたおかげだ。これで出血は多少マシになるだろう。

「酷え……」

「大将……」無事で、何よりです」

「言ってる場合かよッ！ そのお嬢ちゃん、添木を持ってきてくれ！ 足を固定する！」

大将は先生の惨状に顔を悲痛そうに歪めた後、ハルカに指示を飛ばす。出血の手当てはカヨコがやってくれている。だが、足の骨折は手つかずだった。大将はその手当をしよう——彼の足を握る。

「痛てえかもしれないが、我慢してくれよ」

鈍い音と共に、折れ曲がっていた足が戻される。先生は痛そうなお呻き声一つだけ上げて、「ありがとうございます」と笑った。全身が痛すぎて、新たに痛む箇所が分からないのだろう。痛覚の麻痺、大将は不味いと思った。

その後、ハルカが持ってきた添木を使用して足を固定、止血もある程度は終わった。この場で出来る事はもう無い。あとは彼を病院に

送るだけ。

「皆、撤退するよ！ ハルカは2人のカバーを！」

「奥に車がある！ 急いで持つてくるから待つてくれ！」

言うや否や、駆け出す大将。

アルとムツキはラインを下げて、ハルカが前衛として2人のカバーに入る。何とか窮地は脱出できた——そう思ったカヨコは先生に肩を貸して、戦闘の余波が届かない場所まで運ぼうとする。

「逃げるよ、先生。ちよつと乱暴になるかもしれ——ッ」

カヨコは何が起きたのか分からなかった。ただ、何かに優しく突き放される衝撃は体に鮮明に残っていて。右肩にあつたはずの先生の温度は何処にもなく。

虚空を切った手、向けた視線の先には——彼女を優しく退けた彼の左手と、血色の悪い顔に浮かんでいた申し訳なきような苦笑い。

「せ——」

その、彼の眼前。何かがいた。2m程度のヒトガタ。だが、どう見ても真面な生命ではない。体も背中の中も白一色、顔に当たる場所には無数の歯車が回り、軋んでいる。頭上に浮かんでいるのはヘイローに似た何か。唐突に見える出現は限定的な空間跳躍に依るものだろう。

そして、直感した。こいつがこの惨状を作り出したのだと。

だが、そんな事はどうでもいい。問題なのは、そんな訳の分からない生命体が——先生に向かって手を振り下ろそうとしている事だ。それはまるで、断頭台のよう。

「やめろッ！」

カヨコの祈りにも似た叫び。その声に振り返ったアル達。止めようにも、全てが遅かった。

「Save in the name of God——死
ね、救世主」

あらゆる祈りと心を踏み躪り、嘲笑うかの如く、ギロチンのような手が振り下ろされた。甲高い、何かが砕けるような音。次いで、肉が潰れ骨が砕ける音。

ゴムボールのように吹き飛ばされた先生は勢いよく地面を転がり、そのまま瓦礫の山に背中から衝突した。

「カハッ……」

口から血と共に息を吐きだした先生はそのままピクリとも動かなくなり、四肢が力なく投げ出される。彼の懐から滑り落ちたタブレットには赤く点滅するバイタルサインが主張していて、再び彼が死の淵に立たされている事が分かった、分かってしまった。

「お前エッ！」

ムツキの怒号と共に、全員の戦意が滾った。銃のグリップを壊さんばかりに固く握り締め、先生を傷つけた悪意を睨みつける。

——こいつだけは許せない。全員が、そう思った。

敵識別名称、神ザフキエルの知識。

「ぶっ殺してやる」

【OPEN COMBAT】

Gun, or Death

「——反応ありました！ 北西方向、1000m先、どうやら戦闘中の模様です！」

「全く、何が起きてるのよ！」

「分かりません！ 通信状態が酷くて音だけしか……！」

アビドス対策委員会部室で開かれた4人の女子会。暫しの休息を謳歌していた彼女達は、今や砂漠地帯を全力疾走している。学校の近辺……半径10km圏内で異常が感知されたのだ。

愛銃と装備を担ぎ、急いで学校を飛び出した彼女達はアヤネのドローンを先行させて現地での情報収集を行わせたが、ノイズ塗れの音声データしか送られてこない。何かに妨害を受けているような酷い電波障害は、アビドス対策委員会の面々に断片的な情報しか渡さず、自身の目で見える事を強制させた。

彼女達には懸念事項が2つあった。1つは、この先——アヤネの指し示した方向の先には、セリカのバイト先である柴関があるのだ。万が一、大将や客が戦闘に巻き込まれていたら……そう思わずにいられない。

もう1つは、異常が感知されたその直後にシャーレの名前でアビドスの一部地区への立ち入り禁止令が敷かれたことだ。

この異常事態の中枢に、少なくとも先生と大将がいる。少女達を逸らせるには充分過ぎる劇薬であった。

早く、早く、早く。足が纏れそうになる位に走り、一刻も早く現場へ行かんとするアビドス。近づけば近づくほど大きくなる戦闘音、それに伴い異質に張り詰める空気。

そして——アヤネが飛ばしていたドローンが唐突に沈黙した。

「——ッ！ ドローン、ロスト！」

「目を潰された……！」

アヤネの叫ぶような報告にシロコが奥歯を鳴らす。撃墜された、ということとは気付かれたということだ。奇襲の成功率は目に見えて減

り、状況が悪化する。敵も分からない、味方も分からない。それなのに、偵察用のドローンまで潰されては……頼れるのは自分の目だけしかない。

だが、そんな事に構っている場合じゃない。あと少しで戦場の全貌が見えるのだ。撃墜されたことを悔やむより足を前に動かさなければ。

——そうして、戦場にたどり着いた彼女達の眼前に広がる光景は地獄だった。

「な、何よこれ、柴関が——」

「……!」

「これは……」

「酷過ぎます……!」

ラーメン柴関は何処にもない。瓦礫の山が四方八方に飛び散っていて辛うじて『此処に何かがあった事』が分かる程度。絶え間ない銃撃音と爆発音を奏でて、周囲を硝煙と火薬の臭いが包み込む。

「戦闘を行ってるのは——便利屋の皆さんと……」

「便利屋?! いや、そっちは良いんだけどアレは?!」

便利屋が何でこんな所で戦っているのだとか、色々聞きたいことはある。だが、そんな疑問は彼女達と敵対している異形の白いヒトガタを前に吹き飛んだ。

何だアレは。悍ましい、気持ち悪い。あんなモノがこの世界に存在していいはずがない。まるで現実に空いた孔のような虚無、しかし何処か目を離せない高貴さがある。

例えるなら、邪教の宗教画のような。尊く在れと祈られ、願われた暗黒の何か。

「分かりません! ですが、多分アレが——」

「柴関をこんな風にした悪い方ですよね?」

「はい、その可能性が高いかと……シロコ先輩?」

アヤネの視界に映ったのは、屈んでいるシロコだった。なにやら地面に転がっている物を見て、顔を青ざめさせている。何か悪いものを見たような、そんな顔。呼吸が浅く、早く。開いた動向で茫然と見つ

めていた。

彼女は震える指先でそれを掴むと、温かい感触が掌から伝わった。ぬちやり、と湿っぽくて粘度の高い液体。鼻孔を擦る鉄の臭い。間違はなく血だ——シロコの頭に嫌なイメージが浮かぶ。

「皆、これ……」

「どうしましたか、シロコちゃ——ッ！」

ノノミ達はシロコの手握られた鉄製の棒を見て息を呑んだ。全体が赤で濡れている槍のようなその穂先は鋭く尖っている。もし仮に人体に深く突き刺せば『こういう汚れ方』をするであろう。まさか、いやそんな——全員の脳裏に想像が過った。

「まさか、先生が——」

「……まだ、断定できません。ですが、先生と大将さんのお姿が見えないのが気になります。一体、どちらへ……」

アヤネの言葉に、ノノミは否を唱える。そう、まだ断定するべきではないのだ。確かに先生の可能性はある。だが、大将やそれ以外の……便利屋の少女達の可能性も充分に考えられる。先生が負傷したとなればアビドスの士気に悪影響を与えかねない——そう思った、委員長代理としての顔を持つノノミのフォロー。だが、不安を完全に押し殺すには至らず、先生の居場所を求める言葉が口から零れるに至った。

先生の姿が何処にもないのだ。根っからのお人好しの彼が戦っている便利屋の少女達を置いて逃げる訳がないため、必ず何処かにいるだろう。だが、見つからない。大将もいない。彼らは一体何処に消えてしまったのか。

「ん、何方にせよ放っておけない」

「そ、そうです！ 周囲を調べましょう！ あ、ですが便利屋の方の加勢にも行かなければ——」

「セリカちゃんとアビドスの子達か!？」

先生達を搜索するグループと便利屋に加勢するグループに分けようとしていた彼女達に声を掛けたのは、探し人であった大将であった。彼は一際大きな瓦礫の山の裏側から顔と手を覗かせていて、手招

きしている。

「大将！ 無事だったんだ！ 良かった……！」

大将の無事を確認した彼女達の顔が緩む。駆け寄り、彼の姿を見たアビドスの面々は一瞬表情を強張らせた。エプロン等の衣類が血まみれだったのだ。だが、それが表面上の汚れだという事に気付き、胸を撫で下したが——そこで、ふと思った。では、大将を汚す血は誰のものなのか。あの鉄の棒は誰の体に突き刺さったものなのか。

そして、その不安を裏打ちするように、先生の姿は変わらず何処にもなかった。

「大将、先生って知らない？ 多分、何処かにいると思うんだけど……」

その問いに大将が表情を悲痛に歪めた。全員の背筋に嫌な汗が流れる。呼吸が荒くなり、瞳孔が開いて、胸を掻き毟りたくなる不安が全身に襲い掛かった。

「一応、応急処置はした。今はあそこで……」

大将が指差した方には真つ二つになった乗用車が鎮座していた。まるで焼き切ったような切断面を見せるそれは至る所が凹み、汚れ、砕けている。恐らく戦闘によるものだろう。

どう考えても廃棄処分されるであろう車の残骸、その裏側に彼は居た。

「せん、せ、い」

変わり果てた姿で。

「先生ッ！」

全員が先生の傍まで駆け寄り、その傷を見て息を？んだ。白いコートは砂塵と血で汚れ、ボタンが開けられたシャツから覗く素肌も赤く、至る所に包帯が巻かれパッチが充てられている。だが、完全に流血は止まっていけないように時間が経つに連れて滲んだ血の面積が大きくなっていった。

特に深い傷は2箇所、右脇腹と右腕の肘から下。兎に角、流血が多すぎる。早く輸血をしなければ失血死してしまうだろう。

「意識が戻らねえんだ。今、あの子達便利屋68が病院までの道を切り開いて

「くれているんだが……」

「状況は最悪、ですね」

アヤネは予備のドローンを飛ばし、上空から戦場を俯瞰する。タブレットに映る4つの光点は軍勢を相手にしている便利屋68。彼女達を囲むように夥しい数の敵が配置され、磨り潰さんと苛烈な攻撃を加えている。

彼女達の傍には一際大きな反応。恐らくリーダー格だ。足止めをしてきているのだろう。

「ん……」

全員がタブレットを見ている中、シロコはふと空を見上げた。何か起きるといふ虫の知らせ、野生の勘が警鐘を鳴らしたから。自然とグリップを握る力が強くなった。

果たして、その直感は見事に当たってしまい——彼女は拝借したホシノのシールドを展開した。

「……飛行機雲。アヤネ、9時の方向、見える？」

「ッ！ 確認しました！ 時速300kmで接近する飛行物体です！」

「300km!?!? でしょッ!?!」

「嘘じゃありませんッ！ 皆さん、間もなく接敵します！ 衝撃に備えて——！」

全員を守るように前に出たシロコ。彼女が持つシールドと未確認飛行物体が正面衝突する。爆発したように舞い上がる砂塵と響き渡る重低音。身体能力に優れる彼女であるが、流石に今回は分が悪かった。相手の運動エネルギーが大きい過ぎるのだ。踏みしめた大地に靴の跡を残しながら後退り、過剰な衝撃を受け流そうと必死の抵抗を試み、何とか持ち堪えている。

そして、相手も埒が明かないと思ったのか、原始的な突撃を止めて距離を取った。当たり前のように空中を飛んでいるが、それを気に留める者は誰もいない。シロコは僅か数秒の衝突で使い物にならなくなったシールドを投げ捨てて、銃を構えた。全員既に臨戦態勢、後衛のアヤネですら銃を抜いている。

先程の突撃は——シロコを狙ったものではない。彼女の後ろ、先生を狙ったものだ。アイツは先生を殺すつもりだった。

許せない、許せるわけがない。アレは必ず排除しなければならない敵だ。

「どの道、やることは変わらない」

「ですね……」

「取り敢えず、コイツをぶっ飛ばすわよ！ 大将、先生をお願い！」

「敵、来ます！」

白い羽が舞う。文明圏への憎悪と、救世主への殺意を発露する死天使はその喉を震わせ。

「A a a a a a——」

それが、開戦の号砲だった。



血が流れる感覚。命が終わる感覚。体が冷却される感覚。何度も味わった、死に逝く感覚。

それに安堵を感じ始めたのは、果たして何度目の回帰の頃だっただろうか。生きていることに違和感を覚えたのは何度目の生存だろうか。

死んだはずの命が生きていることが気持ち悪い。そんな当たり前の感覚で自身の生存を唾棄している。恵まれている生なのに、心の底から喜べない。

大切な人達が傍にいてくれる幸福、彼女から託された夢、自分自身の誇り。満たされている。幸せなはずだ。例え他の誰かから地獄のような人生と言われても、彼は自身の幸福を疑ったことはただの一度もない。それなのに、その筈なのに、どうしようもない程苦しくなってしまう時がある。寂しくなってしまう時がある。

先生はキヴオトスの住民とは違うのだ。この世界に同胞なんて一人もいない、孤独な生命。どこまでも外部の人間で、座席がなくて、名簿に名前が記されていない者。悩みを打ち明ける人もいなければ、頼

れる誰かもいない。

大切な人達が、彼女が遠い。こんなにも遠い。

死ぬことはなく、生まれることはなく——そして、これ以上回帰することも無い。既に生命として取り返しのつかないほど破綻してしまっているから、二度と誰かと同じ空を見上げることはない。例え同じ空の下でも、違うように見上げるしかできない。

だが——。

まだ体は動く。まだ心は折れていない。剣も祈りも、この手の中にある。

例え、死に瀕していても——私は皆の先生なのだ。

ならば、立ち上がらなければ。

息を吸う。／息を止める。

目を開ける。／目を閉じる。

手を握る。／手を放す。

足で踏みしめる。／足を投げ出す。

私は生きている。／私は死んでいる。

——私は、自分の意志で生存を選び取ろう。



何とか白い怪物を撃退したアビドスの面々は、先生と大将を連れてアル達と合流した。この数相手に分散するのは悪手と判断したのだろう。狙うは唯一点、この包囲網を食い破らんと全員が奮戦する。

そんな時に。

「……………」

掠れるような声が聞こえた途端、彼の近くで戦っていた少女達が振り返った。

「先生ッ！ 大丈夫!? ねえ!?!」

「ムツキちゃん、揺らさないでくださいー!」

駆け寄り、涙を浮かべながら先生の肩を揺らしたムツキをノノミが咎める。だが、その振動が功を奏したのか、彼は薄っすらと目を開け

た。

けほ、と弱々しい咳を一つ。だが、喀血はしていない。

「先生ッ！」

「ああ、私は……」

そう言つて、先生は立ち上がるうとする。状況は把握した。

敵は複製を応用した全能の端末の劣化版。際限なく生み出される眷属は統括個体たる神の知識を倒せば消える。攻撃方法は原始的な徒手空拳と、指向性を持たせた神秘の砲撃、権能をダウングレードさせた超重力のみ。防御も強固な概念装甲は無く、素のスペックが高いだけ。問題ない、切り札を使わずとも殺し切れる。

既に量子波送受信機構の効果範囲にアビドスの面々も加えている。

此処は戦場だ。先生は己の仕事を果たすべく、その両脚に力を入れた。

「まだ立つてはいけませんッ！」

「皆が戦っているんだ。私だけ寝ている訳にはいかないさ」

彼はそう言つて、力なく笑う。意識が戻っただけで事態は何も好転していないのだ。血を流しすぎた事には変わらないし、傷は癒えていない。早く撤退しないと———そう思ったアヤネの思考を読んだように、彼女の望みと真逆の言葉を紡ぐ。

「撤退はない。神の知識は此処で倒す」

「……先生、本気ですか？」

「本気だよ。元より、アレは私を狙っている。何処にも逃げ場なんてないさ……」

彼は案ずるノノミを通り過ぎ、最前線で命を張ろうとするが———
—その歩みはアヤネが立ち塞がる事によって止められた。

「行かせません」

「お願いだよ、アヤネ。退いてくれないかい？」

「嫌です。絶対に行かせませんッ」

「どうしても？」

「どうしても、です」

互いに一步も引かない攻防。交錯する視線、互いが互いに大切だと

心から思っている。だから行きたい、行かせたくない。

「敵は私達が抑えます。だから、先生は——！」

「それこそ出来ない相談だよ。戦っている生徒を置いて私だけが逃げる訳にはいかない」

愛すべき生徒達から敵を引き離す為の逃亡なら選択しよう。だが、自身を生かす為の逃げの一手など選べるわけがない。

「アヤネの心配は嬉しい。嘘じゃない、本心だよ。君に思われているのはとても光栄さ。でも、それでも——私は行くよ。皆を守りたいんだ。皆が大切なんだ」

彼は「だから」と言つて——見惚れてしまう程、綺麗な笑顔を浮かべた。

「私にどうか、皆を救う選択を……許してほしい」

反撃

彼の救済の懇願、あまりにも救世主らしい願望の発露。彼は根底から『こう』なのだ。だからこそ救世主だった、誰よりも救世主に向いていた。

自分の為には怒れなくて、自分の為には戦えなくて。何度失敗しても決して挫けずに、必ず自分の道をやり遂げる。

でも——今、そんな高潔な心は誰も求めていないのだ。生きていと、逃げようと言ってほしかった。後の事は逃げて、傷が癒えてから考えればいい。

「……それでも、駄目なものは駄目です」

「私もアヤネちゃんと同じ意見です。委員長代理として、先生の戦闘指揮は認められません。この機能も早く切ってください」

ノノミはそう言つて、先生が齎した眼を指差す。この機能も先生に少くない負担を掛けているはずだ。以前、彼が負傷したときにワカモが使わせなかったことが何よりも証拠になる。

そして、先生は今度こそ困つたような顔をした。我儘だということ。彼女は彼女も自覚している。でも、退くわけにはいかない。他ならぬ彼に生きてほしいから。あまりにも戦場が似合わない彼に、一刻も早く此処から離れてほしいから。

あの脅威と彼抜きで戦うのは確かに怖い。彼と一緒に戦つてくれると言つてくれた時……喜ぶ自分が居なかったと言えば嘘になる。

でも、もうこれ以上彼に無理はさせられない。泣かない彼を戦わせるわけにはいかない。傷だらけで歩む彼に、重荷を背負わせてなるものか。

それなのに。

「私はシャーレの先生なんだよ。君達を守り、教え、導き、寄り添い——ずつと傍にすることが私の望みなんだ。君達が安心して帰れる場所で在り続けることが私の使命なんだよ」

君達だけに背負わせない。銃で撃たれても斃れない君達を守りた

い。生徒だけに戦わせてなるものか。

そう——こういう人だから、自分達は、アビドスは彼を信じたのだ。例え死の淵に立たされようとも、変わることはない彼の本質、根源。誰かの悲劇を認めない、誰もが陽だまりで笑える世界を作りたいたいという夢。例え、その景色の先に自分が居なくても——それで走るのは、花束と共に渡された願いがあるから。

「連邦生徒会長が託してくれた生徒達と、ずっと一緒に居たいんだ」
この言葉の裏側に隠された感情を、ノノミ達は読み取った。

狂おしい程の熱量。甘く、蕩ける、切ない思い。ただ、彼女に会いたい。一目でいい。会って話したい。胸に残る煌めく思い出の数々を伝えたかった。

——だけど、それはきつと叶わぬ願い。彼女と彼はもう会うことはないのだから。

彼は花のように笑う。弾丸が飛び交う戦場にはあまりにも似つかわしくない笑み。

——それを見て、ノノミも覚悟を決めた。

「……分かりました」

「ノノミ先輩ッ！ 本気ですか!？」

「こうなった先生は折れてくれません。此処で押し問答を繰り返すのなら、一刻も早く敵を倒して先生を病院に送った方が良いです」

「ですが……!」

多くの感情を押し殺したノノミの声音に、アヤネは言葉を詰まらせた。彼女の言っている事は正しい。確かに、敵を排除した何の憂いもない状態で治療を受けさせた方が彼も納得するし、被害も拡大しにくいだろう。しかし、しかし——。

「……先生、それは譲れないことなんだよね?」

「ああ、譲れない。これは私の誇りなんだ。誰が止めても、私は行く」
その蒼い瞳に宿るのは、尊き者を守る為の決意。煌々と燃えているのに、その熱は灯のように温かい。彼の心の温度は、不安で一杯だった少女達を優しく溶かした。

ムツキは俯きながら言葉を紡ぐ。彼を止めれない己の無力さを噛

み締めるように、悔いるように。

「じゃあ、絶対またウチに遊びに来て、一緒に遊んでね……約束だよ？」

「ああ、約束だ」

先生は優しく微笑みながら、ムツキの小指を自身の小指と絡める。ゆびきりげんまん、彼が彼であるために破れない誓いの一つ。

大切だと言いながら誰かの心を傷つけている己に嫌気がする。この誇りを守ることは、生徒を泣かせることだと改めて突きつけられた。

戦えない己が憎くて堪らない。簡単に死に絶える己が嫌いで堪らない。

「……理解できません。死ぬのが、怖くないんですか。もう会えないんですよ……」

「……私だって死ぬのは怖いさ。痛いのは怖い。誰かに会えないのは寂しい。でも、それでもやらなきゃいけない事がある。それが今なんだよ」

死ぬのは怖い。痛いのは嫌だ。戦うのはしんどくて、憎悪も嫌悪も疲れてしまう。毎日を笑って過ごせるなら、それに勝る幸福は無い。だけど、何を犠牲にしても帰りたいかかった日常に背を向けてまで守りたいものがあるから。

アヤネは俯いて、唇を噛み締める。こうでもしないと、嗚咽が零れてしまうから。彼に泣きついて、また困らせてしまうから。

彼はアヤネの頭を優しく撫で、「ごめんね」と一言。彼女を傷つけた己に嫌悪が募るばかりだ。だけど、自責は後でいい。

「——ワカモ、毎回……辛い思いをさせてごめんね」

「いえ……それが貴方様の選択であれば、このワカモ、どこまでも付いていきます」

音もなく彼の隣に立つワカモ。泣き腫らしたような瞳、嗚咽交じりの声音。それらは先生を縊る罪の茨だ。彼は一度目を伏せて、彼女の手握られたキットを手に取り、中身を取り出す。

活性アンブル、止血用血液凝固剤、毒素焼却剤。それに加えて細胞

活性ナノマシン。

考えられる副作用は幻覚、幻聴、激痛、神経の変調、末端の壊死、凍傷、体温低下、血中のヘモグロビン濃度の減少、細胞のネクローシス——他にも、色々。だが、そんな事はどうでもいいと言わんばかりに彼は躊躇いなく劇薬を打ち込んだ。

体の内側から歪な音が聞こえる。傷が再生する。損傷した細胞が健全な細胞ごと駆逐され、新たな細胞が生まれる。傷口の血液が凝固し、流血が停止。毒を燃やす花が彼の体を内側から崩壊させていた神秘を喰らい、強制的に正常状態へと持っていく。

莫大な負荷を肉体に掛けた結果、彼の口から赤黒い血と不要になった肉片が溢れ、もう一度地面に緋色の華を咲かせる。拒絶反応に近い震えが全身を悪寒と共に襲い掛かり、一瞬意識を飛ばしかけるが何とか繋ぎ止めた。それから鎮痛剤を服用し、脳内で限界稼働時間のカウントダウンを開始する。

駆け寄ろうとしたアヤネ達を手で制止させた彼は口元の血を袖で拭い——鋭い眼光で敵を射貫く。血塗れでありながら獰猛に笑う姿は、凄惨でありながらも何処か美しく見えた。

「ハッ……」

アレは生徒の敵だ。生徒を傷つける悪意だ。今は先生を狙っているが、その目的である『箱庭の浄化』を鑑みれば、先生を殺した後は矛先が生徒に向くだろう。そんな事は看過できない。故に、必ずここで殺すべきだ。彼が生徒の為の先生で在り続けるならば、避けては通れない道。

深く、深く。アロナの世界と接続する。通常戦闘ではカットしていた機能が稼働しニューロンが赤熱した。視界が沸騰し、燃える世界を見ながら最果てへと飛翔する姿は正しくイカロス。宇宙そのものを演算する事によって発生する莫大な負荷を理屈もクソもない唯の根性論で耐えながら、生徒に戦う術を齎す。

「さあ、反撃開始だ」



「……これは」

その変化に最も早く気付いたのはワカモであった。彼と接続されている視界がよりクリアになった……否、本来は見えない筈のものが見えるようになった。

眼前の天使達の弱点が、殺しやすい点、壊しやすい綻びが見える。試しにそのポイントに向けて銃弾を1発撃ち込むと、忽ち白い悍ましい体が崩壊し、土に還った。再生することはない。増殖することもない。ほぼ無尽蔵の再生力と増殖性能を誇る天使の眷属を完全に殺し切った。

——この現象を、確かにワカモは覚えている。何度も助けられた彼の権能であり、彼が最も嫌った——殺戮を効率的に行うための力だった。

これを使うという事は即ち、彼は本気なのだ。此処で相手を終わらせるつもりだとワカモは分かった。

とくん、とくん、と聞こえる音は彼の命の鼓動。彼が持つ神殺しの技術が——遂にその真価を發揮した。

相手のスケールを減らし、神秘を解釈し、殺しやすい弱点を強制的に作り出し、崇高を撃ち落とす——解体の牙。ゲマトリアから学んだ数秘術は、酷く論理的なロジックで以て相手を暴き、その存在規模を大幅にスケールダウンさせた。

「皆さんッ！ 眼に映るポイントを狙ってください！」

先生の代わりにワカモが叫ぶと、各所から頼もしい返事が返ってくる。視界に映る敵影が加速度的に減少し、その総数は漸く1000を切った。

それを視認した彼女は突貫する。雑兵の掃除はアビドスに任せただけだ。元より、彼女の装備は殲滅能力に秀でたものではない。此処で雑魚を掃除するよりも、親玉の方へ加勢した方が戦場全体の負担が減る上に、彼女自身も出来る事が増える。それに、アビドスにはミニガン使いが居るのだ。彼女を全員でカバーしながら戦えば持ち堪えることは出来る。

そう思ったワカモは本命を叩くべく便利屋がいる戦場へ突撃。向かってくる雑魚を銃剣を巧みに振り回しながら切り刻み、撃ち抜き、道を切り開く。

開けた視界に収まるのは、神の知識の魔手がハルカを捕えんとしている場面だった。カヨコやムツキ、アルが助けようとしているが、間に合わない。例え間に合っても、銃弾数十発を肉体で受け止めながらも殺すだろう。アレはそういう生き物なのだ。『天』に『使』われているから、その命令を投げ出す事は決してない。故に、彼女の頭蓋は速やかに握り潰され、柘榴のように命が散る——その筈だった。

『アロナ、詩篇^{テヒリイーム} 109・17、起^{アウエイクン}動』

『はい！——彼は呪うことを好んだのだから、呪いは彼自身に返るように』

しかし、その敵は止まったのだ。先生と、誰かの詠唱^{ランゲイジ}が聞こえた途端に。あと数mmでハルカの頭蓋を砕ける、その距離で。

突然の一時停止に面食らいながらも、アル達は次々に発砲し天使の部位^{プロ}を吹き飛ばす。止めのようにハルカはHK F A B A R M F P 6^{ロー}を撃ち込んだ。ゼロ距離で散弾銃を貫った敵の白い胴体に幾つもの風穴が空くが——全く気にしていない様子であった。

天使は歯車を軋らせる。それは嚇怒だった、それは憎悪だった。超常的な存在にしては酷く人間的な行動。それを見た先生は遠くで嗤った。

敵を止めたのは彼とアロナの呪詛返しだ。聖典、詩篇の109・17の唄——『彼は呪うことを好んだのだから、呪いは彼自身に返るように。祝福することを望まなかったのだから、祝福は彼を遠ざかるように』、その一部を抜粋して相手を呪い返すカウンターに仕立て上げた。

言うまでもなく先生との相性は最高だ。救世主と見做される彼はこの聖典を最も有効に活用できるだろう。しかし、彼には神秘を扱う事が出来ないため、式の構築だけを行い、出力はアロナに任せている。そして——この呪詛返しを回避することは不可能だ。何せ、傷

を負った者と負わせた者という因果の糸で結ばれている。何人たりとも因果律から逃れる事は叶わない。やった事はそのまま自身に返ってくる、誰でも分かる世界の摂理だ。

「——ッ！」

天使が絶叫する。先生が負わされた数多の傷が返ってきた。足が折れ、腕が抉れ、他にも諸々。人の身で負った致命傷の成り損ないは天使の身であろうとも堪えたようだ。明らかに動きが鈍っている。

物理的な傷であれば即座に修復できただろう。先生により徹底的に叩き堕とされたと云えど、莫大な神秘は健在だ。それを肉体の再生に回せば、この程度の傷であれば瞬きの間に修復できる。

しかし、呪詛となれば話は別だ。呪いは治すものではなく解くもの。幾ら治癒力が高くとも、適切な手段でなければ呪いで負った傷は癒える事がない。そのようなルールなのだから。

声にならない悲鳴を上げる天使。その眼前に、便利屋68が集結し

——その隣に、ワカモが立った。

「加勢しますわ」

「え、ええ、ありがとう……」

「……先生って本当に……」

「くふふつ。まあ、いいじゃん。これでアイツを早くぶっ飛ばせるし」

「あ、あの……よろしく、お願い、します……」

奇妙な共同戦線。先生が繋いだ縁を感じつつ、アルはその顔をニヒルに歪めた。

「さあ、第2ラウンドと行きましようか」

ゲヘナ風紀委員、参戦

「……何が起きてるんだ、これ……」

ゲヘナ風紀委員達が辿り着いたラーメン柴関は、地獄のような戦場の中心地だった。飛び交う銃弾、微かに香る血。

ゲヘナ自治区の抗争よりも凄惨で、流血に愛されている戦地。キヴォトスでは遠いはずの『死』がとても身近に感じてしまう。だが、誰の死か分からない。辺りに飛び散る血も、骨片も。果して誰のものか。

イオリは茫然とした様子で眩きながら戦場の全体像の把握に努める。この戦場にいるのは便利屋68の4名と、七囚人の一人のワカモ。それから見ない制服を纏った4人。だが、生徒同士で撃ち合っている訳ではない。寧ろ、今挙げたメンバーが一丸となって何かと戦っているような。

そう思っていたイオリの隣に、どちゃり、と何かが落下した。恐る恐る、落とされた何かを見ると——目があつた。

「ひッー」

何か、見てはいけないものが。だが、目を離せないような。目が合つた、と云うのも語弊がある。なにせ、今落ちてきた何かには目に当たる器官は疎か顔すら無いのだ。しかも、胸から下は全て消え失せ背中の翼は弾丸で風穴が空けられている。

生きているはずがない損傷だ。上半身と下半身を切り離された状態で生きていられる存在なんて、ヘイローを持つ生徒であつても有り得ない。故に、これは死んでいる。命の呼吸は止まっている。その筈なのに。

「A a a a a——」

ある筈がない口から福音が聞こえる。耳を犯す音色。聞いてはいけない呪詛のような、或いは聖歌のような。兎も角、耳を塞がなければいけない筈なのに——聞き入ってしまう。

——イオリが知る所ではないが、彼女は既に大脳皮質を掌握されている。先の戦闘、ワカモと先生が破壊し尽くしたグレゴリオ才聖歌

隊の複製^{ミメシス}。それらが持っていた機能である『魂を捻転する唄』を、この天使の眷属達も持っていたのだ。だが全く同じ機能ではなく、アツプグレードし、より主の権能に近づけたものに改良されている。ワンフレーズでも耳にした瞬間、即座に精神汚染が開始され、強制反転が行われるレベルで。

憐れみと祈りと礼賛で以って花を手折るように命を摘む、かつての聖絶^{ヘイルム}を思い出させるような神の所業。愛深く、尊くあれと謳いながら尊き全てを蹂躪させる災いのウタ——それが無防備なイオリに牙を向いた。

次に掌握されるのは大脳辺縁系。此処を相手に握られると、いつ精神崩壊が始まってもおかしくない。

カラン、と音を立てて手から滑り落ちるクラックショット。フリーになった両手は誰かを絞殺せんと宙を彷徨う。だらりと垂れ下がった尻尾は地面に引き摺られ、砂の大地に跡を残した。開き切った瞳孔、目尻には涙が浮かび、過呼吸を起こした口からは苦しそうな息が漏れる。

——全く、何とも悪趣味だよ。

イオリの脳内で、聞こえるはずのない男の声が聞こえた。何処か懐かしいと感じてしまう優しい声音。

——愛しい者を自らの手で縊らせ、その罪悪で諸共滅ぼす浄化の歌。天に使える己は尊い者である、という傲慢さの現れだけど……ああ、確かに効果の程は充分か。

苛立ちと怒りが混ざりながらも、それでも奥に確かな温度がある。泣きたくなるほど愛おしくて、悲しくて、悔しくて——でも、会えた喜びを感じてしまう声はイオリの脳に優しく浸透して言葉の意味を伝達した。

——ああ、だけど……旧い時代の遺物如きが偉そうに私の大切な生徒の心に足を踏み入れるのは我慢ならないな。

パキパキと何かが剥離する音が聞こえる。先程まで福音だったものが悍ましい呪詛のように思えて、何かに酩酊したような感覚が急速に消え失せた。

体の主導権が戻る。誰かの首を縊りたくて宙を彷徨っていた両腕に力が入り、地面に転がった銃を拾い上げた。過呼吸気味の呼吸は戻り、開き切っていた瞳孔が収縮し正常な状態へと遷移。

——君の心は君のものだよ、イオリ。

その声と共に、イオリは覚醒した。



「——ッ！」

ハツとして飛び起きるイオリ。周囲を手短に見ると、丁度彼女の部下が到達した頃であり、唄を聞いてから10秒も経っていない。

「……今のは……何……？」

あの時……男の誰かの声を聞いた記憶はある。だが、誰のものか分からない。覚えていない。いや、そもそも声を聞いた記憶すら薄れてきた。あと数秒も経たずに何もかも忘れ去るだろう。だが、地面に横たわった謎の生命体の死体が現実を突きつける。あれは紛れもない真実であると。

苛立ち混じりにトリガーを引く。鋼の弾丸は何の抵抗もなく、吸い込まれるように白の心臓を貫いた。耳障りな福音も聞こえない。生理的な反応もない。完全に沈黙した……はずだ。なのに、あの薄気味悪い音が脳裏から離れてくれない。肩で息をして、冷や汗を拭って……それから一度深呼吸。漸く少し落ち着いた———そんな時に。

「大丈夫かい？ ゲヘナ風紀委員、銀鏡イオリ」

柔らかい、つい先ほども聞いた声が聞こえた。イオリは緩めていた気を咄嗟に引き締めて、煙を吐く銃を構えて声の主に突きつける。それに連動して、彼女の部下たる風紀委員の少女達も銃口を向けた。

「ッ！ 誰だ!？」

「連邦捜査部シャーレ顧問の先生だよ。初めまして」

イオリの5m先、ひらひらと手を振る大人がいた。数多の銃口を向けられているのにも関わらず、柔らかな笑みを浮かべている誰か。誠実

で優しい真面目な人間である事が即座に分かる奇妙な出で立ち。手を振るといふ軽薄な仕草も、かつちりとし過ぎない優しい雰囲気を出している。

だが、彼の顔色は決して良くない。破れた服から覗く素肌には包帯が巻かれ、血が滲んでいる。1人で立つ事も儘ならないのか眼鏡の生徒に肩を貸して貰いながら立っており、少女の方は猜疑心に富んだ瞳でこちらを見ていた。空いている片手は銃のホルスターに伸びており、少しでも不審な言動を行ったら即座に脳天を射貫かれるだろう。

イオリはシャーレ、という名称を聞いて眉を顰め——一端向けていた銃口を下げ、訝し気に口を開く。

「シャーレって、あの……」

「君の想像通りだよ、イオリ。ああ、証拠は——」

「全員銃を下ろしてくださいッ！」

イオリの考えを肯定した彼は自身の身分を示すシャーレオフィスのIDカードを提示しようとした時、雑踏の後ろから叫ぶ声が聞こえた。焦燥感に背中を押されているような、切羽詰まった声。

人混みをかき分けながら先生の前に現れたのはチナツであり、この場にいる風紀委員全員に武装解除を促した。その声に戸惑いながらも応じ、全員が銃を下したタイミングで——先生は彼女に声を掛けた。よく見ると、彼に肩を貸しているアヤネも銃のホルスターから手を放している。

「や、チナツ。久しぶり、元気してたかい？」

「そんな事言ってる場合ですかッ！ 今、救急医学部を手配します！
それまでは——」

「ありがとう。でも、私は最後までここで戦うよ」

「……どうしても、ですか？」

チナツは先生のアナウンス……シャーレの権限を利用した戦争開始の宣言を聞いている。この場所は一時的にシャーレの管轄に入っており、責任者がその場を離れるわけにはいかない。故に、その解答をある程度予想はできていたのだろう。彼女は冷静を装い、そう返す事ができた。

だが、彼女も理解はできても納得できない。そんな、自身の命を薪に焚べるような選択を許容できるわけないのだ。

「どうしてもだよ。これが私の存在理由なんだ。今更後には引けないさ」

「ですがッ」

「こんな死に体でも、私は先生なんだ。どうか、私の我儘を分かってほしい」

そう——この身は先生だ、誰かに死の悼みを押し付ける事はない。死ぬなら全て終わった後、孤独に死ぬと決めている。

「そ、その……大丈夫、なのか？ 外の人間は私達と違って……血もいっぱい出てるし……」

「——」

イオリの何処か心配そうな、気遣うような声を聴いて先生は少し目を丸くした。彼女とは初対面であり、先ほど初めましてを済ませたばかり。彼女が優しい生徒であるのは勿論分かっていたが——それでも驚いて。だが、その驚きを打ち消すくらいには嬉しかった。

「大丈夫だよ。心配してくれてありがとう、イオリ。血はちよつと足りないけど万一に備えて輸血パックは持ってるし、ある程度無茶は——」

「絶対にしないでください」

「……できないけど、戦場に立つのに不足はないさ」

アヤネの有無を言わせない圧力に屈して、先生は苦笑いに近い表情を浮かべながら返した。きつと、彼女も彼がこの場に今も尚立っている事には思う所があるのだろう——そう判断したチナツは、それ以上の追及を止めにする。

「……分かりました。ですが、一応診察はさせてください」

「構わないよ。それで、君が安心できるなら」

そう言って、彼は自身の体をチナツに差し出す。あまりにも無防備な彼にアヤネは驚くが、知り合いのような口振りであったので咎める事はせず、彼の一番傍で成り行きを見守っている。

そして、チナツは「失礼します」と一言告げて、患部の観察に入っ

た。

正直、何故意識を保ち正常に会話ができているのか不思議な程の傷だった。だが、その余りにも多すぎる傷の悉くは正しく応急手当を行われており、重傷の箇所は再生が始まっている。恐らくナノマシンを使っているのだろう。

——現状、この場で出来る事は無い。そう判断したチナツは診察を止めて、彼に向き直る。

「……とても丁寧な手当てでした。これ以上の処置は専用の設備がないと厳しいです。救急医学部の車両を急いで手配するので、戦闘終了後はそちらで処置を受けていただきたいのですが……宜しいですか？」

「……搬送先の病院だけ、私が指定して大丈夫かい？」

「構いませんが、どうしてですか？」

「ゲヘナの病院に搬送されると、私も君達も都合悪いだろう？ 特に、条約前だからさ」

シャーレの先生をゲヘナで匿っている、という事実は誰も幸福にならない。先生も公平を謳えなくなり、ゲヘナは外に敵を作ってしまった。そのような事態を避けるための提言はチナツの「分かりました」の一声と共に受け入れられた。

それを見て安心したような笑みを浮かべた彼であるが——

——直ぐに、表情が真剣なものに切り替わる。

「……アヤネ、支援準備。セリカは北西^Nに射撃、シロコの退路を確保して。戦線を立て直す」

「はいッ」

「若干押されている。ワカモを……いや——」

『あまり状況は良くないようですね？』

先生が苦い顔で矢継ぎ早に指示を飛ばしていると、唐突に第三者の声が響いた。オープンチャンネル、発生源は……チナツ。

彼女が持つタブレットからホログラムが投影され人の像を結ぶ。水色の髪を揺らす少女が、取り繕ったような笑みを浮かべてそこに立っていた。

全員の視線が向いた事を確認した少女は、腰を深く折って一礼し言葉を紡ぐ。

『初めまして、シャーレの先生、奥空アヤネさん。私はゲヘナ学園風紀委員所属行政官、天雨アコと申します』

アコが通信越しとはいえこの場に現れた事により、風紀委員の面々に緊張が走る。自然に背筋が伸び、姿勢が正されて——脳内でアドレナリンが微かに分泌された。イオリは譫言のように「アコちゃん……」と呟き、事の成り行きを見守る。

「行政官……風紀委員のNo. 2が、どうして……」

「まあ、ある程度は予想できるけど……今はそれを言ってる場合じゃない」

『ある程度は予想できる、ですか……凄まじい洞察力ですね。ひよつとして私の心の中とか覗いてます?』

アコは若干ジト目で先生を見ると、彼は「そんな事できないよ」と呟き肩を落とした。

その様子にイオリとチナツ、アヤネは何処となく違和感を覚えた。先生は兎も角、アコがフレンドリー過ぎる。現れるだけで部下に緊張が走るような彼女が冗談を言うようには見えない。それなのに、彼に対してはまるで気心が知れた仲のように軽口を叩いたのだ。先ほど、「初めまして」と言ったのにも関わらず。

アコは仕切り直すように『それよりも』と言って、佇まいを直し——先生をしつかりと見据えた。

『先程仰った状況不利……今現場にいる風紀委員、全員を参戦させたらどうでしょうか』

「先生の手腕であれば、この程度の人数を淀み無く指揮する事など造作もないはずです」

「……ゲヘナ風紀委員のメリットは?」

『先生指揮下での戦闘経験。あとは……貴方に恩を売れる事でしょうか?』

突然の申し出にアコと先生以外の全員が驚愕する。まさかシャー

レと共同戦線を張るとは思いもよらなかったのだ。知らない所で事態が急速に大きくなる中、彼は考え――苦笑いを浮かべた。

「……依怙鼻肩はできないよ」

『知っています。貴方はそういう方でしょうから……それよりも、ヒナ委員長が会いたがっていましたよ』

「そっか……なら、近い内に会いに行かないと。勿論、アコにもね」

彼が微笑みながらそう言うと、画面越しのアコははにかむように笑った。初めて見る彼女の柔らか過ぎる表情に風紀委員の全員は驚愕し、二度見したが――次の瞬間にはいつもの行政官としての顔に戻っていた。

『では、これより該当するゲヘナ風紀委員は一時的にシャーレの管轄下に入ります……宜しいですね、イオリ、チナツ』

「かしこまりました」

「わ、分かったよ、アコちゃん……」

現場の幹部クラス2名の了承を得た事により、正式にシャーレの所属となった風紀委員。だが、彼女達のやる事は変わらない。敵を、風紀を乱す者を倒すだけ。アコの元でも先生の元でも――銃を握る理由は変わらない。

「戦線を再構築する。突然で申し訳ないけど、どうか私の指示を聞いてほしい」

先生の声に、この場にいる全員が強く頷いた。

決着

たった1人の、この世界で最も弱い生命によって覆された戦場。有事の際に自身の身すら守れない先生は、最前線に立ちながら生徒と共に戦っている。

全員に満遍なくリソースを割り、共有している視界と痛覚、聴覚で以って生徒一人一人のコンディションを具にチェックしながら治療と攻撃をその時の状況によって入れ替えながら、負担を最小限にしている。

「ぐ、う……」

だが、彼は自身の負担を度外視していた。ナノマシンの過剰投与により過回復が発生し右手の指先が壊死し始めてきている。黒くなつた部位を隠すように手袋を着けたため、一目ではばれる可能性は無いが……あまり時間は掛けられない。確認できていないだけで、他の部位でも同様の壊死が起こっているだろう。足先は凍傷だろうか。酷く、寒い。

そして、投与した薬の効果時間はどれも1時間程度。それを過ぎたら意識を保つことは難しくなり、一気に死の階きざはしを駆け上がる事になる。故に、悠長にしていられない。可能な限り早く決着を付けなければもう一度戦局が覆されてしまう。

ゲヘナ風紀委員が参戦してくれた事によって、アビドス側の数的不利は何かイーブンまで持つて行けた。イオリやチナツ……2名の強い生徒の参加と、後方からの火力支援。恐らく、雑兵処理はこれにて決着が付くだろう。

後はワカモと便利屋の少女達が対峙している本命だけ。不意打ち等で負ってしまった傷を転用した呪詛、システムの完全展開を以ってやっといーブン。変わらず油断は許されない状況のため其方側に思考のリソースを割こうとするが、中々考えが纏まらない。怪我の影響だろうか。それとも、火力支援の終末誘導を行っているからか。

脆弱なこの体に嫌気を覚えながら、先生は胸ポケットの奥——
大人のカード
切り札の感触を確かめた。今待機状態にしたため、後は彼のコールで

いつでも起動できる。

いざという時はこれで誰かを守りなさい——遠い日、誰かに言われた事を思い出す。対価を払い、代償を受け入れて奇跡を起こす、彼がキヴォトスにおける大人である証。彼が自身を裏切らなかつた証明。

この世界でも、誰かを守り、導く灯とならん事を——そう願った時、シツテムの箱が震えた。

『先生ッ、それは……！』

「知ってるよ。でも、何時でも使えるようにしないとね」

これを使う危険度を誰よりも知っているアロナは、彼の行動を制止しようとした。だが、彼は止まるつもりなんて皆無である。使わないに超した事はないが、使わずに敗北……なんて無様を晒すつもりはない。打てる手は全て打ち、全力で相手を迎え撃とう。

「正念場だ。アロナ、バックアップは任せたまよ」



アル、ムツキ、カヨコ、ハルカ、ワカモの共同戦線。いつもの4人に加わったワカモは驚くべき順応性で以って、便利屋の少女達と共に戦っていた。

カバーの正確さと速度はカヨコが瞠目するほどであり、あの悪名高い災厄の狐がこんな細々としたことができるなんて——と内心で思っている。

カヨコがワカモについて知っていることは多くないが、それでも協調性やチームワークといった言葉からかけ離れている人物である事は明白だ。特定の誰かと協力することもなく、唯孤高に己の欲望を満たす災害——七囚人とはそういうモノであろう。

だが、どうだろうか。今の彼女は伝え聞いていた人物像と全く異なる。誰かと共に戦うことを熟知している……否、それだけではない。便利屋68のメンバー全員の事が分かっているかのような立ち回りなのだ。

まるで何度も戦場を共にした事があるかのような、そういった違和感。あまりにも巧すぎる。幾ら先生のサポートがあったとしても、この動きを咄嗟に行うのは不可能だ。

故に考えられるのは、便利屋の戦闘スタイルを彼女に流した『誰か』がいる事だろう。一番可能性が高いのは先生であるが——
彼であっても不可能に思える。何せ、彼の指揮の元で一度も戦った事はないのだ。

色々とは彼は謎が多すぎる。ファーストコンタクトから謎塗れで、今回で更に謎が増えた。彼はつい最近キヴオトスに来たと聞く。それなのに、様々な文献をひっくり返す勢いで調べてようやく見つけた情報を当然のように保有しており、より詳しいものまで持っている口振り。

先程の奇妙な詠唱も、トリニテイの生徒……特にシスターフッドが聞いたら驚愕のあまり銃を取り零してしまうだろう。

「……本当に、どこまで知ってるんだろうね」

数発残ったマガジンをそのまま地面に落とし、新たな弾倉を叩き込む。スピードリロードと呼ばれる技法。無論、リロードしている間は敵から視線を外さない。

——というか、5人合わせて数百発撃ち込んでるのに斃れないのはおかしいでしょ。

と、カヨコは至極真つ当な事を考える。ここまでボコボコにされているなら、そこは斃れておけど。現象だか何かは分からないが、ここまで頑丈なのは色々と駄目だろう。色々とは不条理だ。

「チツ……」

舌打ちを一つ。射線が通りにくい場所へ移動された。遮蔽物の裏から顔と銃を覗かせ一発撃つが、当たらない。故に、こちらも危険を承知で移動するしかない——が、カヨコの直感が警鐘を鳴らしている。無策で飛び出れば殺されると。

だが、彼女は一人で戦っている訳ではないのだ。

「ぶっ殺してやるッ！」

「あははッ！ いいねハルカちゃん！」

散弾銃片手に命知らずの突貫をするハルカとノリノリでカバーするムツキ。発射された弾丸は吸い込まれるように敵に殺到するが、掌から形成された謎の力場により全て明後日の方向に逸らされる。

その弾丸は何の痛手も与えずに失墜する——その、筈だった。

「甘いわ」

だが、その常識はアルの存在により覆される。逸らされた弾丸に自身が発射した銃弾を当てる事により無理やり軌道を補正したのだ。言ってしまうえば、立体空間におけるビリヤードの要領。想像を絶する神業は見事に敵を射抜く事に成功した。

その隙を突き、カヨコはポジションを変更する。だが、その場所にはどうやら先客がいたようで。

「あら……」

破損した狐面を着けているワカモだった。お面が損傷している以外は全く傷はなく、精々鮮やかな着物の裾が汚れている程度。彼女も色々と規格外だ。戦争が巧い、とでも言うべきだろうか。

そんな事を考えていると、「鬼方カヨコさん」と呼ばれる声が出て振り返る。

「罅が明きません。一度打って出るので、カバーの方、お願いできますか?」

「……罅が明かないのは同意。でも、打って出るって——」

刹那、ワカモは飛び出した。その表情を焦燥に歪めて。

「なッ——!」

その突然さに驚愕しながら飛び出したカヨコが目にした光景は、銃剣から取り外した刃で敵の突撃を受け止めているワカモの姿だった。

「やらせる訳ないでしょう……!」

吹き荒ぶような怒り。犬歯を剥き出しにし、眼を見開いて獰猛に怒る姿は狐と云うよりは大型の肉食獣に見える。

——先生が狙われたのだ。恐らくデコイが全て壊され、彼を隠すものが無くなったからであろう。或いは、この5人との戦いを不毛と判断した結果なのかもしれない。何方にせよ彼が狙われた事

実是不変であり、それはワカモにとっての地雷だった。

そもそもこの状況……彼が怪我を負っている事自体が許し難い。敵を三度焼き尽くしてもなお飽き足らぬ怒りだ。そんな時に、彼に傷を負わせた張本人が、今一度彼女の^{ワカモ}前で先生を傷つけようとした。

——許せるわけがなからう。彼がその突撃に対してカウンターを合わせ、一撃で以て天使を滅ぼすつもりであっても……ああ、許せるわけがない。

彼に武器を振るわせない。彼に銃を握らせない。対話と相互理解、誰かと誰かを繋ぐ絆が似合う彼に——他者を傷つける道具を使わせたくない。

故に、彼女は危険を承知で身を晒して受け止めた。この程度、どうって事ない。だって、彼の方が何倍も痛い思いを、怖い思いをして——その悉くを乗り越えてきたのだから。

燃え続ける彼への愛の熱を感じながら、眼前の敵を睨みつけた。機械仕掛けの歯車、ロジックの塊に舌打ちをして、受け止めている左腕に更に力を籠める。鋭利な手刀と職人の手により打たれた鋼が衝突し辺りに火花が散った。

「突撃しか脳がない猪如きに……！」

ワカモの手元で翻る短刀。銀の閃光が空を裂き、返す刃でもう一閃。無駄を徹底的に削ぎ落とした流麗な二太刀で以て天使の両腕は膝から先が消え失せる。

続く一撃、構えたライフルからのゼロ距離射撃で敵を退け反らせた。

その一覧の動作で大きなダメージを負った敵は堪らず距離を取るが——そんな事をワカモが許すわけもなく。

取られた距離を低姿勢の全力疾走で潰した彼女は天使の肩に飛び乗り、その大腿部で真正面から頭をホールド。

そして——。

「へし折りますわ」

ワカモはホールドした頭を、自身の体ごと180°回転させた。ゴキーン、と鈍い音が鳴り敵の後頭部が正面を向く。首の骨を砕き、肉を

振り切った事を確認したワカモは飛び降りて射撃。それに合わせるように便利屋の少女達も銃撃を重ね、一瞬で天使の体が穴だらけになった。

しかし、絶命には至らない。虚空の四肢を動かす動力たる神秘は外部から供給されている。経路は不明。恐らく先生であれば分かっただろうが、どの道切断する手段はない。

故に、狙うのは神秘が供給されている炉心。考えられる場所は脳か心臓だろう。怪物の弱点は昔からその2つと決まっている。

敵の圧縮された神秘の砲撃を瓦礫に隠れてやり過ぎつつ、ワカモはリロードを行う。先生が張ってくれたシールドはあるが、それも無限ではない。リソースが尽きれば切れて、再展開には時間がかかる。使わずに済む場面なら温存すべきだ。

「アルちゃん、服の裾焦げてるよ?」

「嘘ツ!? この服高かったのよ!」

「せ、先生に続いて、アル様まで……!」

ふと隣を見ると、便利屋の少女達もワカモと同じ場所に退避していた。牽制射撃を行いつつ戦場を見ると、あれだけあった瓦礫の山が今や数える程度しか残っていない。恐らく今隠れているこの場所もそう遠くないうちに消し飛ばされるだろう。ジリ貧になってきた、そう思った彼女は外した短刀を銃下部に取り付ける。

それにしても、この極限状況で漫才ができるのは凶太過ぎるだろう。緊張感が無いのかもしれない。ワカモの溜息とカヨコの溜息がシンクロした。

何はともあれ、此処が運命の分岐路だ。これから行う攻撃を外せば、圧倒的な速度と精密さ、威力を兼ね備える神秘砲撃を遮蔽物が無い空間で回避し続けなければならない。幾ら先生の未来予測に等しいアシストがあっても、全て避け切るのは至難の業だ。

故に、此処で決め切るつもりで仕掛けなければ。

「貴方様、此処で決め切ります」

『分かった。作戦は——』

頷いた彼は頭の中で瞬時に作戦を組み立て、己の権能を限界まで駆

動させ、皆に伝達しようとするが——ワカモの「いえ」という言葉に止められた。

「それ以上貴方様がお体を酷使するのは、このワカモ、耐えられませんか。どうかご自愛ください」

『……』

「私のお願いです。どうか、ご一考ください」

ワカモの真摯な願いに、先生は観念したように溜息を吐いて。

『分かったよ。でも、万が一君たちが失敗したら後は任せてほしい』

「ええ、絶対に失敗できない理由が1つ増えましたわ……ご武運を」

『ワカモの方こそ……必ず、私の元に帰ってきてね』

その声を最期に、彼との通信が途切れる。やはり、かなり無理をしていたのだ。今も恐らく気力だけで量子通信機能を保たせているのだろう。それが悲しくて、悔しくて。ワカモは目を伏せて——開眼した。

「皆さん、私の作戦を聞いてくださいいな」

散々辛酸を舐めさせられた憎らしい相手、そいつを爽快にぶっ飛ばす方法を。



「じゃあ——作戦、開始」

カヨコの静かな声と共に、最後の攻撃が始まった。

「これで何も見えないよねえ！」

初手はムツキが戦闘の最中に仕掛けておいた煙幕。白く煙る景色は5名の姿を覆い隠し、カモフラージュする。対救世主に特化して生産されたこの天使は然程感覚が鋭くない。先生の生体反応はダメーであろうが感知できるが、それ以外は捉えるのに時間が掛かってしまう。故に、この煙幕でも目隠しとしては十分な成果を上げた。

そして——立ち往生している天使に向かってムツキはそのバッグを放り投げる。次の瞬間には耳を塞ぎたくなるような爆音が聞こえ、火薬の匂いが嗅覚を刺激した。

咄嗟に飛び退いた敵は下半身がごつそりと消失しており、先ほどの爆弾セツトの威力の高さを物語っている。だが、これで終わりではない。

刹那、突撃する影二つ。

「死んで下さい死んで下さい死んで死んで死んで死んでッ！」

「物騒過ぎませんか、この方」

鬼気迫る、普通の人が見たら迷わず背を向けて逃げてしまいたくなる表情を浮かべ、散弾銃を乱射しながら突撃するハルカ。それを軽く引きながらカバーするワカモ。

「うわああアアアッ！」

狂ったようにトリガーを引きまくるハルカにより全身穴だらけになった敵は、掌に神秘を圧縮し致死の弾丸を発射しようとするが――

――ワカモのサマーソルトキックにより逸らされる。そして、サマーソルトの陰に隠れるように放たれた真一文字の銀閃。それは、敵の首と胴体を切り離すに至る鋭さであった。

「仕上げは任せましたわ」

「ええ、外さないわ」

「ごっちもね」

宙を舞う頭部にはカヨコが、地面に崩れ落ちようとする胴体にはアルが銃口を向けている。2人は全くの同タイミングでトリガーを引き、狙いを外すことなく着弾。心臓と脳、神秘の炉心を同時に打ち碎かれた天使は即座に絶命に――至らない。

この天使はまだ尚生きていたのだ。だが、炉心を崩されたためこれ以上の戦闘行動は不可能。故に選んだ手段は自爆だった。残っていた神秘を爆縮させ、先生ごと辺り一帯を纏めて吹き飛ばそうとするが――それは叶わない。

「ぶちのめすわ」

その一言と共に、アルが放った銃弾が爆発した。肉体内部という回避不可能の場所からの攻撃は残存していた天使の肉体を纏めて吹き飛ばし、塵すら残さない。

これにて、神の知識は完全に消滅した。

思惑、交差

神ザフキエルの知識、及びその眷属の完全消滅を確認した先生は一つ息を吐いて量子波システム送受信機構メサイアを解除した。

今回は深く繋がり過ぎてしまった。本来は見えない、見えてはいけない神秘の流れすら可視化してしまうレベルの深度。宇宙色に変色した目は、有り得ざるものすら視認してしまう。過剰な情報を受信し、今の状況と数秒過去の状況、数秒未来の状況が全て重なって見えていた。

一種の入神状態トランス。解除した今でも残滓を感じてしまう。使いすぎると戻れなくなる——遠い過去、ヒマリにそう言われた事を思い出す。

まだ不可逆的な後遺症は負っていないが、このままでは遅かれ早かれ致命的な破滅を迎えるだろう。彼が壊れるのが先か、それとも彼が壊すのが先か。

瞳の虹彩が完全に元に戻り、視界が通常のものに切り替わった彼はもう一度深呼吸。唇の両端を壊死しかけている指先で吊り上げて微笑みを作る。

「ありがとう、2人とも。一緒に戦ってくれて」

彼がそう言うのと、チナツとアヤネは緊張の解れたいつもの微笑みを浮かべてくれた。そして、もう1人の功労者——風紀委員の生徒達を気前よく預けてくれたアコに向けてお礼を言う。

「アコもありがとう。君が風紀委員の子達を連れてきてくれなかったらどうなるか分からなかったよ」

『礼には及びませんよ、先生』

「それでもお礼くらいはさせてほしいな。今度遊びに行く時、ちよつと高めのお茶菓子でも持って行くか?」

『……ええ、では、その日を楽しみにしていますね』

何とも言えない微妙な、それでも何処か喜びが見える表情でアコは頷いた。

なお、先生が云う『ちよつと高めのお茶菓子』はトリニテイのティーパーティー御用達店のものである為、ちよつと高いどころか桁が一つ多い程である。これを買う事によりユウカにお説教を受ける事になるが、別にいいだろう。領収書をちゃんと取り、用途を説明すれば長時間正座のフルコースは受けずに済む……はずである。

そして——アコは複雑な感情で此方を見つめているアヤネの方に視線を向けた。

『……奥空アヤネさん、何か私に御用ですか？』

「……私個人は、アコさんを始めとする風紀委員の方に心から感謝しています。皆さんがいなければ、私達の損害はもつと大きかったでしょうし……先生を、失っていた可能性もあります」

アヤネ個人に、彼女達風紀委員に悪感情はない。寧ろ感謝の念が募るばかりだ。彼女達が土壇場で力を貸してくれなければこの戦いをもつと辛いものになっていたはずであり、そうなれば先生が帰らぬ人になっていた可能性があった。それを阻止してくれた彼女達にマイナスの感情なんか抱けるはずもない。これで風紀委員を糾弾しようものなら、恥知らずと罵倒されても仕方ないだろう。

だが——アヤネはそれでも言わなければならぬ事があった。個人ではなく、アビドス対策委員会の一員として。非常に心苦しいが、誰かがやらなければならぬ事を。

「ですが……アビドス自治区内で私達に無断で、この規模の公的な戦力を動かした理由を聞かせてください」

静寂に包まれる空間。いつの間にか最前線で戦っていた少女達——シロコ、ノノミ、セリカ、アル、カヨコ、ムツキ、ハルカ、ワカモ、イオリを始めとする風紀委員といった面々が集まっており、先生を境界線として真つ二つに別れている。

『……失礼しました、対策委員会の皆さん。私達ゲヘナ風紀委員会はあくまで、私達の学園の校則違反をした方々を逮捕する為に来ました——そちらの、便利屋68の方々をね』

「……ッ！」

アコがそう言うや否や、風紀委員の少女達は銃を構え便利屋68に

その銃口を向けた。急に敵意を向けられたアルは顔を青褪めながら肩を振るわせ、アビドスの少女達の背に隠れる。

「ねえねえ、どうするアルちゃん？　今やり合ったら確実にフルボツコだけど」

「厄介ごとが次から次へと……」

「あ、アル様……ここは私が自爆を……」

「ちよ、ちよつと！　自爆は駄目！」

一番最初から戦い続けた便利屋の少女達はもう体力的には限界だ。予備の弾丸は粗方使い切ってしまったし、集中力も尽きている。仮に戦った場合、無惨に擦り潰されるのは明らかだ。一緒に戦ってくれそうなアビドスも限界が近く、先生にはこれ以上無茶をさせられない。控えめに言って詰みだった。

『私としては、大人しく便利屋の身柄を引き渡して欲しいのですが……アビドスの皆さんは如何ですか？』

「なんで私達に話を？」

『恐らく便利屋68は抵抗するでしょう。そうなった場合は私達も相應の武力行使に出なければなりません。此処は皆さんの学園自治区付近ですから、一応許可を取っておこうかと』

「……？」

アコの言葉にアヤネは僅かに眉を顰めた。今、何か……途轍もない程重要な情報が彼女の口から溢れた気がする。だが、その言葉の内容を探るよりも早く——シロコが口を開いた。

「私達アビドスの自治区でそれは駄目。それに、此処には先生がいる。先生の近くで戦わないで。それでも、どうしても戦^やるなら——」

シロコの銃のセーフティが外れる音が響いた。

「自治権の侵害と見做して、私達も黙ってられない」

シロコの言い分は『やるなら他所でやれ』の一言に尽きる。ゲヘナ自治区やその他の場所で戦闘行為をする分なら構わないが、此処はアビドスであり、先程まで戦場であった場所。ゲヘナの治安維持機構が、ゲヘナの違反者を取り締まる場ではない。

その上、怪我人と民間人が現場にいるのだ。自治区を預かる身とし

て、これ以上の戦闘行為は到底容認できない事であった。

『他の皆さんも同意見のようですね……シャールレとしての意見はどうですか、先生？』

「んー、便利屋の子達を今この場で素直に渡せるか、と言われると……ちよつとそれはできないかな」

「せ、先生……！ ええ、ええ！ 信じていたわ！ 流石私達の経営顧問！」

「くふふつ、先生らしいね」

「そんな体でよく言うよ……でも、ありがとう」

「あ、あの……ありがとう、ございます……」

先生の啖呵に感涙するアルであったが——これ以上の戦闘は不味いと、頭の冷静な部分が提言している。どう考えても勝てつこないのだ。此処は大人しく一旦捕まり、隙を見て脱出した方がいいのではないのか……そんな案が頭に浮かんで消えて。

『ふむ……困りました。私個人はシャールレと敵対したくはありませんが……』

「お互い、これ以上の戦闘は厳しいだろう？ この場で無駄な負傷者を抱えるより一旦引いた方が賢明だ」

『それは尤もな意見です。ええ、模範解答だと思いますよ、先生。ですが——』

「君にも引けない事情がある。勿論、それは分かっているつもりだよ」

先生は生徒の味方だ。だからアビドスの味方であり、便利屋の味方でもあり、風紀委員の味方でもある。何処にも平等に手を差し伸べ、何処にでも平等に肩入れしない。誰でも愛するし、誰も愛さない。今こうして便利屋側に立っているのはアビドスの自治権に抵触しそうな行為を避けるためだ。

アコは口元に手を当てて、思考する。現在の状況自体は可能性の一つとして考慮していた。想定外なのは一時的に共通の敵を倒すために彼等と共闘した事と、先生が重傷を負っている事。

ただ傷を負っているだけなら治療を口実に救急医学部の手を借りてゲヘナに連れ込む事もできるが——彼は想像以上に頭が回る。

自治区の病院に連れ込もうとしても彼はきつと回避するだろう。キヴオトスに来訪してから1ヶ月も経っていないのに立ち回りが巧い。それに——あの傷。あれはどう考えても重傷だ。キヴオトス外部の脆弱な人の身で耐えられる怪我のレベルを超えている。意識を保っているのが不思議なくらいだ。それなのに、こうして正常な受け答えをしている。

あの傷は大したことがないのか——否、そんなはずはない。チナツから送られたバイタルデータがそれを証明している。ならば、傷を即時再生させる手段を持っているのか。だとすると、それはどう考えても一般に公開されていない実験段階の新技术だ。シャーレの特権で回してもらっているのか、それともシャーレで開発しているのか。

何方にせよ、彼の手札が読めない。何を持っているても不思議ではないのだ。しかも、戦術や指揮能力では確実に彼の方に分がある。動かせる戦力が彼よりも何倍も多いにも関わらず、圧勝できる気がしなかった。

だが——彼自身の戦闘能力は皆無だ。そこに付け入る隙がある。

『シャーレとアビドスの意見は一致、便利屋も素直に捕まる気配はなし……少々、困りましたね。こうなっては仕方ありません。本当は穏便に済ませたかったのですが——』

そう云ってアコはふつと微笑むと、片腕を緩く上げた。

瞬間、空気がひりつく様な熱を帯びる。それは宛ら——厳かな審判の号令であった。

『総員——戦闘準備』

「ッ!？」

「アコ行政官!？」

アコの伝令。N.O. 2の指令に呼応するように、風紀委員が銃を構える。

先生は怪我を負っている。重傷だ。だが、致命傷ではない。この戦闘を10分以内で済ませ、彼をゲヘナまで空輸し治療を受けさせれば

目立った後遺症なく復帰できるだろう。負傷した先生をゲヘナで治療した、となれば信用も向上する。連邦生徒会は民間の——D・U・内の医療機関に搬送するように五月蠅く言うだろうが、防衛室長に依頼すれば火種を小さくできる。問題ない範囲だ。強いて言えば、あの腹黒糸目女に借りを作ってしまう事が気に食わない程度。

チナツの非難の声に耳を貸さず、アコは淡々と指示を下し、銃口を向けた——刹那、黒が奔った。

「ッ！」

瞬間、両断される銃火器。紙でも切るように先生へ向けられた敵意を寸断したのは当然ワカモであり、彼を庇う様に立ち——静かに、だが煮え滾るような怒りを込めた声音で告げる。

「下ろしなさい」

『七囚人の一角、災厄の狐——狐坂ワカモ』

「最後通告です——銃を下せ」

下さなければ死ぬ——誰もが、そう思った。特に、彼に直接銃口を向けていた生徒は首筋に手を当て、安堵している。一瞬、落とされたかと思つたのだ。銃ではなく、首を。それ程まで、先ほどの一撃は速く、鋭かった。

だが、それで『はい、分かりました』と言つて銃を下げる風紀委員ではない。依然として銃口は彼等に向けられたものであり——ワカモは落胆しながら言う。

「警告はしました。呑めないなら……無様に死に絶えなさい」

『各員シールド展開ッ！』

「遅いですわ——欠伸が出てしまうほど」

神速で翻る真紅の災厄。数多の血に濡れた妖刀妖銃は遂に命を摘み取るに至ると思つたが——。

「ワカモ」

優しく名前を呼んだ先生によって、止められた。彼はそのまま首を緩く横に振って。

「いいんだよ」

「ですがッ……」

「私の為に怒らなくていい。私の痛みに、君が苦しまなくていいんだよ」

そう言つて、先生はワカモの肩を優しく抱き寄せた。これ以上、彼女が傷つかぬように。彼女が傷つけぬように。

そう、彼女が怒る必要はないのだ。彼女が悲しむ必要も、苦しむ必要も、泣く必要もない。この怪我は別に誰の所為でもないのだから。今の状況は起こるべくして起こった事だから。その為に、彼女が誰かを殺めるなんて——それは、先生として許容できる訳がなかった。

彼に密着した途端しおらしくなったワカモ。他の誰か何一つ変わらない、大事な生徒である彼女を撫でながら彼はホログラムの向こう側にいるアコを流し目で見て、呟く。

「君の本来の目的はアル達便利屋68の捕縛じゃない。私の身柄だろう?」

そう言い、先生は影のように笑った。

ゲヘナ学園風紀委員長

「便利屋の子達はゲヘナの校則を違反しているけど、被害の規模は然程大きくない。少なくとも、彼女達を捕えるためにこの人員を動かす必要はないし、態々ゲヘナのテリトリー外に出向いてまで迅速に動く理由はもつと無い。彼女達を捕えるために起こす自治区侵害の方が大きな問題になるからね。言ってしまうえば、リスクとリターンが釣り合っていない」

便利屋の少女達には申し訳ないが、この子達は小悪党なのだ。ゲヘナで問題を起こせば捕らえられるだろう。だが、温泉開発部や美食研究会のような他の自治区との抗争に発展する可能性のある問題を起こしていないし、起こす可能性も高くない。故に、風紀委員の中ではプライオリティが低いのだ。細々とした悪さを時折している4人の問題児——それ以上の認識をしていない。

だが、それでも動かしたのは——何か他に理由があるからだ。例えば、訳の分からない組織のトップに、輪をかけて訳の分からないおかしな人間が大きな権限と共に赴任したとか。

「便利屋の子達はあくまで他の自治区で風紀委員を動かすための方便。彼女達がアビドスに潜伏していると分かったときは、渡りに船だと思っただんじやないかい？」

『……』

何のために与えられたのか分からない大きな権限——戦力の保有と戦争の自由。

キヴオトスに起きた大きな事件のグラウンドゼロ。

災厄の狐を容易く手懐ける人心掌握術。

ティーパーティーに執着される理由。

間違はなく五本指に入る戦術眼と指揮能力。

優れた頭脳と、それを十全に活かす能力。

益々、訳の分からない人物であった。彼の来訪と共に、キヴオトスは徐々に変化しているような気がしている。悪い方向ではなく、良い方向に。

そして——彼の発生に伴うように消えた連邦生徒会長。まるで何かの小説のようだ。多くの意志と願いが交錯する謀略版リーマン予想は、彼が来てから更に複雑に変貌した。蜘蛛糸のように絡み合い、結び、新たな糸を紡ぎ上げる。アコは思わず匙を投げたくなった。「君達の狙いは、連邦捜査部シャーレの顧問である私だ」

先生は春の陽の様な温度の眼差しでアコを見た。そんな彼とは対照的に、彼女は鋭く冷たく——何処か未恐ろしいものを見るような視線で彼を見た。

少々前、彼は「ある程度予想できる」と言っていたが……此処まで正確に予想されるとは思ってもいなかった。一体、どのような頭の構造をしていれば今日初めて会った人間の思考を言い当てられるのか。洞察力が優れているとか、そういった次元ではない。もつと異なる深度、直感が有り得ないほど鋭いのか。まるで、思考基盤そのものが『違う』印象を受ける。

何処までも不気味な人だ——アコは心からそう思った。そして、そんな彼に対して何処か心を許している自分がいる。先程の軽口も思わず口から飛び出たもの。まるで気心の知れた掛け値なしの親友のような、或いは愛する人のような……そんな繋がりを彼との間に感じていた。

『……ええ、素晴らしい考察です。正解ですよ。連邦生徒会長が直々に任命するだけがあります。私もヒナ委員長の側近としてより研鑽が必要という事ですか……私もまだまだ未熟ですね』

そう言つて、アコは露骨に肩を落とす。先生の能力を過小評価していたつもりはないが……想定以上だ。彼の評価を大幅に上方修正しつつ、彼女はちらりと——頭脳に優れたもう一人の少女を見る。

『尤も、貴女も気付いていたでしょうが——ねえ、カヨコさん』

「……まあ、こんな事だろうと思つたよ」
カヨコは愛銃たるH&K^{デモンズ} P30に視線を固定したまま、言葉を紡ぐ。

「私達便利屋は、ゲヘナの中じゃ小悪党もいいところ。もつとヤバイ集団なんてザラにいる。私達を捉えるために態々ゲヘナ自治区を手

薄にするレベルの人数を連れて、ましてや他の学園の自治区まで追いつく必要なんてない」

『流石の判断力です』

「何回もお世話になってるから、大体分かるよ……それに、先生が怪我してるって分かった時はかなり焦ったんじゃない？ 私達便利屋が先生を吹っ飛ばしてたら、それこそ大問題。連邦生徒会との全面戦争もあり得るからね」

『ええ、ご明察ですよ、カヨコさん。今の私のデスクはコーヒーで水浸しになって大変ですので……実態は訳の分からない超存在の攻撃でしたが……というか、よくご無事でしたね、先生。あの場には瞬間的に50G以上の超重力が働いていましたのに』

一般的な人間に耐えられるGが6G程度……心臓のポンプ能力とGによる負荷が釣り合う生理的な限界点……だというのに、彼は生きています。あの軽装を見るに耐Gスーツ等を着込んでいるとは思えない。故に、彼は何らかの手段で致命傷を回避したのであるが……その方法が皆目見当がつかない。それを探るための質問に彼はくすりと笑いながら。

「皆と……彼女が守ってくれたんだ」

大事そうに持っている白いタブレットの表面を優しく撫でる。何処か遠い場所を見つめる眼差しの彼に、アコは暫くの沈黙の後、『そうですか』と短く呟いた。彼を誰かが咄嗟に庇ったのか、それとも運に助けられたのか。或いは、『彼女』と呼ばれた誰かが彼を守ったのか。当事者ではない彼女に、その詳細は分からない。分からないが、彼には何らかの手段があり、それを以って回避したと判断した。

無論、アコも彼の手札は気になる。だが、この場においてそれは本題ではない。彼が致命傷を負わずに生きています、それで充分なのだ。彼の事はゲヘナで保護した後、じっくりと調べれば良い。

『まあ、幾つかのイレギュラーが起きてしまいました……幸い、流れや大筋が大きく変わった訳ではありません。私は私のやるべき事を果たすしましょう———待機組、前進』

タブレットを片手に、遊びのない指示を出すアコ。彼女が下した命

令によって起きた変化に気付いたアヤネは、同じく真つ先に気付いた先生に向けて声を上げる。

「12時の方向、それから6時の方向……3時、9時……風紀委員会の更なる兵力が四方から集結しています！」

「増援!? まだいるの!?!」

「……!」

彼と接続された視界に映る生体反応の数が膨れ上がった。敵性反応、目を凝らせば黒の軍服のような制服に身を包んだ少女達が隊列を組んで此方に向かつて来ている。そして、彼女達を支援する部隊が更に後方に控えており、ビルの屋上や路地裏にも配置されている。蟻一匹通さない、と言わんばかりの包囲網。先生は肩を落とした。

「随分集めたねえ」

『貴方を相手取るには最低でもこれ位は必要だと感じましたからね』

「過大な評価、痛み入るよ」

『そうでしょうか？ 先ほどの先生の活躍を鑑みると、私はこれでも不足に感じてしまいます……あと倍は連れてくるべきでした』

涼やかな声音でそう告げるアコに対して、先生は内心歯噛みした。此方が万全であればこの人数……大隊規模が相手でも突破口を開くことはできただろう。例えば彼女がこの倍の戦力を持ってきても、この場にヒナが居ても全員を逃がす事はできる。彼と彼女では潜り抜けた修羅場の桁が違うのだ。

だが——今、この場で戦える生徒は多くない。便利屋は言うまでもなく限界。アビドスとワカモはまだ戦えるが、近いうちに限界が来るであろう。そして、先生もじきに限界を迎える。元々気力だけで意識を保たせているが、それも終わりが近い。暫くすれば撃ち込んだ薬の副作用が現れて意識を失うだろう。そうなれば、先生というストッパーを失ったワカモが彼の為に暴虐の限りを尽くしながら辺りを血の海に変える。それは、それだけは何としても避けなければならぬ。

——血に濡れるのは、私だけで充分だ。

彼は気合を入れ直し、目を開く。虹彩が変色し蒼となり、破裂した

毛細血管の血と混ざって不思議なマールを描いた。

『そう言えば、先ほどのお2人のお話は正解です……尤も、得点としては半分ですが。確かに、私はシャーレと衝突するという最悪のシチュエーションも想定していました。ですが、事の発端は——』

「トリニテイのティーパーティー、桐藤ナギサだろう？」

『——凄まじいですね、そこまで把握していましたか』

アコは僅かに目を見開いた。まさか、そこまで見透かされているとは思わなかったのだ。やはり彼は油断ならない人間だ。情報収集能力も彼の方に分があるとなれば、現状勝っているのは兵力程度しか思い至らない。彼女はシャーレと彼の重要度を更に引き上げた。

『ええ、その通りです。我がゲヘナ学園と長きに渡って対立関係にあるトリニテイの生徒会、ティーパーティーの1人がシャーレに関する報告書を入力している……と、そんな話がうちの情報部から上がって来まして』

「……そっか、ヒフミが……」

——皆さんの現状は伏せて、カイザーローンの事だけ伝えさせていただきます。

数日前、ヒフミがそう言っていたことを思い出す。ブラックマーケットで出会い、交流し、共に銀行を襲い、別れた1人の友人。彼女はきつと、ティーパーティーの3名の誰かにカイザーの事を伝えたのだろう。そして、その伝達内容の中にはシャーレの件が含まれていた。

『当初は私もシャーレとは何なのか、全く知りませんでした……ティーパーティーが知っている情報となれば、話は別です。私達も同様に知る必要がある——それで、チナツさんが書いた報告書を確認しました』

「……アコ行政官、確認するの遅くないです？」

「ティーパーティーが掴んでいる件に関しては、シャーレのホームページに報告書をアップロードしたただけだなあ……」

チナツの何処か呆れたような口調と先生の苦笑いをアコは無視した。彼女は多忙なのだ。下から上がってくる報告書を一々確認して

いては文字通り日が暮れてしまう。

『連邦生徒会長が残した正体不明の組織……大人の先生が担当している、超法規的な部活。どう考えても怪しい匂いがしませんか?』

「私もそこには概ね同意だよ。大きな権限と武力を保有できる、何処にも所属していない機関——私の命令一つで動く組織なんて、怪しくて仕方がない」

『そうでしょうか? シャーレという組織は、とても危険な不確定要素に見えます。これからのトリニティの条約にも、どんな影響を及ぼすのか分かったものではありません。しかも、顧問たる先生は災厄の狐を従え、聖園ミカに入れ込まれている……何処からどう見ても、厄介事の種でしょう』

「……」

アコの語りを聞く先生であつたが、その内心は一つの疑問が埋め尽くしていた。

——私がミカに入れ込まれてるのは何処の情報なんだい?

今回のアコもそうだが、情報収集能力に優れた少女達……ヴェリタスやヒマリといった面々が口々に言う『聖園ミカが入れ込んでいる先生』という情報。ミカのプライバシーは大丈夫なのだろうか、とか色々聞きたいことはあるが、疑問を口に出さない事にした。この場にはいない華の女子高生のプライベートを深堀するのは人としてのモラルに欠ける。

『ですから、せめて条約が無事締結されるまでは、私達風紀委員会の庇護下に先生をお迎えさせて頂きたいのです』

「……それはそれでトリニティとの軋轢が生まれそうだけどね。それに、条約が締結されても、先生を手放すつもりなんて無いでしょ?」
『ふふっ……ええ、締結後も綿密な連携をさせて頂くかと』

カヨコの言葉に、アコは飄々とした態度で答える。それに対して苛立ち交じりの舌打ちをしても、相手の笑みは変わらない。

そして——そんな笑みを睨みつける人影が4つ。アビドスの生徒が、先生を守るように立ちはだかる。

「ん、寧ろ状況が分かりやすくなって良いかも」

「先生を連れていくつて言われて、私達が『はいそうですか』なんていう訳ないでしょ!?! あつたまくるツ……!」

「そうですね、私も同感です☆」

『ふむ……残念ですが、交渉は決裂ですね』

シロコ、セリカ、ノノミがそれぞれ銃を取り風紀委員に向ける。アヤネは目を伏せ、ワカモは先生の手を優しく振り解き再び銃を取った。

「ふふ、やっぱりこういう展開になりますか。では仕方ありませんね、奥空アヤネさん?」

「……」

「ゲヘナの風紀委員は、必要でしたら武力を行使することに躊躇しません」

「助けてくれた方と戦いたくはありませんが……先生が連れていかれるのを、黙って見ている訳にはいきません」

アヤネも消極的ながらも戦う姿勢を見せる。銃を握り締め、風紀委員に取り繕った敵意を向けた。

そして、そんな少女達を便利屋は見つめながら。

「……社長、どうする? 今なら多分、アビドスと先生が注意を引いているし、私達だけなら逃げようと思えば逃げられるけれど——」
「逃がないわ」

アルらしくないノータイムの返答、それにカヨコは驚きつつも——
——頷いて、銃のリロードを済ませた。社長が戦う姿勢を見せたのだ。ならば、彼女の部下として応えない訳にはいかない。

そして、その気持ちはカヨコ以外も同じのよう。

「くふふっ、アルちゃんかっこいい〜」

「ふふ、ふふふッ、ぜ、全員、ぶち殺して見せます! あ、アル様、先生、見ていて下さい!」

アビドス、便利屋、ワカモ……全員、戦意は充分。先生の為に武器を取る事に全く異論はなかった。そして、風紀委員も退く理由はなく。

今一度、戦いの号砲が下されこの場が戦場になる——誰も

が、そう思っていた。

『…………アコ』

白髪の少女が、通信越しに現れるまでは。

最強の証明

互いに譲れない目的を抱えたまま、この場をもう一度戦場にしようとしていた2つの集団を止めたのは、白い長髪と捻れた角を持つ小さな身体の少女だった。小学生にも見えるほど細く薄い華奢な体躯であるのにも関わらず、放たれるプレッシャーは紛れもなく強者のそれ。ワカモをも凌ぐ圧倒的な存在感^{終幕}は周囲の全てを威圧している。

担いでいる巨大な銃……MG2ですら、彼女が放つ圧力の前では霞んで見えてしまう。銃という明確な暴力よりも彼女の方が数倍恐ろしいのだ。通信越し現れただけであるのにも関わらず、この場のイニシアティブを全て掌握した。

明確な脅威だ。神の知識とは異なる、単純明快なスペックの暴力。戦ったら手も足も出さず負ける——アビドスと便利屋の少女達は誰もがそう思った。

鷹のような鋭い目を携えながら欠片も表情を変えずに、感情が抜け落ちた声でアコの名を呼んだ彼女こそ。

『えっ……ヒ、ヒナ委員長!?!』

ゲヘナ学園風紀委員長、空崎ヒナ。キヴオトスに於ける最強の一角であり不良達の恐怖の象徴。凡百の生徒とは隔絶した、文字通り次元が違う戦闘能力を誇る一騎当千の少女。

彼女に平坦な声音で名前を呼ばれたアコは、思わず叫び姿勢を正した。背筋が伸び、緊張した空気が走り、冷や汗が頬を伝う。

その様子を、アビドスの少女達は訝し気に、興味深そうに眺めた。

「委員長……?」

「風紀委員会のトップ!?!」

アヤネが疑問の声を、セリカが驚愕の声を上げる。纏っている軍服のような制服は確かにゲヘナ風紀委員の正装であり、袖を通していない羽織っているだけのロングコートには『風紀』と記された腕章が見える。

彼女が——ゲヘナ最強、風紀委員長。

アビドスと便利屋の顔色が悪くなる。特にアルは白目を剥いて何

時もの表情を浮かべていた。

『お、お疲れ様です、ヒナ委員長……ですが、どうしてこんな時間に……』

『アコ、今どこ？』

『えっ、私ですか？ えっと、その……わ、私はゲヘナ郊外の市内を、風紀委員メンバーとパトロール中でして……』

視線を左右に動かしながら歯切れの悪い回答を述べるアコ。無論、全て嘘だ。彼女はゲヘナ学園風紀委員の本部の一室において、パトロールもしていない。大隊規模の風紀委員はゲヘナ郊外の市内ではなくアビドスの砂漠地帯において戦闘行為を行っていた。

嘘に嘘を重ねた言葉に、思わずセリカは怒りの声を上げる。

「はあ!? アイツ、思いつきり嘘吐いてるじゃん!?!」

「やっぱり、行政官の独断専行だったみたいですね……」

アコの独断専行、それが持つ意味はこの場に於いて大きい。少なくともヒナの参戦という最悪の事態は想定されない上に、これ以上の増援もないだろう。

アコの行政官という肩書は重い。だが、独断で大隊規模の兵力を、それも他の自治区で動かせる程ではないのだ。間違はなく必要なプロセス……風紀委員長たるヒナと生徒会の万魔殿バンデモニウム・ツサエティの承認をすつ飛ばしているだろう。彼女の能力を考えると、命令系統の改竄や偽装程度はお手の物……という事実も、この推察を裏付けた。

この結論にいち早く至ったカヨコは安堵の溜息を吐いて、銃口を下げる。

『それより委員長、何故この時間に……出張中だったのでは？ 帰還予定にはまだ早かったかと記憶しているのですが……』

『思ったより早く片付いたから、さつき帰ってきた所』

『そ、そうでしたか……! そのう、私、今すぐ迅速に処理しなくてはならない案件がありましたして、後ほどまたご連絡いたします! 今は、ちよつと、立て込んでいて……ッ!』

先程よりも更に早く捲し立てるアコに、無表情を貫いていたヒナが初めて感情を表した。疑問の顔を。

『立て込んでいる……？ パトロールなのに珍しい。何かあったの？』

行き場のない指先でタブレットの画面を弄びながら、アコは思考を巡らせる。失敗した——そう思ったのだ。嘘に嘘を重ねてしまい、ヒナに疑問を抱かせる隙が生まれた。

そもそも、彼女が他の風紀委員と共にパトロールする事自体が希である。大抵の場合、彼女は各地のパトロールを統括する側であり現地参加する事は少ない。

あつたとしても、それは大きな問題が起きたとき……それこそ、美食研究会が他の自治区のレストランを爆破したとか、温泉開発部がD・Uの敷地内に風穴を開けたとか、そのレベルでないと動かないのだ。

そして、そのレベルの事件ならば真つ先にヒナに連絡が行くはずだ。だが、ヒナの端末は帰還して以降全く震えておらず沈黙を貫いている。

無論、アコはアビドス襲撃……否、先生捕縛作戦を実行する旨をヒナに伝えていない。完全な独断専行なのだ。故に彼女はヒナに怪しまれないように偽のそれらしい報告を速やかに行い、煙に巻く必要があつたのだが……偽装に使えそうな事柄は今の所起きていない。アコが手を焼く事件なんて輪をかけて無い。

平時なら喜べる平穏が、アコは今ほど恨めしく思った事はなかった。

なりふり構っていられないと思ったアコは、適当な事件……温泉開発部が校舎に風穴を空けて逃亡したという事にでもして、何とか穏便にやり過ぎそうかと口を開こうとした。

だが——。

「他の学園の自治区付近で、風紀委員の大隊を独断で運用しなければならぬ事が？」

『——えっ』

今までの様な通信越しの音声ではない肉声が聞こえた。チナツから見て、右側から。

それを認識した途端、チナツとイオリは驚愕の表情を浮かべて慌てて声が聞こえた方を向いた。

「……っ!？」

「ッ——!」

「はッ、あれっ!？」

「!？」

いつの間にか、彼女はそこに立っていた。紫の制服とその上に羽織ったロングコートを風に靡かせ、自身の身長に匹敵する銃を軽々と担ぎ、時折背中の中長な翼を羽ばたかせる少女。

彼女は仏頂面でアビドスの面々と便利屋、風紀委員、ワカモを見て……それから最後に先生を見た。

「い、委員長!?! い、一体いつから!?!」

イオリが驚愕の声を上げるが、当のヒナは先生をじつと見つめたまままだだった。彼女は様々な感情が入り混じった瞳で先生を射貫く。そして、彼もその視線に気づいたのか蒼のままの瞳を動かし——視線が、交錯した。

「……せん、せい」

「——ヒナ」

ヒナの噛み締めるような、泣き声を堪えるような声。

先生の後悔と自責、会えた喜びと深愛が複雑に絡まった声。

互いの声は耳に入らない。元々、誰かや相手に聞かせるための声ではないのだから。

一瞬の邂逅。互いに視線を交わらせたのは1秒にも満たない時間であり、それ以上の事はしていない。だが、それだけで充分であった。先に先生が視線を切る。その最中、彼がはにかむように、愛しいものを見たかのように寂しく笑ったのは——誰も気づかない。

そして先生からの視線を無くしたヒナもまた自身のやるべき事を果たそうと氷のように冷たく鋭い口調で告げた。

「アコ、この状況、説明して……1から10まで、全部」

その身から放たれる威圧が、更に増した。まるで空気が意志を持って全身を圧壊させに来ているようなプレッシャー。アルはもう一度

白目を剥いた。

「ゲヘナ風紀委員長、空崎ヒナ……外見情報も一致します。間違いなく、本人です……！」

「……これは、本格的に不味いね……」

アヤネとカヨコの苦々しい呟き。ないと割り切っていた『ヒナの合流』という最悪の事態が目の前で実現してしまったのだ。

特に、ヒナの強さと恐ろしさを骨の髄まで知っているカヨコはその表情を露骨に歪めている。

「名実ともにゲヘナ最強。この状況であつちに味方されたら、勝ち目が完全になくなる」

「うーん、そうだけど……なんか向こうの雰囲気悪くなくい？」

「ん、そうだね……もしかして仲間割れ？」

ムツキとシロコの言葉通り、ゲヘナ側の雰囲気は非常に悪い。剣呑と言っても差支えがない程だ。だが、対立している訳ではない。ヒナの放つ威圧感が圧倒的過ぎて対立の体を成していないのだ。チナツやイオリといった幹部クラスの少女も自然と背筋が伸び、その他のメンバーは露骨に顔を悪くしながら冷や汗を流している。

『い、委員長、その、これは……えつと、素行の悪い生徒達を捕まえよう……！』

「便利屋68の事？ それにしては少々大勢いる様に見えるけれど。彼女達はこんな数で相手しなきゃいけない相手じゃない」

ヒナは「それに」と言つて。

「シャールレにアビドス——何故、彼女達と戦闘状態になっているの？ そもそも、私はこの作戦行動を認知していない。自治区を越えた作戦行動には事前に私の認可が必要な筈」

『え、えつと……委員長、全て説明いたしますので、どうか——』

「——……いや、もう良い。大体把握した」
『えっ』

アコが述べようとしていた弁明と説明を『不要だ』と言わんばかりにばつさりヒナは切り捨てた。無論、詳しい説明はしてもらおう。だが、それは報告書の上でだ。

怒りと共に戦意を燃やしていたアビドスと便利屋68、災厄の狐。ヒナが知らない風紀委員の動き。アコの動揺。

今この場で起きた、或いは起きようとした事柄は大体把握した。唯一分からないのは、先生が致命傷一歩手前の傷を負っている事だけ。「察するに、ゲヘナにとつての不安要素の確認及び排除。そういう、政治的な活動の一環つてところね」

ヒナはその明晰な……情報部に所属していたことが分かる頭の回転で、アコの意図を状況証拠のみで見抜いた。やはり侮れない——
—そう思ったワカモはヒナの評価を一段階上げる。

「でもアコ、私達は風紀委員であつて生徒会じゃない……連邦捜査部シャーレ、ティーパーティー、失踪した連邦生徒会長、その他学園のパワーバランス。そういうのは、バンデモニウム・ソサエティ万魔殿の狸達にでも任せておけば良い。この一連の行動は私達、風紀委員会の領分を超えている」

『ヒ、ヒナ委員長……』

仕えている上官から明確な叱責。淡々とした口調ながらも、何処か怒りを感じられる言葉にアコは言葉を詰まらせる。何か口を開こうにも、通信越しに向けられる厳しい視線に射貫かれてしまい……彼女は口を噤んで、黙つて首を垂れた。

「詳しい話は帰つてから聞く。通信を切つて校舎で謹慎してなさい、アコ」

『……はい』

その一言と共に、アコとの通信が切断される。彼女の沈痛な面持ちを見た先生は思わず胸が痛んだ。確かに、彼女の言動はゲヘナ風紀委員としては逸脱しているのだろう。だが、彼は彼女の独断専行の力添えもあつて勝利を掴んだ身なのだ。何とか罰を軽くしてあげたいが、干渉し過ぎてはいけない。どうか、その辺りの落としどころを探らないと——そう考えていた先生であつたが、その思考はシロコの突拍子もない一言によつて切り裂かれる。

「……じゃあ、改めてやろうか」

「ハア!? ちよ、ちよつと待ちなさい!」

シロコが『仕切り直し』と言わんばかりに銃を構え、風紀委員に銃口を向けるとアルが顔を真っ青にしながら止めに来た。その様子を見てアビドスの面々には動揺が走り、ムツキが笑い、カヨコは溜息、ハルカはおどおどしている。

当然、この状況で開戦しても蹴散らされるだけだ。弾薬の底は突きかけて、此方側の体力と気力は限界、銃も酷使してしまったため早急にメンテナンスが必要な状況なのだ。そして、相手側には単騎で風紀委員全勢力を凌駕しうるヒナがいる。無謀どころの話ではなかった。「ま、待つてください！ ゲヘナの風紀委員長と言ったら、キヴオトスでも匹敵する人物を見つけるのが難しいほどの強者の中の強者ですよ!?! ここは下手に動かず、一旦交渉するのが吉です！ 先生が怪我をしている現状、不要な戦闘は避けるべきですッ！」

「ご、ごめん……」
アヤネが凄い剣幕で捲し立てると、シロコもその迫力に気圧されて頷く。

それを確認したアヤネは一步前に出て、風紀委員長と対峙した。

「初めまして。私はアビドス対策委員会所属、奥空アヤネです。ゲヘナ学園の風紀委員長、空崎ヒナさん、で宜しいでしょうか」

「ええ、そう」

「この状況については把握されていますか？」

「……勿論。事前通達なしでの他校自治区付近に於ける無断兵力運用、及び他校生徒との衝突——」

「それは未遂だよ」

ヒナの言葉を遮るように言葉を述べたのはシャーレの先生だった。ワカモに支えられながら何とか立っている彼は、白を通り越して青白くなつた手をひらひらと振っている。

「ああ、私がボロボロなのは今は深く詮索しないで。後で……そうだね、3日後くらいに報告書として送付するから」

「……そう、分かった」

先生の有無を言わせない発言に、ヒナは何処か釈然としない表情で了承する。そして、彼女は「兎も角」と言つて。

「私達に不手際があったのは認める。けれど、其方が風紀委員会の公務を妨害したのも事実。違う?」

「……ッ!」

「それはそうかも」

「ふーん、それで?」

「私達の意見は変わりませんよ? 先生は奪わせません」

ヒナの言葉に一步も引かないアビドス。と戦^やるならかかって来いと言わんばかりの好戦的な様子にアルは内心震えていた。正気の沙汰じゃないと。

「……アビドスの連中、好戦的過ぎるでしょ」

「先生を奪われるのが嫌だからじゃない?」

カヨコはこの場をどうやって切り抜けるか考える。アビドスが戦う意志を見せている現状、便利屋だけ逃げる事は出来ないだろう。恐らく先生は戦闘を止めたい側だろうが、誰かが一発でも銃弾を放てば即座に開戦するだろう。世界を変えるのに必要な銃弾の数はたった一発で充分だと、サラエボ事件とレキシントン・コンコードの戦いが証明している。

仮にこの状況で戦闘が起きた場合、最低でもヒナだけは持つていかなければならない。それも、可能な限り早く。そうしなければ本当に勝ち目がないのだ。

緊迫した空気が2つの勢力に流れる中、アヤネはタブレットを握り締めながらポツリと呟いく。

「せめて、ホシノ先輩がいてくれたら……」

「——ホシノ」

その名前を出したとき、確かにヒナが反応した。びっくり、と眉が僅かに動いて鉄仮面を崩すに至ったその名前は、彼女にとって記憶に留めておくべき特別な意味を持っていたから。

「……小鳥遊ホシノ、か」

「はいはい、お呼びかな〜」

間延びした声が良く響いた。

間に合わなかった少女

先程のヒナに続く、2人目の来訪者。その人物は先程までアヤネ達が名前を呼び、求めていた彼女だった。

ヒナが少し目を大きくし、声が聞こえた方を向けば、アビドスや便利屋が立っている側からゆっくりとしたペースで呑気に歩いている桃色の少女が見えた。愛銃を引つ提げ、盾を持っている彼女は確かにフル装備であるが、今はまだ然程やる気が無いようだ。彼女はほぼ更地になった周囲と、臨界寸前の張り詰めた空気に辟易とした口調で言う。

「うへへ、これはまた……随分派手にやったねえ。凄い事になってるじゃ〜ん」

「ホ、ホシノ先輩ッ!？」

「先輩ッ!」

アビドス対策委員会の委員長たる小鳥遊ホシノ。戦闘力のアベレージが他校に比べて非常に高いアビドス、その中で最強たる彼女はヒナに匹敵する圧倒的な神秘を誇っているのだ。

そんな頼れる彼女の出現に、アビドスの面々は顔を輝かせる。先ほどまで勝ち目がほぼゼロだった状況が、圧倒的に不利程度まで持ち直したのだ。彼女達の期待と信頼に満ちた視線に何処か気恥ずかしさを覚えながら、ホシノは「やつほ〜」とへらへらとした笑みを携え間延びした声で挨拶をする。

「いや〜、ごめんごめん。ちよっと昼寝しててねえ。少し、遅れちゃって……」

アビドス、便利屋、風紀委員、ヒナと順繰りに見つめていたオツドアイが――遂に先生とワカモを捕えた。

「はっ。」

先程までの口調が嘘に見えるほどの冷たく、鋭利な声音だった。眠たげな瞳が一気に見開かれ、驚愕を顕わにする。

先生の状態。ワカモに支えられ何とか立っている現状。頭から流

れている血によって閉じられている左目。両手に着けられた見慣れない手袋。全身に巻かれ、赤が滲む包帯。青白い、死相が見えそうな酷い顔色。その他、肌が見える箇所はほぼ全て砂塵と血と内出血で彩られている。

何があつたのか、その詳細は一切不明だ。ホシノが知っていることは多くない。

だが、それでも――先生が何かによって、あの傷を負ったことは分かった。分かつてしまった。

「――先生……？」

「さつき振りだね、ホシノ。おかえり」

先生はそう言つて、何時ものように微笑む。緩い、陽だまりのような笑顔。だが、ホシノから見れば、その笑みは冥府に墮ち逝く者が浮かべる末期の安堵にしか思えなかつた。

早鐘を打つ心臓。横隔膜が痙攣して、声帯が氷漬いたみたいに声が出ない。冷や汗が流れて奥歯が無様に震え、滲む視界が涙を認識する。

流れる血の温度と、それに伴つて冷却される彼の体……触れ合つてもいないのに、それを感じ取ってしまった。

「先生、その怪我……どうしたの？」

「……これ、かあ」

恐る恐る、だが何処までも冷たく先生に問いかけるホシノ。彼女の視線に、彼は歯切れ悪く何か……彼女を心配させないための嘘を吐こうとする。誰かを泣かせたくない、悲しませたくないという彼の悪あがきは結局身を結ばない。この怪我はどうやつても取り繕える気がしなかつた。

彼は諦めたように苦笑を浮かべて。

「少し、失敗したただけだよ」

何でもない事のように、そう言つた。

「どうしたもこうしたも無いわよ！ 道中見てないの先輩！ 凄く大変だったのにッ！」

「ん、変な連中が柴関を吹き飛ばして、先生も傷だらけになった。風紀

委員はそいつらの掃討を手伝ってくれたけど、今は敵」

先生の苦し紛れの嘘……尤も、彼にとつては真実であるが……に納得がいかなかったセリカが真つ先に噛みつき、それを捕捉するようなシロコの説明。それを聞いてホシノも大体の状況を掴んだのか、アビドスの面々が敵意を向けている風紀委員を視線でなぞった。

「ん、取り敢えず先生をこんな風にしたのはゲヘナの風紀委員会じゃないって分かったけど——」

眩き、ホシノは便利屋の方を見る。月夜のような瞳に射貫かれたアル達は言いようのない圧力を感じた。それはまるで、先ほどヒナに射貫かれた時と同じ——。

だが、その圧力は彼女が視線を逸らした事により解けた。喉元まで迫っていた死神の手が突然消えた事に安堵しながら、アルは固唾を呑んで事の成り行きを見守ろうとする。

ホシノは小さな歩幅で、自然体に足を踏み出し——ヒナと対峙した。

「便利屋の子達を追ってアビドスまで遙々来たの？」

「……風紀委員の任務機密に抵触する。答える事は出来ない」

「いやいや、ふざけないでよ。そんな大勢で私達の自治区に無断で踏み入って、それで何の説明義務も果たさないのはちよつと不義理じゃないかなあ？」

ホシノは「それに」と言つてヒナの後方に控える風紀委員達を一瞥する。彼女の瞳に映る怒りを見た少女達は思わず震え上がった。これは不味い、と本能が全力で警鐘を鳴らす。ヒナ委員長と同じタイプ、戦ったら死ぬ——と。

「まあ、なんとなく分かるよ。便利屋の子達は建前で、本命は先生でしよ？」

「……」
「うへ、私は政治に興味はないけど、先生が重要なのは知ってるよ。でも——」

ホシノは眼前のヒナから一切視線を逸らさず、銃のセーフティを外し盾を展開した。

「先生は私達の顧問だからね。勝手に連れて行かれるのはちよつと困っちゃうなく」

「顧問……」

「そう、アビドス対策委員会の顧問。厄介ごとの宝箱みたいな役割を引き受けてくれたんだよ、先生は。嫌な顔一つせず、優しく笑って。だから、さあ……」

異なる空を抱く2色の瞳に込められたのは、その身を焦がすほどの覚悟。

「それでも先生を連れて行くなら、戦争しようか。私達と貴方達で。小競り合いとかじゃない、本気の学校間の戦争を」

絶対零度のような声音で、ホシノは告げた。

来るなら来い、潰してやる——そう言わんばかりの宣誓。例えその果てに自身のヘイローが破壊されても、絶対に退かないという決意だ。こうなった彼女は止められない。例え大隊規模の軍勢を仕向けても単騎でその全てを凌駕するだろう。ヒナ以外では相手にならないレベルの、明確な脅威。その圧倒的な殺意と戦意にヒナの後方に控えているイオリとチナツの表情が青褪めた。

そして、ヒナも表情を変える。先ほどアコに向けていた視線よりも更に鋭い、肉食獣や猛禽類を思わせるようなものへ。愛銃を握る手に力が籠り、咄嗟にセーフティへ伸びそうな指を意志で以って抑えつける。

「1年生の時とは随分変わった。人違いじゃないかと思うほどに」

「……ん？ 私の事、知ってるの？」

「情報部にいた頃、各自治区の要注意生徒達はある程度把握していたから」

そう言つて、ヒナはホシノから僅かに目を逸らす。視線に籠る感情の色は痛ましき、同情、憐憫——そして、憧憬。

「特に小鳥遊ホシノ……あなたの事を忘れる筈がない。あの事件の後、アビドスを去ったと思つていただけ……貴方はまだ、その場所を守り続けている」

「……」

「そうか、そういう事か。だから、シャーレが……いや、そんな事は無い、か。彼ならきつと……」

「うーん、貴方が何を知ってるかは興味ないけどさ」

ヒナの続きの言葉を遮るように、ホシノは声を上げた。彼女にしては珍しい、刃物のような鋭さを伴った言の葉。遠くを見ていたヒナは流し目で彼女を射貫くと。

「人の思い出に、土足で足を踏み入れないでほしいな」

身を焦がす怒りと殺意が瞳の奥でどす黒く渦巻いていた。

殺意と憧憬、2種の異なる感情が2人の最強の間で交錯する。そして、その拮抗はヒナが踵を返すことで崩された。

「……元より、私は此処に戦いに来た訳じゃない」

風に翻るロングコート。アビドス達に背を向けたヒナは自身の部下下たる風紀委員達に向けて命令を告げた。

「撤収準備、帰るよ」

「ええッ!？」

「何か異論ある?」

ヒナの一言に風紀委員達は驚愕に包まれ声を上げるが、反論を封殺する鋭い言葉と眼力によって黙らされる。静かになった自身の部下を一瞥し、彼女はその視線をアビドス対策委員会の方に向けて——
—深く、頭を下げた。

「事前通達なしでの無断兵力の運用と、武力行使未遂……このことについては私、空崎ヒナよりゲヘナ学園風紀委員会としてアビドス対策委員会に対して、公式に謝罪する。今後、このような事が無いと約束する——どうか、許してほしい」

誠意の籠った、真摯な謝罪。それを受けてアビドスの面々は。

「どうか頭を上げてください、空崎ヒナさん。私達は風紀委員会の方達に助けられたんです。先ほど対立したのはお互いの立場上、譲れないものがあつたからで……感謝こそあれど、恨みなんて持っていません」

「ん、一緒に戦ったのは事実だから」

「まあ、風紀委員の奴等には助けられたし……」

「そうですね。幸い、私達と風紀委員の方達との間で何か起こった訳ではありませんから」

アヤネ、シロコ、セリカ、ノノミがそれぞれの思いを口にする。彼女達は風紀委員のメンバーと実際に共同戦線を張ったため、一際感謝の念が大きいのだろう。彼女達は風紀委員に悪感情を持つていなかったのだ。先生を連れて行く、と言われた時は怒りがあつたが……それでも、恨んだり憎んだりはしていない。共に脅威と戦った時間は決して嘘ではないのだから。

皆の言葉を聞いたホシノは「はあ」とため息を一つ吐いて。

「……何があつたのかは分からないけど、これは私が遅れたのが悪いね」

他のメンバーの決定を尊重する意思を見せた。

対策委員会、全5名の言葉を真正面から受け取ったヒナは「礼を云う」と短く、しかしはつきりと告げて便利屋の方を見た。

「便利屋68」

「ひいッ！」

ヒナの平坦な恐ろしい声に身を縮めるたアルは咄嗟にアビドスの陰に隠れるが、そんな事はお構いなしに彼女は死刑宣告を告げた。

「次、ゲヘナ自治区に足を踏み入れるときは……覚悟すると良い」

殺気を伴ったヒナの言葉にアルは白目を剥きながら卒倒しかけた。それをムツキは笑いながら写真を1枚撮り、ハルカはおどおどし、カヨコは頭を抱えている。便利屋のいつもの光景だ。

ヒナはそれを興味なさそうに一瞥し——先生の方へ歩を進め、彼の前に立った。俯いて、彼から顔が見えないように。

「……先生」

「止めてくれてありがとう。共同戦線に関してはシャーレからの依頼って形にしておくから、ヒナは気にしないで。事後処理諸々は私の方で全て請け負うから。ああ、あと、報酬も近日中に振り込ませてもらうね」

互いに聞こえる程度の、囁くような声音。先生の優しい声がヒナの耳を擦った。

——本音を言うと、今すぐにもでも抱きつきたかった。抱きしめたかった。抱きしめてほしかった。あの日のように頭を撫でてほしかった。愛しい声で、優しい温度で、名前を呼んでほしかった。

「……そう、ありがとう」

——でも、それを求めると、彼はきつと困ってしまいうから。初対面の人に抱きしめられても困惑するだけだから。優しい彼は拒絶なんてしないだろうけど、それでも線引きはしっかりしないと。ずっと私達の為に戦っていた貴方に呆れられないように。

そんな事を考えていると、先生が「ああ」と言つて。

「アコをあんまり責めてあげないで」

「分かったわ……そうだ、先生。アビドス高校の問題についてだけど、少し話しておきたい事がある」

「カイザーコーポレーションの件かな？」

先生が悪戯っぽく口にする、ヒナはその表情を驚きに染めた。

無口で無表情に見える彼女が浮かべた、年相応な一面。それを嬉しく思いながら彼は言葉を紡いでいく。

「アビドスの砂漠地帯。あそこでカイザーコーポレーションが不審な動きを見せている。加えて、真珠と鉛が運び込まれていて、神秘が鳴動している……そうだろうか？」

「……その情報、何処も掴めてないはずなのだけれど」

「私も、遊んでいるだけじゃないって事さ」

「……そう。ああ、あと10分程度で救急医学部の車両が到着するか、もし良ければ使つて」

ヒナの言葉に、先生は少し考える素振りを見せて——それから、何時もの笑顔を浮べた。

「じゃあ、有難く使わせてもらおうね」

「うん……私達はもう行く。またね、先生」

そう言つて、名残惜しそうに先生の元から離れるヒナ。風紀委員達と共に歩き、アビドスを去ろうとするが——。

「ヒナ！」

振り返ると、何時にも増して優しい笑顔を浮べた彼が手を振つてい

て。

「今度、必ず会いに行くよ」

——そう、言ってくれた。

代償

ヒナが風紀委員達を連れてアビドスを去っていくのを見送っていた先生は、彼女達の影が見えなくなってから初めて安堵から生まれる息を吐いた。

「……はあ……っ」

深く、息を吐く。先ほどまで張り詰めていた緊張の糸が切れたみたいに体に力が入らなくなり肩を貸して貰っていたワカモに撓垂れ掛った。

「貴方様ッ」

「ごめん。情けない姿を、見せちゃったね……」

預けられた体重に愛しさと悲しみを覚えながら、ワカモは即座に先生の体勢を楽なものへと変えさせる。ずっと前から……それこそ、風紀委員と小競り合いをしていた時には既に限界を迎えていたのだ。絶えず襲い掛かる激痛と意識の暗転を理屈もクソもない単なる根性論で耐えつつ、他人との会話を成立させていた。凄まじい精神強度だろう。しかも、その拮抗をワカモやヒナ以外……彼を旧くから知る生徒以外に悟らせなかったのだ。

だが、何事にも限界はある。彼の心よりも先に、体の方が絶叫を上げた。元より、ハイローも神秘も持たない脆弱な肉体だ。此処まで保っただけでも上出来だろう。

「先生、大丈夫?」

「体調に変化はありませんか? 頭痛や吐き気はありませんか?」

ワカモに肩を貸された先生のすぐ傍に集まる便利屋とアビドスの面々。皆、一樣に同じ表情をしていた。彼への心配、不安。泣きそうな誰かの顔。それを見て彼はボロボロの体に喝を入れて————微笑んだ。

「ああ、大丈夫だよ……少し、疲れただけさ……」

彼は「けほ」と弱々しい咳を一つしてから、皆に云う。だが、誰もがその言葉を信じなかった。死人の様な顔色で『大丈夫』と言われても何一つ安心できない。明らかな強がり、唯のやせ我慢。それは誰の

目から見ても明らかだった。

ホシノは血濡れで笑う先生を見て、爪で皮膚を破らんばかりに拳を固く握り締めた。胸に抱くのは後悔と怒り、憎悪。その対象は彼をこんな目に遭わせた誰かと、遅れた己。何だか無性に嫌な予感がして、黒服との対談を途中で切り上げてまで走ってきたのに……それでも足りなかった。

彼女は他の皆と異なり、彼と共に戦う事すらできなかったのだ。来た時には全て終わっていて、残されたのは流血で彩られた彼だけ。

また、間に合わなかった。今回、先生は運良く生きていたが、次もそうだとは限らない。いや、死んでしまう可能性の方が高いだろう。だって、彼は自分達と違うのだから。弾丸1発だけでも死んでしまう。そうならない為に、盾を持っていたはずなのに。

—— 大事な人に危機が訪れるとき、私はいつも傍にいない。

「ごめん、先生……遅く、なって」

無論、昼寝をしていたのは嘘だ。ホシノは誰も知らない場所で、アビドスを悪意から守るために戦っていた。だが、それが言い訳に過ぎないというのは誰よりも彼女自身が強く分かっていた。アビドスが、彼が必死になって……自壊すら厭わず戦っていた時に、その場にいなかったのは……他ならぬ彼女だったから。

言葉にできない数多の感情がホシノの胸の中で渦巻く。俯いて、唇を噛み締めて、必死に後悔を堪える。こうすればよかった、なんて全て後の祭りだ。そんな意味のない if に救いなんてない。どうしようもない事、変えようがない事だけが現実だ。彼の傷は現実だった。

彼女が彼女自身に課す重責と後悔。それを感じ取った先生は血の味がする声帯を震わせる。此処で気合を入れなければ、何処で気合を入れるのだと自身を奮い立たせて。

「……ホシノは悪くないよ。だから、どうか謝らないで。君が君を責める必要はないんだ。ああ、だからどうか——」

—— 笑って。

清廉さを感じさせるほどの笑みを浮べた先生は、ホシノが握り締めた拳にそつと自身の手を重ねる。彼女の手を覆う様に被せられた手

袋越しの彼の手は血が足りないのか少し冷たかったが、それよりも……涙が出てしまいそうなほど、暖かかった。彼はそのまま、ホシノが固く結んでいる五指を解く様に自身の指を走らせて拳を開かせる。そんな事をする必要はないのだと、優しく諭すように。

ホシノの自罰を表す拳を解き終えた先生は、そのまま彼女の頭を優しく撫でる。自由に動く左手が汚れてなくて良かった、と彼は思いながら——深層で、己を嘲笑した。

——何が『笑って』だ。畢竟、自己満足に過ぎない。自分の都合を、願いを彼女に押し付けているだけ。ああ、なんと傲慢なんだろう。あまりに、罪深い。

「アル達も、色々と厄介ごとに巻き込んでごめんね……」

「これ位、どうって事ないわ。未来の経営顧問の為だもの」

アルが自信満々に、自慢げに胸を張りながらそう云うのを見て先生は面食らったような顔をして——それから、微笑を浮べる。本当に、頼もしい限りだ。

——今回の戦闘で、取り返しのつかない傷を負った者は今のところいない。柴関は崩れてしまったが、大将は無事だ。大将の入院費と復興の資金は全額シャーレ負担にし、諸々の事も考えなければならぬ。

全て、数日後の己に課す宿題だ。

そんな事を考えている先生の傍にシロコが歩み寄り、垂れ下がった右腕を手を取った。

「ん、今は先生を病院に連れて行くのが優先。他の事は後回し」

「……ああ、そっか」

シロコの言葉に彼は短く肯定した。

活動限界時間はもう過ぎた。体に莫大な負荷を掛ける薬物、そこまですら効果が長持ちするわけではない。あとはいつ副反応が現れるか。それだけ、気を付けなければ。

「ん、先生は私が病院まで連れて行く。背負えば早い。任せて」

「いや、そこはおじさんに任せてほしいな？」

「私もやりますよ☆」

「ま、まあ、どうしても言うなら私が背負うわよ？」

「あ、あの……私でも……」

先生本人の与り知らぬ所で勃発した争い、ワカモはそれを完全に無視しながら彼の手当てを行っていた。傷が開き始めているのだ。赤く染まる包帯を解き、新品へと交換するが……血は止まらない。何処にも向けられない焦りと苛立ちを覚えながら、彼女は応急処置を行った。

「ああ……」

抜けていく血。輸血パックで補った分が無に帰りつつあった。それを、先生は正しく認識する。

先ほど撃ち込んだ劇薬の副作用が現れ始めたのだ。もう長くない事を確認した彼は、弱々しく声を上げて。

「あー、悪いけど、今日は此処で解散にしよう。病院に関しては大丈夫。風紀委員の子達が救急医学部を呼んでくれたみたいだから、さ。それを使わせてもらうよ」

折角の善意を受け取れない事に申し訳なさを感じつつ、彼は提案する。恐らく、救急医学部はあと5分も経たずに到着するだろう。そして、車両に乗っているのは氷室セナ。彼女ならば大丈夫なはずだ。

そう口にする彼に、ワカモ以外の生徒達は顔を見合わせて少し考えてから。

「そうですか……確かに、その方が先生に掛かる負荷は少ないですね。私は賛成です」

全員を代表して、アヤネが彼の提案に乗ることを示してくれた。こんな状態の彼をおんぶという不安定な体勢で運ぶのは悪手と考えたのだろう。専門設備が揃っている車両を使えるのならばそれに越したことはない。

彼は皆の同意に安堵したような表情を浮かべて。

「じゃあ——」

「ですがー！」

先生の言葉を遮るように、アヤネは力強い口調で告げる。

「先生の引き渡しをするまでは此処にいます」

決して曲げられない意志を感じさせるアヤネの言葉。後ろを見れば、全員が同じ意志を持っていることが感じられた。無茶に無茶を重ねた彼を間近で見ている彼女達だ。きつと、心配なのだろう。引き渡しが終わった後も病院まで走ってついてきそうな勢いがあった。それ自体は彼としても嬉しい。

だが、余計な心配は掛けたくないのだ。皆で危機を乗り越え、致命的な戦闘も回避できてめでたしめでたし——そんな終わりに泥を塗りたくはない。

「皆、疲れているだろう？ 私は大丈夫だよ。それに、ワカモが居てくれるからね」

「いや、どの口で言うのさ。さつき倒れかけたの、おじさん達は見逃してないからね？」

「ああ……全く、手厳しい……なあ……」

霞む意識の中、先生は困ったような声音で呟く。

——そこで、限界が訪れた。

「ゴホッ、ゴホッ……え、あ……」

掠れたような音。まるで喘息の発作のような咳の音だった。ぞくり、と背筋が震えるような嫌な音。それを聞いて、ワカモは血相を変え、彼女が彼が負担なく吐き出せるように楽な体勢へと移そうとするが——それよりも早く、彼が倒れた。

「ア、が……ア……」

呼吸が上手くできないのか、苦しそうに胸を手を当てながら地面に蹲る彼を見て全員の背筋が凍り付いた。自分の首を絞めようする動作、胸を掻き毟る動作、頭を抱えて荒い呼吸を繰り返す。酸素が回っていない。極限状態だ。

「貴方様ッ！」

「ゲホッ……ゲホッ……あ、あ……ガハッ」

湿っぽい咳に変わったかと思えば、彼の口から血が吐き出される。本日何度目かの吐血。だが、その量も症状も比べ物にならない程重い。赤黒い血に交じって体の中の一部だったはずの肉片や破れた肺胞、ゲル状の血が外気に晒された。

そして、口だけではない。演算での負荷も現れたのか、目からも流血が始まった。唯でさえ霞んでいた視界が赤く染まり、更に視認性が低下する。吐血に比べると量自体は少ないが、それでも無視できる損傷ではない。

その他薬物で誤魔化していた傷口が次々と開き、辺りを血に染めた。先ほど輸血パックを使用していなければこの時点で間違いなく失血死していただろう。それ程までに血を流した。

「ハア……ハア……ゲホツ、ゴホツ」

「せ、先生ッ！ 大丈夫——」

「近寄らないでくださいッ！ 邪魔ですッ！」

ワカモはそう言い放ち、開いた傷口の処置をしながら副反応の対処を行っていく。鎮静剤を首筋に注入し、持ち込んだ点滴を打つ。その間に輸血パックを再度展開し、抜けた分の血液を補充させる。

手慣れている動き。彼とワカモの間に割り込む余地なんて、ホシノにはなかった。彼女は彼によって解かれた拳を再び握り締める。

——彼女は、あまりにも無力だ。何も出来る事がない。彼を苦しみから助けることも、痛みを和らげることも……出来る事なんて、何一つなかった。

青褪めた顔で血と肉を吐き出す先生を見るホシノ。足元には彼が先ほど打ち込んだ薬物の残骸……注射器が転がっており、カランとガラスの音を立てた。震える指先で拾い上げてラベルを見ると、そこにはびっしりと化学物質が綴られており——その下には効能と持続時間、副作用が記されている。

Blood Coagulant for Hemostatic
止血用血液凝固剤——BCH—097。コード

ネーム、アネモネ。名前の通り血液を固め、傷口から流れる血を物理的に塞ぎ止める効能を持つ。だが、効果中は血中の酸素濃度が低下し血栓が生まれる。更に、効果時間が切れたら塞ぎ止めていた血液が流れだし、失血死のリスクが激増する。正に寿命の前借であり、致命傷の先送り。副作用も呼吸不全、血中のヘモグロビン濃度の低下、血流不全による末端の壊死、不整脈、痣の出現……他にも、色々。今、彼の体に襲い掛かっている不調はこの副作用なのだろう。

——あの時、黒服の誘いを無視して先生と共にいればこんな事にならなかったのではないか。いや、あの話は重要だった。少なくとも、無視するという選択肢は取れそうにない。じゃあ、どうすれば良かったのか。どうすれば、彼が傷を負わずに済んだのか。

いや、そうではない。もう済んでしまった話だ。過去は変えられない。目の前で起きている事は現実だ。変えられるのは未来だけ。でも、どうやって変えればいいのか。ホシノには優れた医療の知識はない。彼の元に行ってもワカモのように応急処置を行えず、邪魔と罵られて終わるだろう。

外敵を排除するための銃。後ろにいる後輩を守る盾。何がキヴオトス最高の神秘だ、笑わせる。銃を持っていても彼と共に戦えなかった。そんなものでは何一つ守れなかった。傷つく彼の助けにすらなれなかった。邪魔にならない場所で、ただ事の成り行きを見守る事しかできない。彼の痛み止めにはすんなれない。

——小さなこの手が、この体が恨めしくてたまらない。悔しくて、悲しくて、情けなくて。不安でたまらなくて小さな嗚咽と涙が零れ落ちる。彼を失いたくない、そう思っているはずなのに体は震えて動かない。まるで、先輩のときの焼き直しのように。

万が一、彼が死んでしまったら。そう思うだけで怖くて仕方がなかった。

分かっていた気だった。彼の苦しみも、彼の痛みも。彼が抱えている、沢山の重荷も。でも、実際は何一つ解っちゃいなかった。

優しく、暖かくて、陽だまりのような人。何故、貴方ばかり苦しむのだろうか。貴方ばかり傷つくのだろうか。

——真昼の太陽の下、ホシノは己の無力を噛み締めた。

貴方の守り方

D・U・シラトリ区の一部にある総合病院。救急医学部の車両によつて其処に運び込まれた彼は、病院に着くや否や血相を変えた医師達によつて集中治療室^{ICU}に運び込まれた。やはり相当に悪い状態であつたのだろう。生命維持装置を始めとする様々な機械とケーブルを取り付けられ、担架に乗せられて嚴重な設備が施されている部屋に運ばれていく彼を見送つたワカモとアビドス、便利屋の面々は全員が沈痛な面持ちをしていた。

清潔感のある白色で統一された部屋。そこに並ぶ無機質なミニントグリーンの椅子達。部屋の隅には観葉植物が供えられ、壁に埋め込まれたテレビは誰も聞いていない音声を垂れ流している。

誰もが彼の無事を祈つて待っていると、不意にドアが開いた。現れたのは彼を担当した医師の1人。

「先生はッー！」

「峠は越えました。意識はまだ戻っていませんが、数日経てば目を覚ますでしょう」

緑の手術衣を身に着けたアンドロイドはアイラインを何度か点滅させながら、言葉を紡ぐ。

「微細な出血は全てパッチで止めました。右腕の挫創は縫合しました。右足、左上腕骨骨幹部、左鎖骨、肋骨の骨折も処置しました。損傷した内臓に關してもです。その他、壊死寸前の箇所や凍傷箇所の治療もある程度は終え、後はナノマシンの働きと自然治療に任せるしかありません」

医師の口から語られる、先生の傷の数々。そのどれもが、柔い彼の体が負うには余りにも重かった。彼の痛みを思うと胸が張り裂けそうなほど苦しくなる。泣いてしまいたいほど悲しくなる。

「あと少しでも遅かったら、皆さんの応急手当が無かったら、氷室セナさんの車内処置がなければ……彼は帰らぬ人になっていたでしょう」
「……………ッー！」

その道のプロから告げられた一言。それは余りにも重く、彼女達の肩に押し掛かった。彼の喪失は決して絵空事ではなかったのだ。本当に……本当に些細なボタンの掛け違いで、彼はその命を散らしていたかもしれない。そう考えるだけで吐きそうになってしまう。

「今は容体も安定しています。まだ油断はできませんが……恐らく、命に別状はありません」

「……そうですか、ありがとうございます」

そう言つて、深々と頭を下げようとするワカモであったが——
医師の「ですが」の一言に遮られる。

「左腹部の刺傷、これだけはどうにもできませんでした」

「どうにも、とは」

「傷は塞がっています。ですが……ああ、実際に患部を見て頂いた方が早いですね」

そう言い残し、手術室の奥へと入っていく医師。それを訝し気な目で見送る彼女達であったが、その内心は先程の不穏な一言……「どうにもできなかつた」がこびり付いて離れない。跳ねる心臓の鼓動と、背中に感じる冷や汗。嫌な想像が頭を過つて仕方がなかつた。

——そうして、どれほどの時間が経つたのだろうか。戻ってきた医師の手にはレントゲン写真大の大きさの紙が握られていた。医師はキャスター付きの長机にその写真を広げ、全員に見えるようにする。

その写真に写っていたのは、先生の上半身だった。沢山のケーブルが取り付けられ、傷だらけの体を晒している彼。見てだけで痛ましさを感じて目を逸らしてしまいたくなる程であったが、誰一人としてそんな逃避はしなかつた。

彼女達はその視線を、件の左腹部へ持つていき——。

「なに、これ」

言葉を、失った。

左腹部。鋭く尖った鉄製の棒が貫通していた場所には、傷跡があった。色濃く残る痛みの痕、これは確かに完治は難しいだろう。きつと、彼の体に残留し続ける古傷になる。だが、それよりも目を引くの

は。

「——痣……？」

茫然とした様子で呟くカヨコ。目の前の写真を食い入るように見ながら、思考する。

それは傷跡を囲んでいる植物のツタのような何かだった。そのツタには棘の様なものが生えており、迂闊に触れると痛みそうな造形をしている。

まるで痣のように彼の体に焼き付いている円環を描く植物。恐らく、タトゥーや刺青ではないだろう。もし仮にそうであれば、医師はここまで深刻な顔をしないはずだ。それにカヨコ達が処置したときにこんなものはなかった。故に、それ以降に焼き付いたものなのだろうが……如何せん、情報が少なすぎる。

彼が天使に攻撃を受けたのは2回。1回目は超重力による建物圧壊に巻き込まれ、2回目は手刀を振り下ろされた。

この傷跡は1回目で負ったはずだ。特に深い傷だったからよく覚えていて。彼が天使と呼称した何か、それが生んだ超重力によって破壊した建物が作り出した天然の凶器によって作られた刺傷。それを取り囲むような、件の痣。関連していない方が不思議だ。遅効性の敵の攻撃だろうか。

しかし——カヨコの直感が違うと囁いている。

丁度傷跡を囲むように焼き付いていることから、無関係でないのは事実だろう。だが、あの攻撃が直接の原因ではないのかもしれない。もっと他の、何か……深い場所に原因がある気がしてならない。

「現状これが何なのかは不明です。スキャン等も全て試しましたが実りある結果は得られませんでした。害があるもの、という訳ではないようですが……少々不気味です。我々でも経過観察をしますが、恐らく解明はできないでしょう」

苦い表情をディスプレイに映し、首を振る医師。それを見て、皆もまた同様に表情を暗くする。

深い傷跡を囲むようにできた、植物のツタの様な痣。どう考えても彼にとって良い方向に働くものではないだろう。より一層、彼の言動

に注意を払わなければならぬ。今後はこんな無茶をさせて堪るものか。

それに、彼に対して言いたいことが山のように増えた。取り敢えず意識が戻ったら病室で全員で説教だ。絶対に逃がさない。自らの行いを心から反省するまで決して許さない。

だが、それよりも先ずは先生の無事を喜ぼう。彼が生きていてくれて、本当に良かった。

「それで、面会は可能ですか？」

「最低でも1週間は面会謝絶です。大勢の方が面会にいらして、体力を消耗してはいけませんから」

まあ、当然だろう。絶対に面会を断れないであろう彼に代わって、病院側で拒否してくれたと考えればありがたいとすら思った。最優先なのは一刻も早い彼の快復。その障害になるであろう要素を可能な限り取り除くのは当然であろう。

一通り必要な話を話し終えたのか、医師は腰を折って「では、失礼します」と言つて退室した。それを見送り、ドアが完全に閉じられたことを確認した彼女達は——皆、一様に脱力した。

張り詰めていた緊張の糸が解けて、どつと疲れが押し寄せてくる。今日は色々と濃かった。まるで1ヶ月の出来事を無理矢理1日に圧縮したような、そんな気がしてならない。

「……取り敢えず、先生が生きていてよかった」

「ええ、そうね……本当に、今日だけで5年くらい寿命が縮んだわ……でも、何であんなになるまで我慢してたのよ……」

「誰かに心配させたくなかったんだと思うよ。全く、少しは自分を顧みてよ……」

「そうだね、先生はそういう人だもん」

アルの疑問に、それぞれカヨコとムツギが答える。彼の人柄はある程度分かった。彼は致命的なまでのお人好し。自分よりも他人を優先する困った人であり、生徒を心の底から大切に思っている。だから余計な心配をさせたくなかったのだろう。ワカモを残して全員を帰そうとしたのもその性質の表れだ。本当の限界……気合とか精神論

で抑えられないラインまで我慢し、如何にも大丈夫であるかのように振る舞う。彼がやりそうなことだ。彼が好みそうな手段だ。全く、心配すらさせてくれないなんて馬鹿げている。

だが、彼女達が一番怒っているのは他ならぬ彼女自身だ。彼の状態に、彼の限界に気付かずにつつと無理をさせていた。誰よりも傷ついていたのにも関わらず。

ギリ、とムツキは奥歯を噛み砕かんばかりに喰いしぼる。柴関が倒壊した時の記憶、霞む意識でも鮮明に覚えていて彼に抱きしめられた感触。自分が受ける筈だった傷を彼が肩代わりしたのだ。何故、と聞いても彼は『生徒を守るのに理由なんて要らないよ』といったものように笑って言うだろう。彼はそういう人だから。

彼に守られた私は、^{ムツキ}彼を守ることができなかつた。その事実が本当に苦しくて。

険悪な空気になりつつある待合室。肌を刺すような鋭さを伴っている空気の中、セリカの「そういえば」と声が響いた。

「大将もここに入院するのよね？」

「多分そうなると思うよ〜」

セリカの疑問に、ホシノが間延びした声で答える。

到着した救急医学部の車両は先生の為に風紀委員が用意したものであるが、彼と一緒に大将も乗せたのだ。そのまま一緒にこの病院に運び込まれ、片やICU、片や外来に通されてそれぞれ適切な処置を受けていた。幸いにも大きな怪我はなかったようだが、建物の倒壊に巻き込まれたという事もあり念のため精密検査を受け、入院するようだ。

ヘイローを持たないとはいえ、流石キヴオトスに住まう人と云うべきだろう。アロナの物理障壁があった事、標的となった先生から離れていた事などの要因はあるが、それを踏まえた上でも重傷を負っていても不思議ではない攻撃だった。

「先生は面会できませんし、一度お顔を見に行ってみましようか？」

「そうですね。一応避難はしてもらっていたけど、心配だし……」

「あ、あの……私なんか、い、行ってもいいのでしょうか……」

「良いに決まってるわよ！ 大勢いた方が大将も喜ぶわ！」

席を立ち、大将の病室へと移動を始めるアビドスと便利屋の少女達。一斉に押しかけると迷惑だろう、と判断したカヨコとアヤネがグループ分けを行っているのを尻目に……ワカモは彼女達とは正反対の方向へ歩を進めた。

「……貴方は行かないんだね」

「ええ。あの方以外は全て些事ですから」

それに気づいたホシノがワカモを呼び止めるが、ワカモは振り返る事すらせずに答える。

先生の多くを知る彼女、先生の愛を知る彼女。彼が生死の境目を彷徨ったあの時、彼女の内心は如何ほどだったのか。きつと、身を焦がすような怒りと憎しみと悲しみで一杯だっただろう。彼女は真実、彼を愛している。愛する誰かを失いかけたとなれば——その心は筆舌に尽くし難い程、乱れていたはずだ。

それなのに、彼女は自分のやるべきことを果たそうとしている。その在り方はホシノにとって余りにも眩しすぎた。

「……強いね、貴方は」

「あの方の安息すら守れない私が……強い訳がありません」

暗い、暗い声音。有り余る悲しみを伴った、自責の音階。それは強く、ホシノの耳を打った。

「もう、二度と失わないと決めたはず……でしたのに……」

「二度と……？」

訝しむようなホシノの声。だが、それについて深く考えるよりも先にワカモが振り返った。先の戦闘で破壊された狐の面は外されており、泣き腫らした赤い瞳が真っ直ぐとホシノを射貫いた。

「大事だと思ふ事は、誰にでもできます。私達はその先——どうすれば守れるのかを考えなければなりません」

「——」

「大切な何かが掌から零れ落ちた時、誰よりも悲しみ責めるのは……他ならぬ、私達自身なのですから」

そう告げて、ワカモはこの場から立ち去った。ホシノに対する忠告

と、ワカモ自身の自責と自罰。

余りにも重い言の葉に押し潰されそうになりながら、ホシノは小さな掌をぎゅつと握り締める。

——言われなくても、分かっている。そんな事、分かっているのだ。彼を大切に思っている事や、失いたくない事も。

此処に至るまで、多くを手放した。多くを取りこぼした。その果てに残った細やかな、だが確かな幸せと居場所。そして、自身の全てを受け入れ肯定してくれた彼。守りたい。手放したくない。ずっと掴んでいたい。

でも、この手は何かを守るにも、掴むにも小さすぎて。

「ホシノ先輩……」

無力感に打ちひしがれる小さな少女を見て、ノノミは目を伏せた。

忍び寄る悪意

先の待合室から階層と棟を移動し、一般病棟の病室までやってきたアビドスと便利屋の面々。どうやら個室があてがわれているようで、病室を表す番号の下には大将のネームプレートが1つだけ存在していた。

他の入院患者さんに迷惑が掛からないようにグループを分けようと考えていたが、大将1人だけならば纏めてお見舞いした方が良くだろう。その方が大将にも負担が掛からない。

なるべく早めに切り上げる事を条件に、ドアを3回ノックし真白い病室に足を踏み入れた。

「こんにちはわ、大将。お見舞いに来ました」

「大将、大丈夫？」

「やつほく、大将」

「ああ、大丈夫だ。こんな早い時間からありがとう、セリカちゃん、アビドスの生徒さん達も……ああ、便利屋の生徒さんまで」

入院ベッドのリクライニング機能を使っているのか、上体を起こしている大将が生徒達を朗らかに出迎えた。喜色を滲ませる声音、この声が聴けただけでも来てよかったと思う。

「お怪我のほどはいかがですか？」

「ちよつと擦りむいただけさ。入院なんてしなくていいくらいだ」

ノノミの問いに、大将は撒かれた包帯や絆創膏を指しながらそう告げる。見たところ確かに軽傷だ。処置がされている場所は然程多くなく、受け答えもしつかりとしている。一先ず、大将の無事を自身の目で確認できた彼女は胸に安堵を抱き、息を吐いた。

そんな中、大将は「それよりも」と言つて。

「先生の具合はどうだい？」

「今は容体が安定しているようです。面会はできませんが意識は数日後に戻る、と……」

「そうか……」

噛み締めるように呟き、ベッドに体重を預ける大将。その顔には安堵が強く表れていた。大将も自身より重い傷を負った先生の事が気が気でなかったのだろう。彼の無事を聞いた大将はとても嬉しそうであった。

だが、その嬉しそうな表情は申し訳なさそうな顔になり——セリカの方を見据えた。

「ごめんな、セリカちゃん。折角のバイト先を潰しちまって」「そういう問題じゃないわよ……」

セリカの呆れるような呟きに大将は豪快に笑い——誰もが驚愕する真実を告げた。

「まあ、いい機会だ。元々、もう直ぐ店を畳むよていだったからな。予定がちよつと早くなっただけと考えれば済む話さ」

「お店を……?」「えッ」

「ちよ、それホントなの大将!」

柴関が近日中に店仕舞いをする予定だった——大将から言われたその事実は便利屋は勿論、アビドスにとっても驚愕すべき事であった。信じられない、と言わんばかりの顔で大将を見ると彼は「ああ」と何でもない事を話すような声音で誰も知らない事柄を紡ぎ始めた。

「少し前から退去通知を受け取っていてね」

「た、退去通知って何の話ですか? アビドス自治区の建物の所有者は、アビドス高校で……」

「———そうか、君達は知らなかったんだな」

茫然とした顔でキヴオトスにおける常識を話すアヤネ。大将が経営している柴関の土地の所有者は、自治を任されているアビドス高校だ。

故に、柴関に退去通知を出す権限を持つ者は土地の所有者たるアビドス高校しかないが……当然、アヤネ達の身に覚えはない。ならば彼女達よりも前の代か? いや、大将は「少し前」と言った。そこから推察するに、恐らく数か月前。年度を跨ぐことはないだろう。

一体、何が——そう思っていた皆に、大将が何処か気の毒そうな顔をしながら知っている事を告げる。

「何年か前の話なんだが……アビドスの生徒会が借金を返せなくて、建物と土地に所有権が移ったんだ」

「えッ!?!」

その声はアビドス全員から上がったものだった。便利屋も声こそ上げないが驚愕している。

何せ、そんな話は聞いたことがないのだ。自治区の土地を売買するなんて信じられない。売る方は勿論、買う方も。学生自治を謳うキヴオトスにおいて限りなく黒に近いグレーゾーンのやり取りだ。

「う、嘘?!? アビドスの自治区なのに?!? じゃあ、一体今は誰が……!?!」

「……悪いな、名前ははつきりと覚えていないんだ。力になれなくてごめんな」

「ん、大将が謝る事じゃない」

「……そんな……でも、そういう事なら……」

これまでの事、掴んだ事実——そして、大将の発言。それらを総合し、ある結論に至ったアヤネは全員を見渡した。

「皆さん、先に学校へ戻っていてください。私は少し、早急に確認すべきことができましたッ」

「ちよ、アヤネちゃん!?!」

「大将、少し早いですが私はこれで失礼します。お大事になさってください」

そう言い残し、1分1秒すら惜しいといった様子で足早に病室を去るアヤネ。誰が止める間もなくドアの外へと駆けて行った彼女の背中を追うようにセリカも足をドアの方へ向けた。

「何の事は分からないけど、私も一緒に行くわ! 先輩たちは先に戻ってて!」

アヤネに追いつけるように少々駆け足で病室を飛び出したセリカであったが、言い忘れた事があるのか廊下の向こう側から顔を覗かせて「大将!」と叫んで。

「まだ引退なんて考えないですよッ！ 退去通知は私達で何とかするか
らッ！ それじゃ、お大事にね！」

そう言い、今度こそ病室を去るセリカ。廊下からは2人の走る音と
看護婦の注意する声、それに対する2人の謝罪が響いてきた。それに
対して苦笑いを浮かべながら、ホシノは噛み締めるように呟く。

「また、知らなきゃいけない事が増えたね〜」

「ですね……では、私達もお暇させて頂きます。大将、お大事になさっ
てください」

「ん、何かあつたら遠慮なく呼んで」

「ああ、ありがとうな」

苦い表情を浮かべるアビドスの面々。これ以上いると、病室全体の
雰囲気が悪くしてしまうと考えた彼女達は病室を後にしようとする。
残っているメンバーの間で話したい事は確かにあるが、部屋に戻って
からでも構わないだろう。

「それじゃ、おじさん達は帰るよ。またね、便利屋の皆」

「また何処かでお会いしましょうね☆」

「ん、またね」

「え、ええ、また……」

「まったね〜」

「……」

「は、はい……」

そうして、アビドスは便利屋68、大将と別れた。



同刻、シャーレオフィス。無人の薄暗いその場所に1人の生徒が訪
れていた。肌を刺すような静寂の中、ぽつりと呟く声は寂しい音色を
響かせた。

「……先生」

早瀬ユウカ。最も早い段階で先生に接触した生徒の1人であり、ミ
レニアムの生徒会に当たるセミナーに所属している彼女は主がいな

い机に腰掛けて黄昏れていた。

先生が重傷を負った事、緊急入院した事を聞きつけた彼女は仕事を全部コユキに放り投げて病院に駆け付けたが、受付で「面会謝絶です。お引き取りを」と取り付く島もなく告げられ。それからセミナーに戻る気にもなれなくて、彼の残滓を掻き集めるようにこの場所を訪れた。

コユキに仕事を押し付けてしまった事は申し訳なく思う。泣き顔で「うああああああ——————————」と叫ばれれば流石に良心が音を立てながら痛んだ。今度、謝罪ついでお昼ご飯でも奢ってあげよう。

だが、それよりも気がかりなのはノアだ。彼の一報を聞いた時、酷く傷ついた顔をしていた。目を見開いて、持っていたペンとメモ帳を落とし、白い肌を更に白くして。彼の傷をとて重く受け止めていた。彼と会ったことが無いはずなのに。

無論、ノアが見知らぬ誰かの不幸に全く心を痛めない冷血だとは思っていない。柔らかな態度と強かさを持つ、少しお茶目で優しい……自慢の親友だ。

だが、それでも……あの青褪めた顔には少々疑問が残る。あの悲しみは、まるでよく知る親しい人が傷ついたかのような——。

そこまで考えて、軽く頭を振る。もしかしたら自分が知らない場所で会っていたのかもしれない。彼はいつの間にかエンジニア部とヴェリタス、特異現象捜査部と仲良くなっていたのだ。ノアとも何処かで会って、親交を深めていた可能性は充分に考えられる。

「……だとしたら、伝えておくべきよね」

眩き、スマホのスリープを解除しトークアプリを開く。選択するのは当然ノアであり、彼女に先生と面会できない旨と病院で聞いた現在の容体を綴った文章を送信した。

「はあ……」

溜息を1つ吐いて、ロックを掛けたスマホを仕舞う。酷く憂鬱だ。何も手につかない。先生は外の人間、自分達とは異なる命。日常的に飛び交っている弾丸1発が彼にとっては致命傷になる。分かっている

たつもりの事実を改めて突き付けられた気分だった。

「……怖く、ないんですか」

このキヴオトスには、彼にとつての死因があちこちに転がっているのだ。弾丸だけではない。キヴオトスの住民は彼を素手でも殺せる。それはユウカだって例外ではない。無防備な彼の頭蓋を握り潰し絶命させることは簡単にできる。勿論、彼女はそんな事をやるつもりは欠片もない。だが、これはするしないの問題ではなく、可能不可能の話なのだ。

自分以外の全てが自身を簡単に殺せる力を持っている環境。そんな中、自分を守る最低限の力すらない彼は真面に日常を送れているのだろうか。

そう思っていると、突然オフィスに明かりが灯った。ユウカの操作ではない。故に、この場に自身以外の誰かが現れたと直ぐに思い至る。さて、誰が訪れたのやらと後ろを振り向くと――。

「ッー」

乱れた和服を纏う美少女がいた。黒の百鬼夜行の制服、仮面こそ無いがユウカが見間違えるはずがない。彼女は――！

「孤坂ワカモ……！」

記憶に新しいシャーレ占領事件、その主犯格の凶悪生徒だ。

「何が目的？ 返答次第では撃つわよ」

咄嗟にSIG MPXロジック&リズンを引き抜き、ワカモに銃口を向ける。

――何故ここにワカモが？ 先生の不在を狙って？ あの事件の焼き直しをするつもりなのか？ いや、考えても仕方がない。七囚人は常識で測れない狂人ばかりだ。兎にも角にも、シャーレで変な真似はさせない。

「……此処で発砲は御法度ですわ。ガンラックはそこにあるので、物騒な物は仕舞ってくださいな」

「は、え……？」

聞き間違いだろうか。今、災厄の狐からルールは守れと言われた気がする。溜息混じりの言葉、呆れたような視線。確かに、彼女は愛銃たる三八式小銃真紅の災厄もサブウェポンのハンドガンも持っていない。完全

なる丸腰だった。

ちらり、とオフィス入り口のラックの方を見れば2つの銃が立てかけられており彼女がシャーレのルールをきっちり守っている事が分かる。

この場に於いてルールを破っているのは己だと気づいたユウカは視線をワカモから逸らず、苦虫を噛み潰したような表情で凶器を仕舞い——鋭い目で眼前の少女を射抜く。

「何が目的なの？」

「あのお方のお召し物を取りに参りに」

「……」

本日2回目の衝撃にユウカは絶句する。思ったよりも数倍常識的な理由であった。彼女の表情を見るに、嘘を言っているようには思えない。確かに、入院ともなれば衣服の替えは必要だろう。それを取りに来るのは何ら不思議なことはない。1番の謎は、それを何故ワカモがやっているかという事なのだが……。

頭の中が疑問符で埋め尽くされたユウカをワカモは興味なさそうに一瞥し、横を素通りする。彼女は「失礼します」と呟きクローゼットを開けて、ハンガーに掛けられている制服とコートを1着ずつ手に取り丁寧に畳んでバッグの中に入れる。下着も同様の手順でバッグに仕舞い、用が済んだ彼女は「失礼しました」と言ってクローゼットを閉めた。

「あと、医務室へ……」

そう呟くワカモは踵を返し、次の目的地へ向かおうとする。先の戦闘と手術で大量に消費してしまった彼の輸血パックを補充するためだ。

先生は全く神秘を持たない身のため、神秘を纏ったものは彼にとって毒になる。故に、体に神秘が満ちている生徒の血液は使えないのだ。

そのため、彼は平常時は献血の要領で自身を血を抜き緊急時に使えるようにパッキングして保存している。その保管場所が医務室なのだ。他にも初撃で粉碎された緊急時医療キットの携帯用ケースと、

キット本体から使用した薬剤のストックも補充しなければならない。

—— 彼が、再び彼らしく戦えるように。

ワカモは決死の想いで落涙を堪える。酷く痛む胸、掻き筆りたくなる苦しさ。彼への恋情。彼に捧げる愛。どうしてあの陽だまりのような青年がこんな風に苦しまなければならぬのだろうか。そう、思わずにいられない。

必ず守ると誓った筈なのにこの体たらく。たった一人の愛しい人すら守れないこの無力さに何度己を呪い殺そうと思ったことか。だが、そんな事は許されない。歩み続ける彼の側に居るためには、同じ速さで歩かなければならないから。

ワカモは伏せていた顔を上げる。彼の全てを守る為に、彼の願いを叶える為に—— 武器を取ろう。

「—— 早瀬ユウカさん。1つ協力してほしい事があります。他ならぬ、あの方の為に」

だからまずはその為の一步。痛みの中、目を覚ました彼が彼の意志を貫けるように—— 必要な全てを掻き集める。

不和

天使を撃退し、先生が入院することになってから明けて、翌日の朝。吹き抜ける春風は初夏の香を感じさせる青さと清涼感に満ちている。D・U・の何処か、或いは百鬼夜行に赴けば散る間際の美しい桜が拝めるだろう。

春の陽気と夏の訪れを感じさせる麗らかな朝日が照らすアビドス高校の校門前には箒を片手に砂を払うノノミの姿があった。アビドス高校を含むこの自治区は砂嵐と切つても切れない関係にある。不規則に襲い掛かる砂嵐は、放置しておくで一瞬で道を砂の中に沈めてしまうため定期的な清掃が欠かせないのだ。

それに、この道は皆が登校する際に通る場所だ。通学路まで砂に埋もれていては気分も滅入ってしまう。今日のような日は、余計に。

「……先生」

——どうしたんだい、ノノミ。

いつもなら聞こえるはずの声は聞こえない。白のコートを纏う彼は何処にもない。優しい声で名前を呼んでくれる彼は、天使の羽が落ちたような笑みを浮べる彼はいない。一緒に居た期間は1ヶ月にも満たない筈なのに喪失感が酷い。心にぽっかりと穴が開いたような寂しさ。思つた以上に彼を必要としていたんだ、とまるで他人事のように思ってしまう。

1日経つた今でも先生は目を覚ましていない。その事実が両肩に重く押し掛かる。もし彼がこのまま目を覚まさなければ、もし容体が急に悪化すれば。暗い想像ばかりが頭に浮かんで消えて、ノノミの思考を雑念で埋め尽くす。

気分転換で始めたはずの掃除も全く手に付かない。先ほどからずっと同じ場所を箒が往復している。風に巻き上げられた砂がスニーカーに入っても気にならない位には、彼女は上の空だった。

昨日見た最後の彼は、饒舌に尽くし難いほど痛々しい姿をしていた。

全身を埋め尽くす切創、擦過傷、刺創、内出血。拭い取れない血の

香と死相。点在する重傷。体の各部位に繋がれた多数のケーブルとその先の機械。

弾丸を『痛い』で済ませる民が住まうキヴオトスでは、まず見ないレベルの処置。その光景が脳裏に焼き付いて離れない。

そんなノノミの嫌な想像を掻き消すように自転車のブレーキ音が鳴り響いた。俯いていた顔を上げた彼女の視界の片隅に水色と黒のロードバイクと其れに跨る銀色の少女が映る。シロコが登校したのだ。

ノノミは暗い顔色を努めて明るくし、自転車を手で押すシロコを出迎える。

「シロコちゃん、今日はいつもより早いですね。おはようございます」

「うん……おはよう、ノノミ」

ノノミの朗らかな挨拶に頷き、返すシロコの表情は思案顔であった。彼女にしては珍しい顔だな、とノノミが思っていると。

「ノノミ、ホシノ先輩が今何処にいるか分かる？」

「ホシノ先輩ですか？」

ノノミがそう聞き返すと、シロコは頷いた。何か用事があるのだろうか、と彼女は思いながらこの時間帯におけるホシノの行動パターンを思い浮かべながら、最も可能性が高い予想を口にする。

「多分、学校の何処かの教室でお昼寝してると思いますよ」

「そっか、ありがとう。じゃあ、先行ってるね」

「……？」

短く言い残し、自転車と共に校門を潜っていくシロコ。その後ろ姿を見ながらノノミは疑問符を浮べる。足早に立ち去る彼女はどこか焦りが見えたのだ。そして、不安も。だが、それよりも目を引くのは怒りの感情だった。

聞かれたホシノの所在、シロコの怒り。間違いなく何か起きる。ノノミの直感が囁いていた。

「ついていく、べきでしょうか……」

次第に小さくなるシロコの背中を見送るノノミ。彼女の呟く声は砂塵に吹かれて空を舞った。

机と椅子が倒れる喧しい音が、静寂を切り裂く様に教室の中で響いた。

アビドス別館。本館の奥、隠すように建てられた小規模の建築。この場所も教室を複数保有する校舎であるが生徒数の減少に伴い使用する機会が減り、いつの間にか使わない机や椅子、道具や機材を保管する倉庫になっていた。

街の喧騒からも離れ、生徒が使用する本館からも切り離されているためホシノはこの場所をお昼寝用のスポットとして使用している。或いは、皆に明かせないようなやり取り……大っ嫌いな大人と連絡を取る秘密の場所としても。

そんな場所で、シロコとホシノは対峙している。片や怒り、片や何時もの表情を取り繕って。

「いたた……酷いなく、もう……おじさんはシロコちゃんをそんな子に育てた覚えはないのにな」

「……いい加減にして。いつまでシラを切るつもり？」

ホシノは先程の倒壊で出来た机と椅子の山に座り込みながら、冷たい表情で見下ろしているシロコに視線を送る。仲間を心から大切にしているシロコが、彼女にとって最初の恩人であるホシノを突き飛ばしたのだ。異常事態、と言う他ないだろう。だが、ホシノは彼女の怒りに心当たりがある。故に、口では兎や角言いつつも彼女の行動を内心では責めていなかった。

何せアビドス対策委員会に対する明確な裏切りだ。5人の友情に泥を塗る下劣な行為だ。寧ろこの程度で済んで温情と言う他ないだろう。

そう思い、ホシノは自嘲する。こんな事をして誰も喜ばないなんて、ずっと前から知っていたのに。

——先生なら、この複雑に絡まった糸も心も解いてくれるのかな。

なんて、思う。甘え過ぎだろう。浅ましいにもほどがある。傷だらけで歩む彼に、これ以上の重荷を増やさないって決めた筈なのに。「うへへ、何の事言ってるのか、おじさんはよく分かんないな」
「……嘘、吐かないで。ホシノ先輩は知ってるでしょ」

何かを堪えるような声音で呟くシロコ。真つ直ぐとホシノを射貫く彼女の視線は虚偽を許さない。必ずホシノが口を割るまでは諦めないだろう。

「嘘じゃないって〜」

だが、ホシノは正直に話すつもりはなかった。のらりくらりとシロコの追及を躲し、その真実と胸の奥の本心は誰にも明かさなかつたのであつた。そんなホシノに対して次第に苛立ちを隠せなかつたシロコは、座り込んでいるホシノの胸倉を掴もうと手を伸ばそうとして——不意に、教室のドアが勢い良く開け放たれた。

「ホシノ先輩！ シロコちゃん！ 一体どうしたんですかッ!？」

肩で息をしながら教室の中に入って来たのは、先刻シロコが校門で出会つたノノミ。恐らく心配になつて追いかけてきたのだろうとシロコは当たりを付ける。それに、先ほど机と椅子の山を倒壊させたのだ。この校舎は木造のため遮音性が低い。大きな音はさぞ良く響いただろう。

ノノミは教室の中を見渡す。目に飛び込んできたのは崩れた机と椅子の山に座り込んでいるホシノであり、彼女はノノミを見てへにやつとした笑みを浮べる。対するシロコはノノミと視線を合わせずに、何処か気まずそうな表情のまま瞳を逸らした。

「シロコちゃん、どうして……」

「ノノミ……」

シロコがホシノに対して強い怒りを抱いた結果の行動。それがこれだと悟つたノノミは窘めるような、或いは非難するような表情で狼耳の少女を見つめる。

シロコが理由もなくこのような暴挙をするとは彼女も思っていない。だが、それでも——仲間に暴力を振るうのは駄目だろう。

シロコもその辺りの自覚はあるのか、ノノミが来てからはずっと居

心地が悪そうにしている。唇を噛み、俯いて——だが、その迷いも即座に終わる。彼女は何かを決意したような瞳でノノミを射貫いた。

「ホシノ先輩に用事があるの。ノノミには悪いけど——2人きりにして」

決して覆せない意志が籠った眼差し。確かに自身の行動は悪かった、反省している……だが、それよりも優先すべき『何か』があるのだとシロコの視線は訴えていた。その強い我に呑気に机を背もたれ代わりに座り込んでいるホシノは苦笑いを浮かべる。本当に強い子だと、若干の羨望を込めて。

そんな2人をノノミは厳しい表情のまま交互に見比べる。そして

「うーん、駄目です☆」

「えっ……」

いつも通りの笑みを浮かべて告げる。

「私達対策委員会に、『2人だけの秘密』みたいなものは許されません。なんたつて運命共同体ですから！」

「……でも」

「ですから、きちんと状況も説明してくれない悪い子には——」

そう言つて、ノノミは右手で銃の形を象りシロコの胸元に付きつける。

「お仕置き☆ しちやいますよ？」

「う、うーん……」

シロコは戸惑いの表情を浮かべる。予想外、と言えば予想外なのだが……ノノミが飛び込んで来た時点でこうなる事は彼女も薄々分かっていた。口では物騒なことを言っているが、その全てが2人の為であることはシロコも理解している。優しいノノミはこれ以上、2人が衝突する場面なんて見たくないのだ。

ノノミの善性と好意を前に、シロコは先程までの勢いを無くす。固められた決意には迷いの色が差し込み、どうするべきか———と思考を回し始めたとき、不意にホシノが声を上げた。

「えつとねえ、実はおじさんがこっそりお昼寝していたのがバレちゃったんだよね〜」

そう言い、立ち上がりながら頭を掻く。その顔は張り付けられたような、緩んだいつも通りの表情。スカートやシャツに付着した埃と砂を手で払う動作は自然体そのもの。先ほどまでの険悪な空気が嘘だったかのように振る舞うホシノは、はつきり言って——異常であつた。

「私のがんびり屋で怠け癖があるのは今に始まった事じゃないけど……ほら、私は先生のピンチに間に合わなかったじゃん？ 全部終わりにかけていた時になって漸く来て、さ……だから、その事でシロコちゃんにお叱りを受けてたってワケ。おじさんも最近はちよつと怠けて寝すぎたかもつて反省中なんだ。だから、ね？」

何処か申し訳なさそうにホシノはそう言う。真新しい癒えぬ傷口を自ら切開するような糾弾の言の葉は、柔いホシノの心に容赦なく突き刺さつた。これは紛れもないホシノの本心だ。だが、これはシロコとの衝突の原因ではない。

曰く、嘘の中に真実を混ぜるとバレにくい。そう思い至つたホシノの、咄嗟の転換。そして最後にシロコに向けてアイコンタクト。『話、合わせてね』と。

ホシノの視線と意図を受け取つたシロコは一瞬苦虫を噛み潰したような顔をした後、何処か申し訳なさそうな顔をしながら呟いた。

「……ん、ごめん。少し気が立つた。ホシノ先輩に当たつても、どうにもならないのに……」

「ま、誰しもそんな時はあるよね。おじさんもそういう経験あるある。ま、私は気にしないよ〜？ 可愛い後輩の不満を受け止めるのも、先輩のお仕事だからね」

ホシノはシロコとノノミを通り過ぎ、出入り口のドアの方へ向かう。そして、教室と廊下の境界線で振り返って。

「ほら、そろそろ集まる時間だから、行こっか」

それだけ言い残し、足早に別館から立ち去るホシノ。そんな彼女を追う様に、倒してしまった椅子や机を綺麗に片づけたシロコも去つて

しまい——ノノミだけが残された。

「——ホシノ先輩、シロコちゃん……」

2人のやりとり、一瞬で交わされた誓約。彼女達は何かを隠したのだ。ノノミに、他の誰かに知られたくない秘密を。

確かに、人は誰だって知られたくない事の1つや2つはあるだろう。何でもない事から重大な事まで、秘密の数や種類は人によって千差万別だ。だが——シロコが思わず手を上げてしまうような秘密なんて皆目見当がつかない。

いずれ中天に座す太陽を眺めて、ノノミは思う。どうか何も起きませんように、と。

だが——ノノミは近い内に致命的な何かが起こると、嫌な予感がして仕方がなかった。

虚の道

「——全員、集まりましたね」

シロコとホシノの衝突をノノミが仲裁してから暫く経った後、アビドス対策委員会部室にて。いつも通りの部屋に5名全員のメンバーが揃っていた。

何度も見た光景、何度も触れてきた当たり前の景色。その筈なのに、先生がいない期間の方が遥かに長い筈なのに——あるべきものが欠けたような心象になる。空席となった6つ目の席。こちらを眺めて優しく微笑む彼の姿はどこにもない。

それに寂しさを覚えながらも皆は気持ちを切り替える。今は感傷に浸っている場合ではないのだ。やるべき事が、伝えるべき真実がこの腕の中にある。

アヤネは息を一つ吐いて、昨日セリカと共に纏めた紙の資料をテーブルの上に並べて、口を開く。

「昨日、大将の話を受けてセリカちゃんと2人でアビドス自治区の関係書類を掻き集めて整理しました。皆さん、まずはこれを見てください」

「ん〜、これって……地図？」

それはアビドス自治区全体が印刷された、A4サイズの紙束であった。少々古臭さを感じる紙面には大まかな区画ごとに黒の太線が引かれブロック分けされ、そのブロックの中を細い線がセクションごとに分けている。セクションやブロックには番号や記号が割り振られ、誰がどの土地を保有しているのかが分かるようになっていた。

「直近までの取引が記録されているアビドス自治区の土地の台帳……『地籍図』と呼ばれるものです」

「土地の所有者を確認できる書類、ということですか……？」

「でも、書類なんて見なくてもアビドスの土地は当然アビドス高校の所有で——」

そこで頭を過ぎるのは、昨日の大将の言葉。

アビドスの生徒会が借金を返せなくて、建物と土地に所有権が移っ

た……彼は確かにそう言っていたのだ。

焦燥感に駆られたノノミは「まさか……！」と呟き、顔を青くする。「私もさっきまでそう思ってた！でもそうじゃなかったの！」

そう叫ぶセリカの顔には焦燥感と不安で一杯だった。よく見ると目の下には隈が浮かんでおり、満足に睡眠を取れていない事が分かる。書類をまとめる作業も原因の1つであるが、一番の理由はこの事実だろう。この学校を取り戻そうと、必死になって足掻いてきた彼女だからこそ……このどうしようもない真実は胸の奥深くに突き刺さった。

「昨日の大将の話を聞いて、まさかとは思ったんです。書類保管庫に保存されていたアビドスの利権関係の書類を読み漁って、やっと理解しました。柴関ラーメンが入っている建物は勿論のこと、このアビドス自治区の殆どが……」

苦々しい顔で地籍図を見るアヤネは——何かに耐えるように、重々しく真実を告げた。

「……私達アビドス高等学校が所有していませんでした」

「えっ……!?!」

「どういう事？アビドス自治区がアビドスの所有じゃないって、そんなわけ……」

疑問の声を上げるホシノは手近にあった地籍図を1枚拝借し、その所有者が書かれている欄を必死になって探し——そして、見つけた。

「——カイザーコンストラクション」

その呟きにシロコとノノミの目が大きく見開かれた。

「……!」

「カイザーコンストラクション……カイザーコーポレーションの系列ですか？」

「はい。カイザーコーポレーションの多数ある事業、その中の建設業を扱っている会社です」

「……そっか。大将への退去命令も土地の権利を持つてるカイザーが出してたんだ……」

そう呟くシロコの顔は悔しさに歪んでいた。

ずっと、知らなかったのだ。当たり前だと、常識だと判断して知ろうともしなかった。

日に日に消えていくアビドスの住民達。去る理由は一向に復興しないアビドスに見切りを付けたと思っていた。だが、実際は違うのかもしれない。もしかしたら、大将のようにカイザーから退去命令を出されて強制的に退かされた可能性が浮上した。

アビドスの住民はこのことを知っていたのか。いや、知っている可能性の方が高い。何せほぼアビドス全域だ。大将のように知っていて、それでいて尚この場所に残ってくれているのだ。

——— ずっと、裏切ってしまった。

その悔しさが、不甲斐なさが、怒りが焼き付いて離れない。固く拳を握って、唇を噛む。知らなかった、では済まされない。この事実から目を逸らすことも許されない。

——— 真実を知ろうともせず、住民達の信頼を裏切り続けていたのは———

——— 他ならぬ、自分達であった。

「……ゲヘナの行政官の方や、風紀委員長……彼女達は柴関近辺を『自治区付近』と呼称していました。自治区内ではなく、あくまで付近。あのお2人は、大規模戦闘が起きたあの場所が既にアビドス自治区から外れている事を知っていたんです」

アヤネは昨日の会話を思い返す。あの時、感じた違和感の正体は柴関周辺の呼称。風紀委員会のトップ2人はずっと『自治区付近』と言っていたのだ。この真実を知っていたから。

「カイザーが所有しているのは、既に砂漠化した本来とアビドス高校本館も、その周辺数千万坪の荒地。そしてまだ砂漠化が進んでいない市内の建物や土地まで……所有権がまだ渡ってないのは、今は本館として使っているこの校舎と、周辺の一部地域だけでした……」

つまり、アビドスのほぼ全域を既に手放してしまったという事。広大であったはずの自治区が知らない間にとても狭くなってしまった事。皆が驚愕を覚えた。

この校舎が最後の砦であり、アビドス存続の希望。そして、カイ

ザーの悪意に抗った証であり——大企業の暴挙を晒す武器でもある。

「で、ですが、どうしてこんな事に？ 学校の自治区の土地を取引だなんて、普通できるはずが……一体、誰がこんな事を……」

「——アビドスの生徒会、でしょ？」

ノノミの疑問に、ホシノが静かに答える。何時もの怠けた昼行燈の少女の姿はどこにもなく、ただ冷徹に現実を見据えていた。彼女は冷たい瞳と声音のまま、語り始める。

「学校の資産の議決権は生徒会に帰属している。土地の売買なんて可能なのは、普通に考えて自治区を保有している学校の生徒会だけ……そうでしょ、アヤネちゃん？」

「はい、その通りです。取引の主体は、アビドスの前生徒会でした」

そう言い、指差すアヤネの先にある取引欄にはカイザーコンストラクションの名前と、アビドス生徒会の名前があった。きちんと印も押されており、偽造の跡は見えない。正式な取引が両者の間で交わされた事がわかる。

故に、この取引は例えカイザーの不正を暴いたとしても覆せないだろう。この取引や契約自体に不正や不備があつた訳ではないのだから。

「そんな……アビドスの生徒会はもう2年前に無くなつたはずでは……」

「……はい。ですので、生徒会がなくなってからは……2年前から取引は行われていません」

「——そっか、2年前……」

噛み締めるようにホシノは呟く。大事な思い出、決して色褪せないように心の奥底にしまっていたあの日々を——思い返す。懐かしくて、思わず笑みが零れてしまった。誰も知らない彼女だけの思い出、彼女だけの記憶。彼女だけが知る、対策委員会のきっかけ。あの日、植えた種はちゃんと芽吹いたよ——と、遠くにいる大事な人に伝わるように強く思う。

「何をやってんのよ！ その生徒会の奴らは!？」

そんなホシノの感傷は、机を勢いよく叩きながら立ち上がったセリカによって中断された。彼女はその身に有り余るほどの怒りを発露させながら、その感情のままに叫ぶ。

「学校の土地を売る!? それもカイザーコーポレーションなんかに!? 学校の主体は生徒でしょ!? どうしてそんな事……ッ!?」

大切な居場所だった。大好きな場所だった。それを守る為に、存続させる為に多くを切り捨ててきた。

セリカだって15歳の少女だ。遊びたかっただろうし、趣味や好きなものだってあるだろう。だが、それらを我慢して学校の為に多くの時間を捧げてきた。別にそれに対して誰かに感謝されたかった訳ではない。学校存続以外の見返りを欲しいと思った事はない。

彼女にとつてその行動は自治区を預かる学生として、この学校と場所を愛する者として当然だと考えていた。

だが、これはあんまりだろう。大切だと思っていた居場所は自分が入る前から奪われていた。取り返せない所まで行ってしまった。守りたいと誓ったものは、自分達の手からすり抜けてしまっていた。

その衝撃も、怒りも察するに余りある。

「こんな大事に、ずっと私達は気づかないまま……」

「……其々の学校の自治区は学校のもの。余りにも当たり前の常識です。当たり前すぎて、借金の方ばかりに気を取られて……致命的な見落としに、気付く事ができませんでした」

アヤネは拳を固く握りしめて、唇を噛んで俯く。こうすればよかった、ああすればよかった。そんな思考が堂々巡りして頭から離れない。学校が借金に喘いでいる、という現状自体がキヴオトスでも例外中の例外なのだから……自治区は学校の物、という常識も捨てるべきだったのだ。

常識に囚われ過ぎて、初歩の初歩でつまづいている事に今まで気づかなかった。気づいていれば、何かが変わっていたかもしれないのに。

「私が、もう少し早く気付いていたら……」

「ううん、それはアヤネちゃんが気にする事じゃないよ」

自分自身を責めるアヤネを、ホシノは優しく諭す。貴女の所為ではないのだと。間に合わなかったあの日、先生が言ってくれたように。今度は己が誰かを許す番だと思いつつながら。受け取った優しさのバトンを誰かに渡す事で、何かが少しずつつ好転していくと信じて。

「これはアヤネちゃんが入学するより前の……いや、対策委員会ができるより前の事なんだから」

「……ホシノ先輩、何か知ってるの？」

その様子、自分達の知らない事を知っているような口振にシロコが目敏く反応する。ホシノはこのメンバーで唯一の3年生、2年前も1年生としてこの学校に在籍していたのだ。何か知っているかも——
——懇願に近い彼女の言葉に続くように、ノノミも声を上げる。

「あ、そうです！ ホシノ先輩も、アビドスの生徒会でしたよね？」

「え？ そ、そうだったの!？」

「それに……最後の生徒会の、副会長だったと聞きました」

全員の視線がホシノに集まる。突然話題の中心になった彼女はどこか恥ずかしそうに、懐かしそうに——帰れない日々を口遊むように語り始めた。

「……うへ、まあ、そんなこともあったねえ。2年前の事だし、そもそも私もその辺の生徒会の先輩達とは実際に関わりは無くってさ——」
そう言い、頬を掻きながら思い返す。1年生として駆け抜けたあの日々を。砂に埋もれた校舎達。日に日に減っていく生徒。見切りをつける住民達。ないない尽くして何もかもが駄目だった。最低だった、最悪だった。今思い出しても碌な思い出なんてなくて。

「私が生徒会に入った時には、もう生徒会のメンバーは殆ど辞めちゃって残ってなかったよ。在校生も2桁になってたし、教職員もない。授業なんてものは、もうとっくの昔に途絶えてた」

全校生徒の減少、治安維持部隊の自然消滅、最高意思決定機関たる生徒会の機能不全。対応しなければならぬことばかりだった。やるべきことが山積みだった。悲鳴を上げるように走って、走って。休む間もなく、またスタートを切った。

「生徒会室も、プレートとか無ければただの倉庫にしか見えない所

だったし、引き継ぎ書類なんて立派な物は一枚も無かった。ちようど砂漠化を避けようとして、学校の建物をあっちこっちに移してた時期ってのもあってね」

転々とする校舎。慣れる間もなく移されて、放棄されて。建設費だけが嵩んでいく。大事な書類も何処にあるか分からず、無くした無くしたと色んなものをひっくり返して……それでも見つからず肩を落とした。

「そもそも最後の生徒会って言ったって、新任の生徒会長と私の2人だけだったし」

「たつたの、2人……」

「そうそう。笑っちゃうくらい少ないよね……まあ、その生徒会長は無鉄砲で、会長なのに校内でも随一の馬鹿で……私だって嫌な性格の新入生でさ」

一向に良くならない状況に憤っていた。改善しない現実を立っていた。手を差し伸べてくれない誰かを憎んでいた。全てに、反抗していた。

頭を過ぎるのは酷い思い出ばかり。他の生徒がキラキラとした日々を送っている中で、自分だけが砂塵に汚れていた。

「いや……何もかも滅茶苦茶だったよ」

でも、それでも——確かに輝く日々だった。今更ながらにそう思う。

「校内随一の馬鹿が生徒会長……？ 何それ、どんな生徒会よ……？」

「成績と役回りは別だよ、セリカ」

「そもそもセリカちゃんも成績はそんなに……少し前、先生と一緒に補講やってましたし……」

「わ、分かっているってば！ どうして急に私の成績の話になるわけ!？」

一応ツッコんでおいただけじゃん!？」

顔を赤くしながら捲し立てるセリカ。いつもの調子が戻ってきたと安堵を抱く。ああ、そうだ。彼女に悲しい顔なんて似合わない。こうしている方がずっと——彼女らしい。

「そもそも、アヤネ、あれ見てたの!？」

「覗くつもりはなかつたんですけど……」

頬を掻きながら、アヤネはそう呟く。本当に偶然なのだ。偶々……本当に偶々、宛先もなく校舎を歩いていたら、普段は使わない空き教室でセリカと先生が2人でいるのを見つけた。

何をやっているのだろうかと思いつつながら中を覗くと、そこには机の間に挟んで2人きりの特別授業を行っていたのだ。

教科書を使い、解説とヒントを挟みながら分かりやすい授業をする彼。彼に教えられた事を使いながら問題を解き、時折質問する彼女。今や廃れてしまった教育の姿はアヤネの目に新鮮に映った。

あれだけ初対面でツンツンしていたセリカが、今やここまで彼を受け入れて懐くなんて……と思いつつながら。あと、少し羨ましいと思いつつながら。

兎にも角にも、彼と彼女の間に生まれていた溝や軋轢がなくなることがアヤネは心から嬉しかった。その喜びは、ちゃんと覚えている。

「うへ、いやいや、正にその通りだよ。生徒会なんて肩書きだけで、どうしようもないお馬鹿さんが2人集まったただだけだからね。何の間違いだか、生徒会なんかに入っちゃって……いや、あの時はあちこちに行ったり来たりだったねえ」

セリカの怒りを宥めるように、ホシノは呟く。

生徒会とは名ばかりの組織だった。全校生徒が100を切り、役員も2人しかいない生徒会で何を決めれると言うのか。砂漠化は進行するばかり。授業なんて文化はなくなつた。生徒は減るばかりで、それに反比例するように問題が積み上がる。借金を返済する目処も立たず、現実の全てが敵対しているように思えた。

「ほんつと、馬鹿みたいに、何にも知らないままさ……」

雰囲気が悪化する生徒会室で、生徒会長と向かい合いながら意見を交わし合った。この方法いいんじゃない、でもそれだとこの問題が――

――ああでもない、こうでもないと思つて頭を悩ませた日々。それらは実を結ぶことがなく、砂に埋もれて消えてしまった。

砂漠化の原因を突き止めようと現地に赴き、意味のないデータを集

めた。

住民に聞き込み調査を行い、頑張ってるねと言われて飽を貰った。だが、その住民は数日後にはいなくなっていた。

他の学園や企業、連邦生徒会に協力を要請しようとキヴオトス中を走り回り、その悉くが門前払いされた。

なくなつたお祭りを開いて、人を呼び込もうとした。

どれもこれも、今は遠い遙かな日々だ。

「もう、どうしようもなかつたなんてね……」

そう吐き捨てたホシノの声は後悔で溢れていた。深く深く、深海まで沈みそうなほど重い声音。彼女が隠し続けてきた、その身を焦がす自罰と後悔。誰も知らないバッドエンド。覆せない過去と現実。或いは、彼女の負の側面。

守れなかつたものばかりだ。取りこぼしたものばかりだ。見失つたものばかりだ。私^{ホシノ}だけ残されても——何度そう思って、この身を呪つただろうか。

「……」

「ホシノ先輩……」

「……ホシノ先輩が責任を感じる事じゃない。昔の事情は知らないけど、実際に生徒会が解散になった後……アビドス対策委員会ができたのは、間違いなくホシノ先輩のおかげ」

守れなかつたものばかり——だとしても。

取りこぼしたものばかり——だとしても。

見失つたものばかり——だとしても。

貴女^{ホシノ}がいてくれたから、今この未来があるのだと——シロコは強く、断じた。

「……う、うん」

その余りにも強い口調に気押されたホシノは、頬を搔いて思わず首肯する。

「……ホシノ先輩は怠け者だし、色々とはぐらかしてばっかりだけど……大事な瞬間に誰よりも前に立ってる」

「そうです。セリカちゃんが誘拐されたって連絡を貰った時も、誰よ

りも早く駆け出したのもホシノ先輩でしたし……」

「……うへく、そうだっけ？ よく覚えてな——」

「はい、ホシノ先輩は誰よりも友達想いですから☆」

「私、それ初耳なんだけど!? 何で教えてくれなかったの!?」

「ホシノ先輩は色々と駄目な所もあるけど、尊敬してる」

「それって褒め言葉なの？ 悪口なの？」

絶えず襲ってくる4人からの誉め殺し。詰め寄りながら、我先にとホシノの良い所や好きな所を列挙し続ける。その唐突さに、顔を若干赤くしながら彼女は声を上げる。

「ど、どうしたの皆!? 急にそんな青春っぽい台詞を……! おじさ

んこういう雰囲気、ちよつと苦手なんだけど!?」

「……なんとなく言っておこうかなって思ってた」

「え、ええ……」

そう言い、胸を張るシロコ達。それを見て困惑の声を上げたホシノは照れて赤くなった顔のまま。

「あー、もう……顔、熱くなっちゃったよ」

心底、嬉しそうに笑った。

連鎖する悪意

「……では、どうして前の生徒会はカイザーコーポレーションにアビドスの土地を売ったんでしょうか？」

気を取りなおすように、会議の軌道修正を行うアヤネ。そう、今は会議中なのだ。先程のホシノの誉め殺しは必要な事だったとはいえ、いつまでも脱線しているわけにはいかない。

中断していた疑問を再び全員に投げかけると、最初にシロコが意見を述べた。

「実は裏で手を組んでたとか」

「いえ……それは違うと思います」

その意見にアヤネは苦笑を交えて否を返す。アビドス生徒会とカイザーコンストラクションが手を組んでいたのならば、このアビドス地区は既にその名を無くしていただろう。アビドスの自治権が及んでいる地区も無くなっていくだろうし、校舎も取り壊されていただろう。

そもそも、2年前の時点で『そう』ならば、ホシノ以外の4人は高校に入学すらできていないだろうし、ホシノもこの場に残っていなかった。

「そうだね。私もすっかり関わってないからただの推測だけど……ちゃんと学校の為を思って、色々頑張ってきた人達だったんじゃないかなーって思ってる。多分、最初は借金を返そうとして……って感じなんだろうな」

「借金のために、土地を……」

「はい、私もそう思います。取引が開始された時点で、学校の借金はかなり膨れ上がった状態でした。それを返済するための手段に土地の売却を選択したようですが、砂漠化が進行しているアビドスの土地に高値が付くはずもなく……少なくとも、借金自体を減らすには至らなかったようです」

ホシノの言葉を肯定し、紙を捲りながら補足をするアヤネ。借金の増加に伴い、売却する土地が広がっている事からも、この説は間違

いないだろう。だが、幾ら売っても大した値にはならず借金は加速度的に増していき、かと言って他に手放せる、価値あるものがなかったアビドスは土地を売る行為をやめる事ができなかった。

「それで繰り返し土地を売ってしまう負の循環に……という事でしようか？」

「何それ？　なんかおかしくない？　最初からどうしようもないっていうか……」

そう、根本的に破綻しているのだ。最初の方ならばまだ分かる。借金を課されようと、生徒数というマンパワーがあるならば十分返済できる見込みはあっただろう。それに、その時は砂漠化も今ほど進行していなかったため、土地の価値もそれなりにあったはずだ。

だが、減少していく生徒と進行する一方の砂漠化を鑑みれば、その考えは覆らなければおかしいだろう。減少する生徒、住民。悪化する治安。自治区の管理すらできない学校。そんなガタガタな学校が貸し付けた莫大な金額を返済できる訳がない。

必然、何処かのタイミングで見切りを付けなければ採算が取れなくなるだろう。カイザーがその程度の先見性を持つてないとは思えない。故に、その未来が見えた上でこの現状があるのだ。まるで、返済できない事を承知の上で貸し付けているような――。

「……そういう、事か」

「シロコ先輩？」

その解に至ったシロコは思わず声を上げる。今まで別々の問題として捉えていた全てが、線と線で繋がった。

「アビドスにお金を貸したのもカイザーコーポレーション、アビドスの土地を買ってるのもカイザーコーポレーション」

「……!？」

「初めからカイザーはアビドスに借金を返済してもらうつもりなんてなかった。その狙いは――」

「広大なアビドス自治区そのもの、って事だね」

シロコの至った解に即座に理解を示したのはホシノだった。状況証拠も完璧、疑う余地もない。目的は分かった、ならば後は――

その手段だけ。

「カイザーローンが学校の手に負えないくらいのお金を貸して、利子だけでも払ってもらおう為に土地を売るように仕向ける」

「……そうですね。きっと最初は要らない砂漠や荒廃した土地でも売ったらと、甘言を弄したのでしよう。どうせ砂漠化した使い道のない土地、その提案を断る積極的な理由もなく……」

アヤネが理解し、言葉を続ける。

当時の生徒会にとっては甘い誘惑だったのだろう。生徒に借金を課すこともなく、砂漠化で荒廃した土地を手放すだけで減るともなれば、飛びつく気持ちも分からなくなる。少なくとも、アビドスの信用を落とすことや利子の増額をその場凌ぎとはいえ防止できるともなれば、全校生徒が団結して借金を返済することよりは余程現実的に映ったのだろう。

それに、権利を手放すという事は同時に責任を手放すという事だ。砂漠化で荒廃した土地なんて保有していてもコストが嵩むだけ。利用できる見込みも無いのならば、何もかも手放し少しでも借金を減らす方を選ぶだろう。当時の生徒会も借金の事で頭が一杯で、他にリソースを割く余裕もなかったであろう事もその選択を後押ししたはずだ。

「ですが、そんな安値で売ったところで借金が減らせる訳でもなく、土地を取られる一方で……」

「アビドス自治区そのものが、ゆっくりとカイザーコーポレーションの物になる」

「元々、そういう計算だったのかもしれない」

「アビドスにお金を貸した時点で、こうなるように全てを……」

「随分前から計画してた罠だったのかもね。それこそ、何十年も前から……それくらい、規模の大きな計画だったのかも……」

それ位には、大規模な計画だった。初期の方から……アビドスがカイザーに頼った時と同タイミングですら遅い。もっと前からこの状況を狙っていたとしか思えない。

元々カイザーはアビドスの土地を手に入れる計画をしていたのだ

ろう。だが、アビドスに怪しまれずに接近するタイミングがなく計画が滞っていた。そんな時に起きたこの砂漠化は渡りに船だとすら思っただけだ。なにせ自社がブラックオプスに手を染める事なく、誰も悪くない天災によって勝手にアビドスが危機に陥ってくれたのだから。その危機に乗じて、善人の皮を被って接近する。君達学校に良いお話がありますよ——と、甘い誘惑を囁きながら。

そうして、ゆっくりと窒息させていった。時間をかけて少しずつアビドスという地域を殺していったのだ。気づいた時には手遅れになるように、もうどうしようもない程事態が進行しているように。全て奪われ、壊され、殺されるのをただ待っただけになってしまおうように。恐ろしいほど合理的で、非道な手段だった。

「何それ!? ただただカイザーコーポレーションの奴等に弄ばれてるだけじゃん!」

当然、そんな現実を受け入れられるわけがないセリカは先ほどよりも更に強い怒りを込めて叫ぶ。

何せ、これは対策委員会の全てに対する冒涇だ。今までの全てに泥を塗りたいく下劣な行為だ。

最初から返せない鼻で笑いながら貸し付けたのならば、今まで返そうと努力してきた日々は何だったのか。まだ無駄な事をしてる、と馬鹿にされるだけだったのか。対策委員会という組織も連中から見ればお飯事まめごとだったというわけか。

駆け抜けた日々も、努力も、葛藤も、絆も——全て全て無駄だったと嗤われ、否定された。

そんな事——到底、許せる訳がなかった。

「生徒会の奴等、どんだけ無能なわけ!? こんな詐欺みたいなやり方に、騙されてさえないなければ……ッ!」

「セリカ、落ち着いて」

肩で息をしながら怒りのまま叫ぶセリカを宥めるシロコ。だが、彼女としてセリカの怒りを否定しているわけではない。むしろその逆だ。

シロコも、他の全員も——途轍もないほど、激怒している。「悪いのは騙される方じゃなくて騙す方。こんなやり方、許せない」

「……わ、私も分かっているわよ！　ちよつと前にマルチに引つ掛かっちゃったし、下手したら此処の誰よりも分かっている！　悪いのは騙した方だって事は！」

セリカだって分かっている。もういない生徒会を責めても仕方がないと。彼女達だって必死になって学校を守ろうとして、この行為に及んだのだと。

彼女は力無く地面に座り込み、涙声で怒りの裏側に隠れていた感情を吐露した。

「でも……悔しい、よ……どうして……ただでさえ苦しんでいるアビドスに、どうしてこんな酷い事できるのよ……」

「セリカちゃん……」

助けを求める手を踏みつけた。泣いている人を振り払った。苦しんでいる学校を利用して、己の欲望と目的を追求した。

何故、そんな酷い事を平然と出来るのだろうか。

「……苦しんでる人達って、切羽詰まり易くなっちゃうからね」

「——え？」

「余裕がなくなると、人は何でもやっちゃうんだよ……ま、よくある話だけだね。ただ、それだけだと思うよ、セリカちゃん」

汚い大人のやり口はよく知っているよ、とホシノは吐き捨てた。

この話も世の中に掃いて捨てるほどある悲劇の1つだ。別に珍しくも何ともない、歴史を紐解けば星の数ほど見つけれられる悪意の話だ。

それは分かる、分かるが——受け入れたくなんてなかった。悲劇を『よくある話』なんてカテゴライズにしたくなかった。そうした方が良いとしても、そうした方が賢いとしても……セリカにはできない。

悲劇を受け入れろだなんて哀しすぎる。今、この場にいない先生は2人きりの時に言ってくれたではないか。『悲しければ嘆いて、腹が立てば怒っていいんだよ』と。

——ならば、私も斯く在りたい。

悲劇を前に涙を堪えて唇を噛む必要なんてないのだと、優しく教え

てくれた彼のように。

「状況は決して良くありません。ですが……希望はあります」

アヤネが強い口調で、輝く意志が伴った瞳で前を射抜く。

「学校の借金、このアビドスが陥ってる状況、そして先生と共に見つけてきた幾つかの糸口……これで、私達を取り巻く全てが明らかになりました」

「ん、そうだねー」

「カイザーコーポレーションはアビドス生徒会が解散して以降、土地を購入する方法が無くなり……だからまだ手に入れていない『最後の土地』であるこの学校を奪う為に、ヘルメット団を雇用していたのだと思います」

「……カイザーコーポレーションの狙いは、このアビドス高等学校そのもの」

この場所以外全てを手中に収めたカイザーが狙っているのは、今なおたった5名にやって存続しているアビドス高等学校だ。カイザーの支配に抗い続けた証たるこの学校を、この学校を奪われたら全てが終わる。

それが、全員の共通認識だった。

「そうなるよ、次の疑問が出てきますが……どうして、土地なのでしょう？ アビドス自治区は、もうほとんどが荒地と砂漠、砂まみれの廃墟になっているのに……」

「それは、確かに……言っちゃなんだけれど、こんな土地を奪ったところで何か大きな利益になるの……？」

「それは——」

「話は纏まりましたか？」

アヤネが口を開こうとしたその時、一陣の風と共に窓から舞い降りたのは——狐面と百鬼夜行の制服を纏った少女だった。

「孤坂ワカモさん……」

「貴方、何しに来たの？」

「伝えるべき事を伝えるに」

そう言う彼女は、はつきり言ってしまうえばボロボロだった。致命傷

や動けなくなる重症以外を全て無視し、前進する狂氣的な戦闘スタイル。先生が悲しむから封印していたそれを、彼女は期間限定で開放していたのだ。

戦況を決めるのはスピードだと判断し、彼が眠る間に出来る限り今後の憂いを減らしておこうとした結果。この傷は彼女にとっては彼の為に戦った勲章のようなものだった。

「これから私が発する言葉は、あの方の知識であり、意志です。よく聞いてくださいな」

その怪我を心配するアビドスの面々を無視しながら、彼が『万が一』を想定してワカモに伝えていた言葉を彼女は反芻する。

「カイザーコーポレーションが砂漠で何かを企んでいます」

「……！」

「動くならお早めに。では——」

動揺する彼女達を置き去り、再び風と共に去るワカモ。一分一秒が惜しい今は他に話す余裕などないと言わんばかりの行動にアビドスの面々は目を白黒させながらも、彼女から伝えられた彼の言葉を咀嚼し、呟く。

「アビドスの砂漠でカイザーが何か……」

「嘘ではない、と思いますが……うーん……」

「ああもう、そんな難しい事考えるより先にやる事があるでしょ！

アビドスの砂漠はうちの自治区なんだから！ 実際に行ってみればいいじゃん！ 何が何だか分からないけど、この目で直接確かめた方が早いって！」

先程の涙が嘘だったように意気揚々と銃を手に取り叫ぶセリカを見て、皆は笑って同じように銃を取る。ああ、その方がシンプルだと思いつながら。

「……ん、そうだね」

「……いや、セリカちゃん良い事云うねえ。こんなに遅しく育ってママは嬉しいよ。泣いちゃいそう……ノノミちゃん、ティッシュ貰える」

「はい、どうぞ☆」

「な、何よこの雰囲気!? 私があんな事でも云ったらおかしい訳!」「あはは、そんな事は……ですが、セリカちゃんの云う通りです!」
伝えられた彼の意思。あれは信頼なのだ。彼女達ならばきつと『こうする』という、心地の良い思い。その暖かさに触れながら、皆は銃を掲げて。

「行きましょう、アビドスの砂漠へ」



皆が準備のために教室を出て、1人残されたシロコ。彼女は自身のバッグから1枚の紙を取り出した。

そこには、こう書かれている。

『退会・退部届——対策委員会 小鳥遊ホシノ』

紛れもなくホシノ本人の筆跡だった。偽装ではない。あとは顧問の承認のみ、という段階まで書き進められたその書類は決して遊びではなかった。

彼女は本気でこの部活を辞めようとしている。

ホシノがあそこまで長く席を外す事は珍しい。スマホで連絡しても一向に繋がらなかったのだ。誰よりもアビドスと対策委員会を愛し、メンバーのリーダーとして最前線で戦っていた彼女が見せた違和感。

何かある、と勘繰り探った結果がこれだ。ノノミには気づかれたが、その詳細までは分からないだろう。反面、ホシノには完全に気付かれている。紙を抜いたことも確実にバレているはずだ。

気心の知れた仲とはいえ、不在の時を狙ってバッグを探る行為は良くないと……ああ、分かっている。だが、どうしても不安だった。そして、その不安は杞憂なんかではなかった。

「何か、きつと理由が……」

ホシノがアビドスを去るなんて嫌だ。そんな寂しい選択なんてさせたくない。

でも、彼女の問題が何処に起因するものなのか分からなくて。

「どうすればいいんだろうね、先生……」

彼ならば分かるのかな、なんて願望ですらない何かを抱きながら――

――彼女は教室を出た。

全てはこの居場所を、アビドスを、仲間を守る為に。

残照、暁を呑む

生きている体には代謝が付き物だ。一定のサイクルで体を生まれ変わらせる行為、細胞の入れ替え。段々と古いもの、役目を終えたものが破棄されて新しいものに切り替わる。尤も、心筋細胞等の筋肉細胞や神経細胞といったものは入れ替わりのスパンがとても長い。人生の終焉を迎える時ですら、心筋細胞は半分しか入れ替わっておらず、半分は生まれた時の細胞のまままで終わる。

だが、それでも、全身が生まれた時と同じ細胞を保ったままの生き物は存在しない。必ず代謝によって体を生まれ変わらせなければならぬ。生まれたときの体を手放さなければ、違う体にならないと命になれない。

そう考えると、生まれたときの自分と今の自分は果たして同じものなのだろうか。仮に同じだとしたら、何処で誰が判断したのか。仮に違うとしたら、何処に差異を感じたのか。言うなればテセウスの船、個の連続性……そのパラドックス。

その観点で考えると、先生という存在は非常に不思議に思える。彼は殺されている。それも、数えるのも億劫になる程に。彼という個体は殺された時点で途切れ、彼の物語はピリオドを打たれる。その筈なのに彼は続いているのだ。

断絶しているのに、連続している矛盾。死んだ自分、生きている自分……それらが混ざり合っているから、彼は明確に他の存在と異なる。文字通り、生きて^{死んで}いる世界が違う。生も死も、対立する二項を同時に矛盾なく内包している。

死、と云うのは恐ろしいものだ。暗く、冷たく、辛く、痛く……どこまでも悲しいもの。一度味わったから耐えられるものではない。寧ろ、あらゆる生命が一回しか耐えられないものが死なのだ。それを何度も味わい、耐えて、それでも尚前を向いている彼は異常という他ないだろう。

彼がキヴォトスで疎外感を感じるのも不思議ではない。何せ、彼を

象っている全てが、凡ゆるものから外れている『異質』なのだから。



息を吸うとその分だけ何か大切なものを手放さなければならぬ気がしたから、大事なものは何処かに仕舞っておかないといけなかった。

奪われないように、無くさないように、置いていかないように。呼吸と一緒に、出て行かないように。生きる代償として捨ててしまわないように。

その代わりに捨ててきたのが自分だった。生きる為に自分の荷物を捨ててきた。他の誰かから受け取ったものを捨てたくなかったから。

別に、その事を後悔しているわけではない。自分の命なんか比べ物にならないくらいに大事なものが多くて、それを守る為なら何だって惜しくない。

だが、時折考えてしまう。自分はどこにいるのか、という事を。今ここに立っている自分は、本当に自分なのかと。他の誰かで構成される自分は本当に自己を持っているのか——そんな、哲学のような問いを。勿論、答えなんてない。

海底からゆっくりと引き上げられる感覚。目覚めだ。意識の覚醒だ。夢と現、脳皮質が作り出していた深海から浮上する。

薄らと目を開けると、白が飛び込んできた。まるでカーテンで視界を遮られたような光景は、目に包帯が巻き付いている事の証拠。視覚は正常だ。聴覚も同じく心電図の音が聞こえる為、正常。嗅覚もアルコールの匂いを捉えているから、正常。触覚も同じく。四肢もある。肉の四肢だ。内臓も恐らく大丈夫だろう。

ベッドのリクライニング機能を使って、上体を起き上がらせる。その時、声すら上げられない鋭利な痛みが全身を襲うが、それを呑み込んで意識を覚醒させた。

「……はあ」

そのまま手を突いて、足を使って立ち上がろうとするが……体が動かない。神経がおかしくなったか、それとも……有ると思ひ込んでいただけで、実際には欠損しているのか。最低でもそこは確認しておかないと……と、そこで漸く手や足を折っていたという事実を思ひ出す。

取り敢えず、視界を塞いでいる包帯を外さなければ何も始まらないだろう。彼は左手を動かそうとするが……やはり、上手く動かない。ケーブルの感触だけが鮮明で、それ以外の感覚が皆無だ。だが、右手は動いたため、それを自身の顔の方へ持つていき、手探りで包帯を外していく。手先が覚束なくて、最終的には巻かれていた包帯をずり落とす形になってしまったが……視界の確保はできた。

明るい日の光。太陽の位置的に正午を少々回った程度だろう。瞳孔が収縮して必要な光量を確保させて、そこで漸くぼやけていた視界のピントが合った。

先ず、視界に飛び込んできたのは右手。内出血は多いが、目立つ傷は数える程度。次に左手、指先が黒く変色し壊死しかけているが……これは日数を掛ければ完治する。

——思ったよりも随分軽いが、油断はできない。何処かが軽ければ、その皺寄せのように別の何処かが碌でもない事になっているのだから。

体に掛けられていたブランケットを退け、病衣を肌蹴させると、そこには思った通りの光景が広がっていた。

先ず、左脇腹。刺し貫かれた箇所を囲むような植物の痣。当然、心当たりはある。共鳴だ。

——曰く、救世主がゴルゴダの丘で磔刑に処された後、その生死を確かめるべく磔になった彼の脇腹に槍を突きたてたと云う。

この痣はその伝承と重なったが故に現われたのだろう。所謂、類感魔術。類似したもの同士は互いに影響しあうという発想だ。救世主という共通項、刺し貫かれた脇腹……それによって現われた聖痕^{ステイグマ}、或いは烙印。この植物も茨だ。円環は王冠を表している。荊冠、受難の証。安息などないと改めて突きつけられる。

——自身を救世主と思った事はないが、ここまで雁字搦めにされてしまうと苦笑が出てしまう。そんなに大層な存在ではないというのに。

兎も角、この烙印は放置で構わない。ただの消えない痣だ。これが原因で死ぬことはない。ただ、生徒達には見せないようにしないと。そしてそのまま視線を下半身に持つていき——。

「……ああ」

と小さく呟いて、苦笑いを浮かべた。

「——アロナ、起きてるかい？」

『先生ッ！ 大丈夫ですか!? 異常とか、変な所とか、痛い所とかありませんか!?!』

「大丈夫だよ。心配かけてごめんね」

来客用のテーブルに置いてある白いタブレットに話しかけると一瞬でシステムが起動しホログラムのアロナが現れた。彼女の顔は涙と不安でいっぱいになっていて、どうやらかなり心配をさせてしまった様子。ズキリ、と先生の胸が痛んだ。

「……あれから、セナが私を此処に？」

『……はい。倒れた先生をセナさんが治療しながら此処まで……アビドスの皆さんや便利屋の皆さん、ワカモさんも走って此処まで付いてきました』

「そっか。また、迷惑かけちゃったな」

呟き、体の感触を確かめっていると——突然、咳込んでしまった。『先生ッ！』と叫ぶアロナを宥める余裕もなく、喘息の発作のような音を繰り返す。血の混じった胃液が手前まで昇ってきて、堪えようにも抗えずにそのままベッドに吐き出した。丸一日以上何も食べてなかった事から、幸いにも吐瀉物はごく少量だったが、胃の不快感は消えてくれない。

『先生ッ！ すぐにナースコールを——!』

「必要ないよ。吐き出し損ねた血が昇ってきただけで……ああ、大丈夫さ」

『そういう問題じゃないです……!』

叫ぶアロナを落ち着かせながら頭の中で状況を整理する。先の戦闘から丁度24時間が経過した程度だ。ワカモはアビドスの面々に伝言を伝え終え、彼女自身の仕事に取り掛かってくれているはずだ。そして、アビドスの面々は砂漠へ向かっているだろう。ワカモを経由して伝えた真相を確かめる為に。

そうになると、先生も此処で寝ているわけにはいかない。皆の為に動かなければ先生の名折れだ。

「アロナ、病院の基幹システムのジャックをお願いします」

『……まさか、先生……』

彼の不穏な一言を聞き、アロナの顔色が露骨に悪くなる。病院のシステムの掌握？ 何のために？ いや、そんな事は分かりきってる。だが、しかし——そんな思案が見え隠れしている彼女に、先生はふわりと微笑んで。

「病院の方々には申し訳ないけど、脱出しちゃおうかなーって」

『無茶です先生ッ！ 今動かれると体の傷が……！』

「そんな事は承知の上だよ、アロナ」

彼はそう云いながら、手元に持ってきたスマホの通知欄を見て——

——それから、僅かに頬を緩めた。

『先生は頑張りすぎです！ 何でも一人で頑張って……もつとアロナ達に——！』

言葉の続きを勢いそのまま口に出そうとしたアロナを、先生は「アロナにそう言われるのは嬉しいけど」と言って遮り。

「私ひとり、じゃない。皆、頑張ってるんだ。このキヴオトスにいる人達は全員、頑張ってるんだよ。そんな中で、私だけが惰眠を貪るわけにはいかないさ」

『う、ううう……！』

先生の言葉に納得がいかないのか、海を望む青い教室で地団駄を踏みながら愛らしく膨らませるアロナ。言葉でダメなら泣き落としで、と言わんばかりに涙目で先生を見つめる彼女には何としてでも休んでほしいという意思がはつきりと見て取れる。泣き落としは今咄嗟に思い付いた苦し紛れの策であるが、それでも効果は覲面だ。何せ、

先生は人の涙には弱い。特に、生徒やアロナの涙は。

だが、それでも此処で止まるわけにはいかないのだ。アロナの意思と善意を踏み躪ってしまう事に申し訳なきを覚えながら、彼は此処を立つ準備を進める。

ベッドのすぐ隣にはシャーレのコートと制服、そしてヒマリが使用している車椅子と同型の物が鎮座している。どうやらワカモが色々と計らってくれたようだ。迷惑をかけてばかりだ、と思い己を嘲る。詰めが甘いにも程があるだろう。だが、懺悔している場合でないから思考を切り替えて、アロナに向かつて声をかけた。

「クラフトチェンバーの……そうだね、FS-104を貰えるかな？」

『……は、はい。勿論ですが……何か冷凍保存しなきゃいけないものでもありました？』

疑問の声を上げながら、アロナは先生の言葉通りの物を固定化した。物質を冷凍保存するためのキューブを受け取った彼は、苦笑いを浮かべながら。

「足の指が取れたから、それを保存したくてね。此処に残しても仕方ないし、誰かに聖遺物として利用されるくらいならクラフトチェンバーの対価物質に突っ込んだほうがマシだからね」

その言葉に、アロナは弾かれたように彼の足の指先へと視線を持っていき——そして、絶句した。

彼の左足の指が2本無くなっていたのだ。視線を足からずらすと、白いベッドの上に無造作に転がっている肉塊が2つと、赤い血痕。

欠落したのは左足の小指と薬指。包帯は巻かれていない事から、病院での処置後を取れたと考えられる。凍傷と壊死が同時に発現した事が原因だろう。断面からの流血が僅かなのが救いだ。

彼の体に付けられた取り返しのない傷。それを見て、とうとうアロナは泣き出した。

『先生……ごめんなさい……アロナが、アロナがもつと——』

「違うよ、アロナ。君の所為なんかじゃない。君が責任を感じる必要なんてないんだ」

『でも……でもお……』

「咄嗟にアロナが守ってくれたから、私は生きている。私にとってアロナは命の恩人なんだ……ありがとう。心からそう思ってるよ。それにほら、よく言うだろう？ 死ぬこと以外は掠り傷ってさ」

そう言っつて、彼は笑う。だが、そんな事でアロナの涙が止まる訳もなく。

アロナは言っつてほしかったのだ。苦しいって、痛いって。足の指が欠けて平気な人間なんていない。大丈夫な訳がない。彼の事だから、きつともう人前で素足を晒さないのだろう。海に行ってもサンダルすら履かないのだろう。なのに彼は平気な顔をして笑うのだ。

それが、本当に苦しくて。

彼の痛みを悼み、啜り泣く青い少女。そんな彼女の元へ向かうべく、先生は青い教室を保有するシツテムの箱へと手を伸ばした。

—— ずっと傍にいてくれたアロナの涙を拭ってあげたいから。

真昼の太陽

アロナをひとしきり宥め終わったあと、先生は青い教室から出てキ
ヴォトスに帰還した。

教室とキヴォトスの移動——精神の転移も少なからず肉体に
負荷を掛ける。そのため、体力が消耗している状態や、怪我をしてい
る時の使用はアロナから禁止されているのだ。

先生に抱きしめられ多幸福感に包まれていたアロナはその事実に関
づいた途端、また泣きながら彼に説教をして——兎も角、今のア
ロナは非常にご機嫌斜めだ。また、色々と落ち着いた時にちゃんと
構ってあげないと——————肉の体に力を入れる。

痛む体に鞭を打ち、手を伸ばして取れた足の指たちを回収する。欠
損してから少し時間が経っているのか、手に取った足の指は硬く、冷
たかった。自分の体の一部だったとは思えないほどに。

その時に、体に接続されていたケーブルが何本か外れてしまうが
……大丈夫だと判断する。恐らくナノマシン注入用のケーブルだ。
体の修復が大体終わっている今、役目は無い。

腕に刺されていた点滴の針を手慣れた動作で抜く。そして、点滴の
パックを見て僅かに違和感を覚え……スマホのナノマシンの動作履
歴を確認、違和感が正しかったと確信に至る。回りくどい手口を、と
内心で吐き捨てるが特に問題はないため放置した。

その他の全身に取り付けられたケーブルを全て引き抜く。こんな
事をすればすぐに看護師か医者がすつ飛んでくるだろうが、この病院
の基幹システムは全てアロナの手に落ちている。直接この部屋に訪
れなければ、彼が起きている事にも気付かないだろう。

全てのパラメータを正常値へ書き換え、看護師による患者の確認も
済んだものにしておく。そしてオートマタの巡回経路も書き換え、監
視カメラの映像も全て差し替えた。これで彼の行動を記録する媒体
はなくなった。

空白地帯となった病室で病衣を脱ぐ。その最中、体が幾度も悲鳴を
上げ激痛を訴えるがそれらを飲み込んで、彼は生まれたままの姿と

なった。

少し前まで傷一つなかった体。今や傷跡と痣に塗れて見る影もない。勿論、時間を掛ければ跡すら残らない物もある。キヴオトスの医療は非常に優れているのだ。

だが、その技術を以てしても拭い取れないものがある。人の体も心も、変化しやすいだけで元の形には戻らないのだから。

一つ息を吐いて、制服を手に取り身に纏う。体は動かさしくいが、幾度となく袖を通した己の正装だ。ボタンを留める等の指先を使う動作はあるが滞りなく着用できる。寧ろ、病衣を脱ぐ時よりもやり易かった。

シャーレの白い制服とコートを纏った瞬間、彼は『誰か』から『先生』に成る。意識の切り替え、と言うよりは分散した自己を型に嵌めるような。何処にもいなかった自分を此方側に呼び戻すような——
——そんな変貌。

首からIDを下げ、車椅子に腰掛ければ、不自由はあるがシャーレの先生としての活動に大きな支障がなくなった。これでまた生徒の為に動ける。それに心から安堵した。

シャーレの回線、彼専用のアクセス経路を使用し秘密兵器の起動を行い——そのまま、量子波送受信機構システム・メサイアを応用した脳波によるコントロールを開始した。シャーレ屋上格納庫から病院までの距離は直線距離で約5 km、1分も掛からずにこの病院の屋上まで来てくれるだろう。

「じゃあ、行こうか——アロナ」

『はい、先生……くれぐれも、無茶はしないでください』

「ああ、分かってるよ」

車椅子で屋上へと向かう彼。その無防備極まる背を——看護師の服を纏ったオートマタが見つめていた。右手に握っているのはカルテではなく、カスタマイズされたハンドガン。

「……此方、アルファ1。ターゲットが動いた。約3分後、D2ブロックに到着する。仕掛けるぞ」

『アルファ2、了解』



広大な砂漠を望む荒廃した道路を1台のごく一般的な車両が走っていた。法定速度を彼方に置き去りにした速さとF1レーズ宛らのドラテクはシロコがハンドルを握っているから。何とこの少女、ロードバイクを動かす感覚で車両を走らせているのだ。もしこの地にヴアルキユーレが居たならば、まず間違いなく危険運転で逮捕されていただろう。

それはともかく
閑話休題。

アクセルべた踏みの暴走機関車は徘徊していた不審なドローンやオートマタを何体か轢きながら短時間で砂漠と道路の境界線まで辿り着いた。

「……車は此処に止めておきましょう。この先は……」

「ん、徒歩だね」

この車両は極地での運用を想定していない。舗装された一般道路での使用がメインだ。もし仮に、此処から先を車両で進もうと思うと砂漠地用のオフロード車か戦車等の軍用車でもないと厳しいだろう。或いはヘリ等の航空機、砂漠に足を付けないものが望ましい。

無論、借金に喘ぐアビドスにそんな高価なものは無いため必然的に徒歩での移動に限定される。

車に詰め込んだ荷物の中から最低限必要な物だけを選別し、それを持って車外に出る。照り付ける太陽が容赦なく肌を焼き、日焼け止めを持ってくれば良かったと今更後悔。砂塵対策にマスクは持っていたが、そこまで気が回らなかった。

煌々と輝く太陽を恨めし気に見上げながら、セリカは聞こえてくる会話を耳を傾ける。

「野宿用のキャンプ用品はどうしますか？」

「ん……不自然な熱源までの距離は300kmだよ？」

ホシノの確認にアヤネが「はい」と肯定を返すと、彼女は緩んだ笑

みを浮べて。

「なら要らないんじゃないかな？ 妨害を想定しても昼過ぎには目的地に着けると思うし、使わなかったら荷物になっちゃうからさ〜」

「もし移動中に夜が来たら、皆で肩を寄せ合って寝ましよう☆」

ノノミが楽しそうに言うのと、張り詰めた雰囲気は緩む気がした。思えば、少し肩に力を入れ過ぎたのかもしれない。それ自体は悪い事ではないが、それが原因で失敗したら元も子もないだろう。過ぎたるは猶及ばざるが如し、とはよく云ったもので、何事も程々が丁度良い。

「それにしても、アビドス砂漠……元々、砂漠地帯だった場所かあ……」

「ドローンや警備ロボット、オートマタが普段から徘徊している危険な場所です。先ほどはやむを得ず撃破しましたが、以後はできる限り戦闘を避けて進みましょう」

「はい」

理由は不明であるが、アビドス砂漠には良くドローンや警備ロボット、オートマタが徘徊している。嘗ての市街地を守るために配備されたものがそのまま残っているのか、或いは企業等が不要になったものを此処に遺棄しているのか。そんな事を調べる余裕も力もないアビドスにとつて理由は不明であるが、この場は出所不明のオートマタが流れ着く場所であり、銃撃戦が想定される場所であった。

先程はやむを得ず轢いて破壊してしまったが、オートマタ等の間のネットワークが生きている可能性を考慮すると良くない選択だった。他の道を探す手間無く最短距離で砂漠の入り口まで辿り着けたのは僥倖であったが、それは結果論でしかなく、一瞬で破壊できていなかったら他の個体を呼ばれていた可能性がある。

その事を踏まえると、この先の砂漠では可能な限り騒ぎを起こさない方が良いだろう。オートマタ等の巡回経路と被るなら迂回路を探し、どうしようもなくなった場合のみ、最速で基幹ユニットを破壊する。

「皆さん、念のため今一度火器の動作チェックをお願いします」

「うへ、帰ったら即分解清掃コースかな〜」

「サブでもう一つ銃持つてくるべきだったかも」

アヤネの言葉に了解を返した少女達は、各々持ち込んだ銃器のチェックを開始する。弾丸は装填されている。セーフティを外したら即座に発砲できる状態だ。加えて、予備の弾薬や消耗品もばっちり。神の知識ザフキエルのような規格外が相手でなければ3回程度の大規模戦闘が可能な量を確認し——悪意の潜む砂漠を鋭い視線で射貫く。「アビドス砂漠で、カイザーコーポレーションが一体何を企んでいるのか……実際に行って、この目で確かめましょう」



そうして砂漠を歩き続けて、どれほどの時間が経っただろうか。午前9時には砂漠の入り口に立っていて、そこから歩き始め……今、確実に正午は過ぎてきているだろう。最初は無風だった砂漠も、奥に進むにつれて強風が吹き始めた。今は防塵用の装備一式を身に着けていないと真面に進むことすらできない。砂嵐、と呼ぶには些か規模が小さいが、それでも過酷な環境である事には変わりない。

アビドスを襲った砂漠化のダウンスケール版を、彼女達はその身を以って味わっていた。

「ここが、棄てられた砂漠……」

「砂だらけの市街地に行った事はありませんが、此処から先は私も初めてです……」

棄てられた、と云われた通り、今彼女達が立っているこの場所は随分前に遺棄されたものだ。来る手段も徒歩等に限られ、仮に来たとしても砂塵舞う大地が広がっているのみ。フィールドワークにも向かない地形のため、此処に来る用事なんて皆無だろう。

実際、ノノミ達4人は初めて足を踏み入れて、その極限環境に圧倒されている。吹き荒ぶ風と、それに伴う砂塵、小石。照り付ける真昼の太陽。数m先すら見通せない最悪な視界。成程、確かに此処は捨てるのも納得がいく。こんな環境では何もできないだろう。

だが、そんな環境を過去に訪れたことがある少女がこの場にはい

て。

「いや、久しぶりだねえ。この景色も」

「ホシノ先輩は此処に来た事あるの?」

セリカの問いにホシノは「うん」と短く頷いてから——広大な砂漠を見渡した。

「1年生の時、生徒会の仕事の一環で何回かね」

——尤も、前見たときはここまで荒んでいなかったけど。

あれから2年。たった2年で、専用装備一式で身を固めないと苦しい環境に変化したのだ。砂漠化の進行スピードは恐ろしいと言う他ないだろう。

「もう少し先に進めば、そこにはなんと……かつてアビドスの砂祭りが開かれていたオアシスが!」

「え? オアシス? こんな所に?」

「うん。でもまあ……昔の話だよ。今はもう全部干上がっちゃったんだ。元々はそんじよそこの湖より広くって、船も浮べられるくらいだったとか」

何処か懐かしそうに話すホシノを尻目に、皆は辺りを見渡す。ホシノの云うオアシス、その跡地らしき場所は残念ながら視認できなかったが、以前の繁栄を聞くと興味を惹かれる。

「ま、私も実際に見たことはないんだけどさ」

「砂祭り……私も聞いた事がある。アビドスの有名なお祭りで、凄い数の人が集まるって」

「そうそう、別の自治区からもそのお祭り見たさに態々人が来るくらいだったからね。まあ……砂漠化が進行する前の、何十年も前の事だけだよ」

「へえ、今はこんな荒れ果ててるけど、昔は此処でそんな凄いお祭りが……」

「前まではこの辺りも結構住みやすい場所だったらしいからね。當時はこんな砂埃も無かっただろうし……」

噛み締めるように呟く、アビドスの面々。嘗ての繁栄、キヴオトス最大規模の自治区を誇ったアビドスの大きなお祭り。だが、それは才

アシスの消滅という形で幕を下ろしてしまった。そして、オアシスの消滅を契機にこの場所から人が去ってしまったのだろう。

今や人影一つすら残っていないこの街を見て、とても寂しくなった。今使っている校舎や、自分達が済んでいる家、郊外の町。それらも、抗う術なくこうなってしまうのだろうか。砂漠に埋もれ、生活の影すら残らず、段々と人々から忘れ去られる……そう思うと、とても悲しくなってしまう。

5人の間に流れていた暗く淀んだ空気を取り払う様にホシノは「ところで」と言つて。

「アヤネちゃん、まだ目的地は遠そう？」

「えっと……一応設定したセクターまでは、もう少しですね。あと20分程度で到着するかと」

「もう少しですか……見た所、何もなさそうですね……うーん……」

ノノミは目を凝らして遠くを見るが、相変わらず何も見えない――

――いや、今視界の端に何か映った。

「……今、なにか……」

ノノミと同じく、シロコも何かに気付いたようだ。その眩きに伴い、全員の足が止まり即座に警戒体制へ移る。近場にあった建造物の残骸に身を寄せ、その間にアヤネがドローンのサーモセンサで偵察を行えば、2人が捉えた『何か』のシルエットがタブレット上に表示された。

「これは……ドローンとオートマタですね」

「この辺り、何でかああいうのが良く集まるんだよね」

「……アイツ等、なんか変じゃない？ 目的もなく歩いてるっぽいけど……」

「兎も角、最初の方針通り通り過ぎるのを待ちましょう」

8体のオートマタと、それと同数のドローン。この集団の行動は率直に言えば意味不明なものだった。嘗ての命令を忠実に守っているのだろうか。それとも、宛先なく砂漠を幽鬼のように彷徨い歩いているのか。

オートマタ集団の行動をじっと観察していると、不意にノノミが持

ち込んだバッグの中を取り出して。

「少し遅いですが、お昼ご飯にしましょう☆」

防塵テントを取り出しながら、満面の笑みでそう言った。

誰が影を追い

昼食を取ろう、と云うノノミの提案は皆に受け入れられた。思えば出発してから碌に休憩も取っていない。体力的にも、集中力的にもこの辺りで休憩を挟んでおいた方がこの後が楽だろう。その時間にあるオートマタ集団をやり過ごせるならば効率的にも良い。反対する要素なんて何もなかった。

全員で協力し、建物の残骸を風除けに使いながら作業をする。支柱を立て、シートを張り、ピックを地面に突き刺すと、簡易的なテントが作り出された。5人全員が入るには少々手狭だが、贅沢は言えない。砂塵と風、直射日光を防げるだけでもありがたいがたかった。

少女達はテントに入るや否や、纏っていた防塵装備を全て脱ぎ捨てた。

「あゝ……暑かった……」

「うへ、おじさんもげんか〜い」

「結構着込んでいましたからね……」

額に張り付いた前髪を鬱陶しそうに払いながら手で仰ぐセリカと、その横で伸びをするホシノ。そんな彼女達を見つめながら、アヤネは苦笑いを浮かべる尤もも、口に出していないだけでアヤネやノノミ、シロコも内心は同じだった。制服の上に防塵装備を着込んで、更に荷物を持ち数時間ぶっ通しで移動し続けるのはかなり堪えた。

何時もの制服姿に戻ったただけなのに開放感が凄まじい。だが、同時に少し休んだ後にまたこの装備を着込まなければならぬと思うと少々憂鬱だった。

空気を切る鋭い風の音はテントの中からも良く聞こえ、巻き上げられた砂利や小石がシートの外側を喧しく叩いている。装備を固めていたため然程気にならなかったが、風に乗った砂利は体に当たると普通に痛い。砂漠地帯で活動するのであれば必ず対策しておかなければならないのだ。

そして、これらの装備は決して安価ではない。極地運用を想定して

いる物は基本的にとても値が張る。無論、砂漠地帯に在る学校であるアビドスはこれらの装備を有していた。だが、借金を負ってからは碌に手入れも更新もできておらず、今回使おうと思ひ倉庫に足を運んだアヤネとシロコが見たのは経年劣化で使い物にならなくなった装備達であつた。

しかし、彼女達は砂漠での運用が充分に可能な装備を所有している。その理由は――。

「こんな物まで持つてきてくれたなんて、本当先生様々よね」

今この場にはいない先生が関与している。

アビドスに訪れた初日、クラフトチェンバーによる物質生成で持ち込んだ物の中に5人用の防塵装備と野外活動用のキット一式が入っていたのだ。これを見つけたときアビドスの面々は感謝と驚愕、ほんの少しの不気味さを彼に覚えた。

必要な物が、必要だと思つた時には既に用意されている周到さ。まるでこうなる事が分かつていたかのような先読みは今に始まつた事ではない。だが、今回ばかりは少々異常だ。何せ、アビドスの来訪初日から準備されていたのだから。あの日から何度も状況が変わつた。予想外の事ばかりで、頭の処理が追いつかない場面だつてあつた。それをあの始まりの日から予測する？ 常識的に考えて不可能だろう。

出発前のワカモの伝言も例に漏れず必要な情報だつた。あのタイミングで伝えられたから、行動の方針が固められた。

―― 一体、彼は何が見えているのだろうか。同じものを見ている筈なのに視点が全く異なる感覚すら覚える。暗闇のようできて迷いを晴らす光のような時もある、何処までも理解不能な人。

だが、同時に納得した。彼に感じた違和感は、きつと他者とは異なる断絶した視点や価値観に起因するのだろうか。

他者と同じ視点を持ってない。他者と同じ価値観を持ってない。他者と同じ生き方ができない。

そして、この差は彼自身が一番分かつているだろう。キヴォトスに彼の同胞はいないのだ。神秘の有無という肉体的な差違、隔絶した視点という精神的な差違。彼とキヴォトスの住民達の共通点なんて肉

体のフォーマットがある程度一致している事しかない。

ずっと彼のそばにいるワカモだつて彼の味方で在り続ける事は選べても、彼の理解者になる事はできない。

言つてしまえば、彼はこの広い世界で独りぼっちなのだ。

——それは、なんて哀しい物語。

「うへ、そうだね。お見舞いに行つたら、ちゃんとお礼言わなきゃだ」

でも、それでも一緒に歩めるとホシノは思っている。彼を信じる事はできるし、彼を頼ることも頼られることもできる。彼に触れることも出来るし、彼を抱きしめることだつてとても簡単だ。

彼は孤独な救世主ではないのだ。底抜けに優しく、麗らかな陽だまりと暖かな笑顔がよく似合う——普通の青年だ。

「……先生、大丈夫かな」

ぽつりと呟いたその声。外で吹き荒ぶ風よりもかなり小さい音の筈なのに、テントの中の4人にはとても良く聞こえた。少女達が声の主たるセリカの方に視線を向けると、彼女は顔を少しだけ俯かせたまま。

「ごめん……心配になつちやつて……」

「謝ることじゃない。先生が心配なのは、皆一緒」

「そうですよ。それに、きっと大丈夫です。今頃、病室で暇を持て余してると思いますよ。」

少し笑いながらノノミがそう言うと、皆も釣られて笑みを浮べた。

「……そうですね。どうやら、就任以降は碌に休めていないようなので、体を労わる良い機会かもしれません」

「だからと云つて入院は良くないんだけどね」

「ん、確かに。先生はもつと自分の体を大事にしてほしい」

シロコの言葉に、全員が肩を落としながら苦笑いをする。確かにその通りだ。彼にはもつと自分の体を大事にしてほしい。ひとつきりの体なのだ。あんな……まるで消耗品の様に使い潰す真似はしてほしくない。

「そろそろ飯できますよ」

と、そんな風に雑談に花を咲かせているとノノミが声を掛けてくれた。其方の方に視線を向けると、使い捨ての容器と紙コップ、加熱用ヒーターに入れられたレーション、それらが入っていたであろう袋が5つずつ準備されていた。

各々が1つずつ手に取り、ヒーターの中身から主食とおかずのレーションを取り出し容器に盛り付けると良い香りが鼻孔を擽った。セリカのレーションの中身は炒飯と麻婆豆腐の中華系のラインナップであり、戦闘糧食とは思えないほど食欲をそそる見た目をしている。

他の少女達はまた別のメニューのようであり、肉じゃがだったりハンバーグだったりと非常にレパートリーに富んでいた。少女達は「いただきます」と呟き、スプーンでレーションを掬い、口元に運び咀嚼すると——その目を驚きで染めた。

「わあ！ 美味しいですね☆」

「これは凄いですね……！」

ノノミとアヤネが声を上げると、それに同意するように皆が頷いた。軍事に使用される携帯食料は即座に食べれる事や栄養価が最も重要視され、味や見た目は殆ど顧みられる事がない。

だが、アメリカ軍で使用された初期のMREのような余りにも不味い食料と云うのも当然宜しくなかった。3大欲求の1つである食が満たされないとともなると兵士達の士気に悪影響を及ぼすであろう。そのため、軍事面での有用性はそのままに、味などの娯楽面の改善が始まった。

そのような動きもあり、レーションの味は年々と進歩しているのは知っていたが……これは想像以上だ。利便性も、栄養価も、味も、見た目も全て今までの物と一線を画している。

「これ、SRT正式採用のお高めのやつじゃない？ 付属品も一杯ついているし」

そう言ってホシノは袋の中の付属品を取り出した。中身は調味料とウェットティッシュ、ミントガムが入った小さめの袋が1つ。粉末のコーヒーと緑茶が1つずつ。デザートのパウンドケーキ、ナッツとドライフルーツ、チョコレート。正に至れり尽くせりのラインナップ

であった。

「ん……これも先生から？」

「はい。補給品として初日に頂いたものです……ここまで良くしてくださるなんて思っていませんでした」

「だね……それにしても、このレーション美味しいね。種類も一杯あるし、これなら普段から食べちゃいたい位だよ」

「普段から食べたらあつという間に体重が怖くなるわよ、ホシノ先輩……」

「うへ、それはヤダな」

そんな軽口を叩きながら、雑談交じりで少し遅めの昼食を取るアビドスの少女達。最近は慌ただしくて5人で落ち着いて食事を取る頻度が少なかった事も相まって、時間はあつという間に過ぎ去った。

レーションをペろりと完食し、お湯に溶かした粉末のコーヒートパウンドケーキを用意する。

「……砂漠のど真ん中で、こんな優雅なデザートを楽しめるなんてねえ……」

「ですね☆ それに、デザートも美味しいですし」

そう言い、付属していたデザートを頬張る。若干パサついているが、味は普通に美味しい。パサつくのもコーヒートと一緒に流し込めば然程気にならない上に、口内の甘味と苦みのバランスが丁度良くなるのだ。恐らく、企業側もコーヒートと一緒に楽しむことを想定しているのだろう。

そうしてデザートまで楽しんだ少女達はゴミを圧縮し片づけ、出発する準備を進めていると——ふと、先ほどまで聞こえていた風の音が止んでいる事に気付いた。

「ん、外見ってくる」

シロコは立ち上がり、入口から顔を出して外の状況を視認する。無風、とまではいかないが、そよ風が吹く程度で巻き上げられる砂塵は殆どない。これならば密閉度が高い防塵装備を着込まなくても充分進めるだろう。

入口のロックを解いたシロコは外に足を踏み出し、伸びをする。そ

して、それに続く様にアビドスの面々も外に出て、設営したテントの撤去作業を開始した。

5分もすれば撤去は終わり、再び目的地へ歩を進めようと思ったアビドスの面々であったが……。

「……あれ、は……」

最初に気付いたのはシロコであった。向けた視線の先、視界には何か角ばったものが見える。距離があるのかシルエットははっきりしないが、それでも蜃気楼でない事は分かる。

「さつきまで風が吹いていたから砂埃で見えなかつたけれど……巨大な街、工場？　良く分からないけれど、何か、大きい施設が向こうに……」

「確かに何か見えるけど……こんな所に街？」

「岩場、ではなさそうな……ごめんなさい、私じゃこれ以上は……」

「ん〜……アヤネちゃん、ドローンから何か拾えそう？」

「はい！　少々待ってくださいー！」

そう言い、待機状態にしていたドローンを飛ばし、限界高度ギリギリでズームカメラを稼働させる。その映像がタブレットに送信されると、皆がそれを覗き込んで観察する。

「……シロコちゃんが正解だね、これ」

確かに、それは人工物に見えた。無機質な角ばったデザインをしている施設のようだが、この砂漠に鎮座している。

「……こんな、誰も居ない棄てられた砂漠に？　埋もれた街とかじゃなくて？」

「うーん、確証は持てないけど……なんか、綺麗なんだよね。全体的に。だから、多分違うと思う」

砂漠に埋もれている街ならば、もっと荒廃しているだろう。だが、ドローンからみた映像では形が非常に整っていたのだ。それも、確実に人の手が入っていると言い切れるレベルで。

「兎に角、肉眼で確認出来る位置まで近づいてみましょう」

「ええ、そうですね」

アビドスは新しくできた目的地に向けて足を進める。この先に、自

分達の知りたかった何かがある——そう、何かが叫んでいた。

▼
建築物はアビドスの少女達の足で30分程度の距離にあった。ヴェールを剥がすように明らかになる建物の全貌を前に、アビドスの少女達は茫然と立ち尽くし——そして、ポツリと呟いた。

「——何、これ」

誰の口から発せられた言葉か分からない。だが、その一言がアビドスの総意である事は疑いようがなかった。

大小様々な工場が乱立する工業都市。数種類の発電施設を複数と電波塔、規格化された倉庫、運搬用の大型トラックが何台も。そして、その工業都市を囲む外壁と、至る所に存在する侵入者用のトラップ。アビドスの砂漠が工業地帯として栄えた過去はないため、これは誰かが新しく建造した物だろう。少なくとも、此処にいるアビドスの少女達はこの工場の存在を全く知らなかった。

「侵入者用のトラップが幾つもある。迂闊に触れない方が良い」

「かなり大規模ですね、これは工場でしょうか？ 実験施設……いえ、何かを掘っている……？」

シロコとノノミが中の様子を観察し、この施設の用途等を考察する中で……ホシノは施設を外部から隠す壁を見つめながら、呟く。

「——こんなの、昔はなかった」

此処に来たのは、今回を除くと1年生の時だけ。つまりは2年前だ。当時、こんな施設は影も形もなかった。恐らく、比較的最近に建設され、運用されているものだろう。

だが、何故こんな場所に建てたのだろうか。立地は最悪。レアメタルや石油といった貴重な資源が眠っている訳でもない砂漠地帯のど真ん中に工場を立てるなんて酔狂にもほどがある。そもそも、一体誰が工場を……いや、思い出せ。此処の所有者を。アビドスから土地を筆り取ったのは——。

そこまで思考していたホシノの耳に不意に銃声が鳴り響いた。

「——ッ！」

その刹那、思考回路が切り替わる。ホシノは一瞬でシールドを展開し4人の前へ躍り出て、銃のセーフティを外し銃口を銃声の鳴る方へ向けた。

敵手から放たれた銃弾はシールドや外壁、足元の砂に着弾し火薬の香を周囲に充満させる。

「侵入者発見！」

「1人たりとも生かして返すなッ！」

此方に銃口を向け発砲しながら叫び、周囲に集まり出すオートマタの兵士達。その光景をホシノのシールドの陰から眺めていたアビドスの少女達は各々銃のセーフティを弾いた。

「な、何もいきなり発砲する事ないじゃない!？」

「警告もなく交戦なんて……」

「ん、でも……これであの施設の怪しきは増した。押し通る」

「所属不明の兵力が展開しています！ 数は30以上……オートマタとドローンですっ！」

「——良く分からないけれど、熱烈な歓迎を受けちゃったし、ちゃんとお返ししないとね？」

ホシノが呟き、その目が鋭く細められる。

警告無しに撃ってきた以上、相手は間違いなく真面目な集団ではない。平和的な、暴力を伴わない解決なんて望めないはずだ。

それに、視認するや否や発砲してきたことから、この施設を知った者は例外なく消すつもりなのだろう。グレーどころか余裕でブラツクだ。俄然、この施設に興味が湧いてくる。この壁の向こうには何があるのだろうか。

——それに、ストレス発散には丁度良い相手だとホシノは思った。彼の傍で戦えなかった鬱憤を此処で晴らしてしまおう。

「よし……戦闘開始ッ！」

ホシノの号令と共に、アビドスの面々は散開した。

悪意の主

「ふい〜…いや〜、厄介だったねえ、こいつら」

煙吐く銃口を下し、地面に倒れ伏したオートマタを足で小突くホシノは辟易とした表情で呟く。

一方的に吹っ掛けられた戦闘はアビドスの勝利という形で幕を下ろし、所属不明の敵集団は煙を上げて沈黙した。だが、これだけが全員、という訳ではないだろう。アビドスがこの場所にいる、という事実はこの場に駐屯している全てのオートマタ達に共有されたと思っただ方が良い。

「そんなに強い、って訳じゃないけど…何て言うか、面倒くさい感じ？　今まで戦ってきた奴等とはちよつと方向性が違うと思う」

「ん、セリカの言う通り。凄く厄介だった」

「そうですね…あれは私達が個人でやる戦闘ではなく、組織立った軍事行動のような感じがします。厄介に思えたのも、恐らく連携が取れていたからかと」

アヤネは「それに」と言っ

「この銃、恐らく市場に出回っていません。専用の生産ラインで生産されている特注品か、足が付かないように洗ロンダリング浄されています」

銃のパーツは全てメーカーで登録されている。何処の銃が何処に在って、誰が持っていて、何処で使われたかすぐに分かる仕組みになっている。キヴォトスという学園都市も同様に正規の手順で販売された銃は全て登録されている。簡単に言えば、銃弾一つ見るだけで銃に纏わる全てが詳らかにされるのだ。

しかし、それだと都合の悪い人達がいる。例えば民兵、テロリスト、殺し屋。そういった訳アリの人の為…暴力の自由を欲する人は正規店ではなくブラックマーケットを経由したり、または独自の生産ラインを持つていたり、或いは既製品の組ロンダリングみ換えを行い、足が着かないようにする。

今現在、地面に転がっているこのオートマタ達はそういった後ろめたい事を行うための処置が施されていたのだ。

個人の武力の強さではなく、集団としての強さ。生徒同士の撃ち合いが多いキヴオトスに於いては非常に珍しい種別の強さを持った所属不明のオートマタ。

きな臭くなってきた、と心の奥底で思った。

「全員、集団戦の何たるかを把握していました。隊列と連携を崩さず、生じた穴は即座にカバーする。ですが、無茶と深追いはしない。ゆっくりと、確実に『詰み』に持っていくための……非常に堅実的な立ち回りです。命令系統もしっかりしているのか、粘り強い戦い方でした」

「……まるで軍隊みたいな集団だ」

「その軍隊みたいな奴等が何でこんな所にいるのよ？」

「セリカちゃんの言う通りです。この方達は此処で一体何を……」

「うーん、それは私にも——ん？」

ノノミとセリカの疑問に首を横に振ったホシノであったが、その視界の淵に何かが映った。気のせいか、と思つてよく目を凝らして見てみると——外壁にシンボルが描かれている事に気付く。塗装と砂で汚れているため少々分かり辛いが見間違いなどではなくしっかりと描かれていた。

「アヤネちゃん、あれ、見える？」

「は、はい……何かのマーク、でしょうか……？」

ホシノの問いにアヤネは頷く。その2人のやり取りでロゴに気付いた他の少女達も其方の方に視線を向け、ロゴがある事を視認。ホシノはそのロゴの正体を確かめるべく外壁の方へ足を進め、外壁を汚す砂を手で払い——ヴェールを剥がす。

「……この、マークは」

外壁に記されていたマークは正三角形と、その中央でクロスする帯。モチーフはタコだろうか。

そして——そのロゴの下に記された企業名は『KAISER PMC』。

「——カイザーPMC」

ホシノは信じられないような——否、目の前の光景を現実だと

信じたくないような目でそれを見た。

「……照合できました。このロゴは確かにカイザーPMCの物です」
「カイザーって事は、こいつ等もカイザーコーポレーションの息が掛かってるって事!？」

「……そういう事みたいだね」

シロコが苦虫を噛み潰したような顔を浮べると、怒り心頭のセリカは外壁を思いつきり蹴り飛ばした。ヘイローを持つ少女の全力の蹴りは外壁の表層に蜘蛛の巣の罅を入れるに至ったが……セリカの怒りは増すばかりだった。

「カイザー、カイザーって……一体何なのよ、こいつ等はツ！」

アビドスの土地を甘言を弄して奪い取ったカイザーコンストラクション。

アビドスに桁違いの借金と利子を吹っ掛け、学校を奪おうとしたのはカイザーローン。

アビドスの土地に訳の分からない施設を立てたカイザーPMC。

そして———それらを裏から支援する大本の企業であるカイザーコーポレーション。

一体、アビドスの土地を奪うために幾つの企業を使ったのか。幾つの非道を重ねたのか。そして、それでも尚飽き足らぬのか。

嚇怒の炎を灯したセリカはその感情のまま表情を歪めた。

「……なるほど、そういう事だったんですね」

「ノノミ、何か気付いた？」

ロゴの『カイザー』ではなく『PMC』の部分を除しい表情で見つめていたノノミは、先ほど相手にした集団の所属を既に分かっていた。そして、あの集団……ひいてはこの施設が持つ危険性も。

「PMCはPrivate Military Company……民間軍事会社の事です。傭兵の様な個人ではなく、軍隊そのもの。簡単に言えば、軍事を民営化している企業がPMCです」

「軍の民営化……!？」

「はい。私達が相手をしてきたヘルメット団のような不良やチンピラとはレベルが違います。先ほど相手をしたオートマタは、訓練を受け

て常日頃から軍隊として組織されているプロの戦闘集団なんです」

「……だから、あんなに統率が取れていたんだ」

「退学した生徒や不良の生徒を集めて大企業が私兵として雇っている、という噂は知っていましたが……まさか——」

ノノミが言葉の続きを言葉にしようとしたその瞬間、突然ノイズ混じりの警報が啼きだした。外壁上部に取りつけられたスピーカーから響く音、赤色回転灯が光りながら回る。エマーゲンシーだ。

甲高い警告音は砂漠の空に吸い込まれ、辺りの空気を緊迫感で包み込む。

「警報!？」

「うへ、こりや大事になりそうだ」

「ッ！ 皆さん、一刻も早く——」

その言葉を口にするより早く、地面が鳴動した。何か途轍もない嫌な予感を覚えながら、アヤネは音の鳴る方へ視線を向け、眼鏡の望遠機能を使って正体を確かめようとして。

「装甲車に、戦車……数は……少なくとも、8台……」

「8台ッ!? 嘘でしょッ!？」

「ッ！ 皆、上!？」

シロコの叫ぶ声に釣られて皆が上を見上げれば、青空に浮かぶ鋼の塊が複数見えた。空気が破裂する音と切り裂く音を周囲に響かせながらこの場に現われたのは、軍用ヘリと戦闘機。

戦車は12台、装甲車は20台、軍用ヘリと戦闘機は5機ずつ。そして、此方に集結しつつある大規模な兵力。熱源反応は時間が経つ毎に膨れ上がり、その数は大隊規模を優に超えた。警報によってこの施設の警戒レベルは一瞬で引き上げられたのだ。アヤネは顔を青褪めさせながら、タブレットを眺めてこの状況を切り崩すためのきっかけを模索する。

「旅団規模の兵力が集結しつつあります！ 包囲網が形成されたら私達に勝ち目はありません！ 急いで離脱しましょう!？」

「私が突破口を作る！ ノノミちゃんとセリカちゃんはカバーお願い！ シロコちゃんは殿を!？」

「了解！」

矢継ぎ早にホシノが指示を出せば、それに強く頷くアビドスの面々。ホシノはシールドを展開し、銃を構えてクラウチングスタートの要領で駆け出せば、それに続くように他の少女達も隊列を組みながら走り出した。

そして、その背に迫る無数のオートマタと兵器達。誰一人として生かして返さない、この場で殺してやると言わんばかりの圧力を携えながら逃げる少女達の影を捕えんとする。

謎の施設の外周で、アビドスの命運を賭けた包囲網突破作戦が開始された。

▼
遠い日、貴方が守った世界を思い出す。

貴方は擦ったような顔で笑っていた。愛しいもの、生徒に触れるとき、貴方の手は少し震えていた。

優しく、暖かくて、臆病な人。

貴方、ねえ、もう――。

▼
「……先生、来たよ」

「その声はヒナかな？ ああ、ありがとう」

そう言つて、緩く微笑む先生。ヒナと2人っきりの病室はとても静かだった。2人の呼吸音と、布が擦れる音。そして、先生に取り付けられた機械が定期的に発する電子音以外には何も聞こえなかった。

ヒナは先生が寝かされているベッドまでふらつきながら歩いている、無造作に投げ出されている彼の手をそつと握る。

青年とは思えない皺くちやの手。皮と骨だけで酷く脆い。触れても、あの日頭を撫でてくれた優しい手とはどうしても結びつかないはずなのに、それでも彼のものだと分かってしまう。手の奥に残る優し

さと暖かさはずっと変わらないから。

——私の所為だ。私をもっと早く気付けていれば、こんな風にはならなかった。優しい彼は否定してくれるけど、この結論は私の中で変えられない事実だ。

「丁度、私もヒナに会いたかったんだ。アコとかイオリ、チナツは時々来てくれるけど……ああ、責めている訳じゃないんだ。ただ、最近は何も聞けてなかったから寂しかったんだ」

くすり、と笑う彼。以前なら見えたはずの彼の瞳は包帯に巻かれている。口元だけが彼の面影を残していた。声だつて、声帯を大きく損傷したから以前の声音とは異なる。

彼の傷は赤い肌の女がやった。目を抉り、喉を切り裂き、彼の体を凌辱した。駆けつけた時には、彼は既に残骸のようになっていて。それで、その女を殺して。その後は病院に駆け込んで。

そして、今の彼がいる。

「最近は何も暖かくなつたのか、酷く眠くてね。誰かと話したり、仕事をしないでないと転寝しそうになつちゃうんだ」

その眠りは良くないものだ。眠ったら最後、彼はもう2度と笑ってくれない。21gが世界に溶けて、貴方の存在は不可逆の非実在になってしまう。

「まあ、私ばかり話していてもしょうがないから、よければヒナの話も聞かせてくれないかい？」

「……そう、ね。何から話そうかしら——」

日に日に弱っていく貴方を見て、私は胸を掻き毟りたくなる程の苦しさを覚えた。馬鹿みたいに『ごめんなさい』って戻らない日々を下座して、それを過去の己が冷たい目で見ていて。

もう、ずっと前から心は折れていたのだ。彼だつてそれに気づいているから、優しく肯定をしてくれていた。彼を守れなかった私を、無条件で肯定してくれた。

私を嫌わずに許し続ける貴方の優しさが、辛かった。

貴方と別れて、泣いて。貴方を失つて、また泣いて。

そして——この世界で、貴方を見て泣いてしまった。

在りし日の、あの世界の貴方だった。キヴオトス外部の人、疎外感が酷いはずなのに、誰よりもこの場所と住まう人々を愛している。

そして、その愛する誰かのために、貴方は何度だって巡礼の旅を続けるのでしよう。生徒の未来のために、夢のために、幸福のために、笑顔のために、貴方は何度だって傷ついて、その度に立ち上がる。走って、走って、血を吐きながら走る。決して足を止めずに、でも悲劇も何もかもを忘れないで全てを背負って。自分以外の誰かの幸せと明日の為に。そんな、貴方の生き方がとても悲しく思えてしまうの。

貴方は生徒の為に全てを賭けて戦っている。もし、私達が輝く明日を笑顔の花束の中で迎えられたとしても、その輪の中に貴方はいるの？ 誰かの幸せの為に走り続けた貴方の幸せは何処にあるの？

自分の中の幸せと、明日への希望。小さな光を誰かと共有して、少しずつその輪を広げていく。

それが輝く明日であり幸せだと、私は思っている。

だからどうか、先生。貴方は貴方の幸せを掴んで。見つけられないなら、あの日にくれたみたいに一緒に探すから。

先生、貴方に幸せが訪れる事を……祈ってるよ。



月に誓った貴方への愛と共に、あの日伝えられなかった言葉を口遊む。

「貴方、ねえ、もう——いいよ」

辛かったならやめていいのだと。例えば、進めない事を貴方が悔やんでも、貴方以上に私達が貴方を愛するから。

擦り切れるまで歩もうと思わないで。傷ついたなら木陰で休みましょう。

死んでもいいなんて思わないで。貴方の命はずっと愛されているの。

私達が愛した貴方は、ただの貴方なのだから。

「名前を呼んでくれて、嬉しかったよ——先生」

空崎ヒナは、はにかむように笑った。

皇帝の場

「はあ……はあ……」

「っ……」

「ふう……」

「キリがないですね……」

前線で敵の相手をし続ける4人の辟易とした声が、砂漠の空に虚しく響いた。地面に転がるオートマタとドローンの数は100を超えて久しい。銃で撃ち抜き、ミサイルや爆弾で爆破するのは勿論、徒手空拳で叩きのめすことだってあった。

爆破し、現在も尚炎上中の装甲車。足回りを破壊した戦車。軍用ヘリはローター部分にシロコのドローンを特攻させて叩き墮とした。戦闘機までは破壊できなかったが、特殊な……対戦車装備や対空装備を保有していない歩兵5人の成果としてはかなりのものだ。彼女達と同等の条件で同じ事ができる存在は、キヴオトスにおいてほぼ居ないと言ってもいい。

それだけの大金星を挙げたのにも関わらず、5人の表情は芳しくなかった。

破壊したヘリの影に隠れて身を隠し、肩で息をしながらこれからどうすべきかを考える。

シロコの残弾は2マガジン、ドローンはロスト。

セリカの残弾は3マガジン。

ノノミの残弾は0、ハンドガンの残弾は1マガジン。

ホシノの残弾は2マガジンのみで、シールドはあと少しで壊れるだろう。

アヤネの補給物資も底を突いた。

足りない、とホシノは爪を噛んだ。どう考えたって足りっこない。残弾も、体力も……戦闘行動に必要な全てが不足していた。包囲網が完成する前、一番穴が大きいタイミングで攻勢を仕掛けてこれなのだ。事此処に至っては、無傷での脱出は不可能だ。故にホシノは自身が殿となって4人を逃がす方向へ思考をシフトしようとした所で――

——想定が甘い、と現実が嘲った。

「敵兵力、増大しましたッ！ 増援です！ 歩兵だけではなく、装甲車や戦車、ヘリや戦闘機まで……！」

「ッ！」

ホシノはアヤネのタブレットを食い入る様に見つめると、その画面には無数のマーカーが立っていた、一際熱源が大きいのは装甲車等で、空中に浮いているのがヘリ等だろう。そして、歩兵の無数のオートマタ達。包囲網の完成は間近だ。どれだけ甘く見積もっても1分は切るだろう。

増援に来る兵力も、既存の兵力の規模も正確には分からない。だが、その量は片方だけでも疲弊したアビドスを磨り潰すには充分すぎる。余程逃がしたくないのだろう。アビドスの手に余る過剰戦力だ。「駄目です、包囲網を突破できません！」

東西南北、上空に至るまでの包囲。何処を向いても夥しい数の敵がいるのみで、蟻一匹すら通してくれないだろう。包囲網が完成したのだ。

「……絶体絶命、だね」

「うへ、これはきつそうだ……」

「ど、どうしましょう……！」

アビドスの皆は満身創痍の体を立ち上がらせて敵を見据える。圧倒的な状況不利。ざっと見たところ、歩兵だけでも旅団規模以上。それに加えて、走行車や戦車、軍用ヘリ、戦闘機。展開された兵力の後方から迫るのは輸送車だろう。コンテナには大勢のオートマタ達が詰め込まれているはずだ。

秒単位で増える人員。尽きた資源。限界に近い体力。今は物陰で息を潜めているが、仮に空から対地ミサイルによる爆撃やガトリングによる制圧射撃を貰えば、一瞬でアビドスは壊滅的な打撃を受けるだろう。かといって無策に飛び出せば物量に物を言わせた一斉射撃で叩き潰される。何方に転がっても詰みの状況、それが分かっているから迂闊に動けず、機を伺っているのだが、時間が経つ程に戦況は悪化するばかり。最悪の循環だった。

さて、どうするか——そんな思考が頭を埋め尽くしたアビドスに向かつて、ある装甲車が接近している事に気付いた。

「……なにか、来る」

砂漠……というよりは、あらゆる極地を想定した車両。戦車並みに分厚い装甲、窓は全て防弾加工とスモーク張り。恐らく盗聴対策もされているだろう。そして、何より目を引くのは他の装甲車よりも装飾が豪華であり、構造自体もかなり工夫が凝らされている点だろう。そして、改造元となった車種もかなりの高級車だ。

間違いなく一般の従業員が乗る車両ではない。最低でも役員クラス、またはそれに準ずる階級を持つ誰かが乗っているであろう装甲車は悠々とアビドスの少女達の5m前で停車した。

少女達は銃を構え、車両に最大の警戒態勢を取る。特にシロコは銃以外にもラスト1つとなった手榴弾の感触を確かめ、何時でも投擲できるように準備。

鬼が出るか蛇が出るか——執事か側近であろうオートマタが後部座席のドアを開けると、座席から大柄な影がゆつくりと降車した。

他のオートマタとは『違う』と直感する大柄な影は徐に機械仕掛けの右手を挙げた。

その刹那、直属護衛部隊のオートマタが銃口を向ける。その辺りにいる雑兵とは何から何まで違う手練れに殺意を向けられた少女達は顔を悪くし、5人で円を描くように背中合わせの陣形を取った。

「ふん……何処そのドブネズミが入り込んだと思ったらアビドスだったとはな。つまらん」

重々しい口調で、大層つまらなさそうに呟いた大柄な影。ストライプのブラックスーツ、黒いシャツ、赤いネクタイ。その上に羽織った外套と赤いストラ。アイラインを光らせるその人物の身長は2m30cm程だが、体格の所為かそれ以上の威圧感を感じる。今まで見てきた存在とは格が違うその様を見せつけられた少女達は、圧力に気圧されながらも気丈に口を開く。

「……アンタ、誰よ」

「——あいつ、は」

疑問を声に出すセリカとは対称に、ホシノはその正体に心当たりがあった。ああ、忘れられるはずがない。この人物は——。

「まさか此処に来るほどの低能だとは思っていなかったが……まあ、良いだろう。囁った所で、何かが変わるわけではない」

吐き捨て、アビドスの方へ一歩踏み出した何者か。それに伴い、直属護衛部隊も前に詰める。特別な車両と直属の護衛を持っている事から、それなりの重役なのは確かだが、どの様な権限と立場を持っているのかは見当がつかなかった——その人物から皆を庇う様に立っているホシノ以外は。

5人の敵意をそよ風のように受け止め、余裕綽々と何者かはホシノを見下ろした。アイラインに籠る感情は嘲り、侮蔑、嫌悪。

「人様の私有地に無断で侵入し、剩え銃撃を行つた。君達の学校の借金に加えてもいいが……大して変わらんか」

「お前は、あの時の——」

「……確か、例のゲマトリアが狙っていた副会長だったか？」

ホシノを見下ろし、観察する誰か。そして、その人物はアイラインに嘲りの色を乗せながら呟く。

「君は見たのか？ 崇高なる神意の代行者を」

「……何の話？ 私は——」

「会談を切り上げ、向かったと聞いていたが……ふむ、その様子では見てないようだな。ゲマトリアは君の為に準備したと言っていたが、主賓がそれでは浮かばれん」

人影は「我が社としても興味深い催しであったが」と付け加え、ホシノから視線を外した。

対するホシノの頭は疑問で埋め尽くされていた。そして、それに伴う背筋が凍り付くような嫌な予感があつて、心臓を鷲掴みにされているような恐怖を感じる。

だが、その疑問と悪寒に明確な回答を出すよりも前に目の前の人物が口を開いた。

「面白いアイデアが浮かんだ。弱いヘルメット団を雇うよりも、使え

ない便利屋を雇うよりも良さそうだ」

「——あなたは、誰ですか」

普段は笑みを絶やさず、穏やかな雰囲気を纏っているノノミから漏れ出たとは思えないほどの冷たい声音。それを受け、オートマタは僅かばかり驚いた表情を浮かべてから……溜息と共に大きく肩を落とした。

「呆れたな。無知蒙昧とはこの事か……まさか、私を知らないとはな。アビドス——君達なら、良く知っている相手だとは思うがね」

そう言い、その身に余る傲慢さを隠そうともせずアビドスを見下ろす人影は——己の身分を曝け出した。

「私は、カイザーコーポレーションの理事を務めている者だ。端的に言ってしまうえば、君達アビドス高等学校が借金をしている相手だよ」その言葉、明かされたオートマタの身分にアビドスの少女達は驚きを顕わにした。

「では、古くから続く借金の話をしようか——アビドスの諸君？」



「カイザーコーポレーションの、理事……！」

「アンタが……ッ！」

アヤネが驚愕を、セリカが怒りを込めて呟いた。シロコとノノミは声にこそ出していないが、その心の中に渦巻く感情は概ね2人と同じだった。ホシノは目の前の人物が理事である事を知っていたため、驚きこそ無かったが……その内側には高純度の怒りが渦巻いている。

今、眼前にいるオートマタこそが自分達を、アビドスを、住まう住民達を苦しめ続けてきたカイザーコーポレーションの親玉。古くから続くアビドスの悪意の主。

そして、今の自分達が探し求めていた人物でもある。今回で達成できるとは思わなかったが、彼女達の最終目標は何処かで偉そうに座っている最高責任者を引き摺り出す事だったのだ。

早鐘を打つ心臓。様々な感情が胸の奥で渦巻いて、思考が逸る。

そして、理事はそんな彼女達を一瞥して言葉を続けた。

「正確に言えば、カイザーコーポレーション、カイザーローン、カイザーコンストラクションの理事だ。今はカイザーPMCの代表取締役社長も兼任している」

「——あなたの身分なんてどうでもいい。要はあなたがアビドスを騙してお金を巻き上げて、土地を奪い取った張本人って認識に相違はない？」

「……ほう？」

シロコが憎悪を顕わにした瞳で眼前の悪意を射貫けば、理事は愉悦を隠し切れない声音を漏らした。

「そうよー。ヘルメット団を仕向けて、ずっと私達のアビドスを苦しめ続けた犯人がアンタなんですよ!? 絶対に許さない……アンタの所為で、アビドスはッ！」

シロコに続く様にセリカが前に出て、叫びながらトリガーに掛ける指先に力を籠める。あと僅かでも指を奥に押し込めば弾丸が発射される、怒りに満ちた銃口を向けられた理事はアイラインを瞬かせて——
——辟易とした感情で首を横に振った。

「やれやれ。最初に出てくる言葉がそれか。呆れて言葉が出ないとはこの事だ、アビドス。碌な教育も受けてこなかったのか、君達は」
「どの口でそれを……！」

「私有地へ無断で侵入し、我が社の優秀な職員に攻撃を加え、兵器と施設を壊し……不遜にも私に銃口を向ける始末。救いようがない愚かさだ。……くくつ、面白い」

心底愉快そうに喉を鳴らすカイザー理事。それに相對するアビドスの表情は何処までも暗く、鋭く、冷たかった。

「警告も無しに発砲する職員が優秀なんて、面白い事を言いますね。一度職員全体に再教育を施してみてはいかがですか？」

「減らず口を。無論、再教育は必要ない。我が社の職員は非常に優秀だ。無断で侵入してきた不届き者を、こうして追いつめたのだから」
「な」

カイザー理事はアイラインを一度瞬かせ、「それに」と続けて。

「この一連も全て自己防衛に過ぎない。何せ、見知らぬ不審者が我が家に土足で上がり込んできた様なものだ。私の温情に感謝した方が
良い。君達は本来、銃殺されて然るべきなのだから」
「……」

「それに、口の利き方には気を付けてもらおう。此処はカイザーPMCの私有地であり、法に則った事業を行っている場。まず君達は、企業の機密が多くある私有地に無断で足を踏み入れた侵入者である事を自覚すべきだ」

カイザー理事がそう言い放った直後、空気が熱を帯びた気がした。直属護衛部隊だけでなく、アビドスの少女達を取り囲んでいた全てのオートマタが銃口を向ける。明確な敵対行動、文字通り相手の指先一つで容易く芽を摘み取られると悟った少女達は顔を悔しそうに歪ませながらも、気丈に相手を睨みつけた。負けるものか、と己の心を奮い立たせて。

それが気に食わなかったのか、理事は鼻を鳴らした。

「さて、話を戻そう……アビドスの自治区の話だったか。ああ、確かに買い取ったとも。私と生徒会、互いの認識をすり合わせ、書類を作成し、押印した。双方の合意による、極めて合法的な取引だ。無論、取引の記録は残っている。書類も、その当時の録画データも。私が一方的に騙し取ったかのような物言いは止めてもらおう。それとも、君達は企業に喧嘩を売りに来たのかね？」

「アンタ……ッ！」

「おや、凶星かね？　だが、それは止めておいた方が身のためだ。君達も、人生の終点をこんな砂漠なんぞにしたくないだろう？」
「……」

「正直、私は君達の相手をしていられるほど暇ではないのだが……侵入者と雖も客人は客人。もてなさないのは礼節に欠ける。カイザーコーポレーションは其処らの三流企業とは違うのだ」

明らかにアビドスを格下と見下し、舐めている態度のカイザー理事。その傲慢さと身勝手さに怒りを覚えるばかりだ。引き金を押し込みたくなるが、そんな事をすれば全てが意味を成さず終わってしまう

う。今やるべきは、このオートマタを玉座から引き摺り出す情報を得る事だ。

——だから、怒りに吞まれるな。

「ふむ……そうだな。どうしてアビドスの土地を買ったのか、その理由を知りたいか？」

「……確かに、こんな砂漠にこの規模の施設を建築して何がしたいのか……その理由は気になりますね」

ホシノの隣に立つように前に出たノノミは、鋭い声音でそう言った。

「私達はアビドスの何処かに埋蔵している、ある宝物を探しているのだ」

「ッ!？」

その余りにも荒唐無稽な理由を聞いた皆は、それぞれ憤怒と驚愕を顕わにする。シロコとセリカは『宝探し』なんて巫山戯た理由でアビドスの自治区が侵害されていたなんて——腸が煮え繰り返る思いだった。

「そんな適当な理由、信じる訳ないでしょッ!？」

「もっとマシな理由を考えるべき。宝探しにこの数のPMCは必要ない……この兵力はアビドスを制圧する為のものじゃないの？」

「……やはり愚かだな。まさか、君達にそんな価値があると思っているのか？ カイザーPMCが大規模な兵力を挙げて、態々制圧しなければならぬほどの価値が。たった5人しかないいちっぽけな学校に、これ程の用意をすると本気で思っているのか？」

アビドスの事を心底馬鹿にした声音で呟いた理事は自らの武力を誇示するように、兵士たちを見渡した。

旅団を超える兵力。兵士に与える銃器。ドローン。弾丸。

戦車、装甲車、それぞれ数百両ずつ。

軍用ヘリ、戦闘機、それぞれ数十機ずつ。

これらを一式揃えるだけでも一国の国家予算レベルの費用が掛かる。アビドスの借金なんて余裕で数十回返せる金額が動くのだ。無論、買って終わりではない。メンテナンス費用、人件費、研究費、設

備費、防衛費、教育費……その他諸々。壊れたものがあれば新しく買
い替えなければならぬし、燃料等の消耗品だって馬鹿にならない。
この施設に掛かった総額は、アビドスの借金なんかでは到底釣り合
わないのだ。

それを、たった10億に満たない借金すら返せないアビドスに使う
？ たった5人しかいない学校を制圧する為に用意する？

そんな訳ないだろう。カイザー理事は不愉快そうに息を吐いた。
「冗談ではない。そんな事を私が容認するものか。あくまでこれは、
何処かの集団に宝探しを妨害された時の為の備えだ。君達を滅ぼす
ために用意したのではないのだよ。君達程度、いつでも、どうとで
も出来るのだよ——例えばそう、こういう風にな」

アイラインに嘲りの色を込めて呟いたカイザー理事は、耳元のイン
カムをタップし何処かと通信を行う。会話内容は不明、だが碌でもな
い事をやっていると感じが囁いていた。そして、僅かな時間が経過し
た後、理事は首を横に振りながら、淡々とした、だが喜悦が隠しきれ
ていない声を上げた。

「残念なお知らせだ。どうやら、君達の学校の信用が随分落ちてし
まったようだ」

「……？」

言葉の意味を呑み込めず、疑問符を浮べていた彼女達であったが—
——突如として、アヤネの端末から着信音が鳴り響いた。

「着信……こんなときに……？」

「出たまえ」

カイザー理事に促されたことに腹を立てながら、アヤネは応答ボタ
ンを押してスピーカーモードに設定を切り替えると無機質な機械音
声が端末から響いた。

『——いつもご利用ありがとうございます。こちらカイザーロー
ンです。突然のご連絡、大変申し訳ございません。現時点を持ちまし
てアビドス高等学校様の信用評価を最低ランクに下げさせて頂きま
す』

「えッ!?」 ちよ、ちよと待つてください！ 毎月の返済は滞りなく

『変動金利を3000%上昇させる形で調整致しました。諸々を適用した上で、来月以降の利子金額は9130万円で御座います。尚、この決定に関しまして、いかなるお申し付けも受け付けておりません。ご承知おきください。それでは引き続き、お支払いの方をお願いいたします』

「はいッ!? 3000%って……どうしてそんな急に——!?!」

アヤネが叫ぶも、既に電話は切れた後。切断を知らせる無感情な電子音が砂漠に響き、アヤネは顔色を青くしながら眩く。

「き、切れちゃいました……」

「9000万!? 嘘でしょ!?!」

「くくっ……」

文字通り、今までとは桁が違う利子の金額に皆が顔色を悪くする。毎月800万弱でもかなりギリギリだったのだ。その10倍以上なんて冗談ではない。どう考えても返せるわけがない。

その絶望を眺めていたカイザー理事は心底愉快そうな嘲笑を零した。

「これで分かったかな、君達の首に掛けられた紐が今、誰の手にあるのか?」

「っ……こんなやり方で、良くも合法だなんて……!」

「ちよ、嘘でしょ!?! 本気で云ってんの!?!」

「ああ、本気だとも、しかしこれだけでは面白みに欠けるか……:そう
だ、9億の借金に対する保証金でも貰っておくでしょう。一週間以内
に我がカイザーローンに3億円程、預託して貰おう。この利率でも借
金返済が出来るという事を、証明して貰わねばなあ?」

「そ、そんな……!」

「っ、この……!」

堪忍袋の緒が切れたシロコは前へ駆け出し、引き金を引こうとする
が、それよりも早く護衛が距離を詰めて2人掛かりでシロコを組み伏
せた。砂漠に転がるSG550カスタム。ポケットに隠した手榴弾
も捨てられてしまった。

「シロコちゃんツ！」

「よくもやったわねツ！」

叫ぶホシノとセリカ。シロコに組み付いているオートマタを排除しようとするが――。

「――動くな」

カイザー理事の一言に止められた。

「動いたらこの生徒の喉に銃弾を1マガジン撃ち込む。仲間は大それるろう？ 大人しく武器を捨てたまえ」

組み伏せたオートマタ達とは別の個体がシロコの口に銃口を突っ込み、引き金を指に掛けていた。セーフティは外されており、先ほどの言葉は脅しでもなんでもない事が分かる。一歩でも動けば確実にトリガーを引かれてしまうだろう。体の内側から弾丸で傷つけられた、ともなればヘイローを持つ少女と言えど無事では済まない。最低でも喉と内臓の損傷、最悪死に至るはずだ。

4人の少女達は各々武装を解除する。言いがかりをつけられないようにマガジン等も全て地面に落とし、非武装を主張するとカイザー理事は満足そうに頷いた。

「それでいいのだよ……さて、では君達は3億の預託金と毎月9000万の利子を用意できるのかね？」

「そんなの、できる筈が……」

「ならば学校を諦めて去ったらどうだ？」

アヤネの絶望を伴った声音に、カイザー理事は冷たく言い放った。

「自主退学をして転校でもすれば良い。それで全て解決するだろう？ そもそもこれは君達個人の借金ではない。学校が責任を取るべきお金だ。何も、君達が進んで背負う必要はないだろう？」

「そんな事、出来る訳ないじゃないですか！」

「そうよ、私達の学校なんだから！ 見捨てられる訳ないでしょ!？」

「アビドスは私達の学校で、私達の街なんです。捨てられません……！」

そんな簡単に諦めることができるなら此処まで来なかった。

理屈とか効率とか、そんな事は心底どうでもいい。ただ、街を愛し

たのだ。愛した場所を風化させたくなかったのだ。泣いて、笑って、生きた場所を守りたい。愛した居場所で生きていたい。これからも思い出を育みたい。

そんな、非常にシンプルな動機。その輝きを目にしたカイザーの理事は心底不愉快そうな表情でアビドスを問い質した。

「ならばどうする？ 君達に、これを覆すだけの何かがあるのかね？」
「……ッ！」

言葉に詰まるアビドスの少女達。諦めないのは確定事項であるが、現状良い案がある訳ではない。3億と9000万。どうやっても真つ当な手段で返せる金額ではないのだ。学生であるのなら尚更。

「……先生」

アヤネの、この場にはいない彼の手を求める眩き。それを耳にしたカイザー理事は「ほう」と呟いて。

「先生、シャーレの先生か……くくっ……」

「……何が可笑しいの」

「いやはや、この兵力を用意した理由……仮想敵の名を聞くとはな」

「仮想敵、って……」

「この兵力は対連邦捜査部シャーレを想定したものだからな」

その言葉に、アビドスの少女達は絶句した。確かに、先生は色々と規格外だ。それは彼女達が一番身を以って知っている。だが、今現在シャーレは彼とワカモしか参加していない。あとは赴任初日の戦闘で彼と共に戦ったとされる4名の生徒が辛うじてシャーレと言える程度。無論、アビドスのメンバーも彼から求められれば喜んでシャーレに所属するが……それでも、生徒の数は20を超えないだろう。

その組織を想定して、この兵力？ 一体どれほどシャーレを危険視しているのだろうか。或いは、危険視するように入れ知恵した誰かがいるのか。事の詳細は不明だが、シャーレはカイザーが莫大な金額を投資し、戦力を整えなければならぬ程の組織であることは揺るぎない事実であった。

「尤も、対シャーレの想定は無駄であったがね」

「……どういう、ことですか」

何か、途轍もない程の嫌な予感が背筋を駆け抜けた。筆舌に尽くし難い悪寒、或いは虫の知らせ。

カイザー理事へ問うノノミの声は震えていた。聞きたくない、だが聞かなければならない——その感覚は、目の前で先生を失いかけたあの時の感情とよく似ていた。

「非常に残念だが、先生は直に死ぬ。不幸な事故だ、全く」
その嫌な予感を裏打ちするように、カイザー理事は無慈悲に言い放つ。彼の死を。

そして、アビドスの少女達はその言葉を妄言と切り捨てることができなかつた。何せ、彼女達は彼が死にそうになった瞬間を見ているのだ。血を吐き、苦しんでいる彼を。

——遠い場所、病院のベッドで力なく横たわる彼の姿を幻視する。

途端、彼女達の顔色が悪くなり、泣きそうな表情になった。嫌だ、嫌だ、嫌だ、彼が居なくなるなんて嫌だ。あの笑みが、あの声が、あの温度が失われるなんて耐えられない。

「偶々、患者に処方する点滴に致死量の毒薬が含まれていた。偶々、病棟の崩落に巻き込まれた。偶々、銃の暴発事故に巻き込まれた。そんな不幸な事故に巻き込まれ、彼は命を落とす。そのようなシナリオになっっている」

「お前エッ！」

怒りのまま叫ぶホシノ。カイザー理事を破壊せんと奔るが、喉元に銃口を突き付けられ止められた。組み伏せられたシロコもその表情は怒りで歪んでおり、PMCによる拘束を解かんと必死に体を振らせる。他の3人も銃口を突き付けられ身動きが取れない。

更なる盤面有利を勝ち取ったカイザー理事はほくそ笑みながら、神経を逆撫でする優しい声音で言葉を続けた。

「おや、事故と言っただろう。誰も悪くない。君達は勿論、私達も悪くない。強いて言うならば、巻き込まれた彼の運が悪かったのだ」

『——ああ、やはり貴方だったか。貴方らしい粗雑な仕事だったよ』

良く通る声は、アビドスの少女達の上空から聞こえた。

誰もが空を見上げると、上空に何かが在った。黒い機影。無駄のない機能美を追求したフォルム。コンテナには6つのハッチ。

総じて、見たことがない機体であった。企業で売られている一般的なものではない。試作品か、特注品か。何方か不明だが、いずれにしても警戒しなければならぬ何かであった。

「管制室、何をしていたッ！」

「申し訳ございません！ ですが、先ほどまで一切反応がなく……！」
「ステルス機か……ッ！」

『ご明察だよ。確か、メロダックって名前だったかな？ 尤も、ステルス機能はおまけで、ある兵装を運搬する事が本来の仕事だけだね』

ふわりとした笑みが浮かぶような声音。機体に搭載しているスピーカー越しではあるが、聞き間違える筈がない。この声は——

どのようなトンデモ技術を使っているのか不明であるが、近づいても尚エンジン音は殆ど聞こえなかった。地面の砂を揺らしながら着地した機体——メロダックの側面に設置された扉がスライドし、スロープが降りる。

そして、そのスロープを使って機体から降りてきた車椅子の先生は、花のような笑みを浮べて。

「遅くなってごめんね、皆」

「先生ッ！」

数多の銃口を向けられ、上空からは軍用ヘリが、施設からは対空砲が狙っている。そんな絶体絶命の状況であるのにも関わらず、先生は余裕の笑みを携えてアビドスの少女達とカイザー理事の近くまで寄って。

「こんにちは、カイザー理事」

先生は、冷たい笑みを浮べて——そう告げた。

大人VS大人

砂漠の太陽の元、対極に立つ2人が相対した。

シャーレの先生は全体的に白色色彩だ。白の車椅子、白の制服。ブラケットがわりに膝にかけられた真白いコート。シャーレを示す腕章は制服のジャケットに付けられている。ネクタイも絞めず、第一ボタンを外しているラフな姿は少女達の目には新鮮に映った。

彼は基本的に制服やスーツは隙なく着こなすタイプだ。着崩す事は殆どなく精々屋内でコートを脱ぐ程度であり、それ以上の遊びはない。だが、今の彼は少々異なる。普段は皆無だった露出がそれなりに多いのだ。

髪も全て下ろされており、普段とは異なる雰囲気。着崩した制服と相まって、先生ではない彼の側面が顕になっっているのだ。これで着ている服が制服でなく私服であったなら、本当に普通の青年であっただろう。

風が吹いて、首元のIDと前髪が靡く。それに伴い、彼の瞳から蒼色の燐光が零れた。

「自己紹介は不要だろうか？ 何せ、貴方が秘密裏に消そうとした人間だ」

「……」

「おや、釣れないね。殺したはずの相手が目の前にいる気分を聞かせてほしかったんだけど……」

「最悪の気分だ、シャーレの先生」

先生の口元が耽美に歪み、その表情に嘲笑を張り付けた途端、空気が一変する。カイザー理事が一步前に踏み込み込んだ。彼我の距離は1mもない。カイザー理事は怒りと驚愕が相混ぜになった表情で彼を見下ろしていた。

暗殺は滞りなく行われていたはずだった。点滴に致死毒を混ぜられた彼はベッドの上で眠るように息を引き取るシナリオだったのだ。もし仮に目を覚まして、病院に紛れ込ませたカイザーPMCが誇る特殊暗殺部隊が一切彼に悟らせずに絶命させる筈だった。

それなのに、彼は今この場にいる。負った傷はそのまま、決して良くない顔色。だが、その蒼い瞳に灯る意志の強さだけは変わらない。世界そのものを屈服させてしまうレベルの精神強度は、カイザー理事が思わず胸元に隠してある護身用の銃の感触を確かめてしまう程だった。

その場に現われただけで全てのイニシアティブを握った彼は悠然と辺りを見渡し――組み伏せられたシロコと、銃口を突き付けられた愛しい生徒達を視界に収めた。

「――とりあえず、彼女達を解放してもらえないかな？」

「……断る、と言ったら」

「君達が二度とPMC事業をやれなくなるけど、それでもいいなら選ぶと良い」

断つたら今この場にいる全てのPMCを破壊すると言っているようなものだった。そして、それが脅しではない事はカイザー理事もよく分かっている。彼は本気だった。

断つた瞬間、彼は一切の躊躇いなく作業のようにPMC達を鉄屑へと変えるだろう。手段も方法も分からない。何をしてくるか、その全てが詳細不明だ。だが、必ず彼はやるだろう。その果てに如何なる損害を負おうともやり遂げる目をしている。

「――拘束を解け」

今、この段階で彼と戦争するのはリスクリターンが釣り合わない……そう考えたカイザー理事は拘束解除を部下に命じた。PMC達は一瞬戸惑ったが、命令を受託し拘束を解いて理事の護衛へ戻る。それを見た先生は初めてその笑みを穏やかさを含んだものへと変えて。

「賢明な判断、感謝するよ。私も無益な殺生はしたくないんだ」

「ふん……貴様、恐らく部隊を破壊していないだろう？ その礼だ」

「そうかい……」

眩き、口元を僅かに綻ばせる彼。カイザー理事の言う通り、彼は暗殺部隊を不可逆な損壊へ追いやっていなかった。精々、システム部分に量子コンピュータすら機能不全に陥らせるウイルスを流し込んだ程度。今頃、彼を殺そうとした人狩り部隊は病院の屋上で転がってい

るだろう。

「一応聞いておく、貴様……何故、生きているのだ」

「色々要因はあるよ。例えば、暗殺に毒物を使った事。サブプランの実力行使でオートマタを使った事。私の意識があった事。でも、強いて言うなら——」

先生は唇の両端を吊り上げ、三日月を浮かべながら。

「貴方達の杜撰な仕事のおかげだよ」

結局の所、そこに行き着く。仮にカイザーがオートマタやドローンといった電子駆動の機械人形ではなく、生徒等の生身の住民を仕向ければ彼だって無傷では済まなかった。

毒物はそもそも使った事が間違いだ。彼の血中には毒物を瞬時に分解するナノマシンが撃ち込まれている。そのため、彼を毒殺するならば独自の機密性の高いロジックで動いているナノマシンを機能停止に追いやった上で毒を仕込まなければならぬのだ。無論、それが非常に難易度の高い仕事なの言うまでもない。現に、カイザーは彼の毒殺に失敗しているのだから。

故に、彼を殺すのならば必然的に物理的な、凶器を伴う手段に限られる。彼に正面から戦いを仕掛けるか、或いは長距離狙撃。暗殺も選択肢に入るだろう。

しかし、そのどれもが基本的に困難極まる手段だ。

正面の戦闘は彼と彼が指揮する生徒に勝たなければならないが、まずこの時点で厳しい。彼と接続している生徒は普段より戦闘力が高まっている上に、連携も高度に取れるのだ。そこに彼の指揮や戦術眼も合わさるため、彼を殺すための前提条件にすら辿り着けない可能性が非常に高い。

かと言って、長距離狙撃と暗殺はアロナと先生の探知を掻い潜る必要がある。広大なアビドス全域すら手中に収められる2人だ、如何なる隠密も不意打ちも通用しない。容易く発見され、カウンターで返り討ちに遭うのが関の山だ。

もし仮に、彼を殺せる状況まで運べたとしても、今度はシツテムの箱の防御壁を貫通する必要がある。巡航ミサイルすら無傷で防ぎ切

る物理防壁と権能に等しい概念防壁は突破する手段が非常に限られており、その手段の用意も難しい。

たかが大企業の精鋭暗殺部隊如きが、彼を殺せるはずなかった。

「何の力もない、車椅子に頼る手負いの私を仕留められないなんて軍事に向いてないんじゃないかい？ 赤字になる前に撤退をお勧めするよ」

「減らず口を。貴様程度——」

「いつでも殺せる、かい？ でも、その言葉は殺すべき時に殺せなかった言い訳にならないって事は、貴方も良く知っているはずだ」

怪我を感じさせない飄々とした態度と涼やかな笑み。生徒達には決して見せられないな、と自嘲するほど、彼の笑みは邪悪が過ぎた。犬歯を剥き出しにし、凄惨に嗤う彼。だが、その悪の中に輝きが燦然しているのも確かだった。例えるなら、黒曜石やオニキスのような。何者にも侵されぬ、染まらぬ漆黒。普段の彼……純白や蒼、黄金に照らす光輝とは対極に位置する暗い煌めき。

「ほざいたな、脆弱な人間風情が……！」

「脆弱なのは貴方も同じだ。この場に出てきた以上、貴方は、貴方が見下している他の誰かと違わない。撃たれば傷つく鉄の体。自分を一方的な強者と思わない方が良い。私達は皆、弱者だよ」

先生は「それにしても」と言つて、辺りをぐるっと見渡した。砂漠に広がる巨大な施設、闊歩するPMC達。アビドスのものだった、誰かの居場所。

「キヴォトスに何らかの施設を造る場合、必ず連邦生徒会に認可を取らなければならない。施設の規模、目的、想定運用年数、掛かる資金……その詳細を提出し、審議で可決してから初めて施工できる。この規則に自治区は関係ない。アビドス自治区だろうが、貴方達の土地だろうが、そのプロセスは飛ばせないんだよ。だけど、カイザーPMCがアビドスの砂漠に掘削施設を作る、なんて記録は無い」

「だからどうした。仮に施設建設に必要なプロセスを経ていなくとも、此処が正式な手順で買い取った我々の土地であることには変わりない」

「その土地の売買も連邦生徒会の立ち合いの元で行わなければならない。仮にそれが出来なくとも、取引内容の事前申請と取引後の登録申請は最低限行わなければならないんだ。でも——」

彼は市販のタブレットの画面をカイザー理事に突き付けて。

「連邦生徒会に保管されているデータのの中に、貴方達がアビドスの土地を買い取った記録の一切が存在しないんだよ」

「……ふん、当然だ。何せ——」

「アビドスの全てを手中に収めるまで提出するつもりなんてなかったのだろう？ 自治区が残っている段階で提出すれば、『生徒の土地を奪った企業』としてバッシングは必至だ。自治区の在校生や住民だけでなく、他の自治区でも反感を抱く人は必ず出てくる。その企業イメージの低下から不買運動に繋がれば、カイザーだってそれなりのダメージを受けてしまう」

先生は「だけど」と言葉を続けて。

「何もかもがなくなつた時点の提出ならば、ただ使われない土地を買い取っただけに過ぎない。マイナスイメージも大してないだろう。貴方は始めからそれを狙っていた」

「リスクマネジメントなんぞ、どの企業でもやる。我々の行為が珍しいわけでもあるまい。大人の貴様なら分かるだろう？」

「ああ、よく分かつてるよ……正式な届出も悪事も時効になつてから。全ての反対者を根絶やしにしたタイミングで己の利権を主張する。小賢しい小悪党が考えつきそうな案だね」

先生は嘲笑を浮かべ、タブレットを仕舞う。余裕を感じさせるその所作にカイザー理事は言いようのない不快感を感じた。この手の人間……如何なる状況においても迷わず、恐れを抱かず、己の意志を貫く存在は昔から嫌いだった。見ると殺したくなるほどに。

そして、先生も同じ意見だった。彼はカイザー理事に純然たる敵意を向けている。カイザーは彼の地雷を踏み過ぎた。

先生は強い輝き……生徒を優しく導く灯ではなく、悪意と罪悪を焼き尽くす浄化の火を灯した瞳で真っ直ぐカイザー理事を射抜いた。

「天災を利用した学生、および自治区からの搾取。アビドス高等学校

の機能不全。連邦生徒会の手が及ばない僻地での利己的な活動。今まで散々好き放題してきたんだ。玉座の上で踏ん返り返る快樂はもう充分味わっただろう？ そろそろ年貢の納め時だよ。貴方達の活動は、流石に目に余る」

「ほう、面白い事を言うな、先生。その意見は連邦捜査部としての意見か？」

「勿論、その側面もある。私の言葉はシャーレの言葉だ。だけど、ああ、そうだね……」

先生は車椅子を一步進ませる。交錯する蒼と赤、彼我の距離は全て踏み潰された。

「これは、世界に責任を負う者としての意見だ。キヴォトスは、アビドスは貴方達の玩具じゃない。誰かが生きて、誰かが愛した大切な場所だ。貴方達に踏み躪る権利はない」

「ならばどうする？ その生徒と貴様の戦力を連れて、我々と全面戦争でもするつもりか？」

「無益な殺生はしたくないって言っただろう？ 夥しいスクラップの山を積み上げる趣味は、私にはないんだ。ただ、そうだね……」

彼は怖気が走るほど美しい笑みを浮かべて。

「貴方達の目的とシナリオを全て御破算にするのも、悪くないね」

言葉と同時に、黒の巨体が奔った。車椅子の倒れる音、刹那の交差。

先生の胸ぐらを掴み上げ、彼の顔を憎悪に塗れたアイラインで睨みつけるカイザー理事。身を竦ませてしまうような形相に一步も引かず、寧ろ相手を踏み潰さんと青筋を立て、犬歯を剥き出しにして獰猛に笑う先生。

言葉を重ねるまでもなかった。意志を確認する必要はなかった。この2人は原初から敵同士、己の道を通さんとする限り敵対は必然であった。

「吹けば飛ぶ肉体でよく吼えたな、人間ツ！ 与えられた力に酔いしれた偽りの存在如き、今すぐこの場で縊り殺せる事を証明してやろうか……ッ！」

「私の愛する生徒を傷つけた下郎が、良く云った。貴方には、貴方自身

の罪悪で滅んでもらおう。自業自得のアポトーシスさ。恨むなら、惜しげもなく悪意を重ねた過去の己自身を恨みなよ。それに、私の命は下衆にくれてやるほど安くないんでね……！」

凄まじい気迫だった。恵まれた鋼の体格と、細身で手負いの肉の体。前者の方が圧倒的に優位なはずだが、その身から発せられる威圧感には拮抗している。その拮抗が、カイザー理事は気に食わなかった。

他者を威圧する支配的な色と、世界すら染め上げる覇者の色。方向性こそ異なるが、同一系統にある圧力は2人の間で鬩ぎ合いをし、周囲に緊迫した空気を伝達する。

先生は本気であった。本気で怒っていた。踏み潰された誰かのために、傷つけられた誰かのために。そして、何より——アビドスの少女達のために、この場の誰よりも激怒していた。

子ども達のような銃で語る戦いではない。言葉と意思で信念を貫く大人の戦いが幕開けた。

貴方の怒り

誰がどう見ても拙い状況だった。先生とカイザー理事には覆せないスペック差が存在する。キヴォトス外部の柔い肉の体と、機械人形の鋼の体。何から何まで先生が勝っているものはない。彼の胸倉を掴んでいる手を、少し上に動かすだけで人体の急所に手を掛けられてしまう。文字通り、彼の命は理事の手の中にある。

しかし、彼は決して臆さない。青筋を立て、犬歯を剥き出しにし、深い蒼に染まった瞳に激情と敵意の色を灯して眼前の悪意を睨み付けている。

先生の身体は万全とは言い難い。瀕死の傷を負って僅か1日しか経っていない状態であり、車椅子に頼らなければ移動すら満足にできない怪我人なのだ。

今この瞬間にも処置した傷が開き服の下の何処かで出血しているだろう。掴まれた胸倉を中心に全身が軋み、痛覚を直接焼かれているような激痛が襲っているが、それを意志で振り伏せている。

そうとも、生徒の為に生きると決めた原初の宣誓に嘘は吐けない。愛する生徒の為に、この程度の障害を踏み越えられなくて何が先生か

気合と根性という酷く原始的な解決法だけが彼に許された唯一だ。心を、魂を薪に焚べ、誰かの為に燃えるその姿は宛ら天から墮ちる流星。アビドスの願いを、想いを叶える為に零落した傷だらけの流れ星、その姿が綺麗だと——不覚にも、ホシノは思った。

「我々の目的を邪魔すると吠えた、その気概だけは買ってやろう。だが勇気と蛮勇は違うぞ！ 生徒が愚かなら、先生もまた愚かだったようだな……！」

「他者から搾取する事しか能がない我楽多風情が、私の生徒を馬鹿にするなよ」

カイザー理事はフリーな方の腕で懐から護身用の銃を取り出し、先生の額に銃口を押し付ける。頭蓋を砕かんばかりの鋼鉄の体軀らしい馬鹿力に、彼は僅かに顔を歪ませたが——逆にそれを押し返さ

んと真っ向から立ち向かった。此処で退くわけにはいかない。

「せ、先生!？」

「ッ!」

アビドスの少女達は、普段は見せない彼の凄惨な笑みに言いようのない感情を感じながらも、脳の冷静な部分が『拙い』と訴えていた。命のイニシアティブをカイザー理事に握られている状況だけでも良くないのに、肝心の彼の顔色が青いのだ。息も荒い。

早く助けないと——その一念がアビドス全員に共有され、彼の元へと駆けだそうとするが、それよりも早くカイザー理事が口を開いた。

「最後通告だ、連邦捜査部シャーレ。我々の目的を邪魔せず、大人しくその生徒を連れて戻るなら手足の1、2本で済ませてやろう。此処で見たこと、起きたことを全て忘れるという条件付きでな。だが。愚かにもこのまま抗うとほざくなら、この場で屍を晒してもらおうかア……!」

先程までカイザー理事は先生と完全に敵対することを避けていた。自らが怖れの情を抱いたゲマトリアが興味を抱いて注視している相手。どう見ても厄ネタだろう。可能なら関わりたくないと思うのが普通だ。

——仮に先生と戦争をするのでしたら、可能な限り戦力を動員しなければなりません。彼は出し惜しみをしていられるほど手強い方ではありませんので……無論、私は貴方と彼が戦争することを望みませんが。

いつかの日、黒服に忠告されたことを思い出す。その時からシャーレ、及び先生を仮想敵として設定し準備を進めてきたが……備えあればなんとやら。これだけの過剰戦力を集めた判断は正解だった。

この戦力ならば、何をしてくるか不明の先生が相手でも勝てるはずだ。もし押されたならば防戦に徹し、呼びつけた援軍が来るまで耐えれば良い。それも無理なら、生徒を人質に取れば良いのだ。これまでの会話から、言動から、彼が生徒第一で動いているのは丸わかりだ。その弱点を突いてしまえば彼は唯の無力な人間になる。

脳内で組み上がった、勝利を収めるための解にカイザー理事はほくそ笑んだ。

圧倒的な威圧感を伴う事実上の死刑宣告。己の命の為に悪意を見過ごすか、己の意志を貫き死ぬか。どう転んでも悪い未来になる2つの選択肢を突き付けられた先生は——見惚れてしまうほど綺麗な笑みを浮べて。

「二昨日来やがれ、バーカ」

鈴を転がすような声音で、カイザーが提示した全ての選択肢に否を突き付けた。

その解を受けて一瞬茫然としたカイザー理事であったが……虚仮にされたと分かった瞬間、そのアイラインが一際激怒で染まった。

「……いいだろう、そんなに死に急ぎたいなら、望み通りにしてやろうッ！」

その怒りのままカイザー理事は護衛に指示を出す。命令は先生の銃殺。受託したオートマタ達は即座に彼に銃口を向け、引き金に掛けるマニピュレーターに力を込めた。

「先生ッ！」

叫ぶ少女達。それに伴い、伸ばされた手。せめて凶弾から彼を守る盾になろうと駆け出すが——僅かに距離が足りなかった。

そして、数多の銃口から弾丸が発射される。発砲音がやけに耳に残って、尾を引く煙が脳に焼き付いた。弾丸の幾つかは外れるだろう。だが、必ず着弾するであろうものもある。そして、その内の幾つかは致命傷を貫くコースであった。脳、心臓、眉間、喉。生き残れる確率は極めて低いだろう。

まるで礫にされたように、自らを死に至らしめる弾丸を見つめる彼。だが、その表情は決して諦めではない。強い意志を感じさせる彼は、少しだけ口元を動かす。

「——アロナ」

その名前を呼んだ。

『はいッ！ 万事、アロナに任せてください！』

脳裏に響く蒼い君の声。同時に、彼に殺到していた弾丸は全て見え

ない壁に阻まれたように弾かれ、無意味に地面へと墮とされた。

「何……ッ！」

物理現象を超越したそれに、思わず瞠目し驚愕の声を上げるカイザー理事。周りを見れば銃弾を実際に発射したPMC達も同じような表情を浮かべていた。

その隙に彼は宙に浮いたままの足でカイザー理事の体を蹴り拘束から脱出する。倒れた車椅子を脳波コントロールにより起き上がらせ、落下する自身をキャッチするようにポジショニング。狙い通りに車椅子へと再び腰を下ろした彼は、覚めぬ怒りのまま追撃のオーダーを出すカイザーを見て——自身を持ち込んだとっておきの名を呼んだ。

「マルドゥク、起動」

その声と共に先生が乗り込んで来た黒い機体のコンテナハッチが開き、2m程度のヒトガタがカイザー理事達に向けて飛び出し——青の光が揺らめいた。

刹那、PMCが持っていた銃が全て、トリガーから後ろのみを残して真っ二つになる。その断面は焼き爛れたようになっており、高い熱エネルギーを持つ何かに溶断されたのだと即座に理解に至った。

「何だ、アレは……」

呆然とした様子で呟くカイザー理事。交錯から1秒未満で護衛全員の銃を切断した謎のヒトガタは——悠然と、先生の隣に佇んでいた。

「絶大な戦闘能力を発揮するパワードスーツの支援機。本来はセット運用が前提だけど、別にこれだけでも使えないわけじゃない」

ミレニアムサイエンススクールが誇る凄腕の特殊部隊であるClearing……通称C&C。その中のコールサイン04の名で呼ばれる少女、飛鳥馬トキ。彼女は追加装備としてアビ・エシユフと呼ばれるパワードスーツを保有している。

彼がこの場に持ってきたマルドゥクと、それを運ぶメロダックは彼女が使う事を想定した拡張アタッチメントなのだ。その用途は単騎での敵拠点への突撃と先制攻撃、殲滅。圧倒的な物量を誇る敵を彼女

1人で相手取るために考案されたシステムは調月リオと明星ヒマリの2名か、或いは先生をオペレータとして要求する。

マルドウクも過激な作戦に応えられるような構造となっている。

腕部はアサルトライフルとグレネード、レーザーブレード。脚部は膝関節から下は実体剣。腰部、胸部にはミサイルハッチ。背中には折り畳み式のレールガンとガトリング。エネルギーシールドも備えており、攻撃力と速度、機動性に振り切りながらも防御力にもある程度割いた機体になっている。勿論、トキとアビ・エシュフの連携を前提としているため、その他の機能も充実。

エリドウの演算性能も一部引き継いでおり、オペレータのバックアップ有きであるがミレニアム最強の美甘ネルを追い詰めた圧倒的なスペックを場所を選ばずに発揮できる。その上、単体での飛行すら可能だ。

人型兵器としての1つの到達点、それがマルドウク。オーバーテックノロジーに肩まで浸かっている兵器の登場に流石のカイザー理事もたじろいだ。

だが、先生の持つ手札はそれだけではない。彼がアロナに呼びかけ、タブレットを操作すると――次々とオートマタ達が不快な電子音を上げながらスパークし、転倒した。勿論、それだけではない。ヘリやドローン、戦闘機、稼働している施設に至るまで一瞬で機能不全に陥った。

「今度は何だッ!? ええい、貴様らは何をやっているッ!？」

『も、申し訳ございません! ですが――』

取り繕う余裕もないカイザー理事は通信越しに部下とコンタクトを取るが、謝罪の言葉一つを最後に通信が切断される。赤のアイラインにノイズが走り、駆動系からは嫌な音が鳴る。命を司る基幹システムは機能停止の一手手前。その症状が、この場にいる全ての機械に分け隔てなく降り注いだ。ノノミの銃も今は使う事ができないだろう。今アロナが起こしたのは疑似的に再現された太陽嵐だ。

太陽フレアに伴う太陽風……それに含まれる電磁波、粒子線、粒子が電子機器に甚大な被害を及ぼす、今も尚人類の手に余る宇宙現象。

彼とアロナが持つ対機械生命用の切り札の1つは思った通りの絶大な成果を挙げた。

勿論、先生とてこんなものを好んで使いたくはない。放射線や粒子ビームをカットし、真正面から浴びても後遺症が残らないように改良されたとは云え、元は轢殺の宇宙現象であり、彼の敵が使う攻撃を解析した結果生まれたものだ。安易な濫用は彼の信条に反し、彼女に対する冒瀆に値する。

生徒にできることは生徒に任せる。それが彼の先生としての在り方だ。だが、その生徒が致命的な危機に陥った時、滅びと相対した時——或いは、大人の悪意と敵意に晒された時。その何れかに該当する場合のみ、彼は己の切り札を解放する。システムの箱や大人のカードも同じだ。生徒達の自主性の為に、安易な使用はしない。彼女達の成長を妨げる要因になってしまうから。

カイザー理事は生徒達を危機に陥らせ、大人の悪意と敵意を彼女達に向けたのだ。使うべき条件は満たされている。

「私はキヴォオトスに存在する全ての中の最弱だ。身体の基本スペックは到底敵わない。でも、私はそれでいいんだよ。私はあくまで生徒を救い、教え、導く先生だ。敵を滅ぼす為の存在じゃない」

「貴様……！」

「安心しなよ。命は奪わないと決めている。少し経てば動けるようになるさ。後遺症も、何も残らない。勿論、念のため精密検査の受診をお勧めするけどね」

肩を竦めながら言葉を述べる先生に向けてカイザー理事は護身用の銃を向け、トリガーを引くが——狙いは大きく外れた。額を貫けるように照準を合わせた筈だが彼の頬を僅かに掠めただけ。ソニックブームにより切り裂かれた頬からは一筋の赤が零れた。

その光景を悔し気な表情で見つめながら、カイザー理事は唯一生きている回線に「復旧とECM対策を急げ！」と叫んだ後に——先生の方へ視線を固定する。

「馬鹿なッ！ こうも容易く、我々が……！」

「頭の回らない大人は最悪だけど、その逆なら私も好きだよ。私達、相

思相愛だね」

既に銃を握る事すらできないカイザー理事に向けて、彼は冷たく言い放つ。姿勢制御プログラムが機能不全に陥り、膝から崩れ落ち砂に埋もれ———僅かに動く顔で、目の前にいる得体の知れない『違う生き物』を見上げた。

「化け物め……ッ！」

「認識が甘かったねえ、カイザー理事。仮にもシャーレを想定してこの程度なら、私はカイザーを過大評価していたのかもしれない。ああ、想定が甘いにも程がある。私を、シャーレを相手取りたいならこの5倍は持つてきなよ」

怨嗟に満ちた声で彼の存在を『化け物』と定義しても、皮肉を交えながら嗤うばかり。全てのイニシアティブは彼に移った。既にカイザーは彼の掌の上。文字通り、彼の声一つでこの場にいる全てのオートマタは絶命するだろう。

「私は戦いが苦手なんだ。武力も争いもない方が良いに決まってる。だが、それでも———看過できないことがある」

先生は伏せていた目を開き、憂いを帯びた蒼で這い蹲るカイザー理事を見つめる。

手遅れでも見過ごせない事があった。

間に合わないとは分かっているでも足掻かなければならない事があった。

誰かと争ってでも貫かなければならない誓いがあった。

———それが、今だった。

透き通る蒼に見つめられたカイザー理事はマニピュレータが壊れんばかりに握り締め、自身の内に燃える激情を仕舞い込んだ。

屈辱だった。見下した存在に憐れまれるなど、身を八つ裂きにしても尚余りある怒りだ。踏み潰してきた弱者を見上げるなど、許せるはずがない。

だが、これは紛れもない現実なのだ。カイザー理事は化かし合いで先生に一步も二歩も上に行かれ、完敗を喫した。その事実を呑み込み、理事は憎悪に満ちた声で呟く。

「認めよう、この場合は貴様の勝ちだ……！ シャーレを過小評価していた。貴様を唯の人間と侮った私が愚かだったようだな……救世主……！」

「私は唯の人間だよ。そこは間違っていないさ」

先生は『救世主』と云うワードに辟易とした感情を込めながら呟けば、膝立ちのカイザー理事が敵意に満ちた光で彼を見据えて。

「連邦捜査部シャーレ、先生……貴様は私の敵だ。必ず殺す……！」

「私達が相容れない事なんて初めから分かっていただろう、カイザー理事。私達は不？戴天の怨敵だよ」

話は終わりだ、と言わんばかりに踵を返しアビドスの方へ戻る先生。

「生徒に、アビドスに固執した事が貴様の敗因であり、死因だ。愚かな生徒と共に、道化として死に絶えろ」

背後から突き刺さる刃のような言葉に彼は振り返って——闇を切り裂くような眼光で、倒れ伏すカイザー理事を貫いた。

「愚かなのは貴方達の方だ、カイザーコーポレーション。自らの欲望の為、自ら以外の全てを裏切ってきた貴方達に、裏切れない何かの為に戦ってきた彼女達を侮辱する権利はない」

その言葉を最後に彼は固い雰囲気崩して、何時もの柔らかい笑みを浮かべながら。

「学校に帰ろうか、皆」

凜然

先生と生徒が機体に戻る最中、カイザーコーポレーションは一切のアクションを起こさなかった。それは単純にシステムがまだ復旧していなかったからなのか。この場で負けを認めた以上、不意打ちの様な追撃は醜いと思ったのか。その内心は赤い光で彼等を見つめているカイザー理事にしか分からない。

だが、どう考えても先生とカイザー理事の対立は避けられないだろう。互いが互いを不？戴天の敵と認め、敵意と殺意を向け合った。握手して仲良しこよしなんて事は到底できない。次に見えた時、銃口を突き付け合う運命は決定している。

「――」

スロープを登り切る直前、先生がカイザー理事を一瞥した。未だ、蒼いままの瞳で。何処までも突き抜ける、広い空のような色。だが、その裏側に深淵のような色が覗いていた。暗く、淀み、濁った色彩。20と数年しか生きていない普通の人間があのような目をする訳がない。

異常なほど場慣れしていたのも納得がいく。彼は人生の大半を戦いに、命の奪い合いに費やしてきたのだろう。生粋の戦士だ。彼個人が争いを好む好まないは関係ない。彼は『在る』だけで争いを呼び寄せるのだから。

卓越した戦術眼等も全て後天的に身に着けたものだ。元々素質があつたのだろうが、その才能を曇らせず磨き続けた結果、あのような戦争の申し子が生まれた。その弛まぬ努力と研鑽はカイザー理事も高く評価している。

超人たる連邦生徒会長が後を任せただけはある。戦いを好まない性質と戦いに特化した才能が全く噛み合っていない点と、彼単体での戦闘能力が皆無な点以外は申し分ない。そして、その欠点を補って余りある長所もある。

――認めざるを得ない。先生はカイザーよりも上の傑物だ。真正面から戦いを挑んでも現時点では勝ち目が少ない。仮に勝てた

としてもカイザーは確実に再起不能になるだろう。それ程までに彼とシャーレは脅威であった。

カイザー理事は内部に籠っていた熱を溜息のように排熱し、漸く復旧しつつある各種システムを確かめてから声を張り上げた。

「今から3時間後に緊急会議を開く！ 各位、復旧を急げ！」

施設全域に取りつけられたスピーカーから響く理事の声に応じるように、ドローンやオートマタ達は各々の仕事を行う。その光景を見つめながら——己の敵に向けて、カイザー理事は重々しく口を開いた。

「次は、必ず殺してやる——シャーレの先生」



メロダックは遠い過去にミレニアムサイエンススクールのエンジニア部、ヴェリタス、特異現象捜査部、セミナーと先生によって開発された兵器群だ。アビ・エシユフとそのデバイサー、マルドウク6機、予備のアビ・エシユフ、オペレーター2名が最大積載量となっており、徹頭徹尾トキのサポートのみに注力し、特化している構成となっている。

主な用途は^{デカグラマトン}神名十文字が一柱、ケセドの制圧作戦。圧倒的な物量を磨り潰すための個の暴力を求められたときは、もう既に戦える生徒が殆ど残っていなかった頃だ。死者こそいなかったが重傷者だらけで人材不足に悩まされていた時に、ウタハ、チヒロ、ヒマリ、リオ、トキの連名で作戦の概要と、これらの兵器群の設計図が提出された。

勿論、生徒を特攻させるも同然の作戦に先生が承認する訳もなく突き返した。こんな馬鹿な真似はやめてくれ、私が何とかするから、と。

しかし、作戦は決行された。先生が意識不明の重体で生死の境目を彷徨っていた間に。意識が戻った彼が最初に聞いた報告はリオ、ヒマリ、トキの戦闘中^{Missing in action}行方不明だった。ケセドこそ倒せたが作戦に参加した3人の生存は絶望的で、便宜上MIAと呼んでいるが、『恐らく死んでいるだろう』と云うのが共通の見解だった。仮説の正しさを証

明するように、その世界で先生は最期の瞬間まで彼女達に逢えず……。

そんな事情もあり、彼はこの兵器群を作成することに全く乗り気ではなかった。何せ、己の愚かさや無力さの象徴だ。これを見るだけで胸が張り裂けそうになる。吐きそうになる。

ずっと消せなかった。後悔も、悲しみも。死地に向かった彼女達に何もしてやれなかった。怖かっただろう、痛かっただろう、辛かっただろう。それなのに、それなのに、何も……。

だから、風化なんてさせない。この記憶は必ず憶えていなければならぬのだ。他の誰が忘れても、彼だけは憶えていなければならぬ。それが、彼の責任。何もできなかった彼が負わなければならぬ十字架。だからこの兵器達を作ったのだ。次こそは彼女達を救えるように。伸ばされた手を掴めるように。誰かと同じ未来を見続けるために。

そうだ、最果てに座すベツレヘムの星は——皆を守り抜くために。

「——はい、先生。処置が終わりました」

「……ああ、ありがとう、ノノミ」

搭乗可能人数が最大3名なメロダックであるが、アビ・エシユフとマルドウクの格納スペースとオペレータールーム以外に1つだけブロックが存在する。広さは6名だと僅かに狭いと感じる程度。このスペースはトキが付けて欲しいと願ったものであり……そして、彼女の願い通りに使われる事は無かった。彼女と、彼女が先輩と慕う4人の為の部屋。

いつか一緒に任務がしたいと笑ったトキをよく覚えている。

そして、そんな細やかな願いすら叶えてやれなかった己に対する怒りと憎悪も。

手当てをしてくれたノノミに向けて彼は笑みを浮べる。新たに増えた頬の傷跡と、その処置痕。救急キットを仕舞ったノノミは「お礼を言うのは私達の方です」と云って。

「ありがとうございます。先生が居なければ、今頃どうなっていた

か……」

「君達を助けるのは当たり前だよ。私の大事な生徒なんだ。何処にい
ても、必ず見つけて助けるよ」

混じりけの無い彼の善意、善性。それを真つ向から受け取った彼女
達は『彼らしい』と笑う。ああ、そうだ。彼はこういう人だった、と。
「遅くなつてごめんね。本当なら出発に立ち会いたかつたんだけど
……」

「い、いえ！ そんな……先生が謝る事なんて……！」

「先生、怪我は大丈夫なのツ!？」

だが、彼の優しさを素直に受け取れないのもまた事実だ。セリカが
酷く心配そうな顔で彼に問いかければ、先生は微笑みを返した。

「万全とは言えないけど、大丈夫——」

言葉の続きを口にしようとした先生だったが、何かを堪えるような
顔で歩いてくるホシノに意識を割いた。何かあつたのだろうか、と見
当違いの心配をする彼は、彼女に向けて言葉を投げかけようとして。

「……ホシノ？」

つま先が触れ合う距離まで近づいても、ホシノは無言だった。その
様子に心配の他にも疑問を抱いた彼であつたが——それは即座
に驚きに変貌する。

ホシノは彼の方に小さな手を伸ばし、服に手を掛けて脱がし始めた
のだ。余りにも突然なその行動に、彼は苦笑いを浮かべながら言葉に
よる制止を試みる。

「あの……無言で私のシャツのボタンを外すのは止めて頂けると
……」

「うへ、私もこんな無理矢理はしたくないんだ。だから、本当に嫌なら
抵抗して。先生の手で私の手を握るだけでいいから」

そう云い、彼の脱衣を再開するホシノ。彼女から示された抵抗の選
択肢を先生は取れない。何せ、手は殆ど真面に動かないのだ。左手は
目覚めた時から動かなかつたが、右手も時間経過により動かし難くな
り、今では指先が僅かに動く程度。遅効性の神経障害が襲い掛かつて
いる。

「ちよ、ホシノ先輩!? 何やってるの!？」

セリカが顔を真っ赤にしながらそう叫ぶと、ホシノもまた茜を滲ませた顔を向けた。おじさん、と自身を呼称する彼女だって心は17歳の乙女なのだ。この状況は普通に恥ずかしい。

だが、それでもやらなければならぬ事があった。確かめなければならぬ事があった。他でもない、彼の為に。

「ん、抵抗は無駄。大人しく脱がされるべき」

「そうですね☆ 隠し事をする先生にはお仕置きです!」

その意図を察したシロコとノノミは先生の側へ素早く移動し、彼の両手を優しく抑えつけた。力を籠める事はしない。本当に軽く、掌を覆い被せるだけ。振り払おうと思えば簡単に振り払えてしまう拘束とも呼べないものだが、彼は困ったように笑うばかりで動かす事はしない。

セリカとアヤネがどうしたらいいのか分からず右往左往している内に、彼のシャツのボタンはすべて外れ、シャツの下に着ていた黒の長袖カットソーが顕わになる。それと同時に特徴的な匂いが全員の鼻孔を擦った。

「……………これは」

「ねえ、先生……………まさか……………」

蚊帳の外にいた2人もホシノの意図と彼の状態を察し真剣な表情をする。4人が固唾を呑んで見守る中、ホシノは意を決して所々湿り、色が変わっているカットソーの裾を掴んで思いつきり捲った。

「……………これ、何?」

「あ……………まあ、うん……………」

黒のカットソーの下、彼の素肌は血で汚れていた。ホシノが指摘すると、彼はばつが悪そうな顔をする。言い逃れはできない。感づかれた時点で彼は詰んでいた。

「また、無理したの?」

「いや、無理は……………」

顔を背けようとした先生だが、いとも容易くそれは阻まれる。ホシノの両手が彼の頬に添えられ、決して視線を逸らせないように固定さ

れた。

「私の目を見て答えて、先生」

「……」

ホシノの、何処までも心配するような瞳。深い悲しみを携えた彼女の顔を直視できなくて、だが視線を逸らす事はせずに口を噤んで彼女を見つめる。

2人の間に気まずい沈黙が流れている中、他の4人は彼の手当てをするための道具を片っ端から掻き集めていた。彼を寝かせるための担架、或いはベッド。汚れを洗い流せる水。救急キットは今この場にあるため、シロコとノノミが2人で迅速な手当ができるように準備している。

30秒も経たずに彼女達は戻って来て、その手には必要な道具が握られていた。それを確認したホシノは大きな溜息を吐いて。

「うへ、取り敢えず手当てを優先するよ。ちゃんと掴まってね〜」
そう言い放ち、先生を横抱きにするホシノ。それに対して感情を動かす余裕もなく、彼はあつという間にベッドの上に運び込まれて服を再び捲り上げられた。

開いた傷は多くないが、それでも決して無視できない。彼はただでさえ体力を大きく消耗しているのだ。こういつた負担の積み重ねがどんな形で現れるのか、彼女達はよく覚えている——蹲り、血を吐きながら苦しむ彼の姿を。

幸いにも血を流しているだけで、それ以外の何かは見当たらなかった。それに安堵を覚えてしまうが油断はできない。何せ、彼は『大丈夫だよ』と優しい嘘を吐く事が上手なのだ。

逃がすことはしない。必ず手当てをして反省させる。皆の揺るぎない決意が籠った表情を見て先生は。

「……お手柔らかに」

苦笑いと共に零れた彼の声に頷く者はいなかった。

堕ち逝く星に

「——兎に角、先生は無茶をし過ぎなんです！」

「でも……」

「でもじゃありません！」

先生が続けようとした苦し紛れの反論をアヤネは無言を言わず断ち切り、お説教の続きを開始する。5分ほど前からこんな感じであった。一通りの応急手当を終え、「ありがとう」と微笑んだ彼に告げられた、アビドスの少女達による先生、お時間頂きます死ね。刑お時間頂きます宣ね。告

つまり、無茶に無茶を重ねて無茶をトツピングする暴挙に出た彼に対するお説教だ。アビドス高等学校までの道すがら、5人の少女による代わる代わるの言葉達は非常に耳に痛い。何せ、己の浅慮を改めて突き付けられているようなものなのだ。

勿論、生徒に思われている事は先生冥利に尽きる。それはとてもありがたい話であり、彼女達の思いを糧に更に頑張れてしまうのだが……彼女達はその『頑張り』を咎めているのだ。

彼女達も彼に大切に思われているのは嬉しい。今までの全てを肯定してくれた彼に対する感謝も愛も抱えきれないほどある。親愛も、それ以外の……特別な誰かに向ける愛も。

だからこそ、己の身を使い潰すような彼の言動は嫌だったのだ。駆け抜けたその先に自分が居なくても構わないと謂うような……まるで、生き急いでいるような。

故に怒っている。彼女達は彼と『この先』も生きたいから。

——と、こんな様々な事情もあり、彼は車椅子に座りながら説教を受けている。

シロコは静かながらも確かな心配を。

ノノミは明るさを潜めた悲しみを。

セリカは気丈さの裏側に隠した寂しさを。

今はアヤネの番であり、先生はずっと理詰めの説教を受けている。彼の無茶に心から怒り、二度とあんな無茶をしないようにする説教を。反論は全て封殺され、途中からは彼も力なく「はい……」と頷く

だけになっており、『怒ったアヤネが一番怖い』と云うアビドス共通の認識を身を以って味わっていた。

その光景を見つめながら、ホシノは微妙な表情を浮かべながら頬を搔いていた。

「……おじさんが言うのもあれだけど、なんかちよつと可哀想になつてきたね〜」

「ん、仕方ない。これは先生が悪い」

「無茶をした先生にはお説教です☆」

「そうよ！ 無茶ばかりして……本当に心配したんだから……」

その言葉通り、セリカは人一倍彼を心配していた。彼に説教をしている最中、感情が昂って泣いてしまうほどに。その落涙を見て彼は慌てて、その瞳から零れる青を止めようと必死に慰めて……と云うのが顛末だ。

馬鹿に付ける薬は無いと云うが、先生と書いて馬鹿と読む彼なら話は別だ。生徒の涙が何より良い薬になる。託された数多の願いの為に前進し続ける鋼鉄の決意に揺るぎはないが、それでも断崖の果てを飛翔する前のブレーキにはなるだろう。いつか訪れる巡礼の旅の果て、^{だれか}皆の為に命を捧げるその時に——— 僅かでも迷ってくれればいい。

「兎に角、もう無茶はしないでください！ 分かりましたか!?!」

「はい……」

そうこうしている内に、どうやらアヤネの説教は終わったようだ。彼女は肩で息をしており、どれほど熱を籠めて彼へ言葉を綴ったのを見て取れる。

アヤネの番も終わり、いよいよ最後はホシノの番。だが、彼女が言いたいことは大体仲間達が言ってくれたし、そろそろ学校に着く頃だ。元々は『時間を有効活用しよう』という考えの元に開催された彼へのお説教大会もそろそろお開きでいいだろう。4人の少女達に代わる代わる言われれば彼も反省しているだろうし、段々可哀そうになつてきた。

彼の行為だつて、元は善意なのだ。自分の生徒を放っておけない、

助けたい——そんな、暖かい思い。それ自体はとても嬉しいけど、他人の心配ばかりして自分の体を顧みなかったのが問題点の訳で。

あと、病院も脱出したのだろう。あんな重傷だった彼が正規の手順で退院できるわけがない。そこも皆のお怒りポイントだった。

ホシノの中で様々な感情がごちゃ混ぜになる。

悲しみはある。怒りはある。心配だっけしている。たった1日でも、会えなくて寂しかった。来てくれて嬉しかった。守ってくれて嬉しかった。

——アビドスは貴方達の玩具じゃない。誰かが生きて、誰かが愛した大切な場所だ。貴方達に踏み躪る権利はない。

——自らの欲望の為、自ら以外の全てを裏切ってきた貴方達に、裏切れない何かの為に戦ってきた彼女達を侮辱する権利はない。彼がカイザーに発した、その言葉達。それにどれほど救われたか、先生はきつと分らない。彼にとっては当たり前前の事だから。でも、それでも。

「——つと」

車椅子に座る彼の胸にそつと顔を埋めるホシノ。手当したばかりだから強く抱きしめる事はせずに、そつと背中に腕を回すように。少しだけ顔を強く彼に押し付けければ、アルコールの匂いの奥にある彼本来の香りが鼻孔を擽る。それに至上の安心感を覚えながら、本当に言いたかった言葉を呟いた。

「ありがとう、先生」

きつと、怒られると思っていたのだろう。ホシノの口から零れた混じりけの無いその言葉に一瞬面食らったような顔をして……それから、誰もが安らぎを覚えるような笑みを浮べる。

そして、彼は茜が散るホシノの耳の真横まで自身の顔を移動させて。

「此方こそ、ありがとう、ホシノ」

囁くような心地の良い彼の声が、ホシノの耳朶を転がった。それにどうしようもない幸福感と安らぎと愛しさを覚えながら、続きを口に

する。

「——お願いだから、自分を大切にして。もうこんな無茶は二度としないでよね」

「……ごめんね、私が馬鹿だったよ」

懺悔と悔恨。感情の籠る声。しかし、彼はホシノの願いに頷かなかった。馬鹿だった、浅はかだった、軽率だった、愚かだった、危険だった——それは、正しく理解している。だが、それでも体が動いたのだ。看過できない、と心が叫んだのだ。大人の悪意から彼女達を守りたかったのだ。

ホシノは思う。きつと彼の道は困難極まる受難の道になるだろう。危険な目にも遭うし、命を落とす事だつてあるかもしれない。安らぎからは見放され、幸福は遠ざかるばかり。そんな嫌な直感が脳裏を過った。

その道を歩き続ける事が貴方の望みだとしても、幸せだとしても——行かせたくない。その先で貴方が眠れるとしても、暗い場所に行かせたくない。

誰かの為に止まれない彼の代わりに、私が彼を止めよう。彼が独りぼっちにならないように。昏い先で息を止めてしまわないように。頑張った貴方に、少しでも多くの幸福が訪れるように。

そんな事をホシノが思っていると、彼の手が中途半端に伸ばされている事に気付いた。躊躇が見え隠れしているの腕。彼の胸から顔を離れた彼女はその手を掴み、自身の右頬にそつと当てる。大きくて、しなやかで細いけれど男性らしさもある中性的な手。ちゃんと暖かい。

「先生の手、あつたかいね」

「……そっか」

ホシノと先生は、顔を見合わせてはにかんだ。

それから彼は4人の方を見て、くすり、と笑って。

「皆も来るかい?」

「な、何言つてんのツ!? 別に羨ましいとか思つてないからツ! 本当だからツ!」

「うへ、そんなに頑なだと逆に怪しくなっちゃうんだよセリカちゃん」
そう言いながら、ホシノは先生の手に頬擦りをすると、セリカの顔は余計に真っ赤に染まった。そんな彼女に対して、『もう片方は空いてるよ』と言わんばかりに手を振る先生。神経を整える薬が効いてきて漸く真面に動く様になったのだ。感覚はまだ鈍いが、誰かを抱きしめたり撫でたりするのは困らない。

然そういう、『私はもう大丈夫だよ』という意図も含んだアピール。それに真っ先に食いついたのはセリカではなく。

「お邪魔しますね☆」

「ノノミちゃんだ〜」

ノノミが駆け足気味で彼の元へと行き、背後から思いつきり抱きしめた。余りにも大胆な行動、混じりけの無い好意。いつかしてくれた膝枕の恩返し。あの日の暖かさはまだ覚えているのだ。彼の膝は、声は、眼差しは何よりも優しくかった。だから、彼にも同じように安心してくれればいいな——そんな思いによる抱擁。彼は「擦りたいよ」と柔らかい笑みを浮べて、心底嬉しそうだ。

「ん、先生は私も撫でるべき」

ノノミの次はシロコが来て、先生の空いている片方の手を自身の頭に素早く乗せた。その押し強さに彼は『シロコらしい』と懐かしさを覚えながら、彼女の頭の形を覚えるように優しく撫でつける。それは彼女の望み通り……否、望み以上の触れ方だった。その動作一つ一つから溢れんばかりの愛情が伝わってくる。

その後はノノミが一旦離れ、見ているだけだったセリカとアヤネを巻き込んで再び集まった。それなりに広さが確保されている機内のはずだが、先生を中心にして集まっている所為で酷く窮屈に感じてしまふ。

でも、それが酷く心地良かった。手を伸ばせば触れられる距離にある。声を掛ければ振り向いてくれる近さにいる。体温と呼吸を感じられる場所にいる。

ホシノは、遥かに煌めくシリウスの星に誓う。

——皆を、先生を……どんな手を使ってでも守り抜く、と。

▼

アビドス、某所。黒い空の元にワカモは立っていた。下半分が消失し使い物にならなくなった仮面を片手に持ちながら可憐な顔を焦燥に歪める彼女の傍らには大量の銃火器が散乱している。勿論、これは彼女の持ち物ではない。この多くの武器達の持ち主は、同じくこの近辺に散乱しているオートマタだ。

「……………ふう」

息を一つ吐いて、ヒールブーツで足元のオートマタの頭蓋を粉碎する。これで何体目だろうか。500を超えてから数えていないが、多分4桁は越えているだろう。一体一体は雑魚だが、数が増えるとそれなりに厄介になるのがオートマタの特性だ。機体の全てを電子制御している関係上、ミスを誘う、という戦術が有効に働き難い。

特に今回ワカモが相手にしたタイプ……………大きな意志の元に接続された、個体差がないオートマタ達は本当に厄介極まる。

最後の一体を完全に破壊した事により戦闘が終了する。黒に染まった空に光が差し込み、数秒で見慣れた青が返ってきた。

「これで、少しは楽になると良いのですが……………」

懇願によく似た呟き。だが、それが叶いそうにない事はワカモが一番よく分かっていた。

決戦は近い。既に神秘は臨界寸前だ。あと少し何かが起こるだけで、このアビドスは地獄のような戦場へと変貌するだろう。

オートマタの肩部に存在する土星のマーキング。
破壊したときに溢れる鉛と真珠。

オートマタ達が現れる場所に張られる、黒い空を映す結果。
きつと、これまで経験してきた戦いが兎戯に思えるほどの死線が形成される。だが、怖くないのだ。彼が隣に立ってくれるから。

ワカモは踵を返し、砂漠を後にする。用事は全て済んだ。此処に留まる理由は無い。それに——。

「ああ、愛しの貴方様。このワカモが、今すぐ貴方様の元へ向かいます

から——」

目覚めた先生に逢いたいのだ。今すぐホテルに戻り、湯浴みを済ませて着替えて、化粧をして——一番、綺麗な状態で彼との逢瀬を楽しみたい。

その一念が心中を埋め尽くしたワカモの足取りは、とても軽かった。

末期の祈りを

「…………ふう」

「何とか戻ってこれましたね…………」

メロダックで帰還した彼女達は一先ず部室に戻り、息を吐いていた。空は茜色に染まっており、砂漠は地平線が見えそうなくらいに澄み渡っている。何時もだったら『綺麗だね』と済ませられるその光景も、潜む悪意を目の当たりにした今は違ったものを感じられてしまう。

尚、彼女達を輸送した機体はAIによるオートパイロット機能とシャーレの広域無線通信の併用により独りでに元の格納庫へ戻っていく光景を目にしながら、彼女達は専用装備や資材を片付け、対策委員会部室に戻る頃には疲労がピークに差し掛かっていた。

先生を除く全員が酷く疲れた面持ちで椅子に深く腰を掛け、溜まった涎みを吐き出すように長く息を吐く。本当なら、一刻も早くシャワーを浴び、食事を取って、ベッドで眠りたかったが…………そんな余暇を楽しむ余裕はなかった。優先して話し合う事が、確認しなければならぬ事が山のように積み重なっている。

アヤネは全員の着席を確認しようと辺りを見渡すが、長机に先生が居ない。何処に行ったのか、と部室を見渡したら給湯スペースでハーブティーを入れていた。この人は何をやっているんだ、と内心で思いながら手伝いに行こうと早足で駆けていくが、どうやらもう入れ終わったようで配膳の準備に取り掛かっていた。

アヤネと同じく、彼を手伝おうと給湯スペースまで来ていたシロコは彼から5人分のティーカップが乗ったティートレーを受け取り代わりに配膳を行う。目の前に置かれたハーブティーは、彼が初日に入ってくれたものと同じ。そこまで遠くない筈なのに懐かしいと感じてしまう。

そうして、全員が着席した。長机を囲む6人。アヤネは全員を見渡し、それから先生におずおずと声を掛けた。

「あの、先生……本当に、病院に行かなくても……」

「心配してくれてありがとう。もう、大丈夫だよ」

「ですが——」

「皆が手当てしてくれたんだ。きつと傷は開かないさ」

「そんなの、何の根拠もないじゃない……」

ハーブティーを嗜みながら先生にジト目を向けるセリカ。突き刺さる様な視線に彼は優しい微笑みを返して。

「ふふっ……それに、もう無茶はしないよ。だから、ね？」

「うへ、そんな事言ってるけど、さつきはカイザーのトップと一触即発だったじゃん？ 私達としてはちよつと信用できないかな？」

「……あはは」

「目を逸らしちゃ駄目ですよ？」

ホシノの鋭い言葉に微妙な顔と笑みを浮べると、ノノミが素早くブロックした。逃げ場はない。

仕方がないだろう。あの怒りは抑える事ができなかったのだ。何せカイザーは責任を捨てるばかりか、その重荷で子どもを潰そうとした。権利を悪用し、守るべき子どもの明日を壊そうとした。それに加えて、アビドスの少女達の誇りを、意志を、想いを、願いを踏み躪つたのだ。

許せるわけがないだろう。怒髪冠を衝くのは道理というもの。あの場で誰よりも怒らなければならなかったのは彼なのだ。同じ大人として、先生として、子ども達を愛する者として。

故に反省しているものの、後悔はしていない。寧ろ、骨が砕けるのも承知の上で一発殴り飛ばせば良かったと思っている。

暴力は嫌いだ。争いは苦手だ。故に先生は護身用の銃すら持たず、己が生徒に銃を含むあらゆる暴力を向ける事は無い。そうしなれば己が死ぬ状況になっても、文字通り死んでも生徒に力を向けない。生徒を指揮し生徒に攻撃させている分際で何を今更と自身でも思うが、この綺麗事だけは譲れない。

——私は、決して私の手で生徒を傷付けない。

だが、相手が大人となれば話は別だ。大人によって子どもが危機に

陥った時は、どんな手を使ってでもその悪意を排除しよう。カイザーだろうが、ゲマトリアだろうが、無名の司祭だろうが等しく踏み潰すのみだ。

「先生が生徒を思っているのは分かっています。ですから、その思いを少しでもいいのでご自身の為に……」

「うーん……それはちよつと……」

「先生？」

「……はい、ごめんなさい」

アヤネの言葉に先生が難色を示せば、ノータイムで恐ろしい笑顔が返ってくる。あまりにも攻撃的なその笑みに、彼も流石に謝罪以外の答えを見失ってしまった。

先程の説教が余程堪えたのか、彼女に向けて苦笑い混じりの笑みを浮かべている彼がちよつと不格好で情けなくて……でも、優しく、格好良くて、頼り甲斐があつて。そのギャップが面白くなって、ホシノはくすりと笑いながら。

「ま、先生にちよつとでも変な所があつたら即座に病院に叩き込むからね？ 辛かつたらちゃんと訴えるんだよ、分かった？」

「私だつてちゃんと自分の限界は分かつてるよ」

「その限界を認識した上で、一切躊躇せずに突つ走れるのが先生のお馬鹿さんポイントなんだよ？ 皆も、少しでも辛そうな感じがしたら有無を言わず強制的に連れてっちゃってね？」

ホシノの云う『お馬鹿さんポイント』なるものに心当たりがあり過ぎて言葉を詰まらせた先生を置いてきぼりにして、彼の連行プランが提唱されてしまった。

「ん、これからは先生をもつと見るね」

「勿論よ！ もう二度とあんな無茶はさせないんだから！」

「そうですね。すぐ車を動かせるように準備しておきます☆」

「じゃあ、私は病院へ連絡できるように手配を……」

そして、そのプランは当然ながら全員可決。議論の余地すらなく満場一致の解答であつた。

無論、先生としても思つてくれるその気持ちはとても嬉しいもの

で、ありがたいものだ。だが、彼女達の身体能力で力づく、となると先生は基本的に抵抗できない。本当に有無を言わさず病院に叩き込まれるのがオチだろう。

幸い、体内のナノマシンが頑張ってくれているお陰で体の不調は粗方消え去った。局所的に細胞分裂を促進させる事により、骨折の方もあと少しで完治……とまではいかないが、それでも歩行には問題なくなる程度には回復する。精々、彼女達に心配されないように頑張るとしよう。先生は軽く頭を振って、気持ちを入れ替えた。

「……それじゃ、そろそろ本題に入ろっか」

気持ちを切り替えた先生に合わせるように、ホシノは呟いて緩んだ空気を引き締める。

「結局、カイザーコーポレーションがあそこで何を企んでいるのか詳しく分からなかった」

『宝物を探している』と言っていました……アビドスのあんな場所に果たしてあるのでしょうか？」

「ノノミ先輩の言う通り、あの砂漠には何もありません。石油や貴金属、ガスといった、お金になりそうな地下資源は何一つ残っていません……以前に行われた地質調査でそういう結果がでています。出鱈目を言っている、と思いたいですが……詳しい事は何とも……」

「だとすると、どうして……」

資金に悩んだアビドスは、自治区をひっくり返す勢いでお金になりそうなものを探した。石油、天然ガスといったエネルギー資源。貴金属等の鉱物資源。地質調査を行い、掘り起こし……だが、実りある結果は得られなかった。そのような記録と結果が保存されている。

それに、カイザーが態々自身達の手で探すような『宝物』が石油等の資源……有り触れたものとは思えない。だが、砂漠にありそうなものなんてそれくらいしか思いつかなくて。

皆がカイザーの読めない思惑に頭を悩ませていると、シロコが徐に立ち上がった。愛銃に付着した砂を軽く払い、強い決意を秘めた瞳で意思を告げる。

「……行ってくる」

「し、シロコ先輩!? 行くって、何処へ……」

「PMCの施設。あそこで何をしているのか調べないと駄目な気がする。さつきは大勢だったから見つかったけど、私だけならばれずに侵入できると思う。だから——」

「それは許可できない」

冷たい、鋭い声。シロコの意味に待ったをかけたのは先生だった。彼は車椅子を動かし、彼女の前に立ち塞がる。この道の続きを、歩ませないように。

「……先生」

「危ないと分かっている場所に、君を行かせるわけにはいかない」

たった数時間前に侵入を許したカイザーPMCは厳戒態勢だろう。警備は更に嚴重になり、恐らく空中には全域を網羅するドローン達が哨戒している。サーモセンサーや動体感知センサー、赤外線センサーも全て稼働しているはずだ。

そんな環境にはどうやっても侵入できないだろう。シロコでも不可能は覆らない。そして、捕まったら最後、どんな目に遭うか分からない。本当にヘイローが破壊されて命を落とすかもしれないのだ。

そんな場所に、愛する生徒を行かせるわけにはいかない。絶対に退かない、という意思がシロコを貫いた。

彼の懇願、心配してくれる気持ち。溢れんばかりの愛。その真摯さは、確かにシロコの胸を打った。だが、それでも確かめなければという義務感は消えてくれなくて。

「でも……」

「お願いだよ。行かないで、シロコ」

重ねての懇願。届かぬ星を憂うような眼差し。それを見てシロコは観念したように息を吐いて。

「……ん、分かった」

と、侵入を諦めた。それに安堵したような顔をする先生。本当に良かった、と表情全てで体現する彼を見てシロコは少し悲しくなった。

——貴方は他の人を愛せるのに、自分は愛せないんだね。

彼の前から退いて自身の席に戻ったシロコ。それを確認したアヤ

ネは仕切り直すように口を開く。

「一先ず、あの施設は保留にしておきましょう。問題は……」

「借金、ですね」

「そうよ！ あの理事とかいう奴、3000%とか言っただけだ!?」
机を勢い良く叩きながら立ち上がるセリカ。

彼女は他の皆がカイザーの思惑について頭を悩ませている傍ら、ずっと借金のことを考えていたのだ。今すぐ解決しなければならぬ問題は此方だろうと判断して。

「確かにアイツらが何をやってるのかは気になるけど、今は借金を何とかしないと！ このままだと本当に学校がなくなっちゃう！」

「確か利息だけでも9000万、でしたか」

「それに加えて保証金も要求してきましたし……あと1週間で3億円なんて……」

突き付けられた最後通牒、どれだけ頑張っても到底届かないであろう金額。提示された金額を口に出せば、その数字の大きさを改めて認識してしまう。

対策委員会全員の顔に影が刺し、暗い空気が場を満たした。1週間で3億なんて到底不可能だ。仮にこれを用意できたとしても、待っているのは跳ね上がられた9000万の利息。

毎月800万弱を返すだけでも手一杯で活動予算は火の車なのに、10倍以上の金額をコンスタントに払い続けるのは無理だろう。少なくともバイトや依頼をこなして得た金銭を返済に充てる、と云う方法は取れそうにない。

どうすればいいのだろうか。そんな思考が頭を埋め尽くす中、立ち上がったのはまたしてもシロコだった。

「……毎月9000万。それに加えて3億。こんな借金、もう真面目なやり方じゃ返せない。だから私達もなりふり構ってられない。手段を選ばなければ、方法はある」

「だ、駄目ですよ！ それではまた……!」

正道には正道で返すのが道理ならば、外法には外法で報復するのが筋というもの。目には目を、歯には歯を、とはよく云ったもので、敵

が手段を選ばないならば此方も手段を選ばなければいい。カイザーが凡ゆる手を使ってアビドスを滅ぼしに来るならば、此方も凡ゆる手を使ってアビドスを守ろう。

強盗か襲撃か、何れにせよ褒められない方法に手を染める事を暗に示唆するシロコ。当然そんな事は認められないアヤネは声を荒げてやめさせようとするが、その案に賛成する者がいた。

「……私は、シロコ先輩に賛成」

「セリカちゃん!？」

座り、俯いたまま震えた声で告げるセリカ。この答えを選ぶまでに数多の葛藤があった。数多の決断があった。迷いも、後悔も、何もかも。あの時のような一時の感情や利益に流されたが故の決断ではない。彼女は想定する全てを勘定に入れ、天秤に掛け、その果てに賛同を選んだ。

「こんなお金、学生の私達で用意できる範疇を超えてるわよ! 学校が無くなったら全部終わりなんだから、なりふり構ってられない! それに、アイツ等、私達が返せないって分かかってあんな事をやってる! 卑怯な手を使ってるヤツを相手に、私達だけ馬鹿正直に真つ当な方法で戦う必要ないでしょ!？」

セリカの言葉には感情が籠っていた。怒りや焦り、不安……そして、それらに類する思い達。固い決意で以って発せられた彼女の言葉には、周囲を納得させようとする意思の他に、自分を納得させようとする意思も感じられる。

彼女とて認めたくないのだろう。だから、無理に納得しようとしている。もう仕方がないのだと、諦めるしかないのだと……綺麗事を並べられる幼年期はもう終わったのだと。

「そんな……!？」

「セリカちゃん待つて! そんなことしたらあの時と同じだよ!」

悲壮な言葉にノノミが呆然とした顔で言葉を失っているとアヤネが席を立ててセリカに詰め寄る。その方法は駄目だと、他に方法があるはずだと説得しようとするが、そんな子供騙しで意思を曲げられるような情弱な決意ではない。セリカもアヤネに合わせるように勢い

のまま立ち上がり、言葉で殴りつけるように声を張った。

「状況が変わったの！ 学校を存続させるために、もう綺麗事を言つてられなくなつたんだよ！」

「あの時、ホシノ先輩が止めてくれたのに、自分から進んで犯罪者になるの!?!」

「じゃあどうするのよ!?! 真面目な方法で今すぐ借金を払う方法があるの!?! ないでしょ!?! だから——」

「だからって、関係ない他の誰かを不幸にして、犯罪に手を染めて学校を守つても意味がないです！」

「意味ならあるわよ！ 汚い手を使おうが守れた学校はちゃんと残る！ 私達、そのためにずっと頑張ってきたじゃない！」

「ですが——!?!」

互いに一步も引かぬ言葉の応酬。互いの主義は平行線で、決して交わらない。学校を守りたい、その一念は同じはずなのに、互いが互いの意思をへし折らんと声を張り上げている。

議論はヒートアップし、空気は秒刻みで悪くなる。あと少しで臨界——と、誰もがそう感じたときに、乾いた音が響いた。突然の音に皆が発生源を見ると、手を鳴らしたホシノが嫺やかな微笑みを浮かべていた。

「ほらほら、熱くなりすぎ。2人とも落ち着いて。深呼吸だよ」

「……ごめんね、セリカちゃん」

「——私の方こそ。アヤネちゃんに当たつても、意味なんかはないの……」

互いに謝罪の言葉を口にして席に戻る少女達。それを満足気に見ながら、ホシノはまた緩く微笑んだ。

「そんなに学校を思つてくれるのは嬉しいけど、おじさんは学校も皆も大事だから、さ。そんなに思い詰めてほしくないんだ」

「……ごめん。私が軽率だった。こんな風にしたい訳じゃなかった」

「うん、皆分かつてるよ。シロコちゃんはいいい子だからね」

ホシノは「勿論、皆もだけど」と付け足し、背もたれに身体を預ける。学校の事をよく考えているが故の衝突、それを責めるつもりは全

くない。それに、お互いがお互いに謝罪の言葉を口にした以上、あの議論の部外者だったホシノが口を出す権利はなかった。

それから彼女は酷く透明な表情を浮かべている先生に視線を向けて。

「先生はどうかかな？」

「勿論、犯罪行為は推奨しないよ」

「それは先生としての意見？ それとも……」

「どっちもだよ」

つまり、実利と彼個人の意見、そして先生という立場の全てで以つて、犯罪に手を染める事を推奨していない。

道徳観や倫理観といった、彼個人の善性。

生徒が道を踏み外す事を良しとしない、教師としての立場。

犯罪行為に手を染めた事によつて彼女達が逮捕されてしまった場合のリスク。

一度上手く行つたからといって、次も成功するとは限らない。そもそも成功する確率の方が低いのだそんな分の悪い賭けに、彼女達の守りたいものを差し出すのは止めた方がいい。失敗したりリスクも考えると猶更、正道から逸れない方が賢明に思える。

現状、アビドスは八方塞がりだった。取れる手はない。使える手段じゃ間に合わない。彼女達は雁字搦めにされたこの状況を打開する術を見出せなかった。

そんな時、不意にホシノが立ち上がった。

「ま、今日はこの辺りでお開きにしようか」

「え、でも……」

「さ、皆、解散解散。今日は色々あつて疲れたから、気持ち先走つてるんだと思うよ？ 今日帰つてシャワー浴びてご飯食べてゆっくり寝て、ちゃんと休もう。それからまた明日集まれば、きつと良い事あるつて。あ、これは委員長命令つて事で！」

背伸びをしながらホシノは命令を下す。

実際問題、疲労が溜まっているのは事実だ。色々万全ではないから良い案がでないのかもしれない。一度家に帰り、英気を養えばこの

状況を切り開く方法を思いつく可能性はある。

勿論、希望的観測だ。明日になったらもつと状況が悪くなっている可能性だって考えられる。でも、今この場で考えても坂を転げ落ちるように言葉を重ねるしかないだろう。セリカとアヤネの言い合いのように。

互いの顔を見合わせ、疲れた表情に『お揃いだね』と苦笑いを浮かべながら、彼女達はホシノの意見に同意する。

「うへ、じゃあ皆、また明日ね」

そうして、この会議は解散することになった。

秘匿

「ん〜……シロコちゃんは何かまだやる事がある感じ?」

「うん……先輩、ちよつといい?」

対策委員会、部室。日は落ち、周囲が宵闇に包まれつつある頃合い。委員長が発令した帰宅命令により、皆は装備等の清掃を済ませた後に帰宅した。今この教室に残っているのはシロコとホシノだけだった。先生は学校内にいるが今は席を外している。

シロコに声を掛けられたホシノは銃の分解清掃を行っている最中であつたが、声が聞こえたら即座に手を止め、パイプ椅子に座っている彼女を見上げた。互いに感情が読めない視線。ちゃんと交わっている筈なのに、交錯していない印象を抱いてしまう。

「うへ〜、おじさんとお話したいことがあるの? 照れるな〜」

「——その話、私も同席させてくれないかな?」

ふわり、と夜の風が吹き抜けた。心地の良い声が聞こえた方に視線を向ければ、教室のドアを開けている先生がそこにはいて……いつも通りの、優しい笑みを浮べていた。

「ん? 先生も? うへ、おじさんモチモチだ〜」

そう言い、茶化すホシノ。彼女は銃を組み立て、細部のチェックを済ませると立ち上がってへにやり、と笑って見せた。彼女の繕った笑顔を視界に収めながら、シロコと先生は互いを見つめる。

「……先生」

「分かってるよ……全部、ね」

「……ん」

とても短いやり取り。それ以上の言葉は必要なかった。互いの意志の確認をたつた数秒足らずで済ませた2人を見て、ホシノは蚊帳の外に置かれた事に頬を膨らませながら告げる。

「先生、いつの間にかシロコちゃんとそんなに仲良くなったの? 先生も隅に於けないね〜」

明るい声音。空気を軟化させるような、ホシノの魅力の詰まった

声。だが、その声も何処かぎこちなかった。その事に、彼女自身は気付かないまま。

「でもさ、今日は疲れたし、色々な事があったじゃん？ 私もしろこちゃんもクタクタで、先生だってしんどいでしょ？ だから、また明日話そう？ 大体、どんな話かは分かっているから」

「……ん、分かった。じゃあ、また明日、この教室で」

「……うん、また……明日」

ホシノの言葉にシロコは僅かに目を伏せた後、頷いた。数多の感情を飲み干した声、また明日と言われたホシノは……とても言い辛そうに、同じ言葉を返す。まるで針を嚙下するような痛ましい声はシロコの耳を打ち、その哀しみをより大きなものにした。

そしてシロコは僅かに俯きながら、とぼとぼと教室のドアまで向かう。その寂しそうな背を見たホシノは思う所があったのか、躊躇いながらも手を伸ばそうとしたが……肘を曲げて控えめに伸ばされたホシノの小さな手はその背に届くことはなく、虚空を切る。

そしてホシノは手を下し、黙って俯いた。馬鹿だなあ、と自嘲して。

「……先生」

「ああ……」

シロコは教室を出る直前、ドアのほど近い距離にいた先生と視線を交錯させる。蒼ではない先生の瞳を久し振りに見るな、と思いながらアイコンタクト。言葉は不要だった。シロコの心情に寄り添うような、春の陽だまりの様な笑みを浮べた先生を見て安心した彼女は少し軽くなった足取りで教室を出た。

ドアが閉まるとホシノと先生の2人きりの空間が完成して、夜闇に包まれた静寂も相まって少しだけ官能的な雰囲気を作り出される。彼の服装……着崩し、普段よりも露出の多い恰好。外れている第一ボタン、そこから覗く鎖骨が妙に色気に溢れていて。ホシノは僅かに顔が赤くなるのを感じた。

そして、そんな自分を隠すようにおどけた口調で冗談っぽく口にする。

「うへへ、先生やるねえ？ 私の可愛いシロコちゃんといつの間に目

と目で意思疎通ができるようになってるなんてねえ」

「私はホシノともできると思うよ。ほら、目は口程に物を言う、なんて何処かの誰かが言っているだろう?」

「いやいや、そんな事は無いよ。やっぱり、先生は侮れない大人だな。おじさんは流れに付いていけなくてなんだか寂しいよ」

云い、首を横に振るホシノ。そんな彼女を見て、先生はやはり『違う』と感じた。無理をしている。隠している。普段通りを装っている。分かりやすいくらいだった。彼女の事は良く知っている。律動すら把握できてしまう。言葉一つ、視線一つ、息遣い一つで彼女の状態を判別できる。

——それほどもでに、彼女と絆を、想いを重ねた。

彼は意図的に雰囲気を実剣なものへと変えて、意を決して口を開く。

「ホシノ、聞いてもいいかな?」

「ん〜……何を?」

「退部届の話」

先生は懐から大事そうに封筒を取り出す。封筒の表紙には小鳥遊ホシノの名前と、所属委員会名、学校名と……そして、退部届とだけ書かれている。

「それって……」

続きの言葉は口から零れず、無言の空気が流れた。少しだけ驚いたような目で封筒を見つめていたホシノは、徐に口元を緩ませて、恥ずかしそうに頬を掻きながら視線を逸らした。

「うへ〜……いつの間に。これ、盗ったのはシロコちゃんだよね?」

「PMCから帰る道すがらに、皆に内緒でこっそりとね」

「……全く、シロコちゃんったら、幾ら何でも先輩の鞆を漁るのは駄目でしょう」

先生から差し出された、自身の意志だったものを受け取ったホシノは封を開けて中の紙面をまじまじと見る。黒のボールペンで綴った文字列、紛れもない自身の筆跡。紙面に走るインクを指先でなぞりながら、ホシノは寂しそうに呟いた。

「先生、きちんとシロコちゃんを叱っておいてよ〜？ あのままじゃ、とんでもない大悪党になっちゃってもおかしくないって〜」

「勿論。でもそれは追々ね。今はこの話の方が重要だ」

「そっかあ〜」

「この退部届……ホシノはアビドス対策委員会を抜けようとしている——その認識で相違はないかな？」

ホシノは先生の言葉に力なく頷いて、彼の方を見る。普段は彼を見上げているはずなのに、今は彼を見下ろす側に立っている。それが何とも可笑しくて笑いそうになるが、真剣そのものな彼の顔を見るとそんな気も失せてしまう。

ホシノは窓の方に視線を遣りながら、小さな声で呟く。

「うーん、逃がしてくれる訳……ないよね〜？」

「当然だよ。君を離す訳にはいかない」

そう言い、先生はホシノの手を握った。振り解こうと思えば簡単に解けてしまう優しい拘束。この場から逃げ出すことはとても簡単で、彼を押し退けるだけでいい。この手さえ離れば、覆せない身体能力差で以って振り切れば、言い難いことから逃避することができる。

「……はあ、仕方ないなあ」

ホシノは辟易とした、だが嬉しさが滲む声音で呟いた。彼の拘束に捉えられたままでもいいよう。彼の温度を感じたままでもいいよう。どうせ最後だ。それくらいの夢は見たい。彼女は息を漏らし、泣き笑いのような顔を浮べた。

「面と向かって話すのも何だし……先生、ちよつとその辺を一緒に歩かない？」

ドアの方まで歩いたホシノは振り返りながらそう云うが……直後、車椅子が目に入った。ああ、彼は今歩けないのだ。その事に気付いたホシノは、少しバツの悪そうな顔をして。

「あ、ごめん。やっぱ今の無しで。やっぱり……」

「気遣いありがとう。でも、大丈夫だよ」

そう言い、車椅子から立ち上がる先生。それに驚愕しながらも、慌てて彼を支えようとするが、ホシノのサポートは必要なかった。立ち

上がった直後は平衡感覚がおかしくなっていたのか僅かにふらついていたが、今はきちんと2つの足で立っている。少し左足に違和感を感じるのかつま先で床を叩くが、それも止めて、彼は笑ってホシノに声を掛けた。

「よし、じゃあ……散歩しながら話そうか、ホシノ」



夜の校舎は暗闇に包まれていた。明かりは窓から差し込む星と月の明かりだけで、電気はつけていない。ホシノは勝手知ったる様子で迷いなく進み、先生はその少女の後ろをついていく。

辿り着いたのは校舎裏のアビドス別館だった。木造の小規模の建築、ホシノとシロコの衝突があった場所。彼女は手慣れた所作で開錠し扉を開ける、確かに此処ならば万が一にも聞かれる可能性はないだろう。

「けほッ、けほッ……うわあ、もう砂だらけじゃーん……ま、仕方ないんだけどね。掃除をしようにも5人しかいないし、そもそも人数に対して建物が大きすぎて……」

出入り口に積もった砂は、今朝には存在しなかったものだ。恐らく老朽化により生じた隙間から入り込んだのである。砂を巻き上げないように、そつと足で払うと、校舎内へ足を一步踏み出した。軋む床に歓迎されながら、彼女達は建物の中を進んでいく。

「砂嵐が減ってくればいいんだけど、天災にそんなのは通用しないからね」

砂嵐はアビドス内では別に珍しいものではなかったが、段々と大きくなる被害規模を前にそうも言っていられなくなった。砂嵐を止めるために気象兵器に片足突っ込んだテクノロジーの研究を行ったり、様々なデータを収集したり。だが、それらは全て砂漠に消えた。

「うへへ、折角の高校生活が全部砂色だなんて、ちよつと遣る瀬無いと思わない？」

「……ホシノはこの学校が、この場所が本当に好きなんだね」

今まで聞いた声音の中でも一段と優しい音色に、ホシノは驚きながら後ろを振り返った。聖母の様な貞淑さと清廉さを兼ね備えた笑みを浮べる彼を見て……彼女はその表情は呆れを含んだものになった。「……今の話の流れで、本当にそう思う？ うへ、やっぱ先生は変な人だね」

「良く言われるよ。変とか、ずれているとか……私としては、思った事や所感を口に出しているだけなんだけどね」

苦笑いを浮べる彼が何とも人間臭くて、ホシノも同じように苦笑いを浮べる。

「……砂漠化が進む前、アビドスはかなり大きくて力のある学校だったって言われてるけど……そんな記憶も実感も、おじさんには全くなーいんだよね……最初から全部めちゃうちゃで、ちゃんとしたものなんて何一つない学校だった」

足を止めず、床が軋む音を伴奏に語るホシノ。前に進み続けた彼女は徐に立ち止まり、窓枠に積もる砂を払い……そこに腰掛けた。体の半分を外に出して月光を浴びる彼女は酷く美しい。目を奪われる、とはこの事だろう。

「おじさんが入学した時のアビドス本館は、今はもう砂漠の中に埋もれちゃったし。当時の先輩達だってもう皆いなくなっちゃった」

ちらり、とホシノは隣に立つ先生に視線を送る。自分よりも頭2つ分ほど高い彼は月を見つめていた。酷く、透明な視線。一瞬でも目を離すと消えてしまいそうな儚さ。でも、だからこそ……綺麗だと思っただ。例えるなら、雪月花。吸い込まれそうな彼の瞳を見ながら、ホシノは言葉を紡ぐ。

「今いる此処は、砂漠化を避けて何回も引越した結果辿り着いた、ただの別館。ま、此処に来てからシロコちゃんやノノミちゃん、アヤネちゃんにセリカちゃんと会えたから……」

今までの思い出を、走馬灯のように振り返ったホシノは。

「うん、やっぱ好きなのかもしれないな」

——酷く悲しそうに微笑んだ。

「先生はどう？ 此処、好きかな」

「勿論、好きだよ。ホシノ達が守ってきたこの場所が。これからも続いていくこの場所が。例え、この星の何処にも私の居場所が無くても、私を知る人が誰もいなくても……それでも、私はこの場所を愛し続けるよ」

「……そっか。先生にそう言っつて貰えるなら、嬉しい」

先生を見て微笑むホシノ。そして、彼女は覚悟を決めた様な表情を浮べる。

「……先生、正直に話すよ」

「……うん」

「私は2年前から変な奴等の提案を受けてた」

その声は、酷く冷ややかだった。

最後の嘘

陽が落ちてから1時間が経過した。僅かな茜の残滓すら消え去り、深い藍色が夜の色彩として周囲を染め上げる。空には月が浮かんでいた。十五夜の満月。古くから月は信仰の対象であった。ツクヨミ、アルテミス、セレネ、ディアーナ、マーニ。

当然、エジプト神話にも月神はいる。コンス、トート、ハトホル……。そして、ホルス。太陽神でありながら月神であるホルスは確かに天空神の名に相応しい。天空を統べる神とは主神であり、最も全能に近いのだから。

明日は十六夜だろう。満月から僅かに欠けた月。月は信仰の対象であると同時に、狂気の象徴だった。狂気を表す『ルナティック』の語源はラテン語の月であり、心理の変化と月は結び付けられることが多かった。満月に変身する狼男が良い例だろう。

他にも前述のアルテミスは、より詳細には三相女神の1つの側面であり、処女性と若さを表すアルテミス、豊穡と母を司るデメテルまたはペルセポネ、死を表すヘカテーの3つの姿があり、月の満ち欠けのように刻一刻と姿を変えていく。

兎にも角にも、月は信仰であり狂気であった。太陽が堕ちた闇を淡く照らす青褪めた光に、人々はそれらを見出した。

それは今でも変わらない。明かりがチープになった現代でも月明かりは特別であり、真昼の太陽や人工的な明かりとは異なる趣を与えてくれる。そうでなければ、『月が綺麗ですね』なんて言葉は生まれなかっただろう。

だから、この時間は特別であった。夜の校舎、自分達以外誰もいない静寂。まるで周囲の時間が止まったような空間の中に、2人の呼吸音だけが存在する。足を動かせば鳴る床の軋む音も、鈴虫が鳴く音も、風の音も、何故か遠のいている気がした。

ホシノは窓枠に腰掛けたまま夜空を見上げる。思えば、こうして夜に誰かといえるのは久し振りだ。いつも夜は一人で街のパトロールをしてそのまま朝を迎えていたから。

彼女はちらりと隣に視線を送る。ホシノが窓の外を見つめているのに対して、彼はいつの間にか反対方向……校舎の木造壁をぼうつと眺めていた。ガラスに背を預け、月を見ていた透明感を保ったまま。彼女は窓枠に乘せられた手を見つめる。自分のものよりも大きな手。優しく頭を撫でられた感触をよく覚えている。行かないでほしい、と握ってくれた優しさをよく覚えている。

ホシノは彼の手の甲に、そつと自身の手を重ねた。彼は少しだけ驚いたような顔をしたが、直ぐに微笑みを浮べて——ホシノの手が覆い被さる自身の手の向きを変える。先ほどまで彼の手の甲と彼女の掌が向かい合う形だったが、今は互いの掌同士が向かい合う形に。所謂、恋人繋ぎ。勿論彼とホシノは先生と生徒以上の関係ではないが、それでもこんな手の握り方をされると否が応でも意識してしまう。恐る恐る彼の手を握ると、同じように握り返してくれた。手のひらから伝わる彼の優しさと温度に背中を押されたように、ホシノは少しずつ語り始める。

「カイザーコーポレーション……提案というか、スカウトというか。アビドスに入学した直後からずっと、何回もね。そう云えばついこの間もあつたな〜」

先生の方を見る事なく、ホシノは淡々とした口調で己の秘密を明かしていく。持ち掛けられた取引はこの一連の出来事の全ての元凶たるカイザーコーポレーション近辺から。尤も、全ての元凶だと確信したのはつい最近であり、それまではホシノもきな臭いと思っていた程度だった。勿論、この背後関係を漁ろうと試みた事はあつたが有効な調査方法が思い浮かばず、事此処に至るまで放置してしまつた。無理をしてでも調べれば良かった、と思うが結局後の祭りだ。既に事態は一刻を争う段階まで進んでしまっている。

「アビドス高校を退学して、指定の企業に所属する。その条件さえ呑めば、アビドス高校が背負う借金の殆どを負担するって契約」

「……2年前、か」

「うん。そいつ等は私の体に10億近い価値を付けてる。誰から見たって破格の条件だったけど、でも当時は私がいなくなったらアビド

ス高校が崩壊するって思ってたから、ずっと断っていたけど……」

提示された内容はホシノの体。17歳のうら若き少女の体の全てを差し出せば、アビドスが背負う借金の殆どを負担する……人権やキヴオトスのルールを鼻で嗤うような巫山戯た取引だった。

彼女が高校に在籍している期間の殆どに、その勧誘話がついて回っている。彼女が入学した時、生徒会に在籍していた時、2年に上がり後輩ができた時、そして今に至るまで。そして、その悉くを断ってきた。

理由はやはり、唯一の年長者たるホシノが居なくなればアビドス対策委員会が纏まらないと思っただからだ。唯一の3年生として、アビドス存続に関して人一倍責任を感じているのだろう。或いは、見殺しにしてしまった夢物語への負い目か。

ホシノは彼と絡めた指先を解いたあと窓枠から降りて……振り返った先生の背中に自身の背中を預けながら続きを語る。決して、この顔が見られないように。今、これ以上優しくされてしまうと……本当に、泣いてしまいそうだから。

「アイツ等、PMCで使える人材を集めているみたい。何をするつもりか知らないけど、多分悪い事。カイザーPMCも、そいつ等と組んでいるはず。私も連中の正体は知らない……ただ、私は黒服って呼んでいる」

「――黒服」

先生がその名を口にしたときに浮べていた表情は……絶対に生徒に見せてはいけなさと断言できるほど、剣呑さと敵意に溢れていた。ベアトリーチェは見えた瞬間必ず殺すと決めているため例外であるが、黒服等の他のゲマトリアは然程憎んでいる訳ではない。故に利害が一致するなら協力関係を築くのもやぶさかでないし、その信条や誇りには一定の信頼を置いている。

だが、生徒に害を及ぼすなら話は別だ。探求の為に生徒を泣かせるならば彼は迷いなくゲマトリアの敵になる。ゲマトリアを殺すとはまではないかなくとも、その不愉快な目的は確実に御破算にするだろう。

この世界での対ゲマトリアへの方針を固めつつ、先生はホシノの続

きに耳を傾ける。

「何となくぞつとする奴で……キヴォトス広しと雖も、ああいうタイプの奴は見たことなかったし……怪しい奴だけど、別に特段問題を起こしたりはしなかった。何なんだろうね。あのカイザー理事ですら、黒服の事は恐れているように見えたけど……」

「じゃあ、この退部届は——」

先生がそう言うと、ホシノは「……うへ」と口癖を呟き……彼の正面へと躍り出た。その手にはポケットから取り出した退部届が握られていて、暗い光を灯した瞳で月明かりに照らされた紙面を眺めている。

「まあ、1mmも悩んでいなかったって云ったら嘘だし。ちよつとした気の迷いっていうか……うん、もう棄てちゃおうか」

言うや否や、ホシノは先生の前で退部届の紙を破り捨てた。無数の紙片となった退部届を掌の上に乗せ、外へと散らす。風に舞いながら夜空に消えていく紙を見つめながら、「うへへ、すつきりした」と彼女は満足そうに呟いた。

「余計な誤解を招いちゃってごめんね。ただ、こんな話を皆にしたところで、心配させるだけで良い事なんて何一つ無さそうだったからさ。でもまあ……可愛い後輩達にいつまでも隠し事をしたままっていうのも良くないし……明日、皆にちゃんと話すよ。聞かされたところで困らせちゃうだろうけど、隠し事なんてないに越したことはないだろうし。まあ、一種のけじめみたいなものだよな」

悪戯っぽく笑う彼女に、先生は同じように笑みを浮べて、頷いた。

「……実際、今はあの提案を受ける以外に他の方法は思い付いていないんだけどね。あんな大金、学生の私達にどうやって払えばいいのやら……」

「——大丈夫。大丈夫だから」

言い淀んだ彼女を否定するように、彼は力強く、優しく断言する。膝立ちになった彼、合わせられた視線の高さ。吸い込まれそうな瞳には、全てを抱擁する宇宙のような色彩が覗いて……そこに映る自身が酷い顔をしていることに今更気付いた。

彼はまるで幼子をあやす様にホシノをゆつくりと抱きしめた。何度も「大丈夫だから」と耳元で優しく呟く彼と、抱きしめられる自分。それを、何処か他人事のように感じていた。

彼は自分を許していない。自分を誰よりも憎み、自分に誰よりも怒っている。非常時に銃一つ満足に握らない己を、無力極まる己を、世界すら救えなかった己を……誰よりも許していない。

彼は傷ついている。心も体も、この世界に住む誰よりも傷ついている。痛くて、辛くて、泣き叫んでもいいのに……それを選択せず、誰かの傷に寄り添い、癒すことを選んでいる。

彼の原点を、ホシノは詳しく知らない。だが、その歩みは傷と痛みに彩られている事は分かってしまった。そして、この道の果てで彼が救われない事も。

それなのに……何故。

「必ずなんとかなるから……信じて」

誰を信じればいいのか。何を信じればいいのか。アビドスか？

先生か？ それとも、己自身？ 世界にでも縋ればいいのか？ 或いは――。

「……そうだね、奇跡でも起きてくれたら良いのだけれど」

呟き、ホシノは己を嘲った。

奇跡なんて起きない。この世界が厳しい事なんて随分昔に学んだ。現実には驚く程正しい者が身を削るようになってきている。善は小賢しい悪を前に蹂躪されるしかないのだ。アビドスがカイザーに絞り殺されそうになっている今、それに否を唱えることは許さない。それに……誰よりも正しく、善性と優しさに満ちている彼が傷だらけなのだ。奇跡は起きないし、現実には正しさを糧に成り立っているのは疑いようのない真理だろう。

でも、今はそんな子ども染みた願望に縋るしかないのだ。たった漢字2文字の言葉が重く押し掛かる。

「奇跡、かあ……」

謔言のように呟く。息をすると花の香り……彼の香りが頭の中で弾けて、消えて。ああ、昔もこうやって抱きしめられた。大きくて、暑

苦しくて、鬱陶しくて——でも、とても暖かくて。

「さて、湿っぽい話はこれでお終い！」

彼の抱擁から脱出したホシノは手を鳴らし、全ての感情を呑み込んだ。

これ以上は涙を堪えられる気がしなかった。みつともなく彼の胸の中で泣きたくはなかった。だって……。

「じゃあ、私も帰るから……おやすみ、先生！　また明日！」

明るい声でそう告げて、来た道を引き返す。

足取りは軽やかに。一番綺麗な自分を最後に見てほしいから。

そうして、彼女は振り返って。

「さよならー！」

花が咲いたような笑顔で、別れを告げた。

「——ホシノ」

だけど、まだこの別れは終わらず。

振り返った彼女の視界に入ったのは、シリウスに照らされた先生の顔。彼は、ホシノの心に届く様に——その胸を焦がす思いを叫んだ。

「ホシノがその身を捧げなくていい。自己犠牲なんて必要ない。私が何とかする。絶対に奪わせないから……。」

——いいや、そんな言葉を伝えたい訳ではない。もつと、心の奥。己の本音を今にも泣きそうな彼女へと送った。

「私が、君を守るから」

先生は、この世界の異物であった。

先生は、よく分からない人であった。

先生は、ホシノの知る大人とは違った。

先生は……誰よりも、『先生』であった。

「……うん」

その声に、ホシノは心の底から安心したような笑みを零して。

「ありがとう、先生」

——ねえ、ユメ先輩。私、ちゃんと笑えてるかな？

▼
アビドス対策委員会の皆へ

まずは、こうやって手紙でお別れの挨拶をする事になったこと、許して欲しい。おじさんにはこういう、古いやり方が性にあっていてさ。

皆には、ずっと話していなかった事があって——実は私、昔からずっとスカウトを受けていたんだ。カイザーPMCの傭兵として働く、その代わりにアビドスが背負っている借金の大半を肩代わりする……そういう話でね？

うへへ、中々良い条件だと思わない？ おじさんこう見えて、実は結構能力を買われていてさく、凄いでしょ？

借金の事は、私がどうにかする。直ぐに全部を解決は出来ないけれど、まずはこれでそれなりに負担が減ると思う。ブラックマーケットでは急に生意気なことを云っちゃったけれど、あの言葉を私が守れなくてごめんね。

でも、これで対策委員会も少しは楽になる筈だから。

アビドス高校からも、キヴォトスからも離れる事になったけれど、私の事は気にしないで——勝手な事をしてごめんね。

でもこれは全部、私が責任を取るべき事……私は、アビドス最後の生徒会だから。

だから、此処でお別れ。

じゃあね。

先生へ

実は私、大人が大嫌いだった、あんまり信じてなかった。

シロコちゃんが先生をおんぶして来たあの時だって、なんか駄目な大人が来たなって思ったくらいだし？

でも、先生みたいな大人と最後に出会えて、私は……いや、照れくさい言葉はもう良いよね。

先生、最後に我儘を云って悪いんだけど、お願い。シロコちゃん

は良い子だけれど、横で誰かが支えていないと、どうなっちゃうか分からない子だから、悪い道に逸れちゃったりしないように、支えてあげて欲しい。

先生なら、きっと大丈夫だと思うから。

シロコちゃん、ノノミちゃん、アヤネちゃん、セリカちゃん

お願い、私達の学校を守って欲しい。砂だらけのこんな場所だけだ……私に残された、唯一意味のある場所だから。

それから、もしこの先どこかで万が一、敵として相対する事になったら……。

その時は、私のヘイローを壊して。

——よろしくね。

アビドス高校、対策委員会部室。朝の雲雀も鳴かぬころ、先生はその場所に佇んでいた。テーブルに置かれた退部届と、仲間達、先生に宛てられた手紙。

「——行かせる訳、ないだろ」

それは、彼女を引き留める声だった。優しく、真剣で、芯の通った——数多の決意を含んだ、彼女の為だけに発せられた声。

「アロナ、生徒に連絡を」

『はい！ 分かりました！』

「あと、クラフトチェンバー、テイラーメイドの13番……天命の起動準備」

その宣誓にアロナは息を呑んだ。クラフトチェンバーの13番、概念武装の起動準備をすると言う事は——始まるのだ。世界を救う聖戦が。

だが、アロナは迷わない。彼の為に、世界を救うための術を準備する。

「行く……私は、もう決して立ち止まらない。二度と手を離さない」

その道中が地獄でも。

その果てが虚無でも。

それでも——あの日、零れ落ちたものを取り戻すために此処に
来たのだ。

「私の全ては、皆きみを守り抜くために」

そのために生きると——決めたのだ。

ホシに届かなくて

「遠い、戻れない過去を思い出す。

「じゃーん！ 見て、ホシノちゃん！」

「……何ですか、その紙切れ」

ホシノの鋭く冷たい声音、欠片も友好的に感じない鋭利さ。何かに憑かれているような、強迫観念と焦りと不安、何処にも向けられない怒りと苛立ちに満ちた——ホルスの眼。

戦闘行為に邪魔にならないように短く切られた桃色の髪、ミリタリージャケット。それは暁のホルスと呼ばれた彼女の全盛期の姿だった。

キヴオトス最強クラスの彼女に真つ向から睨まれたその少女は『よくぞ聞いてくれました！』と言わんばかりの顔をして。

「アビドス砂祭りの昔のポスター！ やつと手に入れたんだ！」

ホシノは何処までも能天気な少女に苛立ちを覚えながら、件の紙切れを見ると、確かにそれはポスターだった。経年劣化で色褪せ、少々汚れているが祭りの告知を行う賑やかな色彩が彼女の目に飛び込んできく。日付は随分前のものだった。このポスターだけ、今日の前にいる少女だけ時間が止まっている。昔の繁栄を見ている。今の衰退を見ていない。未来の滅びを——分かっていない。

「この時はまだオアシスが湖みたいに広がってたんだよねー。どんな感じだったのかな？ きつと綺麗だと思うんだよねー……あ、このポスターは記念にあげるね！」

少女から差し出された紙切れをホシノは心底鬱陶しそうな、面倒そうな顔をして見つめる。彼女にとっては……否、目の前にいる頭がお花畑の少女以外にとって、このポスターはゴミ以外の何ものでもない。過去の栄光があっても今が救われる事がない。昔は昔で今は今だ。地続きであるが故に、過ぎ去った時間は現在に干渉できない。

だから、今このポスターがあっても昔のように祭りが開かれる事は無いし、元よりそんな無駄を行う余裕も時間もないだろう。

「えへへ、すつごく素敵でしょー！　もし何か奇跡が起きたら、またこの頃みたいになが山集って——」

「奇跡なんて起きっこないですよ、先輩。それよりも現実を見てくださいー！」

そうだ。奇跡なんて起きない。夢なんて見るべきじゃない。夢なんて見ても、目が覚めたら酷薄な現実が嘲笑っているだろう。

一時、救われて。結局少し後に傘増しされて返されるのなら、そういうインスタントな安らぎは不要だ。そこに縋り落ちていくのなら、自身の心臓に銃口を突き付ける方が望みがある。

畢竟、夢と現、そのギャップに辛くなるだけ。それだったら、初めから夢なんて見ない方が良い。救われない現実に安堵した方が良い。

「こんな砂漠のド真ん中に、大勢の人が来るわけないでしょう!?　もうアビドスにそんな力は残っていないんです！　夢物語もいい加減にしてくださいー！」

「うええ、だって、ホシノちゃん……ご、ごめんね……?」
「……ッ！」

その少女の顔、申し訳なさど下手糞な愛想笑いが相混ぜになった表情を見て、ホシノの怒りが臨界を迎える。

差し出された紙切れを半ばひったくるように奪いとれば、少女は驚いた顔をして。

「そうやってふわふわと、奇跡だの幸せだの何だの……」

ホシノはもう、自身の意志で口から零れる言葉を止める事ができなかった。誰かの所為でない事は分かっている。運が悪かっただけで、天災に対する明確な責任者がいるわけではない。怒っても泣いても、この状況は好転しない……ああ、そんな事はよく知っている。

でも、だからと云って、この誰にも向けられない怒りと苛立ちを自分の中に留めておく事なんてできなかった。

「もつとしっかりしてください！　貴女はアビドスの生徒会長なんですよ!?　もう少し、その肩に乗った責任を自覚したらどうなんですか！」

そう言い放ち、ホシノは少女から奪った過ぎ去りし日の思い出を破

り捨てた。



最初見たときは、『信用できない』と思った。鳴り物入りで現れたシャーレの先生、赴任して1ヶ月も経っていないのにその噂はとても良く耳にする。キヴォトスの喧騒から距離を置くアビドスでもこれなのだ。シャーレの拠点があるシラトリは、それはもう大層な事になっっているのは想像に難くなかった。

キヴォトス外部の大人の男。とは言ってもヘイローの有無や身体能力しか違いはなく、キヴォトスに住まう住民達と大きく変わることはない。年も生徒と大きく離れておらず、確かに先生という役割に適任に思える。生徒を大人へ導く者、子どもの健やかな成長を願い、その発展を手助けする存在。教え、導き、共に笑い、共に歩いていく誰か。

赴任初日から事件に巻き込まれ、その鮮やかな手腕で解決に導いたその姿はニュースで何度も耳にした。そして、連邦捜査部シャーレの役割も。曰く、キヴォトスの何でも屋。お願い事の為に東奔西走する、悪く言ってしまうえば他人の都合で貧乏くじを引かされる仕事。生徒を含むキヴォトスの住民が『自分達の手に負えない』と思った時に駆け込むセーフティの様な、体のいい願望機のような、或いは無責任に祈られる流れ星は、確かにキヴォトスの需要にマッチしている。銃撃が絶えない賑やかな場所だ、そういつたバランス的な役割は必須だろう。特に、連邦生徒会が機能不全に陥った今では。

勿論、その前後関係は気になる。連邦生徒会長が失踪したから先生が現れたのか、先生が現れたから連邦生徒会長が失踪したのか。この因果は非常に重要だ。結果が同じでも、過程が異なれば意味が違う。だから、一度思い切って聞いてみた。連邦生徒会長と会ったことがあるのか、と。そうしたら、彼は。

——実は、会ったことがないんだ。不思議だよね。

と、笑って答えた。会った事もない人間にシャーレと謂う超法規的

組織を任せる連邦生徒会長の頭は大丈夫なのか、とか、知らない誰かの頼みを引き受ける先生にもどうかと思ったりしたが……その類の軽口は口から零れる事が無かった。

彼の表情。決して手の届かない星に思いを馳せるような顔。戻らない憧憬を悼む顔。果ての無い郷愁に身を焦がす顔。

だが、それよりも強かったのは『会いたい』という感情だった。一目でもいい、一瞬だけでもいい。例え会えなくても使っただけでもいいや、それすらいらぬ。生きていけばそれでいい。笑っていても、泣いていても。どんな姿でも、どんな思いを抱えていても、何処かの空の下で息を吸って吐いていけばそれでいい。君の愛した場所はちゃんと守るから、いつでも帰ってきていいんだよ——愛、と呼ぶには歪で。恋、と呼ぶには重くて。

だが、それでも純粋な感情だった。純度が高すぎて狂気すら感じてしまう。良く言えば平等な、悪く言えばフラットな感情を生徒達に向ける彼。誰もが特別であるから、誰もが特別ではない。平等に、フラットに、差が出ないように扱う。誰でも愛する代わりに誰も愛さない。

そんな彼の特別……それが連邦生徒会長なのだ。恐らく、彼の中では連邦生徒会長は生徒ではない。もっと別の……複雑な間柄。それを、少し羨ましいと思ってしまった。代われるのなら代わってみたい。先生の特別を体験してみたかった。

でも、そんな夢物語は叶わない。今から彼を裏切るのだから。彼だけではない。全ての仲間を、全ての過去をこれから裏切る。

「ごめんなさい……」

だって、仕方がないだろう。あんな馬鹿げた金額を吹っ掛けられても返済の目途なんて立つわけがない。何もできずに、愛したアビドスがカイザーの物になる光景を唇を噛んで見ているしかない。

でも、それを覆せる一手をホシノは持っていた。カイザーではない者との取引。ゲマトリア、と呼ばれる異形の神秘探求集団はキヴオトス最強クラスの神秘を持つホシノを欲していた。つい先日までは取引に応じるつもりはなかったが、事情が変わった。今では『こんな私

の体で満足するなら喜んで』とそれなりに前向きになっている。

もう見ていられなかったのだ。敵わない現実に打ちのめされるアビドスが。もう頑張った。充分すぎるくらい頑張った。大切な高校生の時期の大部分を借金返済に費やして、細やかな幸せを噛み締める彼女達から更に奪うなんて認められるはずがなかった。この世に神様なんて存在がいるなら蜂の巣にしなければ気が済まない程に。

それに、先生の事も。もう彼に合わせる顔がないのだ。

特権階級に足を踏み入れた神意の代行者を見てほしい、と黒服に云われた。

崇高なる代行者と見たのか、とカイザー理事に云われた。

そして、ホシノが黒服と会談しているときにアビドスと便利屋、風紀委員が相對した訳の分からない謎の存在。

ここまでヒントが出たなら分かってしまう。ことのあらましを、話の大筋を理解してしまっている。空気が読めない、と白けるぐらい残酷に見えてしまつて嫌になりそう。

アビドスの仲間達が戦い、撃退した神の知識ザフキエルと呼ばれる何か。それが、黒服が用意し、ホシノに見せたかった神意の代行者なる存在なのだ。

だが、黒服の目論見通りにはならなかった。ホシノは神意の代行者と戦う事はおろか、目にするにとすらなく、今に至っている。そう——本来ならばホシノと相對するはずだった代行者は、どんな理由か不明だが先生を標的にして……そして、あの傷を負わせた。

もう言い逃れはできない。自身ホシノが彼を傷つけたも同然だ。例え間接的であろうが関係ない。彼女が相手をするはずだった敵を彼に押し付け、その果てに彼に消えない傷を負わせてしまった。そして、その場に立ち会う事すらできなかった。

頭で考えていた最悪の可能性が現実だと突き付けられたその時、ホシノの心の柔い部分が折れた。ずっと引き摺っていた別れと合わせて、ホシノの心はもう立ち直れない領域に行ってしまった。

だから、彼女は今この場にいる。

肌を突き刺すような鋭い風は、断頭台に吹き荒ぶ刃。摩天楼を見上

げて、誰も来ない現実に安堵する。

そして、ホシノは死に逝く為の一步を踏み出した。

シロコ、ノノミ、セリカ、アヤネ……大切な後輩たち。昼行灯の自分に良くついて来てくれた事に感謝が絶えない。何処に出しても恥ずかしくないどころか、胸を張って自慢できる仲間達だ。彼女達の重荷を僅かでも減らせるのなら、愚かにも時ばかりを重ねた己の身にも価値があったと思える。

「ユメ先輩……ごめんね。私が死んでも、そっちには行けないや」

帰れない、戻れない場所まで旅立ってしまった大切な先輩。彼女の意志は決して途絶えない。ホシノが引き継ぎ、アビドス対策委員会の4人に継承したのだ。彼女はきつと、この先も続く。守りたかったアビドスはちゃんと誰かが守り続けてくれる。

「先生……」

最後に、陽だまりに笑う彼を呟く。色々と迷惑をかけてしまった。信用せず、身勝手な同族嫌悪に身を焦がした。大切な仲間にかんた穏な事をしようとしたら、その場で即座に撃ち殺す腹積もりだった。色々と察しが良く、規格外の思考を持つ彼の事だ、きつとその魂胆も見抜いていただろう。彼はその上で、同じように接してくれた。変に特別扱いせず、他の誰かと同じように。それは『死にたくないから』なんて自己防衛ではなく、彼が心から生徒を愛しているからだろう。

不撓不屈の精神を持ち、誰かの為に前へ進み続ける彼を悼んだ。傷だらけで、血を吐きながら、それでも誰かの為に。自分の命より大切なものを見つけてしまったばかりに、当たり前の機能である『停止』を失ってしまった彼を哀れんだ。

生徒を大切だと、ホシノが大切だと叫んだ彼に……何を感じたのか。それは今でも分からない。彼の傷が自分の物のように痛んだ。彼の笑顔に喜んだ。彼の悲しみに哀しんだ。彼の怒りに震えた。彼と過ごす時間を大切に感じた。彼の姿を自然と目で追った。孤独を歩む彼の隣に立ちたいと思った。

名前のない、自身の胎から生まれた想い。言葉にできず、伝えられない事に謝罪をする。

だってそうだろう？ 間接的とは言え、彼を傷つけたのだ。そんな生徒がこれ以上彼と共にいる事なんてできない。何も言わず……とはいかなかったが、多くを語らずこの結末に辿り着けた幸運に感謝する。

誰かを傷つけ、失い、消費してきたこの身。守られてばかりで、取り零してばかり。そんな歩みに終止符を打てる。誰かの為になりながら、この呼吸を停止できる。

これこそが、小鳥遊ホシノに与えられた最大の成果だ。

勿論、思う所はある。悔いも心残りもあるが……きつと大丈夫だ。何せ、今のアビドスには先生がいる。道を外しても彼ならば正してくれるだろう。頼んでばかりで申し訳ないが、可愛い生徒の最期の頼みだから、寛容な心で受け入れてほしい。

「……」

ホシノは最後のアビドスを目に焼き付けてから、己の道にピリオドを打つ棺桶たるビルに足を踏み入れる。

——もう、戻れない。

星（きみ）を離さない

全面ガラス張りのエントランス。床の材質は大理石。人影一つない無人のロビーを素通りして、ホシノはエレベーターホールに足を踏み入れた。ボタンに手を翳すと、1階に駐留していた機体のドアが開いた。まるで怪物の口。トンネルを異界の入り口と見做した人の気持ち分かる気がする。

息を1つ吐いて、ホシノはエレベーターに乗り込む。そして最上階のフロアを指定すると、僅かな振動すら無く上昇を開始した。ガラスになっている背面から見えるキヴオトスの朝焼けは酷く美しい。暁に呑まれる地平線、生命の息吹たる光に照らされる世界。ああ、自分がこんな風になっても世界は変わらないんだね———と違って、自嘲する。

そうだ。世界は残酷なほど変わらない。誰が死んでも、誰が生きても陽は昇るし夜は来る。ユメ先輩が居なくなつた後も、それは変わらなかつた。だから、ホシノが居なくなつても……きつと、今日も明日も、世界はちゃんと廻っていく。

それが———今はちよつとだけ嬉しかった。



「くくっ……お待ちしておりましたよ、ホシノさん」

「……」

フロアが丸々1つの部屋として使われている場所、そこにポツンと置いてあるデスクからは男の声が聞こえた。黒いスーツを纏う異形のヒトガタ———ゲマトリアが一角、黒服。

彼はいつも通り、デスクに両肘を突きながらホシノを見ていた。亀裂の入ったフェイス、発光箇所のような右目。後頭部から立ち昇る黒い靄のような何か。相変わらず、不気味だった。

「どうやら、契約についてご一考を頂けた様子で……ええ、嬉しいですよ、ホシノさん」

このフロアに入ってから一回も口を開いていないのにも関わらずホシノの内心を見透かしたような言葉を口にする黒服に、彼女は苛立ちを隠そうともせず舌打ちをした。だが、そんな事では黒服の余裕は崩せず、伽藍洞の瞳を細めながら愉快そうに喉を鳴らしている。

「貴女が何を理由にこの選択をしたのか気になる所ですが……義務感でしょうか？ 後悔でしょうか？ それとも——」

「御託はいい。早く契約書を出して。私の気が変わる前に」
「クツクツクツ……そう慌てずとも」

何がそんなに楽しいのか、とホシノは笑い声を漏らす黒服に嫌悪の視線を向ける。だが、その視線を意にも介さず、黒服はゆったりとした所作でデスクの引き出しを開けて……バインダーを1つ取り出した。

「どうやら貴女は大きな後悔を抱えているようですね。彼に関して」
「……だったら、何」

「ええ、貴女の後悔は無用です。彼もきつと望んでいないでしょう」
「ッ！ お前に何が——」
「では、貴女に何が分かるのですか？」

沸騰しそうだった脳が、冷水を浴びせられたみたいに一瞬で冷えた。目の前には、空っぽの瞳を向ける異形。キヴォトスに存在しなかったはずの者。

「勿論、私も彼について多くを知りません。何度もコンタクトを試みています。全て袖にされていますからね。ですが、それは貴女も同じでしょう。ホシノさんは、彼について何を知っているのですか？」
「……ッ」

その問いに、ホシノは即答できなかつた。何を知っている？ 彼の本質を、彼の心を。どんなに大切に思っている？ 所詮は他人同士。多くの時間を重ねたわけではない。それなのに、何が分かるんだ？ 「神ザフキエルの知識エルに関しては私の不手際でした。我々のメンバーが細工をしていた事に気付かなかつた私の無能を責める権利を、彼は保有しています。勿論、彼だけではありません。あの場にいた全ての方々もです。ですが、ホシノさんはあの場にいなかった」

内心でずっと思っていた事だった。ずっと責め続けてきた事だった。大事な時に居なかつた役立たずと、何度この身を呪った事か。

その呪いを、ホシノの癒えない傷口を切開される——それだけで、吐きそうだった。泣きそうだった。過呼吸になって、目の焦点が合わなくなつて。

「遠い世界の話には関われません。何処かで誰かに不幸があつても、貴女はそれに対して心を痛めてはいけません。意味のない感傷は貴女の世界を否定する事に繋がります」

お前は部外者なのだ、お前には関係ない話だと突き付けられる。感傷では救えない。涙で人の傷は癒えない。悲しみで死は覆らない。そんな後悔を抱くなら最初から事を起こしておくべきだった。その場になかつたなら、そんな感情を抱くことすら許されない。

とても、当たり前の話。口にするまでもない世の摂理だ。関係のない人間、反対をしない人間はそれだけであらゆる不幸を肯定しているのだから。

「——と、無駄話が過ぎましたね。では、此方が契約書です。良く内容を吟味した上で、サインをお願いします」

その言葉を聞いて、ホシノは滲む視界とふらつく足取りでデスクまで向かう。黒服から差し出された紙とペンを受け取り、紙面に視線を送る。

何度も勧誘はされたが、基本は突っ撥ねるばかりで、こうして契約内容の詳細を知るのは今回が初めてだった。紙面に綴られていた文句は彼が口にしていた内容と相違はなく、紙というインターフェースに合わせた角ばつた、一読しただけでは理解しにくい文面になっているだけ。

「……生徒としての全権利を譲渡、ね」

「ええ。ホシノさんが保有している肉体、精神、神秘……その全てを私に譲渡していただきます」

「つまり、奴隷って事ね」

「その認識で相違ありません。この書面にサインをした瞬間、ホシノさんの全ては私のモノになります」

「ふーん……」

ホシノは一瞥すらせず、紙面に視線を走らせる。

「私は契約を決して偽りません。例えば、守る価値の無い口約束であろうとも、一度結んだ契約は決して反故にしません。そして、契約内容に関して偽装も隠蔽もしません。疑問には真摯に答えます」

「……そう。律儀なんだね」

酷く平坦な声で答えたホシノは、既に紙面に綴られた契約内容を読み終えていた。

聞かされていた内容と相違はない。ホシノに関する全てを引き渡す代わりに、アビドスが背負う借金の9割を黒服が負担する。その金額は約9億。

こんな未熟な女の肉にそこまでの金額が付けられた事が不思議でならなかった。戦闘能力を買われたのか。神秘に目を付けたのか。それとも、子どもでも孕ませるつもりだろうか。

もしこれらの理由だとしたら……いや、どんな理由でも己にそんな価値は無い。黒服の目は節穴だ。だが、高く買ってくれるのならそれに越した事はない。クーリングオフなんて受け付けないから、精々高い買い物だったと後悔してくれればいいだろう。

ホシノは手渡されたペンを握る。この先、己の意志は無い。碌な未来は訪れないだろう。文字通りの奴隷だ。自由も安息もなく、唯命令に従うだけの機構に成り下がる。殺し殺され、その果てで凄惨な死体になるだろう。

でも、それでも――。

「……最終確認だ。これにサインをすれば――」

「ええ。記載されている金額分、私がアビドスの借金を負担しましょう」

ホシノの昏く沈んだ瞳と、黒服の目が交錯する。

そして、その果てで。

「……分かった。その契約を結ぶよ」

ホシノは、己の全てを差し出した。己の全てを対価に、アビドスを守ろう。彼女達の先を守ろう。

深呼吸を数度して、ペンを今一度握り締める。訪れる先が怖くて指先が震えるが、それを何とか抑え込んで己の名前を綴っていく。

あと、5文字。

この選択を最期に、小鳥遊ホシノという昼行灯で、怠け者で……でも、誰よりもアビドスを愛し、後輩を愛した少女は消える。

あと、4文字。

これでアビドスは守られる。これ以上後輩が苦しまなくて済む。借金はまだ残っているが、かなり楽になるだろう。今までバイトに充てていた時間を他の事に使えるようになる。

あと、3文字。

色々と心配なことはある。でも、きつと大丈夫だ。世界は残酷でも、そこに住まう人の善性はまだ信じていられる。

あと、2文字。

思い浮かぶのはアビドスの仲間達。ノノミ、シロコ、セリカ、アヤネ。こんな先輩に付いて来てくれたことに感謝しかない。確かに駆け抜けた日々は苦しかったけど、やらない方が良かったなんて一度も思わなかった。辛すぎて笑っていた、楽しくて泣いていた日々——
—その全てに、終止符を。

あと、1文字。

最期に思い浮かんだのは先生だった。大嫌いだったはずの、信頼できる不思議な人。暖かくて、優しくて、魅力に溢れた大人。彼と関わった時間は決して長くないけど、それでも正しく夢の様な日々だった。その日々の続き、自分が居ない事に思う所はあるが……後悔はない。これこそが、小鳥遊ホシノの最大の成果だ。

これで、終わり——。

「——そこまでだ」

声が、響いた。暁を切り裂く真昼の太陽。夜明けを告げる静かな足音。あまねく悲劇を、涙を浄化する意志。

だれか皆が望み、焦がれた——救世主。

「やあ、ホシノ」

「せ、先生……な、何で……」

振り返ったホシノの心は『何故』の一念が埋め尽くしていた。何も言っていないはずだ。誰も知らないはずだ。それなのに、彼は此処にいる。白の連邦生徒会の制服に、白のロングコート、青い腕章。普段と変わらない彼だった。

「何でって……ああ、そうだね」

彼はホシノの疑問に答えるため、フロアの中央まで乱れなく進む。まるで散歩に向かうような軽い足取りで彼女の隣に立つと……空が晴れるような笑顔と声音で。

「まだ、一緒に水族館に行っていないだろうか？」

—— たった、それだけの理由。一緒にブラックマーケットに足を運んだあの日に結んだ口約束。精々『楽しそうだから行きたいな』程度にしか思っていないくて、今彼が口にするまで忘れていた言葉。それを大切に覚えてくれていた。

—— それが、何よりも嬉しくて。

そんなホシノを、先生は本当に優しい眼差しで眺めていたが……黒服に瞳を移動させた次の瞬間、陽だまりの様な視線が切り替わった。冷たい、と呼ぶことすら烏澁がましい瞳。絶対零度に等しい、熱と冷たいものを一切感じない悍ましい温度。常人なら声帯が凍てつく視線が黒服を射貫く。しかし、黒服は一層笑みを深くするばかりだった。

「さて……初めまして、と言った方がいいのかな——黒服」

「ククツ……今更言葉など——私と貴方の仲でしょう、先生」

初対面の宿敵が、会合した。



「とは言っても、何度もコンタクトを試みているので、初めましてではありませんね」

「ああ、そうだね。熱烈なラブコールありがとう、しつこい男は嫌われるよっ。」

「ええ、品が無い真似という事は認めています。ですが、私は貴方にど

うしても会いたかったのですよ。まるでオム・フアタール運命の男だ。勿論、私達にとつただけではなく、生徒にとつてもですが」

「人を誑かしてみたいに云うのは止めてほしいな」

心底楽しそうな黒服とは対照的に、先生の口調は淡々としていた。だが、それは興味が無いから自然とそうなっている訳ではない。その内に秘めた激情が大きすぎて逆に冷静になっていくだけだ。

「さて……貴方はこの契約を破棄しに来た、という事ですか？」

「まだ結んでもない契約を破棄だなんて、巫山戯たことを囁るね。でも、概ね正解だよ。私はホシノを連れ戻しに来た」

「それはそれは……なんとも、正しい大人らしい理由で」

「当然だ。私はこの子の先生で、この子は私の大事な生徒。この子の未来を、心を、希望を守ることが、大人の責任だ」

先生が『先生』たる理由を聞いた黒服は僅かに目を細めた。

「大人の責任……成程、それが貴方のスタンスですか。ええ、理解しました。その考えが、私達と異なることも。ですが、それを理由に貴方をどうこうするつもりはありません。先生……私達は共に歩めます。我々は同胞に成り得る存在です」

「同胞、か……」

「ええ、同胞です。勿論、種としての同胞ではありません。貴方は既に他の全ての命と異なります。この世界を隈なく探しても、貴方の孤独を癒す者は、貴方が同じ生き物として安堵を抱く誰かは存在しないでしょう」

チエアから立ち上がった黒服は勿体ぶった動作で両手を広げた。狂気に狂喜する、黒の狂気。それを、先生は面倒そうな視線で見つめる。

「ですが、同じ方向を向いていれば同胞と言えるでしょう。貴方の能力、素質、才能、努力、性格、信条、理念、運命……ああ、素晴らしい。想像以上、予想以上です。その素晴らしさに、崇高に納得はできません。ですが……理解ができない」

「貴方は崇高の器だ。救世主だ。悉くをその手で救える神の子だ。全

てを抱擁する黄昏だ。世界をその手にする資格がある覇者の王冠だ。それなのに、貴方は何故先生などという役割を背負っているのですか。キヴオトスに來られた日、サンクトウムタワーの全権限を手に入れた時もそうです。貴方はこの都市を統べる絶対者として君臨する事が出来たはずです。いえ、貴方は今でも指先一つでキヴオトスを手中に収められる。それだけの、あらゆる力を持っている」

「それだけの力。世界を意のままにするだけの何か。それを、持っているのに。」

「何故……貴方はそうしない？」

心底理解不能だと、黒服は目の前の純白を見つめた。

先を生きる

暁で立ち止まる世界。眠りから覚めるにはまだ早い時間、夢の中、キヴオトス外部から現れた未知の変数達は向き合っていた。

「何故、か」

彼は口遊むように、そう言葉を紡いだ。

「それが、私の望む未来ではないから」

「ほう……では、貴方の望みとは何ですか？」

「彼女達を教え、導き、寄り添うこと」

余りにも『自分』が無い理由だった。他人の為に人生を捧げている、と言っているようなものだった。しかも、それを自身の至上としている。自分の為に生きるよりもそちらの方が良い、と。

「クク……ならば、貴方にとって我々は——」

「ああ、よく分かっているじゃないか……貴方達はホシノ達を騙し、心を踏み躪り、その苦しみを利用した」

「ええ、確かに仰る通りです。私達は他人の不幸を用いて、自らの利益を得ました。それは否定しません。私達の行動は善か悪かと問われれば、きつと悪でしょう」

黒服は芝居染みた大げさな身振りで、その両手を広げる。

「しかし、ルールの範疇です」

その割れたような瞳が細められた。真っ直ぐに射貫くのは、目の前の純白、他人を殺傷できる程恐ろしく澄み渡ったクリアホワイト。

「そこは誤解しないでいただきたいです。アビドスに降りかかった災難は私達の所為ではありません。アビドスを襲うあの砂嵐は、大変珍しい事とはいえ一定の確率で起こり得る現象です。誰か明確な悪役がいる訳ではない、天変地異とはそういうものでしょう。私達はあくまで、その機会を利用しただけ」

そう、この件の始まりはカイザーが、黒服が悪いわけではない。誰も悪くない自然災害が発生したのが事の発端だ。それ自体は先生も、ホシノも否定しない。

先生が気に食わないのは——助けを求める手を踏みつけた、そ

の性根だ。

「砂漠の中、脱水症状で死に逝く者に水を提供する。ただし、一生奴隷として働いても返済できない額で。ただそれだけのことです。さして珍しくもない、世の中にはありふれた話でしょう。何も私達が特別心を痛め、全ての責任を取るべき事ではありません。私達が初めて作った事例でもなければ、私達がそれをしなかった所で消えるものでもないのですから」

「……それが、世界のシステムだから」

「ご明察です。持つ者が持たざる者から搾取する。知識の多いものが、愚者から搾取する。大人なら誰もが知っている、厳然たる世の中の真実ではありませんか」

当たり前前の社会構造。世界は下にいる者を食い潰して成り立っている。犠牲の無い社会は数万年の進化で辿り着けるものではなく、未熟な知性は排斥できる誰かを探した。発展は流された血の量に比例し、繁栄は下に積み重なった死体に決定される。栄光が輝けば輝く程、その裏の闇は深く強い。そもそも、根本的に人間は他人が嫌いだ。分からないから、遠いから、理解できないから。

だから、先生の『生徒の為に生きる』という信念も綺麗事にすらなり得ない悍ましい何かだ。

——そんな事は、分かっているんだよ。

「……ああ、そうだね。確かに、この世界は案外厳しいよ。傷つき傷つけられ、殺し殺され……下にいるものを踏みつけて、この世界は成り立っている」

「そうですね。なら、今回と同じではありませんか。どうか、放つておいてください。元々、貴方の与り知るところではないのですから」

——そう。彼の知るところではなかった。彼の手が届く話ではなかった。もし彼の範疇であるならばこんな回りくどい手を尽くしていない。人間は自分しか、自分の世界しか救えない——そう言ったのは誰だったか。

そもそも、アビドスに来たのは本当にギリギリだ。あと少しでも事態が動くと取り返しのない事になる一步前に、漸く彼はこの地に

足を踏み入れる事ができた。余りにも遅い。遅すぎる。もつと早く来ていれば……そう思ったのは1度や2度じゃない。もつと早く来ていればホシノの後悔も、重荷も軽くできたかもしれないのに。何かが変わったかもしれないのに。

しかし、それはできない。彼はアビドスの人間ではないし、キヴオトスの人間ですらないから。目覚めの時間は大体同じで、そこからの流れは大きく変えられない。プリセットされたソフトウェアのように。

だから、諦める——そんな潔く区切りを付けられるなら、こんなにも足掻いていない。

この世界が厳しいことも、冷たいことも、苦しいことも、辛いことも分かつている。全てが虚しいと諦めていた少女達を知っている。

だからこそ、優しい人になりたかった。自分の所に来れば『もう大丈夫』って安心してくれるような人に。

その願いは、今も変わらない。

「……この子達の苦しみに対して、責任を取る大人が誰もいなかった」
「だから、貴方が責任を取るのですか。家族でも、保護者でも、ましてや同じ生き物ですらない貴方が。偶然アビドスと呼ばれ、あの子達と出会っただけの……他人である貴方が」

「偶然じゃないよ」

先生は黒服の言葉を否定し、懐から大事そうに何かを取り出す。

それは、彼とアビドスを繋いだ縁。彼をこの場に呼んでくれた——
——助けを求めて伸ばされたもの。

「手紙を貰ったんだ、助けてほしいって。それに、私は先生……彼女達の責任を取る理由なんて、それで充分すぎるくらいだ」

「そうですか、そうですか……では、私達の仲間になるという提案は？」

「断る」

「……その真意をお聞かせいただけいても？」

これまで彼が語ったのは彼のスタンスであり、『先生』としての理念だ。勿論、これらも提案を蹴る理由だが、根本は別にあると黒服は判

断した。彼は大人だ、清濁併せ？む事だつてできる。理念を曲げない範囲で黒服と協力する事もできたし、ゲマトリアも約一名を除いて最大限の配慮はするつもりであった。

彼は聡明だ。ゲマトリアの一員となるメリットはよく分かっているだろう。その利点を捨ててまで、ゲマトリアと敵対する理由を黒服は知りたかった。今後……彼と協力するために。

故に知りたい。彼が何を持つのか。彼が何を求めるのか。彼が何を望むのか。金銭や名誉、権力といった俗物的なものではないだろう。そんなものでは目の前の純白を揺るがす事など敵わない。

では、何だ？ 穏やかな生活か？ 孤独を癒す誰かか？ 戦いから離れた安息か？ いいや、どれでもいい。それが黒服に用意できるのであればなりふり構わず用意し、先生の為に用いよう。用意できないものであれば、用意できるように研鑽を重ねるまで。

そう思うほどには、黒服は先生に入れ込んでいた。彼と共に歩めるのであれば、どれほどの対価も時間も労力も犠牲も惜しくない。

そもそも、今この瞬間……彼と対等に言葉を交わせるだけでも喜びを覚えるのだ。

是が非でも、仲間欲しい。共にキヴォトスの、神秘の先を見たい。そう思う黒服の伽藍洞が先生を射貫けば、彼は溜息を吐いて耳に掛る髪を後ろに流しながら答え始めた。

「色々あるよ。私の望みと乖離している事。他人の不幸を利用した性根が気に入らない事。カイザーと協力した事。ただ、一番の理由は――

――」
刹那、先生は激情を灯した。世界を焼き尽くさんばかりの嚇怒は、たった一人の為に。

「お前、ホシノを泣かせただろ」

ホシノを傷つけた。ホシノを苦しめた。ホシノを悲しませた。彼の大事なホシノを――泣かせた。

「それに勝る理由はない。ゲマトリアは私の敵だ」

その言葉と同時に黒服から庇う様にホシノを抱き寄せる。『もう大丈夫だ』と、安心させるように。

——もう、会えないと思っていた。あの時が最期だと信じて疑わなかった。頭を撫でてくれた温度を。手を握ってくれた愛しさを。抱きしめてくれた優しさを。

二度と思い出さないように、忘れないように心の奥底に仕舞っていたそれを想起させた彼は『最後なんかじゃない』と優しく強く否定する。

何度だって頭を撫でるし、手を握ろう。抱きしめる事だって。それが生徒の為ならば喜んで。バッドエンドなんて認めない。一人で消える事なんて許さない。自己犠牲なんて以ての外だ。

「いやはや、これが——救世主。父なる聖テトラグラマトン四文字の神子という事ですか」

黒服は再び狂喜していた。想像以上、と彼を称した自身を殴りたい気分だった。彼はそんな単純な物差しで測れる存在ではない。

その能力、素質、才能は誰かと手を繋ぐために。

その善性と優しさと愛に満ちた性格は、誰かに手を差し伸べるために。

その信条と理念は大切な生徒達を真実守らんがため。

例え運命が決まっていようとも、誰かの為に走り続ける精神性。

望むのは皆が笑う日々。また明日ねと言い合える平穏。希望に満ちた明日の花束。

利他的で、博愛に満ちていて。誰かを受け入れる受容性は他の追隨を許さず、繋がる心と心の輪はまるで星々を包む宇宙のよう。その在り方は絆と対話であり、共に歩む誰かがいる限り無限の可能性を持っている。正しく全は一、一は全の究極だ。

救世主だ。誰よりも救世主だ。己をそう認めていない事も含めて、誰よりも救世主に相応しかった。その輝きに目を焼かれる生徒がいるのも頷ける。

最高評価、という言葉すら足りえない評価を黒服から受けた彼は——その表情を、有り余る悔恨に歪めた。

「はッ……」

彼の口から発せられたとは思えない程、冷たく乾いた声。

「買い被りすぎだよ。私が救世主であるものか。この身が真に救世主であったならば——こんなにも、守れなかったものが多い筈ない」

頭を過るのは後悔の記憶。助けられなかった。守れなかった。救えなかった。そんな思い出ばかり。次こそは、と決起しても無意味に屍を重ねるだけだった。滅び逝く世界を眺める事しかできなくて。

魂が擦り切れるまで世界に挑んだにも関わらずこの体たらく。無能にもほどがある。無価値にもほどがある。

「——ククッ」

先生の原点。有り余る後悔の記憶。言葉にならない想いを受け取った今でも、黒服の中での彼への評価は天井知らずに上がっている。

彼の暗く澱んだ中には、確かに輝きがある。捨てられない何かがある。たった一つ捨てられなかった『救い』を、プライドを大切に持ったままだ。

その上、この後悔は非常に重要だ。過去の悲劇を『済んだ話』と切り捨てられるようならば、こんなにも彼は救世主ではない。愚かしい、と誰もが思うような情こそが彼の神髄だろう。

過去も現在も未来も、生徒も住民も何もかもを大切に思える精神……それに最大の賛辞と喝采を送りたい気分だ。

その心を。そのプライドを。彼の輝く純白を聞きたい。そう思った黒服は、敢えて答えの分かり切った問いを口にした。

「しかし、貴方は誰かを救うことを諦めていない。最も救われなければならぬ貴方自身を蔑ろにして、他人の為に他人を救っている。何故ですか？」

「——私の大事な……愛しい生徒だからだよ」

他人の為に他人を救う綺麗事を、空想で終わらせない。

苦楽なんて共にしない。共有するのは楽だけだ。

望むのは問答無用のハッピーエンド。

失い続けた日々を上回る愛と平和。

——そう。

例えば、彼女の昏く沈んだ瞳が。
私の手に、少しでも明るい未来を視てくれるように。



黒服は腕を組みながら、今の状況を俯瞰する。

ホシノを手に入れるならば先生を相手にしなければならぬが、黒服はそんな事をしたくない。意見が交わらないから実力行使、と行くのは少々短絡的が過ぎる。

そして、黒服は先生が欲しい。彼の全てが欲しい。だが、それは叶わないだろう。彼の地雷を踏み過ぎた。この一件が片付けば話くらいは聞いてくれるかもしれないが、それまでは何を言っても否で返される。勿論、彼を仲間に引き入れる方法としても実力行使は存在するが……行うつもりは全くない。彼は言葉を尽くせば理解してくれる。それなのに力を使うのは……余りにも醜い。

それに、彼は無理矢理な手段で仲間に取り入れようとしても即座に自殺するだろう。脊髄に仕込んである自決装置……恐らく一点もの。人質として捕らえられたとき、生徒の荷物になると判断したとき……或いは、生徒を傷つける存在に反転したとき。そういつた時に迷わず命を投げ出せるように、キヴオトス赴任初日に、己自身の手で脊髄を切開して仕込んだセーフティ。

彼の脳波、またはシツテムの箱からの命令を受けた瞬間、彼の脳と全神経を焼き切つて死体にした後、肉体を結晶化して砕け散らせる。その真意は己を遺体を残さないためであろう。このキヴオトスに於いて、彼の肉体は最高純度の聖遺物だ。彼の肉体に神秘を流し込めば、神に等しい権能を振るう事が出来るだろう。その危険性を正しく認識している彼は、死後に肉体を残さない事を選んだ。肉の一片、霊の一欠けすら利用させないために。

他人の為に人間らしい死に方すら迷いなく捨てることができる精神性——益々、『欲しい』と思った。

だが、彼と話す機会はこれつきりではない。今後とも彼と何度か顔を

突き合わせるだろう。その時は同じ方向を向いていたものだ——
——そう思いながら、黒服は再びチェアに腰掛けた。

「よろしい。では、ホシノさんを連れて帰ると良いでしょう。ですが……」

黒服は腕をゆっくり持ち上げ——その指先が先生を指した。

「私は、貴方の輝きが見たいのですよ……先生」

刹那、砂漠が蠢動した。神秘が満ちる。神秘が吐き出される。神の
代行者。楽園に座す生命の樹。忘れるな、忘れるな、思い出せ、思い
出せ。ヒトの原罪を、唆されて食んだ知恵の果実を。神の御許から追
放された、その罪悪を。

「本日は土星がよく見えます。炉心の真珠と鉛。意味は勿論、お分か
りですね？」

「ああ、よく知っているよ——」

致命的な神秘が覚醒する。過去のケースもデータも話にならない。
正しい手順で以って解放された一柱は、正しく神の御許に在るもの。

——キヴオトスを消し去る『滅び』が目覚めた。

聖戦

蠢動する砂漠。目覚めた神秘が鎌首をもたげる、世界滅亡の一步手前。それにも関わらず、先生と黒服は静かに相對していた。互いに無言の空間、細められた眼光が射貫くのは真逆の色彩を持つ不？戴天。黒服は先生の目を見つめる。瞳に灯る決意と戦意。一生涯、戦いそのものに意味を見出す事は無い彼の戦場は、いつだって誰かの為に。———そうだ。この輝きを視たかった。敵わない脅威を前にしても誰かの為に立ち上がるその勇姿を。

「———遠い昔」

彼の全てに敬意を表する黒服は語り始める。己が目覚めさせた神の代行者の———その、真実を。

「キヴオトスの端、誰も足を踏み入れない旧都心のとある廃墟で奇妙な研究が勧められていました。神を研究し、その存在を証明できれば、その構造を分析し、再現できるだろう。即ちこれは新たな神を作り出す方法である」

ホシノの端末からは聞いたこともないようなアラート音がひっきりなしに鳴り響く。画面上部に表示されたのは『預言者降臨』の五文字。その下には細かい文字でびっしりと詳細が書かれていて、中央にはマップが映し出されていた。

そのマップの中央には赤い点が1つだけ打たれており、その点を中心にして円が広がっている。円の濃淡は危険域と警戒域を表している。だが、その範囲が馬鹿げているのだ。縮尺的に危険域は半径5km、警戒域に至っては半径30km。

何が現れるのか———その詳細が一切分からないホシノは抱き寄せてくれた彼に不安そうに縋り……それに気づいた先生は「大丈夫だよ」と優しく微笑む。

そして、彼は再び視線を黒服に固定する。何度も何度も聞いた、勿体ぶった解説の言葉。聞きすぎて空で暗唱できるようになってしまった。それだけの数、戦い抜いた。

「誰もが嘲笑う滑稽な仮説でしたが、そんな理論に興味を示した者達

がいたのです」

望むのは完膚なきまでの勝利。文句の付けようのない大団円。その光を掴むために、何度だって立ち上がり剣を取ろう。

「ゲマトリアと呼ばれる者達はその研究を支援し、莫大な資金と時間が費やされ、神の存在を証明するための超人工知能が作られたのです。神という存在に関する情報を収集、分析、研究し、それを証明する人工知能……対絶対者自立型分析システムは、そうして稼働を始めたのです」

黒服達が名前を拝借する前のゲマトリアが支援した神を求めるA I。その研鑽の果て。それこそが、今なお砂漠で生きる——アビドスの怪談の正体だ。

「……月日は流れ、都市は破壊され、研究所も水底に沈みました。そのような研究が行われていたという事実すら忘れ去られる程の時間が過ぎたのにも関わらず、このA Iは己の任務を遂行し続けました。そしてついに、A Iの宣言が、廃墟に声高らかに鳴り響いたのです」

——Q E Dと。

「これは証明され、分析され、再現された新たな神の到来です。音にならない聖なる十の言葉、と己を称する新たな神——デカグラマトン」

天の主により創造され、生命を司る樹である十の頂き。活動、
Y e t z i r a h B r i a h A t z i i u t h
形 成、創造、流 出の四界。それに至る道。

「彼の者はまた、己の神命を予言する10人の預言者と接触し神聖な道である『パス』を拓きました。これぞまさに、新たな天路歷程。これは本当の神なのでしょうか……ああ、私にはわかりません。そのよ
うなことは、実際のところどうでもいいのです。ただ、彼の者自身の
神性を証明する過程であるそれは、間違いなく真理の摂理に至る道、
セフィラと呼んでも、遜色はないでしょう」

——先生。

「あなたがこれから選遇する預言者は、セフィラの最上位に位置する、
天上の三角形の一角。そのパスは理解を通じた結合、『違いを痛感す
る静観の理解者』の異名を持ちます」

——それは、ビナーです。

此処に顕現するのは第3のセフィラ。

数字は3、色は黒色、宝石は真珠、金属は鉛、惑星は土星を象徴する。

守護天使は神の知識。^{ザフキエル}

照応する神名はI H V H A L H I M。

天使の階位はアラリム。

「デカグラマトンの預言者を相手に、貴方のいる『シャール』はどこまで耐えられるでしょう？ あなたが積み重ねてきたその繋がりの力が、果たして新たな神の御前でどれだけの意味を持てるでしょう？」

あの少女達の神秘は、新たな神の神秘に比肩しうるでしょうか？」

黒服は芝居掛った仕草で両手を広げながら、深淵の向こう側に在る光を歓待する。

「そうです。これは非常に興味深い研究なのです——では、健闘を祈っています。貴方の輝きを見せてください」



警告、対絶対者自立分析システム起動を報告。

警告、生命樹機神体の降臨を観測。

時空間アーカイブに創世記^{ジエネシス}が挿入されます。

楽園^{エデン}を元にした膨張現象^{インフレーション}を確認。

神秘質量、2億4000万以上。

侵略^{ミステイク}個体、第三神秘統括細胞^{クセル}。

発生区間、ハッブル時間……146億年。

——第三セフィラ、ビナー。出現します。



異様に張り詰めた空気の中、先生とホシノはアビドス砂漠を目指して走る。ビナーから放出される神秘の影響か、通信は困難極まるため

他のメンバーとコンタクトを取ることは出来ない。

—— ホシノの知る所ではないが、今現在2人が向かっている場所……もつと言えば、そのポイントを中心とした半径50kmは連邦生徒会とシャーレの連名で進入禁止令を出している。そしてアビドス全地域には避難命令が発令され、ヴァルキュレやSRT、その他トリニティ自警団等のボランティアによつて地域住民の誘導が実施されていた。

これらは先生の仕込んだプロトコルが正常に起動した証だった。尤も、リン以外には碌に説明する時間がなかったため、彼女以外のメンバーは今頃カンカンだろう。朝、と呼ぶのすら早い時間に叩き起こしてしまった事は大変申し訳なく思っている。今度、菓子折りを持ってお詫びに行かなければならない。

閑話休題。

兎にも角にも、今は早く向かわなければならぬ。ワカモは既に戦っているし、アビドス、便利屋の少女達もそろそろ到着している頃合いだろう。彼が別で呼んだ少女達は距離の関係上、直ぐに到着はしないため本格的な開戦はまだだろうが、悠長にしていられる時間があ
るわけではない。

ワカモは個人の決定力、という点ではヒナやホシノ、ツルギといった各学園最強に一歩劣るが総合力では決して負けていない。彼女の神髄はその場にあるもの全てを利用したゲリラ戦法。人を、地形を、物を、状況を利用し尽くす頭脳はキヴォトスにおいては珍しい長所だ。

そのため、彼女には責任者たる先生が不在の間のみ、シャーレとしての指揮権を譲渡している。だが、彼女に素直に従う生徒が大多数か、と問われればそうではない。先生の愛する生徒達は全員我が強く
て個性的だ。

故に、いざという時はワカモが指揮をしてくれるという考えは甘えに他ならない。彼女の戦闘能力をフルに活かしたいなら指揮官という重荷は邪魔にしかならないだろう。それに加えて、彼が呼んだ生徒を最も知っているのは当然彼であるため、彼が直接指揮した方が総合

的な戦闘力は跳ね上がる。

そういつた事もあり、先生とホシノは一刻も早く戦場に向かわなければならぬのだが——現実はそのままで甘くない。

「……ッ」

脳波通信の接続先がロストした。それはつまり、シャーレ屋上格納庫から出撃させていた無人戦闘機等が全て叩き落とされたという事。元々、生徒にターゲットを向けさせない為に出していたただけだが……撃退されたとなると流星に歯噛みしてしまう。

動かせる残りの機体はメロダック1機と軍用ヘリ、戦闘機、戦車がそれぞれ幾つか。メロダックはメンテナンスが終わるまで待たなければならぬし、他の機体では同じように落とされるだけだろう。そもそも、ターゲットを生徒に向けさせないだけならデコイの散布だけで事足りるし、ワカモヤアル、シロコにはいざという時の保険で渡してある。

リソースの逐次投下は愚策だ。出すなら有りつ丈を。全力で相対しなければ勝負の土俵にすら上がらない事は嫌と言うほど知っている。

メロダックのメンテナンス終了後に緊急出撃スクランブルをかけて、それでも駄目ならば——幾つか、禁じ手を切ろう。

彼は走りながらタブレットに保存されているデータ集のロックを解除する。何重にも掛けられた鍵の先にあるのはアーカイブ化された神秘。使い方を誤れば死に直結する反則じみたもの。

今、暴れているビナーが作成した端末である神の知識ザフキエル——この天使と相対した時に使った詩篇テヒライムもその1つだ。そして、それ以外にも法の書、ヴェーダ、アヴェスター……他にもまだ多くある。それらは全てあまり使いたくない類の手札であり、必要とあれば迷いなく切れるカードだ。

そして、もうひとつ——大人のカードと呼ばれる彼に許された最大の特権がある。パラレルワールドやループ前の世界で縁を結んだ生徒を最大6人まで呼び寄せる正規の使い方はもうできなくなってしまうた、やらなくなってしまうた。

しかし、対価に奇跡を起こす効果自体は変わらない。世界を覆す力、事象改変型プロトコル、覆せぬ終焉のXIII……そう呼称されるに足る能力は発揮できる。最悪、先生の命を代償にすれば摂理に反した書き換えも可能だ。

最大出力は欠けた足の指2本分落ちるだろうが、それでも権能が完全開放されていないセフィラー1柱程度ならば余裕で事象改変の渦に叩き込める。

勿論、死ぬつもりはない。ホシノと水族館に行くとか啖呵を切った以上、そこで屍を晒す事は許されなだろう。彼女が笑ってアビドスへ帰る為にも、この場は必ず生き残らなければならぬ。生きて、朝日を迎えなければ——信じて送り出してくれた全てを、裏切ることになってしまう。

先生は立ち止まり、ゆつくりと目を開ける。その瞳は蒼く、蒼く——宇宙の様な深淵の蒼へ変貌した。眼球を廻る旧世界言語は救世主と神の子を表す。量子波送受信機構の完全励起状態、生徒の為に滅びを撃ち砕く者。

「……ホシノ、戦えるかい？」

那由多の世界に挑んだ彼が見据えたのは接近する中隊規模の軍団。神の知識が生み出した天使の眷属と形状こそ同じだが、その中身は別物だ。普通の生徒であれば苦戦は免れないだろう。

だが——。

「うへ、勿論……今度は、私に先生を守らせて」

第三のセフィラたるビナー？ 力天使の階級で異端顕現した神の知識？ 無制限に生み出される天使の眷属？

ああ、全く以って取るに足らない。その悉くを凌駕しよう。腰を落とし、足を踏ん張り、思いつ切り銃と盾を握り締める。瞳に灯る守護の決意、体に宿るは彼から受け取った熱。

何度も彼は守ってくれた。アビドスを、学校を、大切な仲間達を。そして——ホシノを。大切だと、大事だと何度も叫んでくれた。

——だから、今度は私が彼を守る番だ。指一本だって触れさせない。

違いを痛感する静観の理解者

その威容を現すならば『鋼鉄の大蛇』が最も適切だろう。

全長100mは下らない巨体、天使の光輪の如きヘイロー、背中に存在する垂直発射装置^{VLS}、極めつけに人の身長と大差ない口径のビーム砲。

ミサイルによる面制圧能力と、金属すら瞬時に蒸発せしめる熱量を誇るビーム砲による一点突破能力。巨体を活かした体当たりや尻尾による攻撃。回避能力こそ低いものの、装甲は非常に分厚く並みの弾丸では掠り傷すら与えられない。

不完全な起動状態でもカイザーPMCの軍隊を抵抗すら許さずに一方的に蹂躪した戦闘能力は、正しく新たなる神だ。戦闘に長けた生徒以外は相手にならず、決定打はキヴオトス最強クラスでもなければ与える事は不可能だ。

これを裏付けるように、記録に残っているビナーとの交戦は基本的に防御が中心になっている。こんな化け物、相手にしていられなかったのだ。徹底的な防戦で、反撃は隙を見て差し込む程度。そうやってちまちまと消耗戦を繰り返しながら、相手が諦めるのを待ち……：そうやって、先人たちはビナーと戦い、アビドスを守ってきた。

だが、今回は少々訳が違う。そんな逃げは通用しない。第三セフィラと文字通り真正面から戦い、これを打ち砕く必要がある。万が一にも打倒できなければアビドスは滅亡し、キヴオトスは半壊するだろう。

そう———これは唯の戦いではない。世界の存亡を賭けた最初の聖戦なのだ。

此処まで事態が切迫してしまっただのは幾つか理由がある。まず第一に黒服がビナーに接触し、相性の良いリソースを提供した事だ。

黒服の実験、最新の神話が旧き神話との会合を果たしたら———そんな思惑。それを探求するために、ビナーの炉心に真珠と鉛のリソースを提供し、土星がよく見える今日に完全起動させた。

第二に、聖歌隊^{コーラス}がこの地に訪れたことだ。聖歌隊を作成した技術た

複製をビナーが学習した結果、天使たる神の知識がビナーの端末として生まれた。

最後に、生まれた神の知識にベアトリーチエが細工をした事だ。救世主への憎悪は非常に良く馴染み、先生を絶命させんとする行動へ至った。そして、その憎悪は端末の作成者たるビナーは勿論、パスを通じて他のセフィラにまで伝搬している。

他の柱の目覚めまでは至っていないが、それでも油断ができる状態ではない。時間を掛けすぎれば他の個体も共鳴し覚醒に至るだろう。もしそうなってしまうえば、本当にキヴオトスは終わりだ。故に、先生は一刻も早くビナーを撃破しなければならない。タイムリミットは夜明けまでの約2時間。

だが、悪い事ばかりではない。先生が呼んだ援軍……ゲヘナ風紀委員会、早瀬ユウカ、忍術研究部、ヒフミがそれぞれこの地に向かっていった。そして、現地には既にホシノを除くアビドス対策委員会、便利屋68、狐坂ワカモが応戦している。先生とホシノもこの地に向かっており、全員が集合するまであと僅かとなった。



「もお！ 何なのよ、コイツ等！」

「くふふっ、ほらアルちゃん、次来たよ〜」

アビドス砂漠、聖戦の場。

砂塵舞う大地にてアルの泣き言が響いたと思えば、その声は即座にムツキが放り投げた爆弾が爆発した音でかき消される。ムツキの広範囲攻撃で仕留めきれなかった敵はきっちりとアルが撃ち抜いて、漸くできた突破口にアビドスの少女達が果敢に突貫し……そして、無常にも押し返される。そんな二進も三進もいかない攻防を20分以上に渡って繰り返していた。

アルは岩陰に隠れて、リロードを済ませる。その内心は混乱と泣き言を言いたい気持ちで一杯だった。泊まっていたホテルに備え付けられていた警報がけたたましく鳴ったかと思えばスマホも鳴り始め

て、心地の良い睡眠から叩き起こされたのだ。寝ぼけ眼を擦って画面を見れば、そこには伝え聞いていたシャーレの緊急依頼。慌ただしく最低限の準備をして駆けつけて今に至っている。

別に先生の依頼を受けたことを後悔している訳ではない。ただ、もう少し時間はどうかならなかったのかと思ってしまう。勿論、それはアルの主張であり、先生に当たってもどうにもならない事はちゃんと弁えている。だが、朝の4時に叩き起こされたと思えば、いきなり鉄火場に放り込まれたのだ。泣き言の1つや2つ、寛大な心で許してほしかった。

ムツキのリロードが済んだことを確認したアルはノノミにハンドサインを出して、再び戦場へ舞い戻る。照準の先にいるのはカイザーのロゴが記されたオートマタ、ドローン——だけでは無い。記憶に新しい天使の眷属までもがこの場を集っていた。数は不明だ。だが、どう見たって100や200は余裕で超えている。最低でも500……いや、4桁はいると見た方が良い。

勿論、無理に全てを倒す必要は無く、ただ本体のビナーまでの道を切り開けば良いのだが——ビナーが全ての兵を統括しているのか、空いた穴に対するカバーが非常に速いのだ。僅かでも逡巡してしまえば、作った風穴は瞬時に無に帰す。

兵力で負けている現状、最も注意しなければならぬのは各個撃破だ。押し込めばビナーまで辿り着けるが、代わりに孤立してしまう——
——そういった状況が何度も作り上げられていた。誘っているのだ。此方のミス。そして焦った所を一気に叩き、蹂躪する……そういう魂胆だろう。

仮に誘いに乗らなくても戦闘を続けている内に数的有利を確保しているビナー側に天秤は傾く。故に、何処かのタイミングで仕掛けなければ物量で磨り潰されて敗北を喫するだろう。

ジリ貧だ。ワカモは仮面の奥で奥歯を噛み締めて、必死に思考を回す。援軍が来ることは知っているが、このまま続けても到着前に此方の勢力の大半が戦闘不能になる。ならば防戦に徹すれば……いや、駄目だ。そんな手を取った瞬間押し込まれる。だが、これ以上は攻め手

にリソースは割けない。

自分が出るか？ いや、恐らくビナーはそれを狙っているのだ。敵の思惑に乗った瞬間、その策から抜け出す事に戦力を割かなければならないため、後手に回る。そもそも彼女が出てしまえば後衛と前衛のバランスを取る指揮官がいなくなってしまうため、何処かで必ずボロが出てしまう。だが、いや、しかし――。

そうこうしている内に、前衛を務めている戦力――シロコ、セリカ、ハルカ、カヨコが孤立しかけている。完全に囲まれるまでの猶予はあと一分もない。今回は運が良いのか悪いのか、陣地の奥まで進むことができた。

危険を承知で前進するか、退いて立て直すか。何方にするか――
「いや、もう答えは決まっている。」

「前線を上げます！ 雑兵は無視して構いません！ 一刻も早く、ビナーをツ！」

「了解！」

声を張るワカモに追隨する、戦意に溢れた無線越しの声。

そうだ、退いたら負ける。攻めなければ勝てない。前線を上げ、一歩でも敵に肉薄する。あの機械仕掛けの神デウス・エクス・マキナに一発でも多くの弾丸を当てる。そして、その果てに勝利の栄光を掴まなければならぬ。

例え、この選択の果てに取り返しつかない事態になろうとも、先生さえ生き残ればワカモの勝ちなのだ。



ビナーへ進軍している前衛部隊の戦場は後衛部隊の戦場とは比較にならない程の苛烈さを呈していた。秒刻みで変化する戦場、構築される敵のフォーメーション、自身の手札。オートマタ、ドローンによる銃撃と天使の眷属による圧縮した神秘の熱線、肉弾戦。それに加えてビナー本体によるVLSも時折加わる。

最早、今自分が何とどう戦っているのかすら定かではない――
それほどの戦いであった。

「アビドスの連中、突っ込みすぎ……！　ハルカ、カバーお願い！」
「は、はいッ！」

前衛の指揮官を半ば強制的に任されたカヨコは歯噛みしながら指示を出す。兎にも角にも、敵の数が多すぎる。単純な物量差は1000倍に迫りそうな勢いだ。そんな中で厚い防衛網を突破してビナー本体を叩かなければならないなんて悪い夢のような話だった。

孤立しかけているアビドスの少女達……シロコとセリカのカバーにハルカを向かわせたカヨコは歯を食いしばりながら思考を回す。状況は不利、勝てる見込みは薄い。何度か奇跡が起きれば漸く対等になるか程度。アルやムツキ、ノノミ、ワカモのバックアップはあるが、彼女達も彼女達に向かう敵の対処をしなければならぬから多くは望めないだろう。故に、ある程度はこの戦力で突破しなければならぬのだが――。

「チッ！」

らしからぬ舌打ちを挟み、弾丸で敵の頭を吹き飛ばす。リロードを行いながらハルカ側の様子を見ようと顔を上げると――最悪の現実が目の前に広がっていた。



前線の中でも、更に前――最前線に位置する場所がシロコとセリカの戦場だった。その内心は焦燥で一杯であり、早く何とかしないと一念が内心を埋め尽くしていた。

直感してしまったのだ。ワカモがビナーと呼んでいたコイツを可能な限り早急に倒さないとアビドスは致命的な痛手を負ってしまうと。

気を利かせたカヨコがハルカをカバーに回してくれたお陰で少々楽になったが、それでも油断ができない――そう思った時に、シロコは2人と分断された。手負いの敵を取り逃す訳にはいかないと詰めたその隙を狙ったビナーの狡猾な策。

考え得る最悪の事態だった。

そして、それを待っていたかのように。

「——あ」

鋼の大蛇。ヒトすら呑み込む口径の砲門が開口していた。エネルギーの収束は既に臨界点を超えている。莫大な光と熱が離れたこの場所でも伝わってくる。

「シロコ先輩ッ！ 逃げてッ！」

逃げる？ 何処に？ 発射まで1秒もない。回避はおろか防御も不可能だ。放出される熱量は人体を影すら残さず蒸発させるには充分すぎるもので、次の瞬間には砂狼シロコという少女は熱線で焼き尽くされるだろう。

セリカのカバーは間に合わない。目の前で学校の先輩が光の奔流に呑まれるのを見ている事しかできない。

「ごめん……」

果して、その言葉は誰に向けたものだったのか。それはシロコにも分からない。ただ、彼女の脳裏には今までの出来事が走馬灯のように目まぐるしく思い浮かんでいた。寂しくて、寒くて、悲しい記憶——そして、それを打ち消すような賑やかで、温かくて、楽しい記憶。

これで、終わり——誰もがそう思っていた。
だが。

「——え？」

空を揺るがすような轟音と共に、今にもシロコを焼き尽くさんとしていたビナーの体が吹き飛んだ。ワカモを除くメンバーがあれほど苛烈な攻撃を加えても揺るぐことすらなかったビナーが比喻でもなんでもなく、吹き飛んだ。

100mを超える巨体、ビルを軽々超える質量を持つ鋼鉄の体が物理的に退いたのだ。当然の如く砲門は明後日の方向を向き、シロコを殺すためのエネルギーは未だ暗い空に山吹色の閃光を描くだけに至った。

だが、それについて疑問を抱く暇は無く、横合いから猛スピードで接近していた小さな影に横抱きにされて危険地帯から強制的に脱出させられる。勿論、シロコだけではなく一緒に詰めていたセリカやハ

ルカ、カヨコも一緒に。

「ふい、間一髪……私、今度はちゃんと間に合ったよね？」

心底安堵したようなため息は、シロコが最も声を聞きたかった先輩のもの。空を写す二色の瞳には憂いや悲しみはなく、ただ後輩を思う慈しみと——誰かのために戦う戦意のみ。

「ホシノ先輩！ 本当に……心配、したんだから……ッ！」

「……ごめんね、セリカちゃん。私が馬鹿だったよ」

「ん、その話はまた後で。今はアイツを止めないと」

聞きたいことは山ほどあった。言いたいことは山ほどあった。だが、それらはまた後でいいだろう。今はやるべき事をやらなければならない。

だって、彼女たちには——また、『明日』が、『続き』があるのだから。

「便利屋の子達も、シロコちゃん達のサポートありがとうね。これからは私達も一緒に戦うから」

「それはいいんだけど、私達って……」

カヨコの疑問に、ホシノは遠くを指差す。その方向は折しもビナーが座す方角であり——鋼の巨体と対峙する小柄な少女が立っていた。

そう——彼女こそがビナーを吹き飛ばした張本人。銃撃では間に合わないと判断し、砂漠という劣悪な足場で50m以上跳躍し——その臂力を以って鋼鉄の巨体を蹴り抜いたのだ。

霊的装甲と物理装甲を併せ持ち、強固極まる防御力を誇るセフィラの一柱を、フィジカルに物言わせた唯の蹴りで退けたその異常性は語るに及ばないだろう。

「あれって……」

豊かな白髪。振じくれた角。廻る黒と紫のヘイロー。風に靡くは『風紀』の2文字。身の丈に迫る巨大な銃を担ぎ、たった一人第三のセフィラと相対する少女は——。

「これより、ゲヘナ風紀委員会は連邦捜査部シャーレの指揮下に入る」
ゲヘナ最強、空崎ヒナ。風紀委員本隊に先んじて、この場に参戦し

た。

神秘、証明

ホシノとヒナ……アビドスとゲヘナ、双方の最強が戦場に舞い降りたと同時に先生もまた後方に到着していた。

神を殺傷せしめる深い蒼の瞳は彼が本気の証であり、決意そのもの。

量子波送受信機構システムメサイアと呼ばれる数多の可能性世界を可視化する反則技……瞳の色彩を変化させる危険極まる御業は全て誰かの為に。その果てに己が他世界の神格と混ざろうとも構わない。鋼の決意を持ちながら、先生はにこやかに頑張ってくれた彼女達に手を振った。

「先生！」

「貴方様、お待ちしております」

「うん、ただいま——あとは、私に任せて」

システムの範囲に全生徒を組み込む。その最中、ビナーにシステムへの侵入を試みられるが……当然、既に対策済みだ。

即座にカウンターハックを仕掛けて逆にビナー側の基幹システムを焼き切ろうとするがファイアウォールに阻まれて失敗した。分かってはいたが、彼方も強固な攻性防壁を持っているようだ。

そもそも、こんな小手先の虚偽威しでセフィラの一角を落とせるとは先生も思っていないかった。この程度で壊せるのなら自分達は此処まで苦労していないし、対策を考えていない。神はどこまで行っても神であり、人の身とは次元が異なる領域に在るのだから。故に、神を殺すならば玉座から引き摺り落とすか同等の領域まで上り詰めるか。後者は一応手立て自体は有るが色々制約があるため、必然的に前者の手段を取らざるを得ない。

尊者を引き摺り落とす墮天術式。神を蹂躪する罪悪の杭。そこそが先生が用意した概念武装『天命』の正体だ。

故に、先生はビナーと相對した瞬間に礼装の起動をしなければならぬのだが……。

「ワカモは気付いている？」

唐突にも思えるワカモへの問い。それを聞いた彼女は首を緩く横

に振って。

「はい……恐らく、ビナーはまだ余力を大きく残しています」

「やっぱりね。本気のビナーがこの程度の訳がない。出方を伺っているのか……いや、多分これは起動準備中なのかな」

そう、本気のビナーがこの程度の訳が無いのだ。天使の眷属、オートマタ、ドローン。確かに恐ろしいが、ビナーの本気を知る彼等にとって『手緩い』としか言いようがない。

それに、神秘質量が2億程度で停滞しているのも気になる。過去のデータを鑑みるに、ビナーの神秘質量は最低でも30億を超える。単純計算、1/15の出力しか出ていないのだ。勿論、今回は完全な目覚めにならないように色々と手を尽くしたため、30億を下回る可能性自体はあるが、それでも2億という数値は小さすぎる。

故に、ビナーはまだ起動すらしていないのではないか。今までの攻撃は全て各部が問題なく動くかどうかを確かめるための動作チェックではないのか——それが、先生の見解だった。

もしそうならば、アレはまだ神としての本領を發揮していないという事になる。そんな相手に神を殺す手段をぶつけてもカタログスベックは發揮できずに、貴重な切り札を1つ失う羽目になるだろう。

勿論、切り札は使い捨てではない。だが、再装填には少々時間が掛かってしまうため、使うならば勝ちまで持つていききたいのが本音であった。

そして、起動前に壊せるほど優しい相手ではない事も知っている。今までの戦況は全て聞いた。カイザーPMCのオートマタ、ドローンの乗っ取り。天使の眷属の降臨。VLSとエネルギー砲の試験運用。武装は全て終わっている。あとは内部プログラムの精査と、ビナーの動力部たる核融合炉のチェックだけであろう。

概算、5分。それがビナーの起動に掛かる時間だった。そんな状態で下手に攻め、敵地のド真ん中で完全起動——なんて事になったら目も当てられない。

故に、まずやるべき事は——。

「前線を立て直す！ ワカモ、ヒナ、ホシノ、皆のカバーをお願い！」

「このワカモ、貴方様の想いのままに」

『ええ、分かったわ』

『うへ、勿論だよ』

まずは崩れかけている前線を再構築する。先生という指揮官の参戦により全体指揮に固定されていたワカモがフリーになり、ホシノとヒナという頼もしすぎる戦力が参戦した。それに加えて、じきにイオリやアコ、チナツを含む風紀委員本隊とユウカ、忍術研究部が来るだろう。充分に勝算のある戦力だ。

仮にビナーが眠っているのならば叩き起こすまで。全てを凌駕し、その上で明日を見るための勝利をこの手に掴もう。



アサルトライフルで敵を撃ち抜き、ドローンのミサイルで強引に風穴を明ける。大味な2つの武装の隙を隠すように懐に忍ばせたハンドガンと手榴弾で向かい来る敵の迎撃を行う。それがこの戦闘におけるシロコのパターンであった。開けた風穴はセリカやハルカが更に奥まで押し込んだり、大きくしていたのだが……その役に1人、頼もしい先輩が参戦している。

「じゃあ、突破するよ。ついて来て」

言うや否や、破竹の勢いで敵陣を切り崩すホシノ。盾を使い、銃を使い、向かい来る敵全てを薙ぎ倒していく姿は正に暁のホルスの名に相応しい姿であった。セリカもハルカも彼女のフォローに回っており、その進軍をサポートする立ち位置になっている。2人の援護を受けたホシノは即座に順応し、隙潰しに回っていたリソースを全て一点突破のために使用しようと判断。それに呼応するようにカヨコとシロコが並び立つ。

先生の合流により一気に戦闘が最適化された彼女達はあつという間に先生達と合流するための道を拓くが——ビナーは無事に返すつもりなんてなかった。

ビナーの背部のハッチが開き、VLSが発射される。ターゲットは

防御手段を持つホシノ以外。どんなプログラムをしているのか、複雑な軌道を描きながら焼き尽くさんと迫るミサイルは絨毯爆撃染みている。ホシノ1人が防御したところでどうにかなるものではなかった。

それと同時にビナーの口に光が収束する。シロコを蒸発させんとした浄化の光だ。その狙いはホシノ。金属の沸点を超える熱を持つエネルギー砲ならばバリステイクシールドを貫通できると踏んだのだろう。

だが——そんなに事が上手く運ぶわけがないのだ。

『ビナー!』

先生の叫びと共に、ヒナが銃を構える。照準の先に見えるは先程発射されたVLS。先生の愛し子を根絶やしにせんと迫る悪意達。

「逃がさない……!」

終幕：イシユ・ボシエテ。ヒナの持つ巨大なMG……MG 2から

終幕：デストロイヤー

発射される数多の銃弾。空を裂くように放たれた最強の証明は全てのミサイルを空中で撃ち落とした。通常ならば唯の弾丸がミサイルを落とせる訳がないのだが、その無理を本人の莫大な神秘で強引に解決するのがキヴォトス最強クラスだ。彼女であれば放った後の弾丸の機動操作すら可能であろう。

そして、この場にいるキヴォトス最強クラスはヒナだけでない。天空神ホルスの神秘を持つホシノもまたその名を連ねる。

放たれた莫大な熱量。ヒトを跡形もなく蒸発させるはずの熱線はたった一人の少女により塞き止められる、バリステイクシールドで防げる訳もない。吐き出される熱と、シールドの材質の融点、沸点。誰にも覆せない数値というステージで測ったとき、軍配が上がるのは前者なのだ。前者でなければならぬのだ。

それなのに。

「ふう……」

傷ひとつないホシノが其処に立っていた。

確かに、彼女だけが防いだわけではない。彼女を覆う様に先生が防御壁を重ね掛けしていたが、それでも無傷なのは世の摂理に反してい

る。

ビナー内に存在するAIと量子コンピュータが駆動する。彼女達が引き起こした事象を逆算し、原因を推定せんと高速で回転する。だがあらゆるデータが起きた結果と一致しない。全ての数値は彼女達がそのような事象を起こせないと証明しているのだ。

何故——その一念がビナーを埋め尽くしていると、ヒナが無表情に告げる。

「新たな神が聞いて呆れるわ。それじゃ、デウス・エクス・マキナ機械仕掛けの神なんて夢物語。精々、壊れかけの集積回路が良い所ね」

ヒナの知る愛しい彼の皮肉。それを真似てビナーに呆れを突き付けた。

物理法則？ 世の摂理？ 馬鹿を言え。その程度、己の神秘で捻じ曲げられなくて何がキヴォトス最強か。そんな事すら成し遂げられないのであれば、ヒナもホシノもこの場に居ない。もっと過去に野垂れ死んでいた。

それに、ホシノにとっては後輩と先生を守るための大一番であり、ヒナにとっては夢にまで見た先生との再会なのだ。いつも以上に気合が入るのも道理というもの。深層で結ばれた彼との繋がりを感じて、何処までも飛べそうだ。体が軽い。思う様に、思う以上に体が動く。思考と行動の完全なシンクロ、鋭敏が過ぎる五感、溢れるアドレナリン、研ぎ澄まされた第六感とコンバットハイ。

故に気付いた。ああ、あれは罠だ——。

「小鳥遊ホシノ！」

「わかってるよ！」

VLSとエネルギー砲という大味な技を隠れ蓑にしてビナーは砂嵐を巻き起こしていた。勿論、唯の砂嵐ではない。ビナーに起こされた砂嵐は砂塵の一粒に至るまで濃密な神秘を宿している。砂塵が当たった場所は即座に神秘により削り取られズタズタに切り裂かれるだろう。それは宛ら、無数の小さな刃物が渦を巻いているかのようだった。

砂嵐という現象、砂塵という無数の凶器。防御をしてもシールドは

貫通されるだろうし、VLSのように迎撃も不可能だ。

だが――。

『障壁を4秒展開する！ その間に範囲から脱出を！』

見える視界に目立つピンが立つ。先生が指定した場所。そこに向けて全員が駆け出し、背後では砂嵐と半透明の青い障壁が衝突した。轟音が鳴り響き、衝撃で砂漠の砂が巻き上がる。パキパキと障壁に罅が入る音が聞こえるが、砂嵐は決して通さずにきっかり4秒間の役目を果たして消滅。

遮るものが無くなった砂嵐は直線状の建物や岩場を呑み込み、抵抗すら許さずその一切を削り取った。通った痕には文字通り何も残らない、轢殺の自然現象。

勿論、その間に少女達は安全地帯まで退避が終わっている。だが、万が一アレに飲み込まれていたと思うと――背筋に冷たいものが走った。ホシノやシロコ、セリカはアビドスに身を置いている関係上、自然現象の恐ろしさはよく分かっていたが……何かしらの指向性を持たせた途端、ここまで明確な脅威になるとは思ってもいなかった。そして、それはハルカとカヨコも同じ気持ちである。

ヒナだけは異なり、神秘の砂嵐には然程心を動かされていなかった。元々何度か見ていた光景であるし、一度は当たった攻撃だ。脅威は知っているが、特別目くじらを立てるものではない。

そもそも、この攻撃はビナーの中では弱い方にカテゴライズされる。神秘質量が50億を超える完全顕現のビナーを相手にした事があるヒナにとってはあの程度は見聞にも等しい。声を荒げたのはホシノ達が脅威に曝されていたからだ。

一先ず、全員無事にポイントへ辿り着いた。そこには後衛部隊と先生がいて、彼のいつも通りの微笑みに誰もが安堵の表情を浮かべる中

――無機質な機械マシン音が響いた。



『スタンバイ、スタンバイ、スタンバイ』

脅威が、増大していく。

『スタンバイ接続完了、スタンバイ動力起動、スタンバイ神秘掌握』

どうしようもないほどに。

『スタンバイ主よ、スタンバイ御身の愛に、スタンバイ歓びを』

誰もが『滅び』を悟った。

『——— 神秘、証明』』

——— ミステイクセル第三神秘統括細胞。

キヴオトスを消し去る終末装置の本領が発揮される。

『神に逆らう者は裁かれ』

それは、アダムの代から人間を見続けてきた命の木。

『罪人は敬虔なる神の使徒に触れられない』

知恵の実を食べた罪悪を永遠に憎み続ける神の代行者。

『神に逆らう者は滅びに至る』

全ての時代に存在する、在りとして在るもの。

『我らは神の憤りを招き、道を失わぬ様に』

神の喜びに歓び、神の嘆きに怒る天の被造物。

『主の賛美は永遠に続く。全能の神、神は栄光の王である』

神を礼賛する喝采。それは、アビドスの夜明けを退けた。

——— 暗い、黒い空が来たる。

『アクセス——— テトラグラマトン聖四文字』

この地に生きる全ての命を『罪深い』と嘆く、原罪無き生命の至宝は神の樂園を再臨させる為に舞い降りる。

『モード主よ、ドットその御許に近づかん』

——— それは、数多の神話と信仰を轢殺した唯一神の御許に在る樹。他宗教、多神話にて神と崇められた存在を悪魔と見做し、貶め、己が神話へと組み込んだ、世界最大の信仰。

第三セフィラ、ビナー。此処に再起動を果たした。

其は、命へ至る輝き

ビナーの再起動完了。それは膠着しかけていた戦況に一石を投じるには十分な出来事だった。

「あれが、ビナー……」

ポツリと誰かが呟く声。だが、それに反応する者はいなかった。ビナーの圧倒的なスケールに誰しもが息を？んでいるのだ。

姿形は一切変わっていないのにも関わらず、目にした瞬間『違う』と直感してしまう。それ程までに劇的な変貌、変遷。神の席に、楽園に最も近い——いと尊き者。

神秘質量、20億を超えて尚増大中。推定40億まで上昇すると推測。

再起動に伴い、装甲の強度と攻撃性も跳ね上がった。物理装甲、霊的装甲は共に権能域に足を踏み入れ、唯でさえ高かった攻撃力は更に上昇。熱線は勿論であるが、VLSですらホシノの強固な防御力を以ってしても防ぎきれないだろう。

更に、機能停止していたビナーの炉心も完全に起動した。ビナー……否、デカッラマトン神名十文字は共通して核融合を自力で行って活動のエネルギー源としている。

超高温、超高压状態における核融合反応。軽水素同士が直接反応する陽子—陽子連鎖反応……主に太陽の中心核にて行われる核融合をビナーは起こしている。

言ってしまうえば、完全顕現したビナーは一個の恒星なのだ。カテゴライズは侵略型神秘生命体。人類の手に余る星の怪物、未だ届かぬ宇宙の理と神秘を纏う旧き新しき神。

核融合に伴い鋼鉄の体から放射される陽子を主成分とする宇宙線と、生成される神秘が合わさった致死の不可視光——通称、ミステック・レイ神秘線。

宇宙線の有毒性と超高濃度の神秘の有害性が悪影響を及ぼし、最早ビナー周辺は生命が生存できる環境ではなくなってしまった。それはハイローを持ち、圧倒的な身体スペックを持つ生徒達も例外ではな

い。

ビナー周辺が『神秘の地獄』と形容される環境に成り果てた。

先生は最低でも半径1kmよりも外にいななければ死は免れず、ハイローを持つ少女であってもビナー本体から500mは離れなければならぬ。それ以上の接近は対抗手段無しでは不可能であり、圏内に入ったら絶命する。

「アロナ、対神名^{デカグラマトン}十文字プロトコルを」

『はい！ 生徒全員に適応します！ あと、対権能プロトコルもですよ。』

「うん。アロナ、ありがとう—— 正念場だ。一緒に頑張ろう」

『勿論です！ 何があっても、アロナは先生の御傍に』

生徒達にビナー周辺でも活動できるように放出される有害物質の一切を無効化し、無害化するシールドが付与される。連続展開可能時間は30分、再展開が可能な回数は4回まで。このシールドが使える間にビナーを倒さなければならぬ。

そして、アビドスと便利屋の面々は冷や汗が止まらなかつた。手が震えて、目の前の敵を前に心を折ってしまいそうになる。

アヤネやシロコが飛ばしていたドローンはビナーが再起動した瞬間に蒸発したのだ。ビナーの近くにいた、ただそれだけで文字通り消え去った。消滅する寸前、ドローンから送られてきた温度データは50万°Cを超えており……何かの冗談かと思ってしまった彼女を責める事は出来ないだろう。

アビドスの少女達は今まで沢山の脅威やピンチと相対してきた。記憶にあるだけでも神の知識^{ザフキエル}を筆頭にカイザーPMCやヘルメット団、マーケットガード、その他諸々。

だが、それらと比較してなお——アレは正真正銘の怪物だった。

「……先、生」

先生の袖を握り、不安そうな声音で彼を呼ぶシロコ。目の前に聳える脅威は正しく『滅び』と呼ぶに相応しい存在であり、既存文明圏への悪意に満ちたものであった。

ただ、そこに『在る』だけで害になる。神秘を放出し、物理法則を捻じ曲げ、周囲の環境を己の主に適したものと塗り替える——それは宛ら、異界法則の展開。

ビナーは神の知識ザフキエルと同じく、どうやってもキヴオトスの害にしかなり得ないのだ。それは、先生がこれらの存在達を『敵』と呼称する事が何よりの証拠となる。彼が敵と呼称するのは生徒を傷つけた者を除けば、キヴオトスの存続を脅かす存在だけ。そして、前者と対話を試みる事は有るが、後者はそれすらないのだ。

絆と対話を重んじ争いを好まない彼が、言葉を交わすこともなく武力を以って滅ぼしに行く存在——それが神名デカグラマトン十文字だった。

「ああ、分かっているよ」

シロコを安心させるように、彼は呟く。ああ、そうだ。分かっている。アビドスを訪れた初日からこうなる運命だと知っていた。放置するとビナーが完全顕現する事も、キヴオトスが大きな痛手を負う事も。そして、そんな未来を覆すために今まで手を打ってきたのだ。

ホシノ。シロコ。ノノミ。セリカ。アヤネ。アル。ムツキ。カヨコ。ハルカ。ワカモ。ヒナ。

今、此処にいる少女達。

アコ。イオリ。チナツ。ユウカ。ミチル。イズナ。ツクヨ。ヒフミ。

これから此処に来てくれる少女達。

こんな未熟な己について来てくれた事、手を取ってくれた事、危険だと分かっている尚、その大切な体と心を預けてくれた事に感謝が絶えない。

彼女達は信頼してくれた。背中を、銃を預けてくれた。大切な何かを託してくれた。

そんな大きな想い達に、この程度の事で報いれるとは欠片も思っていないが——それでも、己は武器を取ろう。彼女達が笑える明日の為に。

先生は開眼する。瞳の蒼は秒刻みで深く、深く、マーブルを描きながら染まっていく。アロナ及び教室との完全同調。アロナと彼の境

界が曖昧になってしまうほど、深く繋がっている。

「……ビナー。私を殺す、私が殺す敵。神の楽園への回帰を望み、満ち足りた場所から一步を踏み出した勇気を愚かだと嘲るならば……私は、お前を認める訳にはいかない」

キヴォトスを滅ぼす楽園の証明。彼が滅ぼすべき悪意。それを見つめながら先生は言葉を紡いでいく。

「この世界は流血を重ね、屍を重ね、進化を重ね、発展を重ねてここまで来た。それは、確かに正解ではなかったのかもしれないが……それでも、今ここにある世界には、此処で生きる人には大きな価値があるんだよ」

例え間違いでも、今には大きな価値がある。確かな意味がある。それを。それを――。

「それをお前の勝手な基準で終わりにさせるわけにはいかない」

彼女達の物語は続いていく。それにピリオドを打つのは彼女達でなければならないのだ。間違っても神の代行者を騙る我楽多ではない。

神暦の世界。神秘を帯びた幼年期の子供たち。穏やかで、暖かくて、騒がしい――皆の居場所。

其処を守るための戦い。互いの存亡を賭けた聖戦。

そう、これは――世界を救う戦いである。

「行こう、皆」

「了解！」

白のコートを翻しながら、先生は静かに開戦の号砲を響かせた。



先程の完全起動に合わせて全身改造カスタマイズしたのか、ビナーの攻撃パターンは増加していた。

VLSはクラスタ爆弾のようなより大量殲滅に特化した弾頭が新造され、機体の関節部には無数の射出口が出現した。ここからは通常の弾丸以外にも神秘を圧縮したエネルギー砲が発射可能だ。

大口径主砲は動力源の起動により連射が可能になったのか、出し惜しみなく使用してくる。更にレーザー一辺倒ではなく超広範囲を纏めて薙ぎ払う拡散弾や、連射性を更に向上させた単発弾まで。

それに加えて巨体を活かした攻撃や砂嵐といった超自然現象まで自由自在。付け入る隙が殆ど消されていた。危険度は勿論の事、兵器としての完成度もより向上している。

『シロコー・216度転回、北西方向に火力を集中させて！ タイミングは3秒後！』

予備のドローンを全て起動させ、歩兵とは思えない火力を持つシロコは先生の指示通りにターン、鋒を突き付けるように銃口を向ければ、コンマ1秒遅れてドローンも其方を向く。周りを見ればノノミ、セリカ、ホシノが同じように引き金に指を掛けていて——刹那、アビドスの最大火力が発射された。

先生による2重、3重の攻撃強化。主に連なるもの、聖なるものへの特攻付与。一神教に対する多神教の概念。それにより、銃弾1発ですら敵にとつては決して無視できない威力となっている。

吐き出される圧倒的な火力に成す術もなく薙ぎ払われる敵達。広範囲を制圧するノノミと、漏れを精密射撃でカバーするセリカ、ドローンを含めた複数火器を持つシロコ、最強の突破力のホシノを前に逃げられるわけもなく、範囲内の敵は全て叩き潰された。

そして——徹底的なデカグラマトン対策とアビドスの火力が合わさり、ビナーへ至るための1つの道筋を生み出した。

『突破する！ ワカモツ！』

「仰せのままに」

何時もの優しい雰囲気と声音をかなぐり捨てて、荒っぽくワカモを呼べば、彼女は音もなくアビドスと並び立った。タイミングは完璧、彼女達は生み出した道を疾走する。フォーメーションはシールドを持つホシノと遠近両方で戦えるワカモを先頭に、中衛にセリカとシロコ、後衛にノノミとシロコのドローン。彼女達の能力を最大限に活かしたポジショニング。

「突貫するよ！ 皆、ついて来てッ！」

言うや否や駆け出したホシノ達。だが当然敵も黙っている訳もなく、その行軍を止めようと攻撃を仕掛けに来るが――。

「大盤振る舞いよ！ アビドスの連中の方へ行かせないわ！」

「アルちゃんかっこいい〜！ 私達も負けてられないねツ！」

「あ、アル様、先生！ 御二人の為に根絶やしにしますからツ！」

「はあ、熱くなりすぎ……でも、頑張らないとね」

後方からアビドスに追い縋らんとする敵を全て一手に引き受ける便利屋68の少女達。後先考えない最大火力の全力投下は先生が来た余裕により生まれたもの。彼ならばきつと大丈夫――そんな信頼がこの行動を後押しした。

アルの天才的な射撃センス。ムツキの広範囲爆撃。ハルカの狂気的な突撃。3人を統括するカヨコの援護。それに先生のサポートが合わされば負ける訳がないのだ。

たった4人の奮戦。だが、それは決して無視できるものではなく、ともすればビナー本体にすら痛手を与えられる可能性を持つアルは明確に排除すべきターゲットとして定められた。

向けられた無機質な殺意にアルは内心ビビりながらも――風紀委員長たるヒナの圧力の方が怖かったため、余裕ぶった口調を演出できた。

「背中は何せなさい、アビドス！」

「ありがとッ！ あと、あの時睨んでごめんねツ！」

アビドスの退路を確保しながら、それでいて敵を一体たりとも通さないように陣取る。アビドスと便利屋、互いに背中合わせの状態。文字通りの一蓮托生だ。

アルは乾いた唇を舌で舐めて潤し、ワインレッド・アドマイアー P S G ー1を片手で構え――その銃口を、敵へと向けた。

「ふふっ……ここを通りたければ私達を倒して行きなさい」

「アルちゃん、それフラグだよ？」

「ぜ、全員ぶっ殺しますー！」

「これで連中は本命に集中できる……あとは、私達が食い止めればいい」

カヨコがリロードを挟みながら、冷静に状況を分析する。

突破口は開けた。あとはワカモを含むアビドスが失敗しなければ、若しくは便利屋が敵を通さなければ理想的な運びと言えるだろう。尤も、そんなに上手く行くとはカヨコも思っていない。必ず何処かで綻びは発生する。

だが、そこは先生が何とかする筈だ。彼の役割は戦場全体の統括、指揮、生徒の安全確保。それに加えて、各部隊の司令塔の統括。

故に、便利屋全体の司令塔たるカヨコはこの場の事だけを考えていればいい。敵を一体たりとも通さず、この場を守り切れば充分役割を果たしたと言えるだろう。先ほどよりはずっと楽な仕事だ。

勿論、ビナーに背を向けている現状は好ましくない。何せ、空を裂く絶大な火力をその目で見ているのだ。もし、アルやムツキ、ハルカに向けられれば——そう思うと、とても怖い。だが、そこは先生とアビドスを信用しよう。社長アルが、そうしたように。

そんな事を思っていると、見知った顔から通信が届いた。量子波送受信機構システムメサイアつて便利だね、なんて思いながら——チャンネルをオープンにする。

『お久しぶり……と言うほどではありませんね、カヨコさん』

「アコ、何の用？」

若干辟易とした声音でそう言うが、アコの余裕ぶつた態度は崩せなかった。彼女が鈴を転がすような声音で笑えば、カヨコは面倒そうに溜息を吐いた。

「要件があるなら手短にお願い。今、こつちも正念場だか、らッ！」

振り向きざまにH&Kデモンズ P30で敵の頭部を粉碎する。サイレンサーで抑えられた銃声。鼻孔を擽る火薬の香り。

『今、私達の方は少々余裕があります。ですので、カヨコさんに風紀委員会の砲手達を御貸ししようかと』

「……私達に貸しているの、それ」

『本来なら駄目でしょうが、今は先生の元で共通の敵と戦っていますから』

通信越しに聞こえる爆音。時折、風紀委員本隊への指示が聞こえ

る。恐らく、彼女も近くにいるのだろう。表舞台に出て指揮を取るなんて珍しいが、事此処に至れば現地で指揮を取った方が良いのだろう。

『全員、優秀な人材です。カヨコさんならばきつと十全に指揮を取れるでしょう』

「……分かった。この借りは返すよ」

腕を見込んだアコの申し出を、断る理由が無いカヨコは了承した。恐らく、たった4人で止めている事が気がりだったのだろう。相変わらず素直じゃない、なんて思いながらも——即座に思考を切り替える。

予想外の戦力付与はあったが、状況もやる事も概ね変わらない。敵を通さない、それだけだ。

『ええ、楽しみが増えました——では、武運を』

「そっちこそ」

その言葉を最後に、通信が切断される。次に話すのは全て終わった後、互いの無事を喜びながら。

主の権能／空の星を、この手に

ビナー本体はアビドス対策委員会とワカモ。

その彼女達へ追い続ける敵の足止めは便利屋68。

そして、先生が声を掛けた中で最大数の兵力を誇るゲヘナ風紀委員会は雑兵処理に徹していた。数えるのも億劫になる数の敵全てを、ゲヘナの治安維持機構が総力を挙げて潰しているのだ。

「アコ、第六大隊を下がらせて。第八機動小隊はカバーに回して、待機中の第十二大隊を投入する」

それは最強のヒナも例外ではない。アコが風紀委員全体の指揮を取る傍ら、時折こうして口を挟みながら部隊を動かしている。

被害状況が大きい部隊を下がらせて、補給と再編成を受けさせる。退却のカバーはミレニウムが開発した機動スーツを纏う隊に任せ、抜けた穴は待機中の部隊が埋める。理想的、とは言えないがそれなりに上手く事が運んでいるだろう。

「第十二大隊が展開するまでの時間は私が稼ぐ」

その大きな要因はやはりヒナの存在が大きいだろう。最強クラスの単体戦力、広範囲殲滅に長けた武装、優れた頭脳、莫大な神秘。彼女一人でこの場の戦況をコントロールしていると言っても過言ではないほど、その身に秘めた決定力は大きかった。

ビナーが最上位警戒対象に彼女を含めるのも道理だろう。起動前とはいえ大質量の巨体を唯の蹴りで揺るがせたのは覆せない事実であるし、本気になれば今のビナーとすら真正面から戦^やり合えるスペックを持っているのだ。

仮にヒナがあらゆる被害を無視しこの場の風紀委員を全員見捨てビナーに向かったら——恐らく勝てるだろう。それだけ、彼女という存在は強大だ。勿論、彼女が風紀委員を見捨てるなんて万一にも有り得ないため、この仮定は成立しないが。

それに加えて、この場の雑兵はヒナが釘付けにしているようなものなのだ。彼女が移動したらそれに追従するように大規模な兵力が移動するだろう。

だが、それでも——彼女がこの戦場において重要なファクターである事は疑いようのない真実であった。

「ターゲットを確認」

トリガーを引き、敵を蹂躪する。7・62mm NATO弾が分間1200発吐き出されるその様は正しく暴風雨の如く。機関銃という火器はこの場において最も有効な暴力の1つに数えられるだろう。ヒナの神秘であれば弾丸数発で大抵の敵は叩き潰せる上に、貫通弾による撃破も狙える。対集団戦闘において彼女を上回る存在はいないであろう。

マガジンの弾を全て吐き出し終え、トリガーにロックが掛かる。ヒナは表情を一切変えずに即座にリロードを挟もうとするが、それを隙と見たのか数体の敵が接近してきた。彼我の距離は30mもない。リロードを終える頃にはもつと縮まっているだろう。

絶大な火力、殲滅力を誇るヒナ。だが、銃弾は当然無限ではないため必ずリロードを挟まなければならない。その隙に、銃を活かせない至近距離まで潜り込んで一気に叩く——戦術としては間違っていないだろう。

だが、致命的な読み間違いが一点ある。それは、相手がヒナである事——ただ、それだけだ。

即座にリロードを済ませたヒナは、あろうことか銃を空中に放り投げた。そのまま獣のように姿勢を低くして、足の筋肉を使ったしなやかな疾走、一瞬で距離を踏み潰す。真正面にはアサルトライフルを持ったオートマタ。

「甘いわ」

神速の貫手。それはオートマタの装甲を裂き、内部フレームを砕き、ICを割り、さらにそれらを逆手順で貫いた。一瞬で機能停止に陥ったオートマタから手を引き抜き——明るい紫の眼光が次なる敵影を捕える。

「……」

振り向きざまに回し蹴りを繰り出し、背後から接近していたオートマタの頭部を吹き飛ばす。遠い場所で頭部が落下する音が聞こえた

が、まだ敵の内部システムが生きているようで頭が無い状態においても彼女に銃を向けてきた。

だがそんな事に一々心を動かす訳もなく、極めて冷静に銃を持つ腕を膂力に物を言わせて振じ切り———マニピュレータが持っている銃を拝借。そのままトリガーを引き、近寄っていたオートマタとドローンを適当に撃破して———そこで漸く、空中に放り投げた銃をキャッチする。

「殲滅する」

弾切れしたアサルトライフルを敵に向けて投擲し、キャッチした愛銃で以って敵を薙ぎ払う。荒れ狂う暴力の嵐が去った後には、巨大な翼を羽ばたかせるたった一人の少女が立っていた。

———これが、ゲヘナ最強。キヴオトスの頂点の一角。

その身に宿す神秘はソロモン72柱、序列第一位のバアル。或いは、バエル。元はセム族の主神、天空と豊穰、植物、英雄神であったバアル。ホシノと同じ系統の天空神の神秘。

悪魔としてのバアルの起源は、異教徒の主神を異端として弾圧するために歪めたことだ。かの有名なベルゼブブも、主神バアルを称える言葉であるいと高き王を貶めるために生まれ、それが一人歩きした結果。故に、神としての側面と悪魔としての側面の2重属性を持っている。

他にも、バアルを表す言葉は多くある。東の王、神殿の王、館の主———他にも、色々。

その中でもヒナは『館の主』という言葉を入っていた。その理由は単純で、大切な人を連想できるから。

———シャイレ先生
館の主。

少々無理矢理だろうか？ 確かに、思い付いたときは自分でも頭に砂糖が詰まっているのじゃないかと考えたし、らしくないと言われるかもしれないが———それでも良かった。どんな形でも彼との繋がりを感ずる事ができるならば。

ヒナは一つ息を吐いて、コートを翻す。この場は大方蹂躪した。手が空いている今は押されている箇所のカバーに行かなければならぬ

い。

「頑張つてね、先生」

ヒナはそう言つて、とても優しく笑つた。



ビナー本体との交戦は、激戦と呼ぶに相応しい様相を呈していた。四方八方から襲い来るレーザー、空から降り注ぐミサイル群、至る所で巻き起こる砂嵐と、圧倒的な火力を持つエネルギー砲。

大半の銃弾は強固な装甲を持つビナーにとって意味を成さない。この場で痛手を与えられるのはノノミのミニガンによる集中砲火か、ホシノのゼロ距離射撃か。前者に関してはこの場で長時間足を止められないため現実的ではなく、後者は接近する隙が無いためそもそも不可能だ。故に、取る手段は。

『シロコ、ミサイルの制御権を貰うね!』

「了解!」

シロコのドローンに搭載された小型ミサイルしかないだろう。彼女のコマンドにより放たれたミサイルの制御権は即座に先生へ譲渡され、複雑な軌道を描きながらCIWS代わりのレーザーを掻い潜りビナーへ着弾。装甲の一部が吹き飛んだ。しかし。

「ッ! あれは……」

「嘘でしょ!? アイツ、再生できるの!?!」

先程吹き飛んだ装甲が復元し始めているのだ。その様子は生命体の細胞分裂によく似ている。残った部分、無事な部分から足りないものが、欠損したものが生成され、一切合切元に戻る———そう思ったが。

『やらせませんッ!』

アヤネの声が通信越しに響いたかと思えば、先ほどミサイルが着弾した場所を中心に大きな爆発が起きた。その衝撃はビナーが身動きじょうぎをするほどであり、シロコが付けた傷を更に拡大。加えて再生速度も

目に見えて落ちている。

「ナイス、アヤネちゃんツ！」

必要のないドローンに有りつ丈の爆薬を詰め込み、その上からアロナが再生阻害やその他諸々を重ね掛けした一回きりの特攻兵器は大きな戦果を挙げた。ノノミもミニガンの火力を存分に活かし、セリカとシロコ、ワカモは各々持ち得る最大火力で以ってビナーを屠らんとする。

そして、そのビナー本体を駆け上がる小さな影が一つ。

「ゼロ距離射撃、避けられないでしょ？」

ビナー頭部、右眼球に当たる場所に立つホシノは迷いなく引き金を引いた。刹那、耳を劈くような不協和音が響き、空気が爆発したかのような衝撃波が全身を襲う。ビナーはホシノを振り落とそうとその巨体を振らせるが、駆け上がる直前に貫つたワカモの短刀をハーケン代わりに突き刺している彼女は一向に離れない。

左手で刀の柄を掴み、右手でショットガンの引き金を引き続けるホシノ。だが、一方的な有利が何時までも続くわけもなく、マガジンを空にしたタイミングで短刀が外れ彼女は空中に投げ出される。そして、宙に浮き身動きが取れない彼女へ向けてビナーの砲門が向けられた。

「ホシノ先輩！」

収束する黒の極光。荒れ狂う熱エネルギーと、狂う磁場。ホシノは思う、誰も助けに来ないでほしいと。

これから放たれるエネルギー砲の種類は拡散タイプだ。助けに来ようとしたら諸共焼き尽くされてしまう。つまり、1人を見捨てるか、2人仲良く傷を負うか。幸い、自分は頑丈だ。シールドが展開できなくとも何発か耐えられるだろうし、この高さから自由落下しても死にはしない。

それにしても、AIのくせに厭らしい戦術だ——そんな事を思っていると、収束する光の前に半透明の障壁が張られた。

『ワカモォー！』

先生の荒い叫び。それと同時にホシノの視界を焼き尽くすような

光が奔った。だが、致死性の熱はホシノに届かず全て阻まれる。それに対して疑問に思う隙も無く、横合いから軽い衝撃が体を襲って——
——ホシノは己を抱える少女の名を呟いた。

「——狐坂、ワカモ」

「刀を貸せと仰ったと思えば、こんな無茶な突撃に使われるとは……」
溜息交じりに宙を舞う黒の着物。それを撃ち落とさんと無数の殺意が迫るが、その一切は彼女達に届かない。躲され、防がれ、或いは切り払われ——無傷のまま、彼女達は砂漠に降り立った。

そして、後衛のアヤネもいつの間にか合流していた。漸く揃ったアビドス対策委員会、フルメンバー。

彼女達の顔に一切の負の感情は無い。敵いようのない脅威だと知りながら、必ず勝つと豪語しよう。

眼前には未だ健在の滅び。半壊した頭部が蠢くが、再生速度は欠伸が出るほど遅い。それが不快なのか、ビナーは一度絶叫した後——
——己の最奥に手を伸ばした。

『御手の業はまことの裁き、主の命令は全て真実』

無機質な機械音声。聖典の一説、その引用。

『御名は畏れ敬うべき聖なる御名』

——主の『権能』が発動する。

『テトラグラマトン・ブレイン・ス・セプテム
『聖四文字残滓・十の災い、降り注ぐ零の雫』』

アビドスの少女達は初めて、その目で本当の『神』を見た。



雷鳴が轟き、黒に染まる空から降り注ぐは夥しい数の電だった。それは出エジプト記に於いて聖四文字がイスラエル人を救うためにモーセを介してエジプトに下した災禍——十の災い、その七つ目。稲妻と共に降り注ぎ、植物を枯らし、生き物を殺し、あらゆるものを砕いたとされる電。その再現が少女達に牙を剥いた。

無限すら砕かんばかりの権能。ビナーは目の前にいる少女達だけでなく、アビドスという土地そのものを攻撃しているのだ。此処まで

事態が切迫してしまった今、カイザーや借金がどうのこうの、というスケールの問題ではなくなってしまった。

文字通りの規格外であり、星を塗り替える異界法則そのもの。キヴォトスを滅ぼす神の代行者だった。

酷く寒い。吐く息が真っ白だ。今は春だというのに計測された気温はマイナスに突入しそうな勢いで低下している。このまま放置すればアビドスの気候そのものが変わってしまうだろう。ビナーが影響を与えている範囲も秒刻みで拡大しており、30分にも満たない時間で人が残る市街地を呑み込む——そんな演算結果が出ていた。

最早猶予はない。一刻も早く倒さなければ文字通りアビドスは死ぬだろう。

だというのに。

「……ふへっ」

ホシノは笑っていた。

「うん、私って本当……幸せ者なんだなあ」

噛み締めるように呟く彼女を見て、アビドスの少女達もまた笑う。

そう——ホシノという少女はずっと幸せだった。夢を託してくれた先輩がいて、大好きな後輩がいて、その後ろでは見守ってくれた大切な大人がいる。

その幸せにずっと気が付かない振りをしていた。自分なんかと幸福を受け入れられなかった。その行為が、自身と関わってくれた全てに泥を塗るも同然だと分かっているにもなお、少女の心は幸福を拒絶してしまった。

「私には、仲間がいるんだ。一緒に過ごして、馬鹿やって、喧嘩して、笑い合える——本当に、大好きな人達が」

だが、今は違う。ホシノはこの幸福を受け入れた。傷だらけで、不格好で、下を向いても——それでも、共に在ってくれた沢山の幸せを小さな胸で抱きしめる。

抱え込んでしまった。沢山の思い出も、過去も、問題も、責任も。なまじ、自分一人でもどうにかなってしまうからそればかり。誰にも話せず、誰にも言えずに、ここまで来てしまった。

でも、今は違う。ちゃんと話せる。言えなかったこと、言いたかったこと。

私は孤独じゃない。独りぼっちじゃない。共に歩いてくれる誰かがいて、共に笑ってくれる誰かがいる。心と心の輪はいつまでも、何処までも繋がっているのだから。きつと夢にも繋がつているはず。

——今だったら、そう信じられる。

さようなら、弱くて泣いてばかりの昔の私。でも、置いてきぼりにはしないよ。弱さも強さも、過去も現在も抱いて一緒に歩いて行こう。

この先に広がる、透き通った蒼色の明日みらいに。

シロコを見ると、彼女は微笑みを浮かべてサムズアップ。

ノノミを見ると、彼女は満面の笑みで銃を構えた。

セリカを見ると、彼女は少し顔を赤くしてそっぽ向いた。

アヤネを見ると、彼女は力強く頷いた。

ワカモは敵を見据えている。そのブレない芯が今はとても頼もしい。

ホシノは拳を高く、高く突き上げる。

今まで、誰も救えなかった小さな手。

手放してばかりで、すり抜けてばかりで、失ってばかりで。何一つ成せなかったと泣いて、悔やんでばかりいた。

「私達は、アビドス対策委員会！」

だか、それでも手放さなかったものがある。

すり抜けなかったものがある。

掴んだままのものがある。

誰も救えなかったなんて嘘だ。彼女はちゃんと救えるものがあった。救ったものがあった。そして——これからも、彼女の手はきちんと誰かを守れ、救える。

「アビドス対策委員会、出撃ッ！」

「おーッ！」

空の星を、この手に。

■■■■、
気合を入れ直したアビドスを嘲るようにビナーは叫び、その巨体を振らせ砂の津波を巻き起こした。神秘纏う砂塵は鉄筋コンクリートすら削り取る破壊力を持つが、今回はそれだけでない。砂漠に積もった電がこの津波の中に紛れ込んでいたのだ。

全てを呑み込み、叩き潰そうとする意図が見え透いている技。圧倒的なスケールを持つ神の災いの前に躍り出たのは、盾を構えたホシノだった。

「私に任せてッ！」

巻き起こされた災害に比べて余りにも小さな体。都市すら呑み込まんとするスケールを前に、ホシノは犬歯を？き出しにして獰猛に笑う。欠片も臆さず、迷わず、躊躇すらなく、突っ込み——盾と津波が衝突した。

「ぐ、うう……！」

全身が砕けんばかりの衝撃がホシノを襲う。猛スピードの重機に突進されたと錯覚するほどのインパクトは先生が展開した三位一体トリニティの概念と同調した3層の障壁を砕き、彼女の盾へ、体へと伝搬した。骨が軋む。筋繊維が千切れる。あらゆる細胞が悲鳴を上げている。無理だ。不可能だ。ホシノの冷静な部分が己に死を突き付けるが、それがどうしたと前進する。無茶も無謀も承知だ。その上で、やらなければならぬ。

無茶をこじ開ける。無謀を押し通せ。不可能を可能にしろ。足りないなら掻き集め、至らないなら振り絞れ。

そうしなければ愛したアビドスが滅ぶ。そんな当たり前の現実から目を背けるな——！

ホシノは母音の『お』を断続的にがなり立て、怒鳴り上げ、喉を震わせる。どくん、と脈打つ心臓。輝く光輪ハイロー。刹那、爆発する神秘。この瞬間、小鳥遊ホシノという少女は己に課せられた限界を1つ踏み越えた。

「オオツ——！」

ホシノは力任せにシールドを振り抜く。彼女達を呑み込まんとした砂の津波は一切切粉砕され、誰にも傷を負わせることなく全て元の砂漠に戻った。そして、返す刃のような神速の銃撃。構えて、照準を合わせ、トリガーを引くまでにコンマ何秒のオーダー。

——体が軽かった。秒刻みに進歩しているような気がする。強くなっている。格段に、自分でも明確に分かるくらいに。まるで思考と行動が直結しているような、あらゆるタイムラグがない。アドレナリンが溢れ出る。五感が冴え過ぎていて気持ち悪いくらい。第六感も鋭敏だ。まるで未来が見えているように相手の行動が手に取る様に分かる。コンバットハイ、唇の両端が軽く吊り上がる。瞳孔が拡大して2色の瞳が剣呑な色を帯びた。

殺到する攻撃を全て躲し、防ぎ、間隙に銃弾を放つ。その動作を数回繰り返すとビナーの防御壁と装甲が粉碎された。

それを見て、ホシノは叫ぶ。

「攻撃は全部私が受け止める！ 皆はその間に攻撃してッ！」
「了解ッ！」

再開される先生の防御壁。これのおかげでかなり負担が軽減された。先ほど負った傷も全て再生が終わっている。手を軽く何度か握ったり、足首を回したり……違和感がない事を確認。シールド本体の方もまだ無事だ。これならばある程度は耐えられるだろう。

「それにしても、この先生のサポート……ちよつと反則過ぎないかな〜？」

ホシノは苦笑いして、遠くで自身達のサポートをしている彼の姿を幻視する。戦場で欲しいあらゆるデータを表示する機能、円滑な双方向通信、練達と呼ぶことすら侮辱になるほどの指揮。

それだけでも厄介なのに攻撃強化、防御強化、再生強化まであるのだ。彼個人の戦力は皆無だが、直接戦闘以外にやれることが多すぎる。彼一人で何人分の仕事を熟すのだろうか。

——と、そこまで考えて思考を切り替える。目の前の敵はまだ健在だ。余計な事に思考のリソースを割くわけにはいかないだろう。シロコとセリカが機動力を活かしてビナーの狙いを絞らせないよ

うに攪乱。それぞれ愛銃で掃射を行いながらダメージを与える事に注力している。ノノミは自慢の火力でビナーの装甲を吹き飛ばす事に尽力し、アヤネは支援を行いながらP229コモンセンスで射撃を行っている。ワカモはビナーを攪乱しつつ攻撃し、他の4人のカバールを行っていた。流星は音に聞こえし七囚人、武闘派筆頭の面目躍如と言えるだろう。一人でできる事、やれる事が多い。それは彼女が慕う彼にそっくりであった。

ホシノは盾を構え、襲い来る神秘の雷を防ぐ。悪なるものを焼き尽くす天からの光、災いの一部。先ほど津波よりも更に重い衝撃を全身が襲うが——耐えきった。次の攻撃までのインターバルが反撃の好機。

表面が焼け爛れ使えなくなった盾を放り投げ、ショットガンを片手にビナーへ突貫するホシノ。その姿は2年前、天才的なセンスと超攻撃型の戦闘スタイルを持ち、各所から畏れられた暁のホルスと呼ばれた少女そのものであった。

攻撃は全て躲すか、先生のシールドを信頼してノーガード。ビナー以外は一切目に入らないと言わんばかりに最短距離を最速で駆け抜けた彼女は、遂にビナーの懐に潜り込んだ。

「ハア——ッ——」

ビナーの全身を覆う銀色の装甲。それを素手で力任せに引き千切り、内部を露出させるとそこにショットガンの銃口を突き付ける。

そのまま彼女は迷いなくトリガー。1マガジン分たつぷりと弾丸を叩き込んだ。おまけと言わんばかりに手榴弾を損傷の近くに置いて逃走。起爆した途端にビナーが怒り狂ったように体を暴れさせ、辺りに無差別な破壊と砂嵐を齎した。

巻き込まれたくない少女達は危険を察知した途端に離脱を選択し、迷いなくビナーから離れて様子を窺う。確かにダメージは与えられている。再生障害が有効に働いているのか、ビナーの装甲や損傷は一向に復元する様子はない。だが、行動不能になるほど大きな傷は与えていなかった。目の前にいるビナーはピンピンしているし、出力が低下している様子なんて微塵もない。

膠着状態だった。攻撃は通るが、有効打が与えられない。このままだと不毛な争いを数時間に渡って繰り広げなければならず、そうなつてしまえば災いがアビドス全域を覆い尽くして終わる。

ホシノは思考を回す。盾の予備はあと2つ。だが、今必要なのは攻撃力だ。防御力はお呼びじゃない。攻撃力に秀でている空崎ヒナは——いや、駄目だ。彼女がいなくなれば前線が崩壊してしまう。「うへ、どうしようか。このままじゃジリ貧だから、何処かで手を打たないと——」

「ああ、そうだね。勿論、切り札はあるよ」

少女の後ろから誰よりもこの場に相応しくない者の声が、聞こえた。



時間と空間の隙間、或いは断層。戦いの中で、意識と意識の縫い目の中をゆっくりと歩く。答えは既に見えている。風景は全て溶けて伸びている。時間の流れはとても遅い。

オートマタの残骸を踏みながら、避けながら、誰にも悟られる事なく——先生は最前線へ向かっていた。アロナのナビゲーションを頼りに、誰もが意識を向けない場所を縫う様に、ビナーへ向かう。

「……」

その足取りはまるで夢遊病の患者のようだった。だが、彼の意識ははっきりとしているし、目的も明確に定まっている。ただ、足取りだけが夢を見ているみたいに虚ろだった。

やる事は唯一つ。ビナーを停止に追い込むこと。可能ならば破壊まで持っていきたいが、それが難しいのはよく分かっている。故に、最低でも修復に半年以上掛かるような傷を負わせられればそれで充分だ。

——彼は過去を思い返す。

数多の滅びと対峙した。誰かの為に滅ぼした。彼女達の為に殺す

ことを選んだ。

先生は神の楽園ではなく、幼年期が終わる少女達の生きる世界を選んだ。懸命に、頑張つて生きている彼女達を選んだのだ。

その選択は、微塵も後悔していない。この世界は彼女達が生きる場所なのだ。神の愛玩具が躍る劇場ではない。

——故に、この手で。

まるでこの世界に空いた空虚な孔のように、悟られる事なく——
先生は、アビドスの少女達とワカモの元に辿り着いた。

「せ、先生ッ!? 危険です! 今すぐここから——」
「心配ありがとう。でも大丈夫だよ。短時間なら障壁も持つし、身体だつて耐えられる」

最も苛烈な戦いが繰り広げられている最前線へ護衛すら付けず一人現れた彼に皆が驚愕し、後衛の方に戻ることを促すが、彼は笑つてやんわりと断つた。

確かに、この場は先生が生存するには全く適さない環境だ。足場の砂粒一つ、大気に至るまで濃密な神秘を帯びている。それに加えて宇宙線まであるのだ。この場の全ては神秘を持たず、柔い体の彼にとつて猛毒にも等しいだろう。

それは防壁を携えていても変わらない。現に彼は呼吸一つするだけで肺と喉が焼けるような痛みが襲つており、秒刻みで全身の細胞が死滅している。体のあちこちが異常を訴え、システムの箱にリンクさせている彼のバイタルデータも様々な箇所がイエローゾーンに突入している。アロナが慌てて防壁の強化と改善を頑張っているが、仮にそれが終わつても彼を蝕む毒を完全に無害化できるわけではない。この場に彼が留まれるのは長くて1分。それ以上の滞在は死を意味する。

そして、そんな事を誰にも悟らせない先生はいつも通りの笑顔を浮べて。

「少し時間を稼いでほしいんだ。20秒程度。それだけ貰えれば、後は何とかする」

「20秒……」

たった20秒、されど20秒。ビナーという怪物を相手取る20秒は想像よりもずっと長いということは、彼女達が一番よく分かっていた。時間を稼げばいいと言うが、あんな化け物を相手に——と、頭の冷静な部分が無茶と笑うが、少女達の意志は既に固まっている。「20秒、先生に狙いを向けさせなければいいんだよね?」「ああ、無茶なお願いだとは分かっている。でも——」「ん、そうしなきゃいけないでしょ? 私は、やる」シロコの頼もしい頷き。できるできないではなく、やる。根性論と言われればそれまでだが、それでも。

彼女は仲間達を見渡し、分かり切った意志を確認する。「私も頑張りますね☆」

「分かったわよ! やればいいんですよ! だから、先生も無茶だけはしないでね!」

「はい。先生の20秒、何としてでも稼いでみせます」

アビドスの頼もしい頷き。無茶だと、無理だと分かっているが——
——託してくれた。信じてくれた。

それを本当に嬉しく思い、必ず報いなければと決意を更に固くする。失敗は許されない。敗北も許されない。

手に掴むのは疑う余地もない完全勝利。求めるのは完全無欠のハッピーエンド。

「ありがとう、皆……ワカモ、頼むよ」
「はい。必ずや」

深い忠誠の言葉。片膝を突き、騎士のように首を垂れる和服の彼女は彼の勝利を信じて疑わない。彼ならばできると信じているのだ。彼は、どれだけ遠く穢れても己の道を進み続ける。

ワカモはその道を肯定してあげたかった。間違っていないのだと、正しいのだと。

故に、それを阻む者は全て踏み潰す。そして、彼の元へと帰るのだ。「うへ、皆、気合充分だね。先生、私も時間稼ぎに行けばいいかな?」「いや、ホシノは別でやってほしい事があるんだ。それに協力してほしい」

「うん、私ができる事ならなんでも任せて」

先生とホシノは顔を見合わせて緩く微笑む。そして、彼は息をゆつくりと吐いて——瞳を鋭くした。

「クラフトチェンバー、テイラーメイド、コード13」

十字教の忌み数が割り当てられた礼装は尊き者を蹂躪する致死の牙。

七の罪悪で強制的に墮天させる神殺しの杭。

重厚な音を立てて、銀色の直方体は何もない空間から落下する。1 m四方、高さが2 m程の立体。側面からは2本のコードが伸びていて、片方はタブレットやスマホの端子に対応した物、もう一つは先端が針のように尖っている。

「——」

彼は無言で物体から伸びる2本のコードを1本はシツテムの箱へ、もう1本は彼自身の首へと突き刺した。コードの先端が筋肉に触れ、神経に触れ、骨に触れる。突き刺した首からは一筋の血。音もなく流れて、先生の纏う制服を血の色で汚した。

「先生ッ」

「大丈夫だよ、心配しないで」

突然の自傷行為にホシノは目を丸くして先生を見つめるが、彼は笑って手を振る。これの完全起動には必要な動作なのだ。先生が必要なデータを演算し、術式を構築し、それをアロナが礼装に組み込む——そういう構造になっている。つまり、アロナと先生の共同作業だ。

「ホシノ、これを挟んで私の反対側に立ってくれないかい？」

「え？ う、うん……」

「一か所だけ色が変わっている場所、分かるかな？ そこに手を翳して」

先生の指示通りに物体を挟んで彼の反対側に立ち、色が変わっている部分に手を触れさせる。刹那、触れた箇所から淡い光が物体全体に奔った。それは亀裂のようなものであり——何かが中から生まれようとしているとホシノは悟った。

「うん、そうそう……じゃあ、行くよ」

幼子へ声をかけるような音色、ホシノを安心させるための声でそう云って。

『すたんばい、すたんばい、すたんばい』

幼い、少女の声。

「空の星々よ、青の教室よ、蒼き少女よ」

その詠唱はビナーが聖四文字へアクセスするために用いたものと

酷似しているが、その根本は全く別だ。

「キミはいつも、私の傍に、いてくれた」

大切な誰かを守るために。

「——— 神秘、装填」

神殺しが幕を開ける。

天命の元に

撃鉄が落ちる。火花が散る。世界、或いは意識の切り替え。前人未到の神殺しが幕を開けた。長く続いたアビドスの悲しみに終止符を打つために。

届かぬものを蹂躪する神秘が装填される。

『システム起動、神秘収束——演算開始』

アロナがシステムを励起させて、稼働に必要な神秘を礼装に集束する。取り込む量自体は然程多くないが、その密度だけが尋常ではない。極限まで礼装に神秘を集束させて、恐るべき突破力を以って敵を打ち破るのだ。防御も装甲も関係ない。全て貫通し、狙うのは唯一点、その心臓。

『アウエイクン接続完了、アウエイクン出力転移、アウエイクン稼働開始』

仮に砂や砂糖でも莫大な質量を極限にまで圧縮し、超高速で射出すれば全てに風穴を空けられる——という理論と全く同じだ。神秘という不定形なものに形を与え、それを極限まで圧縮し、内部で爆発させることで加速度を与えて——その突破力で敵を穿つ。

口からどす黒い赤が肌を伝いながら落ちて、砂漠の地面に毒々しい花を咲かせた。脳がオーバーヒート寸前だ。あと少して神経が焼き切れて廃人になる——その一步前まで酷使し、相手のスケールを演算して墮天術式を構築する。

だが、当然それを許すビナーではなかった。

「」

ビナーは酷く冷静に先生を殺す術を演算する。本体からの攻撃は確実に防がれる。では雑兵を使うか——否、即座に彼を殺せる者は居ない。そもそも、ビナー本体の攻撃でなければ彼の防壁を振り切る事はできないだろう。

ではどうするか。答えは単純、意識が向けられていないビナー本体を使えばいい。対象はホシノが壊した本体の一部。そこにはお誂え向きに神秘を発射する射出口が付いている。

破壊されたものを遠隔操作で起動させ、圧縮し、演算し——致死の弾丸を装填した。

「うあ」

神速、と呼ぶのが相応しい攻撃だった。第3宇宙速度を超える初速で飛来したエネルギーは脇目も振らず一直線に、最速で——先生を貫いた。アロナの防壁は間に合わなかった。

脆弱な肉の体に風穴が空く。場所は左胸、心臓直下。ごぼり、と零れる赤色。口から溢れる血。そしてソニックムーブに傷つけられた内臓が絶叫を上げ、激痛を脳に送る。

全身の力が抜けて、思わず片膝を突いて跪いてしまいそうになり——

「せ、せんせ——」

「構うなッ！」

鋭い声と共に、先生は耐えた。ホシノの声を起爆剤にして、彼は足を踏ん張る。そうだ、こんな所で倒れる訳にはいかない。必ず全員で、生きて帰るのだ。

崩れそうになる両脚に力を込めて、大地を踏みしめる。口から漏れた血を乱暴に拭って、眼前の滅びを見据え——その顔を獰猛に歪めた。

ああ、致命傷だ。血管が損傷した。心臓を含む内臓も傷を負った。近い内に死ぬだろう。

だが、生きて帰る。そう誓ったのだ。その契りは決して破れない。

「狙いが甘いじゃないか、ビナー。お前を殺す悪意は此処だぞ……！」
パッチを使用して止血し、ナノマシンを多量に打ち込んで傷を再生させる。それに加えて活性アンプル、止血用血液凝固剤を馬鹿みたいに投与して、駄目押しにアロナの生体サポートを駆使して無理矢理体を立ち上がらせてから、その凄惨な笑みを勝ち誇ったものに変えて。

「それに、私の勝ちだ」

『殲滅対象、捕捉完了』

アロナと先生の意志がついに神の代行者を捉えた。

生命樹第三セフィラ、第三神秘統括細胞、ビナー。

テトラグラマトン
聖四文字との接続状態。

神秘質量、45億7800万。

発生区間、146億年。

神格規模、創世記。
ジェネシス。

改めて考えても馬鹿げているとしか言いようがないスケールだ。正に神の名に相応しい。今期の生命では何一つ及ばない、怪物の中の怪物。あと10万年の進化と発展を重ねて届くかどうか。少なくとも宇宙に進出した程度の文明では一切太刀打ちできないだろう。

だが、それでも——戦う手段はある。

『礼装、疑似展開完了』

ホシノが手を翳した場所を中心に銀色の装甲が剥離し、中に存在する本体が徐々に露になる。メカニカルな外見。キヴォトスでよく見る銃とは根本的に武器の種類が異なる。しかし、一部の形状は銃と似ていた。持ち手があり、トリガーがある。恐らく、何かを射出する機構。だが、その口径だけが馬鹿げている。対物ライフルですら比較にならない。

「——正統顕現、天命」
ネガ・セフィラ

先生の一声と共に、覆われていた装甲の全てが吹き飛んだ。



概念武装、天命は尊き者……聖四文字に連なるものを殺す礼装だ。もつと厳密に言えば、神の領域にアクセスした何某の内部を蹂躪するための墮天術式。強大さの根本である『罪が無い事』や『穢れが無い事』、『完全である事』を成り立たなくさせ、神へ至るためのアクセス経路を破壊し機能停止に追い込むためのものだ。

簡単に言ってしまうえば、罪悪の押し付け。悪と穢れを突き付けて完全を破壊し、神の御許から追放する。故に墮天術式。ネガ・セフィラの否定と名付けられているが、別にセフィロトだけが特攻対象ではなく、神に連なるものや聖なるものであれば大体がこの礼装で駆逐できる。

礼装の形は巨大な杭打ち機だ。これはエンジンア部がロマンだか

ら、とゴリ押ししたものであるが……それなりに理に適っていると思う。杭打ちならば外すことはなく、きつちりと全てを当て切れるだろう。それに加えて、杭というものは聖典に於いて重要な意味を持っている。神の子の処刑。神の御許に在るものを殺すには良い手段と言えるはずだ。杭以上の神を殺す道具に相応しいものがあるとするれば十字架か、或いは槍か。

「先生、これ……」

ホシノの身長には不釣り合いなほど巨大な得物。それを見上げる彼女の表情には驚愕が大きく浮かんでいたが……その裏側には恐れと不安が滲んでいた。

やはり怖いのだろう。敵ではなく、この礼装自体が。

滅びを滅ぼす殲滅兵器。先生が辿り着いたセフィラ殺しの真実。殲滅力こそ低く応用も効きにくいのが、対セフィラ、対神格、対尊き者に過剰なまでに振り切れている。正に殺戮の機能美。敵を殺す、その一念のみを突き詰めた結果、そこに危険な美しさを孕んでしまった。「ごめんね、こんな役を任せちゃって」

その怯えを的確に感じ取った先生は、本当に申し訳なさそうにホシノに笑いかける。

こんな殺戮の道具を生徒に握らせたくなかった。生徒をビナーの懐という危険地帯に突っ込ませたくなかった。本当ならば自分がやりたかった。

だが、できないのだ。己はヘイローを持たないから。後先考えず大人のカードを使った自爆特攻染みたやり方であれば一回程度は使用できるが——今はまだ使うべきではないと弁えている。

ホシノは先生と礼装を交互に見つめ、それから意を決したように口を開く。

「……ううん、いいよ。それに、私の大一番だ。アレを倒す大役を任せられてありがとう、先生」

ふわり、と天使の羽が落ちた様な笑顔。くるりとしていて、愛らしい……ホシノらしい笑み。

言いたいこと、聞きたいことは沢山あった。何故こんなものを用意

できたのか。これは、ともすればヘイローすら砕くことができるのではないか。殺意を形にしたような道具を一番戦いが似合わない彼が持っていることも。

それに加えて、他ならぬ先生自身の傷。口から零れたどす黒い赤を、胸から零れた鮮血の赤。大丈夫ではないことは明白だ。また私の前で無茶をするのか、また死んじやいそうになるのか——そう、問い質したい気持ちでいっぱいだった。

だが、彼女はその全てを呑み込んだ。呑み込んで、敵を倒すことを選択した。何故ならば、彼の眼には確かに意志があつた。必ず生きて帰るという意志が。大団円を掴む決意が。少し前、『仕方のない事だから』と、痛みを受け入れていた諦観の彼はこの場に居ない。

だから、安心して前へ進むことを選べた。何処へ行っても、彼と繋がっていられる。システムで、心で。何処へ飛び立っても、彼は必ず帰りを待っていてくれる。まるで夜天を照らすシリウスであり、導のポラリス。旅人の道しるべ。

黒服の『彼の何を知っているのか』という問い。それに今なら自信を持って答える事ができる、何も知らない。だから、これから知るのだ。彼を。彼の好きなこと、愛したもの。会話を重ねて、時間を重ねて、ゆつくりと。相互理解と融和、受容性、絆と対話の大切さは彼が充分教えてくれた。

だから、今度は私が歩み寄る番だ。

「先生」

「……うん」

「行つてきます！」

「ああ！」

ホシノは駆け出す。大事な一步を踏み出すために、大事な仲間の元へと帰るために。

「私が全力でサポートする！ だから振り返らないで、ホシノ！」

ホシノの瞳に映るオルタナティブが最適化される。ビナーへ至る道が詳細になり、まるで彼女は世界の隙間を縫うように着実に距離を詰めていく。それは宛ら、アロナのサポートを受けた先生のように。彼

女は多次元解釈の応用により、0でも1でもない状態に遷移した。

だが、それでもビナーは正確に捉える。多次元解釈程度で接敵を回避できるような温い相手ではないのだ。その頂上の演算力を駆使し、世界の狭間を疾駆する少女を殺そうと殺意を向けるが――。

「絶対に通しません！」

「やらせる訳ないでしょッ！」

「ん、ホシノ先輩は私達が守る」

「はい！ 指一本触れさせません☆」

しかし、その一切の攻撃は阻まれる。射撃、ドローンによる攻撃、手榴弾。これが最後だと位置づけて、出し惜しみなんてしない。時間稼ぎに撤する少女達は各々の全力を以ってホシノを殺さんとするビナーを食い止めていた。

「……そっか、すつかり……大きくなったんだね」

噛み締めるように呟く。面倒を見なければならぬ、守らなければならない大事な、大好きな後輩達。彼女達を悪意から、敵意から何と少しでも守らなければならないと思っていたが……もう、どうやら彼女達は守られるだけではないようだ。それに僅かな寂しさを覚えるが――それを打ち消す成長の喜びがあった。

「あの御方の寵愛を受けているのです。失敗は許されませんよ？」

光、二閃。銀の刃がホシノを狙う悪意を切り払い、放たれた弾丸が道を切り開く。

キヴォトス屈指のアベレージを持つアビドスの少女達4人と総合力最強クラスのワカモ、その5人が総力を挙げて作れた時間はたったの20秒。

だが、この20秒が必要だった。アビドスを救うためには。

「捉えたッ！」

ホシノとビナーの距離は1mもない。クロスレンジ。ホシノの間合いだ。最後の踏み込みで距離を完全に潰した彼女は右腕を思いっきり振りかぶり――その装甲に礼装を叩きつけた。

「これでえッ！」

ホシノはトリガーを引き、パイルバンカーの真価を発揮させた。

罪悪を与え、神の御許から引き摺り落とす墮天術式。七つの大罪に対応した七つの杭が神殺しの牙としてビナーに突き刺さる。

傲慢の罪、主との接続を断ち切った。

憤怒の罪、アクセス経路を粉碎した。

嫉妬の罪、神秘質量を削り取った。

怠惰の罪、権能を剥奪した。

強欲の罪、膨張現象を無効化した。

暴食の罪、統括を破棄した。

色欲の罪、根幹たるAIの機能を停止させた。

七つの杭を打ち込んだ場所を中心にしてビナーの巨体が真つ二つに分かたれる。その断面はズタズタに引き裂かれたような、目も当てられない傷跡になっており天ネガ・セフィラ命の殺傷能力が伺える。

停止する核融合。奇怪な電子音を立てながら次々と各部位が停止し、それに伴い天使の眷属と乗っ取ったオートマタも動きが鈍くなる。嵐のような攻撃は収束の兆しを見せ、血走っていたビナーのアイラインは消灯した。

きらきらと光る7つの葉莖。宙を舞い、地上に落ちるその直前――

――ビナーのアイラインに光が奔る。

『Save in the name of God』

ビナーの上半分が持ち上がる。口が開き、眼には剣呑な色が灯つた。

『Save in the name of God』

権能は無い。超常性は全て破壊された。だが、それでも。

『Save in the name of God』

怪物は、何処まで行っても怪物なのだ。

――

絶句するアビドスの4人。ゲヘナ風紀委員会、便利屋68、ユウカ、忍術研究部を動員した露払い。先生とアロナによる捕捉。アビドスとワカモの全力の足止め。ホシノによる特攻攻撃。ビナーの基幹システムは停止した。権能は剥奪された。神秘質量は目に見えて減少している。それに加えて上半身と下半身を真つ二つにしたのだ。

これで生きている方がおかしい——確かに、そうだろう。だが、ビナーのカテゴリズは機神体。生命ではなく機械なのだ。故に生きて^動ける部分だけで稼働させることも可能であり、時間を掛ければ復元する以上、基本的に死というものが存在しない。

しかし——形ある以上、倒せる手段は存在する。

「……ホシノ」

「うん——これで、終わり」

番外の杭がビナーの^{しんぞう}炉心を撃ち抜いた。

メサイアの条件

「全て片付ける。これ以上、キヴオトスの土地を好きなようにはさせない」

「まあ、恩はあるからやるけど——」

「イオリ、お喋りは後です。次が来ますよ?」

「そうですね。今は先生の助けになりましょう」

「……皆、なんでそんなにやる気があるんだ……?」

ゲヘナ学園、風紀委員会。

先生と深い繋がりを持ち、彼の弱さを肯定する空崎ヒナだけでなく、行政官のアコや狙撃手のイオリ、医療班のチナツまで。風紀委員会の筆頭とも呼べる4名の最強戦力がアビドスの地に揃い踏みしている。そして、彼女達が率いる部隊まで。彼の願いに応じて、これだけ大規模な人数が動員されたのだ。ヒナがどれだけ彼に入れ込んでいるのかがよく分かる規模であるが、この招集に応じた理由はそれだけではない。

もう一つの理由はアビドス対策委員会——そのメンバーの一員たる小鳥遊ホシノだ。シンパシーを感じた彼女の助けになりたい……そんな思いがあった。ヒナが慕う先生であれば絶対に手を差し伸べるから。

だから彼女も彼に救われた一人の生徒として斯く在りたいと思っただのだ。あの日、彼が手を引いてくれたことを忘れない。その優しさのバトンをきちんと受け継いで、誰かに託していくと決めた。その第一歩が小鳥遊ホシノの助けになるならば——悪くない。

「ふ、風紀委員までいるの!?!」

「アルちゃん、気付くの遅くない? だいぶ前から居たよ?」

「あ、アル様! 次は風紀委員がターゲットですかッ!」

「戦う相手は間違えないでね」

便利屋68。アビドスの友人。些細なきっかけを経て友情を結んだ少女達。彼女達も同じだ。先生の助けになりたい、アビドスの助け

になりたい、大切な人達を守りたい。元々先生から依頼は受けていたが、仮になくてもこの場に駆け付けたらう。そんな社長の方針に異を唱える者は勿論誰もいない。損得で考えず自分がやりたいと思っただけを行動に映せるアルだからこそ、3人は付いて行くのだから。

先生を助けるために戦った過去も、アビドスに手出しさせないために戦う今もそれは変わらない。目指す未来は完勝、唯一つ。

「主殿！ このイズナ、参上いたしました！」

「忍術研究部、先生殿の望みに応じて華麗に参上〜！」

「さ、参上です！」

百鬼夜行連合学院、忍術研究部。部長の千鳥ミチルを筆頭に久田イズナ、大野ツクヨの3名が参戦。キヴォトスに訪れてから比較的初期に交友関係を結んだ少女達は先生の無茶な願いに即答してくれた。

「にはは！ 面白いくらい吹き飛んでますね〜」

「コユキ、遊びじゃないんだからちゃんとしなさい」

「え〜？」

『「え〜？」じゃないわよ。連れて来た時はあんなにやる気があったのに、全く……」

「まあまあ、ユウカちゃん。最初の宣言通り、コユキちゃんには沢山頑張ってもらいましょう。ほら、来ましたよ」

「え、ちよ、ノア先輩？ ちよつと多くないですか？」

「ふふつ、先生のお手伝いです。一生懸命頑張りましたよ」

「うあああああ——————————————————————！」

ミレニアムサイエンススクール、セミナー。彼が呼んだのはユウカだけであるが、気を利かせた彼女が同じくセミナーに所属する少女達に声を掛けてくれた。生塩ノアと黒崎コユキ。ビッグシスター以外のフルメンバーが彼の為に集った。

コユキに関しては暇そうにしていたから、ユウカ達が不在の間に問題を起こされては困るため連行した————————————という事情がある。中々に信用されていない理由であるが、彼女が問題児なのはセミナー間では周知の事実であるため特に反対はなかった。寧ろ、コユキ自身も退屈なデスクワークから逃げられるから嬉々として参加したのだが、

放り込まれた場所が予想を超える鉄火場だったため半ばヤケクソになっっている。

そして、ノア。ユウカにとっては彼女こそが本命であった。彼の知らせを受け取り、傷ついたあの日から大分立て直しているが、それでも何処かぎこちなさを感じてしまう。ユウカの得意とする計算と合理性、論理的思考ではなく、ただの友人としての勘。あまり寝れていないのかコンシーラーで隈を隠す日々が続いてしまっている。

だから、この場でその蟠りのような何かを解消してもらおうと考えた。何が理由か分からないが、ノアの不調は十中八九彼に理由があるはずだ。戦いが終わった後、時間を設けてもらい一対一で話させなければならぬ。

「ふふつ、天才清楚系病弱美少女ハッカーの私は砂漠でも問題なく——えいつ」

「インタプリタ起動。解析開始」

「こういうクラッキングは好みじゃないけど……今回は特別」

「世界をもっと愉快に！ さあ、前進前進〜！」

「EMPドローン、稼働。皆、後ろに下がって」

「エンカウント、リンクします」

「機械の真善美は、合理的で、精密で、そして簡易であることだね」

「敵の位置を確認、発砲準備完了——支援射撃、開始」

「私の實力をお見せしましょう！ オーバークロック、ファイア！」

ミレニアムの特異現象捜査部、ヴェリタス、エンジンニア部。この3つのグループは特に彼が呼んだわけではなかった。システムの効果範囲に彼女達が居る事を知った彼は普通に驚いており、『なんで……？』と思っただのは完全に余談だ。

彼女達を呼んだのはユウカとノアであり、ミレニアムを発つ前に声を掛け、今はこうして共同戦線を張っている。3つのグループは共に荒事に向いている訳ではないが、それでも対オートマタであれば機械に強い特徴を活かして十分に戦う事ができるのだ。

——此処に至るまで、多くの助力があった。多くの願いがあった。その根幹を成す想いは、先生を助けるために、アビドスを助ける

ために。全ては彼とアビドスが繋いだ縁。追いつめられているからと云って他を蔑ろにせず、善性を持ち続けたアビドスの少女達だから、こうして多くの生徒達が手を貸してくれている。アビドスの夜明けまで、あと僅か。



「———終わりだよ、ビナー」

天 ネガ・セフィラ 命は七つの大罪に対応した七つの杭と番外の杭がワンセットだ。七本で墮天させて、その後に番外で打ち砕く———それで漸く、セフィロトの一根は殺しきることができる。この武装の詳細を予め彼から話されたホシノは動揺することなく、最後の一発を心臓に叩き込むことができた。

空になった礼装を地面に落とすと重厚な音を立てて砂漠に沈む。暫くするとクラフトチェンバーの回収機能が作動して最初に吹き取んだ銀の装甲ごと格納されて何も残らない。

ホシノは己の得物である銃と盾を構え、ビナー本体から離れて———続々と集まってくる敵の増援をその両眼で捉えた。

死に逝くビナーが最期に下した命令は『殺戮』という二文字のみ。だが、その命令が周囲のオートマタやドローン全てに伝搬した結果、地獄絵図が形成されようとしていた。

言うまでもなくアビドスは限界だ。だが、この場を何とかして切り抜けないと生きて帰れない。故に今一度気合を入れ直し、向かい来る敵影を全て蹴散らそうとしたその時———オートマタ軍団が派手に吹き飛んだ。

「今度は何ッ!？」

誰も配置されていない筈の方角から飛んでくる爆撃の嵐。砂を巻き上げながら降り注ぐ砲弾の種別を認識したシロコは驚きを交えながら呟いた。

「これって———」

L118牽引式榴弾砲。キヴオトスのマンモス校が一角、トリニ

テイ総合学園にて正式採用されている砲弾だった。そして、彼女達が知るトリニテイの人物なんて一人しかいない。

『み、皆さん！ 大丈夫ですか!?!』

先生の持つタブレットから数日前に聞いた、覚えのある声が響いたと同時に第2波がオートマト達を砕いていく。ホログラムに映された少女はトリニテイ総合学園の真白い制服を纏う、油性ペンで書かれた『5』が目立つ、たい焼きの紙袋を被った少女。

「この声、ヒフミ!?!」

『ち、違います！ 私はヒフミではなく、ファウストです！ この件に関してトリニテイ総合学園は一切関係ありません!』

「……もう名前、言っちゃっているけれど」

『あ、あう……』

シロコの尤もな指摘に思わずヒフミは勢いを失くすが、今はそんな些事を気にしている場合ではない。ヒフミ……もといファウストは気を取り直して叫んだ。

『と、兎に角、此処から援護射撃します！ 持ち込めた砲台の数は多くありませんけれど、火力支援は任せて下さい!』

「ありがとう、ヒフ……ファウスト」

『はい！ ファウストです！ 先生も頑張ってくださいッ!』

ヒフミと通信をする傍ら……先生だけがビナーを見ていた。そしてまたビナーも先生を見ていた。互いが互いを殺す為に、己が最善の一手を構築する。

ビナー……否、この機体はもう動かない。神秘を生成していた炉心は跡形もなく吹き飛ばされて、あらゆる武装はエンプティ。取れる手はほぼ皆無であり、カイザーのオートマトやドローンに期待をすることがないが……あの程度の機体が彼を殺せるとは全く思っていなかった。

故に取る手は自爆一択。機体に残存する神秘を一点に集め、超高压と超高温で以って無理矢理圧縮して神秘の爆弾を作り上げる。

そして、先生は『芸がないな』と嘲った。追い詰められたら自爆を選ぶなんて短慮が過ぎる。そして、その一発芸は数日前に見た。そん

な苦し紛れに一々付き合う必要もない。

だが、このまま自爆させるわけにはいかない事は彼もよく分かっていた。範囲こそ狭いが、神秘を爆縮させた場合の被害は知っている。確実に地形は変わるであろうし、ともすればアビドスの地盤に甚大な影響が出かねない。

—— 故に。

彼は懐から一枚のカードを取り出す。既に待機状態にしていた——
—— 世界を覆すための力を。

—— 事象改変型プロトコル 大人のカード、起動——

だが、もう正規の使い方である『他世界、並行世界の生徒の招集』は不可能になった。

何度も回帰を繰り返し、魂が摩耗し切った彼がもう他世界の縁を認識できなくなってしまうたから。

自身の都合で、大事な生徒を関係のない世界の戦いに巻き込みたくないから。

「これこそが、私に唯一許された特権。私の全てを対価にし、犠牲にして、世界を覆す奇跡を起こす……最後の幻想」

契約、複製、記号、儀式……言葉は何でもいい。支払った代償に見合った事象を発生させる、その根本は変わらない。

正規の使い方ではない、例外的な使用。その効力は世界の事象、因果律への干渉に特化している。

「世界よ、この身を捧げます」

溢れた光が世界に熱を灯す。先生の命を、肉体を、存在を、概念を薪に蒼い光は燃える。

この奇跡こそ、先生という人間の象徴。

キヴォトスの何処にも居場所が無い彼に与えられた、誰かの為にその身を消費する権利。

彼が寄り添い、歩み、救い——愛した世界たち。

信じたものは過ぎ去ってしまった。掴んだものは崩れ去ってしまった。守りたかったものは手をすり抜けてしまった。だが、それでも——その大切な何か達が残していったこの暖かさだけは今も

尚、この胸にある。それだけで先生の人生は大きな意味を、価値を持つ。足を止めない理由なんてそれで充分だ。

「箱庭の星々よ、君が歩む道に目一杯の祝福と花束を」

歩んできた道は決して楽ではなかった。痛くて、辛くて、苦しくて。諦観と絶望に満ち、憎悪と悪意に晒されても——それでも、この世界は。

希望があつた。善性があつた。そして、未来が、明日がある。今まで重ねてきた歴史には意味があり、命には価値がある。間違えても、失敗しても、それでも——きつと救えるものがあると、先生は信じている。

「私は、君の傍にいるよ」

先生が救世主たる理由。

対価を払い、奇跡を成す願望器。

彼が自分を裏切らなかつた証。

世界を、人々を救う救世装置。

——それが、駆動した。

夜明けの太陽

爆縮するビナー。光を集め、神秘を集め、アビドスを臨終させる悪意。その破壊規模は先生の予想した通りそこまで広くはない。精々ビナーを中心として半径100m程度。それが一次被害の及ぶ範囲だ。だが、二次被害……放出された神秘は半径数kmに渡って有機生命体に悪影響を及ぼす。

ここまでは、直接的な規模や破壊範囲……生徒達に与える被害の話。この先はもう少し別の……アビドスやキヴオトスという土地に与える被害の話だ。

まず間違いなくアビドス砂漠の地盤が崩れる。砂漠という誰もいない土地だから、と言って見過ごすことはできない。いつかの未来に此処に住む誰かの為にも防げるものは防がなければならないだろう。

そして、キヴオトス全体の話。此方は推測になるが、運が良ければ被害なし、悪ければ星の自転が狂う。

故に、止めなければならない。

集束するビナーと相反するように先生は光を、神秘を放出する。それはアビドスを、キヴオトスを生かそうとする善性。高らかに謳い上げる星を見上げた知性体への喝采、賛歌。キヴオトスに住まう全ての命をただ愛した。例えば己と違う種であろうとも、どれだけ遠くとも、それでも心から愛したのだ。

その想いは、今でも変わらない。

蒼い光が満ちる、アビドスを照らす。暗い世界に溢れる光は正しく道標。誰かの為に未来を創るその姿は紛れもなく救世主だった。

「――終わりを此処に」

先生の代償が支払われた後、奇跡が起きた。



「素晴らしい輝きです、先生。ああ、眼が焼かれてしまいそうです。これほどまで心を揺さぶられるものを、私は見たことはありません。ああ、貴方は何と——」

誰もいなくなったビルの最上階、遠くで練り広げられていた戦闘の全てを俯瞰していた黒服は哄笑を上げていた。狂喜を抱き、狂気に震え——彼の魅せた輝きに見入っている。

あれが救世主。他人の為に他人を救う者。誰よりも愚直に、世界と人の善性を信じる存在。生徒を教え、導き、寄り添い、見守り、救う先生。

「素晴らしい、素晴らしい。神暦最後の神子、星の海を渡る者。あらゆる救世主の概念、その集合体」

そう——黒服は見抜いていた。誰よりも早く、彼の最奥を。彼は確かに救世主だ。だが、一口に救世主と言ってもその人物は多岐に渡る。

黒服も最初は最も有名な十字に纏わる神の子だと思っていたが——それは部分的な正解だった。彼を構成する救世主の要素はそれだけでない。

ゾロアスター教、3名の救世主^{サオシユヤント}——フシエーダル、マー、アストワトウルタ。

仏教の開祖たる覚者と、未来仏の弥勒菩薩。

ヒンドゥー教、カルキ。

同じ唯一神を信仰する教えの救世主、メシア或いはメサイア、マフデー——そして、神の子。

それらすべての要素が救世主の名の下に統合されている。一切の矛盾なく、破綻なく、相性すら超越した次元で融和している。正に『救済』という言葉が擬人化したような存在。

これが連邦生徒会長が後を託した者。キヴオトスの救世主^{せんせい}。

「ああ、疑う余地はありません。貴方こそが真なる崇高。星の救世主です」

常人では到達できない頂きであった。影すら踏むことができない在り方であった。一生を掛けても……否、無限の時間を使っても至れ

ぬ場所に彼は立っている。

考察は不要だ。推測は不要だ。そんな無粋な真似は、彼の輝きを侮辱することになる。彼に最大の敬意を表する黒服が己に許した行為は、彼の齎す光をただ観測し、記録し、色褪せぬように留める事のみ。彼はきつと普通の人だったのだろう。連綿と続く星の歴史の中で頭角を現すこともなく、何処にでもいるありふれた只人として生きる筈だった。親から生まれ、成長し、誰かと結ばれ、多くの人から惜しまれその生を終える。戦いからは縁遠い世界で毎日を営み、懸命に生きる普通の人間——そうなる運命を変えたのは、やはりキヴオトスと連邦生徒会長なのだろう。

そして、その果てに救世主と呼ばれるに至る程の何かを重ねた。苦痛、悲哀、決別、憎悪、悪意、絶望——受難の道。発狂する事が道理な困難を乗り越えて、彼はこの場に立っている。その精神強度は計り知れない。世界の滅びや生命の絶滅ですら彼の足を止める事はできないだろう。

「おお、これが先生か。私の理解者となってくれるかもしれない存在。つくづく口惜しい。時間が許すのであれば歓談をしたかった。彼に祝福を。生命の解答を持つそなたに、万雷の喝采を送らせてくれ」

ギシギシと木が軋む音と拍手の音が重なる。彼方の先生へ最大の称賛を携え、ゲマトリアが有する領域に現われたのは木製の双頭人形——マエストロ。

彼もまた、先生にとっても高い評価を下していた。その輝きは芸術品の様なものであり、神秘でも、恐怖でもない新たなる価値。或いは、生命体としての解答。短命であるがゆえに持つ命への諦観、客観性。自身が一番効率の良い使い潰し方を心得ている。その在り方がマエストロの琴線に触れた。

故に口惜しい。彼が初めて目の当たりにしたマエストロの作品が、あの出来損ないの複製ミメシスであった事が。彼と相對する定めであったのならば、ベアトリーベアトリーチェチェの依頼依頼であっても己の美学と威信を賭けて本気で作り上げるべきだった。

彼に粗雑な作品を見せてしまった事が、酷く恥ずかしい。

「神の代行者による原罪浄化は果たされず、代わりに救世主が夢を失いつつある世界に希望を見せました。これは失敗とも、成功とも呼べるでしょう。目的こそ果たせなかったものの、より価値あるものが生まれましたから」

「そういうことだ！」

「彼……先生の介入により物語の主軸がブレて、全ての概念が変わってしまいました。悲劇は喜劇に、涙は笑顔に、絶望は希望に。これは歓迎すべきことでしょうか。それとも忌避すべきことでしょうか。私の好む文学的なテキストとは異なりますが、そこに価値を含むのもまた事実です。彼の持つ数多の救世主の記号を解釈しなければならぬでしょう。彼の価値を知るために」

紳士然とした立ち姿。右手に杖を持つ、前まで留めたトレンチコート姿の男性。本来頭部があるべき場所には何もなく、代わりに首と思われる場所から黒い霧を吐き出していた。

左手に抱える額縁にはスーツを纏ったシルクハットを被る男の後ろ姿があった。

ゴルゴンドとデカルコマニー。互いが虚像と非実在を象徴する相棒であり記号である関係。

彼はこの結実を『それもまた一興』と受け入れていた。望んだ結末からは乖離しているが、代わりに興味深いものを見つけた事が出来た。あらゆる負を反転させるその姿はある種の痛快さすら孕んでいた。

悲しみの中にいる者は哀れみでは救えない。マイナスはマイナスで打ち消せないのだ。だからこそ、彼は笑いながら救いに行く。マイナスをプラスで打ち消すように。太陽のよう、とは言い得て妙で、彼は確かに空を照らす恒星のようであった。燃え尽き、冷えるその末路まで踏まえて。

そうなる前に、世界にその身を捧げる前にメタファーである彼を通じて完成させなければならぬだろう。

「アレは最早我々とも、生徒とも異なります。同じ地平を見ていません。ミクロとマクロを矛盾なく成立させるその視点……アレは知生

体であつても人類ではありません。何か転換期があつたのでしよう。先生と呼ばれる何かは、ヒトと叫べない別の生き物です」

3名が先生に好意的な反応をしているのに対して、彼女だけは異なつた。

燃えるような赤い肌を持ち、白いドレスを纏う女性の異形。頭部は翼のようなものが覆つており、その中央には赤と黒の目が蠢いている。床に届く程長い髪と引き摺る純白のドレスも相まって邪悪な花嫁のようであつた。その名はベアトリーチェ。神曲。ダンテを求め、地獄界の教導者。

「ベアトリーチェ、その物言いは些か礼を失している」

「あれは害虫です。不当に荒らす虫に尽くす礼はありません」

「来訪者、という意味合いであれば我々も同じでしょう。彼は我々と同胞に成り得る存在です」

マエストロ、黒服の彼を擁護するような言葉にベアトリーチェは忌々しそうに鼻を鳴らした。

「虫けらと同胞とは、面白い事を仰いますね。良いですか、ヒトとは呼べない生き物に居場所はないのです。早急に踏み潰し、穢れを浄化しなければ」

「……」

余りにも傲慢な物言いだつた。自らを支配者と言つて憚らないその様子は3名が思わず絶句してしまふほどであつた。ベアトリーチェは彼を排除したくて堪らないようで、既に不倶戴天と見做している。

彼女はある意味、先生という存在の危険性と異常性を正しく認識していたのだ。それは必ず敵対する運命であるからか、或いは本能か。彼は己と見えたその瞬間、あらゆる障害を踏み越えて殺しに来ると悟つたのだ。

故の警戒、殺意。ベアトリーチェにとって先生は敵なのだ。己の目的を全て御破算にする恐るべき敵なのだ。

「御三方、落ち着いてください。此処で争う必要はありません。マダム、彼の物語は一度エンディングを迎えました。完成した脚本に続き

を加える行為は美しくありません。どうか、矛を収めてください」

「ゴルゴнда……私に指図をするつもりですか？」

「いえ。我々は互いに不干渉。貴女の目的に助力も邪魔もするつもりはありません。ですが、今の貴女が単身で彼の下へ出向いても勝利を収める事は難しいでしょう」

「——」

その忠告にベアトリーチェは無言を返した。確かに彼を本気で殺すのであれば相応の準備は必要だ。勢いに任せても良い事なんて無い——それはよく分かっている。

ビナーを機能停止に追い込んだ、あの概念武装。気軽に使える類のものではないだろうが、それでも次弾装填に1時間は掛からないはずだ。

故に、彼は今現在あの恐るべき突破力を所有していると見た方が良。そして、アレを食らえば神秘をため込んだベアトリーチェですら塵すら残らず消し飛ばされる。

——狙うなら彼が一人の時だ。

そうやって無理矢理自分自身を納得させ、彼女は憎悪と殺意を呑み込んだ。

そして、この会談もお開きになる。4名がそれぞれ己の持つ領域に戻ろうとした時——黒服は思い出したかのように呟いた。

「ああ、生徒の皆さんにご忠告を。彼の荷物は彼しか抱える事ができません。生徒の皆さんが出来る事は、彼の荷物を共に背負う事ではな——」

この会談を覗いている予知夢の少女に向けて。

「——荷物の重さで倒れそうな彼を支えることです」



「——んう」

「目が覚めたかい、ホシノ」

眼を覚ましたホシノが見たのは穏やかな笑みを浮べる先生であつ

た。手や足が大地に触れている感触はなく、代わりに何かに抱かれていますような——と、そこまで考えて、今の自分の状況が理解できた。岩陰に座る彼に横抱きにされている状況を。

「え、ちよ——ッ！」

「まだ立てないと思うから、じっとしてて」

それに何とも言えない恥ずかしさを覚えた彼女は降りようと万一にも彼を傷つけぬように小さく足掻くが、彼がぎゅっと力を込めて抱きしめただけでその反撃の一切は封殺された。

確かに、まだ全身の感覚が覚束ない。今下ろされても不格好な尻餅をつくだけだろう。だが、それは彼だって同じのはずだ。疲労感で一杯のはずなのに、ホシノを抱えていて大丈夫であるわけがない——
—そう思つて彼を見上げると、ゆったりとした微笑みを返した。

これは何を言つても駄目だと悟つた彼女は諦めて彼に抱かれたまままでいようと思つた。至る所が汚れ、血が付着している彼の制服をぎゅっと握り、辺りを見渡す。

「……あれから、どうなったの？」

ビナーが自爆しようとしていたため大人のカードで被害を極力抑える防壁を張りつつ近くにいた全員を転移し、防いだ後は風紀委員等と協力しつつ残党を掃討していた——と説明したら彼女は『休め』というだろうから暈しつつ顛末を話した。全てを話し終えた後、彼女は「そっか」と短く呟き、肩の力を抜いた。漸く戦いが終わったと認識したのでろうか。

風紀委員の医療班が忙しく動き回っており、少し先には一緒に戦つたアビドスの仲間達や便利屋、ワカモがそれぞれ治療を受けている光景が見える。ヒフミの姿が見えない事から、彼女は一足先に退散したのでろうか。

「そういえば、先生は何で私を抱っこしてるの？」

「……なんとなく？」

「うへ、何それ」

ホシノが何とも言えない表情で呟くと、先生のインカムに通信が届いた。正確な内容は分からないが、恐らくホシノか先生の治療の番が

回ってきたのだろう。彼は「ありがとう、チナツ」と呟き——それから、立ち上がった。

「——夜が明けたね」

ビナーが退けていた夜明けがアビドスに訪れた。差し込む朝日、新しい1日の始まり。再びキヴォトスを照らした太陽を眺めていた2人であったが、タイミングを示し合せたかのように互いの顔を見つめて。

「おかえり、ホシノ」

「うん——ただいま、先生」

こうして、アビドスを巡る一連の戦いは終わりを迎えた。

夢の続き

ビナーとの戦闘から数日が経った今、先生は病院のベッドで天井を眺めていた。

あの後、先生はぶっ倒れた。焼き切れる寸前まで脳を酷使し、肉体を使い潰した上で心臓直下に風穴が空いたのだ。当然と言えば当然だろう。更に戦闘続行の為に劇薬を服用し、大人のカードまで行使したため、ホシノと会話している時点で彼は気合だけで意識を繋ぎ止めていた。

病院に叩き込まれ、数日間の昏睡ののち眼を覚ました先生はスマホを手に取り……電話をした相手は首席行政官たる七神リン。彼の意識が戻った事に安堵している彼女に開口一番「リン、仕事回してくれないかな？」と言ってしまひ――。

当然の如く却下され、彼はこっぴどく叱られた。彼としては事後処理に追われている彼女達を少しでも楽にしたい、という思いの提案だったのだが、怪我人に心配されたくはないと言われれば彼としても反論はできない。全ての言い訳と逃げ道を理論的に叩き潰され、最終的には「はい」と「ごめんなさい」しか言えなくなった彼は、ビナーと戦っていた人物とは思えない程情けなかった。

リンの……否、連邦生徒会全体の意見は『傷が癒えるまでは休め』の一言に尽きる。シャーレたる彼に様々な雑務や面倒事を押し付けてしまった負い目もあるのだろう。尤も、質が悪いのは、押し付けられたその重荷を彼は迷惑に思うどころか心地良く思っていることだが……。

兎も角、彼女達は傷も癒えぬ彼に仕事をさせるつもりは全く無かった。システムの箱を覗いても、眩暈がするほどあつたはずのタスクは綺麗さっぱり完了しており、何度リロードしても新しく入ってくる気配はゼロ。メールを開いてもそれは全く同じであった。

病室の中に持ち込まれた物はシステムの箱と私用のスマホを除け

ば着替えのみ。出先での仕事道具であるノートPCはどこを探しても見当たらなかった。

こうして、先生はやろうと思っていた仕事も仕事道具も奪われてしまい絶賛もやもやしている。事後処理等に奔走している彼女達を黙って見ていられるほど薄情ではないし、かといって仕事を行う手段は手元にない。

では手段を取りに行くか、と思っても以前病院を脱出した前科があるからか必然的に警備は固くなっており到底脱走なんてできない。扉を開けたら真正面にナースステーションがあるのだ。ドアを開けた瞬間気付かれる。

そもそも、あの脱出はアロナが協力してくれたから成立したものだ。今現在、無茶を重ねた彼に大変ご立腹な彼女が脱出に協力してくれるとは思えない。『嫌です！』と一蹴されるだろう。

「二応、元気なだけだなあ……」

——もし、この場に病院にある彼のカルテを参照した者が居たら確実に彼を叱っていただろう。

全身打撲と切り傷、内出血多数。眼及び口からの流血。内臓も損傷している。極めつけに心臓直下に風穴。そして、その多くはまだ治癒していない。外部も内部もボロボロなのだ。元気や無事とは口が裂けても言えないだろう。

そして。

「——」
彼はシステムの箱に保存されている、本当のバイタルデータをタップした。病院のカルテは偽装……とは言わないが、書かれている内容が真実かと問われれば否だ。彼の真実はシステムの箱にのみ存在する。

尤も、多くのデータは病院のカルテと一致する。神の知識戦^{ザフキエル}で負った傷とビナー戦で負った傷。それらが合わせて表示されていた。勿論、足の指の欠落も記載されている。それらは全て心当たりのある傷であるが——ただ一つ、分からない物がある。

「——腎臓」

内臓の1つである腎臓……その片方が無くなっていた。生まれつきではない。きちんと存在していた事はこの目で確認している。だが、突然無くなってしまったのだ。肉体の機能的には問題ないため特段気にするつもりはないが、この手の欠損は後が怖い。無茶をできるラインが変わってしまうから。どこをどこまで失くしたら変わるのかは頭に入っているが、微調整は必須だろう。

——そして、この手の消失は何度か経験している。

「随分、安い代償だね」

大人のカードで起こした奇跡、その対価だ。ビナーとアビドスの土地に対して展開した防御障壁と、生徒達の強制転移の代償。だが、その支払いは想定していたよりもずっと安かった。何か自分の知らない物も別で奪われているのではないかと勘繰ってしまうほどに。だが、特には無かった。記憶も、人格も、精神も——目に見えない概念を奪われた訳でもない。だから、対価は腎臓一個で間違いないだろう。

普通なら喜ばしい事である筈のそれが、先生は不気味に思えて仕方が無かった。

「暇だなあ……」

そう言いベッドに体重を掛けるとスプリングが軋む音が病室に反響した。幸いなことに、足の指の欠落は誰にもばれていない。早めに義指を作らないとな——そう思っていると、ドアの向こう側から3回ノックする音が聞こえた。彼はサイドテーブルにシツテムの箱を置き。

「どうぞ」

「先生、来たよ」

「いらっしやい、皆」

先生が微笑みを浮かべながら手を振るその先には5名のアビドス対策委員会のメンバーが居た。入口のガンラックに銃を立てかけ、身一つになった彼女達は手を振る彼を見て安心したような笑みを見せて少し駆け足気味に寄り、ベッドを囲むように立っていると。

「椅子は奥にあるのを使ってね」

「座つちやうと長居しちやいそうだからね。先生に負担は掛けたくないし、今日はこのままでいいよ」

「氣遣いありがとう。でも、大丈夫だよ。さっきまで暇を持て余していたんだ。私の話し相手になると思ってた、ね？」

先生が申し訳なさそうな笑みを浮かべながらお願いをすると、アビドスの少女達は『それなら仕方がない』と言わんばかりの表情で椅子を運んできた。やはり彼女達も彼とは色々と話したかったのだろう。ホシノも先ほどはああ言っていたが、彼をお願いを聞いてからは一番表情が和らいでいた。

椅子5脚と円形テーブルを準備し終えた彼女達は彼を一瞥して――口を開く。アビドスの現状を、好転した状況を伝えるために。



「――こうして、対策委員会は先生の公的な認証によって、アビドス高等学校の正式な委員会として承認されました。非公認だった所為で酷い目に遭ったという部分も多いので、これで一安心です」

タブレットに映されている資料をスクロールしている先生を眺めながら、アヤネは一通りの説明を締めくくる。これにて一旦、アビドスを巻き込んだ動乱は終息した。

尚、ホシノがベッドに腰掛け、先生の肩に頭を預けている絵面をアヤネはスルーしている。そして、それに対抗心を燃やして何かをやるうとしているシロコも彼女は当然の如くスルー。とても強かであった。

「お陰様で対策委員会は、正式にアビドスの生徒会としての役割を担う事になりました」

「そっか……良かった」

アヤネから告げられた嬉しい報告に、彼は安堵の息を漏らす。非公認か公認か、というのは非常に大きな差異だ。連邦生徒会に認められた彼女達は公の場での発言権を取得し、その他援助を受けることができるだろう。これで、孤立無援の戦いを強いられることはなくなるは

ずだ。

「個人的には、ホシノ先輩に生徒会長になっていただきたかったのですが、断固として拒否されました……」

「私には生徒会長なんて大層な肩書は似合わないからね、柄じゃないもん」

「……と、こんな感じで、会長の席は暫く空席になりそうです」

先生の右肩に頭を預けたまま緩い声を上げる少女に、皆は苦笑いを浮べる。彼女の顔には今までであった強迫観念や不安は綺麗さっぱり無くなっていて——それが、アビドスのメンバーはとても嬉しかった。

生徒会長の席に着かない、と言っているが対策委員会の委員長は相変わらずホシノであり、実質的な代表は彼女のままだ。これは単純に生徒会長という肩書を背負いたくないのだろう。恐らくは心情的な問題、彼女にとってアビドスの生徒会長は一人しかあり得ないのだから。

ホシノは過去を乗り越えたわけではない。後悔も痛みも変わらず抱えたままで、それらはホシノという少女が終わるまで消える事はないだろう。だが、それは後ろを向いて塞ぎ込んでいる訳ではない。彼女は己の過去と向き合い、共に歩んでいくと決めたのだ。いつか『こんな事もあったね』と受け入れられるように。

決して楽ではない道だ。だが、不思議と不安はなかった。彼女の隣には信頼できる仲間がいて、彼がいてくれるから。だから、彼女はいつまでもアビドス対策委員会の小鳥遊ホシノして歩むことができるだろう。

先生は肩に寄りかかる少女の髪を撫でる。ホシノを見つめる彼の瞳は愛と優しさに満ちていて。そして、彼女も先生の手をただ嬉しそうに受け入れていた。

「柴関ラーメンも屋台の形で復活する事になりました」

「お客さんも結構来てくれるし、私もバイトを復帰したから来てよね！」

「うん、勿論」

嬉しそうに胸を張るセリカに、先生はふわりと微笑んだ。

▼
屋台という形で再開した柴関。屋台になった関係で提供できるメニューの数や席数は少なくなったが、その味は変わらない。地域住民の憩いの場はかつての盛況を取り戻しつつあった。

大将はすっかりと常連になった便利屋68の4名を客席に通し、水を配膳する。

「ご注文は？」

「そうね……醤油ラーメンで！」

「じゃあ私は味噌で！」

「わ、私もその……味噌で……」

「私は塩で」

「あいよ！」

4人分のオーダーを取った大将は厨房に戻り、調理を開始しようとした所で――ふと、屋台の隣に飾られた花が目に入った。

胡蝶蘭。大将が店を再開すると聞いた先生が屋台と共に送ったもの。それに加えて、彼は店舗を再開する事も見越しているのか多額の支援金を振り込んだ。どんな一等地であろうとも余裕で店が建つ金額を。

自身を標的にした攻撃に巻き込んでしまった負い目があったのだろう。先生とてこの程度で謝罪ができるとは思っていなかったが、それでもやらなければならぬ事であった。

大将はカウンター席で歓談する4人の少女達を眺めながら、嬉しそうに呟く。

「こりゃ、暫く引退はできねえな」

▼
先生の協力のお陰で、ホシノ先輩の件は解決しましたが、アビドスの

借金は9億のままです。ですが、カイザーローンはブラックマーケットでの不正取引がリークされて、近い内に連邦生徒会とヴァルキューレの調査が入るようです」

「それは良かった。色々と手を回した甲斐があったよ。これで暫く大人しくなるといいけど……」

苦笑いしながら言葉を零す先生を見て、アヤネも苦笑いを浮べる。あのカイザーがこの程度で大人しくなるとは到底思えなかった。また何処かで性懲りもなく小賢しい悪事を考えているだろう。しかし、連邦生徒会が動いたともなれば、アビドスの時のような表立った行動はできなくなる。連邦生徒会が調査をするとはそういう事だ。機能不全に陥っていると云えど、連邦生徒会の権威は依然変わらない。

「恐らく、連邦生徒会も今はそれどころではない状況のため、何処まで詳細に調査をしてくれるかは分かりませんが、それでも状況は好転すると思います。カイザー理事も、生徒誘拐未遂の容疑者として指名手配されているようですし……少なくともカイザーも今まで通りとは行かないと思います」

「尻尾を切られたか」

「はい。恐らく、会社としては関わってないと主張する為でしょう」

本社側の動きがやけに早かった事から、恐らく前々から準備自体はしていたのだろう。カイザーという大きな意志の下に接続されている子機は失敗を庇うつもりはないようで、会社と己の保身のためには手段を選ぶつもりもないようだ。

勿論、それについて同情しない。己の罪悪に滅ぼされたのだ。因果応報と笑うのが道理だろう。

「あ、それからあの無理に上げられていた利子についても問題になって、最終的には以前より遥かに少ない金額の支払いで済む形になりました。これで少しは未来の事にお金を使えそうです」

「ま、それでも9億の重みは変わらないけどね」

「でも、これでかなり楽になった」

「はい、後回しにしていた校舎の修繕や備品の新調ができます☆」

800万弱の利子も見直され、来月からは大幅な改定が行われるよ

うだ。元々、抵抗する力を奪うための搾取を目的とした横暴極まる利子なのだ。当然と言えば当然だろう。

元の借金の金額はかなり多額のため、即座に返すことはできないが以前のように返済まで100年単位で掛かる様なものではなくなり、遥かにマシになったようだ。以前までのバイトに掛かりきりだった生活も改善され、モラトリアムを謳歌できるだろう。

それが、先生は本当に嬉しかった。



「まだ住民が暮らす郊外については取引の違法性が露呈したため返還されましたが、大部分のアビドス自治区については変わらずカイザーコーポレーションが保持したままです。其方の方の取引自体は違法でなかったようなので、仕方がないですが……結局、あの場所でカイザーコーポレーションが何を企んでいるのかは分ならず仕舞いでした」

「ビナーについてもそうでした。過去のデータは一部残っていましたが、私達が戦ったものとは似ても似つかない記録ばかりで……」

「——それは私の管轄だ。カイザーの暗躍も、デカグラマトン神名十文字も私が対応するよ。だから、心配しないで」

アヤネとノノミの言葉を遮り、優しく微笑む彼を見て、アビドスの少女達は顔を緩めた。

確かに不安も不明点も多い。考えなければならぬ事は山積みで、対応しなければならぬ事は多くある。だが、アビドス対策委員会は確かに勝ったのだ。カイザー、ゲマトリアという大人の悪意に。ビナーという滅びに。そして、その果てにアビドスを守り抜いたのだ。今は、その事を噛み締めてもきつと罰は当たらないだろう。

「さて……では、メンバー間で情報共有も済みまし……ホシノ先輩」

アヤネがホシノに目配せすると、彼女は煌めく笑顔を携えながら。

「よーし、じゃあ、定例会議を始めよっか！」

幕間Ⅱ

鯨の転寝

朝、少女は目を覚ます。仮眠のような浅い眠りではなく、深い眠りから。それは少女にとつて失われて久しい日常だった。これまで胸中を埋めていた漠然とした不安はない。ただ『今日も一日が始まる』という実感だけがあった。朝の雲雀が鳴いている。

気を利かせた誰かさんが居住区や人の集まる場所に警備用オートマタとドローンを寄付してくれたから、日課だった夜のパトロールも随分頻度が減って、今は週に1日か2日程度。ヴァルキューレも時折訪れてくれるようになり、悪化していた治安は少しずつ改善の兆しを見せている。少なくとも、今までのように不良集団や悪徳企業が幅を利かせる不条理は起きそうになかった。

何かに押し潰されている訳でも、支配されている訳でもない。急いでる訳でもなければ、壊れている事もなく。ただ、平和そのものなアビドス。ホシノはその光景を見て少しだけ誇らしさを感じていた。これは紛れもなく自分達が守った世界なのだ。

だが、急に背負っていた荷物が軽くなったから色々混乱はある。状況が好転したという事は、今まで通りとはいかないという事。今の状況に合わせたチューニングは必要だ。少しずつ慣れて、また営みをしていかなければならない。それが人間としての責務だから。

——— それにしても、本当に色々あった。ビナーとカイザーの件の聞き取り調査に、報告書作成、それから復興。幸い、戦場となつた場所がアビドス砂漠のど真ん中であつた点と被害が大きくなる前に倒せた事から復興には多くの時間が掛からなかった。精々、散らばつた機械部品を回収する程度。

問題は聞き取り調査で、正式な生徒会として認められたアビドス対策委員会が連邦生徒会まで呼び出され説明する事を求められたのだ。各室長と議員が揃い踏みしている環境で、だ。肝が据わっているアビドスの面々であつても、緊張するのは当然だろう。勿論、その場には

当事者たる先生も同席しており、彼のフォローのおかげもあって恙なく終える事ができた。

そして、報告書はシャーレが代わりに請け負う事になった。これは先生の希望だ。

正式な部活、及び生徒会として認められるという事は責任を負うという事だ。必要であれば公の場に出なければならぬし、求められれば説明をしなければならぬ。長く非公認の部活として活動していた後輩達はこの手の経験に欠けているため、まだまだサポートは必須だ。報告書や資料の作成方法や、その他諸々。

勿論、ホシノとて多くの経験がある訳ではないが、それでも一時期は副会長をやっていた身だ。後輩達よりは知識がある。だが、その知識も2年前で更新が終了しているため、何方にせよ先生のフォローや知識のアップデートが必要なのだが……。

ホシノはベッドから出て、洗面室へ足を向けた。顔を洗って、歯を磨いて、寝ぼけた頭で思考を回す。

彼女の生活は本当に一変した。パトロールのため削っていた夜の睡眠時間は確保できるようになり、ずっと張っていた気を緩める余裕ができた。尚、お昼寝の時間は据え置きのため彼女の睡眠時間は割と凄い事になっているが、そこについては言及しない。

——元々、ホシノは睡眠が好きではなかった。厳密に言えば、一人で夜眠ることが嫌いだ。悪夢を見てしまうから。夜はずっと寂しくて、寒くて、凍えそうだったから。

頻繁にする昼寝は夜寝れない分の穴埋めという側面が強く、対策委員会の部屋や学校で眠るのは悪夢を見ずに済む——という理由がある。浅い睡眠、意識はずっと半覚醒状態で夢に落ちることはないけれど体を休ませてやる時間は必要だった。

だが、今は夜に眠っても悪夢を見る事はなくなった、夜の寂しさに震える事もなくなった。これはきつと、彼女が過去と向き合い、前へ進めたからだろう。

ふと、ホシノは窓の外を見る。美しい朝。空気が澄んでいて、空は高く青い。絶好のお出掛け日和だろう。

——そう、今日はお出掛けなのだ。先生と二人つきりで水族館に行くという、彼女にとつては重大イベント。いつも以上に準備に気合が入るのも道理だろう。とは言っても、彼に『そういうつもり』がない事は重々承知している。彼は先生で、自分は生徒。その関係は変えることができない。彼の奥に決して踏み込めない。

だが、その上で言おう。これはデートなのだ。

故に、少しくらいはおしゃれや化粧とかをしたいと思いますと思ったが……如何せん、知識も物もない。ファッションなんて気にしたこともなかったし、化粧なんてやった事すらない。自宅にある衣類は制服を除けば部屋着とパジャマ程度で、化粧棚には化粧液と乳液……あと、隈隠しのコンシーラーしかない。

可愛い自分を見てもらいたい、という年頃の少女らしいホシノの乙女心は無常な現実を前に砕かれた。こんな事になるならノノミに頼れば良かった——と後悔するが、当日の朝にそんな事を思ってもどうしようもない。

勿論、ホシノとて私服くらい持っている。体型が変わらない事を活かした数年前からずっと着古しているもの——ではなく、勇気を出して最近通販で買ったヤツだ。サイトを色々見て回り、流行やら何やらを勉強し、その果てに買った勝負服。何度か試着したがサイズはぴったりで、変な部分はなかったように思える。

今日の為に買ったと言っても過言ではない服であるが、ホシノは中々それに手を伸ばせずにいた。万が一……いや、億が一にも有り得ないが、彼に『似合わない』と言われたら彼女の心はへし折れる。それに、柄じゃないのだ。買った服だって背伸びをし過ぎかもしれない。と、そこまで考えて、ふと思った。

——先生は私服で来るのか？

当然と言えば当然だが、ホシノは今まで先生の私服を見たことがない。基本的に彼の服は連邦生徒会の白い制服か、たまに黒のスーツ。私服や私生活の話も聞いたことがない。私服を一着も持っていない、なんて事はないと思うが癖で何時もの服装で来るのではないか、という疑念がホシノの中を埋め尽くした。

「……聞かなきゃ、だよね……」

胸中を埋める疑問の解答を得るために彼女はスマホを手に取り、メッセージアプリをタップした。



「……あく、やっちゃった〜」

シャワーを浴び、僅かに肌が赤みを帯びたホシノは髪をドライヤーで乾かしながら一人呟く。メッセージでのやり取りで彼に私服で来て欲しいと言ってしまったのだ。これでもう、ホシノはハンガーに掛けてある私服達を着る以外の選択肢は排除された。もし仮に、これでホシノだけ制服で来たなら普通に裏切りだ。彼から抗議の視線を受ける事間違いないだろう。

だが、これで良かったのだとホシノは思う。今日は互いにオフなのだからそんな日にいつもの服を着ていても仕方がないだろう。遊びに来たのか仕事で来たのか分からなくなってしまうから。

故に、今日は『アビドス対策委員会の小鳥遊ホシノ』をお休みさせるために制服ではなく私服を着る。彼も同じで、『シャールレの先生』をお休みさせるために私服を着せるのだ。決して彼の私服やオフが見たいという下心ではない。

いつも以上に丁寧に髪を櫛で梳かし、ヘアオイルも付けて準備は万全。顔にも汚れとかその他諸々が何もついてない事を嚴重にチェックして……部屋着から私服へと着替える。

ホワイトのブラウスとブラックのロングスカート。制服とさほど変わらない物の筈なのに、全然違うように思える。ブラウスはスカートの中に入れる、タックイン。その上からベルトを回してスカートとブラウスを固定する。

ストラップを付けたハンドバッグを肩に掛け、その上からパステルブルーのニットカーデイガンを羽織って準備は完了だ。全身鏡で隈無くチェックしておかしな点がない事を確認した彼女は玄関へ向かう。いつものスニーカーではなく新調したローファーを履き、再度

チエツク。

「うーん……」

変な部分は特にないはずだ。念の為、バッグから手鏡を取り出して前髪等をチエツクする。異常なし。多分いつも通り……いや、いつもよりも可愛い気がする。勿論体感だが。

「よしー！」

気合いを入れ、ガンラツクの銃とシールドを手に取り——彼女
はドアを開けた。



D・U・シラトリ区、駅前。噴水が空に虹を作り、ガラス張りの駅舎を通して賑わいが見える。人工芝の上で跳ねる子ども達、駅構内のカフェを楽しむ人達。それなりに大きな駅だからか人の流れが絶えることはなく、楽しそうな声が聞こえない瞬間はない。

そんな場所に彼はいた。見慣れない格好の、見慣れた人。

「――」

先生ではない彼、等身大の普通の青年としての側面。キヴォトスでは見えない浮世離れした姿。今まで未知のヴェールに覆われていたもの。ホシノがその姿に見惚れていると、気付いた彼が手を振りながら歩み寄ってきた。勿論、見慣れた柔らかい笑みも携えて。

「おはよう、ホシノ」

「うへ、おはよう、先生」

彼が寄ると花の香りがした。ホワイトリリー、中性的な香水。或いは、彼自体の香り。

「……」

ホシノは彼を頭の前からつま先までじつと観察する。

髪はセットされていて、左耳には小振りのアクセサリーが飾られていた。恐らくノンホールピアスだろう。首には土星のようなトップスが下がるネックレス。

服も綺麗めで纏っており、トップスはライトグレーのシャツ。第一

ボタンは外されていて、鎖骨とネックレスが覗いている。ボトムは黒のフレアパンツで、同色のギブソンシューズと良くマッチしていた。そして、アウターにはベージュのトレンチコート。

—— 見れば見るほど、何かいけない扉を開きそうな気がした。「先生、結構おしゃれさんなんだね。あんまりそういうイメージなくてびっくりしたよ」

「今日はホシノの隣を歩くし、それに恥じない格好をしてきたつもりだから……うん、そう言つて貰えて嬉しいよ」

涼し気に彼は言うが、数時間前は彼も『ホシノにダサいつて言われたら死のう』と思ひながら準備を進めていた。過去の経験……ミカに着せ替え人形にされた事があるため、ファッションについては少し知っているし、彼女の反応から自分にどんな服が似合うのかも大体は分かつていたが、それはそれとして不安だった。

そのため、今の彼は内心ガッツポーズをしている。ミカに対する感謝の念を浮べながら。

そして、彼は大事な事を忘れていたと言わんばかりに。

「ホシノの私服も凄い似合ってるよ。可愛いね」

「……うへ」

—— ああ、もう、本当に狡い。どうして彼はこうやって歯の浮くような言葉が湯水の如く出てくるのだろうか。お世辞や社交辞令でない事が余計に質が悪い。

誰かの欲しい言葉を、欲しいときに掛けられるのは余り宜しくないように思える。こうやって勘違いしそうになるから。そんな事を思いながら彼に視線を送つても、見慣れた笑みを浮べるばかりで抗議にもなりはしない。だから。

「ほ、ホシノ?」

「お休みは有限なんだから無駄にはできないよ。さ、出発出発」

彼の左手を握り、照れ隠しのように手を引く。ホシノの手を包めるくらいに大きな手だけれど、彼女よりずっと脆く、弱い。だが、そこには他者を傷つけぬ強さがあつて、大きな優しさがある事を良く知っている。この手に、何度も守られたから。

▼

水族館の中は人がポツポツといる程度だった。全くいらないわけではないが、客足は疎らで、これならばショーは良い席が取れるだろうし、人をかき分けながら進む必要はないだろう。水槽にも周りを余り気にせず近寄れるし、何より雰囲気落ち着いて良い。現実から切り離された水底の世界。この浮世離れた雰囲気ホシノは好きだった。

ホシノは先生と腕を組みながら順路を歩く。恥ずかしさは既に捨てた。折角の彼とのお出かけなのだから楽しまなければ損だろう。だから、馬鹿みたいにテンションはガン上げで。ひたすら遊ぶ、はしゃぐ、浮かれる。今日という一日を大切に過ごしたいから。

「……さて、さっきまで淡水魚と近海の魚の水槽を見てきたから、次は熱帯魚かな」

「熱帯魚ってカラフルなやつ？」

「そうそう。クマノミやグッピー、テトラとかのやつ」

館内案内を見ながら、ホシノのペースに合わせて歩く先生。館内は少し薄暗く、人も少ないから落ち着いていて、魚との距離も近い。普段の生活では中々目にする事のない生き物を眺めるホシノの視線は年相応の少女のように輝いていて、先生は『来てよかった』と一人思う。

色鮮やかな魚が泳ぐ幾つものアクアリウム。スポットライトが照らす、この水槽の主役達。

水中を優雅に泳ぐ多くの魚をじつと見入るホシノと、展示している魚の紹介パネルと水槽を交互に見る先生。彼女はこの水槽という一つのアートを楽しみ、彼は生物学的な楽しみ方をしている。

「この子達ってなんでこんなにカラフルなのかな？」

「確か、正確な理由は分かってないみたいだよ。この子達が元々生息している環境だと派手な色の方が見つかりにくいとか、体色が警戒色を表しているとか、紫外線から身を守るためだとか……説は色々ある

みたいだけどね」

「へく、そうなんだ。この子達も元はサンゴ礁とかで生きてるもんね。川魚みたいな保護色だと、かえって見つかりやすいのは何となく分かるかも」

右へ左へ。生息地や好む環境毎に分かれている熱帯魚の水槽を移動しながら、水族館というコンテンツを楽しむ。そして、一通り楽しんだ後はA Rが示す順路の方に足を向ける。

次のコーナーは深海魚だった。



「お〜……」

深海魚のコーナーに来たホシノは興味深そうな声を漏らしながら水槽を見つめている。深海という過酷な環境に適応するために進化をした生物は少々不思議な見た目をしており、例えば目が肥大化していたり、逆に退化していたり。今までの魚達とは雰囲気も生態も変わっており、誰もがイメージする魚とは離れている。

深海魚の展示スペースは先程まで訪れていた熱帯魚のコーナーよりも明度と彩度が落とされており、より暗い……深海という場所に雰囲気近づけている。

「すっごい形だね〜」

じっと見つめているホシノ。その瞳には好奇心が多く含まれていて、魚の名前や生態を壁に飾られているパネルと水槽そのものを交互に見つめている。少し前の彼と同じ視方。非常に珍しい、普通の生活を営んでいる上では滅多に見る事のない生き物は生命の不思議を感じさせる。そして、その生命の不思議を暴くために、白紙の地図を埋めるように人類は星を開拓してきた。知生体として進化を果たした人間が未だ届かない場所が深海と宇宙だ。そのどちらも深淵であり、昏い青を見ると生命にプリセットされた探求心や好奇心が疼いてしまう。

隣に立つ先生も水槽をぼうっと眺めて……それから腕時計を確認

した。時刻は午前が終わりそうな頃合い。

「……うん、満足！ 深海魚も面白いね〜」

非常に満足そうに呟いたホシノ。そんな彼女に彼は微笑みながら。

「そっか。じゃあ、いい時間だし、この辺りでお昼にしようか」

「うへ、そうだね〜」



水族館内のカフェで昼食を済ませた2人が次に向かった場所は触れ合いコーナーだった。大きく開けた明るい屋内には天板がない水槽が幾つか配置されており、その中には数種類の生き物がいる。魚やヒトデ、ウニ、ナマコ、カニ、ドクターフィッシュといった有名どころ。小さいサメやエイ、タコといった少々珍しいものまで。ホシノは全種コンプリートして、先生はカニに指を挟まれた。

その後はペンギン、アザラシを見てからイルカショーを訪れて……一番の目玉にしてホシノが一番楽しみにしていた海のトンネルに足を踏み入れた。

「へえ〜、凄い！ こんな所、初めて来たよ！」

上を見ても、左右を見ても魚が泳ぐ幻想的な風景が其処にはあった。数えられない位の魚が泳ぐ、全長30m近いトンネルにホシノは目を輝かせていた。ぱつと見えるだけでもシユモクザメやマンタ、マンボウが泳いでいる。勿論、小型の魚も沢山泳いでいてどの方向を見ても楽しめる作りになっていた。

そして、ホシノは天蓋を覆うような巨大な影を指差した。

「お、あれ見て！ ジンベエザメ！ 大きいね〜」

ホシノと先生の真上を通り過ぎるような巨大な魚影は、この館の目玉であるジンベエザメであった。優雅に泳ぎ、トンネルの終わりへと向かうジンベエザメに導かれるように2人も足を進める。

その最中。

「……私、幸せだった。でも、それに気づかない振りをしてたんだ。失うのが怖くて、私一人が幸せなのが許せなくて」

少しずつ、息を吐き出すようにホシノは言葉を紡ぐ。眩しすぎて、

痛すぎて直視できなかつた現実。ホシノを取り囲んでいた沢山の事、それを彼女は見つめなおす機会を得て——そして、気付いた。今の自分が、過去の自分が……笑えていた事に。

「私、ちゃんと向き合うよ。現実には、幸せに。それが私のやりたいことだから。向き合つて、ちゃんと生きていく。いつか、胸を張つて会えるように」

今日はその旅立ちの一步。自分に正直に、ありのままを受け入れて生きていくから。遠くにいる、ホシノだけの先輩に『立派になったね』と言つてもらえるように。大切な仲間達に頼つてもらえるように。

その果てのない、終わりある旅を真つ直ぐに歩いて行けるように——。

「だから、ずっと隣で見守つててね。私の先生」

▼

「今日はあるがどうね、先生」

「私の方こそありがとう。楽しかった？」

「うん、勿論！先生はどうだった？」

「楽しかったよ。こんな羽を伸ばせたのは久しぶりだからね」

お土産コーナーでお揃いの鯨型ストラップを買つた後は水族館を出て、丁度良い時間だったためそのまま夕食を取つた。2人で取り留めのない会話をして、笑い合つて、一日はあつという間に過ぎ去り……名残惜しいが、お別れの時間が近づいた。

ぐつと背を伸ばす先生には確かに楽しさが滲んでいて、その言葉が嘘でない事がよく分かる。今日一日、本当に楽しんだ。

「また行こうね、ホシノ」

「……うん！」

▼

「……うん」

ホシノはお揃いのストラップが付いたスマホ、そこに映る画面を眺める。海のトンネル、ジンベエザメや無数の魚をバックしたホシノと先生のツーショット。ホシノは満面の笑みで、彼は優しい……ホシノが好きな微笑み。

今日という一日、彼と過ごした轍の様なもの。そして、新しくできた彼女の宝物。

拡大して、縮小して、色々な角度から眺めて一通り楽しんだ後……ホシノは件の写真をホーム画面とロック画面に設定してベッドに飛び込む。

本当に良い一日だった。楽しくて、新鮮で。これほど羽を伸ばせた経験なんて今までなかった。これでまた頑張れそうだった。この一日を糧に、帰り際の彼に言われた「また行こうね」の言葉を糧に。

ホシノはもう一度、宝物の写真を眺めて——今日という大切な一日に終わりを告げた。

新たな始まりを告げて

アビドスを舞台にしたカイザーコーポレーションの策略、黒服を筆頭とするゲマトリアの暗躍、そして滅びの一粒たるビナーの目覚め、及び総力戦……クロノススクールのニュースでそれらがひっきりなしに報道されていた時期が少し前の事になった頃。

キヴォトスやアビドスは日常を取り戻し、いつも通りを謳歌していた。対策委員会は学校の借金を減らすために勤しみ、アビドスの住民は住処にて生活を営む。何かに笑い、怒り、喧嘩して、仲直り。眩しいくらいに美しい日常。アビドス対策委員会が守った、彼女達の居場所。その場所も完全復興に近い。

目まぐるしく事態が動き、それらが終息した時期のシャーレは酷く静かだった。主たる先生は入院しており、仕事は全て連邦生徒会が請け負っていたから。退院後も仕事自体は回されたものの、その量は普段とは比べ物にならないほど減っており……。

そういつた事情もあり、先生はここ最近はかなり自分の時間……余暇を手に入れる事ができた。とは言っても、今現在趣味なんていうものはない。昔は人並に好きなものはあったが、精神を摩耗してしまい楽しむことができなくなってしまった。つまらない人間になった、と自分でも思う。だが、そんな事は嘆いても仕方がない。だからやれる事を、したい事を探そうと思いを回しても特には出てこなくて。

結局、今まで削りに削っていた睡眠時間に余暇を回していた。

「……んう」

シャーレオフィス、デスクで先生は目を覚ます。ぼんやりとしてピントが合っていない視界。数回瞼が引き合って、そして弾かれた。ライトを消している暗い部屋。窓から差し込む光もない今は午前3時に差し掛かる直前。意識を手放したのが午前2時過ぎであるから、1時間も寝ていない計算になる。

——最近、こういう事が多くなった。寝れないわけではないが、眠っても短時間で目覚めてしまう。浅い睡眠。疲労はきつと溜まっている。今は然程気にならないが、どうしても辛くなったらサヤ

に頼んで導入剤を処方してもらわなければならないだろう。或いは、自分で調合するか。

タッチディスプレイになっていくデスクを操作すると、シャーレオフィスに明かりが灯った。視線だけ右に動かすとイリリガートル台が目に入る。上部にぶら下がった輸液バッグの中身は殆ど残っていない。

右腕に刺さった翼状針を手慣れた動作で引き抜いて、立ち上がった先生は軽く伸びをする。パキパキと音を立てて、体が解れた。

そのままデスクの引き出しを静脈認証で開けて、中に仕舞つてあるケースを取り出す。蓋を開け、中身の錠剤を3錠出して口に含み、水で飲み込む。

そのまま彼は必要な荷物を持ち自身専用のシャワールームへ足を運び、内部に入って鍵を掛ける。

ID、靴、靴下。コート、ジャケット、シャツ、カットソー、肌着。ベルト、スラックス、下着。その順番で服を脱ぎ、生まれたままの姿となった彼は体の表面……巻かれている包帯を確かめた。血は滲んでいない白を全て外し、彼の素肌が全て露になる。

火傷、切創、擦過傷、裂挫創、刺創。心臓付近の背中側まで貫通した傷と、左脇腹の痣。体に刻まれたそれらの経過を確認してシャワーを浴び、湯上りに包帯を巻くか、或いは人工皮膚を張り付けるかを選択する。朝のルーティンワーク。

そして、これらをすべて終え先生としての姿に戻った彼は普段通りならばオフィスに戻るのだが……今回は戻らずシャーレの地下、クラフトチェンバーが座す場所へと降りて行った。

「――まずまず、かな」

そう言つて彼が出来栄えを評したのは、少し前に欠損した左足の指2本……それを補うための義指だった。

今までバタバタしていて頭の中から抜け落ちていたが、彼はあの時から足の指を失ったままであり、それを癒やす事も代替する事もなく今まで歩んできた。カイザー理事に啖呵を切った時も、黒服と対峙した時も、ビナーと殺し合った時も、ずっと。

ビナー戦後に運び込まれた病院で欠損が露呈しなかったのは偏にアロナが偽装鏡面プロトコルを局所的に稼働させてくれたからだ。

彼女には色々が無茶をさせてしまった。暫くは機能の負荷を先生側で請け負わなければならぬだろう。

昔からそうだった。彼女は無茶をすると、無理をするとその皺寄せのように眠る時間が長くなる。睡眠をしてエネルギーの消費を抑えるために。

だから、眠る彼女を見ると本当に胸が締め付けられるような気持ちになる。己が彼女を酷使した動かぬ証拠を突き付けられるようなものだから。

「――アロナ」

呟くような声を1つ漏らして、彼は義指の取り付け作業に入る。靴を脱ぎ、靴下を脱ぎ、指が3つしかない素足を晒す。そして、2本の指を取りつければ見た目は幾分かメカニカルだが形だけは一般的な足と変わらなくなった。左右の足を見比べても特に違和感はなく、そのまま歩いたり走ったり飛んだりしても動きにくさは感じない。概ね成功と言えるだろう。

仕上げて義指に人工皮膚を張り付ければ、見た目も生身と相違なくなった。実際に触れられない限りは恐らく気付かれる事はないだろう。

足の指が無くなった程度の怪我で誰かに心配を掛けたくない。踏ん張りが効かなくなったり、少し歩き辛かったりする位で日常生活を営む上では何も不便ではないのだから。

己の傷は隠すもので、痛みは呑み込むものだ。無闇矢鱈に訴えても状況は改善する事は無く、失ったものは失ったまま。良くも悪くも元通りにできない。

キヴォトスの医療は優れているが、それでも欠損を再生できるほどではない。元の人体と相違ない形と機能を備えた義体を作れるが、中身はロジックの塊で肉の塊ではないから。

勿論、それについて不満に思ったことはない。義体と云えど、その性能は途轍もないほど優れている事は身に染みて分かっているし、一

度失くしたものを代替できるだけでもありがたい。しかし、失った肉体が全く惜しくないかと問われれば――。

「……良くないな。思考が分散している。集中できていない」

先生は頭を軽く振り、思考をリセットする。最近はこうやって雑念が混じることが多い。アビドスに単食う大きな問題が片付いたからか、それとも仕事に意識を向けられなくなったからか。或いは、単純な睡眠不足からか。いずれにせよ気が緩んでいる事は間違いない。

眠気覚ましも兼ねて両手で軽く頬を叩いて、先生は『先生』としての自己を再定義する。

「……よし、今日も一日、頑張ろう」

再び靴を履いた先生は、何時もの先生らしい顔を浮べてシャーレのオフィスへと戻っていった。



「うへ、おはよう、先生」

「ん、おはよう、先生」

「先生、おはようございます☆」

「おはよ、先生」

「おはようございます」

午前10時。ぞろぞろとオフィスに入ってくるのは、アビドス対策委員会の少女達だった。今日はシャーレに所属する運びになった彼女達に諸連絡や諸々の登録を行う日。先生の仕事場を見渡しながら、朝の挨拶をする彼女達の表情は好奇心や興味が透けていた。

「おはよう、皆。そして、いらっしやい。シャーレへようこそ」

そう言っ、にこやかに笑う先生。彼は慣れた動作で5人を応接室まで通し、お茶とお茶菓子を用意して、チェアに座らせ……プロジェクターを起動させて説明を行う準備を完了させた。

「さて、じゃあ早速だけど説明をさせてもらうね。何か分からない事があつたら、気軽に聞いてくれると嬉しいな」

▼
最初は連邦捜査部シャーレの役割について。全体の仕事の内容や権力の範囲、連邦生徒会との位置付けについての話。

次は生徒が行う事について。当番制、と言われているアレだ。生徒が行う仕事内容や、各種規定……簡単に言えば業務を行う時間や、休憩、お給料の話だ。

仕事内容は基本的に先生のサポートであり、本人の能力や経験に応じて行う仕事内容は大きく異なる。例えばユウカは数理系の仕事が多くなり、ハスミは様々な仕事をバランス良く……といった具合に。業務時間や休憩についても当然規定はあるが、然程かつちり決まっている訳ではないためある程度は融通が効く。

お給料についてはかなり良い額を貰える。平均的な時給を大きく超える額に、セリカの目が輝いたのはまた別の話だ。

一通り話し終え、質問も全て答え、一旦小休止。

先生はノノミとシロコに挟まれ、膝の上にはホシノが乗っている。最早見慣れた光景にアヤネもセリカも一々突っ込まなくなった。彼女達も随分強かになったものである。

「へえ、アビドスに新規店が……」

「そうそう。砂嵐の影響が少ない駅近の郊外でも、土地代はかなり安いからね。今はカイザーも大人しいし、タイミングとしては丁度良かったのかも。店主さんも良い人そうだったよ」

「ん、これを機に少しずつ人が戻ってくると良いけど……それはまだ難しそう」

「ですが、大きな一歩です☆」

過疎化を重ねたアビドスに訪れた新しいもの。その到来をアビドスの少女達は心の底から歓迎していた。嘗てのような賑わいを見せるのはまだ先だが、それでも大きな一歩だ。店が増えれば経済が動き、経済が動けば人も増える。勿論、現実はその単純ではないが、良い転機になることは間違いないだろう。それに、彼女達は愛した場所に人が訪れてくれるだけでも嬉しいのだ。来て、過ごして、その果て

に『良い所だった』と思ってくれるならば、それに勝る幸福はない。「先生はあれからどうなの？ 沢山怪我してたし……」

「私は大丈夫だよ。連邦生徒会の子達が色々と気を遣ってくれてね。そのお陰で休める時間とか、色々と整理する時間が出来たんだ。あと数日もしたら、私も通常通りにシャールレの仕事をやるつもりだよ」

ホシノの裏から顔を出して微笑めば、セリカも安堵したような溜息を吐く。周りを見れば全員が同じような表情をしていた事に気付いた彼は「心配をかけてごめんね」と呟いた。その時、彼の吐息が首筋にかかったホシノは顔を真っ赤にしながら俯くが、真後ろにいる彼は当然気付いていない。

その後も取り留めのない話を続け、気が付けば全員のティーカップの中身とお茶菓子が無くなっていった事に気付いた彼は腕時計を一瞥して……ホシノを猫のように持ち上げ、膝の上から下した後立ち上がった。

「丁度良い時間だし、シャールレの中を案内するよ。ついでに、認証系も済ませちゃおうか」



シャールレの中の施設と一口に言っても、中身も種類も様々だ。

彼や当番の生徒が実際に働くオフィスと、お客様を通す応接室、先生が時々使う休憩室。

体育館や図書館、視聴覚室、教室等の学校の施設が集まるフロア。キヴォトスの生徒には欠かせない射撃場。

実験室、工作室、検証スペースといった一部の生徒が喜びそうな場所。

居住区の方に行けば生徒が宿泊できる部屋や浴場、食堂、菜園、果てにはゲームセンターやトレーニングルームまで完備されている。ワカモは基本的にこの居住区の一室か、先生の休憩室を寝床にしているが、今日は不在であった。

生徒が主に利用するのはこの位であり、階数的には1Fのエントラ

ンスからオフィスまで。クラフトチェンバーやその生成物の待機場、外部に漏らせない機密が保管されている書庫、危険物の保管庫が存在する地下は立ち入り禁止であり、管理者たる先生と連邦生徒会の室長以上のみが足を踏み入れる事ができる。

このように地下に関しては秘匿されているのに対し、オフィスより上の階……先生の私室や展望回廊があるフロアはオープンであった。アビドス対策委員会の少女達にも紹介できる程度には。だが、彼の私室と名前こそ付いているが、全くと言っていいほど利用しなため殺風景であり、これを見た生徒は皆苦笑いをしていた。

シャーレのビルのワンフロアを貸し切ったただっ広い部屋には利用した形跡のない電子レンジと冷蔵庫が無造作にあるだけ。これは『何も無いのはちよつとな』と思った先生が買い、置いたものなのだが、却って逆効果だったようだ。先生にはインテリアコーデイネートの才能がないらしい。

一通りの紹介を終えた後は彼女達が持つ学生証とスマホをシャーレのカードキーとして登録し、ついでに虹彩と静脈の登録も済ませ、5人から書類を受け取れば、彼女達は正式にシャーレ所属の生徒となった。



「シロコ、そのこの棚の……F61のファイル取ってくれないかな？」

「ん、分かった」

「ホシノ先輩、これって大丈夫？」

「ん、多分いいと思う。でも、念のため後で確認した方が良くかも」
朝の静寂が嘘だったかのように賑わうオフィス。今日の日程はオリエンテーションのみで、その後は解散の流れであったが、彼女達は「実際に仕事やってみよう」と言っていて……そして、今に至る。異例の当番5人態勢。シロコは先生のサポート、ホシノとセリカには機密性の低い書類仕事を任せて、ノノミとアヤネは別件で外に出ている。

5人に仕事を割り振る事は大変だったが、単純計算でマンパワーが

6倍になったため、見る見るうちに片付いていく。元からさほど量がない事も相まって、午後3時前だというのに本日分の仕事が終了しそうな勢いだった。

「アヤネちゃんとのノミ、ただいま戻りました☆」

「2人ともおかえり。どうだった？」

「良い経験になりました。あの場で出た案をアビドスでも採用できないか、一度持ち帰って検討してみます」

そう言い、メモを片手にアヤネは満足そうな笑顔を零す。彼女達にはシャーレも一枚噛んでいる町興しのデイスカツションに参加してもらった。

本来は先生が行くべきものであったが、彼が怪我を負ったと知った主催者達が『無理をせず休んでくれ』と、連絡をしたのが数日前。ぐうの音も出ない正論であったが、自身が関与した事を無責任に投げ出してしまったような気分一杯になり……そこで、今日思い切って彼女達に聞いてみたのだ。

シャーレも噛んでる町興しに興味あるかな？ ——と。

衰退の道を辿るアビドスに住む彼女達は当然興味を示し、彼は急いで主催者に連絡をし、主催者も快諾をしてくれて——今に至る。彼女達の様子を見るに良い刺激になったようだ。

「これ、主催者さんから頂いたお菓子です。皆さんで食べてくださいって」

「ありがとう。もう少しで今日の仕事は片付くし、終わったら皆で分けようか」

紙袋を受け取りながら、先生は『ちゃんとお礼しに行かない』と思ひ、残りの仕事を片付ける。

全員の仕事が終わったのは、それから約10分後の事だった。



仕事を終え、お菓子を摘まみながら雑談し、5時になったタイミン
グでシャーレを出した6人。そのままアビドスの方面の電車に乗り、最

寄りから向かった先は屋台で再出発を果たした柴関であった。久しぶりに6人揃って夕食を楽しめば、時間なんてあつという間に過ぎ去っていく。

先生が会計を済ませ屋台から出たら、辺りはかなり暗くなっていた。

「今日はありがとう。本当に助かったよ」

「うへ、こっちこそありがとう」

「すみません、ご飯まで出していただいて……」

「この位、なんてことないさ」

彼がそう言つて返せば、皆も顔を緩める。ああ、こういう人だったな、と。

颯爽とした夜風が吹き抜ける。初夏の訪れを告げる風を肌で感じた彼は、歌う様に言葉を発する。

「じゃあ、今日はこの辺りで解散にしようか」

「ん、先生。夜道は危険。私が送つてく」

「心配ありがとう。でも、大丈夫だよ。駅も近いからね」

シロコの申し出をやりわりと断つた彼は踵を返した後——顔だけを彼女達の方に向けて。

「また、いつでも遊びにおいで。当番じゃなくてもいいからさ」

少女達に向けられたその顔は、あまりにも儂くて。まるで蜃気楼、或いは雪の結晶のような、一瞬でも目を離したら溶けて消えてしまふような微笑みだった。

「それじゃあ、おやすみ。またね」

誰かを迎える花

D・U・地区。どこの学園の管理下にも存在しないキヴオトスの中では異例の都市。複数の空港や駅を備え、高層ビルが立ち並ぶその様は正に都心だ。その中でも一際目を引くのは連邦生徒会が所有する……キヴオトスの中で最も高いビルであるサントウムタワー。首が痛くなるまで見上げても、その頂上を地上から何う事はできない。

空に聳えるサントウムタワーは進化を重ね、空に手を掛けるに至った知性体の足跡だ。自分達は此処まで来た——その跡を残し、証明しようとする心の現れ。

我らの前に栄えた知性体に対する感謝と、我らの後に栄える知性体へ送るエール。それを今期に栄えた生命の誇りとして残す。バベルの塔、とは言い得て妙で、何時か滅びるその時まで愚直に宙^{ソラ}へ手を伸ばし続ける。

閑話休題。

D・U・地区にはサントウムタワー以外にも多くの高層ビルが存在する。その中で最も目を引くものと言ったら、唯一つしかないだろう。ともすれば、キヴオトスの中で有名になろうとしている組織が保有する建物。サントウムタワーよりは低い、それでも地上からではその全貌が伺えない高さを誇る高層ビルは、ビルの主と合わせて密かに観光スポットと化しているシャールレのオフィスタワーだ。

D・U・地区は眠らない街であるが、やはり最も活気に溢れるのは多くの人が活動する時間……朝の9時から夕方6時の間になる。人で賑わう街。キヴオトスの繁栄、その縮図。

ガラス張りになったエレベーターから下を眺めているのは、最早シャールレの常連と化した早瀬ユウカだった。特徴的なヘイロー。綺麗な青の髪を何時ものツースイドアップに結んでいる彼女の表情は柔らかい。何せ、久しぶりの当番なのだ。アビドスに行き、入院し、またアビドスに行ったかと思えば、シャールレとして協力を要請され。彼の頼みを断る訳もなく同じセミナーのノアとコユキ、暇そうにしてい

たヴェリタスやエンジニア部、特異現象捜査部まで巻き込み過剰戦力で彼の下に行き、彼と共に神話の怪物と戦った。

そして、戦いが終わったかと思えば彼はもう一回病院に叩き込まれたのだ。面会自体はしたものの、彼に負担を掛ける事を良しとしなかった彼女は比較的短い滞在にしており……ぶつちやけると、彼に会えなくて寂しかったのだ。

だが、今日のユウカはシャーレの当番。仕事という大義の元、一日中彼を独占できる。最近頻繁に当番に来ていたアビドスの少女達は、今日の当番の名簿欄に名前が記載されていない。更に言えば、ユウカ以外の名前は存在しない。つまりは突然の来客やプライベートで遊びに来る生徒を除けばシャーレのオフィスの中で彼と二人つきり。それに、少しだけ優越感を抱いていた。

微弱な振動を味わった後、エレベーターのドアが開いた。オフィスがある階層。ユウカは肩に鞆を掛けて、黙々と足を進める。カーペットが敷いてある明るい廊下を迷いなく進めば、目的の場所に辿り着いた。

扉の横のディスプレイには先生の予定と、本日の当番の生徒の名前。そして彼のステータスは在室になっていた。恐らく既に仕事を始めているか、或いは仕事をしながら寝落ちしているか。

ユウカは深呼吸を1つして、鞆の中から手鏡と櫛を取り出して最終チェック。前髪を整え、肌や服にゴミが付いていない事を確認した彼女は道具を仕舞い、襟を正してからオフィスに足を踏み入れた。

「先生、いらつしやいますか？」

自動ドアを潜った先には白を基調とした清潔感のある見慣れたオフィス。明かりこそ点いているが、人の気配は感じられない。ユウカの声に対する返事も返ってこなかった。無論、予想通り。否、彼女風に言うなら『計算通り、かんぺき』だろうか。彼女は足音を殺して奥のデスクまで歩いていき……突っ伏して寝ている先生を見つけた。

「……先生」

眩き、彼を見る。まるで眠った春のような、小さな寝息を立てる彼。黒のスラックスと第一ボタンが外された黒シャツというラフな姿。

基本的にいつもはかっちりとしている彼が見せる隙の多い姿は余りにも蠱惑的だった。

彼女は毒気を抜かれた様な顔を浮べ……キャスター付きの椅子を転がし、先生の近くに座って彼を眺める。睡眠を因数分解する事はない。ただ、隣に座って見つめるだけ。きつと、酷く疲れているのだから。コンシーラーで隠されている隈が動かぬ証拠。また徹夜したのだろう。デスクの上にはスリープ状態のシツテムの箱とノートPC、デスクトップPC。置かれたマグカップのコーヒーは一口も飲まれずに室温に冷めている。

「お風呂は……」

立ち上がり、彼の頭と首元を嗅ぐ。汗混じりの匂いがするだろうと思っていたが、そんな事は全くなかった。勿論、寝汗の関係で全く汗を掻いてないわけではないだろう。だが、頭からはトリートメントの香りがして、首筋からはボディソープの香りがする。シャツとスラックスは主張が控えめな柔軟剤。何時も彼が付けているホワイトリリーの香水と競合しないもの。

——お風呂には入ったみたいね。良かった。

口には出さず心の中で思うだけに留めて、再び彼を眺める。よく見ると、彼は普通に整った顔をしていた。夜を退けるような長いまつ毛、愛に溢れた瞳と優しい言葉を発する口は閉じられている。健康的な肌色には毛穴すら見当たらない。女性として普通に羨ましいくらいだった。

服の隙間から覗く鎖骨と、その下に続く女性と比べて筋肉質な体。ユウ力達よりも弱くて、脆くて、柔らかい体なのにいつも最前線に立ち誰かを守り続けてきた。

——貴方を守らせてほしい。決して折れない貴方を。傷ついたらままの貴方を守らせて。そう希つても貴方はきつと申し訳なさそうに微笑むばかりで、きつと頷いてくれない。

本当に難儀な、罪作りな人……そう思っていると、「んう」と悩ましそうなくぐもった声が聞こえた。先ほどまで閉じられていた瞳が薄つすらと開かれていて世界を映していた。手を突いて上体を起こ

し、椅子の背に凭れながらぼうつと天井を見つめている彼にユウカは声を掛ける。

「おはようございます、先生」

「……おあよう」

半ば反射のよう。声が聞こえた方へ顔を向けて、呂律が回っていないふにやふにやな挨拶をした。彼は朝にあまり強くないのだ。視界もピントが合っていないから、挨拶をした生徒が誰かも分かっていないだろう。

彼は寝ぼけ眼を擦りながら冷めたコーヒーを口に含み、意識を覚醒させた。

「改めておはよう、ユウカ」

「はい、おはようございます、先生。お仕事も良いですが、徹夜続きは駄目ですよ？」

「あはは……私にしかできない仕事が多くてね。でも、セーブしながらやってるから大丈夫だよ」

カイザーコーポレーションが行ってきたブラックオプスの数々に対する報告書と、それに対するシャーレの方針。これは彼の一存で決められるような簡単な事ではなく、連邦生徒会とも擦り合わせなければならぬ。連邦生徒会はキヴオトスの治安全体を見据えた方針で、シャーレの方針は生徒の安全に寄り添ったもの———そんな棲み分けがされている。

そして、ビナー戦。当然の如く戦闘データは全て提出。引き摺り出した攻撃パターン、防御パターン、回避パターンの羅列とその対処法を全てレポート形式で連邦生徒会のデータベースに保存した。そして、数日後には連邦生徒会主催の各学園の重鎮を招いた対策会議が開かれる。恐らく今後とも戦う神名^{デカグラマトン}十文字を見据え、各学園が円滑に協力できるように情報共有を図るのだろう。当然、その会議で使う資料の作成者と当日の発表者は先生だ。だが、来る日の為に連邦生徒会が昼夜関係なく動いてくれているのは彼も良く知っている。

———彼が休まずに働き続けるのは自分以外の生徒が頑張っているからだろう。

ゲマトリアの暗躍は意図的に省いた。これは彼の仕事だ。他の誰かに、ましてや生徒に任せる訳にはいかない。大人の相手は大人がすべきなのだから。

協力を要請した各学園への報酬の支払いもある。生徒達は皆『報酬はいらない』と口を揃えて言っていたが、今回はシャーレの正式な依頼のため受け取って貰わなければ彼と連邦生徒会が困る。使われた弾丸だって無料ではないのだから。働きに対する正当な報酬とお礼だと思っただうか受け取ってほしい。

これに加えて、動員した学園の生徒会に対する事情説明と、発生したインシデントの後処理、事後処理……そして、実際に戦ってくれた生徒達に対するお礼。特に生徒に対するお礼はちゃんと一人一人面と向かって告げている。勿論、例外はない。文字通りあの場に居た全生徒に真正面から向き合い、真摯に感謝の言葉を送ったのだ。

——と、これらが彼にしかできない……彼自身の意志が大きく干渉する仕事だ。

当番の生徒には細々としたその他の雑務を任せ、その間に彼は自分にはできない仕事を行う。

当番の生徒がいけないときは一日中シャーレを留守にして各学園へお礼をしに赴き、言葉を交わす。尤も、これは数日前に全員分が終わってしまったが。

故に彼はここ数日、殆ど外に出ずシャーレに引きこもりながら書類と格闘している。気が滅入りそうになるが、先延ばしにしても良い事なんて何もないと知っている彼は黙々と仕事を言い続けていた。当番の生徒と交わす取り留めのない会話を癒やしにしながら。

凝り固まった体を解すように伸びをする彼は「あ」と短く声に出して。

「何か飲むかい？ コーヒーも紅茶もあるし、多分冷蔵庫の中にはジュースも入ってるけど……」

「いえ、お構いなく……というか先生、食事はちゃんと取ってくださいね」

ユウカはジト目で先生のデスク横に設置されている小さなゴミ箱

を指差す。中身はゼリー飲料とカロリーバーのゴミが大半で、残りは仕事の合間に摘まんでいたと思われる高カカオのチョコレートが幾つか。

時短を意識した食事はまるで生存に必要な栄養さえ補給できれば良いと言っているようなもので、彼の多忙さが伺える。だが、そんな状況でも食事は疎かにすべきではないのだ。

痛い所を突かれた彼は誤魔化す様に苦笑いを浮べて「大丈夫だよ」と口にするが、何も大丈夫な事はない。このまま突き進むと近い内に栄養失調で倒れてまた病院のお世話になりそうだった。ユウカは『全く、先生は私が居ないと駄目なんだから』と内心で思いながら、椅子から立ち上がる。そして、奇しくも先生も全く同じタイミングで立ち上がった。

動作がシンクロした2人は互いに顔を見合わせて一瞬だけ微笑みを交わし、キッチンへ向かっていく。ユウカは先生の朝食を作り、先生はユウカの分の飲み物を淹れに行くのと、彼女の手伝いをしに。



「ご馳走様でした」

「ご馳走様でした……私の分までありがとうございます」

「気にしないで。それに、ユウカも朝食まだだったんでしょ?」

互いに専用のマグカップを傾けながら、食後のコーヒーを楽しむ。インスタントではない、一から焙煎して淹れたコーヒーは手間の分だけ美味しく思える。誰かと飲むなら猶更。

「ユウカは朝ご飯を食べれる、私は誰かにご飯を作れて嬉しい。正にWin-Winの関係じゃないかな」

「そういうものですか?」
「そういうものだよ」

ユウカが少し手を伸ばせば触れられる距離にいる先生。彼はいつものように笑っている。

——彼は文字通り、二度死にかけた。一度目の詳細は不明だ

が、二度目は知っている。その場に居たのだから。

心臓の真下に直径5mmの風穴が空けられた。無論、致命傷だ。仮にナノマシンが定着しなければ帰らぬ人になっていただろう。そんな状態で、彼は誰よりも戦っていた。自分以外の誰かの為に。

「先生」

「どうしたの？」

「……もう無茶はしないでくださいね」

ユウカの健気なお願ひ。それに先生は上手く領けない。だから、苦笑いとも微笑みとも取れる曖昧な表情を浮かべて笑う。その笑みが、ユウカは酷く痛々しく見えて仕方がなかった。

「全く、私は駄目な大人だよ」

「そうですね。お金の管理もできないし、すぐに食事は疎かにするし、徹夜ばかりですし……」

「困ったな。身に覚えがありすぎて全部否定できない」

お手上げだ、と言わんばかりに両手を上げる彼。確かに彼は駄目な大人だろう。特に私生活、生徒が絡まない部分は非常にだらしない。

「だけど———そう、だけど。」

彼はそういう甘さを補って余りある魅力がある人なのだ。寧ろ、その甘さすら人を惹きつけるスパイスになっている節がある。例えば

———今のユウカのように。

「ええ、先生は駄目な大人です」

「お金の管理はできなくて。」

書類仕事が苦手ではないけど嫌いで。

終わらないからと徹夜を続けて。

私生活はだらしがなくて。

しかし。

困っている人に真っ先に手を差し伸べる善性がある。

生徒に向き合い、寄り添い、教え、導き、守り、救う優しさがある。

先生として、大人として、一人の人間として心の底から生徒を愛し、

大切に思っている。

そういう部分がユウカは非常に好ましかった。

▼
その後はユウカと先生は阿吽の呼吸で仕事をし続け、本日分のタスクは全て終わらせた。当番が終わる時間まではユウカと雑談をしながら穏やかな時間を過ごし、帰る彼女を見送り……先生は広いシャワーレに一人残された。

彼は明日の準備や生徒の前ではできない類の仕事を済ませ――

――今は、シンデレラの魔法が解ける頃合い。

「さて」

先生は酷く優しい声音で語る。

「ユウカは帰宅、ワカモは不在。電子機器も全て動作を停止させた。この場で起きる事は記録に残らず、記憶に残るだけ」

誰も知らない、たった二人の会合。

「ビナー戦以来だね――ノア」

或る記憶

「——え」

その知らせにミレニアムサイエンススクールのセミナー書記、生塩ノアは吐息とも悲鳴とも取れる声を漏らした。トレードマークのペンとメモ帳を地面に落として、震える足で数歩後ずさって……それから、糸が切れたように力無く地面に座り込んだ。

「ノ、ノア!?! 大丈夫!?!」

いつも揶揄っている可愛い自慢の親友の声、それが酷く遠い世界のように思えた。呼吸が上手くできない。酸素を取り込めない。視界が滲む。これは涙だ。体の震えが止まらない。寒い。寒い? 分からない。でも、震えている。

彼が傷ついた。彼が血を流した。痛みを訴えた。あの、陽だまりのような彼が。戦いなんて全く似合わない彼が。なんで?

知っている、誰かのために。日常の陽だまりの彼が戦うのは生徒の為だ。その善意に、優しさに何度も救われた。差し伸べてくれた手に光を見た。

そして、その善意と優しさと光に礫にされる彼も。

「落ち着いて、ノア! 大丈夫だから……ッ!」

倒れ込みそうなノアを支えるユウカ。彼女を安心させる為の言葉を発するユウカも何が『大丈夫』なのかは全く分からなかったが、それでも口にしなければならなかった。青褪めた顔で震える彼女はまるで親を失った幼子のように……酷く、痛ましかった。それは直視できないほどに。

「嫌……嫌……先生……嫌、です……」

半狂乱。正気ではない。泣きながら讒言のように「先生」と「嫌」を繰り返している。その様子を見てただ事ではないと悟ったコユキも慌てて何かを探しに飛び出した。

そう——ノアは記憶を持っていた。或る記憶を。無数にある並行世界、横並びの歴史……その一つ。先生と笑い合い、絆を深めた

大切な思い出。だが、それと同じくらい痛くて、受け入れられなくて、悲しい思い出。

世界を救ったお話。

帰らぬ人となった救世主。

滅びに打ち勝ち、生徒を守り抜いた先生。

そうだ、あの光景を生塩ノアは生涯忘れることはないだろう。

——違う、私が上手くやれていないだけだ……！ 出し渋るなッ！ 霊の一片まで振り絞れッ！ この期に及んでまだ帰りたいなんて甘えた事を考えるな……！

光の中、己を鼓舞する言葉と共に立ち上がる彼を。帰りたい、まだ生きたい、怖い、死にたくない。そんな当たり前の感情を怒号と共に薙ぎ払って。

——もう、充分過ぎるくらいだ。あと少しを、私は沢山貰った。だから……！

だから、貴方が死ぬんですか？ 私達の為にその身を捧げるんですか？

……いや、口にしたのはそんな言葉じゃない。彼の行いを問いたですような疑問じゃない。思ったのは、心が叫んだのはもっとシンプルな感情。

「……行かないで」

貴方は心臓を抉り出した。



先生の声が静謐を切り裂いた数秒後、コツコツとヒールがリノリウムを叩く音が聞こえた。

真夜中の月光に照らされる白を基調とした姿。流麗な白髪と、特徴的なヘッドギア。まるでアメジストのような瞳。その姿を認めた先生は、もう一度彼女の名前を呼んだ。大切な、彼女の名前を。

「——ノア」

「はい……貴方のノアです」

鈴の名を転がしたような、だが癒えぬ傷と痛みを抱えた声。彼女は緩く微笑みながら、その瞳は眼前の彼を捉えて離さない。

——そう。彼女は徹頭徹尾、先生を見ていた。自身と同じように月光に照らされる青年を。浮世離れした、まるで蜃気楼のように霞んでしまう彼を。少し伸びた彼の髪、代謝、生きている証拠。2人の呼吸音だけが世界にあるかのような感覚はノアに甘い痺れを齎した。「ごめんなさい、不法侵入のような真似をしてしまって……」

「気にしないで。それに、ここはシャール、凡ゆる生徒に門を開く場所。だから、良いんだよ」

「私が、貴方の生徒だから」

「ああ、その通り」

言つて、彼は微笑んだ。その微笑みは誰もが安心感を覚えてしまうものであったが……ノアはその笑顔があまり好きではなかった。彼に『安心感』という重荷を背負わせてしまっているようで。

様々な感情でぐちゃぐちゃになったノアの内心を露知らず、先生はいつもの調子で背中を向けて。

「さあ、座つて。お茶を出すよ。誰もいない時間に来たんだ。何か聞きたいこと、聞いてほしいことがあるんだろう？ 私でよければ幾らでも付き合うからさ」

先生は手を引いてノアをソファに座らせ、落ち着いた色の明かりをローテーブルに灯し、彼はキッチンの方に消えていく。その背中をノアは見つめていた。

——記憶と一切変わらない姿だった。声だった。そうだ、彼はああいふ風に名前を呼んでくれた。大切なものにそつと触れるような優しい声音で。抱きしめてくれるときも、頭を撫でてくれるときもそうだった。一挙一動に溢れんばかりの愛と暖かさが込められている。

その後ろ姿を見ながら、彼女は思い返す。

先生を犠牲にして救われた世界。

そこで生きた——ある少女の手記。



7 / 3 1

去年の今頃、皆で海に行きましたよね。覚えていますか、先生。いえ、きつと覚えているでしょう。貴方は私達との思い出を何より大切にしていますから。あの夏、私は沢山の思い出を貰いました。今思い返すだけでも口元が綻ぶような、優しい記憶。そして、貴方の横顔。波打ち際を歩く貴方の足は砂に塗れていました。

貴方にとって、あのお出かけは最後の思い出作りだったんですか。

8 / 1

貴方の居ない夏が来る。

8 / 1 0

祭囃子が聞こえてきました。百鬼夜行の夏祭りでしょうか。一度でいいから、貴方と行って見たかったです。我儘ですよね、ごめんなさい。

8 / 1 5

貴方の微笑みはまるで線香花火だった。貴方の笑顔はまるで早咲きの向日葵だった。

儂くて、愛おしくて。胸が締め付けられてしまいそう。

私だけが止まったままなんです。あの時から、私の時間は動いてくれない。貴方の終わりが焼き付いたまま離れない。皆、喪失感に折り合いをつけて進んでいるのに私だけが前に進めない。

貴方の居ない先が怖くて仕方がない。貴方が過去になる事が怖い。貴方を忘れるのが、どうしようもないほど怖いんです。

8 / 2 2

久し振りにシャールレに訪れました。あの時から変わらないままのオフィス。コルクボードの写真の色とりどりの笑顔は貴方が作って、守ったものなんですよ。

オフィスのカレンダーは去年のクリスマススイブで止まったまま。あの時からこの場所は動いていない。私と一緒にです。先生の持ち物は何もかもそのまま。貴方の居た温度が冷却されている。貴方の残滓を掻き集めて私は夜を超える。

9 / 30

少し前、貴方の持ち物を皆で分け合っただけです。皆、泣いていました。もう先生が何処にもいない事を改めて突き付けられたような気分です。先生が気に掛けていたアリウススクワッドの秤アツコさん、その場で崩れ落ちていましたよ。貴方に送ったはずの花を抱えながら。ユウカちゃんはペンを、私は本を頂きました。ユウカちゃん、ずっと使っているんです。貴方の形見を。

10 / 6

最近寒くなってきましたね。先生もそろそろ衣替えを始める時期でしょうか。

先生、一つ謝罪をさせて下さい。ユウカちゃんに『最近ノアが目を合わせてくれない。嫌われているのかな』と相談しましたよね。偶然聞いてしまいました。

違うんです。嫌っているわけではないのです。ただ、癒えない傷を負ってしまった貴方を見るのが怖いんです。優しく頭を撫でてくれた貴方の右腕がない現実を直視できないんです。

ごめんなさい。ごめんなさい。真つ直ぐ貴方を見れなくて、ごめんなさい。

……なんて。去年の同日の日記です。貴方はこの時から人生の終わりを悟っていたような顔をしていましたね。終わりへ近づく貴方に、私は何も言えなかつた。

10 / 21

先生の読みかけの本を全て読み終えてしまいました。ですが、貴方が挟んだ葉はそのままです。私が送った葉、大切に使ってください

嬉しいです。貴方によく似合う一輪草。追憶の華。でも、私は貴方を思い出にしたいくないです。

11 / 9

夢の中で先生に会った。先生は海を見ていた。全ての命の母たる海を。あの人にも母はいるのだろうか。思えば、先生ではない『彼』の話を私は全く知らない。先生になる前の彼がキヴオトスの外でどのような生活を送っていたのか、私達は知らない。聞いても貴方は「どんな人だったのだろうね」と悼むように微笑んでいたから。これ以上は聞けなかった。彼の思い出に土足で踏み込む様な真似だと思ったから。

私達は彼の多くを知らない。知る事を許されていない。

11 / 22

一人で夜を超える貴方の横顔が寂しそうで、その孤独に寄り添いかけたのです。だって、一人で進むには、その道はあまりにも寒いでしょう。でも、私はできなかつた。貴方の背に手を伸ばしても、届かなかつた。

貴方の苦しみや痛みを私に分けてほしかつた。今すぐにでも代わってあげたかつた。私は貴方にそんな顔をしてほしくない。いつまでも笑っていて欲しいんです。貴方にはあの陽だまりのような笑顔が良く似合うから。

私は貴方の何かになれましたか。貴方の痛みを和らげる何かになれましたか。もしそうであれば、それに勝る幸福はありません。

12 / 23

貴方は何も教えてくれない。貴方はずっと透明なままで、消えてしまえそう。消えないで、消えないで。私は貴方に居てほしい。でも、時間の流れはいつだって残酷なんですね。私も漸く、現実を受け入れる決意をしました。遅すぎますか？ でも、貴方はきつと優しく頭を撫でてくれると思うんです。これは私の我儘な思い込みですか？

先生が死んだ。私は貴方が居ない事を、漸く受け入れる事が出来ました。もう会えないんですね。遠くに行ってしまったんですね。私達は此処に残るんですね。貴方が守った世界で、日常を歩むんですね。果ての無い終わり有る旅を行かなければならないんですね。いつか貴方に胸を張って会えるように。

そうなんですよね、先生。



陶器が僅かに音を鳴らす。静かなシャーレに響くその音色はまるで朝の訪れ。C&Cとティーパーティー仕込みの何処に出しても恥ずかしくない優雅な所作で紅茶を淹れながら、先生はノアの方を流し目で見ると。

彼女は綺麗な姿勢でソファに座っていた。まるで一枚の絵のよう。彼がソーサーとティーカップ、ティーポットを持ちながらソファの方へ向かうと、彼女は長いまつ毛に彩られた宝石を開眼した。吸い込まれそうな蠱惑的な色。

「ありがとうございます、先生」

「いえいえ」

カップにノンカフェインの紅茶を注ぎノアの前に置くと、彼女は流麗にカップを口元に運んだ。色素の薄い唇が軽いリップ音を鳴らす。彼もノアの隣に座り、極めて穏やかな口調で言葉を紡いでいく。

「こうして、ノアと落ち着いて話すのは初めてだね」

「……ええ、そうですね。初めてお会いした時は色々と大変でしたから……お体の方は……？」

「大丈夫だよ。心配させて——」

とん、と先生の体を軽い衝撃が襲った。次いで、ソファのクッションが背中に触れた。空気の流れに乗る、頭が痺れるような甘い香り。はらり、と頬に掛かる白髪。押し倒された、と理解するのに時間は掛

からなかった。

「ノア……？」

先生が困惑の色を浮べても、ノアは動かなかった。彼女の表情はよく見えない。青褪めた月明かり、その逆光。

彼女の手は彼の手首を握っている。まるで縋るように、祈るように。彼女の手は震えていた。

「嘘、ですよね」

「……何が」

「——大丈夫という言葉です」

その言葉に、先生は否定も肯定も返さなかった。先ほどまで浮べていた困惑は苦笑いに変質している。申し訳なさそうな笑み。悪戯がばれたような、と呼称するには質が悪過ぎる。何せ、この程度の衝撃でさえ傷が開いてしまっているのだから。

ノアはじつと彼を見つめる。感情の読み取れない瞳。手を通して伝わる彼の脈拍。吐息。生きている証拠。それが泣きそうなくらい嬉しくて、彼女は彼の心臓へ耳を当てた。

とくん、とくん、と命の鼓動。暖かい。血が通っている。細やかな、だが何者にも汚せない今を生きる人間の祈り。見知った見知らぬ先生の存在証明。

——そうだ。彼は先生だが、ノアを知る先生ではない。だからあの時……ビナー戦後に会った時、「初めまして」と言った。それで割り切るつもりだった。割り切れるはずだった。あの記憶は己の中に留めて、色褪せないように大切に仕舞うと誓っていた。

先生に『先生』の影を重ねたくはなかった。だって、それは彼にとって重荷になってしまうから。でも。

「ノア」

この声音で、温度で名前を呼ばれてしまえば、そんな抵抗は無意味だった。全てを優しく溶かし、赦すような表情で微笑まれて冷静でいられるわけがない。一挙一動、その全てが彼だった。ノアが間違えるはずがない。彼は、在りし日の彼だ。

——貴方の胸の中で泣けるのならば、それはどれだけ幸せな事なのだろう。陽だまりのような温かさと花の香りに包まれながらずっと隠していた大切な思い出を共有する。楽しかったこと、悲しかったこと、嬉しかったこと、怒ったこと。胸に残る輝く思い出たちを、先生に救われた生徒として話したかった。

普通の人に『前世か何かの記憶がある』と言っても鼻で笑われるだけだろうが、彼はきつと驚いた顔をしながらも信じてくれるだろう。誰かを疑う事が致命的に下手で、信じる事が上手だったから。

でも、それは我慢。沢山の荷物を背負う彼に、これ以上何かを背負わせたくないから。この世界でも先生は沢山のことを背負っている。信頼だったり、愛だったり。或いは、他の何かだったり。そんな中に、己の思い出まで加えたくない。

ノアは彼から距離を取る。掴んでいた手首を放し、近づけていた顔を離す。それから彼女は深々と頭を下げて。

「……急に乱暴しちゃってごめんなさい」

「いや、いいんだ。ノアが正しいよ。私は嘘を吐いたんだから」

「そうですね。嘘は良くないですよ、先生。先生が無茶をすればユウカちゃんも……私も、悲しみますから」

「2人にそんなに思われているなら、先生冥利に尽きるよ。うん、なら無茶はほどほどにしないと」

「そこは嘘でもしないと言い切って欲しかったですよ?」

「嘘は良くないって、ノアに言われたばかりだからね」

先生がそう言うのと、ノアは鈴を転がしたような声音で笑った。彼女はそのままカップの紅茶で口を潤し、立ち上がる。

「夜分遅くに押しかけてごめんなさい。私はこれで失礼しますね」

「? 何か用事があったんじゃないのかい?」

「ええ、ありませんよ」

ノアは先生の耳元に口を寄せて甘い声で囁いた。

「先生に会う……とつても、大事な用事が」

「……私も、ノアに会えて嬉しかったよ」

「ふふつ、先生のそういう所、私はとても好きですよ」

ノアは先生から離れ、「では」と言い残しシャーレを後にしようとしたが……その手を先生が掴んだ。

「こんな夜遅くにノアを1人で帰らせるわけには行かないさ。居住区に泊まっていきなよ」

「ですが……」

ノアは時計を見る。時刻はすでに1時を過ぎていた。確かに真夜中だ。この状況で彼が引き下がる訳がないと良く知っている彼女は嬉しそうな溜息を吐いて。

「では、先生の好意に甘えさせていただきますね」

「うん、部屋は——」

「ですが」

するりと彼の手をすり抜ける。くるりと回って彼を見る。舞う髪の毛がまるでレースの様であった。

「先生も一緒に、ですよ。お部屋は休憩室を使いましょう」

「……えっと」

「数日、碌にお休みできていませんよね？」

有無を言わせない圧力を前に、先生は黙って首を縦に振るしかない。コユキがノアを『怖い』と言う気持ちが若干分かった彼であった。

「善は急げ、ですよ。先生？」

花が咲いたようなノアの笑顔の前に、先生は苦笑い混じりの笑みを浮かべて……彼女の華奢な手に引かれて行った。

ノアは思う——今度こそは、貴方と共に生きていたい。誰かのために死ぬ貴方を、見殺しになんてしない。だから、行かないで……もうこれ以上、何処にだって。貴方がいない遠くを見つめながら、私の知らない彼方になんて歩き去ってしまったわらないで。私が、私達が大切なのは、他でもない貴方なのだから。

これは、生塩ノアの筆跡。彼の多くを知る彼女の詩。

響いて届け、我が心。貴方の救いになりたいから。

Vol. 2 時計じかけの花のパヴァーヌ「ユア・
ネーム・イズ」

Let's Go New Game!

私の声が、聞こえますか？

そこにいますか？

この世界を救う——勇者よ。

あなたのことを、ずっと待っていました。

今こそ、全てを話しましょう。太古、天使と魔族が……



「カットカット、カット——ト！」

ミレニアムの部屋に快闊な少女の音が響き渡る。ゲーミングキーボードを勢いよく叩きながら立ち上がる、桃色の猫耳ヘッドホンカチューシャと同色の尻尾が特徴的な彼女はシナリオライター。どうやら自身が手掛けた話のあらすじが気に入らなかつた様子で、頭を抱えながら部屋の中をうろろくと歩いていた。

「ダメダメ、在り来たり過ぎ！ これだと発売と同時にこけそうな感じ！ 私がユーザーだったら、プロログでこのテキストが出た瞬間に『あ、やめよ』ってなるよ！」

使い古されたテンプレート。ありきたりな二項対立。誰かと誰かが争っていて、その何方かの勢力に主人公が属していて。そして、もう一方の勢力を倒すために立ち上がる。変に奇を衒ってない非常に分かりやすいシナリオであるが、様々な娯楽が群雄割拠する昨今、こ

のような王道は余程でない限り『いつものやつね』と流されてしまうだろう。

大事なのはファーストインプレッション。手に取ってくれたユーザーの心を掴むあらすじ。それを目指して彼女は再びモニターと向き合う。

「もう一回！」

気を取り直して、テイク2を開始した。



勇者よ、あなたを待っていました

私は女神モモリア。

私達の世界——ミレニアムランドは今、過去に類を見ない危機に瀕しています。

この危機を乗り越え、生徒会の廃部命令からゲーム開発部を……いえ、ミレニアムランドを救えるのはあなただけです。

これから始まる、あなたの冒険のその先に……。

どんな試練や逆境が待ち受けているか、今はまだ分かりませんが……どうか最後まで、勇気だけは失わないでください。

勇者様の傍には、旅路を共にする少女達も居るはずですから。



新しい世界で、貴方はその少女達から『勇者』ではなく……。もっと特別な、相応しい名で呼ばれる事になるでしょう。その名前とは……。



薄っすらと開いた瞳の中に光が差し込んだ。人工的な明かり。後頭部のクツシヨン、背中に当たるカーペット、掛けられたブランケットの感触。

此処は室内だと理解するのに時間は掛からなかった。だが、自分の記憶を信じるならば、こうして目が覚めるまでは室外に居て歩いていたはずだ。

記憶の空白地帯、その間に何があったのだろうか。倒れたのか、それとも襲撃を受けたのか。どちらもあり得る。倒れるのは単純に疲労の蓄積。襲撃を受ける理由も両手の数では足りない位に思い当たる。

「先生！」

「……んう」

「あ、目覚めた?！」

先生の顔を覗き込んでいた小柄な少女は彼が目を開ける瞬間をばつちりと見ていて、意識が戻ったと分かるや否や即座に声を掛けた。その声音には意識の覚醒への安堵が多く含まれており……先生はその少女を見て全てを思い出す。その途端に頭が痛くなってきた気がしてきた。

手を突いて上体を起き上がらせる。数回瞬きをして、軽く頭を振って眠気と鈍痛を吹き飛ばそうとするが上手くいかず、ただ無意味に頭を振っただけの人になった。もつと言ってしまったえば、頭を振った影響で鈍痛の方は更に酷くなっている気がする。

熊のマスケットがあしらわれたブランケットを丁寧に畳みながら、彼は少女……モモイの方を向いた。

「気が付いたか? 君は運が良いな！」

「急に変な喋り方しないで、お姉ちゃん。先生が戸惑ってるでしょ」
「へへっ、嬉しくってつい……」

モモイの横から顔を出した少女は、モモイとそっくりの顔立ちをした少女であった。色違いのヘッドホンと尻尾。明朗快活を体現したようなモモイとは異なる、落ち着きと冷静さを孕む表情。彼女は先生

の方に顔を寄せて愛らしく問いかける。

「先生、大丈夫？」

「……うん、多分」

「いやー、良かった！ このまま目を覚まさないのかと思ったよ」

「本当に良かったです。お姉ちゃんが窓の外に投げたプライステーションが、偶然先生の頭に命中した時は……このまま殺人事件の容疑者になってしまおうかと思いました」

溜息混じりにミドリは言う。そうだ、彼が倒れたのは疲労でも襲撃でもなんでもない。ただ、モモイが投げたゲーム機という名の鈍器が偶々彼の頭にクリーンヒットしたただけだ。

……ある意味、襲撃かもしれない。

「お姉ちゃんの代わりに謝ります。ごめんなさい、先生」

「ふーんだ。そう言うミドリだって、私が『もしかして先生に当たっちゃったかも!』って叫んだ時、第一声は『プライステーションは無事!』だったじゃん」

「そ、それは……私達ゲーム開発部の財産リスト第一号だし、思わず……」

若干分が悪いと悟ったミドリは「とにかく」と言っ

「先生はあのシャールから来たんですよね？」

「うん、そうだよ。二人とも初めまして」

「うわっ、本当に!! じゃあ私達が送った手紙、読んでくれたんだ!

もし読んでくれたとしても本当に来てくれるなんて思っ

「可愛い生徒のお願いを無下にする事なんてできないよ」

ふわりと笑いながら言い、先生は手紙の内容を思い返す。



A long time ago in a galaxy far, far away……

ゲーム開発部

Episode I
The Rise Of Saiba Sisters

ゲーム開発部は無慈悲にも廃部の危機に陥った！

部の存続を願う少女達は己が威信を賭けて成果を作り、コンテストにて賞を取らなければならない。

今は正に大ミレニアムプライス時代！

一方その頃。

妖怪太もも大魔神こと早瀬ユウカは

お菓子を食べ過ぎた所為で増えた体重を必死に落としていた。



「え？ 何？ 何なの？」

突然訳の分からない怪電波を受信してしまった先生は冷や汗を浮かべながら困惑の声を漏らした。

何が起きたのか分からなかった。催眠術だとか超スピードだとかではない、もつと恐ろしいものの片鱗を味わってしまった先生は恐らくSAN値チエツクに失敗したのだろう。

ユウカの太ももを見上げるくらいの角度で読むと丁度良い感じになりそうなスペースオペラの内容は結構スカスカだった。どれくらいスカスカかと云えば、内容の半分がユウカの体重の話で埋まる程度には。

「ええ……？」

「先生どうしたの？」

「いや、何か世界一有名なスペースオペラが始まりそうだったんだ……今朝の事を思い出そうとしただけなのに……」

うーん、と頭を呻らせる先生を見てミドリは『プライステーションが良くない当たり方をしたんじゃ……』と内心冷や汗を掻く。一部始終を見ていない彼女の知る所ではないが、モモイが投げたプライステーションはそれはもう良い当たり方をした。ダーツで例えるならダブルブル²、弓道で例えるなら皆中。モモイは物を投げる才能に長けているのかもしれない。

怪訝な顔を向けるミドリに苦笑いをして、彼は改めて手紙の内容を思い返す。

——ゲーム開発部は今、存続の危機に陥っています。生徒会からの廃部命令により破滅が目前に迫っている今、助けを求められる相手は貴方だけです。勇者よ、どうか私達を助けてください！

そうだ。こんな内容だった。アロナがノリノリで読み上げていたのが面白くて録画したことまで思い出した。

切羽詰まった危機的状况。なりふり構っていられないと言わんばかり。一握の希望をこんな己に託してくれた少女達。眩しいくらい

に純粹で、無垢な……愛しい生徒達。

彼女達の願いを叶えるためにこの身は在るのだ。都合の良い願望機と揶揄されようが構わない。誰かの願いを叶える流れ星でいいじゃないか。

「改めて……ゲーム開発部へようこそ、先生！」

「先生に来て頂けて嬉しいです」

「此方こそ呼んでくれてありがとう。会えて嬉しいよ」

開いた窓から風が吹き込む。新たな出会いの祝福。心地の良い温度にその身を預けながら3人は大切な『初めまして』を告げる。

「私はゲーム開発部、シナリオライターのモモイ！」

「私はミドリ。イラストレーターで、ゲームのビジュアル全般を担当しています。あと、今ここに居ないけど、企画周りを担当している私達の部長、ユズを含めて……」

「私達が、ミレニアムサイエンススクールのゲーム開発部だよ！」



自己紹介から少し経った頃、ゲーム開発部には一人の来客が訪れていた。ゲーム開発部にとっては見知った顔だったが、あまり会いたくない類の人だった。

特徴的な青い髪をツーサイドアップにした、太ももが眩しい彼女はミレニアムサイエンススクールの生徒会に当たるセミナーの会計、早瀬ユウカ。或いはゲーム開発部の保護者兼母親。

だが、今回の来訪はゲーム開発部の保護者的な側面は全くない。今のユウカはセミナーの会計だ。故に、話す内容も必然固くなる。

今回は再三告げられていた廃部の最後通告。当然そんな事を受け入れる訳にはいかない彼女達はユウカへの反論材料としてある賞を受賞したゲーム開発部産のゲームを引き合いに出したのだが……反論をぶつけられたユウカの表情はとても微妙だった。

「……そうね。確かに受賞、してたわ」

ティルズ・サガ・クロニクル……このゲーム開発部における、唯一

の成果。ゲームもさることながら、幾つもの印象的なレビューがこの作品に寄せられていた。

曰く。

——私がやってきたゲーム史上、ダントツで絶望的なRPG。いやシナリオの内容がとかしやなくて、ゲームとしての完成度が。

——このゲームに何が足りないのかを数えだしたらキリがないけど……まあ、一番足りてないのは正気だろうね。

——このゲームをプレイした後だと、デッドクリームゾーンはもしかして名作の部類に入るんじゃないか、って思っちゃうわ。

他にも、色々。先生としてはとても興味深いゲームなのだが、一般受けするかどうかと言われると笑って誤魔化すだろう。つまりはそういう事だ。

ユウカの……セミナーの言い分としては、『クソゲー1位のゲームを作るような部活に回す予算はない』というかなり真つ当な意見だ。しかもそれ以外に成果もなく、部員の数も少ない。故に廃部となるのは自然の道理だろう。だが、彼女達とてそれに『はい、分かりました』と素直に頷くわけにもいかない。

故に、ユウカとゲーム開発部は一つの取り決めをする事になった。それはミレニアムプライスまでに何かしらの成果を出し、賞を受賞する事。これが果たされればゲーム開発部は存続し、果たされなければ廃部になる。一切の言い訳の余地がない、白か黒かの二択、シンプルルール。

きつちりと約束を交わしたユウカは立ち上がり、溜息を吐く。

「まさか先生の前でこんな、可愛くないところを見せてしまうことになるなんて」

「ふふっ、ユウカはいつだって可愛いよ」

「……全く、先生はいつもそうやって……」

頬を僅かに赤くさせ、指で毛先を弄ぶユウカ。冷酷な算術使いの姿は何処へやら。その表情は先程までゲーム開発部を詰めていた少女とは同一人物とは思えないほど女の子だった。

彼女は態と大げさに咳ばらいをして、踵を返し出口に向かう。

「では、またお会いしましょうね、先生」
「うん、またね」

▼
場所は変わって、ミレニアム近郊——廃墟。科学が発展した近未来的なミレニアム都心から距離がある此処は廃ビルと瓦礫の山が立ち並ぶ、放棄されて久しい場所だった。

それもそのはず、この場所は連邦生徒会が立ち入りを制限していたのだ。ミレニアムのセミナーではなく、連邦生徒会が。基本的に自治区の統治は学校に任せている連邦生徒会が態々干渉してまで立ち入りを固く制限していた謎の領域……数理と叡智を肯定するミレニアムの特異点。計数されざる場。その詳細は一切不明だ。

これまでは危険な地域だから、という理由で立ち入りを制限していたのだが……危険な理由が不明なのだ。単純に危険な存在が居るのか、あるいは放射能汚染のように環境が悪いのか。それとも地盤が緩いのか。誰も入ったことがないのか、そもそも入ることができないのか。入ったら最後、戻ってこれないのか。或いは、特定の人物でないとこの廃墟自体が意味を成さないのか。

この場所の詳細を知っている可能性があるのは連邦生徒会長か、ビッグシスター調月リオ、先生しかないだろう。

彼女達は此処にあるものを探しに来ている。

「ねえ、お姉ちゃん。一体いつまでこうしてればいいの?」
「アイツらがどっか行くまで……!」

ヴェールに覆われたキヴオトスの未知、その多くを知る人物がすぐ傍にいたとは露知らず、モモイとミドリは小柄な体を活かし瓦礫に身を隠していた。その向こう側ではオートマタが数体隊列を組んで歩いている。正常か、或いは異常か。何方かは分からない。だが、廃墟と言われるには徘徊しているオートマタの状態がそれなりに良い事が気がかりだ。何処かに生きているメンテナンス施設があるのか。それとも、廃墟とは名ばかりでこの場を整備している誰かが居るのか。

静かな都市に響くモーター音が遠のいた事を確認したモモイは片目だけ瓦礫の外に出し、簡易的なクリアリング。オートマタもドローンもない。

「ひゅー、もう行ったかな？ よし、じゃあ行こう！」

「よし、じゃない！」

瓦礫を飛び出そうとしたモモイの襟を掴まんで引き留めたのはミドリであり、その顔には驚きやら何やらで一杯だった。彼女は捲し立てるように口を開く。

「いったいここは何!? あんな謎のロボットが、数え切れないぐらい動き回ってるし！」

「何って……もう何回も言ってるじゃん。廃墟だよ。出入り禁止の区域っていうからまあ、ある程度の危険は覚悟してたけど。いやあ、冷や冷やするね……」

正にゲーム感覚で危険極まる場所に足を踏み入れたモモイ。そんな彼女に呆れたミドリは溜息を吐いて、改めて周囲の状況を確認する。何処を見ても廃墟、廃ビル。崩れた道路とライフライン。そして、銃器を持ちながら徘徊するオートマタとドローン。総じて、穏やかとは口が裂けても言えない雰囲気だった。まるで人間が排斥されたような都市。実際に足を運んでみても謎は深まるばかりだった。

「あのロボット、いったい何なんだろ？ ううん、それより……あんなのが幾つも欲してるこの廃墟って一体何なの？」

「うーん、私もヴェリタスからちよつと聞いただけだから、分からないことだらけだけど……本来、この出入りは厳しく制限されてた、つてどこまでは先生にも言ったよね？」

その問いに首肯するとモモイは満足そうに頷いて。

「この出入りを制限して、存在自体をできるだけ隠そうとしてたのは……連邦生徒会長だったの」

「連邦生徒会長って……あの、キヴオトスの生徒会長たちの頂点にいたのに、突然いなくなっちゃった人？」

「そうそう。あの人がいなくなってから連邦生徒会の兵力も撤収しちゃって、そのまま放置されてるみたい」

「そのおかげでこうして入り込めたんだけど……」

モモイは仕切り直すように「とにかく！」と叫んで。

「ヒマリ先輩によると、ここはキヴォトスから消えて忘れ去られたものが集まる、時代の下水道みたいな場所なのかもしれない……って」「ヒマリ先輩が……」

明星ヒマリ。ミレニアム史上、たった3名しか所有していない『全知』の学位を持つ少女。尚、この全知の学位は本当に存在するのかわかしの真偽は不明である。だが、彼女は全知の名に相応しい傑物であり、実際に存在するならば確実に所有しているだろう。

彼女は元はミレニアムのハッカー集団、ヴェリタスの部長であったが、今はリオの要請で特異現象捜査部というセミナー直下の組織の部長をしている。武闘派のC&Cと対を成す、知力に特化したミレニアムの切り札が彼女だ。

ここまで聞くと堅物に思えてしまうが、実際の彼女はかなり愉快な人物だ。超天才清楚系病弱美少女ハッカーと自らを公言して憚らない自信家であり、凶太い、イイ性格をしている。しかし、自尊心は高いが傲慢ではなく、他人を貶す事はない。他人の能力を認め、賞賛し、信頼している点は彼女の数多くある長所の内の1つだろう。

完全に余談だが、彼女が時々つけている『全知』の2文字があしらわれたちよつとダサイアイマスクは先生も持っている。少し前に遊びに行つた際、ヒマリがくれたのだ。

「いつもRPGの賢者みたいに『私は何でも知ってますよ』って感じのヒマリ先輩が、かもしれないって言葉を使うのも珍しいね……それくらい、未知の世界なんだ。でも、なんでこんなところにG・Bibleが……あれ、ちよつと待って!？」

ミドリは表情を驚き一色に染め上げた。まさか、いやそんな事は、頼むから間違つていてほしい……そんな逡巡が見え隠れするように、彼女は双子の姉に問いかける。

「まさかとは思うけど……お姉ちゃんが『ここにG・Bibleがある』って言ったのは、キヴォトスから消えて忘れ去られたものが集まるって聞いたから!？　そ、それだけの理由でこんなところに!？」

「それだけじゃないよ。ヴェリタスにG・Bibleの搜索を依頼したら、座標を教えてくださいの……最後にG・Bibleの稼働が確認された座標が指してたのは、普通の地図には存在しない場所だった」
そこでモモイは先生に自身達の探し物……G・Bibleについて話してなかったと思い、自らが知る情報を説明し始める。曰く、ゲームの聖書。過去、ミレニウムサイエンススクールに在籍した伝説的なゲームクリエイターが作成した書類であり、その中には『最高のゲームを作る方法』が載っているようだ。

簡単に言えば、彼女達はその方法を知るためにこの場に足を運んだのだ。

改めてG・Bibleの内容を聞いたミドリは、その余りにも突飛で胡散臭い、眉唾物と吐き捨てられても仕方がない謳い文句にジト目になりながら。

「……どこかのゲームクリエイター学校の広告じゃなくて？　なんか、凄く詐欺っぽい」

「違うよ！　G・Bibleはあるって！　読めば最高のゲームを作れるようになる『ゲームの聖書』^{バイブル}は、絶対にある！」

だが、G・Bibleの存在を心の底から信じているモモイは勢い良く否定する。

——そうだ。在ってもらわないと困る。もしこの話が行き止まりなら、ゲーム開発部は消えてしまうのだ。その未来は何としても避けなければならぬ。他ならぬ、彼女の為に。

「そのG・Bibleを読めば、最高のゲーム……『テイルズ・サガ・クロニクル2』が作れるはず！　ヴェリタスから貰ったこの座標に向かって行けば、そこにきつとG・Bibleが——」

その時、徘徊しているオートマタに見つかった。

不思議の国の目覚め

謎のオートマタ集団はまるで仇のように執拗に攻撃を加えてきた。アロナの防壁に弾かれた銃弾を見て効かないと判断するや否や、ブレードを片手に突貫したり、或いは高火力兵装を持ち出したり。しかも、近辺で徘徊するオートマタに召集を掛けたようで、時間が経つに連れて数が増える始末。

特別戦闘に長けているとは言えないゲーム開発部の2人と、単体では戦闘力が皆無な先生。この3人が真面に相手をできる訳もなく早々に逃げの一手を取らざるを得なかった。

背後から迫る銃弾の雨霰、殺意が高すぎる高火力兵器と半ば自爆特攻染みた近接攻撃に背中を向けながら全力疾走し、必死になって隠れる場所を探していた所……工場の様な施設を見つけた。扉が解放されていると見るや否や、転がり込むような勢いで中に入り、レバーを壊さんばかりに思いっきり引いて入口を閉めると重厚なシャッターが下りる。数秒と経たず外界から遮断され、工場の電源が生きているのか自動で非常灯が点灯した。

取り敢えず、一旦は難を逃れた。だが、もたもたしていると火力に物を言わせてシャッターなんか直ぐに突破されるだろう。安全に籠城できるのは長く見積もっても10分弱。その短い間に体制を立て直し、あのオートマタをどうやって相手にするかを考えなければならぬのだが……。

「あれ……？」

その異常を一番早く口に出したのはミドリだった。彼女はシャッター……正確には、その向こう側を怪訝そうに見つめながら口を開く。

「あのロボットたち、急に追ってこなくなった……？」

そう、急に追って来なくなったのだ。シャッターの向こう側からは音1つ聞こえない。立て籠もられたと判断するや否や即座に突入の為の工作をすと思っていたが、その様子は感じられない。いや、

シャツターの向こうからは物音一つすら聞こえないのだ。

音を完全に遮断できるほど分厚くない事は目で確認している。故に、向こう側では本当に何も起きていないのだろう。オートマタならサーモセンサーや動体感知センサー、赤外線センサーくらいは標準装備している。シャツターを隔てた程度で見失う訳がない。

故に考えられるのは——意図的に追撃を止めたという事。あのオートマタ達はこの工場に足を踏み入れる事ができないようにプログラムされているのだ。それも、侵入者の排除という命令よりも上位の位置づけで。それだけ大事な場所の扉が開けっ放しだったのは気になる部分だが……今はそんな事を考えていられない。

「この工場に入るまでは、恐ろしい勢いで向かってきたのに……何でか分かんないけど、とにかくラツキ、で良いのかな？」

「良くないよ！ うわああああん！ もういや！ いったいなんでこんなところで、ロボットたちに追われなきゃいけないの!？」

樂觀的なモモイと、この状況を重く受け止めているミドリ。双子なのにかなり対照的だ。

ミドリはハンカチで汗を拭うモモイの肩を揺らし、酷く真つ当な事を言う。誰だってオートマタと命がけの追いかけてっこをしたらこうなるだろう。

ミドリ自身、キヴオトスの生徒らしくオートマタとの交戦経験は多くあるが、今のアレは違う。何と言うか、纏う雰囲気。大半のオートマタは精々『痛い目に遭わせてやろう』とか『暫く動けなくしてやろう』だったが、今のは『絶対に生かして返さない』という殺意がひしひしと感じ取れるレベル。追われているときは普通に涙目であった。

「落ち着いて、ミドリ。生きてればいつか良い日も来るよ」

「今日の話をしてるの！ そもそもお姉ちゃんのせいでしょ！」

ミドリの鋭い指摘に「うぐっ」っとくぐもった声を漏らすモモイ。視線が明後日の方を向いて、下手な口笛を吹く。助け舟を求めて、工場に来てから一度も喋っていない先生の方に視線を向けるが……彼は完全に息が上がっていた。肩で息をして、限界寸前まで酷使した足

は生まれたての小鹿のように震えている。助けてはくれなさそうだった。

「とにかく……本当にここ、何をするとところなんだろう」

「連邦生徒会は、あのロボットたちがいるから出入りを制限してたのかな？」

「うーん、あのロボット達が実は連邦生徒会の秘密兵器で、とかは考えてみたけど……何か引っかけてるんだよね。大事なことを見落としてるっていうか、それに……」

『——接近を確認』

その時、無機質な機械音声が聞こえた。

「えっ、な、なに？」

「部屋全体に、音が響いてる……？」

2人は互いに背中合わせになり、周囲を警戒する。工場全体に響くような音声は恐らく各所に設置されたスピーカーから聞こえるものだろう。

『——対象の身元を確認します。才羽モモイ、資格がありません』

「え、え!?! 何で私のこと知ってるの？」

『——対象の身元を確認します。才羽ミドリ、資格がありません』
「私のことも……一体、どういう……？」

2人の疑問を置いてきぼりにする機械音声。当然の如く彼女達を知っているのは、恐らくサンクトウムタワーのデータベースにアクセスしているからだろう。それだけの特権をこの工場は持っているのだ。

旧き時代の名残。何らかの理由によりキヴオトスからいなくなっ
てしまった、前期の知生体が残したもの。それが今期の知生体と会合
を果たそうとしている。新たな時代の為に。

『——対象の身元を確認します……先生』

そして、その確認は遂に先生の方へ向く。2人とは異なり、なまえ個体名
ではなく先生という役職で呼称された彼。この施設……連邦生徒会
長が直々にロックを掛けたこのオーパーツなら篡奪された己の名を
識っているかもしれない、と思っただがどうやらそんな事は無いよう

だ。

尤も、名前を呼ばれたからと言って何かが変わるわけではない。ただ、自分を含む誰もが覚えていないのは一抹の寂しさを覚えてしまうだけで。

先生は息を吐いて、天井近く……設置されているカメラの奥、この工場を統括している意志と視線を合わせる。

そして。

『資格を確認しました、入室権限を付与します』

「ええっ!？」

「え、どういうこと!? 先生はいつこの建物と仲良しになったの!？」

認証を弾かれた2人は驚愕の表情を浮かべながら彼を見る。先ほどまで素っ気無かった建物が初めて生命に振り向いたのだ。しかも、認証を通つたのはキヴオトスの人間ではない異邦の彼。異常と言う他ないだろう。

「……」

「先生……?」

そして、パスした先生は無言で統括意志を眺めていた。特に何かをするわけもなく、無言で、驚くことすらせず。まるでそれが最善だと分かっているように。

『才羽モモイ、才羽ミドリの名を、先生の『生徒』として認定。同行者である『生徒』にも資格を与えます。承認しました』

暫くしてモモイとミドリの2人も認証された。先生の生徒としての認証、ワンタイムパスワード。これにて3人全員がこの施設の最奥へ足を踏み入れる資格を認められたことになるのだが、この場は行き止まりだ。正確には行き止まりではなく、目の前に扉と思わしきものはあるのだが、開く気配は一向になかった。

だが、認証が通つた今なら或いは———そう思った所で。

『———下部の扉を開放します』

「……下部の扉? この目の前の扉じゃなくて?」

「それより、下部つてもしかして……?」

ミドリは恐る恐る下を見る。鉄製の冷たい床。非常灯の明かりに

照らされたそれは、よく見ると一筋の線が入っていた。

「流石に違うでしょ。どこからどう見てもただの床——」

言うや否や、床が線に沿って真つ二つに分かたれた。地面を踏みしめていたはずの手足は今や空中。ふわりと感じる無重力。そして——そのまま3人は重力に従い自由落下運動を始めた。

「ゆ、床が無くなっ……落ちるっ!？」

「うわわわっ!」

空中でじたばたとする2人。突然バラエティー番組の罰ゲームのようなものをその身で体験させられて思考が追い付いていないのだろう。キヴォトスの生徒であればこの程度の高さから落下しても勿論無事だが、生徒に痛い思いをさせたくない先生は2人を空中でキヤッチし、音声でシステムの箱を起動させた。

「アロナ、制御頼むよ」

『はい! 任せてください!』



無傷で施設の最下層まで降りることができた3人は、非常灯の明かりに従って歩く。上層と比べて道は複雑ではなく、一本道だった。通路自体も広いとは言えず並んで歩くのは2人が限界。出入口も3人が落下してきた以外の穴は無い。つまり、あそこから落下するルートが正規の道なのだ。設計者は馬鹿なんじゃないか、とモモイは思った。

「」

外界からは完全に遮断されているこの空間に響くのは3人の足音と呼吸音。冷たい空気が流れて、言いようがない緊張感がモモイとミドリを襲って思わず固唾を呑んでしまう。そして、暫く歩いていると突然開けた明るい空間に出た。

——そこで、2人は有り得ないものを見た。

「……………えっ!？」

「お、女の子……………」

広い空間にポツリと存在する機械の椅子。そこに一糸纏わぬ姿で眠る少女が居た。長い、黒の流麗な髪。雪月花のような顔。きめ細やかな肌。華奢な美しい手足。眠り姫だった。童話の中でしか存在しないような、純粹無垢な……純白の姫君がいた。

その現実離れた美しさに2人は目を奪われる。呼吸すら忘れてしまうほど空想的だったのだ。まるでこの場所だけがキヴオトスから切り離されているような、絵本の中に出てくる王国のような……そんな光景。

数秒後、はつとした2人は慌てて少女の方に歩み寄り360度隈なく観察する。そして、その2人の後を先生がついてくる。彼の表情は懐かしいものを見たような……本当に優しい表情を浮かべていた。

「この子……眠ってるのかな？」

「……返事がない、ただの死体のようだ」

「不謹慎なネタ言わないで！ それに死体っていうか……ねえ、見て」
ミドリは少女を指差して。

「この子、怪我とかじゃなくて……『電源が入ってない』みたいな感じがしない？」

「そう？ 確かに言われてみれば、何だかマネキンっぽいね。どれどれ……凄い、肌もしっとりしてるし柔らかい……あれ？ ここに何か文字が書かれてる」

少女の肌を指先でつんつんしていたモモイはその肌に文字を見つけた。刻まれているのだろうか。まるで何かのシリアルナンバーのように。

「……AL—I S……」

「……アル、イズ……エー、エル、アイ、エス？ どう読むのか分からないけど、この子の名前？」

「……アリス？」

モモイとミドリは2人で頭を悩ませていた。名前にしては無機質なアルファベットの羅列。そこから導き出された名前はアリス、不思議の国。だが、その読みは少々無理やりであった。通常、アリスならば『ALICE』と刻むだろう。

だから、何かが違うのではないか——そう思ったミドリは姉が指差した方へ顔を思いっきり寄せた。刻まれた文字をじつと見る少女。イラストレーターとして日々活動している事が功を奏したのか、或いはドットやフォントの差異に敏感なのかは不明であるが……ミドリは「あ」と声を漏らした。

「ちよつと待つて、これよく見ると全部ローマ字なわけじゃないか……AL—1S、じゃない？」

「え、そう？」

眩き、モモイは少女を見る。確かに1と言われればそうも見える。だが、最初にエルだと思つたからか確証は持てない。見れば見るほど訳が分からなくなつてきて、彼女は話を切り上げるように「それより！」と声を上げた。

「一体この子は……それにこの場所、いったい何なんだろう？」

「この子に聞いた方が早いんじゃない？」

「起きて話してくれるなら良いんだけど……とりあえずこのままじゃ可哀そうだし、服でも着せてあげよつか」

「へえ、予備の服なんて持つてきてたんだ……つてそれ私のパンツじゃん！」

「違つよ、これは私の。猫ちゃんの表情が違うでしょ」

言いながらきてきぱきと服を着せるモモイとミドリ。数分も経たずに少女は白のミレニアムの制服を纏つた姿になった。

——先生の見慣れたあの姿に。

「……よし、これでいいかな」

そう言い終えた途端、部屋全体に音が響いた。穏やかではない音、警報音。

「な、何この音!？」

モモイは肩を一瞬だけ跳ねさせて、それからすぐに銃を構えて周囲を警戒する。何が出てきても対処ができるように。だが、何時まで経つても何かが出てくる気配は皆無だった。肩透かしを食らつた少女は銃を下し、キョロキョロと見渡しながら口を開く。

「警報音みたいだけど……もしかして近くにロボットが？」

「ううん……この子から聞こえた気がする」

「え？ ま、まさか……」

「——状態の変化、および接触許可対象を感知。休眠状態を解除します」

無機質ではない、声帯から発された平坦な声。

「——」
青い、大きな瞳が開かれた。意識の覚醒に伴い、頭上にはヘイローが浮かぶ。キヴオトスにいる生徒と全く変わらない、或る少女の覚醒。長きに渡る孤独の終わり。

「め、目を覚ました……？」

「……状況把握、難航。会話を試みます……説明をお願いしますか？」

こてん、と愛らしく首をかしげる少女。見惚れてしまうほど美しい、まるで1枚の絵の様な光景であったが疑問を投げかけられた少女達はそれどころではなかった。

「え、えっ？ せ、説明？ なんのこと？」

「せ、説明が欲しいのはこっちの方！ あなたは何者？ ここは一体なんなの!？」

「本機の自我、記憶、目的は消失状態であることを確認。データがありません」

矢継ぎ早に投げかけられた疑問。だが、その全てに回答を得られなかった。彼女は記憶喪失であるから。自我も、記憶も、目的も全て真っ白。彼女は今、初めて生まれたのだ。

「ど、どういうこと……い、いきなり攻撃してきたりしないよね？」

「肯定。接触許可対象への遭遇時、本機の敵対意思は発動しません」
「うわ、すごい。ロボットの市民ならキヴオトスによくいるけど、こんなに私たちに似てるロボットなんて初めて」

敵対の意志は無い——そう告げられた少女達は警戒して離れていた距離を再び詰めて、再度観察する。オートマタとは明確に違う、ワンオフ。コストなんて度外視で作られた精巧が過ぎる機体は、あまりにも生命だった。

どうしようか、と疑問に思ったミドリは先生に視線を投げた。彼ならばなんとか丸く収めてくれるのではないか、という願望。少女の願い。それを受け取った先生は軽く微笑み、少女の視線と己の視線を合わせる。

「君の名前は？」

「回答不可、本機の深層意識における第一反応が発生したものと推定されます」

返ってきた返答はまたしても不明。だが、彼女なりに考察を交えた……先ほどよりは明確に情報量が多い答えだった。それに満足した先生は「そっか」と短く言って、少女から離れる。この場ではこれ以上意味がないと言わんばかりに。

「深層意識って、何のこと……？」

「うーん……工場の地下、ほぼ全裸の女の子、おまけに記憶喪失……」

——その時、モモイに電流が奔る。

「ふふっ、良いこと思いついちゃった」

「いや……今の言葉の羅列からは、嫌なことしか思い当たらないんだけど……」

「——？」

少女を置いてきぼりにして、少女の近い未来が決定した瞬間であった。

その名はアリス

ミレニアムサイエンススクール、ゲーム開発部の部室。そこには廃墟の探索から帰って来たモモイとミドリ、先生。そして――。

「――？」

部室の中央、クッションを抱きしめながら興味深そうに辺りを見渡す少女がいた。廃墟で見つけた機械仕掛けの少女。空を溶かしたような青の瞳には人間的な情緒はまだ少ないが、オートマタ達よりも数段人間的だ。動きに不自然さが皆無で、滑らかに動く様は正に人間。ロストテクノロジーと呼ぶに相応しい、今のキヴオトスよりも数世紀先に進んだ科学技術の結晶だった。

「ねえ、ちよつと!?! この子を部室にまで連れてきてどうするの!」
「うっ、首絞めないでって! 苦しっ、ゲホッ、ゲホッ!」

そんな少女の背後でモモイとミドリは言い合いをしていた。その要因は件の少女。工場で眠っていた彼女をモモイは子の部室まで連れてきてしまったのだ。見つけただけならよかった。動いただけならよかった。だが、部室に連れてきたのは失敗だろう。どうやったって責任なんて取れない。

「し、仕方ないじゃん。そもそもあんな恐ろしいロボットたちがいる場所に置いていくわけに――」

「それ、食べ物じゃないよ。口寂しいなら飴でも食べるかい?」

「ああつ! 私のWeeriモコンを口に入れないで! ペツてして! ペツて!」

先生の諭すような声音とモモイの説得が効いたのかは不明だが、少女は口に含んでいたゲームのコントローラーを吐き出した。口内の温度で温められ、唾液と菌形が付着したコントローラーをげんなりとした顔で眺め、ぽいと放り投げる。

先生は空いた少女の口に飴を差し出していたが、飴玉を掴んでいた指ごと食べられていて苦笑いを浮べていた。舌で指先を舐められたり、或いは噛まれたり。先生もまさか指まで口に含まれるとは思って

いなかったが、当初の目的である少女の興味を引く事には成功しているため、暫くこのままでもいいだろうと判断した。

そして、少女達も先生が気を引いている内に今後の方針を固めようとひそひそ話を再開する。

「……やっぱり、放っておくわけにはいかないでしょ」

「それはそうだけど……今からでも、連邦生徒会かヴァルキューレ辺りに連絡した方が良くない?」

「……それはまだ。私たちのやるべきことが終わった後にね」

「やるべきこと?」

そう言つて、モモイは少女の方へ向かう。その気配を感じ取ったのか、少女は先生の指先から口を離し……桃色の少女を見る。青色の、透き通った瞳。穢れを一切知らぬ無垢に射貫かれた彼女は一瞬だけたじろいで……それから、気を取り直して。

「さて、とりあえず名前は必要だよな。『アリス』って呼ぼうかな」

「……本機の名称、『アリス』。確認をお願いします」

「ちよ、ちよつと待つて! それお姉ちゃんが勝手に読んだ名前ですよ!?! 本当なら『AL—1Sちゃん』なんじゃないの?」

「そんなに長いと呼びにくいじゃん。どう、アリス? 気に入った?」

モモイは自信満々な表情で少女を見る。廃墟の工場不思議の国で見つけた機械仕掛け童話のお姫様。少女の名前としてはぴったりだろう。これ以上に相応しいものは思い付きそうになかった。

——罪も穢れも知らない、何色にも染まる純白。純真無垢を体現したそのキャンバスに描く最初の一笔は、大切な名前を決めるために。

「……肯定」

そして——その祈りは、少女までちゃんと届いた。

「本機、アリス」

——ああ、透明の君に万雷の喝采と祝福を。君は今、この時……初めて『命』になった。自らの名を自らで選んだその決断に溢れんばかりの花束を。アリスとして生きる君に、愛を。

「あはは! ほら、見たか私のネーミングセンス!」

「うーん……本人が気に入ってるならいいけど」

何処か釈然としないながらも、本人が良いなら良いか、と流す事を選んだミドリ。確かにAL—1Sよりもアリスの方が名前としては相応しいだろう。それに、此方の方が呼ぶ方も呼ばれる方も親しみを持ちやすい。

——アリス。確かに、良い名前だ。姉にしては抜群のネーミングセンスと言えなくもない。

「さあ、それじゃ次のステップに行ってみよっか」

「お姉ちゃん、いったい何を考えてるの……？　子猫を捨ててきたとか、そういうレベルじゃないんだからね!」

「ミドリの方こそ、よく考えてみてよ。そもそも私たちが危険を冒してまで、G・Bibleを探してた理由は何だったっけ？」

「それは……良いゲームを作って、部活を廃部にさせないためでしょ？」

「そう、今一番大事な問題はそれ」

あの探索の目標はG・Bibleを手に入れる事。そして、入手した物を使用してゲームを作成し、ミレニアムプライスで受賞する事。

だが、それらは目的ではなく手段なのだ——部の存続の為の。「良いゲームも作りたいけど、まずは部活の維持が最優先。それで、そのためには二つの条件のうち、どっちかをクリアする必要がある。ミレニアムプライスで受賞を狙うのは、あくまでその内の一つに過ぎない」

「あくまでも何も、方法は実際のところ一つしか無いでしょ？　お姉ちゃんがそう言ったんじゃない。だってこれ以上部員を増やすのは無理……」

そこまで口に出した所でミドリは気付いた。部員を増やす方法。確かに、ミレニアム内で新規に部員を募っても入部を引き出す事は難しいだろう。だが——今、此処にいる少女は違う。目覚めたばかりでミレニアムの生徒ではないのだ。

しかし、その案は余りにも突拍子過ぎて。頼むから外れてくれと思いなから、オイルの切れた鍼力人形のように首を動かし——姉の

方を向いた。

「お、お姉ちゃん、まさかとは思うけど……この子をミレニアムの生徒に偽装して、うちの部に入れようとしてるんじゃない?!」

「ああつー。私のゲームガールズアドバンスSP、食べちゃダメっ! 8コア16スレッドカスタムCPUに8K解像度を誇る、キウオトス唯一の16bitゲーム機なんだよ!」

そこには先のコントローラーと同じ要領でゲーム機本体を齧っているアリスと、それを何とかして吐き出させたいモモイが格闘を繰り広げていて。先生は特に手出しをする事なく微笑みながら成り行きを見守っていた。

その光景に一人だけ頭を悩ませていることが馬鹿らしくなったミドリは大きな溜息を吐いた。

「ああもう……大丈夫なのかな……?」



アリスを部室に連れてきてから30分が経ち、今後の方針がある程度固まった頃。4人に増えたことにより若干手狭になった部室を眺めながら、ミドリは改めて「うーん……」と声を呻らせた。

「やっぱり心配……この子をうちの部員に偽装するなんて……本当に大丈夫?」

『大丈夫』の意味を確認……『状態が悪くなく問題が発生していない状況』のことと推定、肯定します」

「いやいや、肯定できないって! この口調じゃ絶対疑われるよ! やめておこう!?! これは無理だって!」

ミドリの疑念が確信に変わるまでの時間は10秒も無かった。最初から問題じゃない箇所の方が多い位であったが、新しく口調という問題点が追加されてしまったのだ。出来立てのAIのような、ライブラリのワードをそのまま引用した言葉。誰だって怪しいと疑うだろう。少なくともミドリはこの口調のアリスを新入部員と言い張った所で、ユウカが『はい、そうですか』と認めてくれる未来は見えなかつ

た。

「今やめるって選択肢の方が無理だよ。何としても、私たちのゲーム開発部を守らなきゃ。そうしないと、ユズの居場所が……寮に戻るわけにはいかないし……」

「……そう、だったね……」

そう、ここで止めてしまえばゲーム開発部は廃部回避の道を一つ潰してしまう事になる。そうなると残された道はミレニウムプライスの受賞のみ。それが困難な道だというのはモモイもミドリもよく分かっている。なにせ、エンジン部やヴェリタスといったミレニウムが誇る天才達と同じ土俵で戦う事を示すのだから。

ゲーム開発部はゲームが好きで、ゲームの開発をしている部活だ。だが、それだけだ。時代の最先端を行く技術を持っている訳でも、類稀な知性を持っている訳でもない。同好会的な側面が強い少女達では逆立ちしても天才集う部活と真っ向勝負なんてできないだろう。

故に、ミレニウムプライスで勝負するルートを回避できるなら、それに越したことはない。確率の低い道より、高い道。ゲーム開発部の存続は最優先事項だ。ユズの為にもこの部を無くしてしまう訳にはいかない。

「服装もある程度整ったし、あとは武器と……学生登録をして、学生証を手に入れないと」

制服はスペアを使って何とかなった。私服や下着は後々増やしていけばいいだろう。あとは生活するための部屋も必要だが……これは暫くゲーム開発部の部室を使えばいい。勿論、ゆくゆくは考えなければならぬ事であるが、今は後回し。

最優先は彼女をキヴォトスの、ミレニウムの生徒にする事。恐らく彼女は学籍も何も持っていないだろう。学生自治を謳うこの場所でそれは致命的だ。故に、何としてもキヴォトスの学生の象徴であるワソフの武器と、学校に在籍する事を証明する学生証を発行しなければならぬ。

「学生証については、私と……」

モモイは邪魔にならないように部屋の隅で座っている先生の方を

見ると、彼女の意図を察した彼は立ち上がった。同伴の申し出。自分一人ではミレニアムの学生課にいるオートマタ達の首を縦に振らせるのは難しいと考えたモモイは、先生という名のシャーレの権威を使う事を選んだ。

そして、特に断る理由が無い彼も了承。『この時間で学生課、空いてるかな』と思いつながらハンガーに掛けたコートを羽織る。

「私と先生の方で何とかするから、ミドリはユズと2人でアリスに「話し方」を教えてあげて」

「は、話し方？」

「今のままだとミドリが言った通り、疑われちゃうかもしれないから。唯でさえ『友達もいない貴方達に新しい部員の募集なんて出来るはずないでしょ』って言われてるし……もし、何かの拍子にユウカに『本当にゲーム開発部なのか』って聞かれたとして」

モモイは軽く咳ばらいをして。

『肯定、あなたの質問に対し、アリスの回答を提示。私はゲーム開発部の部員』……なんて言っちゃった暁には、全部台無しになりかねない」

「いや、それはそうだけど……」

微妙に似ているようで似ていない、30%ぐらいのアリスを再現したモモイ。澁刺とした彼女には機械的な、平坦な口調は難しかったのだろう。彼女自身、『あんまり似てなかったな……』と内心想っている。

先程の発言を鑑みるに普通に言いそうだった。というか、絶対に言う。確かにこの口調でユウカの前に立ったらゲーム開発部は少女誘拐を真っ先に疑われるだろう。そして、それが事実だと発覚したら廃部どころの話ではなくなってしまう。確実にヴァルキューレのお世話になるはずだ。元カイザー理事が生徒誘拐未遂の疑いで連日報道されていたことは記憶に新しい。アリスをここに連れてきた時点でもう逃げ道は失われてしまったのだ。

ミドリはモモイとアリス、それから先生を交互に見て……それから観念したように「はあ」と大きなため息を吐いて覚悟を決めた。

「仕方ない、やれるだけやってみるよ」

「よし、じゃあ任せた！」

「ちよ、ちよっと待って！」

ミドリから了承の言葉を引き出すや否や、先生を連れて部室を飛び出したモモイ。引き止める言葉と手は何もない空中を切った。置いてきぼりにされた彼女は本日何度目かの溜息を吐いて、青い瞳で見つめるアリスを視界に収めた。

「……？」

——綺麗だ。改めて見ても、そう思う。完成された芸術品のよ
うな無駄を削ぎ落したような美そのもの。同性であるからこそ、その
美しさを否が応でも知覚してしまう。

彼女が作り出した雰囲気には？まれないように、ミドリは頬を掻きながら口を開く。

「え、えつと……アリス、ちゃん？」

「肯定。本機の名称、アリスです」

「うん、じゃあアリスちゃんって呼ぶね。それにしても話し方かあ……よく考えると、どうやって習得するんだろ。普通は動画を見たり、周りの言葉を真似していくうちに自然に、って感じだと思うけど……子供用の教育プログラムってインターネットに落ちてるかな……」

うーん、と声を呻らせながら悩むミドリ。通常、話し方の習得と言語の習得はワンセットだ。だが、彼女は違う。話し方がまるで辞書を引いているようなものなのだ。根本的な意思疎通に問題は無い事が問題点。無機質な口調から情緒のあるものへと何とか変えたいのだが……如何せん、その方法が思い当たらない。

「——？」

そんなミドリを尻目にアリスは部室の探索を始める。物珍しいのだろう。あの時、目覚めるまで彼女はずっとあそこで眠っていたのだろうから。初めての目覚め、初めての外界。興味を惹かれない方が不思議だ。彼女の眼にはきつと全てが新鮮に映っているだろう。彼女は知的好奇心の赴くままきよろきよろと周囲を見渡し……その瞳が、

あるものを捉えた。

「正体不明の物を発見、確認を行います」

「あつ、そ、それは……っ!？」

彼女が手に取ったのは何の変哲もない一冊の書籍だった。ゲーム雑誌。上に飛び出ているのはあるページを指す付箋。

「えつと、ちよつと恥ずかしいけど、実はその中に、私たちが作ったゲームが載ってるの。まあ、凄い酷評されちゃったんだけどね」

そう言い、苦笑いするミドリ。それから2人の間に気まずい沈黙が流れるが……ミドリが何かを思いついたように「あ、そうだ!」と声を上げた。

「クソゲーランキングでは1位になっちゃったし、アリスちゃんがどう思うかは分からないけど……アリスちゃん、私たちのゲーム……やってみない? 『会話』をしながら進められるから、ゲームをやってみるのも勉強になるかも」

「……ここまでの言動の意図、完璧には把握しかねます」

その言葉にミドリは肩を落とす。分かっていた事だった。クソゲー1位のゲームを好んでやりたがる人は希少種だ。それをやるくらいなら、もつと他の……名作をやった方が良い学習にはなるだろう。

だが、それでも、少しだけ悲しい……そう思った彼女の心に立ち込めた暗雲を払ったのは、アリスの「しかし」という言葉で。

「……肯定、アリスはゲームをします」

「ほ、本当に!? ちよ、ちよつと待ってて、すぐにセッティングするから!」

顔を明るくしたミドリは床に乱雑に転がっているクッションや衣類を蹴飛ばし、部屋の端に追いやりながらゲーム機本体とモニター、そしてアリスがプレイする場所と自身が観戦する場所を確保する。ものの5分弱でゲームをやるためのセッティングを終えた彼女は今日一日を通して最も明るい顔でアリスの方を振り返った。

「よし、準備完了!」

「……アリス、ゲームを開始します」

——コスモス世紀2354年、人類は劫火の炎に包まれた。

「タイトルから分かるかもしれないけど、このゲームは童話テイストで、色彩豊かな王道ファンタジーRPGなの。王道とは言っても、色々な要素を混ぜてたりするんだけどね。トレンドそのままでもダメだけど、王道に拘りすぎても古くなるからってことで」

劫火の炎ってなんか頭痛が痛いみたい、なんて事を思い浮かべる。姉はかっこいい言い回しをしようとして空回りする事が多い。次回作はもう少しその性を抑えさせないと——と。だが、今は関係のない事だから、頭の片隅に記すだけに留める。

再び画面の方を見ると、プロローグを全て読み終えたアリスはチュートリアルの入りに差し掛かっていた。

「……ボタンを押します……」

そして、画面のチュートリアルの指示に従いボタンを押し込んだ途端——。

Game Over

「?!?!」

爆発音と共に即死した。

「あははははっ!」

頭の中がエラーで一杯になったアリスを笑う声。その声の主は学生証を発行しに学生課へ向かったはずのモモイだった。笑う彼女の隣には苦笑いを浮べた先生が立っている。

「予想できる展開ほどつまらないものはないよね! 本当はここで指示通りじゃなくて、Aボタンを押さなきゃいけないの!」

「お姉ちゃん……? 学生証を作りに行くって言ってなかった?」

「行ってきたんだけど、遅い時間だったからか誰もいなかったの。また明日行く」

「それはさておき、改めて見てもこの部分はちよつと酷いと思う」

チュートリアルで死ぬゲームは珍しいが、それでも世の中に皆無なわけではない。所謂、硬派なゲームや死にゲーと呼ばれるもの。一切の妥協なくプレイヤーに世界観や難易度を楽しんでもらうために敢えて敷居を高くしているのだ。突破した達成感を味わってもらった

めに。

だが、それでも——チュートリアルに従いボタン一つ押した瞬間爆死するゲームは無いだろう。かなり悪質な初見殺し。チュートリアルに見放されたらプレイヤーは何を信じたらいいのか分からなくなってしまう。正気が足りない、と言われるにはそれ相応の理由があるのだ。

過去にこのゲームのリアルタイムアタックをやった先生は苦笑いしながら、エラーで一杯になったアリスの応答再開を待つ。

尚、先生の記録はゲーム部の部長が参戦したことにより一瞬で破られたのだが、これは完全な余談である。

「も、もう一度始めます……」

「再開。テキストでは説明不可能な感情が発生しています」

「あつ、私それ分かるかも！ きつと「興味」とか「期待」とか、そういう感情だと思うー！」

「どう考えても『怒り』か『困惑』だと思うけど……というかこれ、一種の虐待なんじゃ……」

モモイの言葉に従い、チュートリアルに逆らいBボタンではなくAボタンを押し武器を装備したアリス。爆発も起きずにきちんと装備できた事に安堵しながら、彼女は道なりに進んでいく。

「お、良い感じ。そのまま進めば、RPGの花である戦闘が……」

言うや否や、緊迫した音と共に画面が切り替わった。エネミーとのエンカウント。王道RPGの花形である戦闘——それが、開始した。

BGMが戦闘専用のものへとシフトし、モニターには古き良きRPGの戦闘画面が表示される。先ほどとは打って変わったその光景にアリスは目を輝かせながら。

「緊張、高揚、興味」

「Aボタンを押して！ 今度は嘘じゃないから！」

「Aボタン。『秘剣つばめ返し：敵に対して2回攻撃をする』」

そのコマンドを確認したアリスは意気揚々とAボタンを叩く。

「行きます、プニプニに対して……秘剣！ つばめ——！」

だが、アリスの攻撃は叶わない。先手は敵が取った。敵性生物の攻撃はアリスの操作キャラに命中し——。

「!?!?」

即死した。ゲーム開始数分で2回目のゲームオーバーである。因みにプニプニなる敵の得物は銃だ。合理性と機能美を突き詰めたハンドガンは剣よりも射程が長く、誰でも使える。それを鑑みると確かに合理的であるが、剣と魔法で戦うファンタジー世界に現代兵器は色々ミスマッチな気がする。

あと、プニプニはそのスライム状の体でどうやって銃を握り、トリガーを引いているのだろうか。謎は深まるばかりであった。

「うーん、やっぱりプニプニが『ふっ』って言うのは不自然かな」

「……ツッコみどころはそこじゃないと思う」

「思考停止、電算処理が追いつきません」

「あ、アリスちゃん? 大丈夫?」

沈黙したアリスを心配した表情で見つめる2人。思考停止、電算処理が追い付かない——というエラー文。度重なる理解不能な現象を前にアリスの脳がオーバーヒートを起こしてしまったのだ。前期の知生体が遺した彼女を一時的に機能停止に追い込んだこのゲームは結構恐ろしいものではないのだろうか。

暫くすると、アリスの体に生命の息吹が宿った。再起動が完了したのだ。そして数秒後、彼女は目を開く。

「リブート、再開します」

「今度は銃の射程距離把握に努めながら、接近しすぎないようにプニプニを排除します」

「そう、まさにそれ! 諦めずに繰り返し挑戦して、試行錯誤の末に答えを見つける! それがレトロチックなゲームのロマンだよ!」

世界の色彩を知る

「電算処理系統、および意思表示システムに致命的なエラーが発生」

「頑張つてアリス、ここさえ乗り越えれば待望のクライマックスだよ！」

「うう……！」

またしてもアリスの脳にダイレクトアタックを喰らわせたテイルズ・サガ・クロニクル。彼女の処理系と感情を同時にバグらせたゲームの開発者であるモモイは激励の言葉を、ミドリは床に手を突いて項垂れていた。

「今のはどう考えても、『草食系』って言葉が思い出せないからって、それを『植物人間』って書いたお姉ちゃんのせいでしょ!」

ミドリが指差すのはテキストが表示される画面。彼女が言及していた場面は既に過ぎ去ってしまったが、そんな事はお構いなしにシナリオ担当の姉に向かって。

「ごめんなさい。私は植物人間ですので、女性に対して気軽に声をかけることはできません」ってテキストを読んだ瞬間、アリスちゃんが一瞬意識を失ってたじゃん！」

「……質問。どうして母親がヒロインで、それでいて実は前世の妻で、更にどうしてその妻の元に、子供の頃に別れたきりの腹違いの友人がタイムリープしてきているのか。いえ、そもそも『腹違いの友人』という表現はキヴォトスの辞書データに搭載されていな————エラー発生、エラー発生！」

「が、頑張つてアリスちゃん！ クライマックスまでもう少しだから！」

「……リブート。プロセスを回復」

自身が発した言葉の意味が分からずエラーを吐いたアリスだったが、なんとか持ち直した。

母がヒロインなのは色々とモラル的な面で拙いのではないかとか。

そして、その母が前世の妻なのは関係性が倒錯し過ぎていないかとか。

あと、そこにタイムリープ要素が加わって更に話と関係性がややこしくなって相関図が訳分からぬ事になっているとか。

腹違いという言葉は普通兄弟姉妹にかかるものではないのかとか。

それらの疑問^{エラー}を全て呑み込んで、アリスは再起動を果たしたのだ。

「…………ふう」

アリスは息を一つ吐く。何度もリブートを果たした所為か、その表情には疲労が滲んでいる。

「これが、ゲーム…………」

何か途轍もない勘違いをしていそうな彼女は手放していたコントローラーを再び握って。

「再開します」

その瞳には、確かに意志が宿っていた。



「こ、ろ、し、て…………」

「よく頑張ったね、アリス…………今はゆっくりお休み…………」

謔言のように呟くアリスを先生は抱きしめ、頭を撫でる。彼の表情には溢れんばかりの愛があつて、一つの事をやり遂げた彼女に対する賞賛があつた。目覚めた直後、離乳食代わりにこのゲームを与えられた生徒は前代未聞だろう。そして投げ出す事なくゲームセットまで走り抜けたのだ。紛れもなく偉業だと彼は思う。

「すごいよアリス！ 開発者二人が一緒とはいえ、3時間でトウルールエンドなんて！」

「そ、それもそうだけど、本当にゲームをやればやるほど…………アリスちゃんの喋り方のパターンが、どんどん多彩になってきてる…………!？」

今この瞬間、ゲームで情操教育を終えた少女が誕生した。

「…………勇者よ、汝が同意を求めるならば、私はそれを肯定しよう」
「うん、確かにそう…………かも？」

どう考えても日常生活で使い道のないワードが飛び出してきたため、『これ大丈夫かな』と一人不安になるモモイ。この口調はこの口調で問題がある気がする、機械的なものとどっちが良いかと言われたら悩みながらも今のものを選ぶだろうが、それでもユウカを欺けるかは微妙なラインだろう。

「ゲームからそのまま覚えたせいで、ちよつとまだ不自然かもだけど……言葉を羅列してただけの時よりは、かなり良くなったと思う！」
「うーん、そうかな……そうかも……うん、そうだね！」

自分を無理矢理納得させたモモイ。或いはミドリに丸め込まれたとも言えるだろう。兎に角、ゲームによる教育は一定の成果を収めた。一部、少々予想外の方向に突き抜けたものもあるが……まだ修正は効くはずだ。

そんな事を考えながら、少女達2人は「それよりも」と声を揃えて。
「こういうのを面と向かって聞くのは緊張するんだけど……わ、私達のゲーム、どうだった？ 面白かった!？」

クリエイターとして最も気になるのはユーザーの意見だ。自分達で作ったものは、誰かの中で何かになったのか。楽しんでもらったのだろうか、人生のひと時を彩る色になったのか……もしそうであれば、それに勝幸福はない。

「……説明不可」

「え、ええっ!? なんで!？」

「……類似表現在検索」

「も、もしかして、悪口を探してる……? そんなこと無いよね?」

最適な言葉を探すため沈黙しているアリスを、2人は期待半分不安半分の面持ちで見っていた。厳しい意見は言われ慣れている。何せクソゲーの王冠を取ったのだ。酷評も罵詈雑言も見慣れているし、聞き慣れている。だから、今更それが1つ増えた所でその総量は変わらない。だが、それでも——アリスには面白いと言って欲しかった。

そして、その願いは。

「……面白さ。それは、明確に存在……」

「おおっ!」

「プレイを進めれば進めるほど、まるで別の世界を旅しているような……夢を見ているような、そんな気分……もう一度……もう一度……」

瞳から零れる青。それはアリスから流れた涙だった。大きな水晶から少しずつ流れる一筋の雫を見た瞬間、2人は驚愕の声を上げる。

「ええッ!？」

「あ、アリスちゃん!? どうして泣いてるの!？」

「決まってるじゃん! それぐらい、私たちのゲームが感動的だったってことでしょ!」

「い、いくらなんでもそれは……というかこのゲーム、ギャグ寄りのRPGのはすだし……」

「ありがとうアリス! その辺の評論家の言葉なんかより、その涙の方が100倍嬉しいよ! あー、早くユズにも教えてあげたい……!」

「——ううん……ちや、ちゃんと全部見てた」

そこに、3人とも先生とも違う……少しくぐもった声が聞こえた。その発生源は部屋の隅に設置されているロッカー。耳を澄ませば、そこからはガタガタと物音も鳴っている。

「え? ロッカーが勝手に開いて……」

「きやあああつ! お、お、お化け!？」

「落ち着いて、ミドリ! プライステーションを投げちやダメ! そろそろ壊れる!」

ロッカーから出てきたのは小柄な少女。長い橙色の髪と、チャームポイントのおでこ。ミレニアムの生徒にしては珍しくジャケットを着崩さずに前まできっちり閉めており、制服は見えない。人と視線を合わせる事が苦手なのか視線は斜め下を向いており、時折見上げるように瞳だけ動かすが即座に元に戻る。内気そうな、その少女こそ。

「ユズ! そこにいたんだ!」

「あれだけ探しても見つからなかったのに……いつからロッカーの中にいたの?」

「み、皆が廃墟から戻ってきた時から……」

「だいぶ前じゃん!? その時からずっとロッカーの中にいたの? あ、もしかしてアリスちゃんが怖かったから?」

「モモトークか何かで伝えてくれれば良かったのに、びっくりしたよ……………」

「あ、アリスと先生は初めてだよ。この人が私たちゲーム開発部の部長、ユズだよ」

先生は特に声を掛けずに手を軽く振るだけに留める。いきなり『初めまして』の挨拶をしても怖がらせるだけだと知っているから。そうするとユズは少しだけ驚いた顔をして即座に顔を逸らし……………暫しの逡巡の後、顔を背けながらも控えめに手を振ってくれた。

そして彼女は疑問符を浮べているアリスの元まで歩いて――。

「えっと、あの……………あ、あ……………」

「あ……………」

「……………ありがとう」

それは、ゲームを作ったクリエイターとしての言葉。一生懸命作ったゲームを楽しんでくれたユーザーに向けられた混じりけの無い感謝だった。

「ゲーム、面白いって言ってくれて……………もう一度やりたいって言うてくれて……………泣いてくれて……………本当に、ありがとう。面白いとか、もう一度とか……………そういう言葉がずっと聞きたかったの」

そう言って、ユズは空が晴れるような笑顔を浮べた。



「とにかく、あらためまして。ゲーム開発部の部長、ユズです。この部に来てくれてありがとう、アリスちゃん。これからよろしくね」

「よろ、しく……………」

気弱に微笑むユズ。外を嫌う彼女が自らの意志で踏み出した大切な一歩。ゲームを楽しんでくれた人の為に、得体の知れない大人が居るにも関わらずロッカーから出たのだ。その内側にはきつと葛藤があっただろう。だが、その上で彼女はアリスに感謝を伝える方を選ん

だのだ。一生懸命、ゲームを作ったクリエイターとしての『ありがとう』を。

突然現れ、感謝を伝えられたアリスはまだ状況が呑み込めていないようだ。彼女は数回目を瞬きしたあと、何か合点がいったように「理解」と呟いて。

「……理解。ユズが仲間になりました、パンパカパーン！ ……合ってますか？」

「あ、うん。だいたいそんな感じ、かな。ふふつ、その様子だと、本当に私達のゲームを楽しんでくれたんだね……オススメ……仲間が増えるのは、RPGの醍醐味の一つだもんね。あ、もしRPGを面白いなって思ってくれたなら……私が、他にもおすすめのゲームを教えてください」

「ちよつと待ったあ！ アリスにオススメするのは私が先！ 良質なゲームをやればやるほど話し方も自然になって、私達の計画の成功率も上がるんだし！ さあ、まずは『英姫神話』と『ファイナル・ファンタジア』と『アイス・エターナル』と……」

「何言ってるの、アリスちゃんはゲーム初心者だよ!? 『ゼルナの伝説・夢見るアイランド』から始めるのが一番だって!」

「これだけは譲れない、次にやるべきは『ロマンシング物語』だよ。あ、でも第3弾だけはちよつと、個人的には、やらなくても良いかなって……」

3人が口々に言うゲームはアリスの為に選んだ己のお気に入り達。我こそは、と言わんばかりにタイトルを並べて次にプレイしてもらおうゲームを総出で決める。これが良い、こっちの方が良い。シナリオ、ゲーム性、BGM、イラスト。それらを加味して、彼女が楽しんで貰えるゲームを選ぶ。

アリスをゲーム開発部の部員に仕立てて廃部を回避する——
なんて打算的な目的は既に彼女達の頭の中から抜け落ちている。ただ、先ほどのように楽しかったと言ってほしい。ゲームをもっと好きになってほしい。ゲームを愛する者として、同じ『好き』を共有したい。その想いで一杯だった。

それをアリスは眺めている。彼女は3人の言っている事の多くを理解できていない。まだ目覚めたばかりで、様々なものが育っていないから。だが、それでも——自分自身が大切に思われている事だけは、ちゃんと分っていた。

「……期待。再び、ゲームを始めます」

だから、期待に目を輝かせながら彼女はゲーム機のコントローラーを握る。さあ、次はどんな彩^{世界}りが待っているのだろう。

不思議の国は、始まったばかり。

光の剣

結局、アリスのゲームは夜通し続いた。3人に勧められるがままに平積みされたゲーム機と本体。それを1つ、また1つとクリアを重ねていき、夜が明ける頃には約半分程クリアを終えていた。それは非常に高い学習能力の賜物か、或いはアリス本人が関心を抱いたからか。

勿論、そこにはゲーム開発部の3人のサポートがあった。だが、夜も遅くなると全員ダウンし、日付が変わってからはアリス1人しか起きていなかったのだ。尚、ゲーム開発部の部室で一夜を明かす訳にはいかない先生は午後18時頃に「また明日来るね」と言い残し、シャワーに帰った。

故に、日が変わってからは先生の不在と3人が夢の世界に旅立った事によりアリスはアシストもなく1人でゲームをプレイしなければならなかったのだが……経験を重ねた彼女はもう既に目覚めたばかりのような透明でも、純白でもない。彼女は3人が眠った後は1人で黙々と考え、クリアし、そして自らの意志で次にやりたいゲームを選んだ。

——それは自由意志の芽生え。彼女はまた一步、命としての道を進んだ。眩く煌めく黄金の様な、生命の紀行。彼女は星を見上げた知性体の仲間入りを果たした。

その輝かしい生誕の一端を担った少女達、その1人であるミドリは薄っすらと目を開いた。カーテンの隙間から差し込む光に顔を顰めて、いつの間にか掛けられていたブランケットを頭まで被ろうとするが……そこで、先ほどの光が朝日だと思ひ至る。寝落ちしたと気付いた彼女はブランケットを蹴飛ばす勢いで飛び起き、手元のスマホで時間を確認した。

「えっ、もう朝!?! しまった、準備しなきゃ……」

「ようやく気が付いたか……無事に目を覚ましたようで何よりだ、君は運がいいな」

「えッ!?!」

未だ覚醒しきっていない頭と、聞こえた声。寝ている間にゲームの

賢者の家か何かにも迷い込んだのかと驚いた顔のまま周囲を見渡すと――ゲーム機とモニターの真正面、昨日から何も変わっていない少女が座っていた。その姿に何処かほつとしたような表情を浮かべて。

「あ、アリスちゃんか……調子はどう？ 色々と覚えられた？」

「君の言葉を肯定しよう、必滅者よ」

「な、何か偏った台詞ばかり覚えてない……!？」

昨日から思っていた事だが、覚える言葉のレパートリーが偏りまくっている。プレイさせたゲームの多くが戦闘系だった事が祟ったのか。今度はもう少し穏やかなゲームをプレイさせた方が良いのかもしれない。これまでアリスが発してきた言葉の多くが日常生活では翻訳必須であり……これはこれで怪しまれそうな気がする。円滑、と言えば円滑だが、それでも違和感は拭えない。まるでゲームの中から飛び出してきたような……そういった類のズレ。また方針を考えなければならぬだろう。今度はユズも含めて3人で。

「おはようー」

「おはよう、皆」

部室のドアが開くや否や朝の眠気を一切感じさせない明るい声と、それに相対するような落ち着いた優しい声音が響いた。モモイと先生の2人。ミドリとアリスは2人に澱みなく「おはよう」と返したが、ユズはまだ先生が怖いのか目を背けて何かを堪えるようにか細い声を絞り出す。すると、彼はふわりと微笑んだ。まるで天使の羽根が落ちたような笑み。思わずユズも顔が緩んでしまい……それが恥ずかしいのか、直ぐに顔を背けてしまった。

少しずつ、だけど着実に距離が縮まっている2人を尻目にモモイはアリスに封筒を手渡す。本当なら昨日の内に渡したかった、彼女の所属を示す大切なものを。

「アリス、これ」

「……アリスは『正体不明の書類』を獲得した」

「おつ、またさらに口調が洗練されてるね。これは『学生証』だよ」「洗練っていうか、レトロゲームの会話調そのものだけどね……」

アリスは受け取った封筒の中から1枚のカードを取り出し、光に当てながら眺めていた、自分の名前、天童アリス。顔写真。ミレニアムサイエンススクール所属。裏面を見ると住所と思わしき物が書かれている。自らを示すカードを彼女は不思議そうに見て、ポツリと呟く。

「学生証……」

「この学生証は、私たちの学校の生徒だつていう証明書。生徒名簿にもヴェリタスがハッキ……いや、登録してくれたから、もうアリスも正式に私たちの仲間だよ！」

「仲間……なるほど、理解しました。パンパカパーン、アリスが『仲間』として合流しました！」

口からセルフSEを奏でながら、RPGの合流イベントを演出する。半ば強制的な加入であつたが、どうやら彼女は喜んでくれたようでその顔には笑みが浮かんでいる。所属している部活の欄もゲーム開発部と描かれており、名実ともに彼女は3人の仲間入りを果たした。

「ねえ、今、『ハッキング』つて言わなかった……?」

「大丈夫大丈夫！……さて服装と学生証、それに話し方！この辺は全部解決できたから、あとは……武器、だね。アリス、せっかくだし案内するよ」

モモイはアリスの手を引いて歩く。ミドリはそれに付いて行き、ユズは部室に残る選択を。先生は3人に同伴する。「行ってきます」と言つてドアを開けると、其処はキヴォトス最先端を歩むミレニアムらしい近未来的な光景が広がっていた。アリスは内心『これがSF……!』と若干感動している。尚、彼女の方が余程SFである。

朝早くという事もあり、廊下の人通りは疎らだった。精々、偶にすれ違う程度。道行く生徒達の目的は恐らく部活か何かの朝練だろう。雰囲気も全体的に落ち着いている。学生が集う場所らしい活気は、この時間にはまだなかった。

モモイとミドリにとって、この人通りの少なさはありがたかった。何せ今はアリスという目立つ少女と、先生というキヴォトスの有名人

を連れてきているのだ。往来が激しい時間に出歩いてしまえば針の筵となる事間違いないだろう。視線の雨に晒される事に大きな抵抗はなくとも、何事にも限度はある。先生とアリスが居る今、その限度が易々と超えられてしまう事は想像に難くなかった。

「ミレニアム……ううん、キヴオトスの生徒は、みんなそれぞれ自分の武器を持つてるの。だから、アリスにも武器を見繕ってもらわないとね。調達する方法は色々あるけど、このミレニアムで一番手っ取り早く、ちゃんとした武器が手に入る場所と言えば……やっぱりエンジンア部かな」

「エンジンア、部……？」

「そうそう、分かりやすく言うと鍛冶屋みたいなものかな？」

モモイがそう言うのと、アリスは「なるほど」と言って手を打った。鍛冶屋、とは言い得て妙だろう。武器は至る所に転がっているし、便利な発明品も『何に使うのこれ?』と思わざるを得ないような変な作品が所狭しと並んでいる。そこならば、キヴオトスで使用されている武器の大体は入手できるだろう。

「機械を作ったり、修理したりする専門家たちのことを、ミレニアムでは『マイスター』って呼んでるんだけど……エンジンア部はそのマイスターがたくさん集まっている、ハードウェアに特化した部活なの」
「機械全般に精通してるのはもちろん、武器の修理とか改造なんかも担当してる部活だから。多分、使っていない武器とかが色々残ってるんじゃないかなって。というわけで、学校の案内がたら早速行ってみよっか！」



ミレニアムサイエンススクール、エンジンア部の部室。学校の本校舎からは少し離れた場所に在る此処は朝の喧騒から更に遠かった。聞こえてくるのは機械の駆動音と、金属の鳴る音。

潤沢な予算を与えられている事が伺える広い部室と整った設備。

そして、その広い部屋の半分以上を占めている発明品。

至る所に示されているCAUTION^注のマーク。

そして、コーヒーやエナジードリンク、カロリーバーの残骸が積み重ねられているゴミ箱。

ソフトウエアに特化したヴェリタスと対を成す、ハードウェア特化の部活。ゲーム開発部が目標としているミレニアムプライスにて毎年賞を取っている、ミレニアムにおいても有数の天才集団である。

「成程、大体把握できたよ。新しい仲間に、より良い武器をプレゼントしたい……と。そういうことであれば、エンジニア部に来たのは素晴らしい選択だね。先生も久しぶり」

「久しぶり、ウタハ。また会えて嬉しいよ」

チエアに腰掛け、スパナを片手に機械をいじっている大人びた美人……白石ウタハはそう言っ、ゲーム開発部の3人と先生を歓迎した。彼女こそがマイスター集うエンジニア部の部長だ。多種多様のロボットの製作を続けるハードウェアの申し子であり、ミレニアム随一の発明家。彼女は耳にかかった明るい紫の髪を上げて、部室の隅の方を流し目で見ると

「ミレニアムにおける勝敗というのは、優れた技術者の有無に大きく左右されてしまうものだ。そっちの方に、私達がこれまで作ってきた試作品が色々と置いてある。そこにあるものであれば、どれを持って行っても構わないよ」

「やった！　ありがとう、先輩！」

「やあ……初めまして、アリス。1年生のヒビキだよ。良ければ私が、何か良いものを見繕ってあげる……」

音もなく表れたのは、アリスやモモイ達と同じ1年の猫塚ヒビキだった。1年生と雖も、マイスター集うエンジニア部に所属する彼女は紛れもなく天才である。数多の発明品を作成している彼女であるが、その優秀な性能と全く関係ない変な機能を付ける事で有名だとか。特に付くのは自爆機能とBlue tooth機能らしい。変なものだと、トランプの自動シャッフル機能が付いた事例もあるのだとか。

そんな彼女は武器が乱雑に転がっている部屋の隅まで移動し、両手

に取りながら吟味し……そして、1つを手渡した。

「……これはどう、アリス？」

「へえ、拳銃？」

「うん。見た感じ、多分だけど……これまでにあまり戦闘経験は無いはず……」

「その言葉は否定します。アリスはこれまでに人類を27回救い、魔王軍との46回に渡る戦闘を行い、三桁を超えるダンジョン探索を行ってきました。経験値はそれなりに豊富です」

「それは、すごいね……」

実戦経験を聞いたらゲームの話が返ってきたヒビキは困惑しながら返す。成程、ゲーム開発部のお友達らしく彼女もゲーマーのようだ。それも、結構重度の。だが、今は剣と魔法で魔王を切り倒した経験ではなく、実際に銃を握った経験の有無が重要だ。彼女は「兎に角」と言って、話を強引に元の路線へ戻す。

「銃器を使用した経験は……あまり無さそう。そういう人にはやっぱり拳銃が良い。これはプラスチック製だから軽いし、反動も少ない。そういう意味でも、色々と初心者に優しいはず。それに、何より……この銃にはミレニアム史上、今まで存在しなかった機能が搭載されている」

「な、何それ？」

「何か聞く前から凄そう……いったいどんな機能なの？」

ミレニアム史上、初の機能。大体の機能や発明品が集うミレニアムにおいて『初』という言葉はそれ相応に重要な意味を持つ。ごくり、と生唾を呑んでその史上初の機能を聞こうとするが……。

「それはね——Blue tooth機能、だよ」

「……え？」

発明者たるヒビキの口から飛び出てきたのは、余りにも馴染みのある機能であった。イヤホンやキーボード、マウス等の幅広い機器に使われている国際標準規格の無線通信技術。ゲーム開発部にも幾つも転がっているだろう。対応製品も、搭載製品も。

どんなトンデモ技術が飛び出てくるやらと身構えていた2人に

とって、この機能は拍子抜けが過ぎた。思わず気の抜けた声が口から漏れて、ぱちぱちと瞳を瞬かせる。

だが、ヒビキはそんな2人を置いてきぼりにして己の発明品の機能を話し始めた。

「Bluetoothを通じて、音楽鑑賞やファイルの転送まで可能な拳銃……調べた限り、そんなものは今までに存在しなかった。もちろん、スモモ機能も搭載。乗り場のICパネルにタッチして、交通機関を利用することもできる。それにNFC機能も付いてるから、コンビニで使えちゃう」

「凄いやえば、凄いやもするけど……コンビニで『これで決済を』って拳銃を突き出したら、店員の人びつくりしちゃうよ！」

「びつくりどころか、普通に強盗じゃんそんなの……」

さしずめ、『これ^{対価は命だ}で決済を』だろうか。銃撃が一般化しているキヴォトスでも銀行強盗は普通に犯罪だ。そんな事をすれば間違いなくヴァルキューレの御用になるだろう。

苦笑い混じりでミドリが言えば、モモイも同意見のようで肩を落とす。一方、ヒビキは折角の画期的な発明品に同意を得られなかった事が若干悲しいのか「便利なのに……多分……」と呟き、再びアリスの使う武器の見繕いを開始するが……そこで気付いた。アリスの姿が先ほどから見えないのだ。きよろきよろと視線を動かすと、モモイとミドリも彼女を探しているようで部室を見渡していた。

「あれ、そういえばアリスちゃんはどこに……？　アリスちゃん、アリスちゃん？」

「……あ、あそこ」

ヒビキが指差したのは部室の隅。アリスは己の身の丈以上の大砲を眺めていた。まるで魅入られたように、視線を動かさず。

——それは、まるで武器に導かれたようであった。

「ふっふっふっ……お客さん、お目が高いですね」

「え、えっと……？」

「説明が必要なら、いつでもどこでも答えをご提供！　エンジニア部のマイスター、コトリです！」

「……？」

アリスの傍に現われたのは、エンジニア部のマイスター、1年の豊見コトリ。一度物事を語り出すと止まらない舌を持つ、解説と説明が好きな彼女は非常にハイテンションであった。その高さたるや、アリスが思わず言葉に詰まるレベル。

その理由はやはり、アリスが先ほどまで見つめていた大砲にある。あれはエンジニア部の発明品の中でも有数の出来栄えを誇っているのだ。他の武器には目もくれず、唯一つを見つめる彼女を見て——技術者としてテンションが上がらない訳がない。彼女は本当に良いものを見抜いてくれたのだ。

「あなたがアリスですね。ゲーム開発部、四人目のメンバー！」

「あ、コトリちゃん久しぶり。ところで、アリスちゃんが見てるこの大きいのは何？ まるで大砲みたいだけど……」

「良い質問ですね、ミドリ。これはエンジニア部の下半期の予算、その内の約70%近くをかけて作られた——エンジニア部の野心作、宇宙戦艦搭載用レールガンです！」

「宇宙戦艦、って……また何かとんでもないことを……」

一気に大きくなった話のスケールにミドリは頭を抱える。だが、エンジニア部では見慣れた光景だった。彼女達は変な機能や変な発明品を頻繁に作成している。定期的にはつちやけないと発作が起きるのだろうか。目を見張る様な素晴らしい成果の裏にはこういう己の趣味や性癖に正直になったびっくりどつきりメカが山のように積み重なっている。

「前にも、確かコールドスリープしようとして、『未来でまた会おう』って言いながら冬眠装置を作って大騒ぎした挙句、皆して風邪ひいてなかった？」

「その『未来直行エクスプレス』なら、今でもよく使っているよ……まあ、冷蔵庫として、だがね。食べ物をもっと先の未来にまで送れるようになったから、失敗ではないさ」

「使い道の割に、名前が大袈裟！」

ウタハが指差した方向に鎮座するは、人が数人は収容できる巨大な

冷蔵庫。これこそが未来直行エクスプレスだった。人をコールドスリープさせるには至らなかつたが、冷蔵庫……物資を冷却する機能に關しては充分であり、こうして冷蔵庫として使用している。本来の使い方からは逸脱してしまつたが、これはこれで便利なのだ。

「話を戻しますとエンジニア部は今、ヘリコプターや汎用作業ロボツトに續いて、宇宙戦艦の開発を目標としているのです！ このレールガンは、その最初の一步です。大気圏外での戦闘を目的として開発された実弾兵器！ これはミレニアム史上、明らかに類を見ない初の試みです！」

「かつこいい……聞いただけでワクワクしてくる！」

「さすがミレニアムのエンジニア部！ 今回は上手く行つてるんだね!?!」

「ふつつつつ、勿論です！ ……と言いたるところだったので、ちよつと今は中断してまして……」

「えええつ!? なんで！ 期待したのに！」

「いつものことながら技術者たちの足を引っ張るのは、いつの世も想像力や情熱の欠如ではなく、予算なんです……」

結論、予算オーバー。宇宙への栄えある第一歩を踏み出したのは良いが、第二步目が続かなかつた。宇宙での戦闘を想定したコストを度外視したワンオフ兵器は途轍もない金食い虫になり……そして、今はこうして部室の隅で目覚める時を待っている。

「このレールガンを作るだけで下半期の予算の70%もかかつたのに、宇宙戦艦そのものを作るには果たして、この何千倍の予算がかかることやら……」

「そんなの計画段階で分かることじゃん！ どうしてこのレールガン、完成まで持つて行つちやつたのさ!?!」

「愚問だね、モモイ」

モモイの肩を後ろから叩いたのはウタハであり、その傍らには先生も立っていて。2人は顔を見合わせながら。

「……ビーム砲は——」

「ロマンだからだよ」

ウタハと先生は目を見合わせてハイタッチする。そう、ビーム砲はロマンなのだ。口径は大きければ大きいほど良い。巨大ビーム砲とロボットに興奮しないエンジニアと男の子はいない。予算？ 運用難易度？ そんなものはこのロマンを前にしたら全て些事だ。ビーム砲とロボットからしか得られない栄養素がこの世の中には存在する。

「うん」

「その通りです！ ビーム砲の魅力が分からないなんて、全く、これだからモモイは……」

「バカだ！ 頭良いのにバカの集団がいる！」

ヒビキ、コトリの2人も先生とハイタッチする。この3人と先生の間には同じロマンを共有する心があるのだ。もう、言葉は不要であった。

「エンジニア部の情熱が注ぎ込まれた、この武器の正式名称は——」

『光の剣：スーパーノヴァ』です！」

「また無駄に大きな名前を……」

「ひ、光の剣……!?!」

「あ、アリスの目が輝いてる……!?!」

キラキラとした目で光の剣を眺めるアリス。彼女の頭の中からはこれまでの武器は全て抜け落ちていく。この光の剣……否、勇者の剣しか目に入らない。

「わあ、うわあ……!?!」

「アリスちゃんがこんなに興奮してるの、初めて見たかも」

「———これ、欲しいです」

アリスそう言うと、ヒビキは「……え？」と言葉を漏らした。その茫然とした表情を前に、アリスは意味が通じてないのかと思って。

「偉大なる鋼鉄の職人よ、あの龍の息吹が欲しいのだ」

「うーん、そう言ってくれるのは嬉しいのだけど……」

「申し訳ないのですが、それはちよつと出来ないご相談です！」

「何で!?! この部屋にあるものなら何でも持って行って良いって言っ

たじゃん!」

「……それは、理由があつて……」

「理由? もしかして、私のレベルが足りてないから……装着可能レベルを教えてください!」

「いや……悪いが、そういった問題ではなくてだね……もつと現実的な問題なんだ」

「あー……お金かー……」

呟き、モモイは自分の財布の中身を確認する。中身は心許ないが……アリスの為ならばゲーム開発部の共有財産を幾つか売り払ってでも惜しくはない。彼女は意を決して口を開く。

「心配しないでアリス。私が、ミドリのプライステーションを売り払ってでも……」

「お金の問題でもないよ」

「現実にお金以上の問題なんて無いでしょ!」

「まあ、製作における予算という意味では、ある程度同意はするけれど……」

ウタハは「実際に宇宙戦艦も予算の問題で駄目になったからね」と苦笑いを浮べる。だが、今回はそうだった……物質や資金的な問題ではなく。

「……この武器は、個人の火器として使うには大きくて重すぎる」

「なんと、基本重量だけで140kg以上です! さらに光学照準器とバッテリーを足した上で砲撃を行うと、瞬間的な反動は200kgを超えます!」

そう——如何に身体能力に優れているキヴォトスの生徒と雖も、200kgの反動を完璧に制御するのは困難を極める。それに、元は宇宙戦艦に搭載する予定だった主砲。最初から個人が携帯する兵装ではないのだ。

「これをカッコいいと言ってくれただけで、私たちは嬉しいよ。ありがとう。持って行けるのならば、本当にあげたいところなのだけだ……」

「——汝、その言葉に一点の曇りもないと言えるか?」

「ん？ この子、また喋り方が……」

「た、多分ですが、『本当なのか』って聞いてるんだと思います」

「勿論、は言っていないが……それはつまり、あれを持ちあげるつもり、ということかい？」

その問いにアリスは静かに頷いた。真っ直ぐ剣を見つめる眼差しに一切の曇りはない。彼女は踏み出し、レールガンの取っ手を掴む。

「この武器を抜く者……比の地の覇者になるであろう！」

「ふふふつ、なるほど。意気込みは素晴らしいですね！」

「無理は、しない方がいい……クレーンでも使わないと持ち上がらな
——」

ヒビキが言ったその瞬間、レールガンが床から浮いた。その余りにも非現実な光景を前に3人の目の色が変わる。

「……まさか」

「嘘……」

「えええつ!？」

完全に床から離れた光の剣、その重量を前にアリスも僅かにふらつくが、両脚で大地を踏みしめて踏ん張り——レールガンを構えるに至った。

「も、持ち上がりました！」

「嘘……信じられない……」

「これは、凄いね……」

その細く、小さな体の何処にそんな馬鹿げた力があるのか。最初の方こそ不安定だったが、今はもう完全に制御しているのだ。どう考えても彼女は身体能力だけを考えたら、キヴォトスでも上位に位置するだろう。ともすれば、ヒナやホシノといった学園最強戦力に匹敵するレベルだ。

「えつと、ボタンは……これがBボタンでしょうか……」

「ま、待って……!」

「ツ……光よ!」

光、一閃。空を切り裂くような極光が砲口から放たれた。その反動を前にアリスは尻餅をついてしまうが、そんな些細な事は響き渡る強

烈な破壊音と舞い上がる粉塵と煙を前にしたら些事であった。

「あああああつ！ わ、私達の部室の天井があつ!？」

「す、凄いです！ アリス、この武器を装着します!！」

煙が晴れると、砲撃が直撃した部室の天井には巨大な風穴が空いていた。差し込む光と風通しの良くなった部室にコトリが膝から崩れ落ちるが、ぶつ放したアリスは光の剣をぶんぶん振り回しご満悦。その表情は新しい玩具を手に入れた無垢な子どものようであった。

「ほ、本当に使えるなんて……ですがそれだけは、その……予算とか諸々の問題で、できれば他のでお願いしたく……」

「いや……構わないさ、持っていつてくれ」

「ウタハ先輩……本当に良いんですか?」

「ああ。どちらにせよ、この子以外には使えないだろうからね。ヒビキ、後でアリスが持ち運びやすいように肩組と取っ手の部分を作ってあげてくれ」

「……前向きに考えると、実戦データを取れるようになったのはありがたいかも」

眩き、ヒビキはタブレットを片手に取りつけるストラップの材料を身繕う。

そう、確かに部室で死蔵するよりはデータが取れる方が何倍もありがた。何せ、作ったは良いがあまり使っていないなかつたのだ。アリスが集めたデータを元にすれば、次はもっと良いものを作れるかもしれない。尤も、予算的な意味で次があるかは怪しいのだが。

「うわ、何だかものすごい武器をもらっちゃったね！ ありがとう!！」

「あ、ありがとうございます!！」

「いや、お礼にはまだ早いさ」

「え?」

疑問符を浮べる2人を尻目に彼女は手元の端末を操作し、危険物が仕舞われている部屋の鍵のロックを解除する。扉上部のランプが赤から緑に点灯した。

「さて……ヒビキ、以前に処分要請を受けたドローンとロボット、全機出してくれるかい?」

「……うん」

「えつと……ウタハ先輩？　なんだか展開がおかしいような……」

「これってもしかして、『そう簡単に武器は持って行かせない！』みたいなパターンじゃない!？」

「その通りさ。その武器を本当に持って行きたいのなら……」

「私達を倒してからにしてください！」

ヒビキが部屋の奥から引き連れてきたのは大量のドローンとオートマタだった。本来であれば警備用で配備される予定であったが、その過剰スペックが問題となりセミナーに処分を言い渡された問題作。

そして、彼女達また己の武器を構える。ウタハもセントリー^雷ガン^{ちや}を用意し、準備は万全だ。

「ッ！」

「えええつ！　そんな、ウタハ先輩どうして!？」

「他の武器なら、喜んで渡しただろうけれど……　その武器に関しては確認……いや、資格と呼んだ方が相応しいかな。それを見極めさせてもらうよ」

「資格？　それって……」

「前方に戦闘型ドローン及びロボットを検知、敵性反応を確認」

アリスは光の剣^{スパーラザア}を振りかざし。

「我、勇者の資格を此処に示さん！」

廃墟の国

結論から言うと、アリスは光の剣を振るうに値する資格を示す事ができた。

彼女達は大量のドローンとオートマタを片っ端から薙ぎ払い、幾分か手心を加えていたエンジニア部の3人を下し……そして、アリスは満面の笑みでレールガンを構えて部室から出た。残されたのはエンジニア部の3名と、スクラップになった機械達。片づけをしないと、と頭の片隅で思いながらウタハはアリスを思い返す。

——最低でも1トン以上と推定される握力。発射時にもブレない安定した体幹バランス。高い出力と強度。肌全体に傷すら見当たらない綺麗な肉体……いや、機体。

彼女はその類希なる頭脳と培った経験から、アリスが生身の人間ではない事を見抜いていた。そして、彼女を構成する全てが今の技術では到底再現できそうにないロストテクノロジーである事も。故に彼女はこの時代の産物ではない。過去……前期の生命が遺した何か。何の因果か、それがこの時代に目覚めた。

——つまり、最初から厳しい環境での活動を想定し、ナノマシンによって自己修復することを前提として作られた体……その目的はきつと。

自己修復ナノマシンはの事前投与は、最初から損耗の激しい極地での運用を前提としていることを示す。そして、拡張性の高いヒトの肉体。過剰、と言わざるを得ない圧倒的なスペック。それらを総合して考えると、解なんて一つに定まってしまう。

——戦闘だな。

そう、彼女は初めから戦闘を目的として造られた命だ。そう考えるとも色々と辻褄が合う。あのレールガンを持ち運び、放つことができたのも、そもそもそれが目的であるからで。搭載された頭脳も其方の方に特化しているのだろう。故に、2回目以降はレールガンの反動を完璧に御して見せたのだ。最初の1回、その失敗を元に。常識を逸する学習速度とスペックだ。一介の技術者として興味は尽きない。

だが、彼女はゲーム開発部のアリスとしてあの場に居た。もう彼女は選んだ後なのだから、自分^{ウタハ}がとやかく口を出すのは無粋だろう。

——彼女は、これからどんな子になるのだろうか。

アリスに開けられた部室の天井、そこから覗く青空をウタハは眩しそうに見上げた。



「モモイ、その場で転回。振り向きざまに銃床^{ストック}で殴ってから離脱」

「りょーかい！ 思ってたけど、先生って戦いになると割と荒っぽくなる……よねッ！」

軽口を叩きながら、モモイは先生の指示通りの行動を行う。殴りつけたロボットの頭部は粉碎され、メインカメラの消失により混乱している。その隙に囲まれつつあった彼女は離脱し、モモイが精密射撃で的確に一体ずつ撃ち抜いていく。

——そう、彼女達は再びミレニアム自治区内の廃墟へ足を踏み入れていた。

本来ならばアリスという新しい部員が入部した時点で、既定の人数を満たしたことにより廃部の危機は免れるはずであった。だが、それは今期までの条件。来期からは一定数以上の部員と成果、その両方が求められる。部員の要件を満たしても一時凌ぎにしかならなかったのだ。

結局、目に見えて分かる成果が必要になった彼女達はゲームを作ろうと作業を開始しようとして……そこで気付いた。

——あれ？ 前はアリスに気を取られて忘れてたけど、G・Bibleは？

そう、彼女達は前回の探索でG・Bibleを手に入れてないのだ。アリスという途轍もない発見があった所為で忘れていたが、前回の探索の目的はゲームの聖書。そして、それは達成できていない。その事実^に気付いたモモイは全員に呼びかけて慌てて支度をして……今に至る。

尚、エンジニア部から帰って、廃墟に出向くまでの空白の時間。そこにはユウカのアリスに対する質問尋問タイムがあつたが……ユウカは深く突っ込まずに彼女の事をゲーム開発部の一員と認めた。恐らく他の部活だったら、あんな怪しさに溢れた解答をした瞬間に理詰めされて、アリスの真実を吐かされるだろう。なんだかんだ、彼女達に対しては冷酷な算術使いも甘いのだ。尤も、本人はその事実を否定するであろうが。

「うう……皆、大丈夫?」

「うん、私は平気。だけど、思ってたより敵の火力が高くて……先生は大丈夫ですか?」

「心配ありがとう。大丈夫だよ」

タブレットを操作する手を止めて、先生は穏やかに微笑む。その笑みを見て何処かほっとしたような表情を浮かべる彼女達であつたが、此処は戦場。一時の気の緩みが命取りだ。故に彼女達は再び気を引き締めて、銃を握る手に力を込める。

未だ熱源反応は近い。恐らく戦闘音を確認するために此方に向かつてくるだろう。以前の探索では戦闘できるメンバーがモモイとミドリミドリの2名しかいなかったから、基本的に逃げに徹していた。だが今回はユズに加えて超火力を持つアリスが居るのだ。単純計算、戦力は2倍。これならば敵がある程度蹴散らしながら進める。

そうこうしている内に、敵が来た。オートマタとドローンの混合。数は約10弱。

「来た、ロボット達……!」

「よし、じゃあ手筈通りに!」

此方に向かつて銃を乱射してくるオートマタ達。相変わらず殺意が途轍もない。ユズはほぼ初遭遇のため、半泣きだ。だが、それでも己の役割を果たさんとM320ニャンダッシュを振り回して敵の行動を制限する。

モモイとミドリもその抜群のコンビネーションを活かし、敵の退路を防ぎ、逃げ道を着実に奪い——本命を通すための布石を整える。それは宛ら詰将棋の様相。彼女達の発案を先生が形にした、最も効率的な敵の撃破方法。

果して、敵は集まった。遮るものがない一直線上。退路はない。動きはモモイ、ミドリ、ユズが制限している。

「今だよ、アリスちゃん！」

「やっちゃって！」

敵を射貫く巨大な砲身。集束するは青の極光。

「今日の私の役割は、光属性広域アタッカー」

お膳立てされた一直線上、その全てが彼女の射程範囲だ。3人の退避は既に終わっている。故に彼女は威力を一切制限せずにその圧倒的な火力を解き放つ。

「——光よ！」

アリスの宣言と共にトリガーが引かれ、エンジニア部の傑作が解き放たれた。莫大な熱量と光の奔流。視界がホワイトアウトした刹那、破壊音が鳴り響いた。煙が晴れたその場には無残に破壊された残骸が転がるのみ。

「よし、成功！ やるねえ、アリス！」

「アリスちゃん、凄い！」

モモイとミドリはそう言っ、アリスとハイタッチする。その表情は企みが上手く運んで満足気だ。

尚、ユズは直線上にあった廃ビルに風穴が空けられているのを見て驚いていた。光の剣：スーパードヴァの最大火力を見たのが今回が初のため、致し方ない事だろう。そして彼女は己の銃に付いているゲーム機を起動させてマップを開き——その声を上げた。

「て、敵の第二陣が接近中！ 数はさつきよりも多い！」

「連続戦闘はちよつと……お姉ちゃん、流石に私達が不利だよ。一旦引いて態勢を立て直そう！ 先生もいるんだし、安全第一で作戦を立て直した方がきつと……！」

敵の増援。しかも先ほどよりも数が多い。状況は不利だ、そんな事は分かっている。突入から何度も接敵して、その度に撃退してきたのだから。弾薬だつて有限な訳で、弾切れになったら最後、徒手空拳しか残されていない。そして、自分達が無数のオートマタ相手に取っ組み合いをして勝利を収められるほど武闘派ではない事なんて分かり

切っている。

故に一旦退いて、今回得られたデータを元に作戦を練り直し再度突入する。幸い、今回で敵の配置の傾向は何となくであるが掴むことができた。これを元に突入ルートを考えれば少ない損耗で奥まで入り込むことが可能はずだ。

それに何より、敵の火力が想定よりも高いのだ。今は先生を守れているが、いつまでも守り切れるとは思っていない。彼は銃弾一発が死因になり得る。キヴォトスの民とは違うから。先生の安全が最優先事項、彼がいる今無茶をするべきではない。

故に、ミドリは撤退を提案した。それを受けたモモイは腕を組み、頭を悩ませて——それから、呟く。

「ううん、ここで退くわけにはいかない。突破しよう」

「ッ！」

「多分ここで引いても状況は悪くなるだけ。これだけ騒ぎを大きくしたから、次は多分もつと厳しくなると思う。此処に足を踏み入れる事すらできないかも。確かに、戦闘音を聞きつけてロボット達は集まってくると思うけど……それでも、今が一番手薄なはず。G・Bibleの座標……あの工場に入るには、今が最大のチャンスだと思う」

「でも……」

「——大丈夫です」
不安そうなミドリを励ますように声を掛けたのは、先ほどまで沈黙を貫いていたアリスだった。彼女はその瞳に真っ直ぐな意志を灯して、ゲーム開発部のメンバーと先生を見る。信頼と決意が混ざった、彼女の色。

「私達は今まで一緒に27回のダンジョン探索と、139回のレイドバトルを成功させてきました。今回もきつと……このパーティなら、私達なら勝てるはずですよ」

「で、でも、それはゲームの話でしょ!? 現実はずっと……!」

「ど、どう転んでも、危険はある……私もが、頑張るから、前に進もう」
「ユズまで……じゃ、じゃあ先生は? 先生は私達と違って、攻撃を受けたら……!」

「——安心してください」

ミドリの不安を薙ぎ払う様に、アリスは澀みなく言葉を紡ぐ。何も案ずる事は無い、心配なんてない、大丈夫だ——と。彼女の眼には誰かを守り抜かんとする決意が燃えていた。それは、尊き者を護るための意志。皆の為^{だれか}に剣を取ることを選び続けた彼にとても良く似た色。

「どんな危険があっても、どんな困難が待ち受けていようとも……アリスが先生を護ります。だから——」

アリスは彼に手を差し伸べる。遠い、遠い日。もう過ぎ去ってしまった残影。アリスが思い出せない日々。だが、それでも……あの暖かさと優しさは魂の最奥に刻まれている。故に、彼へ手を差し出すのだ。いつの日か、彼がそうしてくれたように。

「先生……アリスを信じて、私達と来てくれますか？」

彼女の問い。貴方を護らせてほしい、その願い。煌めくような想いを受け取った彼は、空が晴れるような笑みを浮べる。そして、差し伸べられた手をそつと握った。

「ああ、勿論。私も仲間として、私に出来る事をやるよ。指揮は任せ
て」

——いつまでも信じているよ、アリス。

「……ッ！ パンパカパーン！ 先生が改めて仲間になりました！」

アリスは満面の笑みを携え、彼に握られたその手をぶんぶんと振る。彼の腕が取れてしまいそうな勢いで喜びを体現する彼女を見て、それから先生を見る。彼も言葉通り、退くつもりはなさそうだ。正確には、己の都合で退くつもりがない……と言うべきだろうか。

ミドリは溜息を吐いて、それから気持ちを入れ替える。銃を握り締めて、次に備えてリロード。

「こうなったら、私も覚悟を決める！ ゲーム開発部、敵陣を突破するよ！」

「おーッ！」

少女達は己の信頼する武器を構えて、目的地へ駆け出した。

赤熱した銃身。空っぽになった弾倉^{マガジン}。額から流れる冷や汗を拭いて、ミドリは大きく息を吐いた。モモイやユズも疲弊した表情を見せていて、息を切らしていないのはアリスと先生だけ。

「はあ……はあ……な、何とか成功、かな……？」

暗い工場。非常灯のぼんやりとした明かりが唯一の光源となるこの場所で、皆は壁に背を預けていた。服越しに伝わる壁の温度はひんやりとしていて、上昇した体温がゆつくりと冷却されるのを感じる。五月蠅く跳ねる心臓と荒い呼吸はもう少しで収まりそうだ。

「侵入成功です！ アリス達はミッションをクリアしました！」

嬉しそうにミッションの成功報告をするアリス。彼女は宣言通り、先生を守り切ったのだ。その戦いっぷりはモモイとミドリ、ユズが呆気にとられてしまうほど。それはアリスが限界以上に力を振り絞ったから——ではない。何方かと言うと、元の出力が発揮されたよ^{スペック}うな……或いは掛けられていたりミッターが幾つか外れたような。そういう類の上昇値だった。

——ウタハが見抜いた彼女の用途……戦闘を目的に作られた彼女が本気を出したのだ。唯、彼を守るために。

「ねえねえ、私達つてもしかして実は凄く強いんじゃない?! C & Cとか、他の学校の戦闘集団と戦っても勝てちゃうかも!」「うーん……少なくともC & Cは絶対無理だと思うよ……」

息を整えたモモイは自身の健闘に胸を張り、ミレニウムが誇る戦闘集団にして特殊部隊に並ぶかも……と、膨らませるがミドリに一蹴される。

自分達はあくまでゲーム開発部、何方かと言うとインドア派な部活だ。特別体が強かったり、フィジカルに秀でていたり、銃の扱いや戦闘が上手い訳ではない。言うなればアマチュアだ。そんな素人に毛が生えた程度の集団が、各学校の戦闘集団に及ぶなんてミドリは到底思えなかった。

特にミレニウムが誇るメイド服姿の凄腕エージェント集団、Cle

aning&Clearing……通称、C&Cには逆立ちしても勝てる気がしない。真正面から戦ったら3分もせずゲームオーバーだ。

そして、他校の戦闘集団も途轍もないほど強いと聞く。有名なのはゲヘナ風紀委員会の空崎ヒナと、正義実現委員会の剣先ツルギ。彼女達は2人ともキヴォトス最強クラスとして名高い。間違いなくゲーム開発部の4名では相手にならないだろう。

だが、そう思ってしまう気持ちは分からなくもなかった。何せ、戦っているときの全能感が凄まじかったのだから。相手の動く先が、意図が手に取るように分かる。仲間達の行動が全て見えている。自分の体が羽根のように軽かった。まるで戦闘行為に最適化されたような、そんな感覚。

そして、その理由は分かっている。

「きつと、先生の指揮のおかげですね」

「私もそう思う……先生がいると、安心感が違う……」

「ふふつ、こういう事は少し得意なんだ。サポートは任せてよ」

そう言つて、くすりと笑う彼に集約される。彼の瞳が蒼く染まった刹那、世界が切り替わったのだ。それに加えて指揮も的確そのものであり、彼の奏でるメロディに合わせて銃撃音を重ねるだけで面白い位に敵が倒れていった、少し得意、なんてとんでもない。指揮能力に関して、彼の右に出る者はこの世に2人といないだろう。

彼の能力に何処か恐ろしさを感じながらも、ミドリは「ところで」と言つて話題を切り替える。

「皆、残弾は大丈夫そう？ 私はまだ2回……ううん、1回なら大丈夫だけど……」

「うーん、私もそれ位かな。アリスとユズは？」

「バッテリーがチカチカしています……マナが足りません、という事でしょうか？」

「わ、私もあと1回くらいしか持たなそう……」

突入前、戦闘は避けられないと考えたため、いつもより多く弾薬を持ってきたが……それを以つてしても尚足りない。敵の攻勢が思っ

た以上に激しいのだ。4名全員が揃って戦闘できるのはあと1回、多く見積もつてもあと2回が限度だろう。帰りの分も考えると、この工場内での正面戦闘は可能な限り避けたい。

「なら、できるだけ隠密行動で行こっか。先生、案内を任せてもいいですか？」

「勿論。オートマタの配置を鑑みるに、目的地まで発見されずに行けそうだ」

彼はタブレットを片手に突入ルートを考える。画面に映っているのは工場の内部マップだろう。蒼いマーカー5つはゲーム開発部と先生の物で、赤いマーカーは敵……オートマタとドローンのもの。そして、内部の方に見える緑のマーカーが目的地だ。

確かに、オートマタ達の配置は疎らだった。恐らく多くの兵力を工場外部の方へ回しているのだろう。掻い潜れそうな穴は多い。これならば見つからずに目的地に辿り着けるはずだ。

「スニーキングミッションですね！ アリス、分かりました！」



カン、と靴底が鉄製の床を叩く音が良く響く。工場の中に入って20分が経過した頃、彼女達は漸く最下層に足を踏み入れるに至った。薄暗い非常灯に照らされる、無機質な階段と、その脇に這う無数のコード達。下層から吹き込む風はまるで黄泉の唸り声のようで、嫌に冷たい空気が粘度を持つように絡み付く。

恐怖というものは人間にプリセットされた根源的な感情だ。程度の差はあれ、先の見えない闇は誰だって怖い。人類がどれほど進んでも遺伝子に刻まれた恐怖から逃れる術はないから。

そして、それはキヴオトスの少女達も例外ではない。幾ら体が強くとも、怖いものは怖いのだ。故に、少女達は先生のコートの裾や袖を掴んだり、手を握って暗闇の中を進んでいたのだが……。

「……あれ」

「ん？ どしたのアリス？」

突然、アリスが立ち止まった。彼女の眼には困惑の感情が浮かんでいて、茫然と輪郭すら定かではない道の先を眺めている。

「……分かりません。でも、何処か見慣れた景色です……此方の方へ……行かないと……」

「えっ?」

ふらりとアリスは歩を進めた。その足取りは先程まで闇の中で恐怖していた少女とは思えないほど軽い。まるで使い慣れた道を行くような、一切の躊躇いが無い進行。彼の袖を握っていた手は既に空いている。

「本当にどうしたの、アリスちゃん?」

「アリスの記憶にはありませんが……分かるんです、此処の構造が。まるでセーブデータを持っているみたいです。この身体が、反応しています。例えるなら……チュートリアルや説明が無くても進められるような……何度もプレイした事のあるゲームを遊んでいるような……」

「どういう事……? 確かに、元々アリスが居た所と似た様な場所だけ……」

ミドリとモモイの声に振り返る事すらせず、アリスは迷いなく道を進む。隠し通路のような巧妙にカモフラージュされた扉すら看破し、彼女は最短距離である場所へ向かう。認証系も全てパスし、階段を降り、工場の奥へ。

そして——彼女達は遂に最深部、真実の鍵が眠る場所へと行き着いた。其処はコンピュータが一台だけ置かれているだけの酷く殺風景な空間。工場の最奥、と言うにはあまりにも簡素だが……それでも、此処が一番重要な場所だと直感的に思ってしまった。否、そもそもこの工場自体がこのコンピュータ一台を隠すための大規模なカモフラージュ施設だとすら感じてしまう。それ程までに、異様な存在感があった。

少女達と先生は足を踏み出す。一步、一步、着実に。そうして真正面まで来た直後——画面に明かりが灯った。

『Division Systemへ、ようこそお越し下さいまし』

た。お探しの項目を入力してください』

「お、まさかの親切設計。じゃあ早速G・Bibleについて検索してみよっか?」

「いやいや、ちよつと怪しすぎない? それより、『ようこそお越しくございました』ってことは……Divi^{ディ}：sion^ビ System^シっていうのが、この工場の名前……?」

コンピュータの電源が生きている事は想定内だ。何せ、幾つか非常灯が点灯しているのだから。流石に主電源は生きていないだろうが、サブが供給しているのだろう。

だが、このコンピュータが己がシステム名を名乗るのは予想外だ。分割、分別を意味する名前のシステム。一体、此処で何が行われているのだろうか。そんな考えが頭の中を巡るばかり。

だから気が付かなかった。アリスが前に出て、備え付けのキーボードを操作し、『G・Bible』と入力した事に。

そして、その問いに対するコンピュータの返答は。

『#\$、#\$%#%^*&(#@』

「こ、壊れた!? アリス、一体何を入力したの!? チートコード!」

「い、いえ……エンターキーはまだ押してないはずですが……」

『あなたはAL—1Sですか?』

「ッ!」

「……?」

——今、運命の歯車が動き始めた。



コンピュータの問い。それはモモイとミドリを絶句させるには充分すぎる衝撃だった。AL—1S……アリスと名付ける前の、彼女の名前。それを、この機械は知っている。

「いえ……アリスはアリスで——」

「待って! 何かがおかしい。アリスちゃん、今は取り敢えず何も入力しない方が……」

『音声を認識、資格が確認できました。おかえりなさいませ、^{ALIS}王女』

しかし、彼女は認識された。超高精度の音声認識。何か、分からない事が起きようとしている。逸る気持ちで先生を見れば、彼は穏やかな表情でコンピュータを眺めている。その眼差しは生徒を見つめているような、暖かで愛に溢れた瞳だった。

その表情に更に疑問が深まるばかりであつたが、ユズの「えっと」という言葉に現実に取り戻される。

「その……ALISっていうのは、アリスちゃんのことなの？」

「あ、ごめん。そういえばユズちゃんには言つてなかつたかも」

「……アリスの、本当の名前……本当の、私……」

彼女は青い瞳で画面を見つめて。

「あなたは、ALISについて知っていますのですか？」

紡がれる疑問の声。本当の自分、本当の名前。分からない。アリスは、アリスの事を全く知らない。何の為に生まれて、何の為に此処にいるのか。だから思い切つて聞いてみた。自分が、ALISと定義された個体が、何であるのかを。

だが、一向に答えは返つてこない。確実に反応が遅くなっている。画面の方もぼんやりとしてきた。その詳細な理由は不明だが、恐らくはアリスの問いに答えるために多くのリソースを使っているからだろう。

そして。

『———そうで……@!· #%#@!· \$%@!·』

僅かに聞き取れる言葉を発した後、そのマシンボイスはノイズに塗れた。奏でられる不協和音は意味を成していない。そして、それに疑問を抱く暇もなく事態は急展開を迎える。

『緊急事態発生。電力限界に達しました。電源が落ちると同時に消失します。残り51秒』

「ええッ!? だ、ダメ! せめてG· Bibleの事を教えてからにしてー!」

色々とおつたが、まだG· Bibleの事を知れていないのだ。その為にこんな危険極まる場所に再び足を踏み入れたのに、何の成果も

ないのでは色々と浮かばれない。もうこんな場所で危険と隣り合わせの探検はしたくない——そんなモモイの懇願が届いたのか、モニターにはある文字列が映し出された。

『あなたが求めているのはG・Bibleですか?』

『Yes!』

『あなた達も知っています——今、目の前に』

『G・Bible……確認完了、コード：遊戯……人間、理解、リファレンス、ライブラリ登録ナンバー193。廃棄対象データ第1号。残り時間35秒』

「廃棄!? どうして!? それはゲーム開発者達の……いや、この世界の宝物なのに!」

『G・Bibleが欲しいのであれば、提案します。データを転送するための保存媒体を本機に接続してください。私のメモリの中にG・Bibleのデータが存在しています。しかし、現在私は消失寸前。故に新しい保存媒体への移行を提案します』

「保存媒体って急に言われても……あ、ゲームガールズアドバンスS Pのメモリーカードでも大丈夫?」

『……まあ、可能では、あります』

途轍もない程嫌そうな、不服そうな声がコンピュータから聞こえた。その声音は抑揚のないマシンボイスなどでは到底再現できない、感情を持つ生命から発せられるものだった。

その嫌そうな声音に若干申し訳なさを覚えるが、背に腹は代えられない。メモリーカードと機体をケーブルで繋ぐと画面が切り替わり、転送画面が映し出される。

『転送開始……保存領域が不足、既存データを削除します。残り9秒』

「え、嘘!? もしかして私のセーブデータ消してない!? ねえ!」

『容量が不足しているため、確保します』

「だ、ダメ! 待って! お願いだからセーブデータは残して! そこまで装備揃えるの凄く大変だつ——」

『残念、削除』

「ちよつとおおおおお!」

モモイの願い虚しく、セーブデータはG・Bibleの要領確保のために全てデリートされた。恐らく管理者権限で削除したため、復活も難しいだろう。

「ああああ！ 私のゲームガールズアドバンスのデータがああッ！ 私の700時間がああッ！」

そして、消えたのはモモイのセーブデータだけではない。先ほどまでモモイと愉快な漫才を繰り広げていたコンピュータもまた電源が落ちていた。残り時間を使い切ったのだろうか。

そう思っていると、再び画面に光が灯った。映し出されるは『転送完了』の4文字。そして恐る恐るエンターを押すと。

『新しいデータを転送しました。G・Bible.exe』

その文字列の前に、全員が息を呑んだ。

「こ、これって!?!」

「今すぐ実行してみよう！ 本物なのか確認しなきゃ！」

メモリーカードを本体に取り付け、電源を付ける。やはりゲームのセーブデータはどこにも見当たらないが、画面にはexeファイルのアイコンが1つだけあった。謎に緊張して手汗が出てきて、跳ねる心臓を抑えながら意を決して実行させると——ポップアップウィンドウが出てきてパスワードを要求された。

「パスワードなんて知らないよ!?! 何それ、どうすればいいのさ!?!」

「ううん、大丈夫！ パスワードくらいヴェリタスが解除できるはず！」

「そ、そうだね、そうすれば……！」

遂に見えた光明。手に入れる事ができたG・Bibleと、それを読み解くための手段。もう憂いはない。

「これがあれば、本当に面白いゲームが……テイルズ・サガ・クロニクル2が……！」

「うん、作れるはず！」

モモイはメモリーカードを再び鞆に入れ、「よしッ！」と気合を入れる。ああ、創作欲が湧いて仕方がない。今だったら何回でも徹夜ができそうだ。

「待っててねミレニアムプライス……いや、キヴォトスゲーム大賞！
私達の新作は今度こそ、キヴォトスのゲーム界に良い意味での衝撃
を与えてやるんだから！」

鏡を求めて

ミレニアムサイエンススクール、ヴェリタスの部室。大量のPCとタブレット、サーバ、データベースから成る、ハツカーの集う場所。鼻につんとくる甘い香りはエナジードリンクのもので、ゴミ箱や机の上を見れば空き缶が大量に放置されている。

そんな場所にゲーム開発部の少女は来ていた。理由は勿論、先日入手したG・Bible関係だ。カタカタとキーボードを叩く音が静かな部室に反響して、終わる瞬間を待ち望む少女達は緊張した面持ちで見守っている。

どれほどの時間が経っただろうか。不意にキャスター付きの椅子が軋む音が聞こえて、顔を上げると白髪の少女……小鈎ハレがタブレットを片手に此方を見た。

「依頼されたデータについて結果が出たよ」

「い、いよいよ……！」

「ドキドキ……」

「……知っての通り、私達ヴェリタスはキヴォトス最高のハツカー集団と自負している。システムやデータの復旧は、それこそ数えきれないほど解決してきた。その上で、単刀直入に言うね」

そして、ハレは告げる。少女達……否、ある特定一名に向けて、残酷な現実を。

「モモイ、貴方のゲームのセーブデータを復活させるのは無理」

「うわあああん！ もう駄目だ——！」

モモイはこの世の全てに絶望したような声を上げて、来客用のソファに寝そべり撃沈した。彼女だって分かっていた、ゲームのセーブデータの復旧が難しい事くらい。だが、それでも——と、そんな一握の希望に縋らずにはいられないほど、あのセーブデータには時間をつぎ込み、思い出を育んできたのだ。故に、改めてこうして現実を突きつけられると心にくるものがある。

残念、削除——あの小馬鹿にしたようなマシンボイスがもう一度聞こえたような気がしたが、きつと幻聴だろう。モモイはきつと疲

れている。

だが、今回の本題はそれじゃないのだ。

「そっちじゃないでしょ!? G・Bibleのパスワードの解除はどうしたのさ!?!」

「それならマキが作業中ですよ」

椅子を回転させ、此方を見ながらそう言ったのは同じくヴェリタスの少女、音瀬コタマ。彼女はゲーム開発部のメンバーを見渡し……そこに先生の姿がない事に気付いて人知れず肩を落とした。新しい音声データを盗聴しようと思ったのにと、内心で思っ

「マキちゃんが?」

「おはようミド! 来てくれたんだね、ありがと!」

ドアを一枚隔てた作業スペースから出てきたのは件の少女、小塗マキ。燃えるような赤髪が特徴的な、グラフィテイ好きな快闊な少女だ。ミドと呼ぶことから分かるように彼女はゲーム開発部の彼女達と同じ1年で、部の垣根を超えて交流している。勿論、仲も良好だ。

「うう、私のセーブデータが……涙と汗の結晶が……」

「モモはどうしてそんなに泣いてるの?」

「気にしないで……それより、G・Bibleはどうだった?」

「うん、ちゃんと解析できたよ。あれはあの伝説のゲーム開発者が作った神ゲーマニュアル……G・Bibleで間違いないね」

「や、やっぱりそうなんだ!」

その表情を歓喜一色に染めながら、ミドリは立ち上がる。G・Bible入手は大変だった。オートマタに追い回され、銃撃されるの繰り返し。危険な目に何度も遭ったが、その苦労に見合うだけの成果はちゃんと手に入れられた。姉のセーブデータは尊い犠牲になってしまったが……浮かばれている事だろう。多分。

「ファイルの作成日や最後に転送された日時、ファイル形式から考えても確實。作業者についても、噂の伝説のゲーム開発者のIPと一致していた。それと、あのデータはこれまでに1回しか転送された形跡がない」

「どういことは、つまり——」

「うん、オリジナルのG・Bibleだろうね」

「す、凄い！ それじゃあ——！」

早速その中身を見ようと思いい立ち上がったミドリに、マキは「でも」と言葉を続けて。

「ファイルのパスワードについてはまだ解析できていないの」

「ええッ!? それじゃ結局見れないじゃん!? がっかりだよ！」

「うッ……だって私はあくまでクラッカーであってホワイトハッカーじゃないし……」

精神ダメージから復帰したモモイの指摘を前に、マキはバツが悪そうにそっぽを向く。全く負い目が無いわけではない。彼女達の期待に満ちた眼差しを裏切ってしまうのはそこはかとなく良心が痛むが……人には得意不得意があるのだ。彼女自身が言う通り、マキの専門はクラッキング。嚴重に掛けられたパスワードの解除ではないのだから。

「兎に角！ 解析ができないからって、それ以外に方法が無い訳じゃない」

「そうなの？」

「あのファイルのパスワードを直接解除するのは、多分ほぼ不可能。でも、セキュリティファイルを取り除いて中身を丸ごとコピーするって手段ならいけるんじゃないかな……」

——まあ、ヒマリ先輩ならあのセキュリティのパスワードでも解析できそうだけど。

内心でそんな事を思いながら、マキは手元のタブレットを弄りながら続きの言葉を紡ぐ。

「で、そのためにはOptimus Mirror System……通称、『鏡』って呼ばれるツールが必要な」

「ぜ、全然話についていけない……」

「うーん……つまり、今のままじゃG・Bibleは見れないから、『鏡』ってプログラムが必要だってことだよな？」

ミドリがある程度内容をかみ砕いて話すと、モモイを含む3人は納得した様子で頷く。マキも「そゆこと！」と彼女の要約に花丸をあげ

た。

「じゃあその『鏡』はどこにあるの？」

「あたし達ヴェリタスが持ってた」

「何だ、それなら今すぐ……え、待って!? 過去形!？」

「そう。今は持ってない。生徒会に押収されちゃったの、もうっ!」

マキは口を尖らせ、背もたれに身体を預ける。思い出されるのは先日
の来客……セミナーの会計、早瀬ユウカ。彼女は急にヴェリタスの
部室に押し入り、「不法な用途の機器の所持は禁止」とだけ告げてプロ
グラムを回収していった。勿論、鏡のプログラムだけでなく、その他
の不法な物……コタマの盗聴器も押収品として彼女が持って行って
しまったのだ。

故に、鏡のプログラムは今やセミナーの管轄下に入っている。

「……その『鏡』って、そんなに危険なものなの？」

「そんな事はないよ。暗号化されたシステムを開くのに最適化された
ツールってだけ」

ハレは「ただ……」と言葉を続けて。

「世界に一つしかない、私達^{ヒマリ先輩}の部長が直々に製作したハッキングツ
ールで」

「ヒマリ……?」

その疑問符にミドリは「アリスちゃんはまだ会ったことがないよ
ね」と言い。

「ヒマリ先輩はヴェリタスの部長さんなの。ちょっと身体が不自由で
車椅子に乗っているから、見かけたらすぐ分かると思う……本当に、
凄い人でね。身体の事はあるけど、それであの人に同情したり軽視し
たりするような人は、少なくともこのミレニウムにはいない。天
才、っていうのかな。ミレニウム史上、まだたった3人しか貰えてな
い学位、『全知』を持つてる人なの」

「うん、本当に凄い……けど、それはそれとして、どうしてせっかく
作った装備を取られちゃったの?」

「……私はただ、先生のスマホのメッセージを確認したかっただけで
す。そのために『鏡』が必要で……不純な意図は全くなかったのです

が」

「どう考えても不純だよ！ 何しようとしてるのさー！」

先生のスマホは宝だ。様々な生徒と繋がり、言葉を交わしている彼。その中にはきつと、誰か1人の為に紡がれた大切なものだってあるだろう。コタマとしてはそれをちよつと見たり、聞いたりしたかっただけなのだが……どうやらモモイとミドリには納得されなかった様子だ。

勿論、暗号化解除ツールなんて力業を使わなくても彼に直接『スマホのメッセージを見せて下さい』と言えばいい。だが、彼が大人しく見せてくれるかはまた別問題な訳で。十中八九、『駄目だよ』と優しく断られるのは目に見えて分かる。彼は、生徒のプライベートやプライバシーは必ず守るだろうから。

「うわああん！ 早く鏡を回収しないと部長に怒られちゃう！」

「兎に角……整理すると、私達も鏡を取り戻したい。それに、G・Bibleのパスワードを解くためには、あなた達にとっても鏡は必要……そうでしょ？」

頭を抱えるマキと、流し目で此方を見るハレ。

セミナーに押収された、ヒマリが作成した暗号解除ツール。ヴェリタスとしても貴重な物だから取り返したいが、セミナーと押し問答を繰り返すのは現実的ではない。ならば実力行使……と考えるが、それはそれで壁が高い。

そんな堂々巡りの中に、件のツールを使用したいと手を挙げる部活が1つ。それがゲーム開発部だった。彼女達も廃部を免れるために何としてもG・Bibleの内部データが欲しいのだ。

—— 此処に、ヴェリタスとゲーム開発部の利害は一致した。

「……うん、大体分かったよ」

「ふふ、流石モモ。話が早いね」

「目的地が一緒なんだし、旅は道連れってね」

「共にレイドバトルを始めるのであれば、私達はパーティーメンバーです」

乗り気なモモイとアリスに、マキは「助かるよ」とハイタッチ。そ

んな少女達を見て、ミドリは「まさか……」と震える声を上げた。「お姉ちゃん、ヴェリタスと組んで、生徒会を襲撃するつもりなんじゃ……」

その問いを否定する者は、この場に居なかった。



ミドリとユズは襲撃を渋っていたが、モモイの献身的な説得により何とか首を縦に振らせることに成功した。2人も薄々分かっていたのだろう、もうこれ以上に有効な手立てがない事に。パスワードの総当たりも現実的ではないし、一定回数失敗したら中身のデータ全削除……なんてトラップが仕掛けられていたら目も当てられない。

よって、ゲーム開発部の方針としても『セミナーが押収した鏡を奪取する』という方向に固まったのだが……。

「問題？」

ここで1つ、問題がある。セミナーを襲撃する上では回避できないイベントであり……最大の壁が。

『鏡』は生徒会の差押品保管所に保管されているんだけど、其処を守っているのが実は……メイド部、なんだよね」

「……え？ メイド部、つてもしかして……」

「もしかしなくてもC&Cの事だよね？」

メイド部、或いはC&C。ミレニアム屈指の武闘派集団。メイド服を身に纏い、流麗な所作で優雅に敵を『清掃』する事で有名な……あの、メイド部。

そんな集団が、鏡が保管されている場所を守っている。

「そうそう！ まあ、些細な問題なだけだよさ」

「そつかく！ そうだねー、うーんなるほど……」

モモイは徐に立ち上がり、右手の人差し指でヴェリタスから出るためのドアを指した。

「よし、諦めよう！ ゲーム開発部、回れ右！ 前進ッ！」

「待つて待つて待つて！ 諦めちゃダメだよモモ！ G・Bible

が欲しいんでしょ!？」

「そりゃ欲しいよ! でもだからって、メイド部と戦うなんて冗談じゃない! そんなの、走ってる列車に乗り込めとか、燃え盛る火山に飛び込めって言われた方がまだマシ!」

その位には、非現実的な話なのだ。

オートマタやドローンなら幾らでも掻い潜れる。

セミナーの4名が相手でも、少々キツイが何とかはなっただろう。

だが、C&Cは無理だ。あの集団を相手にして勝てるビジョンが浮かばない。勝率なんて那由多の彼方だろう。

「でもこのままじゃ、あたし部長に怒られ……じゃなくて! ゲーム開発部も終わりだよ! このままじゃ廃部になっちゃうんでしょ!?!」

「うぐつ……も、勿論廃部は嫌だけど……でもこれは、話の次元が違う。C&Cのご奉仕で壊滅させられた過激団体や武装サークルは数えきれないもん」

「……最後には痕跡すら残さず、綺麗に掃除される。有名な話だね」

彼女達が仕事を終えた後には何も残らない。まるで、はじめ原初から無かったように。その手腕により何度も過激団体や武装サークル、違法サークルが壊滅させられ、その悉くが病院と矯正局に叩き込まれた。

「そりゃ、私も部活は守りたい。でも、ミドリにアリス、ユズの方が圧倒的に大事! 危険すぎる!」

「待つて待つて、多分勘違いしてる。何も真正面からメイド部を相手にする事はないよ。あたし達はミレニアムの生徒なんだし。それに、あたし達の目標はメイド部を倒す事じゃなくて、差押品保管所から鏡を取ってくることなんだから……」

「そんなに変わらないじゃん!」

「——でも、可能性のない話じゃない」

確かに、メイド部は強い。ミレニアムの生徒なら知っていて当たり前の常識だ。だが、最強であっても無敵ではない。厳しい戦いになるのは確定であるが、それでも……まだ、打つ手自体はある。

その理由は。

「私の盗ちよ……いえ、情報によると、現在のメイド部は完全な状態ではありません」

「えっ?」

そう——現在のメイド部は期間限定でフルメンバーではないのだ。そこに付け入る隙がある。



場所は変わって、ミレニアムサイエンススクール、屋上。特別な権限を持つ者しか足を踏み入れる事ができない場に佇む2つの影。片方はスーツのような制服の上にジャケットを羽織っているユウカ、もう一人はクラシカルなメイド服を纏っている。

冷たい風が2人の間を流れた。メイド服のスカートがゆらゆらと揺らめき、布の裏側に仕込んだ爆弾が金属音を奏でる。

「……そのまさかよ」

ドアを背に、ユウカは語る。その表情はあまり好意的ではなかった。

「なるほど、俄かには信じ難いお話ですね。あんなに可愛らしいのに……セミナーを襲撃しようだなんて、人は見かけによりませんか?」
「純粋な子達よ。そこだけは間違いないわ。でも……いえ、だからこそ、時にはとんでもない悪戯をしたりもする。それに、今回はヴェリタスも絡んでるの」

「ヴェリタスも、ですか……少々珍しい組み合わせですね」

「そうでもないわ。大事な物の為に手段は選ばないって点で、ヴェリタスとゲーム開発部はよく似ているもの」

そう——ユウカはゲーム開発部の次の行動を完全に読んでいた。伊達に彼女達の保護者代わりを務めているのではない。というべきだろうか。モモイやミドリの変考に關してはほぼ100%の精度でトレースが可能だ。

それに加えて、今回はヴェリタスの部長……ヒマリから情報を受け取っていた。ここまでお膳立てされたのに分からない訳がないだろ

う。

故に先手を打つ。荒事を起こすつもりならば此方も使える最強の手札を切るまで。

「そうでしたか。まあ何であれ依頼である以上、私達は受けるつもりですが……」

セミナー直属のエージェント集団……Cleaning & Clearingのコールサイン03を担う室笠アカネは眼鏡を整え、1つ指を立てる。

「1つだけ、ちよつとした問題があります」

「問題？」

「今のC&Cは部長が不在です」

「ね、ネル先輩がいない!?!」

C&Cの部長、美甘ネルの不在。それは非常に重要な問題点だった。ちよつとした、なんて言葉では済ませられないほどの。

メイド部ことC&Cがミレニアム最強と呼ばれる所以は素晴らしい練度のエージェントが揃っているからであるが、何よりも大きな要因はネルだ。ミレニアム最強の名をほしいままにしている彼女は、キヴオトスという大きな括りで見ても最強クラスに位置する。特に勝利への執念は目を見張るものがあり、中・近距離での戦闘能力はトリニティのツルギと並ぶだろう。彼女が持つコールサインたる00ダブルオーは勝利を意味する、と呼ばれるレベルだ。

「はい。ミレニアムの外郭に個人的な用事があるそうでした」

アカネは「ですが」と言葉が続ける。

「ご心配なく。リーダーが居るときのC&Cが一番強いのは紛れもない事実ですが、防戦であるのなら私達だけの方が良いかもしれません。リーダーは壊す事に特化した人ですから……では、改めまして。依頼はお受けします」

アカネは長いスカートを掴み、優雅な所作で雇い主たるユウカに一礼。

「約束の時間まで、ゲーム開発部を生徒会の差押品保管室に近づけない事……お約束いたしましょう」

▼

C&Cのリーダー、ミレニアム最強のネル……彼女の不在。それは確かに、ゲーム開発部達が一縷の希望を抱ける情報だった。何せ、ネルが健在なだけで勝率はほぼゼロだ。彼女と真正面からやりあって本気で勝とうとするならば、最低でもキヴオトスの上澄みの上澄みが戦力として必須になる。

そんな彼女がいなくてもなれば、作戦の成功確率は跳ね上がるが……それでも、那由多の彼方にあつた勝率が多少近づいた程度。勝算がある、と断言できるほどではない。

確かにネルは強い。ミレニアム最強にして、キヴオトス最強クラス。そこは疑いようのない事実だ。C&Cの無法な強さは彼女の存在が大きなファクターなっている。だが、彼女が居ないC&Cが弱いかと問われれば、それは否だ。C&Cの4名全員が凄腕のエージェント。ネル以外の3名も他の戦闘集団とは一線を画す能力を備えている。ネルが居ないから安心……なんて、甘い考えは通用しない。

故に、ネルの不在を突いて作戦を執行するヴェリタスの考えにモモイは中々頷けないでいた。

「正面衝突を避けて、『鏡』だけを奪って逃げる……」

確かに理には適っている。此方の勝利条件は鏡の奪取であり、C&Cの撃退ではない。故に正面戦闘は可能な限り避けて、隠密で差押品保管所まで向かえばいいのだが……それはあくまで此方側の話だ。

C&Cの任務は差押品保管所の防衛。ゲーム開発部やヴェリタスからその部屋を守り切れれば勝ちなのだ。そのため、間違いなく実力行使に出るだろう。この場にいるメンバー全員を気絶させたり病院送りにすれば、少なくとも差押品保管所に足を踏み入れる事は無いのだから。

言うまでもなく、モモイにとってゲーム開発部の存続は最優先事項だ。だが、ミドリやユズ、アリスよりも大事なものではない。C&Cと対立するという事は、彼女達が危険な目に晒される事を意味する。

——それが、モモイは嫌だった。

「うーん……」

声を呻らせ、思考を回す。まるでシミュレーションゲームで戦略を練っているみたいな感覚。だが、何時まで経っても代案や打開策は出てこず、堂々巡りする。

そんな時、同じように思案に耽っていたミドリが急に立ち上がった。彼女の瞳には強い決意が灯っていて、前へ進もうとする意志が燃えている。

そして、その決意のままに。

「——やってみよう、お姉ちゃん」

「ええッ!? 相手はあのメイド部だよ!? 幾らネル先輩がいないからって……」

「うん、勝算が無い事は分かってる。でも……このまま諦めて、ゲーム開発部を無くすわけにはいかない」

このままだと廃部になる現実。C & Cに勝ち目がない現実。その2つと正しく向き合った上で、ミドリは一步踏み出す事を選んだ。

確かに、勝算がない戦いに挑むのは怖い。だが、それでも——皆と一緒になら、進める気がして。

「ボロボロだし、狭いし、偶に雨漏りもするような部室だけど……もう今は、私達がただゲームをするだけの場所じゃない。皆と一緒に居るための、大切な場所だから。だから少しでも可能性があるなら、私はそれに掛けたい。例えばメイド部と対峙する事になっても、それがどれだけ危険だとしても……私は、守りたいの。アリスちゃんの為に、ユズちゃんの為に。私達全員の為に」

「ミドリ……」

——ゲーム開発部は、私達全員の大切な居場所だから。

そして、そんなミドリに呼応するようにアリスもまた立ち上がり一歩を踏み出す事を決意する。

「私達ならできます。伝説の勇者は……世界の滅亡を食い止めるために魔王を倒します。アリスは計45個のRPGをプレイして、勇者達が魔王を倒すために必要な、一番強力な力を知りました」

「一番強力な……あ、レベルアップ？ それとも装備の強化？」

「盗聴ですか？」

「EMPシヨックとか!？」

「ち、違います……」

そういつた、目に見える分かりやすい力ではない。直接的には相手を傷付けることはおろか、触れることすら叶わない概念のようなもの。見えなくて、分かり難くて、柔らかくて、時間の流れと共に変化する……アリスが一番最初に知った、大切なもの。

「一緒に居る仲間と、そこに在る絆です」

共に笑える誰か。1秒先さえ分からぬ世界を歩める仲間が、そこに芽生えた絆が何より大事だとアリスは思っている。自分だけが強くて何になろう。孤独を歩んでも空しいだけだ。この空の元、誰とも繋がれないなんて哀しすぎる。

故に、アリスは思う。誰かと繋がれる強さこそが勇者の条件であると。

そうだ—— 一番最初に触れた他人の暖かさは、今もこの胸に残っている。

「アリス……うん、そうだね。確かに、そうだよ」

ミドリの踏み出した一步。アリスの決意。それらを受け取ったモイは、最後に部長たるユズを見ると—— 彼女はゆつくりと、しかし強く頷いた。

モイは息を吐き、そして気合を入れ直す。もう、迷わない。

「よし、やろう！ セミナーの差押品保管所に潜入して、『鏡』を取り戻す！」

ゲーム開発部、全4名がセミナー襲撃に承諾した。

「ハレ！ 何か良い計画とかない!？」

「任せて……でも、その計画を実行するためには幾つかの準備が必要だね。さっき言ってた盗聴もそうだし、EMPシヨックもそう。それに……あとはやっぱり、仲間だね」

ゲーム開発部、ヴェリタスに加えて更に仲間が加わる。パーティーメンバーの新規加入というゲームなら盛り上がるイベントにアリス

は目を輝かせながら彼女の方を見た。一体、どんな仲間が加わるのだろう。どんな新しい出会いが待っているのだろう———そういつた期待に溢れた眼差し。

「でも、私達とはそこまで親しい仲って訳じゃないから……お願いしないよね」

「お願い？ 誰に？」

「キヴォトスで今大活躍中の人だよ」



「事情は把握したよ。それで私の所に来たんだ」

シャーレオフィス。先生はいつもの服装で客人をもてなすために飲み物を淹れていた。ヴェリタスの3人はコーヒー、ゲーム開発部の4人はコーヒーは飲めないためジュースである。

「うん。それで、先生……」

「ああ、良いよ。何かあったら責任は私が取る。だから、君達はその心のままに」

ふわり、と笑う彼。その顔には一切の陰りが無い。大事になったら迷いなく彼はその身を差し出すだろう。

——先生としての立場上、彼女達の案に大っぴらに賛成するわけにはいかない。そんな事をすれば、シャーレという組織がセミナーを軽視或いは敵視していると見做されてしまうから。

そもそも、今回はゲーム開発部及びヴェリタスが襲撃する側で、^{ルール}秩序を破壊する側なのだ。確かにユウカの押収は強引な部分があっただろう。もしかすると、必要な承認やステップを幾つか飛ばしているかもしれない。その事について彼女達が憤る気持ちも分からない訳ではないし、貴重なツールだから取り戻したいと思う事はとても自然だ。

そして、ゲーム開発部。彼女達にとっても本件は死活問題だ。この作戦が成功するか否かで、部活の未来が大きく左右されてしまう。作戦の成功率を少しでも上げるために、藁にも縋る想いで彼を訪ねたの

だろう。

先生としても、彼個人としても……その思いには最大限応えてあげたい。

だが、彼女達の味方をするという事はユウカと対峙する事を示す。ミレニアムやセミナーの規則に則り、非認可の部活から危険物を回収したに過ぎない彼女達と。

対立する二項、それらの共通の敵になる事は出来ても、味方になる事はできない。誰かを助けるということは、誰かを切り捨てるという事。それは変えようのない世界の真理だ。何度もこの身で味わってきた、当たり前前の現実。

——— ああ、儘ならないものだ。

彼は誰にもばれない様に嘲笑を零す。己の矮小さなんて痛いほど分かっている。己の手の小ささは憎いほど分かっている。

だから、せめて全ての責任は取ろう。それが先生たる己ができる最大の仕事だから。彼女達が憂いなく、また同じテーブルで笑い合えるように。

気持ちを入れ替えるように彼は「さて」と短く言って。

「私を介してまで会いたい生徒は誰かな。アビドスの子達？ それとも百鬼夜行の子達かな？」

「それは———」

ハレから告げられた生徒の名前……否、部活動の名前を聞いた彼は。

「その子達なら、私の仲介なんて要らないと思うけどなあ……」

と、苦笑いを零した。



「成程、それは確かに的確な判断だ。君達の言う通り、その方法なら私達じゃないと難しいだろうね」

場所は変わって、ミレニアムサイエンススクール校内のエンジニア部。いつも通りの制服姿で機械弄りに興じるウタハは突然の来訪を

快く受け入れ、彼女達の話聞き――。

「うん、分かった。協力しよう」

随分あっさりとセミナー襲撃に加担しようとしていた。その決断スピードはモモイが「軽っ!」と叫んでしまうほど。そして、ウタハ以外のメンバー……ヒビキとコトリも同様に、ゲーム開発部達に協力するつもりである。

「ほ、本当にいいんですか? エンジニア部は実績も沢山ありますし、こんな危ない橋を渡る必要は……」

「そうだね、そうかもしれない」

「それなのに、どうしてメイド部と戦うなんて危険な計画に乗ってくれるんですか?」

「それは――」

確かに危ない橋を渡らなくてもエンジニア部は存続できる。寧ろ、部の存続だけを考えるなら門前払いするなりセミナーに突き出すなりした方が余程確実だ。

だが、そういつた合理的な考えを蹴ってまでゲーム開発部に味方する理由は。

「うん、その方が面白そうだから……かな」

「そうです! それに、私達ももっと先生と仲良くなりたいですから!」

「私とかい? それは嬉しいな」

「勿論それもある。それと……」

ちらり、とウタハはアリスの方を見る。その意味深な視線にアリスとミドリは疑問を浮べるが、それを口にするよりも先に彼女は視線を外した。

「いや、今はいいさ。よろしく」

「こちらこそ、よろしくお願いします……!」

こうして、ゲーム開発部はエンジニア部という強力極まる仲間を引き入れる事に成功した。



「これでメンバーは揃ったよね？」

「うん、準備もできてる」

ハードウェア特化のエンジニア部、ソフトウェア特化のヴェリタス。存在そのものが反則染みている神算鬼謀の先生。そのメンバーに加えてゲーム開発部。今集められる戦力としては、これが最大値だろう。

錚々たる顔ぶれ、このメンバーと一緒にセミナーに一泡吹かせに行く。モモイは武者震いか、或いは緊張で体が強張り……そして、思い出したかのように「あ」と短く言っ

「そういえば、作戦はいつ始まるの？」

「……もう始まっているよ」

モモイの知らぬ間に、戦いの幕は切って落とされていた。

Cleaning & Clearing

窓ガラスが割れる音が響いた後、壁に蜘蛛の巣状の罅が入り――
―そして、貫通した。

13・97mm弾。対物ライフルに使用される殺意が凄まじい精度と速度で飛来する。認識後の回避は不可能、故に狙撃手の思考の先読みが必要だ。だが、相手は思考が読まれる事も織り込み済みのようで、ただ単に狙うだけでなくフェイントやブラフで巧妙に獲物^{ターゲット}を揺さぶり、仕留めに掛かる。回避後の位置に置かれている次弾。回避しようとするばするほど、掌の上から抜け出せなくなる。

其処に一切の遊びは無い。油断も慢心も皆無だ。狙撃手……Cleaning & Clearingのコールサイン^{ゼロツー}02、その役割は後方火力支援。角楯カリンはスコープ越しにモモイとミドリ^{ミドリ}の姿を眺めていた。

見通しの悪い夜。距離は約250m。強い風が吹くビルの屋上から、ミレニアムの廊下を全力疾走する少女2人を狙撃している。流石は凄腕のエージェント集団の一角、と賞賛すべき腕だ。悪条件をもものともしていない。

彼女は己自身を一個の兵器と定義し、心臓の鼓動や血管の収縮、呼吸といった生理反応を全て制御しているのだ。故にブレない。故に当たる。狙撃で彼女に並ぶ生徒は、どれだけ多くとも片手で数えられる範囲であろう。

闇夜に溶けるような褐色肌の手が閃き、そのトリガーを引く。間髪入れず次弾、狙いは回避した先。破滅的な音が2回夜空に響き、立ち昇る硝煙と火薬の香り。必殺、と呼称するに足る狙撃。1射目の狙いは心臓、2射目は脳天。凡百の生徒なら1射目の時点でノックアウト、戦闘に長けている生徒でも2射目の回避は困難極まる。

だが――。

「……成程、筋は悪くない。狙撃の回避方を熟知している。誰かの入れ知恵か……それとも、優秀なセンサー役がいるのか」

モモイとミドリは両方とも完全に回避して見せたのだ。庇おうとしても当たるように仕込んだはずであるが、それすらも掻い潜り……彼女達には未だ、傷一つ付いていない。流石双子、互いのカバーは完璧だ。

しかし、それだけではないのだろう。此方が想定した戦闘能力を大幅に超えているのだ。勿論、無策でC&Cに挑んできた訳がないだろうが……それでも、策を練ったからといってC&Cに彼女達が勝てる道理は薄い。

小手先の策でひっくり返せるのは、ある程度実力が拮抗しているとだけ。どう転ぶか分からないという天秤を傾けるのが策であり状況。最初から絶望的に開いている差をそれらで埋めることは出来ないのだから。

しかし、どうだろうか。確かに彼女達は劣勢だ。余裕はない。有利なのは依然此方で、このままいけば順当に勝利できる。

だが、それは順当に事が運べば、の話だ。少しでも油断すればひっくり返される……カリンがそう思ってしまうほど、彼女達は食らいついていた。

一朝一夕で戦闘力が上がらない事を知っているカリンはその不自然さを疑問に感じるが、狙撃を緩める事は無い。まるで手と目だけが別の生き物のように、思考から完全に独立して動いている。

「小さくて、すばしっこくて……しかもポジションも上手い。確かに、並みのスナイパーなら当てられないだろうけど……」

眩き、カリンは弾倉を落とし新しいものに変える。狙いは依然、あの2人。鷹の様に細められた金の瞳に剣呑な色が灯り、周囲の温度が僅かに下がる。

「速度とパターンは把握した。風も許容範囲、視界を遮る物も少ない……もしかしたら、『壁を背にすれば安全』って思ってるのかもしれないけど……」

しなやかな指先がトリガーに掛かり、鋼の弾丸が射貫く先を見据えた。

「残念。次は当てる……」

——彼女の宣言通り、弾丸は命中する。発射するのは3発。1発は牽制、2発目が本命。これでミドリを仕留める。そして、続く3射目で動揺したモモイを撃ち抜く。

これは、先生の手腕で以てしても変えられない未来。先生の回避指示、それを聞いたミドリであるが回避する間もなく射貫かれてしまう。カリンの狙撃はミドリの思考と行動のタイムラグを勘定に入れたものであるから。今までのデータと、カリンの経験から逆算した値を狙撃に組込み、時間の隙間を縫うように放つのだ。

故に回避不能の必中攻撃。健闘空しく、彼女達2人はカリンの狙撃を前に斃れるだろう。

しかし、今までののは全て弾丸が放たれればの話だ。

「それはどうかな？」

真後ろから聞こえた声。その時初めて、カリンは己の獲物たるボーイズ^{ホー}対戦車^{クア}ライフル^{アイ}から手を離れた。

「私の計算結果は少し違う。君の弾丸があの子達に当たる確率は……0%だ」

即座にスカートの裏に隠し持っていたハンドガンを引き抜き、声が聞こえた方向に銃口を向けて——そして、絶句した。

流線型の白いボディ。2つの脚部と胴体側面にはミレニアムの口ゴ。だが、何よりも目を引くのは座れそうな部分の真下に付いたガトリング砲だろう。黒い銃口が無言でカリンを見つめ……そして、モーター音と共に弾丸を吐き出し始めた。その唐突さにカリンも反応が僅かに遅れ、引き抜いたハンドガンが弾丸により破損する。

しかし、咄嗟に姿勢を低くし回避に専念した判断の速さは流石と言うべきだろう。完全に意識の外からの攻撃であったのに弾丸数発しか当てる事が敵わず、壊せた武装もハンドガン1つ。これでは戦力低下は望めない。

「なッ、何だそれは!？」

「紹介しよう。エンジンニア部の新作……全ての天候に対応可能な二足歩行型戦闘用の椅子、雷の玉座さ」

「なんで椅子を歩かせ……それにカタパルトまで付いている?」

歩行する椅子とは何なのか。しかもキャタピラまで付いているなんてどこを想定しているのか。それに、戦闘用とはどういうことなのか。椅子に戦闘力は果たして必要なのだろうか。

C&Cにおいては比較的常識人なカリンらしい、非常に真つ当な疑問。だが、その疑問は雷の玉座の製作者たるウタハのお気に召さなかったようで。

ウタハは少しだけ残念そうな、悲しそうな息を吐いて腰を掛ける。

「この雷ちゃんの魅力を理解してもらえないとは、残念だね……」

「……理解はできないけど、およそ把握はできた」

置いたままにしていた身の丈ほどあるライフルを担ぎ、カリンはウタハを見つめる。

「ずっと、気になってはいたんだ。どうしてゲーム開発部がセミナーのセキュリティを突破して此処まで来ることができたのか……あなた達エンジニア部が、そして先生が協力していたのか。ヴェリタスとゲーム開発部に」

そう考えると、色々と辻褃が合う。狙撃の回避も、様々な場所同時多発的に発生しているインシデントも。全て先生が裏で糸を引いているのだ。まるで音楽を奏でるように。その指揮能力、全体を俯瞰する目は凄まじいと言う他ないだろう。

何せゲーム開発部、ヴェリタス、エンジニア部という荒事に特別秀でていない集団をC&C相手に正面から戦えるレベルにまで押し上げているのだ。

「やはり、ヒマリの情報も私達を混乱させるための罠だった……？」

「ということは……」

刹那、銃口が閃いた。対物ライフルで早撃ちクイックドロウを行う、半ば曲芸染み雷ちゃんた神業。その弾丸の先はウタハではなく、その横の椅子。100ヤード91.44mで垂直23.2mmの装甲板をする威力を持つ弾丸は機体を大きく吹き飛ばした。

「雷ちゃんー！」

「成程、これで貫通しないとは随分丈夫にできてるな……何か転んで、足をバタバタさせてるけど」

カリンは極めて冷静に、彼我の戦力差を分析する。相手はウタハ1人と、雷ちゃんこと雷の玉座。もしかしたら、他のエンジニア部の部員も居るかもしれないが……それを加味しても、彼女達が勝てる確率は決して高いとは言えない。銃を撃つ椅子は確かに面白いが、それだけだ。タネが分かっているなら幾らでも対応できる。

「私を本気で止めるつもりなら、奇襲で来るべきだった。その椅子があるとはいえ、正面から挑んでくるなんて……それは計算ミスだろう、ウタハ」

そう——カリンの言う通り、先の一撃で確実に彼女の意識を刈り取るべきだった。彼女が最も油断していた瞬間であったから。事此処に至った今、もう奇襲は通じない。

この場はカリンの本領が発揮できる狙撃が可能な交戦距離を確保できないが、それでも遅れを取るつもりはなかった。

——確実に、戦闘力を奪う。

「遮蔽物も無い、こんな広い屋上で、私に正攻法で勝てるでも思ったのか？」

「……君の言う通りだ、此処には遮るものは何もない」

ウタハは雷ちゃんを起き上がらせながら、ぼつりと呟く。見渡す限りの平面は確かに正面戦闘を強いる地形だ。此処が室内だったらウタハは成す術なくカリンに倒されていただろう。

だが、この地形は屋上。遮る物が無いという事は——別の箇所からもまる見えだという事だ。

「そう、天井すらもね」

「……ッ!？」

ウタハの勝ち誇ったような言葉に悪寒が走ったカリンは急いでその場を飛び退くが……僅かに遅かった。彼女が先ほどまで立っていた場所が爆音と共に吹き飛び、挟られた地面が破片を飛び散らせる。立ち込める煙に咳込みながら、威力と弾道からその獲物を推定。

「まさか、曲射砲!?! 一体どこからッ!?!」

「うちのヒビキがミレニアムタワーの反対側から、ね……君がヒビキを狙撃するためには幾つもの壁や天井を貫通させなきゃいけない。

或いは、同じように曲射するか。さて、私を目の前にしながら、君にそのどちらかが出来るかな？」

「くッ……！」

状況は遷移した。先ほどまで圧倒的にウタハが不利であったのに今では拮抗か、僅かに有利を取っている。

「ふふ、もう一度言ってみようか？」

ウタハはその顔を勝ち誇ったものへと変えて。

「——計算通りだ」



「……狙撃が止んだ」

「ウタハ先輩とヒビキちゃんだ！ 2人がカリン先輩を食い止めている間に先を急ごう！」

狙撃される危険性が無くなったとはいえ、此処は依然相手のホームグラウンド。油断なんて一切できない。それに、作戦開始前に2人は言っていたのだ。「いつまで止めれるか分からない」と。そんな2人が稼いでくれた貴重な時間を無駄にするなんてとんでもない。

故に、安全な今、一歩でも前へ進もうとしたのだが——轟音が響き渡った。

「えええッ!? なになにに、地震?！」

「違う!、これは爆発!、ということとは、まさか……!?!」

振り返るミドリ。それに呼応するように爆発音が再び鳴り響いた。



ミレニアムの校舎の中、モモイとミドリが居る場所から数階層下の場所で戦闘が起きていた。

スカートの内側から多種多様の爆弾を転がし、この場一帯をイニシアチブを握っているのはコールサインゼロスリー03、室笠アカネ。家庭、外学園内のお掃除が得意な彼女は優雅に微笑んだ。

「くうつ……講義はまだ、終わって……!」

「ひーッ、死ぬかと思った! 一体どこにそんな大量の爆弾を隠してたのさ……!」

息も絶え絶えで文句を言うのはコトリとマキ。彼女達は服のあちこちが焦げていて、顔にも煤やらなにやらで汚れている。対するアカネは全くの無傷。メイド服には汚れはおろか皺すら見当たらない。

「ふう、あまり学校の施設を壊したくないのですが……ユウカ、申し訳ないですがシャッターは無理矢理破壊しました。ゲーム開発部の現在の位置は?」

『さっきまでカリンが足止めしてたけど、逃げられたわ。けど、目的地は分かる』

『鏡』がある差押品保管所の方ですね。では、直ぐにエレベーターでそちらの方へ向かいます」

そう言って、通信を切ろうとした刹那——このフロアの全ての明かりが消えた。

「ッ!? ユウカ、聞こえていますか? ユウカ?」

呼びかけるが、返答は終ぞ返ってこなかった。

「まさか、電力と電波を遮断して……!?!」

その回答に思い至ったアカネは初めてその表情を焦りが籠ったものへと変える。

「くツ……ここまでするとは……!」



廊下を走り抜けた先、窓すらない閉鎖的な空間に足を踏み入れる事ができた2人は大きく息を吐いた。額の汗を乱暴に袖で拭って、荒れた息を整える。

「さっきの停電、ウタハ先輩とヒビキの策が成功したって事だよな?」

「うん、そのはず……確か、このポイントを抜ければ……」

「もう直ぐ生徒会の差押品保管所のはず。漸くこれで……!」

見え始めた旅の終点。鳴り響く心臓の鼓動。それは走ったからな

のか、それとも緊張か。それは分からないけれど、兎に角『早く』という気持ちだけがあった。

だから、気が付かなかった。

「お、やっと来たねー!」

「え!?!」

「ッ!?!」

C & Cのエージェントに。

「遅かったねー、だいぶ待ってたよ。ようこそ、ゲーム開発部の子達!」

そう言つて、無邪気に笑う彼女はコールサイン^{ゼロワン}01……一之瀬アスナ。ネルに次ぐトップクラスの戦闘能力を持つ彼女がゲーム開発部の壁として立ちはだかつていた。

「あ、アスナ先輩!?! どうしてここに!?!」

「どうしてって言われても……何となく? 予感とか直感とか、そういうのってあるでしょ? 此処で待ってたら、あなた達に会えるんじゃないかなーって。そんな予感がしてたから!」

——作戦前、先生が言っていたことを思い出す。アスナは完全なイレギュラー、直感と予感が尋常じゃないほど優れているから、足止めは行っただけ無駄だと。彼女は確実に、そういった包囲網をすり抜けて本命を狙いに行くだろう、と。

分かっていたつもりであったが……こうして目の当たりにすると、信じがたいものがある。

「先生にも会えるかなーって思ってたけど、居ないし……遅れて来るのかな? 別動隊みたいな感じで!」

しかも、此方側の策まで言い当てられた。彼女の言う通り先生は別ルートを通つて来る。カリンを食い止められなかった場合に備えてのリスク分散であったが……それが仇となった。合流するまで待てばよかつたと思うが、後の祭りだ。

「さ、じゃあ始めよっか?」

アスナはFA—MASを構えた。

▼ 「差し押さえ品のロボットを全部出して！」

セミナー室にて矢継ぎ早に指示を飛ばすユウカ。その表情は芳しくない。何せ、今のところ対応が後手に回っているのだ。引つ掻き回されてばかりで指揮系統も混乱している。一部の区画は停電したりジャミングが起きていて、これでは連携なんて望めない。加えてシャツターが下りている部分もあり、部隊の合流すらできない始末。

彼女達が幾ら集まろうと正面戦闘でC&Cに勝つことは困難極まるため、策を弄するのは分かっていた。だが、その策ごと踏み潰す算段であったのだ。最強のエージェント集団たるC&Cは、たとえ相手が有利な状況であろうと負ける訳がない……と。その慢心に付け込まれて、一枚上を行かれた。

「本当なら塗装し直して、学校の掃除用ロボットとして使おうと思つてたけど……背に腹は代えられない。今は侵入者達を撃退するのが先！」

監視カメラに映る映像、その全ては差し替えられている。センサーも全て掌握されていて、何の情報も正しいのか分かったものではない。ヴェリタスを相手にするとはそういう事だ。情報戦のアドバンテージは相手側にある。

「メイド部の命令を聞くように全機プログラムを変更したわ、アカネッ！」

「承知しました。ではこの子達を連れ、改めてゲーム開発部をお掃除しに行きます」



差押品保管所へ続く広い廊下。普段ならば静寂に包まれる場であるが、今は異なる。断続的な発砲音が鳴り響き、銃弾が壁と床を抉る。

そう、此処は——戦場だ。

「うああッ！」

体勢を崩したモモイに襲い来る5. 56 mm NATO弾。吐き出される暴力の塊を前に彼女は何とか回避しようとするが、その回避先を読んだかのように銃口が向けられる。トリガーが引かれるまで、あと0. 1秒。

「お姉ちゃんッ！」

モモイを助けるように放たれた弾丸は一直線に敵へ向かうが、当たる事は無い。一旦射撃を止めたアスナはまるで舞う様に避けたのだ。尋常ではない身のこなし。戦闘開始から暫く経つが、未だに有効打はおろか弾丸一発すら当てられていない。

「で、でたために強い……！　これが、C&Cのナンバーツー……！」
対する2人は満身創痍だった。致命打こそ貰っていないが弾丸は大量に受けており、万全とは言い難い。集中心も切れてきて、背中に冷や汗が流れる。浅い呼吸を繰り返し、眼前に立ちはだかる高い壁を見つめた。

そして、2人の表情は苦虫を噛み潰したようなものへと変わる。どう考えても勝てつこないのだ。肌で感じられる実力差。先生のサポートがあったとしても、それを覆す事は難しいだろう。

——何か、策は……いや、アスナ先輩相手に策なんて通じない。でも、正面からじゃ勝てない。私達の目的は差押品保管所で鏡を手に入れる事……いや、だとしても、アスナ先輩を無視する事なんてできない。

ミドリは思考を回すが、考えれば考えるほど八方塞がりな気がしてきた。お世辞にも強いとは言えない2人、相手はC&Cのナンバーツー。数では上回っているが、それ以外の全てで負けている。故に戦闘を続ければ続けるほど不利になる。

1回仕切り直すか、或いはサブプランに移行するか。ミドリはそれを決められないでいた。

「ふーん……」

その脳内作戦会議を、何をせず眺めているアスナ。彼女は2人に対する評価を大幅に上方修正していた。

——思ってたより全然悪くない。お世辞にも戦闘能力が凄

とは言えないけど……チームワーク、って言って良いのかな。まるで2人で1人みたいな動き。その点において間違いなくベテラン級の……。

「双子のパワーってやつかな。良いじゃん良いじゃん！」

自身が攻めあぐねるといふ初めての感覚。それがなんだか楽しかった。故に、思考は切り替わる。任務の達成から一歩踏み込んだ場所……即ち、2人の防御をどうやって切り崩すか。

あの方法が良いかな、それともこの方法？ どれも楽しそうだから、全部試しちゃおう——心の底からこの遊戯を楽しんでる事が分かる彼女の表情に、モモイとミドリは背筋が冷たくなった。

「くう、分かってはいたけど、こんな所でアスナ先輩に出くわすなんて……」

「……お姉ちゃん、一旦退こう！ 私達じゃアスナ先輩に勝てない！」

「うん、仕方ない……！」

選ばれたのは一時撤退。生粋のバトルジャンキーの彼女を真っ向から相手になんてできないと考えたのだろう。

だが——。

「そうはさせないよッ！」

アスナの言葉に呼応するように壁の一部が吹き飛んで風穴が空いた。舞い上がった粉塵に咳込みながら、破壊痕からその獲物を推定。間違いない、これは対物ライフルの弾丸だ。そして、対物ライフルを使う人物なんて1人しか思いつかない。

「これ、カリン先輩の……っていうことはまさか、ウタハ先輩……ッ！」



「……どうして私は横になって……それに、この大きなお尻は一体誰の……？」

「……大きくて悪かったな」

声は思ったより近くから聞こえた。ウタハは痛む頭を上に向ける

と、^{ニールン}膝立ちのまま動かないカリンが居た。

「結構キツイ所に当たったはずだけど……思ったより早いお目覚めだ」

そして、彼女は視線をスコープから離さないまま「ごめん」と小さく呟いた。

「手加減する余裕は無かった」

「まさかヒビキの攻撃を受けながら、正確に私を撃ち抜けるなんてね。それに、君がこうして私のすぐ傍に居るのは……」

「そう。この状態なら、先輩想いの彼女は撃つてこないだろう」

在り来たりな表現をするならば、ウタハはヒビキに対する人質であった。こうやって固まっていると彼女と迂闊に撃てなくなる。曲射砲はスナイパーライフルのような点の攻撃ではなく面の攻撃、ウタハを避けてカリンを狙う事は兵器の性質上不可能だ。2人の距離が1mも離れていないならば猶更。

そして、もし仮にウタハを巻き込むことを承知で撃ってきたとしても、カリンとしてはそれでも良い。体のスペックは彼女の方が上のため、曲射砲の無差別で先にダウンするのはウタハだ。この広い屋上で1人になった後は、先ほど言われたようにビルの外壁を撃ち抜くなり曲射するなりでヒビキを仕留めてしまえばゲームセット。あとは流れるようにゲーム開発部を撃ち抜いて、この騒動は幕を下ろすのみだ。

「……はあ、これは計算外だった。あの砲煙の中で、どうして私の事を正確に狙えたんだい？」

「視覚でしか敵を捕捉できないような狙撃手ではC&Cは務まらない」

2人の敗因は幾つかあるが、その中で最も大きいものはカリンを甘く見過ぎたことだろう。カリンの敵を捕らえるセンサーは視覚だけでない。聴覚も、触覚も、直感も、あらゆる全てが彼女のセンサーだ。其処を見誤っていなければ、今よりは多少マシンな状況になったかもしれない。

「先生に作戦内容を見てもらうべきだったのかもね……」

「それより、あまり離れないでほしい。余計な事をしてても体を痛めるだけだ。私も心が痛む」

「……ほんの少して良いから離れてもらえるかい？　この状態だと君のお尻が近すぎて、ちよつと困る」

「そつちが背を向ければいいだろう!？」



ハレからの通信。それはウタハの無力化により、カリンを抑える事が出来なくなった……という内容だ。

ヒビキはカリンへの砲撃を止めてゲーム開発部の援護を試みているようだが、位置がバレたのか彼女の下へロボットが向かっている。それへの対処もしなければならぬため、今すぐに……とはいかないようだ。

次いで、マキからの通信。隔壁封鎖により閉じ込めたアカネが、シャツターを爆発させて無理矢理脱出した。そして、今は大量のロボットを引き攣れて差押品保管所……つまり、モモイとミドリが居る場所まで向かっているようだ。

そして、この場には既にアスナが居てカリンの射程範囲。そこにアカネまで加わるとC&Cの3名が揃う事になる。集団戦では勝ち目がないから、と各個撃破を前提にして作戦を立てたのに、それが崩壊してしまった。

——不味い。

ミドリは焦燥感を滲ませながら、奥歯を鳴らした。

「あははっ、何が何だか分からないけど……私達が優勢って感じ？　もしかして、もうそつちの計画は失敗寸前かな!？」

「……違う」

ミドリは焦りも、不安も全てを薙ぎ払って、叫ぶ。

「まだ、失敗なんかじゃない……!？」



作戦決行15分前、ヴェリタスの部室でモモイは絶賛頭を抱えていた。

「うう、どうやっても結局ここで詰まっちゃう……」

扉を破壊し、注意を引き付けるところまでは成功する。そして、アカネとシャッターで閉じ込め、カリンをエンジニア部の2人に足止めしてもらおう。アスナは相対した誰かが頑張り、なんとか退ければ……差押品保管所まで侵入すること自体は可能だ。

だが、これは全て綱渡り。どれか1つでも失敗した瞬間、この作戦は瓦解する。最低でもメイド部を孤立させ、身構えさせない事が条件だ。最大の不確定要素こそアスナであるが、他の2人も想定通りに動いてくれるとは思わない。

「もしヒマリ先輩の名前を出して混乱させたとしても多少時間を稼げるだけで、最終的にはそのまま包囲されるはず。侵入から2分以内にアカネ先輩を封じる。5分以内にカリン先輩を阻止、11分後にロボットを突破、13分後に鏡を確保。そして、この間のどこかでアスナ先輩を退ける。その後……」

「……どう頑張っても、20分後には全員捕まっちゃう」

ユズの発言通り、20分が最大の作戦時間。この時間を超過しての作戦行動は不可能だ。そして、この20分の間にも次々とメンバーは減っていくだろう。一番危険なのはアカネと共に閉じ込めるメンバーと、カリンを抑えるまで彼女の狙撃を掻い潜る必要があるモモイとミドリ。誰が、どんな順番で、誰に落とされるか。それも加味して作戦を考えなければならぬ。

全員が揃っての大団円……それは最初から不可能であった。

だから。

「全員じゃなければ、良いんじゃない?」

「え?」

「例え私達の内の何人かが負けたとしても、最後には勝つ方法……」

そう……あくまで目的は鏡の奪取。C&Cの撃破でも、全員揃っての成功ではない。最低、このメンバーの中の誰か一人が作戦終了まで

に鏡を持っていれば、それで勝利なのだ。

「もし、そのタイミングで……」

「み、ミドリ？ 何言ってるの？」

「計画通りに行かなかった場合の事も、計画しておかないと……です
よね、先生？」

「そうだね。無駄を削ぎ、確率を高め、完璧かつ確実に……なんて言っても、現実はそのなにより上手いかな。だから、成功しようが失敗しようが、結果がどちらに転んでも、それはそれで美味しいように仕込んでおくのがポイントなんだ」

そう言っ先生は立ち上がり、ミドリの方まで歩いて行って。

「一緒に考えようか、この状況を切り開く一手を」



セミナーが保有する反省室。少々高級な、過ごしやすい独房にアリスは一人座り込んでいた。彼女はモモイとミドリへの注意を逸らすためのデコイ役として一足先に暴れており、その役目を全うしてからこうして捕らえられた。

様々なセキュリティで固められた電子の檻。手枷足枷、床は全てセンサー。監視カメラも複数台ついていて、檻を開ける扉は生体認証とパスワードの二重ロックが掛かっている。外はオートマタが巡回していて、とても脱走なんてできそうもない。

しかし、それでも——アリスの目は死んでいなかった。

その理由は、まだ仲間達が頑張っているから。

まだ、負けじゃないから。

まだ……勇者には役割があるから。

「……あつ」

そして、その時は訪れる。牢に灯っていた明かりが全て消えた。勿論明かりだけではなく、その他全て電子機器の電源も落ちた。予備の電力に切り替わるまでの30秒間、この場は無防備になる。

「電力遮断、このイベントが起きたという事は……EMP発動、ハツキ

ングを使った設定の変更、タワーの権限の掌握を確認……把握しました」

強固なロックが掛かっていた電子扉はすんなりと空いた。彼女は時が止まったままのオートマタ達をすり抜けて、己の武器たる光の剣を持ち、スマホを見る。画面に映るのはマップとそこに引かれたライン。ヴェリタスが用意した、差押品保管所に至るまでの道。そして、その道中から少し外れた場所にある……一つの光点。

「アリス、脱出します。ここからのアリスのクエストは……まず、セミナーの差押品保管所に向かう事。ですが……」

眩き、僅かに迷いを見せるアリス。だが、それも一瞬で己のやるべき事……否、やりたい事を選び取った。

そして、彼女は駆け出す。誰もが諦めた大団円——それを、実現させるために。

勇者の条件

「私達が派手に動けば動くほど、一度閉じ込めたアリスへの警戒は薄くなるはず……」

そう、この作戦は段階により陽動と本命が切り替わるものだったのだ。最初はアリスが陽動で、2人が本命。だが、今は——アリスこそが本命だ。彼女は今頃、誰もいないお膳立てされた道を走り、差押品保管所に向かっていている事だろう。

となると、この現状の意味ががらりと変わる。陽動の2人がC&Cの全員を釘付けにして、ロボットまで動員させたのだ。戦果としては限りなく最上に近い。

今のモモイとミドリの役割はアリスが鏡を奪取するまでの時間稼ぎだ。この場にいるメンバー全員、作戦完了まで他に目を向けさせない。釘付けにするのだ。

そのための布石も既に完了していた。今、此処には先生が向かっている。類稀なる指揮能力を持つ彼がこの場に居れば、流石にC&Cも無視する事は出来ないだろう。仮に2人と先生を無視してアリスを追いに行っても、ヴェリタスが封鎖した隔壁を複数枚突破する必要がある。それに掛かる時間とアリスが鏡を手に入れるまでの時間を天秤にかけて場合、後者の方が圧倒的に速い。

「それに、もしこのタイミングで私達が捕まったとしても、謹慎くらいだったら部室でこっそりG・Bibleを見ながら『テイルズ・サガ・クロニクル2』を作る」

「うーん、何の相談かなー？ ちよつとずつ必死さが無くなっている気がするけど……まさか、諦めた訳じゃないよね？」

「——この状況なら、諦めた方が賢明だと思いますがね」

冷静な声の主は、アスナでも2人でもない第三者。ゲーム開発部の彼女達が嫌と言うほど見た、セミナー会計の彼女。

「うッ……ユウカ！」

「久しぶりね。取り敢えず、ここまで状況を引つ掻き回した事については褒めてあげる。ここまで手を焼くなんて、本当に驚いたわ」

そして、ユウカは「でも……」と言い、その顔を怒りと呆れで歪めた。

「それはそれ、これはこれ。こんなありとあらゆる方法を使ってセミナーを襲撃するなんてやり過ぎよ。猶予を与えた事といい、ちよつと甘過ぎたのかしら」

ユウカは銃のセーフティを外し、2人に銃口を向ける。2丁のSIG MPX、ロジック&リーズン。

「もう悪戯じや済まされないわよ。無条件の1週間停学か、拘禁くらいは覚悟しなさい」

「停学!? 拘禁!?!」

「そんな……1週間だと……ミレニウムプライスが終わっちゃう!」

「アリスちゃんも、今は反省部屋に入って貰ってるわ。1人だけで可哀想だったけど、あなた達が来ればきつと喜ぶでしょう」

「うう……!」

想定していたよりもずっと重い罰に2人は再び焦りを覚える。だが、ユウカから見ればこれでも軽くしたつもりであった。1週間と言わず、1ヶ月くらいに伸ばしても当事者以外誰も文句を言わないような事を彼女達は起こしている。

それなのに罰を軽くしたのは、こんな事をさせるまで追いつめてしまった負い目もあるのだろう。人情家のユウカらしい理由だった。

「捕まっても大丈夫だと思っただけ……このままじゃ例え鏡を奪えたとしても、期限内にゲームは作れない……どうにかして、突破しないと!」

「突破? へえ、私達を?」

「……ふう、やっと着きました……こんなに息が切れるなんてまさか本当に体重が……いえ、そんなはずは……」

ユウカの声に呼応するように現れたのは、彼女を閉じ込めるために配置したシャッター全てを爆破解体したアカネ。だが、爛然なメイド服には煙や煤はおろか、火薬の匂いすらない。そして、その後ろには大量のロボット達が2人に銃口を向けている。

アカネの合流——それは、セミナー側の戦力の大部分がこの場

に集結した事を示す。当初の予定なら手を挙げて喜んだ状況であるが、罰の内容を聞かされた今は少々拙い。少女達の心を諦観の2文字が侵食し始めた。

「ふふっ、今度こそ本物みたいですね……改めて初めまして。モモイちゃん、ミドリちゃん。マキちゃんとコトリちゃんについてはギリギリ許せる範囲かもしれませんが……ここまで入り込んで来てしまったあなた達に、もう言い訳の余地はありませんよ」

アカネはそう言つて嫺やかに微笑む。だが、その奥には獯猛な攻撃性が隠れていて、どう考えても碌な未来が待つていない事が見て取れる。拘禁や停学の前に病院送りになりそうだった。

そして——ユウカはモモイとミドリの奥、ゆったりとした歩みで向かって来る人影を見つけた。連邦生徒会を示す白の制服、闇夜に映える白のコートと、シャーレの腕章。

「先生……こんな形でお会いしたくはなかったですよ」

「……ごめんね、ユウカ」

モモイとミドリを庇う様に立ったのは、今まで個人行動で己のやるべき事を果たし続けた先生だった。ユウカと対峙する顔には申し訳なきが色濃く滲んでいて、心なしか声音も暗い。あまり戦いたくない、という心情が見て取れる。

そして、彼はアカネの方を見ると……視線が合った。

「初めまして、アカネ。私はシャーレの先生だよ。よろしくね」

「はい、初めまして、先生。いえ、ご主人様と呼んだ方がよろしいでしょう。室笠アカネです。よろしくお願いたしますね」

2人は対峙する立場であるが、その初対面の挨拶はとても穏やかで気品に溢れていた。互いが互いに尊重している事が分かる。だが、それはそれ。アカネは例え先生であろうと容赦する事はない。今の彼女のご主人様は彼ではなくミレニアムなのだから。

故に従うのはユウカの命令。アカネは彼女に視線を送ると、その顔を随分と愛らしい膨れっ面にして。

「シャーレに抗議文くらいは送らせていただきますので、ご承知おきくださいね」

「それについては弁明はしないよ。君達の断罪は甘んじて受け入れるさ。ああ、でも、モモイ達の罪はできるだけ軽くしてあげてほしいな。こんな事を私が嘯く権利はないと思うけど、それでも……彼女達は彼女達なりに、大事なものを守ろうとしたんだから」

彼の言葉。自分が全ての罪を被る代わりに、ゲーム開発部を始めとする少女達の罪を軽くしてあげてほしいという嘆願。そして、その罰も。彼がこの場の全てを背負うつもりであった。まるで、それが責任であると言わんばかりに。

その願いにユウカはたつぷり10秒考えてから……大きな溜息を吐いた。

「……先生に免じて、その事情は考慮しましょう。ですが、容赦はしませんよ」

「充分さ。私の戯言に耳を傾けてくれてありがとう。今度、必ず埋め合わせはするよ」

心底嬉しそうに笑った彼は、そのままユウカに背を向けて……諦めかけている2人の少女と視線を合わせた。

「ごめん、ごめんね先生……色々助けてくれたのに、私達の力不足で……私達のせい……」

「まだ諦めるのは早いよ。それに、こんな所で立ち止まりたくはないだろう?」

「だけど……もう、無理だよ……」

現実問題、ここから勝利を掴むのはかなり厳しい。こちら側の戦力はモモイとミドロの2人と、指揮の先生。対するはセミナーの会計とC&Cが3名。流石の先生もこの戦力差を覆すのはしんどかった。

だが、それでも——ここで手を伸ばすのを辞めてしまうのは違うだろう。何せ、彼女達にはまだ可能性があるのだから。

「たとえ無理でも、最後まで頑張ってみようよ。大丈夫、私がついてる。それに……」

先生は少しだけ遠くを見て。

「彼女はまだ、諦めてないみたいだよ」

「——光よッ!」

夜を切り裂くような光が先生の真横を通り過ぎる。諦めかけた2人に希望を与える、見慣れた極光。

その光の矛先はロボットを薙ぎ払いながら進み……そしてアスナまで辿り着く。予想外の長距離攻撃を無防備のまま貫つてしまった彼女は大きく吹き飛び……その背を思いつきり床に打ちつけた。

「あ、アスナ先輩!? 大丈夫ですか!?!」

「大丈夫じゃないよー! あははっ、思いつきり当たっちゃった!

何これめっちゃ痛い、頭のとっぺんからつま先まで今1ミリも動かしたくない!」

「……大丈夫そうですね」

「アスナ先輩と半数近くのロボットを纏めて行動不能に……!」

たった一射で、この場の最高戦力たるアスナとオートマタの半数が撃破された。天秤が一気に傾く大番狂わせ。これで勝負はどうなるか分からなくなった。

まさか、相手にこんな隠し球が——ユウカは僅かに奥歯を鳴らした。

だが、ユウカよりも動揺しているのはアカネだった。身近で見ている分、アスナの無法な強さはよく知っている。そんな彼女が一撃で倒されたともなればその内心は穏やかでいられない。

そして彼女は、その焦りのまま通信を繋ぐ。C&Cには優秀な眼を持つ狙撃手^{カリン}がいる。故に、この類の奇襲は事前に彼女が察知してくれていて、早期にその旨の連絡が来ているはずだ。別働隊がいる、気をつける——と。だが、今回はそれが無かった。何故か? 決まっている。そんな事をしてられない状況に彼女が陥ったのだ。

「カリン、状況を報告してください! 今のビーム砲はどこから……!?!」

アカネはその冷静な声音と表情を崩して通信機に叫ぶ。いつからかは不明であるが、気がついたら支援射撃が止んでいたのだ。無性に嫌な予感がして呼びかけているが、その不安を裏付けるように彼女の声は返ってこなかった。

「カリン、カリン!? 返事をしてください!」

無恩を貫く通信機に向かつて叫びながら、彼女はカリンがポジションを取っている屋上を見上げると……そのタイミングで、夜空に光が咲いた。



「くっ……閃光手榴弾……ッ！」

100万カンデラを超える光と150デシベルを超える音を撒き散らす非致死性の兵器を至近距離で受けてしまったカリンは視覚と聴覚の両方を潰されていた。

「私の後輩は、大事な先輩に爆撃を当てたりしない優しい後輩で合っているとも。だが、それでいて、とても賢い。この状況を予測し、的確な選択ができるくらいにはね」

「これじゃ、アカネへの支援が……どうしてここまで……！」

この短時間で聴覚が回復しつつある事に驚愕しながらも、ウタハは極めて冷静に、当たり前前の事を説くように答える。

「部活を守りたいからに決まっているだろう？」

「……あのゲーム開発は、ちゃんとした部活動とは言い難い。あんな自己中な問題児達をなぜ助ける？」

「ただの自己中じゃないから、かな。あの子達は友人のために、一生懸命頑張っている。だから、様々な人が手を貸すんだよ」

私達みたいだね、とウタハは付け加える。

唯の自己中な問題児ならば協力なんてしなかった。

最高傑作とも言える武器を渡したりしなかった。

彼女達が友人想いの良い子達だと知っているから——ウタハはあの剣を渡し、こうして協力している。

「……別に、部活動じゃなくてもゲームは作れるだろう」

「それは君の言う通りだ」

カリンの真つ当な疑問に肯定しつつも、「でもね」と付け加えて。

「勿論、唯の友達でも大きな意味はある。気の合う友人同士で作ったゲームにも素晴らしい何かは宿るだろう。それでも……同じ部活の

仲間というのは、お互いを強く結び付けてくれるものだ」

ウタハが信じるのは縁の形。彼女達が何より欲したのは――
同じ部活という繋がりの中、切磋琢磨できる仲間達。

「あの子達も、あの部活で一緒にやりたいんだという気持ちがあるから、こんなにも必死に頑張っているんだろう」

「っ、でも……！」

カリンが何かを言うよりも先んじて、次弾が降り注いだ。爆発的な光と音。目を閉じたり、耳を塞いだりしても防げない五感を奪う攻撃が彼女の行動を再び封じ込める。

再び動き始めた状況を感じて、ウタハは唇を少しだけ歪めて。

「計算通り、ではないけれど……面白くなってきたね」



「モモイ、ミドリ、先生！」

「アリスちゃん!？」

「どうしてここに!？」

煙を吐く巨大なレールガンを担ぎながら現れたのは、差押品保管所へ向かったはずのアリスだった。本来であれば彼女が鏡を奪取するはずであったのだが……その予定は崩壊した。

その理由は、たったひとつ。

「どんなゲームの中でも、主人公達は――決して、仲間の事を諦めたりしませんでした。なので、アリスもそうします」

アリスは光の剣を構える。

大切な仲間達を諦めないために。貰った勇者の証、それに相応しい存在になるために。

「試練は、共に突破しなくては！」

その真っ直ぐな、高潔さを感じさせる決意。それを聞いて、諦めかけていた2人の瞳に再び強さが宿った。

「……うん、どうせこのまま捕まったら全部終わり。だったら……！」
リロードを済ませ、眼前に聳える巨大な壁を見つめる。もうその高

さに絶望する事はしない。必ず乗り換えるのみだ。

「行こう、ゲーム開発部！ 前進ッ！」



戦場となったあの場からの退却及び差押品保管所への突入を目的とするゲーム開発部と、それを阻止したいセミナーとC&C。両陣営の戦闘は苛烈を極めた。

モモイとミドリが阿吽の呼吸で攪乱し、その後ろからアリスがレールガンで狙い撃ちにする。だが、相手はユウカとC&C。大味な戦略が通用するほど甘い存在ではない。シールドの瞬間的、局所的な展開により最低限のダメージと消耗で凌いだユウカは姿勢を低くして疾走、前衛の2人を無視してアリスの方へ突貫する。

当然、モモイとミドリとて素通りさせる訳がない。彼女達はユウカを止めようと銃口を向けるが、そこはアカネがきちんと見ている。射撃と爆撃での確に足を止めて、彼女の邪魔をさせないように手を尽くす。

そして、対峙するユウカとアリス。アリスの武器はクロスレンジ、ミドルレンジの交戦には向かないため、彼我の距離が5mもない戦闘では順当にユウカが勝つだろう。しかし、アリスの背後には先生がいる。そこが勝利の分かれ目だった。

アリスは敢えて更にユウカとの距離を縮める。手を伸ばせば触れられる距離。そのレンジで一番早いのは銃撃ではなく単純な物理攻撃だ。光の剣スパーノヴァの140kg以上という莫大な質量を活かした原始的な暴力は、反応が僅かに遅れた彼女のシールドを粉碎し、吹き飛ばした。

そこで状況が傾き、今まで無傷を貫いてきたアカネにも漸く有効打を与える事が出来た。大丈夫、行ける———そう思った彼女達は決して臆することなく戦場へ飛び込み、再び銃撃を開始する。互いに一歩も退かぬ熾烈な攻防の軍配は、諦めを薙ぎ払ったゲーム開発部に上がった。

相手側の陣形に風穴を開けた彼女達は果敢に進み、セミナーとC&Cを突破。最後の仕上げで先生が隔壁を下ろして足止めを行う。

そして、暫く全力疾走した後——漸く目的地たる差押品保管所のドアを潜る事が出来た。転がり込む様に入室した少女達は勢いよくドアを閉めて、大きく息を吐いて壁に凭れる。

「はあ、はあ……ふ、う……に、逃げ切れた……？」

息も荒く、汗に塗れて、服も汚れて、髪もぼさぼさ。だが、モモイの問いに力強く頷く少女達は達成感に満ちた美しい顔をしていた。彼女達はあの絶望的な状況を切り抜け、そして大きく一步進んだのだ。健闘、という言葉では言い表せないほどの大立ち回り。今だっただら何でもできそうだ。

30秒ほど休息し、呼吸を整えた少女達は立ち上がり室内を見渡す。差押品保管所、彼女達の目的地。倉庫の様な風貌を予想していた彼女達であったが、その実態は少々異なっていた。窓は割れ、柵は倒れ、床も壁もあちこちが破壊痕に彩られている。カリンの跳弾か、或いは戦闘の余波か。

「ユウカは、もうきつきの時点でアリスが『鏡』を持っていると思います。んでいるだろうから……きつと、部室の方に逃げたと考えてるはず。まさか、私達が此処に来てるとは思わないだろうね……よし、各々手分けして『鏡』を探そう！」

モモイがそう宣言するや否や、ミドリとアリスは散開し惨憺たる状態の部屋の物色を開始する。だが、もとはセミナーが管理する部屋、整理整頓は行き届いているため、ほどなくして見つける事が出来た。登録No.、回収日、回収場所……間違いのない、このUSBメモリに追い求めた鏡が入っている。

それを確認した少女達はそのままとっさり部屋を後にしようとするが——ふと、アリスが立ち止まった。

「……アリス？」

「静かに、ミュートをお願いします」

アリスの鋭敏な五感が何かを捉えた。彼女は視覚を切り、耳を澄ませて、肌を研ぎ澄ませて……あらゆる感覚を起動させる。

「……誰かが此方に向かって来ています。足音から考えて、数は1人」
「うーん、このまま此処に居て、ユウカとかメイド部とかが纏めて戻ってきたら困るし、1人くらいなら皆で無理矢理突破しちゃおっか」

モモイの案は決して悪くなかった。この閉所でユウカとメイド部を相手にするのは悪手であるため、1人なら無理やりにも突破した方が安全だ。何より数で勝っているため、多少の実力差ならば戦力差で埋める事が出来る。

だが、それは——戦力差が多少の範囲で済ませる事が出来たらの話だ。

「——ちよつと待って、ハレ先輩から連絡が来てる」

言い、モモイはメッセージ画面を皆に見えるように差し出す。書かれていた文面は『逃げて、いや隠れて！ 早く！ 何としてもそこ\$！ # ^ & ! @ #』——という、なんとも奇怪な文字だった。後半部分は文字化けしているが大体の内容は把握できる。どうやら彼女は隠れてほしいようだ、何かから。逃げるではなく、隠れる。それはまるで、立ち向かう事そのものが間違いであると言わんばかりであった。

「ええ、一体どういう事……?」

「いつも冷静なハレ先輩がどうしたんだろ、ネズミでも出たのかな」

「接近対象を確認、ミレニアムの生徒名簿を検索……対象把握」

そして、アリスは一步踏み込む。ハレが隠れると言った理由に。無邪気なまま。

「身長146cm、ダブルSMG、メイド服の上から龍柄のスカジャン……」

「——え?」

「ま、まさか……!」

低い身長。

ダブルSMGという圧倒的な制圧力と火力。

ミレニアムの暴力装置たるC&Cの象徴、メイド服。

そして、その上から羽織るのは龍があしらわれたスカジャン。

ここまで言われれば分からない訳がなかった。間違いない、今この

場に向かっているのは――。
「隠れてッ！」



重厚な扉が吹き飛ぶ破滅的な音が鳴り響いた。先生が仕掛けた電子ロックも物理ロックも一切合切無視して、極めて合理的に扉を蹴破ったのは小柄な少女。

メイド服にぶら下げられた2丁のSMGと、それに取りつけられた鎖。両手をスカジャンのポケットに入れた彼女は扉をぶち抜いた足を下ろし……鋭い目つきで室内を見渡した。

「ふうん、もう滅茶苦茶だな」

眩き、もう一度室内を見る彼女。壁には彼女が蹴り碎いた鉄製の重厚なドアが突き刺さっていて、その通り道となったであろう箇所は抉られたような轢殺の痕。通常の生徒がかなり頑張った末に起こせるであろう規模の破壊を、この少女は無造作な……ただ部屋に入るという目的の為に繰り出した蹴りで生み出したのだ。

その姿を見て、机の下に隠れているモモイとミドリは背筋が凍るような感覚を覚える。ミレニアムの中でも随一の知名度を持つ彼女を見間違える訳もない。彼女は間違いなくC&C最強のエージェント、ダブルオーコールサイン00の美甘ネルだ。

しかし、コタマの情報では彼女は本日不在だったはず。それなのにどうして此処にいるのだろうか。まさかC&Cのメンバーの誰かが、セミナーの誰かが彼女にSOSを出したのか、或いは別の理由があるのか。

詳しい事は分からない。だが、明確なのは見つかった瞬間に今までの苦勞が全て水の泡と化すことだけだった。

その恐怖が震えを生み、手が少し震えて……机のフレームに僅かに触れた。

「……ん？」

常人なら絶対に聞こえていない筈の音であるが、規格外のネルにそ

んな常識は通用しない。彼女の鋭敏な聴覚はその音を正しく捉えた。「何か、音が聞こえた気が……」

呟き、頭を掻いて音源の方へ足を進める。聞こえたのはデスク近辺。丁度ネルからは、入口からは見えなくなっている部分。確かに、侵入者が隠れるには適した場所だろう。

響く足の音はまるで死神の吐息か、或いは断頭台に吹き荒ぶ風の唸り。突き付けられる明確な死と敗北のイメージ。絶対に勝てない、戦ってはいけない類の存在。彼女達は言葉ではなく、もつと根源的な部分でそれを理解させられる。

アリスはこの時初めて、『恐怖』を覚えた。

「ふーん……確かに、気配がある。机の下か？ 数は3、いや4……？」

ネルは唇の両端を僅かに吊り上げ、その手にMPXツイン・ドラゴンを取った。セーフティは既に解除済み、マガジンにはたつぷりと弾が詰まっている。立ち姿に隙なんて見当たらない。例えば3人で掛かっても一方的に蹂躪される未来に変わりはないだろう。

一步、一步。ゆつくりと、しかし着実に近づくネルの足音。それに呼応するようにモモイとミドリミドリの心臓の鼓動は速くなり、背中に嫌な汗が流れる。お願い、どうか———と思っても、彼女のセンサーに一度捉えられてしまった以上、もう逃げる事はできない。

そうこうしている内に、隠れている机の目の前まで彼女は来ていた。先生が鏡面偽装プロトコルを走らせているおかげで、彼女達の姿は風景と同化しているが……それでも天板を挟んで30cmもない距離だ。目視で姿が確認できなくとも、気配で捉えた彼女ならば確実に捕捉できる。つまり、覗き込まれた瞬間に終わり。

拙い拙い拙い———そんな思考が頭を埋め尽くしていると、ふと足音が聞こえた。その音はスニーカーやヒール、ローファアの類ではなく、もう少し軽い……スリッパやサンダルが床を叩く音だ。少なくともC&Cやセミナー所属の生徒ではないだろう。

「あ、あのー！」

「あん？」

「ね、ネル先輩！ 大変です！」

その音の主は、万が一に備えてヴェリタスの部室……その隅に置かれていたロッカーに待機していたユズだった。きつとネルが怖いのだろう。足は震え、声は上擦っていて、真っ直ぐ顔は見られず視線は右往左往している。そもそも、外が怖い彼女が自らオープンな場に出る事は滅多にない。だが、それでも

——彼女は此処に来た。ゲーム開発部の大切な仲間達を助けるために。

「アンタは……う？」

「せ、セミナー所属のユズキです！ 今、戦闘ロボットが暴走していてあちこちが滅茶苦茶なんです！ アカネ先輩とカリン先輩、アスナ先輩が制圧を試みていますが……」

「なんだよ、暴走か？ アレを差し押さえたのなんか随分前だろうに、まだ整備が終わってねえのか……」

「状況的に助けが必要かと思……それで、ここにいらっしやると聞いたので……」

言葉の終端が弱々しく先細り、怯えるような瞳でネルを見る。下手な芝居だった事なんて自分でも分かる。不自然な箇所の方がきつと多いだろう。バレた瞬間に蜂の巣だ。ミレニアムプライス、なんて甘えたことが言えないレベルには叩き潰される。

怖い、怖い、怖い——でも、逃げない。仲間が、様々な人達がゲーム開発部の為に繋いでくれたバトンなのだ。ここで、立ち向かわないと。

そんな決死の覚悟が、願いが通じたのか——ネルは「はあ」と大きく息を吐いて。

「仕方ねえな。場所は何処だ？」

「あ、ありがとうございます！ 場所は2Fの……Bブロック全域だったはず……」

「結構広いが……まあ、アタシが気にする事じゃねえな。アンタはどうするんだ？」

「わ、私は此処の整理をします。そ、その……戦闘は怖くて……経験も

あまり無いですし……」

戦闘に参加しない旨を聞いたネルは踵を返し、風通しが良くなった部屋の出口まで歩いていき……そして、振り返った。

「アンタ、覚えておきな。戦闘で一番大事なのは、武器でも経験でもねえ。度胸だ」

それは、怖くても誰かの為に逃げなかったユズへ送る最大の賛辞。「その点で、アンタに素質が無いとは思わねえ。自分がどう思われているかくらい、アタシにも分かっている。アンタが結構ビビりな事も、まあ見てれば分かる。それなのに、初対面のアタシに声を掛けるのは、度胸がないとできない事だろうからな」

「は、はい！　ありがとうございます！」

「じゃあな、またどこかで会おうぜ」

そう言い残し、去っていくネル。遠くなる足音が完全に聞こえなくなったタイミングで——ユズは全身の力が抜けて、その場に倒れ込んだ。

「ふええ……」

「——つと。お疲れ様、ユズ」

それを支えたのは、いつの間にか机から出ていた先生。ユズは彼の穏やかな微笑みを見て安堵したのか更に力が抜けて、その体重の大半を彼に預ける形に。極度の緊張状態が急に緩んでしまったのが原因だろう。

「し、死んじやうかと思った……」

「ユズうううう——！」

「ユズちゃん凄い！　おかげで命拾いましたよ！」

「う、うん……力になれて良かった……」

大切な仲間の助けになれたこと。

振り絞った勇気を肯定してくれたこと。

そして、何より——臆病で、逃げてばかりで、怖がりだった自分が一人で進めたこと。

それが嬉しくて、ユズは花が咲いたような笑みを浮べた。

終わらない戦い

「——なるほどな」

眩き、ネルは背中を柱に預ける。そんな彼女の眼前には3名全員のエージェントが揃っていた。

部長たるネルが不在の間に受けたセミナーからの依頼。その報告と情報共有。全てを聞き終えた彼女は微妙な表情を浮かべて。

「ゲーム開発部、か。知らねえ部活だったが……そいつらにしてやられた、って事だな？」

「……申し訳ありません。この依頼を受託して、作戦を準備したのは私です。メイド部の名に、C&Cの戦果に傷をつけてしまいました。罰は何なりと」

「——んなことあどうでもいい」

首を垂れ、ネルから与えられる罰の全てを甘んじて受け入れるつもりだったアカネは肩透かしを食らった様に疑問の声を漏らす。C&Cの華々しい戦績と任務達成率に泥を塗る真似をしてしまった事を『どうでもいい』の一言で済ませられてしまえばこうもなるだろう。

アカネはコールサインの没収……つまり、C&Cからの除名処分すらも想定していたのだ。それだけ、彼女にとってC&Cは重いものだった。

「それに、あたしが此処に戻って来た時にリオから連絡が来た」

「会長から？」

「ああ。任務は撤回。無かった事に、だとよ」
「ッ!？」

その内容に全員が驚愕を覚える。セミナーの、ミレニアムのトップたるリオから直々に任務の撤回が来るなんてとても珍しい……否、記憶に在る限り初めての異常事態だった。そもそも、今回依頼したのはユウカで、受託したのはアカネだ。そこに会長が介入して事態を有耶無耶にするのは何か裏を感じてしまう。

元々、彼女は面と向かった殴り合いや撃ち合いは得意でなく、後ろから糸を引いて戦術を巡らせるのが得意な戦略家タイプだ。彼女の

今後の動向には気を付けなければならぬだろう——と、ネルは頭の片隅で考えながら。

「……それは、一体何故……?」

「アタシの知った事かよ……けど多分、リオもヒマリも確かめてみたかったんじゃないのか?」

「……ゲーム開発部の力量を、ですか?」

「惜しいな。アイツ等が確かめたかったのはアリスとかいう奴だ」

今回依頼の受けるに至った情報をセミナーに流したのはヒマリであり、彼女はセミナー、C&Cと敵対したヴェリタスの部長だ。そして、彼女はリオと繋がりを持っている。そんなリオはセミナーの長。

此処まで状況証拠が出揃えば自ずと答えが見えてくる。

アリスを何かを確かめたかったヒマリは同様の目的を持つリオと共謀。

G. Bibleを求めている事も同時期か、或いは事前に知っていた彼女は、それに掛かっているロックを解除するツールである鏡をセミナーに押収させた。押収自体はユウカがやったようだが、そこに至るまでのお膳立てはヒマリから情報を受け取ったリオがしたのだろう。

そして、鏡を求めるゲーム開発部は必然的にセミナーと敵対せざるを得なくなり、タイミングを見計らってヒマリがその情報を流す。このタイミングでリオは全てを御破算にし得るネルを遠ざけ、C&Cに欠員を生む。

あとはC&Cというリオとヒマリが知る物差しでアリスを測るだけ。

そして全てが終わった後、起きた事態を権力で揉み消せば完了。

大体のシナリオはこうだ。一部異なる点はあるだろうが、大筋は間違っていないだろう。

つまり、C&Cはリオとヒマリに良いように使われたのだ。

「ま、その辺りの事情は知ったこっちゃねえ」

ネルは預けていた背を柱から離し、スカジャンのポケットに両手を突っ込む。そのままスタスタと歩き……アカネ達を振り返る。その

彼女の唇の両端は、三日月の孤のように吊り上がっていた。

「アカネ、調べておいてくれ」

「はい？ 何をですか？」

「ゲーム開発部だ。関係者も纏めてな」

「いきなり何故……リベンジ、ですか？」

「その表現はなんか癪だが……まあ、ちと興味あってな。一通り情報が洗えたら、そいつ等ん所に行くぞ」

ネルの命令。彼女達がゲーム開発部に行く用事なんて、理由なんて一つしかないだろう。何時もの頼もしい、負けず嫌いの極地の様な彼女らしい指令に全員の顔色が明るくなった。

「はい、望む所です。今頃あの子達は、メイド部に一泡吹かせたと喜んでるはずです。ふふっ……次にお会いする時、どんな表情を見せてくれるのか……楽しみですね」

「うんうん！ リベンジマッチだね！ 私も準備しに行こー！」

「以前の戦闘では役目を果たせなかった。次は、失敗しない」

ゲーム開発部の少女達の知らぬ間に、C&Cフルメンバーとの再戦が決定した瞬間であった。



同刻、ゲーム開発部。何時もなら活気に溢れ、楽しそうな声が飛び交う場であるのだが……。

「……こんなに落ち込んだのは……『テイルズ・サガ・クロニクル』のプロトタイプをアップロードした時以来……」

まるでお葬式のような空気であった。その雰囲気唯一呑まれていない……否、状況を呑み込めていないのは、良くも悪くも純真無垢のアリスだけ。

「あ、あの……モモイ……？」

「ふふっ、ふへへへ。全部終わった！ おしまいだあー！」

モモイは良くない狂い方をしていた。心配そうに声を掛けたアリスの姿すら目に入っていない彼女は重度のダメージを受けてぶっ壊

れている。昔のテレビみたいに叩けば治るかも……とアリスは思うが、実行には移さなかった。

「み、ミドリ？ その……大丈夫、ですか？」

「アリスちゃん、ごめん……今は何も話したくない気分なの……」

ミドリも重いダメージを受けているが、モモイよりは幾分かマシだ。最低限アリスを気遣える余裕は残っていて、傷つけないように遠ざける事が出来た。それが出来ただけでも、ミドリは自分自身を一杯褒めてやりたかった。

「えっと、ユズ——」

「嚇怒、破滅、濫觴、糜爛、絶望、虚脱……世界は今、破滅へ向かって……遠くの星が地上を焼き払う……」

ユズはこの中で一番良くない壊れ方をしていった。精神ダメージが重すぎて、普段なら絶対に言わない事を口走り、この世の全てに絶望したような顔を浮べている。

「あ、あの！ えっと、私はあまり理解できていないのですが……もしかして、この状況は……」

アリスはそう言って、無造作に床に転がっているゲーム機を指差す。点灯したままの画面にゲームは映されておらず、黒い画面に白で彩られた無機質な文字列が浮かぶのみ。

「G・Bibleの所為、ですか？」

モモイの頑張ったゲームデータを犠牲にして手に入れたゲームの聖書ことG・Bible。C&Cとセミナーを敵に回しながらも奪取したヴェリタスの鏡を使用し、パスワードを無事解除できた彼女達は意気揚々フアイルを開き……そして、アリスを除くゲーム開発部の3人が撃沈した。

「——」

無言の視線がアリスの全身に突き刺さる。彼女も勿論G・Bibleに書かれている内容は読んだが、皆が撃沈した理由がいまいちわからなかったのだ。

「G・Bibleは、嘘は言ってないと思いますが……」

「そういう問題じゃないッ！」

モモイの渾身の大声にびっくりしたアリスは丁度隣にいた先生の腕にしがみつく。その仕草に、情緒に溢れた姿に彼も胸の奥が熱くなった。数日前の無機質な、機械的な動作は何処へやら。今はこんなにも人間味に溢れていて、暖かい。

彼はアリスを膝の上に乗せて、頭の形を覚えるように優しく撫でる。そうすると彼女は気持ちよさそうに目を細めて『もっと』と頭を突き出してかた。甘えん坊だなあ、と彼は微笑みを浮かべ、ガラス細工に触れるように彼女の髪を梳かした。

「いつそのこと嘘つて言ってくれた方がまだマシ！ うああああん！ 終わった！ 私達はもう廃部なんだ！ ふええええん！」

モモイの魂の籠った悲痛な叫びを聞きながら、先生は数刻前を思い返す。

パスワードの解除が終わり、実行可能な状態になったG・Bibleを持ってきたのはマキ。彼女はUSBメモリに入ったexeファイルと——もう一つ、Keyと名付けられたファイルを全員に見せた。曰く、前者は解析できたが、後者は何一つ分からなかったらしい。強いて言えばファイルが壊れていない事が判明した程度であり、既存の言語では書かれている内容に一切触れられない、眼を疑うような構成をしている。

——Keyというファイルをマキが指差したとき、先生が届かない星を想うような優しい……それでいて、寂しそうな感情を滲ませた事は誰も知らない。

尚、モモイはKeyをケイと呼んでしまい一同から総ツツコミを受けたことは、彼女の名誉のために伏せておくべきだろう。

兎にも角にも、G・Bibleは目を通せる状態になった。それを実行させて、彼女はG・Bibleの真実に迫る。

エンターを叩いて足早に前書きを読み、いよいよ最高のゲームを作る術のお披露目。意を決して叩いた先には……。

『ゲームを愛しなさい』

書かれていた内容はこれが全て。ゲームを愛すれば、ゲームもそれに応えてくれる……という、半ば精神論のような何か。確かにそうで

あるし、書かれている内容は間違っていないし嘘でもない。確かにゲームを愛しなければ良いものは作れないだろう。それ自体は大いに納得できる。

ただ、ゲーム開発部がG・Bibleに求めていたものと、実際に書かれていた内容に大きな乖離があった

危険な廃墟に2度も探索に赴き、色々な人を巻き込み、セミナーとC&Cを敵に回してまで手に入れたものの内容が、縫った最後の希望の中身がこれだった……その残酷な現実には、彼女達は大きなダメージを負ってしまっていた。

「あの、モモイ……テイリークエストは……?」

「アリス……私のHPはもうゼロだよ……」

「ミドリ……?」

「ごめんね、アリスちゃん……知っていたけど、現実には残酷なの……そう、つまりこれがトゥルーエンド、ハッピーエンドじゃない、別の到達点……選ばれなかったヒロインは救われない……」

「……ユズは、何処に……?」

「多分、またロッカーの中に引きこもってるんだと思う。よく見て、ロッカーが偶にプルプルしてるでしょ?」

モモイの言葉とアリスの疑問に返答するように、今一度ロッカーが震えた。確かにあの中にユズはいるのだろう。実際、先生も先ほど肩を落としながら入っていく彼女を見ている。

程度はどうであれ、アリス以外のメンバーは一樣に重いダメージを負ってしまった。こうなってしまったら、今はG・Bibleやゲームの事、廃部の事から離れさせた方が良さだろう。それに、ここ最近はずっと心が休まる時なんてなかっただろうから。

「……えーっと、アイスでも食べる?」

「……食べる」

「ユズはどう?」

「……わ、私も……」

全員の返事を聞いた先生は膝の上から降ろし、冷蔵庫からアイスを出す。差し入れとして先生が買ってきたちよつと高めのもの。

口に運ぶと上品な甘さを感じるそれに、少女達の顔が少しだけ明るくなった。疲れた時やしんどい時には息抜きや甘いものが一番効くのだ。

「今の皆の姿はまるで正気がログアウトしたみたいです」

「うう……仕方ないじゃん！ 最後の手段だったのに！ それが、あんな誰でも知ってる文章が1つ入ってるだけだなんて！ 釣りにもほどがある！ ブログだったら炎上だよ！」

だが、それは完全なその場凌ぎ。アイスで逸らしていた現実を食べ終わった後にはちゃんと直視しなければならぬ。

縫っていた最後の希望が砕かれてしまった、残酷な現実を。

「知ってた！ 世界にはそんな、それ1つで全部が変わって上手いくような、便利な方法なんか無いって！ でも期待ぐらいしたっていいじゃん！ うあああああんっ！」

「ごめんね、アリスちゃん……私達は……私達だけの力じゃ、良いゲームは作れない……」

「——いいえ」

その弱音を、アリスは強く否定する。彼女達が良いゲームが作れないなんて、アリスは欠片も思っていなかった。寧ろその逆、彼女達ならばきつと良いゲームが造れると確信している。何故ならば——

「アリスは『テイルズ・サガ・クロニクル』をやる度に思います。あのゲームは、面白いです」

アリスは、このゲームに……彼女達が作ったゲームで、泣くことができたから。

「感じられるのです。モモイが、ミドリが、ユズが……このゲームをどれだけ愛しているのかを。その沢山の想いが込められたあの世界で旅をする……胸が、高鳴ります。仲間と一緒に新しい世界を旅する、あの感覚は……夢を見るといいうのが、どういう事なのか。その感覚をアリスに教えてくれました」

機械仕掛けの少女は夢を見た。人間が羊の夢を見るのと同じように、彼女もまた夢を見たのだ。電子の夢を。

アリスは、その感覚を嘘にしたくない。ましてや、その夢を見せてくれた彼女達に——否定なんて、してほしくなかった。

「だから、待望のエンディングに近づくほどに、あんなに苦しんだのに、思ってしまうのです……この夢が、覚めなければいいのに……と」

さらっとあのゲームを苦行認定しつつも、アリスの主張は徹頭徹尾変わらない。あの夢はとても心地の良い夢だった。自分に感情を、経験を、心を、愛を与えてくれたのだ。眠り続けた機械を暖かい命にしてくれたその感謝は、ずっとこの胸に。

「アリスは、そう思うのです」

あのゲームに救われた1人の人間として、今一度思いの丈を綴る。この想い、どうか少しでも届け。あなたの心の鐘を鳴らしたいから。そんな彼女のあまりにも純真な願いは。

「——作ろう」

ユズの胸に、ちゃんと響いた。

心ない酷評と冷やかしばかりで、外の全てが怖くて仕方がなかった時……モモイとミドリは『面白い』と言ってくれた。態々ここまで訪ねて来てくれた。仲間に、友達になってくれた。

その時の嬉しさは、感謝は片時も忘れたことがない。

確かにプロトタイプを元に作り上げたゲームは再び酷評されてしまったが……それでも、『作らなければ良かった』なんて思わなかった。

心の通じ合う大事な仲間達と一緒にゲームを作って、それを面白いて言ってもらおう——それがユズの夢だ。そして、その夢はアリスによつて叶えられた。モモイとミドリという大切な仲間と共に作ったゲームは、アリスの胸にちゃんと響いて……そして、こうして仲間になってくれたのだ。

部屋の片隅で、藍色の空に綴った夢——それが、こうして形になつてくれた。

「私の夢は、私達が作ったゲームを皆に面白いて言ってもらおう事。だから、これ以上は欲張りかもだけど……叶うなら、私はこの夢がこの先も終わらないでほしい」

だから、もつと先へ。次へ。藍色の空を突き抜けた先まで行ってみたい。この夢の続きを見てみたい。夢の終わりなんて————知りたくない。

だから。

「……ねえ、今からミレニアムプライスまでどれくらい時間残ってる？」

「6日と4時間38分です」

「よし、それだけあれば充分！」

モモイもミドリも気持ちは同じ。もつと先へ、前へ。夢の続きを歩んでみたい。これからもずっと、大好きな仲間と共に在りたいから。

「さあ、ゲーム開発部一同！」

残された時間の全てを使って。

『『テイルズ・サガ・クロニクル2』の開発、始めよう！』

大切な居場所を守るための最後の戦いが始まった。



「お姉ちゃん、まだ!？」

「ま、待って、急かさないで！ あとこれだけ入力すれば終わりだから

……！」

「あと2分だよ!? 急かさずにはいられないって!」

「正確には96秒です。そう言ってる間に残り92秒……」

「わ、分かった分かった! もうできたから焦らせないで!」

PCと睨めっこしているモモイを左右から挟み込むよう陣取り、『早く』と急かすミドリとアリス。それもその筈、今日はミレニアムプライスのエントリー締切日。アリスの言う通り、残り1分半が差し迫っている中、まだ提出できていないともなれば、焦るのも当然だろう。ここで間に合わなければ今までの苦労が全て水の泡と化す。それどころか、部活を存続させるための戦いの舞台にすら上がれない。

———そんな結末は、御免だった。

その近くではユズが床に座り込みながら、PCとゲーム機を繋い

で、ソースコードを写しながらデバック作業を行っている。ユーザー側の様々な挙動を考える時間はもうない。故に、ゲームを進行する上で必ず踏んでしまうような致命的なエラーだけを修正し、もう一度テスト。それも終盤に差し迫っていて、目に見える致命的なバグは全て取り除けた。整合性チェックを行い、モモイとタイミングを合わせるだけ。

「うん、エラーはでてない……モモイ!」

「オツケー、ファイルをアップロード! 完了までの予想時間は……

15秒! アリス、あと何秒!」

「残り19秒です……!」

「お、お願い……間に合って……!」

両手を合わせ祈るミドリ。やれる事は全てやった、あとは天に任せのみ。回線やサーバー側の状況、その他諸々の要因でデータのアップデート時間は左右される。15秒という時間通りに必ず事が運ぶわけじゃない。だから、全ては運だ。

皆が固唾を呑んで見守る画面のバーが右端まで行き、残り時間が0秒になり、完了の二文字が表示される。

そして。

——ミレニウムプライスへの参加受付が完了しました。

画面にそのポップアップが表示された時、皆は一樣に大きな安堵の溜息を吐いて肩の力を抜き……そして、その喜びを噛み締めた。

「間に合ったああああ!」

「ギリギリ……心臓止まるかと思った……」

「皆、お疲れ様。よく頑張ったね」

「うん! 先生もありがとう!」

抱き合い、達成感に溢れた顔で喜びつを体現する彼女達の横から先生は劳いの言葉を掛ける。彼としても気が気でなかったのだ。彼女達の居場所が失われるか否かの瀬戸際、先生として何もしてやれない事が歯がゆくて……だから言ったのだ。私に出来る事があれば、と。

実際にゲームをプレイするユーザーとしての意見を言ったり、彼女達の身の回りの事を行ったり。製作開始から一週間弱の期間、彼は

ゲーム開発部に入り浸っていた。シャーレに戻ったのもやむを得ない要件がある時だけで、それ以外の全ての時間は彼女達の為に。

「あとは3日後の発表を待つだけ、だね」

「うん。取り敢えず間に合って良かったけど、これで終わりじゃない。3日後には……このまま部室にいられるのか、そうじゃないのかが決まる」

ミレニアムプライスに出て終わりではない。ここはあくまでスタートライン。ゴールは成果として何らかの賞を受賞する事だ。もしそれが叶わなければ、早急にセミナーから立ち退き要求をされるだろう。ユウカは人情家で優しい……と言うより、かなり甘い人柄であるが公私の分別はついている。努力賞、という言葉は通用しない。

故に、気を緩める事は出来ないのだが……モモイには1つだけ、どうしてもやりたい事があった。

「でも、3日後って結構長いじゃん？　そこで提案んだけどさ……先にWeb版の『テイルズ・サガ・クロニクル2』をアップロードしてみるのはどう？」

「ッ!？」

「ど、どうして?？」

「3日間も待てないよ！　それに、審査員の評価より先にユーザーの反応を見たくない!？」

「うーん、でもちよっと怖いかも……低評価コメントも心配だし」

モモイの提案。ユーザーの反応を知りたいというクリエイターとしては真つ当な意見であるが、ミドリは素直に領けないでいた。

その理由は、モモイの言葉に怯えるような反応を見せたユズだ。過去、数多の心ない言葉に傷つけられてしまった彼女の内心を考えると……無条件で肯定しにくい。

「何言ってるのさ！　そもそも、ミレニアムプライスだけに出品するために作ったゲームじゃないでしょ！　自信を持って見てもらおうよ！　私達はベストを尽くしたんだから！」

「そ、それはそうだけど……」

ミドリは流し目でユズの方を見る。先ほどと変わらず俯いたまま

であるが、その両手は固く握られていて、何かの決意をしているような雰囲気であった。

そして、彼女は深呼吸してから……顔を上げる。その表情には怯えも恐れも後悔もない。ユズらしからぬ、だが、ユズに良く似合う顔。

「うん、アップしよう」

「ユズちゃん……」

「作品っていうのは……見てくれる人、遊んでくれる人がいて初めて完成されるものだと思うから。私は……私達のゲームを、きちんと完成させたい」

自分達の内側だけで完成させ、世界で日の目を浴びることが無いもの。それはそれで、一種の芸術の極地であるようにも感じられる。名誉や権力、共感といった他者や社会から与えられるものに一切興味を示さず、ただ自分の為に、自分の作りたいものを作るのは大きな価値があるだろう。

だが、彼女達はオスカー・ワイルドではないし、芸術家という訳ではない。彼女達はゲームを愛し、ゲームを作るクリエイター。

確かに、以前のような心ないコメントに晒される危険性はあるだろう。

「全力で頑張ったから。それに……皆が一緒だから、きつと受け止められる」

自分達はやり切った、限られた時間の中で精一杯やれる事をやった。仲間と共に全力を尽くしたのだ。その結果が例え振るわなくても、受け止める事は出来る。後悔も心残りもない。

「私はもう、大丈夫」

だから、胸を張ろう。自信を持とう。それが自分達の誇りになるから。

「よし、それじゃあ今すぐアップロード！」

「ああ、待って！ まだ心の準備が……！」

「待ったなし！」

ミドリの懇願空しく、モモイは最後のクリックを済ませて力作をネットの海へ泳がせた。暫くするとアップロード完了の文字が出て

きて、正常に事が済んだと知らせてくれる。

「アッパ完了！ プレイして感想が貰えるまで少なくとも2、3時間は掛かるだろうし、それまで暫し休憩って事で！ それじゃ、解散！」
「……はあ、そうだね」

ミドリは諦めがついたような、若干呆れたような表情を浮かべる。昔から姉は向こう見ずな性格で、強引だった。昔はそれが苦手だったが……今ではそうでもない、その強引さは、時には手を引いてくれる優しさになる事を良く知っているから。

取り敢えず、これで要件は全て片付いた。あとはモモイの言った通り、2時間後までは各々自由時間を過ごせる。ミドリは欠伸を噛み殺し、眠気で霞む視界を擦る。思えば、この数日間は碌に寝れていなかった。それに、お風呂も時間を意識していつも通りに入っていない。

汗臭い、って先生に思われたりしていないだろうか。ちらりと流し目で彼を見ても、それは分からない。

そんな事を考えていると、アリスが徐にPCの前に陣取り、画面を注視しているのが見えた。

「アリス？ なんでPCの前に座ってるの？」

「待機します。皆さんがダウンロードを始めたようです。気になります」

「気持ち分かるけど、これからゲームをプレイするのにまだ時間がかかるだろうし、待ってても直ぐには来ないと思うよ」

「はい、それでも——待ちます」

「わ、私も……どつちにしろ、緊張で寝れないし……待つてる」

言い、アリスの隣に座るのはユズ。緊張した面持ちで画面を見つめている彼女は人一倍気になるはずだ。一度は酷評されたゲームの次回作……プレイしてくれた人はどんな感想を書いてくれるのだろうか。そう考えると、眠る事なんてできなかつた。

その2人の緊張が伝搬したのか、ミドリも2人の隣に座って。

「私もドキドキしてきちゃった」

「私は心配でドキドキが止まらないよ……うう、自分で言いだしたの

に緊張でおかしくなりそう！」

そうして、画面の前には4人の少女が座り込んでいた。途中、部屋の邪魔にならない部分で仕事をしていた先生も連れて、今は5人。全員がゲームのコメントを見守っている。

一分一秒が永遠に感じられるような、ゆっくりとした時間の流れ。そんな中、初めてついたコメントは。

—— わお、これ前回クソゲーランキング1位を取ったあれの続編？ もうゲーム作りは止めたと思ったけど、懲りないねえ。

「……」

全員、無言。まあ、予想はしていた。まだアップして30分も経っていないのに付くコメントなんて大方碌でもないだろうと。だが、記念すべき初コメントがこれなのは……少し、心に来るものがある。

そして、その文面を穴が開くほど見たアリスは徐に立ち上がって。

「マキに連絡。該当アドレスの方角に対して、最大出力のビーム砲を食らわせてきます」

「それは駄目！ 気持ちは分かるけど落ち着いて！」

レールガンとスマホを持ち、部屋を出そうになったアリスをミドリは必死になって止める。気持ちは分かるが、それは思うだけに留めておいた方が賢明だ。彼女として友人が何処かの部屋の一角を吹き飛ばしたニユースなんて見たくはない。

「大丈夫、ゲームをやってもいない人の発言だから……気にしないで、ね？」

—— 前回のTSCは確かに手放しで賞賛できる作品ではなかったかもしれませんが。ですが新鮮味があり、少なくともありふれた作品ではありませんでした。今回の2ではどんな目新しさを見せてくれるのか、楽しみです。

—— さて、鬼が出るか蛇が出るか……せつかくなら中庸なんかじゃなくて、例えばどっち側だったとしても振り切った体験をしたいね。

—— 前作はやったけど、良い思い出としては残っていない。それどころか苦い記憶が幾つも鮮明に思い出せるくらい。でも、どうし

てかな……続編だって知ってるのに、ついダウンロードしちやっただ。

1件目に続くような形で2件目、3件目……といったようにコメントが表示される。好意的なコメント、期待を寄せるコメント、他にも多数。純粹にゲームを楽しみにしている人もいれば、明日の話のネタを探すような人もいるし、怖いもの見たさや時限爆弾を楽しそうに解除しようとしているような心持ちの人もいる。

——2時間後に補習でテストがあるんだけど……そんな事より今はこのゲームをやりたい気分。

——テストなんてこれから先、幾らでもあるじゃん。でも、これを遊ぶ最高のタイミングは、アップされたばかりの今なんだよ！

「えっと、嬉しいけど……できれば、テストを受けに行ってほしいかも……」

「だ、ダウンロード数がもう2000を超えてる!? 流石におかしくない!?!」

「……あ、有名なポータルサイトに私達のゲームが発表されたって記事が載ったみたい」

ミドリのスマホの画面には、或るポータルサイトの記事。そこには確かにゲーム開発部が手掛けたTSC2の粗筋や前作の概要、ゲームをアップロードしたサイトのリンクが載っている。PV数も秒刻みで伸びていて、それと連動するようにダウンロード数も増加している。

「うわあああ……! 無関心じゃなければ良いな、くらいに思ったたのに! こんなに数が増えると急に怖くなってきた!」

「……ドキドキします」

「ううっ! 期待と不安で心臓が爆発しそう!」

モモイがそう言った直後——ゲーム開発部の部室のすぐ傍で轟音が鳴り響いた。

「ほ、本当に心臓、爆発しちやっただですか?」

「ち、違う! 私の心臓じゃない!」

「そもそも心臓は爆発しないでしょ、お姉ちゃん……」

「一体何の……まさか、ゲーム機が爆発!?!」

「流石にそんなPL法で一発アウトな物を世には出さないとと思うけど……」

先生は苦笑いを浮かべながら立ち上がり、窓を覆っているカーテンをずらして空を仰ぐ。蒼に染まる彼の視界には、銃を携えるメイドの少女が一人。

「これ、13.97mm砲……という事は、カリン先輩!」

ミドリが青褪めた顔でその真相を突き止めたと同時に次弾が着弾する。再び揺らぐ部室と、困惑を浮べる4人の少女。間違いない、カリンの——否、C&Cの標的はゲーム開発部だ。

「遠距離攻撃を確認、部室正面に対して11時の方角! 距離、約1km……!」

「この前の仕返し!?!」

「反撃を開始します! 光よ——」

「駄目、アリス! 此処だと先生が……!」

レールガンを展開しカリンを射貫こうとしたアリスであったが、モイの言葉により一旦矛を収める。部室という閉所でアリスの火力を發揮してしまえば先生が巻き込まれかねない。彼は脆弱な肉の体、レールガンなんて余波だけでも致命傷だ。

それに、この場で反撃してしまえば部室に風穴が空いてしまう。守れるかもしれない大切な居場所が壊れる——それだけは、避けたかった。

「そ、外にセミナーの人達も……鏡の件の報復……!?!」

「ちよ、ちよつとは申し訳ないと思っただけど……」

「取り敢えず今は外に出よう。タイミングはスプリンクラーが動作して2秒後、逃走経路は——」

4人全員がシステムにリンクする。鮮明になる視界と、クリアになる心。これなら行ける——そう思った少女達は銃を持ち、部室の外へ駆け出した。

約束された勝利（ダブルオー）

セミナーとC&C、ドローンの苛烈な攻撃を掻い潜り、何とか部室を脱出したゲーム開発部の4名の少女達。全力疾走をするうちに彼女達は旧校舎の廊下まで辿り着いていた。カリンの射程範囲外。ポジション変更の時間を考えると、ここが狙撃のリスクに晒されなければ約10分弱。それまでに新しい場所に行かなければならないが……恐らく、今も尚ドローンが追ってきているだろう。

物量で負けている以上、真面に相手なんかしてられない。前回は鏡の奪取という目的があったため引けなかったが、今回は特にならない。故に取るのは逃げの一手。既にミレニウムプライスへの提出は終わっているため、発表の時間まで一心不乱に逃げる事も可能。最悪、ミレニアムの外部に出てしまってもいい。

そう思っていた少女達の希望的観測を。

「——逃げ切れる、とでも思ったか？」

粉々に打ち砕いた。

「ッ!？」

その声が一番早く反応したのはミドリだった。恐れていた人の声。前回の作戦に於いて、最大の障害だった彼女。脳髓に刻み込まれた恐怖の赴くまま、過去最高の冴えと速度で銃を構えてトリガーを引いたが——。

「遅え」

ミドリの最速よりも、相手の普段の方が圧倒的に速かった。無造作に構えられたSMGから吐き出される弾丸、圧倒的な神秘に裏打ちされた鋼はミドリを貫こうとするが、先生のシールドにより阻まれる。それを見て僅かに眉を顰めたのち、トリガーを引く手を緩めた。効果が薄い事を悟ったのだろう。

勿論、彼女の実力ならばあと数秒掛ければ貫ける。先生のシールドも強力ではあるが、無敵ではないのだから。だが、その数秒間の内にアリスに狙われても面倒だと彼女は判断した。非常に冷静で、クレバーだ。

小柄な姿とメイド服、龍があしらわれたスカジャン。手に持つはMPX。アリスの恐怖を呼び起こす、その姿。

あの日見た、ミレニウム最強。C&Cのリーダー。

そのコールサインは————約束された勝利。

美甘ネルが、彼女達の行く先を遮る巨大な壁として立っていた。

「……成程な」

ネルは全員を一瞥し……少女達の奥に立つ、先生を睨みつける。

「道理でいちいち良い判断だと思っただけ。さっきこのチビ達を指揮したのも、ミレニアムの差押品保管所を襲撃したのも……アンタが一枚噛んでたのか、先生」

「彼女達をどうしても放っておけなくてね……初めまして、ネル」

「……噂は聞いている。その実力もな。最初は眉唾物の噂だと思っただけが……どうやら違うみたいだ」

「お褒めに預かり恐縮……と言いたいけど、私の力なんて大した事ないさ。いつだって頑張ってるのは、生徒達だよ」

「ハッ！ 大した事ない奴がアスナ達を手玉に取れるかよ」

先生の自虐とも取れる謙遜にネルは顔を歪める。

確かに、生徒も頑張っただろう。だが、頑張っただけで唯の生徒がC&Cのエージェント3名を相手にして勝てる訳がないのだ。彼女達の輝かしい勝利には何か本人達の頑張りや運以外の何かがあった。そして、その要因が先生であるとネルは見抜いている。

「それで、ネルはどんな用事かな？ 見た所、私じゃなくて彼女達に用事があるっぽいけど……」

「も、もしかして……リベンジ、とか……？」

「そんな下らない理由で来る訳ねえだろうが」

モモイの言葉を笑いながらネルは否定する。そうだ、リベンジなんて下らない、報復も逆襲も不要だ。そもそも、そんな事にかまけていられる程、C&Cは暇じゃない。ネルが此処に来たのは、ゲーム開発部にC&Cを睨けたのはもっと別の理由がある。

「強いて言うならまずは……その、でこ出してるアンタ」

ネルはでこを出している少女……ユズに指を刺す。

——ただ、指先を向けられただけ。ただそれだけなのに、ユズは体の震えが止まらなかつた。呼吸が浅くなる。冷や汗が止まらない。数日前に振り絞った勇気が己を嘲笑する。浅はかだ、身の程を弁えろ、と。彼女が挑んだのは文字通りの最強、キヴォトスのピラミツドの頂点に座す存在。

それに挑戦するという事がどういう意味なのか……数日後の答え合わせが始まった。

「あの時は、よくもアタシを騙してくれたな……」

「ひッ……！ す、すみません！」

ネルの凄んだ声を聴いた刹那、全速力で頭を下げるユズ。もう半分以上彼女は涙目であつた。身体全体で『どうか命だけは』と懇願する彼女であつたが……聞こえたのは、予想外の声。

「やるじゃねえか、褒めてやるぜ」

「……え？」

怒られたり怒鳴られたりすることは想定内で、弾丸1マガジン分くらいは覚悟していたのだが……聞こえたのは、予想外の賞賛の言葉。見ればモモイもミドリも同様に鳩が豆鉄砲を食つたような顔をしていて、ネルの真意を測りかねている。

そんな彼女達の内心を置き去りにしてネルは紡いでいく。己を退けたユズへの賞賛を。

「怯えた振りをしてブルブル震えながら、アタシを騙すなんてな。大した演技力だ。ま、実際は演技じゃなかつたとしても変わらねえ。アタシは勇気を出して、アタシを退けた。あの日アタシに言つた言葉を、アタシは間違いとは思わねえ」

ネルは最強だ。それは個人の武力という意味でもそうであるが、統率力や指揮能力も非常に優れている。そんな彼女に、死角に隠れるなんて子ども騙しは通用しない。先生を含む4名があの場合に隠れていた事は当然分かつていて、保管所にいる事から侵入者の類であるとも判断していた。

故に、彼女はあの部屋ごと4人を纏めてスクラップにするつもりであつたのだ。だが、ユズが来て、あの場合に隠れている4人の為に精一

杯の勇気を振り絞り己に声を掛けた。セミナーの生徒だと、身分を偽って。

勿論、ネルは彼女が嘘を吐いている事を知っていた。仕事で何度も顔を合わせるセミナー生徒、新入りとはいえ顔も名前も知らないなんてありえない。初めから己を騙し、ここから遠ざけるための茶番だと分かっていた。

だが、それでも乗ったのは、偏にユズの振り絞った勇気に魅せられたからだ。友人の為に立ち上がった彼女の勇気に免じて、ネルはあの4人と彼女自身を見逃した。

その判断を、ユズを評価した事をネルは間違いだったと思っていない。

「まあ、それは良いとして……そつちの、バカみたいにデケえ武器を
持つてるアンタ」

「アリスの事ですか？」

「ああ、テメエには用がある」

そう言つて、ネルは再び銃を構える。先ほどの様な1丁ではなく、2丁。ネルのフル装備状態。唇を好戦的に歪め、極上の獲物を鋭い目つきで射貫く。

「アスナに一発食らわせてくれたらしいじゃねえか……ちつと面貸せや」

「あ、アリス、このパターンは知っています。『私にあんな事をしたのは、あなたが初めてよ……ッ』、告白イベントですね。チビメイド様はアリスに惚れていると。スチル獲得です」

「いや、アリス……多分これは告白じゃなくてカツアゲ……」

「ふ、ふっぎけんこの野郎！ 告白もカツアゲもしねえ！ ってか、誰がチビメイド様だ！ ぶっ殺されてえのか!？」

話の腰を木端微塵にへし折られたネルはその激高のまま声を張り上げる。桁違いの膂力で握られたグリップが軋む音を立てて、肉体から無意識に放出された神秘が窓ガラスに亀裂を入れた。

「ひッ……」

「怖……」

——だが、『怖い人なだけでノリも良いし、結構いい人なのでは？』とモモイは内心で思った。



「つたくよお……中々にイラつかせてくれるじゃねえか」

頭を掻き、溜息混じりの声を吐くネル。話が予想外の方向に逸れたせいで、よく分からない内に体力を損耗してしまった。これも作戦の内なら大したものであるが……多分、あれは素なのだろう。だからこそ、厄介なのであるが。

そして、アスナ、カリン、アカネの3名も合流し……C&Cは、此処にフルメンバーとなった。

「まあ良い。誤解してるかもしれないねえから一応言っとくが、別にC&Cに一発食らわせた分の復讐ってわけじゃねえ。怪しい部分なんて掃いて捨てるほどあったが、こつちとしては正当な依頼の中での出来事だった。んで、そつちはそつちで、アタシらを相手に目標を達成しただけだ。別にそこに恨みはねえが……俄然、興味が湧いてきてな」

「興味……？」

「ま、確認って言った方が良いかもしれないねえが……」

そう言つて、ネルは構え直す。依頼は確かに怪しい部分は多かった。考えれば考えるほど裏があるような気がして、予測は立てれたが確信には至っていない。当て馬として利用されたのは癪だが……今は、そんなことはどうでもいい。

彼女が興味を向ける相手は、ただ1人。

「さあ、ちよつくら相手してもらおうか。アタシと戦つて勝てたら、このまま大人しく引き下がってやる。お互いを理解するにはこれが一番手っ取り早いからな。どうだ、難しい話じゃねえだろ？」

単純明快、勝った方が正義。四の五の詭弁を宣つたり、策を弄する事のないシンプルなルール。少なくとも、以前の作戦よりも随分と分かりやすい勝ち負けの線引きだ。

「——分かりました」

「お、やる気満々と来たか。いいぜ、話の早いヤツは嫌いじゃない」
「一騎打ちのイベント戦闘……みたいなものですね、理解しました」
「イベ……なんつった？」

「あの時は狭かったですし、『鏡』を持って帰るといふ使命がありました
たが、今なら……！」

重厚な音を立てて、レールガンが展開する。各部位のランプやライ
ンが点灯し待機状態から戦闘出力へ遷移。一撃で相手を葬り去る、対
艦想定の過剰出力がネルに向けられた。

「行きます、魔力充填、100%……！」

「へえ……！」

「——光よ！」

青褪めた光が爆発的に広がり、周囲を破壊の嵐で包み込む。余波だ
けでも壁に亀裂を入れるほどの出力。射線上にあったものは一切合
切薙ぎ払われ跡形も残さない。そして、全てを呑み込んだ光の奔流は
威力を減衰させる事なく校舎の壁まで着弾し、破壊。銃撃戦を想定
し、強度の高い素材で作られているはずの壁に巨大な風穴を空けた。

「わお！」

「くッ」

「何という威力……！」

その驚異的な出力を前に、流石のC&Cも固唾を呑む。先日相対し
た時よりも更に高い攻撃力は、アリスの言う通りの最大出力なのだろ
う。これを真面に食らえば、キヴォトス最上位の生徒……否、神話や
権能に足を踏み入れている存在が相手でも有効打に成り得るだろう。

粉塵と煙舞う廊下、排熱するレールガンを下ろしアリスは眩く。

「……やったか？」

「アリスちゃん！ その台詞は無暗に言っちゃダメ！」

「あ、ネル先輩は3年生でした。言い直します」

アリスは愛らしい咳払いを1つして。

「や、やっつけられましたか……」

「いや、敬語の問題じゃなくて……」

「——アリス、来るよ」

先生の言葉が聞こえた途端、煙が尾を引いた。獣の様な低姿勢で疾走するのは傷一つ見当たらないネル。その姿を見るや否や、アリスは驚愕を顔に張り付かせ咄嗟にレールガンを盾代わりにする。それと同時に、ネルもトリガー。吐き出される弾丸が甲高い金属音を奏でて弾かれる。

だが、これはあくまでもブラフ。本命は。

「こっちだ」

最低限の動きでターンし、ネルはアリスの防御を掻い潜る。彼我の距離は1 m、遮る物はない。

死神に目を向けられたような感覚を覚えたアリスは我武者羅にレールガンを振り回し、なんとかネルとの間に挟ませようとするが……速さは相手が圧倒的に上だった。

超至近距離で叩きこまれる9 x 19 mmパラベラム弾。先生が付与したシールドを真正面から踏み潰し、アリスの体にダメージを与える。

しかし、アリスもやられているばかりではない。途中まで動かしていたレールガンをネルとの間に挟ませて弾丸をシャットアウト。このままシールドバツシユの要領でネルを弾こうと思ったが——咄嗟の判断はまたしてもネルの方が上で。

「オラアッ！」

華奢な足から繰り出されたとは思えない程の轟音と、金属の軋む音。圧倒的な膂力で以って盾にされたレールガンごとアリスを吹き飛ばした。

「うあッ！」

その勢いそのまま壁に激突したアリスは苦悶の声を上げて項垂れる。体感的には時速100 kmオーバーの大型トラックと正面激突したようなインパクト。アリスや防御力に秀でた生徒以外は、この時点で戦闘不能になるほどの威力であった。

「確かに、並大抵の火力じゃねえが……それだけだ」

「も、もう一度、魔力を充填……！」

「言っただろ——遅えって」

瞬き数回分の時間。文字通り目を開いたら、アリスの目の前にネルがいた。その唇は寧猛に吊り上がっている。

「あつ……」

光が集束するレールガンをかち上げ、銃口を明後日の方向に逸らし、回避。無防備になったアリスの体に2丁のSMGで火力を叩き込みながら、都度アリスの反撃を片手間にあしらう。

一方的が過ぎる展開。いつしか反撃する隙すらなくなったのか、アリスはレールガンを使用しての防御に専念。時折距離を放そうとするが、ネルはそれを許すような甘い相手ではない。その行動を的確に阻害しながら、銃撃と打撃のフルコースを奏でる。

「確かに、テメエの武器は強い。個人携行の中じゃ最高だろうよ。だが、引き金を引いた後、発射までに最低でもコンマ数秒は掛かる。その上、その高すぎる火力のせいで相手にある程度の距離まで潜り込まれたら撃てねえ。爆圧に自分まで巻き込まれるからな。そして、この間合いでアタシに勝てる奴なんざ、キヴオトス全体でもそう多くは——いや、一人も居ねえ」

ネルはアカネが集めたデータと先の一射で、アリスの武器の特性を完全に見抜いていた。

高い火力。真っ直ぐ飛んでいく素直な射撃。トリガーから発射までのタイムラグ。得意とする距離。大振りな武器本体。次弾までの時間。弾自体の弾速。

それらの変数を全て組込み、その場で最適解を構築。それがこの戦法だ。付かず離れず、反撃も逃避も許さない攻撃の嵐。ネルの最も得意なクロスレンジでの銃撃戦。キヴオトス最強の暴力がその片鱗を見せた。

「うう……」

「……がっかりだな。この程度でアイツ等がやられたとは到底……」

勿論、ネルとてアリスに負けるとは全く思っていなかった。戦えば順当に、予定調和の如く勝つ。勝敗の天秤は覆らない。

だが、期待はしていたのだ。セミナーとC&Cの3人を掻い潜り、目的をきつちりと達成させたその実力に。

それがこのザマだ。アリスはネルの攻撃を前に何をやる事もできない。これでは他の有象無象に毛が生えた程度だ。

溜息を吐き、酷く残念そうな声を漏らす。そして、早々にこの遊戯に決着を付けようと更に攻撃を苛烈しようとしたが……アリスは突然、レールガンを振り回した。140kg以上ある本体を活かした質量攻撃。咄嗟の気転、意表を突く形の攻撃ではあったが……ネルには通用しない。空中で身を振り一撃、二撃を回避。続く三撃目はレールガン本体を踵落として迎撃。

「はッ、寄せられた時の判断としては悪くねえ。だが、どうする？ このレンジじゃアタシの方が強い。質量攻撃じゃ有効打にならねえ。発射しようにも、その武器の特性上、アタシに照準を合わせられねえ」

「……照準は、必要ありません」

「あん？」

「——行きますー！」

レールガンに再び光が集束する。一切合切を薙ぎ払う超火力。ネルであっても最大出力で食らえば有効打になりうる規格外。

だが、その銃口はネルを狙っていないかった。アリスが狙うのは——
——足場。

「まさか、テメエッ！」

「——光よッ！」

光が、爆発した。



先の一射。速射を優先したため、最大出力と比べて大きく威力は落ちるが……それでも、元は戦艦の主砲。ミレニアムの床を粉碎するには充分すぎる威力であった。崩落に巻き込まれたのはアリスとネルの2名。他の生徒達はギリギリ巻き込まれずに済んだ。

瓦礫の山が降り注いだ下の階層、其処に飛び降りるはゲーム開発部の3名と先生。あの崩落に巻き込まれたとなれば万が一があっても不思議ではないのだ。

「アリスちゃん！ どこにいるの!？」

「け、煙で視界が……」

「あ、見つけた！ アリス！ 大丈夫!？」

モモイの言葉。それが聞こえた全員は弾かれたように指差す方向に駆け寄った。形成された瓦礫の山に横たわるアリスを見つけた彼女達は胸を撫で下ろした後……すぐに気を引き締めて、アリスの状態を見る。

まず、ヒーローはちゃんと廻っている。身体も銃撃の傷こそあるが、あの崩落に巻き込まれたとは思えない程綺麗だ。服は汚れているが、クリーニングでどうにかなりそうなレベル。

——まず、危惧していた事態はなさそうだ。その事実にあ堵の息を吐いた。

そうしている内にアリスは目を開いた。立ち込める煙と粉塵に咳込んで、彼女は一番近くに立っていた先生の袖を掴んで。

「うう……撤退を望みます!」

「アリスは私が。3人はレールガンをお願いできる?」

「はい！ 皆、急いで!」



先生とゲーム開発部がアリスを連れて撤退する少し前。大きな瓦礫の山を挟んで反対側にC&Cの3人は降り立っていた。

「リーダー!」

「だ、大丈夫でしょうか……まさか、崩落に巻き込まれて……」

「うーん、うちの小っちゃいリーダーも潰されて更に小っちゃくペっちゃんこに……」

「——誰が小っちゃいって!？」

小さい、というワードに過剰反応して瓦礫の山から這い出てきたのは、アリスと同じように傷一つないネルだった。顔を真っ赤にしながら怒る彼女は全く以ていつも通りで、どう見ても崩落に巻き込まれたとは思えない。

「あつ」

「わーお、流石うちのリーダー！ 全然ピンピンしてるじゃん！」

「つたく、テメエは一体どっちの味方なんだよ……」

「ネル先輩……それは？」

「あん？」

良く目を凝らせば、ネルの周りには薄い膜の様な何か展開されていた。否、何かではない。あれはシールドだ。キヴオトスではよく見る技能。身近な例としてはユウカだろうか。勿論、それ以外にも使い手は何人もいる、キヴオトスではさして珍しくない能力だ。しかし、ネルがそういった類のものを使える話は今まで聞いたことが無い。無論、ネルの出鱈目さを考えれば土壇場で使えるようになったとしても全くおかしくない話であるが……今回は違ったよう。

「ああ、これか。先生だよ、恐らくな。この程度の崩落、巻き込まれても痛くも痒くもねえつてのに……話に聞いていた通りのお人好しだ。ま、この分にはアリスあの子も無傷だろうな」

——崩落の直前、先生はアリスとネルの2名と、念のため他の全員にシールドを付与していた。結果としてアリスは大きな傷なく逃げる事ができて、ネルは無傷だ。借りが出来ちゃったな、とネルは内心で息を吐く。

「目的は概ね達成した。リオがゲーム開発部に興味を持つ理由も分かったし……先生の事も知れた。戦果としては上々。撤収だ、帰るぞ」

こうして、ゲーム開発部とC&Cの再戦は双方痛み分けのような形で決着が付いた。

掴み取った未来

「ねえねえアリス、見て見て〜」

そう言つてモモイが取り出したのはC&Cが身に纏っているものと似ているゴシックなメイド服。白と黒を基調としたフリルの付いた愛らしい衣装。本当に何の変哲もない、ただの服であるが……それを見せられたアリスは一瞬で恐怖に顔を歪めた。

「ひいッー!」

そして駆け足で部室の隅のほうまで行き……其処で仕事をしている先生の胸に思いつきり頭を押し付けた。万一にも、メイド服が視界に入らないように。

「あはは! いい反応!」

「何してるの、もう! アリスちゃんが完全に怯え切ってるじゃん!」

「うう……先生! モモイがアリスを虐めます!」

縫るようにアリスは先生のジャケットを握り締める。恐怖の感情が優先されて手加減が出来ていないのか、ジャケットの繊維が千切れている音が断続的に聞こえてきた。その内破れそうだな、なんて思いながら先生はアリスの背中に手を回し、もう片方の手で頭を撫でる。

「モモイ、他人の傷を無理矢理切開するのは駄目だよ」

「いや〜、反応が面白くつてつい……ごめんね、アリス」

「アリスちゃん、大丈夫?」

「あ、アリス、暫くメイド服は見たくありません!」

それだけ言い残し、再び先生の胸へ顔を埋めるアリス。

先の一件……ネルと真正面から戦い、その強さを脳髓に叩き込まれてしまった所為で、アリスはメイド服がトラウマになってしまった。尚、メイド服でなければC&Cのメンバーに会わせても大丈夫であったため、恐怖の対象はあくまでメイド服とネルらしい。

「うーん、体の方は大丈夫だけど……心の方はもうちよつとかかりそうだね」

溜息を吐いてメイド服をクローゼットの奥の方に仕舞うモモイを眺める。『あれ、いつ買ったんだらう?』なんて考えながら。ゲーム開

発部に無駄遣いできる部費はない。もしゲームを買うための資金やら維持費に手を出して買ったならば、暫くはおやつ抜きにしないと……なんて、思う。

そんな時、部室のドアが不意に開いた。スリッパを履き、ジャケツトを上まで閉めている特徴的な姿はゲーム開発部の部長、ユズ。

彼女はゲーム開発部の代表として、C&Cとの戦闘で起きた校舎の破壊について事情聴取を受けていたのだ。それが終わって戻ってきたのだろう。以前は殆ど部室の外に出る事は無かったのだが、今では消極的とはいえ、外部との関わりを持つようになっていた。それはきつと素晴らしい変化なのだろう。

「あ、ユズ。おかえり〜。どうだった?」

「うん、ただいま。えっと……部活動中の不慮の事故として処理してもらえたよ」

「嘘ツ!? それどうやったの!? もし部が存続したとしても、弁償代として部費は諦めなくちゃって思ってたのに……!」

「私じゃなくて、C&Cの方で色々と根回しをしてくれたみたい」

ユズは「それと」と言っ

「ネル先輩からの伝言……『また会おうぜ』って」

「ひいッ!」

「ああつ、アリスちゃん! ロッカーの中に入っちゃダメ! どうしよう、ユズちゃんを見て変な事覚えちゃったよ!」

遠い日——数週間前で全然近頃なのだが——を思い出す。アリスが此処に来た最初の日、その時はユズがロッカーの中に居た。だが、今はアリスがロッカーの中に居て、完全に立場が逆転してしまっている。

なんだかそれが可笑しくて、顔を見合わせて笑い合う。

そしてユズはPCの画面を開き、ケーブルを使って外付けモニターに接続。

——今日の目玉をクリックする。

「ミレニアムプライス、始まったね」

「もし受賞したらクラッカー鳴らそうか。お祝いにケーキも買って、

さ。でも、もしそうじゃなかったら……」

「……うん。直ぐに荷造りしないと。私達はさておき、ユズちゃんとアリスちゃんは……」

ミドリの心配そうな声。それに対する言葉を、彼女達は持ち合わせていなかった。

——運命が、始まる。



ミレニウムプライス、会場。D・U地区のホールを丸々貸し切つて行われるミレニウムサイエンススクールの中でも有数の行事は、他の学校や企業もかなり注目している。何せキヴォトスの最先端を往く学校の研究発表なのだ。此処で大きな成果を残した有望な研究や人材には先に手を付けておきたいと思うのが道理だろう。

『これより、ミレニウムプライスを始めます！ 司会及び進行を担当するのは、ミレニウムサイエンススクールのエンジニア部所属、豊見コトリです！』

マイクを持ち、カメラを前に意気揚々と語るのは説明好きなおしゃべり少女ことコトリ。ロジックや理論、仕組みを話させたら右に出る者はいない彼女は確かに司会進行役に適任と言えるだろう。尤も、どうしても専門的な話が多くなるためお茶の間は置いてきぼりになるだろうが。

『今回は、これまでのミレニウムプライスの中でも最多の応募数となりました。恐らくは生徒会セミナリの方針変更により、部活動維持のための成果が必要となった影響かと思われます！』

モニター越しでも変わらない、いつも通りの姿。この祭典を心待ちにしていたと言わんばかりの元気な声を聴いて、ゲーム開発部の4人は胸を撫で下ろした。

「……コトリちゃん達の方も無事だったみたいだね」

「エンジニア部は元々、ミレニウムの中でもかなり功績が認められる部活だし……うん、でも、本当に良かった」

「そうだね……ところで、史上最多の応募って……」

「それはちよつと困るなあ……」

応募数が多くなるという事は、それだけ倍率が上がるという事。また一歩、受賞までの道が遠退いたような気がして背筋に冷や汗が流れる。

『昨年の優勝作品である生塩ノアさん著の『思い出の詩集』は、その形而上的な言葉の羅列がミレニウム最高の不眠症に対する治療法として評価されました。尚、これは本来の意図とは少し違ったようですが……。今回も『歯磨き粉と見せかけてモツツアレラチーズが出る持ち歩きチーズ入れ』、『ミサイルが搭載された護身用の傘』、『ネクタイ型モバイルバッテリー』、『光学迷彩下着セット』、『ちようど缶一個なら入る筆箱型個人用冷蔵庫』……』

次々と羅列されるびつくりどつきり発明品達。オリジナリティという言葉の元、開発者が好き勝手に己の作りたいものを形にしたため、有用性を彼方に置き去ったものが大半だ。

優等生的な発明品はその他に任せ、自分達は学生らしく『好き』を形にする姿勢。有用性も利便性も知った事ではないと笑い飛ばし、唯作りたいものを興味の赴くまま作るからこそ、このお祭りミレニウムフライスは面白いのだ。

『そして！ 今キヴオトスのインターネットでセンサーションを巻き起こしている、スマホでマルチプレイが楽しめる古き良きレトロ風ゲーム、『テイルズ・サガ・クロニクル2』などなど！』

そして、注目の作品として名前を出されたゲーム開発部産のゲーム。コトリの言う通り、このゲームは今キヴオトスのインターネットで大きく話題になっていた。ダウンロード数も順当に伸び、評価や感想も日に日に増加。開発者たる彼女達の知らぬ間に、この祭典のダークホース的な立ち位置に立っていた。

『今回出品された3桁の応募作品の内、栄光の座を手にするのはたった7作品！』

数百あるうちの7。その高い倍率を改めて突き付けられた彼女達は思わず息を呑んだ。緊張で心臓が跳ねて、手汗が滲む。

——この結果次第で、全てが決まる。

『それでは、7位から受賞作品を発表します！』

栄えある受賞作品、その最初の1つは。

『7位はエンジニア部、ウタハさんの『光学迷彩下着セット』です！

これは身に着けていてもその下の素肌が見えてしまうため、着ているのかそうでないのか分からないというエキセントリックな作品ですが……露出症の患者さんが合法的に趣味生活を営めるようになるという点で、大変高い評価を受けています！ その評価を下した審査員が一体誰なのか気になってしまいますね！ とにかく7位！』

初っ端からアクセル全開の作品が7位に登壇。特殊な趣味の人にアプローチした作品は、見事その趣味を持つ人に刺さったようだ。トリニティ総合学園の何処かで『エッチなのはダメ！ 死刑！』と聞こえた気がしたが、多分気のせいだろう。

「ふいー……ま、私達のゲームは7位に相応しくないよね」

息を吐き、続く受賞作品を眺める。6位、5位。テイルズ・サガ・クロニクル2は受賞作品の名前に上がらない。

「私達の名前、呼ばれないね……」

そして4位の発表。残るはベスト3のみだというのに、ここでもゲーム開発部の名前は呼ばれなかった。

「うう、そろそろお願い……！」

『さあ、ここからはベスト3の発表です！ 3位は……！』

第3位でも、ゲーム開発部の名前は聞こえない。

「も、もう心臓がもたない！」

「お願い、お願い……！」

『僅差で2位を受賞したのは……！』

いつの間にかロッカーから出ていたアリスは先生の膝の上に座り、他の少女達と同じように結果を眺める。

「お願いします、私達の名前を……！」

——だが、その願いは届かなかった。

そして、残るは1位のみ。

「2位でもない……って事は……」

「も、もしかして……！」

『最後に！ 今回のミレニアムプライスで、最高の栄誉を受賞した作品です！』

3桁を超える応募作品の、栄えある頂点。

「ドキドキ……！」

『1位を受賞した作品は……』

其処に君臨する、成果の名前は。

『——CMの後でッ！』

「……アリスッ！」

「充電完了、何時でも撃てます！ 目標、ミレニアムプライス会場……！」

「気持ちは分かるけど落ち着いてッ！」

盛大な肩透かしを食らった彼女達はミレニアムプライスの会場ごと吹き飛ばそうと構えるが、ミドリとユズ、先生の3人掛かりで何とか宥める。全員、モモイとアリスの気持ちは痛いほど分かるが、それでも会場を吹き飛ばすのは不味いのだ。

そして、そうこうしているうちにCMも終わって。

『さあ！ それでは発表しますー！』

その刹那が永遠にも感じられて。

『待望の1位は……』

本当に、ミレニアムプライスの頂点に……。

『新素材——』

直後、モニターが穴だらけになった。

「きゃあつ！ ほ、本当にデイスプレイに撃ってどうするの!？」

「どうせ全部持って行かれちゃうんだし、もう関係ない!」

ミレニウムプライスの受賞作品、その7つの内にゲーム開発部の名前は入っていない。それはつまり。

「うえええん！ 今度こそ終わりだああああ!」

「うう……結局、こうなっちゃうなんて……」

「落ち着いて、お姉ちゃん。ユズちゃんも……」

「分かってるよ！ 全部が否定されたわけじゃない、へこたれる必要なんて無いって！ ネットでの評判も悪くなかったし、クソゲーランキング1位のあの時から、私達はちゃんと成長した！ これからも、私達は成長していける！ もっと面白いゲームを作る！ 次はもっと良い結果を出して、今より立派な大きい部室だってもらえるはず!」

確かに、ゲーム開発部の作品はミレニウムプライスの受賞7作に選ばれなかった。だが、それは今までの頑張りが無価値となる訳ではない。

誰かに面白いつて言ってもらえるゲームは確かに作れて、駆け抜けた達成感を味わった。

ゲームの楽しさにもより一層触れる事が出来て、仲間との絆も更に深まった。

次はもっと良いものを作れるはずであり、ミレニウムプライス受賞も雲を掴むような話ではなくなった。

自分達は、確かに成長した。前に踏み出せたのだ。

「ユズと、アリスは……ッ!」

「ユズと、アリスは……ッ!」

セミナーとの約束、ゲーム開発部が廃部になる現実は変えられない

い。居場所を失ったユズは寮に帰らなければなくなり、アリスに至っては帰る場所すらないのだ。

それが、モモイもミドリも受け入れる事が出来なくて。

傷つくと分かっている場所に、大切な友達を送り出す事なんて出来なくて。

変えられなかった帰結。それを前に無力さを噛み締めている2人に……ユズは優しく微笑んで。

「……心配しないで、モモイ。ミドリも。私、寮に戻る」

「えっ……」

「もう私の事を、クソゲー開発者って呼ぶ人は居ないと思う。ううん、もし仮にいたとしても、大丈夫。今の私には3人と先生がいるから。もう、怖くないよ」

さあ、塞ぎ込んでいた日々によならを。怖くても、もう大丈夫。優しく手を引いてくれる誰かが居なくても、もう歩けることを見せるから。

「ありがとうございます、先生」

「……お礼なんて。私は、結局君達に何もしてやれなかった。でも、まだ結果は——」

「そんな事を言わないでください。先生がこの部室に来てくれた時から、私達は大きく変わる事が出来ました。ずっと優しく見守ってくれて、信じてくれてありがとうございます。ただ、アリスちゃんは……」
心配そうな視線をアリスに向ける。彼女もまた、涙目になっていた。4人が散り散りになる現実を受け入れる事が出来ないでいた。

そして、一粒の涙と共に声を漏らす。

「……もう、皆とは一緒にいられないんですね」

「ッ……ごめんね……ごめんね、アリスちゃん！ 私、絶対毎日会いに行くから！ また一緒にゲーム作ろう！」

「ううう……！ や、やっぱり嫌！ こんなに仲良くなれたのに離れ離れになるなんて寂しいよ！」

「わ、私も……皆と一緒に……！」

アリスの言葉をきっかけにして、堪えていた涙が零れた。

綺麗事なんて幾らでも言える。別に今生の別れではないし、会おうと思えば幾らでも会える。でも——こうして、この場所で4人が集まるのはこれが最後かもしれないと思うと、どうしても我慢できなくて。

抱き合って、涙を流して、別れを惜しんで。ミレニアムプライスの受賞部門は終了した。

——大事な部分を聞き逃している事に、彼女達は気付かぬまま。

そして、不意に部室のドアが開き——駆け足で、満面の笑みで部室に上がり込んできたのはユウカだった。

「モモイ！ ミドリ！ アリスちゃん！ ユズ！」

「ひいッ！ もうユウカが！」

「ちよ、ちよっと待って！ 荷造りなんて、そんな直ぐに……！」

「鬼！ 悪魔！ 冷酷な算術使い！ セミナーに人の心は無いわけ!?!」

「——おめでとうッ！」

突然投げかけられた賞賛の言葉。ずっと言いたかった事を伝えられたユウカの顔は晴れ晴れとしていて、対するゲーム開発部は全員疑問符を浮べていた。

その奇妙なすれ違いが起きて——ユウカは部室の中の雰囲気
が暗く濼んでいる事に気付く。よく見れば全員泣いていて、その表情は悲しみに歪んでいた。

「……え？ 何、この反応？ 結果、見てなかったの？」

「……結果？」

「……私達、7位以内に入れなくて……」

「はあ？ 何言ってるの、今も放送中なんだから、ちゃんと見なさいよ」

「お、お姉ちゃんがディスプレイを吹っ飛ばしちゃって……」

「本当に何してるのよ……ほら、スマホ貸してあげるからちゃんと見てみて」

そう言って差し出されたスマホの画面には。

『ミレニアムプライスはこれまで、生徒達の才能と能力で作られた作品に対し、実用性を軸に据えて授賞を行ってきました。これはより良い未来を求め、実現していくという趣旨に基づいています』

審査員は『しかし』と言葉を続けて。

『今回の作品の中には、新しい角度から実用性を感じさせてくれたものがありました。その作品は懐かしい過去を鮮明に思い出させ、未来への可能性を感じさせてくれたのです。よって、私達はこの度、異例の選択をする事にしました』

ミレニアムプライスで史上初となる選択。それは実用性を突き詰めた作品ではなく、未来と過去を繋ぐ枝に与えられる唯一無二の賞———その、設立。

そして、その賞の栄えある第一号に選ばれたのは。

『特別賞、受賞作品……ゲーム開発部、『テイルズ・サガ・クロニクル2』です』

「ええっ、嘘ッ!？」

「な、何が起きてるの……」

2人の至極真つ当な疑問を置き去りに、審査員はコメントを綴る。

『レトロ風という時代を超えたコンセプト、常識に縛られず次々と想像を超えていく展開。一見してそれらとマッチしそうにない不可思議な世界観。最初は困惑の連続でしたが、新しい世界を旅して、一つ一つ新たな絆を結びながら、魔王を倒しに行く……そういったRPGの根本的な楽しさが、しっかり込められた作品だと思います。プレイしながら、かつて初めてゲームに夢中になった幼年期の頃を鮮明に思い出す事ができました。そういった点を評価して、この作品に……今回、ミレニアムプライスの特別賞を授与します』

読み上げられたコメントは以上。それを聞いても、どこか現実感が無くて。

「本当におめでとう！ その、実は私もプレイしてみたの。決して手放しで面白かったとは言えないけど……良い作品に出会えた後の、あの独特な感覚が味わえた」

「モモ！ ミド！ あたしもTSC2やってみたよ！ すっごい面白

かった！ 今ネットでも大騒ぎだよ！ ヴェリタスの調べだと、有名アイドルの名前よりTSC2の検索数が多くなってるってさ！」

「ほ、ほんとに……？」

部室に転がり込んできたマキから話されても、現実感は遠退いたままで。

「確認しました。3時間前にアップしたテイルズ・サガ・クロニクル2は、先ほどまでダウンロード7705回、計1372個のコメントが付いていましたが……ミレニアムプライスの発表以降、約26秒間でダウンロード回数が1万を超えました。コメントも約500個追加。言葉のニュアンスからして否定的・疑惑的なコメントが242件、肯定的・期待のコメントが191件。残りは不明、もしくは評価を保留にしているコメントです」

肯定と否定の数を見れば後者の方が勝っている。だが、最も共感を貰っているコメントの上位2件は。

——実際にプレイするかどうか、最初は散々迷いました……でも、今はこう思っています。このゲームに出会えてよかったです。

——これまでミレニアムに対して偏見を持っていました。冷静さと合理性しかないというミレニアムの生徒達への偏見は、今回のミレニアムプライスとこのテイルズ・サガ・クロニクル2を通じて完全になくなつたと断言できます。

これが意味する事は、つまり。

「つまり、廃部にはならないんだよね!？」

「ええ、そうよ。あ、でも、あくまで臨時の猶予だから。正式な授章ではないし、生徒会^{セミナー}としてはまた来学期まで、ゲーム開発部の部室の没収及び廃部を保留する事にしたの」

セミナー側が予期した賞を授与したわけではないが、かといつて後出しで特別賞を無効にするのは筋が通らない。故に折衷案として、一旦の保留という形になった。この部の存続はまた来学期の成果の有無によって変わるだろう。

そしてユウカは少し言い辛そうに「えっと、それから」と呟き……ぺこりと頭を下げた。

「ご、ごめんなさい。此処にあるゲーム機の事、ガラクタつて言つて。あなた達のおかげで思い出したわ。小さい頃に遊んだゲームの事……だから、ありがとう」

ユウカは踵を返して——自ら未来を掴み取ったゲーム開発部を笑顔で称えた。

「それじゃ、部室の延長申請とか部費の受付処理とかは必要だから、落ち着いたら生徒会室に来てね。じゃ、また後で！ 本当におめでとう！」

嵐のように来て、嵐のように去つていった青髪の少女。現実味のなかった一連の出来事が、彼女の言葉達で確かな実体となつて。

「やったあああああ！」

「良かった……！ 本当に良かった……！」

「やった……嬉しい……！」

「……？ え、えつと……？」

状況をいまいち飲み込めていないアリスの手を、ミドリは涙混じりの満面の笑みを浮かべながら握つて。

「アリスちゃん！ 私達、特別賞を受賞したんだよ！ この場所も、私達の部室のまま！」

「えつと、つ、つまり……アリスはこれからも……皆と一緒にいて、良いんですか……？」

「うん！ 勿論！」

「これからも、よろしくね……！」

少女達の瞳から、また涙が溢れる。だが、それは別れを悼む涙ではなく——これからも共に歩める幸福から流れる涙だった。

「アリスちゃん！」

「私達……！」

「これからも、ずっと一緒だよ！」

「……ッはい！ これからも、よろしくお願いします！」

少女達4人は大切な場所で生きる。知識を重ね、経験を重ね、物語を紡いで、生命として成長する。輝かしい生命の紀行を、彼女達は歩んでいく。

——願わくば。

——こんな物語が、いつまでも続いてほしい。



——データ復旧率、98.00%。

——システム作動……準備完了。

——プログラムをセット……Division。

——ALIS……いえ……アリス……。

——せん、せい……先生……。

——私の、大事な……。

会合

人を寄せ付けぬ張り詰めた空気。肌を刺すような冷たさと、それに付随する静寂。異空間のよう、とは言い得て妙で、此処は外界から切り離されている。

——セミナー執務室。多くの機密を抱えるセミナーの会長個人に与えられた部屋は、基本的に部外者の立ち入りは禁止されている。それは同じセミナーの役員であつても変わりなく、部屋の主である会長の許可なくして足を踏み入れる事は不可能だ。

だが、例外は存在する。キヴオトス有数のマンモス校として多くの生徒を抱えるミレニウムの中で、唯一執務室に独断で足を踏み入れる事を許されている生徒が一名だけ。

それが彼女——明星ヒマリであつた。類稀なる知性を持ち、要請を受けてヴェリタスの部長と特異現象捜査部の部長を兼任する彼女は、セミナーの生徒ではないのにも関わらず、ミレニウムに於いて会長と同等の権限を所有している。

だが、今回の彼女は部屋の主に呼ばれた来客の立場であつた。エレベーターのドアが開き、デスクとPC、保管庫しかない殺風景な部屋に足を踏み入れた彼女は大げさに溜息を吐いて。

「あら……超天才清楚系病弱美少女の来訪を、電気も点けずに迎えるなんて……」

窓から差し込む月明かりだけが唯一の光源。暗く静かな部屋に差し込む幻想的な光に照らされる少女は、1人だけではなかった。

「来客をもてなす気がこれっぽっちも無いという点、とてもあなたらしいとは思いますが……暗い部屋でモニターをつけていると、眼が悪くなりますよ——リオ」

その声に反応して、1人の少女が立ち上がる。全体的に白いヒマリと対照的な黒。膝近くまで伸びるストレートな黒髪と、宝石を思わせるルビーの瞳には理知的な光が灯る。スーツの様なジャケットとミニスカート。そこから伸びる足と、右の大腿部に巻きつけられたホル

スターにはハンドガンが収められている。モデルと言われても納得する抜群のプロポーシオンを持つ、大人びた少女だった。

——彼女こそがミレニアムサイエンススクール、セミナーの會長……調月リオ。ビッグシスターという名前で知られる、合理性の塊のような少女。

ヒールを鳴らしヒマリの近くまで歩いてきた彼女は手元のタブレットを操作。この部屋の監視カメラと各種センサーを停止させ、電波をジャックする。電子的な空白地帯を作り上げた。

「万全を期しているだけよ。この会談を外部に知られてはならないもの。その為であれば、この程度は問題にはならないわ」

リオはヒマリを見下ろす。ヒマリはリオを見上げる。何方にも、その双眸には冷たい温度が溶けている。

「この訪問はデータベースには残らない。つまり、記録上は私達は会ってなどいない事になっている。全ては、これから話す内容の機密を守るため」

「リオったら真面目なんですから……」あなたは私の姉なの？』くらいの軽口を返せないと、ユーモアからは程遠いですよ。今のだって、超天才清楚系病弱美少女の軽い冗談なんですから。ふふっ」

「……貴女は私の姉ではないわ。血縁的な繋がりには皆無よ。急にそんな非合理的な話をするなんて……どうしたの、ヒマリ。体調が優れないのかしら」

ヒマリに怪訝そうな視線を向けるリオ。彼女の視線には疑問が浮かんでいて、本当にヒマリが何を言っているのか、何を言いたいのか理解していない様子であった。

「……ええ、ええ。そうでした。あなたはそういう人でしたね。ユーモアを解さずに『合理』だなんて……あなたの好きな表現でしたね」

——昔からそうであった。リオはこういったユーモアやジョークの類を一切解さない、堅物という言葉をそのまま形にしたような人柄だ。ただ只管に合理性を突き詰める。自分の心情も他人の心情も些事と投げ、己の信じる最善を突き詰める……良く言えば他者の手を引くリーダー気質、悪く言えば独裁者の気質がある。

それを嫌というほど知っているヒマリは辟易とした感情を隠そうともせず、もう一度大きな溜息を吐いた。

「好悪の話ではないのだけれど……事実でしょう。この会合が秘匿されている事くらいは、貴女も理解しているものだと思っていたのだけれど」

「それはどうでしょう？　そもそも、人目を気にするのであれば、他の場所にすれば良かったのでは？」

「……他の場所？」

「ええ、例えば……」

ヒマリはその顔を耽美に歪め、囁くような声音で。

「誰かさんがこっそり作っている……セーフハウスとか？」

ヒマリのとっておき。秘密主義の誰かさんが、輪をかけて周囲にひた隠しにして建造している悪趣味な場所。あらゆる情報屋に、企業に、民間に掴ませないようにしていた……彼女の抱える最大の秘密。その情報をヒマリは入手していた。天才、全知……その名は伊達ではないのだ。

その秘密を晒されたリオであるが、彼女は不気味なほど落ち着いていた。ヒマリを射貫く視線は一切ブレる事は無く、その程度は想定内と言わんばかり。しかし、彼女としてもこれ以上話すつもりはないのか。

「……本題に入りましょう」

「あらあら、話を逸らすつもりですか？　ふふ……ええ、構いません。誰しも知られたくない秘密はありますから。尤も、あなたのそれは少々度を越えていますよ」

「逸らすも何も、それは本題じゃないからよ。雑談に興じるほどお互い暇ではないでしょう……まず、お互いの認識のすり合わせを」

リオとヒマリ——ミレニウム有数の天才達の会合が、始まる。

「前回、鏡を巡ってミレニウム生徒が起こした一連の騒動……それは私達が共に仕掛けたことだったわね」

「ええ。私が鏡という手段を用意し、リオがC&Cという危機を提供する……マツチポンプも甚だしいですが、珍しく一つの目的の為にあ

なたと私が協力しました」

昔からの顔馴染み……否、幼馴染と呼称しても良い間柄。近い能力と、同じ年齢。親しくなるには充分な下地。だが、その仲は決して良好とは言えなかった。それこそ、今回のように彼女達2人が協力するなんて事態が滅多に起きない程に。

だから、今回の協力はそれだけの非常事態なのだ。好悪を投げ捨て、彼女達が2人で取り掛からなければならぬもの。ミレニアム全体を巻き込みかねない事件を起こした、その目的は。

「――AL―1Sの正体を明かす為に」

ミレニアムの廃墟で眠っていた、機械仕掛けの姫君……その正体を明かすためだ。

モモイとミドリがミレニアムの生徒とさせて編入させたのは渡りに船だった。もし仮に同席していた先生が彼女を引き取るなんて言え、それだけで計画が台無しになっていたのだ。

シャーレ所属となった彼女の正体を暴こうとすれば、必然的にシャーレと一戦交える事になる。ゲヘナの風紀委員長小島遊ホシノと暁のホルス狐坂ワカモ、七囚人の武闘派筆頭が属する、あのシャーレと。

多くの最新兵器と最強のエージェント集団たるC&Cを保有するミレニアムであっても、それらを相手にするのは流石に分が悪かった。

故にアリスをミレニアムに所属させ、問題の及ぶ範囲をミレニアムの内側に留めたゲーム開発部は彼女達2人にとってはかなりのフアインプレーだ。

「ええ……あれからそれなりに時間が経ったけど、解釈の結論は出たかしら？」

「勿論です。アリスの正体……それは――無名の司祭が崇拝するオーパーツであり」

「遥か昔の記録に存在する……名もなき神々の女王」

前期の知生体が遺したオーパーツにして、無名の司祭が神と崇める存在。神々を統べる、王冠を抱く女王。

――それが、ミレニアムが誇る天才の2名が導き出した、同じ

結論であつた。

リオは目を伏せて、語る。

「……同じ解釈になったようね。つまり、あの存在の本質は……」

「ええ。アリスは、あの子は——」

謎に覆われたアリスの正体。その本質は、解は。

「——世界を終焉に導く兵器」

「——可愛い後輩ですよね♪」

過程は同じであつた。結論も同じであつた。だが、その本質だけは異なっていた。

リオは世界を終焉に導く『滅び』として、ヒマリは可愛い後輩としてアリスを見ている。

「……あら。食い違いましたね」

「……貴女は、一体何を言っているの?」

「リオこそ、何を言っているのですか……?」

互いに顔を見合わせ、理解できないような表情で見つめ合う2人。先に動いたのは、リオだつた。

「そう……」

——彼我の溝は、絶望だ。

「じゃあ、私達の同盟はここで終わりという事ね」

「そうですね。同盟ではなく、休戦でしたが」

リオがタブレットを操作すると、部屋の壁が開いて自走式のロボットが数機出てきてヒマリに銃口を向ける。場所は相手のホームグラウンド、ロボットに囲まれ、自身は戦闘に長けていない。余人なら絶体絶命の状況であるが……彼女の余裕は揺るがなかった。

「ああ、これが噂の……最近、貴女が作っている玩具ですね」

「——同盟を解消した以上、貴女をこのまま帰す訳にはいかないわ……無駄な抵抗はしないで頂戴」

「まあ……そうでしょうね。あなたならそうすると思っていました」

眩き、ヒマリは車椅子に取りつけられているコンソールを操作すると——部屋全体の主導権が彼女の方に移った。

「私のオフィスがハッキングされた……!」

「あらあら、ビッグシスターの部屋は無敵だとしても？ この程度造作もない事、あなたが一番知っているでしょう、リオ」

「A M A S、ヒマリを捉えなさい……！」

——しかし、リオの命令を聞き届ける個体は一機も居なかった。追加でコールをしても答えるものではなく、車椅子を転がすヒマリを止める手を持つ存在は何処にもない。

「ふふ、超天才清楚系病弱美少女に不可能なんてないんですよ」

全てはヒマリの掌の上。今、この場でリオは彼女に勝てないのだ。カウンターハックを仕掛けても意味がない。主導権を取り戻しA M A Sを喚けるよりも、彼女がこの場から逃れる方が速いから。それに加えて、荒事に向いていないリオ本人が直々に捉えるのもそれはそれで難しい。

故に、彼女は此処で捉える事は諦めた。A M A Sが唯一の手札という訳ではない。彼女には、彼女だけの反則がある。ヒマリを捉えるのはそちらに任せてしまえばいいだろう。可能であれば選びたくはない非合理的な方法。だが、使うしか道が無いのであれば……彼女は躊躇いながらも使う。

——本当なら、リオもこんな所で同盟なんて解消したくなかった。ヒマリの能力を一番よく知っているのは他ならぬ彼女であり、できばずつと味方にしておきたかった。

だが、事が此処に至っては仕方がない。

「それでは、リオ」

余裕綽々でエレベーターに乗り込むヒマリ。だが、その表情はリオの放った或る言葉によって崩れる事になる。

「彼女をどうにかしないと——」

その真意を聞く前に、エレベーターの扉は閉じた。



「自分と意見が違うと気付くや否や、躊躇いなく行動するその姿……久々に見ましたが、相変わらずですね、リオ。まあ、超天才清楚系病

弱美少女の私には無意味ですが」

リオのテリトリーから無傷で脱出したヒマリは愛すべきヴェリタスの部室へ向かう。だが、その雰囲気は何時もより暗く、声音も落ち込んでいる。彼女の脳にはリオが別れ際に放った言葉が刻まれたままだった。

——先生が、死ぬわよ。

突飛な妄想と笑い飛ばせばよかった。アリスがどれだけ先生を慕っているのか、彼女はその目で見て知っている。そんな彼女が彼を傷つけるなんて、ましてや殺すなんてありえない話だ。

だが、何故か絵空事と切り捨てる事が出来なくて。まるで実際にその光景を知っているような、嫌な実感が離れてくれない。

——赤いヘイローのアリスを抱きしめ、その胸から血を流す彼を。

「……いけませんね」

そんな幻想を振り払うように、ヒマリは頭を振る。きつとビツグシスターと話し過ぎた所為だ。

さあ、早く部室に戻って可愛い後輩達の顔を見に行こう——そう思っていたから。

1人の少女に、気が付かなかった。

「……えっ」

明滅する視界と意識、鈍い痛みを訴える首筋。車椅子から転げ落ちて地面に倒れ込んだヒマリは襲撃の実行者を見上げて……目を見開いた。

——完璧な気配遮断。華麗な手際。そして、ゴシツクなメイド服。冷たく見下ろす双眸。此処まで条件が揃えば自ずと答えは導き出される。

「……あなたは、まさか……5番目の、C&C……」

その言葉を最後に、ヒマリの意識は無明の闇に落とされた。

——そして。

「こんばんわ、トキ」

その闇に紛れる、現実に空いた虚無の孔が独り。

——再び、運命が動き出す。

輝かしい日々

某日、先生は珍しく暇をしていた。偶々仕事の少ない日で、外部に出歩く用事もない。当番の生徒もおらず、シャーレには彼ののみ。

午前の段階で仕事が終了した彼は暇つぶしがてら館内の掃除をしたり、予算の計算をしたり、今後の事を考えたりしている……ふと、スマホが鳴った。仕事用のもではなく、プライベートのもの。

電話の相手はモモイ。彼女以外にもミドリやアリス、ユズの楽しそうな声が聞こえる事から、恐らくは部室にいるのだろう。

部活動に付き合ってほしい、という彼女のお願いを彼は快諾。そのまま準備を済ませて、ゲーム開発部に向かっていたのだが……彼はふと思に至る。『そういえば何をするのか全然聞いてなかった』と。

何をするのか定かではない中、彼は部室の中に入り……。

「おりゃあーッ！ 先生、覚悟して！ 今から、私のとっておきの必殺技、モモイスプラッシュを見せてあげるんだから！」

かれこれ1時間以上、彼はモモイと格ゲーに興じていた。モニターの前に2人並んで座り、コントローラーを持って。

ゲームも今や終盤戦。モモイの体力は1割、先生の体力は4割弱。もう少しでゲームセット、という所でモモイスプラッシュなる技が先生を捉えた。

「あっ」

「ふっふっふ！ 私のコンボに死角はないよ！ 先生の！ HPがなくなるまで！ 止まらない！」

空中に打ち上げ、落下するタイミングでまた打ち上げる。このループを繰り返し、先生のキャラの体力ゲージを削り切る算段なのだろう。だが……。

「あ、抜けた」

「何でッ!？」

モモイスプラッシュに死角は当然の如くあった。タイミング良くコンボを抜けた彼はそのまま攻撃をしてモモイの残り僅かだった体力ゲージを0にしてゲームセット。モモイの負けだ。

「うわーん！ 何で私のコンボを抜けられるの!？」

「モモイは焦るとレバガチャしちゃうからね……多分、最後の方は操作が雑になっちゃったんじゃないかな？」

「そ、そんなっ!? もう私の攻撃パターンを見切ったなんて……」

コントローラーを放り出し、悔しそうに床に転がってクッションに顔を埋めるモモイ。先生に負けたのが余程悔しいのだろう。時折「うう……い」とくぐもった声が聞こえる。そんな彼女を見ると『負けの方が良かったのかな』と思わなくも無いが……手を抜く事の方が彼女に対する侮辱になっってしまう。そもそも、忖度で勝つても彼女はきつと喜ばない。やるなら全力で、だ。

そんな彼女を見かねて、絵を描いていたミドリは椅子を回転させて体を此方に向けると呆れた顔で。

「……お姉ちゃん、先生は今日始めたばかりの初心者だって言ってたよね」

「ミドリやめて！ 辛い現実を突きつけないで！ 今のは無効！ 無効だから！」

「何回無効にするの、お姉ちゃん……」

このやり取りをする回数もそろそろ二桁の大台が見えてきた。彼女曰く、戦績は8戦0勝0負0分8無効。このままあと何回無効試合が積み上がるのかな、なんて思いながら先生は苦笑いする。

「もう一回！ もう一回やって先生！ 今度こそ正真正銘とっておきのコンボを見せてあげるから……い！」

「お姉ちゃん、その辺にしておこう？ これ以上は先生が困っちゃうから」

「うう、でも……勝ち星がないまま終わるのはゲーマー的に……」

「またそんな事言っ……」

そう呟き、負けず嫌いな姉を呆れた顔で見るミドリ。確かに初心者相手に勝ち星が一個もないまま終わるのは悔しい。だが、それで先生に迷惑をかけてしまうのは違うだろう。引き際も大切、我慢を覚える事も勉強だ。

先生も何か言っ……あげてください——なんて思いながら彼に

視線を向けるとコントローラーを手に取っていた。そして彼は悪戯っぽい笑みを浮べて。

「いいよ、モモイ。あと一回だけ、ね?」

「やったー! うん、あと一回! 今度こそは勝つから!」

先程の意気消沈した雰囲気は何処へやら、モモイは輝くような笑顔で再び試合のセッティングをする。

「はあ……先生、あまりお姉ちゃんを甘やかしちゃ駄目ですよ」

「忠告ありがとう。でも、子どもは大人に甘えるものだからね。素直に甘えてくれて寧ろ嬉しいよ」

「……そういうものですか?」

「そういうものだよ。だからミドリも、遠慮なく私に甘えてね」

彼がふわりとした笑顔でそう言うと、ミドリは少しだけ恥ずかしそうにはにかんで「……はい」とだけ呟いて、再びペンを取る。机に向かう彼女の横顔に喜びが浮かんでいたのはきつと見間違いではないだろう。

尚、この最後の試合はモモイが辛勝して終えた。その時の彼女の顔は、それはそれは良い笑顔だった。



9戦1勝0負0分8無効でモモイの勝利で幕を閉じた、突発的な格ゲー勝負。ゲーム機とモニターを片付け、少し広く感じる部室にモモイ、ミドリ、先生の3人は座って……今日の本当の目的を話し始める。「……お姉ちゃん、こんなに遊んでばっかりで……今日の部活の目的、覚えてる?」

「あ、そうだった」

「そうだった……?」

「ち、違うのミドリ! これは言葉の綾! ちゃんと覚えているから! ね!」

「……そういえば、まだちゃんと話を聞いてなかったね」

先生がそう呟くと、ミドリは信じられないものを見るような目でモ

モイを見た。姉に電話を頼む時、ちゃんと先生に今日の要件を伝えておいてと話した筈なのだ。それなのに彼が知らないという事は……モモイが伝え忘れたという動かぬ証拠だ。

「えっ、お姉ちゃん……先生に何も説明していないの……？」

「やめてミドリ！ そんな目で私を見ないで！ 今！ 今から言うからッ！」

モモイはわざとらしい、余り似合わない咳払いを一回してから。

「今日は——次回作のアイデア出しをしようと思って！」

ゲーム開発部の次回作。先のミレニアムプライスで特別賞を授与されたが、廃部の撤回はされず来季まで保留の形になった。今すぐに危機が訪れる、という訳ではないが近い将来ではあるため、今のうちに準備をしておくつもりらしい。

そこで偶々先生の手が空いているのを気づき、思い切って呼んで——

——そして、今に至る。

「……最近、あんまり顔を出せてなくてごめんね」

「ううん、先生が忙しいのは知ってるから……今日は来てくれてありがとう！」

「此方こそ呼んでくれてありがとう。それで、私は何をすればいいかな？」

「次回作のアイデア出しをしてもらいたくないな〜って。多分、先生なら面白い意見とかアイデアとか一杯出してくれると思うし……」

チラチラと先生を見るモモイの目には、彼に対する大きな信頼が煌めいている。彼ならば何とかしてくれるかも——という期待。以前に助けてもらった時から、彼女の中で彼の株価は鰻登りだ。だから、今回も彼を求めた。

勿論、先生に彼女達ほどゲームの知識はない。クリエイターとしても、プレイヤーとしても。故に紡げる意見は素人目線になってしまうし、制作のアドバイスなんて到底できっこない。

でも、彼女の瞳を裏切る事なんて出来ないから「呆れられないように頑張るよ」と、笑って応える。

「それで、この格ゲーは……」

「あ、それはお姉ちゃんのアイデアなんです。何も浮かんでない状態で悩んでもいいアイデアは出て来ないから、先にゲームを分析しようって」

「ああ、だからこんなに……」

落とした視線の先には、大量のゲームとゲーム機本体。彼女達の分析作業に使ったものだろう。よく見れば先生でも名前を知っている著名な作品が大半だ。ユーザーから高い評価を受けているゲームをクリエイター目線で分析し、それを自作に取り入れてグレードアップを目指す……確かに、理にかなっているだろう。

「……それにしても、色々なゲームを集めたんだね。次回作の方向性も併せて決めるのかい？」

「いえ。もう方向性は決まっています……うちの次回作は『まったりスローライフ系ダンジョン探索型RPG』です」

「これまた随分詰め込んだね。でもスローライフでRPGなら、この辺りの要素は必要なさそうだけど……」

落とした視線の先には、無数のゲーム達。SFロボット、シューティング、音ゲー、格ゲー、ホラー……ざっと見る限り、この辺りの種類は一通り網羅している。まったりスローライフ、ダンジョン探索、RPGという要素にこれらのジャンルは合わないんじゃないのか——そう思っていると、モモイが勢い良く立ち上がった。

「何言ってるの先生！ 確かに一般人から見たら、ダンジョン探索型RPGと格ゲーに接点がなさそうに見えるかもしれないけれど、それだけで判断するのはNGだよ！ 次のミレニアムプライスを狙うなら、誰にも予想がつかないような新しい挑戦が必須！ 先入観を捨て、あらゆる偏見を乗り越えてこそ、新しい地平線の向こう側に辿り着ける……！」

「全く関係なさそうなジャンルの要素を組み合わせたら、意外と面白いゲームになるかもしれないよ」

「あっ！ ミドリ！ 私のセリフ取らないですよ！」

「お姉ちゃんが勿体ぶって言わないからだよ」

「うわーん！ 酷いよー！ 先生、慰めて〜！」

「はいはい」

抱き着いてきたモモイの頭を撫でながら、彼は視界の隅で動く猫の尻尾のような何かを見つめる。アレは一体どういう原理で動いているのだろうか。そもそも、アレは人体から生えているのだろうか、それとも着脱可能なのだろうか。キヴォトスには不思議が多いが、その中でも彼女達の尻尾はそのランキング上位に位置する。先生の中では、尚、現在ぶつちぎりの一位はコハルの首から縦に伸びているあの黒い線だ。

「皆、頑張ってるんだね」

「そりゃ、勿論!」

「はい。私とお姉ちゃんだけじゃなくて、ユズちゃんとアリスちゃんも。今度こそ皆で一緒にミレニアムプライスを取るって約束しましたから」

「うん! それが、今私達に与えられたクエストなんだ!」

「——モモイ、ミドリ、先生! 緊急事態です!」

アイデア出しを行おうとしていた3人の耳に聞こえた声は、明るい声。アリスの音。ユズと一緒にいた彼女は緊急事態という不穏な言葉を携えて来た。

——先生は少しだけ、意識と神経を研ぎ澄ませる。どんな緊急事態でも、即座に対応できるように。

「ついにユズがオンライン10連勝を超えました!」

「えッ!? 本当!?!」

「このバランスが終わったゲームで10連勝も!?!」

「……それは、凄いね」

肩透かしを食らった先生は、安堵したような溜息を吐いた。

アリスの冒険

ゲーム開発部の次回作のジャンルは『まったりスローライフ系ダンジョン探索型RPG』だ。スローライフとは銘打つても、メインとなるのはダンジョンの探索。必然的にその構造には力を入れなければならない。

決められたダンジョンか、ローグライクか。その二択を迫られた時、アリスはローグライクの方が良いと答えた。毎回構造が変化する為、出会えるモンスターやアイテムにバリエーションがある……という点で。確かに、ユーザー目線から見れば毎回同じ一本道よりも、其の方が長く楽しんで貰いやすい。

尚、前回ゲーム開発部が作ったローグライクゲームには『先生のはなまるシール』なるアイテムが登場していたらしい。はなまるシールなら自分よりココナの方が似合うよな、なんて思いながらアリスの熱弁を聞いて。

そして、今は。

「華やかなビジュアルとこだわりが大事なんだよ！」

「それは確かにそうなんだけど、それが結局無駄になっちゃったら意味無いじゃん。私達にもリソースにも限界はあるんだから、今はまだ届かない頂点を突き詰めるより実現可能な現実的なラインの話をしてようよ」

「でも、それだと地平線の先の景色を見れないよ！ 限界を突破できないよ！」

「お姉ちゃんはいつもそう言って……！」

理想を突き詰めるモモイと、現実的なラインで妥協したいミドリが言い争っていた。何方の言い分にも一理があつて、尚且つ2人ともその部分をちゃんと把握しているからこそ余計に平行線を辿るばかり。

こうしたい、ああしたい、その繰り返し。どんどんとヒートアップしていつて——。

「先生の意見はどう?！」

「ええ。こういう時こそ先生の意見が必要です！ どちらが正しいと思いますか？」

と、蚊帳の外で置いてきぼりにされていた先生に白羽の矢が立った。

「うーん、とりあえず2人とも落ち着いて……」

「やっぱり派手な方がいいよね!？」

「実現可能なラインの妥協が必要ですよね？」

ずい、と先生に顔を寄せる2人。苦笑いを浮べて「喧嘩は良くないよ」と諭しても逆効果で。さて、2人を傷つけずに切り抜けるにはどうしたものか———と黙っていたら助け舟を出してくれた生徒が一人。

「ちよ、ちよつと！ 皆ストップ！ 先生が困ってる……!」

「あ……」

「ご、ごめん……」

「このまま論争を続けても、先生に迷惑をかけるだけだよ。だから……ここは、ゲーム開発部で代々受け継がれるアレで決めた方が良さと思う」

「なるほど！ アレですね、ユズ！」

ゲーム開発部に代々受け継がれる伝統的な方法。それなりの頻度で双方の意見が平行線になってしまったため、それを解消するために生み出された酷くシンプルな決闘。

即ち、勝者の意見は絶対。ゲーム開発部らしく、ゲームで白黒つけるのだ。

モモイとミドリが今回選んだのは『フルゼリー大戦』なるゲーム。それで互いの意見と平行線に終止符を打つ。

「さあ、後には引けないからね！ ミドリ！」

「ふん！ お姉ちゃんこそ！」

2人はゲームコントローラーを手に取った。



2人がゲームをしている間、アリスは先生を連れて外に出ていた。ユズ曰く、「先生と一緒にいたら、何か特別なインスピレーションを得られるかもしれない」らしい。

明るい光に照らされるキャンパス。人通りも多くて、活気に満ち溢れた声が四方八方から聞こえる。

「パンパカパーン！ アリスと先生は、村の外に出る事になりました！ 見習い勇者アリスと先生の冒険は此処から始まるのです！」

「今日は見習い勇者なんだね、アリス」

「はい！ 今日のアリスも先生もレベル1の見習い勇者です！ 今までは冒険の時に伝説の勇者から始めたりもしましたが……その時、モイがこう言いました。『伝説の勇者がレベル1のスネイルを倒す冒険って、少し変じゃない？』と」

「確かに……」

「はい。なので、『最初から冒険の始まる町の周辺に伝説のドラゴンを配置する！』と言っていたのですが……ミドリとユズが必死に止めてました」

何ともモイらしい案である。大方、伝説のドラゴンが近くにいるからこの町に滞在している……という理由付けを行いたかったのだろうが、納得はできてもユーザー側からすれば理不尽極まりないだろう。目を付けられた途端終わりの即死トラップが配置されている最初の町なんてコントローラーを投げつけたくなる。

「あの時、皆が言っていた事を全部理解した訳ではありませんが……それでも、今日は折角先生と一緒に冒険できるので、レベル1から始めます！ 少しずつモンスターを倒し、レベルアップして、伝説の勇者を目指しましょう、先生！」

「うん、頑張ろうね」

「はい！ ……ですが、こうして冒険を始めるにあたって、アリスは悩んでいます。ユズのクエストをクリアするためにはどうすれば良いのでしょうか……？」

アリスの疑問に彼は「そうだね」とワントンポ置いて。

「取り敢えず、前進してみるのはどうかな？」

「前進？」

「此処で立ち止まってるだけではインスピレーションなんか湧いてこないからね。人と関わって、話して、共感する。それが第一歩だよ。それに、アリスが言っていたよね。勇者の冒険は、前進することから始まるものだって」

その言葉にアリスはハツとしたような顔をして……それから満面の笑みで、先生の手を取った。

「はい！ 出会いもバトルも、レベルアップやクエストだって！ 始まりは前進からです！ 先生は素晴らしい知識をもっていますね！」
「アリスの受け売りだよ。全部、アリスから教えてもらった大切な事さ」

「えへへ、はい！ 先生！ 行きましょう！ 前進です！」



アリスに手を引かれ、先生はキャンパスを歩く。今訪れている場所は運動スペースの一角にある陸上競技用の広大なトラックだ。

「——いち、に。いち、に」

そこで、2人は声を聴いた。リズムカルな掛け声と足音、呼吸音。

誰かがこのトラックを走っている。

そして、アリスはハツとした分かりやすい顔を浮べて。

「アリス、分かりました！ ミレニアムのキャンパスで発生する特殊イベント……ミレニアム・ランダムエンカウントイベントの前兆です！」

「ランダムエンカウント……？」

「はい！ 冒険中に遭遇するフィールドイベントです！ 何が起こるか分かりません。先生、油断は禁物です！」

そう言い放ち、先生を庇う様に前に立つアリス。しかし、彼はエンカウントするであろう人物が誰か既に分かっていた。乱れの無い足音と掛け声、トラックという場所。此処まで条件が揃ってしまえば、分からない訳がない。

「こんにちわ、スマイレ」

「——あら、こんにちわ、先生。^{トレーナー} 今日も良い運動日和ですね。トレーナーも一緒にいかがですか？」

「お誘いありがとうございます。でも、ごめんね。今日はアリスと一緒になんだ。運動はまたの機会に、ね？」

ミレニアムのトレーニング部。乙花スマイレ。スポーティーなトレーニングウェアの上から指定のジャケットを羽織る、すらりとした彼女は今日も今日とて運動に精を出していた。

「これはスマイレ先輩との遭遇イベントだったんですね！ スマイレ先輩は今日も『運動冒険』中ですか？」

「はい。軽くジョギングでもしようかと思いましたが。アリスさんも『冒険運動』中ですか？」

「はい！ 今日は先生と一緒に見習い勇者の冒険中です！」

「成程……毎日運動していて偉いですね」

「冒険は継続が大事ですから！ サボったらすぐにレベルが下がってしまいます。デイリークエストを忘れるのは罪だと、モモイも言っていました」

「ええ、運動は地道にコツコツと続けるのが肝要です」

噛み合っているような、噛み合っていないような、何とも言えない会話を繰り返している2人。どうやら2人はよく会うようで、その度に会話をして仲良くなったようだ。アリスの友人はもうゲーム開発部の中だけに留まらず、その人当たりの良さや明るさでその輪を広げている。それが先生は嬉しくて、思わず笑みが零れてしまう。

「トレーナーと一緒に居るアリスさんを見ると、私も負けられなくなってきました」

「アリスもです！ スマイレ先輩に負けないようにレベル上げを頑張りますー！」

「ええ。お互い、頑張りましょう。お先に失礼しますね、トレーナー、アリス！ ジョギング20km、参りますー！」

「オーバークワークには気を付けてね」

▼

スマイレに負けないよう意気込み、揚々と進んでいくアリス。その活動範囲はミレニアムのキャンパスの中に収まらず、いつの間にか郊外の方まで来ていた。彼女の辞書に『止まれ』の文字はない。進めるところまで突き進むのが彼女のポリシーだ。それに、今までとは違う所に来たらインスピレーション……アリス風に言うと、予想外のイベントが起こるかもしれない……らしい。

その予感はずらずと雖も遠からず。

「あつー……ご主人様とアリスちゃんだ！」

数m離れた場所、満面の笑みを携えて大きく手を振るアスナが居た。その隣にはカリンも居て、彼女も小さく手を振っている。2人の服装は何時ものC&Cの仕事着たるメイド服ではなく、ミレニアム指定の制服。アスナはシャツのボタンを大胆に開け、スカートを折って短くして今風のギャルっぽく。カリンはシャツの上からカーディガンを纏い、アスナよりは少々きつちりとした出で立ちをしている。

「こんにちわ、アスナ、カリン。珍しい格好だね」

「そうでしょ！……どう、ご主人様？ 似合ってる？」

「うん、似合ってるよ」

「何時もと違う服装……新ジョブへの転職……」

そして、アリスは「はっ！」と何かに気付いたような声を上げて。

「アリス、気付きました！ 2人はメイドから新しいジョブ……女子高生に転職したんですね！」

「いや……私も生徒だから。そもそも、これが普段の格好というか……」

「女子高生は強いジョブだとアリスは知っています！ モモイも良く言っていました。そう——女子高生は寝る前にアイスクリームを食べても体重計が怖くないジョブなのだ！」

「普通に怖いけど……」

「あははっ、その通り！ アリスちゃん鋭いね！ 私達は今、ジョブチェンジして秘密のクエストを進行中なんだ！ これはその為のユ

ニフォーム！」

ノリの良いアスナは即座にアリスに合わせた、彼女の分かりやすい言葉で答える。メイドから女子高生にジョブチェンジして、その姿で大衆に潜み秘密のクエストを進める……その文字列がアリスのロマンスに触れたのか「なるほど、そうなのですね！」と言って目を輝かせている。

「秘密……情報収集かい？」

「うん！ 最近のゲヘナとトリニティの情勢が気になるって、リオ会長が言ってるね」

「……エデン条約かな？」

「うーん、確かそうだった気がする！ なんだっけ、何か動き？ 予兆？ そういうのを調べてほしいって言われちゃって！」

「アスナ先輩、ちよつと……」

「だから制服を着てね……通りすがりのゲヘナ生とかトリニティ生いないかなって。見かけたら声かけよう！ って思ってる！」

きよろきよろと辺りを見渡すアスナ。だが、彼女達のお目当てのゲヘナやトリニティの生徒は見当たらない。

「……まあ、そんな感じ。ゲヘナの方バンデモニウム・ソサエティ魔殿や、トリニティの

ティーパーティーの動きを今は調べている。2校とも規模が規模だから、ミレニウムも慎重に事に当たらないと……」

「なるほど、アスナ先輩もクエストを受けて冒険しているんですね。アリスと同じです！」

「本当？ アリスちゃんと同じだよ！ お揃い！」

「アスナ先輩。これ以上話すとアカネが……」

アスナの袖を引きながらカリンが苦い顔で呟くと、「あ、そうだった！」と言って。

「アリスちゃん、ご主人様！ さっきのは秘密だよ？」

「勿論、口外はしないさ」

「……まあ、先生とアリスなら良いか」

「はい！ アリス、秘密は守ります！ ゲームでも、秘密を洩らすと呪いを受けたりしますから！」

「あはは！　そうそう！　アリスちゃんはいいつも元気だね！　ところで、アリスちゃんにご主人様は何してたの？」

「アリスと先生は冒険中でした」

「おお、冒険！　面白そうー！　それ、私もやりたい！」

「はあ……先輩、任務を忘れないで……」

そう呟き、溜息を吐くカリンを見ると彼女の気苦労が知れるようだった。恐らく、この任務中に何回も余計な事を喋りそうになって、その度にカリンが止めてきたのだろう。

——アスナのコミュニケーション能力を活かしつつも、彼女単体だと何が起るかわからない為、ストッパーとして常識人のカリンを付ける。何となくアカネがC&Cのメンバーをどう思っているのかわかる人員の配置だった。

「パーティーメンバーが増えるのはいつでも歓迎です！　メンバーが増えたら、使える戦術の幅が広がりますから！　パンパカパーン！」

アスナ先輩もカリン先輩も、次の冒険では仲間です！」

「わあい！　パーティーに入った〜！」

「私も……っ？」

「はいー！」

向けられた向日葵のような笑み。邪気も裏も一切存在しない、無垢をそのまま形にしたような彼女にカリンも釣られて穏やかな笑みを浮べて。

「そっか、よろしくね」

——と、カリンもアリスのパーティーメンバーとなる事を快く承諾した。

「それじゃ……アリス、先生。私達は先に失礼する」

「うん、またね」

「じゃあね！　アリスちゃん、ご主人様！」

「はい！　次のクエストは一緒にやりましょう！」

そして、予期せぬ邂逅を交わした4人は再び己のやるべき事と向き合う。アリスと先生はインスピレーション探しに、アスナとカリンは情報収集へ。互いに背を向け、歩き出そうとした時……カリンは徐に

振り返った。伝え忘れた大事な事を、伝えるために。

「ああ、そうだアリス。ネル先輩が探していた」

「えっ!? チビメイド様がアリスの事をですか!？」

「うん。何か用事があるそうだけど……まあ、会ったらよろしくね。

先輩はアリスの事を本当に気に入っているみたいだから」

「あ、うう……」

「それじゃ、バイバイ」

そして、彼女達の背が見えなくなった頃。アリスは若干怯えているような顔で先生の袖を引いて。

「先生！ こうしている場合じゃないです！ ネル先輩がいつ現われるか分かりません！ 一先ずこの場から退却しましょう！」



「あ、そこのゲヘナの子！」

「え、誰？ あたし達になんか用？」

「私達はゲヘナに編入予定なんだが……」

アスナが声を掛けたのは現在在籍している生徒ではなく、これから編入する予定の生徒であるキララとエリカ。2人はアスナとカリンを訝し気に眺めて……まあ街頭アンケートみたいなものと適当に納得した。

「お、そうなんだ〜！ 編入前に気になる事があってね〜」

「ああ。万魔殿パンデモニウム・ソサエティのリーダーについてなんだが……」

「え？ 今のリーダー？ ねえ、知ってる？」

「さあ？ イブキちゃんじゃないの？」

「いや、羽沼マコトなんだが……」

「え？ マコト？ 誰それ」

——頑張れ、マコト。色々と。



アリスと先生は再びミレニアムのキャンパスに戻っていた。どうやらネルと遭遇しなかったためらしいが、ミレニアムの方がぼつたりと会いそうな気がしなくもない。

近未来的な校舎の中。白を基調とした清潔感のある廊下には生徒で賑わっていて、活気もある。

——先生が守りた^{守れなかつた}かった、少女達の日常。己を縊る罪と後悔の茨。

楽しそうな声をバックミュージックにアリスは再び冒険を開始する。

「アリスには分かります……此処に、新しいアイテムの気配が！ それでは探索を始め……」

「あつ、アリスちゃんだ〜」

探索を開始しようとしたアリスに声を掛けたのは、指定の制服と白衣を纏うミレニアムの生徒2人。彼女達はまるでマスコットを見つけた様な表情でアリスの方まで歩み寄って来た。

「今日はどうしたの？ 今日も武者修行中？」

「武者修行ではなく勇者修行です。そして今日は見習い勇者バージョーンです！」

「それって何か違いあるの……？ あんまり分からないけど」

「隣の人は……シャールレの先生？」

「はい！ 先生です！ 勇者パーティーのマスコットです！」

「初めまして。よろしくね」

成人男性がマスコットを名乗るのは多方面に失礼な気がしたので、簡易的な自己紹介に留める。だが、その物腰柔らかな……端的に言う^とと頭まで緩くなりそうな、ゆるふわな雰囲気^がマスコットという言葉に見事にマッチしてしまったようだ。

「不思議な雰囲気の人だね……なんかマスコットっていうのも理解でききるかも……」

「そうかな……ま、いいや。アリスちゃん、今日も冒険頑張ってるね〜」

「はい！ アリス、応援を受けて充電しました！」

——そうして、アリスは澱みなくクエストを熟した。頻繁にミ

レニアムの中を歩き回り、道行く人殆どに声を掛けて、話をして、仲良くなっている所為か彼女はちよつとした有名人のようで、クエストの報酬と称してお菓子やケーキを貰ったり、或いは一緒にゲームをプレイしたり。兎に角、彼女はミレニアムの生徒からとても好かれていた様だった。アリスもその可愛がりは一切嫌がる事なく、寧ろ嬉しそうに受け入れている事もそれを助長させている。その様子はミレニアム生徒全員の妹。可愛がるな、と言う方が無理なレベルだった。一通りのクエストを熟した後、アリスと先生は校舎から出て広場を歩いていると。

「むむっ！ そこにいるのはもしや——」

「ああ、先生とアリスか」

「やほ」

「こ、こんにちは！」

「こんにちわ。皆が此処にいるのは珍しいね」

広場に居たのはエンジニア部の3人……ウタハ、コトリ、ヒビキ。普段はラボからあまり出て来ない彼女達がこうして外で集っているのは、先生の言う通りとても珍しい。

先生の言葉はあくまで世間話の一環だ。取り留めのない、気にするほどでもない些細な疑問。だが、それはどういう経緯を辿ったか不明であるが『エンジニア部のスケジュールに興味がある』と曲解されてしまい——説明好きなコトリがずっと近寄って来て。

「いいでしょう！ 私から説明しましょう！ 私達エンジニア部は朝7時に起き……」



「……して、此処に至った訳です！ そうですよね、ヒビキ！ ウタハ先輩！」

たっぷり60分。一日の始まりから今に至るまでの全てのスケジュールとその意図を話し終えたコトリは満足げに話を区切った。尚、先生もアリスもとても律儀に聞き流すことなくちゃんと話を聞いて

ていたため、コトリは内心感激していた。説明や解説が好きな身としては、興味を持って聞いてくれるのはそれだけで感涙物なのだ。

「あ、うん、まあ、そんな感じ……多分？」

「つまり、足りない装備を補充するために出てきたって訳さ」

コトリが詳細過ぎる説明をして、ヒビキが微妙な相槌を打って、最後にウタハが内容を端的に纏めて締めくくる。それがエンジニア部の日常。

「ふむふむ……毎日新しい武具を作り続けるその姿……流石、光の剣を作ってくれた鋼鉄の鍛冶屋ですね！　アリス、感激しました！」

「あ、あまりよく分からないけど……誉め言葉として受け取っておこうかな」

「鍛冶屋……アリスらしい言葉選びですね！」

「……まあ、広義で言えば、確かにそうだね」

「アリスの武器はエンジン^私ニア部^達の自信作だし……」

ヒビキがそう呟いたのち、3人はアリスの方……否、正確には彼女が背負っている武器へ歩み寄る。

「アリス、最近レールガンの……いや、光の剣の調子はどうかな？　不調とか気になる点とかない？」

「はい！　バツチリです！　アリスにとって光の剣は宝物……そう、勇者の象徴ですから！　大切に扱っています！」

「そうかい。なら良かった。何かあったら、何時でも来てくれて構わないよ」

アリスの言う通り、光の剣は本当に大事にされていた。こまめなメンテナンス……分解作業も伴う少々面倒なものも定期的に行っていて、毎日の点検もちゃんと行っている。武器に大きな愛情が無いと、愛着が無いと、こんな事は出来ないだろう。作ったものがこんなにも大切にされているのはエンジニア冥利に尽きる。

——良い主に巡り合えたね、と内心でウタハは己の傑作に微笑んだ。



その後も、アリスの冒険は続いた。多くの出会い。多くの会話。多くの縁。全て、アリスが一から紡ぎ上げた、今の彼女を形作る大切なもの。アリスがキヴォトスで、ミレニウムでどう生きて、どう過ごしているのかがよく分かる交流。

あの時からずっと、アリスは成長している。知識を重ねて、経験を重ねて、物語を紡いで。1日という大切な時間を通して、彼女はまた一歩生命として成長する。

そして——今日一日を締めくくる、最後の出会いは。

「——見つけた、チビ」

「や、野生のチビメイド様が現れました!」

「ああん!? 誰が野生のチビだ!?!」

アリスが怖れていたラスボスとのエンカウント。彼女を避けるために色々な場所を歩き回っていたのだが、とうとう捕まってしまった。

「あ、ネル。久しぶり」

「んだよ。先生も一緒に居たのか。丁度良かった。2人ともちよつと付き合ってくれ」

「ええっ!? アリスはまだ冒険の途中で、ボス戦には……」

「ほら、さっさと行くぞ」

先生の背に隠れようとしたアリスだが、身のこなしはネルが数段上。隠れるよりも前にネルは彼女の手を掴んだ。逃がすつもりなんて欠片も無い、固く握られた手。痛みは全くないが、代わりに途轍もない圧がある。

「アリス、チビメイド様に捕獲されてしまいました! アリスの冒険はここまでなのでしょうか!? バットエンドになるなら、せめて特殊スチルが欲しいです!」

「何言ってるんだ……んな事より、チビメイドって何だよ! もうちつと違う呼び方をだな……」

「チビメイド様以外の呼び方……?」

それ以外に何かあるのか、と言わんばかりの声音と表情にネルは内

心『こいつマジか』と思う。そもそも、散々怯えているのにも関わらず、頑なに『チビメイド様』から呼称を変えない時点で割とぶっ飛んでいる。

コイツは大物だな、なんて取り留めのない事を考えながらネルは溜息を吐いて。

「先輩でいいだろ、普通に。ほら、ネル先輩って呼べよ」

「うーん……はい、分かりました！ チビネル先輩」

「チビを外せよッ！」

「相変わらず仲良いねえ」



ネルの有無を言わさない連行、辿り着いた場所は古き良きゲームセンターだった。音ゲーやクレイニングゲーム、UFOキャッチャーが立ち並ぶ雑多な店内は人の数が疎らで殆ど貸し切り状態。煌びやかな光と音が網膜と鼓膜を刺激する空間で、ネルとアリスは2人仲良く隣通しで座っていた。

「くっそ、また負けた！ ぐああーッ！ ムカつく！ んだよその技!? ハメ技じゃねえかッ！」

「ユズはハメ技もゲーム要素の一つだと言っていました！ 抜けられない方が悪いそうです！」

「テメエ、セコい手を使ってんじゃねえよ！」

「うわあああん！」

アリスの胸倉を掴まんばかりの勢いで立ち上がったネルがその顔を怒りで歪ませると、刻まれた恐怖が呼び起こされて半泣きに。かれこれ10回以上、このやり取りが繰り返られていた。そして、その繰り返しされた回数分だけネルはアリスにボコボコにされた事になる。尚、ネルはアリスに一回も勝っていない。連敗記録を絶賛更新中である。

——こうして、2人がゲームをプレイするのは今日が初めてではない。対戦数自体も50回を超えているし、今回は偶々ゲームセン

ターで遊んでいるが、ゲーム開発部の部室で一緒に遊ぶことも多い。当然アリス以外にもモモイやミドリ、ユズとも対戦しており……その悉くに敗北を喫している。

「くっそ、次だ！」

そう息巻き、再び2人は同じ筐体に向き合う。当初は荒削りだったコンボもアリスの指南によって少しずつ繋がるようになり、対戦数を重ねる毎に上達……しているのかは分からないが、少なくともワンサイドゲームになる回数は減ってきた。

「うわああん！ ネル先輩のコンボが繋がりません……」

「もっかい最初からだ！」

悪態を吐きながらも投げ出す事は無く、その熱意に押されるようにアリスの指南は続く。時間はあつという間に過ぎ去って、3人がこの場所に訪れて1時間が経過しようとした頃……ある少女がこのゲームセンターに訪れた。それに気付いた先生が軽く手を振ると、彼女もまた穏やかな表情で優雅に手を振り返す。

そして、彼女は音も気配も無くネルのすぐ近くまで歩み寄った。とても、攻撃的な笑みを携えて。

——アリスの背筋に冷たい汗が流れた。

「あの……」

「おいゴルア！ 画面から目を離すんじゃないやねえ！ アタシの華麗なコンボを——」

「どこでサボっていると思ったら、こんな所にいらっしやったのですね、部長」

聞き覚えのある、だが想像を絶するほど冷たい声が耳のすぐ傍で聞こえた瞬間、ネルは肩を跳ねさせながら驚き筐体の椅子から飛び退いた。

「うわッ！ あ、アカネ!? いつの間……!」

「ちよつと前だよ」

「気付いてたなら教えろよ先生！」

「熱中してたし、邪魔するのも悪いかなーって」

ネルの怒りをそよ風のように受け流した先生は全く悪びれていな

い苦笑いを携えて「ごめんね」と付け足す。面白そうだから放置したのだ。仮に何処かで同じようなシチュエーションがあった場合、彼は満面の笑みで口を噤んで成り行きを見守るだろう。

「私、言いましたよね？ 今日には会長から任務の通達があるから準備をしておいてください、と」

「……あ」

完全に忘れていた事がよく分かる、ネルにしては気の抜けた声。かなり大事な用事を忘却の彼方に追いやっていた彼女は思わずコントローラーを動かす手を止めてしまい……そして、その隙を見逃してくれるアリスではなく、残り僅かだった彼女の体力ゲージを一切容赦なく消し飛ばした。

「アリスの完璧な勝利です！」

「ちよ、テメエ！ 今のはナシだろ！」

「勝負の世界は残酷なもの。常に結果だけが真実なのです。それとも、ネル先輩は戦闘中によそ見してやられても、今のは無効だと言うのですか？」

「……へえ、言ってくれるじゃねえか……！ 上等だ！ その挑戦——」

「ゲームは一日一時間。約束、しましたよね？ さあ、任務に戻りますよ、部長。これ以上は許しませんからね」

椅子に座ったネルをひよいと持ち上げ、そのまま担いだアカネは澀みなく出口に向かう。それはまるで、聞き分けの無い子どもを叱る母親。ネルの身長とアカネの大人っぽさも相まって、容姿の乖離に目を瞑れば親子と言っても通用しそうであった。

「あ、ちよつと待ってくれアカネ！ あと少しだけ……！」

「それでは失礼します、先生、アリスちゃん」

「またね」

▼
哀れ、ネルの願いは聞き届けられる事無く連行された。

アリスと先生がゲームセンターを出たのは空が茜色に染まる頃だった。夕焼けの色、また明日と言い合う時間。

鳥が啼く、陽の落ちる街並み。さざめく音が遠く聞こえる。2人は帰路に就く。

「そういえば、アリスはネルが怖かったんじゃないかい？」

「……確かに、今もメイド服は苦手ですが……今は味方です。モモイが言っていました、敵から味方になると大体弱体化する、と。なのでネル先輩も弱くなっている可能性が高いです。だから、アリスはネル先輩の事はもう怖くありません。ネル先輩も、もう仲間ですから！」

「そっか」

「……ですが……ネル先輩とゲームする間、冒険が出来ないのは困ります……だから、先生と冒険する大事な今日だけは、その……」

「最近、あんまり顔を出せてなかったもんね」

信号が赤になり、2人は立ち止まる。この先はミレニアムのキャンパスの正門。別れは近い。それを惜しむように、会えなかった時間を埋め合わせるように先生はアリスの頭を撫でる。

彼だつて別段鈍い訳ではない。自分がアリスに大切に思われている事はちゃんと分かっているし、寂しい思いをさせてしまった事だつて……ああ、分かっている。

「私は、今日アリスと過こせて……冒険ができて、とても楽しかったよ」

「ッ！　そうですか？」

「勿論、本当に楽しかった。アリスはどうか？　今日の冒険は、今日という一日は楽しかったかい？」

暮れ泥む空は攫われそうな色を描く。焼かれた色に照らされる、振り返った彼。その光景が妙に現実感が無かったけど。

「アリスは……アリスも、今日の先生との冒険は楽しかったです！　その、残念ながらユズのクエストは進める事が出来ませんでした……それでも、アリスは勇者です！　勇者は諦めないものです！」

一日中、日が暮れるまで歩き回った。ミレニアムのキャンパス内を、郊外を。その中で、アリスは煌めく様に生活を営んでいた。様々

な生徒と出会い、可愛がられたりしながら、一生懸命この星で冒険するアリスは——本当に、眩しくて。

「まだ見習いですが、これからもクエストを熟し、沢山レベルアップして……いつかは、この光の剣で世界を脅かす魔王を倒します！」

だから、どうか——。

「その時まで、アリスと一緒に冒険してくれますか、先生？」

「うん、勿論。これからもよろしくね、アリス」

繋がる2つの手。

その手をいつまでも、離さずにいられたなら。

斬刑

事の発端は、ヴェリタスが謎の機械を偶然発見し、それを自身の部屋に運び込んだことだ。

継ぎ目も無い球体型のボディと、そこから垂れ下がる数本の触手と、蜘蛛のような足。幾ら弄つてもうんともすんとも言わないそれに不気味さを覚えた彼女達は先生を呼んだ。よく分からないものが見つかったから助けてほしい、と。

ヴェリタスから機械の特徴を聞いた彼は、即座にその謎の機械が無名の守護者だと至り、機械に触らない旨と、その場から離れてほしい旨を告げて通信を切り全速力でミレニウムへ向かった。

向かう途中、彼は『間抜けが』と内心で己を罵倒する。学園の事情に精通している彼は当然の如く無名の守護者が活発化しているのを知っていた。そして、危険極まるそれらを掃討する為の作戦も既に立てていて、あとはリオの押印を待つだけであつたのだが……現実には彼の事情なんて知った事ではなく、待つてはくれなかった。

ならば、せめて——その一心で、彼は街を駆けていた。

切羽詰まったような、彼にしては珍しい余裕のない口調を聞いた少女達は『これちよつと拙いんじゃない?』と思いつながら、一先ず大事なもののだけ持つて部室の外に出たところ——ぼったりと、ゲーム開発部の少女達と出くわした。

聞けばヴェリタスが謎の機械を入手した、という話を風の噂で聞いたらしく、その見物に訪れたようだった。新作ゲームのインスピレーションを得るために。だが、先生が通信越しに言っていた内容を話すとあっさりと引き下がり、また別のインスピレーションを探しに4人は踵を返そうとして——その時、聞こえた。

モモイのゲーム機が起動する音が。

瞬間、アリスの様子が変貌した。まるで電池が切れたような……或いはPCが再起動したような。アカウント^人_格が、切り替わった。

「——起動開始」

日常が音を立てて崩れて。

「コードネーム、ALICE、起動完了」

少女達に決定的な終わりを突き付けた。

「プロトコルATRAHASSISを実行します」



先生が訪れたときには、もう既に戦闘は始まっていた。爆発して瓦礫と化したヴェリタスの部室と、断続的に奏でられる炸裂音と銃声。遅かった、と奥歯を噛み砕かんばかりに食いしばって彼は生徒達と接続する。

状況は全て把握している。アリスの人格がケイに切り替わった事、それがトリガーとなって無名の守護者が起動した事。C&Cは別の場所で起動した無名の守護者の対処に当たっているため、此処に来るのは速くて10分後。

通常の無名の守護者が相手ならば苦戦はしない。このメンバーでも十分に勝てるだろう。だが、相手にアリスが居るならば話は別だ。彼女が機械のスペックを過剰なまでに高めている。恐らくは神秘を供給しているのだ。それも、無名の守護者本体の方が耐えられずに自壊するレベルの量を。

「……アリス」

「有機体の生存反応を確認。照合……照合完了。プロトコルLONG INUSを実行します。救世主^{先生}に、死^{救済}を」

先生の声は届かない。否、届いている。届いているが——彼女 は止めなかった。苛烈を極める攻防、互いに一步も退かぬ凄惨な戦闘は、とうとうシツテムの箱の電力を食い潰す。途端に無くなるシールドと攻撃支援。生徒との接続は何か持たせているが、それも長続きするものではない。

故に——大人^{切り札}のカードを何時でも起動できる状態にした。

その善性を、輝きを見て彼女は不快そうに眉を顰めた。

——そうだ、あの眼だ。諦めを投げ捨てた不撓不屈。絶えず前

進し続ける鋼の決意。誰かみんなを救わんとする光の権化。例え手が折れても、足が折れても、死んでも、心だけは折れない。

その姿が、その心が、彼女は死んでしまいそうなほど大嫌い大好きだった。プロトコル Calvariae Locus を実行します。先生あなたに安らぎロブげを」

更なる出力上昇。それは何とか拮抗していた戦線を崩すのに充分過ぎる決定力を持っていた。徐々に押される前線、真綿で首を締めるように少しずつ敗北の足音が近づいてくる。

そして、ついに恐れていた事態が起きた。

「ミドリッ！ 避けてえッ！」

耳に届いた姉の声、絶叫。顔を上げると、謎の機械が刃を振り抜いていて——ミドリは『死んだ』と思った。理屈は無いが、あれは確かに己を屠るだけの殺意と機能を備えていて、切り裂かれた瞬間に絶命する——なんて、出来れば当たってほしくない直感が囁いた。

だが。

「——え」

刃とミドリの間、彼女を庇う様に白が立ち塞がった。何度も見た背中。何度も守られた手。なんで、なんて思う暇はなくて。伸ばした手は届かなくて。

「ごめん」

そう呟いた、彼の顔は見えない。

「おやすみなさい、先生。どうか、良い死後ゆめを」

何処か安堵したような、アリスの声。

そして——全ての銃声が遠のいた。

「——っ」

それは、あまりにも呆気ない幕切れだった。思わず興奮めだ、と呟いてしまうほどに拍子抜けで、無様で、三文芝居じみていた。

自在にうねる触手。そこから繰り出されるしなやかで鋭い斬撃。それは無防備な軟い皮膚を切り裂き、総頸動脈を切り裂いた。そこに一切の迷いも、狂いもない。人間一人を屠るのに必要十分な力、深さ

でいて、まるで撫でるように。

一拍置いて、ぱつと咲く赤い花。切り裂かれた首から溢れる夥しい量の命の色。それは周囲に飛び散り、瓦礫と化したヴェリタスの部屋と、彼のすぐ近くにいた生徒を毒々しく彩った。

「せ、んせ……？」

顔に、手に、髪に服に感じるのは少し前まで体に通っていた筈の温度。視界に映る彩度がきつい赤は少女達の思考を絶望に塗り潰す。周囲に立ち込める咽せ返るような血臭と、死の香り……。ホワイトリリーが散つて、その上から彼岸花が咲いた。

死人花——死体の上に咲く、血を吸った赫。葉見ず花見ずの曼珠沙華。

「な、なん、な、あ、あああッ……！」

全身が赤でべつたりと濡れた。濡れた。何で——答えは、もう分かっている。その筈だ。解は唯一つ、この目で見た。今、目の前で起きた事こそが現実だ。夢なんて都合の良い現実逃避に縋る事なんてできない。

首から溢れる鮮血が網膜に焼き付いて離れない。

髪に、顔に、服に、手に染みついた血の香りは拭い取れない。

零れた命の温度は忘れられない。

あの光景が、数瞬間のあの惨劇がずっと脳内でリフレインする。まるで少女達の首を縊る呪いのように。

だが、それでも——この場にいた全員が、その光景を現実として受け止められなかった。受け止められなかった。

視界がブレる。声帯が凍り付く。奥歯がみつともなくがちがちと音を立てて、心臓が早鐘を打った。酷い吐き気がして思わず口を押さえてしまつて……その所為で、掌に付いた彼の血が、口元にべつたりと。もう何がなんだか分からなくなつて、今自分が何をしているのかすら分からない。

ぱしやり、何かが水溜りに落ちる音。崩れ落ちた肉体が鮮血の元に斃れた。ぴくりとも動かない。

そして——ミドリは喉が張り裂けんばかりに絶叫した。

「いやあああああッ！」

銃を放り投げた彼女は糸の切れた人形のように倒れる先生を抱えて泣き叫んだ。何時もなら優しい笑顔を浮べていた顔はもう見る影もない。口から血の泡を零し、それよりも多くの血を切り裂かれた首から流す彼はミドリの呼びかけに一切の反応を示さなかった。眼も酷く虚ろで、呼吸の度に命が失われる。意識もあるのかないのか分からない。

「先生ッ！ 先生ッ！ 目を開けてッ！ 先生ッ！」

抱き締めると、彼の体の温度に絶望しか浮かばなかった。首から滴る鮮血。綺麗なままの肌に刻まれた致死の一撃、斬首痕。真一文字に切り裂かれた場所からは絶えず命が零れて、彼を黄泉の国へ連れて行くとする。

飛び散った血に反比例するような、青褪めた肌。これほど冷たい、命から肉塊に成り逝くモノを抱えるのは初めてだった。

身体の震えが、涙が止まらなくて。死んでしまいたいそんなほど苦しくて。

心ハイトローが、砕け――。

「揺らすんじゃねえ！」

その怒りに満ちた、だが何処か理知的な声は一瞬だけミドリの震えを止めた。そして、その一瞬でネルはひつたくるようにミドリから彼を奪い取り、その傷を見る。

切り裂かれたのは本当に必要最低限。然程深い訳ではない。だが、それでも総頸動脈を切り裂かれたのだ。即座に命に関わる致命傷。流れた血の量も決して少なくない。彼の体重から逆算して、死に至る流血量を算出。恐らくまだそのラインには至っていないだろうが、それでもあと数分で届く。一瞬の油断も許されない。そして、斬首痕以外に傷は見られない。処置しなければならぬ患部が一ヶ所だけなのは、此方としてもありがたい。

最後に虚ろな、蒼が明滅する眼を覗き込むと……僅かに瞳孔の収縮反応が見られた。小さく弱い脈もあって、自発呼吸も止まっていない。

——まだ、助かる見込みはある。

「今は止血が先だ。何が何でも血管を塞げ。ナノマシンを投与して、服を傷口に巻きつける。その後はミレニアムの保健室だ。全員ぶん殴ってでも処置に当たらせろ。アカネ、アスナは先生を連れて撤退。カリンは援護だ。アタシは此処で殿をやる」

「了解ッ！」

ネルの的確な指示の数々。C & Cのリーダーとしての状況判断能力は確かに先生の命を繋ぐ最適解を導き出した。

アカネが彼を治療しながら、アスナが持ち前の規格外の直感と幸運を活かして事前に危機を察知。そしてアカネや先生に矛先が向かない様に前衛を務める。

どうか、彼女の幸運が彼を守らんことを——今はそんな神頼みしかできない。

カリンはアスナとアカネの援護に徹させる。先生を抱えている今、アカネは戦闘は可能な限り避けた方が良いだろう。アスナだけでも充分だとは思うが、先生の命に関わる今、念には念を入れておく。出し惜しみはしない、フルスロットルだ。

そして、暴れるのか得意なネルはこの場で殿を務める。逃すつもりはない。一切合切、スクラップにしてやる。

適材適所とは正にこの事。エージェント1人1人の得手不得手を知り尽くしている彼女だからこそこできる人員配置であったが……それでも、間に合うかどうかは分からない。

しかし——諦めることだけはしない。

「ご主人様、意識を確かにッ。必ず助けてみせます……！」

「ご主人様の道は私達で切り開くッ！」

「もう先生に指一本触れさせない。敵は任せてッ」

先生を抱え、戦場から離脱する3人。その顔は焦燥と不安、恐怖に歪んでいるが、やるべき事は決して見失っていない。それぞれが先生を生かす為に、己の全力を尽くしていた。

そして、その背に追い縋る謎の機械。鮮血が滴る刃を携えた個体が再び彼に牙を剥かんとした時——ネルの手が閃き、破滅的な銃撃

音が奏でられた。怒りの爆発に伴い上昇した神秘によって何倍にも増幅された威力の銃弾は忽ち敵を滅ぼし、嵐の後には穴だらけの、原型を留めていない何かが残るのみ。

「おいチビ共、泣くのは早え。先生は助かる。Cアタシ達&Cが助ける。だから銃を取れ。前を向け。諦めるな。アタシ達で、コイツら全員叩きのめすぞ」

その言葉を聞いて、モモイとユズの相貌に僅かな光が灯る。あのC&Cが助けると言った、助かると言った。彼女達の強さは、心強さは良く知っている。だから、今回もきつと大丈夫だ。保健室できつと目を覚ます。眼を覚まして、きつと何時もみたいに笑ってくれるはずだ。

そう思つて、そう思い込む事にして、胸に巢食う黒を現実逃避の袋小路に叩き込む。そうしないと不安と絶望と焦燥でどうにかなりそうだったから。ネルの言葉が信じられない、という訳ではない。ただ、あの光景が網膜に焼け付いたままなだけで。

——2人は震える小さな手で、再び銃を握り締める。

「ヴェリタスはチビ共を見張つてろ。自暴自棄になんてさせるな。危なくなつたら撤退も視野に入れて良い。最悪、アタシ一人でもなんとかなる」

有無を言わせないネルの指示を前に、彼女達は静かに頷いた。荒事がそこまで得意な訳ではないが、それでもゲーム開発部共々真面目な戦力としてカウントされていないのは思う所がある。しかし、それも仕方のない事だろう。ネルの前では殆どの生徒が足手纏いになつてしまふのだから。

「ハレ、マキ、大丈夫ですか？ 辛いのであれば……」

「……まだ、大丈夫」

「あたしも……モモとユズは？」

マキの目配せに、モモイとユズは気丈に頷く。瞳孔が開き切つていて、どう見ても大丈夫な状態ではないが……それでも、此処に残る事を選んだ。大切な仲間の為に。

だけど、ミドリは。

「ごめんなさいッ……ごめんなさいッ……先生……」

「……ミドは、下がらせた方が良さそうだね」

大粒の涙を流しながら後悔を紡ぎ続けるミドリだけは下がらせた方が良い。もう戦える状態ではない。銃も放り出して、震える体で泣き続ける彼女をこの場に留まらせ続けるのは悪手であろう。

無理もない話だった。第三者の視点……離れた場所であの光景を見た自分達と違って、彼女は目の前で見てしまったのだ。飛び散った血も、その温度も、全て。慕っていた、好いていた人の斬首を脳に焼き付けて、その血を浴びて冷静でいられる訳がない。

だから、下がらせる——理屈的には正しい。だが、どうやって下がらせる？ 彼女一人では無理だ。ヴェリタスの誰かが付いた方が良いのだが……C&Cが3人抜けてしまった今、これ以上動かせる人間を減らすのは戦力的に少々厳しい。ネルは『一人でも良い』とは言ったが、相手は正体不明の敵。万一の事を考えると、残せる戦力が多いに越したことはない。

だが、しかし——思考が袋小路に入りかけたその時。

「何の騒ぎかと思つて来てみれば……こんな事になっていたなんて」

「……副部長」

ヴェリタスの副部長、各務チヒロがM27IAR^{バックドア}を担ぎながら瓦礫の山と化した元部室に足を踏み入れた。彼女は眼鏡の奥の瞳に訝し気な色を灯して、周囲を見る。

まず一番最初に飛び込んで来たのは謎の機械達。これは知っている。最近、ミレニアムの郊外で発見されている出所不明の何かだ。何故此処にあつて、起動しているのかは分からないが……それはいいだろう。大事なのは、それらが自分達に敵対しているだろうという事だけ。

そして、その機械の指揮官と思われるのは——。

「……何があつたのか分からないけど、あれが部室を？」

「はい。部室を破壊し、先生を……いえ、丁度良い所に来てくれました。彼女を任せてもいいですか？」

コタマにしては珍しい、切羽詰まったその様子にチヒロも少々驚い

だが……それだけ拙い状況なのだ判断して思考を切り替える。気になる事なんて山ほどあったが、聞くべきは今ではないと思い……彼女はミドリの方まで歩を進めて。

「立てる？ 立てないなら背負うけど……」

中ば条件反射のようにミドリは差し出された手を握る。己の手で。先生の血で染まった、赤い手で。

ミドリの手を引き、一先ず安全な場所まで離脱していくチヒロを視界の隅に入れながら……ネルは、目の前の見知った見知らぬ少女を見る。

「——おい、アリス^{チビ}」

普段なら肩を跳ねさせ、怯えつつも愛らしい反応を返してくれるアリス。しかし、彼女は虚ろな瞳でネルの向こう側、虚空を見つめている。

当然の如く反応は皆無。青空を写したような瞳は赤とピンクが混ざったような不気味な色合いに。そして、ヘイローもアリス本来の色からその色に侵食されつつある。

「テメエに何があったかは知らねえ。コイツ等との関わりも分からねえがよお……それでも、アタシの知るお前はそんなんじゃないかった。だから、よお——ちつとばつかし、寝てろ」

無数の無名の守護者^{謎の機械}を率いるアリスと、ミレニウムが誇る最強^{ネル}が再び激突した。



「……んで、何があったんだ？」

大半の無名の守護者を一人で叩きのめし、アリスの意識を刈り取つたネルは辺りの惨状を見渡しながら瓦礫の山に腰掛ける。耳に付けた通信機からひっきりなしに届く報告に眉を顰めながら、今の自分に必要な情報だけ聞き取り、記憶に留めていく。

「すげえ音がしたら来てみれば先生は拙い状態になっていたし、部屋が木っ端微塵じゃねえか。あのチビも分かんねえ事になっていたし

……ああ、テメエ等は大丈夫か？」

「そんな事より先生はッ」

「……首の皮一枚繋がった。これ以上の処置はウチじゃ厳しいから、D・U・の病院で治療中だ。護衛にはC&Cからアスナとカリン、セミナーから会計と書記が付いている」

「ミレニアムの技術でも厳しいって……そんなに先生の怪我は……」

「怪我自体は別に複雑じゃねえ。程度を無視して言えば単純な切り傷だしな。だが、輸血が出来ないんだとよ」

ミレニアムの保健室にストックしてある輸血パックはハイローを持つ者のフォーマットに合わせてあるため先生には使えない。故に、血が足りない場合は他の場所に態々足を運ばなければならぬのだ。キヴォトスの中にある無数の病院の中から、彼用の血がストックされている病院を見つけ出した上で。

だが、今回はそれらの工程を全てすっ飛ばせた。ノアの尽力のおかげで、彼女の力添えが無ければ……そう思うだけで背筋が凍り付いてしまう。

——総頸動脈の完全切断ではなく、損傷。ナノマシンの早期投与。ネルの指示。アスナ、カリン、アカネの尽力。救護班の懸命で的確な処置。過去の記憶を頼りにしたノアの協力。

最後に、アロナ。彼女は電源が切れても尚、傷口の拡大を防ぎ、血流を操作し、助かる状態を維持し続けた。これがなければ、彼は確実に帰らぬ人になっていただろう。全員が全員やれる事をやって、最善を尽くしたおかげで彼は首の皮一枚、命を繋ぐことができた。

「一応、覚悟だけはしておけよ。首を搔っ切られてんだ、いつ天秤が傾くか分からねえ」

「……ッ！」

彼の命は依然薄氷の上、いつ黄泉に転がり落ちてでも不思議ではない。元より、総頸動脈を切り裂かれて生きている方がおかしいのだ。命の灯が消えていない今が奇跡の状況。この先も奇跡が起きてくれるとは限らない。何度星に願っても起きないから奇跡なのだ。

故に、「死を受け止める準備覚悟だけはしておけ」とネルは告げた。心の整理だけは

つけておかないと、受け止めきれずに壊れてしまうかもしれないから。自暴自棄になるのは駄目だ。自刃も許されない。そんな事をしても彼が決して喜ばないのは、彼と関わった全ての時間が証明している。

——斯く言うネルも、別段心の整理が付けられている訳ではない。今自分が冷静にならないと終わる、という自制心が彼女の心を押さえつけて無理矢理冷却している。それに、この場における年長者としての意地もあった。後輩に無様な姿を見せる訳にはいかない、と。彼女は数回深呼吸して両手で頬を叩き、意識を切り替える。今は、目先の事を考えなければ。

「おいチビ共、そっちは……」

視線を向けたその先には、ゲーム開発部の少女が2人居た。先に撤退したミドリと、ネルの近くで眠るアリスを除くメンバー……モモイとユズ。だが、2人の内意識があるのは1人しかいなかった。

「ネ、ネル先輩……あぁッ、も、モモイが……!」

意識のないモモイを抱えるユズは泣いていた。奥歯をがちがちと鳴らして、自分とそう変わらない背丈の大事な仲間を震える手で抱えて、ネルに縋る。どうか、仲間を助けてほしいと。

もう彼女は限界だった。アリスが何かに乗っ取られて、敵になり、先生とモモイを傷つけて。

彼女からしてみれば、いきなり大事な人を3人も失ったようなものだ。心が砕けてしまうのも無理はないだろう。

「チッ……おい、救護班。怪我人1人追加だ。意識不明、原因は恐らく頭部への衝撃……あぁん？ 非番？ 知るか、全員引き摺り出せ」

ネルはユズから受け取ったモモイを診ながら通信機越しに指示を飛ばす。非番も休暇も知った事ではない。大事なものは怪我人の処置だ。ミレニウムの中で、自分の庭でこれ以上の失態を重ねるのはネルのプライドが許さない。

救護班に檄を飛ばし、非番の人員すらも総動員し、それでも足りない人材は他の部門から引っ張って、何とかモモイの処置ができるだけの人材を確保した。

「ほら、とつとと行け。このチビは大丈夫だ。意識はねえが、息はある。安静にしてれば直しきに目を覚ますだろうよ」

「は、はいッ！ あ、ありがとうございますッ！」

「礼はアタシじゃなくてアイツ等に言つてやれ」

ぺこりと頭を下げ、駆け足で去っていくユズ。遠くなる背中を眺めながら本日何度目かの溜息を吐いて……横たわったまま動かないアリスを抱えた。

彼女もまた傷を負っている。先生は勿論モモイと比べても軽傷であるが、処置が必要な怪我もあり、彼女の早期復帰も考えると保健室に運んで専門家に任せた方が良さだろう。しかし、目が覚めた時……その時のアリスは本当にあのアリスなのだろうか。

その不安もあり、ネルはアリスをこの場に留める選択をした。怪我人と非戦闘員が集まる保健室で、先ほどのように暴れられたら本当に拙い。

だが、それでも——アリスを信じたい気持ちが強いの。目を覚ましたら、あの生意気な笑顔で『チビメイド様』とか『チビネル先輩』とか呼んでくれるのではないか。そんな希望的観測が、脳裏から離れてくれない。

そして、先生についても。ひよっこりと何食わぬ顔で『遊びに来たよ』と笑ってくれる……という都合の良い妄想がずつとリフレインする。

「……儘ならねえなあ」

細く、誰にも聞こえない声量。ネルは曇天を見上げた。

ビッグシスターの決断

アリスの暴走から2日が経過した。

火の海となり、瓦礫となった部屋は再建工事の着手の日付が決定した。

騒動に巻き込まれた生徒も殆どが軽傷であったため、既に復学し勉強に励んでいる。

その騒動自体も、セミナーの揉み消しでガス爆発という形で処理された。

こうして、事態は収束した。だが、それは事件が終わった事を示さない。アリスが暴走した理由も、あの機械が何であるかも依然不明なまま。あの出来事は数々の疑問と傷痕をミレニアムに、生徒達に残ってしまった。

ハレは推測する。アリスの暴走には少なからずあの機械が関与している、と。

ミドリは言う。アリスの雰囲気が変わった時、モモイが持っていたゲーム機が突然起動した、と。

モモイのゲーム機にはG・Bibleが入っている。それに付随するKeyという謎のファイル。Divi:Simon System。それらはまるで何か一本の糸で繋がっているように思える。しかし、その真実は闇の中だ。モモイのゲーム機はまるで中身が空っぽになったように起動せず、あらゆる操作に沈黙を返した。まるで、初めからそうであったように。

件のモモイは、未だ意識が戻っていない。ミレニアムの保健室の一角で眠り続けている。バイタルデータは安定しているが、それでも目を覚まさないのは単純に傷が深いのか……それとも、分からないだけで何らかの障害があるのか。

面会には通してもらえた。真白いベッド、点滴を刺され、機械に繋がれバイタルが数値化された姉。所々包帯が巻かれ、生々しい戦闘の痕が残る姉。騒がしさを形にしたような小さな口から洩れるのは吐息だけ。力の入っていない手を握りながら、ミドリはその両目を余り

ある悲しみで濡らした。自分もつとちやんとしていれば、こうならなかったかもしれないのに……なんて、遅すぎる後悔を抱きながら。

そして、最後に先生。彼は当然の如く面会謝絶だった。彼の関係者、と窓口に伝えても「お引き取りを」と取り付く島もなく突き返されるばかり。だが、運良く彼を診ている主治医と話す事ができて、その容体はある程度伺い知る事ができた。

簡単に、端的に言うならば死体一步手前。容体も安定していない。いつ坂道を転がり落ちるように悪化しても不思議ではないようだ。その症状は出血性ショック。大量の血が体外に流れ出てしまつて、脳や臓器といった体の重要な器官がその機能を保てなくなる病。

特に、彼は輸血までに掛かった時間が決して短いとは言えない。何処かしらに障害が発生している可能性は充分に考えられる。このまま目を覚まさない状態もあり得るし、仮に目を覚ましても重い障害を患い、以前のような生活ができない可能性も考えられる。そもそも、明日の命すら定かではないのだ。次の瞬きをしたら眠るように息を引き取っているかもしれない。

だが、それ以外にも彼を襲う症状はあつた。それは体内に混入した神秘。恐らく患部から混入したのだろう。その行為が意図的か否かは不明であるが、彼の体内に神秘が入り込んでしまい、内側から蝕んでいる。まるでウイルスのように。

言うまでもなくキヴオトス外部の彼にとって神秘は毒だ。悪性腫瘍と言い換えてもいい。体の中に取り込まれれば最後、癌細胞のように正常を駆逐しその肉体を死に至らしめる。

だが、何より恐ろしいのは神秘を中和する方法がキヴオトスに存在しない事だ。仮に神秘が通常の毒であれば、解毒薬なり血清なりで治療を図れた。しかし、彼以外にとって神秘は毒でないが為に、これまで解毒薬も血清も作られなかった。その必要がなかったから。

一応、彼の体に投与されている血中ナノマシンが無毒化を図っているようだが、先の流血によって数を減らしてしまっているのか、その無毒化スピードは決して速いとは言えない。いずれは無毒化スピードを蝕む速度が上回り……というのが、医師が敢えて彼女達に伝えな

かった見解。彼はまるで真綿で首を絞められるように、その命を絶命の崖に立たされている。

大好きな姉と、慕っていた先生。その両方が突然手から零れ落ちたミドリは心が折れかけていた。この数日、碌に眠れておらず、食事も喉を通らない。苦しくても涙が出なくて、吐き気ばかりがあつて、何度もトイレで胃液を吐き出した。口元を抑えた掌は彼の血で真っ赤に染まっている気がして、鼻孔に入り込む臭いには全て血が付随する。

トイレの鏡に映る酷い顔にミドリは思わず苦笑いした。まるで別人だ。普段はおしやれや身だしなみには気を遣う筈なのに、なんて思う。もう見せたい相手は此処に居ないのに。

そうしてふらつく足取りで部屋に向かっていると——ふと、後ろから足音が聞こえた。次いで、ビニール袋が擦れる音。緩慢な動作で振り返ると、其処に居たのは。

「……ユウカ」

「ミドリ、大丈夫？」

「うん……」

「……ちゃんとご飯は食べて、寝なさいよ。モモイが起きた時、あなたがそんな顔をしてたらきつと悲しむから」

「……分かつてる」

上辺だけ飾ったはりぼての返答を返すミドリに、ユウカは何も言わなかった。このままではいけないと一番分かっているのは他ならぬミドリであろうし、一番辛いのもミドリだ。安易に慰めを言つてはならない。そんな事をして彼女を傷つけるだけ。彼女の傷に寄り添えるのはゲーム開発部の仲間達だろう。

「ミドリはどこ行くの？」

「アリスちゃんの所。ユズと待ち合わせしてるから……」

「そう、じゃあ目的地は一緒ね」

ユウカはビニール袋を掲げる。中には飲み物や食べ物、ゲーム。アリスの為に買ってきたもの。

そして、彼女は空いている手をミドリに差し出した。

「一緒に会いに行きましょう？ アリスちゃんだって、あなた達の顔を見ればきつと元気を取り戻すわ」

「……ユウカは、強いね」

差し出した手に感じた、涙の感触。ぽたぽたとユウカの手がミドリ
の心情で彩られる。

「私、何も、何もできなかつた……あそこにいたのに……ッ！ 守られ
て、ばつかりでッ」

「ミドリ……」

「お姉ちゃん、眼を覚まさなくて……ッ！ 先生が、し、死んじゃうか
もってッ！」

そう叫んだミドリの、涙で滲んだ視界。それがカーテンで遮られた
ように柔らかく歪んだ。暖かい温度と柔らかい感触。背中を擦る優
しい手。

「——大丈夫、大丈夫だから。ミドリの所為じゃないわ。誰もあ
なたを責めたりしないから」

ユウカはずっと思い詰めていた、泣けなかつたミドリを抱きしめ
る。彼女が背負うには重すぎる荷物を解く様に。



ゲーム開発部、部室前。ユズと合流した2人は隔てる扉を眺める。

「あれから、アリスちゃんは？」

「その……アリスちゃんはまだ……」

「そう……」

——無理もない話だった。彼女の傷はずっと深い。身体では
なく、心の傷。現代の医療でも治せない場所が、彼女は痛んでいるの
だ。

ユウカは3回ノックして。

「……アリスちゃん」

呼びかけるが、返事はない。

「ユウカよ。ミドリもユズも居るわ。入ってもいいかしら？」

やはり返事は返ってこない。だから、意を決して。

「……入るわよ」

鍵は掛かっていなかった。

すんなりと空いたドアの向こう。明かりも点けず、カーテンも全て締め切っている暗い部屋。その隅……お気に入りのブランケットに身を包んだアリスが座り込んで、俯いていた。

「アリスちゃん」

「……」

「ご飯も食べないで、ずっと閉じこもってるってユズが言ってたわ」

「う、うん……皆、心配してるから……だから、行こう……？」

「——アリスには」

アリスは初めて反応を返した。両手で細い膝を抱きしめて、そこに頭を埋めて。

「アリスには、出来ません」

「……どうして？ アリスちゃんは……」

「アリスは、アリスの所為で……モモイが怪我をしました……」

絞り出したような声は、震えていた。

「全部、アリスが……やった事です。どうしてこうなったのか、アリスにも分かりません。あの時、何かが……まるでアリスの知らないセーブデータが、アリスの中にあるような」

アリスの人格ソフトではなく、肉体ハードの反応。それを見たのは今回が初めてではなかった。あの時……G・Bibleを求めて廃墟の工場に侵入した時も、同じだった。アリスの体が、それに反応した。

「……アリスの体が反応しました。動きました。あの時、アリスが何をしたのか……何も、思い出せませんが……それでも、アリスが、モモイを……」

「違う、違うわ、アリスちゃん。よく聞いて——」

「せ、先生も会いに来てくれません……アリスは先生に嫌われてしまいましたか……？」

その言葉に、誰もが息を詰まらせた。継るように、『違う』と否定してほしくて見上げた青の双眸。そこに映った光景は気まずそうに、苦

しそうに表情を歪める3人。その沈黙を、アリスは肯定として受け取ってしまった。

——アリスの精神状態を考慮して、先生の現状を伝えなかった事が仇となる。

「や、やっぱりそうなのですね……アリスがモモイを傷つけたから、先生はアリスを嫌いに……!」

「落ち着いて、アリスちゃんの所為じゃないからッ!」

「——いいえ、貴女が怪我をさせた。それは逃れられない真実」

酷く冷たい声が聞こえたから、振り返ると。

「……会長」

「ユウカも居たのね」

セミナーの長、ミレニアムの生徒会長たるリオ。彼女はユウカを一瞥して、直ぐに視線を戻す。彼女はアリスを冷たく見下ろしていた。

「ああ、やはり——危惧した通りになってしまったようね」

「……どうして、会長が此処に?」

「真実を伝えに来たのよ……彼女についての」

「真実、ですか?」

ユウカが3人を庇う様に立てば、リオは僅かに眉を潜め、「そう」と肯定して。

「貴女達は数日前の事件で1つの考えに到達したのではなくて? 今まで友人だと思っていた彼女が見せた、異なる姿。そして同時に生じた破壊と混乱」

リオは唄うように、誰もが目を逸らしたかった残酷な真実を少女達に突き付ける。

「そして、貴女達はこう思ったのでは? 今まで友人だと思っていたものは、そうでないのかもしれない——と」

「会長、一体何を言ってる……」

「単刀直入に言えば、貴女の後ろにいるその少女……少女の外見を備えたソレは、普通の生徒ではないわ。貴女達がアリスと名付けたソレは——」

そう言つて、リオはAL—1Sを指差して。

「未知から侵略してくる不可解な軍隊の指揮官であり、名もなき神を信仰する無名の司祭が崇拜したオーパーツであり、古の民が残した遺産——名もなき神々の女王、AL—1S」

共存なんて不可能な、今期の知性体を排斥する侵略者こそがアリスと名付けられたナニカの本質だと……リオは静かに告げた。

「な、何を言ってるんですか!? 一方的に脳内の独自設定を話さないでください! アリスちゃんはアリスちゃんです!」

「そ、そうですッ! アリスちゃんは……!」

「……会長。先の事件で気が立っているのは分かります。責任を追及しなければならぬ立場にある事も、分かります。ですが、どうか今は退いてください。この子達も大切な友達が、家族が……今もまだ、眼を覚ましていないんです」

だからどうか、今はお引き取りを——そんな些細な願いは。

「ごめんなさい。私の配慮が足りなかったわね。もっと理解しやすいよう、貴女達の好きなゲームに例えましょう」

リオには届かなくて。

「つまり、アリス^{AL—1S}。貴女は——この世界を滅ぼすために生まれた魔王なのよ」

「……ッ!」

——アリスの青い瞳が驚愕と絶望で見開かれる。

「またそんな設定を……どうしてそんな事を言うんですか! 一体何を企んでいるんですか!」

「企んでなどいないわ。寧ろ、逆に聞きたいのだけ……貴女達は見ただけではなくて? 不可解な軍隊とアリスが接触した事で、何が起きたのかを」

「……それは、あの変なロボットの事ですか?」

「その通り。本来、あんな事になる予定はなかったのだけれど……完全に此方のミスよ。C&CとAMASを通じて全部追跡したと思っていたのに……まさか、掻い潜った個体がいたなんて。それは完全に私の不手際によるもの。謝罪を此処に」

一方的に言いたいことを告げて、勝手に謝罪して。

「でも、そのお陰で私の仮説は証明された。貴女達が接触したソレは、廃墟から溢れ出した災禍。ミレニアムに、ひいてはキヴオトス全土に終焉を齎す悪夢。メサイアを殺す『滅び』」

「そして、アリスの存在が廃墟から奴等呼び寄せているという事が証明された。今回は運良く壊れかけの個体と接触するに留まったけれど……次はこんなものでは済まないでしょうね」

——炎の中、無数の生徒の屍を貪る無名の守護者。そして、その頂点で狂い咲く、返り血に塗れた真つ赤な童話の姫君。それを、現実にはしないために。

「この脅威を解決する方法は一つだけよ、アリス」

「解決、する方法……？」

「そう——アリス、貴女が消える事。この世界に、貴女は存在してはいけない」

この世界に、アリスを受け入れてくれる都合の良い誰かは存在しないのだと——もう既に、自らの手で消してしまった後だと。

「……そ、そんな……アリスは、ただ、勇者に……皆と一緒に、ゲームを……クエストをしたかった……それだけ、なのに……」

「いいえ、それは叶わないわ」

「ッ！ 会長、それ以上は——！」

「ユウカ、黙ってなさい。これは私達の問題よ」

アリスの存在そのものを否定するような言葉の数々に堪忍袋の緒が切れたユウカは銃を引き抜くが、冷たく言い放つたりオを止める事は叶わなかった。

「……私はゲームに詳しくはないけれど……それでも、辞書的な知識はあるの。だから、貴女に質問をするわね」

リオはアリスを庇う3人を押し退けて。

「貴女は己を勇者と呼んでいるけれど……勇者は大事な人達に剣を向ける存在かしら？」

「……ッ！」

「寧ろ、貴女のやった事は悪役魔王のそれではなくて？」

正論がアリスの心を抉る。眼を逸らさないでいたはずの真実が浅慮と嘲けつた。

「アリスちゃん！ 聞かなくていい！」

「いいえ、聞くべきよ。眼を逸らす事も、逃げる事も許されない。事実から目を背けるのは思いやりにはならないわ。それは単なる現実逃避に過ぎない……負うべき責任の放棄は、極めて非合理的な行動よ」「だからと云って、こんな……！」

「間違っている、と？ では私はアリスを無視すべきなのかしら。多くの生徒を負傷させた事件を起こした、危険な兵器を」

単純な責任問題。彼女にはミレニアムの長として、学校に通う生徒の安全と生活を守る義務があるのだ。そして、何かしらの問題が起きたときはその原因を追究しなければならない立場にある。

最大多数の最大幸福、とは誰の言葉だったか。多くの生徒の幸せと安全の為に、リオはアリスを切り捨てなければならなかった。それがどれほど非情で、冷酷で、糾弾される決断であっても。

「それじゃあ、アリスは……どうすれば良いんですか……？」

「さつきも言った通り、全ての元凶はアリス……貴女が此処に居るから起きている。ならば、後は簡単でしょう？ 爆弾は、安全な場所で解体すれば良いだけなもの」

その言葉が意味する事は、つまり。

「貴女のヘイローを破壊すれば解決する、という事よ」

——それはアリスの死を指し示していた。

童話のお終い（めでたしめでたし）

「ああ、でも……貴女のソレは本当にヘイローなのかしら。生徒でない貴女がどうしてヘイローを持っているのか、理由は分からないけれど……唯の機械である貴女がヘイローを持っているのは——そう、狂気に包まれたあのA Iと同じ。貴女が天啓を受けるとは思わななければ……ええ、猶更、貴女を放つてなどおけない」

呟き、リオはタブレットを操作し——待機させておいた機械を起動させて。

「さあ、貴女の出番よ——美甘ネル」

その言葉と共に現れたのは、途轍もないほど不機嫌そうな顔をしたネル。その登場に3人の顔色が露骨に悪くなった。先生も居ない今、例え3対1でもネルに勝てる見込みは皆無だ。

——ならば、せめて自身^{ユウカ}1人で可能な限り時間を稼いで、彼女達には逃げてもらうか？ 否、それだけでは駄目だ。ミレニアムはリオの庭。この自治区に居る限り、確実に捕まってしまう。ならば、自治区外……先生の縁を頼りに、アビドスカゲヘナに行ってもらおうか。何方にせよ、残された時間は多くない。

ユウカの背筋に冷たい嫌な汗が流れた。

「……」

「……あまり、彼女を悪く思わないでやってね。今の彼女はエージェント、私的な感情はない。私の命令に粛々と従うだけ」

C & Cという組織はセミナーの……否、正確には会長直属の組織なのだ。故にネルは今、リオの命令でこの場に立っている。美甘ネルではなく、エージェントが一人、コールサイン^{ダブルオー}00として。

「幾らユウカが居るとはいえ、ネルが相手では分が悪いでしょう？

それに、外部に助けを求めたとしても……周囲はA M A Sで掌握しているわ。救援が間に合う事は無い」

完全な詰み状況。覆せる手はない。策はない。このままでは——

「さあ、仕事の時間よ。ネル、アリスを回収してくれるかしら？」

「……ネル、先輩……」

ネルはスカジャンのポケットに両手をつ込みながらアリスの前まで歩いて来て、彼女を見下ろす。

勝ち気で生意気だった青の双眸は恐怖と不安で濡れていて。小さな体はユウカに縋るように震えている。

よく知った彼女の、見知らぬ一面。それを目の当たりにしたとき、ネルの何かがぷつりと音を立てて切れた。顔に青筋が浮かぶ。歯を噛み砕かんばかりに喰いしぼる。銃のグリップが砕けることも厭わず握り締める。

ああ、そうだ。これは——怒りだ。

「くっそ、やってられっかよ！」

その声と共に奏でられる銃撃音。部屋には傷を付けずリオの傍で待機していたA M A S数機を碌な抵抗すら許さず1秒未満でスクラップにした。

「……ネル、何のつもり？」

「今までだって依頼内容を気に入った事なんてあんま無かったけどよお……今回はそんな中でも最悪だ。同じ学園の生徒を、何も分かってねえヤツを……アタシの後輩を誘拐しろってか？ ふざけんな。そんな依頼、やってられっかよ」

ネルはユウカに目配せをする。『ここは任せろ』と。頷いた彼女はアリスの手を引いて立ち上がらせた。

「コールサイン^{ダブルオー}00は返上だ。もうテメエに付き合う義理はねえよ

——リオ！」

「ここで裏切るつもりかしら、ネル」

「裏切る？ ハッ！ テメエの指示が気に入らねえだけだ」

「そう……ネル、貴女はいつもそう。気分次第で命令を違反する姿……いつ爆発するか分からない痲癩玉のような側面が貴女の長所であり、一番厄介だった」

リオは「でも」と言葉が続けて。

「対策は当然しているわ。この状況は想定内よ。C & C全員だったら

勝ち目はない。でも、貴女だけなら——敵に回っても勝ち目はある」

「ああ？ んだつて？」

「トキ——貴女の出番よ」

その声と共にするりと入り込んできた少女。彼女は氷のような瞳でネルを見上げる。その手に握られていたのは——何の変哲もない手榴弾。

「ッ！ 逃げろテメエ等ッ！」

爆発音が鳴り響いた。



転がり出た廊下。其処には無数のA M A Sとリオ、そして——

メイド服に身を包む、見慣れない少女が立っていた。

「初めまして、先輩。C & C所属、コールサイン04。ゼロフォー。ご挨拶申し上げます」

「5人目の……エージェント……」

「ああ、テメエがアカネの言ってた5人目か。まったくよお、随分ご機嫌な挨拶してくれたじゃねえか。覚悟はできてんだろうなあ!？」

怒りと共に引かれるトリガーと、それに伴って吐き出される銃弾。無数にいたはずのA M A Sがあつという間に数えられるほどになり、ユウカ達がリロードする頃には殆ど全滅していた。

——これが、C & C最強。その名に勝利を背負う物。

リオとてA M A S程度でネルを止めれるとは思っていなかった。ミレニアム最強の理不尽さは、それを抱えていた彼女が一番よく知っている。故に。

「こんな事はしたくなかったのだけれど……トキ、武装の使用を許可します」

「——イエス、ママ」

切り札を1つ、使用した。

「テメエ——！」

布の落ちる音が聞こえた時には既にネルの目の前、鼻の先が触れそうな距離にいた。服装も長袖ロングスカートのメイド服からノーズリーブミニスカートのメイド服に変わっていて——その右腕にはアームギアが装着されていた。

機械音を立てて展開する装甲と、ミサイルの発射口。咄嗟にネルは腕をクロスさせて致命傷を貰わないようにガードするが、トキはお構いなくそのガードの上からミサイルを叩き込んだ。

「ぐ、う——ッ！」

断続的に響く爆発音。皮膚が焼かれる感覚と、骨まで届く衝撃。それをミサイルの弾切れまで耐え切り、反撃をしようとしたが——

「なッ！」

煙の晴れた眼前、トキの姿は何処にもなかった。あるのはスラストーとバーニアでホバリングしているアームギアだけ。本命たるトキは——。

「ネル先輩、後ろッ！」

その言葉に反応し、咄嗟に振り向いたが……僅かに、トキの方が速かった。向けられた銃を躲し、続く鎖による打撃も低姿勢で回避。そのまま足払いをしてネルの姿勢を崩すと、その頭を思いつきり廊下に打ち付け関節を極めた。

「——大人しくしてください。抵抗すれば、曲がってはいけない方向に腕が曲がりますよ、先輩」

「て、めえ……」

「皆さんも下手に動かないでくださいね。無駄な抵抗はお勧めしません」

周囲を見れば、追加のAMASがユウカ達を包囲していて、その銃口を少女達に向けている。抵抗する自由すら奪われた彼女達は正に絶体絶命だった。

「……勝負あり、ね。もう少し苦戦すると思ったのだけれど……先生が居ないと考えると、これ位が妥当かしら」

そうして、リオは向かう。アリスが1人取り残されたゲーム開発部

の部室に。A M A Sを引き連れて。俯いて、現実を受け入れられず彼女、その綺麗な双眸を曇らせながら。

「リオ先輩……1つだけ、聞いても良いですか？」

「……何かしら」

「先生は、何処にいますか？」

——ずっと、気になっていた事だった。例え彼がアリスの事を嫌いになっても他の少女達は違うはずだ。ミドリもユズもユウカも、ネルだって彼はきつと好きなままで、助けるためにきつと此処に来るだろうと思っていた。何時ものように飄々と、『助けに来たよ』と……まるでゲームのヒーローのように。

しかし、彼は終ぞ現れなかった。

その疑問にリオは「伝えてなかったのね」と呟いて——最悪のタイミングで、彼女にとって最悪の真実を開示した。

「何処にいるも何も、貴女が殺しかけたのよ」

「会長ッ！ 言って良い事と悪い事が——ッ！」

「……アリスが、傷つけたのですか？」

アリスから発せられたとは思えないほど冷たい声。絶望と、悲しみと、諦観と——様々な負の感情がぐちゃぐちゃに混ざり合った、聞くだけで胸が痛くなる音色だった。

「あ、アリスは、モモイだけではなく、先生にまで怪我を……？」

「怪我で済む話じゃないわ。総頸動脈損傷……貴女の所為で、先生は今も生死の境目を彷徨っている。眼を覚まさない可能性もあり得るし、仮に目を覚まして後遺症は残るでしょうね」

大好きな友達に傷を負わせた。彼女はまだ目を覚まさない。それだけでも辛いのに、苦しいのに……大好きな人まで傷つけてしまった。しかも、彼は今も生と死の境目を彷徨っている。いつ転げ落ちて不思議でない断崖を。誰の所為？ 決まっている——魔王の所為だ。

「本当は、私もこんな強硬手段に出るつもりはなかった。先生の届出……あの機械達の掃討と、天童アリスの身分の保証。だけど、それを承諾する前に事が起きてしまった」

シャーレの届出。リオに宛てられた書類にはあの機械に関するデータと、それらを掃討する作戦の概要、承諾書。それに加えて、先生がアリスの身分保証人になる旨が記載された書類が同封されていた。ミレニウム全体、キヴォトス全体としても決して悪くない条件。寧ろ此方に求められているのは、アリスをミレニアムの生徒としてこれからも認める事くらいで、それ以外には何も無かった。リオ本人としても、流れる涙の量は少ない方が良いと思っている。誰もが笑い合えて、幸せならそれに勝る事は無い。

アリスを危険だと思った自身の判断を間違えとは思わない。アレは紛れもなく終幕を下す引き金であり、何かきつかけさえあればキヴォトスを終わらせるだろう。だが、適切な管理を行った場合に爆発しないのであれば、解体するよりもそちらの方がリスクが低く、合理的であろう。

故に、認めようとしたのだが……その矢先に事件が起きてしまった。しかも、先生は意識が戻るかも分からない、生死を彷徨う危篤状態。

これが、希望の末路だというのならば。

彼一人に何もかも背負わせようとした代償だというのならば。

——自分だけが綺麗責任を取らずになままでいたいなんて、そんな身勝手な話は許されないだろう。

「アリス、貴女は——自身を受け入れてくれる唯一の居場所先生を、その手で殺しかけたの。もし仮に先生が目覚めて、貴女を受け入れてくれたとして。貴女はそれを許せるのかしら。先生を傷つけた己が、彼の傍に居る事を」

「……ッ」

「他の誰が許しても、先生が許しても、一番その光景を許せないのは……他ならない貴女自身よ、アリス」

アリスの強張った体から力が抜ける。彼女はもう諦めてしまった。友達を傷つけて、大切な人を傷つけて。それでも皆と居たい——なんて思うのは……あまりにも罪深い。

「ちよ、ちよっと待っ——」

「下手に動かない方が良い。無関係な子を傷つけたくない」

部屋の外から聞こえる声を確認する事もなくリオはあくまで冷静に対処する。敵はアリス唯一人、それ以外は……リオが守るべき生徒だ。

「貴女が継る光の剣も、もうないわ。これで貴女が勇者だと証明するものはなくなつた」

「……あ、アリスの剣が……勇者の証が……」

アリスが何度も使い、何度も助けられた宝物。アリスを繋いでくれた、大切な勇者の証。その電源が完全に落ちてしまっていた。電源を操作しても何も返さず、何処のランプも点灯しない。それはまるで、アリスが勇者ではないと雄弁に語っているようだ。

「……あ、あ……うう……」

モモイを意識不明にして、先生を殺しかけ、それでも尚手元に残つた宝物は沈黙しか返さない。

——アリスの心は、もう折れてしまった。

「……全部、アリスがいるからなんですか……？ アリスが魔王だから、起きたことですか？」

「そうよ」

「アリスが此処にいたら、また同じことが起きますか……？」

「ええ。そして、もっと多くの生徒が傷つく」

「……アリスが、アリスが消えたら……解決しますか？」

アリスの最後の疑問。それに首肯したりオを見て——彼女は、決めた。

「……そう、ですね。アリス、全て理解しました……アリスが、消えるとします」

その命を、終わらせることを選んだ。

「駄目ッ！ アリスちゃんッ！」

「アリスちゃん……！」

「チビ、テメエッ！」

「やめて、アリスちゃん！」

アリスを止める数多の言葉と意志。勇者であろうと、魔王であろう

と……例え彼女が何であつてもアリスはアリスだと信じる彼女達。泣いてしまうほど暖かいけど……否、だからこそ。

「アリスは、もうこれ以上誰かを傷つけないです。怪我、させたくないです」

モモイが怪我をしたと聞いたとき胸が痛かった。

先生が怪我をしたと告げられた時も、同じくらい胸が痛んだ。

どうしてこんな事になったのか、未だにアリスの中で明瞭な解答は出ていない。しかし、それでも確かな事は——自分は、大切な人達を2人も傷つけた。

「色んな話を聞いて……やつと、理解しました。アリスがずっとこのまま居たら、いつか皆が傷ついてしまいます。そんなの、アリスは嫌です」

リオの手を取り、立ち上がるアリス。

「大丈夫です。アリスは生命体ではないのですから。アリスはミレニアムの生徒ではないから、いなくなつても大丈夫です。アリスは……勇者、ではないから。アリスは、先生に……き、嫌われて……しまいしました、から……アリスは……だい……じょうぶです」

彼女はまるで、自分に言い聞かせるようにそう言つて。

「ミドリ、ユズ、ユウカ、ネル先輩。今までありがとうございます。皆、アリスと一緒に冒険してくれてありがとうございます。モモイ、ごめんなさい。出来れば直接会つて、謝りたかったです」

そして、最後に。

「先生、ありがとうございます。そして、ごめんなさい。手を握つてくれた時を、信じてくれた時を、アリスは一瞬も忘れませんでした。アリスと生きてくれて、ありがとうございます。今まで本当に、幸せでした」

リオとアリスは歩いていく。これからアリスを殺す場所に向かつて。誰も笑つてなどいなかった。誰も喜んでなどいなかった。トキや、リオでさえ。

——こうして、全員が己の無力を噛み締めて。アリスは皆の前から姿を消した。

理屈ではなく

ミレニアムサイエンススクールの会議室。本来ならばセミナーに使用目的、時間、人数を申請し認可を貰わなければならない部屋であるが、ユウカとノアの力添えにより今日一日丸々貸切る事ができた。

最新鋭の設備が惜しげもなく投下された場所でヴェリタス、ゲーム開発部、C&Cが一堂に会している。皆の表情は、決して明るいとは言えない。

「……結局、会長がアリスを連れて行ったんだね」

「ねえ、これって結構ヤバいんじゃない……?」

「はい、非常事態です」

リオによる、同意の上でのアリス誘拐。それは彼女の事を可愛がっていたヴェリタスに大きな衝撃を与えた。会長の性格上、無意識下とはいえ部室棟崩壊の要因の一端を担ったアリスを放置するとは思えない。必ず何かしらのアクションはするであろうと予想していたが……まさか弁明の機会すら与えず強硬手段に出るとは考えていなかった。

そして、もう一件。

「……では、リオ会長が部長以外を呼び出さなかったのは」

「恐らく、最初からリーダーが裏切ると想定していたのだろう」

「酷い！ アリスちゃんを連れてった上にリーダーの事も虐めるなんて！」

「そして、その虐めた相手がコールサイン04とは……」

リオの懐刀にして切り札、C&Cのコールサイン持ち。拜命以降、ずっとその存在を秘匿されていた5人目のエージェントがリオ側として立った。恐らく、彼女の目的に賛同している訳ではなく、ただ彼女の道具として振る舞っているだけなのだろう。正にリオが欲した便利なナイフ。揺さぶりも説得も一切通用しない。主たるリオが諦めるまで、彼女もまた諦めないだろう。

「アカネちゃんはトキちゃんの事何か知ってる?」

「……いえ、詳しい事は殆ど。私も、私達以外にもう一人コールサイン

持ちがいる、という事くらいしか知らなかったの……5人目のC & C、任務に赴く事は無いリオ会長専属のボディガード……それが彼女です。リーダーは彼女と戦ってみて、どうですか？」

「強え。それだけは確かだ。からくりはあるだろうが、それを差し引きしても強え」

基礎と基本を徹底的に極めた優等生の戦闘スタイル。セオリー通りながらも独自性を持ち、相手に一手先を読ませない技巧。全てが高水準かつ、隙がない。敵にするとかなり厄介なタイプだろう。

そしてネルは大きな溜息を吐き、表情を有り余る悔恨で歪めた。

「……目の前でアイツが連れて行かれるのを……アタシは、ただ見る事しかできなかった……」

「リーダー……」

「リーダー、気に病む必要はない。正面から戦った訳じゃないだろう？」

「そうだよ！ あんなの無効だよ、無効！」

「——お前らは、任務が失敗してもそんな言い訳をするのか？」

あの日、アリスに言われた言葉。それをオウム返しのように、目の前にいる仲間達に投げかける。

トキの武装が初見であった事。

部室を傷つけられない事。

ユウカやゲーム開発部に気を配らなければならなかった事。

トキが徹底したネル対策をしていた事。

トキが切り札を切った事。

リオのサポートがあつた事。

ネルにとって不利な条件は多くあつて、トキにとって有利な条件は多くあつた。あの戦闘は全くフェアではなかった。だが、だからと言つて無かつた事にはできないだろう。反則も無効も、現実にはない。

ネルはトキに負けて、アリスが涙を浮かべながら連れて行かれるのを見ている事しかできなかった——その結果だけが真実だ。あの日噛み締めた無力感だけが、敗者^{ネル}に与えられた全てだった。

「なあ、どうしてだ」

ネルは片手で顔を覆いながら、疑問を吐く。

「あのチビはどうして、ハイローを壊すなんて話をされたのに、リオに付いて行ったんだ？ 言葉の意味を理解して、納得した上で付いて行ってるのか？ なあ……ゲームがちよつと上手い程度のチビに、何でリオはあんな事を言ったんだ？」

——あの時見た、アリスの涙が脳に焼き付いて離れてくれない。

「アタシだけが理解できてないのか？ だったら教えてくれよ、一体これは何なんだ？」

「……取り敢えず、一旦状況を整理してみましよう」

コタマは部屋の隅に置いてあった大型のタツチデイスプレイを持ってきて、ペンを持つ。それを見て自分ばかり弱音を吐いてられないと思ったのか、ネルは立ち上がって。

「そうだな……情報共有といこうか。アタシ達には、知らない事が多すぎる」



アリスの起動から暫く経ったある日から、ミレニアムの廃墟にて不可解な軍隊が活性化、ミレニアムに進行を開始する。この行軍は指揮官たるアリスを目指したものであろう、というのがリオの見解であるが……詳細は不明。これの対処にはC&Cが当たっていた。

シャーレが不可解な軍隊の掃討作戦を立案。リオに作戦概要と承認書、併せてアリスの身元を保証する旨の書類を提出。しかし押印はされなかった。

リオの追跡から逃れた不可解な軍隊とアリスが接触、活性化。暴走したアリスにより部室棟が崩壊。軽症者多数、モモイは意識不明、先生は重体に陥る。

事件から二日後、リオがゲーム開発部の部室に来訪し、トキとAMASを用いてアリスを誘拐。彼女の目的はミレニアム、ひいてはキ

ヴオトスの為にアリスのヘイローを破壊する……つまりアリスを殺す事だった。

——そして、今に至る。

流れのままに、流されるままに。抗う事すら許されず、彼女達の意志が及ばない所で様々な部分が決定してしまった。返してと叫んでも届かなくて。奪わないでと泣いても意味がなくて。

少女達は大切な人を3人も失ってしまった。

「……アリスちゃんは……会長の言う通り、本当に……魔王なんでしょうか？」

「アリスちゃんの気持ちをちゃんと聞いて、お話したいよ……アリスちゃんは、そんなんじゃないって、魔王なんかじゃないって……会長を説得したい……」

アリスに会いたい。会って、ちゃんと話したい。また心を交わしたい。少女達の本音はこれに尽きる。リオの言葉を、アリスの涙を否定したい。魔王なんかではないと証明したい。

だが、どうやろうというのだ。ミレニウムを隈なく探してもリオもアリスも、トキすら見つけれられない。そして、ヴェリタスの部長と特異現象捜査部の部長を兼任しているミレニウム屈指の反則札のヒマリも数日前から行方不明だ。

したい事、しなければならぬ事。それらはあるのに、やる方法が無い。無力で、無知で。

ギリ、と誰かが奥歯を噛み締める音がやけに大きく聞こえた。

そんな時。

「——モモイ」

誰もが予期しなかった。

「降臨ッ！」

誰もが求めた少女が部屋の入り口で仁王立ちしていた。

「お姉ちゃんッ！」

「うわっ!? なになに!?!」

それに真っ先に反応したミドリは椅子を蹴飛ばしながらモモイまで駆け寄り、その勢いのまま抱き着いた。突然体当りからの熱い抱擁

をされた彼女は目を白黒させながらミドリの方を見ると、彼女は泣いていた。だが、それは悲しみから来るものではなく……安堵と歓喜。「良かった……本当に、良かった……ッ！」

「ミドリがアンチコメ読んだ翌日の一日限定甘えん坊モードになってるんだけど!? 何で!?!」

「モモイ、眼を覚ましたんだ……良かったあ……」

「なんかユズもそんな感じになってるし!?!」

ミドリとユズ、大切な2人に揉みくちやにされているモモイ。口では疑問と驚愕を言っているが、その表情は満更でもなさそうで。

「お姉ちゃん、体は……?」

「勿論大丈夫! ぐっすり寝たから体力ゲージもマックス! そう……今の私は、棚からポーシヨンを手に入れ、次ステージの推奨レベル以上にレベルを上げ終えた戦士……! 怖いものなんて何も無い、超強化女子高生状態だよ!」



深夜のショートケーキすら怖くない超強化女子高生なるものに進化を果たしたモモイ。意気揚々と部屋に入ったはいいが、何も状況を知らされてない彼女に対する説明を終えて。全てを聞き終えた彼女は、思いつきり息を吸い込み――。

「このおバカさんが!」

と、開口一番叫んだ。

「正直、難しい話はよく分かんないけど……何言ってるか結構さっぱりだったけど……皆の話聞いてたら胸がぎゅって痛くて、あんまり言葉が纏まらないんだけどさ……でも、1つだけ確かな事はあるよ!」

「……確かな事?」

「私達がこの事態に納得できてないって事! 正直アリスが魔王だろうがドラゴンだろうが何だろうが、そんな事どうでもいいの! 私はこのままアリスとお別れなんて嫌だよ!」

世界を滅ぼす魔王だろうがなんだろうが、そんな事はどうだってい

い。重要なのは、この帰結に己が納得するか否か。あの別れを今生の訣別にしたいかどうか。涙のまま死に逝くアリスを、見殺しにしたいのか。

そんなのは嫌だと——ただ、シンプルに。

「アリスの最後の言葉、別れの挨拶でもなんでも無いじゃない！ まともなエンディングですらない！ 最悪だよ！」

アリスにそんな事を言わせるために言葉を教えた訳じゃない。あんな寂しい別れを言わせてたくて今まで一緒に思い出を育んだ訳ではない。言葉を教えたのは、思い出を育んだのは、これからもずっと友達でいるためだ。

その未来を、否定すると言うのならば——。

「だから私はアリスを連れ戻しに行く！ 連れ戻しに行きたい！ 皆、そうじゃないの!?!」

アリスの下へ行く理屈なんて、それで充分だ。難癖をつけられたなら理由なんて後で幾らでも後付けしてやればいい。

今、早急に考えなければならぬ事は、この事件の真相なんかではない。囚われたアリスをどうやって助けに行くかだ。それ以外の事なんて心底どうでもいい。

「……うん、そうだね」

「流石モモ！ 良い事言うね〜！」

「ええ、シンプルで分かりやすいです」

モモイの単純な、力強い言葉。アリスを助けたいという一念にヴェリタスの3人は笑みを零す。そうだ、簡単でいいじゃないか——と。友達を助けるのに、小難しい理屈や理由なんて不要なのだ。

「……感謝するぜ、チビ。ああ、そうだ。ごちゃごちゃ考える必要はねえ。殴られたら殴り返せばいい。奪われたものがあるなら奪い返せばいい。単純明快だ。アタシも、あの結末に納得なんかしてねえしな。なあ、お前達はどうだ？ アカネ、アスナ、カリン」

「ふふ、言葉にする必要がありますか？」

「それが部長の決定なら」

「勿論付いてくよ〜♪」

C & Cの4人も、アリスの救出に同意を示す。

ネルはあんな弱い者虐めに加担するために、黙認するために勝利^{ダブルオー}を拜命したわけではない。それがリオの求めるミレニアムの勝利だ。というのならば、そんなものは塵屑以下だ。C & Cという立場も最強のコールサインも全て投げ捨て、己の正義と勝利に従い後輩の為に銃を取る。その方が何倍も自分らしい。

そんな彼女に3人のメンバーも当然のように同意を示す。リーダーらしいと笑いながら、自身達の雇い主に反逆を決意。ミレニアムの為に奉仕を続けてきた少女達は、アリスという一人の生徒の為にだけにその正義を投げ捨てた。

—— 此処に、アリス奪還作戦の決行が決定された。



奪還が決定したは良いが、決まっただけ。相変わらず何から手を付けて良いかは不明であり、リオの潜伏先とアリスの居場所は闇の中だった。だが、それでもできる事から、目先の事から始めようと思つた時—— 突然、会議室のドアが音を立てて開いた。

ドアの向こう側に立っていたのは先の一件でアリスを守り切れなかったユウカと、彼女の親友たるノア、そして強制連行されたと思われるコユキ。セミナー室から全力疾走してきたのだろう。額には僅かに汗が浮かんでいて、前髪が張り付いている。それを鬱陶しそうに払い除けて、ユウカは。

「リオ会長がアリスちゃんを連れて行った先が分かりました」

と、誰もが求めた情報が手の内にある事を開示した。

「本当!？」

「ええ……というかモモイ、起きたのね。無事でよかった。身体はもう大丈夫なの?」

「勿論!・ぐっすり寝たから万全だよ!」

偽りが無いその言葉にユウカも笑みを零す。口では少々淡泊に言っているが、事件の後処理に追われる日々の中でもお見舞いを欠か

した事は無く、最低でも一日一回はモモイの顔を見に行っていたのだ。その事を知っているノアは『素直じゃありませんね。でも、そこも可愛いんですけど』と思い、手帳に記録する。

「んで、その潜伏先は何処だ？」

「今画面に映しますね……此処です」

ユウカは手元のタブレットとスクリーンをケーブルで繋ぎ、画面をミラーリングする。接続から少し経った後、画面が数回明滅して……そして、映し出されたのは。

「んだこりゃ……都市、か？」

茫然としたネルの眩きの通り、画面に映し出された場所は都市であった。理路整然とした未来都市。立ち並ぶビル群と網目のように張り巡らされた道路。キヴォトスの中枢都市も宛ら、といった都心が映っているが……人が、1人も居ない。発展しているのにも関わらず、人の気配と生活の痕跡が皆無だった。

「ネル先輩の言う通り、これは都市です。データベースから消去された資料を復元して見つけた、存在しない筈の場所のデータ……コードネーム、エリドゥ^{Eridu}。リオ会長が秘密裏に建設していた、終焉に備えるための要塞都市だそうです。一体、いつの間にこんな規模の都市を……」

「そうだがよお……こんな規模の都市を秘密裏に建てるなんて、リオのリソースはどうなってんだよ」

ネルの至極真つ当な疑問。この場に居る誰にも……同じセミナーの少女達にすら悟らせず、秘密裏に作る手腕と隠蔽力も驚愕するが、一番はリソース問題だ。

現実問題、この規模の都市を建造するには莫大な資金と資材が必要になる。リオが会長であっても彼女の独断で一度に動かせる資金には上限があり、それに縛られる限りこの規模の都市は十年経っても建造できないだろう。

故の疑問。リオにはトキ以外にも、これらの資金と資材を融通した協力者がいるのではないのか……という想定。仮にいたとしたら、それは一介の学生の身分で収まる器ではない。最低でもリオと同等の

……学校の会長クラス。もしかしたら大企業の役員・取締役という説もあり得るかもしれない。仮にそうであるならば、ただ単純な暴力で解決する問題ではなくなってしまう。ネルとしては、そういった企業や外部の利権が関わる面倒事は避けたかった。

鋭い彼女の疑問にユウカは「その……」と気まずそうに眼を逸らして

「……セミナーの予算を横領してたんです」

「普段から突飛な行動をされる方ではありませんでしたが……本当にショックです。こんな事をされるなんて……」

「いや、横領には気付けよ。何のための会計と書記なんだお前等は」
「にはは！　ぐうの音も出ないですね！」

ネルの容赦ない正論が突き刺さったコユキ以外のセミナー2人は、互いに示し合わせたように肩を落として苦い顔をする。特に会計のユウカは大きなダメージを受けていた。彼女はセミナーの、ミレニアムの財政を担う重要な役職に就いている。本来、こういう不正を防ぐ役割を担っていたはずなのに、防ぐことはおろか気付くことすらできなかった事には人一倍責任を感じているのだろう。これではゲーム開発部を始めとした、今まで資金に関して口酸っぱく言っていた部活に示しがつかないとも。

対するノアは苦い顔をしているが……必要だったと割り切っている。彼女は、リオが予算を横領してまで作ったエリドゥの価値を知っているのだ。彼女が建設した要塞都市は来るべき決戦に於いて重要な役割を担っている。住民の避難場所として、或いは決戦の地として。

それを知っている身としては、幾ら予算を横領しているとはいえ悪くいう事はできない。アレが無ければ、もっと多くの血と涙が流れていただろうから。

「それにしても、予算を横領ですか……この都市の存在も、そこから知れたのですか？」

「はい。予算の一部に不透明な流れを発見し、それを追跡して……という形です」

—— リオが不透明な流れをそのままにする、なんて初歩的なミスを犯す訳がない。敢えて残す必要もない。となると考えられるのは、気付いても残すしかなかったか……或いはリオ以外の誰かが、残るように細工したか。

「いやあー、それにしても、リオ会長がまさかマジヤバ生徒誘拐をするなんて……」

「……リオ会長は、ご自身がやると決めた事に関して絶対に迷いません。合理的な判断を——時には重要な決断が必要な場面でも何ら迷う事はなく、目標達成のためであれば、ブルドーザーみたいに強引に事を進めてしまう。そうして危険を排除し、キヴオトスの終焉を防ぐべく奔走した結果、出来たのが……」

ノアは瞳の奥に読み取れない感情を滲ませて。

「あの要塞都市、エリドゥなのでしよう」

—— そうだ、リオはやるべきと決めた事、やらなければならぬ事に関しては決して迷わない。基本的に自己完結しているから、良くも悪くも他者の意志が介在しないのだ。故にその意思が揺らぐ事はなく、ただ只管求めた理想に向けて前進する。例えば、その理想の果てで己が糾弾されようとも、罪人として罰せられようとも……彼女は決して足を止めない。

その姿が、ノアは先生と重なって見えた。

やるべきと決めた事、やりたいと思った事には愚直で。恐れを消さず、疑問を忘れず、希望を捨てず、自分を疑わず。戦いには無縁なはずなのに、誰よりも前に立って走り抜ける姿。誰かの幸福と平穏を祈り続け、生徒を救い、守り、教え、導き、寄り添い……だが、決して同じようには生きられない。自罰的、と言えばそうなのだろうが、それだけではない。

ああ、覚えている。彼の言葉を。

—— 死へと向かう巡礼の旅、その果てが昏くとも、今まで積み重ねた全てを無駄にしない為に理想へと手を伸ばし続けるんだよ。その道中に、1つでも多くの幸福と笑顔がある事を祈って。

そう言っ、彼は優しく笑った。その横顔があまりにもあんまり

で、その重荷を軽くしてあげたい、共に背負ってあげたいと思った。先生という役割、誰にも弱音を吐けない孤独な生き方。救世主という罪業、誰かの為に身を捧げる義務と権利。それに雁字搦めにされて、断頭台で刃を待つ彼を見殺しにした事——それが、何度悔やんでも悔やみきれない、生塩ノアの罪だった。

だから、今度こそは。そう誓ったあの夜を、彼の温度に抱かれた日を彼女は忘れない。もうこれ以上、責任を抱える誰かを見捨てたりはしない。彼も、リオも。一人でその道を歩むには、余りにも寒いだろうから。

本音を言うと、死の淵を彷徨う彼の傍から一瞬たりとも離れたくない。手を握ってあげたい。黄泉へ向かう道から引き戻してあげたい。オルフェウスのように音階を奏でながら、彼を暗い道から連れて、明るい空の下へ。

でも、それは我慢。彼に胸を張ってまた会えるように、今はやれる事をやるのだ。目が覚めた彼に呆れられてしまわないように。

それに、彼はきつと願っているのだ。彼が誰かの手を引いて歩いたように、彼に救われた誰かが誰かの手を引いて歩く事を。そうやって善意と優しさの輪が広がって、キヴォトスを包む事を、彼は祈っている。

その細やかな願いを叶えてあげたい。彼に救われ、彼に手を引いてもらった一人の生徒として。今度は自分が、誰かを救い、手を引く番だと。

立場の関係もあり、自分が直接アリスを救いに行くことはできないだろうけど、それでも——その助けになれるのであれば。

「……アリスちゃんは、エリドウの中心部にあるタワーに連れて行かれた可能性が高いわ」

ユウカがタブレットを操作すると、一際高いタワーが拡大された。サンクトウムタワーやシャーレのオフィスビルと比べたら見劣りするが、それでもかなりの高度を誇る建造物。エリドウの中枢機能を担うタワーは確かにアリスを連れ込むにはうってつけの場所だろう。安全性も申し分なく、侵入者の迎撃もしやすい。

「地上340mのタワー、屋上付近は電波塔も兼ねてるようね。地下は20階まであるけど……復元したデータからは、地下に何かあるかまでは分からないわ」

「電力の消費はどうなってるの？」

「あくまで設計当初の想定ではあるけど……屋上付近と地下が特に」となると、その2択か……アスナ、どっちだと思う？」

ネルの問いにアスナは数秒「うーん」と唸り……そして、閃いたように。

「高い方！」

「おし、じゃあアリスは屋上付近か」

「……改めて見ても、その直感、本当に反則技よね……」

「……でも、何でこんな目立つ物が今まで見つからなかったんだ？」

「カリンの言う通りです。このような規模の都市、いくら会長であろうとも必ず何処かで情報の流出が……」

設計当初の図面を見るに都市の面積は100km²。大小様々なビル群が立ち並ぶ未来都市と、中央に聳えるタワー。完成するまでは、少々無理があるがリオの完璧な情報統制でどうにかできたと仮定する。

だが、完成品はそうはいかない。あの規模ではどう考えても目立つてしまう。頑張れば隠し通せる、なんていう範疇を超えているのだ。高所から眺めれば確実に発見できてしまうだろうし、例えば地上であっても一際高いタワーなら眺めることは出来るだろう。規模も何もかも、隠すのには向いていなさすぎる。それなのに今まで影すら踏むことができなかったのだ。

故に、何かしらのからくりがある。

「……鏡面偽装技術。実験段階の迷彩……簡単に言えば、透明人間になれる技術を使っているんです。周囲の風景と同化して、鏡のようにテクスチャを張り付ける……直視はおろか、音波も電磁波も遮断した完全なステルスを、会長はこの都市全域に使用しています」

「……成程な。理屈や理論は分からねえが、言ってることは粗方理解できた。つまりリオはずっとエリドゥとかいう場所でコソコソやつ

てたんだな。セミナーの予算を横領して、ステルスも使いながら」

——全ては、自身が予期してしまった決定的な『滅び』に対抗するために。類希な頭脳はキヴォトスの終点を見てしまい……そして、その終わりを回避するためにリオは未来に奉仕する奴隷になってしまった。彼女は現在いまではなく未来あしたの為に生きている。いつか予期した未来を現実にしないうために、彼女は現在を生きる権利を自身の意志で差し出してしまった。

まるで、救世主であれと捧げられた彼のように。

「エリドウの座標は此処です。鏡面偽装は都市をドーム状に覆っているだけなので、内部に足を踏み入れてしまえば影響を受けません」
「……確かに受け取った」

ネルのスマホに転送されたエリドウのデータと、その座標。距離は少々離れているが、行けない場所ではない。陸路では行けないだろうから、必然的に空路を使用する事になるだろう。C&Cでヘリを出すか、或いは別の部活からヘリを借りるか……いや、それでは駄目だ。迎撃システムで叩き落とされる。ならば、別のルートを……と考えても、ぱっと思いつかばなかった。

「ここから先は私達の仕事です。御三方はミレニウムに残ってください」
「い」

「ッ！ でも……！」

「お気持ちに分かります。ですが、セミナーが不在となつてはミレニアムの行政が麻痺してしまいます。どうか、ご理解を」

考えてみれば当たり前の話だ。セミナーが全員出払ってしまったら、それだけでミレニアムは混乱に陥る。特に今は大きな事故が起きた直後、生徒の安全はセミナーの責任に関わる。そんな状態でミレニアムを離れてしまうのは悪手だろう。確かにアリスもミレニアムの大切な生徒であるが、ミレニアムの生徒は彼女一人ではないのだ。アリス救出の為に他の生徒を蔑ろにしてしまったら……それこそ、大勢の為に一人を切り捨てたりオと変わらない。

それでも、アリスを助けたいという気持ちが大きい。あの時取れなかった手を、握れなかった手を握りたい。今度こそは、と何度思った

事か。アリス奪還の実働メンバーに参加できないユウカの心中は察するに余りある。だが、それでも——ユウカは自分のやるべき事、やれる事を合理的に、冷静に見極められてしまうから。

彼女は苦虫をダース単位で噛み締めた様な顔をして、絞り出したように「……分かりました」と呟き。

「お願いします……リ才会長を止めて、アリスちゃんを連れ帰って来てください!」

その願いを、彼女達に託した。

作戦会議

「——成程。それで私達を」

セミナー3人と入れ替わるように入室したのはエンジニア部の3人。アリスに光の剣を託した鍛冶達は、今までの話を聞き——そして。

「勿論協力しよう。支援は惜しまないさ」

と、随分とあっさり協力を承認した。先のセミナーの差押品保管所襲撃と同じようなフットワークの軽さ。

リオは勝手にエンジニア部最大の発明品を奪って行ったのだ。スーパーノヴァの実戦データを集めるといふ目的を邪魔した以上、エンジニア部に対する事実上の宣戦布告と受け取れる。売られた喧嘩はなんとやら、エンジニア部の部長として到底看過する事は出来なかった。

というのが建前。本音はもつと簡単だ。彼女達もアリスを好いていて、大事にしていた。最高傑作とも呼べる光の剣も託したし、それ以外の支援もしていて可愛がっていたのに……お別れすら言えず、その場に立ち会う事すらできなかった。

そんな悲しい別離なんて、納得できるはずがなかった。

「座標は確認できたけど、問題は潜入方法だね。用心深い会長ならきつと、対侵入者用の防御システムを構築しているだろうから、何の準備もなく接近したら……エリドゥが何故要塞都市と呼ばれているか、身を以て知る事になるだろうね」

「じゃ、じゃあどうすればいいの!?!」

「近づく事も難しいなんて……」

「——だけど、それはあくまで何の準備もなく、普通に接近した場合の話だよ」

双子の悲観を打ち払うようにウタハは言葉を紡ぐ。確かに通常的手段……陸路や空路で侵入しようものなら迎撃システムに引っ掛かってそのまま叩き落とされるだろう。撃墜される事を承知で特攻するならば別に良いだろうが、今回は行ったきりの鉄砲玉では駄目

だ。目的はアリスの奪還。彼女を連れて、全員でミレニアムの地に戻ってくる事が最低限の勝利条件。捨て身も自爆特攻も許されない。

しかし、それがかなり難易度が高い事は全員承知していた。あのリオが要塞都市と名付けるエリドゥ、想像の範疇にある迎撃システムは全て最高品質の物を備えているだろうし、此方が考えも及ばないようなシステムが設置されているかもしれない。それを掻い潜り、無傷で侵入するのはかなり骨が折れるだろう。

だが——それは、あくまで通常の手段の話。別の……リオが用意した……厳密に言えば、用意せざるを得なかったルートを通れば、もう少し安全に事を運べるだろう。

「都市建設の人手だけだったらリオ会長のドローンだけで事足りるだろうけど、資材となると話は変わってくる。無から有は作れないからね」

「うん。ミレニアム自治区の郊外には、輸送用の無人列車がたくさんある……」

「都市建設の資材をミレニアムから運んでいたと仮定するなら、路線のどれかがエリドゥと繋がっている可能性が高い」

ウタハはあくまで仮説として話していたが、内心では先の言葉が殆ど真実であると確信していた。

リオはミレニアムの会長。その肩書に見合う絶大な権力を持つが……その権力が及ぶ範囲は自治区の中だけだ。学区から出れば、その決定権が及ぶ範囲は他の生徒と大きな差異はない。建材の購入は横領した資金で外部から買っていったとしても……機密を確保する目的があるのならば、資材の運搬は自分の手でやらなければならない。

となると、必然的に自由が効き易いミレニアム自治区内の設備を使用するだろう。そして、都市建設が出来るだけの資材を効率的に運搬できる設備となれば輸送用の無人列車しか考えられない。

「じゃあ、路線さえ分かれば……!」

「ああ、エリドゥに行けるよ」

「で、でも、路線はいっぱいありますよね……? どうやってエリドゥに繋がる路線を探せば……?」

「そこで私達の出番だよ。道は私達がどうかしよう。そこで、ヴェリタスの協力も仰ぎたいんだけど……頼めるかな？」

「勿論です。私達も協力は惜しみません」

ハードウェアの天才とソフトウェアの天才が手を組んだ。突入経路とその手段については解決したと仮定して良いだろう。

故に、次の議題は。

「——どうやって連れ戻すかだね。多分、ここが一番難しいポイントだと思っただけ……」

「ええ。要塞都市と呼ぶくらいですから……リオ会長には万全の備えがあるのでしよう」

「都市のセキュリティは勿論、防御システムもかなりのレベルだと思うよ」

「それに、要塞都市のセキュリティと防御システムを突破してもまだ問題が残っている」

「話を聞く限り、リオ会長の護衛をしているメイドが一番の障害ですね」

「トキさん……でしたよね？」

飛鳥馬トキ、C&Cのコールサイン04。先のぶつかり合いでネールを一蹴した彼女こそが最大の障害となるだろう。リオお手製のドローンたるAMASも脅威であるが、トキのそれと比べたら無いに等しい。彼女をどう突破するかでこの作戦の明暗は分かたれるだろう。トキの撃破無くして、この作戦は成功しない。

「あの時の、彼女の動き……まるで……」

「うん……チートプレイヤーみたいだったね……」

現実にはゲームと違う、という事を加味してもそう言い表すしかないほどの強さ。幾つかの好条件が重なっていたとはいえネールを碌な反撃すら許さず一方的に叩きのめすのは、何か質の悪い夢かジョークかと思ってしまうほど現実味がなかった。

単純な強さ、で言い表せない異質な何か。ネールが『からくり』といったその不明瞭を彼女達は『チート』であると捉えた。つまりは、何か仕組みやロジックがあるのだ。あの出鱈目を支える裏側には、必ず何

かがある。

「……兎に角、アタシ等に必要なのは作戦だな」

「——え？」

今、有り得ない人から有り得ない言葉が聞こえた気がする。そう言わんばかりの顔を向けた先には真剣な表情のネルが座っていて。

「ね、ネル先輩？　大丈夫？　熱とかない？」

「もしかして、大けがした反動で……」

「ああ？　なんの話だ？　つーかお前等はアタシよりも自分の心配をしろよ」

心配の声を投げかけてもぶつきらぼうな親切心が返ってくるばかりで、真剣な表情は消えない。『まさか、本当に頭を……』とネルに物凄く失礼な事を思った時、C&Cのメンバーが少女達に耳打ちして。

「……任務モードの部長だ」

「そうそう！　仕事モードになった部長はとくっても真面目なんだから！」

「ふふつ、実はそうなんです」

「な、なるほど……！」

そもそも、真面目でなければ武力を行使する組織の長になれていない。リオは癩癩玉、とネルの事を称していたが、その真面目さは買っていたのだ。C&Cの部長を任せる程度には。

「うーん……ネル先輩、どういう意味か聞いてもいいかな？」

「無事要塞都市に着いたとしても、だ。其処がリオの領域である以上、アタシ等の動きは丸見えだ。誰が何と言おうが、アイツはビッグシスターだからよ」

「えーつと、つまり？」

「単純な話だよ。あれこれ浅知恵をこねくり回す暇があるんだったら、初っ端から突っ込んだ方が良いって事だ。この面子でリオに頭脳戦を仕掛けても勝てる訳がねえ。先生かヒマリが居れば話は別だったんだが……居ない奴は頼れないからな」

「ですが部長、それこそリオ会長の思うツボでは……」

「だから作戦が必要ってんだよ」

ネルはその顔を大胆不敵に歪めて。

「正確には、陽動作戦か」

「陽動作戦……」

「このゲームの勝利条件は単純明快だ」

——アタシらがやられる前に、あのチビを救い出す。

それ以外には勝利条件は存在しない。敗北条件はアリスの死、またはメンバーの脱落。

ならば、やるべき事は唯一つ。

「アタシ等C&Cが正面から突っ込んで騒ぎを起こしてやる。そうしたらリオはアタシ等側にトキを派遣せざるを得なくなるだろ？ ついでにドローンも引つ張り出せたらベストだ。アタシ等がエリドウの戦闘能力を釘付けにしてる間にお前達がチビを救え。どうだ？ 簡単な話だろ？」

「でも、それだとネル先輩達の負担が……」

「あ？ アタシを誰だと思ってやがる」

余りにも頼もすぎる言葉。自分こそがミレニウム最強であるという自負が現れた、ネル以外が発しようものなら傲慢とも呼べる宣誓。

「アイツには一杯食わされたからな。次会ったらやり返してやるって決めてたんだよ。後は、それを実行するだけだ」

「……分かった、従おう」

「うんうん！ 私達に任せて♪」

「ふふ、精一杯頑張りますね」

C&C全員が味方となり、共に戦ってくれる。その安心感は途轍もない。彼女達の強さは一度戦ったから身に染みて分かっている。このメンバーなら、エリドウの強固な防御を突破できる可能性はあるはずだ。

「それでは、これで決まりですね。正面は私達C&Cが担当いたします」

「ああ、最低でもトキはアタシが、ドローンはアスナ達で足止めする。お前達はアタシ達を気にせず前へ進め」

「後方から侵入するのはその他のメンバー……ゲーム開発部と私達かな？」

「私達ヴェリタスは遠隔で支援するね」

「防衛システムのハッキングは私達に任せて！」

「はい、完璧にやり遂げてみせます」

作戦は決まった。

まずはC&Cが突入し、正面で暴れて陽動を引き受ける。恐らくリオは自身の手札の中で最も強力なトキを投入し、ネルにぶつけるだろうから、ネルは彼女を足止めする。他のメンバーにはドローンを投入するだろうから、併せてそれも足止め。エリドウの戦力を分断する。これは目立てば目立つほどいい。兎に角派手に暴れて、リオの意識のリソースを此方側に多く割かせる。

その後はゲーム開発部とエンジニア部が突入する。この時の突入経路はC&Cと別が望ましい。C&Cがエリドウ側の戦力を引き付けている間に中央タワーに向かい、アリスの奪還を目指す。

防衛システムやセキュリティの解除は遠方からヴェリタスが行い、彼女達を支援を行う。

「ヴェリタス、エンジニア部。ルートの割り出しにかかる時間は？」

「1時間……と言いたいところだけど、10分で済ませるとも」

「上出来だ。作戦決行は10分後。各自、準備は済ませておけよ」

ネルはそう言い放ち、モモイに視線を配る。最後はお前が締めろ、と言わんばかりに。その意思を受け取ったモモイは力強く頷いた。

「よし、これで行こっか！ 目標は要塞都市エリドウの中央タワー、屋上付近！ アリスが連れて行かれた場所！ 勝手に家出したアリスを！ 私達の手で連れ戻すんだよ！」



10分後。作戦のブリーフィングも済ませた少女達はその手に銃を取る。アリスを奪還するために、彼女が何度だって憂いなく笑えるように。

「——作戦開始！」
姫を救う戦いが、始まった。

その果てが地獄でも

重厚な鉄筋コンクリートに覆われた光を一切通さぬ独房。あらゆる希望が絶たれた現代のシャトー。デイフは要塞都市エリドウ内部――中央隔離施設と呼ばれる場所にある。

隔離施設と呼称される事から読み取れるように、此処の本来の用途は独房ではない。あくまで干渉を遮断する目的の施設であり、その性質が偶々独房として非常に優れていただけだ。故に罪人を収監する施設にしては設備が整いすぎており、正に至れり尽くせり。だが……快適なのかと問われれば、囚われの花は満面の笑みで首を横に振るだろう。

思考を煙に巻く午前三時。ヒマリは車椅子に背を預けながら、心底忌々しそうに閉ざされた天井を見上げた。

「リオ……あなたがやっている事は、やろうとしている事は本当に忌むべき事です。直視に耐えませんが」

『……貴女はいつも悪し様に私の事を罵るわね。陰気だとか、浄化槽に浮かぶ腐った水だとか……』

ヒマリの独り言に反応し、通信を繋げて来たのはいつもの仏頂面をしたリオだった。相変わらず明るさの欠片も無い陰気な顔、見ているだけで気分が沈みそうになる。

「あら、盗み聞きとは趣味が悪いですね。そうやって陰に隠れているいと他人の本音も聞けないのですか？」

『盗み聞きも何も、此処は私の領域内よ。この場でのあらゆる活動は私の手にあるわ』

「相変わらずですね。ええ、下水道の水のようなビッグシスターらしきが出ていて何よりです」

『……まあ、良いわ。そんな風に私を非難する事ができるのはこのミレニアムで……いえ、このキヴオトス上で、ヒマリ……貴女くらいでしょうね』

つまりは、面と向かって対等に対話ができないほど、リオは他者と

隔絶してしまっているのだ。その優れ過ぎている知性の所為で。そんな彼女の唯一の対等がヒマリであり、彼女だけが唯一面と向かつて対話ができた。幼馴染、という言葉だけでは言い表せない深い仲。彼女達は互いに唯一無二であり……同じ地平を見る事ができるのだから。

だが、それも今は過去の話。

『そんな貴女だからこそ、私が今からしようとしている事を理解してくれるのではないかと、期待していたわ』

「アリスのヘイローを破壊する行為を、ですか？」

『……』

「あなたは自分の行いを、ミレニアム——ひいてはキヴオトスを守るための……そういった類の行為だと信じているのでしょうけど」

ヒマリは目を逸らさず、ホログラムに映るリオの双眸を見つめた。

「結局の所、何も知らない少女を誘拐して、都市に監禁し、ヘイローを破壊しようとしているだけじゃないですか」

『その言葉は間違っていないわ……でも』

リオは何か反論を言おうとした。ヒマリが納得してくれるように、理解してくれるように言葉を尽くそうという意志を持った。だが、リオは『いえ……』と言って、その相互理解に至る可能性を孕む道を自らの手で閉ざす。

『貴女はそう考えているから、私の事が理解できず……許容もできないのでしょうね』

「ええ、私はあなたに賛同しません。そして——シャールレの先生も黙ってはいないでしょう」

『……そうね。彼と関わった時間は決して長いとは言えないけれど、それでも為人は把握している。彼は決してアリスを見捨てないでしょう。でも、それは彼が健在であればという仮定の上で成り立つ話』

「……どういう意味ですか、リオ」

『先生は不可解な軍隊襲撃で意識不明の重体に陥っているわ。此処には来れない』

端的に告げられたその言葉の意味、その理解をヒマリの心が拒んだ。笑えない冗談であつてほしいのに、リオがそういう遊びを一切行わない性格である事は良く知っている。故に紛れもない現実であると脳は解を出しているのにも関わらず、彼女の心はその真実を拒んだ。

——先生が、死ぬわよ。

先日の会合でリオが言っていた言葉。それが真実になりかけたのだ。だが、あくまでなりかけただけ。リオは意識不明の重体と言った。彼女が決して事実を歪めない性格をしていることは長い付き合いでよく知っている。だから、彼はまだ生きている——そう思つて、不安を薙ぎ払つた。

『それでも、向こうにはC&Cというミレニウム最高峰の戦力が渡つている。油断も慢心もできないわ』

「……元々そんな可愛い部分がある性格じゃないでしょう、あなたは」
リオの辞書に油断やら慢心やらといった言葉が皆無な事は長い付き合い合から身に染みて知っている。良くも悪くも遊びがなく、同時に隙も無い。がちがちに凝り固まった合理主義者がリオの顔だ。

『——全く、誰一人私の事を理解してくれないのね……唯の一人でさえも。ええ、でも、それでも構わないわ。私も子どもじゃない、誰も彼も理解してくれるとは思つていないわ』

「そうやって誰も理解してくれないと腐るのも、それなりに子どもだと思えますよ？」

理解してくれないと嘆くリオは、果たして歩み寄る努力をしたのか。自分はこういう事を考えていて、こういう意図があると……自分はこのいう人間であると一度でも他者に晒した事はあるのか。

逆に、リオは他者を理解する努力をしたのか。一度でも、誰かと面と向かつて本音を話したのか。互いを知るための言葉を、合理性を盾にして彼女はずっと蔑ろにしていたのではないのか。

理解されないからと決めつけ、他者を遠ざけて独りで腐るのは……あまりにも、子どもだ。

『……ヒマリ、貴女はこの前言っていたわね。私がセーフハウスを

作っているんじゃないかって。でも、その回答だと半分以上不正解よ。より正鵠を得るならば、このエリドゥは未来に起こる脅威を防ぎ、迎撃するために建てた要塞』

外界からの干渉、外界への干渉……その双方を遮断するこの場所は要塞であり、シエルター。危険を排除する剣ではなく、危険から身を護る盾。全ては、破滅へ至る未来を覆すため。

「リオ、あなたは相変わらず……」

『理解されなくても、この世が私を悪と規定しても構わない』

生き方は決めた。今更引き返す事はしない。ならば、後は自分に来る事を精一杯やるだけだ。

『私は、私が正しいと信じる道を進むだけよ』

—— 例え、その果てが地獄でも。



通信を切ったりリオは全てを見下ろせる管制室の椅子の背凭れを軋ませる。

—— ヒマリには全て話した。意図も、目的も、何もかも。後は自分が全力を尽くすだけだ。もし万が一失敗しても、その後はきつと彼女が道を正してくれるだろう。

リオは目を開き、エリドゥを見つめる。誰かを、未来を守りたいという願いの結晶。リオがその身を捧げ続けた証は……相変わらず何も答えてはくれなかった。

「起こりうる全ての変数を考慮し、計算しても……私が目標を達成する確率は99%以上。備えは充分、後は実行するだけ……」

『—— リオ様』

これからキヴォトスの敵を屠るのだと、躊躇うな、疑問を持つなど……自分に言い聞かせるように呟いたリオに届いたのはトキからの通信。彼女の平坦な声音を聞いて心が冷えたのか、リオはいつも通りの表情を張り付けた。

「何かしら、トキ」

『エリドウの監視システムから報告が』

「……分かったわ。結局、データが示した通りになるのね」

リオは長い髪を払い、エリドウの全システムを励起させる。侵入者を決して逃さないフィールドが完成し、合理性の元に磨り潰さんとビッグシスターの意志が駆動する。

「では、後は手筈通りに」

『イエス、ママ』

短い一言と共に通信が切断される。侵入者を表すポインタが幾つか。地下と空中。数は空中の方が圧倒的に多いが、これは恐らくデコイも含まれている。スピードは圧倒的に空中が速い。このまま手を打たなかったら数分と経たずにリオの座す中央タワーに足を踏み入れるだろう。

この場合、本命は——彼女は冷静に、相手の策を分析し、使っても痛くない手札から切っていく。

そして、彼女は小さく呟いた。

「全てが終わったら、ヒマリ、貴女も……先生も……きつと——」
己を受け入れてくれるのかもしれない、なんて都合の良い妄想を
才は胸の奥底に埋葬した。



エリドウのシステムの探知内に入った事を確信したアスナがネルにハンドサインを送ると、小柄な彼女は小さく頷いて——冷たい声を発した。後ろに降下用のハッチがある作戦スペースにて、最強戦力達は作戦の最後の確認を行う。

「——お前等、準備はいいか？」

「勿論！」

「ああ、問題ない」

「いつでも開始できます」

最新鋭のヘリの機内。ミレニアムサイエンススクールが誇る最強の武闘派集団であるC&Cは、当然の如く移動手段を自前で持っている

るのだが……彼女達はそれを全機スクランブルさせたのだ。C & Cが乗っている機体以外にもデコイ目的の機体が何基も隊列を組んでいる。

全機の目標地点はエリドゥウの中央タワー。撃墜にリオがリソースを割けば作戦通りに、仮に見過ぐす事を選んだのならばへりを質量兵器代わりにしてタワーをへし折る算段。操縦しているAIには何重にもプロテクトが掛けられており、その解除にリオ本人を動かせるならばそれはそれで良い。

彼女達は陽動、リオのリソースを少しでも割かせた時点で勝ちなのだ。

尚、今回の作戦で破損したへりの費用は全てリオに請求するつもりである。

「アタシ達の役割は陽動。リオに無視されなきゃそれで勝ちだが……どうせなら、アイツのリソースを可能な限り吐かせた方が良い。本命のアイツ等が楽できるからな」

「ええ。ドローンは都市全域で10000らしいですが、このデータはあくまで建設当初のもの。今はこれよりも多くなっていると考えた方が良いでしょう。流星に倍になっているとは思いませんが……それでも、1500機はあるかと。そこから非戦闘用の機体とメンテナンス中の個体、私達の降下ポイントから離れている個体を除くと……」

「大体、10000弱か」

「はい、そのくらいになるかと——」

刹那、爆音が轟いた。隣を見れば隊列を組んでいたへりが一機撃墜されていて、機体を空中分解させながら地に落ちていく最中。撃墜に使用されたのは迎撃用パトリオットミサイル。だが、それ以外にも隠し玉はあるだろう。

「リーダーはトキちゃんに掛かり切りになっちゃうから、私がドローン達と戦うんだよね？」

「となると、私達3人で最低でも600は持って行きたいな」

「一人200機ですね。分かりました、それを目安にしましょう」

そう話している内に、次々とヘリが撃墜される。最新のヘリを容易く撃墜せしめる迎撃性能は流石リオ手製というべきだろう。あれだけ持ってきたはずの機体がもう片手で数えられる範囲になってしまった。

「うし、固まったな。アタシがトキと戦^やり合ってる間に、お前等はドローンを潰す。一人200機がノルマだ。立ち塞がる障害は全て薙ぎ払え。リオのリソースをアタシ達で枯らすぞ」

4名のインカムにヴェリタスの通信が入る。降下ポイントである、と。後部のハッチが開くと、辺り一面に広がる要塞を冠する未来都市。だが、其処は既に硝煙弾雨飛び交う戦場。破滅的な香りが鼻孔を擦り、ネルの口角が自然と吊り上がる。

——最近は、ずっと消化不良だった。

アリスとの戦いは目的を果たしたために銃を収めた。

^{Division}不可解な軍隊との戦いも、楽しめるようなものではなかった。

アリスが攫われるのを止められなかった日は最悪だった。

だが、今は違う。伸び伸びと戦える。誰かの命令ではなく、自分の意志で。アリスを助けるといふ、自分が望んだことの為に引き金を引ける。

そのの——なんと気分の良い事か。

「^{成功を祈る}Godspeedってなあ！」

誰よりも早く飛び出たネルはミサイルとCIWSが飛び交う戦場へと身を晒した。その次にアスナ、カリン、アカネと続いて降下し——そのタイミングで彼女達が乗っていたヘリが撃墜。降り注ぐ熱風と破片、そしてミサイル。それらを巧みに躲しながら、防御しながら彼女達は銃を構えた。

重力加速度に従い落下する中、視界が飴細工のように伸びる。眼下、見下ろした先にはAMASが銃口を向けていた。ミサイルもターゲットをヘリから4人に変えて、彼女達を撃破せんと白煙を吐く。

だが——。

「甘えよ」

その程度で倒されるメンバーは誰一人としていない。圧倒的な制

圧能力を誇るネルは二丁のSMGの火力と連射力を生かし、向かってくるミサイルを片っ端から撃墜し、CIWSの弾丸は振り回す鎖で叩き落とす。その間にアスナとアカネが地表のAMASを制圧し、カリオンがミサイルやCIWSの発射口を的確に射貫く。空中という生身の人間では身動きを取る事すら困難な悪環境ですら、彼女達の能力を下げる足枷にはなり得ない。

あれだけの迎撃、対空防御、近接防御、AMASを使用したのにも関わらず、リオはC&Cに掠り傷一つ与える事が出来なかった。

「降下成功。次のフェーズに参りましょう」

アカネの言葉に呼応するように彼女達はマガジンを新しいものに交換し、再び銃を握る。わらわらと集ってくるAMAS、各部からせり上がる機関銃とミサイル発射装置。たった4人しかいない彼女達はあつという間に囲まれた。だが、この程度の雑兵で彼女達の余裕は崩せる訳がなく。

「熱烈な歓迎だね」

「ええ、そうですね」

「……どうやら、行かしてくれそうにないけど」

「ハッ！ 関係ねえよ、押し通るまでだ——行くぞッ！」

エリドゥ突入作戦

燃え上がる炎と、風に乗って運ばれる熱。ひび割れたコンクリートの上には空の葉莖と爆破したビルの破片や撃墜されたヘリの残骸。原型を留めていないほど暴虐の限りを尽くされたAMASのなれ果てが街を破滅的に彩り、また一つ刹那的な花を咲かせる。

「やつほ〜!」

アスナの心底明るい声音と、相反する様な圧倒的な暴力。AMASは彼女の弾丸の前に成す術なく鉄屑となり、瞬く間に壊滅する。そして最後は爆発し、辺りにドローンだった何かがまき散らされた。

「あははっ! どんどん爆発してく〜!」

「……これで、100台目!」

動力部を一撃で射貫いた所為か自爆が行われず比較的原型が残っている残骸に足を掛けたカリンは息を一つ吐きだして、銃のリロードを行う。

——あれで100台目。3桁の大台を突破した。だが、ドローンの数も勢いも一向に減っておらず、向けられる殺意と銃口の数に減少傾向は見られなかった。これでは突入前に想定した数字を上方修正する必要があるだろう。

1体の戦闘能力は別段高くなり、精々その辺りのドローンに毛が生えた程度。しかし、数で押されると少々面倒なものがあつた。弾薬にだって限りがある。別に銃が無くても徒手空拳で戦う事もできるが、効率は格段に落ちてしまうのだ。戦局を決めるスピードが今回の肝であるため、撃破効率が下がる事は歓迎できない。

「……終わりが見えない!」

「ええ、想定より数が多いですね!」

カリンの隣に音もなく降り立ったのはアカネ。そして、一拍置いて爆発音が轟き、何かが崩れる音。音の聞こえる方角に目を向ければ丁度真ん中あたりからビルがへし折れ、倒壊している途中だった。眼を凝らしてよく見れば中には大量のAMASが倒壊に巻き込まれて右

往左往右しており、数秒後には全機が瓦礫と区別がつかなくなるだろう。

間違いなくアカネの仕業だろう。ドローンを可能な限り引き付け、爆弾を大量に仕掛けた逃げ場のないビルに閉じ込め、あとはタイミンクを見計らってビルごと爆破。ネルは言わずもがな、彼女も周りを一切気にせず伸び伸びと戦えていて、かなり活き活きしているように見える。

そういえば部長は、とカリンは思つて視線を上げると……彼女は空戦型A M A Sと超高速のドッグファイトを繰り広げていた。尤も、超高速なのはネルだけであり、ドローンは彼女の圧倒的な速度と攻撃力を前に成す術なくスクラップになるばかりだが。

足場にしたビルがみるみるうちに建築物としての体を保てなくなり、二丁のS M Gが直線状にあつた一切合切を薙ぎ払う。破壊し、失墜するドローンすらも足場にし獐猛に敵を狙い続けるその姿は宛ら猟犬や獅子。生粋の捕食者が今の彼女を形容する言葉として最も相応しいだろう。

「……今の所、派手に暴れて騒ぎを起こす、という陽動の目的は達成できていますが……」

アカネは時計を見る。もう直ぐ本命部隊がエリドウに突入する時間だ。ポイントから引き離れたドローンは何機か分からないが、それでも彼女達の突入が少しでも楽になる事を祈ろう。そう思い、アカネは爆弾でドローンのお掃除をしようとした時——カリンが弾かれたように顔を上げた。約200m離れたビルの屋上、自身達を見下ろす人影。

「そっ……ッ！」

照準を合わせ、引き金を引くまでに1秒足らず。一切のブレも狂いもない、脳天を直撃するコース。着弾までコマ数秒のオーダーであり、如何なる強者であっても見てから反応する事はほぼ不可能。反射神経の限界という、人体の構造上仕方がない問題が横たわっているのだ。だが——。

「避けた……?？」

「あら」

「わあ！ すごくいい！」

ひよい、と軽々しく。人影はカリンの弾丸を躲した。まるで初めからそこに来ることが分かっていたように。攻撃の先読み、という生易しい次元の話じゃない。アレは最早、未来予知と同等レベルだ。

「……お出ましたな」

カリンは煙吐くライフルを下ろし、その視線を鋭くする。あの人影こそがリオ側の最高戦力にして、不明点。彼女達の前に立ち塞がる――
――最大の障害。

此処までは想定通り、後は少女の相手をネルが―――と思った
ら、既に彼女は少女の背後に居て。

「――ツ」

「此処はアタシの距離だ」

その華奢な足を振り抜いた。

咄嗟に展開される積層型電磁シールド。絨毯爆撃すら防ぎきるり
オ手製の専用装備。だが、ネルはそんなものはお構いなしに脚力を解
放しシールドの上から思いつ切り少女を蹴り抜く。圧倒的な膂力に
裏打ちされた蹴りは少女が立っていたビルの角を崩し、爆発したよう
に瓦礫が舞う。降り注ぐ破片は容易く人を殺傷せしめる巨大な殺意、
運悪く真下に居たA M A Sは回避する間もなく瞬く間に全滅。そし
て、蹴られた本人たる少女は弾丸の様な勢いで着弾し、コンクリート
が捲れ上がり地面が揺れた。

例えヘイローを持つ少女であっても確実に意識は刈り取れる威力
だった。どれだけ強くても戦闘能力はがた落ちしているだろう。だ
が―――煙が晴れた後には、一切の手傷を負っていないトキが涼し
い顔で立っていた。盾にしたであろう電磁シールドは見るも無残な
姿に成り果てているが、それ以外は一切無傷。服に汚れすらついてい
ない。

その光景にC & Cも驚愕するが……同時に納得した。確かに、この
実力であればネルを抑え込めるだろうと。そして、その強さからく
りがある事も分かる。彼女本人も勿論強者であろうが、それを後押し

している何かが存在しているのだ。恐らくはリオの何かしらだろう。少し厄介だな——と彼女達は意識を鋭くした。

「取り敢えず、あん時の借りは返したぜ……新人」

ビルから降り立ったネル。好戦的に歪んだ笑みを浮べる彼女とは対照的に、少女は鉄仮面のように無表情であった。ネルの声に対する反応も見せず、破壊の限りを尽くされた要塞都市の成れ果てを氷のような瞳で一瞥し……そして、最後にC&Cの4人を見る。

「……お待ちしておりました、先輩方。C&C所属、コールサイン
ゼロフォー
04。飛鳥馬トキ、ご挨拶申し上げます」

芝居がかった優雅な所作でスカートを摘み、トキは深々と頭を下げた。



C&Cが地表で派手に暴れている時と同じくして、ゲーム開発部とエンジニア部はエリドゥ内部の駅に進入していた。薄暗い非常灯に照らされる無人駅。恐らくは資材置き場も兼ねているのだろう。整理整頓された様々な物資が辺りに積まれていた。しかし、それらを片付けてスペースを確保すればキヴオトスに多くある駅と大きな差はない。人が生活する事を想定しているような構造であるのに、人の気配も生活も一切感じない事が不気味さを助長させていた。まるでこの世ならざる場所に足を踏み込んだような、あるいは霊長類が死に絶えたポストアポカリプスのような……そういった、非現実感が景色の裏側に燻っている。

「此処が……」

「エリドゥ……」

「此処にアリスちゃんが……」

きよろきよろと辺りを見渡しても、資材とレール、列車以外には何も無い。人も、ドローンも。不気味なほどに静まり返った場所だからか、呼吸音と足音、布の擦れる音だけがやけに響く。金属をそのまま打ち付けた様な簡素な階段を使って列車から降りると、冷たい空気が

肌に張り付いた。

「よし、想定通り物流輸送用無人列車でエリドウに來れたね」

「うん、ヴェリタスが手伝ってくれたおかげ」

「流石ヴェリタスです！ まさか列車のシステムごとハッキングしてくださるとは！」

『ちよつと言葉に棘ない？ 気のせい？』

彼女達の言葉の節々から『お前達も来い』という棘が感じられたが……ハレは『まあいいや』と軽く流した。ハードを扱うエンジニア部と違い、ソフトを扱うヴェリタスは侵入経路さえ用意されていれば仕事はできるのだから。

『……気を付けてね。その通路の先、地上に出たらもう完全にエリドウの敷地内だよ』

『一応、ちゃんとモニターリングしてるから安心してね！』

『ですが、此方で拾えなかった何かが突然現れるかもしれません。此処は既にリオ会長のテリトリーです。くれぐれもご注意を』

その言葉に誰もが息を呑み、銃を握り締める。ウタハも雷ちゃんの調子を確認、スタンバイモードで起動させた。此処は既に相手の領域内、何が飛び出しても不思議ではないのだ。特に今回の相手はあのリオだ。想像の上を行くともんでもない兵器やら何やらの相手をしなければならぬ可能性がある。油断なんて出来る訳がないのだ。

そう思っていると、上……地表から振動が伝わり爆発音が聞こえてきた。一回ではない、断続的に、何回も。激しい戦闘が起こっているようだった。

「……C&Cの降下が成功したようだね。現在はドローンとリオ会長直属のC&C……確かトキ、だったかな？ 彼女と交戦中だ。随分派手に暴れてくれているようだね。おかげで此方側の守りが手薄になっっている」

「マキ、そっちはどうなってるの？」

『大混戦も大混戦。ホント、とんでもない事になってるよ！』

マキはC&Cを映しているモニターを視ながら『うひゃー』と感嘆の声を漏らす。少し前にC&Cに喧嘩を売ったが……今思うと随分

命知らずな真似だと思う。兎に角、ネルが途轍もない。一人だけ生きている世界が違う。そして、そんな彼女と真つ向勝負できているトキも凄まじいし、他のC&Cもネルには劣るが出鱈目な事には違いない。C&Cがミレニアム最強の武力集団だと言われている理由が言葉ではなく目で以て分かった瞬間であった。

——リオもC&Cが陽動で本命がゲーム開発部達である事は見抜いているだろう。だが、関係ないのだ。見抜かれようが見抜かれまいが、相手に無視できないと思わせる事ができればそれで良い。そもそも、バレずに侵入なんて都合の良い事ができるとは思っていない。最初からバレる事を前提で、速攻を仕掛ける。相手に立て直す隙も、戦力を集中させる隙も与えない。スピードこそがこの作戦の肝だ。

そう考えると、この作戦は今の所順調に事が運んでいると言える。リオ側の最高戦力と思われるトキと大量のドローンはC&Cに釘付けにされ、守りは手薄。ならば、後は勢いそのまま行ける所まで——
—そう思った時、皆の前に数機のドローンが姿を見せた。

「おや、中々素敵な子だね。迷子かな？」

「いやいや！ 迷子じゃないよウタハ先輩ツ！ これ、リオ会長のドローン！」

「分かつてはいたけど、早い……！」

リオのドローン、A M A Sの襲来。気付かれているとは思っていたが、それでもドローンを送り込むまでのスピードが速すぎる。弾かれたように銃を構える突入部隊のメンバー達であるが……その様子がおかしい事に気付いた。現れただけで、銃を一向に撃つてこない。見物に來ただけのようにも見えるドローンを訝し気に眺めていると……再び通信が入った。

『大丈夫、そのドローンは攻撃してこない』

『バレる前に制圧終わってるよ！ ついでに周辺のネットワークは私達でハッキングしたから、地上までは安全に出れるはず！』

「わ、そんな事も出来るんだ……凄いな……！」

「ヴェリタスだからできた事だね。ここまでは悪くない走り出しだ」

そう言い、各々が銃を持ち、引き金を指に掛ける。ヴェリタスがハックしたドローンは確かに襲ってこないだろう。だが、カウンターハックされる危険が無い訳ではないのだ。敵は倒せるときに倒すのが鉄則、逃がす理由はない。

誰かに急かされる訳もなく、正確無比に弾丸を打ち込みドローンを破損。完全な沈黙を確認した後、彼女達は地上へと続く階段を駆け上がった。

歪む生命論

白く、白く、殺菌された塩の牢獄。外界からの干渉の一切を遮断するこの場所は病院の無菌室。

「——」
そこで力なく横たわるのは、無数の機械に繋がれて無理矢理生かされている先生だった。輸血は終了しても、傷が消える訳ではない。人体に付けられた傷は肉体がある限り不可逆で、元通りになんてならない。あの斬首痕は、文字通り彼が埋葬されるまで残り続ける。まるで、罪人の証のように。

病院から連絡があつた。先生の自発呼吸が一時的に停止した、と。

「——先生」

呟く声。小さく、弱い、消え入りそうな音階。それが誰から発せられたものなのかは分からない。ユウカか、或いはノアか。もしかしたら二人の声が重なったかもしれない。だが、そんな事なんてどうでもよかつた。目の前に聳えるこの現実を前にしてしまえば。

どうやら先の出血性ショックで内臓の一部に血液、及び酸素の供給が滞っていたようで、その症状が遅効性の毒のように彼の体を蝕んでいる。内臓障害、特に呼吸器系が重いらしい。その障害と神秘の毒性が相乗効果を生んでしまい、彼の機能を1つ殺した。まだ心停止はしていないが、いつそうなくても不思議ではなく、彼は少しずつ暗い死の方に足を進めている。まるで、そうである事の方が自然なように。

一報を聞いて、病院に全力で向かつて、説明を受けて。現実には根付いているはずのそれらを聞いても何故かその出来事が現実であるという実感が無くて、綿で絞殺されているような心地で言われるがままに通されて。

「——」そして、現実を突き付けられた。

最後の面会になるかもしれない、なんて縁起でもない事を言う医師は意識の外から弾き出されて久しい。彼女達はただ、ガラス越しの彼を見つめている。数多の願い、幾多の意志を背負い——そして、その果てに断崖に立つ彼を。

小さく響く電子音がガラス越しに聞こえてきて、思わず足の力が抜けて地面に座り込んでしまった。タイヤ越しに伝わるリノリウムの冷たい温度が妙に気持ち悪くて、現実が脳の奥で少しずつ弾けて浸透していく。理解を拒んでも時間は止まらない、という当たり前の道理に苛立ちを覚えても何もできない。死神に胸倉を掴まれている彼を抱きしめる事は不可能なのだから。彼女達と彼はガラス一枚という紙切れに等しい防御壁を隔てている。

「……先生ッ」

絞り出したような、掠れた声。涙で滲んだ視界の所為で彼の顔がよく見えない。何度も目に焼き付けて、記憶に留めたあの顔。時折見せてくれる屈託のない笑顔が花のようで、その笑みを引き出したいと何度も思つて幾度も試行錯誤した。今はもう、人形のように眠るばかり。

ふと、靴底が床を叩く音が聞こえてきた。病院だから、と気を遣つて走らないようにはしているが逸る心がそのまま早歩きとなつている。揺れるヘイローと、長い桃色の髪。黎明と黄昏、二つの空を抱く瞳は焦燥と不安で滲んでいた。

あの、少女は——。

「……アビドスの、小鳥遊ホシノさん……でしたか？」

「うへ、やっぱり先越されちゃつてたか」

ひらひらと力なく振られる手にはスマホが握られていて、取りつけられた鯨のストラップが揺れている。無理矢理取り繕つたような、力のない体。彼女もきつと、彼の状態を聞いて駆けつけてきたのだろう。彼女はそのままノアとユウカの近く……ガラスまで歩いて、彼を見下ろした。

「……また、無茶したんだね、先生」

その声には有り余る悲しみと後悔が滲んでいた。また守れなかった——という一念。ホシノは二度、傷を負った彼を見ている。落ち込んだ双眸、彼に輝かしい未来を見た瞳は暗く澱んでしまった。本当に大切な人の息が止まったという知らせを受け取った彼女の内心はどれだけ痛み、悲鳴を上げているのだろう。でも、それでもと——

——彼の為に祈る暁の少女は、酷く美しかった。

彼女は伏せていた目を開眼し、もう一度祈る。どうか彼に命を——と。

「アビドスの皆さんは？」

「皆はお留守番してるよ。ほら、押しかけちゃ迷惑になっちゃうでしょ？ だから私が代表として来たんだ」

ホシノは「委員長特権はこういうときに使わないとね」と笑うから、釣られて2人も笑みが零れた。それは職権乱用だろう、と。思えば、ここ最近はずっと笑えてなかった。しかし、その笑みも一瞬。直ぐに現実が覆い隠して、ユウカは重々しく口を開いた。

「……ホシノさんは、私達を責めないんですね。あの場に居ながら先生を守れなかった、私達を」

「いや、おじさんも傷心の女の子に追い打ちをかけるほど鬼じゃないよ」

ホシノは緩んだ笑みを見せてから——それを引き締めて俯き、噛み締めるように「それに」と言つて。

「手の届くところに居たのに守れなかった辛さは……よく知ってるから」

もつと自分がちゃんとしていればこんな事にはならなかったのではないか。もつと自分が強ければ誰かを奪われずにいたのではないか。そう思うと自分への不甲斐なさや怒りと絶望と憎悪で心が満たされて、何処にも向けられない感情が大きく育っていく。誰よりも許せない自分自身が、傷ついた誰かの代わりに生きている現実が認められない……ホシノという少女は何度もその呪いに身を焦がしてきた。それが残された者に与えられた罰だと思つて、誰かの分まで苦しむことを受容した。

その誰かが、残された者の幸せを願つていた事から目を逸らして。

「……こんな偉そうな、説教みたいなこと言っちゃってごめんね」

「いえ、そんな……」

眩き、ユウカは下を向く。震えているホシノの手。彼女もきつと無理をしているのだ。折れかけている心を『彼はまだ生きている』とい

う一縷の希望に縋って何とか持たせているに過ぎない。達観したような言葉を発しているが、彼女だって17歳の……ユウカやノアと1歳しか違わない女の子。大切な誰かを失いかけて平静でいられるはずがないのだから。

それを何とか取り繕い、泣きだしそうになる心を押さえつけて、誰かの心に寄り添う言葉を投げかける……ホシノという少女はあまりにも強かった。例えばそれが今この場で取り繕った張りぼての強さでも、尊敬に値する事は間違いない。彼女だって、泣きたいだろうに。

「……ホシノさんも、先生に助けられたんですか？」

「うん。私が此処に立っていられるのは先生が救ってくれたから。こんな面倒な生徒なのに、私の手をずっと離さないでいてくれたんだ」「先生らしいですね」

そう言つて、笑い合つて。互いの思い出を共有する。こんな一面があったとか、こんな事があつたとか。アビドスでの彼、ミレニウムでの彼。生徒を心から想っていて、愛していて。それ故の極度の巻き込まれ気質で、厄介ごとばかりに引きずり込まれる。だが、彼はそれを邪険にするどころか、生徒に頼られる事が心底嬉しいようであった。笑っていた。

そうして親睦を深めてからホシノは少し雰囲気固くして——
——ずつと聞きたかつた本題を切り出した。

「……多分そつちも機密とか事情とかいろいろあると思うから、さ。答えられるなら答えてほしいんだけど……」

しん、と静まり返る世界。

「誰がやった？」

その一言と共に空気が凍り付いた。ホシノの発する圧倒的な、世界そのものが押し潰しにきているようなプレッシャーを前にしてユウカは戦慄した。

——強いとは思っていた。先のビナー戦での大立ち回りを見るに間違いなく自身よりは強いとは考えていたが……これは流石に想定外だ。冗談じゃない。ネル先輩に匹敵するか、或いはそれ以上の……！

「あんな傷は事故じゃ負わない。殺す気が無いと首の動脈なんて切れない。だから、悪意と殺意を以て先生を傷つけた誰かが居るんでしょ？ それに、ちよつと前にミレニアムの部室棟で事故があったよね。ガス爆発がどうか。アレも実はカモフラージュで、真相は別にあるって思ってるんだけど……どうかな？」

頭も切れるのか、とユウカは更に驚く。ホシノの推理はほぼ正解だ。先生の状態と、ミレニアムで起きた事故……たった2つの情報で、彼女は隠された真相を暴き出した。だが、『当然だろう』と何処か冷静に処理する自分がユウカの中に居たのも事実だ。先生の傷が大きなヒントになり過ぎている。彼の性格、訪れていた場所と、そこで起きた事故。これの関連性を疑わない方がおかしい。

「ねえ、どうなの？」

ホシノの眼。鋭く細められた猛禽類を思わせる瞳に灯る激烈な殺意と憎悪。もし仮に、この場で人物名を出したら、彼女の手で殺されるだろうという確信があった。例えその道が地獄でも、そんな事をしても彼が決して喜ばないとしても……それでも、彼を傷つけた誰かが許せない。彼を傷つけて、のうのうと生きている現実を認められない。奪ったなら奪われるべきだと現実が絶叫を上げる。

「——ま、言えないよね」

途端、ユウカとノアを潰していた圧力が霧散する。息苦しくもなくなり、心臓を驚掴みにされているような悪寒も綺麗さっぱり消え去った。僅かに恐怖を孕んだ目でホシノを見ると、彼女は「怖がらせちゃってごめんね」と緩く笑みを浮べて謝罪した。

そして、彼女は踵を返して。

「じゃ、おじさんは帰るよ」

それだけ言って、ホシノは振り返らず遮断された面会室から去っていった。まるで何かを堪えるように、これ以上あの場に居ると、動かない彼を視ると泣いてしまいそうだから。

その背を、何も言わずに眺めている2人。無力と遣る瀬無さを漂わせる背中に、思う部分はあった。特にノアは良く知っている。何もできなかつた痛みを、噛み締めた無力を。彼を慕う者として、彼女が知

る限りを伝えたかったが……それは無理だ。ノアはあのアリスを知らない。記憶にある限り、アリスが別人のようになったことなんて無いのだ。知らない事は知らないまま。真実を知っていそうなり才はエリドゥでアリスを殺そうとしていて、先生は断崖の果て。

彼女が得意なのは記憶に留める事、忘れない事。特別身体能力が高かったり、腕つぶしが強かったりはしない。戦闘も得意な方ではなくて、前に出て戦うよりも援護や支援の方が性に合っている。何かを知っているはずなのに、何もできない——その現実が、余りにも苦くて。

「先生……」

何故彼だけが——そう思った回数は数えきれない。いきなり知らない土地に連れて来られ、戦わないなら死ねと突き付けられ。争いを好まない彼は眉間に皺を寄せ、祈るように戦ってきた。死にたくないからではなく、生徒の為に。彼は生徒の為に多くを捧げた。時間も、体も、心も、愛も……命さえも。そして、救われたはずなのに。

それなのに、まるでやり直しだと言わんばかりに回帰して——彼は死後の安息すらないまま、また走っている。血を吐きながら、誰かの為に。

その生き方がどうしようもなく哀しく思えるのは——自分だ
けなんだろうか。彼も、彼の幸せを見つけてほしいと思うのは傲慢なのだろうか。その疑問に答えてくれる人は、何処にもいない。

要塞都市の所以

降り立った……と言うよりは、ネルによってビルから叩き落とされたトキは遂にC&Cの前に姿を見せた。生徒の名簿にすら記載されていない顔と名前。だが、その身に纏うメイド服と佇まいが彼女が紛れもなくC&Cのコールサイン持ちである事を証明している。

話に聞いた通りの手練れ。立ち姿の何処にも隙が無い。向けられている視線も此方の出方を観察するような色があり、万事に対応できるように意識を研ぎ澄ませている。ジャイアントキリングなんて叶わない。彼女と戦って勝ちたいならば単純な実力で上回らなければ不可能だろう。

「思つたよりも早く現れてくれましたね。ですが、誤差の範囲内です」「私達が此処に来るのは最初からお見通しだったという訳だ」

「はい。リオ様は全て把握しておいでです。C&Cの判断も、その動きも——勿論、その狙いも、全て」

全て見え透いているが故に、全て掌の上。当然この状況も想定内であるし、イレギュラーなんて無い。リオが描いたシナリオ通りに現実には奏でられている。予定調和の三文芝居の如く。この盤上に居る限り、彼女達は決して敗北を覆せない。その事を誰よりも知っているトキは深々と頭を下げて。

「ですので、僭越ながら申し上げます。これ以上の抵抗は無意味です。大人しく投降をお願い致します」

——だからどうか、投降を。

トキは別段、積極的に誰かを傷つけたい訳でも戦いたい訳でもない。それが同じ部活の先輩ともなれば猶更だ。同じ部活の仲間……などと云う烏滸がましい事を言うつもりはない。

ネル以外は初対面であり、アカネも情報は掴んでいたものの顔を合わせるのは初めてだ。そんな状態で仲間、なんて言っても説得力がない。薄っぺらい関係性で変に仲間意識を持たれても相手だ先輩達って迷惑だろう。それでも同じ学校の、同じ服を纏っている者として……彼女達の身を案じる自由位はある筈だと。

リオの命令にはなかつたはずの行為。トキナりの優しさと善意が表れた進言であつたが——それは、C&Cを逆鱗を逆撫でした。

「ほう……なるほど」

「うーん、それはちよつと難しいかな?」

C&Cを舐めているとしか言えない降伏勧告にカリンの瞳が鋭くなり、アスナが笑つて銃を構える。

降伏? 冗談じゃない。そんな腑抜けた選択をするくらいなら最初からこんな所に来ていなかった。ネルの意志でリオに歯向かう事を決めたのだ。一人だけ訳知り顔でアリスを殺そうとするあの決定が気に食わないから助けに来たのだ。彼女達が意志を折るのは部長が折れた時だけ。そして、そんな事態は未来永劫起きない事は身にかけて分かつている。

詰まる所、交渉決裂。一昨日来やがれと言わんばかりに銃口をトキに突き付けると——途端、トキの隣にあつたA M A Sの残骸が爆発した。

「……!?」

「わつ、ビックリした!」

咄嗟のバックステップでダメージを回避したトキであるが、メイド服のフリルが僅かに煤で汚れた。白に重ねられた黒は良く目立ち、それを何とも言えない無表情で見つめたトキは煙の奥に居る人物を冷たく射貫く。C&Cの4人のうち、爆弾魔なんて1人しかいない。

「あら、やはりこの程度では相手になりませんか」

「あ、アカネ……?」

「……室笠アカネ先輩。戦闘では爆発物を利用した広域制圧を得意とする——C&Cの要注意人物」

「ふふ、初対面の後輩にそう言われると少し照れくさいですね。先ほどののはあくまでも挨拶のつもりだったので……」

挨拶代わり、と言うが……あわよくば意識を刈り取るうとしていたのだらう。残骸という意識から外されやすいものに仕掛けられたプラスチック爆弾^{プラスチック爆弾}トラップに加えて、ノーモーシヨンの起爆。爆発自体を回避できたとしても飛び散る破片が第二の凶器となるため、無傷での回避は困難極

まる。だが、それでもトキは回避してみせた。話に聞いていた通り。

「初めまして、後輩さん。トキ……でしたね？ 先日は部長が大変お世話になったと伺いました」

「世話にはなつてねえよ」

ぶつきらぼうなネルのツツコミを無視して、アカネは自身の後輩にして——敵である少女を見る。可憐な笑顔の裏に純粋な感情を隠して。

「それに……投降しろという丁寧なご勧告まで頂くなんて……ふふ、貴女がリ才会長のボディガードを務めている事は伺っていましたが……全く——C&Cを見くびってもらつては困りますね」

純粋な感情とは、即ち怒り。アカネの攻撃性が発露する。C&Cを侮辱されたのだ。ミレニアムが誇る最強のエージェント集団たるC&Cを。数多の任務を乗り越え、輝かしい栄光を打ち立てた仲間達を……無意味と嘲った。腸が煮え繰り返るのも道理というもの。たとえそれが善意から生まれたものであつても、可愛い後輩にして同じC&Cの仲間からの言葉であつても……許せぬものがある。容認できぬものがある。

共に『最強の集団』という称号を背負う仲間たちを侮辱されて、冷静でいられるものか。

「目には目を、歯には歯を。本日はそのために来ておりますから」

故に、暴力には暴力で返礼する。あの日ネルを振り伏せたのと同じように振り伏せるのだ。そこに加減も容赦も必要ない。

「貴女は確かに強いのでしょうか。隠し玉は多くあれど、恐らくは貴女こそがリ才会長のとおつておき、懐刀となるのも領けます。ですが、無敵ではありません」

カリンの狙撃は回避された。必殺必中のタイミングと速度であつたのにも関わらず、難なく。

それに対して、ネルの蹴りは回避ではなく防御をした。手札の1つである電磁シールドを展開し、防御に専念し、ダメージを0にした。

アカネの爆撃は回避されたが、今まで汚せなかつたトキのメイド服

に煤汚れを刻んだ。

後半二つに共通するのは、トキの行動と対応が咄嗟であった事……
読まれていなかったのだ。攻撃の起点はトキの背後と、トキの後方足
元——死角。つまり、トキの未来予知にも等しい能力はトキの視
野の範囲内でのみ効力を発揮すると推定できる。

この考察が違ってても構わない。何かしらの条件がある事は確定し
ているため、そこは実戦の中で探ればいいだろう。勝ち筋は、必ずあ
る。

「勿論、此処で大人しく投降するのですしたら水に流す事はできますよ
？ 部長も先の一撃で借りは返したと仰っていましたので」

大人しく尻尾を巻いて逃避を選択するならば見逃すぞ、とアカネは
トキと同じように投降を勧める。勿論、素直にトキが領いてくれると
は思っていないが……それでも、彼女には武器を交わす前に投降を勧
められたのだ。ここは同じく、相手にも投降勧告をしなければ失礼だ
ろう。目には目を、と自分で言ったばかりなのだから。

「……それはできません。私はリオ様から命令を受けております。指
示に背いて行動しているC&Cを制圧せよ、と。そのため、この場か
ら引く事はできません」

「ふくん、真面目ちゃんなんだね、トキちゃんは♪」

「想定通りの反応だ。言葉で引いてくれるとは初めから思っていな
い」

カリンは徐にトリガーを引いてドローンを数機纏めて撃ち抜き、撃
破。耳を塞ぎたくなる音が轟き破壊されたドローンが爆発し炎を上
げて街を彩った。真横で起きた爆発はトキの余裕を崩す事はなく
……武装の使用ができるようにメイド服の一部をパージ。パワード
スーツ用のアタッチメントを露出させ、彼女も臨戦態勢となる。

「C&Cは秘密のエージェント組織……最初は潜入によって此方を攪
乱すると踏んで備えておりましたが、まさか堂々と正面からいらつ
しやるとは想定外でした。しかし、作戦と考えると納得もできます。
恐らく、私がこの場に居る事もあなた方の作戦の内では？」

「……そうなのか？」

「あはは♪ そうなんじゃないかな〜？」

「あら、そうですねえ……私達としても想定外ですよ」

「——誤魔化そうとしても無駄です」

誤魔化し方がお粗末すぎる。これでは疑ってくださいと言っているようなものだ。沈黙を選択したネルに至っては答えを言っているようなものだし、他のメンバーも似たり寄ったり。やはりと言うべきか彼女は謀はかりごとが苦手だ。リオには遠く及ばない。

「先輩達の思惑など分かっております。ゲーム開発部がおりませんね。つまり、そういう作戦なのでしょう？　先輩方は私の足止めを任されている」

「——」

「それは正しいでしょう。リオ様の武装を纏った私との正面对決は先輩達に任せ、その間にゲーム開発部を自由にさせる……それであれば、確かに僅かに勝算はあるでしょう。先輩方の勝利条件はアリスの奪還、エリドウの陥落や私の撃破ではありません」

トキは「ですが……」と呟き、その手にアームギアを装着する。先日ネルに使った手札にして、リオがトキの能力を見込み、彼女に送った武装の1つ。その威力を身を以て知っているネルは唇を吊り上げ、凜猛に笑った。

「ゲーム開発部が突破可能なほど、エリドウのシステムは甘くありません。作戦を間違えましたね、先輩方。本気でアリス奪還を考えるのであれば、ネル先輩は本命の部隊に行くべきでした」

「ハッ！　聞いてもねえ事をペラペラとよく喋るなあ、オイ」

展開したアームギアから10発のミサイルが射出されるが、その全てはネルの銃撃で撃ち落とされる。射出から全機撃墜までにかかった時間は1秒程度。凄まじい攻撃精度と速度。何せ、ネルの真正面にいたはずのトキが、彼女が銃を抜く瞬間を視認できなかつたのだ。気づいたら銃を抜いていて、自分の攻撃の全てが捌かれていた現実を前にトキはその表情を僅かに歪めるが……まだ、手は多く残されている。焦る必要はないだろう。

「テメエの装備は強力だが……装備が強力なヤツは他にも知ってるん

だよ。装備が強えなら、それを頭に入れば良いだけだ。初見なら兎も角、同じ手品が二度も通じると思うなよ、後輩」

武器が強力であるのなら、その選択肢を封殺すれば良い。あのアームギアは確かに強力だ。通常の爆発に加えて、電子機器を破壊するための手段まで搭載されている。加えてホバリングもできる事からドローンのように使用する事も出来ると考えられる。

このようにタネが割れているなら、幾らでも対応ができるというもの。そして、対応できるなら二度目は通じない。当たり前前の摂理だ。この時点でトキの武装が1つ……否、先の蹴りで破壊された電磁シールドを含めると2つ潰された。

——使用可能な武装は奥の手が1つ。レッグギアが2機、ドローンが4機、他タイプのアームギアが2機。携行火器のアサルトライフル、シークレットタイム G11K3。相手はネル、ダブルオー出し惜しみをして勝てる相手ではない。となると、取れる手は必然的に限られてくる。

「……へえ」

眩いたネルの眼前、そこには全身を武装で固めたトキが立っていた。

腕部に装備されたアームギアはネルが見たものよりも小型であり、人体の動きを阻害しない……簡単に言ってしまうえば鎧の様な装備。問題なく銃器を握れるだろう。各所に展開しそうなハッチがある事から、恐らくギミックが隠されている。

脚部も同様に、人体の延長線上にある。各所のハッチは姿勢制御用のバーニアか何かが格納されているだろう。飛べるかは不明だが、陸上での機動力は数段上がったと考えていい。

そして、彼女を固める4機のドローン。その内の2機が攻撃用で、残りが防御用。攻撃型の装備はミサイルと機関銃、防御はシールドとCIWS。

奇を衒わず、拡張した人体に使いやすい武装を装備する。いかにも優等生なりオらしい回答だ。

「それがテメエのフル装備か」

「ええ、これが私の全力です」

——あくまで『この場で出せる全力』ですが。トキは心の中で付け加えて、ネルを鋭い眼で射貫く。リオのサポートも正常に機能している。演算も十全。本命の奥の手を確実に通すため、この状態で可能な限りネルを消耗させよう。リオの命令は……絶対だ。

「雑魚どもは任せるぞ」

「はい！ リーダー、思いつきりやっちゃって！」

「ああ、了解した」

「勿論です、部長の邪魔はさせません」

散開し、トキが引き連れて来たA M A Sと交戦する3人のコールサイン持ち。辺りで戦闘音が奏でられ、この場に立つのはネルとトキの2人。彼女達は全く同じタイミングで構え——戦闘態勢へと遷移する。

「さあ、リベンジマッチと行こうか」

「……此処は通しません」

「知らねえよ——ぶっ飛ばして通るまでだッ！」



「これで……！」

コトリのM134^{プロフェツサーク}。モーターにより高速で回転する銃身、6本に束ねられた暴力から吐き出される無数の弾丸は分間2000から4000発にも及ぶ。地下という逃げ場のない閉鎖空間に於いてこの武装は最高峰の制圧能力を叩き出し、前方にいた大半のA M A Sを薙ぎ払った。

そして、もう一人。この地下で最高クラスの制圧能力を持つ生徒が居る。

それがヒビキだ。持つ武装は迫撃砲、M224^{ファンシーライト}。60mmの口径を持ち、迫撃砲の中では中迫撃砲という部にカテゴライズされる。天井がある都合上、高い射角を取り遮蔽物越しの攻撃や真上からの攻撃は不可能であるが、グレネードランチャーのような運用は充分可能である。そして、彼女ほどの頭脳を持つならば弾道計算や偏差射撃もお

手の物。コトリの射角外、撃ち漏らした敵を的確に攻撃し……そして、全てのドローンをスクラップにしたことを確認した彼女はゴークルを上げて残骸が散らばる一面を見渡した。

「邪魔なドローンは全部倒した……！」

ゴークルに搭載されているセンサーからは動体反応や熱源反応は得られなかった。前方も、モモイ達が担当している後方も。ウタハの方を見ると、彼女も静かに頷いた。彼女もヒビキと同様に敵が居ない事を確認したのだろう。

『皆、油断しないで！ そろそろ地上だよ！』

ヴェリタスの通信をバックミュージックに彼女達は地上へ繋がる階段を一気に駆け上がる。ドローンの追撃はない。響く音は人数分の足音と呼吸音、そして銃器が奏でる騒々しい音だけ。

随分と地下深くにステーションを作ったのだろう。10階層分ほどは駆け上がった筈なのにまだ地上は見えない。そして、それだけ時間が経ってしまったえば当然敵も集まって来る訳で。

彼女達の後方から機械音が聞こえた。

「ッ！ 増援！」

振り返った視線の先、暗い闇の中であっても目立つ白を基調とした期待と同色のカメラアイ。先ほど粗方片付けたはずの陸戦型AMASが隊列を組んで押し寄せている。

「マキ、数は分かる？」

『先行してるのが7！ 後方には……分かんない！ でも最低20はいる！』

「……流石に真面に相手したくないね」

30機程度、別に倒せなくはないだろう。先のようにコトリとヒビキを中心にして残りのメンバーを露払いに徹させれば少ない消耗で撃破すること自体は可能だ。

だが、今回はスピード勝負。アリスのヘイローがどのタイミングで破壊されるか分かったものではない。リオの性格上、破壊可能なら即座に実行に移すだろうから……雑兵掃除に時間を掛けることは悪手だ。タイムリミットが不明であるならば、可能な限り早く彼女の元へ

と辿り着きたい。

「全部倒したはずなのに、どうして……!」

『恐らく、エリドゥの構造が関係していると思う。都市全域に迷宮のように地下通路が張り巡らされていると仮定したら……』

「そこを通れば増援も早く送り込まれる……そういう訳だね」

『ごめん……私達のリサーチが足りなかった』

「ううん、マキ達の所為じゃないよ」

そうしている内に、ドローンの追いつめる手がどんどん近づいてくる。ここで少女達は二択を迫られる。迎撃を優先するか、地表に出る事を優先するか。

迎撃するならば、階段というあまり良くない足場で戦う事を強制される。地表に出る事を優先しても、恐らくは待ち伏せは居るだろう。

何機いるかは分からないが、その待ち伏せに加えて追ってきているドローンを相手にするのは少々骨が折れる。

そして、このドローン達もエリドゥの防衛機構の内の1つに過ぎない。中央タワーに近づくにつれてどんどんと厳しくなるだろう。それなのに、こんな序盤も序盤で消耗するのは……余りにも手痛い。

どの択を選んでも旨味がない。少しずつ、だが着実にリオは少女達を磨り潰しに来ている。圧倒的に有利だから油断や慢心の1つくらいしてくれてもいいのに、遊びや隙が皆無だ。ただ只管、合理的に、完璧に。二重三重に張り巡らされた蜘蛛の糸、神算鬼謀の体現者。

さて、どうするか——誰もがそう考えたとき、ユズは足の速度を緩めて最後尾になった。

「ごめんなさいッ!」

その一言と共に発射されるグレネードランチャー。狙う場所はドローンではなく足場である階段そのもの。アリスがネルに対抗した手段と同じ手を彼女も取った。

爆発音が響き渡り、煙が晴れた場所には大きな風穴が空いていて……それを前にドローンは足止めを食らう。迂回路を探すが、此処は階段。そんな都合の良いものは何処にもない。空戦型が居ないのか、完全にドローンと少女達は分断された。

「すごいよユズ！ 超ナイス！」

「う、うん……階段はなくなっちゃったけど……」

「いや、構わないさ。退路は終わった後に考えよう」

—— リオの性格上、負けたときに抵抗するとは考えにくい。彼女達が目的……アリスの奪還を果たした場合は恐らく素直に帰してくれるだろう。つまり、退路が必要な時は奪還アリスが死亡した作戦が失敗した場合。そして、『アリスが殺されて素直に逃げ帰るか』と問われれば否だ。よって、退路はそもそも必要ない。あとは進むだけだ。

道を断たれたならば、と言わんばかりに執拗に射撃をする先行部隊のドローンに見向きもせず少女達は再び階段を駆け上がる。これで最悪は防げた。だが、この先は恐らく空戦型も投入されるであろう。先ほどのように陸路を断つても追撃の手を緩ませることは叶わなくなる。それが今後はどう影響するのは不明であるが……それでも、今は前に進まなければ。

「出口が見えたよー」

最前列のモモイが指差す先、そこには光があった。人工的な明かりではなく、太陽光。それを見て、全員が更に速度を上げて長い階段を上る。地表付近の構造は一般的な地下鉄の駅のような造りになっていて、最早迷う部分はない。そして、少女達は地表マイナス数cmを踏みしめて——。

「よーし！ 外に出れた！」

「ふむ、此処がエリドゥ……凄まじいね」

犇めき合うように立ち並ぶビル群。事前に資料として目を通した設計当初の図面よりも数段発展している要塞都市を前に全員が固唾を呑んだ。スケールが違いすぎる。たった一人でメガロポリス級の都市を形にするなんて誰もが出来の悪い冗談だと思ってしまうのに、リオはその絵空事を実現させてしまった。間違いなく同じことは誰にもできないであろう大偉業だ。

「……それで、ここから何処に向かえばいいの？」

『アリスがいるのは中央タワー。ここだけセキュリティが段違いだから詳しい構造とかは分からないけど……それでも確率が高いと思う』

『現在地からルートを算出しました。左手にある大通りを真っ直ぐ北に進めば辿り着けます』

ヴェリタスかた端末に送信されたマップに映る赤いマーカーが現在地。其処から伸びる点線に従い進めば、確かに中央タワーに辿り着けそう。碁盤の目のように理路整然と張り巡らされた道路。マップやガイドが無いと景観がほぼ同じな事も相まって迷子になる事間違いないのだが……今回はヴェリタスという頼れるハッカー集団がバックについている。迷う事はそうないだろう。

少女達は聳え立つ摩天楼の中、最も目立つ中央タワーを見上げる。直線距離で約10kmは確実に離れているであろうにも関わらず、その威容は他の建造物と一線を画していた。あの場所にアリスが……そう思うと自然と銃を握る手に力が籠る。

望むのはアリスの奪還。誰もが笑えるハッピーエンド、誰一人欠ける事のない大団円。

アリスの涙を、言葉を、絶望を否定する為に——此処まで来た。仕方がない事だからと目を覆って天使の輪を欠けさせることが正道であり真理であると宣うのなら……その正道も真理も、悉くを否定する。リオの目的に妥当性や正誤があるかなんて興味はない、そんな事は心底どうでもいい。ただ、その目的の為に友達を犠牲にする事が許せないのだ。

その一念を胸に少女達は要塞都市を駆け抜ける。振動する地面から隔壁がせり上がり、彼女達の道を断とうとするが……システム面はヴェリタスが見ている。隔壁は完全に上り切らず、1m弱程度の壁になるのみ。そして、その程度の高さの壁で少女達の進撃を止められる訳もなく軽々しく飛び越えてタワーを目指す。

『エリドゥのAIからカウンターハックを受けました。私が対処に当たります』

『うん、実働部隊の援護は私達に任せて』

都市の自動防衛システム。今まで殆ど無視していたヴェリタスの援護を的確に潰しに来ていた。ヴェリタスの援護がなければエリドゥの防衛機構を突破できないと踏んだのだろう、確かにそれは半分

当たりだ。そして、この状況は予想済み。この場合は――。

「我々の出番という訳ですね！」

「うん、手初通り私達で現地のシステムはある程度受け持とう。ヴェリタスには及ばないが、それなりにソフトも弄れるさ」

「うん……任せて……！」

ゲーム開発部に同伴し、現地にいるエンジニア部がヴェリタスが担っていた役割を受け持つことで強引に解決する。確かに彼女達の専門はハードウェアだが、それはソフトウェアがからつきしである事を意味しない。寧ろ、彼女達は其処らのプロよりも精通している。エンジニア部の発明品に搭載されているプログラムやファームウェア、ソフトウェアは全て自前のもの。知識も経験も充分だ。

持ち込んだ機器を使用し、システムに侵入し、書き換え、突破していく。リオもC&C側に多くのリソースを割かなければならない関係上、彼方側と比べると苛烈ではないが……それでも手強いものは手強い。隔壁以外にもミサイルやレーザーやらCIWSやらがせり出して侵入者を排除せんと攻撃を開始する。

それに加えてA M A Sまで参戦し、彼女達の道を塞ぎ銃を構える。懸念通り空戦型も配備されていて、陸戦型と半々程度。少々面倒な手合いであるが、少女達は一切減速せず果敢に突撃し。

「どいたどいたー！」

躊躇なくトリガーを引き、ドローンを粉碎する。跳ねた弾丸が道路やビルの外壁に当たっても一切の損傷が見られない。流星要塞都市だ。硬度も強度も申し分ない。

……それだけに、この都市の建築物や道路をスナック感覚で破壊していくネルの異常さが浮き彫りになっていくのだが。

コタマがエリドウの攻性システムと激闘を繰り広げている間に、ハレとマキは攻撃兵装のシステムを落としに掛かる。次々と区画を突破していく作戦のため無視しても大事には至らないだろうが、兵装の有効射程が分からない都合上、無視するわけにもいかない。

何と戦う想定であるのか一切分からない過剰な兵装を一つ一つ解除していくと、彼女達を狙う銃口の数が少しずつ減っていく。

最後の1つ、まかり間違つても人に向けるべきでない馬鹿げた口径のレーザーをハッキングしたと同時にドローンの残数もゼロとなる。中央タワーを望むこの区画に敵性反応は皆無だ。

「制圧完了!」

「先を急ごう。増援は来ているかな?」

『来てるけど、数は少ないし距離も離れてるから無視しても大丈夫だと思っよう!』

マップに新たに映ったマーカーが増援。しかし、マキの言う通り距離も離れていて数も少ない。恐らくはC&Cに使っていたドローンを此方側に回したのだろう。これなら無視しても構わない。

尤も何故今になってC&Cに回していたドローンを此方に向かわせたのか……その意図が分かりかねる事に僅かな不安を覚えてしまふが。何か、大事な事を見落としているのかもしてない——その疑問がウタハの内心を黒く彩った。

『大丈夫、道案内とシステムは任せて』

『ささ、このままGOGO〜!』

ヴェリタスの頼もしい声に従い、先を目指そうとしたその時——
—地面が揺れた。

「何ッ!?!」

「こんな時に地震!?!」

「……いや、これは……」

『ううん、地震じゃない。エリドゥだけが揺れてる。一体何が起きてるの……?』

『モモ、ミド! そつちで何が起きてるか見える?!』

——遂に、要塞都市エリドゥがその本領を表す。

神髓

「揺れている……のか？」

「んん、地震？」

「地震にしては振動のパターンが単調な気がしますが……」

同刻、突入部隊が地面の異常な揺れを感知した頃。陽動部隊としてエリドウの最外周から徐々に中央へ進軍しているC&Cも同様に地面の振動を感知した。だが、感じられる振動は突入部隊とは比較にならないほど小さく、地面に立っていると『何となく揺れている気がする』と思う程度。同じ都市内で起きている事とは思えない程温度差のある影響。だが、その差異を指摘する者は此処にはいない。

そして、エリドウを襲っている異常を事前に知らされている者が一人。

「……リオ様、手札を1つ使われたのですね」

懐刀たるトキだけは、この現象を事前に教えられていた。エリドウが持つ数ある手札の内の1つ、防衛線に於いて最も効力を発揮する機構。リオからすれば使っても痛くない手札であろうが、それでも使わせた事実が大事なのだ。秘密のヴェールが1つ？ぎ取られたのは大きい。

——負けるとは思わない。現状はどう考えても此方の方が有利だ。奥の手まで含めれば盤石と言ってもいい。しかし、トキは知っている。イレギュラーがある事を。自身が交わした取引で持ち込まれた……否、持ち込まざるを得なかった、盤面を崩す特異点。それを考えると……。

「……可能な限り、早く対処した方が良いですね」

「余所見してんじゃねえぞッ！」

「しておりません。見えています」

弾丸のような速さで突貫するネル。頭に血が上ったような顔をしながらも頭脳の冴えと冷静さは変らない。両手に構えた銃での確に動きを阻害しトキを仕留めんと果敢に襲い掛かるが……それらは全て見え透いている。

トキは敢えて棒立ちで銃撃をやり過ぎし、直撃コースはシールドで防御。突撃するネルを真っ向から迎え撃つ。彼我の距離がクロレンジに移った時に、両者は共に仕掛けた。

トキは右アームギアに仕込まれたショートブレードをポップアップ。グリップを握り締め横薙ぎの軌道を選択する。

突然出て来たブレードに『今まで温存していたのか』と驚愕するが、まだ間に合うと判断。ネルは驚異的な反応で銃に取りつけられた鎖を手繰り寄せて迫っていたブレードを絡め取った。

この時の為に隠していた武器が1つ奪われたトキであるが、その鉄仮面に揺るぎはない。彼女は何の躊躇もなくブレードを手放し、腕部スラスターで加速。骨を容易く砕く威力を持った手刀でネルの首をへし折らんとする。だが、その攻撃もネルには通らない。端を足で踏みしめ、ぴんと張った鎖でトキの腕を受け止めた。金属が奏でる不協和音、散る火花。ゼロ距離で睨み合う両者。

「ハッ……！」

「……」

鎖から落下するブレードの柄をネルは蹴り上げ攻撃するがトキは顔を逸らす事で難なく回避。寧ろそれを隙とみて足払いを仕掛けてネルの体勢を崩した。だが、ネルもただで転ばない。もう一丁の銃に仕掛けられた鎖でトキの左腕を拘束し、そのまま思いつきり引つ張った。すると当然、トキもネルに釣られて地面へと倒れ込む。

「――」

互いに向ける銃。鼻の先が触れそうな距離に銃口があつて、暗闇が互いを見つめていた。当然の如く回避できないレンジ。ネルはこのまま我慢比べとしゃれこむつもりであったのだが、トキはそんな勝負に興味はない。スラスターの加速度がたっぷり乗った足でネルの体を蹴り飛ばし無理矢理距離を取った。

吹き飛ばされた先に在ったビルに蜘蛛の巣状の罅が入り、壁が倒壊する。しかし降り注ぐ瓦礫はSMGの火力で全て粉碎されて、下に居る彼女を襲う事はない。

「……痛えな」

煙が晴れた先には痛そうに顔を歪めているが、体はほぼ無傷のネルが何食わぬ顔で立っていた。彼女は僅かに赤く染まる唾を吐き出し、口元を乱暴に拭いて……顔を好戦的に歪めて銃を構えた。

「さあ、仕切り直しだ」



通常、地震や洪水、土砂崩れ等の被害が広範囲に及ぶ災害は発生と影響範囲がある程度判明され次第、即座にクロノスなどの情報機関が速報を流す。いつもは割と適当なフェイクニュースを流し、世間からの信用がお世辞にも高いとは言えないクロノススクールであるが、災害に対する動きの速さだけは認められている。

しかし、そんなクロノススクールはおろか他の報道機関も一切エリドウを襲っている地震について報道していないのだ。いくら秘匿されているとはいえエリドウはキヴォトスの内部にあり、極論学園自治区やD・U・と同列だ。大半が『ここは要塞都市エリドウである』とか『ここには何か隠されている』と思わないだけで、高い場所から見下ろせばエリドウがある座標は望める。

それにも関わらず、災害速報が流れてこない。これはあらゆる情報を握るヴェリタスが太鼓判を押す事実だ。

いや、エリドウの地震が報道されないのは百歩譲って良いとしよう。しかし、エリドウだけを襲う地震なんてない。仮に震源がエリドウ直下であっても必ず周囲に影響が出る。秘匿されているのはエリドウだけで、近辺はオープンだ。その場所で起きている異変は掴めないとおかしい。

故に、エリドウを襲っている地面の揺れは自然現象ではないのだ。

一体何が起きているのか———そう思ったハレは画面越しに奇妙なものを見る。

突入部隊のマーカーが動いているのだ。一定の速度で、機械的に。しかもその方向は目的地たる中央タワーとは真逆。入口に戻る方角だった。

「皆、そっちは進行方向じゃないよ。目的地は——」

「ハレ先輩、皆が動いているんじゃない！ 都市全体が動いてる！ 嘘でしょ!？」

ハレは弾かれたように手元のPCでエリドゥのデータを収集する。セキュリティを突破し、ファイアウォールを超え……そして、都市に仕掛けられている監視カメラの1つ、突入部隊が居るセクションを掌握した。

画面いっぱいに映される監視カメラの映像、其処には——マキが言った通りの信じられない光景が映し出されていた。



突入部隊の眼前に映る光景は、フェイクだと思ってしまうほど現実感が無いものだった。音も聞こえていない、見えてもいる。何なら自身でも体験している。しかし、そのスケールが規格外過ぎて脳が正常に理解できていない。

ビルが、設備が、都市が動いている。稼働し、その配置を刻一刻と変えている。先ほどまで道だった場所は行き止まりになり、何もなかった場所にビルが建つ。吹き飛ばした隔壁も入れ替わり、迎撃システムも新調される。

そして、少女達が立つ地面も例外ではない。稼働し、一步も動いていないはずなのに座標が変わる。中央タワーから、アリスから遠ざかる。ヴェリタスが算出したルートは使い物にならなくなり、立っている場所ごと振り出しに戻される。

「どうなってるのこれ!？」

「……何が出てきても不思議ではないと思っていたけど……まさか都市全体にこんな大規模な仕掛けをしているとはね」

簡単に言ってしまうえば、この都市全体がスライドパズルの拡大版なのだ。

正方形に区切られたセクション、碁盤の目のように理路整然とした外観。思えば、都市全体も正方形だった。それも全て、この仕掛けを

円滑に動かすための用意。

要塞都市エリドゥ、防衛戦にて最も効力を発揮する施設。仮に外敵から攻め込まれても都市の構造を変化させることにより相手を封じ込める。恐らく、完全な要塞として使うのならば隔壁を持つセクション全てを外周に移動させるのであろう。

仕掛けも単純に、都市の基盤にレールと動力を仕込んでいるのだろう。それを自在に動かし、その時に応じた最適な都市の形に整える。今回は妨害。リオは彼女達を目的地に辿り着かせないために迷宮のように入り組んだ構造にエリドゥを変化させた。

これは少々拙い事になった、とウタハは思考する。唯でさえタイムリミットが分からない現状、可能な限り時間は掛けずにいたい。しかし、今はこうして振り出しに近い位置に戻され、中央タワーへと至る道は迷宮の中に閉ざされた。ヴェリタスがまた一からルートを解析しても、もう一度構造を変えられてしまえばその努力も無に帰す。

つまり突入部隊はいつ振り出しに戻されるか分からない状況で、リオの指先一つで姿を変える都市のゴールを探さなければならぬ。制限時間が明確に存在する現状、どう考えても現実的ではないだろう。

——一応、都市の迷宮を無視する方法は存在する。それは単純に空を飛ぶことだ。変化するのはあくまで陸路、この場から飛び立ち空路で一直線に中央タワーに向かえば関係ない。最速最短で辿り着けるだろう。だが、数多の最新鋭ヘリを叩き落とした対空防御を潜り抜ける事ができれば、という前提条件がある。その前提の壁が、余りにも高い。

それか、超高火力兵装でビル群をぶち抜きながら一直線で進むか。しかし、これもそんな火力の武装を扱えるメンバーがこの場に居ないため現実的ではない。光の剣スパーンザがあれば、或いは……とは思うが、扱える少女も武装自体もリオに囚われている。この方法は選択できない。

そして、最後の1つ。エリドゥを動かしているシステムをハッキングして停止させる方法。だが、これも最高峰のセキュリティを突破し、かつリオとの競り合いに勝たなければならぬ。何方か片方なら

ば可能だっただろう。しかし、両方となれば流石のヴェリタスでも荷が重いと云わざるを得ない。その両方を熟せるのはヒマリか先生くらいであろう。

しかし——最後の手段が最も現実的と言わざるを得ない。

「ヴェリタス、済まないが……」

『はい。私達でエリドゥの基幹システムに攻撃を仕掛けます。陥落は困難でしょうが、妨害はしてみせます』

「ありがとう、それで充分さ。後は私達で何とかするよ。無茶なお願いをして悪いね」

その言葉を最後にヴェリタスからの通信が途切れる。現時刻を以てヴェリタスはエリドゥ基幹システムの陥落に全力を注ぐため、これまでの様な支援は期待できない。ドローンや防衛システムの妨害も、敵の探知も。彼女達は文字通り身一つで難攻不落の要塞を攻略しなければならぬ。

「ドローンを出すよ。焼け石に水だけど、ないよりはマシだから……」
ヒビキの手元から離れるドローン。元は彼女の武装である迫撃砲を十全に扱うために作られた外部補助であるが、探知等の基本的な機能は大体揃っている。勿論、彼女の発明品らしくNFC機能とBluetooth機能、ついでに自爆機能も完備だ。

彼女の近くにホバリングし、各種センサーとカメラが稼働する。Googleに映る情報から得られたデータは、確かにこの場所はエリドゥ外端に近い場所である事と——そして、C&C迎撃の為に使われたドローンがこの先のセクションで待ち構えている事だ。隣接するセクションからもドローンを集めたのか、その数はマキが教えてくれた時よりも増加している。

迂回路はない、故に前に進むのみ。

「予想外の事はありましたが、やる事は変わりません！ 目的は依然変わらずアリスの救出、目的地は中央タワーです！」

「うん……コトリちゃんの言う通りだね。アリスちゃんを、助けないと」

「よし、皆、前進！」

何回リスタートされようが、理不尽に打ちのめされようが決して諦めない。あらゆる障害、意図、その全てを凌駕し、目指すのハッピーエンド。その誓いは決して揺るがず、ただ前へ進む。その先に、輝かしい未来がある事を祈って。

「交戦距離に入った……！」

ヒビキの声に呼応し、全員が武器を構える。強い意志が籠った瞳で見据えるのは、ドローンが守るその先。

「皆、気を付けて……！」

ユズが発射したグレネードランチャー。その一発が開戦の狼煙となり激闘が幕明けた。

死の淵に立ち

——この夜を幾つ超えたら、私は終われるのだろうか。

変質する肉体、変質する魂。自分が自分でなくなる感覚を覚えながら、先生はふとそんな事を考えた。宛先の無かった糸が何かに絡まっ
て、結びつきが強くなるたびに、自分が何処にもいない虚無感を覚え
た。漠然と、此処に居てはいけなと思うようになった。キヴオトス
の為に、他ならぬ生徒達の為に今この場で自刃するべきだと。いずれ
自殺すらできなくなる……と、脳の奥が警鐘を鳴らした。

——私は凡そ考え得る限り、最悪の死を迎える。

断崖を前に、彼は連邦生徒会長に笑いかけた。彼女の顔はよく見え
ない。だけど、きつと悲しんでいるだろうという確信があった。彼女
の事なんて手に取るように分かる。それだけの時間を重ねてきた。
それだけの思い出を育んできた。そして、逆もまた然り。

——此処から先、一歩踏み出せば二度と安らぎを得られないだ
ろう。だが、それでもいいんだ。

こんな役目を彼女に背負わせる訳にはいかない。消えるのは、死ぬ
のは1人で充分。その1人もキヴオトスの異物であれば、厄介払いも
できて一石二鳥だろうと言った。しかし、彼女は決して頷いてくれな
かった。唯、縋るように手を伸ばした。

——分かってくれ、とは言わないよ。これは私の我儘だ。

生徒に光溢れる明日を。その誓いを違える事は許されない。これ
こそが己の生きる理由であるのだから。

そうして、彼は背を向けて……彼女の言葉に耳を傾けた。

「貴方の笑顔の奥にあった憂いに気付けなかった事を……今でも、悔
やんでいます」

「——さようなら、連邦生徒会長。私の最初の教え子。なんでも
ない女の子。もう二度と会えないだろうけど……元気でね」

——先生！ アリスは勇者になります！

その綺麗な夢の果てを見届けたいと思った。例え、それが叶わない願いだとしても……それでも。彼女の旅路がどんな色で染まるのか、あの透明だった少女が鮮やかに色付くまで知りたかった。

——先生、アリスは……皆と違う生き物なのですか……？ 皆と一緒にいるべきじゃないんでしょうか……？

それは違うと宣言した。アリスは皆と何一つ変わらない、この世界で生きて、誰かを愛する人間だと叫んだ。彼女はこの星の下で歩いていけるのだと、他ならぬ彼女自身に言い聞かせた。

——ケイ、君もだよ。君も、皆と何一つ変わらない。君も誰かを愛して、誰かと生きる人間なんだ。人間なんだよ。女王のための鍵アリスじゃない。君は、君だよ。

この言葉は、果たして届いたのだろうか。それは分からない。けど、その時……初めてケイは笑ってくれた気がした。アリスよりも大いびた少し冷たい笑みは彼女がアリスではない事の証左。

鍵ではなく、ケイとして。モモイの付けた名前を大切に口遊んだあの時、アリスとは異なる一つの命が芽吹いた。彼女はアリスの隣で星を見上げたのだ。

——これは先生だけの記憶。彼だけが覚えている世界の轍。もう過ぎ去ってしまった大切な残滓。何を失おうとも決して手放さなかった、生徒達との思い出。

先生が対話したのはあの世界のアリスとケイであり、この世界の彼女達ではない。故にあの記憶を彼女達は知らないし、別に知ってほしいとも思わない。彼女達は同位体であっても別人なのだから。

だが、それでも——。

アリスがまた泣いているなら。

絶望の淵に立ち、『消えたい』と呟いているのなら。

ケイが諦観しているのなら。

それが運命だと、兵器としての自身を受け入れているなら。

——その絶望と諦観を覆す事が、先生たる己の役目だ。

「——あり、す」

痛い。痛い。痛い痛い痛い痛い。生きていくだけで、呼吸をしているだけで死にそうになる。声帯が震える度に血の味がして、激痛で意識が遠のく。目が開けられない。体が動かせない。全身の感覚が鈍い。寒いのか暑いのかすら分からない。ただ、神経に直接流し込まれたような痛みだけが鮮明だ。

死に体、満身創痍。そういった言葉がよく似合う酷い状態。ただでさえ脆弱なのに、今は現代の医療に縋らないと細胞分裂すら儘ならぬ。心臓も止まりそうだし、呼吸だって上手くできない。内臓は何個か駄目になっただろう。

だが、それがどうした。

喉を震わせる。叫べ。生きていくのだと。こんな絶命の淵でのたうち回っていても、確かにまだ生きていくのだと。生きていくから、まだやれる事が残っているのだと。この生にはまだやるべき事が残されているのだと、誇り高く宣誓しろ。

「——け、い」

自分の命なんて心底どうでも良くなるほど大切に想っている生徒達の名前を震えながら紡ぐ。止まりそうになる心臓を無理やり動かして、息を吸って、命を繋ぐ。途轍もない勢いで寿命を削っているが、そんなことは知った事ではない。元より先の短い生命、10年削れようが30年削れようが大差はないのだ。それに、自分の数十年よりも彼女達の先の方が大切なからだから——己は此処で灰になれ。

動かすたびに死ぬ体を無理矢理動かす。

呼吸するたびに止まる心臓を強引に動かす。

これ以上は、とアラートを出す脳を意志で振り伏せて、残骸と成り果てるはずだった肉体に喝を入れる。

目が開いた。赫く、赫く染まる視界。蒼く、蒼く墮ちる世界。だが、色も分かる。目も見える。それ以上なんて求めない。

手が動いた。痛覚以外の感覚なんてとうに消え失せている。だが、まだ動く。彼女の手を掴める。彼女の涙を拭える。彼女を抱き締められる。それで充分すぎるくらいだ。

足が動いた。走ることはおろかまともな歩行すら不可能だろう。だが、それでもまだ動く。動くなら、彼女の元まで駆けつけられるはずだ。

「いか、ないと……」

そうだ、行かないと。彼女達の元へ。涙を拭わないと。諦観を打ち砕かないと。そうでなければ、そう在らなければ何が先生か。何が大人か。

身を振ると音を立てて体に接続されていたチューブが外れる。管の口から溢れる液体達は先生の肉体を生かし続けてきたもの。まるで縛鎖を千切るように、彼は死体から生命へと新生する。

口元に装着された酸素マスクを乱暴に取り払い、深く息を吸って——そして、掠れるような音色で咳き込んだ。ぽたぽたと口から唾液と胃液、血が混ざった液体が溢れ、口元とベッドを汚した。やはり呼吸器系はかなりダメージを負っている。完全な再生は難しいだろう。

そして、手を突いて上体を起こそうとするが……死にかけの体上半身を支えるだけの力が残っているはずもなく、徒労に終わる。しかし、『それならば』と言わんばかりに身を振り、ベッドから落下した。「……ッ」

落下した距離は1mもない。だが、それでもこの体にはかなり堪えた様で、身を床に打ち付けた瞬間意識が飛びそうになり、衝撃を受け止めた右腕からは嫌な……骨が折れる音が鳴った。更に抜き忘れた翼状針が肉を抉るように刺さってしまい腕から僅かに流血。彼は痛み顔に顔を歪ませながら針を抜き、床を這いずりながらローテーブルに置かれたシツテムの箱へ手を伸ばす。

——あ、ろ、な。

確かにそうやって声に出したはずであるが、代わりに零れたのは枯葉のような咳の音。もう声も出せなくなったのか——否、違うだろう。まだ、やれるはずだ。

限界まで伸ばされた彼の手。震える指先は、確かにシツテムの箱を掴んだ。

「——アロナ」

僅かに血の香りがするシツテムの箱の表面を撫でて、明かりは灯らない。バッテリーの残量は充分であることは分かっている。何せ先生が手に取るまで電源ケーブルが接続されていたのだから。

となると、考えられるのは。

「守ってくれて、ありがとう」

彼女は、彼女の持てる全てを使って先生を生かしているのだ。今この瞬間にも死に行く先生を生に押し留め、死神の足跡を蹴散らしてくれている。彼女が、戦っている。守ってくれている。

それが嬉しくて、彼は深い感謝と——謝罪を紡いだ。

そのまま彼は病院のシステムを一時的にジャック。自身の部屋を掌握し、抹消し、漂白する。病院脱出も手慣れたものだ。何をやるべきか、何が必要か、その全てが把握できてしまう。救えないな、と自嘲。誰かに迷惑をかけっぱなしだ。

彼は病院着を脱ぎ、生まれたままの姿となり……数日変えていなかった人工皮膚を剥がす。

「クラフトチェンバー」

眩いた彼の眼前、落下したのは10にも及ぶ注射器とシャーレの制服であった。

ミントグリーンの患者服を脱ぎ捨て、シャーレの服に袖を通す。そうする事で、傷だらけでありながらも彼は再び先生となった。呼吸しやすいように首の包帯を少し緩ませ……彼は注射器を手取る。

ナノマシンが入った注射薬や細胞活性化薬。その他、多くの劇薬。それを一本ずつ打ち込み、肉体を蘇生させ、最後に追加でアンプルを致死量ギリギリまでバカ打ちして——彼は、その足で立ち上がった。

「ハア……ハア……お、エ……」

煩く跳ねる心臓。沸騰するほど熱を持つ脳。消えようとする意識。充血し、マールを描くようにぐちゃぐちゃになる視界。震える手足。過回復で細胞がネクロシスし、耳や鼻からの流血が止まらない。

全ての投薬は生きるためだ。だが、その投薬自体が危険そのものであるため、全てが『生きるために死ぬ』という支離滅裂で無茶苦茶な自殺行為に成り果てた。一瞬一瞬、彼は死んでいく。彼は生き返る。「わ、た、し……は……」

死の淵、輪廻の断崖。身を投げる寸前だった深淵に背を向けて彼は生に疾走する。ただ、誰かの為に。

——別に、自分だけが彼女達を救えるなどと思いつもりはない。彼女達の特別が自分であると自惚れるつもりも、ない。彼女達の旅路は長いのだ。これから先、もっと良い出会いが待っている。もっと輝く想い出が待っている。先生よりも良い誰かに必ず出会うだろうし、特別もきつと見つけられるはずだ。彼女達の長い旅路の中で僅かな時間を共に過ごした誰か……彼女達にとって、先生という存在がそれ以上の何かにはならないだろう。

だが、それでも——伸ばされた手を己が掴めるなら。流れる涙を己が拭えるのならば。否、そんな理由付けすら不要だ。

何故なら——私は。

「先生だ……ッ！」

それだけが己に残された、たった一つの譲れないプライド。

それを胸に、彼は一歩ずつ進んでいく。目的地は要塞都市エリドウ、アリスとケイが囚われている場所。多くを抱え込んでしまった少女が座す場所。

こんな死に体で何ができると己を嘲笑いながら、それでもと前に進む。壁に凭れ掛り、手すりを使って、震える足を引き摺って。

ただ、その瞳の意志だけは——決して翳らなかつた。

それでも、前へ

風が吹く。咳をしても一人。この場には先生以外誰にもいない。

エリドゥ、入り口前。聳え立つ摩天楼が冷たく見下ろすその場所に彼は立っていた。白のシャーレの制服と、生気を感じさせないほど青白い肌。風が吹けば消えてしまいそうな命の灯であっても燃えているのならばどうともなる。消えていなければ、それでいい。

「――」

都市の中に入ればA M A S達が盛大に出迎えてくれるだろう。リオ手製の超高性能ドローンだ。己が勝てるとは思わない。仮に接敵したのが1体であっても、銃を持たない先生であれば確実に敗北を喫する。否、仮に武器の類を持っていても負けるだろう。

つまりアリスが囚われる中央タワーまでの道中、一回でもリオの探知網に引つ掛かった瞬間に彼の敗北が決定する。

頼みの綱であるアロナは現在休眠中。目覚めるのは大体2時間後だろうか。システムの箱も彼の生命維持に全てのリソースを割いているため、反則とも言える数々の機能は使用不可。どうしても使いたいならば生命維持機能を切る必要がある。今、システムの箱のできる事はクラフトチェンバーの物資呼び出しくらいだ。

生徒との接続は依然として使用可能であるが、何時間も出しっぱなしはできない。適度にクールタイムを設けなければ脳が焼き切れて廃人になってしまう。

一応、索敵やハッキングに使うためのタブレットは一台持ってきたが、所詮は市販の最上位モデル。システムの箱と比べられるものではない。

大幅な弱体化もいい所だ。そもそも、今こうして立っているだけで限界であるし手足の震えは止まらない。視界もぼやけるし、意識だつて靄がかかっているみたいに不鮮明だ。時折不整脈のように心臓が早鐘を打つ上に、呼吸だつてかなりしんどい。神経がイカれているの

か、感覚も鈍かった。この分では痛覚というブレーキも真面に作用してくれないだろう。

文字通りの暴走列車。このまま一步踏み出せば彼は止まらない。どう楽観的に考えてもこの先に待っているのは破滅だ。もし何もかもが上手くいって生きて帰れたとしても、壊れた部分は元に戻らない。

「……元々、動かない筈の体を無理矢理動かしているんだ。後遺症の1つや2つ、覚悟の上さ。死ぬことだって」

誰に聞かせる訳もなく、彼はそう呟いた。

——既に準備は済ませている。自分が死んだ後に動くプロトコル。ワカモに伝えているクラフトチェンバーの制限解除コード、連邦生徒会に譲渡するシャーレの権限。これから来るであろう滅びへの対処も含め、彼が知りうる全て。

尤も、これはあくまで保険だ。死の覚悟はしているが、最初から死ぬつもりは全くない。たとえ絶望が必定していても、最期まで足掻くと決めている。この役割を、荷物を他の誰にも……ましてや生徒達に背負わせてなるものか。

彼は1つ息を吐き……鋭い視線で前を射貫く。

そして、エリドゥに足を踏み出そうとした——その時。

「待ってください、先生」

風鈴の様な綺麗な声が背後から聞こえた。聞き覚えのある、愛しい声。先生は傷口が開かないようにゆっくりと振り返り、声の主を瞳に映す。そして、あの日と同じように彼女の名前を大切そうに音にした。

「……ノア」

ノアは彼を見る。怖気が走るほど青く、白い肌。一目で正常でないと分かってしまう。暗く落ち込んだ目元、死相が色濃く滲んでいた。

「何処へ行くおつもりですか?」

「エリドゥの中央タワー……アリスの元へ」

「其処にはゲーム開発部とエンジニア部、C&Cの方々が向かっています。皆さんがきつとアリスちゃんを助けてくれます。ですから、先

生は病院に戻りましょう?」

病院に戻って、傷を癒やして。アリスを連れ帰って来た皆を笑顔で迎える。確かに、それは合理的だろう。死体同然の彼が今更エリドゥに向かったとしても出来ることなんてたかが知れている。だったら最初から向かわず諦めて、ベッドの上で大人しく誰かの帰りを待つ。彼女達の成功を祈って。

でも、それは——泣いているアリスを見棄てる事を意味する。諦観を抱くケイを見棄てる事を意味する。何もかもを背負おうとしたリオを見棄てる事を意味する。

そんな選択は、到底容認できるはずがなかった。

「ありがとう、ノアは優しいね。でも……私は行かないと」

「……貴方が先生だから、ですか?」

その言葉は、ノアにとって呪いに等しかった。先生だから、大人だから。その言葉一つで彼は何度も傷つくことを選んだ。自分以外の誰かの為に。

「相変わらずノアは鋭いね。その通りだよ。私は先生だから生徒の危機には駆けつけないと……先生これだけが私に残された唯一なんだ」

彼に残された唯一——それが先生として生きる事だというのは知っていた。

遠い過去、ノアはリオとヒマリの推測という形であるが、先生についての考察を聞いたことがある。

曰く、キヴオトスの真実に辿り着いてしまったが故にヒトではなくなった何か。

彼は運命の日を契機に人類が抱く当たり前の距離感と安心を失ってしまったのだ。元より異邦の生命であった彼であるが、この出来事を境にキヴオトスと彼の溝は更に絶望的になる。まるで現実世界にぽっかりと空いた虚無の孔……存在してはいけない侵略生命インヴェーダーの遺物。それが、ヒトでなくなった彼に与えられた評価だ。

以降、誰かと同じ空を見上げることすらできなくなった彼であるが、彼はそれでも己が『ヒト』であると信じた。例え異邦であっても、偽物であっても、虚無であっても、同じ空を見上げられると彼は祈っ

た。

その根本にあるのが、『私は彼女達の先生である』という彼の原初の誓いだ。この誓いだけが、彼を人類であると定義する唯一無二だった。

——それを否定する意味を、ノアは知っている。これを否定したら最後、彼は文字通りの虚無になってしまう。

だが、それでも。

「それでも、先生を行かせたくないんです……これは私の我儘ですか？」

「……困ったなあ」

本当に心底困っているような、だが優しさが滲む声。その声に誘われるようにノアは彼の胸に抱き着いた。背中に回す両手。服越しに伝わるその温度と、消えてしまいそうな命の鼓動。

「こんなに冷たい手をした人は初めてです。貴方を進ませてしまえば、貴方は死んでしまう」

「でも、私は前に進まない。例え死ぬとしても、今この場で前に進まない。私は先生ではなくってしまおう。皆との繋がりを無くしてしまおう」

己が先生でなくなり、生徒達との繋がりを失ってしまう事——それが彼にとつて、何よりも恐ろしい地獄だった。自分が傷つくのは良い。死ぬのも良い。生徒に忘れられても、憎まれても、嫌われても、殺されても、その先が明るいならば喜んで受け入れよう。

だが、生徒との繋がりを失ってしまう事だけは嫌だ。そんな末路は耐えられない。

「だから進んでしまおうのですか？ 先生を憂える全てから、背を向けて。傷口こそが自分であると思いつめて」

強く握られ皺になるシャーレの制服。震えたノアの手と声。その全てが先生をこの場に縫い留める。彼女の背を擦ろうとした手は行方を無くしてしまった。彼女の祈りと言葉から目を背けようとした己に、彼女に触れる資格なんて無いと思つたから。

何とか納得してもらおう、なんて甘い考えは彼方に吹き飛んで久し

い。これは誰かの為と嘯きながら何度も無意味な屍を積み重ねてきた己に対する罰なのだ。眼を背けることも、耳を塞ぐ事も許されな
い。一言一句全て受け止め、その上で……その上で？ 何をするとほ
ざくつもりなんだ。何を言えるんだ。こんな己の身を憂えて泣いて
いるノアに、どんな言葉をかければいい。

生徒アリスの為と言いながら生徒ノアの願いを踏み躪った。この身は、そんな
惨い事をもう一度やるつもりなのか。

「前に進むことがそんなに尊いんですか。前へ進まない自分に価値が
ないって、本気で思っているんですか？ それは違います。前に進め
なくても、挫けても、失敗しても、貴方はずっと大切に想われていま
す。貴方をずっと大切に想っています」

「ノア……」

「貴方が先生だから皆に愛されている訳じゃないんです。先生が貴方
だから、貴方が貴方だから……こんなにも、皆に愛されているんです
よ」

生徒達は先生という役職を愛しているわけではない。先生が彼
だったから、善性と優しきで満ちた彼だったから愛したのだ。

生徒を見守る優しい表情、時折見せる屈託のない笑顔。シャーレの
戸を叩いた時、出迎えてくれる表情。頭を撫でる手や抱き締める手。
それらは全て彼が彼だから持ち得る物なのだ。そんな彼だから生徒
は彼を愛し、信頼し、銃を預けてくれるのだと——ノアはそう
言っていた。

だが、それは彼が先生である事を否定している訳ではない。寧ろそ
の逆で、先生は何時迄も『先生』であってほしいとノアは願っている。
ずっと隣で見守っていてほしい。ずっと一緒に歩んでいきたい。彼
と共に煌びやかな日々を駆け抜けて幼年期を終え大人になりたい。

でも、それでも。先生という称号が呪いになってしまえば。自
壊してでも前に進もうとしているならば。弱音の一つすら吐けず遠
くに行ってしまうなら。

それなら——その重荷を、今くらいは下ろしてもいいだろう。
誰にもバレない所で泣いてもいいだろう。彼だって一人の人間だ。

前を向かず歩かず止まっている時があってもいい。褪せない想い出を思い返して涙を流していい。そんな些細な弱さを許さない生徒は誰一人として存在しないのだから。

大切な誰かを失う悲しみ。遺された自分と、物足りない毎日。何度も無力を呪って、声をあげて泣いて。そうして掴んだ那由多の果ての奇跡。

だから行かないで、愛しい人よ。もうこれ以上、どこへだって。

縋るように見上げた彼の双眸、そこには確かに迷いがあつた。葛藤があつた。何度も己を殺すような苦しい表情は彼が本気で悩んでいる証拠。彼は今、本気でノアと向き合っている。

そうして彼は本気で悩んで、考えて、向き合つて。意を決したように瞳を開けた。そこには一縷の迷いすらなかった。

「ノア、ありがとう。多分、私は誰かにずっとそう言ってもらいたかつたんだと思う」

先ほどまでは所在が無さそうに力無く垂れ下がっていた両手はノアの背中に回されていて、彼女を弱く、しかし確りと抱きしめていた。その仕草すらもノアを掻き乱す。この優しさも抱き締め方も、全て自分が覚えていた通りだったから。

「だったら……！」

「でも」

彼はいつものように笑って、ノアの目尻に溜まる涙を指先でなぞる。

「投げ出すことはまだできないよ。私は、まだ歩みを止めるに足る理由も、未来も見つけられていないんだ」

——連邦生徒会長。君と交わした約束はずっと覚えている。輪廻の断崖で交わした契約。遠くへ向かう最終電車で託された願い。天の割れ目、星が落ちる空の下で語り合つた夢の話。それを思うと、足を止めるにはまだ早いなと思ってしまう。彼女に顔向けできないとか、生徒達の為にもとか……そういつた理由も勿論あるが、まだ自分が納得できていないのだ。『これで終わりでもいい』と思えるようなエンディングに出会えていないから。

「だから、ごめんね。もうちよつとだけ前に進んでみるよ」

——その先で、胸を張れる答えを見つける為に。

「……どうしても、行くんですか？」

「行くよ。アリスの元へ」

その迷いのない真つ直ぐな声を聞いて。ノアは差し出されたハンカチで涙を拭いながら「分かりました」と呟いて……MP17書記の採決を引き抜いた。

「私も同行します。先生1人では心配ですから」

「……ごめんね、巻き込んだじゃって」

「気にしないでください。これは元々ミレニアムの問題ですから」

彼女は「それに」と付け加えて。

「もう二度と先生を見殺しにしないと決めていましたから」

「……ノア、君は——」

何かを聞こうとした彼の口から言葉が溢れる前に。

「皆でアリスちゃんを連れ戻して、私達は一緒にユウカちゃんに怒られましようね」

「……そうだね。じゃあ、怒られる為にも元気な姿で帰らないと」

先生はシステムを励起させる。タブレットも稼働させ、戦闘態勢を整えた。そして、ノアは不意に「先生」と呼んで。

「全部が終わって、ユウカちゃんのお説教も終わったら……ちよつとだけお時間貰えますか？ 聞きたい事、伝えたい事があるんです」

「勿論。実は私も君に聞きたい事と伝えたい事があるんだ」

「ふふつ、奇遇ですね。では、終わった後、楽しみにしていますよ」

2人はエリドゥに足を踏み入れる。彼の道行は決して楽なものではない。それに付き従う事を決めたノアもまた同様だ。

だが、それでも——。

「今度こそ、貴方を守らせてください」

ノアは胸を張って、彼と共に歩くと決めた。

明日の行方

C & Cに睨けられたリオ手製のドローン、AMASは全滅した。彼女達が相手にしたドローンの数も4桁に迫る勢いであったが、その悉くを戦闘不能に追いやり、徹底的に破壊。

周りの被害も一切気にしなかった所為か、彼女達の戦場となっていた場所は見るも無残な姿に成り果てている。道路のコンクリートは捲れ上がり、ビルや建造物も大半は吹き飛び原型を残しているものは4割にも満たない。あらゆる迎撃武装、隔壁も当然の如く全て粉碎。彼女達は僅か数秒クッションという限られた範囲であるが、エリドゥを破壊した。

そして、今は。

「アスナ、いっくよー!」

この戦いを心底楽しんでる事がよく分かるアスナの声が聞こえたと思ったら、彼女は銃を片手に突貫する。ブルパップ式のアサルトライフルから発射される弾丸は全て直撃コース。驚異的な精度と言わざるを得ない。回避は困難だろう——トキ以外であれば。

「——ッ」

「わおー、凄いな〜!」

トキは弾丸の弾道を全て見切り、最低限の動きで弾雨をすり抜ける。跳弾すらも演算に織り込んで、弾丸が自身に命中する可能性を排除した。それに驚嘆するアスナをトキは冷たい目で見る。そして彼女は——この場で一番何をしてくるか分からないアスナを最優先で叩き潰す事を選択した。

彼女は余りにも危険だ。ネルに次ぐ実力を持つ、という時点で大概なのに、それに加えて異常な直感を持っている。意図的に発動させれば相応のデメリットがあるが、それを差し引いても破格と言わざるを得ないだろう。使うだけであらゆる状況不利を無視して盤面をひっくり返せるポテンシャルあるのは非常にやりにくい。特に、リオのように盤面を整える事で強さを発揮する戦略家タイプにとっては。そして、そのリオの作戦の下で動いているトキにとってもやりにくい事

この上ない。

——相手の逆転の目を潰すなら最優先で狙うべきはアスナだ。
トキは足のスラストターを稼働させて加速。両アームギアに搭載されている超小型機関銃を展開し、その両手でアサルトライフルを構える。圧倒的な初速と加速により一瞬で零になる彼我の距離。互いが攻撃を仕掛ける前のコンマ数秒間、アスナは思考する。

——右をよく見てるから右かな？ でもそれはブラフだよな。
本命は部長にやってみたみたいなギミック……この距離で機能するならばブレードとかスタンガン？ もしかしたらショットガンって線もあるかも。

そして、彼女の直感から導き出された最適解は。

——首！ 左！ あとはアドリブ！

「捉えましたよ、アスナ先輩」

いつの間にか銃から離されていたトキの右手。それは紫電を纏いながらアスナの首筋に伸びていた。予想通りのスタンガン。だが、間違はなく一般に流通しているものよりも高電圧だろう。もしかしたらアンペアも高められているかもしれない。仮に当たれば間違いなくこの戦場から脱落してしまうのだが——それは当たればという仮定の元。この行動はアスナの直感の範疇にある。

「あはっ！ 当たらないよー！」

彼女は直感の赴くままに上体を逸らし、トキの魔手を回避。そのまま彼女は右手を地面に突き、それを軸にして左足を延ばし体を戻じる。繰り出された蹴りはトキが構えた銃を腕ごと弾き、彼女は胴体から空気に。アスナはその隙に滑り込ませるように左手で持つ銃を突きつける。トキの顎下、数m。

トリガーが引かれるまでコンマ何秒のオーダー、回避可能な距離ではない。両腕は共に攻撃に使ってしまった、防御は間に合わない。余人なら絶体絶命のその状況、しかし——トキにとってはまだ巻き返しが可能だ。

彼女は脚部のスラストターを全力で逆噴射し、アスナの銃口から離れる。刹那、狂い咲いたマズルフラッシュ。銃口から逃れられたアスナ

と両手を戻したトキ……両者が再度、互いに照準を定めたのは全く同時であった。

銃の銘や型番は異なるが同じアサルトライフルを扱う者同士、互いが最も得意とする距離感とは必然的に近くなる。このまま状況が進むとあとは本人のスペックが物を言う純然たる実力勝負に転がり込むのだが……アスナは別に一人で戦っている訳ではない。

「今だー！」

地面をホバリングするトキに飛来する対戦車ライフルの弾丸。アスナと距離を取ったという事は、支援射撃にアスナを巻き込む可能性が無くなった事を示す。C&Cの狙撃手、カリンがその本領を発揮した。

次々と飛来する弾丸、その全てが正確無比であり致命打。速度で振り切ろうと思っても未来の位置をある程度予測しているのか、その照準に揺るぎは見られない。

猛追するアスナと、それを支援するカリン。厄介極まる組み合わせを前にトキも己の武装全てを用いて距離を話ながら迎撃し——そしてある地点まで来たタイミングで、「カチ」と嫌な音が足元から聞こえた。

瞬間、ホワイトアウトする視界。各ギアに仕込まれたシールドが稼働し体の機能を保護するが、相手はそんな事なんてお構いなしに。

「無駄ですー！」

と、足が止まったと見るや否や有りつ丈の爆弾をぶつけにくる。何重にも奏でられる爆発音。どこにそんな量の爆弾を隠し持っていたのか、と思ってしまう量と種類でアカネは徹底的にトキを磨り潰しに來ていた。

幾らシールド機能があるとはいえ爆心地に長く留まりたくはないトキは空中に離脱するが——その背に追従する影が一つ。

「逃がさねえー！」

二丁のSMGと、一丁のアサルトライフルが交錯する。発射された弾丸をトキはシールドで受けて、ネルは肉体強度を神秘で底上げして防御。互いにマガジンを空にした後は流れるように格闘戦に移行、ト

キはブレードを両手で握り締め、ネルは徒手空拳と鎖で迎え撃つ。

空中という足場が皆無な劣悪な地形、有利なのは外付けアタッチメントにより飛行能力と姿勢制御の術を持っているトキであるが……ネルは一步も退かない。トキの攻撃を巧みに利用し、空中に於ける格闘戦を成立させていた。恐ろしさすら感じてしまう近接戦闘のセンス。これを土壇場で、トキを相手にやっているともなればミレニアム最強というのも納得がいく。

攻撃偏重の戦闘スタイル。クロスレンジでは負けなしの力量と、それを支える本人の身体能力と神秘。近接格闘もCCCを超高水準で修めているため隙が無い。だが、何よりも恐ろしいのは圧倒的なセンスと学習能力であろう。比喻抜きで彼女は一秒前の彼女自身を常に凌駕し続けている。

こうしている内にもネルは進化を果たす。有利だったはずの状況が徐々にイーブンまで纏れ込む。空中戦に適応し始めているのだ。既に彼女の脳内には『どうすれば良いか』という教科書の基本骨子が組み上がっていて、今は白紙のそれを猛スピードで埋めている。このままではあと数回の交錯でネル側に天秤が傾く———そう思ったトキであるが、その拮抗が崩れる瞬間は彼女の想定より早く訪れた。

「……ッ！」

強固なはずのシールドを紙切れのように引き裂いたネルの打撃は、そのまま吸い込まれるようにトキの右アームギアにクリーンヒット。破碎音が鳴り響いたそれはほぼスクラップ寸前になっていて、このまま装備していてもデッドウェイトにしかならないと判断したトキは即座にパージを選択。

身軽になった腕で狙うのはネルの首。指先をぴんと張って手刀を模った彼女は人の意識を刈り取るのに最低限の力と、ネルが反応し切れない最速で以て攻撃を仕掛けるが———破滅的な音が2つ重なって聞こえた。途端にぐらつき、不安定になる姿勢。右脚部のスラストアームが破壊された。

「カリン先輩——ッ！」

視線の先、そこには膝立ちで白煙を吐く銃を構えるカリンがいた。

照準越しに交わる視線、次弾を発射しようとしている彼女にトキはドローンを嚇けターゲットを己から外す。その間に破壊された右脚部をパージしようとしたが、それを隙と見たネルが畳み掛けるような攻勢に打って出た。

ショートブレードは鎖で巻かれへし折られる。超小型機関銃は銃口を握り潰され、五指に内蔵されたスタンガンに至っては効いている様にすら見られない。こうしてトキはバランスを崩し武装殆どを潰された状態で、ネルと超至近距離で真っ向勝負する必要を迫られた。

無論、トキも手練れだ。その身一つでもアスナに匹敵する戦闘能力を備えており、ただ荒事に慣れていただけの生徒では全く太刀打ちできないうらう。

そんなトキが彼女専用によりオ自ら製造・チューニングした武装を装備し、更にリオ等のバックアップ受けているともなれば、その戦闘能力は更なる高みまで押し上げられているのは想像に難くない。エリドウという都市の中であればこの状態……モード2と呼称される今であつても1 on 1であればネル側の勝ち目は4割を切っていた。

しかし、今回は状況が異なる。ネルは1人ではない。頼れるC&Cの仲間達3名が同伴しているのだ。何度も一緒に任務を熟した一心同体と言つても差し支えない戦友の間柄。視線一つ、呼吸一つでやりたい事も機敏も読み取れる。しかも、彼女達も超の付くベテランであり手練れ。単騎での戦闘能力も申し分ない。

そんなC&Cのコールサイン持ち全4名、それぞれが全力でトキを狙い来ればこの劣勢も納得できてしまう。寧ろこの4名に狙われて尚『勝負』の体裁を保っているトキが凄まじいと言う他ないだろう。どれだけ好条件を重ねてもトキと同じことが出来る存在はビナー等の神格クラスを除けばこのキヴォトスに存在しない。それだけの偉業であつた。

だが、輝かしい英雄譚はいつまで続かない。禍福は糾える縄の如しとはよく言つたもので、栄枯盛衰がこの世の避けられない理だ。

輝かしい繁栄の裏側には、澱んだ退廃が。

生の延長線上には暗い死が。

勝者であり続けられる生命なんて存在しない。人間である以上敗者になるタイミングは必ずあり、終わりはいつでも背を追っていて、前で口を開けて待っている。

トキにとつてはそれが今だったというわけだ。ネルの小さな体の何処にそんな馬鹿げた力があるのかと言いたくなくなってしまふほどの攻撃。嵐、台風、暴風雨。彼女の攻撃を形容するならばこれらの言葉が最も適しているだろう。一撃一撃受ける度にリオから賜った装備が壊れていく。

否、ネルの攻撃だけではない。喚けたドローンは全て破壊されたため、アスナ、アカネ、カリンの3名も今はフリーだ。地上から絶え間なく浴びせられる銃弾の雨霰は空中に於ける高機動が可能であった先ほどまでは脅威でなかったが、今は異なる。機動力の要であったレッグギアを一基パージしているのだ。現在は腕部スラスタを使って無理矢理機動力を確保しているが、空中戦闘能力は大きく下がってしまったている。

「——ッ！」

腕部のブレードエッジを利用した横薙ぎの一閃。銀の軌跡を描くそれは、しかしネルには当たらない。彼女は思いつ切り上体を逸らす事で回避。切断された明るいオレンジの髪が数本空中を舞う。その姿勢のままネルは肘打ちを繰り返すが、五指を広げたトキにより受け止められる。彼女はそのまま肘関節を壊そうと力を籠めるが、それも失敗。拘束から抜けられてしまった。

次の攻撃までのインターバル、ネルは思考する。押ししている。間違はなく今は優勢だ。だが、現状は決め手に欠けるのだ。役割が陽動である以上、このままトキと戦っていても良いが、それは余りにも不毛だろう。それに、何より……そんな及び腰の逃避なんて選択は己のプライドが許さない。目指すのは勝利だ。

そして、トキもまた空白に思考を重ねる。地上からの弾丸は全てシールドの局所展開で防いでいるが、それも長続きしない。シールドバッテリーの残量の底が見えてきた。このままではジリ貧だ。本当の奥の手を使用すればこの4人であろうと確実に勝てるだろうが

……その手を使うのは今ではない。この奥の手はトキにとっても、リオにとっても秘策なのだ。

その奥の手の対価はエリドウの全リソース。今この場で使ってしまったら本命部隊に回す余力がなくなってしまう。使うならば陽動部隊と本命部隊が同時に殲滅できるタイミングに限るだろう。

——で、あるのならば。

再びの交錯、激突する寸前にトキはレッグギアをパージ。2人の間に挟まるように舞う機械の残骸はネルの攻撃により瞬く間にスクラップにされ、壁としての役割は1秒も果たせていない。だが、この僅かな時間でトキは交戦距離から離脱。地上から追い続ける弾丸も華麗な身の熟しで回避し、トキは与えられた権限を行使した。

建物が地面ごと稼働し、隔壁が立ち上がる。都市区画の移動——揺れの大きさに差はあれど、これは先ほど体感した現象であると合点がいったC&Cは分断されないように固まろうとするが……都市の構造はトキの方が詳しい。あの交戦の間、彼女はずっと全員の立ち位置を気にしていた。都市を動かした際にネルだけが孤立するようになる。

「……成程な。さっきの揺れの正体がこれか。随分と大規模な玩具じゃねえか」

「ええ。ここ一帯の都市構造を変更し、他の先輩方と隔離させていたかったです」

トキのすぐ近くに落下するアタッシュケース。そこには先ほど全て壊した各種ギアが入っていて、彼女はそれを装着していく。徐にネルが引き金を引いても、その弾丸は防御用のドローンに阻まれる。

そして——全てのギアを装着したトキは再び構えて、眼前のネルを見た。

「さあネル先輩。これであなたの勝率は限りなく低くなりました」

「はあ……勝率だの何だの、言葉遊びが好きなのか？ 全く……ふざけてやがる」

再三、ネルとトキの銃口が交錯した。

罪を見上げて

「分断されてしまったな」

眩き、カリンは隔壁に向けて引き金を引く。響く轟音と靡く白煙。圧倒的な運動エネルギーを持つ弾丸であったが、隔壁を貫通するには至らなかった。僅かな凹みを作った程度で、これでは貫通するまでに何発必要か分かったものではない。先ほどまで展開されていた隔壁とは強度が段違いだ。

「ちらり、とアカネを見ると彼女は無言で首を横に振る。この場でも火力が高い彼女もこの隔壁を力技で強引に突破することは不可能らしい。」

「ん〜、どうしよつか?」

「最優先は部長との合流です。分断したのは何か考えや策があつての事でしょう。その作戦の渦中にいる今はあまり良い状況とは言えません。本当ならばこの隔壁を突破して最短距離で向かいたいものですが……」

爆弾を放り投げ起爆しても、揺らぎはない。この壁を強引に突破するのはあまり現実的とは言えないだろう。となると、残された選択肢は。

「迂回路を探すしかないか」

「ええ、そうですね。アスナ先輩、お願いできますか?」

「はい! まっかせてー!」

道は決まった。あとはネルの元に辿り着く速さでその明暗が分かるだろう。トキがネルを倒すほうが速いか、C&Cがトキの策を食い破る方が速いか。

「あら、お客様ですね」

「予想はしていたけど……まあ、来るよね」

「わー、いっぱいだね〜」

けたたましい音を奏でながら向かい来るのは全機破壊したはずのドローン達。先ほどよりも数こそ少ないが、それでも決して無視できる数ではない。隣接するセクションに配備されていたドローンだろ

う。そう考えると、これは恐らく前座。本命はこの後だ。

しかし、やる事は変わらない。ドローンを破壊し、突き進み、トキの策を真正面から踏み越える。

「では……もう一度、お掃除を始めましょう」



本命部隊の道中は、陽動部隊のそれと比べてかなり順調だった。接敵するドローンの数は少なく、都市の防衛機構はヴェリタスとエンジンア部で何とか潜り抜けることが出来た。エリドウのAIからカウンターハックを受けたときは少し焦ったが、此方もヒマリが作成したプログラムパッチを適用したらどうにかなった。

危ない場面はそこそこあったため順風満帆とは言えないが、それでも作戦を大幅に修正しなければならない問題には今のところぶち当たっていない。勢いはある。ならば、このまま行ける所まで全速力で――そう思った時。

『……?』

『え!?』 ちょよ、ちょよと待って! 今、通信の状態が……!』

ハレが覚えた違和感。マキの焦り。エリドウのAIからハッキングを受けても尚揺るがなかったヴェリタスの通信が揺らいだのだ。電波状況が悪い訳ではない。通信機の故障でもない。となると、思い至る可能性は1つしかない。

『これは……』

――秘匿回線への介入だ。そして、エリドウのAIですら入り込めなかった回線に介入できる存在なんて1人しかいないだろう。より一層酷くなるノイズ。参照する介入コード。理路整然とした文字列の上に並ぶ、第三者が入り込んだ証。一切の遊びがなく、必要最低限のコマンドでヴェリタスの通信を殺しに来ていた。

『ヴェリタス……やはり貴女達だったのね。流石あのヒマリの後輩なだけはあるわ』

紛れもなく人間でありながらも己を機械と定義しているような冷

たい声。ミドリとユズが無力さを味わった時、目の前に立ち塞がった大きな壁は相も変わらず他者と同じ地平を見てはいなかった。

それが聞こえた瞬間、不安定になっていた通信はさらに不安定になり……そして。

「ヴェリタスの通信が……」

「途絶えちゃった……」

『予想はしていたけれど……本当にここまで来たのね』

ヴェリタスと変わるようにコンタクトを取ってきたのは、この場所の主たるリオ。彼女はホログラム越しにメンバーを見渡す。才羽モイ、才羽ミドリ、花岡ユズ。白石ウタハ、豊見コトリ、猫塚ヒビキ。予想以上でも以下でもないメンバーだ。

ゲーム開発部の交流関係は当然の如く洗い出している。内向的な活動内容、度々起こす問題事、アリスを除けば広いとは言えない友好関係。それらを総合的に判断したら、自ずと鏡の一件で協力関係にあったヴェリタスとエンジニア部を頼ると分かっていた。

セミナー……特にユウカが唯一実働部隊に加わるか確率的に不明であったが、リオは彼女の性格も考えて来ないと判断し……そして、それは見事に的中した。

やはりイレギュラーは起きない。全ての事象がリオの掌の上だ。しかし、それを自慢することはない。突き詰めればこの世はおしなべて0と1の羅列。数理的に考えれば解は一意的に決定されるのだ。『やはり、あの時の私の言葉と行動だけでは貴女達を説得できなかったのね』

「……説得とは面白い事を言うね」

ウタハは瞳を細く、鋭く……近く遠くに居るリオを射貫く。

「私はその場に居たわけではないから、彼女達の伝聞でしか当時の状況を知らないけれど……それでも、リオ会長の言動は断じて説得とは思わないと思うよ」

『……』

「自分の都合を一方的に話すだけでは、説得足り得ないのさ」

『私の都合じゃないわ。これはキヴオトス全体の都合よ』

「だけど、彼女達はそう思っていない」

リオ個人の都合ではなくキヴオトス全体の都合であると伝える事こそが、あの場における説得だったのだ。納得するか否かはあくまで結果。そして、きちんと伝えることができなければ納得は得られなくても一定の理解は得られるはずなのだ。

しかし、リオはゲーム開発部から……否、あの場で徹頭徹尾道具として振る舞っていたトキを除いて、誰にも理解されていないのだ。故に、彼女達にとってリオは自分勝手な理由でアリスを誘拐した人物でしかない。その時点でリオの言動は断じて説得ではないのだ。

合理性を好みながら、相手には論理を飛躍した納得と理解を強要する——それが、リオの矛盾だった。

「その矛盾を見つめない限り、あなたは誰にも理解されることはないよ」

ウタハの指摘にリオは何も言わない。少し前にヒマリにも似たようなことを言われたのだ。そして、その時に結論は出した。ある種の開き直り。もう理解や説得を得られるような余裕は残されていないから——前に、進むしかない。

同じ地平を見る事ができた幼馴染、理解者になってくれるかもしれないなかったヒマリを置き去りにして。

キヴオトスのイレギュラー、計数されざる孤独な命であるながらも美しい未来を思い描いた先生の手を振り払い。

世界を滅ぼす兵器であるAL—1Sを殺す。

どんな大義があれど、意味があれど、所詮やることは人殺し。断頭台の刃を振り下ろす己が正義だとは一切思わない。

人を殺す事の意味は正しく理解している。この両手が血で染まる事はもう受け入れた。罵倒も罰も等しく受け入れよう。全てが終わった後ならばアリスと同じように断頭台に乗せられても構わない。最大多数の最大幸福。大勢の為に少数を切り捨てる。世界という機構を生かす為のシステム。その生き方を選んだ。その本音を掴んだ。

愛したキヴオトスを守る……それが自分で決めた道だ。

——この決断の、その先に。少しでも多くの人が平和と幸福を謳歌できる未来を信じている。



要塞都市エリドゥ、外周。本命部隊とも陽動部隊とも全く異なるルートでリオの掌の上に入り込んだ先生とノアの両名は度重なる区画移動により迷宮と化した市内を駆け抜けていた。

視界の隅に映る破壊されたビル、道路、隔壁、防衛機構。この場で激しい戦闘があった事を示す痕に見向きもせず、向かうのは——エリドゥの根幹を成す中央タワー。

この都市の中であれば基本的にリオは最強だ。仮に先生が万全であればシテムの箱の規格外の性能と合わせて真つ向からでも勝てるだろうが、生命維持にリソースを割キアロナも眠っている今は分が悪い。勝率は2割を切っている。

恐らく、先に入っている彼女達もかなり手を焼いているだろう。エリドゥとリオのバックアップを一身に受けて絶大な戦闘能力を持つトキ。多くの防衛機構、都市の構造。それらは到底一筋縄で突破できるものではなく、通常の手段では間違いなく磨り潰されてお終いだ。故に、勝とうと思うならばその部分……エリドゥのシステムを潰すことが最低条件だ。中央タワーの地下20階、屋上と並んで電力消費の激しい箇所メインコンピューターが座している。嚴重なセキュリティが施されているそこをハッキングし、落とさなければ勝機はない。

幸い、今までドローンとは一度も接敵していない。先生が迂回ルートを選択している事もあるが、両部隊が大半を釘付けにしているのだ。戦闘能力が0どころかマイナスに片足突っ込んでる先生と、荒事がさほど得意な訳ではないノア。その2人が相手にできる上限は決して高いと言えないため、この状況は非常にありがたかった。

だが、例え一度の戦闘行動を挟まなくとも先生の体に莫大な負荷が掛かっている事には変わらない。彼は元々病院を脱出してきた身、そ

の肉体は半分以上死にかけている。

「……ッ」

ぐらりと湾曲する視界。遠くなる意識。足首が嫌な方向にねじ曲がって、先生はそのまま音を立てて地面に倒れ込んだ。

「先生ッ！」

駆け寄り、先生を抱き上げるノア。か細い呼吸と喘息の発作の様な咳に嫌な予感がして、背中を優しく擦ると勢いよく咽て……その口からゲル状になった血の塊と肉片を吐き出した。全身の血が冷えたノアは急いで彼を抱えて休める場所に向かおうとしたが、彼の転倒音を聞きつけたドローンが1機、此方に来ているのを見つけた。

彼女達を発見し、照準を定め、トリガーが引かれて弾丸が到達するまで約3秒。エリドウのシステムと接続していないスタンドアローン個体。増援を呼ばれる心配は排除していい。間に合うか——否、間に合わせるのだ。

キヴォトス基準では非力な方のノアであつても先生を抱えることは造作もない。背中と膝裏に手を回し——その瞬間、発見された。予想通り増援は呼ばれない。やはりスタンドアローン。無機質なフォーカスリングが回転し、2人にピントが合わさる。システムが励起し、巡^{クルージング}回モードだった機体が戦闘^{コンバット}モードへ移行する。

ノアがドローンに背を向けると、ドローンが銃弾を射出したタイミングはほぼ同時だった。横抱きにした彼への射線を切り、一目散にビルの外壁へ駆け抜ける。背中に突き刺さる弾丸の感触にノアは顔を歪めながら、それでも負けるものかと歯を食いしばる。

キヴォトスの少女にも痛覚は存在する。ただ頑丈なだけで殴られたり撃たれたりすれば真つ当に痛みを訴えるし、場合によっては血が流れることだって。故に、銃撃戦こそ日常茶飯事となっているが自ら望んで銃口に身を晒す者なんていない。誰だって痛いのも怖いのも嫌なのだ。

それはノアも同じであつた。ただ記憶力が良いだけの、何処にでもいる女の子。背中に感じる鋼は決して心地の良いものではない。弾雨に背を晒す恐怖はいつだって鮮明で、『死』を知る彼女だからこそその

葛藤がある。

だが、それでも——その恐怖を振り伏せて彼女は先生を守っている。彼を傷つける数多から。

——あの日、心臓を抉り出した彼を見ている事しかできなかった。『行かないで』の言葉も届かなかった。ずっと後悔と共に歩んできた。あの時ああしていれば、なんて意味のない if ばかりが頭を過って、彼を終わらせたキヴォトスの大きな意志を憎んだ。

そして—— やつと掴めた彼の手。死地へ向かうはずだった彼の手を取ることができたのだ。『行かないで』の言葉も領いてくれることはなかったけれど届けることができた。その果てに彼と共に同じ場 ハッピリーエンド 所を目指して駆けることができている。それはノアが望んだ彼の選択とは異なるけれど、彼らしいとも思ってしまう。

——だから、こんな所で息を止めることなんて他の誰が許してもノアが許さない。

容赦なく浴びせられる弾丸の雨に顔を顰めながら、ノアはビルの外壁を使って射線を切る。背中はまだ痛む。こういう時は親友のシールドが羨ましい。あの技能があればもっと先生を安全に運ぶことができたのに……なんて。

「……………ふう」

彼を下ろし、安静な体勢にしたノアは1つ息を吐いて銃を構えた。敵の位置も武装も、全て見えている。彼のシステムがあるのだ。いくらリオ手製のドローンとはいえ1体如きに苦戦する訳がない。

ノアは半身を外壁から晒し、先の敵に銃口を向ける。それに反応してドローンも此方に照準を合わせるが、先手を取ったノアの方が当然早い。

発射された弾丸は3つ。一発はカメラに、残り2発はそれぞれ両腕に取りつけられている銃器に。彼女らしい正確な弾丸は的確に敵の目と武器を奪い、更にもう2発追加で射撃し足回りを破壊する。

だが、敵の撃破はあくまで前座。今一番気にしなければならぬのは先生だ。ノアは焦燥が滲む顔で彼を抱き上げ……その悪い顔色を見て血の気が引く。首に巻かれた包帯は赤く滲んでいる。傷が開い

ているのだ。念のために持ってきた医療キットを使用し、傷口を塞ぎ血を止める。輸血が必要な程の出血量ではないが、今の彼には大きな負担となっているだろう。早く、治さないと——そう思った時、先生が薄っすらと目を開けた。そのまま彼はシツテムの箱を操作し、クラフトチェンバーから物資を取り寄せる。

「……ッ！」

落下するアンプルと注射器。その正体をノアは良く知っていた。肉体を効率的に使い潰すための道具。あの世界の晩年の彼はこれを常用しなければ真面に生活する事すら難しかった。眠る事すらできなかつたから副作用で無理矢理意識を断って、起きたらまた別の液体を打ち込んで先生の仮面を被る。その裏側に全てを隠して。

彼の傍でずっと見ていたから知っている。あれは薬なんかではない。猛毒だ。服用しつづければ最後、人ですらなくなる。

そんな劇物を、彼は躊躇いなく首筋に打ち込んだ。

「服用、し過ぎると拙いけど……用法用量を守れば、大丈夫さ……」

彼は力のない笑みで、ノアの不安を払拭するように言葉を紡ぐ。音を立てて転がり割れるアンプル。ガラスの破片が街灯の光を受けてキラキラと輝いた。浅く、荒かった呼吸も少しずつ深く穏やかになり目の焦点も段々と定まってきた。

「……そんなお体になっても、まだ」

「うん、進むよ。私が望んだものの為に」

ノアに抱えられたままの彼は手や足の感触を確かめ、首の包帯をもう一段緩める。風が吹くと包帯がマフラーのように靡いて、その下から斬首痕が覗いていた。決して癒えないその傷口を彼は愛しそうに撫でて……誰にも聞こえないように呟く。

「この痛みが君の証明なのかい、ケイ」

誰かの為の

ミレニアムのセミナー執務室。4人の仕事スペースには2人しかいなかった。左手でペンを回し、右手で頬杖を突いてうんともすんとも言わないスマホの画面を苛立ちながら眺めるユウカと、彼女の怒りが飛び火しないように部屋の隅の方にいるココキ。

居心地の悪い沈黙が流れて、次第にペンを回す音が速くなり……彼女の手元からペスが離れた時に呟いた。

「……遅い」

遅い。遅すぎる。ノアが「先生の様子を見に行つてきます」と言つて2時間が経とうとしている。病院までの距離は往復30分圏内、面会する時間等を含めて1時間程度。それにも関わらず、2時間。SNSで文を送つても、スタンプを送つても何の反応もよこさない。そもそも既読すらつかない。電話にも出ないから、『何かあつたのか』と勘繰るのも無理がないだろう。

通知音が鳴って画面を見ても公式アカウントからのメッセージだったり、望んだ人物からの連絡でなかったり。探しに行こうか、と思つても手掛かりは多くなく先生がいる病院近辺を探す他ないため効率的とは言えない。どうするべきなのか、という思考が頭の奥で堂々巡りしてばかりでせり上がった言葉は溜息に変換される。

——最近はこういう事が多くなつた。ミレニアムで起きた大きな事故。先生が負つた瀕死の重傷。リオによるアリスの誘拐。要塞都市エリドゥの存在。リオの目的。アリスの正体。短期間に様々な事が起き過ぎた。しかし、整理する時間や休む時間は与えられず、今まで以上に目が回る様な毎日を繰り返す。

色々な事に疲れてしまったのだ。朝から夕方まではミレニアムのセミナーとして責任ある立場に立ち。家に帰つて食事や入浴を済ませたらベッドに身を投げて、スマホで遠くになってしまった日常を眺める。更新されない先生との会話履歴。ゲーム開発部と先生と自分で撮つた写真。

最後の会話は次の当番の事と、プライベートで遊びに行く約束。リマインドには次にシャーレへ行くときに買っていくものが記されている。何事も無ければ今週末に遊びに行く予定だったのに……誰にも見せれない弱音を零して、何度も眠れない夜を超えた。

——初めて会ったあの日から、この感情はいつも彼に掻き乱されている。

ユウカはもう一度溜息を吐いて、立ち上がった。

「暫く席を外すわ。留守は任せるわよ」

ノアを探しに行く決心をしたユウカは銃を持ち、コユキに留守を任せようとするが……返事が返ってこない。いつもならお土産の1つや2つ要求するはずなのに、なんて思いながら振り返ると——彼女はいかにも何かやらかしたような顔でPCの画面を眺めていた。それに何か猛烈な嫌な予感を覚えたユウカは彼女の元まで静かに歩いていき……画面をそつと覗き込んだ。

「コユキ？ 何してるの？」

「うわああ!! ユウカ先輩!!」

勢いよく画面を閉じてPCを自身の背後に隠す。この間約1秒。見事なスピードだった。怪しい、怪しすぎる。外出前に仕事が増えた、なんて思いながらユウカは腰に手を当てて。

「で、何をやったの？ 怒らないから言ってみなさい？」

「それ絶対怒るやつじゃないですか……」

無言の笑顔で圧を掛けるユウカと、そんな彼女に戦々恐々のコユキ。傍から見れば完全に後輩を虐めている構図であるが、コユキの普段の言動が結構アレなため、仮に公衆の面前で詰めたとしても咎める人物はそこまで多くない。

しかし、コユキは唯のごく普通の女の子だ。褒められたかったり、可愛がられたかったり、甘えたかったり。或いは誰かに必要とされたかったり。人間なら誰しも持っている願いを持つ、15歳の可愛い少女。ちよつと善悪の判断がまだできなかったり、偶にやる事の規模が大きかったりするだけだ。

故に今回も事をやらかしたとユウカは当たりを付けているのだが、

話も聞いていないのに有罪を言い渡すのは違うだろう。裁判でも弁護は当然の如く行われているのだ。別にそんな改まった場ではないが、コユキの言い分は聞くと決めている。尚、黙秘権は存在しない。

だが、彼女は想像していたよりも簡単に口を割って。

「暇だったんでD・Uの監視カメラの映像を覗いてただけですよ。そしたらちよつとヤバそうな映像がゲットできちゃって……」

コユキはPCの画面を見せつける。画面に映る白黒の監視カメラの静止画キャプチャ。時刻は大体2時間半ほど前。何の変哲もない、ありふれた日常の一部を切り取っただけの場面であつたのだが……其処に、映っていた。

見慣れた顔、見慣れた服。見間違えるはずがない。あれは——

。「先生!? どうしてッ!?!」

手足を引きずりながらも前に進む彼が、そこには映っていた。病院のシステムをジャックしたのは良いが、流石に街路の監視カメラ等にまでは気が回らなかつたのだろう。或いは、その対処にリソースを回せないほど消耗に消耗を重ねてしまっているのか。

何方でも構わない。事の仔細はどうであれ、彼は目を覚ましていて外に出ている。自分の体で。それはユウカにとつて非常に喜ばしい事であつたのだが……何故、生死の境目を彷徨っていた彼が歩いているのか。その疑問が頭を過つた途端、喜びは不安で塗りつぶされ——彼の解に至つた瞬間、ユウカは握っていた携帯端末を潰さんばかりに力を込めた。

「本当に、貴方は何をやっているんですか……ッ!?!」

自分の命すら定かではない切迫した状況なのに、彼は誰かの命を優先している。死に体を引きずり、動かない体に鞭打つて、アリスの為にエリドウへ向かつているのだ。誰がどう見ても愚かな行動、しかし彼は胸を張って灰になろうとしている。

——そんな結末、納得できる訳も無かつた。

血が出るほど奥歯を噛み締める。ノアの帰りが遅いのも納得だ。彼女は何処かで彼と鉢合わせてしまったのだ。そして、2人は行動を

共にして……。

そう思うと、ユウカの胸の奥がずきりと痛んだ。裏切られた気分と言っても良い。何故、何も言ってくれなかったのか。何故、頼ってくれなかったのか。心配をかけたくないとか、巻き込またくないとか、そんな遠慮をする間柄でもないだろう。2人が『力を貸してほしい』と言ってくれば喜んで頷いたのに。

無論、こんな事で友情も信頼も愛情も揺らがないが……それでも、感じた寂しさは嘘ではない。

「コユキ、予定変更よ。準備しなさい。私達もエリドゥに行くわよ」

「うええ!? 本気ですか!？」

「本気も本気よ。それに、あなたも先生にはお世話になってるでしょ？」

「いやまあ、先生は嫌いじゃないですけど……」

確かに先生は嫌いではない。セミナーに来たときは必ず構ってくれるし、褒めてくれるし、可愛がってくれるし、必要としてくれる。お菓子もくれるし、滅茶苦茶に甘やかしてくれるのだ。自分に対し苦言ばかり呈する人しかいなかった彼女にとって、ありのままを肯定する先生の存在は少しずつ大きくなっていった。

先生を見棄てるのは忍びない。大切に想われていることは身を以て知っている。そのお礼……と言って良いのか微妙だが、彼が困っている時には助けに成りたいとは思っていたが……流石に自身の上司兼先輩のおっかないリオに真っ向から齒向かうのには勇気のパラメータが足りなかった。

だが、そんなコユキの事情はユウカにとって知った事ではなく。

「ほら、さっさと行くわよ」

「うあああああ——————なんで——！」



同刻。ユウカとコユキが向かっている事なんて全く知らない先生はビルの上で息を整えていた。情けないとは自分でも思うが、込み上

げてくる発作は抑えることが難しいし、我慢しても良い事がないとよく知っている。

荒い呼吸を繰り返し、外壁に背を預ける。薬剤を打ち込んでから約5分が経過した。そろそろ全身を回り出す頃合い。神秘の無毒化も順調であり、少なくともこれが原因で死ぬことはなくなった。

「…………ふう」

冷たい息を吐いて、ふらつく不格好な足で立ち上がる。ノアが咄嗟に支えてくれたから無様な転倒は晒すことなく、形だけは両足で大地を踏みしめた。

——足の感覚まで消え始めている。早くしないと。

「色々と迷惑かけちゃってごめんね…………ノア」

「気にしないでください。寧ろ、頼ってくれて嬉しいですよ?」

「…………本当、ノアには敵わないよ」

呟きながら、先生はシステムの箱を使用して体に電気信号を流す。眠っていた神経を無理矢理叩き起こし、再び体を動かせる状態へと遷移させる。

「ノア、ありがとう。私はもう大丈夫だよ」

「先生、もう少し休んだ方が…………」

「気持ちはこちらがたいけど、時間は有限だからね。今は先に進まない」と

ノアの気遣いをやんわり断った彼は笑みを浮べて、ノアの肩から離れる。システムの箱の戦闘用システムを励起。そして、再び起動する生徒との接続。彼の瞳が蒼く染まり、尾を引く燐光が近未来の都市に咲いた。

「30セクション西、C&Cとトキが交戦中。22セクション北西、ゲーム開発部とエンジニア部がドローンと交戦中…………まずいね、リオの秘蔵っ子が起動した」

リオの秘蔵っ子…………それに心当たりがあったノアは苦笑いを浮べた。何とも形容しがたい独創的な外観と、それに見合わぬ理不尽極まりない戦闘能力は良く知っている。余程荒事に長けた生徒以外では相手にならない程のスペックを鑑みれば、リオのもう一つの切り札と

言っても差支えない。

——ゲーム開発部が本体を抑えて、その隙にエンジニア部とヴェリタスが総出で止めに掛かれれば辛うじて勝機が生まれる。彼女達が間に合えばもう少し有利に進められるが……。

そう思い、先生は画面にマップを映し2つのマーカーを表示させる。先生とノアよりは突入部隊に近いが、それでも間に合うかはかなり微妙なラインだ。

しかし——リオの都市の構造変更を利用すればチャンスはある。良くも悪くも合理性で動く彼女は非常に次の手が読みやすい。しかし、それは彼女が単純であることを示さない。寧ろ式は複雑極まる。だが、それらを根気よく計算し最終的に得られる解はシンプルだ。

彼女の思考を読み、状況を俯瞰し……取り得る手を、切る手札を予測する。

徐々に近づいている突入部隊と陽動部隊。分断されたネルと3人。倒されたドローンの数。リオの秘蔵っ子。トキの最後の武装。変更された都市区画。ゲーム開発部とエンジニア部。ヴェリタスの支援。持ち込んだイレギュラーにはシツテムの箱を介して情報を流している。

先生達とも、両部隊とも別で動いている彼女達の存在。

——それらを、全て統合して。先生は唯一つの解を導く。

「……ノア」

「——はい。貴方のノアです」

先生の声に呼応するノア。彼女は悪戯っぽく笑って、先生に手を差し出す。白魚のような、と述べることにすら憚られるほど綺麗な手を前にした彼は一瞬驚いたような顔をして……優しく、その手を握った。健康的な白さを持つノアとは正反対の、血の抜けた青白い肌。彼の細くしなやかな指先をノアは愛おしそうに、子どものように握り締め、指先同士を絡める。

貴方のノア——その言葉にどれだけの想いが籠っているのかは彼女しか知らない。この想いは彼女だけのものなのだから。だが、

それでも……この指を、手を通して少しでも伝わってほしいと願う。自分を愛せない貴方へ送る愛。貴方が愛されている確かな証明。

それを知ってか知らずか、彼は何時ものように微笑んだ。此処に居るよ、此処で生きているよ、と息を伝える確かな眼差し。

「この都市を動かしている基幹システムに侵入して道を作る」

「よろしいのですか？ そうしたらきつと……」

「うん、確実に私達にも矛先は向く」

それはつまり、今までのような隠密行動ができなくなることを示す。状況をひっくり返せる特異点たる先生を相手にリオは容赦も油断もしない。確実に、全力で潰しに来る。ドローンだけで済むなら温情。最悪の場合、秘蔵つ子を此方側に回されるかもしれない。先生とノアの2名でどうにか相手できるような相手ではないため、アレが来た場合は——切り札の使用も考えなければならぬだろう。

大きすぎるリスク。だが、今は選り好みしていられる状況ではないのだ。リオの手札がまだ残っている段階で消耗し過ぎてしまったら確実にトキで詰んでしまう。それを避けるためにもリスク受容で動かなければならない。

元より状況は最悪なのだ。今更悪い事の1つや2つ重なったところで変わらない。まだ詰みでない以上、ここからでも巻き返しは効く。

——アリスとケイを助け、全員を無事に日常へ帰す。今はそれだけを考えろ。自分の身体なんて二の次だ。

「侵入経路は……あのビルかな。アレの地下の10階にこのセクションを動かすコンピュータがあるはずだから、それを踏み台にして大本に入り込む。経路さえ作ればあとはヴェリタスがどうにかしてくれるから……10分もいらぬ。ハッキング前にビルは閉鎖する。

ドローン相手なら硬度的に10分は確実に持つから、問題は……」

「ハッキングが終わった後、ビルから出るときですね」

「うん。ビルは確実に包囲されているはずだから、通常経路では難しい。ビルの屋上も駄目だから、安全に出るなら窓からしかないけれど……」

「……私の身体能力で先生を抱えてビルからビルに飛び移るのは少々厳しいですね」

ノアはビルを見上げてそう呟く。彼が指差したビルから最も近い距離にある建物まで目測30m、彼を抱えて飛ぶことができるとは思わなかった。自身の限界なんて嫌というほど知っている。火事場の馬鹿力、なんて言葉はあるがそんなものを狙って使えるとは考えていないし、彼の命が懸かっているのに博打なんてできる訳がない。

「地上でドローンを撃破しながら……も現実的ではないよね。となると……」

彼は手元のタブレットを操作して、クラフトチェンバーの生成済物資のリストを眺める。膨大な量のそれをソートし、目的の物を見つけた彼はこの場に顕現させた。

「ジップラインとハーネス……ですか？」

「そう。長さも結構あるから少し遠いビルまで移動できるはず」

——尤も、これはブラフであるが。

「あとはデコイを巻いてドローンを散らせば少しは安全になる……と良いんだけど」

「……分かりました。移動中は私がお守りしますね」

「ありがとう。頼むよ、ノア」



目的地たるビルまでの道中は不気味なほど静かだった。生物の気配を一切感じない沈黙。まるで停止した世界のような静寂の中、ノアの駆ける足音だけが鮮明に聞こえる。

「貧弱な先生でごめん……本当にごめん……」

「気にしないでください。そのお体で走るのは辛いでしょうし……」

尚、先生はノアに抱えられながら心底申し訳なきそうにしている。キヴォトスの生徒のスピードに死に掛けの彼が付いて行ける訳がないためこの光景はなんら不思議ではないのだが、女子高生に抱えられる成人男性という絵面が相当アレだ。

「……見えました。あそこが目的地ですよね？」

「うん。入口直ぐのエレベーターホールを通過して、奥の非常階段に入って。ロックは解除してある。そのまま階段を地下5階まで降りたら、フロアの中に」

「はい。お任せください」

ノアは一切減速することなく建物の中に入る。彼の言葉通りエレベーターホールを素通りし、奥にある非常階段の戸に手をかける。カチャリ、と音が響くとすんなり開いて冷たい明かりに照らされる無機質な階段が眼に飛び込んできた。

彼女は上のフロア表示を気にしながら階段を下る。1F、B1F、B2F、B3F。階層を下るごとに空気が冷たくなり、足音が反響する。B4Fの文字が目隅に映ると、ノアは更に歩を早めた。

全速力で階段を下りて、踊り場を足で踏む。頭上、フロア表示はB5F。このビルの表示の上での最下層。階段の戸を開ける。鍵は掛かっていなかった。

ドアを開けると、無機質な光景が眼に映る。構造的には役所だろうか。受付のような何かがあつて、待合の椅子があつて、電光掲示板とモニターがある。奥にはエレベーターホールと階段が見えた。

恐らくはこのセクシヨンの統括施設。住民を招き入れる、となった時には此処で諸々の手続きを済ませるのだろう。

「着きましたよ、先生」

「ありがとう、ノア。重くなかった……？」

「いえ、全然ですよ。寧ろ想像以上に軽くて心配になっちゃいました」
悪戯っぽく笑うノアに釣られて先生も笑い……すぐに顔を引き締める。彼はそのまま迷いなく歩を進め、受付カウンターを飛び越えて奥へ向かう。最奥のドアの電子錠を1秒も掛からずに解除し、ドアを開けると従業員用の更衣室や通路、階段があつたが……それらには目もくれず、更に奥へ。そうして彼等は壁の前で足を止めた。

そこに手を翳すと電子音が響いて、壁と思われた場所が稼働しエレベーターへ繋がる道が露出する。

2人は道を歩き、待機していたエレベーターに乗り込む。微弱な振

動に揺られて、地下6階から9階……データセンターや物資置き場、ドローンの待機場所を通過し、目的地たる地下10階に辿り着いた。

「此処が……」

「そう、私達の目的地だ」

スパコンが座す広大な空間、空調により一定に保たれている場所。LEDで照らされる道を澱みなく歩く先生と、彼の隣で何が飛び出してきてもいいように銃器を構えて周囲を警戒するノア。2人はコンソールが鎮座する場所まで向かい……そして。

「ビルの全隔壁を封鎖した。中に配備されていたドローンは全て停止させた。これで私がやるべき事を終えるまでの時間は確実に稼げる。脱出は地上40階から1km離れたビルまでジップラインで移動。その後はデコイを散布してドローンを散らしつつゲーム開発部の子達との合流を目指して動こう」

先生は懐からケーブルを取り出し、シツテムの箱とコンソールを繋ぐ。そして、生命維持の一部を機能停止させ、リソースに余剰を持たせる。機能を切った瞬間、意識を持って行かれそうになったが、それを何とか耐えて気丈に前を向く。

ちまちまと市販のタブレットで戦うのはもう止めだ。埒が明かない。此処から先は真つ向からリオと戦うのだ。例え命を対価にするとしてもシツテムの箱を出し惜しみしている余裕はない。

OSたるアロナが不在でも、オーパーツはオーパーツ。その演算能力はそんなじよそこらのスパコンなんて比較にすらならない。1割弱のスペックでも本腰を入れないハッキング程度ならば充分可能だ。

「じゃあ、始めよっか」

それだけ言い残し、彼はハッキングを開始する。ものの数秒で目の前のスパコンが掌握されるが、これは所詮前座。本命は——エリドウ中央タワーの地下20階の量子コンピュータだ。

「——勝負だよ、リオ」

悲劇の最少化

『貴女達はトロッコ問題を知っているかしら?』

突入部隊の通信をジャックしたりオは徐に口を開いた。誰かに理解されたい。誰かに分かってもらいたい。そんな当たり前の願望の発露。口では『誰にも理解されなくてもいい』と言っている彼女の少女性。ミレニアムの中……キヴォトスの中で誰よりも未来を見据えていた彼女だつて年相応の女の子なのだ。

誰かに感謝されたい訳ではない。元よりそんな事の為に今までを積み重ねてきたわけではないのだから。だが、それでも……この決断は誰かの為であるのだと、誰かに分かってもらいたかった。例え、それが遅すぎた納得だったとしても。

「トロッコ……?」

「問題……?」

『簡単なお話よ。故障し、止まることができなくなってしまった列車がレールの上を走っている時。大勢を生かす為に1人を犠牲にするか……それとも、1人を生かす為に大勢を犠牲にするか。そういう選択肢を迫る問題よ』

トロッコ問題、或いはトロリー問題。

線路を走っていたトロッコの制御が不能になってしまい、このままでは前方で作業中だった5人が猛スピードのトロッコに避ける間もなく轢き殺されてしまう。

この時偶々A氏は線路の分岐器のすぐ側にいた。A氏がトロッコの進路を切り替えれば5人は確実に助かる。しかしその別路線でもB氏が1人で作業しており、5人の代わりにB氏がトロッコに轢かれて確実に死ぬ。A氏はトロッコを別路線に引き込むべきか?

これが最も有名なシチュエーションだろう。ある人を助けるために他の人を犠牲にするのは許されるか———という形で功利主義と義務論の対立を扱った倫理学上の問題。人間は一体どのような倫理、道徳的なジレンマを解決するかについて知りたい場合はこの問題は有用な手がかりとなると考えられており、道徳心理学、神経倫理学

では重要な論題として扱われている。

キヴォトスで広く実用化されているAI技術……特に自動運転系の技術に関連している。今リオが彼女達に問いかけたシチュエーションとほぼ同じ条件、衝突が避けられない状況での判断基準をどのようにするか……という問題。

道徳的に許されるか否かを問う問題。単純化したら『大勢の為に少数を殺していいか』を回答者に迫るものであり、当然の如く正解はない。ただそれが、回答者の倫理、道徳的に許されるかどうか。功利主義的な回答は大勢の為に少数を殺す事が肯定され、義無論に基づく回答は何もするべきではない——つまり、誰が死のうともその命を見殺しにする事が肯定される。

そして、リオは功利主義的な解答——つまり、キヴォトス大勢の為にアリス少数を殺す事を選んだ。倫理学に基づくこの話に正誤はない。ただ、その選択を許さないか許すか、正当化できるか否かがあるのみ。

リオは自身を許す事も、正当化する事も無かった。

『誰かがレバーを引くか、見過ごすか。そして……私は喜んでその役を引き受けようとしているだけ。私はレバーを引く方を選んだわ。敵意も悪意も持ち合わせていない。私は、ただ——』

「もう！ 分かんないよ！ 難しい話はいいから、アリスを返して！」
リオの理論を十把一絡げに隅に置いたモモイは叫ぶ。その話ともういい、聞き飽きた。リオの事情はどうだっていいから、大切なアリスを返せと。

『……貴女は』

「話は聞いたんだからね！ 会長が意味わかんない事言ってアリスを連れて行ったって！」

『……意味不明な話ではないわ。貴女なら分かるのではなくて？ 他の誰でもない、名もなき神々の女王に攻撃された貴女なら』

「分かんないよ！ これっぽっちも分かんない！」

確かに傷つけられた。モモイだって、先生だって。だが、たった一度の攻撃程度で友情が揺らぐことなんてありえない。今でもアリスとは友達だと思っっているし、ずっと大切だ。そもそも、ずっと前に許

しているのだ。だから後は仲直りするだけ。それを阻むというなら、容赦なんてするつもりはない。

今も眠る彼の心は分からないけれど、きっと同じだと信じている。「私はただ、会長からアリスを連れ戻したいだけ！ その先の事なんて後で良い！ そもそも、キヴォトスの脅威だとかなんとか理由を付けてアリスを誘拐するなんてスケールが小さ過ぎるよ！ 普段私が書いてるシナリオの規模の方がずーっと大きい！ そんな話、通じるわけないじゃん」

『……そう。なら良いわ』

モモイの……否、この場全員の総意を聞いたリオはどこか諦観を感じさせる声で呟いた。

——ウタハに言われた事を元に、自分なりに言葉は尽くした。理解してもらおうと、納得してもらおうと歩み寄った。だが、結果は決裂。そして、これ以上彼女達に時間を割くのは難しい。アクセス履歴の中に、ヒマリではない痕跡を見つけた。エリドウの根幹にアクセスできる人物なんて自身とヒマリを除けば1人しかない。来たのだ、イレギュラーが。彼に対抗しなければならぬ今、彼女達相手に取る手段なんて一つしかないだろう。

『——アバンギャルド君、発進』

突入部隊から数セクション離れた区画の格納庫からリオは秘蔵つ子を解き放った。

途端に鳴り出すアラート。接近する時速300km……否、まだ上がる。途轍もない速度で此方に向かって来る巨大な機械。そのエネルギーの総量はいままで相手にしてきたドローンとは比較にならない程莫大だ。少女達は悟る、これこそがリオのもう1つの切り札であるのだと。

最終的な速度は時速600km。数セクションという離れた距離を僅かな時間で踏み潰した恐るべきリオの切り札が遂にその姿を顕わにした。そして、目にしたモモイは思わず叫ぶ。

「うわあっ！ ダサ……」

「確かに、あんまり可愛いデザインじゃないけど……」

スマホで『ロボット』と入力したら予測変換で出てきそうな絵文字そのままの頭部。ミレニアムの校章が大きく描かれたボディ。腕部は4本あり、右下の腕がシールド……なのだが、何故か黄金長方形の螺旋形となっている。左下の腕はガトリングガン。右上の腕と左上の腕はそれぞれバズーカ砲とアサルトライフルとなっている。下半身は戦車をそのままくっつけたようなキャタピラで、機動力も高い。しかし、モモイとミドリが言った通り非常にアレなデザインをしている。美的センスは人それぞれ、とは言われるものの……多分これをおしゃれと言う人物は激レアだろうと思ってしまう。名は体を表す、とはよく言ったものでアバンギャルド君は極めて独特かつ前衛的アバンギャルドなデザインをしていた。

だが、エリドウ中央タワーの管制室にこれのミニチュアフィギュアを置くほど気に入っていたリオは少しだけしよんぼりして目を逸らし。

『……見た目は関係ないわ』

「気に病む必要は無いさ。芸術とは得てしてそういうものだからね」
『同情も不要よ』

気の抜けるやり取りをしている間にも、アバンギャルド君はどんどん接近する。しかもアバンギャルド君単体ではなく、周囲には数多のAMASドローンが展開していて、その数は50に迫る勢い。ヒビキが迫撃砲を使用して数を減らそうと試みるが、減らせたのは10体程度。しかも、リオの隠し玉たるアレには傷一つつけられていない。

そして——ついに交戦距離に入った。

「……き、来ます—」

リオの秘蔵っ子と突入部隊の戦闘が始まる。



エリドウ基幹システムに侵入経路を残し終えた先生は1つ息を吐いて、シツテムの箱に接続されているケーブルを外す。これで少しは彼女達が楽になったと信じたい。欲を言うならばアバンギャルド君

のシステムにまで手を出したかったが、エリドゥで制御している訳ではない完全なスタンドアローンだったためそれは叶わなかった。

しかし、当初の目的は充分に果たした。このまま予定通りビルから脱出するためエレベーターに乗り込み40階まで向かっていた兩名であったが……突然、通信が届いた。秘匿回線。非通知。だが、先生は一切の躊躇いなくオープンした。

『……先生』

「やあ、リオ。元気かい？ 食事も睡眠もちゃんと取ってる？」

『ええ……』

ホログラムに映されたのは何処か浮かない顔をしたリオ。その表情を見て少し彼は驚いて数回瞬きして……理由に思い至った彼は「ああ」と優しい笑顔を浮べて。

「君が気に病む必要は無いよ。勝手に私が死にかけたただけだ。君に落ち度はないさ」

『それでも、先生がミレニウム自治区で怪我をした事実が変わりはないわ。貴方の怪我の責任の所在は、私にある』

「ないさ。私の痛みは私だけのものだ。君が背負うべきものじゃない」

互いに一歩も退かぬ意志と意志のぶつかり合い。その戦いで先に折れたのはリオの方だった。彼が決して引かない事を悟ったのだろう。彼はこういう時……責任に関する事柄や生徒に関する事柄には異常とも呼べるほど頑なだった。アリスとの一件……彼女に関する取り決めに擦り合わせた時からよく知っている。

『一応聞いわ。先生は何故ここに？』

「アリスの奪還だよ。彼女を助けて、全員を日常に帰す」

『その日常はもう崩れてしまったわ』

「確かにそうかもしれない。でも、壊れたならまた作ればいい。やり直しが効かない事なんて無いんだよ。誰だって、何度だってやり直せる」

『それは……綺麗事よ』

噛み締めるようなりオの表情と言葉。彼女の言う通り、彼が吐いた

言葉は全て綺麗事だ。何せ、これらの言葉を吐いた彼自身がもうやり直せないのだ。文字通りのラストチャンス。与えられた最後の猶予。だが、それは彼だけだ。彼以外であれば、彼が愛した生徒達であれば、きつと何度だってやり直せる。

だから吠えよう。負け犬であろうとも——彼女達の先生として、誇り高く。

「リオの言う通り、私の言葉は綺麗事だ。だけど、私はその綺麗事が実現した世界を……都合の良いものが見たくて、今まで走ってきたんだよ」

『——』

「リオだってそうだろう？ 誰もが当たり前に平穏と幸福を享受できる未来が見たくて、今まで頑張ってきた。どれだけ困難な道であろうと、君は前に進んでいる。それは肯定してあげるべきだよ。君の見据える先は、とても眩しい」

目指す理想までの過程の話ではない。彼はリオの理想の果てを肯定したのだ。その景色はきつと眩しいだろう、と。

——初めて寄せられた自らの理想への共感と羨望。それに対して、リオは何も言えなかった。何も言わなかった。何かを言ってみれば、何かが崩れてしまいそうだったから。

『私は、私の意志で、アリスを殺す』

「……私は、その選択の是非は問わない。勿論、正誤や善悪もね。数多の葛藤と選択、決断を経てその答えに至った君に軽々しく『もつとい方法があつたはず』だとか、そんな無責任な事は言えないし、言うつもりもない」

彼はずつと悔やんでいた。自身を呪い続けていた。居るべき時に何を呑気に眠りこけていたのかと、数日前の自分を殴り飛ばしたい気持ちで一杯だった。己が不甲斐なかつたからアリスは涙の別れを告げて、リオは十字架を背負おうとしている。

リオはそれを望んだ事と言っているが、望む望まざるは関係ない。そんな選択肢を生み、彼女の前に与えたこと自体が問題なのだ。だって、キヴオトスの未来を高校生の女の子が背負う必要なんてないだろ

う？

……本当は、そう言いたかった。しかし——あの場になかった自分が、何かを嘯く資格はない。

だけど、それでも……己にリオに語る何かがあるとすれば。それは、きつと。

「君を人殺しになんてさせない」

キヴォトスを、其処に住まう人を愛した彼女の手を血で汚させない。彼女に誰かを殺させない。彼女を引き返せない場所まで行かせない。

——優しいリオに、そんな惨い事をさせてなるものか。

エレベーターが止まる。B41セクション統括タワー40階。地上約160mの高さのフロアに先生達は足を踏み入れる。

『……』

リオは先程から無言を貫いている。俯いているからその表情は分からない。何かを堪えるように。

——一度は振り払った手。彼が描いた理想は不可能で、絵空事だど。人は善性ばかりの存在ではない。善と同じ総量の悪があり、謳歌される日常の裏には消費される悲劇がある。誰もが平穏を選べるわけではない。誰もが幸福を謳歌できるわけではない。それらを享受できる座席は限られていて、その数は総人口よりずっと少ないのだから。だから、その席に座れる誰かを1人でも増やすためにリオは自ら望んで退いた。

それなのに、彼は『リオも同じだ』と言った。君も当たり前に平穏と幸福を享受していいのだと。誰かの為に身を捧げる必要はないのだと。顔を覆いながら誰かを手に掛けなくていい。真っ当に泣いて、笑って、怒っていい。それができない位に雁字搦めにされているなら、その鎖を全て彼が破壊する。彼にとつて世界と個人は同じ重さ。アリスもケイもリオも、同じだけ愛する大切な生徒なのだから。

だから叫ぼう—————リオが泣く結末なんて認めないと。望むのは完全無欠の大団円。誰もが手を伸ばしたハッピーエンド。

「アリスの犠牲と君の献身の上で成り立つ未来は、私が全てを賭して

覆してみせる」



眼下、見下ろした先には山ほどのAMAS^{ドローン}。空戦型も配備されており、リオが万全を喫していると肌で感じられる。射程限界は当然あるため地上にいるドローンの攻撃が先生達に当たることはないが、空戦型は違う。地上160mの彼らをきつと正確に射抜けるだろう。故に、空中移動も決して安全ではなく常に被弾の危険性と隣り合わせであるのだが……それでも陸路よりは数段安全だ。

先生はジップラインを使用し、目的地の1km先のビルにアンカーを打ち込む。すると当然集まっていたドローンはアンカーの終点であるビルの方にも向かい、空戦型はジップラインを攻撃するが、高い硬度を持つワイヤーロープはその程度で切断されない。

——減った地上ドローン。空戦型ドローンもワイヤーロープを切断しようとそれなりの機体数が釘付けになっている。

「これで準備は終わりかな。今からデコイを散布するから……」

『はい、タイミングは先生に譲渡しますね』

ノアの頼もしい言葉を聞いて、先生はガラス張りになっている壁を見つめる。あとはタイミング勝負だ。ドローンの……否、リオの意識の縫い目を歩むのみだ。

そして——先生はハーンネスを押し出す。先生とノアのテクスチャを貼り付けたダミーバルーン。だが、反応は全て本物に見えるように偽装している。当然リオもダミーを本物と誤認しており、流石に先生を銃で蜂の巣にする訳にはいかないという心理が働く。故に銃器ではなく他の手段……組み付き等を試みるが、そこまでは彼も織り込み済み。

ドローンがダミーを捕らえる為に接近したタイミングを見計らっている——先生はダミーバルーンを破裂させた。途端に機能を停止するドローン、通信も悪くなり映像と音声途切れ途切れになる。この現象にリオは当然思い当たる。アレはEMP攻撃だ。しかも、超高濃

度。これではあの場にいた空戦型のドローンは暫くまともに動かなくなるだろう。

しかし、まだ動ける個体は幾つか残っている。それを先生に向かわせようとするのだが……そこで、リオは信じられない光景を見た。

『先生ッ!? 正気なのッ!?』

地上160mから彼は身を投げ出していたのだ。腕をクロスさせ、ガラスを突き破り、摩天楼直下へ。だが、彼は自暴自棄になったわけではない。それは彼の眼差しが物語っている。これは正真正銘、作戦の内なのだ。

彼の落下地点に重なるように影が飛び出てくる。都市部に映える白い姿は紛れもなくノア。落下してくる彼をしつかりと抱きしめた彼女は離れたビルの屋上へ向かう。

高められた身体能力は彼の支援によるものだ。多くのリソースを彼の生存に割いている今、本来はそのような事はできない。だが、先ほど掌握したビルのスパコンを外部の演算補助装置として使用しているならば話は別だ。これにより、ノアはまるで舞うように摩天楼を翔けることができる。

万全に見えた包囲網を軽々突破する2人。それを見てリオは素直に敗北を受け入れる。確かに彼は化かし合いでリオを上回った。限られたリソースで、あの圧倒的な不利な状況を無傷で突破する手腕は見事と言う他ない。これが試合なら完敗と言ってもいいだろう。

だが、悲しいかな——これは試合ではない。先生というイレギュラー相手に出し惜しみができない事を知っているリオはまだ、保険を残しておいたのだ。

彼がエリドゥに訪れた事を知ったタイミングはメインコンピュータをハッキングされたタイミング。通常ならプロテクトとカウンターハックを行うのだが、相手が先生だと分かった彼女はそれらを全てAIに任せて、自らは都市の区画移動と隔壁封鎖を行っていたのだ。

——彼女を向かわせる為に。

ノアは自身に猛追する影を感知した途端、銃を引き抜き射撃を行

う。だが、空中機動は相手の方が圧倒的に上。軽々と弾丸を避けた彼女は速度を一切緩める事なく2人に接近。3つの影が完全に重なったその時、彼女はノアの襟を掴み——放り投げた。落下地点は近場のビルの屋上、この速度で叩きつけられたら先生は勿論ノアも無事では済まない。

最悪の結末を回避するため咄嗟に展開される障壁。彼の生命維持に割いていたりソースを使ったシールドは構築が甘かったため、叩きつけられた時点で崩壊した。その上、防御力を高める事もできなかったため完璧に衝撃を殺し切る事は叶わず、先生は全身打撲寸前、ノアは一時的に意識を失っている。一応2人の命を守る役目を果たしたが、及第点も上げれない。

蜘蛛の巣状の亀裂が入るビルの屋上。ノアをゆつくりと寝かせ、立ち上がった先生の眼前に降り立ったのは——メイド服の少女。

「トキ……」

「お久しぶりです、先生。このような形で再会したくはありませんでしたが……」

涼やかにそう告げるトキに相反するように、彼の表情は余裕がなかった。

危機

「降伏をお勧めします。貴方では私に勝てません」

トキの言う通りだ。キヴオトス最弱である先生が、有数の強者たるトキに勝てる見込みは皆無。文字通り、彼女は彼を指先一つで殺傷できるのだ。人差し指を立て、心臓目掛けて突くだけ。銃なんて大層なものはいらない。拳という暴力すら過剰だ。

加えて、先生の攻撃はトキに通用しない。神秘の有無という絶大な壁に阻まれているため、全力で彼女を殴りつけてもその表情を一切変化させることは叶わないだろう。それは、生命としてのステージの差。生命論や進化論における優劣は不明であるが、こと単純な殴り合いや暴力において、先生という生命は余りにも矮小で弱かった。

そもそも、事此処に及んでも先生はトキを傷つけるつもりは皆無だった。生徒に決して力を向けないと誓った彼はあらゆる暴力を肯定しない。例えその力が脆弱で矮小で、傷一つ付けられないとしても、それでも生徒には必ず力を振るわれない。先生たる彼が生徒に向けるべきは力ではなく笑顔と深愛であろう。生徒に力を振るわなければ生き残れないと言うならば、潔く自刃でもしてれば良い。生徒を傷つけてまで生き残りたいとは思わないし、生徒を傷つけて窮地から脱した己なんて塵屑だ。

「降伏はしないよ。私は、まだ諦めていない」

「……そうですか」

眩き、眼を伏せるトキ。その表情は心底残念そうであり、先生に対する憐みの情を帯びていた。これから傷つく彼への憐憫。諦めなかったばかりに踏み潰される彼の未来を憂いたトキの感情の発露だった。

——尤も、彼を死なない程度に抵抗心をへし折るのは憐れんだトキ自身だ。どの口が、とは思うし許されるとも考えていない。

このキヴオトスにおいて先生を傷つける事はタブーだ。どれほど苛烈な戦いでも彼を狙わない事は暗黙の了解となつているし、どんなならず者でもその後の報復を恐れて銃口一つすら向けない。

そして、トキも彼の性格や為人にある程度触れている。優しく、暖かく、争い事が嫌いな……人好きのする性格。銃を向けたくないと思う誰かの心も分かる。無論、トキも自ら望んで銃口を向けたいとは一切思わないが……それでも、今の彼女はリオの武器だ。情では揺らがない。語らず、逸らず、肅々と——主の敵を排除するのみ。

トキは全身に装着していた各種ギアをパージし、待機状態にさせる。銃器も運搬用のドローンに預け身一つの状態。先と比べて戦力そのものは落ちたが、彼を相手にするのに過剰な暴力は不要だ。力加減を誤って殺してしまえばそれこそ大問題。もし万一にも取り返しがつかなくなったら、リオが言っていたキヴオトス最強に名を連ねる猛者の中の猛者……小島遊ホシノ 暁のホルス、空崎 ゲヘナ風紀委員会、聖園ミカ パテル分派首長、狐坂ワカモ 災厄の狐等のメンバーが総力を挙げてエリドゥを潰しに来るだろう。

故に、生け捕りこそが最重要。彼を必要以上傷つけず、抵抗心のみをへし折る。攻撃自体も後遺症が残らない様に力の入れ方に気を付けなければならぬ。難易度の高いミッションであるが、可能であるとトキは判断。腰を落とし、油断も隙も無く構えた。

「手加減はします。ですが……手足の1、2本は覚悟してください」
その言葉と共にトキは動き出す。先生と彼女の距離は10m程度、踏み込み1つで潰せるレンジ。彼女は一瞬で彼の懐へと飛び込んだ。

——先生から見れば、文字通りトキが瞬間移動したように見えただろう。彼の動体視力ではどう頑張っても追えない速度で以て懐に潜り込まれてしまえば、もうどうする事もできない。初動すら追えなかった時点で勝敗は決した、と考えるのが筋であるが……彼は未来予測すら可能な優秀なシステムと、それを十全に運用するだけの頭脳と眼を持っている。

ギリギリではあるが、巻き返しは可能であった。

「……ッ！」

開かれたトキの五指が狙うは彼の首。首を絞めて失神を狙っていたのだろうが……その動きは分かっている。彼は全力で体を傾けて彼女の魔手を回避。耳の真横で鳴った風切り音に震えながらも、その

蒼は次の攻撃を見ている。

二撃目は顎を掠めるような膝蹴り。狙っているのは脳震盪だろうか。彼の骨が砕けない様に速度と威力を落としているため、軌道を見切るのは容易かった。しかし、見切っても体の反射速度には限界がある。防御が間に合うかどうかはまた別問題だ。

——否、間に合わせろ。神経を研ぎ澄ませ。焼き切れても尚稼働させろ。ここで倒れる訳にはいかないのだから。

「……………これを防ぎますか」

そう呟くトキには彼に対する驚愕と賞賛があつた。伝え聞いていた彼のスペックでは初撃は兎も角、この二撃目はどうやっても回避も防御も不可能。彼の脳は揺さぶられ、意識は闇に落ちる筈であつたのだが……………どういう訳かトキの膝は両掌を重ねた彼によつて受け止められている。

「お褒めに預かり、光栄だよ……………ッ」

顔を歪ませる彼はお世辞にも余裕があると言えなかつた。全力全開で、尚足りない……………そういつた不足を感じさせる表情。膝を受け止めている掌からは何かが軋む様な音が鳴っていて、一際大きな音が響くたびに彼の表情は苦痛に彩られていく。

そして、トキに伝わる軟い人体の感触。殆ど自身達と変わらない外見をしているはずなのに、その強度は雲泥の差だ。最低限の力しか込めていない筈なのに肉が潰れている。骨が砕けている。その度に彼の顔が歪んでいく。

トキは秘匿されていたとはいえミレニアム最強のエージェント集団の一角だ。争いの経験は豊富であり、それなりの数の人間を病院送りにしてきた。

故に、それと同じだと思っていた。武装した誰かを制圧する事も彼を制圧する事も大差ないと。だが……………敵意も害意もない自分より圧倒的に弱い命を甚振るのは、思ったよりも気分が優れなかつた。

伝わる温度。皮、肉、骨の感触。苦痛で歪む彼の顔と、漏れる痛そうなた息。歯を食いしばるように堪えている彼を見てトキは心の奥底で言葉を漏らした。

——これが、人を傷つけるという事ですか。

自分の一挙一動に彼の命が左右される。彼に触れる度にその顔が苦痛で歪む。何かが壊れた感触が伝わる度にトキの心を嫌な色で染める。

殴りつけた先にある誰かの感触に痛みに似た感覚を覚えるのはトキにとって初めての経験であった。今までは任務であれば、命令であれば、必要であるならばと納得して力を振るい続けた。その鉄心で以て、己の心で感じることを止めてきたのだ。命令に忠実な、リオにとって使いやすい武器であるために。

だが、今は思う——果たして、この暴力は必要なのか。

否、必要だ。彼は敵だ。主たるリオの邪魔をする者であり、何を差し置いても真っ先に排除しなければならぬ危険人物なのだから。

だから、躊躇うな。

トキは畳んでいた膝を伸ばし、最低限の動作で彼の防御をすり抜ける形で蹴りを繰り出す。両手を使ってガードしていた彼はその攻撃に対する有効的な手段を取る事が許されず、直撃を貰ってしまう。鳩尾に突き刺さった強烈な蹴りに流石の彼も一瞬意識を失いかけるが、それを何とか繋ぎ止めて気丈に前を向いた。

だが、その一瞬の意識の空白地帯を突いてトキは既に次の攻撃の装填を済ませてある。横薙ぎに振るわる右腕。狙うは彼の首筋。鋭く速い一撃は彼の意識を刈り取るのに十分な威力を保有していた。

咄嗟に引き戻した左腕でガードを試みるがその程度で威力を減衰できるわけもなく、防御に使った腕からは骨の軋む音と肉が潰れる音が鳴って——その衝撃のまま吹き飛ばされた。衝突したフェンスからけたたましい音が響いて、項垂れる彼は意識こそあるが満身創痍もい所。もう真面に動けないだろう。防御に使った左腕は変な場所で曲がっていた。

胸の奥にある未知の感情を見て見ぬ振りして、トキは静かな足取りで彼の元へ向かう。そのまま彼女は何か意識を繋ぎ止めている彼の胸倉を掴み上げて。

「……降伏を、お願いします」

彼女は今一度、降伏勧告をする。彼女は気付いていないが、その声は最初のものとは比べて少しだけ震えていた。全身に残る、ほぼ無抵抗の弱者を一方的に痛めつけた感触は今も鮮明だ。これ以上はやりたくない、というのが紛れもないトキの本音。

だから言つてほしい、降参だ。もう抗わないと、抵抗しないと。それだけで良いのだ。彼がそれを選んでくれれば彼自身はこれ以上傷つく必要もなくなるし、トキもこれ以上彼を傷つけなくて済む。正にWin—Winの関係じゃないか——そう思つても。

「でき……な、い……」

気丈に彼はそう言うばかり。もう意識を保つのすら難しいだろうに、トキを見つめ返す眼には諦めが一切見えない。

そして、氷のような青い瞳の奥で揺れる感情を見つけた彼は唐突に表情を申し訳なさそうに歪めて。

「……ごめん、ね……」

眼と眼を合わせて、はつきりと。途切れ途切れで途中で咽たりもしたが、その謝罪の言葉はしっかりとトキの耳に届いた。あれは紛れもなくトキに対する謝罪だ。あそこまではつきり言われて分からない訳がない。

では、何の謝罪なのだろうか——思考がその領域に及んだ瞬間、トキは頭を殴りつけられたような衝撃を受けた。この状況、彼の性格、トキの心情。そして、彼は心を見通す事が得意と聞く。ここまです揃えば分からない訳がない。

彼はトキに望まぬ暴力を振るわせてしまった事を心から恥じて謝罪しているのだ。彼を傷つける度に痛んでいた彼女の心に寄り添うように、少しでも痛みを和らげるように。君は何も悪くない、君が傷つく必要はない……言外にそう言っているようだった。この期に及んで尚、他者の心を想う彼には呆れを通り越して感心すら覚えるが……それと同時に、怒りが少しだけ湧いてきた。

そこまで分かっているながら、そこまで至っていないながら、何故無駄と分かり切っている抵抗をしたのか。勝算がある抵抗なら納得しよう、特攻として捨て駒になる覚悟なら理解程度はできる。しかし、彼は勝

ち目なんて万一も無いと分かっているながら、それでも前に進むと固く意志を持つていた。碌な攻撃すらしないのにも関わらず。

その果てがこれだ。誰もが予想できていた当然の帰結。初めから分かり切っていた三文芝居。言い方を変えれば、彼は彼自身の選択によりトキに傷つけさせる事を強制させたのだ。

この言い分が身勝手極まりないのは分かっている。自分でもどうかと思うほど醜い感情だ。此方には此方の都合と事情があるように、彼には彼の都合と事情がある。その上、最終的に最後の選択……リオの命令に従い彼を捕らえる事を選んだのはトキ自身だ。

恐らくはそれを含めての謝罪だろう。トキに暴力を振るう選択肢を与えた事、振るわせる道しかなかった事、実際に震わせた事、それによりトキの心が痛んだ事。その全てに対する謝罪だ。この場に於ける全てを背負っているとしか思えないその発言に、トキも内心が穏やかでなくなっていく。

——早く、終わらせましょう。

彼女はその一念で以て、彼の首に両手をかける。そのまま細心の注意を払いながら、彼の首を少しずつ圧迫した。苦しそうな吐息を漏らし痙攣する彼を出来るだけ見ない様に目を閉じて、早く終わってくれと居るかも分からない神に祈る。時間が経つに連れて、彼の反応も弱く鈍くなっていく。痙攣は鳴りを潜め、吐息も短く小さくなっていく。

掌から伝わる温度は凍えそうなほど冷たくて、脈は弱く速い。手にかける首は少しでも力を込めれば折れてしまいそう。それに何も感じない訳がない。今だって、トキの心は掻き乱されっぱなしだ。だが、それももう直ぐ終わる———そう思った時、背後から発砲音が聞こえた。

「……ッ！」

身体に沁み込んだ条件反射。銃声が聞こえたら体が回避行動を取るようにトレーニングを積んでいる彼女は飛び退こうと全身の筋肉をばねのようにしならせたが———このまま回避したら彼に銃弾が当たってしまう可能性を考えた。

銃声が聞こえた方角、距離……それらを元に弾道はある程度予想できる。恐らくは当たらないだろう。だが、跳弾した場合は話は別だ。そうなってしまうと弾が何処に当たるかは誰にも予想できず、半ば運任せになってしまう。そして、運悪く彼にでも当たってしまったら……考えるだけで身の毛がよだつ結末だ。

勿論、彼が通常の状態であれば急所や内臓に当たらない限りは弾丸そのものが致命傷にはならないはずだ。だが、今の彼は万全とは言い難い。何がきっかけで、何が契機になって息を止めるか分かったものではないのだ。被弾は可能な限り避けた方が良いだろう。

そこまで一瞬で思考したトキは先生に覆いかぶさる。その数瞬後、背中に鋭い痛みを感じた。言い逃れができない被弾の証。これまで向けられた攻撃の悉くを回避、防御していたトキは今初めて手傷を負った。

勿論、この程度はどうという事はない。この程度の口径の弾丸一発で戦闘行動が出来なくなる訳もないし、戦闘力が落ちる事もない。だが、初めて己に傷を与えたのがネルではなく彼女だった事が意外であった。

「先生から、離れてください……！」

「——生塩ノア先輩」

トキから見れば随分と頼りない、サブアーム同然の銃を真っ直ぐと向けるノア。全身で戦う意志、抵抗の意志を示す彼女を見て、何処かほっとする自身が居たことにトキは気付いた。これで暴力の矛先を変えられる……と。

トキはノアの言う通り、先生から距離を取る。そして、すたすたと歩いていき……今も意識と無意識の境界線に立つ彼が戦闘の余波に巻き込まれない様に位置を取る。その意図に気付いたノアは内心で彼女に対する謝意を示し……彼女が用意した領域に足を踏み入れた。

「……降伏は」

「はい、しませんよ」

「……そう、ですか」

本日何度目かの降伏勧告は、これまでと同じように『一昨日来やが

れ』と言わんばかりに突つ撥ねられた。どうやら、そんなにも主たるリオの目的は受け入れ難いらしい。

大勢の為にアリスを殺す……その手段と目的の正誤を、トキは考えないようにしている。道具は口を利かない、意志を持たない。それを決めるのは振るう主。ただ、主にとって使いやすい道具であれ——それが、C&Cとしてのトキの全てだ。

「降伏はいつでも受け付けます」

トキはドローンに持たせていた愛銃を手に取る。それに呼応するようにノアも銃を構えるが、その顔色は良いとは言えない。勝てない、と心のどこかで悟っているのだ。片やセミナーの書記、片や戦闘のスペシャリスト。勝負を100回やっても結果は見えている。勝ち目なんて無いに等しいが、それでも……ノアは目を逸らさず、前を見る。勝率が0%だと分かっているながらも、無謀な挑戦と嘲笑されようとも、全ては彼の為に。

酸欠により霞んでいた意識が鮮明になった先生も思考する。真つ当な手段ではまず間違いない勝てない。ノアとトキでは戦闘能力の差が大き過ぎるのだ。己が万全であれば防戦くらいなら可能だが、今はそれも難しい。

加えて、彼女と戦っていたはずのネルの事も気になる。彼女が負けたとは思っていない。恐らくは隔壁の中に閉じ込められているだけだろう。タブレットに映るマーカーの動きから彼女がトキを追って此方に向かっていている事は分かる。隔壁の枚数は不明だが、最低でも10分……否、先生の動き次第で短縮可能だ。

その時間をノアと己で稼げるか————そこが勝負の分かれ目だろう。



トキとノアの勝負は酷く一方的な展開だった。彼女の代名詞とも言える各種ギアはパージされているが、そもそも彼女は身一つの状態でもC&CのNo.2であるアスナに匹敵する強者。ノアが勝てる

相手ではない。

攻めるトキと、防戦一方のノア。防戦が成立しているのも先生の援護や支援があるからで、システムにより引き延ばされる体感時間をフルで使ってトキの鋭い攻撃を回避することに専念する。隙を見て反撃を差し込もう……なんて甘い考えは疾うに消えた。カウンターに意識を割かれたその瞬間に勝負が決する嫌な予感があったのだ。彼女の冷たい瞳はずっとノアの先を見ている。

攻撃の後隙、僅かに長い次の攻撃までのインターバル。誘っている、と気づくまでに時間は掛からなかった。カウンターを誘発しようとしている。しかも、それが抜群に上手い。先生と接続していなければ確実に隙と見做してカウンターを行い、逆に手痛い一撃で以て沈められていただろう。

別にノアの勝利条件はトキの撃退ではない。先生と目的を共有している今、時間稼ぎに徹して援軍……ネルを待てばいいのだから。だが、戦闘開始から2分も経っていないのに此処までジリ貧になっているのは非常に拙い。

「……ッ！」

通算18回目の直撃。それと同時に先生が展開していたシールドが甲高い音を立てて砕け散った。再展開は不可能。ここから先は身一つでトキの攻撃を耐えなければならぬ。

ノアはトキの手札を全て知っており、戦闘を何度か見ていた経験から次に取りそうな手も大体の予想が可能。そこに先生の未来予知に等しい指揮が加わればトキが取る手段は全て筒抜けにも等しい。実際にノアはトキの行動を全て先読みし、その上で自身の行動を決定していた。だが、その上で勝てない。

ノアの不運は更に続く。トキの攻撃を回避しながら真つ当に射撃戦を行っていた彼女であるが、突如として銃から正常に動作せず弾丸が発射できなくなってしまった。装填不良……弾薬がマガジンから薬室へ装填される途中で詰まり、薬室が閉鎖されずに止まってしまいうジャム。それが起きてしまったのだ。

トキはその隙を見逃す訳もなく、一瞬の驚愕を突いてトリガーを引

く。その弾丸は狙いを逸らさずノアの銃に命中し、彼女の手から獲物が零れ落ちた。ノアの後方、3 m。トキが眼を光らせている今、彼女に背を向けて銃を取りに行くのはあまりにも現実的ではない。しかし、アレが唯一の武装であるため取らない限りは太刀打ちはできないのだ。

——詰み。その二文字が、脳裏を過ぎる。

「……勝負は決しました。降伏をお勧めします」

「それは、できません……！」

「……先生も同意見ですか？」

「……そうだね。ノアが諦めないなら、私も諦めないさ。それに——」

先生がゆらりとした笑みを浮べた途端、トキの背筋に冷たい汗が流れた。どうしようもない程の嫌な予感。彼女は悟る、可能な限り最速で彼を潰さなければ——と。その本能の赴くまま彼女は拳を構えて突貫する。狙う先は彼の顎。そこを霞めて脳を揺らし、脳震盪を起こして彼の意識を奪う。

——必ず間に合う速度だった。彼が何かを起こす前に確実に彼の意識を奪える距離だった。しかし、先の一件で彼に対して力を振るう事に忌避感と痛みを覚えてしまったトキは僅かに迷う。その迷いが雌雄を決する要因になり……彼女は、彼の行動を止める事が叶わなかった。

「まだ勝負は決していないよ」

その言葉と共に、戦場となっていたビルの屋上が崩壊する。極めて効率的かつ芸術的な崩落はビルに仕込まれた自壊プログラムを局所的に動作させた結果。彼はノアとトキが戦っていた間、ずっとタイムラグを見計らっていたのだ。このプログラムを動作させるチャンス

を。

「先生……！」

先生が展開したシールドに包まれながら落下するトキは、ノアを横抱きにして落下する先生を見る。そこに浮かぶ表情は余裕に満ちた勝ち誇った顔……ではなく、額に脂汗を滲ませ、余裕なんて一切感じ

させない顔をしていた。唇の端からは血が一筋零れ、眼球は充血し切っている。だが、瞳に灯る戦意と意志だけは全く消えていない。

落下したのは屋上から3階層分程度だろうか。倒壊した貯水タンクが作った水溜りに足を濡らし、トキは油断なく各種ギアを再び装着する。落下した階層、トキの前方10m先に見慣れた人影。想像よりも随分早い到着だ。恐らく、彼が何かしらのサポートをしたのだろう。

「ごめん、あとは任せるね——ネル」

「ああ、任せろ先生。無茶はすんなよ」

「ネルの方こそ」

短いながらも強固な信頼関係を思わせるやり取り。バトンタッチを果たした先生はノアと共に窓から飛び降りた。

この場に残されたのはトキとネルの2人。

「つて訳で、選手交代だ。先生潰すためにアタシの前から逃げるとはいい度胸してるじゃねえか、オイ」

ネルの感情は分かりやすい怒りを象っていた。額に浮かび上がる青筋、砕けんばかりに握り締められた銃のグリップ。寧猛な笑みと、口から覗く剥き出しの犬歯。

今受けているリオの命は『先生の捕縛』だ。ネルの撃破ではない。故にネルを無視し、彼の元へと急行しなければならないのだが……眼前の彼女はそんな事を許してくれないだろう。少しでも彼女から意識を逸らした途端、あの手を持つ銃が向けられると分かっている。

故に、多少遠回りでもネルを倒さなければならぬ。

建物内というスラスターの機動力を十全に活かさない閉鎖空間、タンクにより形成された深さ数cmの水場。総じて地上や屋上で戦っていた場合よりも総合的なスペックは落ちるが、問題にするほどではない。この状況でも充分にネルを相手取れる。

「……押し通ります」

「上等だッ！」

黄金を穿つ

トキの相手をネルにバトンタッチした先生は、一切の躊躇なくノアを横抱きにしたまま割れた窓から飛び降りた。地表20m近い高さ、当然彼が無事でいられる訳も無いがシツテムの箱のサポートがあれば話は別だ。落下に合わせて物理障壁と衝撃緩和のシールドを多重展開すればこの程度は耐えられる。

リオの手中から逃れた先生とノアは喉けられたドローンを適当にあしらいながら一目散に突入部隊の方面へ向かう。

無論、本来ならばドローンは撃破した方が良い。敵を無視しても良い事はないし、倒せるときに倒した方が状況は有利に傾きやすいのだから。だが、そんな事を言っていられない程状況が切羽詰まっているのもまた事実だ。

リオによつて次々動かされるエリドウの区画。トキとネルの戦鬪の余波により崩壊する都市。降り注ぐ瓦礫は容易く先生を潰す巨大な質量だ。いちいちドローンの相手をした結果倒壊に巻き込まれた、なんて事になったら目も当てられない。そんな下らない死に方をするため此処に來た訳ではないのだから。

立ち上がる隔壁を飛び越え、降り注ぐ弾雨を躲しながら駆け抜ける。リオも2人を止めるために手段を選ばなくなったのか、非殺傷弾を装填したドローンで以て追いかけていた。発射される弾丸はゴム弾ではあるが、射出される物が変わっただけで銃という媒体は変っていない為、当然の如く威力は高い。先生に当たれば内出血は間違いなし、運が悪ければ骨折までしてしまうだろう。

「くッ……！」

駆け抜ける先生の背中、背骨から少しずつ弾丸がぶち当たる。これで何度目の被弾だろうか。10を超えてからは数えていない。身体のうちここに生まれた内出血、不全骨折、骨折。だが、痛みはないのだ。多少身体が動かしにくいな、と思う程度。危惧した通り痛覚が正常に働いていない。シツテムの箱に映る彼のバイタルデータはほぼ全箇所が危険域に突入している。

右上に映る2:56:44という数字は生存限界時間。仮に何も手を打たないままであれば、この数字が0になった瞬間に彼の命は消え去るだろう。時間内にアロナは目覚めるだろうが、目覚めたからといって状況が劇的に好転する訳ではない。精々、死ぬまでの時間が少し伸びたり、死にたての状態が長く維持される程度。結局の所、この3時間弱という時間で全てに決着を付けなければならない事には変わりなかった。

……一応、この時間内に適切な処置を施すことができれば生存できる。だが、その適切な処置が可能な装置はシャーレの医務室にしかない上に、一度入ったら確実に1日は出て来れない。故にシステムの箱による生命維持、その場凌ぎにしかならない薬剤投与、それらを総動員してもどうにもならない部分は馬鹿の一つ覚えのように気合と根性で補っていたのだが……それにも限界はある。否、元より限界なんて何度も踏み超えていたのだ。何の神秘も特別も持たぬ、ただの人の身で。

きつかけは、たった一つの銃弾で充分だった。

「……っあ」

右足が弾かれたような感覚を覚えた途端、足元が不確かになった。意識が遠のくような感覚はない。墮ち逝く視界は酷くクリアだ。頭も冴えている。飴細工のように伸びる視界、近づく地面。受け身を取らなければ、そう思っても体はピクリとも動いてくれない。このままでは少し拙いな——なんて他人事のように現実を受け入れていたら、襲ってきたのは随分と柔らかい感触だった。暖かくて、優しく。真白いカーテンに被さったような視界の潰れ方。心当たりは1つしかなかった。

崩れる先生を抱き留めたノアは表情を透明にして、トリガーを引く。先生には見せられませんが、と自嘲する程にその顔は普段のノアからかけ離れていた。怒りと憎悪に塗り潰されて尚、その身に余る殺意によって透明な色彩を保つ顔。自分の大切な誰かを傷つけた相手にしか見せないノアの側面。ドローン越しとはいえ、その瞳に昏く澱

む確かな殺意を見たりオは少しだけ背筋が冷たくなった。

そのまま彼女は先生を抱えてエリドゥを駆け抜ける。追い続けるドローンの相手は最低限。動ける人間が自分一人しかいない今、優先すべきは安全の確保だ。間違っても敵の排除ではない。

それに、ノアもトキとの戦闘や先ほどのドローンの銃撃により少ないダメージを負っている。先生を背負いながら長距離移動することが難しいほどにまで体力を損耗してしまっているため、敵の相手なんてしたくはなかった。

そうして一先ず安全な場所……隔壁に3方向を閉ざされた袋小路へノアは辿り着いた。誘導された、とは思う。だが、その誘導に乗らなければならぬほど切羽詰まっていたのだ。兎にも角にも戦力が絶望的に足りない。先生は重傷、ノアも傷だらけ。秒刻みで状況はどんどん悪くなる。せめてあと一人、腕が立つ人が欲しい……それが彼女の本音であった。だが、ないものねだりをして仕方がない。今ある手札で勝負するしかないのだ。

——彼には悪いが降伏も視野に入れなければならない。内心、ノアはそう思う。

勿論アリスも大切だ。助けてあげたいとは強く思っている。しかし、彼の事はノアしか守れないのだ。多くの人が助けに向かっているアリスとは異なって。最優先なのは彼の命。ノアはこんな場所で彼を死なす為に彼を連れて来たのではない。

「ノア……」

けほ、と小さく咳をする。掠れた音と共に少量の血が零れて、ノアの白い制服を赤く濡らした。だらんと垂れ下がる右腕。服は血と硝煙、煤で汚れ、何かの破片で切り裂かれたような破れがあちこちにみられる。露出している手首から下は青褪めているが、弾が当たった箇所は内出血で痛々しく彩られている。指先は黒ずみ、壊死の前兆が見えた。その傷を見てノアの心が更に降伏へと傾く。

——もう、いいじゃないか。彼は頑張った。充分すぎるほど頑張った。だから休んでも……。

そう思ったノアの心を見透かしたように彼は彼女の手を優しく振

り解く。まだ、もう少し。こんな所で諦めたくないから。己の何を犠牲にしても彼女達を守り抜きたいから。

「まだ、動ける……い！」

ノアを安心させるように、己自身を鼓舞するように彼は呟く。ぽたぽたと垂れる脂汗を血で汚れた裾で乱暴に拭い、赫く濁る蒼の双眸を鋭くする。彼は視線を動かし、弾丸により撃ち抜かれた右足の外果部を見た。きちんと繋がっているが、弾丸が貫通していない。恐らくは骨に当たっているのだろう。本来は鉛の毒性も考慮して早めに摘出した方が良いのだが、今は時間が惜しい。進む事を優先しなければ。

「……切り抜けよう」

例え死に体となっても神算鬼謀と呼ばれた先生の戦術眼に曇りはない。リオのこれからの動きも、その狙いも全て見え透いている。故に彼は後出しじゃんけんをするように最適解を返し続け、リオの策を食い破らんと頭脳を駆動させた。そして、彼に応えるようにノアも動く。彼の生命維持機能を切った事で生まれたリソースにより齎された数多の強化に身を任せて。

ノアが背を向けたと同時に、彼は崩れ落ちるように倒れ込んだ。音は出さない。彼女に気付かれてしまうから。そのまま彼は這いずるように移動し、壁に背を預けてからゆっくりと上体を起こす。身体が動かしにくい。感覚も分厚い膜を隔てたように不鮮明で鈍くて、痛みを感じないのも厄介だ。

だが、好都合なのもまた事実。傷の状態から痛みの総量は大体推測できる。仮に痛覚が極めて正常に機能していた場合、この体の状態では真面に動けなかっただろうから。

彼は内ポケットに隠していた劇物を取り出した。それは、彼ですら使用を僅かに躊躇う禁じ手の中の禁じ手。

その効能は様々であるが簡単に言えば過剰再生を意図的に引き起こす化合物だった。例えるならパソコンの再起動ボタンとクリーンアップを複合させたもの。

投与した時点で脳死さえしていなければどんな状態でも立ち上がることができる可能性を孕む、世が世なら死者蘇生の薬として持て囃

される薬剤だが、当然の如くデメリットは存在する。

まず、撃ち込んだ時点で確定で拒絶反応が現れるのだ。運が悪いと此処で死に至る。それを乗り越えても様々な副反応、後遺症等が全身を襲い、服用後は肉袋同然になる確率がある死の具現化。彼の覚悟の現れ。

それを、彼は目を瞑りながら投与した。

「――」
まだアリスと話していない。ケイと会っていない。それなのに、こんな場所で止まる訳にはいかないのだ。

だから、前へ。前へ。前へ。アリスの為に。ケイの為に。リオの為に。自分以外の誰かの為に。生徒の為に。

己にはまだ成さねばならない事があるのだと、他でもない自分自身に言い聞かせるように。故に足を止めるのは今ではない。死ぬのも止まるのも、悲願が成就したその後だ。

自分の為ではなく誰かの為に燃える決意こそ無限の泉。故に彼は当たり前のように限界を踏み潰し、果て無き未来を誰かに齎さんがため一步、また一步と前へ進む。

さあ――滅亡へ。

「――ア」

身体の震えが止まらない。冷や汗が止まらない。心臓が捻転したような感覚。息を吸っても血の味しかない。酸素が上手く取り込めない。

――元から死体同然の体。激しい運動。切っていた生命維持機能。セクション2つと基幹システムをハッキングした際の莫大な負荷。ノアへのサポートへ割っていたリソース。トキから受けた攻撃。離れていたネルへの援護と、ビルのハッキング。晒された数多の非殺傷弾丸。9mmの弾丸。

これだけの無茶を重ねた結果、彼の体の内側は目も当てられない程にボロボロになっていた。再生できる範疇にない数多の傷は着実に彼を蝕み、暗い奔流となって命の灯を消さんと猛っており、そんな状況下で投下された止めの薬は確かに彼の心臓に手を掛けた。

だが、それでも。

「まだ、だ……！」

死ぬのは今ではない。未だやり残した未練がある今、死ぬわけにはいかぬのだと人の身でありながら不遜にも叫ぶ。多くの命を取り零し、多くの世界を見殺しにした己にも成さねばならない事があるのだから。

「もうちよつとだけ頑張れよ、私の体……！」

生命として当たり前に備わっている限界を再び1つ踏み越えた彼は、獯猛に笑って前を見る。白くて、華奢で、争い事とは無縁そうな少女。

——彼女を争いに駆り立てたのは、私だ。

なんて罪深いのだろう。なんて愚かなんだろう。己に怒りが募るばかりだ。

だけど、まだやれる事があるから懺悔も裁きも後だ。彼は血の味にする唾を呑み込み——来てくれていた2人の少女の名前を叫んだ。

「ユウカ！ コユキ！」

「分かっています！ コユキ、カバーは任せたわよ！」

「にはは！ 行きますよー！」

2丁のSMG、ロジックアンドリーズン。圧倒的な弾幕がノアの眼前を横切ったと思ったら、ドローンが次々に沈黙する。合間合間に投げ込まれる爆弾の種類は多種多様で、ある時は銃弾をまき散らしたり、ある時はEMPだったり、爆炎だったり。それ以外にも様々なものが射撃で仕留め損ねたドローンへ向けて的確に投下され、その絶対数を減らしていく。

あつという間にドローンを8割以上片付けたユウカとコユキは静かに彼等の元へとやって来た。

先生は壁に背を預けて、力なく笑い。ノアは驚きの混じった表情で親友と後輩を見た。まさか来るとは思っていなかったのだろう。彼女にしては珍しく『何故』という驚愕と疑問が明確に見て取れる。

ユウカは様々な感情が渦巻く瞳でボロボロの彼等を見る。その中

には怒りや心配が、再会の喜びがあった。

……言いたいことは、色々であった。聞きたいことは色々あった。こんな場所で何をしているのかとか、体は大丈夫なのかとか。しかし、彼女はその全てを一旦飲み干して。

「……まずはドローンを片付けるのが先ね」

ユウカはシールドを全員に付与して、銃口をドローン達に突き付ける。そして、信頼に満ちた瞳でノアを流し見て。

「さあ、蹴散らしましょう、ノア」

「……ふふつ。そうですね、ユウカちゃん」

その信頼に応えるように、ノアは久しぶりに笑った。



リオが喉けたドローンの残党は早々に片付けられた。爆弾による広範囲殲滅が可能なコユキ。2丁のSMGという継戦力と制圧力の双方を高水準で兼ね備え、更にはシールドという防御に秀でた能力を持つユウカ。ノアが望んだ人手、それも今この状況で最も欲しかったと言えるような戦力達の到来は本当にありがたかった。

これによりノアは正面戦闘ではなく、本領とも言える援護の方に回ることができたのだ。手数は少ないながらも的確なサポートが持ち味のノアは正面切って暴れるユウカと爆弾で戦場を掻き乱すコユキの援護をして戦場を掌握。それに先生の指揮が加わればドローンの程度に後れを取る訳が無かった。

「……これで一区切りね」

空になった弾倉マガジンを地面に落とし、ユウカは一息吐いた。戦闘が終了するや否や、どつと疲れが押し寄せて来る。元々はユウカ一人に展開するものであったシールドを複数人纏めて展開していたのだ。損耗は必然であろう。

しかし、彼等と合流するまでドローンの交戦は可能な限り避けていたため余裕はまだある。弾薬のストックは潤沢で、体力的にも集中力的にも大丈夫だ。先に限界が訪れるのは——どう見ても、彼ら2

人だった。

「……なんで何も言ってくれなかったの？」

ユウカは壁に背を預けて息を整えるノアの隣に腰掛け、俯きながら問いかける。何故、何も言ってくれなかったのか。事情を話してくれば喜んで協力した。例えば、それが成功率が低い特攻同然の作戦であろうと親友の頼みとあれば銃も命も預けるつもりであった。

それなのに、ノアは何も話さず先生と2人で死地に赴いた。片や死に体で、片や戦闘に長けていない生徒。そんな2人が敵地のド真ん中に赴けばこうなるのは火を見るより明らかだっただろう。もしかしたら先生には何か策があつてアリス救出までの道筋が立っていたのかもしれないが、その体ではいつ限界が来てもおかしくない。アリス救出まで彼が持たない可能性の方がどう考えても高かつた。

合理的に。数理的に。作戦の成功率を高めるならばノアはユウカに声をかけるべきだった。動かせる戦力が多くて困る事は殆どないだろう。隠密行動をするならば大人数は不適切かもしれないが、それでも2人と4人では然程変わらない様にも思える。

——否。それだけではない。確かにそういった合理的な理由もあるが、今のユウカを突き動かしている最大の原動力は合理性なんて何処にもない、人として当たり前の感情だった。

「私はそんなに頼りなかつたの？」

それは、何も話してくれなかつた親友に抱いた寂しさ。相談も何もせず、ノアは彼と2人で完結させて作戦に赴いた。まるで、ユウカがそこに介入する余地はないと言わんばかりに。

ノアと先生は何かを共有しているのだろう。思い出か、或いは秘密か。それはノアの先生に対する言動を見れば否が応でも分かる。彼と接するときのノアは何時にも増して輝いていて……言葉を選ばず言うならば、まるで恋する乙女のようなだった。

別に、そういったものについて詳らかに話せと言うつもりはない。誰にだって言いたくない事、秘密にしたい事の1つや2つはあるだろう。ユウカにだってそういうモノはあるし、先生と共有している特別な秘密もあるにはある。

だが、その辺りは伏せて言ってくればユウカも察して深く踏み込まずに協力した。それなのに、彼女は何も言ってくれず。

大切な人が2人自分の手の届かない遠くへ行ってしまったような感情を彼女は抱いた。

だから、問いかけた。ノアにとってユウカはその程度の重みなのか、と。大事な時に頼りたくはないほど軽い関係性なのか、と。親友だと思っていたのはユウカだけの一方通行の関係なのか。ノアにとって、ユウカとは何か——それが、一番聞きたかった。

だけど、ノアから返ってきたのはユウカにとって予測ができなかった言葉で。

「……ユウカちゃんに、嫌われなくなかったから」

「——えっ？」

ノアの顔を見ない様に俯いていたユウカの配慮は驚愕で消え失せ。眼を点にした彼女は顔を上げてノアを見た。

「先生が戦う事を、止められなかったから。ユウカちゃんに嫌われるって……」

ノアは俯き、暗く沈んだ顔で地面を見つめる。

大好きな親友^{ユウカ}に嫌われたくない——それが、ノアがユウカに話さなかった理由の全てだ。彼女は先生の願いを優先すればユウカが悲しむ事をよく分かっていた。先生もユウカも両方同じくらい大事で、大切に、大好きだ。しかし、2人が違う方を向いているから板挟みになってしまい……その果てに、ノアは片方を裏切ってしまった。

だから、何も言わなかった。何も言えなかった。それが悪手であると分かっている、親友に嫌われるのが怖くて。侵入前、彼に「一緒に怒られましょう」と言ったのも年相応の少女らしい強がりだ。

それに、ユウカだって先生の事を好いていることは分かっている。その好いている人が死地に赴くのをノアが止められなかったともなれば、彼女を嫌う理由としては充分すぎるだろう。

それを聞いてユウカは目をぱちぱちと瞬かせ……それから今日一番大きい溜息を吐いて。

「馬鹿ね、そんな事で嫌う訳ないじゃない」

一度や二度……否、何度裏切られてもユウカがノアを嫌う訳がない。その程度で関係性が変わるような間柄ではないだろう。どんなことがあっても、何が起きてもユウカはノアを親友だと思っっているし、ずっと大好きだ。だから安心して話してほしい、頼ってほしい。酸いも甘いも共有してこそ友人だろう。だから、どうか痛みも辛さも分けてほしい——そんな思いを込めて笑う。

「……ふふっ」

そうすると、ノアも微笑みを返した。ああ、ユウカちゃんはこのいう子だった。こういう子だから自分は好きになって、親友になったのだと——初めて会話をした日、色褪せない宝石の様な出会いを思い返す様にノアは笑った。

立ち上がったユウカはノアに手を差し伸べる。彼女は臆せず、躊躇わずその手を取り立ち上がった。まるで仲直りするように。

そして2人はもう一人の馬鹿……否、彼とノアを同列にしたらノアが可愛そうだ。超弩級の大馬鹿者である彼の元へと行こうとその足を向けた。



ユウカとノアが話している傍ら、先生は1人で弾の摘出を行っている。クラフトチェンバーからリウエルを取り出し、カチャカチャと金属音を鳴らしながら弾を少しずつ摘出する。金属器具が骨に当たる度何とも言えない悪寒が背筋を襲うが、それを何とか飲み下しながら作業を続行。

それにしても厄介な部分に当たったな、と思いながら患部を弄っているとふと横に気配を感じた。

前髪が触れそうになるほど近くに居たのは、酷く心配そうな表情をしたコユキ。彼女の視線は先生の右足と顔を行き来している。

——こんなに酷い怪我を負った人を見たのは生まれて初めてだった。何処を見ても傷だらけで、血だらけ。黒ずんだ指先は震えていて、金属が固い何かに触れる音が鳴るたびに悩ましそうな息を漏ら

している。

コユキはその痛みを少しでも和らげたいと思ったが、できることなんて無くて。だからただ、続けるように、祈るように彼の手を握る事しかできない。自分の体温が冷え切った彼の手を温める事を願って。

「大丈夫だよ。心配かけてごめんね。ただ、摘出に手間取ってるだけさ」

「……私がやりましょうか？」

「ありがとう。でも、こんな事をコユキにやらせる訳にはいかないからね。気持ちだけ受け取るよ」

他人の肉を掻き分け、骨を避けて、弾だけ摘出するのは普通に辛い。それに、器具越しとはいえ肉の感触や骨の硬さは伝わってしまうのだ。普通の人がやればトラウマ間違いなしだろう。だから、気持ちだけ受け取って、作業は自分の手で。心配してくれたその心は本当に嬉しいけれど、これは譲れない。

先生はコユキの指先を一つ一つ優しく解いて、また作業に戻る。先ほどある程度引つ張り出せたため、後は最後の一押しだけ。今まで何度も銃で撃ち抜かれた。貫通するときもあれば、今回のように弾が残る事もある。そして、残った時は基本的に自身の手で摘出してきた。その場に救護騎士団や救急医学部の生徒が居る場合は彼女達がやってくれるが、そんなタイミンが良く医療に秀でた誰かが居る事は少ない。尤も、呼べば来るセリナを例外とすれば、だが。

「——ふう……ッ」

カランと手から器具が滑り落ちた。その先端には少し先が潰れた鉛玉が挟まっついていて、肉片やら骨片やら血で汚れている。そして、摘出した傷口からは堰を切ったように血が流れ始めた。彼は動じることなく傷口に布を押し当て血をふき取り、細胞活性化剤を投与。その後、パッチを張り付け包帯を巻いて足の感触を確かめる。弾が除去された事により異物感こそ無くなったが、それでも動かしくにくい事には変わらない。神経系もイカれたのか、と頭の片隅で思考。シツテムの箱に映る活動限界時間は少し伸びていて、バイタルも少しずつであるが改善方向に向かっている。決して正常域には行かないが、これ以上

何かしらの傷を負わなければ警告域イェローまでは持ち直してくれるだろう。

——これで、まだ頑張れる。

そう思い、彼は立ち上がる。最初の方こそふらついていたが、しっかりと己の足で立ち、憂いを帯びた表情で空を見上げた。

そして——彼は真つ直ぐと、ユウカを見つめた。ノアとの話が終わった後なのだろう。2人の間にあった蟠りは綺麗さっぱり消え去っていて、また2人はさらに絆を深められたことが見て取れる。

ノアはきちんとユウカと向き合った。なら今度は己の番だ。

「——先生」

「ユウカ……つと」

先生の体に軽い衝撃が襲って、視界の隅で深い青の髪が躍る。背中に回された腕の感触、掌から伝わる命の温度が暖かくて。

「心配、したんですから」

「……うん」

「言いたいことは、色々あります」

「……全部、ちゃんと聞くよ」

ユウカの怒りも、心配も、悲しみも、喜びも。彼女が伝えたいことは何だつて受け止める。それらを十把一絡げに捌けるほど要領は良くないから、鈍重な歩みになってしまいうだろうが、それでもいい。彼女の大切な思いを流れ作業のように処理するなんてできないし、したいとも思わない。

「手、回してください。私だけが抱き着くなんて不平等です」

「……?」

所在無さそうに垂れていた腕を持ち上げ、彼女の服に血が付着しない様にそつと背中に回した彼であったが、ユウカは不満であったように。

「もつと強くです」

「いや、でも……」

「今更服が汚れても気にしません。だから、お願いします」

その言葉で吹っ切れたのか、彼も少しだけ力を入れてユウカを抱き留めた。元から近かった距離が近づき、遂に0になる。

「これでどう?」

「……及第点、って所です」

「手厳しいね」

厳しい評価を下したユウカであるが、その表情はおおよそ他人に見せられない程には緩みまくっていた。ノアに見られれば暫く弄られる事間違いないだろう。尤も、彼の体に顔を押し付けているため他人からは見えないのだが。

ユウカも満足したのか彼から距離を取る。とは言っても、0だった距離がつま先が触れ合う距離になっただけであるため、依然として近いままであるが。

「……今はこれ位で勘弁してあげます」

「今は、なんだね」

「当然です。先生にはたーっぷり言いたい事があるので」

「……お手柔らかに」

苦笑いでそういう彼であったが、その願いが聞き入れられることはないだろうとは思っていた。ユウカからは勿論、ノアから……:場合によつてはゲーム開発部等の少女からも怒られる可能性があるだろう。この前のアビドスの件も然り、色々と迷惑を掛けすぎた。埋め合わせはきつちりとしないと。

ノアの方を流し目で見ると、彼女は悪戯っぽくウインクをしてきた。張り詰めた様な余裕のない表情ではなく、ノアらしい優しい顔。それを久し振りに見る事ができて彼の心持ちも少し軽くなる。

彼は踵を返し、隔壁の最奥へと歩を進める。名残惜しいが休憩は終わりだ。身体はある程度休まつたし、隔壁のハッキングも済ませたため最短距離で突入部隊の元へ向かえる。これから先はアリス救出までノンストップで駆け抜けよう。

緩んでいた靴紐を絞めて、手袋を引つ張りフィットさせる。崩れていた服装も整えて、さあ戦場へ———そう思った時に、ユウカから「先生」と声を掛けられて。

「ユウカ?」

疑問符を浮べる彼に対して告げるのは、これだけは伝えたかった言

葉。怒りも不満も色々あるけれど、それらの感情はこれを前にしたら
全て些事に等しい。

彼女は大輪の花のような表情を浮かべて――。

「無事でよかったです」

また会えて。また話せて。また名前を呼んでくれて。また触れ合
えて。本当に、本当に嬉しかった。彼が生きていてくれて本当に嬉し
かった。

それが、何よりも彼に伝えたかったユウカの祈り。

零の先

リオが考案しトキに任せたC&Cの二分。これによりC&Cの盤面に与える影響力を最小化し、最高戦力たるネルはトキが直々に封殺する。残りのC&Cのメンバーはエリドウの機構を用いて足止めし、ネルとの合流も突入部隊との合流も防止。

そうすれば残るのはゲーム開発部、エンジニア部、ヴェリタスというお世辞にも戦闘行動に長けているとは言えない集団だけ。無論、エンジニア部とヴェリタスは一芸に秀でているがエリドウをどうにかできる程ではない。

先生の復帰こそ予想外だったものの、彼が戦力として頼るのは親交があつたセミナーである事は想定内。ユウカも、ノアも、コユキも盤面を破壊し前提を覆す特異点にはなり得ない。そして、先生も決して万全とは言えない状態であるため、封じるのは可能であつた。

如何にもリオらしい手腕。遊びも油断も慢心も皆無。病的と言えるまでに完璧を求めた合理性。全体主義と功利主義の煮凝りの様な彼女は、事が此処に至つてもまだ盤面を詰めようとしていた。

まず、最優先で潰しに掛かつたのは先生。トキは動かせない、アバングヤルド君は突入部隊に宛てている。となると、彼女が動かせる戦力はドローン程度しかないのだが——それは過去の話。

先生の敗因は時間を掛けすぎてしまった事だ。

「……本当に、手強かつたわ」

ああ、認めよう。こと戦術、戦略、指揮に限れば彼はキヴォトス最強だ。単体で盤面に及ぼす影響力が尋常ではない。攻撃力は皆無だが、戦場の頭脳に求められる防御力と生存能力はきつちりと確保されているのも高評価だ。仮にイーブンな条件であつたなら確実に敗北を喫しているだろう。だが、これはお互いにプレイを称えるフェアな試合ではない。互いの目的と意地を掛けた戦争だ。そこにリオの勝機がある。

サブモニターに映された各種のパラメータ。アバングヤルド君には及ばないが、それでも彼とセミナー3名を叩き潰すには過剰とも

言えるスペック。アバンギャルド君の予備パーツ、その他ドローンの機器を掻き集め作られた機体の名は――。

「アバンギャルド君・レプリカ、発進」

単体でゲーム開発部を含む少女達を圧倒できる戦闘兵器が先生達のいるセクション目掛けて飛び出した。



最初に気付いたのは、シツテムの箱から周囲の詳細データを拾っている先生だった。ドローンとは比べ物にならない程のエネルギー反応。どんな動力を使えばこんな馬鹿げた出力を実現できるのか疑問になるほどのスピード。この系統の反応に心当たりはあるが……当のアバンギャルド君はゲーム開発部達と交戦中だ。

しかし――思い至った可能性がある。それは、リオの抵抗の少なさだ。彼への妨害の大半をセクションや中央タワーのAIに任せ、直々に手を下したと言えるのがトキ襲撃しかない。妨害手数を減らした理由がリソースの温存であるならば……。

「流石だね、リオ」

全てはこのためだろう。彼女は喉けたトキが突破される可能性すら考慮に入れて、作戦を立てていた事になる。今ある手札で無理ならば増やせばいい……力押しにも程がある方法だが、非常に合理的だ。此処は彼女のホームグラウンド、望むものは大抵は持ってこれるし取捨選択も自由自在だ。ドローンの工場を停止させて、アバンギャルド君擬きの組み立てに舵を切らせるのだからお手の物だろう。

復旧前の本調子ではないシツテムの箱、維持できて残り5分の生徒との接続、生命維持機能と引き換えになる各種強化、クラフトチェンバー内にある物資、大人のカード。それが今持ち得る彼の手札の全てだ。

ノア、ユウカ、コユキ……頼もしいは生徒達は居るが、彼女達だけでアバンギャルド君擬きを相手にするのは流石に荷が重い。

故に――ここは彼も腹を括るべきだろう。

彼がこの場面を突破する方法を考えている間にも、アバンギャルド君擬きは近づいてくる。彼我の距離は約10km。あの機体の足ならば到着まで10分弱だろう。その地点で、彼は足を止めた。

「リオが新しい戦力を投じた。狙いは私達だ。この場で迎え撃とう」彼の唐突とも言える言葉に生徒達は驚きながらも確りと頷いてくれた。本当に、自分には勿体無いくらいに眩しい生徒達だ。つくづくそう思う。

彼はタブレットを操作し全員のスマホにスキャンして得た情報を送信する。機体名や各種武装、システム、スペック、外見。それらが事細かに記されたデータを見たコユキは開口一番。

「にははー、なんですかこのダサイデザイン！」

と、爆笑しながらスマホを眺めていた。アバンギャルド君の意志を確かに引き継ぐ黄金比の盾と如何にもな頭部ユニット。でかかど印刷されたミレニアムのロゴ、肩のマーキングには『Mr・Avant garde—replika』と印字されている。本物のアバンギャルド君に負けず劣らず、この機体もリオの美的センスが全面的に押し出された非常に前衛的なデザインになっていた。

「人の美的センスはそれぞれだから、ね？」

「でも、これをダサいって思うのは万人共通だと思えますよ？」

苦笑いしながら先生がフォローしても、切れ味の鋭い言葉でばつさりとは断するコユキ。彼女は3Dのアバンギャルド君・レプリカをくるくる回しながら『全方位どっから見てもダサイのは逆に凄いのでは？』と、リオが聞いたら拗ねそうな事を思い浮かべている。

「……デザインは一旦置いておこうか」

「あ、先生が話を逸らした。実は先生もダサいって思ってるんじゃないですか？」

「ノーコメントで」

「それは駄目ですよー！」

作戦会議特有の緊迫した空気感は遥か彼方に消え去った。先ほどから息を吐く暇もなく、コユキの表情も雰囲気も張り詰めてばかりであったのだが……それが今は緩んで、彼女のありのまま表に出てい

る。甘えたい、じゃれ合いたい……15歳の少女性。先生としても、彼女がこうして甘えてくれるのはとても嬉しかった。だからついっい彼も沢山甘やかしてしまふのだが……それをあまり面白く思わない生徒が1人。

「コユキ、先生が困ってるでしょ」

「え、そんな事ないですって!」

コユキは「にはは!」といったものように笑いながら彼に近づき……少しだけ不安が滲んだ表情で彼を見上げて。

「迷惑じゃない……です、よね?」

「全然。だから、コユキはありのままが良いよ」

コユキの心の片隅を埋めていた不安を取り除く様に彼が強く否定すると、僅かに翳っていた彼女の表情は向日葵を思わせる大輪の笑顔に変わる。先生が一番好きなコユキの表情、それを見た彼は少しだけ表情を頬転ばせて何時もの癖で手を伸ばしたが……中途半端な段階で彼は下ろす。いくら手袋をしているとはいえ、血に塗れ壊死しかけている穢れた手で綺麗な彼女に触れたくはなかった。

「……?」

コユキはそんな不可解とも言える彼の行動に疑問符を浮べるが……手を気にする彼を見て合点がいく。確かに、彼を含めたこの場のメンバーは戦闘行動を何度も繰り返しているため、決して衛生面が完璧とは言えない。汗も掻いているし、硝煙やら何やらで汚れている。だから、また今度——そう笑って手を完全に下した彼の意に反するように彼女は更に一步彼に近づいた。

帰ったら長時間のバスタイムが確定しているこの状況、幾ら汚れても同じだとコユキは笑って頭を差し出す。まるで、『汚れているのは貴方だけではない』と言うように。

流石に彼もこんな風に切り返されると思わなかったのか苦笑いを浮べる。『どうしようか』なんて思いながらも、信頼がくすぐったくて苦笑いは直ぐに優しい笑みに変質。そして、コユキの『撫でないんですか?』と言わんばかりの上目遣いが最後の一押しになって……彼は手袋を新しいものに交換した後、彼女の頭に触れた。

気持ちよさそうに目を細めるコユキと、彼女を愛に満ちた眼差しで見つめる彼。まるで何時もの日常……セミナー室に戻ったような光景の前にユウカは少しだけ安堵を覚えると共に、どうしようもない部分はずきりと痛んだ。どうして、この当たり前前の毎日が続かなかったのだろうか——と。

ユウカとノア、コユキ……偶に来るリオと先生、可愛い後輩であるゲーム開発部。扉を開ければ暖かく出迎えてくれる誰かが居て、共に笑い合える誰かが居てくれる。過ぎ行く日々が美しくて名残惜しく思っても、次の一瞬が待ち遠しくて『また明日』という言葉が福音にも思えた。

——それなのに、どうしてこうなってしまったのだろうか。ユウカにはそれが分からなかった。

あの日々では駄目だったのか。あのまま続くことが罪だったのか。アリスが幸せでは駄目なのか。どうしても殺すしかないのか。より良い未来の為という大義さえあれば、今ある幸福を踏み付けても許されるのか。

誰もが生きたくて。幸せになりたくて。生きていいと誰かに叫んでほしくて。誰かに生きてほしくて。

日常を望んだ。青春を望んだ。今日よりも少しだけ幸せな明日が欲しかった。

——それは罪なのか？ そんなものは幻想だと、世界の残酷さを前に平穏を望む心は磨り潰されるしかないのか？ それは違うだろう。世界は残酷なだけではない。それはあくまで世界の一面だ。確かに悪意はある。闇はある。だが、それと同じくらい……否、それ以上の善意と光を人間という知生体は積み重ねてきたのだ。それなのに暗い部分だけを取り出して、真実を知ったような顔をするのは間違っている。少なくともユウカの知る世界はアリスの生存すら許せないような狭い場所ではない。

だって、こんなにも——暖かい美しいのだから。

思わず頬が綻んでしまう、日常の象徴のような一幕。此処がセミナーの執務室であったなら咎める事はなかったが、生憎と今はエリ

ドウで戦場のド真ん中なのだ。だからユウカは一回軽く咳払いして。

「……あまりコユキを甘やかさないでくださいね」

「善処するよ」

ジト目で苦言を呈すると、彼はあまり反省が見えない顔で笑う。確かに懲りていないし、止めるつもりもないだろう。甘やかすすぎとは思うが、コユキの無邪気な顔を見ると怒る気になれなくなるのもまた事実で。

『いつもこうなら可愛い後輩なのに』と、彼女の問題行動の数々を知るユウカは溜息を吐いた。すると、ノアは何を勘違いしたのか「ふふつ」と擦ったように笑いながら。

「ユウカちゃんも混ざったらどうですか？」

「ちよつ……！ ノア、何言ってるの!?!」

「えく、今更恥ずかしがるんですか？ さつきもつと大胆な事しましたよね？」

アレを掘り返されるとは思っていなかったのか、指摘されたユウカの顔が茜色を折りて、気恥ずかしさから何時もの癖が発露しそうになるが、彼女はぐつと我慢した。コユキの言っていること……彼女達の前で彼と抱擁を交わしたのは厳然たる事実であるし、何よりこれ以上彼に自身の可愛くない部分を見せたくはなかった。彼ならばあの日のように『ユウカは可愛いよ』なんて平然とした顔で口説いてくるだろうが、これは自分の女の子としてのプライド。いつだって可愛い自分を見てもらいたいのが乙女心、それが気になる人なら猶更だ。

せり上がる言葉を嚙下して、空を見上げる。赫々とした明かりに照らされる夜の街、遠くからは戦闘音が聞こえる。誰かが頑張っている、抗っている。ならば、此方も頑張るしかないだろう。共にアリスを助けると誓ったのだ。それを違えることは許されない。

決意を新たにしたユウカは手で両頬を軽く叩いて気合を入れる。それを見て先生もコユキに「続きはまた今度ね」と言って、もう一度頭を撫でてから纏う空気を変質させる。意識の切り替え、或いは世界の切り替え。相変わらず戦闘者としての顔は似合わないな、なんて思いながらユウカは銃を取り出した。

相手はリオのとおっておきのレプリカ。端末には質の悪い冗談かと笑い飛ばしたくなるような、単純明快な数値化された暴力的なスペックがずらりと羅列されている。出し惜しみができる相手ではない。最初から全力全開で挑まなければならぬだろう——そう思った刹那、甲高い衝突音が聞こえた。

「随分良い目と装備を持つてるね。この距離でも私達を正確に狙えるのか」

呟いた彼はいつの間にか展開していた局所的なシールドを4人全員を覆うドーム形に展開。次の瞬間、ミサイルの雨霰が降り注いだ。狂い咲く赤の爆炎が視界を埋め尽くし、地面が振動する。ユウカとノア、コユキは自身の銃をCIWS代わりにしてミサイルの迎撃を行い、先生は少しでも彼女達の負担が少なくなるようにデコイを散布し狙いを分散させる。

先の攻撃——4 km以上離れた此方を正確に射貫かんとした装備はレールガンだ。トキの装備の試作型をそのまま流用して装備させたのだろう。こういった時に即座に対応しアセンブルできるように予め規格を統一していたリオの生真面目さが伺える。

今更長距離狙撃を脅威だとは思わない。点の攻撃ならシールドの局所展開でどうとでもなる。寧ろ厄介なのは今しがた迎撃しているようなミサイル……物量でゴリ押しする面攻撃だ。展開を持続させるのはこの体では少々しんどい。故に最優先で狙うべきは右肩にマウントされている垂直ミサイルユニットだろう。

それ以外の装備はアサルトライフル、レールガンと防御面で困難な武装はない。相手の火力には対処可能、であれば残りの懸念点は——相手の防衛を此方の攻撃が貫けるか否か。

ユウカ、ノアの9 x 19 mmパラベラム弾。ノアはパーツの組み換えで、357 SIG弾、40 S&W弾、45 ACP、10 mmオート弾も使用可能。コユキの7.62 mm NATO弾と各種爆弾。この中での装甲を貫ける可能性が一番高いのはコユキだろうか。

そう思考した彼はクラフトチェンバー内にたつぷりと備蓄されている弾帯を取り出す。コユキの持つ銃……M60E6の連射レート

は分間約500〜650発。これに加えて彼女の爆弾と先生の攻撃強化があれば、装甲の強度を上回れる。

勿論、相手は案山子ではないため素直に弾丸を食らい続けてくれるとは思わない。だが、そこはノアとユウカに足止めしてもらえばどうにかなるだろう。手数は足りないが、質は充分だ。

本物のアバンギャルド君ならば切り札を使わされる死線になる事は確定していたが、予備パーツと有り合わせの部品を使ったレプリカならばこの戦略でも拮抗できる。先生側の消耗も少なくて済むし、生徒側も必要以上に張り詰めなくていい。良い状況、とは口が裂けても言えないが、余裕が少し出てきたのは事実だ。盤面を覆すジョーカーを残したまま先行部隊と合流できるのは僥倖だろう。あのカードは見せ札としての切り札ではなく、ここぞという時にしか存在をオープンにしたくない真正銘のとおき。それを秘匿したままりオの眼前まで肉薄できるのはかなりのアドバンテージだった。

「交戦距離に入るまで一分を切った」

その言葉の正しさを証明するように、更に苛烈に鮮やかに狂い咲く爆炎。耳を劈くような爆音が周囲に轟いているのにも関わらず、静かに発せられた筈の彼の声はとてもよく聞こえた。まるで白一面のキャンパスに生まれた黒点のよう。

狙い澄ましたかの様に放たれる神速のレールガン。ローレンツ力から導き出される絶大な駆動力を持つ弾丸はしかし、権能域に足を踏み入れている彼の物理防御壁に阻まれ少女達に一切の手傷を負わせることはない。仮にこの防御力を突破したいのであれば神の眷属クラスの出力がなければ不可能だ。アバンギャルド君のスペックでは天地がひっくり返っても突破する事は叶わないだろう。

「攻撃は全て私が防ぐ。皆は安心して前に出て。君達には傷一つ負わせないさ」

彼が安心させるように微笑めば少女達も背中を押されたような心地を覚えて、臆することなくしっかりと前を見据える。彼がついているのだ、負ける訳がない———そんな頼もしさを覚えた少女達の前に遂にアバンギャルド君・レプリカが姿を現す。

「——うわあ、やっぱダサ……」

本物と比べると幾分か小型化している。具体的には2mを超えていた本物と比べて、レプリカは自販機と同じくらいの背丈……:180cm程度。だが脚部は相変わらずキャタピラで、腕も2本と減っているが武装の数は本物と据え置き。最大出力こそ劣るがそれ以外は殆ど本物と遜色ない……その極めて独特かつ前衛的な^{アバンギャルド}デザインも。

「その目、光るんだ……」

まさかファイギュアやプラモデルのような発光ギミックが盛り込まれているとは思わなかった彼は赤色に灯るメインカメラを携える機体を見て茫然と呟く。そして、どのような意図があるのかは一切不明であるが、アバンギャルド君・レプリカは頭部自体を回転させ始めた。それは宛ら灯台の閃光レンズのよう。

——これがリオナりの遊び心なのだろうか。確かに絵面的には面白いが……見ていると『何故?』という疑問の方が先行してしまう。何故光るのか。何故回るのか。

「終わったら聞いてみよ」

何もかもが無事に片付いた後の楽しみが1つ増えた先生は、緩んだ思考を引き締めるように戦場を俯瞰した。

コユキは弾帯を使い切る勢いでトリガーを引いている。ライフル等に用いられる弾丸は電磁シールドに阻まれるが、それは織り込み済み。阻まれるならいつそバッテリーを空にするまで防御させればいい。そうすれば煩わしい電磁シールドの事なんて頭に入れなくても済む。

幸い、弾丸のストックなんて山ほどある。こういった時の為に毎日クラフトチェンバーで様々な物資を製造していたのだ。出し惜しみは無し。全力で挑もう。

「こっちよー」

回り込むように走るユウカ。あの機体にCIWSの類が無い事は確認済み。安心して突っ込めるといふもの。障害物を利用し、巧みに距離を詰めんと一切減速せず敵の懐を直指す。

勿論、そんな目立つ行動を取れば当然狙われる。ミサイル、レー

ガン、アサルトライフルが雨霰のように襲い来るが、先生を信頼してノーガード。ユウカの眼前、淡い青色を帯びたシールドの向こう側に攻撃が殺到し視界が悪くなるが——関係ない。ユウカには敵の姿がはつきり見えている。彼との接続で齎される近未来予知を前にすればあらゆる言動が筒抜けだ。それを十全に活かす術を知る彼女は、煙る視界の中でも的確に距離を詰め、銃弾を放ち、そして——

「捉えたわ！」

煙を切り裂く様に飛び出たユウカ、手に持つ二丁の銃が狙う先は右肩にマウントされているミサイルユニット。彼が最も警戒し、彼女自身もつくづく厄介だと思っ面制圧装備。

しかし、ユニットを狙おうにもその外側には電磁シールドがある。ライフル弾の連射にすら耐えられる全く以てふざけた強度の次世代機構をユウカの火力で短時間で突破する事は困難なため、ただバッテリーを削るだけに終わるはずであったのだが……それは、真つ当に銃で弾をばら撒いた場合の想定だ。

「先生、強化をッ！」

「任せて」

瞬間的に倍化されたユウカの身体能力。無論、強化は長続きしない。効果時間内に精々一撃入れるのが関の山という超短期間。だが、それでもユウカの……キヴォトスに住まう生徒の身体能力の2倍だ。加えて、ユウカは飛び出してから一切速度を緩めていない。今の今までトップスピードを維持したままだ。

この一瞬、この一撃に限って言えば——ユウカの攻撃力はネルに迫る勢いであった。

「これでッ！」

展開されている電磁シールドにユウカの銃が突き刺さる。銃を鈍器のように使用するのには少々野蛮であるが、たっぷり乗った加速度と身体能力を最も効率的に活かせる攻撃手段がこれなのだ。故に彼女は一切躊躇わず、更に力を込めて——そして、電磁シールドを突破した。

局所的に空いた風穴に正確に銃を潜り込ませ、後の事なんて一切考えずにトリガーを引く。装甲部分は抜けないが、可動部ならば話は別。ユウカの9mmパラベラム弾でも充分射貫くことができる。

二丁のSMGの弾倉を空にした引き換えにミサイルユニットを支えるアームを銃弾で徹底的に破壊したユウカは、置き土産代わりにコユキから1つ貰った爆弾のピンを抜き投擲。一仕事終えたユウカはサポートに駆け付けたノアと共に一旦距離を取った。

そして、少し距離を離れた直後に爆弾が起爆する。煙が晴れた先には多少装甲が焦げ、電磁シールドの出力が落ちているが依然健在なアバングヤルド君・レプリカ。しかし、ミサイルユニットは丸ごと無くなっていった。恐らく誘爆を恐れてパージしたのだろう。AIらしい的確な判断だ。だからこそ、そこに付け入る隙がある。

コユキが弾帯を付け替え、ユウカとノアも新たなマガジンに変える。電磁シールドの出力が低下した今、ユウカとノアもメイン火力として参戦可能だ。

先生は蒼い眼を薄つすらと開く。宙を映したような、何処までも透き通るような蒼穹。その眼の縁から零れた赤い一筋を誰にもばれない様に拭い——先生は完全に開眼する。

先生の防御に割くりソースが尽きるのが先か、電磁シールド用のバッテリーが尽きるのが先か。

「さあ、あと一押しだ。一緒に頑張ろう」
「了解！」

3人の声が重なると同時に少女達は駆け出した。フォーメーションはコユキをバックに、ユウカを前出してノアをミドルに置く。バランスとそれぞれの得意分野や特性を重視した配置は少女達が最も得意とする戦闘隊形。

それを相手に真っ向から拮抗するあの機械仕掛けの理不尽は、この中で最も火力が高いコユキを潰す選択をする。キャタピラを稼働させ、アサルトライフルをアクティブ。ユウカとノアを無視して一気にコユキまで詰め寄るつもりだったのだろうか——想定が甘い。その行動をノアが見逃すはずがないのだから。

乾いた破裂音が数発響いた後、電磁シールドを貫通しキャタピラの駆動部が的確に射貫かれる。そのままノアはストックを伸ばしSMGのようにしながらユウカにアイコンタクト。その意図を確かに受け取った彼女はノアと完璧にタイミングを合わせ、射撃。足回りを集中的に狙った弾丸はキャタピラを含む下半身を損傷せしめ、機動力を完全に剥奪。これにより相手は回避が不可能となり物理、電磁シールドに頼る他なくなった。

動かない大きな的と化したアバンギャルド君・レプリカに殺到する数多の弾丸。掃射から暫く経てば電磁シールドもバッテリーが底を突き、物理シールドや表面装甲が凹み始めた。確実にダメージは通っている。しかし、相手も中々倒れない。単純に装甲が頑丈過ぎる。一体どんな素材を使って、どういう加工を施せばこの強度が実現できるのか甚だ疑問だ。

この状況で負けはしない。しかし勝つためにはそれなりの労力を支払わなければならないだろう。ここにきてリオの目的が見え始めた。消耗と足止め。端から彼女は迎撃するつもりなんて無かったのだ。ただ時間稼ぎが出来ればそれでいい、と。

ああ、なんて合理的。だからこそ——とても読みやすい。

少女達の射撃を停止させ、万象をすり抜け、先生は前に出る。手に持つのは彼だけが持つ反則、システムの箱。

「あとは私に任せて」

——少女達に夢中になり過ぎて、先生を視界から外していた事。それが決定的な分岐点だった。

優秀なAIだ。これまでの攻防から先生が戦場に及ぼす影響力がそこまで高くないと思っただろう。このメンバーの中で最も非力で、攻撃力も防御力も皆無なのが彼だ。実際にその判断はとても正しい。彼はどこまで行っても弱者であり、単体で何かを壊す力なんて持ちようが無い。

しかし、それは何もできない事を示さないのだ。目の前にいる相手を攻撃して倒すだけが戦闘ではない。少し工夫をすれば自身の得意なフィールドに勝負を持ち込む事だってできる。

彼はそつとボディに手を触れる。今の彼はシツテムの箱と深く繋がっているが故に、その指先で触れるだけでシツテムの内部に入り込む事が可能だ。

「——捉えた」

彼が静かに呟くと、暗く消灯していたシツテムの箱の画面が淡く光り、プログラムコードが高速で流れる。莫大な量のソースコード。リオらしい理路整然とした丁寧な記述はメンテナンス性がとても高いが、それが却って仇となる。単純に見易いのだ。どこをどう書きかえれば、その動きが鈍るのか一目で看破できてしまう程度には。

彼が手を触れ、クラッキングを開始して1秒も経たないうちにメインAIが機能を停止させた。その次に各種火器の制御と駆動系、姿勢制御のプログラムを徹底的に破壊し——。

「アバンギャルド君を真正面から相手するのは少々骨が折れるからね。中から切り崩すのが一番なんだ」

彼がそう言う頃にはメインカメラも消灯しており、完全に沈黙していた。

——ゲーム開発部、エンジニア部、ヴェリタスを追い詰めた機体、そのレプリカ。圧倒的とも呼べる性能を誇るそれを、彼らはたった4人で突破した。



アバンギャルド君・レプリカを突破した4人はビルの裏に隠れて少し息を整えていた。然したる損傷はないとはいえ、戦闘中はずっと気を張っていたのだ。目に見えない部分……集中力や体力は確実に消耗している。ユウカはアリスの事が余程気がかりなのか先に進みたがっていたが、回復も大事な仕事と説得して今は息を整えてもらっている。

先生とて彼女の気持ちは痛いほど分かる。彼も内心はなりふり構わずアリスの元へと駆けつけたい想いで一杯だ。だが、そうも言っていられない事情がある。

「――何をしに来たんだ、お前達は」

ギリ、と先生は奥歯を鳴らす。その表情は生徒には見せられないほどの嚇怒で歪んでいた。エリドウの全てを掌握しているリオですら捕捉できない微量の残滓と出現時間。彼がああ反応を捉えられたのは執念の成した芸当だ。こいつ等だけは絶対に逃がさないと誓った。許せないと叫んだ。

デカゲラマトン 神名十文字よりも数段質が悪いアレは、彼が『敵』と見做し生徒の為に滅ぼさんとした――この星に巢食う悪意なのだから。

先生は思考する。この場にアレが現れた目的を。生徒の殺害……神秘というリソースの回収か。或いは、アリスが目的か。否、何方でも構わない。生徒を害するつもりならば此方も手加減しないというだけだ。

「来るなら来い、潰してやる」

先生は唇の両端を嚙猛に吊り上げ、酷く似合わない攻撃的な薄ら笑いを浮べる。ゲマトリアの出方を窺う必要は無い。一部のメンバーにはやけに気に入られているが彼は神秘を解き明かす数秘術集団に属していないし、その個々の目的にも真つ向から対立している立場だ。キヴォトスや生徒を害さない限り積極的に潰すつもりはないが、今更仲良くしたいとも思っていない。

先生はクラフトチェンバーの制限を解除しテイラーメイドを使用可能にした。加えてワカモヤアビドス対策委員会……彼の生徒達に連絡を入れる。アレが現れた以上、何が起きても不思議ではない。戦力は多いに越したことはないだろう。

そうやって先生が人知れずリオが見据える先の更に向こう側を見ている時、少し離れた場所でユウカとノア、コユキは壁に背を預け息を整えていた。

「明日筋肉痛になりそうね……」

ユウカは電磁シールドをぶち抜くのに使用した左腕をぷらぷらとさせながら呟く。瞬間的とはいえ、身体能力の倍化はそれなりに負荷がかかる。その負荷自体も先生がある程度肩代わりしているが、それでも実際に身体能力が倍になったのは彼女自身であるためフィード

バックは皆無ではなく、明日の筋肉痛を心配する程度の残滓があった。

明日のデスクワークは右腕でやらないと、思ったらノアがくすりと笑って。

「ふふっ、もしもなかったら私がマッサージしてあげますね」

「ありがとう、ノア。そうね……もしかしたらお願いするかも」

親友という鼻肩目なしで見てもノアのマッサージはとても上手い。彼女は『真似事ですすよ』と言っているが、実際の腕前はその道のプロにも及びそうだ。指圧した場所ごとの反応を事細かに記録しているため、1回目よりも2回目、2回目よりも3回目……といった具合に回を重ねる毎にノアの腕前が上がっていく。

尚、このマッサージはユウカと先生専用になっているため2人以外の人にその腕前が露呈する未来の可能性は皆無である。

「ユウカちゃん、コユキちゃん、充分休めましたか？」

「ええ。私は万全よ。コユキは？」

「私もばっちりです！」

2人の回答を受け取ったノアは先生に視線を送る。きっちり2分間休みましたよ、と。それを受け取った先生は緩く微笑んで少女達の元へと歩いて行き……これからやるべき事を説明する。

「此処から直線距離で15km先で大規模な戦闘が起きている。戦っているのはゲーム開発部を筆頭とするメンバー、相手はアバンギャルド君」

「え、あんなダサいのがもう一体いるんですか？」

「ダサいか否かは一旦置いて、私達が戦った個体よりも強い個体がいるのは事実だよ。交戦時間は30分に迫るけど、未だに有効打は与えられてない。そして、これが中央タワーまでの道を塞いでいる」

「これを倒さない限り、アリスちゃんの元へ辿り着くのは難しそうね」
「では、次の目標は……」

彼はノアの言葉に静かに頷いて。

「彼女達の元まで移動して、アバンギャルド君を撃破する……戦闘続きでごめんね」

「大丈夫ですよ、覚悟はしていましたから」

「……甘えてばかりだ、私は」

自嘲する様な声音を一つ紡いで、先生は再び指揮官としての顔に戻る。これから話すのは少女達と合流し、アバンギヤルド君を撃破した
——その後のこと。

「アバンギヤルド君を撃破後は、恐らくC&Cと合流できる。そして、その後……中央タワー前で最後に立ち塞がるのが……」

「飛鳥馬トキ、C&Cの5人目のメンバー……ですよね？」

「その通り。だから、ここから先は余計な消耗を可能な限り避けたい。ドローンとの交戦もなるべく回避しよう……ルートの割り出しは済んでる」

転送されたデータに映る道順は一直線に進むより少々時間がかかる程度の距離感だった。しかし、その道は複雑怪奇。裏道や地下道も巧みに使い、徹底的に攪乱を試みている事がよく分かる。よくこんな道を瞬時に見つけられるものだ、とユウカは思う。

「さて——では、私達も先を急ごう」

チエツクメイト

リオにはずっと自分に言い聞かせてきたことがある。ノブレス・オブリージュ。力ある者の責任。何の偶然か、彼女には優れた能力が備わっていた。理数系に秀でた知性。数理的な観念を伴うものであれば、彼女は基本的に何でもできる。

唯一、数理では解決できない概念……彼女が特異現象と呼称する某は、その能力を信頼している同族にして幼馴染のヒマリに任せている。化かし合いや頭脳戦はリオとヒマリ、直接的な暴力や強い個人が必要な場合は最強戦力のC&C、数が必要な場合は最新鋭の兵器群やドローン達。総じて、盤石とも呼べる体制だった。

それが崩れ始めたのはいつ頃だろうか。ヒマリの手を振り払ったときか。先生の手を掴めなかったときか。アリスがミレニウムに来たときだろうか。それとも——自分がセミナーの会長に就任したときか。

きつかけがどうであれ、盤石に見えた体制が崩壊しつつある事実に変りはない。こうしてミレニアムの先を担う貴重な人材が内紛にも近い形で衝突しているのだから。世界はより善くあるべきと考えた者、その秩序を暴虐と糾弾する者。誰かが流す涙を拭きたい者。様々な思惑はエリドウという場所で交錯し、一つの大きなターニングポイントを生んだ。

衝突する武力と意志。より多くの幸福を齎したい者と、その下敷きになる少女の未来を想う者。何が正しいのか、何が正しくないのか。多分、何方も正しくて、何方も間違っている。事態はコインの裏表のように明瞭ではない。物の見方は様々だ。誰かの正義は誰かの悪であり、逆もまた然り。

「……」

リオは無言でモニターを眺める。

先生、ユウカ、ノア、コユキの3名が突入部隊の元へと駆けつけている様子。

突入部隊がアバンギャルド君を相手にしている様子。

トキとネルがセクションを破壊しながら徐々に中央タワーへ向かっている様子。

アスナ、アカネ、カリンの3名がドローンを蹴散らしている様子。ヒマリが天井を眺めながらもの思いに耽っている様子。

滅びを予期した。終わりを知った。それを覆したいと希い、手を尽くした。誰かを守りたいと思った。愛した場所を救いたいと思った。その為なら何だってした。

過程に心を痛める事はもうやめた。意味のないifを夢想するのもやめた。取り零したものを数えず、ただ前を見続けた。轢殺した過去に報いるために、望むものの為に全てを捧げると決意した。その決意だけがリオの全てだった。それしかなかった。

世界の未来を守りたい——そう思った幼き日の自分に胸を張れるような足跡にしたかった。

「——」
だが、今はどうだろうか。本当に胸を張れるのか。大勢の為にアリスを殺す選択を見て——あの日の自分は『それなら仕方ない』と納得してくれるのか。いや、きつとしない。『何故だ』と必ず糾弾するだろう。

世界の都合に磨り潰される誰かを救いたくて、誰もが『どうしようもない』と諦めるような悲劇を覆したくて幼き日の自分は力を求めたのだから。それなのに、望んだ力を手に入れることができた未来の己がそういった悲劇を生み出す立場に成り下がっているともなれば……百度殺しても飽き足らぬほど失望するだろう。

しかし、リオはその失望も怒りも全て飲み下してしまった。これが大人になることだと納得して。夢を捨てた訳ではないけれど、より現実的に、実現可能な範囲に落とし込んだ。つまり、誰かの犠牲を容認したという事。彼女が描いた願いの領域から溢れた誰かをそのまま切り捨ててる事を選択した。

幼き日の誓いを最悪の形で裏切り。

誰も理解せず、誰にも理解されず。

強迫観念にも似た何かに突き動かされながら、1つの命を終わらせ

る。

世界の為だから、未来の為だから、誰かの幸福の為だから。

誰かを救えないのは仕方ない。誰かをどん底に突き落とすのも仕方ない。より多くの人が生きて、幸せになるためだから。今は泣き言を言っている場合ではない。泣き顔を見られない様に手で顔を覆ってしまえばいい。大丈夫、この先にはきつとより善い明日が待っている。

そうやって言い聞かせて、心を透明にして、今の善悪を考えない様に目と耳を塞いで——その次は？

誰も救えないのは仕方ないと、悲劇の増加にも目を瞑るのか？ 1000人の為に999人を殺すのか？ そして、1001人の為に救ったはずの1000人も殺すのか？ 何のために？

——ブレるな。

大勢の為に少数の犠牲を強いたのは別にリオが初めてじゃない。歴史を紐解けば類例なんて星の数ほど発掘できるだろう。そうでなければ、『最大多数の最大幸福』なんて詭弁染みた言葉は生まれえない人間には限界がある。生存には犠牲が付き物だ。何も消費しないまま、何も踏みつけないまま生きる命はない。いつの時代だって、誰だって、人間は自分以外の誰かに犠牲を強いてきた。だから、今回も同じこと。

誰も犠牲にしないならそれに越した事はない。だが、そんな事は神様にだって無理だ。間引きのように地表を薙ぎ払い、救うのは自分を信仰する一部だけ。上も下も、全部纏めて——なんて綺麗事は誰も残さなかった。嫌いな誰かが自分と同じように救われるのが気に食わなくて仕方ない……何て身勝手な獣性だろう。

だが、リオはそういつた不完全さも含めて世界と人を愛した。未だ欠点は多くあるけれど、人間の知恵と善性ならば進化の果てに不条理を乗り越えられると信じている。

いつか遠い日、楽園で花を咲かせる皆の為に——ブレるな。役目を果たせ。その生き方を選んだのは自分だ。多くのものを犠牲にしてきて、今更止まる事などできる訳がない。生み出した悲劇に報

いるためにも光を齎さなければ。悲劇は決して無駄ではなかったと証明しなければ。

そうでなければ——アリスの涙は何処に行けばいい？

これは自分との闘いだ。幼き日の誓いを裏切れるか……世界を生かすためのシステムとして自身を完成させることができるか否かを問う戦い。悪も善も、正も誤も無い。それらは全て混ざり合って久しい。ただ、大義の元にアリスを縊る事ができればそれでいい。それでいい筈だ。そうすれば世界は寿命を延ばせる。

それなのに——どうして、迷う必要がある？

先生の言葉がずっと頭の奥でノイズみたいに響いている。彼はアリスの犠牲もリオの犠牲も認めないと言った。リオが成そうとした事の善悪を問わず、正誤を問わず。その果てを美しいと肯定した上で、リオの犠牲を否定した。リオも皆と同様に当たり前に平穏と愛、幸福を享受すべきだと。

その言葉が、脳裏から離れてくれない。自分の幸福は諦めた。システムとして生きる事を選んだ。人間として当たり前に抱く何かは随分前に心の奥底、誰にも見つからない場所に仕舞い込んだ。それなのに、それなのに。

自分でもどうかと思う。あまりにも今更であるし、都合が良すぎる。この期に及んで誰かと共に居たいなんて願望の芽が生えるなんて——。

「私は、やるべき事をやらないと……」

リオはその疑問と願望を封殺して、思考の隅の檻に追いやる。それらは今考えるべき事ではない、と。今は侵入者の迎撃をしなければならぬ。コンソールを操作し、各種システムを励起。アバンギャルド君のシステムをAIによるオート操作からマニュアル操作に切り替え、油断なく眼前の脅威を見据える。

その光景を——赤い眼を薄っすらと開けたアリスは見つめる。

『彼もこうして迷ってくればよかったのに』なんて、何処にも行き場がない思考を浮べながら。

▼

A M A Sは全て破壊した。数こそ多かったが、所詮は高性能な唯のドローンでありこれまで何度も退けてきた相手。今更苦戦する訳もない。故に、少女達は早々にフルメンバーでアバンギヤルド君を相手にすることになったのだが……これが途轍もないほど強かった。

生半可な攻撃は頑強な装甲で弾かれ、高火力なものでも内蔵されている強固な電磁シールドと右下腕のシールドに阻まれ痛手を与えられない。

ガトリングガンの圧倒的な制圧力、バズーカ砲の火力。そして、それらをカバーするアサルトライフル。どの距離でも戦えるような装備に隙は見当たらない。2種の銃器の射程距離に入ったら最後蜂の巣にされ、バズーカ砲の距離に入ろうものならビルにすら風穴を空ける過剰火力で以て吹き飛ばされる。

ならば距離を取ろうと思っても圧倒的な速度と、どんな悪路であろうと走破するキヤタピラが合わさり、逆に詰められる始末。

センサーも非常に優秀なものを積んでいるのか、どれだけ隠密を試みようと思っても発見され銃を向けられる。

しかも制御システムはエリドゥと直結。先ほどまでは先生に乗っ取られないように臨時でエリドゥから切り離していたため、行動に僅かな荒があつたが……今は隙なんて見当たらない。

今まで順調だったツケを払わされるように、少女達は絶体絶命のピンチに身を置いていた。

ヒビキは迫撃砲を構える。狙いは当然、道のド真ん中で好き放題暴れ回っているアバンギヤルド君。ゴーグルを下した視界に映る変数。最適な発射をサポートするシステムは正確無比な射撃を実現させる機構。それに最適化されたヒビキの砲撃はアバンギヤルド君を正確に狙い撃ちしたが……しかし、シールドに阻まれる。ウタハが展開したドローンからのミサイルは全てC I W Sで叩き落とされ、一切の手傷を与えられていない。

そして、アバンギヤルド君の攻撃が始まる。モーター音が鳴り響

き、ガトリングの砲身が回転しライフル弾がばら撒かれた。弾丸の掃射を真面に受けたビルの外壁は忽ち穴だらけになり、少女達にも手傷を与える。

ミドリは腕部を霞めたライフル弾の痛みに顔を顰め、遮蔽物から銃だけ出して射撃を行う。あの図体ならば大して狙わなくても当たると踏んだのだろう。そして、その予想通りに直撃コースであったが……螺旋形のふざけたシールドに防がれてしまった。

ならば全員の一齐射撃で———と思っても、相手が手当たり次第に銃を撃ちまくっている所為でタイミングを合わせる事は難しい。

「隠し玉はあると思っていたけど、まさかこれ程とはね……」

「うん、外見からは想像つかない火力……」

「見た目はすっごいダサいのにくっちや強いよ！ どうしよう!?!」

リオが満を持して隠し玉の戦力を投入した。それはつまり盤石な勝算があつての事だろう。トキが最高戦力である事には変わりないが、それを目眩ましにして今の今までアレを隠し通した。全ては、この状況……C&Cがトキに掛かり切りで合流できていない間に突入部隊を全滅させるため。

全てはリオの掌の上。エリドゥ突入作戦の最初から……否、アリスを誘拐したあの時から仕組まれていた罠だった。

時間が掛けられない彼女達を見るからに面倒そうなたキとの交戦を可能な限り避けたいだろう。故に、トキを相手にする部隊とアリスを奪還する実働部隊に分けるとリオは考えた。そして、トキの相手が務まるのはC&Cのみだ。必然的にC&Cとそれ以外……戦闘力が高い部隊と低い部隊に分けられ、高い部隊には望み通りトキをぶつけ、低い部隊にはもう1つの切り札をぶつける。

そして、もしこれを突破されても奥の手が残っているため、リオの勝利は揺ぎ無かった。

彼女達の作戦を浅慮と嘲るつもりはない。あの状況、あの戦力ではこの作戦が最善手だ。リオが仮にエリドゥを攻め落とす立場だったら確実に2面以上の展開を選んでいただろう。限られた手札かつ相手が有利な状況ならば時間を掛けることそのものが悪手だ。勝つな

ら速攻をしかけるしかない。だからこそ———そこまで読めていたというだけ。

そして、リオとて全てが上手く運んだという訳ではなかった。特に先生というイレギュラーには掻き乱されっぱなしで、彼の手により陥落させられたセクションは1つや2つではない。その上、エリドウ全体のメインコンピューターにすら入り込まれたのだ。手を間違えれば……否、手を間違えなくても負けていた場面は幾つか思い至る。

しかし。

先生、ノア、ユウカ、コユキはゲーム開発部の方面に向かっているが距離的に間に合わないはずだ。

ネルはトキと交戦中で、他に手を回せる余裕はない。

C&Cは中央タワーの方面に向かっている。此方も間に合わないし、そもそも増援に来る様子すらない。

ゲーム開発部とエンジニア部はアバンギャルド君に追い詰められ絶体絶命。

思い描いていた帰結とはまた異なるが、それでも———盤面は何とかリオの手中に収まった。

『———貴女達が誰かと合流する事はない。さあ、終わりにしましょう……アバンギャルド君』

誰かの幸福の為に奮戦する、まるで幼き日の自分のような彼女達の姿を視界から消せば、この迷いも消える筈だと……リオは詰将棋に王手を掛けた。

激戦の観測者

音を立てて崩落するビル。耳を擘くような爆音が鼓膜を乱暴に叩き、撒き散らされる細かい破片が宙を舞う。小柄なネルと比較すると倍以上の全長を誇る瓦礫達を、彼女は重力に真つ向から反抗するように蹴り上げる。自由落下の運動をしていた瓦礫は彼女の膂力により細かく碎かれ打ち上がり、滞空しているトキに目掛けて殺到した。

それは宛ら、散弾銃を更に極悪にしたもの。莫大な運動エネルギーが込められたそれに当たれば運が良くても骨折は免れないだろう。

その面攻撃を前にしたトキは——脚部のスラスターを赤熱させ、瓦礫の雨に突っ込む形でネルに向かって加速。自殺行為同然の勝負を捨てたような行動であるが、それは実行者が彼女以外だった場合の話だ。彼女は鮮やかな身の熟しと卓越した姿勢制御で以て瓦礫と瓦礫の隙間を縫うように前進しながら回避。即席の瓦礫の散弾銃はトキに一切の手傷を負わせる事無く彼女の後ろに聳えていたビルの屋上部分を半壊させるだけに留まった。

最速最短で地上のネルに届いた彼女はアームギアのパワーアシストを全開にして右五指を握り締める。それを迎え撃つネルも同じように右手を握り締め拳を象った。

地上から打ち上げる拳と、空中から打ち下ろす拳。ネルが立つコンクリートには彼女の足元を起点として蜘蛛の巣状の罅が幾重にも入り、トキのアームギアからは金属の軋む音が鳴る。冷たい目で見下ろすトキと、真剣な鋭い視線で見上げるネル。互いに一步も退かぬぶつかり合い。

そして、2人は示し合わせたように逆の手で銃を互いの額に突き付けた。銃口との距離は5cmを切っている。双方共に回避は不可能

「我慢比べだッ！」

トリガーを引いたのは全くの同タイミング。効率的に他者を害する洗練された暴力は回避を選ばなかった、選べなかった少女達に殺到

する。トキはシールドで弾いているが、相対するネルは全くのノーガード。弾丸が当たり続けた箇所が徐々に赤みを帯び、マガジンを7割ほど空にした頃に漸く血が流れ始めた。常軌を逸した耐久力と防御力。単純な肉体性能の面に於いてトキは逆立ちしてもネルに勝てないだろう。

だが——血が出たという事は倒せるという事。長い戦闘で生まれた初めての明確な傷を前にトキは少し攻撃的になってしま……。

「——逸ったな」

底冷えするような声が聞こえた時にはもう遅かった。急いで防御に回そうとした右腕は引き戻す前に五指を広げたネルの手に固められ、繰り出そうとした膝蹴りは出鼻を挫かれる。体勢を崩した彼女を前に映るのは、弾切れになった銃を仕舞い左手を引き絞っているネルだった。

繰り出されたネルの全力の一撃は負荷が掛かっていた電磁シールドを紙切れのように引き裂き、威力を全く減衰させぬままトキの腹部に突き刺さる。巨大な衝撃により『く』の字に折れ曲がる華奢な体。その勢いのまま彼女は地面を何度か転がり、地面に突き刺さった瓦礫に背中から激突した。

「……」

腹部に走る鈍い痛み。今の所、戦闘続行に大きな支障はないが後に尾を引くのは明確だ。それ程までに重い一撃。仮にノーガードで貰っていたなら、先ほどの時点で確実に意識が消し飛んでいただろう。

——油断した。勝負を急いってしまった。敢えて血を見せる事で『効いている』と思わせ、少し攻撃的になった所に手痛いカウンターを食らわせる。話に聞いていた通り、データにあった通りのクレバーな戦い方。先の攻防でのダメージジレースは明確にトキの負けだった。

トキは鉄仮面の裏に痛みを押し殺し、リロードを済ませたネルを見る。油断なく向かい来る彼女はトキのリロードが終わる前に畳みかけようと一気に攻勢に出るが——真横の通りから巨大な駆動音

が聞こえた。

聞き覚えの無い大きな音が聞こえた。ネルは訝し気に流し目で見ると——都市防衛のためのドローンの大群が押し寄せていた。その数は3桁にも上る勢い。しかも、装備はどれも高火力で中にはシールドを装備している個体までもいる。真つ当に戦えばかなり面倒な手合いであることは誰の眼から見ても明らかだった。

だが、彼女は顔色一つ変えることなく、それどころかドローン達を視界にすら入れていない。それはまるで、あの大軍を脅威と見做していないようであった。

そして、溜息を吐きながら徐に銃を構えて——。

「邪魔だ」

刹那、暴風雨が巻き起こった。人智の及ばぬ天災、抗う気力すら起さない空の意志。それが収まった後に残るのは見るも無残な破壊痕のみ。彼女の歩みを止められた時間は5秒にも満たなかった。だが、その5秒の間でトキの立て直しは済んでいる。時間稼ぎとしては充分だった。

睨み合う両者。技量とセンスで上回るネルと、スペックで上回るトキ。その2人の勝負は完全に拮抗状態にあった。



C & Cの3名。彼女達は都市の構造変更によりネルと引き離され、それ以降ずっとノーマークだった。強力な存在ではあるが、所詮ネルがいなければ烏合の衆と思っただのか。それとも、エリドウの防衛能力に大幅な信頼を置いたのか。

その仔細はリオにしか分からないが、唯一つ確かな事は——彼女は学園最強戦力を甘く見過ぎてしまった。

「そーれッー」

アスナの掛け声は爆音に掻き消された。見渡す限りに広がる機械の残骸、死屍累々。C & Cのナンバーツ、戦場を掻き乱すトリックスターたる一之瀬アスナは非常に伸び伸びと戦っていた。異常、とも

言えるほど冴えわたる直感とコンバットハイ。身体が軽く、思考は広く深く。後ろにも目が付いているみたいに、視界が360°に鮮明だった。

AIの思考を先読みしているのか疑ってしまうほど、彼女の行動は速く的確だ。脅威度の高いものから、自身や仲間を狙っている個体から、攻撃をしてくるであろう個体から潰していく。前線でアスナが獅子奮迅の活躍をしているため、狙撃手のカリンと爆弾魔のアカネもその能力を100%引き出していた。

「二発で充分だよ」

対物ライフル。アンチマテリアルライフルや対戦車ライフルとも呼ばれ、土囊等の障害物に隠れる敵を障害物ごと貫いたり、軽車両に対して損傷を与える事も可能な大口径の狙撃銃は、ドローンの装甲程度ならば容易くぶち抜ける。1発の銃弾で複数体射貫くのは当たり前、場合によっては射線上の敵を根こそぎ撃破していた。武器の特性上、面制圧こそできないものの、その圧倒的な火力と精密さは他のメンバーには持ち得ない長所だ。

正確無比な射撃が狙うのは装甲が分厚い個体や盾を持つ個体。それを吹き飛ばし、破壊し、アスナが戦いやすい場を維持する。それが今のカリンに与えられた役割であった。

次弾の装填も済ませ、膝立ちで照準を覗く。そのスコープ越しに目が合ったのは空戦型のドローンだった。空中にいる相手を狙うのは至難の業であるが、飛ぶ鳥すら落とす彼女にとっては一切関係ない。一瞬の迷いすらなく発射された弾丸は容易くドローンを沈黙させ、また1つ残骸を増やす。そして、寄せられた相手にはドローンから奪ったアサルトライフルを使って適当にあしらい敵影が無くなった事を確認して再び照準を見る。

そして彼女の前方、ミドルポジションで戦っているのは。

「良い位置ですね。では——」

カチ、と戦場の中では埋もれてしまう——しかし決して聞き逃してはならない破滅が鳴った。爆炎が昏い空を赤く染め、立ち昇る煙はまるで狼煙のよう。焼け焦げ、所々溶解した機械部品が辺りに散ら

ばり、抉られた地面に徒花の如く咲く防衛機構達。本日何度目かの爆破かは不明であるが、アカネのストックに未だ底は見えない。

彼女は無闇矢鱈に爆破しているように見えて、その実、効力を最大限活かせるようなポジショニングとタイミングを常に計っていた。アスナが攻撃しにくい敵、カリンが狙い難い敵。それらが全てアカネの獲物だ。仕損じも無いし、取りこぼしも無い。正面切つての戦闘は他のメンバーと比べて然程得意ではないが、サポートや援護ならば話は別。前線で暴れてくれる頼もしい仲間がいるならば、その圧倒的な火力と継戦能力は脅威以外の何物でもないだろう。

徹底的なお掃除を持ち味とする彼女は端から敵を逃すつもりなんて皆無だ。至る所に仕掛けられた爆弾と、敵の動き。加えて自身もウエルロッド Mk. 1サイレントソリキューションで射撃をしつつ、アスナとカリンの動きも見る。戦場を俯瞰する頭脳としての役割も兼ねる彼女がやるべき事は多いが、この程度は造作もない。何せ彼女はC&Cのコールサインゼロスリー03なのだから。

リオの想定では、彼女達は『分断された』と気付くや否や確実にネルと合流すると踏んでいた。トキの力量……lonlの状況ならば相当厳しいが、4人で相手すればかなり有利になる絶妙なバランス。今後の為にもトキを潰しておきたいだろう彼女達は勝算が明確にあるトキの元へ向かう計算だった。

実際、以前までは彼女達もそうするつもりで行動をしていたが、しかし、現在彼女達はネルとも突入部隊とも合流せず中央タワーを目指している。

確かに、たった一人でトキを相手にするネルの事は心配だ。だが、今回の勝利条件は誰かがアリスを奪還する事であり、ネルの増援に向かう事でもトキの撃破でもない。

故に彼女達はネルを信頼して、たった一つの勝利条件を満たすための行動に打って出た。その旨を通信越しに彼女へ伝えるとネルは『アリスを頼む』とだけ返し、一身に陽動の役目を引き受け——C&Cの3人をフリーにした。

たった3人であるが、最強戦力の3名。その決定力も影響力も申し

分ない。リオも区画移動や隔壁、各種防衛機構を用いて全力で迎撃しているが焼け石に水。悉くを鎧袖一触し、その歩みは止まる事を知らない。先生とセミナーに嫉け、彼等を苦戦させたアバンギャルド君。レプリカも導入したが2分も経たずにスクラップにされ今は瓦礫の下に埋もれている。寧ろ、彼女達3人を相手に2分持った方を褒めるべきなのだろうか。それは不明であるが——彼女達はリオの盤面を着実に崩しつつある。



未だ暗い空の下、鮮やかな赤い軌跡が描かれた。部室^{アトリエ}では気になる耳障りな駆動音も周囲の喧騒の所為で気にならない。

正式名称、溶断切断式回転鋸。通称はノコちゃん。バッテリーまで含めると総重量50kg以上になるそれは本来武装ではなく、あくまで材料を切断するための設備だ。今回持ち込んだ理由も隔壁等に閉じ込められた場合に無理矢理突破するための手段……という位置づけだった。だが、ヴェリタスの奮戦のおかげで出番が無く此処まで来て、今は武装として開発者たる彼女の手の中にある。

赤熱し、超高速で回転する無数の刃。電磁シールドが過負荷で一時的に消えたタイミングを見計らい、ウタハは刃を携えて突貫する。当然何発も弾丸を貰ってしまうが、それは織り込み済み。元よりリスク承知の突撃だ。インドア派かつ荒事に向かない非力な方であると自覚する彼女であつても50kg程度の質量ならば軽々と振るえるし、ライフル弾も1マガジンなら頑張れば耐えられる。

そして、その予想通りに彼女は掃射を耐え抜き——アバンギャルド君に肉薄した。

下から切り上げる形で振るわれる切断道具。火花が散り、赤の閃光が舞う。獲った——そう確信したが、現実はそう甘くなく、胴体関節を180°以上回転させる事により無理矢理物理シールドを真正面に持つてきた。激突する剣と盾。銃撃のように弾かれる事なく、少しずつ表面を溶かし、切断し、刃が沈み込む。

通常、この距離感でアバンギャルド君と戦うのは自殺行為だ。圧倒的な火力のガトリングガンとバズーカが回避不能な上、アサルトライフルまでアクティブになったら手数でも負ける可能性がある。余程防御力に自信がある者以外はまず勝ち目が無い。

だが、それは全武装がアクティブであった場合の話だ。ガトリングガンとバズーカがリロード待ちであるのは確認済み、アサルトライフルもウタハに向けて撃った時点で弾切れだ。使える武装はC I W S、今更そんな豆鉄砲は気にしない。

先ずは、あの邪魔なシールドを削り落とす——！

がりがりと音を立て、火花を撒き散らし、少しずつシールドを溶断し、そして——完全に切り落とした。これまでと比べて面積が半分未満になる盾。アレでは真面目な防御はできないだろう。強固な守りを構成する内の一つを使い物にならなくなったのはこの戦場において大きな意味を持つ。これで電磁シールドを突破しても……という思いはせずに済むはずだ。

だが、その代償は——ウタハの脱落。

向けられるバズーカの砲身。リロードが済んだのだろう。馬鹿げた口径から覗く暗闇はそのままウタハの未来を暗示する。回避も防御も不可能。だが、その末路は受け入れた。自分達の後輩は非常に優秀だ。突破口さえこじ開ければ後はどうとでもなる。目覚めた後にはきっと何もかも解決しているだろう。だから、彼女は勝利を確信して涼やかに笑いかけた。

「年長者としての意地さ」

——尤も、リオ会長には理解できない概念かもしれないけどね。

さあ、後は任せたまよ。そう思い、眼を閉じたウタハを襲ったのはビルすら崩壊せしめるバズーカの砲撃——ではなく、想像していたより随分と軽い衝撃だった。

「……おや？」

疑問に思い眼を開けると、そこには焦燥感を滲ませるミドリが居た。どうやら横合いから飛び出してきた彼女に間一髪で助けられた

らしい。

「……驚いた。助かるなんて思ってもいなかったよ」

「初めから刺し違えるつもりなら、そんな事やらないでください……ッ！」

彼女は倒壊したビルの瓦礫が積み重なる物陰まで退避し、ウタハを下ろして息を整える。本当に急いで来たのだろう。その瞬発力と速度はミドリの中でも間違いなく人生最速だったと自負しているが、それでも尚間に合うかどうか不安だった。だが、彼女は何とか間に合わせた。掻き集め、振り絞り、彼女はウタハを救ってみせた。

それは、あの日のトラウマを乗り越え成長した確かな証。

「もう二度と、私の前で誰かに傷ついてほしくないんです」

彼が斬刑に処されるのを見ていることしかできなかった。首を切られて、血を流して死に逝く彼に何もできなかった。怖くて、苦しくて、どうしようもないほど辛くて動けなくて。その所為で姉まで失いかけた。

何度も悔やんでも悔やみきれない。己の弱さを幾度も呪った。

だから誓ったのだ——もう二度と、誰も取りこぼさないと。あの悲劇を、あの光景を二度と自身の目の前で起こさせないと、ミドリはミドリ自身に誓いを立てた。

だから、勝手に犠牲になるのは許さない。あまりにも眩しい少女の誓いを目の当たりにしたウタハはくすりと笑って。

「……済まないね。私が軽率だった」



苛烈な戦闘が三つのポイントで巻き起こる地上に反して、地下の道はいっそ不気味なほど平和だった。多くのドローンが地上に出払っている関係で、地下にまで回す個体数が無いのだろう。接敵した数も少なく、その個体達も戦闘を目的として製造されたものではなく建築用の個体ばかり。辛うじて銃を持つ物もあったが、製造当初から戦闘目的で設計されたものではなく、非戦闘個体に臨時で銃を持たせただ

けの粗末なものばかりだった。

案外余裕がないのか、とは思うが……リオの策略は時折斜め上の方向に逸れる事は身を以て知っている。彼女は紛れもない天才なのだ。

そして、そういった策に引掛からない為にも地下道を通る事は必要不可欠。リオに余裕があるのかは不明であるが、対する此方は余裕も無ければリソースもない。突入当初からずっとカツカツで、今までは騙し騙しやりくりしていたが……この後は強者との戦闘が相次ぐ。生徒の体力も心配であるし、何より寄り道をしては先生が持ちそうになかった。

「まるであの子達の作るゲームに出てくるダンジョンね……」

コンクリートに囲まれた細い道。地下は横の広がりも厄介であるが、特に縦の広がりも厄介であった。建物で換算すると大体地下5〜6階だろうか。蜘蛛の糸のように張り巡らされた通路は目印になる物すらないため、地上よりも更に迷いやすい。仮に彼の案内が無ければ目的地はおろか地上に出る事すら困難だっただろう。

通路の先にある階段を下った先には地下鉄の駅が存在していた。改札や駅員室もなく、ポツンとプラットホームだけ。真向かいにある階段の先には壁が聳えていて、反対側にあるホームの壁の中央にはポツンと穴が開いていて、その先に道が見えていた。恐らく此処とそれ以外とでセクションが分かれていたのだろう。

防衛力は非常に優れているのだろうが、リオの指先一つでマップが使い物にならなくなる街は少々過ごしくそうだ。

ノアとコユキは1人で、ユウカは先生を抱えながら反対側のホームに飛び移り、ぽつかりと空いた通路の先を目指す。右へ左へ、前へ。上も下も行った来たりで、目指す場所はゲーム開発部達がいるセクション。何分の行軍を続けたかは定かではないが、それなりの距離を彼らは歩き――。

「あれ？　行き止まりですよ……」

コユキがびよんぴよんと跳ねながら、彼の肩越しに見たその先は確かに行き止まりだった。どう頑張ってもうんともすんとも言わなさそうな重厚なコンクリートの塊。まさか壁を破壊して先に進むつも

りなのか——と思うが、頭の中の冷静な部分が『いや無理でしょこれ』と呟いた。何発銃弾を撃ち込んでも、爆弾を投擲してもこれを壊せるビジョンが浮かばない。もしかしたら此処だけ脆いのかも、と思つて彼の左腕と胴体の隙間に手と顔を通して壁を軽くノックするが、伝わる重さと厚さは他と遜色ない。

え？ これどうするんですか？ ——そう思つて先生を見上げると彼はくすりと笑つて。

「見た目はね。でも——」

彼は重厚な壁に最早^{スケルトンキー}万能鍵と化した腕を翳す。瞬時に書き換えられるプログラムコード、稼働する都市の機構。数秒間の振動の後、壁は真横にスライドし新たな道が見えた。先ほどまで通つていた閉鎖的な道とは異なり、壁は何処にもなくとても開けている。光源は非常灯のみで心許ないが、周囲は見えるためそこまで問題にならない。

構造的には上下に道が折り重なつた吹き抜けだろうか。上にも下にも道が張り巡らされていて、階段もあちこちにある。何処が何処に繋がつていて、何処が目的地なのか皆目見当がつかない。しかも、道には手すりしかないため、少しでも足を滑らせれば暗くて見えない底まで真つ逆さまだ。

重厚な壁に囲まれた息苦しい地下道と、解放感に溢れすぎたこの道……正直どつちもどつちで、あまり通りたくない道であつた。

しかし、選り好みはしてられないだろう。この道を辿らなければならぬならば、行くだけだ。

「今、私達は地下20m地点にいる。此処は見ての通り吹き抜けになつていて、地下50mから地表まで高低差関係なく道が張り巡らされている。この構造を使つて一気に地上まで行こうと思う。出るポイントはあるの子達が戦闘をしているポイントから500m離れた場所、皆の足なら30秒も掛からない」

カンカンと、靴底が床を叩く音が反響する。

「その先は戦闘だ。恐らくはアバングヤルド君とトキの連戦。特に全力のトキは私達全員で勝負に挑んで漸く勝率が2割を超えるくらいだ」

「そんなに彼女は強いんですか？」

「うん。エリドウの中であれば最強は彼女だ。アレを装備した彼女が相手ならネルもまず間違いないで勝てない」

「先生の指揮があっても、ですか？」

「私が万全だったら分からないけど、今は確実に無理だね」

あまりにもあつげらかんと白旗を上げる彼にユウカは絶句した。彼はこういう時に嘘を言う人物ではない。正真正銘全く勝ち目が無いのだろう。しかし、それは駆け引き無しの本勝負に限った話だ。彼は「でも」と言葉を続けて。

「打つ手が無い訳ではないよ。ネルからトキの話を聞かなかった？」

彼女の強さにはロジックがあるって。確かにトキは強いけど、それを後押ししているのがリオの装備とエリドウのシステムなんだ。この2つの要素のどちらかが無くなれば、或いはこのリソースを別の部分に回させれば私達にも充分勝算はある。少なくとも、負け戦ではないさ」

彼は「厳しい戦いにはなるけどね」と付け加えて——フォーカスリングが回転する監視カメラを見上げた。

「その為の仕込みは、もう済んでいる」



人智^ネの及ばぬ^ル天災と人智^トに至れる^キ究極の激突。

最強^シのエージ[&]エント^シ集団の進軍。

ゲーム^開発部[、]エンジン^部、ニア^部、ヴェリ^タス

アリスを愛^シ、愛される者^達の奮戦^ナ。

誰かを想^フう者、暴走^セする意志^ミを止める者^の鳴動。

誰もが意志を持つている。誰もが正義を持つている。

友人のため。未来のため。世界をよりよくするため。だからこそ交わらず、ぶつかり合うしかない。先にある理想の美しさを信じて。

その光景を争いから遠い場所で眺めていたヒマリは天井を見上げながら呟く。

「なるほど……リオの考えは分かりました。綿密に練られた計画、何重にも張り巡らされた策、その手法……それはある意味、合理的なのかもしれません」

ヒマリがプライベートやハッキングで用いる各端末はこの檻に入られる前に全て没収されている。スマホもタブレットも、何もかも。彼女の持ち物は車椅子と纏っている衣服のみ——そのはずだった。

だが彼女は一台の端末を手に取り、その画面を眺めている。紛れもない異常事態であるが、リオは把握できていない。この檻に仕掛けられている監視カメラや各種センサーは全てハッキングされ、書き換えられ、正常な状態に偽装されている。

「ですが、やはり私はそのような独善には賛同できません」

ヒマリの眼には確かな意志がある。リオの計画を覆さんとする、確固たる意志が。彼女は欠片も諦めてはいなかった。監獄に入れられ、抵抗する手段を奪われようとも虎視眈々と逆転の目を探していて——
——ついに、その糸口を掴めた。

「聞こえていないでしょうが——1つだけ、忠告しておきます」
だから、これは唯の感傷。関係性が最悪でも、蛇蝎の如く嫌い合っていない。確かに友人で理解者だった者へ送る哀れみ。

この戦いがどのような結末になっても、ヒマリはリオを決して許さない。リオが自ら振りかざした刃を収めその過ちを認めたら話は別だが、彼女の性格を考えるとそんな事態は万一にも起こらないだろう。

故に、例え誰が許してもヒマリだけは彼女の罪を糾弾し続けなければならぬ。彼女をよく知る者として。彼女を独りぼっちで此処まで進ませてしまった者として。

——もしもリオが何かを話してくれていれば。もしもヒマリが踏み込んでいれば。互いに一歩ずつでも歩み寄っていれば、こんな風にはならなかったのかもしれない。誰もが笑い合える結末を迎える事ができたのかもしれない。

だが、それは夢想の絵画だ。リオと、ヒマリと、アリスと、■■■。そ

の4人が屈託なく笑い合える世界はもう何処にもない。些細なボタンの掛け違い、運命の悪戯によって剪定されてしまった。

しかし、それでも——その景色を目指して駆ける事はできると。だって、まだ誰も諦めてないから。

「あなたは確かに優秀です。よくもまあ、バレずにこのような都市を建設できたものだ……ある種、感心すらしてしまいます」

リオは優秀である。それだけはヒマリも否定しない。紛れもなく自身に匹敵し得る傑物だ。総合力は兎も角として分野毎に見ればヒマリを凌駕するものもあるかもしれない。

だが——その優秀さが仇となつてしまった。

「あなたは自身が正しいと信じたら、やるべき事と感じたら振り返らず突き進むでしょう？ それはあなたの長所であり……同時に弱点でもあります。あなたは、悩みを誰かに打ち解けた事はないでしょう？」

この話は相互理解にも通じる話だ。言葉を交わし、想いを交わし、心と心を交わらせる。それが相互理解であり、心と心を結ぶ枝。その枝をリオは誰にも伸ばすことなく折つてしまった。

「別に、弱点というものは本来そこまで大袈裟なものではありません。それを受け入れ、見つめる事が出来れば。補い合える誰かが居れば。ですが、あなたはそれをしなかった」

彼女は付き従つてくれているトキにすら何も話していない。弱さを、悩みを、重圧を共有しなかった。多くを抱え込んでしまった。自分が背負うべきだと決めつけて。その思いの丈を吐き出せば、きつと誰かは理解して共感してくれたのに。

「優秀過ぎるが故に——人と歩幅を合わせる事も、相手を待つ気もない。あなたのそういうところが最大の弱点なのですよ」

そう言つて、ヒマリは——あり得た^りかもしれない自分の^オifに心の底から憐憫の情を抱いた。

「ですから……あなたを心配する誰かの声も、聞き逃してしまうのです」

——例えば、この端末のように。

時間は少し前……リオとヒマリがアリスに関する極秘の会合を開いていた時に遡る。

この会合は話し合いの果てに互いの意見が交わらない事を確信したりオが最大の障害になるであろうヒマリに懐刀トキを喉け、捕えた——
——そういう結末だ。

だが、リオは知らなかった。トキがヒマリの意識を落とし、彼女にヒマリの身柄を引き渡す——その間に生まれた極小の時間に先生はトキと接触していたのだ。その時は彼もシステムの箱も万全、リオに感付かれずミレニアムのシステムを全て違和感なく書き換える事なんて造作も無い。

こうして、ヒマリを抱えるトキと先生は会った訳だが……彼はヒマリの引き渡しを要求しなかった。代わりに彼女に持ち掛けたのは、ちよつとした取引。

その取引内容こそが今、ヒマリが眺めている端末だ。リオにより持ち物が没収され檻に入れられる直前に端末を忍ばせてほしい、と。そして少しの交渉の果てに取引が成立し、ヒマリの懐に端末が届けられた。

当然、身に覚えのない端末が懐に潜り込んでいた事に気付いた彼女は困惑したが、裏面に小さく印刷されたシャーレのロゴを見て全てを察し、その存在をひた隠しにした。

エリドウの迎撃システムが励起したタイミングと同じくして起動したこの端末はクラフトチェンバーで作成された特殊性。頑丈だったり、各探知に引つ掛からなかったりするのだが……その最たるはシャーレの秘匿回線を使用できることだろう。

これを用いて彼女にリアルタイムでエリドウ内部の情報を流している。各部隊の動き、ドローンやリオの動き、都市の構造……その他諸々。彼女は囚われの身でありながら、誰よりもエリドウを俯瞰できていた。

彼女こそが彼の切り札。とっておきのジョーカー。リオの盤石を切り崩す最強の一手。彼女に大幅な信頼を置く彼は敢えて明確な指示を出さず情報だけを与え、その最終的な意思決定を彼女自身に委ね

た。そして、その意味を彼女はしっかりと把握している。つまり、彼女のタイミングで自身という最強のカードを切ってほしいという事だ。

そして、そのタイミングなんて——1つしか思い浮かばなかった。

この端末に記されているリオとトキの切り札。エリドゥ全域の機能を一点に集中させる事により生み出されるあの装備を失墜させる。それこそが、リオに王手を掛ける最も冴えた方法だろう。

「それにしても端末を持ち込ませるなんて……一体先生はどんな手を使ったんでしょうか」

リオは恐らくこの取引に関与していない。ならば、取引相手は必然的にトキに絞られる。だが、トキはトキでリオのメイドであろうと徹底している少女だ。生半可な取引では確実に靡かないだろう。一体どんな手品を使ったのか……気になる所であるが、今考える事ではない。ヒマリは雑念を追い出して、スマホの画面を眺める。

状況は目まぐるしく変化している。リオが敷いた盤石は徐々に切り崩され、拮抗状態に。

勝負の行方は、まだ誰も知らない。

逆転の契機

ミレニアムサイエンススクール内にあるヴェリタスの部屋は蜂の巣を突いたような惨状に成り果てていた。数分前に遮断された各部隊との通信。それをどうにか繋ぎ直そうと彼女達は持てる力と機器を総動員して奮戦しているが、相手はヒマリに匹敵する天才であるリオ。それに、場所のアドバンテージは相手に有る。

状況は圧倒的に不利であり……その復旧の進捗も芳しくなかった。

「うわあ！　これ、どうすればいいの!?　回線がダメになっちゃってるよー！」

「復旧を試みてはいますが……これでは……ッ」

うんともすんとも言わない回線、通信途絶を表す画面を前にマキとコタマは頭を抱える。何度も様々な手法を試したが、その悉くが徒労に終わっている。リオが自ら手を下しているのかAIの自動防御プロトコルとファイアウォールに任せているのかは定かではないが、彼女達の介入は全て未然にブロックされている。

「——ダメ。ネットワークが完全に途絶した。これじゃあ手の打ちようが……」

悪い事は続く。未然に防がれていたとはいえ、今までは何とかエリドウに通信を試みる事自体は可能であった。だが、ハレの挑戦を最後にそれすら不可能に成り果ててしまう。まるで回線そのものを引っこ抜かれたかのように、ヴェリタスの部室から外部にアクセスすることすらできなくなってしまった。試しにPCで適当な動画サイトを開いても『ネットワークに接続されていません』と無常に表示されるのみ。

「一体どうすればいいの……考えなきや……どうすれば……」

「落ち着いてください、マキ。通信不能になったのはウイルスの可能性が考えられます。まずは全員のPCをネットワークから切り離し、クリーンアップを。その間は別回線に切り替え、予備のPCで通信を試みましょう」

「でも、そんな悠長にしてたら皆が負けちゃうよ！　急がないと……！」

「その通りですが、やれる事からやらなければ勝率は更に下がってしまいます」

マキとコタマが回線切り替えとPCのクリーンアップ、予備PCの起動を行っている間、ハレは唇を噛みながらPCの内部を見ていた。何重にも掛けておいたウィルス対策、嚴重が過ぎるファイアウォール。通信自体に掛けたプロテクトも全て独自のものを使用している。あのリオを相手にするのだ。『あればあるほどいい』と尽くせる手は尽くしてきた。

だが、その上で尚足りない。

単純明快に、ヴェリタスの3人の力を合わせてもリオには及ばなかったのだ。最早比べるのも馬鹿らしくなる程の天才性。三人寄れば文殊の知恵と言うが、集っても尚、本物の天才……知識神から愛されたとしか形容できない規格外を上回る事ができなかった。

ハレは「チツ」とらしくない舌打ちを挟んで。

「……相手の対応をナメてた。打てる手は打ってきたつもりだったけど、上を行かれるなんて。それに、ジャミングなんて妨害手段としては初歩中の初歩。その対策もつとしっかりする必要があったのに……」

この時こうすればよかった、ああすればよかった。そんな考えばかりが頭に浮かぶが、所詮は後の祭り。この世にタイムマシンなんてない。起きてしまった事はどうしようもない。変えられるのはこれくらいだけ。そして、その未来も暗闇これからに閉ざされたかのように先が見えなかった。

ヴェリタスにはエリドゥ内部の状況が分からない。その知識は数分前で更新が停止されている。だが、何となく分かっってしまう。突入部隊も陽動部隊もどちらも絶体絶命のピンチ。片やエリドゥ直結のロボットと交戦し、もう片方は分断され散り散りに。きつと、何か少しでもミスを犯すとその瞬間に全てが瓦解するような綱渡りの上に居るだろう。

そして、今の自分達に彼女達の為にできる事はない。ネットワークを封じられたヴェリタスは翼を挽がれた鳥と同じ。通信によるバックアップもハッキングによる援護も……何もできない。ヴェリタスは完全にエリドゥウから……否、外部から切り離されてしまった。

今現在、打てる手は打っている。別回線と別PC。それらを用意すれば通信を試みる事は出来るだろう。だが、予備のPCはメインのPCよりもスペックが優れている訳ではない。エリドゥウの強固なプロテクトを突破できる可能性はお世辞にも高いとは言えなかった。

仮にエリドゥウの防御を貫き彼女達との通信を確立できいたとしても、これまでと全く同じ支援をできるか、と問われれば否だろう。使っている物のスペックが劣る以上、どうしてもできる事の限界は狭まる。

考えれば考えるほど悪い状況。打開策も苦し紛れに等しい。地の利は相手にあり、用いる機器も相手が上、扱う者の能力も相手の方が上ともなればその勝算は語るに及ばず。相手のミスを祈るしかないが、あのビッグシスターにそんな人間らしい情緒が残っているとは思わなかった。

余りに絶望的なこの状況、ハレの口からぼつりと弱音が零れる。

「私達だけじゃ、此処で打ち止めなのかな……」

「そんなの嫌だよ！ アリスちゃんの事諦めるなんて絶対イヤ……！」

マキの言う通りだ。アリスの事を諦めたくはない。その気持ちは誰もが同じだった。彼女を取り戻すための戦い、彼女にもう一度心から笑ってほしくて今まで戦い続けた。決して不利な状況でも模索を忘れず、希望を捨てず、諦めを踏破し——そして、自分を疑わず。だからこそ此処まで来れた。比類なきビッグシスターを相手に真っ向から喧嘩を売り、何とか勝負を成立させることができた。どれほど手札が悪くとも、状況が絶望的でも勝負のテーブルに着くことができるのだと証明してきた。

それに——エリドゥウ内部に居る彼女達はきつとまだ諦めていない。アリスを助けるための戦いに胸を張って身を投じているはず

だ。彼女達が諦めていないのに、自分達だけが諦める訳にはいかない。

状況は最悪だ。相手は格上。自分達には足りないものが多い。だが、まだ負けていない。チエックメイトは早すぎる。エンディングなんて遥か彼方だ。この世に絶対や100%はないのだから、リオが敷いた盤面にもきつと穴はある。

「何か、方法は……」

呟くハレ。諦めない、諦めたくない。その一心で彼女は模索する。それに呼応するようにコタマもマキも己ができる事、やれる事を熟していく。

そして、彼女達の奮戦に応えるように——しっかり者の頼れる副部長が手を差し伸べた。

「……ちよつと待つて」

最初に気付いたのはハレだった。

「マキ、コタマ先輩」

「えっ？ 急にどうしたの？ ハレ先輩」

「急にモニターにコードが……」

「……これは」

プログラムコードの内容を解読すると、別の場所からヴェリタス部室内のPCにアクセスしているようであった。ユーザー名とパスワードが入力され、プロンプト画面が立ち上がる。管理者権限で実行されたそれに打ち込まれるのはファイルの実行コマンド。

そして、実行されたファイル名は——Optimus Mirror System。

それを見たコタマはハツとした表情でハレとマキを見る。それだけで意図が伝わったのか、彼女達は勝算が芽生えたような顔で確りと頷いた。

ハレは手元のノートPCの遠隔操作アプリを起動し、ヴェリタスに於ける生命線にして虎の子……ヒマリが使用するメインコンピュータに接続し、それを経由してハッキングを開始する。攻撃の矛先はエリドゥを司る基幹システム。当然の如くカウンターハックを貰うが、

それらを全てコタマとマキのマニキュアル手動操作で弾きながら何とか入り込む。
「これが通用しなかったら私達の負け。でも、もし通つたら……!」



ウタハの奮戦により、アバンギャルド君の4本腕の中の防御用のアームを切り落とす事に成功した。これによりあとは電磁シールドを突破するだけで装甲に直接ダメージを与える事ができるようになったが……変わったのは防御力だけ。その驚異的な攻撃性と機動力、演算能力に一切の陰りは無い。

そして、片腕を切り落とされ重心が変化してもバランスを崩した様子は見えずにいる。壊される事もある程度織り込み済みで、かなり優秀な balanser や制御回路を搭載しているようだ。

つまるところ、大ピンチには変わりなかった。

「っ、強すぎます……」

「……このままじゃ本当に危ないかも」

「危機一髪って感じだね」

飄々とした……微笑みすら交えた顔で白旗を半分くらい上げているエンジニア部は言っている言葉に反してかなり余裕が見えた。これは隠し玉がある……なんてことはなく、ただ単純に修羅場に慣れているだけだ。

発明に失敗は付き物。日々新技術を開発するエンジニア部には成功の数よりも多くの失敗がある。例えば思いつきで付けた回路が暴走したり、内部のプログラムが脆弱で容易くハッキングされ暴走したり、よく分からないが暴走したり。

兎にも角にも、飼発明品い犬銃を向けられるに手を噛まれるのに慣れているエンジニア部にとっては割と見慣れた光景だった。違う点としてはその発明品の開発者が自分達ではない事と、別に暴走していい訳ではない事。尤も、それが大問題な訳であるが。

「なんでそんなに落ち着いていられるんですか!？」

飛び出そうとした瞬間にアサルトライフルを向けられ、出鼻を挫か

れたミドリ。隣では運悪くチャームポイントのおでこに流れ弾を食らったユズが半泣きで擦っている。よく見ると少し赤くなっている。内出血をしている訳ではなさそうだが……少し心配だ。

そして、少し離れた瓦礫を盾にしているモモイが叫んだ。

「うわあーん！、今度はこつちを狙ってるよ！ 皆、頑張って回避！」

ミレニアムの校章が大胆に描かれたボディがぐるりと回転し、銃口が向けられる。姉の言う通り、確かに狙っている。銃口を光らせているのは——ガトリング砲。ライフル弾を驚異的な連射レートで吐き出すそれは強固なビルの外壁を僅か数秒で穴だらけにする。盾代わりにしている瓦礫が持つとは思わなかった。

「頑張ってって言われてもどうやって——！」

一か八か当たらない事を祈って飛び出すか。いや、動体感知センサーがあるから十中八九射貫かれる。かといってこの場に留まっても瓦礫ごと蜂の巣だ。あれも駄目、これも駄目。ならどうすれば。思考を必死に回しても答えなんて何処にも無くて。ああ、こうしている内にも蜂の巣に——。

「あれ……？」

何時まで経っても体に銃弾が到達しなくて、痛みと衝撃に備えて強張っていた体の力が抜けていく。ミドリはぎゅつと瞑っていた目を薄っすらと開けると、直ぐ近くに居るユズや少し離れたモモイも呆けたような表情を浮かべていた。

そして少女達は恐る恐る顔を出すと。

「アバンギャルド君の動きが……」

「急に遅くなっ、た？」

あれほど苛烈で、宛ら暴走列車のように動き回っていた敵機が錆びついた絡繰り染みだ鈍重な動作になった。試しに弾丸を撃ち込んでみても電磁シールド発声機能も鈍っているのか着弾してから展開する始末。出力自体は低下していないため突破するのは骨が折れるが、付け入る隙が大幅に増えたのは事実。バッテリーにもものを言わせた常時展開でもされない限り、格段に攻撃が通りやすくなった。

一体誰が——そう思った時、1つの見慣れない通信が開かれた。

『ふう……何とか間に合ったかな』

ホログラム越しに映る光景は鉄火場。ドローンと銃弾が入り乱れる爆心地。その中で安堵の息を吐いた少女は。

『皆、大丈夫？』

ヴェリタスの副部長、各務チヒロが心配そうな顔でホログラム越しに此方を見ていた。



「チヒロ先輩!」

今までずっと姿を見せていなかったヴェリタスの副部長。クラツキングやハッキング等の悪戯好きな可愛い問題児が多いヴェリタスの中に於いてハッカー倫理を持ち合わせ、それを根気良く部員に説いている常識人にしてミレニアム内のシステムのアドバイザーも兼ねているセキュリティのスペシャリスト。

今までずっとタイミングを伺っていた。リオが使用する妨害は質量も最高峰。生半可な手札で突破する事は到底不可能だ。対策してもし切れない部分はどうしても出てきてしまう。ならば、いつそのこと相手に妨害手段を切らせて、後出しで対策すればいい。幸い、そのための手段と優秀な人員はヴェリタスがちゃんと保有していた。

『流石です、待ってました』

『タイミングもばっちり』

『うわぁーん! 副部長〜!』

チヒロの通信に加えてヴェリタスからの通信、及び支援も復活。リーダーやマップも見れるようになっていて、これまで通り……否、これまで以上に安定している。これは今までの常識を覆す異常事態だった。

「ふむ……どうやってこの通信を確立させたんだい? 先ほどまでは私達も秘匿回線を使用していたけど、それも潰された以上、こうやっ

て遠隔地と通信を取る手段は限られると思うんだけど……」

「そうですね！　だってエリドウの通信網は……！」

「リオ会長が掌握しているんじゃないかった？」

『うん、リオ会長が掌握している。でも、こういう時の為にヒマリが秘密道具を用意してくれたみたい。安易な使用はハッカー倫理に反するけど、今は使わなきゃいけない時だからね』

「秘密道具……？」

ヴェリタスの秘密道具……何か心当たりがあるような、無いような。ミドリは「うーん」と声を呻らせながら記憶を掘り起こす。遡る日々はセミナーとC&Cに喧嘩を売った時に至って……差押品保管所からヴェリタスの発明品を奪い取った事を思い出した。アレの機能をそこまで正確に把握している訳ではないが、数多のセキュリティを貫通した実績は身を以て知っている。それこそ、秘密道具呼びも納得ができるほど凄まじいものだった。

「お姉ちゃん！　アレだよアレ！」

「アレってどれ!?　何!?!」

「前、G・Bibleを解析する時に使ったプログラム！」

「もしかして、鏡のこと……？」

ユズがプログラムの固有名詞を出すと、チヒロは顔を少し綻ばせた。

『ご明察。鏡を使って私達の通信が通るようにエリドウ内部のネットワーク設定を弄ったの。ついでに会長にも退場してもらったし、通信のプロテクトも掛けておいたよ』

——そう、彼女達の戦いは全てに意味があった。喧嘩を売った日、エンジニア部とヴェリタスに協力を仰がなければこうして共同戦線を張る事はなかった。差押品保管所から鏡を奪還しなければこの逆転は在り得なかった。

彼女達が結んだ絆が、巡り巡って彼女達を助けている。彼女の背中を押している。望みを、願いを果たせと。

それが、堪らなく嬉しかった。

「確か、鏡は生徒会に差し押さえられたツールだったかな？　エリ

ドウの内部プログラムすら書き換えられるなら、リオ会長が押収する
のも領ける。流石ヴェリタスの元部長だ、侮れないね」

ウタハは「となると……」と言い、先ほどから集中砲火を浴びせら
れているアバンギャルド君を指差して。

「アレも鏡の効能かな？」

『うん、鏡を使ったクラッキングだよ』

「成程……凄まじいね。此処まで計算通りって感じかな？」

『まさか。コタマ達がアレをエリドウから切り離してくれないと通じ
なかつたから、順風満帆って訳じゃないよ。寧ろ賭けの部分の方が大
きかつたかも』

アバンギャルド君はエリドウの基幹システムと自身のシステムの
2つで稼働している。どちらか1つ潰した程度で動けなくなる訳も
なく、多少動きが鈍くなる程度でその戦闘能力が落ちる事はない。

仮に2つのシステムで稼働している状態のアバンギャルド君に鏡
を使用してもエリドウの絶大なバックアップがある以上、瞬時に解析
されて無害化されるだろう。

だからこそアレをエリドウから切り離す必要があつたのだが……
そのタイミングも重要だつた。切り離す前に鏡を使用しても無意味。
だが、切り離した後に使用しても制御が完全なスタンドアローンに切
り替わってしまうためシステムを逃す事は不可能だ。

故に求められたのはエリドウとの接続解除とアバンギャルド君自
身が持つシステムへの攻撃……その2つを同時に行う事だつた。

手順としてはアバンギャルド君がエリドウからデータを受け取る
回線に介入し、『エリドウからの情報』と偽装した鏡のプログラムを内
部システムに混入させる。その後、ヴェリタスがエリドウからアレを
切り離すのと同タイミングで鏡のプログラムを起動。実効手段はこ
れだけだが、言うは易く行うは難し。これらの猶予はコンマ数秒。そ
の上、一度の失敗も許されない大博打。

作戦の成功率を上げるための手は勿論尽くした。どの回線でアレ
と都市が通信しているのか調べるために危険を承知でエリドウに赴
いたり、タイミングを少しでも合わせるために遠隔操作でヴェリタス

のPCを起動させ意図を伝えたり。

その上で賭けの部分が大きかったのだが——彼女達ヴェリタスは成功させた。

それに誇らしさを感じたチヒロは『帰ったら褒めてあげないと』と内心で思いつつ……ヴェリタスではないもう一人のMVP、今もチヒロをドローンから守っている頼もしいボディガードに視線を送った。

『少なくとも、彼女が居なかったらこんなにも上手く事を運べなかった』

「彼女……？」

「うん。運良く会長の監視から抜けられていた部活の……」

『こんにちは、皆さん』

ミレニアム製最新型タンベル

ベネリM4をリロードした彼女はトレーニング部のスマレ。アリスと仲の良い生徒の1人。先生の手引きによりエリドゥに侵入した彼女達は今の今までずっと隠密行動をしており、少し前にリオに情報を開示……隠密を解除したばかりだ。

その僅かな間に彼女達に仕向けるドローンを集めたりオの判断力は凄まじいが……後手に回った時点で、彼女の盤面は崩壊したも同然だった。

『アリスさんの事を聞いて居ても立っても居られず……僭越ながら、協力させて頂きました』

『うん、本当に助かったよ。ありがとう……とまあ、こんな感じで皆から少し離れたセクションで絶賛ドローン相手に抗戦中なんだけど』

チヒロのすぐ傍に銃が放たれる。彼女はそれを転がるように回避し、ビルの外壁を盾代わりにしつつ応戦。前衛はスマレが務めているため、今すぐチヒロ自身に危険が及ぶ訳ではないが……多勢に無勢。いつまでもこのまま、という訳にはいかないだろう。スマレにもチヒロにも限界はある。

『どれくらい持つかは正直分からない。けどまあ、やれるだけやってみるよ』

『持久戦ならお任せください』

『うん、護衛はお願い』

ドローンを相手に獅子奮迅の活躍をするスマレの頼もしい言葉を

耳に入れ、再び通信に集中するチヒロ。タブレットPCを起動させ、プログラムが走る画面を見つめながら凄まじい速度でキーボードを叩く彼女は少し顔を顰める。

『やっぱり……鏡を使ったとはいえ、エリドゥ側のファイアウォールが反応してる。プロテクトも過信できないからパスが切れる前に先手を打つ必要があるね』

規格外の性能を持つ鏡とはいえ、相手もまた規格外のエリドゥ。通信のプロテクトも信用し過ぎてしまうと必ず痛いしっぺ返しを貰うだろう。だが――。

『こういう時こそヴェリタス……私達の出番だよ』

『うん、任せて副部長』

『私達のリソース全部使い切ったとしても！ ネットワークを維持してみせるよ！』

『はい、全力を尽くします』

『うん、維持は任せた。代わりに、ここからは私が皆のサポートを引き受けるよ』

ヴェリタスの部員は皆優秀だ。その人格も能力も信頼しているし信用している。そんな彼女達が任せてと言ひ、維持してみせると言ひ、全力を尽くすと言った。であれば、その結果は自ずと分かるというもの。チヒロは安心して彼女達にネットワークの維持を任せ、代わりに今まで彼女達が担っていた役割を引き受ける。

『……つと。中身をぐっちやぐちやにしたのにまだ動けるんだ。自己修復プログラムとかがあるのかな？』

苦笑いしながら見つめるその先には、鏡によって内部システムを徹底的に破壊したはずのアバンギャルド君が再起動を果たそうとしている。セキュリティもファイアウォールも、およそプログラムと呼びうる全てを書き換えられ真面に動けなくしたはずであるが……チヒロの言う通り、別の何処かに自己修復のプログラムやバックアップを搭載しているのだろう。リオらしいリスクマネジメント。学習型AIに鏡の対策をされている可能性もあるため、この手がもう一度通じるとは思えない。

—— 尤も、例え無駄だとしてもやれる手は尽くすのだが。

『自己修復が終わるのは大体10分後。それを過ぎたらまた手が付けられなくなるから、それまでに決着を付けたいんだけど……何か手はある?』

「そこは私達エンジニア部がどうかしよう。できれば温存しておきたかった手札だけど、背に腹は代えられないからね」

エンジニア部がドローンに持たせた秘密兵器。その中の1つに途轍もない火力を持つ機械がある。ウタハの言う通り温存しておきたかった手札のそれは、万が一リオが中央タワーに籠城した際に防壁を根こそぎ吹き飛ばす為に使用する予定であった。だが、今は死線の中。この場を突破しなければ中央タワーと見える事すらできないのだ。手段や方法を選び好みしている場合ではない。

—— それに、どの道エンジニア部は此処で終わりだ。であれば持ち得る力を出し尽くし、この後にまだ戦いが控えている彼女達を少しでも楽にした方が良い。

そう思い、ウタハがヒビキとコトリに目配せをすると—— 意図がしっかりと伝わったのか強く頷いた。本当に優秀で、優しい後輩達を持てた。それが誇らしくてたまらない。

さあ、全てを出し尽くそう。彼女達の道行きを照らす為に。大切な友人を助けるために全てを用いた彼女達を阻む障害を打ち砕く。

「だけど、弾の数は一発だけ……」

『となると、確実に当てないとだね』

「その通りです! なので、皆さんには我々が準備している間……5分ほど、本体の足止めをお願いします!」

エンジニア部総出で準備に掛からなければならぬとは、余程巨大なのか手順が複雑な機械なのだろう。そして、準備している間にエンジニア部にターゲットを向けられたらその時点でアウトなため、本体を釘付けにする必要がある。準備するグループと、足止めするグループ。

準備するグループのメンバーはもう決まっているため、必足止めグループの方に回されるのは——。

「わ、私達だけ!？」

「うう……：幾ら動きが鈍つてるとはいえ……」

「ちよ、ちよつと難しい、かも……」

必然的にゲーム開発部の3人だけになる。

確かに、システムが乱されているため先程のような理不尽な強さはないだろう。動きも鈍り、照準もブレブレ。脅威の度合いは幾分か落ちたとはいえ、それでもリオ手製の兵器。其処らのドローンとは比べ物にならないスペックを持つ。実際、暴走状態のアバンギャルド君は自身の周りにいるドローンを手当たり次第に撃ち落としている。

——アレを3人で相手にしつつ、5分間は他にターゲットを向けさせない。できるできないの話ではなく、やるしかないというのはよく分かっている。だが、確実に成し遂げられるという自信も無かった。

そんな彼女達の不安を感じ取ったのか、チヒロはくすりと笑って。

『ああ、大丈夫。君達だけじゃないよ。凄く頼もしい援軍がいるから』

その言葉が耳に届いた刹那、少女達の真後ろから数多の弾丸が降り注いだ。だが、それはドローンのものではなく少女達の味方によるもの。圧倒的な弾幕は少女達に一切の手傷を負わせる事無く、道を阻む敵だけ見ている。強固な装甲を凹ませ、キャタピラを破損させ、電磁シールド発生装置の一部を吹き飛ばした。

当然アバンギャルド君も此方に銃口を向けるが、目の前に張られた青い障壁に全ての攻撃が阻まれ少女達に掠り傷一つ付けられていない。

一体誰が……：そう思った少女達に聞こえたのは、聞き覚えのある声達。ミレニアムサイエンススクールにいるはずの少女。

「ふふ、何とか間に合いましたね、ユウカちゃん」

「ええ、急いだ甲斐があつたわ」

「それでも結構ギリギリでしたけどね」

ゲーム開発部と最も親交が深く、どんな立場であろうとも彼女達を心の底から案じていた早瀬ユウカ。

ゲーム開発部との関わりこそ多くないが、彼女達に必要な情報を搔

き集めた生塩ノア。

ユウカを経由して人知れずゲーム開発部の少女達と仲を深めていた黒崎コユキ。

真つ向から敵対しているリオの除いたセミナー3名。その全員が少女達を助けるために此処に集った。

「ユウカ！ ノア先輩！ コユキまで！」

「にはは！ 助っ人登場です！」

3人しか居なかった戦闘員が6人に増えた。単純計算すれば倍の戦力。しかも、セミナーの3人はゲーム開発部とは異なり大きく消耗していないように見える。それは彼女達が可能な限り戦闘を避ける道を選んだという理由もあるが、なにより大きいのは先行していた2つの部隊が大半の戦力を釘付けにしていたからだ。だから、彼女達は大一番に間に合う事ができた。

「凄い……この戦力なら……！」

急に生えてきた勝ちの芽にミドリは思わず眩く。足止めも決して夢物語ではなくなり、寧ろこのまま撃破する事も出来るのではないかと思ってしまう。

だが、彼女にとって誤算だったのは——増援がこれで終わりではなかった事だ。

「ふふ、まだまだもう一人いらつしやいますよ、ミドリちゃん」

悪戯っぽい、風鈴の音のようなノアの声が聞こえた……その刹那。「遅れてごめん。これからは私も一緒に戦うよ」

コツコツと革靴がコンクリートを叩く音がして、徐々に近づいてくる。その歩みに一切の乱れはない。

聞き覚えのある声。ずっと聞けなかった声。ずっと聞きたかった声。まるで唄うような優しい口調。例えるなら春の陽だまり。彼はこの声音で名前を呼んでくれた。大切な音階を口遊むように。

膝に乗せてもらったり、頭を撫でてもらったり、抜け駆けして彼と二人つきりで出かけたり。少し背伸びしたオシヤレは彼の気を引きたくて始めたものだった。彼の好みは分からなかったけど、それでも大人っぽくなりたくて。

—— 記憶が頭から呼び起こされる。辛いから、痛いから思い出さないようにしていた大切な1ページ。それを強制的に想起させる……共に思い出を育んだ『誰か』が来た。その正体は分かり切っている。それでも、ミドリは自分が生み出した都合の良い幻覚だと思っていた。

だって彼は、首を。血が流れて、斃れて。今も眠っているはず。だからこの場に來れる訳がないし、居る訳がない。だから、これは元氣付けようとしたノア先輩の氣遣い。ミドリはそう思う事にした。録音かメッセージビデオか。少し残酷なことをするな、とは思ったが……確かに気合は入れ直せたのだから結果オーライだろう。帰りを待つ彼の為にも頑張らないと—— そう思っても、何故か現実感が消えない。

どこか懐かしい—— 優しく甘い花の香りがした。
だから、恐る恐る振り返ると。

「先、生……？」

砂塵と血に塗れた真白いコートと連邦生徒会の制服、ボロボロなシャーレの腕章。マフラーのように巻きつけられた赤が滲む包帯。取り繕っても尚色濃い怪我の痕。怖くなりそうなほど白い肌の色。手や足は少し震えていて、一目で危険だと分かる状態。

—— だけど—— そう、だけど。蒼い眼の奥の温度も、その雰囲気も、何もかも。それらが全て彼だった。失ったはずの、失いたくなかった大切な人。手を伸ばせばすぐ触れられる距離に居る。

恐る恐る伸ばした手。彼に触れられずに蜃気楼のようにすり抜けてしまうのが怖かった。けれど、彼はミドリと同じように手を伸ばしてその指先を迎え入れる。そして指が触れ合って、手が重なった。手袋越しに伝わる温度。少し冷たくて、脈も速くて小さいけれど——
「ちゃんと、生きています。動いている。この世界に存在している。1つの命として、尊い生命として。」

「うん、私だよ、ミドリ」

はらりと笑う彼。何時も向けてくれた儂い笑み。消えてしまいうなほど透明で、眼を離せばいなくなってしまうほど不安定。だけど

も、その微笑は何もかも溶かして許してしまうほどに優しく暖かかった。

「先生ッ！」

その全てがあまりにも愛おしくて、戦場の真つ只中だという事も忘れてミドリは先生に飛びついた。彼もそれを一切咎めることなく、寧ろミドリと視線の高さを合わせて抱擁を迎え入れる。

「わたッ、私、ずつと……ッ！」

「心配かけてごめんね。でも、もう大丈夫だから」

0 になつた2人の距離を少しだけ離し、彼はミドリの瞳の涙をハンカチで拭う。それからもう一度だけ微笑みを投げかけて、抱きしめて―― 立ち上がった。彼の雰囲気の変貌を感じ取ったミドリも袖で目元を拭い、銃を構える。見据える先は同じ。アリスの笑顔、ただそれだけ。

「本当は色々と話したいけど……今は目の前の事を片付けよう。語り合いはその後で」

彼は涼やかな目を鋭く尖らせ、眼前の脅威を見据える。先生達が戦い、撃退したレプリカではない。真正正銘、本物のアバンギャルド君。リオが持つ切り札が1つ。それを真正面から乗り越えよう。彼女達の孤独で冷え切った手足と心を温めるために。

「さあ、あと一押し。頑張ろう」

瞳を蒼く灯した彼は静かに開戦の号砲を告げた。

託した者、託された者

ヴェリタスによるアバンギャルド君の弱体化。

殆ど消耗していないセミナー3名の参戦。

規格外の指揮能力を持つ先生の参加。

この3つの要素により先ほどまでの圧倒的な盤面振りが覆され、拮抗すら通り越して有利となった。先生により齎された各種強化とサポート、増幅された戦闘能力。彼の戦術指揮。身体の重さも消えて、思う以上に身体が動く。以前、廃墟等で彼と共に戦った際に感じた感覚を再び覚えていた。

そして——ついに、アバンギャルド君のガトリング砲が根元から吹き飛んだ。更に足回りのキヤタピラも右側が吹き飛び、バランスを崩した相手は姿勢制御が儘ならず地面へと崩れ落ちた。

作り出された二度とない絶好のチャンスの前に、エンジンニア部は準備を整えていた切り札を装填する。

「アバンギャルド君の動きが鈍った今がチャンスだ！ 行くよ、エンジンニア部！」

「はい！ ラジャー！」

「分かった、アレを設置するね」

駆け出す3名。それをセンサーで捉えたアバンギャルド君は走り出しの初動を潰さんとバズーカ砲を構え射出するが——その攻撃は届かない。シツテムの箱と先生の複合機能である青い障壁が少女達の眼前に展開されあらゆる攻撃を塞ぎ止めた。乱暴に虚空を叩く銃弾は準備を進める少女達に一切の手傷を負わせる事無く、アバンギャルド君は自身を終わらせる兵器が目の前で組み立てられる様をただ眺める事しかできない。

障壁の展開時間は10数秒、その間にきっちり準備を終えたエンジンニア部は先生にアイコンタクト。それに確りと頷いた彼はシステムを介した指示を送る。全員退避、確保する距離は最低50m。ヘイローを持つ少女達にとってその程度の距離は殆ど無いに等しい。身体能力を活かし、全員が一瞬で飛び退いた。

「自律追跡機能に加え、防水防塵も完璧」

「更に絶対零度や3000℃を超える高温下でも安定した稼働が可能
な、超々安全認証を保証した……!」

「私達エンジニア部の半年分の予算をつぎ込んで作った最強の――
」

羅列された機能。それは宛ら、詰め込めるものを最大限詰め込ん
だ、子どものおもちや箱のよう。最早何を想定し、何処で使う事を考
えたのか分からなくなるほどに追及した環境対策。下半期の予算の
内70%をつぎ込んだ、アリスが持つ光の剣スーパージョウよりもちよつとだけコ
ストを抑えて作られた、エンジニア部の傑作とも呼べるそれは――
。

「最新式遠隔スピーカー!」

どこからどう見てもミサイルだった
スピーカーとは名ばかりの何かだった。

「ええ……?」

「何、この……何……?」

「やっぱりエンジニア部ってバカの集まりなの?」

ユズは脳のキャパを超えたのか困惑の声を漏らし。ミドリは形容
する言葉が見つからないそれに苦笑いを浮かべ。モモイは真顔で辛辣
な、だが限りなく正論に近い事を言っている。

スピーカーの形がどう見てもミサイルなのは百歩譲って良いとし
よう。だが、底部にはノズルと操舵翼と姿勢制御部分があり、先頭部
にはシーカーが搭載されている。どれもスピーカーには無用の長物
だ。そして、スピーカーに最も重要である音を出すユニットが何処を
見ても見当たらなかった。これは果たして世間一般のスピーカーな
のか。

「スピーカーになんでそんな機能付けるのよ……」

「愚問だね、ユウカ」

「そもそも機能というのはですね! 付けられそうなきに――」

「目一杯つけておくのが鉄則」

「つまりはそういう事さ」

ユウカは『また変なものを作って……』と言わんばかりに顔を顰め

て腕を組んでいる。これが平時ならば小言の1つや2つ言うのだが、今は奇想天外なビックリメカに助けられている立場のためそれ以上何も言わずに大人しく口を噤んだ。

エンジニア部の奇行は今に始まった事ではない。要件定義をしつかりしたのにも関わらずその穴を突くような形で好みや癖を詰め込んだものを提出してくるのだ。それでいてきちんと有用であるし、追加の技術料等も取らないため単純に機能が幾つか増えただけ……と素直に考えられないのはユウカがかっちりとした役職に就いているが故なのだろうか。

「それでは——発射！」

ウタハは手元のリモコンの赤いボタンを押し込み、システムを起動させる。スピーカーのノズルからは赤い炎が噴き出し、次第にそれは青く色を変える。ターゲットのロックも完了し、射角も固定された。そしてスピーカーからは発射までのカウントダウン音声がかかる。外見からは想像できないが、名前の通り一応音を出す機能は備わっていたらしい。

そして、カウントダウンの音声が0になると同時、スピーカーは白煙を虚空に描きながらアバンギャルド君目掛けて射出された。エンジニア部の半年分の予算とマイスター達の多くの時間を掛けて作られた傑作は、それ相応の高い性能を持っている。搭載された爆薬も新素材開発部から取り寄せた特注品であり、各種センサーは米粒より小さい羽虫すら正確に捕捉し撃ち落とす。最終的なミサイルの速度は一般的な長距離ミサイルの秒速6kmを大きく超える第三宇宙速度^{秒速16.7km}。足回りの自由を奪われたアバンギャルド君が逃げられる訳が無かった。発射から1秒も経たずに着弾。轟音が鳴り響き、炎が立ち昇った。爆発の余波で近隣のビルに罅が入り、高温によりコンクリートが融解。黒い煙が退避した少女達の方まで届くが、いつの間にか展開された障壁により阻まれる。どうやら攻撃だけではなく煙等の有害物質すらプロテクトの範囲にあるらしい。

ゲーム開発部の少女は固唾を呑んで事の行く末を見守る。彼との接続により煙に塗れていても尚視界は良好。抉り抜かれた爆心地の

中に佇む巨大な機械。アレは果たしてまだ動くのか。

「……わ、私、あのセリフ言いたくてムズムズする……！」

「お姉ちゃん、それはちよつと我慢して！」

「……ぜ、絶対言う必要ないよ。余計なフラグが立つちやうから……」
涼やかな風が吹き、煙が晴れる。モモイのフラグ発言をミドリとユズが止めたのが功を奏したのか、苦戦を強いられたアバンギヤルド君は完全に沈黙していた。

腕は全て挽げ、足周りもキャタピラが吹き飛び、ダサくも愛らしさが滲んでいなくもない頭部は無造作に地面に転がり落ちていく。消耗していたとはいえ、あの硬度のアバンギヤルド君を一撃で戦闘不能に追いやったマイスター達の傑作が凄まじいというべきか、或いはあの攻撃を食らっても尚原型を留めているアバンギヤルド君が凄いか。

「やはり、私達が作ったスピーカーは響きが良いね！」

「そういう意味のスピーカーだったんだね」

「まあまあ、細かい事は置いときましょう！　兎に角これで……！」

「うん、やつと倒せたね」

苦戦を強いられたアバンギヤルド君の撃破は完了した。此方側も大きく消耗したが、未だ致命的ではない。戦力も戦闘力も残っている上に、切り札はまだ手の中だ。アバンギヤルド君もなくなった今、残るリオの手札はトキだけ。尤も、フル装備の彼女が最も手強いのだが……そこは先生がどうかできる範疇だ。依然として限界だが、余程何処かで足止めされない限りこの作戦終了までは持つ。

——その後、この脆弱な体がどうなるかは分からないが。

「やったー！　倒したよー！」

「み、皆で力を合わせたおかげで、た、倒す事ができた……」

「そうだね。その、何というか……」

「レイドボスの討伐に成功した、みたいな！」

踏破不能に思えた困難を持ち得る力で乗り越えたことが余程嬉しいのだろう。ゲーム開発部の少女達はハイタッチを交わしながら喜んでいる。込み上げる達成感と充足感。確かにレイドボスを討伐し

た、というのはゲームで例えると正しいのかもしれない。だが、これは現実だ。ボスを倒してはいお終い、とはいかない。

「皆、お疲れ様。でも本番は此処からだ」

『そうだね。ネットワークを維持できているうちに移動しないと……取り敢えず、ナビするよ』

「任せても良いのかい？」

『うん。この後を考えると先生は可能な限り温存しておいた方が良いでしょう……それに、今も結構しんどいよね？』

「……隠し事はできないな」

チヒロの気遣いに彼は苦笑いを浮べた。逐一状況を報告し合っていたからか、彼女達は彼の状態をある程度は把握している。勿論ノアほどその仔細を知ってはいるが、今此処に居る彼が限界を幾つも踏み越えた結果だというのは充分すぎるほどに分かっていた。彼はこの作戦の要だ。道半ばで失う訳にはいかない。

そんなチヒロと先生の会話を聞いていたモモイはハツとして。

「そうだ！ 先生、怪我は……」

「大丈夫、とは口が裂けても言えないけど……何とかできる範疇だよ。皆の前なんだ、情けない姿は見せないさ」

彼は「もう遅いかもしれないけどね」と呟き、ノアやユウカ、コユキの方を見やる。モモイにその言葉の真意は分からなかったが、彼の口振りとボロボロの姿、そして彼を見つめるセミナー3人のジト目から何となく事の一端は掴めた。恐らく、彼が無茶を通したのだろうと、

少し冷たい風が吹く。ミドリは汗を冷やすような心地の良い温度に身を預けてると、視界の隅で白が躍っていた。マフラーのように首元に巻きつけられた、マフラーよりも細かい布。その下にある傷跡を彼女は見てしまった。

首に走る一文字。その部分だけ肌色ではなく、歪に変色している。傷口を彩る赤色。よく見れば包帯も赤く滲んでいる。まだ完全に傷口が治り切っていないのか、それとも傷口が開いたのか。それは分からないが、偶々見えてしまった傷は彼女の心に昏い濁りを落とした。

「……ごめんなさい……私の所為で、傷……」

「ミドリの所為じゃないよ。私がやりたくて……君が大切で、守りたくてやった事だ。後悔はない。ミドリが無事なら、それだけで私は良かったんだ」

ノータイムでの返答。彼の性格から容易に予想できた答え。それに少しだけミドリは心が軽くなったが……それでも、自分を許す事はできない。あの傷は必ず痕が残る。傷跡を誰かに見せたくないであろう優しい彼はもう人前で首元を晒せなくなる。彼の自由を、奪ってしまった。その現実が数日越しにミドリの背に重く押し掛かる。あの時の彼の選択を無為にすると分かっている、彼の思いを無駄にするのと分かっている……あの時傷ついたのが自分であれば良かったのにと考えてしまう。

そんな彼女の心の黒を察したのか、彼はミドリのすぐ近く……すぐに触れられる距離まで近寄って、目線を合わせる。それから、誰も聞いたことがないような一際優しい声音で。

「ほら、傷は男の勲章って言うだろう？ 別に傷つくことを肯定するつもりはないけど、ミドリを守った結果だと思えば……うん、最高に誇らしいよ」

誰もが無常の安心感を覚える、聖女のような清廉さと貞淑さを携えた笑みと、その裏に隠れた等身大の青年の顔。聖人のようでありながら、その存在を否定している彼らしい二面性。

どの様に果てようと彼はその生涯で戦いに関する全てを肯定する事はない。そして、戦いや傷に意味を見出す事も。そんな彼の口から零れた、限定的ながらも傷ついた過程を肯定する言葉。

「私はミドリが、皆が無事でいてくれて心の底から嬉しいんだ」

——だから、『自分が代わりになれば』なんて思わないで。

見慣れた笑みを浮べる彼。ゲーム開発部の部室で彼はよくこんな笑みを浮べていた。まるで星を見上げるような笑顔。それに毒気が抜かれたミドリも少しだけ彼に寄せた笑みを浮べた。不格好だと思おうし、背伸びし過ぎだと理解している。だけど、今だけは彼と同じ景色を見たい。そんな少女らしい願い。

明日じゃなくてもいい。今週じゃなくていい。今月じゃなくても。締め切りなんてないから、ゆつくりとミドリのペースで。いつか、ミドリがミドリ自身を許せるように。

彼女の眩しさに目を細めた彼は『ミドリはもう大丈夫』と思い、優しく抱きしめてから距離を離し……アバンギャルド君撃破のMVPたるエンジニア部の方を見やった。

「エンジニア部の皆は行けそう？」

「勿論……と言いたい所だけど」

力なく笑ったウタハは少しふらつき、地面に倒れ込みそうになったが……いつの間にか近くまで来ていた先生が咄嗟に支えて事なきを得た。

「……つと、済まないね」

「……うん、私達は此処までみたい」

「インドア派にはあまりにも無茶な動きをしてしまい……」

「見ての通りだ。最後まで付いて行けず面目ないが、私達は此処で戦線離脱だ」

彼女達は彼女達ですつと無茶をしていたらしい。元々インドア派で、力ではなく知性を武器とする部活。発明品は兎も角として、彼女達自身がこういった真正面からの戦闘に大きく長けている訳ではない。都市内部に侵入してから戦闘に次ぐ戦闘、加えてゲーム開発部への手厚いサポート。体力はどうに限界を迎えていた。

「ウタハ先輩……」

モモイの口から声が漏れる。惜しむような声。この先、3人が居なくとも大丈夫なのかという不安。それらは少しだけ彼女の心に影を落とすが——直ぐに満面の笑みを浮べて、握り締めた小さくとも強い拳を真正面に突き出して。

「ううん、大丈夫！ 助けてくれてありがとう！ さっきのスピーカー、凄くカッコ良かった！ この先は私達でどうにか頑張るね！」

その言葉を聞いてウタハは同じように笑い、拳を握る。そしてモモイの拳と自身の拳をこつんと合わせ、彼女達の勝利を祈った。ちらりと先生を横目で見ると彼は悪戯っぽくウインクを返答。後は任せ

て、だそうだ。

——全く、先生も無茶をするね。この場の誰よりも辛いだろうに。

その言葉を胸の奥に仕舞い込み、ウタハは「モモイ」と名前を呼んで。

「ん？」

「これをあげる。いざという時に役立つはずだよ」

「……うん、分かった」

ウタハからあるものを受け取ったモモイはそれを大切に仕舞い――

——中央タワーに足を向けた。無論、モモイだけではない。ミドリ、ユズ、ユウカ、ノア、コユキ。そして、先生も。

「それでは、皆さん……この先の事、よろしくお願いします！」

「皆、頑張つてね」

作戦開始からそれなりの時間が経ち、東の空には茜色の朝日が顔を覗かせていた。時刻は午前6時前。

現時刻を以て——作戦は最終フェーズに移行する。

その手は誰かを

始まりは宙だった。始点は神だった。人は霊長類として進化した。この星を代表する知性体となった。

人は、星^{カミ}を見上げた。

星が過ぎ去り、文明は滅び、その痕跡はキヴオトスの一部に残るのみとなった。

この星の知性体は彼女達が初めてではない。彼女達が星を拓き、文明を拓くよりも前に栄えていた……当時の『人類』と言うべき存在達は確かに実在した。

彼女こそ前期の知性体が遺した文明の一部。『自分達は此処まで来た』という証明。或いは、文明が害悪になった場合に星ごと知性体を根こそぎにする終焉装置。

「——成長とは、絶望を重ねる事だと思うのです」

黒服は喉を鳴らしながら、何がそんなに面白いのか愉快そうに笑う。嗤う。

彼の根城たるオフィスは凄惨な状態に成り果てていた。窓ガラスは全て割れ、床や壁、天井には幾つもの風穴と亀裂が生まれている。応接用のテーブルやソファも同様に二度と使い物にならないであろう状態。この場で何か戦闘があったのは明確だ。

否、戦闘と呼ぶのは不適切かもしれない。この場で起きた事を正しく言うならば、それは蹂躪。黒服は指先一つで招かれざる客人達を地獄に叩き落とした。

「ば、馬鹿な……何も持たぬ異形^{ゲマトリア}擬き風情に……」

「それは正しい感想です。実際、私には大きな力はありません。あなた達と正面から戦った所で勝算はありませんが……あなた達の脅威を知るが故に、対策をしているのです。元々、万一の場合に備えて彼女を排除するための装置でしたが……ええ、丁度良い慣らし運転ができました。感謝しますよ」

這い蹲り、立ち上がる事すら許されていない侵入者の近く。黒服は

いつも使っている椅子に腰かけ、伽藍洞で見下ろしている。その視線は、その眼差しは先生に向けていたものとは大きく異なる。黒服は明確にこの者達を下に見ている。何処までも対等であつた先生と違つて。

「我々と敵対するか……ッ」

「元より私はあなた達を仲間と思つたことはありませんよ。私はキヴオトスを続けようとする側です。その時点であな達とは相容れません」

黒服はキヴオトスが終わつてほしいかと問われれば、迷わず否を返す。彼は紛れもなく続けようとする側なのだ。滅亡に加担するつもりは皆無であり、滅ぼそうとする悪意は見つけ次第踏み潰すつもりだつた。

——例えば、今回のように。

「ああ、生憎と私の元に名もなき神々の女王は居ませんよ。他を当たつてみると良いでしょう」

「……あの者か。あの者の元にも我々が向かっている。何人たりとも逃れる事は出来ぬ」

その言葉を聞いた黒服は彼にその事を伝えようと思つたが——
——止めた。彼ならば恐らく気付いているはずだ。そして、恐らく彼もこの者達を敵と見做すだろう。

ビナーと戦う際に露出した彼の奥底に根差す根源的な敵意。或いは殺意。キヴオトスの人類には決して矛先が向かないそれは凡そ人の身には過ぎた質量。何が何でも殺してみせるといふ気概を離れた場所からでも感じる事ができた。

この侵入者は『何人たりとも逃れる事は出来ぬ』と言つた。それは果たして何方なのだろうか。神格に至つたビナーすら打ち破つてみせた彼の『殺し』の手腕は半端なものではない。

「あちらの方は彼に任せてしましましょう。私が赴くまでもありません」

「それが貴様の選択か、ゲマトリア」

「ええ、ですから——私は私の仕事を完遂するとしましよう」

辺りが昏く染まる。それは深夜の様な闇ではなく、夜明け前……太陽が昇る前の空の色彩。黒服の持つテクスチャ。同胞の1人であるベアトリーチェの持つ能力を解析し、黒服なりにアレンジを加えた業。およそ戦闘に長けているとは言えない彼が持つ、技術的に再現された世界を侵す術。

「この星の長の座は随分前に代替わりを果たしました。今の時代を作るのも滅ぼすのも今期の知性体です。星を見棄て、滅びを望み、その果てに星に見棄てられたあなた達の居場所は——ここにはありません」

既に滅び去った知性体。その滅亡がどれほどの規模だったのか……それは分からない。何せ記録が残っていないのだ。そして、目の前に這い蹲る者達はその時代に於いてどの様な立ち位置だったのかも依然として闇の中。可能性として在り得そうなのは宗教団体か、何らかの秘密結社か。

だが、それらは些細な事だ。この者達は人類から生じたものでありながら人類を超えた真の知性体であると思いがり、星を見棄て、滅びを招いた。その果てにこの者達は『星に住まう全生命の敵』としてラベリングされた。

そして月日が流れ、今期の知性体が生まれ、文明が作られ、キヴオトスとして発展した。この者達はそれらを全て台無しにしようとしている。

——それはなんと傲慢なのだろう。

「では、決を下しましょう。神に執着した成れ果て」

黒の間で腕を組み、黒服は厳かに切り出す。

「——その妄執に絶望あれ。あなたの解答は46億年前に失敗した」



その日は偶々眠れなかった。色々な事が頭を渦巻いて、それが抜け落ちず、深海に落ちようとする意識は鎖に絡め取られ無理表層部

に押し留められる。

よく食べ、よく運動し、よく寝る。絵に描いたような健康優良児であるシロコにとって、朝4時に迫るまで意識を保ったままなのは非常に珍しい。彼女も年頃の少女らしく夜更かしをする時もあるが、その時でも就寝時間が深夜2時を回る事は今までなかった。

「――」
遠くを見る白と黒の瞳孔。視線の先には高く聳えるサンクトウムタワー。空まで届かんとする天の階。別に連邦生徒会に特別な思い入れがある訳ではないが、あの場所には見知った制服を着ている人がいる。彼と同じデザインの制服を着ている人達が。

「……先生」

彼は仕事で忙しくてアビドスの方に来る余裕がなく、シロコも学校やら指名手配のバイトやらで立て込んでいてSNSでのやり取り程度しか交わせておらず、最近では会えていなかった。少し前まで毎日のように顔を合わせていた人がいなくなってしまった喪失感。文章のやり取りはしているが、やはり顔を合わせて声を聴きたいのが本音だ。

――また、怪我をしたらしい。ホシノ先輩は言葉を濁していたけど私とノノミはちゃんと分かる。本当に危ない状態だという事は。話すときに何となく目が泳いでいて、俯きがちで、掠れた作り笑いが多かった。

壁に預けていた背を離し、ベッドに倒れ込む。沈み込んだマットレスの感触。窓の外から覗く淡い月。それをぼうつと眺めて、スマホの画面を傾けた。時刻と曜日、バッテリー残量が映されて、通知が一件。メールだった。宛先は――連邦捜査部シャーレ。

「ッ！」

その文字を見た途端、シロコの脳が覚醒した。慌てて飛び起きてロックを解除し、通知をタップし本文を開く。その宛先になっていたのはやはりシャーレで、見間違いではない。件名は短く『依頼』とだけ。

本文も件名に比例するかのようには短かった。指定の時間に指定の

ポイントにて待機。一旦シャーレに集合し、そこから指定の場所へ向かうようだ。作戦実行時刻は今から約2時間後。ポイントは……何処なのだろうか。指定された場所に特に何かがあった覚えはない。アプリのマップを開いて座標を打ち込んでもただだっ広い土地が広がっているだけ。シロコはアビドスの外側には疎いため、彼女が知らないだけで再開発やらで何かが建造されている可能性が高いが……。「ううん、考えても仕方ない」

シロコは頭を振って取り敢えず疑問を外側に追い出し、画面をスクロールして更に読み進める。

依頼の内容は予想した通り戦闘。だが、人と戦う訳ではないようだ。添付されたデータに映るターゲットは丸っこい機械で、装甲と装甲の隙間には何本もの触手が垂れ下がっている。その先は鋭い刃のようになっている、これに切り裂かれれば痛いでは済まないだろう。

そして、もう一枚——写真が添付されていた。全身白装束で、仮面と帽子に覆われた人型。服の下から覗く手は彫刻のように真っ白で、凡そ真つ当な生命とは言い難い外見。

これもターゲットなのか、と下の方にスクロールすると……どうやら違うらしい。此方を見つけ次第先生に連絡してほしいようで、仮に接触したら可能な限り逃げてほしい旨が記述されていた。文面からは『絶対に戦わないでほしい』という彼の意志が感じられる。

それ程までに危険なのだろうか。写真を見た限りではそんな事はなく、前者の写真……『無名の守護者』の方が余程危険に見えた。

だが、強弱やらで表せない危険があるのだろう。機械の写真からは単純なまでの殺意と害意が感じられた。人型の写真から感じられたのは……粘つく執念と濁った憎悪。思わず生理的な嫌悪感を覚えてしまうような、どろりとした何かを感じる。

画面をスクロールすると、動画ファイルが幾つか。その中の一つをタップするとファイルが再生される。動画に映るのは画像にもあった機械とメイド服の小柄な生徒。戦闘の様子だ。実際に敵対する前にこうして相手の手札を知れるのは非常にありがたい。特に、何をしてくるのかいまいち分かり難い相手だと特に。

機械の主な攻撃方法は斬撃とレーザー。特に斬撃は触手の本数そのまま手数になるため少々厄介だ。1体だけならどうとでもなるが、数で責められると面倒な事この上ないだろう。瓦礫の山をバターのように切り裂いている事からも切れ味は見取れる。反面、レーザーは砲門がそこまで多くない為、よほどの威力でない限りは大きな脅威にはなり得ない。

他の動画ファイルも似たようなもので、それより下には依頼の報酬等の現時点ではあまり関係ない部分ばかり。シロコは最下段の『作戦同意』を迷わずタップして、メールのタスクを切る。現状、シロコ以外に参加表明をしているのはワカモ、ホシノ、カヨコ、イズナの4名。そして、今しがたもう一人……トリニティ自警団の守月スズミという少女が参加者に名前を連ねた。前者4名と異なり彼女の事は詳しく知らないが、彼が頼ったという事は信用に足る人物なのだろう。

シロコは両頬を軽く叩いて意識を切り替える。緩んでいた思考を引き締め、戦闘が出来る状態へと移行。部屋の明かりを点け、パジャマを脱ぎ、シャワーを浴びる。湯上り後に簡易的なスキンケアとヘアケアを済ませ、軽く体の筋肉を解した後には制服へ着替える。

一連の参加者も大きく増えていた。アビドス対策委員会全員、便利屋68全員、忍術研究部全員、ワカモ。そして、トリニティ自警団ももう一名人員が増えたようで宇沢レイサという名前が名簿欄に記されていた。

アビドス対策委員会のグループチャットも動きが活発になっていて、20分後に校門前に集合に。その文面にスタンプで返信し、彼女も最後の準備へ取り掛かる。

愛銃の状態は良好、サブアームの拳銃も同様に良好。ドローンの動作も正常で、予備も同じ。弾丸やドローン用のミサイルの在庫も潤沢だ。

家の戸締りを済ませ、ロードバイクに跨り目指す場所はアビドス高等学校。夏の足音が聞こえる夜明け前の空気。太陽が昇る前の藍に染まる空の下、少女は駆け出した。

▼

シャーレオフェイス、格納庫。地下と同様に一般の生徒の立ち入りが許されていない場所。作戦に使うヘリの選定をしていたワカモは――
異形と相対していた。

殺意をそのまま形にしたようなワカモの視線。荒事に慣れていない者であれば向けられた瞬間に失神してしまいそうなほど、その意志は黒く輝いていた。

「失せなさい、下郎」

カチャリ、と起こされる撃鉄。底冷えする温度の声に乗る絶大な殺意。それを向けられても異形は特に驚く事も……ましてや退く事もなく。

「おお、そなたがああの者の猟犬か。ああの者の敵を排除する牙にして剣。成程、猟犬が迎えるという事はああの者は居ないのだな」

「誰が猟犬ですか……もう一度言います。失せなさい」

ワカモは一步近づき、銃下部に取りつけられている刃の切先を僅かに異形に触れさせる。それでも尚、異形……ゲマトリアが1人、マエストロの余裕は崩せない。それが酷く気に食わないワカモは仮面の下の顔を憎たらし気に歪めて。

「今の私はあの御方のご命令を受けていません。この意味が分かりませんか、木製人形」

「無論だ。私を生かすも殺すもそなた次第……そういう事だろう」

「私は機嫌が悪いのです。頭の数減らされたくなければ早々に立ち去ってくださいまし。これ以上この場に留まるつもりならば、私も手段を選びません」

ワカモは更に銃を前に出す。刃は服を割き、マエストロの木製の体に浅く突き刺さる。命の鼓動も温度も感じない。一体どんな肉體構造をしているのか甚だ疑問だ。否、そもそもこの個体は生きているのか。この木製人形はあくまで中身を入れるための外装でしかないのではないか。その本体は別の……人間で例えるならば魂でも言うべき何かにあるのかもしれない。

ワカモはゲマトリアとの交流経験が多い訳ではない。無論、ワカモだけではなく大抵の生徒がそうだ。先生が意図的にゲマトリアを生徒から遠ざけていた。先生が来る前に黒服から直接取引を持ち込まれたホシノやアリウス地区を支配しているベアトリーチエ等の例外はあるが、彼が来て以来はそれらも全て彼の管轄になっている。大人の相手をするのは大人である、と言わんばかりに。

しかし、今、彼は不在だ。彼は彼でやるべき事を、やらなければならぬ事を果たしに行っている。であるならば、その相手は彼の懐刀たる自分ワカモがしなければならぬだろう。幸い、予定にない客人のおもてなしは得意だった。

「さあ、どうされますか。大人しく引き返すか、それとも——この場で屍を晒すか」

この来訪が彼を害するためのものだったら有無を言わず木片にしていた。そんな事をしたら彼はきっと悲しむだろうが、ワカモは『必要なこと』と割り切つて躊躇いなく果たせる精神を所有している。つまり、殺害の正当化。罪悪の肯定。

ただ、今回のマエストロの目的はあくまで対話。つまるところ彼に会いに来ただけなのだ。故に二択を持ちかける。逃亡か、死か。

別にこの場で逃しても特別良い事が無いのは知っているが、それでも。対話と相互理解を愛した彼に少しでも顔向けができるように。ワカモ自身が胸を張つて『彼の教え子』と言えるように、こうして似合わない事をやっている。

そして、その祈りの結実は。

「——良かろう。知らなかつたと謂えど主人がいない時に尋ねるのは礼に失っていた。非礼を詫びよう、少女よ」

ギシギシと木が軋む音を立てながら、マエストロは頭を下げる。服装に違わぬ芝居がかった一礼。それを見てワカモは憎らしげに鼻を鳴らして銃剣を下した。しかし、完全に戦闘態勢を解く愚は侵さない。何時でも銃を構えトリガーを引けるように、目の前の人形を貫けるように神経は研ぎ澄ませしておく。

「——だが。このまま去るのは些か興が削げる。詫びも兼ねて助

言を1つ、そなたに提示しよう」

銃口を跳ねさせたワカモの眼前、数舜前まで確かにその場に居たはずのマエストロは影も形もなくなっていた。しかし、声だけは嫌なほど鮮明に響いていて。

「名もなき神々の女王、無名の守護者、その信奉者。それらは1つを片付けた所で解決するものではない。繋がる糸がある以上、必ず因果は保たれる」

それは、いつかの未来の暗示。誰も彼も運命の奴隷であるという証明。存在理由から逃れる事はできない。意味と目的を放棄する事は許されない。そのように生まれてきたから、そのように望まれたから。

それは何も、今挙げた3つだけではない。マエストロも目の前に居る少女も、彼だって。この世の全ては運命の、世界の奴隷だ。役割を与えられ、果たすために疾走を要求される。その道をどれほど拒んでも、嘲笑うように糸を垂らし……世界という劇場で踊る役者と成り果ててしまう。

酷く分かり難い表現であるが、つまりマエストロは『全て片付けたと思って油断するな』と言ったのだ。世界と運命はあるべき残酷さを剥き出しにするタイミングを虎視眈々と狙っている。勝利も敗北も全て一過性。永遠は何処にもない。

その助言を受け取ったワカモは心底忌々しそうに鼻を鳴らし。

「——やはり撃ち殺しておくべきだったでしようか」

と呟き、次見えたときは有無を言わさず破壊する事を決めた。

そして、壁に備え付けられているモニターを見ると既に全員ロビーに人影が集まっている光景が監視カメラ越しに映っていた。集合時間までまだ少し猶予があるが、全員揃っているのならばもう始めても良いだろう。

——相手はキヴオトス前期の知性体と、その遺産。油断は許されない相手だ。

「あの御方の世界で、好きにはさせません」

黒の制服を翻し、彼女は出口へと歩を進めた。

あるビルの屋上。フェンスの上に立ち、マエストロは両手を広げて夜明け前の空を仰ぐ。風が鳴くと靡く服と、カタカタと揺れる関節部。

「必定された結実を覆さんと走る者。運命の末路を受け入れた者。彼
私の溝は絶望だ。幸福な結末などない。必ず誰かが涙を流し、血を流
す」

少女の為に少女を救おうとする者と、大切な者達の為に世界を壊さ
んとする者。

大事に思い、大切に想い、心から愛している。だからこそ譲れない。
君に人として生きてほしい、貴方にヒトとして死んでほしい、抱く願
いはただそれだけ。憎悪ではなく、殺意ではなく。ただ愛と憐憫で以
て奏でられる戦場の旋律。

紛れもなく悲劇であろうそれを前に、彼が挫けず折れず立ち向かう
ならば。

「その結末を覆さんと唱えるならば——私は今一度、そなたを喝
采しよう」

境界線の上に立ち

ネルとトキ。彼女達の戦闘時間は累計で数時間にも及んでいた。極限にまで研ぎ澄まされた集中力。溶かした鉛細工のように伸びる視界と、それに伴い切り刻まれ伸びる体感時間。ハイになっている、と誰もが思うような高揚状態でありながらネルの頭は冷えていた。自身の内側で冷たく現状を俯瞰する自分を飼い慣らしている。熱くなり過ぎないように。

彼女の端正な唇の両端が吊り上がり三日月を描く。宝石の様な赤い眼が蜃気楼のようにブレた瞬間、トキはその場で咄嗟に回避行動を取った。彼女が数瞬間に立っていた場所に降り注ぐ弾丸の雨。上昇した神秘により絨毯爆撃をも上回る威力になった9mmパラベラム弾。それは瞬く間にコンクリートに風穴を空け、都市の稼働機構を粉碎。世の中の物理法則に真っ向から喧嘩を売る異常事態を引き起こしたネルは、同じく物理法則に反する速度で飛翔するトキを睨みつける。

そのまま彼女は脚部をばねのようにならせ——その脚力を解放した。足場になったコンクリートが粉微塵になるほどの速度で空中に飛び出したネルの速度は弾丸に匹敵する。音速を超えた弊害でメイド服のあちこちがソニックブームで切り裂かれるが、それを意にも介さず一直線にトキの元まで飛翔する。空中に於ける姿勢制御の方法は鎖や手足、銃をスタビライザーやバーニア代わりにする程度のため、その自由度は敵である彼女よりは大きく劣るが……『そんな事は知った事ではない』と言わんばかりに突貫。直線加速力で上回る彼女はあつという間にトキの影と重なった。

「アタメは、アタシの距離から絶対逃がさねえ」

不敵に笑ったその顔を殴り飛ばそうとトキは拳を振り下ろすが、ネルは射撃の反動を利用して回避。ネルはそのまま空いている手で銃を構えるが、それも含めて見えていたトキは事前に攻撃を置いている。バチン、と音を立てて空中に奔る紫電。あらゆるリミッターを解

除した超高出力パルス攻撃。高温により服が黒く焦げ、その下の肌に痛々しい火傷痕を刻む。その激痛に怯んだ時間は0.5秒にも満たない刹那であったが、その隙にトキはネルを離れたビルの方まで投げ飛ばした。

通常の生徒であれば五体がバラバラになっても不思議ではないほどのインパクト。幾らネルであろうとも確実に意識を失っている、と確信できる程の渾身の攻撃。恐らくは瓦礫の下に埋もれ、ボロボロになっっているであろうネルを確認しに行こうとトキは身体を向け……。そして、猛烈な勢いで何かに引つ張られた。

「なッ……！」

驚愕を覚えたトキの二の腕に巻きつけられた鎖。あの攻防の隙にこつそりと仕込んだのか。タダではやられないのが何とも彼女らしい。トキは急いで切断しようとして手を赤熱させるが。

「メリーゴーランドは好きか、後輩ッ！」

怒号に似た声を張り上げるネル。全身血塗れで傷だらけではあるがその戦闘力と闘志に一切の翳りはない。彼女は瓦礫を足場に踏ん張りながら、その華奢な体の何処にそんな力があるのか分からなくなる程の膂力で全力で抵抗するトキを容易く振り回し――。

「オラア！」

先の意趣返しと言わんばかりにトキをビルの外壁に叩きつけた。奏でられる爆音は隣のセクションの端まで聞こえるほどであり、たつぷりと乗った遠心力とそれに伴う衝撃によりトキは一瞬意識が消し飛びかけるが、何とか堪える。粉塵で塗り潰された世界の中、立ち上がった彼女が前にしたのは――赤い、眼。

大上段に構えられた、ぴんと張った右足。それがトキにはギロチンの刃に見えた。

「墮ちろォー！」

咄嗟に両腕をクロスさせガードするが、その上からでもネルの踵落としの衝撃は全身を駆け巡った。骨を直接揺らされているかのような重さと痛み。それはトキとネルの立っていた床を一瞬で砕き、下の階へ叩き落とす――落ちた先の階も同様の結末を辿った。落下、

粉碎、貫通のサイクルを10回以上繰り返し、ビルの最下層……地下3階まで叩き落とした。

自身の踵落としにより作られた十数階層分の吹き抜けを見上げたネルは銃のリロードを済ませ、鎖を取り回しのし易い長さにする。サブウェポン……伸縮自在かつ途轍もない強度を誇る鎖はエンジニア部の力作だ。対トキを想定して手数と柔軟性を欲した彼女はエンジニア部に頼み、自身の戦闘スタイルを元にその有効範囲を拡張する武装を搭載させた。

それがこの鎖だ。エンジニア部は相変わらず良い仕事をする。土壇場でこれほどの完成度の武器を持つてくるとは思わなかった。

ネルは先生と合流した際に「傷が無視できなくなったらこれを」という一言と共に渡された注射器を取り出し、躊躇いなく首筋に打ち込む。一般では流通していない高性能ナノマシンが稼働し、ネルの体にある傷を深刻度が高いものから治癒していく。

「倒し切ったって思ったが……随分タフだな」

「先輩ほどではありませんよ」

辟易とした目で見つめる先にはネルに負けず劣らずのボロボロ度合いのトキが立っていた。その顔には痛みが張り付いていて、浮かんだ脂汗と切れた唇から零れる血が端正な顔を汚している。

——トキの電磁シールドのバッテリーは既に尽きている。防御用ドローンに至っては10分も持たなかった。故に彼女は純粹な肉体強度のみでネルの猛攻を耐えていたのだが……それが偉業なのはどういうまでもないだろう。何せ、先の二撃は紛れもなく必殺。最強から繰り出される最強の一撃が、二つも。何方か片方だけでも四肢が吹き飛ぶほどであり、両方とも貰えば光輪^{ハイト}すら砕く可能性を孕んでいた。

ネルの好条件と悪条件、トキの好条件と悪条件。それらを差し引きすると全くの互角。どう見ても千日手だ。やろうと思えば丸一日以上……体力と集中力が許す限り彼女達は全力で戦い合える。だが、それは余りにも不毛であろう。

双方共に狙っているのは、眼の前に立ち塞がる高い壁を超える事。

時間稼ぎ？ 足止め？ そんな腑抜けたことを言うつもりはない。目指すのは完全なる勝利だろう。

ネルは脳震盪寸前、頭蓋骨骨折、肋骨もほぼ全滅し、幾つかの内臓にダメージがある。手足の骨も骨折または骨折寸前。右肩は脱臼し、背骨には罅が入っている。それ以外にも切り傷と打撲だらけで、どうして立っていられるのか不思議な体だ。

対するトキも肋骨や背骨が損傷し、手は粉碎骨折。両脚は無事であるが疲労骨折が見えている。内臓も傷ついており、ネルに負けず劣らずボロボロだ。

何方の傷も自然治癒では補え切れる範囲を大幅に逸脱している。ネルは先生の、トキはリオのナノマシンがあるとはいえ、今後の戦闘に大きな支障を与える傷も多い。トキさえ倒せば良いネルは兎も角として、この後にC&Cの3名と別動隊との戦闘も控えているトキは目で見える状況以上に不利であった。

そして、彼女の不利は続く。無線から受け取った情報によると分断していた先生率いるセミナー3名とゲーム開発部とエンジンニア部の連合部隊が合流し、アバンギャルド君を撃破したらしい。更にC&Cの3名が中央タワーに王手を掛けている状況らしく、隔壁とドローンで応戦しているものの何時まで持つか分からないようだ。

そして、それに伴い———リオから武装の使用許可が下りた。

今の今まで隠していた奥の手。エリドウのリソースを食い潰すが故に使いたくても使えなかった真の切り札。アバンギャルド君も撃破され、都市区画の移動も意味を成さない今であれば……確かに憂いはない。戦力の逐次投入は愚策であるが、最初から全てを晒すのもまた愚策だ。切り札は最後まで取っておく。それが戦術の基本であろう。

トキは半壊している各種ギアをパージし、胸元のリボンに手を掛ける。

「私は、皆様方に勝ち目が無いと申しました」

「あん？」

布の擦れる音が静かに鳴り、リボンが解け落ちる。ポーチが取り付

けられたチエストベルトも外し、彼女はクラシカルなメイド服一枚になつた。

急に目の前で後輩のストリップショーが始まりネルは目を白黒させているが……脳の奥、本能が全力で警鐘を鳴らしていた。拙い、と。武装メイドからだだの丸腰のメイド、紛れもなく脅威度は下がっているはず。なのに彼女にはそう思えなかつたのだ。まるで、目の前の彼女が別の何かに変貌を果たそうとしているような。

「ですが皆様は次々と不利を覆し、リオ様の切り札すら撃破し、限られた手数でこの盤面に王手を掛けました。皆様の力量を見誤り、貶める発言をしてしまい申し訳ございません。ここに非礼をお詫びします」
フリルのついた白いエプロンドレスのリボンも解き、その下のフリル付きのノースリーブシャツも脱ぎすて、黒のワンピースのみに。薄手のスカートが風に翻る。

「ですが……只今、リオ様から武装の使用許可が下りました。全てを使い皆様を撃破しろ、と」

「今までは本気じゃなかつたつて事かよ……ナメやがつて」

「いえ、本気ではありません。ただ、全てを使っていた訳ではありません。ですが、此処からは……全力で、本気です」

そのワンピースも脱ぎ、其処に立っていたのは薄手のレオタード状のインナー一枚となつた彼女の姿。ネルはその姿を具に観察するが……気になるポイントはない。特殊な加工は施されているだろうが、それ一枚になつた所で大きく戦闘力が向上するような仕組みは見当たらず、一見ただ脱いで身軽になつただけにも思えるが、それは違う。あれは、これから使う何かのために必要なステップなのだろう。

——ネルの考えは当たりだった。あのスーツは体を動かす際に生じる電気信号を効率的に伝達するためのものだ。トキの手足のアタッチメント周りもあのインナーと同じ素材でできており、その性質により彼女はアームギア等を自身の手足のように扱っていた訳であるが……それをボディスーツのようにするとはどういうことなのか。

答えは簡単だ。ボディスーツすらも用いる大型の武装をこれから

使用する——ただ、それだけだ。

「先輩のお望み通り、先輩の距離で戦わせていただきます」

飛来するのは、いつかの絶滅に備えた決戦兵器。先生が保有する礼装が一つ、『神殺し』のベースとなった——届かざる者に届くための翼。人がいつか辿り着く最果て、その一端。リオが見出した、世界を救済する術。名もなき神々の女王を殺すために作られた真実。

世界を救済するための剣——それがネルに牙を剥く。

「本来であれば、来るべき時まで使用するつもりはありませんでした。リオ様も、私も。リオ様が仰るには、これは『今期の知性体のための決戦兵器』のようです。滅びを滅ぼすためのカウンターであって、先輩方に振るうものではありませんが、此処で負ければ全てが水の泡と化してしまいます……お覚悟を」

トキの身に纏われる装備。あくまで人体の延長線上にあつた先ほどのまでのアームギアとは異なり、人を搭乗者とする戦闘兵器。全長2mを超える大型のパワードスーツを纏うトキの威容は、これまでとは何かが根本的に『違う』と否応なく思わせる。

ネルの頬につう、と冷や汗が伝う。人生で初めて前にした機械仕掛けの頂き。天賦の才能ではなく、知性と知識により天まで上り詰めた、正に『ヒトそのもの』と言うべき究極。確かにこれならば自身に匹敵或いは凌駕するだろうと彼女は思い——
—— 凜猛に犬歯を剥き出しにして笑った。

「今はスケジュールが押ししております。申し訳ございませんが30分で片を付けさせていただきます」

「ハッ！ やってみろ、クソ生意気な後輩……！」

—— 此処に、ネルは生涯最大の敗北を刻むことになる。



パワードスーツ、アビ・エシユフ。その名前は紀元前1700年ほど前まで遡る。バビロン第1王朝の第八代王。その逸話は戦いが多く、その記録からは王朝に反する多くの勢力を払ったことが読み取れ

る。

リオが装備にこの王の名前を送ったのは、記録の再現を望んだからだ。キヴォトスに反する外敵の排除。例え王朝の記録をなぞるようにキヴォトスが緩やかに堕ち逝くとしても、その選択を悔いない為に。外敵に蹂躪され滅ぼされるのと自身達を選んだ果ての衰退は違う。何も残せないのと、何も残さないのが異なるように。

故に、救済の剣。キヴォトスに存在する滅びを薙ぎ払う、人々を救う、人々が継ぐための刃。

—— 皮肉にも、それは他者を効率的に殺戮する能力に過剰なほど長けていた。

戦闘開始から29分48秒が経過した。この短い間に崩壊したセクションの数はエリドゥ全体の10%に上る。ビル等の建築物は勿論、都市の根幹とも言える稼働機構や管理コンピュータが座する堅牢なタワーも一切切切。広大な範囲が文字通りの意味で更地になった。草木の1つ、生命の息吹の1つすらない不毛の地。それを成したのは戦闘能力が異次元の領域まで引き上げられたトキなのだが……都市の凄惨な状況はあくまで戦闘の余波だ。

これを向けた相手は、唯一人。

「ク、ソ……が……ッ」

仰向けになりながらトキを睨み上げているネル。彼女は完膚なきまでに、一切の言い訳が通用しないほどに負けた。

—— 何度も攻撃した。銃も鎖も肉弾戦も。この場にある全てを武器として彼女はトキを最大の敵と見做し全力全開で攻撃した。その試行回数は数えるのも馬鹿らしくなる程であったが……彼女はトキに一切の傷を負わせることが叶わなかった。掠り傷は勿論、その影に触れることすらできず一方的に叩きのめされ、今はこうして地に伏している。ナノマシンの再生が追いついていないのだ。傷口が多すぎて、深すぎて焼け石に水にすらなっておらず、彼女は勝者を見上げる事しか許されていない。

「——」

驚くことは何もない順当な結末。トキがこの選択をしたあの瞬間、

ネルの末路は決定していた。アビ・エシユフを使うとはこういうことだ。ネルを責める事はできない。寧ろ、たった一人でアビ・エシユフを相手に30分弱も戦えたことは充分誇って良いだろう。ネル以外では1分も持たない。ネルに次ぐアスナですら精々5分が良い所だ。

トキは自身の体をスキャンする。アビ・エシユフの回復機能とナノマシンの相乗効果により、装備前はネルに負けず劣らずの傷であったものにも関わらず8割以上回復していた。恐らく1分以内に完治するだろう。そして、完治と同タイミングで中央タワーの方まで戻れる。先生達、C&Cの移動速度よりも彼女の方が圧倒的に上だ。彼らの突入には確実に間に合う。

トキは握っていたトリガー兼操縦桿を離し、アビ・エシユフ内部に格納していたG11K3を取り出し、ネルの額に銃口を向ける。照準越しに交わる視線。トリガーを引く指が僅かに跳ねるが、彼女は引き金を確りと引いた。乾いた音が炸裂音が響いて、葉莖が音を立てて転がる。

額に銃弾を貫つたネルは完全に沈黙。ぴくりとも動いていない。

トキはネルに勝った。約束された勝利とも呼称されるミレニウム最強の彼女を一切の言い訳が通用しない程に叩きのめした。リオを阻む最大の障害は消え去った。リオの完全勝利は目前だ。それなのに、トキの胸の中に実りあるものは何もなかった。目の前に聳えていた大きな壁を乗り越えた達成感も勝利の喜びも。ただリオの敵を排除した、それ以上の何かを彼女は感じなかった。感じられなかった。

——あまりにも空虚な勝利だった。

ネルに背を向けたトキは足のブースターを赤熱させた。空中に於ける自由度は先まで纏っていた各種ギアに僅か劣るが、それ以外の全てのスペックで大きく上回っている。番狂わせは起きない。強敵はもういない。ネルをも下した今、障害は無いに等しい。

「……終わらせましょう。この、戦いを」

自嘲を含む呟きを漏らし、眼を伏せたトキはこの場から離脱した。

「……そう。ネルは私が回収しておくわ。貴女はそのまま先生達を叩きなさい。最優先はC&Cよ。ゲーム開発部とセミナーは無視して構わないわ」

トキと通信を切断し、リオは椅子の背凭れを軋ませた。無音の空間に良く響く不協和音。それがリオにはアリスの怨嗟に聞こえた。否、先の音だけではない。彼女の耳に届く全ての音が、彼女を責め立てる罵詈雑言に成り果てている。

勿論、幻聴だ。リオに対して口汚く罵った者は居ない。今敵対している少女達もリオを否定しているが、口汚い言葉を浴びせる事はなかった……一名を除いて。だから完全な被害妄想であるのだが、重りを付けられて無理矢理水中に沈められるような感覚と不協和音のような怨念がずっと体に染みついている。

「……私は、キヴオトスを救う。この星を救う」

星を救う——その言葉はキヴオトスに於いて非常に重い意味を持つ。まかり間違ってもヒトが口にしてはいけない呪い、或いは天啓。口にした瞬間から星のために生きる事を強制させられ、あらゆる自由を剥奪された上で星を生かす為に生きる道具に成り下がる。ヒトというカテゴライズからも切り離され、その性質や属性すらも『星』に変わるのだ。先生と同じように。

現に今もリオは徐々にヒトというカテゴライズから距離を置きつつある。その果てに在るのが彼と同じ末路。星を生かす奴隷。或いは、世界の礎。未来のために解体される者。碌でもないのは誰の目から見ても明らかだ。リオにそうなってほしいと思うものは誰も居ない。だからこそリオは自ら進んでその身と心を捧げようとしている。根底にあるのは願いのはずなのに、それは最早呪いの様な強迫観念に似ていた。

……ある聖女。百年戦争をフランスの勝利で終わらせ、異端の烙印を押された上で火刑に処され19歳で生涯を終えたオルレアンの乙女。彼女は神の声……天啓を聞いたとされる。もし彼女が聞いた声

と2人を侵す呪いが本質的に同じであったならば、彼女は戦争から逃げる事などできなかつただろう。それは声が正しいからではない。聖なるものだからではない。幸福を約束するものだからではない。逃げるという選択肢が頭から消えてしまうほど重く、振り払えないほど苦しいものだからだ。

——つまりはそういう事である。星を救うと誓った日からその運命は決まっていた。彼がリオの重荷を下ろそうと必死になるのもそういうった事情が絡んでいる。彼女を自分と同じ末路を辿らせたくない、その一心で今も駆けている。まだ引き返せるから。踏み止まれるから。

彼が本当にリオを想っているのは、他ならぬ彼女自身がよく分かっている。言葉に籠る温度と優しさ。誰もが否定しても、彼はリオを決して否定しなかつた。故に、彼女は退くことができない。だって、自身がこの席から退いたら次に座るのは彼だろうから。

ルベライトの瞳が理知の裏に憂いを灯し、その温度のまま眠る透明な青を見る。椅子から立ち上がったリオはアバングヤルド君のミニチュアフィギュアの前を素通りして……横たわるアリスの前に立った。そのまま彼女は跪く様にアリスと高さを合わせ……細く小さい手を両手で包み込んだ。祈るように。

「……私は、ちゃんと貴女の分まで苦しむわ」

短く告げた彼女は立ち上がり、眼を瞑る。

リオは今、境界線の上に立っている。超えたら最後、もう元には戻れない不可逆の変貌。リオは人殺しを背負う事になる。もう受け入れた事ではあるが、改めて運命が目前に迫ると否が応でも意識してしまう。

作戦決行の準備はもう直ぐ整う。あとはトキに回していたエリドウのリソースを回収し、アリスを殺すだけだ。だから、これ以上先生達との勝負に付き合う必要は無い。無い筈だ。

——それなのに、何故まだ勝負を続けようとしている？

非合理的極まる己の言動にリオ自身が最も困惑しながら……彼女自身の手を見つめる。死を知らぬ手を、これから汚す手を。手を握

り締めると湿っぽい音が聞こえて、鼻孔にするりと寂しい匂いが入り込む。

知っている匂いだった。血と、肉と、花の香り。真白いベッドで横たわる先生から生まれた、燃え尽きる寸前の命の香。それが自身の五感に訴えてきた。まるでこれからする事がどれほど罪深いのかを突き付けるように。

———それこそ今更だろう。罪深さは嫌というほど分かっている。例え誰かに阻まれたとしても、アリスを殺そうとした真実は変わらない。命の取捨選択をしようとした思い上がりは消えることなく、人殺しを選択に交えた罪は拭えない。これを選んだ瞬間から戻れる場所なんて無いのだ。

故に、後は進むしかない。進んで、進んで、血を吐くまで続けて。それから、アリスと同じように誰かに切り捨てられる。お前は要らない、と。そんな結末こそがきつと相応しい。

リオはアリスの髪を優しい手つきで梳かしてから椅子に座る。運命を待つ人のように。

束の間の

「アバンギャルド君を退けたゲーム開発部、セミナーの連合部隊はチヒロのマツピングに従って中央タワーに進んでいた。その中で。」

「……所でさ、先生。ずっと気になってたんだけど……」

「うん？ どうしたの？」

「なんでユウカに抱えられてるの？」

ユウカに横抱きにされている先生を訝し気に見ながらモモイは至極真つ当な疑問を投げかける。エンジニア部を置いて出発する時、ごく自然な流れでユウカに身体を預ける先生と、それに対して一切疑問を抱かず彼を抱き上げたユウカを見てモモイは普通に驚いたのだ。周りを見てもノアとコユキは見慣れた光景のようにスルーして、エンジニア部の皆はどことなく納得した表情。モモイと同じように驚いていたのはユズやミドリだけだった。

「さつきまでは私が抱えていたので、今はユウカちゃんの番なんですよ」

「いや、そういう事じゃないんだけど……」

モモイが聞いたのは抱えるローテーションではなく、抱えられる根本的な理由の方だ。別にローテーションには然程興味は……いや、ミドリが若干ありそうだった。もしかしたら自分も、みたいな顔をしている。それでいいのか妹よ。確かに彼を抱えるのは容易だが、身長差で少し問題がありそうだった。

少なくともモモイが求めている解答を出してくれたノアは悪戯っぽく笑う。それを見ると彼女も苦笑いしか浮べられなくなった。彼女が悪い人でも、怖い人でもない事は分かっている。それはアリス救出の一件で迷いなく協力してくれたことが何よりの証明だ。だが、彼女と関わった回数が少ないため、いまいちどう接して良いか距離感を掴めずにいた。

それは兎も角、取り敢えず解答は貰えたし、別に今すぐ聞かなければならないものでもない。所詮、唯の雑談の一環だ。だから胸の奥の

方に疑問を仕舞おうとした時、抱えられている張本人が口を開いて。「体力は兎も角、身体能力は皆に適わないからね。足の速さじゃ絶対には追いつけないんだよ。それに、この作戦の要はスピードだ。私に合わせて進行ペースが落ちるくらいなら、初めから誰かに抱えられた方が良いんだよ……情けない事この上ないけどね」

「へー、そうなんだ」

「あと、病み上がりだから走るのはちょっとしんどいんだ。動けない、って訳ではないけど、この後にアリスの奪還が控えている以上余力は残しておかないと」

また1つ、嘘を吐く。嘘を吐いて、それを本当のことだと自分に思い込ませる。まだ大丈夫だと言い聞かせて、せり上がる血を飲み下しながら微笑みを浮べた。上手く笑えているか心配だ。ぺたぺたと顔を触っても、分厚い膜を隔てたみたいに鈍い。手に何かに触れている感覚が朧で、顔が何かに触れられている感覚も曖昧だ。

感覚の鈍化。症状の進行ペースが想定より早い。脳内で計算し、カウントしていたタイムリミットを誰にも悟らせずに修正。命のタイムリミットも僅かに減少し、余計に時間を掛けられなくなった。

——アリスの救出までは持つとは思う。だが、その後に敵を相手取る余裕を持つとは思わなかった。ワカモ、ホシノを筆頭とする戦力。彼女達に伝えてある作戦行動。自身の死や意識消失等に備えて保険は掛けてあるが、だからといってのうのうと眠って良いわけではない。あくまで最終手段、という位置付けだ。リオやヒマリも起こった状況を見たら自身の意図や敵の察してくれると考えているが、彼女達にやらせたくはないのが本音だ。

何せ、アリス救出後に起こるのは——正真正銘の殺し合いだ。生徒と生徒の戦いではなく、今期の知性体と前期の知性体……互いの絶滅を掛けた血みどろの激突。続きを望むものと、終わりを望むもの。真っ向から対立するがゆえに激突は避けられない。生徒達の消耗、先生の損耗。対する相手は万全。若干分が悪いと言わざるを得ないだろう。

とは言いつつも、相手の戦闘能力自体は大した事ない。先生程度な

らば余裕で縊り殺せるが、腕の立つ生徒であれば数人纏めて制圧可能である。だが、相手の真骨頂はその抜け目のなさ執念深さ。兎にも角にも質が悪いのだ。我儘だが、生徒に相手をさせたくない。

加えて、この戦いに神聖十文字デカケラマトンも乱入してくるかもしれない。そうなった場合は本当に最悪だ。反則技大人のカードの全力使用も選択肢に入れなければならぬだろう。

それはつまり事象改変。ビナーとの決戦の最後に使用した、世界の法則を蹂躪する彼の獣性。進んで使いたい類のものではないが、使わなければならぬなら迷いなくカードを切ろう。それを使用して足止めしている間に天ネガ・セフィラ命で本体を消し飛ばす……それが現状できる唯一の攻略法だ。

次に考えるのは、どの柱が顕現するのか。ビナーは少し前に機神体を8割以上消し飛ばした後のため候補から除外。ケテルとマルクトは色々特殊なため除外。アレは最初にして最後の剣。今この場では出て来ない。であればコクマー、ケセド、ゲブラー、ティファレット、ネツアク、ホド、イエソドの7柱。

この中で最も可能性が高いのはホド、次点でケセドだろうか。何方も強敵だ。神格クラスを相手に無傷で勝てるとは思わない。ビナーは運が良かっただけだ。権能域に在る者達は内臓一つで済むほど生易しい相手ではないし、幸運に助けられる状況がいつまで続くとも思わない。最低でも腕一本は覚悟しなければならぬだろう。

——先生は懐の奥の大人のカードをワンフレイズで起動できるように準備し、クラフトチェンバーに礼装をセッティングする。アビドスの一件が終わってから演算に改良を加えたため、正当顕現が完了するまでの時間は多少なりとも短縮できた。1秒が命取りになる対神格の世界、時間短縮という進歩は文字面よりも大きな意味を持つ。敵の生存を1秒も許さない、敵を最速かつ最高効率で滅ぼす……という点で。

——本当に、どうしようもない。先生は胸の奥で己を嘲笑った。無様で、醜悪で、滑稽で、愚かで、なんとも情けない。キヴオトスに来て、多くと関わり、その果てに生徒の明日を希った。その為な

ら何でもした。世界の救済なんて馬鹿げた夢物語を大真面目に完遂しようと駆け抜けた。

多くのものを踏み付けた。多くのものを置き去りにした。多くの世界を殺して、多くの人を見殺しにした。そんな自分は肯定できない。肯定するつもりもない。自分を大事に思うことも、愛することも止めた。ヒトとしての当たり前なんて随分前に放棄して、ヒトである事すら放棄して、今ここに立っているのは果たして『彼女と約束したあの日と同じ自分』なのか、と何度も思った。こんな……邪魔者を排除することばかり上手くなった自分が。

何度も悩んで、答えは出せず堂々巡りして、末期に得た唯一の結論……彼の誓い。それだけが彼を今も突き動かしている。この先の尊い未来を、自分以外のあまねく全てに齎さんがために。

そうして一人で先を見ていた先生の顔を最も近くで眺めていたユウカは大袈裟に溜息を吐いた。また何か——誰も見ていない場所を思考の渦に入れている。ノアが彼とリオがどこことなく似ている、と言った理由が今更ながらに分かった。考えた事、下した結論を誰にも言わずに呑み込むところが特に。

唯一違う所は考えだけでなく傷も痛みも涙も呑み込む事だろうか。誰にも気づかれない様に。誰にも悟られない様に。何もかも全て、世界そのものを背負うような——希望の殉教者。今も彼は彼方へ向かう巡礼の旅を続けている。その道中に咲いた数多の幸福と笑顔に救われながら。

その果てに彼はきつと鐘を鳴らすのだ。多くの人々のために。多くの幸福のために。彼を突き動かす正確な理由は分からないけど……きつと、ただ一つ裏切れないもののために走っている。

——それが、どうしようもなく哀しく思えて。貴方を独りにしなくなかった。

「ちよつと、なんて温いものじゃないわよ。どうして意識があるのか不思議なくらいで……あなた達と合流する少し前なんて、蹲って震えながら血を……」

「——ユウカ」

彼にしては珍しい声だった。咎める意図等は一切ないが、言葉を静止する言霊を含んだ少し悲し気な声。この期に及んでまだ誰にも心配を掛けたくない、という意図が透けて見える彼の視線はユウカの瞳を貫いた。輪郭を残す孤独と寂しさ。誰も埋める事が叶わない、切り離せない一部になってしまった欠落。

——でも、それでも。

「この子達に余計な心配を掛けたくないのは分かります。ですが、今の先生の状態はある程度共有しておかないといざという時に適切な行動が取れません」

「最優先はアリスの奪還だよ。私じゃない。皆が何のために多くを乗り越えて此処に來たのか……そこだけは間違えないで」

彼がアリス奪還の邪魔になった場合、迷わず見棄てる——言外に彼はそう言っていた。邪魔になった場合、というのはよく分からないが……否、分かっている。だけど分かりたくない。だって彼が邪魔になるという事は、彼が使えなくなった時。それはつまり、彼が死体になった時だろう。死体なんて持っていて重いだけだから、そんなものは捨ててほしいと言っているのだ。

勿論、これ以外にも想定できるパターンはあるだろう。例えば彼が指揮等の戦闘行動が出来なくなった場合。そのような場合……まだ生きている状態でも使えないと判断した時、彼は自身を捨ててほしいと懇願した。

まるで自身を道具や歯車だと思っているような、血の通っていない言の葉。彼の意図に至った時、ユウカの感情は容易く沸点を超えた。否定してほしくて、そういう意図じゃないと言ってほしくて見下ろした双眸。赫と蒼がマールを描く眼に灯る温度は何も答えてくれなかった。不正解だと言ってくれなかった。思わず彼女は抱えている彼の体を固く握る。皺になる血で汚れた白。

「そんな、ボロボロな体の先生を見棄てるなんて……ッ」

「ボロボロなのは皆一緒だよ。私だけが、って訳じゃない。皆、頑張ってる。頑張ってる皆の邪魔をしたくはないんだ。だから、お願い」

皆、もうボロボロだった。損耗度合いが酷いのはぶつちぎりで先生

であるが、生徒達も大なり小なり消耗している。エンジニア部は脱落し、ヴェリタスも通信維持に掛かり切り。ゲーム開発部はアバンギャルド君との戦いで大きく消耗し、ノアは猛者との連戦で限界の底が見えている。比較的マシな方のユウカとコユキも体に疲れが現れ始めていた。別動隊として動いているC&Cも大体同じであろう。

ドローンや都市防衛機構、アバンギャルド君。彼女達はそれらと真つ向から相対し、その全てを乗り越えてきた。エリドゥに来てから気を休める瞬間は片時もなく、ずっと何かと戦い続けて……その先に掴んだ希望の光。

此処に来るまで多くの協力があった。多くの願いがあった。それを自分の弱さで踏み躪る訳にはいかない。

眼を伏せた彼は小さく咳をした。けほけほと弱々しい、けども薄ら寒い嫌な汗を思わず浮べてしまうような音。口元を覆っていた彼の手には赤い液体がこびり付いていて、口の縁からは同じように赤が垂れている。否、口だけでない。鼻からも血が垂れている。

先ほど……合流前も、こうやって彼は血を吐き出していた。中世の頃に行われた瀉血という血を意図的に抜く医療があるが、そんな生易しい言葉で言い表せる領域はとうの昔に超えている。吐き出す血量と、入れる血の量。それが今はトントンなのだ。そんな状態の彼を……否、彼がどんな状態であろうと関係ない。ユウカは彼を見棄てるつもりは皆無だった。それがどれほど愚かな選択であろうと、彼のためならば喜んで愚者になろう。

「……私は、絶対に先生を見棄てませんから」

彼に言い聞かせるように、自分自身に言い聞かせるようにユウカは呟く。見棄てないし、見棄てさせない。彼が望んだハッピーエンドに彼が居ないなんて、それは唯の悲劇だろう。だから、全てを笑い飛ばせるような喜劇の元へと彼も連れて行く。嫌と言っても絶対に聞いてやらない。それが、彼の果たすべき責務であり役割だ。

——この場で最もアリスと話さなければならぬのは彼だろうから。喧嘩別れのような形で離れ離れになってしまつて、それから

一度も言葉を交わせなくて。アリスはきつと、先生がアリスの事を嫌っていると思いい込んだままだろうから。彼女はきつと、あの日と同じように塞ぎ込んでいる。

「……会長に連れて行かれる前、アリスちゃんは泣いていました。先生を傷つけてしまつて。嫌われたと思つて。だから、絶対アリスちゃんと話してください。それまで脱落なんて認めません」

「……そっか。頑張る理由が一つ増えちゃつたな」

先生がアリスを嫌うなんて、そんな事は天地がひっくり返つても有り得ない。例えその手で首を切られようとも、彼女の手で殺されようとも……彼女がどんな彼女であっても、永遠に大切な生徒だ。嫌う事はない。ずっと愛したままだ。これまでも、これからも。

また1つ頑張る理由が、負けられない理由が増えた先生はその心地の良い重みを心の奥底で抱きしめて……自分の所為で蔓延してしまつた重苦しい空気を薙ぎ払うように冗談めかした笑みを浮べた。

「ま、私も易々とお荷物になるつもりはないよ。アリスを助けたくて、何度だつて笑つてほしくて体を引きずりながら此処まで来たんだ。全身の血が尽きるまで戦うよ」

「先生が言ううと冗談に聞こえませんか？」

くすりと笑うノアに釣られて、皆も少しだけ張り詰めた空気と表情を緩めた。だが、完全に緊張を解いて気を緩めたわけではない。緊張と落ち着きの狭間、人間が最も集中できる状態へと遷移している。最後にして最大の戦闘を前に理想的な心持ちと言える。

「……拙いね。武装が起動した。チヒロ、データは拾えてる？」

『うん、拾えてる……何か悪い冗談じゃないかって思つちやうようなデータがね』

チヒロの目に映る、いつそフェイク映像だと言つてほしいくらいの非現実。突入前の先生の口振り、リオの性格。隠し玉があるとは思つた。いざという時はそれを迷わずぶつけてくることも。だが、此処までとは思わなかった。

ミレニウムに於ける最強。約束された勝利のネルが手も足も出ず一方的に叩きのめされているなんて――！

『……先生、何分持つと思う？』

「30分が限度。それ以上は多分しんどいはず。ネルもかなり無理をしている。あの傷でアビ・エシユフを装備したトキを長時間相手にするのは現実的じゃない。アスナ達は？」

『もう中央タワーに到着してるよ。動かす？』

「いや、このまま合流まで待機してもらおうよ。今のトキが相手なら私達も全戦力でやらないと……それでも、かなり分が悪いけどね」

先生達の到着とトキの到着、両者を比較すると前者の方が僅かに速い。その間に配置と作戦伝達を済ませ、真つ向からトキを迎え撃つ。そこまでやつても勝率が5割を大きく下回るため、彼女の規格外さが伺えるが……。

「その辺りの無茶を通すのは私の仕事だ。必ず突破口は作るよ」

無茶や道理をこじ開ける事こそが先生たる彼の役目。ヒトの手で作られた被造物である以上、完璧はない。必ず何処かに死角や欠落がある。幸い、その辺りのウィークポイントは事前に知っていて……其処を見抜くのに長けた優秀な『眼』を持つ生徒はちゃんといえるのだ。勝ち目はないが、希望はある。

彼は流し目でユズの方を見ると、彼女はきよとんとした顔をしてから少しだけ気恥ずかしそうに顔を赤らめながら眼を逸らした。いくら自ら進んで一步を踏み出す勇氣を持たたとはいえ、まだ他者と視線を合わせる事には慣れていないのだろう。だが、誰とも視線を合わせないように俯いていたこれまでを鑑みれば充分大きな一步と言える。

その成長が何だか無性に嬉しくなつて、彼は笑みを浮かべ……その表情のままユズにひらひらと手を振った。すると、彼女は状況が呑み込めていないのにも関わらず困惑を浮かべながら手を振り返してくれた。どうやら少し困らせてしまったらしい。ごめんね、という意図を込めて彼がウィンクを1つすると……ユズの顔は耳まで真つ赤になった。「先生ってウィンク上手いですよね」

「そうかな？ 練習とかはしてないんだけど……」

実はしよつちゆう片目を潰されたり抉られたり失明したりしているから得意になつてるんだよね——なんて事は言える訳もなく、

彼はユウカの疑問に曖昧な答えとも言えない何かを返す。

———そんな雑談と擦り合わせをしている内に少女達は長き作戦の終点、エリドウ中央タワーの元まで辿り着いた。

結末に至る一

目の前に聳える中央タワー。今回の作戦の終点にして最終目標。エリドゥの中心地にアリスはいる。残酷な言葉と運命を突き付けられ、皆の為にその身を消そうとした――あまりにも健気で、純粹で、透き通る青の少女が。

そしてまた、この場所にはリオもいるのだろう。ビッグシスター。テレスクリーンの監視者。ここはオーウエルが綴ったオセアニアではないけど、その徹底した管理……感情を交えない合理性を誰かが皮肉って付けたあだ名。不確定を徹底的に排除したビッグシスターの根城はまるで地獄の門のように少女達を待ち構えていた。此処からが本番だと言うように。

実際、此処からが本番だ。今までの全ては前座。この作戦はアリスの奪還を成し遂げて初めて成功と言える。気合を入れなければならぬのはこれからだ。あのリオが中央タワーに何も配置してないなんてことは有り得ない。都市内部に張り巡らされた防衛機構よりも数段高性能かつ厄介な物を多数備えているだろう。それも、途轍もないほど高い確率で。100%と言い換えてもいい。

――これから起きる戦いは、今までの道中の何処よりも厳しい戦いになるだろう。

「……………ここが中央タワー」

「アリスちゃんが居る場所……………」

ごくり、と生唾を呑むミドリとユズ。3Dマップや伝え聞いていた情報からある程度の推察はしていたが、改めて目の当たりにするとその規模に気圧されてしまう。これと真っ向から戦わないといけない。アリスを助けるために。頼もしい戦力は多くいるけど、それでも不安になる。

ミドリは横目で先生の方を見ると、彼は何時にも増して真剣な表情をしていた。日常の優しい笑みや雰囲気は奥底に仕舞われ、不撓不屈の精神ただ一つを武器にする戦士としての顔。鋭い眼。氷漬けにされたように冷たい表情。顔に付着した赤い血と、口から零れる淡い

息。瞬きの刹那に消えてしまいそうな蜃気楼のようでありながら、地に足が着いている。対立する二項を矛盾なく同時に内包する姿は妙に色っぽかった。

争いを好まない日常の象徴の彼。争いに過剰なまでに高い適性を持つ彼。大輪の花のような笑顔が一番似合うのに、今は流血と傷に塗れている。こんな場所に最もいるべきではない筈なのに、この場所に最も適していて。

もうこんな事には絶対巻き込まないと、ミドリは一人空に誓った。そうして、ちよつとだけ湿っぽい雰囲気になった一同の空気を振り払うように——太陽のような少女が人差し指でタワーを指して。

「……よし！ 此処まで来たなら一気に駆け上ろう！ ラストダンジョンだよ！」

「待ちなさい、モモイ」

一目散に駆け出そうと大きな一步を踏み出したモモイであったが、その歩みはユウカが彼女のジャケットを引っ張ることによって挫かれた。動こうとした方向とは真逆の力が加わったことにより首が若干詰まったのか、華の女子高生が出してはいけない声が鳴る。涙目になった少女は愛らしく頬を膨らませて。

「引っ張る事ないじゃん！」

「先走るのは良くないわ。最後こそ油断しないの」

ぐうの音もでない正論により何も言えなくなったモモイは「それはそうだけどさあ」と呟きながら、早めていたペースを落とす。斯く言うユウカとてモモイの気持ちは痛いほど分かる。空に描いた空想の結実が今や目前に迫っているのだ。逸るな、という方が無茶だろう。だが、それでも心を鬼にして言わなければならぬのは一時の油断が大惨事になるからで。特に、こうしたゴール前は最も気持ちは緩みやすい。手練れならば必ず手を打っている。遊びがないリオも同様だろう。故に、万全を喫する必要がある。

——つまり、別動隊として動いてくれていた彼女達との合流。エリドゥ攻略における大きなフアクターを担った、最強のエージェンツ集団たるC&Cの3人が入り口前で待機していた。

「みんなー、待ってたよー!」

元気な声の主はアスナであり、此方に向かって大きく手を振っている。彼女の表情に疲れの類は一切見えず、傷はおろか服も殆ど汚れていない。見れば、他のメンバーも大体似たような状態であった。流石と言わざるを得ないだろう。多くのドローンや都市の防衛機構を押し付けてしまったのにも関わらず、彼女達はその全てを一蹴したのだ。

彼女達が撃破したドローンの数は凡そ2000体。都市の防衛機構も彼女達の通り道にあったものは全て破壊している。ネルに負けず劣らず、彼女達も大概災害のような奇跡を辿っていた。

「ご主人様も久しぶり!」

「うん、久しぶり……あの時はありがとう。C&Cの皆が居なかったら、私は此処に立てていなかった」

ずっと言いたかったお礼。あの時守ってくれて、助けてくれてありがとう。皆が命を繋いでくれたから、この場に立てている。こうやって大一番に自信を持って命を張れるのだと。彼女達が伝えてくれた命の温度の暖かさをどうしても言いたくて。

勿論、この言葉は通信越しに伝える事もできた。だが、どうしても面と向かって言いたくて。我儘だと知りながらもこれだけは曲げられなかった。

先生の深い感謝を受けて、少女達は誇らしそうに笑みを浮べる。今、生きている彼を見て『ちゃんと守れた』という実感が数日越しに湧き上がった。何もかもを吹き飛ばすような向日葵のような笑顔をもう一度見れて、彼女達の体に喝が入る。まだ頑張ろうと思える。アリスの為に、部長ネルの為に、先生の為に。

アスナに至っては我慢できなかったのか、彼に思いつきり抱き着いていた。もしかしたらその奔走さの裏に人並の寂しさを感じていたのかもしれない。或いは、守れなかった負い目。その真意のほどは分からないが彼女は彼との再会をととても喜んでいた。

その抱擁を彼は優しく迎え入れる。さながら人懐っこい大型犬にじやれつかれている気持ち。嫌な気持ちなんて持てるはずも無いが、

こうやって彼女に抱き着かれていると此処が戦場だという事を忘れてしまいそうになる。それほどまでにアスナは彼にとつて日常の一部だった。シャーレにふらつと現れて書類仕事を手伝ってくれたり、家事をやってくれたり。或いは気分転換に外へ連れ出してくれたり。彼女は彼の日常を鮮やかに染めていた。そして、逆もまた然り。

何時までもこうしていたいのは山々だが、今はやらなければならぬ事が山積みだ。合わなければならぬ生徒と、止めなければならぬ生徒。彼女達が待っている。だけでも幸せそうな彼女を引き離す気にはなれなくて。押しが弱い、お人好し、と色々な生徒に口酸つぱく言われるのも納得できるほどに甘々だった。

「アスナ先輩、ご主人様が困ってます。後で幾らでも抱き着いて良いので、今は」

「はい！　じゃ、後でね、ご主人様！」

そんな彼とアスナを見かねてアカネが出した助け舟。当然の如く彼の意見を挟む余地はなかったが、別に良いだろう。生徒との交流や触れ合いはいつだって彼の原動力だ。

思い出は多い方が良い。それが思い返すたび胸が引き裂かれるような痛みを覚えるような辛い思い出でも。頬が緩むような優しい思い出も。それが生きた証になる。

終わりは避けられない。それは先生もそうだし、彼以外もそうだし。人は、生き物はいつか終わりを迎える。だから、その時まで沢山のものを重ねるのだ。喜び、悲しみ、楽しみ、怒り、憎しみ、愛。成功、失敗、達成、挫折。まだ見ていない景色を目指して、多くの刹那を。やり残しはもう無いと、胸を張れる人生。そのために今も皆が走っている。

だから、その結末はきつと——美しくあるはずだ。

「それにしても、随分遅かったね。何かに苦戦してたの？」

「長く苦しい戦いだったよ……」

「うん、強かったね……」

カリンの疑問に寄って想起される強敵のアバンギャルド君。暫く夢に出てきそうだし、これからゲームの敵キャラをデザインする時に

アレに引つ張られそうだった。紛れもなくダサイのに悪夢のような強さ持つ、『なんか世界観違くない?』と思うリオ渾身の怪作。散々ボコボコにされ、銃で撃たれまくって、増援4名とエンジニア部のおつきでおきで漸く倒せたアレの事は暫く思い出したくない。再び口にする若干トラウマになりかけそうだ。

それ程までに強烈なインパクトと爪痕を残したアバンギャルド君であるが……この少し後にもう一度見る事になるとは知る由も無かった。

「エンジニア部は?」

「エンジニア部は先に離脱しました。アバンギャルド君と戦う時、かなり体を酷使したようで疲労がピークに……」

「アバ……? そうか。いてくれると頼もしかったんだけど……いや、贅沢は言えないな。今この戦力が集えただけで充分だよ」

カリンは辺りを見渡す。人員は居れば居るほどいい。本来なら一人で陽動を担っているネルを除いた全メンバーで臨みたかったが、そうも言っていられないだろう。ないものねだりはできない。それに、先ほどもではC&Cの3名で突入する腹積もりだったのだ。極めて優秀な指揮官と、信頼できる戦力が追加で6名。増援としては申し分ない。彼女達はC&Cが自信と信頼を持って背中を預けるに足る戦友なのだから。

『本当にいいの?』

「うん。アレを起動した今、リオに私達を直接妨害できるリソースはもう残ってない。それに、仮に妨害されても私が持たせるさ」

『……分かったよ。先生がそう言うなら信じるよ。皆は?』

『先生の決定です。従います』

『うん、私も。マキは?』

『勿論やるよ! 先生、期待しててね!』

「頼もしいよ、本当に……現時刻を以てヴェリタスの全メンバーは中央タワーのメインコンピュータのハッキングを。乗っ取らなくてもいいから、絶えず負荷を掛け続けて」

その言葉を最後にヴェリタスとの通信を切断した彼はにこやかに

笑いかけて。

「……それじゃ、情報共有と行こうか。私達に残された時間は少ないから、なるべく手短にね」



突入からの互いの動き。それらの要点を掻い摘んで、必要と思われる情報だけを伝達する。特に重要なのはこの場に居ないネルの所在。4人で担っていたはずの陽動を今は彼女一人で担っていると知った時は全員驚いていた。どう考えても無茶であるが、不思議と彼女ならばどうにかなってしまうと思う。あの出鱈目さは皆が良く知る所だ。

それらを話し終え、いざタワーの内部へ足を踏み入れようとした――そのタイミングで、先生は徐に口を開いた。まるで、この先にはまだ行けないと言わんばかりに。

「さて、悪いニュースと悪いニュースがあるけど……どっちを先に聞きたい？」

「良いニュースはないんですね」

「ないよ。残念なことだね」

「……じゃあ一つ目の方から」

苦笑いを浮かべながら言葉を紡いでいた先生はシームレスに表情を切り替える。ここまでも死線だった。安心して、安定して勝ちを狙えた戦いはない。必ず何処かに賭けがあった。そして、この先からは更なる死闘となる。

「単独で陽動を担っていたネルが少し前に撃破された」

「ネル先輩がッ!?!」

此方の最強の戦力であるネルの撃破。その言葉の重みは思わずユウカが声を荒げてしまうほどであり、他のメンバーも似たような感情を抱いた。全員の背筋に冷たい汗が流れ、緊張と焦りが形になったように心を押し潰す。ごくり、と生唾を呑む音。銃を握り締める手が力が籠った。

「……部長を撃破したのは」

「皆の想像通りだよ」

やはり、と思いきやアカネは歯噛みする。ドローンではネルに傷一つ付けられない。防衛機構も同様だ。アバンギャルド君ですらネルを相手にすれば10秒も持たないだろう。であれば、ネルを倒したのは一意的に決まるというもの。

あの時、命令無視も承知で救援に向かえば良かったのか。いや、あの場では選択が最善だった。ネルが撃破されても、されなくても、結局今も昔も最優先事項はアリスの奪還である事に変わらない。だが、その為に……アリスを助けるためにネルを切り捨てたのではリオと同じでないのか。そうやって何かのために何かを捨てるやり方に異を唱えたくて、そんな簡単に割り切れないから此処まで来た。

思考が悪の坩堝に向かう。ああすれば良かった。こうすれば良かった。どうすれば良かった。その応酬。戻れない時間を想定する行為。後悔に歯止めは聞かず——いや、それは今考える事ではない。思考をクリアにして、雑念を頭から追い出す。

「では、もう一つの悪いニュースは……」

「——噂をすれば、だね」

ネルが撃破された、という事は彼女が押し留めていた最大の戦力がフリーになるという事。そして、今皆が居るのは最後の要である中央タワーの入り口前。門番が居るのは道理というものだろう。

「下がって」

彼の短い言葉と同時に、朝を告げる茜差す空に青白い閃光が奔る。それはビル数棟を瞬時に溶解、貫通せしめ威力を一切減衰させずに全員を焼き尽くさんと呑み込んだ。全てのリミッターが外された最大火力。対大型兵器、対拠点、対城を想定した殲滅武装。それは例えへイロー持つ生徒であっても容易く屠れるほどの威力を持ち、直撃すれば灰すら残らないだろう。

「——ッ」

それを真正面から受け止めるのはシツテムの箱を持ちシールドを展開している先生だった。決して余裕とは言えない表情。これまで

受け止めてきた攻撃とは訳が違う。これは紛れもなく人殺しの為の力。埒外の耐久力を持つ少女達を一切の抵抗を許さず、苦痛を感じさせる暇もなく慈悲を以て殺すために生み出されたエネルギー砲は、消耗を重ねていた先生にとっては身に余るものだった。

放出される莫大な熱量。皮膚が焼ける。髪が溶ける。服が燃える。肉が焼け、血液が沸き出す。だが、意地でも生徒に攻撃は通さない。熱で揺らめく視界。眼球が沸騰するような環境下でも、彼は目を見開いて視線は逸らさず。膝は突かない屈さない。思考を止めず、疑問は尽きない。

——リオの性格はよく知っている。彼女は無駄な犠牲は好まない。だから、この場で全員を纏めて消し炭にするような攻撃は絶対しないのだ。トキの独断とも考えにくい。彼女も別に自ら望んで誰かを傷つけるような生徒ではないのだ。

管理しているリオにも、装備しているトキにも気づかれずに解除されたリミッター。

先生だけでなく、全員に向けられた無差別な殺意。

——彼女達に他人を傷つける事を強要する悪意が潜んでいる。

「巫山戯るなよ……ッ！」

腹の底から零れ出た本音。腸が煮え繰り返るような激情を覚えたのは久方ぶりだった。それを向ける相手はリオでも、トキでもない。彼女達の心を、善意を、希望をこんな形で踏み躪った敵だ。心の奥、誰にも見えない場所で静かに殺意を研ぎ澄ませながら彼は障壁の強度を一段階高める。それに伴い、全身の毛細血管がぷちぷちと音を立てて千切れ、皮膚の下に血が滲んだ。

永遠にも思えたが、実際に光を受け止めた時間は10秒にも満たない。閃光が途絶え、溶け爛れたアスファルトに降り立つのは——
アビ・エシユフを纏う彼女。

「さつき振りだね、トキ」

「……ええ。健在で何よりです、先生……」

先生と向かい合う彼女の顔には疑問が色濃く滲んでいた。恐らく想定にない出力であったのだろう。トキの目に映る各種パラメータ

は制圧用に殺傷能力が落とされている事を示しているのに、先の威力はどう見ても殲滅火力だった。先生が防いでいなければ今頃全員灰になっていただろう。苦い思いを抱えながら、彼女はシステムからではなくハードの面から物理的に威力を制限する。これで恐らく大丈夫であろうと思いつながら。

そして、先生の疑念もトキの顔を見て確信に変貌した。やはり彼が根絶やしにしなければならぬ悪意は居る。自分達の都合と理想を傲慢にも押し付ける、反吐が出るような大人。子ども達の生き方を、選択を、尊厳を踏み躪る外道。

そんな者達の相手は大人が務めるべきだ。間違っても彼女達にやらせる訳にはいかない。

だが、それは後の話。今、向き合わなければならないのは――
眼前に立つ機械仕掛けの究極。先生は眼の蒼を深めて対象の分析を行う。

両腕のガトリングガン。背部にマウントされたエネルギー砲が2門。全身に付けられたスラスト、ブースター、バーニアで機動力も高い。装甲はアバングヤルド君のものよりも更に硬度が高く、電磁シールドも高出力。凶体は大きいため小回りが利き辛いように思えるが、トキの卓越した技能によりそんな隙は消されている。仮にアビ・エシユフの武装が機能しにくいクロスレンジに寄せたとしても彼女は対応してくるだろう。加えて、搭乗者を保護する目的の回復機能まで備えているのだ。ネルの攻撃によって付けられた数多の傷は驚異的なスピードで再生している。彼女に刻まれた重症はもう殆ど何処にもなく、眼で見える傷も次々と消えていた。

その他のスペックも先生が知るものと同一。エリドウの情報処理能力を一極集中させることにより生まれる近未来予知。高い攻撃力、堅牢な防衛、圧倒的な回避性能。通常的手段では攻撃を通すことはおろか指一本触れる事すらできないだろう。

成程、確かにこれであれば神に届き得る。先生がこの世界で戦った神に至る者達……即ち、ザフキエルとビナー。前者はほぼ一方的に倒せるであろうし、後者も8割程度の確率で勝利を収めることができる

だろう。尤も、後者は彼やアビドス含む連合軍が相手にしたものが限度であるが。幾ら今の彼女と言えど、完全顕現は持て余す。

「一応聞いておくよ、ネルは？」

「全身の骨を砕いておきました。幾らネル先輩と謂えど、あの傷で再び戦うのは難しいと思われます」

予想はしていた解答。今も彼女はエリドウの何処かで気を失っている。彼女の元に向かっているのはリオの回収用ドローンか。恐らく彼女をヒマリと同じような隔離施設に捕らえるつもりなのだろう。そうなってしまうえば少々面倒だ。囚われの彼女の救出、というひと手間が加わってしまう。それ自体は不可能でないし、時間もかけずに達成可能であるが……やらなくていいなら、やらない方が良い。この後のスケジュールも加味すれば猶更。

無論、そうならない為にも手は打ってある。クラフトチェンバーから呼び出した医療用ドローン。それが今、全速力で彼女の元へと向かっていた。後はどちらが速いかスピード勝負だ。リオが速いか、先生が速いか——或いは、第三の選択肢か。

そして、ネルが叩きのめされたと聞くや否やC&Cのメンバーも瞳に剣呑な色を灯した。事前に彼から伝え聞いていたが、彼女の口から聞くと改めて……というやつだろう。臨戦態勢。焼け付くような熱を持ちながら、凍えるような寒さも孕む……異様な空気。慕っている部長を伸されたのだ。怒りと戦意のボルテージが際限なく上昇する。

セミナーは彼女達の行く末を固唾を吞んで見守る。恐らく戦いになるという確信を抱きながら。ユウカ、ノアは自身の銃の具合を確かめた。フォーメーションとしてはユウカとアスナが前衛を張り、中衛にノア、アカネ、ゲーム開発部。後衛にカリンとココキ。ミドルの層が厚いため、幾らか前衛の方に回しても良いかもしれない。その辺りの事は先生が考えるため、頭の片隅の方に追いやりながら——いつでも戦闘が開始できるようにユウカは銃を構え、シールドの展開準備を済ませた。ノアも同様に銃のセーフティを外す。

先生。セミナーの2人。C&C。そのメンバー達が真剣な表情で会話を重ね、相手の出方を伺っている最中……ゲーム開発部とココ

キ。1年生4人はこそこそ話をしていた。この場に於いては結構どうでも良い話を。

「あのスーツ……」

「うん……」

「は、恥ずかしくないのかな……」

「露出趣味なんじゃないですか？」

その話題の中心は、この場のインシアティブを握っていると思われるトキ。だが、彼女の強さや纏っているアビ・エシユフではなくその服装についてだった。例えるなら、少々……いや、かなり過激な学校指定の水着。逆に裸よりも恥ずかしいのではないのか、と言いたくなるようなボディースーツだった。

彼女の服装について誰も突っ込んでいない事がこの光景のシュールさを加速させている。全員が全員、真剣そのものな表情で話してて若干面白い。本当の最終決戦だというのに、何故だか気が引き締まらないでいた。

中々にとんでもない^{覚悟}角度なボディースーツを纏うトキを見てモモイ達は苦笑いに似た微妙な表情を浮べる。共感性羞恥とでも言うべきだろうか。アレを着るなら逆に何も着ない方が多分マシだ。それはモモイもミドリもユズもコユキも同じ感想。それに加えて、コユキは途轍もないほどトキに対して失礼なことを言っていたが。

「彼女が最後にして最強の切り札……その認識で間違いないかな、リオ」

『ええ。だから、彼女を突破出来たら先生達の勝ちよ』

「トキはどうか？」

「……この先へは行かせません」

モモイとミドリは全くの同タイミングで銃を構えた。

ユズは怯えの消えた表情で前を見据える。

「まあ、そうだよ。リオもトキも、退けないから」

アスナは片手で銃を突きつける。

カリンは片膝を突いてスコープを覗く。

アカネは下がっていた眼鏡を上げ、爆弾のスイッチを手に持つ。

『先生もそうでしよう。貴方も退くわけにはいかない』

ユウカは二丁のMPXを持ち、決意を固く。

ノアは変らぬ笑みを浮べたまま。

コユキは緊張した面持ちで銃と爆弾を持つ。

「ああ、私は——もう、逃げない」

トキは両手で操縦桿を固く握り締めた。

『なら、私達は争う他ないわ』

リオと先生はそれぞれタブレットを構えた。

長き作戦の終着点。要塞都市エリドウ、中央タワー……正門前。遮

蔽物が一切無い開けたこの空間こそが最終決戦の地。

多くの願いを見た。多くの意志を見た。多くの幸福を見た。

多くの挫折を見た。多くの運命を見た。多くの絶望を見た。

リオは自身とアリスの犠牲を容認した。

先生は自身以外の全てを救うと誓った。

これは、善悪の話ではない。ただ、何方が己の願いと意志を貫き通すかを決めるぶつかり合い。

——理想都市の咎。涙の痕。すべては、ただ誰かの未来のために。

調月リオ。先生。未来を視た人。未来を知る人。鏡映しのような2人。

2人は争う。殺意はなく。怒りはなく。憐れみはなく。ただ、1つの感情を掌に握り締めて。

『この戦いに勝って、私は私の未来を証明する』

「この戦いの果てに、私は君の犠牲を否定する」

——多くの運命を巡る最後の決戦が幕明けた。

撃鉄が下ろされる時

炸裂音が断続的に鳴り響く。葉莢が地面へ向かい落下するよりも早くリロードを済ませ、照準の先に立ち塞がる絶大な脅威を前にユウカは一切臆することなく立ち向かう。

『モモイ！ ミドリ！ ユウカとタイミングを合わせてッ！』

「分かったよー！」

「了解、行きますー！」

それぞれ左翼と右翼に展開するモモイとミドリ。更に、その後ろにはカリンが構えており——その弾丸が発射される。完璧な射撃タイミング、弾道。的確に逃げ道を防ぐ……正に神業と呼べる凄まじい狙撃。それはトキに詰みを突き付けたと思われたが。

「回避行動。補正0.012……誤差修正」

まるでワルツを踊る様な優雅かつ滑らかな動きで難なく回避。まるで弾丸の方が避けたような、或いはすり抜けたような挙動。そのまま彼女は流れるように攻勢に打って出る。狙いは突撃する3名、全員。その内の1人を選ぶことすらなく、3人纏めて——その全てを、叩き潰す。

全身に装備された姿勢制御用のバーニアを巧みに動かし、体勢を整え、両腕のガトリングを構える。特徴的なモーター音が聞こえてきたと同時に銃身が回転してライフル弾が吐き出された。ユウカが持つサブマシンガン以上の連射レートで、カリンが放つ弾丸を射出する……ヒトが生み出した暴力の権化。

カタログスペック上の単純な威力だけでも人体に向けるのは過剰な火力を持つそれは、トキの神秘とエリドウのバックアップにより破壊力が底上げされている。幾ら対人用のリミッターが掛けられているとはいえ、数発の直撃が致命打になり得てしまう。

事実、先生が展開したシールドが音を立てて削れている。今トキに向かっている3名に付与した3層に及ぶシールド。アロナが居ないためフルスペックには及ばないが、それでも戦闘機の爆撃程度であれば無傷で流せる障壁はたった数秒銃弾を受け止めただけで第一層が

半壊した。出鱈目が過ぎる火力。枷が掛かっているとは到底思えない。

「この距離なら……ッ！」

勝ち誇ったようなユウカの声。3人は無傷で懐に飛び込んでいた。付与した3枚の障壁、そのうち2枚は全損し、1枚は半壊。見るも無残な成果だが、確りと守る役目を果たし切っている。

完全なクロスレンジ、正面はユウカ、右にはミドリ、左にはモモイ。3方向から同時に責められればトキと雖も確かに少々面倒だ。だが、面倒なだけで対処自体は容易い。

「甘いですよ」

左右に展開する双子の挟み込み攻撃を限界まで引き付ける。そして、ギリギリまで近寄らせてからトキは思いつ切り前に踏み込んだ。スラスター等フルに使った神速の踏み込み。先ほどまで開けていた距離が一気にゼロになってしまい、ユウカに僅かな隙が生まれる。まさか逆に距離を詰められるとは思わなかったのだろう。

モモイとミドリの驚愕はユウカよりも大きかった。何せ、先ほどまで確かに狙っていたはずの相手が急に消えてしまったのだ。だが、そこまで長距離を移動したわけではない。だから、構え直してカバーを……。

「やせません」

当然、トキがそんな猶予を与えてくれる訳が無かった。彼女は小回りの利き辛そうな巨大な機体を器用に動かし、左脚部を軸にしてぐるりと回転させる。それにより生じた遠心力を利用し右腕をまるでハンマーのように見立てて——ミドリとモモイに思いつきりぶつけた。

音を立てて砕け散るシールド。打撃の威力全てと衝撃の9割以上を吸収したが、残りは少女達の体まで通してしまう。身体には軽くぶつかられた様な衝撃しかないのに随分派手に吹き飛ばされてしまった。この高さから落ちたらちよつと痛いな、なんて思っていたら……視界の隅に走る白い影を見つけた。

「ごめん、私のミスだ……怪我はないかい？」

完璧な落下地点予測。そこに陣取り、落ちてくる2人を優しく受け止めたのは先生。優しく、心配そうに微笑む彼を見て、少女達はその不安を払拭するような笑みを浮べる。

「勿論！ まだまだやれるよ！」

「私もまだ頑張れます！」

彼の手から下された2人はそれぞれ銃を構え、油断なくトキを見る。彼女は今、攻撃の嵐の中にいた。正面からユウカとノア、背後からコユキ、左右からそれぞれカリンとアカネ。余人なら30秒も持たないであろう極限状態であっても、彼女の余裕は崩せない。涼やかな顔で、最低限かつ最高効率で全ての攻撃を回避し続けている。

拮抗に近い状況不利。それが崩されたきっかけはユウカがトキのサマーソルトキックにより大きく後方に吹き飛ばされた事だった。

トキ自身の膂力と、レッグパーツのパワーアシスト。それに加わったレッグパーツ自体の質量。その相乗効果により生まれた馬鹿げた威力は防御力に秀でたユウカを容易く吹き飛ばす。

いつの間にか効果時間が切れていた自身のシールド。既に半壊状態だった先生の障壁。当然、トキの攻撃を受け止められる訳がなく、ユウカは脳を直接殴られた様な衝撃を叩きつけられた。

揺さぶられ、白飛びする視界。喰いしばった歯。激痛。口の中が切れたのか唇の縁から赤が流れる。普通に日常生活を送るだけではまず経験する事が無い鮮烈な痛覚は思わずユウカですら恐怖を覚えてしまうものだった。

痛みとは傷つくこと。そして、数多の傷を重ねた先に暗い死がある。ユウカはイメージしてしまったのだ。この攻撃を受けた先、受け続けた先に待っている……どうしようもない終わりを。根源的な恐怖心、死を恐れる人間の本能。土壇場で身に纏わりついてきたそれを

——彼女は振り払った。

死ぬのが怖いのは皆一緒だ。その恐怖に抗って誰もが此処に立っている。

アリスは泣きながらその恐怖を押し殺して、断頭台に向かった。友達達の幸福な未来を願って。

先生は死も痛みも何もかもを飲み干して、誰かの為に成そうとしている。誰よりも痛くて、怖いだろうに。

——2人が味わっているものに比べたらこの程度の恐怖も痛みも、なんて事はないだろう。

だから前を見る。敵を見る。眼を逸らすな。相手が強い事は分かっていたはずだ。そうだ——ここまでは読めている。元々、ノアと2人掛りとはいえ自身が真正面からトキを相手に出来るほど強いとは自惚れていない。だから、ユウカとノアは本命から目を逸らさせるための存在であり、あくまでブラフ。その真打は——。

「アスナ先輩ッ！」

「はーい！ 任せてー！」

反動を利用し飛び退いたユウカの背後、スライディングをするような低姿勢で飛び込んで来たのはアスナ。彼女は低姿勢のまま見上げるような形で視線と銃口を突き付けた。

「——」

見上げるアスナと、見下ろすトキ。視線が交錯した時間は1秒にも満たない僅かな時間。アスナもトキも余裕そうな表情であったが盤面有利は依然としてトキ。アスナがその直感をフルで活かして防戦に徹すれば今のトキが相手でも何とか食らいつくことが可能であったかもしれないが……それは逃げの姿勢だ。逃げるだけでは、守るだけでは敵を倒せない。勝ちたいなら、掴み取りたいなら——前に出て、戦え。

「これは躲せる？」

「ええ、当然です」

アスナがトリガーを引くタイミング。トキが回避するタイミング。先手を取っていたのはアスナのはずなのに、その初動はトキの方が速かった。後手が先手を追い抜く不条理。行動の先読み、という生易しい次元ではない。もっと異質な……例えるなら、先生の指揮や彼との接続状態と同質のものを感じてしまった。

アスナが射出した弾丸はトキが数瞬前までいたはずの場所を穴だらけにするだけに留まり、余裕を持って回避したトキは悠々とガトリ

ングガンを構える。しかし、弾丸が発射されるよりも前に状況不利を悟ったアスナがユウカとノアを抱えながら大きく後退。

それを見てトキはアスナに対する評価を更に上方修正する。戦闘力もさることながら、戦い方もクレバーだ。分かっていたつもりではあったが、あの猛者犇めくC&Cの中でネルに次ぐナンバーツと言われるだけのことはある。攻めに転じる判断だけでなく引き際の判断まで上手いのは明確な強みだ。

しかし、先ほどの一瞬の攻防で——対アスナの大体の感覚は掴めた。あとは彼女の具合から逆算して2回程度攻防を重ねれば解析が完了する。現状の戦力における唯一の不明点を暴けばトキの勝ち揺るがない。先生も不明点ではあるが、彼は別に戦う存在ではない。幾ら彼が未知でも、彼の指揮を実際に出力する生徒が既知であれば関係ないだろう。

「こんなな攻撃が当たらないなんて生まれて初めてかも!」

「お褒めに預かり光栄です。私も、こんななやり難いのはアスナ先輩が初めてです」

「そっかそっか……それは、部長よりも?」

細められたアスナの瞳。人懐っこく、負の感情からは凡そ最も離れているであろう彼女から放たれたとは思えない温度の言葉と視線。恐らくは無意識なのだろう。隠していた、という訳ではなく彼女自身ですら気付かなかったそれが偶々眼で見える形で露出しただけ。

詰まる所、アスナは人一倍、ネルが撃破された事に内心で怒っている。もしこの場にネルが居れば『お前、そんな顔もできるのかよ』と多少驚いていただろう。

ネルのような周囲を圧倒する暴風のような怒りではなく、少しずつ周囲を侵食する異質な空気。それに当てられたトキは、それでも尚涼しい顔のままだ。

「……さあ、どうでしょうか?」

「え、意地悪。答えてくれないなら……無理矢理聞き出しちゃおっか!」

アスナが纏っていた異質な雰囲気は霧散し、何時もの楽しそうな口

調と空気に戻る。それと同時に駆けだした彼女が狙う先はトキ、唯一人。

その単騎突撃に追走する者は居ない。アスナの接近戦に於ける力量は、今この場のメンバーの誰と比較しても圧倒的に高い。開きすぎている力量差で下手に追走しても足手纏いにしかならないのは分かり切っている。故に、残された少女達と先生がやるべき仕事は。

「え、援護しますッ！」

その突撃の露払い、援護に徹する。カリンの狙撃、アカネの爆撃で動きを制限。モモイとミドリ、ノアの射撃で回避を牽制。ユウカがシールドを付与し、先生が各種強化を齎す。最後にユズがアタッチメントを付け替えたM320ニャンスダッシュからスモークグレネードを射出。2人を白煙が包み込む。

「目晦ましなど……ッ！」

「ナイス援護、皆大好きッ！」

通常、視界が大きく制限された煙幕の中では真面な戦闘行動はできない。人間の認知は大きく視界に偏っているのだ。世界を見るための眼を奪われたともなれば、頼れるのは味覚を除外した聴覚と嗅覚、触覚。それだけで戦闘するのは不可能であろう。だが、アスナは異常と言うべき直感……第六感がある。例え視覚を奪われようと……否、五感全てを奪われようと第六感だけで戦闘を成り立たせることができるってしまうのだ。

それに今は直感が冴え渡っている。まるで雲一つないような晴天。眼を奪われようと、何を奪われようと——アスナにはトキの全てが見えている。

アスナとトキが完全なクロスレンジに入ったと思われる頃、幾重にも鳴り響く銃声が聞こえた。超至近距離での撃ち合いが始まったのだ。手数と制圧力、威力に優れるトキと取り回しが優れているアスナ。どちらに勝利の女神が微笑むかは分からない。だが、少女達には確信があった。この攻防を終えた先に立っているのは唯一人である、と。

しかし。

「視えていますよ、アスナ先輩」

煙が晴れた先、未来に立っていたのはアスナとトキの両名。少女達の想定は早くも裏切られる形となる。両者とも共に全くの無傷。あの最悪の視界で互いが銃弾を全力でばら撒いたのにも関わらず、両者とも一発も当たっていないのだ。辺りに散らばった薬莖の数から使われた弾丸の数が見て取れる。

そう、五感を奪われようと戦えるのはアスナだけではない。エリドウのバックアップがあるトキは世界の認知を拡大させている。アスナのようなロジックもクソも無い類希なる直感ではなく、論理で裏打ちされた純然たる科学と知性の世界認識。見つめる世界の時間軸を数歩先に進ませる知覚。それはアスナと同じ土俵でトキを戦わせることが可能であった。

「すっごいねー!」

心底楽しそうなアスナの声は相手を賞賛する言葉。確実に勝てたと思った。勝利はできなくとも、有効打を数発与えられるだろうと確信していた。だが、そうならなかった。アスナにとっては初めての経験。自身の手札や引き出しが全く通用しない、というのは通常であれば絶望しかないのだが……彼女はこの状況を、心の底から楽しんでいく。

対するトキは、『彼女は本当に人間なのですか?』と内心で疑問符を浮べていた。あの悪視界の中、自身の直感だけを信じて突っ込んでくるなんてイカれている。しかも直感は在り得ない位に鋭く、突き動かされる彼女に寸毫の迷いもない。ネルと先生、ヒマリを最も警戒しなければならぬのは確かだが、その次位にはアスナを警戒した方が良かった。彼女は孤立させて潰すべき戦力であるし、間違っても部隊として運用させていい人材ではない。

一旦距離を離れたトキは両腕のガトリングガンを構える。そのまま対応したトリガーを押し込み、発射する姿勢を取った。だが事前にはなく、発射される弾丸を最低限の動きで躲すのだ。何が何でもこの距離を詰めるという気概。

ガトリングガンの発射レートを考えるとアスナの行為は自殺同然であるが、彼女ならば直撃コースのみを的確に避けられるだろう。神に祝福された如くの直感が彼女を突き動かすから。

——トキがアスナを攻略するためには、彼女の持つ第六感をどうにかする必要がある。つまりは機能を停止させるか上回るか。この内、前者は除外できる。そもそもどんな理屈で彼女が直感を行使しているのか分からないのに、それを機能停止させる事なんて出来ない。であれば必然的に取るべき手段は後者……アスナの直感を凌駕する他ないだろう。

アビ・エシユフを装着して以降、アスナと競り合ったのは2回。どれもクロスレンジからミドルレンジ、アサルトライフルの間合い。その攻防である程度の具合は推測できている。此方が攻撃するタイミングよりも前、構える前の思考段階から彼女は回避或いは攻撃行動を装填している。まるで読めているかのようになる。

——直感で掴んでいるのは思考か？

トキはアビ・エシユフの操縦をマニュアルからオートに切り替え、操縦桿から手を離し機体内部に格納していたアサルトライフルを構える。

「さあ、どう出ますか」

言葉と同時に、発射される弾丸。圧倒的な弾幕量は忽ち万象を穴だらけにしてしまう殺傷能力を秘めており、それに晒されたアスナは今までのような回避に加えて防御も選択。シールドに弾かれた弾丸が明日日の方向に逸れて跳弾。ビルの看板を撃ち落とした。

——シールドを信頼して避け切れないものは敢えて受け止める。今までのような全弾回避ができないとなれば、実現できる最善を選び取る事が出来るんですね。

つまり、不可能を可能にする類のものではない。あくまで可能性を拡張するものであり、最善をそのまま出力できる才能。非常に厄介であるが……攻略は可能だ。だが、まだデータが必要。取捨選択の基準、最善の基準。自身の安全が最優先なのか、作戦の達成が最優先なのか。

それを確かめるためにトキは敢えてアビ・エシユフをパージ。機体をアスナの前に残し、トキ自身はモモイとミドリ、先生がいる場所目指して駆け出した。流石にこの行動はアスナも予想できていなかったのか面食らったような顔をしていて……。

「ご主人様ッ！ そつちにトキちゃんが！」

「……ああ」

——どちらを優先しますか。作戦の要であるゲーム開発部と先生。若しくはアスナ先輩自身か。

その解を欲していたトキの前、彼を守らんと立ち塞がったミドリとモモイを雑踏を抜けるようにスルー。彼とトキを遮るものではなくなった。勿論、トキとて彼を傷つけるつもりは皆無だ。誰に頼まれようとも首を縦に振るつもりはない。事実、トキの手には武器の類は一切握られていないし、あくまでアスナの出方を伺うための判断材料以外にするつもりはなかった。

——彼を人質にでも取った方がスムーズに事が運ぶだろうと分かっていながら。そこまで外道に堕ちたくなかったのだ。仕えているリオの為にも、自分自身のためにも。

さて、この状況でどう出るのか。そう思っていたトキの耳に届いたのはアスナの声ではなく——優しい、男の声。

「優秀な眼を持つているのは君だけじゃないよ、トキ」

「……ッ！」

そう呟いた彼の側面、いつの間にか銃を構えていたユズ。それを見たトキは少しだけ表情を驚愕に染める。何せ、彼が言うまで一切気付かなかったのだ。周囲には気を配っていた筈なのに、五感全てを研ぎ澄ませていたはずなのに。それなのに今の今まで……銃のトリガーが引かれる直前のこのタイミングまで一切分からなかった。

——トキの知る所ではないが、このからくりには当然の如く彼の手が及んでいる。シツテムの箱の機能を用いてユズの気配を消し、存在を世界と同化させていたのだ。全ては、このタイミングの為に。

「アスナを測るつもりだったんだらうけど……それは読めていたよ」

「浅慮、という事ですか。元よりこの手の事柄で先生に勝てるとは

思っておりませんでしたか……」

背後に感じる気配。ちらりと後ろを見ると先ほどスルーした双子が銃を構えていた。先生がトキの後ろにいる手前、実際に発砲する訳にはいかなたため射撃体勢を取るだけだが威圧程度にはなっている。

目的は果たせず、囲まれて。彼が絡むといつもこうなってしまう。頭脳戦が苦手な訳ではないが、それに特化している彼みたいな手合いと真つ向勝負するのは不利極まる。

溜息を吐いたトキは筋肉をばねのようにしならせ大きく跳躍。その動きに追従するように数多の銃弾がトキを撃ち落とさんと殺到するが、それらは華麗な身のこなしで回避。オートモードで稼働しアスナ達と戦っていたアビ・エシユフを遠隔操作で呼び出し。そのまま空中でドッキングを果たし、再びフル装備となったトキはアスナと相対し、四方八方から狙われた。

「もう……ご主人様を狙うのは駄目だよ！」

「ええ。もう狙いませんので、ご安心ください」

微笑を浮べたトキは、その笑みに似合わない暴力を装填。銃弾を射出したことにより温度を帯び、赤熱したガトリングガンの銃身。それを思いつきアスナ目掛けて叩きつけんと振りかぶった。

この攻撃は打撃を防御しても熱によりダメージを負ってしまうため、無傷でやり過ぎたのなら完全な回避或いはシールドを使った防御に限られる。このうち後者の手段を実現できる装備をアスナは持っていないため、必然的に回避を取るだろう。

であれば、あとはどうやって回避するか。彼女はこの距離を維持したいはず。態々自分から距離を離したり詰めたりする選択は取らない。残された可能性は二次元平面的な回避択……左右に回り込みか、上下か。この先はヒントが無い。正解を引ける確率は4分の1だ。だが、彼女の今までの行動を統括すると……。

「わお」

短い驚嘆の声を漏らしたアスナ。彼女はまるでステップを踏むように足を運ぶ。その狙いは地面に転がる数多の空の薬莖。彼女は態とそれを踏み付けて後ろに倒れ込む形で転び、殴打を回避した。地形

や物を利用した柔軟な戦闘択。流石にトキも『葉莢を態と踏んで回避』という詳細までは読み切れなかったが……下に潜り込む形で回避、という部分は的中した。

「……ユウカ、ミドリ。アスナのカバーを」

「ですが、私達ですと足手纏いに……」

「少ししたらアスナの直感がオーバーヒートする。その前にアスナを安全圏まで離脱させないと。ネルが居ない今、彼女は私達の最高戦力だ。失う訳にはいかない」

「了解しました。ミドリ、行ける？」

「……うん、頑張る」

「タイミングは私が調整する……頼むよ」

彼の言葉に確りと頷くユウカとミドリ。シールドを持つユウカがアスナを守り、撤退行動をミドリが援護する。本当ならトキを釘付けにするために引き切るまでの間、彼女と正面から戦うのがベストであるが、そんな離れ業ができる人間はアスナを除いてこの場に居ない。ならば徹底した引き撃ちしかないだろう。突出した個ではなく、数にものを言わせた制圧戦。尤も、これはかなり分が悪いのだが。しかし時間稼ぎ程度にはなるだろう。ヒマリが行動を取り、それがヴェリタスのハッキングと重なるタイミング……勝機が訪れるまでの。

「私達は!?!」

「AMASクロンが来てるから、その相手をお願いしたい」

「任せて!」

「元気だねえ」

此処が戦場だという事を忘れそうになってしまうほど澆漑としたモモイの声。いつも通りの笑顔で、いつも通りの想いで誰かを救いに行く。誰かの涙を己の笑顔で打ち消すが如く、彼女の芯はいつだってブレなかった。

「——その元気な声に、姿に、私は何度も助けられたよ」

「何か言った、先生？」

「ふふつ、さあね」

「えー！ 教えてよー!」

「この戦いが終わったらね」

「絶対だよ！ 約束破ったらゲーム買ってもらうからね！ 4人分！」

日常へ帰る口約束を交わし、彼女達はその手に銃を取る。

——— 彼らの最後の戦いは、第二幕へと突入しようとしていた。

駆ける場所

アスナの直感のオーバーヒートと、それに伴う彼女の戦線離脱。それにより戦場は残された少女達にとって佳境へと突入していた。彼女の前線における影響はただ一人の戦闘員と呼ぶには大きすぎる。その主な役割はトキの釘付け、足止め。トキと真正面から撃ち合うことにより、絶大な戦闘能力と殲滅能力を他に向けさせなかった。

だが、アスナが離脱した今、トキを縛る鎖や枷はない。その全能性を、攻撃性を……救世の刃を十全に振るうことができた。前線は最早地獄絵図と化して久しい。アビ・エシユフ纏うトキが戦場の全てを支配している。それぞれの得意のポジションが、という寝言を言っている場合ではない。スナイパーのカリンを除いた全員が前に出ている。

アスナが離脱した直後はアカネとユウカが前衛を務めていたが、10秒もしないうちにユウカが落とされ前線が瓦解。ユウカ自身のシールドと先生が付与した障壁、何重にも重ねた防御を一撃で貫通し、彼女の体に攻撃を通した。恐らく疑問を持つ暇も、恐怖を抱く余裕もなかっただろう。一撃必殺だったのはせめてもの情けか。一瞬で意識を闇へ落とされた彼女を先生が抱き上げ戦場から距離を離させ、穴埋めにノアとミドリ、モモイを前に出したが、それでも尚抑えきれずユズとココキを動員し……そして今に至る。

状況は圧倒的に不利。トキと唯一真つ向から張り合える可能性を持つているアスナと全員の防御力を底上げできるユウカが抜けた穴は非常に大きい。

アスナが戦線に復帰するまでに要する時間、直感のクールダウンに掛かる時間は約5分。ユウカは先ほど目を覚ましたばかりで、とてもじゃないが戦闘へ送り出すことなんてできない。

先生が秀でているのは戦術構築能力と指揮能力。それに加えて生徒に付与する攻撃強化、防御強化、回復強化、五感の拡張、身体能力向上、未来視。だが、これらの能力は圧倒的な力を持つ個人相手では役に立たない場合がしばしばある。奇策や相性、戦術でひっくり返せ

る強弱など結局はある程度拮抗した状態であることが前提だ。どう転ぶか分からない天秤を傾けるのが策であり状況。最初から絶望的に開いている差はどうしようもない。先生が生徒達に逆立ちしても勝てないのと同じように。

——分かっていた事だった。トキが強いことも。この戦力では勝てないことも。その上で絶望的な勝率を引き上げようと手を尽くした。しかし、足りない。まだ足りない。不足しているものが多すぎる。

「攻撃が当たらない……ッ」

焦燥に滲むモモイの声は、この場にいる全員の総意だった。攻撃が当たらない。それどころか、自在に動き回るトキの影すら踏めていない。

モモイとミドリ、ユズのタイミングが完全に合った攻撃も。

ノアのアシストも。

コユキの爆弾も。

カリンの未来予知に等しい超高精度射撃も。

アカネの超広範囲攻撃も。

それら全てを動員しても尚、届かない。それほどまでに今のトキは高みにいる。それは宛ら、ネルを相手にしたときに抱いたあの絶望感を更に強くしたものだ。どうしたって勝てない。勝てるビジョンが見えない。戦いの中で成長すれば、とか。何処かに逆転の目が、とか。そんな温い発言は到底できない。成長する前に、逆転の目を見つける前に速攻で潰される。ユウカと同じように。

「くッ……」

頬を掠める弾丸。切り裂かれたような痛みにはアカネは表情を僅かに歪める。しかしたかが一発。まだ余裕だ。神速の手捌きで銃のロードを済ませ、威嚇射撃と割り切りトリガーを引く。この口径の弾丸で装甲は抜けない。電磁シールドの有無は関係なく、物理法則に根付く単純な強度と高度の問題だ。ならば、威嚇射撃の豆鉄砲と捨て石にして爆撃を主な攻撃手段に切り替えた方が戦術の組み方として正解だろう。

一番の問題は――。

「ええ、分かっています……残念ながら」

攻撃が当たる気配が一切ない事であるが。設置型も投擲型も何もかも。戦闘機の絨毯爆撃でも傷を負う未来が見えない。

「そろそろストックが切れる頃合いではないですか、アカネ先輩」

「いいえ、まだまだです」

強気に返したものの、ストックの底が見えてきたのは事実であった。極力無駄な使用は押さえていたが、物資はいずれ無くなるもの。それはアカネの爆弾も例外でなく、これまでの使用分とアビ・エシユフを装備したトキに使用した分が重なった結果、大盤振る舞いする訳にはいかなかった。

戦闘開始前、先生は「出し惜しみはしないで。物資は当てがある」と言っていたが……それでも、彼にも限界はあるだろう。この先は可能な限り無駄な爆破を避けて、ここぞという時の使用に絞らなければならない。

「アカネ先輩の強みは手数の方と攻撃可能範囲です」

「……だから、それを封じれば私は脅威ではなくなる。そういう事ですか？」

その言葉にトキは頷かない。ただ油断なく構え、眼前の敵から目を逸らさない。トリガーに指をかけ、背部にマウントされたエネルギー砲をアクティブ。両腕のガトリングガンのリロードし、再度万全な状態へと遷移する。相手は室笠アカネだ。手を抜いて勝てる相手ではない。

「ふふっ……随分見くびられたものですねッ！」

その言葉と共に、アカネはトキを相手に距離を詰めた。彼女がこの程度……最も得意な戦術を封じられた程度で脅威でなくなる？ そんな訳がないだろう。彼女は03^{ゼロスリー}。ミレニウム最強戦力の一角。武芸百般の体現者。あらゆる分野の戦闘が十全に可能だ。

「皆さん、下がってください」

「援護する、アカネ」

「露払いは任せてください」

下がらせた他のメンバー。彼女達をドローンの掃討に当たらせ、アカネは更に一步踏み込んだ。抜けた人員の隙間を縫うようにカリンとノアの正確無比な弾丸が通される。だが、それはトキにとって脅威になり得ない。点を撃ち抜く狙撃と今のトキの相性は言うまでもなく最悪だ。トキはカリンとノアを意識から外し、判断をアビ・エシユフの方に委ねる。優先的に対処しなければならないのは、ガトリングガンの掃射を全て空のアタツシユケースで受け止め、無傷のまま銃を片手にクロスレンジまで踏み込んで来たアカネだ。

「ご主人様の前で野蛮な真似はしたくありませんが……ッ」

手刀。蹴り。拳。銃撃。その組み合わせ。あらゆる武術の長所を取り入れ昇華された近接格闘。それは捌くトキですら目を張る様な極まった練度をしていた。才能あるものが研鑽を積んだ果てに辿り着ける一種の到達点。そこにアカネは居るのだ。アカネの戦術上、敵に自ら接近する機会は少ない。近寄った敵を迎撃する事くらいはあるだろうが、ネルやアスナのようにクロスレンジでの戦闘が役割ではない筈だ。それなのに、此処まで至っているのは不可解と言う他ない。

鋭い刃を思わせる蹴りをミリ単位の動作で軽々と回避したトキは額に突き付けられた銃口を軽く払い除けた。ワンテンポ遅れて炸裂音が響いて、アカネは白煙が尾を引く銃口を再び構える。

「この動きは……」

「ええ、私の近接格闘の師は部長ですから」

飄々とした口調で告げられた真実。アカネの体術がネルから引き継いだものであるなら、似てるのも当然だ。その時々取る扱は彼女流にアレンジが加えられていたり独自性があるが、基盤に在るのはネルのそれと同一。一度詰めた距離は決して離さない。常に相手に銃口を意識させ、気を張らせる。ネルが彼女に近接格闘の術を仕込んだのは恐らくこういう時のためだろう。面倒見の良いネルらしい振る舞いだ。

アカネの脳裏に過るのは鍛錬の記憶。今よりも幼かった頃、得意分野だけを極めていた彼女はネルから呼び出され……近接格闘の訓練

の開始を告げられた。その内容は延々とネルとlonl。双方ハン
ドガンを片手に、距離5mから戦闘訓練を開始する。

クロスレンジでの戦闘はキヴォトス最強と自称し、それが誇張でも
なんでもないネルを相手にアカネが勝てる訳も無かった。あの距離
でネルと真つ向から撃ち合えるのはそれこそ歩く戦略兵器ことツル
ギくらいしかない。

今の今まで勝ち星は一回もなく、善戦こそすれどもネルに膝を突か
せたことは皆無だ。だが、負けた経験はアカネの糧となっている。ネ
ルと共に研いできた隠されし刃はその鋭い切れ味を存分に見せつけ
ていた。



トキの相手はアカネとカリン、ノア。

残りのメンバー……モモイ、ミドリ、ユズ、コユキはドローンの相
手。

そして、その戦闘から一時離脱したアスナとユウカは先生の傍でそ
れぞれ休息と治療に時間を当てていた。ユウカは腹部に走る鈍い痛
みに顔を歪める。巨大な質量で思いつき殴られたから、恐らく服の
下は盛大に内出血しているはずだ。

横目で矢継ぎ早に的確な指示を飛ばす彼を見る。時折、表情を変え
るのは痛みか苦しみか。目まぐるしく変わる戦況、それに合わせて彼
も最善を選び取る。誰がどう見ても頑張り過ぎで、直視できない程痛
ましくて。だが、生徒が折れないならば彼も決して諦めないという確
信があった。他ならぬ彼だから。彼を見続けてきたから分かる。
きつと無理をしている。それなのに何もできない自分が不甲斐ない。
情けない。素直にそう思う。

——もし、仮に。彼がエリドゥに入る前に会ったのがノアでは
なく自分であったとして。その時、自分は彼の選択を受け入れること
ができたのだろうか。今にも消えそうな火を懸命に燃やして、自分自身
を灰にしている彼を……送り出すことができたのだろうか。

きつとできなかつたと思う。恐らく……いや、絶対に行かせなかつた。脅してでも止めたはずだ。柔く傷つきやすい体が暴力に晒さられて折れていく残酷な光景は見えていられないほど惨い。キヴォトスの生徒が傷つくのとは訳が違う。不可逆の傷はどう繕っても繕いきれないから。彼の首の斬首痕のように。

——それが、どれほど醜い……彼の心の尊厳を踏み躪る選択だとしても。

意味のない思考に耽りながらユウカは身を振り、傷が痛まないポジションを探しつつ……彼とチヒロの会話に耳を傾け、参加する。戦闘で役に立たない今、頭脳くらいでは役に立ちたいと思いつつながら。

『……エリドゥを攻撃する片手間にあの装備を解析していたんだけど……流入するデータ量がおかしい、あり得ないって言ってもいいから』

「そこまで、なの……?」

熱に浮かされた謔言のような声に驚いたのは、他ならぬユウカ自身だった。どうやら自分が思っている以上に、感じている以上に傷は重く、深いらしい。

喋るのも辛いだろうに、ユウカが受けた衝撃を観測データから知るチヒロは内心でそう思う。だが、彼女の意地を汲んで思考を声にせず、『うん』と短く返して言葉を続ける。

『エリドゥ全域の電力、演算機能があの機体に集中している……あのデータ量なら疑似的な近未来予知も可能だろうね。それほどの強化を施されている』

先生がリオの妨害を気にしなくていいと言った理由が今更ながら分かる。あれを稼働させているのはエリドゥの全リソース。あの全性能を保ちながら妨害をする余裕なんて無いのだ。アビ・エシユフの性能を落として通信の妨害なんて小手先で勝負するくらいなら敵対者を直接叩き潰す事に注力した方が合理的だろう。

「ハッキングの調子はどうだい?」

『良くない。全員出し惜しみなしでエリドゥを全力で攻撃してるけど、プロテクトが硬い。恐らくアビ・エシユフの後隙を消すために何

処かしらで防御プログラムが走ってるから、その解除が先になっちゃう』

「時間はどれくらい?」

『最短でも10分。強度によっては20分かかるかも。でも、必ず落としてみせる』

「ありがとう……頼むよ」

『無茶はしないでね、先生』

彼は通信を切断し、憂いを帯びた瞳で前を見る。

「……皆、聞いてたかい? 最大20分、何とか持たせよう」

「聞いてたけど、未来予知なんてチートじゃん! ラスポスしか許されない能力だよッ!」

「未来予知なんて……そんなのどうやって……」

「装備が強すぎます……!」

装備もさることながら、何よりも凄まじいのはあの巨体を巧みに動かし十全に使いこなしているトキの力量だろう。外部のアタツチメントを自由自在に動かすのは思う以上に難しい。義手や義足がいい例だろう。基本的に慣れるまでに莫大な時間を要するし、自分の手足のように動かすのは更に時間を要する。

それにも関わらず、彼女の動かし方は練達と呼ぶことすら侮辱になるほどだった。どこをどう動かせばいいのか、どうやって対処すればいいのか。その悉くが完璧と言わざるを得ない。アビ・エシユフが強いのではなく、トキがアビ・エシユフを使うから強いのだ。ここまで使いこなせるまでにどれほどの習練を重ねたのだろうか。

ミレニアムサイエンススクールの戦力は基本的に内部で開発、製造されるドローンやオートマタで事足りる。そこが他の学校と大きく異なる部分であり、表向きには生徒により組織される治安維持部隊が存在しない。発明品が暴走してラボを吹き飛ばしたりする事は偶にあるが、意図して問題行動を起こす生徒の数が他校と比べると比較的少なく、元々の治安がそこまで悪くないのが大きな理由だ。

鎮圧にはドローンやオートマタで事足りるし、メンテナンスさえ確りとしていれば治安維持の兵力は卒業生や入学生による人数変動の

影響を受けない。新たに入隊した生徒を一から教育する手間も省けて、引継ぎもデータ移行で済む。

故に、生徒により組織された大きな兵力を必要としないミレニアムであるのだが……C&Cは唯一の例外となっている。曰く、セミナーの最終兵器。その人員はミレニアムの規模に反し小さく、ゲヘナの風紀委員会やトリニティの正義実現委員会の人数とは比べ物にならないほど少ない。

正に少数精鋭を体現したような構成。所属メンバー全員がスペシャリストであり、そのアブレンジの高さは規模の大きさを武器としている他のマンモス校とは違う強みとなっている。

では、そのスペシャリスト揃いの中で尚、別格と称されるコールサイン持ちとは何か。それは、部隊として運用することが不可能なほど突出した能力を持つ者達だ。

コールサイン00ダブルオー、美甘ネルは単純明快かつ圧倒的な戦闘能力。異常と言う他ないほど卓越した全ての技能、特に近距離での撃ち合いと近接格闘、学習能力に秀でている。

コールサイン01ゼロワン、一ノ瀬アスナは高い戦闘能力と冴え渡った直感、幸運。戦場を掻き乱し、勝利の女神を微笑ませるトリックスターだ。

コールサイン02ゼロツー、角楯カリンはその狙撃能力。遠距離を撃ち抜くスナイパーとして彼女に並ぶ者はキヴォトス広しと謂えど5人と居ないだろう。

コールサイン03ゼロスリー、室笠アカネは広範囲攻撃能力。爆弾魔と呼ばれるほどに殲滅能力に長けている彼女は一切合切を纏めて吹き飛ばす。

コールサイン04ゼロフォー、飛鳥馬トキはバランスに優れた隙のないオーラウンダーな能力と各種アタッチメントに対する高い適正。科学技術の進歩がそのまま彼女の強さに直結する。

以上、全五名。全員が掛け値なしの化け物。それぞれが単騎で旅団を相手取ることすら可能な最強戦力達。

その中の一人……科学の発展により際限なく戦闘能力が上昇する

トキが、ミレニウム屈指の頭脳と技術力を持つリオと協力し、その全てを惜しげもなく投入すればどうなるのか。それは火を見るよりも明らかであった。

攻撃はどれ程強くとも、速く鋭くとも届く前に迎撃される。死角からの攻撃も飽和攻撃も全て対処され、追従することすら許されない。防御や障壁はすべて無効化され、紙切れのように突破される。

五感を拡張してもトキの動きは捉えられず、身体能力は足元にも及ばない。

未来が見えたとしても体の方が追いついていないため、役に立っていない様子もない。

生徒が傷つき傷つける光景に心を痛めない事はなかった。いつだつてずつと痛かった。自分が傷つくより、死ぬよりずつと痛い。

ヘイローを持つ彼女達は頑丈だから、この程度じゃ致命傷にならない？ 痕は残らないから、痛くないから大丈夫？ 馬鹿を言え、死なないから良いって訳じゃないだろう。痕が残らないから、痛くないから、それは傷ついても良い理由にはなりえない。

これが我儘だというのは分かっている。彼女達はそういう環境で生きてきた。キヴォトス外部で生きてきた自分とは常識が違うのだ。故に、この感情はきつと歪だ。キヴォトスに順応できていないのは自分。これがこの世界のスタンダード。そもそも、こうして生徒を己の武器の如く扱っている自分がこんな感情を抱く資格はない。だから早く割り切つて受け入れろ……そんな事ができたなら苦労しない。

誰にも傷ついてほしくない。誰にも泣いてほしくない。誰もが笑っていてほしい。誰もが当たり前前に幸福を享受していてほしい。

だから――。

「……潮時、か」

彼はその言葉と共に微笑を浮かべる。諦め、ではない。喜びでもない。怒りでも何でもない、言葉では形容しにくい表情。まるで『仕方がないなあ』と子どもの願いを聞くような。それを見たユウカはどうしようもないほど嫌な予感を覚えた。

「……私は、まだ大丈夫。心臓と脳さえ無事なら最悪は避けられる」

眩き、懐から取り出したのは一枚のカード。世界の事象を捻じ曲げ、不条理を引き起こし、奇跡と救済を成す……神の御業、その一端。彼に許された最大の反則技。即ち事象改変型プロトコル……通称、大人のカード。或いは、覆せぬ終焉のXIII。

アビドスでの聖戦の最後に使用した例外的な使用ではなく、正規の使用。自身の記憶、肉体を触媒とし、結んだ絆や縁を頼りに他世界、平行世界の生徒を招集する。

……果たして、今の自分にできるだろうか。魂の摩耗、記憶の損壊。先のない命。何より——己の心。今の生徒を守る為に過去の生徒を戦いの道具にしているのか、という葛藤が使用を躊躇わせる。

過去を尊んだ結果、今の繋がりを無くすのか。今のために過去を消費するのか。どちらに転んでも先生は己を裏切ることになる。

さあ、選択の時が来た。過去の己、今の己、未来の己。その身に余る願いを背負いながら足掻き続けた末路。生徒に優劣をつける時だ。どちらを選んでもその先に待つのは痛烈な自己否定。自己愛を持たない、獣にもなれなかつた悪性。

突きつけられた選択肢、引き返せぬ分かれ道。先に待つのは地獄。その二択を先生は——踏み抜いた。

「——いいや、まだだ。私は全てを出し尽くしたわけじゃない」その言葉と共に先生は大人のカードを仕舞う。そうだ、まだやれる。手は残っている。それなのに最終手段に手を出すのは早計だ。

あの行動は、思考は逃げだった。自分が楽になりたいからと生み出した虚構だ。罰も罪も後悔も怒りも憎しみも涙も、自己否定すら言い訳に過ぎない。楽になるための方便だ。

だから、ちゃんと。

「リオに啖呵を切ったんだ。先生の私が折れるわけにはいかない。過去も未来も、現在も全て抱きしめる」

——連邦生徒会長と同じように。

自分の最初の教え子。最初の生徒。この想いも、この生も、全て彼女からの贈り物。だから、今度は彼女に返す番だ。この胸を焦がす想いを、記憶に残る思い出を、この命を。

「だから、行けるよね。そうだろう……先生」わたし

眩き、彼は他ならない自分自身に言い聞かせる。まだ行けると、まだやれると。諦めるのはきつと早い。ゲーム開発部の彼女達が諦めずに前を向いているのに、先生たる己が折れるわけにはいかないのだ。少しでも楽な方に行こうとした己を心底恥じて悔いた彼は頬を叩き、乾いた音を鳴らす。

そして、先生は徐にユウカの手を取って笑いかけた。

「心配そうな顔しないで。大丈夫だよ。私はちゃんと此処にいるよ。ユウカを置いて行かない。どこにも行かないよ」

ユウカは『そんなに顔に出ていたのか』と内心思いながら、微笑みに答えるように彼の掌を握りしめる。そうすると痛みが和らいでいく感覚を覚えた。まるで手を起点として痛みが流れ出るように。

「体はどう？」

「さっきまではしんどかったですけど、今は楽になりました……何したんですか、先生」

「秘密だよ」

悪戯っぽく口元に指を当てる彼はユウカの痛みを肩代わりしたことなんて一切感じさせない表情。傷つきやすい、ということとは痛み慣れやすいこと。内臓が破裂したと疑うような痛みすら彼は呑み干してしまう。

「……先生」

「いいのかい？ 痛みは兎も角、他は……」

「まだ何も言っていないのに、私のことが分かるんですね」

「ユウカと沢山過ごしてきたからね。言いたいこと、やりたいことは分かるよ」

詰まる所、皆が頑張っているのに寝ているのは耐えられないのだろう。痛みも引いてきた今、体に残るのは感覚の鈍さと動かしにくさ、痺れたような衝撃。万全とは言えないけれど、病人でもない。離脱する前のように前線で動くことはできないだろうけど、それでもやれる事はきつとある。

ユウカは彼に肩を借りながらその場で立ち上がり、その手に銃を

持った。これで固定砲台程度の役割にはなるだろう、なんて思いながら。

「知ってると思うけど、私は物凄く弱い。ユウカ一人くらいなら全然抱えられるけど、走り回りながら射撃の反動を受け流せるほど器用じゃないし、そもそもトキの攻撃から逃れられるほど早くない。だからできるのは固定砲台のアシスト程度だ。それでもいいのかい？」

「はい。それでも、何もやらないよりはきっとマシです。だから、先生……防御、任せてもいいですか？」

「勿論。指一本触れさせないさ」

刹那、展開される障壁。トキの攻撃を受け止められるように改良を加え、多次元解釈のエッセンスを織り込んだコスト度外視のシールドは先生とユウカを第一に包み、順次他のメンバーにも付与された。これで少しは被弾と損耗を抑えられるだろう。だから、あとは先生のりソースが尽きるのが早いかトキの弾丸が尽きるのが早いかの勝負。

「……ッあ」

つう、と流れる鼻血。流石にこの人数分の多次元解釈は死に体の身に余るものだったようだ。アロナもない今、演算の負荷がダイレクタに襲い掛かっている。脳が割れるように、振じれるように痛い。『全部終わったらまた入院かな』と他人事のように考えながら、死滅する脳細胞に喝を入れて演算を再開する。

「――勝負はまだここからだ」

先生は急ぐ。早く、速く、疾く、死地へ。

原初の怒り

エリドウD4区画、地獄の底。最強同士の激突により復旧よりも一から再建築した方が早いと思われるほど崩壊した場所には無造作に転がる一つの小さな影があった。服はあちこちが破れ、焼け、切り裂かれ。その下の白磁を思わせる綺麗な肌には幾重にも傷が走っている。切創、擦過傷、創傷、挫創、火傷。

地面に仰向けで転がるその少女がミレニウム最強、約束された勝利の名を冠す美甘ネルだった。彼女の先の長い人生における最大の敗北はアビ・エシユフを纏うトキによって齎されたもの。トキの宣告通り30分以内に叩き潰され、今はこうして地面で空を眺める事しか許されていない。言い訳のしようがない、するつもりもない完敗。

鍛えた肉体、身につけた技術、磨き上げたセンス、場当たりの発想と瞬発力。ネルの持ち得る全てを総動員した。それを真っ向からトキが上回ったのだ。自身の傷が深かったとか、相手の装備が強かったとか、負けた理由を見苦しく探すつもりはない。負けは負け、それ以上でも以下でもないだろう。そもそも、現実の……こういった土壇場の戦いに反則もチートもルールも何もない。お行儀よく戦いたいならコロッセオにでも行つていればいいのだ。

止めとして放たれたトキの弾丸は的確に眉間を射貫き、ネルの意識を闇に落とした。だが、彼女は今こうして意識を取り戻している。それはトキが情けをかけた……という訳ではなく、単純にネルの身体強度の高さから来るものだった。

しかし、所詮は意識を取り戻しただけ。全身の骨は砕かれ、折られ、指先一つ満足に動かせない。神秘も底が突き、ガス欠。激痛で霞む視界、膜を隔てたように鈍い感覚。痛い。寒い。ぴちゃり、と何か液体に触れる音。自分の血だ。それくらいは分かる。力を振り絞って眼球を横に動かすと、ネルと同じように転がっている二丁の愛銃が見えた。当然、無事ではない。銃の片方は砕かれている。もう片方も表面に幾重の亀裂が走っており、あと真面に撃てるのは数発が限度。手数と制圧力を武器とするSMGとして致命的だ。

身体もボロボロで、武器もボロボロ。きつと今、見るも無惨な地を這い蹲る敗北者の姿を晒しているだろう。戦闘行動はおろか動くことすら、呼吸すらかなりしんどい……それが今のネルの状態であった。今のネルなら非戦闘用のドローンが相手でも負けるだろう。その程度には戦闘能力が失墜し、キヴオトスに於ける最底辺の生命である先生よりも上くらいの立ち位置になっているはずだ。

ネルはふと思う。先生達は、仲間達は、ゲーム開発部^チ達は無事だろうか。恐らく彼らの元にはトキが向かっているだろう。戦闘が始まっているとしたら……苦戦は免れないはずだ。もしかしたら既に敗北しているかもしれない。それ程までにトキは強かった。

ネルは自身の体の状態を確かめる。笑ってしまうような損傷度合い。こうなる前に投与したナノマシンが回復に努めているが、その再生速度は欠伸が出るほど遅い。手の骨は砕け、足も靭帯とアキレス腱が断裂し、骨も複数箇所折れている。もし仮にこんな状態で動こうとしたら医者に張り倒されるだろう。

血は多く流れているが失血死はしない。多少貧血になる程度で済む。そもそも、キヴオトスの民……それもヘイローを持つ生徒はその程度で死なない。ヘイローが砕けていない以上、死は遠いのだ。

だから——まだ、行けるだろう？

「う、うけ……」

血の味がする声帯を張り上げる。確かに自身は一度敗北した。完膚なきまでに負けた。だが、一度負けたくらいで潔く引き下がる諦めの良い性格はしていない。趣味と特技は勝利なのだ。アリスとのゲームもそうだ。勝つまでやる。何度も何度もリトライしたのは、その先にある王冠を信じたから。

故に少女は叫ぶ。己を鼓舞する。痛み^チに歪み、苦しみに溺れ……それでも尚、希望と祈りを燃やす声。先ほどまでの敗者の姿はもうそこにはない。此処に居たのは紛れもなく強者だった。

「うぐけ、よ……アタシの、体……」

彼女を突き動かすのは、自身への怒り。手足も繋がっているのに、脳も心臓も無事であったのに。たかが致命傷を負っただけで地に這

い蹲った己の不甲斐なさと、それに伴う嚇怒。それが致命傷を負う彼女を動かす。火に薪を焚べるように、肉体に怒りという燃料を注ぐ。ある者は言った。救済とは怒りであると。不条理に対する怒りが、出来ない世界に対する激怒が救世の第一歩であると。ならば彼女もそうなのだろう。世界を救うために怒りを薪として燃やしている。それは宛ら恒星のよう。命という燃料を燃やし、人々に不変なる光を齎す——絢爛たる輝き。だが、燃え尽きるつもりは皆無だ。全員で無事に帰るという約束を違えるつもりはない。

ああ、そうだ。全員で。アリスも先生も纏めて全員だ。欠員なんて許せるわけがない。地獄や天国から引き摺り出しても全員でミレニアムに帰る。

そうやって気合を入れて、自身を鼓舞して、全身の力を絞り尽くしても体はピクリとも動かなくて。ネルは「クソツ」と短く呟き……もう一度、自身に現実を突きつける。その出来ない現実に対抗する意志こそが、己を動かすと信じて。

「アタシが、動かないと……アリスが……！」

そうだ。自分は今立たないと、今勝たないといけない。勝利の名を背負ったのは何のためか。ミレニアムを守るためだ。自身の愛すべき友人や後輩達を守るためだ。地を這い蹲り、敗北の味を噛み締めるためでは断じてない。

今、自分が折れたままであれば……アリスは死ぬ。ただ友人と笑い合いながら思い出を育みただけの透き通る青の少女が消える。それを覆したくてここまで来た。そんなふざけた不条理が認められなくて世界に挑んだ。だから抗え、最後まで。立って戦え。地に伏せるな、前を見ろ。敵は後ろに居ない。未来は後ろに無い。望んだものは、見たかったものはいっだって暗闇の先にある。

ネルは獣のような咆哮を上げながら全能力を用いて体を動かさんと力を籠め——そして、僅かに指先が動いた。その微かな動きは確かに全身に伝搬し、指から掌、肘、肩、腕全体。最終的に彼女は。

「ハッ……」

全身から血を滴らせ、ネルは立ち上がる。がくがくと振るえる手足

は紛れもなく無理をしている証拠であり、時折ふらついて非常に危なっかしい。一挙一動、呼吸をするのにも全力を尽くさなければならぬ。そもそも、無理をして立っている、なんていう次元ではないのだ。通常であれば立つことは無論できない深度の傷、どうして意識を保っていられるのか甚だ疑問に思ってしまうほど。

事実、ネルはこうして立ち上がるだけで精いっぱいだ。この状態で戦闘を行うなんて無謀極まる。今だったらその辺りのドローンの質量にものを言わせた原始的な体当りですら致命打になってしまう。今よりも多少はマシな状態だった嘗ての彼女を一蹴したトキを相手にしたら30分どころか1秒で決着が付くはずだ。それも、彼女の敗北という形で。

それは非常に癩だが……ああ、認めてやる。トキは強い。紛れもない強者だ。それも、久しくネルが出会わなかったほどの。噂に聞くトリニティの戦略兵器であつてもここまでネルを一方的に叩きのめす事はできない。故に今のトキはキヴオトス最強に最も近い座に居ると言えるだろう。

「あー……結構しんどいが、ま、何とかなるだろ。傷なんて唾付けければそのうち治る」

ネルは屈み、半壊した銃二丁を手に取る。それだけの動作でも意識が飛びかけるほどの激痛が無遠慮にネルの神経を焼くが、それを何とか耐え抜いて、彼女は自身の得物を引き抜いた。片方は砕かれているため使えないが、もう片方はまだ使える。彼女は壊れた方を仕舞い、一丁だけ装備。二丁持ちがデフォルトのネルにしては珍しい姿。制圧力と手数は幾分か落ちるが……大きな問題はないだろう。尤も、他の問題が大きすぎて相対的に小さくなっているだけであるが。

この状態で体を動かす感覚もつかめてきたのか、彼女は手を軽く握ったり、足首を回したり、体の各関節を解していく。骨の多くが砕かれているためその動作はぎこちないが、それでも確りと動くため問題無し。不足はない。

さて、行くか——そう思ったネルが歩を進めようと、エリドゥ中央タワーを見据えたその時……駆動音が耳に届いた。種別は空中

型ドローン。敗北した自身を回収しに来たのか、とネルは思ったが……音の種類のにはエリドウの……リオのものではない。であれば、味方の可能性が高いだろう。

「……シャレーレのロゴ」

ネルの目の前でホバリングし、停止したドローンの側面に印字されているのは今や知らぬ者は居ないと断言できる程有名になった連邦捜査部のロゴ。そして、そのドローンを操る人物なんて1人しかいない。

『……ネル』

「先生か。てつきり、リオ辺りがアタシを回収する用のドローンかと思っただぜ」

『それも確かに来てたけど、今は私で足止めしてるよ。暫くは此処に来ない筈さ』

「そうか……そっちはどうだ？」

『若干不利。だけどジリ貧だ。私達側にトキへ攻撃を通す手段がまだ用意できていない』

「まだ、つてことは……当てがあるのか？」

『まあね……ッ』

直後、通信が不安定になる。きつとトキだ。彼女の装備に

Electronic Countermeasure

E

C

M

は無いと思われるため、恐らくは背部に背負っていたエネルギー攻撃の余波だろう。あの火力を放たれながら電子機器を封じられるのは悪夢以外の何物でもないが……生憎とセンサーに回避を頼っている訳ではないため、ネルには大して関係の無い話だ。

「なら、そいつの用意は少し待ってくれ」

『……その傷で来るつもりかい？』

「当たり前だ。アタシがこんな所で寝てる訳にはいかないだろ」

自身の傷と痛みを鼻で笑い、『この程度何でもない』と言わんばかりの勝ち気な表情を浮かべる。流れる無言の空気、その間に彼は何を思ったのだろうか。表情が見えず声も出ていないためそれは分からないが、恐らくはずつとネルを心配して様々な思考を重ねていたはず

だ。そして、その思考の結果……決してネルは退かない、という当たり前の事実に向面した彼は溜息を吐いて。

『分かったよ。でも、条件がある』

「あん？」

『1つ、戦闘時間は計45分以内に留めること。分かっているとは思いますが、今のネルはボロボロだ。それも、どうして立っていられるのか不思議になるほどね。だから、45分が私の許可できる限界時間だ。それ以上はネルの今後に関わる。私はアリスの先生でもあるけど、同時にネルの先生だ。分かりきっている危険に君を追いやるわけにはいかない』

「充分だ、先生。45分もありや、アイツを叩き潰してもお釣りが来るだろ」

『頼もしい限りだよ、全く』

45分。先の戦闘時間の1.5倍。それだけあれば不足は無いと言える。攻撃を回避される感覚は掴んだ。相手の攻撃の重さも掴んだ。そこから逆算し、トキに攻撃を通す方法は幾つか選択肢として頭の中に浮かんでいる。それが通るかどうかは不明だが、試す価値は充分あるだろう。ネルの掴んだ感覚が上に行くか、トキの未来予測が上に行くか。互いに人外の領域に足を踏み入れている者同士、その決着の行方は誰にも分からない。

自信に溢れたネルの宣誓。ともすれば先の敗北を忘れた思い上がりと嘲笑されるかもしれないが、それは違う。彼女は敗北を認め、受け入れ、それを糧にして最後の勝ちを狙っているのだ。ダブルオーに相応しい、劇的かつ完全な勝利を。ハッピーエンドに至るための王冠を。

ネルの意志を聞き、彼は声に僅かな喜色を滲ませた。だが、直ぐに真剣なもの……戦場の指揮者としての声音に切り替わる。

『2つ、この戦闘後は休息と治療に専念すること。最低でも1ヶ月ね。欲を言うなら2ヶ月。そして、トキと戦った後はあらゆる戦闘を認めない』

「……長くないか？」

『寧ろ最大限譲歩したつもりだよ。色々と持ってきたけど、所詮はその場凌ぎ。終わったらちゃんと休まない』

ドローンの上部カバーが開き、白い冷気が立ち昇る。中には注射器や包帯、その他の医療物資が入っていて、不足は感じられない。ネルは最初に注射器を手に取り、首筋に打ち込む。恐らくはナノマシンと細胞活性剤の混合。先ほど彼に貰ったものよりも効果が高い。ともすればミレニアムの最先端医療技術すら凌ぐかもしれないそれは、ネルの損傷の中でも重いものや戦闘に大きな支障が出るものから優先的に修復していく。

ナノマシンの点滴、栄養剤の投与。それを済ませたら幾分か体が楽になったネルは手馴れた動作で体の表面に付けられた数多の傷跡に絆創膏を張ったりガーゼを当て、包帯を巻いていく。

彼はネルの応急手当が終ったタイミングで再度口を開く。ネルに与える、己が守る条件……その後半部分を伝えるために。

『3つ、トキに攻撃を通すために少し無茶なことをお願いする場合があるかもしれない。無理だと感じたら迷わず断つて。別の作戦を考えるから』

「必ずやり遂げる……って訳じゃないんだな」

『当然だよ。作戦に代替はあるけど、ネルは1人だ。私の大切なネルは君なんだ。だから、無茶と無謀を通すのは待つてほしい。それは私の役目だ』

相変わらず歯の浮くような言葉がポンポン出てくるな、なんて思いながら。だが、それを受け入れて嬉しく思っている自分が心の片隅に鎮座していて、ネルは苦笑いを浮べる。

彼は無理なものは無理と分かっているタイプの人間であり、生徒の限界を生徒自身よりも熟知している。故に彼の口から出る作戦は生徒自身ならば可能なラインであるが、それでも最終的な意思決定は生徒自身に委ねており、決して強要しない。怖いと感じたら、出来ないと感じたら必ず言うてほしいと何度も口酸っぱく伝えた彼をよく覚えている。

——だからこそ。そんな彼だからこそ、皆がこぞつて銃と命を

預けるのだ。元気な顔で無事に彼の元に帰りたと思うのだ。それは生徒を大切に想っているから、大事に思っているから、愛しているから。

だから、自ずと4つ目の条件は分かっちゃってしまう。最も大事な、彼のお願い。

『4つ、必ず無事に帰ること。さっきの3つも大事だけど、これが一番大事だ。ネル、必ず私の元に帰って来て』

「ハッ——当たり前だ。だから、先生も無茶すんじゃねえぞ」

分かり切っていた彼の第四にネルは勝ち気な笑顔を浮べて応える。彼女は必ず彼の元に帰り、彼は彼女が安心して帰れるようにする。互いに対等な条件だ。双方共にボロボロ、これ以上少しでも傷ついたら本当に先が危うい。だからこそ、その先の未来を視る。何もかもが終った後の幸せな風景を夢想して、その為に駆けるのだ。

『厳しい戦いになる。幾つか前提を覆したとしても、勝利の可能性より敗北の可能性の方が——』

「おいおい、先生。何弱気なこと言ってるんだ」

先生の想定。極めて冷静な戦局分析をネルは鼻で笑いながら一蹴する。厳しい戦いなのは分かっている。勝ち目が薄いのも、まあ想定内だ。このままいけば順当に負けるだろう。

——で、だから？

それはあくまで想定の話だ。まだ現実じゃない事を確定事項のように話すのは先走り過ぎている。それに、なにより——。

「こつちにはアタシと先生がいるんだ。負ける訳ないだろ」

『……そうだね。私が弱気になっちゃいけない。分かっていたはずなのに、ね』

ネルと先生のタッグはトキトリオのタッグを上回る。上回れる。戦闘能力最強と戦術指揮最強が組むのだ。打ち破れない障壁はない。不可能すら覆し、必ず勝利の栄光を手にするだろう。これは理屈ではない。理論でもない。唯の直感であり確信であるが……それでも、今の場においては何より信じられるものだ。

『此方の状況を掻い摘んで伝えるね。ドローンは片付けたけど、もう

直ぐ第四陣が来る。ドローンの対処はゲーム開発部3名、コユキ。トキの相手はC&C3名、ユウカ、ノア。トキに関してはまだ傷一つ付けられていないけど、ヴェリタスの仕込みがもうすぐ完了する。ネルが到着するまでの間に最低でも電磁シールドだけは破壊しておくよ』

「分かった。その後はアタシが受け持つ。アタシが到着次第、今トキの相手をしてる奴等もドローンに回してくれ」

ネルが望んだのは完全な1on1^{ダイマン}。真つ向からのぶつかり合い。だが、これは合理的だろう。ネルの戦う距離感で、彼女の足手纏いにならずに戦える者なんてこの場に居ない。アスナが万全であれば可能性はあったが、一度直感がオーバーヒートしている今は下がらせた方が良さだろう。

可能な限り援護とバックアップを施した最強のネルを、彼女が最も得意とする距離感を維持しつつトキにぶつける。他のメンバー全員はネルとトキに邪魔が入らない様に総力を挙げて露払に徹し、彼女の勝利を信じて待つ。

——これが通じなかったら、いよいよ打つ手が無くなる。生徒だけのエリドウ攻略、トキ撃破、アリス奪還を諦め、先生の手札の開示をしなければならぬ。生徒には可能な限り使いたくない、彼が敵と見做す悪意にのみ行使する……世界を歪める至上の権能を。

そして、ネルは徐に「そーいや」と切り出して。

「何で先生は此処に来たんだ？」

『何でって……それは勿論——』

「アリス^{チビ}を助けるため……そりゃ此処に居る奴全員の共通目的だ」

先生の言葉を遮り、ネルは彼の意志の続きを口にする。彼女の言う通り、アリスの奪還は全員の共通目的。それを望まない者はそもそもこの場に居ないか、勝算の高いリオ側に付いているだろう。だから、彼女とてそんな当たり前を聞いたかった訳ではない。

「先生にはまだ理由があるだろ。少なくともその傷を押しだけの譲れない誇りみたいなやつがよ」

『……』

「だから、それをちつとばっかし知りたくてな。互いに背中と命を預

けんだ。芯を知つといて損はないだろ」

闘う理由。傷を押して、誰かを泣かせてまで。彼の安寧を願う心を轢殺してまで此処まで来た理由。それをネルは知りたかった。

アリスを助けたいのは紛れもなく彼の本心で、この作戦に来た最も大きな理由の1つだろう。だが、きつとそれだけではない。彼はまだ此処に来た理由を抱えている。それはきつと、アリス奪還を志したメンバーと共有できない彼だけの理由。もしかしたら、先生ではなく……等身大の青年としての彼が抱いたものかもしれない。

それをネルは知りたくて、この問いを投げかけた。今まで触れ合ってきたのは全て先生としての彼。彼はいつだってネルの、アリスの先生だった。それを別に不満に思う訳ではないが、ただ単純に先生ではない彼に興味があつた。そして、恐らく……先生ではない彼個人に興味を抱くのはネルだけではない。彼と触れ合った全ての生徒が、先生ではない唯の彼を知りたいと思っっているだろう。

すると、先生は少しずつ……先生の仮面を剥ぎ取るように話し始めた。

『私は、悲しい別れが嫌いなんだ。別離は華やかに、笑顔で誰かを見送りたい。もし残された人の記憶に私の居場所があるなら、そこには私が一番私らしかった瞬間を刻みつけたい』

これは彼の持論。命あるもの、形あるものの必然。訣別の時はいつか来る。別れは決して避けられない。どれほど劇的に生きても、惰性で生きても、愛されても、憎まれても……命はいつか終わってしまう。そこを否定してしまえば生命は立ち行かないから。

それは先生も、ネルも、アリスだってそうだ。全員いつかは消えてしまう。全員、いつか命を終え、役目を終える時が来る。自身の次の世代に命のバトンを渡して。

それはとても悲しい事だから——だからせめて、笑って別れたのだ。誰かの記憶の最後に刻む自分が泣き顔ではなくて、笑顔であつてほしい。この命に、この生に。君との出会いに満足している、微塵も後悔していない、本当に幸せだったと伝えるために。

……アリスとの別れは、きつと悲しいものだった。アリスはきつ

と、先生がアリスの事を嫌っていると思い込んでいる。彼女の記憶に刻んだ末期は、斬刑に処された瞬間。

そんな別れは認められるはずがなかった。アリスが泣きながら誰かと別れたなんて、世界が許しても彼が許さない。だから死にかけの体を強引に動かして、止まりそうになる心臓を除細動器で無理矢理働かせて此処に居る。彼女にもう一度会って、話をするために。

彼らしい理由だ、とネルは内心納得していると、彼は『あと』、ともう一つ切り出した。

『リオの事も気がかりだね』

「アイツの事がか？」

『うん。彼女、ずっと思い詰めていたから……心配なんだ』

「先生らしいな、全く」

笑い、ネルは銃のリロードを済ませる。だが、真面に使えない事に思い至ると懐に仕舞い、徒手空拳を構える。見つめる先にはA M A Sの軍団。数は30弱。

『……S M G二丁、準備しておくね。カスタムの好みは？』

「デフォルトでいい。下手に弄ると撃ちにくくなるからな」

平時であれば銃が変わっても直ぐに慣れるが、今は慣れる時間も惜しい。使い慣れたデフォルトの形が一番だ。

「慣らし運転には丁度良い。ちよつくら付き合えよ——ッ！」

言うや否や、彼女はドローン目掛けて駆け出す。徒手空拳とは思えない程の殲滅速度。一撃で装甲ごとCPUを粉碎し、僅か10秒弱で全機を撃破した。

1秒毎に進化し、深化するネル。その両脚は大地を踏みしめ、戦意に滾る瞳が見る先にはアリスが居る。

「負けっぱなしは性に合わねえんだ。絶対ぶちのめしてやる……ッ！」

足搔いて、足搔いて

ヴェリタス……各務チヒロ、音瀬コタマ、小鉤ハレ、小塗マキ。
エンジニア部……白石ウタハ、猫塚ヒビキ、豊見コトリ。

トレーニング部……乙花スミレ。

C&C……美甘ネル。

総勢9名が死力を尽くし、エリドウ中央タワー前まで送り届けた戦力達。

ゲーム開発部……才羽モモイ、才羽ミドリ、花岡ユズ。

セミナー……早瀬ユウカ、生塩ノア、黒崎コユキ。

C&C……一ノ瀬アスナ、角楯カリン、室笠アカネ。

彼女達9人の相手を一身で務めるのはC&Cの秘匿戦力、飛鳥馬トキ。彼女単体の強さは少なくとも美甘ネルを始めとするキヴオトス最強……比べる事すら烏滸がましい比類なき天災、という訳ではない。あくまでそのワンランク下の位置づけ、言うなれば準最強とも呼べる場所に居る。

同じ場所に居るメンバーとしては彼女と同じC&Cに所属するトリックスター、一ノ瀬アスナや災厄の狐こと先生の懐刀、狐坂ワカモ、アリウススクワッドのリーダー、錠前サオリだろうか。このランク帯に居るメンバーの1つの特徴としては、戦闘能力もさることながら、それとは別の得意分野を持っている事だ。アスナは直感、ワカモは扇動、サオリはゲリラ戦、トキは機械操作。

その得意分野を生かし、状況を整え、万全を喫すれば……その牙は頂点にも届き得る。これはそういう当たり前の話だ。キヴオトス最強は最強であつても無敵ではない。

キヴオトスの頂点に最も近かつた空崎ヒナは致死の神秘を纏う巡航ミサイル、無尽蔵に湧くユステイナ聖徒会、生まれ落ちたその時から戦闘訓練を受け続けたアリウス生徒、アリウスの特殊部隊であるアリウススクワッド4名と連戦し、底が突きかけた。

聖園ミカもそうであり、メンタルの不調により実力が十全に発揮で

きず、先生のバックアップを受けたアリウススクワッドとの連戦で消耗した結果、最も偉大と謳われた聖女バルバラを含むユステイナ聖徒会に死を覚悟しなければならぬほど追い詰められた。

つまり、彼女達はあくまで生徒というカテゴリーで最強というだけで、それを上回る脅威や生命なんてキヴォトスにはごまんとある。神の眷属や神格はその最たる例だ。

トキの装備はそういった、人智の及ばぬ脅威を滅ぼすための剣である。いつかの絶滅を回避すべく、覆せぬ結末を覆す……始まりに至るため刃。最後の審判を薙ぎ払うための刃。

故に、元の運用方法を考えるとこの程度の……生徒の中での最強や、猛者10人弱くらいは容易く打ち負かしてくれないと困るのだ。

リオが想定している敵は惑星統括細胞と呼ばれる生命樹機神体と、それに対を成す死命樹機神体、名もなき神々の女王、戴冠王基、星の自殺機構アポトシス。それらは人類が持つあらゆるスケールで測れない、文字通りの頂点。それを倒すと豪語した以上、ここでの敗北は許されない。否、敗北はおろか苦戦も……傷跡1つ付けられた時点でリオの想定が甘かったことを意味する。求められているのは完勝ただ一つ、それ以外は失敗と同然だ。

「……ありえない」

ぼつりと呟いたりリオの眼前に映るモニター、そこには戦力を半減されながらも尚、立ち向かう少女達と先生が立っていた。彼女達は皆同様に苦い顔を浮かべながら、瞳の奥に滾る戦意は消える事を知らず。先生も同様に、傷口を取り繕う余裕すらなくなり全身血みどろで誰よりも酷い状態であるのにも関わらず、諦めという言葉が欠如している。

前述の戦力9名の内、ゲーム開発部3名、セミナーのコユキは戦線離脱。ユウカとノアも限界が見えており、そう遠くない未来に戦線を離脱するだろう。C&Cの3名はまだ残っているとはいえ戦力が半減し、近い将来には1/3になるのだ。

それでも、彼等は勝利を信じていた。ここで倒れるのも悪くないと思いつつ、ここで倒れる訳には行かないという想いを共有している。

リオはアビ・エシユフの各種パラメーターをチェックする。各武装の出力は制圧用に抑えられているが、それ以外のスペックは想定している最大値を記録。トキの体の方も完治、運動機能に支障はなく、アビ・エシユフとの同調率も安定している。つまり、攻撃面以外はフルスペック。圧倒的な回避性能と防衛性能を両立しており、因果そのものに干渉するような攻撃や概念攻撃、神域の権能でも使わない限りは傷一つ付かないだろう。それは演算の中核を担っている量子コンピュータがヴェリタスにハッキングされようと揺らがない現実だ。

だが、数刻前にその想定は覆された。アビ・エシユフの外部装甲に極小の凹みが生まれたのだ。ユウカとノア、カリンが全力で足止めし、行動範囲を激減させ、アカネが閃光弾とEMP爆弾で視覚、聴覚、センサーを徹底的に封じ、その隙にアスナがワンマガジンを叩き込み――だが、その上でも全弾回避され。しかし、弾丸を隠れ蓑にして彼女が全力で蹴り飛ばしていた小さなコンクリート片が装甲の最外端に小さな凹みを作った。

動員できる戦力を総動員して、ここまで徹底的に対策をして、その上で最後は運だった。彼女達のタイミングが何もかも一致していなければ僅かな凹みすら作れなかっただろう。これをもう一度やれと言われても確実に無理だと断言できる、余りにも再現性が低すぎる奇跡ではないもの。それで成したことが装甲を僅かに傷つけただけ、というのは気が滅入りそうになるが……それでも、偉業には相違なかった。

何せ、ネルですら触れられなかったものに傷を付けたのだ。彼女の強さを、理不尽さを少しでも知っているならば思わず目を疑うだろう。ネルと彼女達、その両者に明確な差異があるとすれば――。

「先生……」

やはり、彼の存在だろう。どういう仕組みなのかは一切分からないが、彼は何らかの手段を用いてトキに攻撃を通せるように細工を施した。それもトキの弱体化ではなく、彼の生徒達に対する強化という形で。

そして、その何らかの手段もリオは分かっていた。正確には手段の

媒介になったもの、というべきか。今も彼が持つ、白いタブレット……連邦生徒会の行政官や所有者の彼がシステムの箱と呼ぶもの。外装は何の変哲もない、その辺りの家電量販店に行けば手に入りそうなデバイスであるが……その中身は全くの別物なのだろう。それは彼の顔を見ていれば嫌でも分かる。彼のタブレットを眺める瞳は、まるで――。

そこまで考えて、リオは思考を切り替える。今は彼がタブレットを大事に思っていることは然程重要じゃない。今必要なのは、彼がタブレットを使ってどこまで何ができるか、という事だ。

通常のタブレットの機能は当然有しているとして、大事なものはそれ以外の機能。恐らくは戦闘に関する事は一通りできるだろう。索敵やハッキング、生徒に対する各種強化、シールドの展開。それを十全に運用し、生徒の指揮さえできるようにしているのが……あの、彼の蒼い眼か。

分かっている……否、確定しているだけでもこれほど。生徒の潜在能力を引き出し、その上で高倍率の強化もできるともなれば厄介極まる。相手にしたい手合いではない。

だが、確実にこれだけではない。彼にはまだ隠された手札があるはずだ。使わないのは単純にまだその時ではないのか、今使っても意味がないものなのか……或いは、使いたくないものなのか。

兎にも角にも確定情報が足りない。特に彼が赴任した時期はキヴォトス全体が混乱しており、情報が錯綜していた。そのためリオは彼に与えられたあのタブレットも、噂になっていたシャーレの地下に運び込まれた何かも結局知らずに今に至っている。こうして彼と相對すると知っていたならば、多少無理をしてしても知るために動けば良かったと今更ながらに思う。

手札が多く、かつ何をしてくるか分からないというのは存在しているだけでも厄介だ。何をどこまで変数として考えればいいのかも分からず、かつちり想定すればするほど想定外に脆くなり、かといって余白を多くすれば容易く食い破られる。

彼は手札の切り方が上手い。異常なほど戦闘慣れしている。アビ

ドスでの戦闘……シャーレの公式サイトに上がっている報告書、活動報告とユウカが提出した報告書でも、それは容易く見て取れた。あれは一朝一夕で身に着くような代物ではない。才能のある者が生涯を掛けて至れる、ある種の究極。

色々とおかしいのだ。彼の見た目はどう見ても20代前半から半ば。リオを含めた生徒達との年齢差は10年も無いだろう。そんな青年があそこまで場慣れしている訳がない。どんな生を送れば、どんな経歴を辿ればあの年齢である様になるのだ。極めつけに、彼の性質。あそこまで戦闘慣れしているのにも関わらず彼が好むのは日常の風景、取り留めも無い奇跡と幸福。ちぐはぐすぎて、矛盾が多すぎていつそのこと不気味だ。

「……先生、これ程の力を持ちながら何故——」

管制室で1人呟くりオ。言葉の続きは口にしなかった。口に出るなかつた。口にする資格が無いと思つたから。

——私は皆に笑っていてほしいんだ。私達の誰もが役目を終える日は、いつか来る。悲しくも輝かしい臨終さ。終わりは避けられないなら、その道中は笑顔が多くないとね。

——勿論、リオにもね。私は君に笑っていてほしい。だから、私は祈るよ。君がいつか、憂いなく笑えるように。

あの日の会話。無名の守護者を掃討するための作戦……それを詰めていた時に、ふと彼の口から零れた本音。皆が彼を慕う理由、その一端にリオは触れた。

その言葉に自分が何と返したか、正確な内容はもう覚えていない。ただ、現実に根差した言葉を吐いたのは覚えている。だって、リオを見つめる彼の視線が酷く辛そうで、痛そうだったから。

「……余計なことを考えている余裕はない。相手は先生。トキのサポートに徹しないと……」

そうだ、こんな雑念は不要だ。相手は先生を指揮官に据えた連合軍。過去のデータが紙束に見えるほどの神威を纏っていたビナーと真っ向から戦い、勝利してみせた彼なのだ。油断も慢心もできる相手ではない。何かを考えるのは、この戦いの後だ。

——エンドロールは、まだ先に在る。

▼
「はあ、はあ、は、あ……ッ」

体内に酸素が足りていない。体内に上手く酸素が取り込めない。故に息は短く荒くなる。血走った眼から零れ落ちる雫は透明ではない。濁った赤だ。喉の奥には何かが痞えているような感覚。完全な固形ではなく、半流体。恐らく血液と胃液が中途半端に凝固したものの。気道は塞がっていないが、息苦しさを助長しているのは間違いない。吐き出そうと思っても、生徒達の手前、瀉血のように自発的に血を吐くのは憚られる。特にミドリに死を意識させるような光景を見せるのは駄目だ。彼女にそんなものを二度も見せたくはない。

心臓が五月蠅い。不整脈のように、狂ったように跳ね回っている。そのくせ血液が運べてないから壊死寸前の箇所は徐々に広がっている。自分の体ながら、余りにも脆すぎる。ほんの少し、シツテムの箱を介して因果を認識させただけでこの体たらくとは先生の名が泣くだろう。万全であればこの程度、とは思わなくも無いが、それは意味がない事だ。上手くないかない事の方が多い世界なのだ、万全で挑めることの方が少ないだろう。故に、こうして追いつめられている圧倒的に不利な状況に身を置いている時こそ真価を問われる。

コユキはとても頑張ってくれたが、体力の限界が近かったため下がらせた。

ゲーム開発部3名はこの後に控えているアリスの為に体力温存も兼ねて戦線から離脱させた。

この時点で戦力は半減。そして、近い内にユウカとノアも下がらせる。彼女達ももう直ぐ限界が来るのだ。生徒を戦力として使い潰すつもりはない。そうしないと勝てないならば、生徒の分まで己が体を張ればいい。

そう考えて、そう思つて。あくまで自分を効率的に使い潰すつもりでいると……シツテムの箱が震えた。

『先生、もう無茶ですッ！ これ以上は本当に……！』

耳に届くのは愛しい声。脳裏に過るのは愛しい顔。彼が覚醒してから経過した時間は約2時間。その間、彼は彼女の声を聴いていない。たったそれだけの時間なのに、その声が酷く懐かしく思えて。その声をもう一度聞けて、本当に嬉しくて。目が覚めてから今までの時間が急に長く感じて……彼は息を吸う事より、その名前を呼ぶことを優先した。

大切な、3つの音階を。

「……アロナ」

タブレットに視線を落とすと、半泣きで頬を膨らませている青の少女が超えられない壁に阻まれても尚、此方側にいる彼に触れようと手を伸ばしていた。彼は戦場に似合わない柔らかな微笑を浮べて、伸ばされた手を迎えに行く。勿論、青の教室に位相を移していない以上、触れるのは、触れられるのはタブレットのディスプレイだ。アロナではない。

それにも関わらず、先生の掌には温度が伝わっていた。液晶の冷たい温度ではない。子どもの高い体温、人肌に触れたような。少女を抱きしめた時、膝に乗せた時、背負った時に感じた温度。それはアロナも同じなようで、彼に触れた手を不思議そうに眺めていた。

——拙いな。同調し過ぎた。これ以上は戻って来れなくなるかもしれない。

内心でそう思い、彼は努めて柔和な笑みを浮べる。間違ってもこの思考が外に零れないように。

「起きたんだね。おはよう」

『おはようではないですッ！ 今すぐシステムとの接続を————！』

「ごめんね、それはできない。まだ皆が戦ってるんだ」

この解答を予想していなかった、と言えばそれは嘘になる。少なくともアロナは彼の解答を想定していた。それも、途轍もない程高い確率で言うだろう、と。それは彼の重ねてきた旅路が、言葉が、意志が、願いが示している。ここで折れれば、それは彼ではない何かだ。

だが、それでも……『分かった』と一言。それだけ言ってくれば良かったのにも思ってしまう。

アロナは先程よりも更に頬を膨らませる。ヒーローの色と形が変わり、まるで怒っているかのよう。実際、そうなのだろう。彼女はきつと怒っている。それが分からない程、彼は鈍くない。

『システムの負荷を私に回してください。そうすれば先生も少しは楽になるはずです』

「……いいのかい？ アロナはさつきまで……」

『問題ありません！ アロナは先生のスーパーアロナですから！ 寝起きでもばっちりです！』

「ははっ……頼もしいよ、本当に」

眩き、先生は担っていたシステムの負荷をシステムの箱に移す。すると途端に体が軽くなって、脳が振じ切れるような激痛が和らいだ。心臓の音も呼吸も正常に戻りつつあり、自分がどれほどの無茶をしたのかを改めて突き付けられ……それに苦笑いを浮べる。どうやら、自分は想像以上に自分を追い込んでいたらしい。

そして、システムの負荷を半分請け負っているアロナは変らない表情。相変わらず凄まじい演算処理速度だ。『スーパー』という言葉では彼女の凄さは形容できないだろう。この手の事では電子の海を泳ぐ彼女には勝てそうになかった。尤も、この場合は人の身でありながらアロナに数段劣る程度の処理能力を持つ彼がおかしいのであるが。『あれ？ これだけですか？』

「半分こにただけだよ。もう半分は私に、ね？」

『駄目です！ 半分こするのはおやつだけです！ 残りもアロナに渡ししてください！』

「……いつになく押しが強いね、アロナ」

逆らえない雰囲気を感じ取った彼は大人しく残り半分の負荷をシステムの箱に譲渡する。すると再び体が軽くなり、寿命を削っていたような感覚も消え去った。呼吸がこんなに楽になったのはいつぶりだろうか、なんてどうでもいい事を考えてしまう。少なくとも目覚めてからはずっとあの調子だったため、それ以前……首を斬られる直

前までだろうか。

対するアロナはやはり余裕な表情。指紋認証を『これでいいかな？』で済ませた彼女と同一人物とは到底思えない。生命としての規格の差をありありと見せつけられた先生は苦笑いを浮べて。

「アロナ、私の体はどう？」

『負荷は肩代わりしました。ですが、今までの負荷の痕跡は消えませんが。薬も作用しているので、直ぐに命に関わる事はありませんが……帰ったら絶対安静ですからね！』

「そうかい……ま、後のことは後で考えればいつか」

彼女が居る。そう思った途端、そう実感した途端に不安が一切合切消え去る。背中と遺志を預けられる少女が居てくれて、先生も漸く張り詰めた気を僅かに緩めることができた。心地の良い緊張感に身を預けて、彼は己のやるべき事を成し遂げるための手段を構築する。

「ネルのナビゲート、任せてもいいかい？」

『はい、お任せください！ 先生はどうされますか？』

「ネルに啖呵を切ったんだ。トキの電磁シールドは最低でも持って行くって」

先生は髪をかき上げ、眼を一層鋭くする。刃のような、とは言いが得て妙で、射貫かれただけで切り裂かれそうな鋭さがそこにはあった。だが、それは他者を傷つけるためのものではなく徹頭徹尾、己の意志を貫き通すためだけのもの。

「だから、ネルが此処に来るまでの10分弱で……彼女のシールドを破壊する。フルスロットル全開だ、彼女の為に突破口をこじ開ける」

『分かりました！ 停止させていたプロトコルを再稼働させます！』

これで漸く勝負の土俵に上がる事ができる。ネルが来るまでの慣らしも兼ねて、トキのシールドをぶち抜く。それでボルテージが上がリ、調子と冴え、キレを取り戻せればベストだ。

「アロナ、辛かったらいつでも私に回していいからね。君の苦しむ顔だけは絶対に見たくないから」

『大丈夫です！ 先生のアロナは負けませんから！』

自信満々な言葉を聞き、先生は大胆不敵な笑みを浮べる。目指すの

は大団円。その為に今までを重ねてきたのだ。負けるつもりはない。負ける訳がない。皆が居て、アロナが傍にいてくれるのだ。これで負ける方が逆に難しいだろう。

「アロナ、ありがとう。君がずっと守ってくれたから、私は今此処に居られるんだ」

『私もです、先生！』

互いに背中を預けるように、2人は阿吽の呼吸で己のやるべき事を行う。アロナはネルの為に最短ルートをナビゲートしつつ、演算の負荷を片手間に捌き。先生は頭の中で戦略を練りつつ生徒達を指揮する。

「——頼んだよ、ヒマリ」

彼のその言葉は、きつちりと届いた。

花を食む

中央隔離施設では1つの異変が起こっていた。突如として各種センサーが停止し、ロックが掛かっていた全ての扉が開錠、施設内部を徘徊していたドローンも全機が動きを止めて、その役目を終えたように沈黙。そして、これらの異常事態はリオまで届いていない。それは中央隔離施設の全てが第三者の手に堕ちた事を意味する。

——規格外の防衛システムを備えるエリドゥの一部を電子戦で陥落せしめる手腕を持つ人間なんて1人しかいない。

「リオ、あなたは『勝負は決した』と言いましたね？」

明星ヒマリ。ミレニウムに於ける知性の頂点。当代きつての天才にして、キヴオトスを覆す可能性すら持つ特異点。彼女は絹のような真白い長髪をくるくると指先で弄びながら……リオの言葉を反芻する。ただ反芻するだけでなく、その言霊に多くの意地悪を込めて。

あなたが捉えたと思った花はとつくの昔に束縛から離れていて、今まで大人しくしていたのは虎視眈々とタイミングを見計らっていたからだ——それを、最高の状況で突き付けるために。

「ええ、確かにそうだったのかもしれませんが——貴女の見ている範囲では、ですが」

ヒマリがそう言い終えた刹那、中央隔離施設が爆発した。しかも、ただの爆発ではない。堅牢な防御力を誇るエリドゥ、その中でも中央タワーと並んで強固なのがこの場所だ。その外壁が吹き飛ばされた、ともなればどれほどの威力を持つ爆弾を使ったのかと思わざるを得ない。

『爆発!? 一体誰が……』

流石にこの爆発はリオもきちんと捉えているのか、生きている回線を使用してヒマリにコンタクトを取って来た。だが、会話に応じるつもりはない。今は一分一秒が惜しいのだ。

ヒマリはディスプレイに映る光点を満足げに見つめて、車椅子の中に端末を仕舞う。分かってはいたが、助けに来てくれたのはやはり愛すべき後輩だ。効率を重要視する彼女らしい、壁を全て爆弾で吹き飛ば

しながら最短距離を突き進む救出方法。折角全ての扉のロックを解除したのに、と僅かに思いながらも、そこに嫌な気持ちは一切ない。ヒマリはいつでもポジティブなのだ。『きつと私に会えなくて寂しかったのでしよう』と思うだけだった。

尚、救出にきている彼女は『これが一番手っ取り早いから』という理由で最短距離を壁を吹き飛ばしつつ移動しているだけである。

「本番は此処からですよ」

勝負は決した？ チェックメイト？ いや、まだだろう。誰もが諦めていないのに、誰もが全力を出し尽くしていないのにそう決めつけるのは余りに早計だ。だから、ここからが本番。エンドロールには早すぎる。起承転結の内、今から『転』が始まるのだ。

ヒマリは驚愕の表情を浮かべるホログラム越しのリオに向けて悪戯っぽくウインクして、悠々と車椅子を動かしこじ開けられた穴から外へ出た。

——此処から本気だ。



「……外部からの襲撃？」

ヒマリの鮮やかな脱出劇の一部始終を望んでもない特等席で見たリオは茫然とした様子で呟く。先生と共に入り込んで来た生徒がノアだけではないのは知っていた。ヴェリタスの副部長と、認知していなかった部活の部長。そして、それより後に入って来たユウカとコユキ。それ以外に更に侵入を許したのか？ このエリドゥが？

「有り得ないわ。事前に脅威になる勢力は全てマーク済み。それに、エリドゥの都市内に居る限り私の捕捉から逃れることは——」

口に手を当てたりオはそこで思い至る。そうだ、先生達の侵入が発覚したのはメインコンピュータがハッキングされた時だった。口グを見て可能性に思い至り、カメラやセンサーではなく戦闘の痕から逆算する形で侵入経路と道中の経歴が詳らかになり、それに伴い先生に随伴していたノアと、別行動していた2人を探知できた。

つまり、ハッキング以前の彼らの行動をリアルタイムで追えていた訳ではないのだ。

リオは侵入者を捕捉したと考えたが、今ならば違う考え方ができる。そもそもどうして気付かなかったのだろうか。彼らの侵入をリオが捉えたのではなく、敢えて捕捉させた可能性に。否、確定していないから便宜上『可能性』と呼称しているだけで、その線が濃厚である事はよく分かっている。

先生は彼を含めた4人の侵入をエリドゥウに探知させなかったのだ。その上、頭の回る彼がハッキングのログという特大の証拠を残すはずがない。故に態と残したのだ。何のために？ 決まっている、侵入者は4人であるとしてリオに思ってもらうため。ずっと隠密を続けている誰かの存在を決められたタイミングまで伏せるためだ。

そうして徹底的に札を伏せ、状況を誤認させ、先生に対する対処で手一杯にさせ、リオの最後の切り札たるアビ・エシユフを使わせた。そうしてしまえばエリドゥウの防衛機構は怖くない。スタンドアロンのドローン程度、それなりに腕が立つ生徒一人が居ればどうとでもなる。ヒマリは車椅子を使用しているため見た目は非力そうであるが、それでも先生よりは格段に戦える。自衛くらいは容易くできるため足手纏いになる事はない。

リオはヒマリの脱出を完全に止められない。ドローンを向かわせる程度の対処しかできない。そもそも、こうしてビルを爆弾で吹っ飛ばされた時点で後手に回ったも同然だ。

「ヒマリ……ッ！ 先生……ッ！」



「——こつちだよ、ヒマリ部長」

「ふふ……まさか、あなたが私を助けに来てくださるとは思いませんでしたよ、エイミ」

ヒマリの前に立ち、すたすたと歩いているのは特異現象捜査部の部員第一号である和泉元エイミ。街中で見かけたら二度見どころか三

度見くらいしそうな、コハルが見たら卒倒し得るとんでもない服装の彼女であるが、そのような趣味という訳ではなく、ただ単純に極度の暑がりというだけである。その暑がりには世間一般を逸脱しており、冷房の温度を一桁にしないと『暑い』と言い出すくらいだ。

恐らく冷蔵庫の中が一番快適に過ごせるであろう彼女は1年生ながらその性質に目を付けたリオに直々にスカウトをされ部に所属する、というミレニアムの中では異色の経歴を持っている。尤も、部長の席にヒマリが来るまで特にやれる事も無かったため、部活として存在しているだけで活動を行っていなかったようであるが。

特異現象捜査部は会長のポストに就いたリオが独自で設立した部活だ。対神格、対権能、対滅亡に振り切れた、ともすればオカルトと切り捨てられるような眉唾物の伝承や神話、神秘を集積、解析し、対策するための部活。その活動内容は特殊作戦が大部分を占める。直近ではアビドス砂漠に顕現したビナーが特殊作戦に該当し、リオの要請とユウカのお願いを受けて彼女達も遙々駆り出された事は記憶に新しい。

「……これはリオへの裏切りになると思いますが、大丈夫なんですか？」

特異現象捜査部に所属するということは即ち、リオが属するセミナーの配下であるという事。数刻前に特異現象捜査部へ下された命令は部室待機のみ。故に、エイミの行動はどう繕ってもリオに対する裏切りだ。

リオを嫌いずっと冷戦関係にあったヒマリや、リオ本人からも癪癪玉扱いされ躊躇いなく飼い主の腕を食い破るネルが造反するのは訳が違う。彼女は1年生、ミレニアムで多くの時間を過ごしてきたくない。故に後ろ盾は少ないし、リオとの直接交渉権も持っていない。この作戦が失敗したら、会長権限で学籍を剥奪されてしまう可能性すらあるのだ。無論、リオがそのような事をするとは考えにくい。尊敬していないし嫌いだし、下水道ではあるが……それでも、重ねた年月の分の信頼はある。良くも悪くも彼女は感情に流されない。故に『自身に敵対した』というだけで即処分する筈がないが……その可能性は

皆無と言い切れない。だって、この世に絶対はないのだから。

もしそうなった場合、ヒマリはこの先自分の立場がどうなるかと庇うつもりであるが……それでも、セミナーの長という肩書は相応に強い。権力が同じでも立場が上なのはリオだ。ミレニウム内部で真正面から権力戦争をして勝てる、とは断言しがたい。

だから、本当にいいのかと——ヒマリはそう聞いたのだが。

「うーん……さあ？」

あまりにもあっけらかんとエイミはそう言って。

『私がリオに会いに行つた後、24時間経つても戻つて来なかつたら冷蔵庫にあるプリンを食べてもいい』って部長が言つてたでしょ？でも、どうせなら一緒に食べたいなって思つただけ。それに、誰かに従うならリオ会長よりもヒマリ部長の方がいいな——って何となく思つたから」

「そうなのですね……」

歩きに合わせて揺れる長い三つ編み。体のあちこちに張つてある絆創膏とガーゼは怪我の証であり、ヒマリの為に戦つてきた事を示す。彼女はチヒロとスマレと別れてからずっと一人で行動しており、人知れず中央隔離施設まで歩んできた。最高効率を常に考えている彼女は無駄な交戦を可能な限り避けてはいたが、それでも避けられない戦いはそれなりにあつただろう。それを一人で踏み越えて、ここまで来てくれた……そう思うと、ヒマリの心の内に暖かい感情が溢れた。大事に思っている後輩から同じような感情を返してもらえて嬉しくならない訳がない。

「ふふっ、後輩がどうやって助けに来てくれるのか、想像しながら待つというのはいの外の楽しいものですね。おかげさまでリオの面白い表情が見れました。満足です。暫くはこれをネタに弄れるでしょう」

「……一体、どっちが悪趣味なんだか」

自信満々な笑みを浮べるヒマリの手元には白のボディにシャーレのロゴが印刷された端末。そのディスプレイには驚愕の表情を象るリオが居た。ホログラム越しといえどその表情は無駄に鮮明で、ひと目で驚いていることが容易く見て取れる。一体いつの間に撮つたの

やら、なんて思うが、聞いてもどうせ碌な解答が返ってこない事はこれまでの付き合いからよく知っていた。恐らくは『超天才清楚系美少女ハツカーに不可能はないのです』とはぐらかされるだけだ。

溜息交じりのエイミの表情は相変わらず読み取れない。だが、それでもよく知る者から見れば通常の無表情よりも幾分か柔らかい表情をしていた。それはヒマリの悪戯心に溢れた趣味に呆れたからなのか、それとも存外元気そうで安堵を覚えたのか……それはエイミ自身にしか分からない。

それに、ヒマリの言葉……『暫くはこれをネタに弄れるでしょう』というのは少々意外であった。リオを蛇蝎の如く嫌っている彼女は、てつきりこれを機にリオと金輪際関わらないと思っていたのだが、彼女の口振りから鑑みるにどうやら違うらしい。

道を分かち、袂を分かち、互いに交わらぬと確信し、嫌い合い。そして、決定的な亀裂が今回だ。アリスを好いて、1つの命として尊重し、後輩として大切にしていた彼女は恐らく……いや、絶対にリオを許さない。だから縁を切りそうなものだと考えていたが、まだ関わるつもりがあるようだ。勿論、これまで通りとはいかないだろう。2人の溝は更に深まった。今までは舌戦の裏に銃を隠していたが、この先はきつと銃口を突きつけ合いながら言葉を交わすのだろう。

それが良い事なのか悪い事なのか分からない。事の善悪は当人同士で決めるものだ。だからせめて、その道を選んだことを後悔しない様にしてほしい。費やした時間が意義のあるものだった、と考えられれば無駄でなかった事の証左になるから。

「あら、悪趣味なんて失礼な。超天才美少女ハツカーの高尚な趣味と訂正していただけませんか？」

「はいはい。というか部長、状況が悪いのは変らなくない？ このままじゃ負け戦だよ？ 私達が増勢しても互角になるかどうか……」

眩き、エイミは端末を眺める。ディスプレイに映るのは広大なエリドウ全域。そこには自陣営を示す青のマークと相手陣営を示す赤いマークがポイントされている。

分かれていた部隊が合流し、1つの連合軍となって中央タワー前に

集結し、全員が足止めを食らっていた。そこから離れたセクションでは2人——恐らく以前まで共に行動していたチヒロとスミレ——がドローンを相手に防衛戦を行っている。

また、それとは別で1人が冗談のようなスピードで中央タワー前に向かっていた。その進軍を止めようとドローンが道を阻むが、足止めは叶わず蹴散らされるのみ。この様子では数分で中央タワー前に到着するだろう。

エイミは内心で『なんかよく分からなくなってきたかも』と思い、端末を仕舞った。

「あら、それなら大丈夫ですよ」

「うん？　何か切り札でもあるの？」

「ええ、勿論です。超天才美少女清楚系ハッカーたる者、切り札の1つや2つは完備しております」

さも当然のように言うヒマリであるが、彼女は少し前まで軟禁同然の扱いを受けていたのだ。外の情報こそリアルタイムで先生から受け取っていたが、リオに感づかれぬ為にも大きなアクションは取れない。それにも関わらず、彼女は切り札の用意があったと言った。

相変わらぬ規格外、全知の名は伊達ではない。先生がとっておきの切り札と言った理由がよく分かる。彼女がいつ、どのタイミングで脱出するかが勝率に直結するのだ。

「エイミ、先生の動きは何処まで把握していますか？」

「途中から無線で連絡できなくなっちゃったからそこまで詳しくないけど、大体は把握してるよ」

「でしたら、その行動の中に私か若しくは私の頼れる優秀な後輩達に向けたものがあつたのは分かりますか？」

ヒマリの問いかけにエイミは頭を捻る。何かあつただろうか、と今までの時系列順に出来事を整理する。ヒマリ、もしくはヴェリタスや自身向きとなると武装やらといった選択肢は自動的に排除。ヴェリタスも選択肢に入る事から、エリドゥの中に入らないと触れないものも除外。となると、外部からも使えるものに限定される。

彼が使つたもの。彼が残したもの。その中で、外部からアクセス可

能なもの——。

「……もしかして、中央の量子コンピュータ？」

「その通りです。アレは先生が残しておいた保険にして、私達に託したとっておきのカード……それを使わせてもらいましょ。私側にも幾つか用意はありますが、勝算の高いものから試すのが定石です」

そう言い、先頭がエイミからヒマリに切り替わる。車椅子を自在に動かし瓦礫の山を越えれば、白みだした空の元に辿り着いた。彼女達は行軍を続け、近場のビル……セクシオンを統括しているタワーの中に侵入する。スパコンまでの道は把握済。統括タワーの規格は全て同一のため、先生達の侵入経路をそのまま流用できる。

2人は迷わずに建物の中を進む。ドローンと接敵こそすれど、サッチャンドデストロイ見敵必殺を徹底しているため増援は呼ばれず、エイミの銃をワンマガジン使い切った辺りで最下層まで辿り着いた。

「うわー、凄いな、この子」

「彼女の強さを支えているのは文字通りエリドゥの全てです。エリドゥの能力が彼女に集中している限り、私達に基本的に勝ち目はありません」

コンソール前、2人は大型ディスプレイでトキの戦いを見物する。戦いの場所はいつの間にか中央タワー前の広場から高層ビルが立ち並ぶ場所に映っており、トキは立体的な軌道を描きつつ地上にいる先生達をガトリングで狙うが、ビルの窓ガラスを突き破りながら飛び出てきたアスナに銃口を明後日の方向に逸らされ隣のビルを穴だらけにするに留まる。落下する瓦礫を乗り継ぎながら彼女の元へ向かうのはアスナの跡詰めを担うアカネ。2人は前後を入れ替え、空中に身を投じたアカネはアビ・エシユフの最大火力兵装、エネルギー砲に狙われた。回避は不可能——そう思われたが、彼女は手練れのC&C。空中戦の経験は多くある。

何と彼女は自身の背中に爆弾を放り投げ、即起爆。爆風で無理矢理空中制御を成し、トキの銃口から逃れた。流星にこの回避方法は予想外だったのかトキは驚いた表情を見せて——その隙に2人とカリンは攻勢に打って出た。

それを支援するのは先生。彼は守るための防御壁を檻のように活用し、トキの行動範囲を制限。回避性能の高さを生かせない空間を無理矢理構築する事で突破する手法はアビ・エシユフに有効であったように、回避し損ねた弾丸が電磁シールドに負荷を与えバッテリーを削り——トキは苦い顔を浮べる。先生の戦い方も、C&Cの戦い方も洗練されてきているのを肌で感じているのだろう。このまま勝負を続けても負ける事はないだろうが、消耗は避けられない。

それはきつと先生も同じで、決め手に欠ける状態なのだろう。積極的に攻勢に転じていない事が証拠であり、確実に決めれるタイミングのみカウンターののような形で攻撃を差し込んでいる。それは防戦のようであるが……ヒマリとエイミには何かを待っているように見えた。

ミレニウムに於ける武力の頂上決戦。混ざれと懇願されても混ざりたくない戦場は数多の佳境を超えていた。ゲーム開発部、セミナーは戦闘の余波が及ばぬ場所、先生の背後で治療と回復に専念し、先生は適度に防御を張りつつ戦場の行く末を見ながら詰将棋のように手を打っている。その対局者はきつとりオだろう。C&Cの後ろに先生がいるように、トキのバックには彼女が居る。2人は互いの千手先を読み合いながら、相手に詰みを押し付け、自身の詰みを回避している。頭脳の頂上決戦も水面下で行われているのだ。

その映像を背後にヒマリは人差し指を立てて。

「さて、エイミ。ここで超天才美少女高嶺の花のハッカーからちよつとしたクイズです」

「クイズ？」

「ええ、完璧な相手に勝ちたいならどうすれば良いでしょうか？」

突然のクイズにエイミは「うーん」とワンテンポ置いて。

「自分も同じように完璧になる、とか？」

「それも良いでしょう。ですが、この場の解答としては三角ですね」

「それなりに考えた解答に三角を付けられたエイミは「むう……」と若干不服そうに頬を膨らませた。

「答えは『相手を自分と同じ土俵まで引き摺り下ろす』です。相手を完

壁じゃなくすれば、それだけでいいんですよ」

完璧な相手は完璧だから切り崩せない。倒せないものを倒すには倒せる段階まで相手を引きずり降ろさなければならぬのだ。つまり、完全性を失墜させる。それこそが攻略不可能に思われたアビ・エシユフを攻略する唯一の手段であった。

「……そっか、じゃあ中央のコンピュータに向かう価値はあるね」

「ええ……エイミ、パズルは好きですか？　それも、とっても大きな」

「今興味が出てきた所だよ、部長」

少しだけ楽しそうな表情を浮かべたエイミに応えるように、ヒマリもまた微笑を浮かべる。狙うのはアビ・エシユフの演算機能の中枢を担う量子コンピュータ。これを処理落ちさせるのだ。

その為に何を使うのかはもう決まっていた。

Over Count 00

排熱ファンの唸る音。モーター、ローター、車輪、キヤタピラの駆動音。銃声が鳴る。葉莢が落ちる。その奥で小さく響くのはキーボードを叩く音。

立ち上げた隔壁を背にエイミは銃のリロードを済ませ、敵機の数を確認する。

——空戦型が12、陸戦型が26。装備している火器はミサイルと機関銃。

あの装備だったらすぐには突破できないだろう、と思いながらエイミは自身の後ろに聳える壁のように分厚いシャッターを見つめた。この奥にスパコンが座しており、ヒマリが作業を行っている。つまるところ、彼女は防人だ。ヒマリが銃声に気を取られる事なく、心置きなく作業するためのセーフティ。

『エイミッ！どれくらい持ちますか!?!』

「損傷度外視で1時間くらい」

『自爆は許しませんよエイミ!』

「むう……なら50分」

耳の通信機から響く声が予想より大きかったのか、エイミは若干しかめっ面を浮かべながら無言で音量を小さく設定する。

50分、と言ったがそれはこのペースで敵の増援が送られ続けた場合の話だ。そのペースが上下すれば自然と時間も前後する。恐らくペースが落ちる事はないため、時間は確実に右肩下がりになる。その辺りを鑑みて大体30分持てば良いくらいだろう。

エイミの勝利条件は一定時間、敵機をヒマリの元まで通さない事。彼女の後ろに聳えるシャッターを突破されなければそれで良いのだ。間違っても敵の全滅やエイミの無事ではない。エイミがどれほど傷つこうが守り切れれば勝ちだし、無傷でも通せば負けだ。

その勝利条件が今のエイミにとってはネックだった。自分一人が生き残る事には長けている。防衛戦も撤退戦もミレニアムの中では

有数の腕を持ち、例えばどれほど傷つこうと判断が鈍る事はない。故に特異現象捜査部に選ばれたのであり、生存能力も頗る高いが……それはあくまで自分一人に限った話。ヒマリを制圧せんと迫りくるドローンを一機も通さない、というのは得意分野から離れている。

自分を狙っているのなら幾らでもやり様があるが、他者を狙っているとなると話は別だ。味方の庇い方や拠点防衛について知識や経験がある訳ではない。ここにきて、常に単独で実地での任務を遂行しているという弱みが出ってしまった。

「うーん……もう一人、誰か戦力連れて来れば良かったかも」

そう口に出したが、生憎もう一人の戦力には心当たりが無かった。今の自分達は使えるものを総動員している状況。余裕があるわけ無い。畢竟、ないものねだりだ。そもそもこうして相手のテリトリー内で、年単位で盤石な態勢を整えていたリオと不利ながらも真つ向勝負ができていた時点で贅沢は言えない。

『リオ……！ あなたの相手は私です……！』

通信越しに聞こえるヒマリの切羽詰まった声。彼女は現在、リオのハッキングの対処を一身で請け負っている。稀代の天才の相手が務まるのは稀代の天才のみ。相手にとって不足は無いと豪語し、彼女は全力でコンソールを叩いている。花を思わせる真白い彼女によく似合う余裕に満ちた微笑は影も形も無い。全力を尽くし、死力を振り絞り、彼女は切り開いた活路を死守している。演算に負荷を掛ける目的の区画移動はその場で組んだ有り合わせのマクロとAIに任せ、彼女は彼女のやれる事を。

——ヒマリは下半身が不自由である。全く動かせない不随ではわけではなく、補助器具を使用すれば短距離の歩行が可能なレベルであるが……一切の制限なく自由に動かす事はできない。故に彼女は常に誰かの手を借りて、誰かの助けを借りて生きてきた。そこがリオとの決定的な差異であろう。

つまり、自分一人の限界を知り、誰かに頼る事を知っているのだ。才に溢れていようができない事はできないし、そもそも一人でできる事なんてたかが知れている。自分一人で解決できることの方が少な

いのだ。

だから彼女は他者を頼る、信頼する。他者に頼られ、信頼されるように。自分が救えるのは自分の世界だけと分かり切っているから、助け助けられの輪を広げる。いつかもつと大きなものを救えるように。

これこそが明星ヒマリの天才性であり、美徳。知性の頂点に座しながら孤高を選ばず、他者と手を取り合う事を尊んだ。ある種、天才としての完成形。リオが辿り着けなかった場所に彼女は立っている。

故にヒマリは負けられない。負けるわけにはいかない。他の何に負けても良いが、自分が否定した自分の i f の体現者たるリオにだけは絶対に負けられないのだ。

リオもヒマリを片手間で相手する事はできないため、トキのサポートを一旦 A I に任せて全力でハッキングを行う。リオの狙いは量子コンピュータの制御権。奪われたそれを奪取することであるが……ヒマリが強固なガーディアンとして立ち塞がっているため、中々上手くいっていないというのが現状だ。

互いの意地とプライドをかけた量子コンピュータ攻防戦。制御権を取り戻したいリオと、制御権を奪われたくないヒマリ。その2人の読み合いは千の先を見据えている。

『頼みましたよ、チーちゃん達……!』



ヴェリタス部室。普段ならばキーボードを叩くや椅子を動かす音をバックミュージシャンに幾つかの会話が繰り広げられるだけの静かな部屋であるが、今は蜂の巣をつついたような状態となっている。

会話は無い。そんな事をしている余裕はないから。

椅子を動かす事も少ない。此方も同様に余裕が無いから。

キーボードを叩く音と何かのアラート音がひっきりなしに鳴り響く。このサイレンの音色はヴェリタスのサーバーが外部からハッキングを受けている場合に鳴るものだ。ファイアウォールと各種プロテクトはきちんと作用しているが、それでも油断は許されない。本来

ならばこの対処に1人人員を回すべきなのだろうが、今は防御よりも攻撃を優先。

自分が倒れる前に相手をぶっ飛ばせばいい、という脳まで筋肉でできているのかと疑うような思考だが、それこそが最善手。ちまちまと攻防の駆け引きをしても勝てないのは分かり切っているのだから、最初からノーガードで相手をする。攻撃以外は全て捨て、最短最速で敵をノックアウトさせることが目標だ。

現在、量子コンピュータへのアクセス権を付与されたヴェリタス4名はヒマリ作のAIと共に処理能力に負荷を掛けている最中である。膨大な計算を実行させたり、円周率や自然対数を計算させ続けるのは序の口。内部のプログラムを書き換えたり、クラッキングを行ったりといった事も同時並行で実施し、徹底的に破壊しようとしていた。

一見悪質な嫌がらせにしか見えない行為であるが、これにはきちんとした訳がある。先生やチヒロからの情報からアビ・エシユフ本体に演算能力があるわけではなく、外部の演算装置から結果を受け取っているだけというのは早い段階から判明していた。そして、その演算装置がある限り攻撃は回避され続ける。

全方位から全くの同時タイミングで攻撃を仕掛けたり、トキが行動できる範囲を極小にして回避しても当たるようにする、といった方法が攻略の術として挙げられるが双方ともに現実的ではない。前者はそもそも机上の空論に等しく、後者は行動を縛る術が非常に限られている。

後者の方法は先生が現在進行形でトキに挑んでいるがリスクとリターンが釣り合っておらず、トキを倒し切るよりも前に先生の限界が先に訪れるだろう。

だからこそ、この2つの理想論よりも幾分か現実的な方法でトキの完全性を剥奪する事が求められた。現実的な方法、今ある手札の組み合わせの範囲内、それでいて成功率がそれなりに高い。そんな無理難題に解答を出したのが、遠く離れた場所で戦いを観戦していたヒマリである。

圧倒的な回避性能を実現させている外部演算装置量子コンピュータを処理落ちさせ、

完全性を失墜させる——それがヒマリの考えたアビ・エシユフの攻略法であった。

「もー… どんな処理速度してるのさー！」

頭を抱えたマキが悪態を吐く。先の攻略法はあくまで先の2択よりも多少現実的というだけで、実現が容易かどうかは全くの別問題。寧ろ一般論と照らし合わせると可能性はかなり低い部類に入るだろう。

兎にも角にも処理速度が速すぎる。ワンオフの量子コンピュータ、と聞いた時点で覚悟はしていたがこれは想像以上だ。モニターに映るメモリとCPUの使用率はまだ余裕があり、これでは到底処理落ちなんて望めない。勿論、多少なりとも影響は与えられているだろう。だが、600秒先までの未来が見える状態から590秒先までの未来が見える状態になっても実際に対峙している者にとっては大して変わらない。

『皆、もつと負荷を掛けて！』

「そうは言いますが……！」

「……うん、これ以上はこっち側も持たない」

チヒロの言葉に返すコタマとハレ。しかしその声はマキと同様に余裕がなく、切羽詰まっている事が見て取れる。単純に此方側のマシンスペックの限界より相手側の限界値の方が高いのだ。それはある程度は想定していた現実であり、この作戦に於ける1つの懸念点。部室内のPCを全て動員しても尚、相手のスペックには届かない。

もし仮にこれをおうにかしたいのであればエリドゥ内部に居るヒマリに協力してもらおうのが一番手っ取り速いが、そうすると彼女が留めているリオがフリーになってしまう。流石にリオが相手ではPCのスペシャリストが揃うヴェリタスといえど分が悪い。そもそも、ヒマリとリオで1対1の交換ができて4人がフリーになっているこの状況が最善なのだ。これ以上は望めない。今ある手札で戦い抜く。

『私達ができるのは此処まで。後は頼んだよ、先生……！』



才羽モモイ——意識あり。負傷軽微、戦闘可能。
才羽ミドリ——意識あり。負傷軽微、戦闘可能。
花岡ユズ——意識あり。負傷軽微、戦闘可能。
早瀬ユウカ——意識あり。負傷多数、戦闘不能。現在治療中。
生塩ノア——意識なし。負傷多数、戦闘不能。現在治療中。
黒崎コユキ——意識あり。負傷軽微、戦闘不能。
一ノ瀬アスナ——意識あり。負傷多数、戦闘不能。現在治療中。

角楯カリン——意識なし。負傷多数、戦闘不能。現在治療中。
室笠アカネ——意識なし。負傷多数、戦闘不能。現在治療中。
これが現在の状況であった。総勢9名の戦力はその一切をトキにより撃破され、壊滅状態に。指揮官たる先生も惨憺たる様子で、顔色は白を通り越して青白くなり、意識は消えかけ。地面を踏みしめる足はみつともなく無様に震えており、膝を突くのも時間の問題だろう。対峙するトキは先生の状況とは全くの正反対で無傷そのもの。ボディスーツに包まれた体に一切の傷はない。

彼がこうなり、動かせる戦力もゲーム開発部のみとなった今、トキが敗北する可能性は立ち消えた。欠伸をしても確実に勝てるであろう。

だが、トキの表情には余裕が一切なかった。まるで信じられないものを見るかのような眼で、眼前に立つ幽鬼のような青年を見つめている。冷や汗が流れる。瞳孔が開く。喉が渴いて、思わず生唾を呑み込んだ。最強であるネルと対峙した時ですら覚えなかった緊張感。それを何の力も持たない先生に抱いていた。

そこでトキは気付く。彼の本懐は戦闘能力の有無でも指揮能力の高さでもない。彼の真に怖れるべきは何をしてくるか分からない部分だ。あまりにも未知。あまりにも領域外。彼はキヴオトスのスケールで測れない。正しく異邦の生命だった。

「……取り敢えず、その邪魔な電磁シールドは奪わせてもらったよ」
ゆらりと微笑みながら彼は呟く。彼の云う通り、電磁シールドは

バッテリーが底を突き発生装置を破壊された。これでは再使用なんて不可能だろう。

——流石にこれは予想外だ。僅かに攻撃が掠ったときは『まさか』とは思ったが、それを何度も繰り返されシールドを剥奪されるなんて考えてもいなかった。不可能に思えた策を実現する頭脳と機転は紛れもなく脅威そのもの。油断も慢心もしていなかったはずなのに、完璧であったはずなのに。それでも尚、彼等は上回ったのだ。偉業と呼んで間違いないだろう。

それに加えて。

「アビ・エシユフの演算機能が……これも先生の仕組みですか？」

「私、と言えば私なのかな？　でも、あくまで私はきっかけを作っただけ。実行しているのはヴェリタスの子達だよ」

「……成程。先生が電磁シールドを奪い、ヴェリタスの皆様が回避性能を落とす。確かに、皆様方はそうするしかないのでしょうか」

「ああ、トキがフルスペックだったらまず間違いなく勝てない。仮にこの場に私が動員できる全戦力が居たとしても、電子戦抜きじゃここで頭打ちだ。この先はどうやったって進めない」

目に見えて落ちている回避能力。先までは100%を維持していたのにも関わらず、今は70から80の間を不規則に揺れている。先生を注視するトキの視界に映る彼の未来も数分後の時点で不明。回避性能と、それを支えている近未来予知の機能の低下はアビ・エシユフの最大の手札を削がせたのに等しいだろう。

「だから、私達が勝つためにはまずその2点……回避性能と防御力を奪う必要があった。アビ・エシユフの特に優れている箇所である生存能力、その根幹を成す2つをね。これをどうにかしない限り、私達に敗北はあっても勝利はない。だから優先的に対処したんだけど――

「ですが、対処しようと思って対処できるものではありません。防御を削ぐには触れる必要があります。ですが、回避能力と未来予知がある限り私に触れることができなかったはず。ですが、先生は机上の空論のそれを成した」

ヴェリタスが回避能力と未来予知を奪ってから防御を奪ったのではなく、その2つは同時並行で成し遂げられた。先生達は触れる事すら不可能な相手に触れ、全ての攻撃を回避される相手に攻撃を当てている。迷ういなく不可能と断じられる所業。だが、彼はその不可能を、机上の空論を実現する術を持っている。

「それを可能にしたのがシツテムの箱、という訳ですか」

「そう。ま、反則技だね。仮にこれが無かったら私達はもつと早く全滅してたよ」

そう呟いている彼は冗談を言っている様には見えなかった。シツテムの箱がなかったら事態はここまで纏れ込むことは無かったのかもしれないし、トキのシールドが奪われることは無かったのかもしれないが……トキはあまりそうは思わなかった。シツテムの箱が無かったとしても彼ならば別の手段で対抗してきそう、という何とも言えない信頼がある。

「でも、私もノーリスクとはいかなかったよ。障壁は外部からの干渉を遮断するもの。内側からの干渉は通すもの。その辺りの条件を変更してトキを閉じ込める即席の檻を作るのは苦労したさ。負荷を掛けすぎたから箱のバッテリーは底が見えだし、私もこれ以上はキツイ。同じことをやれって言われてももう無理だ」

「……手札を晒してもよろしいのですか？」

「構わないよ。それも、トキも何となく分かっているだろう？ 私に現時点で切れるカードが無いつて事くらい」

「……ええ。仮に先生に打つ手があった場合、今この場で使わないのは不自然ですから」

彼の発言に僅かな引つ掛かりと違和感を覚えたトキであるが、それを頭の片隅に留めつつ言葉が続けて。

「防御、回避、未来予知の機能が停止または低下した今、攻撃を緩める必要はありません。それをしない、という事はつまり——」

「全部のカードを切った、という事だ」

あまりにもあっつけらかんとした降参宣言。ともすればサレンダーに見える彼のお手上げは、その瞳の奥を見れば言葉だけのものである

と即座に分かる。彼はこの期に及んでまだ諦めていないのだ。手札は尽きた。策は尽きた。体力が疾うに限界で、システムの箱も底が見えている。

だが、まだ彼は勝ちを諦めていない。アリスを必ず救うのだと傲岸不遜にただ一人、世界の残酷さと、どうしようもなさ——優しさと同様かさを知る彼は戦場に立つ。

「でも、その上で言おう——私はアリスを取り戻す」

「私に勝つつもりですか、先生？」

「勝ちたいんじゃない。私は守りたいだけだ。アリスを。あの子を傷つける悪意から」

勝ちたいのではない。彼は己の願いと在り方を貫けるのなら勝負なんて心底どうでも良いのだ。争いを嫌い、戦いそのものに価値を見出さず。戦った果てに得られたもの、守れたもの、救えたものにこそ価値を見出す。キヴォトスでは見ない在り方は、彼が異邦だからなのか——それとも、彼だから持ち得るものなのか。

彼は守りたいだけだ。誰かを。世界を。幸福を。希望を。未来を。輝きを。

だから決して折れないのだろう。その芯がある限り。
だが——。

「確かにシールドは失いました。ですが、アビ・エシユフは健在です。まさか、彼女達3名だけで勝てるとは先生も思っておりませんよね」
「そうだね。所詮は防御の手札を1枚失わせただけ。攻撃力は健在だし、何より回避性能もほぼ据え置きだ。流星に彼女達にはちよつと荷が重い。ま、彼女達はこの後の事もあるから戦わせるつもりなんて無いけど……」

「では、どうされるのですか？ まさか先生自らが、ですか？」

その言葉に彼は「まさか」と呟き、笑いながら。

「私が出たところで踏み潰されてお終いさ。私自身がトキと戦うつもりはない」

「……ゲーム開発部の彼女達ではない別の手段があるっても？」

「ああ、あるよ——君の後ろに、ね」

先生の優しい声音に促されるままトキは後方を振り返ると――
―彼女は信じられないものを見た。

見間違えようがない姿。相手側の最高戦力。何度も拳を打ち合い、何度も銃口を突きつけ合った存在。しかし、アビ・エシユフを解放したトキにより数刻前に敗れ去り、今はリオよって回収されたはずの――

――コールサイン、勝利。ダブルオー

「よお、後輩。久しぶりだな」

勝利に飢える美甘ネルがその両脚で地面に立っていた。あくまでも自然体で、気さくで。まるで久しぶりに顔を見た知り合いに声をかけるようなトーン。

しかし、だからこそ恐ろしい。ギラつく眼や暴力的に吊り上がった口角は凡そ友好的とは言えず、血の匂いと彼女自身の香りが混じり合った天然の香水はまるで硝煙のように否応なく戦場を意識させる。

細い足はすぐにでも距離を踏み潰してきそう。だからと垂れ下がった左手は瞬く間に拳を振りかざしてきそう。銃を握る腕は刹那の間に万象を穴だらけにするだろう。

「……ネル先輩」

発したその声が震えていない事は、トキにとって奇跡に等しかった。あれは何だ、と脳が全力で警鐘を鳴らす。アビ・エシユフの演算は彼女がボロボロであることを示しているが、肉眼で見るトキには到底そうは思えなかった。

美甘ネルは戦闘続行不能？ 戦闘した場合の勝率99.99%？

馬鹿を言え、アレはそんな油断が通じる相手ではない。悔つたら……否、悔らなくてもただでは済まないだろう。それは宛ら手負いの獣。自身の生存を度外視し、目の前の壁を超えるためだけに生命の火を燃やし尽くすもの。血の海に灰を浮べ、骨肉を焚べるように。

ああ、この感情は――恐怖だ。テラー

「おいおい、そんな化け物を見るような目でアタシを見んなよ……：：：這い蹲らせたくなるだろうが」

獯猛に笑い、ネルはトキの前を素通りし先生の横まで歩く。彼は彼女の帰還を心底喜んでいる事が容易に見て取れる表情で迎え入れ、数

往復の短い会話を済ませる。その後、彼は手元のタブレットを操作すると何もない空中から物資が落下する。一切のカスタマイズがされていないMPX。それはネルの手元に収まり、彼女は晴れて元の戦闘スタイル……SMG二丁持ちに戻る。

「有り得ません。あの傷でまともに動くな……！」

「テメエの尺度でアタシを凶んなよ。この通りアタシは元気だぜ？」

気丈に言い放つネルであったが、相応に無理をしている事は先のスキャンで既に分かっている。どうして立っていられるのか、どうして動いているのかが不思議に思えるほどの重傷。だが、それでも――

トキが倒したあの時と比べて大幅に回復している。折れていた骨は最低限くつつき、切れていた筋肉はある程度修復され、内臓も元通りに。治療されず手付かずのまま残る傷は比較的戦闘に支障が無いものだけ。これらの治療は恐らく先生と……彼女自身が持つ回復能力によるもの。

つまり、依然としてボロボロであるが、彼女にとって戦闘自体は可能なのだろう。色々とスケールが違いすぎるため、此方の常識が通用しないという事は分かっていたが……それでも、ここまで常識から斜め上に外れているとは思わなかった。

――これがキヴォトス最強格。これがミレニアム最強。これが勝利の象徴。

「全力のお前に負けたのは気に食わねえが、そいつのリベンジマッチはまた今度だ。今は……お前を一秒でも早くぶっ倒す事を優先する」「やれると思っっているのですか？」

「やれねえと思っってるのか？」

確かにトキのスペックは落ちた。回避性能と近未来視は機能が低下し、防御の要であった電磁シールドは失われ、カタログスペックから2割減している。

だが、それはネルも同じだ。寧ろネルの方がスペックの低下は激しいだろう。傷は癒えても痛みは消えない。彼女は体を動かすたびに脳を焼く激痛を味わっているはずだ。

――先ほどの戦いは、全力のトキにフルスペック、アビ・エシユ

フとそれなりに損耗したネルとのマッチアップだった。これからの戦いは全力のトキ、8割のスペックのアビ・エシユフと手負いのネル、それに加えて——先生がいる。

彼も死に体だ。その傷はネルのそれを上回り、いつ倒れてもおかしくない程。倒れないのは彼の意地によるものか、或いは何か別の助力があるのか。

ネルだけ戦わせて彼は観戦する、というのは考えにくいため何らかの形で彼も確実に戦闘に参加する。考えられるのは先と同じ指揮とバックアップ。これが唯でさえ単騎で強力なネルに齎された場合、火を見るより明らかだ。

アビ・エシユフが映す勝率は信用できない。先程の数値はネル単体と戦ったときの勝率だ。先生が確実に加わるだろうこの状況、勝率は落ちるはず。

「分かっているとは思うけど、今回は制限時間がある」

「だから最速で叩き潰せばいいんだろ、分かってる」

「もし君でもどうにもならなかったら、私の最終手段を使う」

「使わせねえよ。アタシが勝つからな」

余りにも頼もしい言葉の数々は、互いに高い信頼があるからこそ成り立つもの。先生と生徒でありながらその在り方は戦友のようで、言葉の裏で武器を研ぎ澄ます。アビ・エシユフのような外敵を排除する刃、傍にいる誰かを守るための刃、明日に至るための剣。

そして、2人は共に不敵な笑みを浮べて。

「ネル、行けるかい？」

「当然ッ！」

ネルは拳を掌に打ち付け、音を鳴らす。それに伴い赤を幻視する怒りの神秘が全身から立ち昇り、空気に緊張が走った。

「……もう手加減はできません」

「する必要はねえだろ。アタシもお前も、自分がやるべきと思った事をやっているだけだって。それを肯定するのも否定するのも自分次第。だったらせめて悔いのないようにしないと目覚めが悪い」

「……本気で、その傷でやるつもりですか？ 動くのも辛いでしょう

に」

「当たり前だ。それに、先生が気張ってんだ。何の力も無い先生が、だ。ならアタシがたかが致命傷如きで止まる訳にはいかねえよなあ!？」

指向性を持たせない単なる神秘の放出。通常であれば放出したからといって別に何も起こらないが、膨大な神秘を持つネルが行ったならば話は別だ。放出された力場は強度の低いものならば瞬時に圧壊せしめ、鉄柱やポールもひしゃげる圧力となる。それに当てられたトキは思わず顔を覆い、眼前の脅威を見据えた。これではどちらが挑戦者か分らない、と考えながら。

「確かにアタシは動けないのかもしれないが、動けようが動けまいがどつちでもいいんだよ。やる事は変らねえ。アタシは、お前を絶対に逃がさねえ」

一歩、一歩。ネルは踏み出す。そしてトキも彼女を迎えに行くように一歩、また一歩と前に進み——その間合いは20mとなった。一瞬の踏み込みで容易く潰せる距離。一瞬の離脱で容易く離せる距離。

双方、トリガーに指をかけて銃口を相手に向ける。眼に入るのは相手のみ。それ以外は視界からも、思考からもはじき出された。

「先生！ 援護は任せたぞッ！ 遠慮はいらねえ、フルスロットルだッ！」

「任せて！ ネル、君に——ただ一つ、輝ける勝利をッ！」

——アリス奪還作戦、最大にして最後の戦いが幕を開けた。

瓦解する完全性

「あ、あの……先生……」

控えめな声音と共に袖を引っ張るユズは何か気付いたような、或いは何かを聞いてほしいかのような顔で先生を見上げた。大きな瞳に見つめられた彼は彼女の意志と考えに気づき、視線を彼女と合わせる。

「気付いたのかい？」

「は、はい……もしかしたら違うかもしれませんが……」

「違ってもいいよ。臆せず言ってみて」

背中を押されたユズは意を決して。

「あの装備を決められたルールの範疇でチートをハメ技で突破できるかもしれません」

「そう思った理由は何かあるかな？」

「はい。攻撃を回避する瞬間……特に飽和攻撃になればなるほど、初動が遅くなっていました。恐らく、最適解を出すまでに時間が掛かっているんだと思います。1マガジンくらいなら撃たれる前に回避できるかもしれないですが、それ以上となると……」

「回避にも上限がある……ユズはそう言いたいんだよね？」

「はい。で、でも、実際の上限值はよく……それに、回避と未来予知に莫大な演算量が要求される、という仮定の元ですし——」

「いいや、百点満点だよ、ユズ」

卑屈になりかけたユズの言葉を強引に遮り、彼は状況証拠のみでアビ・エシユフの真実に辿り着いた彼女に惜しめない賞賛を贈る。ゲームで鍛えられた動体視力と観察力、推理力。UZQueenの名は伊達ではないのだ。

「ユズの推察通りだ。アビ・エシユフもエントロピーは超越できない。被造物である以上、どれだけ上限値が高くても限界はある。倒せない、って事はないのさ」

その言葉の後、彼は二本の指を立てて。

「攻略に必要なピースは2つある。1つは演算に膨大な負荷を掛ける

事。2つ目は回避力が落ちたアビ・エシユフを倒す事。そのための前提として電磁シールドの突破があるけど……これは私がなんとかしよう。加えて、1つ目はヴェリタスの子達がどうかしてくれるから、残るは……」

「実際に倒す役割、ですね。でも、私達の火力じゃ……」

「そこは心配しないで。当てはちゃんとある。だから、ユズ達には最後の1押しをやってほしいんだ」

「最後の1押し、ですか？」

彼は「ああ」と短く首肯し、前を向く。見惚れてしまうほど透明な色彩を伴って。

「演算力を失墜させ、アビ・エシユフを倒すための……最後の1押しをね。大丈夫、隙は必ず私が作るよ」



ネルの脚力により生み出された神速の踏み込み。距離を離さんとしていたトキの思惑ごと踏み砕く圧倒的な速度は残像すら目で追えない程。文字通りの一瞬で数百メートルの距離をゼロにした。

ネルの最も得意な距離感、彼女が負け無しと豪語するレンジはクロスレンジであるが……彼女が優れているのはその距離での戦いだけではなく、その距離を作り出す術にも長けている。数百メートルなんて半端な距離を離しても容易くクロスレンジまで持ち込まれてしまうため、離脱する労力を鑑みれば開き直ってネルの距離に居座る方がマシなのかもしれない。結局、振じ伏せられるまでの時間がコンマ数秒ずれるだけなのであるから。

その近接技能は負傷多数といえど未だ健在。寧ろ痛覚と傷がアドレナリンの分泌を後押しし、コンバットハイを齎している。先生のサポートによる感覚の拡張も相まって過去最高の冴え。それに加えて全力のアビ・エシユフを相手に30分弱防戦を成立させた際に得た膨大な経験値がある。敗北の経験は決して無意味ではなく、彼女の学習能力とセンスに後押しされ糧になりつつある。肉体的には弱体化し

ているが、それ以外の面では大幅に強化されていた。総合力で見れば今のネルの方が上だろう。

それに、ネルは全てを出し尽くす気でいた。アリスの奪還は仲間任せ、自分の役目は……勝利はトキを倒す事だと割り切つて。故にフルスロットル。このあとの戦鬪なんてものは知らない。この壁を越えられないなら後の事など考えても意味が無いのだから。

「オラアツ〜」

砕けんばかりに硬く握り締めた五指。リスク度外視で高められた身体能力により生まれる破壊力は一撃でビル群を崩壊させるほど。当然、真面に受けければ吹き飛ぶどころでは済まない。間違いなく一撃で意識が消し飛ぶだろう。

だが、それは受けければの話。演算が妨害され、回避力は落ちた。しかし、それでもスペックは異常と言う他ない程のもの。ネルの初動、筋肉の隆起、視線の動きから狙いは既に分かっている。そもそもアビ・エシユフが強いのもそうであるが、濼みなく使いこなすトキが強いのだ。その強さは機能が落ちても揺らぎはない。

ネルの打撃は流麗な所作で回避。そのまま右足側面のバーニアを吹かし急制動を掛けてクイックターンを行い、鈍器となった左脚部をネル目掛けて振り抜いた。だが、その蹴りは紙一重で回避される。読まれた、と思うのに時間は掛からなかった。

突き付けられた銃口。引き絞られたトリガー。発射される弾丸。見える。未来は見えている。だが、回避はできない。アビ・エシユフの制御プログラムがオーバーフローを起こしている。自動姿勢制御ができない事を悟った彼女は瞬時にマニュアル操作に切り替え、巻き返しを図った。回避が不可能であるならば、取るべき手段は必然的に防御に限られる。

トキは腕部を動かし、自身と銃口の間を潜り込ませ——その直後、銃声と金属音が断続的に聞こえた。軽量かつ硬度が高い特殊合金がふんだんに使用された装甲は全ての弾丸を受け止め、返す刃のようにフリーな方の腕……ガトリングガンを構えた。熱を帯びる空気、硝煙を切り裂く様にトキはトリガーを引く。

「ハッ！ 良い動きだッ！」

一瞬で零距离から離脱し、再びクロスレンジの間合いに戻ったネルは分間6000発という狂ったレートを持つ銃に一步も後を引かず、臆せず、全弾回避する。鋭く速い動き、その上かなり正確だ。すばしっこいな、とトキは内心思いながら……もう片方のガトリングガンと背中エネルギー砲を展開。チャージ時間を最大限短縮し、威力と範囲を絞った青の致死光は宛ら超高出力ウオーターカッター。薙ぎ払う様に放たれたエネルギーはビル数棟をバターののように鋭く切り裂き、ついでにネルの持つMPXを半分以上消し炭にした。

「チッ……」

得物が一つ消し飛んだネルは舌打ちを挟み、殆どグリップだけになり使い物にならなくなった銃をトキ目掛けて投擲する。唯の投擲と侮るなかれ、ネルの膂力により放たれたそれは宛ら砲丸。直撃すれば骨折は免れないであろう。だが、直線軌道のそれに態々当たってやる理由も無いトキは軽々と回避した。

直後、周囲に白煙が立ち込め、轟音が数回響いた。音の理由は不明であるが、煙の方はスモークグレネード。恐らくアカネかユズのもの。ネルが誰かから譲り受けたのか。それは不明だが……この程度では目晦ましにもならない。それは先生だってよく知っているだろう。それにも関わらず、ともすればネルの方に不利に働かかねない戦法を取った。であるのなら、そうまでして隠したかった、或いは一時でも意識や視界から外したかった何かがある——そう考えるのが自然だ。

何か猛烈な嫌な感覚を覚えたトキは急いでスモークを切り払い、視界を確保。すると、やけに暗い事に気が付いた。今現在の時刻は6時を過ぎている。太陽は疾うに上っているため、この暗さはいくらもない——いや、この暗さは……何かの影になっている？

そこで初めて、トキは上を見上げて。

「なッ……！」

絶句した。影になっていた、という予想は正解だ。しかし、トキに影を落としていたものまでは分からなかったが……今漸く分かった。

トキの頭上を埋める巨大な影の正体、それは。

「デメエがぶっ壊したモンだッ！ ちゃんと受け取れよッ！」

先のエネルギー砲の薙ぎ払いで切り飛ばしたビルの一部であった。ネルはトキの視界が封じられているごく短い間に移動し、落下しつつあるビルの一部を蹴り飛ばして此処まで運んだのだ。比較する事すら馬鹿らしい圧倒的な身体能力。ビナーを蹴り飛ばしたヒナに勝るとも劣らないスペックはたった数十トンの質量であれば容易く動かせる。

「……驚きました。本当に同じ人間ですか？」

「お前にそれ言われるとムカつくな、おい」

軽口を叩きながら巨大質量と共に落下するネル。その手には先ほど消し炭にしたはずの銃が再度握られていた。恐らく序に取りに行っていたのだろう。本当に抜け目がない。

さて、とトキはやけに落ち着いた感情を抱きながら頭上を見た。落下する巨大質量と、それに随伴するネル。流星にこれは予想外だ。それでいて回避の術も限られる。随分と面倒な戦法を取ってくれましてね、とトキは内心で溜息を吐いた。これはどうやったって無傷での回避は出来ない。であるならば……。

「ほうっ？」

「……」

双方、考えは同じだったようで。2人は互いに銃口を構え、トリガー。恐ろしい速度と殺傷能力を伴う弾丸が瞬く間に巨大な質量を細断し、細かな瓦礫に変えていく。これまで目立った損傷が無かったアビ・エシユフは巨大な運動エネルギーを伴う瓦礫により凹みを作られ、装甲に細かな亀裂が走り、内部の機械部分が露出。

勿論、傷つくのはアビ・エシユフだけではない。ネルはトキの弾丸で、トキはネルの弾丸と瓦礫により傷つけられ、流血と打撲痕が作られた。

「やっぱりこいつは避けられねえよなあ！」

先生から与えられた情報。ヴェリタスの妨害。そして、ネルの経験。それらを統合して導き出したネルなりの攻略法。それは周囲の

環境をフラットな状態から遷移させ、演算機能をオーバーフローさせる事だった。

平地平面の環境下であれば環境変数は然程多くない。気温や湿度、風向き等であればエリドゥのスペックが有れば瞬時に計算できるだろう。

だが、こういった……通常ではまず起きないイレギュラーな状態であれば瞬時に計算して行動、とはいかないだろう。落下する無数の瓦礫とその合間を縫うようなネルの射撃を一瞬で計算し、回避行動に盛り込めるほどまだ現代は進歩していない。故に、相手の機能を逆手に取った攻撃は非常に有効であった。

トキはアビ・エシュフの演算が使えない事が分かると回避を諦め、両腕のガトリングで瓦礫を粉碎し、少しでもダメージを抑えるために打って出た。回避ではなく次善策の防御を瞬時に選択するのは流石の判断力だろう。彼女はアビ・エシュフの性能に胡坐をかいているわけではない。アビ・エシュフの性能と性質を誰よりも理解し、使いこなしているのだ。

「ぐッ……！」

瓦礫に打ち付けられ体が鬱血する。纏うボディースーツが切り裂かれる。久しく感じていなかった痛み。アビ・エシュフを装着している状態で、ここまで鮮烈な痛みを味わうとは思っていなかった。だが、この程度の傷で動きは落ちない。アビ・エシュフも装甲が凹んだ程度で戦闘に大きな支障はない。

故に今気にするべきは——瓦礫と瓦礫の間を舞うように飛び、銃撃音をミュージックに破滅的な舞踏を踊るネルだ。彼女はやはり戦いが上手い。そのセンスがずば抜けている。先生の入れ知恵やアシストがあるとはいえ、たった1回……30分の攻防で限りなく正解に近い攻略法を導き出してくるとは思わなかった。やはり侮れない。動きは先と比べてかなり落ちているが、総合的な脅威度は今の方が確実に上だろう。恐ろしい事この上なかった。

「テメエの演算のタネは割れてる。周囲の環境変数を貪欲に、無差別に収集して機体に未来を見せてるんだろ？」

その声は思ったより近くで聞こえた。右、2 m。即座に振り向き赤熱したガトリングの砲身で殴りつけようとしたが……重低音が鳴り響いて腕が明後日の方向に逸らされる。開けた視界に映るのは足を振り抜いたネル。蹴りで軌道をずらされたのだ。

「なら簡単だ。演算に負荷を掛ければいい」

続いて反対の足での蹴り。それはトキの体に届く事はなくアビ・エシユフの腕部により防がれるが……一際大きな音が鳴り響き、蹴りを防いだ部分の装甲が周りを巻き込み無惨にひしゃげながら吹き飛んだ。

無敵を誇っていたアビ・エシユフに生まれた明確な致命打。大きな傷。その余りにも非現実的な光景を見たトキは驚愕を浮べる。あの装甲は勿論特別性。途轍もないほど高い剛性を持っている。衝撃、斬撃、その他温度変化にも強く、爆撃を受けた程度では傷一つ付かない。そんな素材を全身に使い、更に表面に何層ものコーティングを施しているのだ。真面な手段ではまず無傷を保ち続ける。アスナの全力で漸く凹みが1つ着いた程度なのだ。それにも関わらず、無造作にも見える蹴りで装甲を吹き飛ばすなんて。

「成程、これぐらいの力加減か」

にやりと笑ったネル。最適な力加減を見つけたネルは漸く攻めに転じれる事に歓喜を抱いた。防戦は趣味ではない。何方かと言うと攻める方が性に合っているのだ。そして、攻めている自分が一番強い事も彼女はちゃんと分かっている。

故に、ネルは手を緩めることなく——更に一步、死地に踏み込んだ。

「……ッ」

超至近距離。ネルと相対するトキはアビ・エシユフの操縦をオートに切り替え、操縦桿から手を放して自身の愛銃とサブアームのハンドガンを持ちながら抗戦する。だが、高い出力と強度を実現していたアビ・エシユフの巨体が小回りが利かないというデメリットに転じてしまい、トキが有効打を与える回数よりもネルが有効打を与える回数の方が上だ。このままでは遠からず負ける——そう思ったトキは

撃ち尽くしたハンドガンを放り投げ、空いた手で操縦桿を掴み……物理ロックを解除する。

「制限、解除」

トキの音声によりシステム側のロックが解除され……アビ・エシユフの奥の手が使用可能となった。

「電磁シールド……攻性転用」

「ネル、避けてッー」

先生の叫びと共にネルの体に幾層ものシールドが展開される。それと同時に背筋に冷たさを覚えた彼女も飛び退くが……トキの攻撃の方が速かった。

「一掃します」

その言葉と共に、トキを中心とした全方位に電磁パルス爆発が発生する。その範囲は半径100m。トキの頭上から降り注いでいた瓦礫は悉くが消し炭になり、地面も同様に焼け爛れ、抉れ、吹き飛ばす。

ネルに付与されたシールドは当然の如く全て粉碎。受け止めきれなかった熱量は彼女の五体を焼くのに充分すぎる威力を持ち、衝撃は彼女を容易く数百m先のビルまで吹き飛ばし、外壁にクレーターを形成する程。

これこそがアビ・エシユフの奥の手であるアサルトパルス。一回の使用でシールドの発生装置が焼き切れ、攻撃にも防御にも使用できなくなるため使用タイミングは限られるが、仮に直撃すれば一瞬で戦況をひっくり返す攻撃力を持っている。ロック解除の手順を含めなければほぼノーモーションで発動可能な奇襲性の高さも相まって、必殺と言つて差支えないスペックだ。

「はあ、はあ……」

だが、この攻撃はアビ・エシユフを中心として発動する。その影響を最も受けるのは当然搭乗者のトキだ。故にこの攻撃に際し保護目的のシールドが展開されるのだが、これまでの損耗によりシールドの展開が不完全となつてしまった。全くの無防備、という訳ではないが、それでもあの爆発を受け止めきれぬものでは到底なかつたため、ボディースーツは縁の方が炭化し、彼女の肌には痛々しい火傷痕が随所

に見られた。

だが——まだ、戦える。トキは最早デッドウェイトにしかなっていない発生装置をパージし、ガトリングガンのリロードを済ませた。背部のエネルギー砲も即座に発射可能な状態に展開し、準備を万全にし……眼前の脅威を見た。

「く、そ……ッ……んなのアリかよ……」

瓦礫の山を掻き分け、悪態を吐きつつ手足を引きずりながら歩く姿は万全とは程遠い。彼女も少なからずダメージを受けている。火傷の痕と炭化したメイド服。だが、戦意だけは翳る事を知らず。

トキとネルのダメージレスはほぼイーブン。距離を離して仕切り直せた事を含めると……僅かにトキが戦場をコントロールしている。少しばかりネルが不利であった。

しかし、この程度は不利の内に入らない。コントロールが相手にあるなら奪い返せばいいだけだ。

「さあ、お望み通り仕切り直しだ」

「ええ、もうあの距離まで近づけさせません」

「やってみろッ！」

言うや否や、駆け出すネル。銃を構え、全速力で前へ。直線軌道における加速力は圧倒的にトキが上だ。ジェットエンジンを搭載しているものを相手に単純な追いかけてつこをしても絶対に追いつけない。彼女が勝るのは小回りが利くという点。そこを利用しよう一度近づく必要がある。

対するトキもネルを相手に接近戦なんて御免だと言わんばかりに距離を離しつつ全火器を以て迎撃を行っている。ガトリングガンの圧倒的な発射レートと、少しでも足が止まったらそれを見逃さず射貫くエネルギー砲。エネルギー砲は今までのような集束だけではなく拡散タイプも解禁しているため、これまでに以上に隙が無い。

故に距離を詰めて再びクロスレンジの戦闘に持ち込むのはほぼ不可能だと思われたが……そんな事は織り込み済み。態々アビ・エシユフの演算機能をオーバーヒートさせ、トキの意識をネルに集中させたのは意味がある。

彼女が今まで誰と戦っていたのか——その現実が最高のタイミングでトキの選択に否を突き付けた。

カチ、と静かに破滅を告げる音が鳴る。発生源はトキの足元。ネルを収めていた視界を引き戻し下に眼をやると……巧妙にカモフラージュされた爆弾が1つ。

今度は外しません、と脳裏でアカネの声が聞こえた。

「——ッ！」

人が持ち運べる火器とは思えないほど高威力、広範囲の爆弾は既に空中へ回避行動を取っていたはずのトキを容易く呑み込み、アビ・エシユフの脆くなっていた外装を容易く吹き飛ばした。更に内部の駆動系にも一部ダメージが見られ、左腕部が僅かに動かしにくくなる。今まで受けたダメージの中で最も重篤だ。拙い、と思ったトキはスラストを全力で吹かし、黒煙を切り裂きながら空中に踊り出る。

そして——その行動を諫めるように黒鉄の弾丸が音速を超えて飛来した。

「くう……ッ！」

トキの右足に直撃した弾丸は13・97mm弾。対物ライフルに使用されるものだ。9mmパラベラム弾よりも高い威力と衝撃を貫いたトキは思わず顔を顰めて、自身と同じ高さに居る彼女を見る。

「カリンほど上手くねえけどなッ！」

叫ぶネルは空中に居るトキに追いつかんとビルの側面を全速力で駆け昇っている。その速度は速く、トキとほぼ同速。恐らく先生の身体能力強化だろう。

だが、それより目を引くのは彼女がカリンの得物である筈のボーイズ対戦車ライフル^{ホィ}を担いでいる事だろう。

重力に真つ向から歯向かい、壁を全速力で駆け昇りながら、同じ速度で上昇するトキを射貫くのは紛れもなく神業。本職のスナイパーも顔負けだろう。

「もう一発貫つとけッ！」

先と同様に発射される対物ライフル。空気を切り裂きながら飛来する弾丸は正確にトキを狙っていたが、来ると分かっていたらば対処は

容易い。彼女は脚部で音速を優に超える弾丸を蹴り飛ばし、そのまま巧みな姿勢制御で立て直し——ガトリングガンサブライズパーティを向けた。それに対してネルはアサルトライフル、F A — M A S を構える。アスナの武器だ。もう片方の手には M P X が握られている。

道路を挟んで向かい合わせのビルの側面、上昇しながら行われる銃撃戦。弾丸は窓ガラスを、外壁を砕き、互いの体に数多の傷を付ける。そうして彼女達は互いの終点であるビル屋上まで駆け上り……トキは開けた場に小柄な3つの影を見た。

「さあ、ここからは私達も相手だよ！」

啖呵を切るモモイに追従するミドリとユズ。彼女達も銃を構え、何時でも戦闘可能な臨戦態勢を取っている。その立ち姿は手練れのそれ。初めてトキと対峙した彼女達よりも成長している。潜り抜けた数多の死線と戦場が、彼女達に著しい飛躍を齎した。

認めなければならぬ。彼女達は強いと。トキは内心で『これは油断できませんね』と呟いて、対ネルに染まっていた思考を切り替えた。「……なるほど。姿が見えないと思っただらここにいらつしやいましたか。読み通り、という事ですか……先生」

「どうだろうね。でも、何もかもが上手く運んでここまで来れたのは事実だよ」

落下防止フェンスに凭れ掛るように立つ先生は力なく笑いながらトキの問いに答える。読み通り、なんて事はない。賭けの部分は依然として多かった。だが、それを皆が全力を賭して行ってくれたから、どうかにかここまで辿り着く事ができた。再現性なんて皆無で、もう一度やれと言われても絶対に無理だと断言できる。このメンバーだから成し得た偉業だ。

そして、残る不確定要素はあと一つ。それが成功すれば——勝ちが見える。

この3人の戦いは残る賭けが成功する確率を少しでも上げるための布石だ。勝つための戦いではなく、負けないための戦い。大きく攻めに転じる必要は無い。必要なのは防衛と、損耗を可能な限り抑える事。こういった戦いはそれなりに得意であった。

「行くよ、ゲーム開発部ッ！」
「了解ッ！」

終焉へ向かう疾走

『モモイ、2秒後に221度右に旋回。その0.5秒後にミドリはマークに向けて射撃。ユズはポイント更新後、弾頭をグレネードに入れ替えて』

「ひーッ！先生の指示細かすぎ！頭パンクしちゃうよ！」

「泣き言言わないでお姉ちゃん！私達、それで助かってるんだから！」

とやかく言いながらも彼の指示通りに行動するモモイと、淡々とこなすミドリ。そして、集中し過ぎるあまり元々少なかった口数が更に減少するユズ。三者三様ながら、それでも同じ部活に所属する者同士似ている部分が多々ある。こういった噛み合いの良さも仲を更に深める要因となったのだろう。

ミドリはG3SG／1を構え、瞳に映るガイドマークに従いトリガーを引く。一見何もない場所に撃ったかのように見えるが、そもそも弾丸を直撃させることが狙いではない。狙ったのは貯水タンクの留め具。弾丸によって螺子が吹き飛ばされ、その自重と重力に従い落下し……トキの通路を塞ぐように陣取った。

急に生えてきた障害物を前にトキは態々迂回するのも面倒だと言わんばかりに背中エネルギー砲を片方だけ展開し、即座に射撃。タンクを真っ二つに溶断し、強引に道を確保した。

最速で中央を突っ切り、青い眼がブレる。獲物を品定めするように細められた瞳が狙うのは——近場に居たミドリ。付着した水滴をスラスターの熱量で蒸発させながら、一瞬でトップスピードまで加速したトキは背部のエネルギー砲を構えた。

ミドリの反応速度は一般的なキヴオトスの生徒の平均値から逸脱していない。手先の器用さを要求される細かな作業や絵を描くことは得意であるが、戦闘行為に特別長く身を置いていたわけではないため、その能力はあくまで一般生徒の範疇。トキの攻撃を目視で認識してから体を動かし回避行動を取る……というのは不可能だ。

だが――。

「来るって分かっているなら……！」

予めその択が読めているのなら事前に回避行動を置いておく事で対処可能だ。ミドリはトキがタンクを溶断したその時からトキの攻撃方法、及びそのポイントが分かっていたため、既に動いていた。「良い動きです。ですが……」

言うや否や、トキはマニュアルで照準を直し地面に狙いを定める。そして即座に拡散弾を発射し、屋上の足場を穴だらけにする。いざとなれば空中に浮けるトキにとって足場はそこまで大事ではないが、地に足をつけるしかない彼女達にとっては異なる。いつ崩落してもおかしくない地面、というのはそれなりにやり難い筈だ。

「足場が……ッ！」

『エリドゥの建物は頑丈だ。この程度で崩落はしない。臆せず前へ行こう』

「その言葉信じるからね！　嘘だったら帰ったら沢山遊んでもらうんだからー！」

『可愛らしい要求だねえ』

彼の言葉に背中を押されたように少女達は前に出る。モモイはユニーク・アイディアG3A3を構え、扇形に乱射しトキの逃げ道を制限。態と用意した逃げ道に身を投げた瞬間にミドリとユズがそれぞれ撃ち抜く手筈だったが……その意図を瞬時に察した彼女は敢えて回避行動を取らずにアビ・エシユフの装甲を信頼し、ガードを選択。両腕をクロスさせた彼女は脚部のスラスターを赤熱させ、真正面に居る少女達に向けて突貫した。

少女達も慌てて距離を取ろうとするが、トキの方が速い。距離はみるみる内に詰められ、あと少しでぶつかる……といったタイミングで彼女はバーニアで急制動を掛けて停止。体当たり攻撃と踏んで防御の姿勢を取っていた近場のモモイとミドリをそれぞれ左右の手で掴み、端のフェンスに向けて放り投げた。

「モモイ！　ミドリ！」

先程まで確かに一緒に居たはずの2人が刹那の間に投げ飛ばされ

たユズは珍しく声を荒げ、急いで銃を構えたが……射撃よりも前に銃が彼女の手元から離れた。見ればトキが腕を振り抜いた後であり、『遅かった』と内心で歯噛みする。

「……これで終わりです」

左右のガトリングをそれぞれフェンスに凭れ掛るモモイとミドリに。自身の愛銃をユズに向けてトキは静かに終わりを告げる。彼女達が僅かでも動いた瞬間、トキは躊躇いなくトリガーを引くだろう。銃口が目と鼻の先にあるユズは当然回避できず、モモイとミドリもガトリングが相手だと少々厳しいと言わざるを得ない。トキはバイザー越しに万象を視界に収め、離れた場所に居る先生を見る。

「ネル先輩はどこですか？ 先輩ですから逃げたわけではないでしょう。恐らく近場に居る筈です」

「確かにネルは近くにいるけど……今のトキの相手はこの子達だよ」

「面白い事を仰いますね。彼女達との勝負は既に——」

言い終わる前、トキは右腕が跳ね飛ばされる感覚を覚えた。自身の認識外から誰か来たのか、と思つて人がいると思われる場所に目を向けても……誰も、何も無い。

「なッ……！」

驚愕の声を出すトキに向けて降り注ぐ数多の銃弾。ミドリが此方に近寄りながらトリガーを引いている。先ほどまで銃口を突き付けていたユズも今や手を離れ、落とされた銃を拾いに行っている。であれば、今近くにいるのは——才羽モモイ。

「少し視界に細工をさせてもらったよ」

蟬谷の部分を人差し指でトントンと叩く彼を見て、トキは全てを察する。バイザーだ。バイザーのシステムに入り込まれ、ある筈のないものを見せられていたのだ。恐らくタイミングはモモイとミドリを投げ飛ばした直後。そこでトキの視界を偽装し、モモイを動かしていたのだ。超高度な気配遮断等も利用して。

バイザーを跳ね上げ肉眼で視界を確保すると、やはり見えてこなかったものが見えてくる。フェンスで項垂れていたモモイは消え、その代わりに……ほぼゼロ距離まで近寄り、銃を構えているモモイが現

れた。

超至近距離からG3A3の掃射を貰ったトキは思わず呻き、距離を離そうとするが――。

「逃がさないッ！」

その行動を全力で咎めんとミドリとユズが近距離まで寄る。彼女達の銃の特性が活かされる距離ではないのだが、それでもこの距離を維持するのは余程逃がしたくはないからだろう。

しかも、こんな至近距離で3人とも各々銃を振り回しているのにも関わらず、フレンドリーファイアが一切ない。息が合っている、という言葉すら生ぬるい超高度な連携。同じことができるキヴオトスの生徒はほぼ皆無だろう。

視線一つ、言葉一つ、息一つ。それだけで相手のやりたい事、やってほしい事が分かる関係性。心の奥底で彼女達は繋がっているのだろう。そんな関係性と、そこから生み出される連携はトキですら目を見張るものがある。

これは手加減できる相手ではない。全力で以て当たらなければ逆に此方が喰われてしまう。トキは目の前の少女達の脅威度を一気に最高レベルまで引き上げ、全火器を展開。

「来るよ、皆ッ！」

少女達が散開すると同時に火力が解放される。圧倒的な破壊力を持つエネルギー砲は驚異的な狙いの良さでモモイとミドリを射貫かんとし、ガトリングガンはユズを中心に狙いながら、他の2人の行動を制限、誘発する。

人を倒すのに過剰な火力は要らない。故にエネルギー砲は威力を最低限まで落とし、代わりに連射力と範囲を強化。ガトリングガンは連射レートを引き上げ、回避される隙を無くす。瞬く間に屋上の開けた場所に銃撃戦の痕跡を刻みながら、狙うのはすばしっこく動き回る3人。

彼女達の動きには無駄がない。必要最低限の動きで弾丸は回避し、回避しきれないものは付与されたシールドで受ける。動いている間もトリガーを引く手は緩めず、その銃口と瞳は絶えずトキを見つけて

いた。

そうして十数秒回避し続けた後、ミドリはハンドサインを送り——
——全員一直線にトキ目掛けて駆け出した。

当然そんな事をすればいいのだが、今まで回避に重点を置き続けたのは此処で無茶を通すため。シールドの損耗を抑えた選択がこの土壇場で活きた。

半透明の青い壁に衝突した弾丸は明後日の方向に逸れる。青白い光は霧散する。傷を恐れ、痛みを恐れ、死を恐れ。しかしそれを前に立ち竦むことはしない。恐怖に全力で抗いながら、プリミティブな感情に牙を突き立て、彼女達は足を前に進ませる。

再びのクロスレンジ。ガトリングガンの掃射とエネルギー砲に数秒耐えきったシールドは彼女達が近寄り切ったのを見届けてから蜃気楼のように溶けて消える。幾ら3人にターゲットが分散されていたとはいえ、1つ1つの攻撃力が埒外なのだ。数秒耐え切っただけでも充分だろう。

頼れる防御手段がなくなつた今、少女達は攻撃を受けれない。要求されるのは全弾回避。ゲーム開発部の3名全員が揃って中央タワーの中に侵入する事が最低限の条件なのだ。ここでのリタイヤは作戦失敗を意味する。

「ミドリ！ あとどれくらい分かる!?!」

「あと10……いや、14! 頑張つて耐えて!」

—— タイミングを凶っている?!

トキは思考の片隅で疑問符を浮べた。反対側のビルに着地したはずのネルが参戦してこないのも気になる。彼女の脚力なら一瞬だろうに。

彼女達が凶っているタイミングはネルに関連するものだろうか。だとすると、時間は掛けていられない。このままでは相手の策に嵌つてしまうだろうから—— 先ずは最速で彼女達、最低でも1人は撃破してテンポを崩す。

「痛ッ！ もーッ！ 痣になつたらどうすんのさ!?!」

「泣き言言わないでお姉ちゃん！ このペースなら……! ユズちや

ん、行けそう!？」

「うん……任せて……!」

苛烈になる攻め。嵐の渦中に居ても、少女達は諦めない。全弾回避は諦め、致命傷になり得るものだけを重点的に回避。反撃も最低限にして、誰も脱落しないための守りを固める。ただ、何かを待つように。そして——その時は遂に訪れた。

ガトリングガンは左右共に弾切れ、リロードしなければ使えない。エネルギー砲は赤熱してクールタイムが必要。トキの手数は大幅に減り、武装と呼べるのは手持ちのアサルトライフルのみ。トキの視界に赤い E m p t y 弾切れ表示が躍った。

火器を酷使し過ぎた、と内心で思った彼女は急いでリロードと放熱を済ませようとしたがそれを咎める弾丸が飛来する。

「先生の読み通り……!」

ミドリの勝利宣言。彼女達が待っていた弾切れは訪れた。最後の策を盤石にするための準備、それをきっちりやり切った彼女達は安心して託されたバトンをアンカーに渡す事ができる。負ける、とは思っていない。

何せ、彼女は——ダブルオー勝利なのだから。

「今だよッ! ネル先輩ッ!」

「最高だッ! チビ共オッ!」

靱帯が切れているとは思えない圧倒的な速度で飛び出してきたのはネル。彼女は一目散に、他の事は知らないと言わんばかりにトキを見ている。

突撃槍のような形で展開されたシールドが空気摩擦により赤熱し、空中に青白い燐光。右手には愛銃の片割れ。貪欲な闘志を剥き出しにし、血化粧が施された顔が獲物を前に歪む。

小脇には先生が抱えられていて、若干青い顔をしていた。流星に相手にしてられないと思ったトキは中断されたリロードを行おうとトリガーを再度握ったが——。

「させない……ッ!」

リロードなんてさせるつもりはない。ユズのグレネードラン

チャアが炸裂し、弾頭からはネットが飛び出てトキを絡め取り、動きを制限。いつの間にもアタッチメントを付け替えていたのか、と思っても……もう遅かった。

「くッ………」

眼前。鼻の先が触れ合いそうな距離には既にネルがいる。何をしてももう間に合いそうにない事を悟ったトキは攻撃を諦め、全てのリソースを防御に回した。

「ぶっ飛ベッ！」

言うや否や、ネルは己の全精力を以てトキを蹴り飛ばした。防御の上だろうとお構いなしに繰り出された強烈な威力を持つ蹴りは重戦車同士が正面衝突したような音を奏でる。それを受けたトキは吹き飛ばされ、フエンスを突き破り、空中に身を晒す。

「先生、行くぞッ！ 舌噛むなよッ！」

「任せたよ、ネルッ！」

「当然ッ！」

勿論、これで終わりではない。ネルは先生を抱えたまま突き破ったフエンスから身を投げる。狙うのは離れたビルの外壁に巨大なひび割れを作りながら待ち構えているトキ。

足場を崩壊させるほどの速度で弾丸のように飛び出したネルは人間とは思えない勢いでトキの居るビルに着弾。急停止と急加速で失神しそうになっている先生を心を鬼にしながら無視して、垂直の壁に立ちながら銃を構えた。

「——ッ」

2人は同タイミングで駆け出す。先ほどは駆け上りながらであるが、今回は逆。ビルの側面を下りながら銃撃戦を開始した。

穴だらけになるビルの外壁。ガラスが割れる。足場にした鉄筋コンクリートがひしゃげる。高い硬度で作られているはずのビルが宛ら脆い陶器のように砕けていく。

「ちよつと乱暴するぞ、先生ッ！」

叫ぶネルは背負っていた先生を空中に放り投げ、トキのエネルギー砲を真正面から受け止める。身体に纏わせた神秘と気合と根性で最

低限にまでダメージを抑えた彼女は落下してきた先生を横抱きで受け止め、顔が真っ青になった先生を覗き込んだ。

「……死ぬかと思った」

「死なせねえよ。アタシがいる限りは、な」

互いに笑みを交わし、ネルは再び先生を背負い銃を構え直す。再び襲い来るガトリングガンは感覚を掴んだネルには通用しない。この最悪な足場でも致命傷の回避は可能だ。最悪、先生にさえ着弾しなければ大丈夫だし、彼は彼で守る手段は持っていると言っていた。先のようなエネルギー砲以外は気にしなくていい。

故に今は——攻めろ。

ネルは思いつ切り足を踏みしめる。それだけでビルの外壁が砕け、蜘蛛の巣状の亀裂が随所に奔った。衝撃で舞い上がった破片をボールのように蹴り飛ばし、接近するための布石に。ふわりとした浮遊感の裏側、血走る死線に生命としての躍動。死への恐怖は闘争心を掻き立てるスパイスにしかならず。ここで死ぬのも悪くないと思いがながら——されど、ここで死ぬつもりは毛頭ない。

猛スピードで迫る地面。衝突までは何秒だろうか。例えこの高さから、この速さでコンクリートに打ち付けられてもネルと、恐らくトキは死にはしない。精々全身打撲程度で済み、数か月も安静にしていれば日常生活に復帰できる。だが、先生は違う。彼は容易くミンチになるだろう。

失敗は許されない。ここから先は詰将棋だ。一手を正確に、速く、タイミングを合わせて。リカバリーが効くなんて思わない方が良く。チャンスは一度きりだと先生にも言われている。ここで決め切れなかったらその瞬間に負けだ。トキの迎撃パターンはある程度把握済み。そして、彼女の手札は近距離よりも中遠距離で真価を発揮し、そのレパトリーも増える。この極限状態、いちいち彼女が取るであろう膨大な択を選別している余裕はない。だからまずは、取れる択を可能な限り減らす。

ぐん、とネルは加速する。下方向に、横方向に。その速度は脚部のスパイクを展開し壁に突き立て、可能な限り減速しているトキを容易

く追い抜く。そのまま彼女は回り込むようにトキの前方、超至近距離で陣取り——地面を背にしながら近接戦闘を開始する。

「正気ですか、この人達」

最早命を捨てたとしても思えない行動にトキも思わず心の声が漏れる。命知らず、なんていう言葉では表せないほどの無謀。これを思いつく、という時点で大概なのに、実行に移せるのは頭の螺子がダース単位で外れているとしか考えられない。

銃をメインウェポンとしながら、その背後に隠される蹴りと拳。発砲を隙と見た手練れの相手を一撃でノックアウトさせるための暗器のような魔手。彼女も大概戦闘に関しては遊びが無い。いや、遊ぶ時と遊ばない時を弁えている、と言うべきか。

トキが思い返したのは、今から少し前……ゲーム開発部を含む3つの部活がセミナーの保管庫を襲撃した事件。それが終息した後、ネルとアリスは戦った。データとして閲覧したその戦闘、彼女はそれなりに戦いを楽しみ、遊んでいたようにも思える。尤も、実際に銃を突き付けられたアリスからしてみれば堪ったものではなかっただろうが。

頬を横切る風切り音。はらりと落ちる頭髮。プラチナブロンドが朝日を浴びてキラキラと輝く。

……今のは危なかった。仮に回避が間に合っていなかった場合、確実に意識が消し飛んでいただろう。それ程鋭く、重い一撃。何せトキの背後のガラスが風圧だけで粉碎されたのだ。直撃した場合の事なんて言うに及ばない。

「先生、場所何処だ!？」

「あとちよつと! 今、60階を通過した!」

「上等ッ! 振り落とされんなよ、先生ッ!」

ネルは速度を僅かに落とし、何かのタイミングを計るように、或いは探す様にガラス越しに室内を見ようと視線を送るが……それも即座に中断する。

タイミングも何もかも彼女は全て先生に譲渡したのだ。自分のやるべき事はこれだと割り切って。頭脳を使うのはしがみついている彼の仕事、自分の仕事は——戦いだ。

一際大きな衝撃はトキを容易く上に突き上げ、がら空きの胴体に遠慮なしの弾丸が叩きつけられる。肌を、スーツを切り裂く鋼鉄。彼女の顔が痛覚に歪む。

仮に彼女が攻撃に転じれば、ネルも幾分か手を緩めて回避にも体を使うだろう。しかし、彼女はあえて反撃に転じず防御に専念。アビ・エシユフの装甲を信頼し、防戦一方を態と演出する。それを隠れ蓑にして背中エネルギー砲をアクティブ。砲身の展開は必ずしも必要という訳ではない。砲身を前に出すのはあくまで照準を正確に定めるためだ。故に、態々分かりやすく前に出さなくとも発射可能になるまで準備する事は可能であるし、射角も体勢も限定されるが……射撃自体も可能である。

とは言っても、それはあくまで可能であるというだけ。アビ・エシユフの仕様から逸脱しているし、そもそもそんな無茶苦茶な運用をした経験なんて一度も無かった。

だが、それがこの場では有効に働く。ネルが最も輝き、強力になるのは相手の手札がある程度割れた2回目以降の戦闘のとき。無論、初見の戦闘でも最強の名に相応しい強さを持つが、それが更に理不尽になるのは学習能力が発揮された場合だ。初見で、一撃で決め切れるのならば桁外れの学習能力は意味を成さない。賭ける価値は充分にあるだろう。

しかし、結局はそれも全て理想論。机上の空論はどこまで行っても絵空事、絵に描いた餅だ。これを現実に落とし込むためにはぶっつけ本番で成功させる必要がある。それも、超高速で動くネルを相手にできる訳がない、と脳の冷静な部分がトキの浅はかな考えを嘲笑うが……やれるだろうと自身を鼓舞する。

リオは確かに自分を信用しているし、信頼もしているだろう。だが、それはあくまで兵器としての自分^{トキ}だ。人間としての自分ではない。それはちゃんと分かっている。自分は替えの効く便利なナイフで、それ以上でもそれ以下でもない。錆びれば捨てられるし、より切れるナイフがあれば捨てられる。それに納得した上で、トキは今ここにいるのだ。

ああ、分かっている。自分に実りあるものは何も与えられない。信用も、信頼も、尊敬も、愛も。勝利も敗北も全て空っぽ。中身なんて無い。傍には誰も居ない。主であるリオも、誰もが彼女にとっては余りにも遠い。本音を言うのが寂しいが、それは仕方のない事だ。別に誰かが悪いという訳ではない。その苦みはちゃんと飲み干して、この虚無を受け入れた。

……もし、そんな自分に拠り所があるとすれば——このメイド服。ミレニアムのC&C、コールサイン04こそが飛鳥馬トキの唯一だ。

「——ッ！」

眼球に張り巡らされた毛細血管が千切れるほど、眼の縁から涙と血が零れそうなほどにトキは眼を見開く。見極めるのは一瞬。全てがコマ送りになるほどに切り刻まれた体感時間。風景が伸びる。音が伸びる。風が肌に纏わりつく。視線は逸らさない。ただ、ネルと先生を見る。

良い眼だ、改めてネルはそう思う。どういう心境の変化があったのかは分からないが……先ほど戦った時の表情よりも遥かに良い。あれは戦士の眼だ。現実に牙を突き立て、命ある限り生に抗い続ける者の眼だ。

だからこそ、己の全力で以て応えよう。そう思ったネルは、思考の外側で待ち望んでいた声を聴いた。

「軌道修正……中央棟の、区画……地上50階……ネルッ！　今だー！」
「応ッ！」

先生はネルにしがみついていた手を離し、システムの箱をフル活用して空中で姿勢を整えて碎けた外壁からビル内部に侵入。それに伴い、先生という荷物が無くなったネルは全力でトキに接近し——

「させませんッ！」

策を弄していたのは会話から既に分かっていた。策に嵌ってから抜け出すのは掛かる労力と作れる状況の採算が取れないため、狙うのはその初動、唯一点。

格納したままの砲身、ノーモーションで放たれる青白い閃光。彼女はぶつつけ本番の賭けに確かに成功した。照準を定めていないとは思えないほど正確無比の射撃はネルを貫通し——貫通？

そこで漸く気付いた。今、自分が撃ち抜いたのは——ネルのカジヤンだ。

当の彼女は、自身の懐に。

「——ああ」

「一名様ご案内つてなアツ！」

蹴りでも、拳でも。ましてや銃でもない。ネルはトキを掴み、その勢いのまま自身ごと彼女を先ほどまで側面を走っていたビルの内部へと叩き込んだ。

コールサイン、約束された勝利（ダブルオー）

全方位を壁に囲まれた空間。10m立方の銀色の場に放り込まれたトキは不思議そうな表情を浮かべながら室内を見渡す。壁に埋め込まれた装置、排出口、出力口。壁の分厚さは最早冗談かと見紛うほど厚く、通常兵器で突破することは困難極まる。それはアビ・エシユフでも同じ事であり、リミッターを解除しない限りは長時間攻撃し続けて漸く、といったレベルだ。

一応、出口はある。真正面の扉からは先ほど叩き込まれた時にできた風穴が見えていた。だが、恐らくは——そう思ったトキの思考に呼応するように扉が閉じられる。

当然、この施設に覚えはない。そもそもトキはエリドゥの区画等の知識はあるが、どの施設がどこにあるのか、どのような役割を果たすのかについて……そういった細かい部分に関しては知識が殆どない。彼女はあくまでエリドゥとリオを守る役目があるだけで、エリドゥを使ってどうこうする立場ではないため、必然的にその知識は戦闘系に偏る。

トキが持つのは都市の区画変動とドローンの操作権限、全施設へのアクセス権。この内、全施設へのアクセス権は全くと行って良い程使っておらず、入る場所もリオがいる中央タワーのみ。それ以外の場所なんて前を通りかかった事はあれど中に入った事なんて一度も無かった。

とはいえ、彼女も科学技術の最先端を突き進むミレニアムの生徒。一目見ただけでこの場が何らかの研究施設の一室である事は分かった。それも、かなり危険かつ特殊な実験を行うための場所。そうであればここまで徹底的に密閉しない。

「——此処は……」

「エリドゥ総合研究センター中央棟、らしいぜ」

LEDの光に照らされる先。数枚の自動扉が重厚な音を立てながら開いた先に居たのはやはり美甘ネル。彼女は澱みない歩みで銀の

部屋に入室した。双方の距離は5mもない超至近距離。まつ毛の本数すら見えてしまうほどだ。

———エリドゥ総合研究センター。その名の通りエリドゥの研究を担う施設であり、その研究分野は多岐に渡る。医療や工学、情報学、宇宙航空学。それ以外にもキヴォトスで研究されているありとあらゆる分野の研究を行えるようなこの場は紛れもなく最先端。その最先端の中でも特に予算が掛かっているのが中央棟であった。その中の一室がネルとトキの居る場所であり、高負荷実験室と呼称される銀の封牢。

この室内で設定できる環境変数は多岐に渡る。人間が生存可能な環境は勿論、人間が生存不可能な環境まで自由自在。水深数kmや標高数千mの環境、真空、放射線や紫外線、人体に有害な物質で満ちた空間も作成する事が可能だ。

トキがネルを相手に使い潰した数多の装備達。リオとトキの切り札であるアビ・エシユフ。この2つの武装はこの施設の内部で設計、製造、テストが行われてリリースされた。アバンギャルド君は設計と製造の場所は異なるが、性能テストはこの場で行われた。

重厚な音を立てて扉が閉じる。ネルに遠いドアから順に閉じられ、鍵を掛けられ。その動作が数回繰り返され、最後に彼女の真後ろのドアが閉じて室内は完全な密室となる。ネルとトキ以外に何も無い空間。眼に見えない微生物すらいない、完全な閉じた世界は宛らコロッセオ。何方かが倒れるまでこの扉が開くことはないだろう。

「……誘い込まれた、という事ですか」

「ああ。テメエの敗因はアタシばかり見過ぎた事だ。アタシには度胸のある後輩達が居るんだよ」

「敗因？ 面白い事を言いますね。閉鎖空間に閉じ込めれば回避スペースが無くなり、その分有利に運ぶ……そうお考えですか？ でしたら、それは浅はかです。逃げ場が無くなったのは私だけではなくネル先輩も同じです。この条件下でしたら……私が負けるよりもネル先輩が負ける方が速い」

「ハッ！ ま、確かにそうかもな。万全なら兎も角、アタシがこのザマ

じや勝負の天秤はどっちに傾くか分かんねえ。だから———更に
天秤をぐつちやぐちやにしてやる」

にやりと笑ったネルの顔に途轍もないほど嫌な予感を覚えたトキは周囲の環境をスキャンする。眼に見える危険物はない。ネルが何かをした訳でもない。だが、彼女は何か得体の知れない苦しさを覚えた。

———苦しい？

トキの頭に疑問が生まれる。この苦しさは何だ。見ればネルも何処か苦しそうにしている。息が上がり、自然と呼吸の頻度が高くなり……。

そこでハツとしたトキはスキャンングの対象を物質から拡張し、空气中の成分や体積に至るまでの詳細な情報を収集するように変更。すると、トキの嫌な予感とこの状況を裏付けるデータがバイザーに映し出された。

「酸素濃度が……ッ」

「ああ、徐々に空気を抜いてるぜ。あと数分もすればこの室内は酸素がゼロになるだろうな」

その条件は共に同じ。ネルもトキも徐々に息がしにくくなり、全力疾走した後のような苦しさを覚える。だが、時間が経てば治るものではない。寧ろその真逆、酸素を取り込めば取り込むほど、後の苦しむ時間を延ばす事になる。

「……私を酸欠で失神させるのが狙いですか？」

「んな下らねえ勝負の決着をアタシが選ぶ訳ねえだろ」

トキの考えをネルは鼻で笑いながら一蹴する。この期に及んでそんな女々しい拍子抜けの幕切れを見たくて此処に連れ込んだ訳ではない。ファイナレは劇的に、だ。

そもそも、トキが失神する頃にはネルも同じく失神しているだろう。自爆なんて趣味ではない。勝つなら勝ち切る、それがネル自身が己に課した勝利条件^{ダブルオー}。

「あくまでこれはフィールドの条件だ。搭乗者のお前を極限環境に追い込めば、搭乗者^{デバイサー}を生かす為にそいつの演算もちったあ戦闘以外の方

面にリソースを割り振るんじゃないか？」

ネルの読みは的中していた。トキの視界には何とかして彼女を生かすべく、数多の手段が瞬きの間に演算されている。だが、その悉くが不可能であると突き付けられ、それでも尚トキを生かすべく不可能の中から一握の可能性を探していた。

アビ・エシユフは極限環境下でも活動ができるように設計されている。しかし、アビ・エシユフの限界は遠くとも、それを動かす人間の方が先に限界を迎えてしまうのだ。機械であるアビ・エシユフにとって酸素が欠乏した環境は大きな脅威ではないが、人間であるトキはそうもいかない。酸素が無いのは文字通りの死活問題。確保できなければ酸欠で死に至る。

——この部屋のコントロールルームに居る先生には悪い事をしてしまった。生徒を傷つける事を何よりも嫌い、疎む彼にこんな事をさせてしまうなんて。酸素をゼロにする、なんて言ったが、それは恐らくブラフになる。彼の性格上、そうなる前に空気を正常値まで戻すだろう。打ち合わせはしていないが、絶対にそうするであろうという確信がある。

きつと彼は今にも泣きだしそうな、吐きそうな酷い顔をしている。自分自身が傷つく事よりも彼は他者が傷つくことに痛みを覚えた。それ自体は美徳なのかもしれないが、それではあんまりだろう。彼には少しだけ、誰かの痛み鈍感になってほしい。そうしないと、彼が死ぬより前に彼の心の方が死んでしまうだろうから。この世界は彼のような……極端に他者に重きを置く人間にとっては何よりも地獄だ。

酸欠で視界がブレる。耳鳴りがして、意識に霞がかかり、眩暈と頭痛まで現れ始めた。酸欠の初期症状。このままのペースで行けば1分後には酸素がなくなるだろう。

故にそこがタイムリミットとなるのだが……もう1つ、ここに条件が加わるとタイムリミットは更に早くなる。最後の仕上げをすべく、ネルは通信機で先生にサインを送り——要件を終えたのち、彼女は耳に付けていた通信機を徐に取り外し、その手で握り潰して破壊し

た。まるで、この戦いの邪魔だと言わんばかりに。

「んで、ダメ押しだ」

ネルの言葉と共に、部屋が動いた。

「これは……」

「ああ、この部屋は上下に動くらしいからな。それを利用させてもらったぜ」

アビ・エシユフが算出する三次元座標データのZ軸の数値が徐々に動き始めた。それに加えて、部屋の外側に磁界の発生し、電流が流れ始める。電磁界の形成。部屋の側面4方向に作り出された力場、トキはそれを見てもあまりピンと来ていないようであったが……先進兵器の開発に関わった人や電磁気学を専攻している人、或いはSFが好きな人はこの力場を見れば何をしようとしているのか理解することができるであろう。

それはレールガン。フレミングの法則に従い、物体を電磁力で弾き飛ばす力学の申し子。アリスの光の剣と同種だ。弾丸はこの部屋全体。4本のレールで加速させ、地上50階にあるこの部屋を地下20階まで高速で叩き落とすのだ。

その速度は重力加速度の約10倍。最高速まで加速した場合、彼女達の体には10Gという莫大な圧力が押し掛かる。生理的な限界が6Gの先生とは異なり、彼女達の重力に対する耐性はとても高い。10Gが体に掛かろうと別に死にはしないが、それでもその衝撃力は高速道路を走行している乗用車と正面衝突した場合よりも大きいのだ。これが終わったあとは真面目な戦闘なんて出来そうもない。

だが、それで良かった。ネルはこの場を最終決戦の地としている。肉体は元より限界、意識は気合いで保ち、銃も長くは使えない。しかし、トキを倒すのには充分だ。己に最大の敗北を与えた好敵手を今度こそ打ち負かし、華々しい勝利をこの手に掴もう。

ここまでお膳立てされて敵わないならば、それは単に己が無力なだけだ。彼女以外の誰にも責任はない。より研鑽を積み、強さに貪欲になろう。今度こそ勝者となるために。

だが、負けるつもりは皆無だ。彼女は多くの願いと意志を受けてこ

の場に立っている。それが彼女の背中を押す。まだ負けるな、まだ立てと、手を引く。故に——敗北は無い。あるのは勝利、^{ダブルオー}それのみだ。

そして、トキもまたこの場を最終決戦の地として見做している。トキの肉体はボロボロ、アビ・エシユフもガタガタ。こんな状態ではゲーム開発部の3人にすら勝てそうもない。このフィールドに誘い込まれた時点でトキの敗北は決定していた。しかし、それは最終的な勝ち負けの話だ。最後には負けるとしても、その過程までも負ける必要はないだろう。この勝ちだけは——譲れない。

「テメエとの鬪い、それなりに楽しかったぜ。テメエはどうだ？」
「できれば二度とやりたくありませんね」

「ハッ！ いいな、正直な奴は嫌いじゃないぜ」

鼻で笑いながら、ネルは腰を落として瞳を鋭くする。正に獣だ。彼女は確かに強者であるが、その本領が最も発揮されるのは格上殺し^{ジャイアントキリング}だろう。生存と継戦能力、学習能力に秀でている性質は己より強い者と相対した時にこそ真価を発揮する。つまり、彼女はキヴオトス最強クラスでありながらも生粋の挑戦者^{チャレンジャー}なのだ。これは彼女と同格の他の生徒とは明確に異なる点であり、格上との戦闘で勝ちをもぎ取る能力で彼女を上回る者は存在しないだろう。

ネルのニヒルな笑みを見て、トキは上品に笑う。初めて見えた鉄仮面の裏側の表情は直ぐに陰に隠れ、彼女は己の任務を遂行すべくトリガーを構えた。

——アビ・エシユフの回避能力は60%に低下。ガトリングの残弾は約5000発。背中エネルギー砲は砲身が焼け爛れ、あと1回の使用が限度。スラスタ等の燃料も底が見えており、戦闘能力は目に見えて落ちている。トキ自身の体も傷だらけ。激痛で意識が飛びそうになるのを何とか抑えているが、それも長くは持たない。アビ・エシユフをパージしたら数回の攻防の未斃れるだろう。

だが——そう思ったトキの考えに同調したネルは今まで一番優しく笑って。

「勝負はこれから。そうだろうか？」

斯く言うネルも限界。靱帯は切れているし、骨折は多数。神経もイカれていて、毛細血管もかなり千切れており体の至る所で内出血している。筋肉も様々な箇所が断裂していて、動かすのも一苦労という有り様。今の体で殴り合いなんてできないため、銃で仕損じた場合は負けが確定する。

だが、それでも叫ぼう。『勝負はこれから』だと。まだ負けていない以上、逆転はあり得るのだ。勝利の女神を微笑ませるのは己だと、傲岸不遜に吼える。叫ぶ。

それはトキも同じだったようで。

「ええ、まだ負けていません」

互いに突きつけた、突き付けられたのは黒の銃口。己を貫き通す鉄の決意。微かに香る火薬と硝煙の匂い。張り詰められたのは一本の糸。それを切断し、最後の戦いを始めるべく。

「——さあ、勝負だ」

それ以外の言葉は不要だった。



少女達2人は互いに示し合わせたかのように全くの同タイミングで動き出した。超至近距離、互いに間合いを離す真似はしない。その銃口が狙う先、トキはネルの右腕部、ネルはトキのバイザー。構えてから照準を定め、トリガーを引くまでコンマ数秒のオーダー。瞬きの間に決まるスピード勝負を最初に制したのはネルだった。

「取り敢えず、邪魔な眼は潰させてもらうぜ?」

——戦闘開始から3秒経過。トキのバイザー破損。

次にネルは右腕に握った銃でトキの操縦桿の片方を吹き飛ばそうと構えるが、それよりもトキの方が速い。彼女は腕部で思いつ切りネルの右腕を殴りつけ、ゼロ距離でトリガー。高レートで発射されたライフル弾が治りかけていた骨を徹底的に粉碎する。

「まずは腕一本、です」

「ハッ！ 片手なんてくれてやるよー!」

—— 戦闘開始から5秒経過。ネルの右腕、粉碎骨折。使用不能。

使い物にならなくなった右腕から離れた銃のトリガーを仕込んでいたワイヤーで引き暴れさせる。トキだけでなくネルもダメージを負うが、そんな事は双方共に気にしない。少女達は再度力を込めて銃を握る。

—— 戦闘開始から10秒経過。ネルの左大腿部を弾丸が貫通。アビ・エシユフの右操縦桿及びトキの右五指、粉碎骨折。使用不能。

—— 戦闘開始から12秒経過。アビ・エシユフの推進剤、枯渇。

トキの右五指はもう動かない。痛覚すらない。勿論操縦桿を握る事すらできないが……アビ・エシユフは思考操作に対応している。操縦桿が無くとも操作は充分に可能だ。

対するネルは流石に体に風穴が空いたことが堪えているのか、痛みは歯を食い縛る。だが、所詮はただの足。内臓でないのなら構わない。自分の頑丈さは理解している。致命傷でないなら無視だ。

そして、彼女は過去最高の冴えで死地の中に活路を見出し、本能の叫ぶまま突貫。万象を挟り穿つかの如く左腕を構え……そのまま、トキの真横を神速で通過。ワンテンポ遅れてアビ・エシユフの左腕部が根元から宙を舞った。

「これでイーブンだ！」
「ぐ、う……！」

—— 戦闘開始から22秒経過。アビ・エシユフの左腕分、欠損。

なんて馬鹿げた攻撃力。まさか単純な腕力で左腕部を吹き飛ばされるなんて思っていなかった。ああ、やはり彼女は強い。疑う余地なんて皆無だ。ネルこそが頂点、最強に相応しい。

背後に回ったネルは、トキが振り返るよりも速く左手に銃を構え直し、そのまま射撃。数秒の掃射で彼女は的確に武装を奪った。

—— 戦闘開始から24秒経過。アビ・エシユフの右背部エネルギー

ギー砲、破損。

—— 戦闘開始から25秒経過。アビ・エシユフの左背部エネルギーギー砲、破損。

しかし、トキもやられっぱなしではない。片腕を吹き飛ばされた事により変化した重心を利用し、ぴんと張った右腕部をハンマーに見立ててネルにぶつける。巨大な質量と加えられた遠心力により生み出された衝撃は反応の遅れたネルの胴体にクリーンヒット。そのまま勢いよく吹き飛び壁に叩きつけられた。

—— 戦闘開始から26秒。ネルの肋骨、粉碎。及び脊髄、損傷。

トキは荒い息を整える。まだ戦闘が始まってから30秒も経っていない事実には驚愕しながらも、戦況をひっくり返す事が可能な高火力兵装を瞬きの間に奪われ、悪化した状況に彼女は焦る。エネルギー砲は左右共に使用不能、このまま持っていたとしてもデッドウェイトにしかないため先ほどパージした。左腕は根元から吹き飛ばされて、今は地面に転がっている。

残る武装はトキ自身が持つG11K3とアーミーナイフ、右腕部のガトリングガンのみ。しかも、そのどちらも弾数に余裕がある訳ではない。無駄撃ちどころか、致命打を与えられる場合以外の使用は制限されたと言っても過言ではないだろう。

しかし、弾数に余裕がないのはネルも同じであった。残るのはあと2マガジンだけ。それを撃ち尽くしたら最後、攻撃手段は徒手空拳に限られる。

「まだ……！」

「ああ、そう来なきやなあー！」

その上でまだ序の口だと、気丈にも叫ぶ。满身創痕、後がなくなつてからが本番だ。少女達は切れた唇から流れた血を拭い、再び構え直す。深く息を吸う。浅く息を吐く。酸素の残量は刻一刻と減っている。意識が曖昧になってきた。頭も痛い。タイムリミットは2分弱。その間に。

「テメエをぶつ倒す」

「ネル先輩を倒します」

互いに銃を突きつけ、僅かの間だけトリガーを引き弾丸を発射する。接近の布石、目晦まし。少しでも其方側に意識を向けると言わんばかりの攻撃は2人の意図が共通していたばかりに何の効果も無く、

ただ凹みを作るだけ。

近距離で睨み合う両者。互いに構えたのは拳。この距離なら殴った方が速い。両者の拳はノーガードの腹部に鋭く突き刺さった。

肺の中の空気が漏れるような音が口から零れ、零れた唾液が地面に滴り落ちる。

——戦闘開始から33秒。ネル、トキ、内臓を損傷。

続く二撃目をお見舞いしようとしたネルであるが、引く手をトキに掴まれ……ガン、と頭に強い衝撃が走った。頭突きされたのだ。額の何処かが切れたのか音もなく血が流れ、ネルの右側の視界を赤く塞ぐ。その視界、額を赤く腫らしたトキが恨めしそうな眼で見っていた。

「随分石頭ですね……ッ！」

「お互い様だろッ！」

トキの右五指は既に碎かれた。物を掴むことは当然できない。だが、使い物にならなくなったのはあくまで手首から先。ネルのように腕全体が使えなくなった訳ではない。だから……こういった奇襲もできる。

彼女は左手でアーミーナイフを引き抜き、空中に展開。くるくると回る銀刃、その柄の部分に彼女は振り下ろした右腕を叩きつけた。刃先の向く先はネルの右足の甲。右側の視界が制限されている彼女は、その攻撃に反応が遅れてしまい、トキの狙い通りナイフは足の甲を貫通した。

ぱつと散る赤い血。鋭い痛みでネルの神経が焼き切れんばかりに反応するが、奥歯が砕けんばかりに食い縛り、耐え抜いて……ナイフが突き刺さったままの足で蹴りを繰り返す。その足先はトキの顎骨を容易く砕いた。

「ガ……ッ！」

「ぐ……う……！」

トキが痛みに怯んでいる隙にネルは足に突き刺さったナイフを引き抜く。血でべっとり濡れた刃は明かりを受けてウェットに輝いている。彼女は自身を裂いた凶器を一瞥した後に部屋の隅にぽいと投げ捨て……にやりとした笑みを浮かべ、懐から銃を引き抜いて射撃。マ

ガジンを空にする勢いで放たれた神秘纏う暴風はダメージが蓄積されていたアビ・エシユフの装甲をズタズタに引き裂き、内部を蹂躪し……遂に叡智の結晶を失墜させた。

—— 戦闘開始から40秒経過。アビ・エシユフ、全損。

—— 戦闘開始から41秒経過。トキ、アビ・エシユフをパージ。

「アビ・エシユフが無くとも……ッ！」

シークレットタイム

G11K3を片手にスクラップと化したアビ・エシユフから飛び出したトキは銃を構える。そうだ、アビ・エシユフを失っただけ。まだ手は動く。足も動く。まだ、戦える。

ネルは撃ち尽くしたマガジンを交換し、最後の弾倉を装填。トキもこのマガジンが最後のため、本当の意味で互いに後が無くなった。

「来いッ！ コールサイン04、飛鳥馬トキ！」

疾走するトキを迎え撃つは絶対的強者^{ダブルオー}。部長であるネルにそう言ってもらえて、トキは初めてC&Cの一員として認められたような気がした。お前も他の誰かと変わらないネルの仲間で先輩である、そう言ってもらえたような心地になった。初めて、この底から胸を張れる居場所を持てた。それが嬉しくて—— だけど、何故だか少しだけ悲しくて。

抱いた悲しさを胸の奥に仕舞い、トキは銃撃音を奏でる。それは機動力が落ちたネルに突き刺さり、数多の銃創を作るが彼女は気にした素振りすら見せずに銃を構えて彼女に突き付け、トリガー。回避先を読まれているのか避けきれなかった弾丸がトキの体を打ち付ける。

狭い室内を縦横無尽に動き回るアクロバットな銃撃戦はトリガーロックにより終わりを告げる。弾丸を撃ち尽くしたのだ。そして、残弾はゼロ。遠距離攻撃手段は消え去った。となると、残されるのは。

「例え弾切れでも……ッ！」

—— 戦闘開始から53秒経過。

ツイン・ドラゴン

MPX、G11K3、共に弾

切れ。双方格闘戦に移行。

互いに満身創痍、防御にまで気は回らない。そもそも守ったら負ける。攻めて攻めて、攻め続ける。最後まで立っていた方が勝者なのだから。

なんて不格好な戦い。先ほどまで天を舞いながら戦っていた頂点同士の最終決戦とは思えないほど泥臭くて、単調な戦闘。だが、もうこれしかないのだ。持てる全てを出し尽くした後、頼れるのは積み上げた経験と身に着けた技術だ。

ここで負けられないという意地が、限界を置き去りにした少女達の体突き動かす。一撃を受ける度、放つ度に意識が遠のく。もう限界、何度そう思ったか分からない。痛い、辛い、苦しい。そんな泣き言は吐かない。

弱音を部屋に残存する酸素と共に肺一杯に吸い込み、少女達はフィナーレを飾る一撃を放つべく拳を構えた。

これで最後。この次は無い。この一撃の後、立っていた方が戦いの勝者だ。

「これで終わりだッ！」

「負けません、私は——ッ！」

ネルの瞳に宿る意志のなんと強い事か。必ずアリスを助けるという意志がそのまま形になっているかのよう。本当に彼女の事を心の底から大切に想っているのだろう。そうでなければここまで必死にならない。こんな眼をしない。だって、あれは真正銘、少女の為に命を懸けている表情なのだから。

その目を見た瞬間にトキは自身の敗北を悟ってしまう。

……あと少しだった。本当に惜しい所まで来ていたとは思う。勝敗を分けたのはきつと本当に些細な要因。ただ——自分の目的に、やろうとしている事に胸を張れるのかどうか。ネルは最後の最後まで迷わなかった。だから強いのだ。

対して、自分は判断をずっと先送りになっていた。事の善悪、ではない。自分の感情を。袋小路に閉じ込めて、見ない振りをして。だから最後の最後、意志と意志のぶつかり合いで敗北を刻もうとしている。

……さつき抱いた悲しさに答えを出せていたら、こうじゃなかったかもしれないのに。だが、それは余りにも遅い後悔だ。今どうこうしても、この敗北は覆せない。だから諦めようとしたけれど。

『何かを学ぶのに、知るのに、遅すぎる事はないと思うよ』

脳の奥、遠い記憶。自分ではない彼女の思い出。垣間見た事すら刹那に忘れ去る、何人たりとも穢せない残滓。

届かない場所から夜のような優しい声で語る、見知った見知らぬ誰かが居た。

その声に背中を押されたように、トキは深く沈めていた所に思考の手を伸ばす。思えば、自分に問う事なんて久しくやっていなかった。だから望んだ解答を、あの感情の理由を見つけられるか不安だったのだが……その不安は杞憂に終わる。

その領域、ずっと触らなかつた透明に触れた瞬間、トキは自身の心を見つけた。そして、その大切な解答を無くさない様に、心の奥に抱き留める。こんなに簡単なら、こんなに単純ならもっと早く見つけられていれば良かったなんて思いながら。

ああ、先ほど抱いたこの悲しさは。寂しさは。

やっと分かった。分かってしまった。それと同時に、納得した。

自分は案じていたのだ。あの人を。泣きながら前を向いていたあの人を。誰よりも他人の幸福を願っていた、泣き虫な少女を。

寂しがり屋の自分が、涙を堪えながら独りぼっちになろうとしている誰かを見過ごせる訳が無かった。だって、孤独の痛みは誰よりも知っているから。

そう、結局——飛鳥馬トキは調月リオが大切だったのだ。

「……だから私は、リオ様を見棄てられなかったのですね」

漸く納得のいく答えを見つけたトキは満足そうに呟き、眼を閉じる。かくん、と落ちる体を支えたのは彼女の前に立つ少女。

——戦闘開始から60秒経過。

「……アタシの勝ちだ」

美甘ネル、勝利。

誰かの願い

ボロボロになった銀の部屋。薬莢と銃弾、布の切れ端、血痕、アビ・エシユフの残骸。部屋の酸素は元に戻っている。重力加速度も平地と同じ1G。変化させた環境は綺麗さっぱりフラットな状態だ。

部屋の中央には大の字で仰向けに寝転んでいるネルが居た。その少し離れた場所には気道の確保された楽な体勢で意識を失っているトキ。

勝ったとはいえ、余裕綽々の勝利ではなく接戦の末の勝利。意識を失っていないのが奇跡だ。もう指一本動かせそうな気がしない。だが、何時までも此処に居る訳にはいかないため、少し休んで動けるようになったら伸びているトキを背負って外に出るか——そう思った直後、重厚な扉が静かな音を立てて開いた。

「……よお、先生」

「……ネル」

扉の先に居たのは、この部屋のコントロールルームで各種操作を行い、結末を見届けた先生だった。ネルがぶち抜いた開放感溢れる風穴からの逆光でその表情は見えないが……きつと酷い顔をしているだろうという確信があった。

彼からすれば大事な生徒が2人、全力で殺し合ったようなものだ。優しい彼が歓迎する訳がないだろうし、ましてや喜ぶとは到底思えなかった。

「いいのか？ こんな所で道草食って。目標はアリスの奪還だ。アタシに構ってる暇なんて……」

「それがネルを見捨てる理由にはならないよ」

相変わらずの彼は室内に足を踏み入れ、ネルのすぐ傍まで近寄り膝立ちになって視線を低くする。するとネルの眼に彼の表情が映った。

予想していた通りの酷い顔。泣きそう、という訳ではないが、身に余る痛みへのたうち回っているかのような。彼自身が傷ついたとしても、こんな辛そうな顔はしない。彼の表情を歪ませるのはいつだった

て他人の痛みだ。自分が傷つく事よりも、彼は生徒が傷つくことを心底嫌い、疎んでいる。

そんな彼が生徒を傷つける所業の片棒を担いだばかりか、呼吸に不可欠な酸素まで奪ったのだ。これらを彼はきつと許さない。誰が許しても、誰が認めても、彼は彼を責め続ける。それが死地に立つ生徒に何もしてやれなかった自身の罪だと思つて。

勝つために必要なことだった。ネルの願いを聞いただけだ。そんな風に彼は割り切る事ができない。ネルは彼の痛みに対する姿勢を美德……とは言い切れなかった。他人の痛みに共感し背負うのは確かに美しいかもしれないが、ともすれば傷の舐め合いにしかならない。それに彼は他人の傷を背負うばかりで、自身の傷は生徒には触れない場所に追いやつている。そんなのは一方通行が過ぎるだろう。

覗き込んだ彼の蒼い双眸は見たことが無いほど揺れていた。そんな顔もできるんだな、なんて思うほどに……普段の飄々として掴みどころのない彼からかけ離れている。

ともすれば実際にボロボロなネルよりも痛みを噛み締めている彼にネルはふつと笑いかけて。

「そんな辛気臭い顔すんな、アタシは勝つたんだぜ？」

「……それでも、君が傷ついた事実は消えない。こうしないといけない状況を作ったのは私だ」

「最後に納得して、実行したのはアタシだ。気にするな、つてのは無理だろうが……アタシは先生にそんな顔をしてほしくて戦つたんじゃねえよ」

ネルは地面に手を突き立ち上がる。全てを出し尽くしたあの戦闘からまだ10分も経っていないのにも関わらず、立ち上がる事ができるほどに回復しているのは流石と言わざるを得ないだろう。だが、できるのはあくまで立ち上がる事だけ。それ以降は出来そうもない。

くらり、と視界がブレる。立ち眩みだ。当然、受け身を取れる体力なんて無いため地面に倒れたら頭を強打するだろう。失った平衡感覚、重力に引かれて落ちるが……それよりも早く、ネルの体に回された彼の腕が彼女を抱き留めた。

「無理はしないで。動くのもしんどいだろう?」

「そこまでじゃねえよ。だが……一人で歩くのは辛いな。肩貸してくれるか、先生?」

「別にいいけど、私とネルの身長差だったら却って辛い?」

苦笑いを浮べる彼は成人男性。その身長は小柄なネルと比較すると頭二つ分以上高く、肩の位置も相応に差がある。彼の云う通り、肩を貸した方が逆に辛い姿勢になることは間違いなかった。

言外に『チビ』と言われていているような気がしなくもないが、彼にそういう意図がない事はちゃんと分かる。あくまで彼は現実問題を言っただけ……それはそれでムカつくが。

まあ仕方ないと彼女は溜息を吐いて。

「じゃあ背負ってくれ。しがみつくくらいのは力はある。先生の事だ、どうせアイツも運ぶんだろ?」

そう言い、ネルはトキを指差した。

「アタシ等を運ぶのに時間は掛けられないだろ? なら一遍に運んだ方が効率的だ」

「……分かったよ。辛くなったらいつでも言っただけ」

曇天を穿つような笑みを浮べた彼はネルを背負い、眠るトキを横抱きにして部屋の出口に足を向ける。彼は勝手知ったる様子で部屋を出て、瓦礫の山と化した廊下を歩き、生きているエレベーターに乗り込んで1Fのボタンを押し込んだ。

微弱な振動を味わいながら、ネルは最も知りたかった事を先生に問いかける。

「なあ、先生。先生から見て、アタシはどうだった?」

「勿論——最高に、カッコよかったよ」

その返答に心底満足したネルは犬歯を剥き出しにした笑顔を浮べた。



「ネル先輩ッ! 大丈夫!?!」

「大丈夫な訳ないでしょお姉ちゃん……こんな血だらけで……」

「大丈夫だからぴーぴー騒ぐな、頭に響く」

地上に降りた3人を迎えたのはゲーム開発部の3人。彼女達もずっと気が気でなかったのだろう。背負われているネルの姿を見るや否や安堵の顔を見せ、その傷の深さに気付くや否や心配の声を投げかける。

忙しい表情筋だ、なんて思いながらネルはげんなりした声で少女達の心配を両断した。先ほどまで酸欠で頭に酸素と血が回っていなかったのだ。今は多少マシになったとはいえ、まだ後遺症のようなものは体に残留している。大声を聞かされるのは少しばかりしんどかった。

尤も、心配される事自体を嫌っていないため随分彼女達に対して甘くなっているが。アカネが見たら『変わりましたね、部長』と言う事間違いなしだろう。

「他の奴らは？」

「アスナ、カリン、アカネは傷が深くてまだ動けないから、少し離れた区画のビルで休んで貰っている。ユウカ、ノア、コユキは動けるようになったから、後に控えている事の為に動いて貰っているよ」

「コユキって……アイツも居るのか。あの問題児が、ねえ……」

意外な人物がこの件に一枚噛んでいると聞いて、ネルの顔が分かりやすく驚きに染まった。まさかあの問題児と書いてクソガキと読むセミナーきつてのトラブルメーカーが居るなんて思いもしなかった。

ネルが知るコユキは端的に言えば、話が通じない倫理感の欠けた爆弾魔。動いた拳句に勝手に火種を持ってきて炎上する生きた厄災兼火薬庫が黒崎コユキだ。

当然リオへの反逆に参加するような者ではなく、寧ろ保身のために何方の勢力にも関わらないタイプだと思っていたが……彼の口振りから察するに、どうやらかなり頑張っていたらしい。

——アイツも変わったのかもな。

そう思い何処か感慨深さを抱いたネルであるが、この件が終息した暫く後にコユキが問題を起こし彼女自らの手で金庫にしか見えない

反省部屋に叩き込む羽目になるのは別の話である。

「クラフトチェンバー」

彼は音声入力でタブレットを操作し虚空から真白いブランケットを2つ取り出す。受け取ったモモイ達は彼の意図を察した後、それらを地面に敷く。人一人分なら余裕で横になれる広さだ。

彼は「ありがとう」と少女達にお礼を告げ、片方にネルを寝かせてもう片方にトキを寝かせた。女の子を地面に座らせるのは如何なものかと思っただろう。そういつた所は妙に紳士的であった。

「手当てをするよ。動かないでね」

「……前から思ってたんだが、それは一体どういう手品なんだ？」

「企業秘密だよ。知ったら最後、シャーレに永久就職だからね？」

悪戯っぽく笑い、ウインクのおまげまで。

何かしらの制限があるのかもしれないが、それを差し引いても場所を問わず物資を持つてくることができるのは破格と言う他ない。これがシャーレに与えられた特権、或いは権限か……なんてネルは思いながら、彼の背後で「永久就職……」と呟いているミドリは見なかったことにした。ついでに発言も聞かなかった事にする。

「骨もそうだけど、内臓系と筋肉の断裂が特に酷い。あとは脊髄も傷ついている……本当に、無茶したんだね」

「まあな。あんま認めたくないが、無茶を通さなきゃアタシが負けた。それくらい強かったよ、アイツは」

血を洗い流し、清潔になった傷口に丁寧な処置を施しガーゼや包帯を巻いていく。水や消毒液が沁みて反射的にぴくりと体が反応するが、手間をかけさせたくないネルは何とか抑え込んだ。

「……随分と手際が良いな、先生」

「私は脆くて弱いからね。傷つくことなんて日常茶飯事さ。それに、私は戦えない。皆の後ろで指揮をする事しかできない。だからせめて、これくらいはできないと」

彼の医療技術は、治療の手際の良さは一朝一夕で身に着くものではない。こういった戦場の最前線を何度も経験しなければここまで上手にならないだろう。ともすればC&Cが抱える救護班に匹敵、或い

は凌駕するほどにその腕は確かだった。

表面的な傷の処置は瞬く間に終わって、残りは内面的な部分だけ。これらは専用の設備等が無い今はどうする事も出来ないため、細胞活性剤と治療、再生に特化させたナノマシンを体に打ち込んで様子見。できる事を一通り終えた彼はタブレットをもう一度操作し、何かを呼び出す。黒のスカートと同色のスーツジャケット。白のブラウス。青のネクタイ。メカニカルなデザインのジャケット。ミレニアムの制服一式だった。

「汚れたまま、つてのは嫌でしょ？ ミレニアムの制服、置いておくよ。好きに使ってくれて大丈夫だから。サイズはアカネに聞いたから多分合ってると思うけど……もし違ってたらごめんね」

「面倒見が良いな、本当に」

「私にできる事なんてこれぐらいだからね」

穏やかに微笑んだ彼はタブレットを仕舞い、少し真剣な表情を浮かべて。

「応急手当はこれでお終い。何処か気になる場所とかある？ 包帯の締め付けとか、些細なことでも」

「特にはねえな」

「そっか、なら良かった」

「……なあ、C&Cッチに来ないか？ 丁度アタシ達と出張るタイプの指揮官が欲しかったんだ」

「お誘いありがとう。今は特定の学園に肩入れする訳にいかないから良い返事ができないかな。でも、シャーレが解体されて路頭に迷ったら頼らせてもらうかもね？」

「お？ 言質取ったぞ、先生？」

互いに笑みを交わし、未来の約束を契る。ネルは新しい玩具を与えられた子どものような屈託のない笑顔を浮べていた。今日みたいに彼と轡を並べて戦える日が楽しみでならないのだろう。

その笑顔を見る度に、先生の胸は引き裂かれるかの如く鮮烈な痛みを訴える。

——先生は知っていた。いつか必ずシャーレがその役目を終

えて解体される事を。その時、自分がいない事を。

だから、この約束は初めからどうやったって叶えることができない。作り上げた風景の中に彼の居場所は何処にもないのだ。

彼は悲しそうに一瞬だけ眼を伏せる。果たせない大切な約束を胸の奥に仕舞い込んで。そうして彼はもう一度眼を開く。その直前に生徒との接続を切断し、システムを切ったのだが……再び開いた彼の双眸、その右眼は未だ蒼かった。左眼は元の色彩に戻っているのに。

だが、それも一瞬。長い睫毛に縁どられた彼の瞳はどちらも元の色に戻る。アロナの教室の色ではなく、彼本来の眼に。だが、システムを切断したのにも関わらず一時的にとはいえ色彩が戻らなかつた事を、彼は把握しておくべきだった。

この時点で彼は自身の体で起きている変貌と変換を知っていれば、何か手を打てたのかもしれないのに。

先生はその手に応急手当キットを持ち、立ち上がる。

「これ以上悪化しない様に、本当はベッドか何かに縛り付けたいんだけど……それは帰った後にアカネに頼めばいいか」

「おい先生、流石に冗談だよな？」

「ふふっ、どうだろうね？」

先と同じような悪戯っぽい笑み。だが、先と異なるのはその声音と表情に冗談が見当たらない事だろうか。まさか本気でアカネに頼むつもりではないだろうな、とネルの背筋に冷たいものが走る。アカネなら本当にやりかねないのだ。彼の頼みだから、という訳ではなく、その行為がネルのためなるのなら彼女はやる。

「じゃあ、私はトキの手当てをしてくるよ。すぐ傍にいるから、何かあったら呼んでね」

振り返り、手を振る彼に伝えるようにネルもぶっきらぼうに手を振る。そして、彼が完全に背を向けたタイミングで彼女はブランケットの上に寝転び。

「…………ふ、う————」

肺の中の空気を絞り出すように息を吐いた。治療を受けたとはいえ傷が癒えたわけではない。深呼吸で空気を取り込めば肺が痛み、吐

き出すと氣道が軋む。身体に力が入らず、起き上がることもすらできない。随分と無茶をしたもんだ、と何処か他人事のように思っている。「ネル先輩」と声が聞こえて。

「本当に、ありがとうございます」

ゲーム開発部の少女達3人がネルの傍で深く頭を下げていた。彼女達の顔には感謝と罪悪感と、申し訳なき。

感謝はいい。だが、罪悪感と申し訳なきの感情は不要だ。そんな感情の為にネルは戦ったのではない。

「礼なんざいらねえよ。アタシはアタシのやりたい事をやったまでだ」

「で、でも……その傷……」

「こんなん睡付けときやそのうち治る。頑丈なのが取り得なんぞな。誰よりも早く復帰してやるよ。だから、そんな顔をするんじゃない。こっちまで気分が悪くなる」

同情してほしくて戦った訳ではない。痛みを覚えてほしくて戦った訳ではない。ネルは己の心に従い、やりたいと思つた事、やるべきと思つた事をやったまでだ。それが結果的に彼女達を助ける事になっただけ、故に氣に病む必要は無いとネルは言う。

「笑いながら救いに行くのがテメエ等だ。なら笑え。笑ってアリス^チを救いに行け。そんな面して来られてもアイツが困るだけだ。それとも、辛氣臭い顔をアイツに見せたいのか？」

「そ、それは……」

「なら、テメエがやるべき事は決まってるだろ？ ほら、答えろ、ユズ^{おでこ}」

「……アリスちゃんに心から笑ってもらえるように、私達も笑顔でいる事……？」

「100点だ」

ネルは手を伸ばし、ユズの頭をわしやわしやと撫でる。彼女が満足した頃にはユズの髪はぼさぼさになっていたが、そこまで気にするほどの事でもないだろう。

「先生の用事が済んだら、アタシ等を置いて中央タワーに行け。怪我人を運んでいる暇はねえだろ。アタシ等は大丈夫だ。今更ドローン

程度に遅れは取らねえ。あんな雑兵、寝ててもぶっ壊せる」

ネルは「流石に今すぐは厳しいけどな」と付け加えて、先生が置いていった2丁のMPXと大量のマガジンを見る。カスタムがネル好みのものではないが、別に扱えない訳ではない。そもそも、彼女は銃火器のスペシャリストだ。扱えない銃なんて無いに等しい。

手持無沙汰になった手でネルは銃を握る。掌の重さを感じながらネルは適当に弄っていると、『ああ、伝え忘れたことがあった』と思つて。

「どうしても礼がしたいってなら、チビを必ず助ける。エンジニア部、ヴェリタス、セミナー、C&C。アタシ達が死力を尽くして此処までバトンを繋いだんだ。それを無駄にするな。今までの全部を吹っ飛ばす痛快なファイナーレを飾って来い。リオの鼻を明かせよ。期待してるぜ？」

「……うん！ ネル先輩、ありがとう！」

突き出されたネルの拳に3人は軽く握った拳をこつんとぶつけ、その胸に彼女の意志を背負った。



まるで水中にいるかのような心地だった。耳に届く音が不鮮明で、眼に入る光が不鮮明で。意識がまだ覚醒していないのだ。眠っている訳でも、明晰夢を見ている訳でもない。例えるなら、二度寝に入る直前のような。意識が何方にもいて、何方にもいない状況。

その状態から、トキは意識の覚醒を選び取った。揺らめく水面のような音が鮮明になり、光が眼を突き刺す。薄っすらと開いた視界の先、白の姿を見た。誰かが自分の前に居る。それも、とても近くに。

「……(トキ)は」

「あ、気づいたかい？」

声はやはり思った通り、とても近くから聞こえた。視界のピントがあつて、ぼやけた白のシルエツトが像を結ぶ。腕章とコート。その顔立ち、声。見間違え様もない。聞き間違えもない。この人は。

「先生……」

眩き、トキは彼を呼んで……疑問が生まれる。何故彼は自分の近くにいるのだろうか。そもそも、ここは何処なのだろうか。自身が覚えている最後の光景は、あの部屋でネルと———そこまで思い出して彼女は「ああ」と吐息に似た声を漏らした。

「私は、及ばなかったのですね」

その声には悔しさと口惜しさ。それから僅かな安堵が滲んでいた。口元に浮べた微笑は自身を真つ向から上回ったネルに対する賞賛か、ずっと抗い続けた先生への呆れか。

「……これが、敗北ですか」

噛み締めた苦い味。土と泥と、血の混合物。こうした荒事で言い訳のしようがないほど負けたのは生涯で初めてだった。

痛む全身がトキの敗北を物語り、一切の妥協なく懸命に彼女の手当てをする彼が敗戦処理を体現する。どんな立場であったとしても傷ついた生徒を放っておけなかったのだろうか。彼のポリシーに反する、という理由で。相も変わらずお人好しだ。

……本当に、よく似ている。真つ直ぐな彼と、少し捻くれて分かり難い彼女。両方とも共通しているのは他者を慈しみ、愛する心。溢れんばかりの他者愛は、自己を振じ伏せて余りあるもの。この2人は自分の為には怒れない。自分の為には憎めない。2人を突き動かすのはいつだって誰かの涙だった。

だから、こうなるのは必然だった。泣き顔を覆って、誰にもばれない様に仮面を被り悪役を演じる彼女を彼が放っておける訳がないのだ。理不尽な世界に磨り潰される幸福を見なかつた事にできない彼女のよう。

敗北したというのに心がこんなにも晴れやかな理由も分かる。トキ自身、この結末に納得しているのだ。

ああ、そうだ。これでよかった。これでよかったのだ。トキが負ければリオもきつと諦めがつく。そもそも、この話はおかしいのだ。世界の為にアリスを殺すのも、その執行人がリオなのも。ふざけるのも大概にした方がいい。何故、彼女達がこんな重い荷物を背負わなければ

ばならないのだ。

命を落とすアリスが幸せな世界に居ないのは許せない。世界の為に身を削ったりオが幸福の輪に入れないのも許せない。努力や献身は報われるべきだろう。それが他人のためのものであったのならば猶更だ。

——彼も、そう思っているのだろうか。そう考えたトキの思考を読んだかのように、彼は嫺やかな微笑を浮べる。まるで『あとは任せて』と言わんばかりの表情。それを見てトキは『彼ならきつと大丈夫だ』と安堵を抱く。鏡映しのような彼がいれば、彼が彼女に寄り添えば……きつと、大丈夫だ。そう信じられる。理論に基づかない善意でリオが誰かを救ったように、彼もリオに手を差し伸べてくれるはずだ。後は願うだけだ。差し出された彼の手に、彼女が救われてくれることを。

「……処置は終わったけど……何か気になる箇所とかあるかな？」

「いえ、特には。丁寧な処置をありがとうございます、先生」

「これ位全然だよ」

彼は苦さを抱えた笑みを浮べる。誰かを傷つける事も、誰かが傷つく事も好まない彼は当然の如くトキの傷にも痛みを覚えている。だが、それを口に出す事はできない。彼女を傷つけたのは『アリスを助きたい』という彼の意志だ。同情は許されない。憐憫は許されない。勿論、後悔も。彼女と相対した時点でその権利は剥奪されている。

せめてもの想いでこの場の痛みは全て背負っているが……所詮は自慰行為に過ぎない。誰かを選び、誰かを捨てた自分の罪深さは嫌と言うほど理解している。生徒全員の味方、なんていう彼の信念は裏に蠢く醜さを覆い隠す方便だ。

少なくとも、今の自分が胸を張って『生徒全員の味方』だとは言えそうもない。トキを傷つけ、リオを傷つけたこんな自分が。もし傲慢にもそう嘯くのなら『どの口が』と罵られて当然だろう。嘔吐き。ペテン師。虚言癖。フェイカー。詐称者。

——ああ、本当に塵屑だ。

彼は俯き、嘲笑を浮かべる。いつだって救えないのは自分だった。

救うつもりがないのも自分だった。最後まで許せないのも、愛せないのも自分だった。

正しさという麻醉。善意という針。縫い付けて、誤魔化して、継ぎ接ぎだらけ。誰の為の正しさなのか。誰の為の善意なのか。アリスの為？ ケイの為？ リオの為？ トキの為？ 違う方を向く彼女達の正しさは交わらない。異なる誰かを想う善意は衝突を生む。

彼女達全員に笑ってほしかった彼はどちらを向けばいいのか。誰を想えばいいのか。探し求めた問いの正解はない。だからせめて、伸ばされた手だけは握れるように。助けを求める声だけは聞き逃さぬように。

彼がやれる事なんて多くない。皆のように天を舞うような才覚なんて持ち合わせていないし、できる事なんて悔やみながら、迷いながら、それでも一步一步前に進む事だけ。無力を噛み締め、這い蹲り土を食み、決して拭い去れない彼だけの地獄を抱きながら……現実には屈さず。いつまでも間違えたままでもこの手で何かが出来る以上、必ず救えるものがあると信じて。

——トキは彼をよく知らない。会話をしたのは数えられる程度。初対面の日は今日から1ヶ月も遡らない。彼とやった事といえど取引と戦闘だけ。だから知っている事なんて殆ど何も無い。彼がどんな思いで、どんな結論を出して此処に来たのか……何を望んだのか。知らないことだらけだ。

でも、それでも……彼が誰かから大切に想われている人だというのは分かる。彼に関する噂も判断材料の1つであるが、一番は彼を見つめる生徒の眼差しだ。彼を見つめる目の温度は暖かく、柔らかかった。あれが愛でなければ何なのだろう。

だが、彼は寂しそうだった。彼の横顔は誰も気づかないような孤独の香りを孕んでいる。少なくとも、トキが見た彼はどんな状況でも孤独感を感じていた。

あんなにも愛されているのに、誰かに囲まれているのに、彼は消えない孤独に苛まれている。生徒と教師だから壁を作っている、という訳ではない。彼とそれ以外にはどうしようもない程の溝が横たわっ

ている。断絶しているのだ。愛に気付く事ができても、向き合う事ができても、決して応える事はできない。

……そんな彼があまりにもあんまりであったから。

「先生は、頑張っていると思います」

「……え？」

彼はその表情を分かりやすく驚愕で染めて。

「必死で、誰かの為に頑張っています。他の方がどう思っているのかは存じませんが、少なくとも私はそう思っています。ですから、どうか……そのような顔をしないでください」

何処かに根差した彼の孤独の棘を取り去るように。孤独こそが自身をこの世界に縫い留める楔だと言わんばかりの彼に、もう一つ縫い留めるものを。彼の顔からいつか孤独が消えるように。或いは、孤独すらも愛せるように。

トキは祈る。彼の首を絞めた両手を組んで。彼の為に。彼と同じ孤独を抱える彼女の為に。

「……ははっ。そっか……そうだね。ネルにも同じことを言われたよ。全く、私は駄目だな。生徒に慰められるなんて」

「それでも良いと私は思いますよ。先生も私達と同じ人間なのですか」

トキ達と同じ……そう言われた事がよほど嬉しかったのか、彼は屈託のない笑みを見せてくれた。初めて見る彼の表情。まるで陽だまりのような、木漏れ日のような。戦場に似合わない姿はきつと彼本来のものなのだろう。トキにはそれがとても眩しく見えた。

そう、彼とトキ達は同じだ。何かを想う心があつて、何かに憤る心があつて、何かに悲しむ心があつて、何かを愛する心がある。彼だつて人間だ。完璧な超人でも、聖人君主でも、ましてや救世主であるもんか。彼は皆誰かと同じ速さで歩く——人間だ。

それが、彼について何も知らなかった彼女が知った——決して揺るがない彼の真実。

「同じ、か……」

眩く彼は酷く透明な表情で空を見る。暗い夜が明けた先にある青

空を。例え先の見えない暗い道であっても、道の道中には必ず光はあるのだと雄弁に語る空は彼の眼と同じ色彩。連邦生徒会長の色。何か思う所があったのか彼は「君は……」と何かを言いかけたが、口を噤んで言葉の代わりに笑みを浮べた。まるで手向けの花のように。

そして、彼は音を立てずに立ち上がって。

「さて……私はそろそろ——」

行くよ、と言い切る前にトキの方から可愛らしいくしゃみの音が聞こえた。

「先生、私にも服を頂けませんか？ この格好は少々肌寒く……」

夏の足音が聞こえているとはいえ、朝はまだ冷え込む。トキの纏うボディースーツに防寒防熱対策が施されているかは不明だが、そもそも布面積が少ないため仮に施されていたとしてもこの寒さは凌げないだろう。

「勿論。制服のサイズは幾つかな？」

「恐らくMです」

「恐らくなんだ……」

メイド服の次に普段使いするであろう服のサイズを恐らくでしか把握していない事に若干驚いた彼は苦笑いしながらシツテムの箱を操作。衣類をソートしてミレニアムの制服、Mサイズを検索する。

「はい、制服を含む日用品は全てリオ様が手配してくださいました」

「メイドの癖に主人に世話させたのかお前」

少し離れた場所から鋭いツツコミを入れたのは多少動けるようになったネル。彼女は今から着替えに向かおうとしていたのかゲーム開発部の少女達に肩を貸して貰いながら立っている。恐らく場所を変えるつもりなのだろう。先生もいるこの場で着替えるのは流石に憚られた。

別に彼が席を外しても良かったのだが……トキの元から離れようとするとは何か彼女から痛い視線を感じるため離れられない。

甘えられている、のだろうか。もしそうであるのならとても嬉しい。頑張り屋さんで、寂しがり屋で、それでいて感情表現が変な部分で不器用な彼女がそんな一面を見せてくれる事は。彼女が憂いなく

自分を頼れるように、より頑張ろうと思える。

そんな感情を呑み込んで、微笑を浮べて。

「制服はあったけど……どう？　自分で着れそう？」

「無理です。指一本動かせそうもありません」

「即答かあ」

彼は遠い眼をしていた。



必要以上に触れないように細心の注意を払いながら先生は横たわるトキに制服を着させる。着付け自体は何度かやった事はあるため段取りで手間取ることはないが、それはそれとして神経を使う。加えて、手の感覚が死にかけているため、ボタンを留めたりネクタイを締める仕草は勿論、スカートのファスナーを上げることすら覚束ない。

感覚がない癖に震える指先を抑え込み、彼女の体に可能な限り触れないように、それでいて丁寧に制服を着つけるというのは中々に骨の折れる作業であった。

「……これ、どう見ても事案だよね」

100人いたら100人がセクハラと答える光景。仮にカンナやキリノ、フブキ……ヴァルキューレの生徒がこの場に居たなら、瞬く間に彼の両手に手錠が掛けられていただろう。彼の云う通りどう見ても事案。現行犯逮捕間違いなしだった。

「心配は無用です。仮に捕まって裁判に掛けられたとしても、精一杯弁護させていただきます」

「裁判に掛けられた時点で割と詰みだからね？」

「面会には訪れさせて頂きます」

「有罪になって刑務所に放り込まれる前提かあ」

刑事裁判における有罪率は99%を上回るため裁判に掛けられた時点で詰みが見えているのはあながち間違いではないが、なんて彼は思う。キヴォトスの司法制度がどうなっているのか詳しく調べていないが、発言権や黙秘権が行使できることを願うばかりだ。もし仮に

コハルが裁判官だったら間違いなく死刑であろう。

今まで事情聴取くらいはされた事があっても逮捕された挙句実刑判決を受けた事はない。もしあつたら末代までの恥だ。尤も、どうせ自分が末代だろうが。

家庭や家族なんて……今よりも深い繋がりは望むべきではない。望む資格もない。どうやったって置いて逝ってしまうから。ずっと一緒に居る事なんて出来ない。作れる時間なんて長くて1年程度。そもそも、明日の命すら危ういのだ。それだったら生徒と先生の距離感が最も心地良い。

いつか、彼女達が先生を忘れてくれるように。彼との思い出をより大きな幸せで塗り潰してくれるように。彼女達にとつて自分が代替できる何かであつてほしい。過去にしてほしい。もし思い出してくれたとしても、その記憶が痛みではなく幸福でありますように。

先生は最後にトキのネクタイを結ぶ。鮮やかな青色。今日の空と同じ色。結ぶのも慣れたものだ。シャールの制服にもネクタイはあるし、最近だとアリスに着付けをせがまれたり。思い出、というには散らかっているかもしれないが記憶なんて得てしてそういうものだ。脳に残留する切り取られた瞬間が時系列関係なしに配置されている。思い出して、組み換えて、時間が経てば入れ替わって。

きゅつとネクタイを締めて、全体のバランスを見る。特段不自然な部分はない。

「どう？　息苦しかったり、傷が痛んだりとかは」

「特にはございません。感謝します、先生」

「これ位全然だよ。お礼なんて……」

「それでも、です。私の感謝を先生は受け取ってくださいらないのですか？」

流石にそんな事を寂しそうな表情と共に言われたら彼も引き下がれる事しかできない。感謝は素直に受け取るべき、なんて誰かが言っていた気がする。受け取らなかつたら誰かの感謝の感情はそのまま宙ぶらりんになってしまうから。

「……いや、有難く受け取らせてもらうよ」

微笑みながら彼はそう言って、トキの感謝を愛おしそうに受け取った。それで些細な蟠りも雪のように解け消えて、彼女も穏やかな顔を浮かべる。だが、それも一瞬。彼女は戦闘時にも引けを取らないほど真剣な表情になった。

「……先生。鳥澁がましいお願いである事は重々承知しております。ですが……」

「そんなに改まらないで。もっと肩の力を抜いて。私は君の先生だ。ギブアンドテイクの関係じゃない。甘えていいんだよ。君の願いも意志も心も、必ず聞き届ける。君が私に何かを望むなら、私の全てを賭して叶えてみせる。だから遠慮なんてしないでよ」

彼の言葉で決心が付いたのか、トキは真摯な顔で彼を見て。

「……リオ様を、お願いします」

「ああ、任された」

トキの大切な願いを彼は確かに受け取った。

繋いだ手が離れても

再び舞い戻ったエリドゥ中央タワー。数刻前に来た時はほぼフルメンバーでこの威容を仰いだだが、今はそのメンバーも半数以上が減り、ゲーム開発部の3名と先生のみ。

リオの秘蔵っ子であるアバンギヤルド君は倒した。最高戦力であるトキも戦闘不能に追いやった。エリドゥ各地に配備されているドローンも粗方相当し、残存個体も彼らの突入には間に合わない。残るのはエリドゥ中央タワー自体に張り巡らされた防衛機構のみ。勝ち戦、ではないが、それでも勝利を確信するには十分な状況であった。

『……本当に、トキを下したのね』

「……ああ。私達はトキを踏み越えた。譲れない目的の為に」

復旧した通信の最初の相手はリオだった。それは再度彼女がエリドゥの通信ネットワークを掌握し、ヴェリタスからの支援を受けられない事を意味するが、少女達は今更気にしなかった。目的地が目の前に鎮座している以上、ナビゲートはもう不要だ。

あとは正門から侵入し、最上まで駆け上りアリスを助けるだけ。その為に今まで戦ってきた。その為に数多の願いを踏み潰した。共に戦ってくれた仲間達。命を預けてくれた仲間達。幾多のバトンを託され、意志を託された果て、願いがもうすぐ成就する。

少女達の心臓が高鳴る。呼吸が浅くなる。手汗が滲んで、思わず銃のグリップを固く握った。夜明け前に開始した作戦。だが、今はもう朝の雲雀が鳴き終わった頃。それだけの時間を費やした。その終わりが、もう目の前に。

『……アリスは此処に居るわ。眠っている』

「アリスに何もしていないよね!? もし何か変なことしてたら……ッ！」

『ええ、何もしていないわ。そして、もうするつもりもない』

その言葉を嘘だとは疑わなかった。疑えなかった。リオの発する声には痛いぐらいの真実が宿っている。他者と自己を傷つける可能

性を孕む言霊。彼女がアリスに真実を告げた時と同じ声音。純然たる理論と現実と裏打ちされた刃物は、これまでと異なり少女達に向けておらず、その切先を発言者である彼女自身に向けている。まるで自刃するかのよう。

『ねえ、先生。酷い話だと思わないかしら』

「君が世界を滅ぼす兵器だと認識した存在が……ヘイローを持ち少女の形をしている事が？」

彼の冷たい、温度を感じさせない言葉にリオは『ええ』と同意を示す。

通常、心理的にヒトは自身と近縁種の動物を殺しづらい。魚類を殺す様に哺乳類を殺すことは難しく、牛や豚を殺す様に猿を殺す事は難しい。自身の姿形に近ければ近い程、手に掛ける心理的なハードルは跳ね上がる。

アリスは同じであった。リオやヒマリといったキヴオトスの生徒と何もかもが。皮膚の感触も体温も。表情も、体も。ヘイローを持つことすら共通し、心まであるのだ。彼女は紛れもなくキヴオトスの生命だった。

だからリオはアリスを兵器であると思いつく事にした。彼女は偶々ヘイローを持ち、姿形が人間であるだけの兵器だと。そう思わなければならなかった。そう信じなければ殺せなかった。そう思わなければ、この引き金は余りにも重かった。人差し指に掛かる命の重みに押し潰されてしまっていた。

『私は、最後まで迷い続けた。本当にこれで良いのか。不思議よね。何度も迷った末に出した結論のはずなのに、こんな土壇場で迷うなんて』

「そうかな？ 私はリオらしいと思うよ。君は磨り潰される誰かのために立ち上がった子だ。だから、今まさに磨り潰されようとしているアリスを想って立ち止まるのはとても自然なことさ」

『酷いマッチポンプね。私がやった事のはずなのに』

リオの作戦は、盤面は完璧であった。それは頭脳面の最高峰であるヒマリが、先生が太鼓判を押ししていた事実であり、この盤石を押し付

けるように展開をしていけば先生側に勝ち目は無かった。

リオの敗因はただ一つ。彼女の性格だ。合理的で、排他的で、遊びが無くて……それでいて優しく。その優しさが最後まで彼女の判断力と意志を鈍らせた。本当にアリスを殺すつもりなら、エリドゥに連れてきた瞬間に殺せただろうに。

世界という巨大な集団を善しとしていながら、彼女は声も上げられない誰か……弱者の味方であることを望んだ。世界とは大衆でありマジヨリテイだ。彼らを善しとするのなら、その対極に位置するマインリテイを切り捨てなければならぬ場合がある。今すぐに、ではなくとも集団秩序の側に立つ以上、そのような場面は避けられない。最大多数の最大幸福、それは最少の不幸に眼を瞑る事を意味する。

大きな矛盾だ。大衆に肩入れしながら弱者の味方であろうとするなんて。対立する二つに板挟みになりながら、リオは最後の最後までどちらも切り捨てる事ができなかった。その非情になり切れない優しい性格は——どうしようもない程に救世主に向いていなかった。

やはり、救世主なんて碌なものじゃない。子どもが命を投げ出さないと、心を殺さないと救えない世界なんて間違っている。そもそも、誰か一人に救えてしまう世界なんて何処にもないはずだろう。誰かの為だけの世界ではあるまいし。

——リオもトキも誰かの命を手を掛けずに済んで、世界は回り続ける。彼女達の手は汚れないまま、あるべき日々に戻り日常を謳歌する。

これでよかった。彼が望んだ帰結になった。漸くリオの抱えていたものを下ろしてあげられる。代わりに背負ってあげられる。

残るはアリスとケイ。彼女達と話して、心と心を通わせて。彼女達を日常に帰して、この騒動は幕を下ろす。

——その後の始末は全て先生が処理する。無名の司祭が来ようが神名^{デカゲラマトン}十文字が来ようが関係ない。結末に水を差さんとする不屈き物は全員全部振じ伏せる。

静かに、されど強く。刃は鋭く。殺意と云う砥石で研ぎ澄ませる。

他者の為に蠢動する殺意であり、悪意。彼を突き動かすのは『守るために殺す』と謂う人類最大の業^{カルマ}。来るべきその時まで隠し続け、狙う相手以外には向ける事のない致死は誰にも知られずに唯開放の時を待つ。

そして……先生達はビルの入り口、自動ドアの前に立つ。彼が手を翳すと静かな音を立てながら開いた。どうやら鍵は掛かっていなかったらしい。そのまま4人はビル内部に足を踏み入れる。

「ここが……」

中央タワー、エリドウの文字通り中心であるにも関わらずその中は随分と殺風景であった。エレベーターが駐留するホール、エントランス、ロビーが複合になった広いスペースと、扉の奥に隠された非常階段。明かりすらついていない部屋は人の気配を一切感じないのに……少女達は何かの視線を感じた。

見つめられる眼に温度は感じられない。感情は感じられない。まるで監視カメラにフォーカスされているかのような感覚。心当たりは当然ある。恐らくは――。

ごくりと生唾を呑む。背筋に冷たさが走る。銃を握り締めて、辺りを警戒。先生を中心にして、漏れがないように周囲を固めた。

『先生、貴方にとって生徒とは誰なの？　ヘイローを持っていけば、ヒトの形をしていけばいいの？　それとも学園に所属していれば？　貴方の生徒とは一体誰を示すの？』

リオの言葉に彼は「そうだね……」と呟き、静かに歩を進める。コツコツと固い床を靴底が叩く音色。静かな場所に音が反響する。彼が足を進める先に在るのはエレベーター。彼は指先を滑らせ、ボタンを押した。

リオが投げかけた問いは先生としての彼の核心に迫るものであった。彼の中心は生徒だ。何事も生徒優先、その下に生徒以外の誰かが居て、自身は最下層に近い場所にある。

だから聞いた。彼にとっての生徒とは何であるのか。それを聞けば、何かに納得できるような気がして。彼が答えない、という線は考えられなかった。彼は真摯に疑問と向き合うし、一度交わした約束を

反故にする事はない。だから必ず答えてくれる。そう信じている。

「私も明確な答えを持つている訳じゃないんだ。リオが並べてくれた要素はあくまで生徒を構成する要素でしかなく、それ自体が生徒ではない。学園に所属している事が生徒の条件なら、職員のオートマタだって生徒になるからね。彼等彼女等は私の生徒ではない。勿論、ヘイローを持っていれば誰でも私の生徒という訳でもないよ。それだと私の敵まで含めちゃうし」

彼は冗談っぽく笑いながら、その言葉に己が結論を装填する。彼が愛し、信じ、幾度打ちのめされても決して諦めなかつた……大切な存在が『誰』であるのか。それは特定個人に非ず。特定コミュニティに非ず。彼にとつての生徒とは――。

「私にとつての生徒は、大人と子どもの間で揺れる天使だ。自分と世界、責任と自由、成長と未熟。子どもとして生き、大人としての羽化を始めている存在。定まらないものを抱えながら、懸命に前を向き、未来を見据える……今を生きる生命達」

彼は遠い眼で何処かを見つめる。壁ではなく、もつと奥。水平線すら通り越して宙の彼方まで。

天地の間で切なく揺れ動く半端な心。現実と理想の擦り合わせをしている彼女達は定まらない自己を噛み締めて、これから答えを見つけに行こうと一歩一歩、矛盾を超えた歩みで前に進んでいる。

「そういった子ども達が私にとつての生徒であり、何よりの宝だよ」

『何よりの、宝……』

「そう、何よりの宝だ。だって私は君達という未来の為にこれまでも、これからも走り続けているからね」

彼は「だから」と一旦言葉を区切って。

「アリスもリオも、私の大切な生徒だ。そこに違いはない。助けを求められたなら何度だって手を差し伸べるし、何度だって歩み寄る」

『その果てに何の報酬が無くて?』

「そもそも報酬が欲しくてやってる訳じゃないよ。駆け抜けた先に私が居なくても、今を走らない理由にはならない。私は結局、皆が大事で大好きなんだよ」

別に報酬が欲しくて、感謝が欲しくて何かを成す事はない。強いて言うなら、作り上げた先にある笑顔達が最高の報酬だ。今を走り続ける理由はその先にある未来を信じたから。駆け抜けた先にある幸福な未来を現実にしたから。

と、色々理由を並べたけれど——結局生徒の事が何よりも大切で、好きだから彼は今も此処に立っている。

そんな彼の核心を明確な言葉と共に伝えられたリオは初めてその表情を穏やかな笑みに染めて。

『そう……完敗よ、先生』

静かに、だけど何処か晴れやかに己の負けを認めた。
しかし。

『でも——私には責任がある。トキを巻き込み、ヒマリを幽閉し、アリスを攫った責任が。だから、私は最後まで醜く足掻くわ。例えば、それが合理的でなくとも』

重厚な音を立ててタワー内部に張り巡らされた防衛機構が起動する。対侵入者、それも此処まで足を踏み入れた相手を完璧に想定したそれらの性能は最高峰と言って過言ではない。ドローン1機の性能は他の数枚上を行き、固定砲台であるミサイルユニットや機関銃のスペックも相応に上がっている。

「そっか、それが君の選択なんだね」

『笑ってくれるかしら、先生』

「まさか……リオらしい、とても素敵な選択だよ」

余りにもリオらしからぬ選択を彼は歓迎した。彼女はちゃんと足掻こうとしている。最後まで諦めず、彼方にある勝ちを信じて抗おうとしている。

リオの言う通り、それは合理的ではないかもしれないけれど——
—それでも、とても人間らしい選択だと彼は思う。

だって人間は、『もう少しだけ諦めずに頑張ってみよう』という思いを積み重ねて、ここまで来たのだから。

そう意味では、リオは漸く——他の皆と同じ地平を見れたのだと思う。先生として、一人の人間として、その進歩と成長を喜ばない

筈が無かった。

彼はタブレットを構える。起動する各種システム。思考がクリアに、鮮明になる。つう、とどこかで傷が開き血が流れる感覚。垂れ下がった左腕、コートの下から血が滲んでいる。痛みは無いが、血液の凝固能力が下がっている今は失血が怖いためあまり時間は掛けられない。

「アロナ、これで一区切りだ。最後まで苦勞を掛けて申し訳ないけど……頼んだよ」

『はい！ 各種システム、問題なしです！ いつでも行けますよ、先生！』

——耳に届く頼もしい声。連邦生徒会長の子と同じ、でも少し幼い声。君はもう覚えていないだろうけれど、私だけはちゃんと覚えているから。君の声も、姿も、思い出も。私が君の全てを未来に連れて行くから。

そんな事を考えながら戦闘態勢を取る彼は「そういえば」と口を開いて。

「リオは彼女達にトロツコ問題を聞いたんだよね？」

『ええ、そうよ。それがどうかしたかしら？』

「君が答えを出して、この子達が答えを出したなら——君に相對した者として、私もせめてその問いには答えを出しておかないとって思ってたね」

『……そう、律儀なのね』

「己の意志で武器を握った人間として当然の事さ」

武力衝突は可能な限り避けるべきだ。殺し合いは最終手段であるべきだ。間違ってもそれを前提としてはいけない。確かに反対意見を力ずくで押し伏せれば簡単に自分だけの世界が出来上がる。

だが、そうして作った世界は必ず力で滅ぼされてしまう。決して逃れられない力の呪縛だ。しかも、それは代替わりしても途絶える事がない連続性がある。

一度暴力革命でひっくり返った国が良い例だろう。暴力によって齎された変革は暴力でしか維持できない。当然そんな状態は平穩と

程遠く、誰もが銃声に怯えながら、死に震えながら日常を送る。屍山血河の上で作られた地獄のような日常を。そして、最後は打倒した権力と同じように暴力で打ち倒される。その繰り返しだ。『一度それでどうにかなったなら、次もどうにかなる』という成功体験は拭い難い。そうなった以上、大きな変革には必ず暴力が伴ってしまう。

だから暴力は嫌だと彼は言うのだ。力を行使し、溺れた末の末路は大概酷いものだから。一生力の呪縛から抜け出せなくなり、最後は別の力に碎かれるしか道はないから。

そうだ。武器を取った以上、そこに大義や意義はあつたとしても正義はない。武器を行使するしか道がない状況なんて須らく塵屑であり、対話を拒絶した獣のコミュニケーション。どちらがヒエラルキーの頂点に立つかを決める争いだ。

故に彼は己が武器を振るう理由を宣言する。自分に、誰かに、世界に、もう届かない彼女に。自分の中に明確な答えを出し、それを軸に己が力を行使する。定めた軸から逸脱した行為だけは絶対にしない様に、力を行使している間も思考は止めず争い以外の方法を模索する。

———それこそが、先生である自分のやるべき事。やりたい事だ。

「私は前提が間違っていると思う。人間は皆、自分の命の重みを背負うだけで精一杯だ。自分の命の責任を果たす事に生涯を費やす。それなのに、自分以外の他者の命まで背負わせるのは違うと思うんだ」生きている者は皆、自分の理由を探している。命の理由とか存在する意味とかそんな大層なものじゃなくても今日自分がやるべき事とか何ができるかとか。そういった小さなタスクを積み重ねて、ヒトは終わりに向けて疾走する。その疾走こそが生まれた責任であり、生まれた価値。何が残せるか、何を成せるかではなくその道筋そのもの、走り抜けた軌跡に価値があり、意味がある。

そして———その軌跡の最後に人類共通でやるべき事がたった1つだけある。それが、自分の人生にピリオドを打つことだ。つまりは上がりの合図。それをして初めて、人間の生は終わりを迎える。

思うに、人間が人間を殺す権利を持つのはその生涯に於いて1回きりだ。その殺人は自分を終わらせてやるために使うべきものであり、他人に使ったら最後、権利を使い果たした者は皆と同じように死ねない。自分を終わらせることができないから。

だから、この問題は前提そのもの間違い。他人にたった一回の権利を行使させる事を強要させる問題は不条理だ。

彼は「でも」と続けて、彼なりの結論の続きを話す。

「これは所詮綺麗事だ。だから、本当にどうしようもない時は……私は、私の身を呈して止めるよ。この決断で誰かが救われる事を祈って」

その言葉を最後に、彼は口を噤んで戦士となった。

『……そう。貴方は——』

言葉の続き。リオはそれをあえて口にしなかった。きつと彼なら分かっているだろうと思っただから。その決断に潜む矛盾を。彼が何を置き去りにしてしまったのか、それはきつと彼自身が一番分かっている。それこそ、痛い程に。

だから、リオと先生の間これ以上の言葉は不要。続きの会話はこれが終わったあと、先生と生徒の関係性に戻ってから。

『……行くわよ、先生』

「ああ、おいで、リオ。君の全てを受け止めるから」

そうして彼は自身の眼をアロナの色彩に染め上げる。己の肉体を変換し、教室と繋げ、境界を越えて。唯、自分がやるべき事を果たすべくこの作戦に於いて最後の戦闘——最も不要で、無意味で。だが決して無価値ではない、リオがリオ自身の心と決着をつけるための戦いを開始する。

「皆、これで最後だ。あとひと踏ん張り、一緒に頑張ろう。この道を駆け抜けた先にはアリスが居る。彼女に笑顔の花束を贈るために——最後の最後、完膚なきまでに完璧な勝利を」

「うん、勿論！ 待っててね、アリス！」

「はい！ これでも最後なら、私達の有りつ丈をッ！」

「が、頑張ります……ッ！」

この曇天を突き抜けた先、求め続けたたった一つの笑顔がある事を祈って。

「ゲーム開発部、出撃ッ！」

「おーッ！」

開戦の号砲が響き渡った。



先生達とリオが最後の戦いを開始する数刻前。まだ彼等が中央タワーへの道中を進んでいた頃。漸く少し体を動かせるようになったトキの元へ一件の通信が転がり込んだ。

『……トキ』

リオは静かな後悔を感じさせる声で彼女を呼んだ。いつも冷たい温度を宿していた眼は感情が灯す熱にゆらゆらと揺らめいている。

トキが「リオ様……」と謔言のように彼女の名前を呟けば、俯いて表情を隠した。誰にも見られない様に。

トキは通信越しにリオを一瞥し、痛む体を無理矢理動かそうとしたが……多少動く様になっただけで、未だ支障が無いとは言い切れない状態。忠誠を誓うような膝立ちなんてできる筈も無かった。『儘なりませんね』と内心思いながら息を一つ吐いて、トキは真っ直ぐとリオを見る。

「申し訳(ご)いません。不肖トキ、任務を失敗しました」

『いいのよ……私が、貴女を信じ切れなかっただけ。貴女に落ち度はない。貴女はよくやってくれたわ』

首を振りながら、リオはトキの言葉を否定する。並べた言葉達は紛れもなくリオの本音だった。確かに結果だけ見れば都市防衛の任務は失敗しただろう。だが、責める気は全くない。本当に、良くやってくれた。落ち度なんてある筈がない。

敗因があるとすればたった一つ、リオがトキを信じ切れなかった事。一緒に戦ってやれなかった事。それだけだ。もし、信じていれば、共に戦っていれば——彼女達は先生とネルのタッグに勝利し

ていたのかもしれないのに。双方に差があるとすれば、たったそこだけだっただろうから。

『謝って許されるとは思わないけど、それでも謝らせて頂戴』

リオは俯いたままの顔を上げて襟元を正し、最後まで仕えてくれた最高に誇らしい少女に向けて言葉を紡ぐ。

『トキ、ごめんなさい。私は貴女の時間と自由を奪い、アリスを殺させようとした。決して許されない事をしたわ。私が貴女にした仕打ちの全てに、謝罪を』

「……どうか謝らないでください」

トキはそれ以上の言葉を発せられなかった。発する事を許されていなかった。何を言っても彼女を傷つけてしまいそうで。どんな言葉も慰めにすらならないと分かってしまったから。言葉は届かない。祈りも届かない。心は遠い。

だからせめて、彼女に付き従った事を決して後悔していないと伝えたくて。

『現時刻を以て、貴女の任を解くわ』

「リオ様、それは……ッ」

声を荒げて、その決定に異議を唱えようとしてもあまりに遅くて、遠くて。

『お疲れ様、トキ。ありがとう……貴女には何度も助けられたわ』

それが、トキが初めて見たリオの笑顔だった。

その言葉を最後に、通信が切断される。それに伴い、トキに付与されていたエリドゥの各種アクセス権が剥奪され彼女は真の意味でリオの元から離れてしまう。リオとの繋がりを失ってしまう。

通信機をタップしても二度と彼女に繋がる事はない。声を聞けない。顔も見えない。彼女は孤独になった。孤独を選んでしまった。それが責任だと言わんばかりに。

トキは一瞬、親とはぐれた子供のような……見るだけで胸が締め付けられるような表情を浮かべて、通信機を触っていた手を下ろす。俯いたまま。突然の別れに身体力が抜けてしまって、譫言のように「リオ様……」と呟き、固く結んだ唇で悲しみを噛み締める。

そして、彼女は徐に顔を上げて。

「どうしましょうネル先輩、無職になってしまいました」
「知らねえよ」

己が心に決着を

『——これで終わりッ!』

ドローンオートマタ、と固定砲台が数十機ずつ。それらと3人の少女が入り乱れる20分程度の戦闘の最後を飾ったのはモモイによって放たれた1発の弾丸だった。彼女の1発は残存していた最後のオートマタの眉間を正確に射貫き、沈黙。止めの弾丸すら必要のない鮮やかな一撃は静かながらも少女達の完勝を表していた。

その光景をカメラ越しに見ていたリオは『当然の帰結だろう』と納得し、眼を伏せる。最初から勝てるとは思っていなかった。戦闘開始前に彼女自身が言っていた『足掻く』と云う言葉が全てで、実際悪足掻きにしかなくていいない。数多の死線を潜り抜け、銃を持ち力を振るうものとして大躍進を遂げた少女達の相手はこの程度の自動人形に勤まらない。

アバンギャルド君が健在であれば勝てただろうが、オリジナルもレプリカも破壊されている。無いものねだりだ。もう一度最初から建造する時間は無かったし、先まではエリドゥのリソースを全てトキとアビ・エシユフに割り振っていた。どんなi fを夢想したとしても間に合わない——それが決定された結論。

ああ、勝てると思いがつていない。最初から負け戦だ。トキがあの場所に連れ込まれた時点でこうなる事は決まっていた。最高戦力であるトキを『使わされた』時点で、リオの盤面は不利になってしまっていた。表面上は有利に見えて、相手の戦力を削つていても、その実見えない地雷原の中に放り込まれている。それを運悪く爆破させてしまえば、そこを起点にして全てが崩れ落ちてゲームセット。

敵対戦力にミレニアム最強であるネルと戦術指揮の鬼才である先生が居るのだ。此方側が圧倒的に有利なフィールドで、アドバンテージを常に握り続けていたとしても……負けるのは不思議ではない。それ程までに2人は逆境を覆す事に長けていた。

……それでも、策を使ったとはいえアビ・エシユフを全損させるのは予想外であったが。

だから、納得できるし当然の敗北。それでも少しばかりの口惜しきがあつた。それは盤石の計画を覆されたからではない。ただ、自身が持つ救済意識が彼女達の友愛に上回られた事から来る悔しさ。自分の意志を真つ向から凌駕されて悔しくない訳が無かつた。納得もできるし、理解もできる。だが、それでも心だけが追いついていない。人生で初めてだ。理性が心に敗北するなんて。だけど、何故かそれが酷く心地良い。これが皆だれかと同じ人間らしい心なのか、と。これが皆だれかの見ていた景色なのか、と。漸く胸を張つて『自分も誰かと同じ人間である』と言える気がする。

自分の持ち得る全てと、彼女達が持ち得る全て。力と力をぶつけ、意志と意志を衝突させ、彼女達は見事に勝利を勝ち取つた。文句の付けようがない勝利だ。負けた此方側までもが晴れやかな気分になりそうなほど、鮮やかかつ透明な勝利。それを掴んだ少女達を見てリオはふと考へた。自分の理想の結実を。思い描いた未来を。

そこは平和で、誰もが当たり前前に幸福を謳歌していて、明日への希望に満ちていて。楽園、と呼ぶに相応しい未来だ。だが、そこにリオの姿はない。ただのイメージの問題だ。リオは最後までイメージできなかつた。自分が平和な時代の中に居て、笑つていられる光景を。夢を描く癖に、その夢の中に自分の居場所をどうしても作れなかつた。

それができていれば、もしかしたら——なんて思うのは、自分が人間になれたからであろうか。以前までなら意味の無いifと割り切つていた空想の絵画は、人間にとつてはきつと救いなのだ。だつて、そのifを考へられるのであれば、自分があの時よりも成長している事を示すから。

未熟で、折れやすく、砕けやすく、定まらなくて、半端で。でも、それでも酷く愛おしい心。リオの心臓はもう停止していない。この世界に住まう尊き者の一人として、確かに命の鼓動を鳴らしている。

「……私の負けね」

微笑を浮べて見上げた空は透明に見えた。

先生は手首から先を覆い隠していた手袋を外し、自身の生身の肉体を見る。壊死、凍傷、火傷、内出血、挫傷。ざっと見ただけでこの程度。

だが、なによりも眼を引くのは——小指の指先に亀裂が走っている事だろう。亀裂の全長は1mm程度。眼を凝らさないと良く見えないため見落としそうになるが……それでも、この変化は重篤だった。

聖痕が刻まれた事よりも、指が欠け落ちたことよりも、腎臓を欠損した事よりも……ずっと重い症状。その亀裂から覗くのは肉の色ではない。およそ人体から零れる色ではない。

青だ。彼の亀裂の中から透き通るような青空が見えている。

彼は自身の肉体に起きた変化を再度一瞥して、手袋の奥に仕舞い込む。どうせできる事が無いのだ。気にしない方が良いだろう。こうなったからといって直ぐに命に別条がある訳でもない。精密検査をしなければ今の自分なんて分からないのだ。だから頭の奥に追いやって、今は目の前の事に集中する。

「……リオ」

痛みを堪えるように吐息と共に吐き出された声。名前を呼ぶ音階。また誰かの願いを踏み付けてしまった。また誰かの希望を踏み躪ってしまった。そうするしかなかったとか、そんな見苦しい言い訳をするつもりはない。生徒の願いより自身の意志を優先したのは言い逃れのできない事実であり、アリスを助けるためにリオの少女性に牙を立てたのもまた事実だ。

——全く以て嫌になる。後味の良かった戦いなんてあった試しがない。いつだって戦いの後は最悪の気分で、掌に残る自分以外の血の温度が返しの付いた刃のように突き刺さり、抜けずに残留する。まるで勝者の報いだと言わんばかりに。

敗北にも勝利にも代償はある。勝利者は敗者の願いを背負わなければならぬのだ。背負って、戦って、また背負って。いつか敗北するその時まで己が滅ぼした敗者の願いを背負い続ける。それこそが勝者の報いであり代償であり、罰だ。

ああ、そうだ。踏み付けた願いに報いるために。踏み躪った希望に報いるために。見殺しにした命に報いるために。

もう投げ出す事はできない。あまりにも多くの願いを背負い過ぎた。

もう断ち切る事も出来ない。彼女と夢見た景色は眩し過ぎた。

そうして、走って。走って。血を吐くまで走って。もう止まってほしい、と自身を案じる声すら彼方に置き去りにして。夢見た景色の為に走り続ける。減速はない。この短い生涯を常にトップスピードで駆け抜けるのだ。安息はない。休息はない。何を犠牲にしても帰りがかった場所にすら背を向けて、ただ只管に前へ。

理想に生きて、夢に殉じる。短く瞬いて、刹那に消え去る光のような生。彼はそんな生き方を彼女達にしてほしくなかった。そうすることでは生きれないならば兎も角として、他に選択肢があるならばそんな道を選ぶことだけは思い留まってほしい。だって、余りにも碌でもないのだ。

自分だけが同じ場所にいない。愛した人、愛した景色を全て置き去りにしなければならぬ。過去も現在も未来も、己を構成する全てが理想を実現するための燃料なんて生き方は——人間の生き方じゃないだろう。

だから必要だった。リオに寄り添える人間が。リオの理想を理解して、共感して、その上で彼女の犠牲と献身を否定する者が。

ヒマリは理解もできるし、犠牲と献身の否定もできる。だが、アリスを贄に捧げる道をリオが選んでしまった以上、決して共感する事はない。

故に先生がその役を請け負った。彼女の描いた理想を肯定し、理念に共感し、その上で彼女の犠牲を否定した。彼女もまた、皆と変わらない人間であると。そして、彼女が下した荷物を彼が背負って歩き続

ける。これが、彼が望んだ結末だ。

まだ高校生の彼女が世界の未来なんて背負う必要は無い。ましてやその為に自分を殺す事なんて。そんな惨たらしい末路は認められる訳がないだろう。その果てでリオが安らかに笑えるとしても……ああ、否定しなければならぬ。それが、先生としての己だから。

頭の中でずっと反響する感傷的な心を彼は振り払うようにもう一度「リオ」と名前を呟いて。

「……私達の勝ちだ」

『ええ。私の負け、ね』

どこか晴れやかに自身の敗北を宣言するリオは、諦めた様な……あるいは憑き物が取れたような顔を浮べている。

『私は私の持ち得る全てを使つて貴方達を相手にして……負けた。敗北なんて万一にも有り得なかつたはず……そう思っていたのは私だけね。先生達は次々に前提を覆し、勝利に必要なピースを掻き集めて私達を打倒した』

「そうかな？ 実際、私達が勝てる確率はほぼ皆無だったよ。今回は色々と上手く運んだのと、皆が死力を尽くしてくれたからさ。もう一回同じことをやったら、こうはならないさ」

『それでも、先生はその1回をちゃんと通し切った。その勝負所における強さは誇れるものだと思うわ』

「お褒めに預かりどうも……？」

突然の誉め言葉に先生は困惑と微笑が緋い交ぜになった表情を浮かべながら返答したが、それも直ぐに真剣なものに切り替わって。

「リオ、これが終つたら話をしよう。私達には互いに知らない事が多過ぎる。だからまずは互いを知る所から始めよう。私の事、君の事。それらを取り巻く世界の事。過去の歩み、今思っている事、未来の事。友達とか好きなものとか……そういつた何でもないようなことを話そう。それが多分、今の私達に必要なことだからさ」

彼の唐突にも見える提案。互いを知る事。思えば、彼とフラットな立場で会話を交わしたことがなかった。リオは先生の情報を書面や人伝くらいでしか知らず、会話を交わしたのも無名の守護者掃討の件

とエリドウ突入後の通信越しのみ。あまりにも彼の事を知らなかった。

それに、リオも彼の事を知りたかった。否、知りたくなった、と言うべきか。

生徒を眺める眼差しは何より優しかった。だが、同時にその眼差しの先にある光景にはどうやったって混ざれない事を心の底から理解しているように思える。

生徒を何よりも愛している。だが、その愛は人間が持つには手に余るほど大きく、重く、それでいて歪だ。まるで一度失ったから、もう二度と手放さない様に強く抱きしめているかのように。

彼は別離を知っている。大切な誰かと既に分かれているのだ。『また会えるよね』の声は届かず、彼は大切な……それこそ、心の一部とも言うべき半身を永遠に失った。それが誰なのかは分からない。生徒なのか、それ以外なのか。個人なのか、それとも集団なのか。

このキヴオトスでは呼吸するのも辛いほどに底抜けに優しく、暖かくて——愛に溢れた人。誰かを失う事に心から怯える人。そんな彼の奥にもう少し触れたくなくて、リオは。

『ええ、そうね』

短く、だが声音に喜びと楽しみを乗せて呟いた。その柔らかい表情はきつとりオ本来のもの。だが、その表情は直ぐに隠れた。今は将来の楽しみに思いを馳せている場合ではないと思っただろう。今はまだ、やるべき事が残っているから。

『私達は最上階に居るわ。エレベーターで昇って来て頂戴。これからのは話は、会ったその後で』

「うん、また後でね、リオ」

繋がっていたリオとの通信が途絶する。彼女との会話をしていた先生は、通信機を指先で撫でながら眼を蠱惑的に歪めて微笑を浮かべた。

そうして彼は軽やかな足取りでドロインの残骸が山積みになったエントランスを軽やかな足取りで歩いていく。彼の後を付いていくように少女達も残骸を踏まぬように慎重に歩を進ませる。

エレベーターの真正面。彼は指先でボタンを押し込む。すると銃弾で凹んだドアが開き、オフィスビル然としたエレベーターが口を開いた。どうやら1階に常駐していたらしい。

開いたエレベーターを背にするように、彼は振り返って——少
女達に笑いかける。

「じゃあ、アリスに会いに行こうか」

この長き旅路の果て、最後の笑顔を迎えに。

亡き王女のためのパヴァーヌ I

靴底が硬い床を叩く音が聞こえたから、リオは閉じていた眼を開けた。眠っていた訳ではない。ただ思考を巡らせていただけ。視覚から入る情報を遮断して脳内の情報処理に専念させたい時によくやる方法だった。

考えなければならぬ事。考えてはいけない事。何かを考えている時、雑念のように別の物事が入り込んで来て思考が乱れる……なんて経験を一度はしたことがあるだろう。思考は取り留めがない。指向性が無い。故に、思考を単一方向に向かせるのはそれなりに労力がある。それが『集中すると疲れる』要因の一つなのかもしれない。

リオは同じくヒールで床を鳴らす。振り返る。眼は知性を体現するようなルベライト。理知的で、合理的で、数理的で……だが、それだけではない。その裏側には人間らしい温度と少女性が見え隠れしている。

その眼差しが射貫いたのは、少女達3人の先頭に立つ……息も絶え絶えな死に目を綴る青年。彼はその死相に似合わぬ穏やかな笑みを浮べて、ひらひらと手袋に覆われた手を振った。そして、彼は少女達を連れてリオの顔がよく見える距離まで歩いて。

「……こうして直接顔を合わせるの2度目だね、リオ」

「いえ、3度目よ。貴方は眠っていたから覚えていないと思うけれど」

「あ、そうなんだ……態々来てくれたんだね、ありがとう」

くしゃり、と屈託のない笑みを浮べる彼。大人である彼にしては少々子どもっぽい笑みであるが、不思議とよく似合っていた。だが、それも当然であろう。彼の年齢は別に少女達と大きく離れている訳ではないのだから。多く見積もっても年齢差は両手の指で数えられる範囲。ともすれば片手の範囲かもしれない。

彼の笑みと感謝を受け取ったリオは少し気恥ずかしそうに顔を逸らす。真正面から混じりけの無い『ありがとう』を受け取ったのはかなり久しぶりだった。だからなんて返して良いか分からなくて、失礼

と分かっている顔も顔を逸らすしかなくて。

だがいつまでも顔を背けている訳にはいかないから、彼女は場の仕切り直しと自身の感情のリセットを兼ねて咳払いを1つ。それだけで自身の背が伸びて、緊張感を持てる。見れば少女達も緊張した面持ちで、自然体と呼べるのは彼だけ。

「……本当に、ここまで来たのね。立ち塞がる全てを薙ぎ払って……いつか、貴女達にもう一度切先を向ける存在の為に」

「当たり前だよ！ 最初からそう決めてたからね！」

「……そう。友達思いなのね」

短い言葉。モモイ達のこれまでを肯定する言葉。それは何を言われるかと身構えていた少女達を拍子抜けさせるには充分すぎるものであり、あまりの呆気なさに彼女達は眼を瞬かせて疑問符を浮かべていた。

頭の中がエクスクラメーションマークで詰まったモモイは恐る恐るリオを見るが、彼女は一瞥した以降眼を合わせてくれない。彼女の視線は、ずっと彼に向いている。

リオが抱いた原初の願いを肯定してくれた人。

リオが描いた理想の先を美しいと言ってくれた人。

その上で、リオの犠牲を否定した人。

あくまでアリスの事をかけがえない友人、仲間として見ている少女達とは訳が違う。彼は透明だった少女に潜む危険性について正しく理解している。恐らく、この場に居る誰よりも。

だから、これが最終確認。本当に良いのかと。自分の首を切り裂いた少女を、自身を殺しかけた少女を助けても良いのかと———今一度、彼に問いかけた。

「ああ。私はアリスを助けるよ。何度でも。それが私のしたい事だから」

すべき事ではなく。しなければならぬ事ではなく。彼が『そうしたい』から助ける。己の中の善悪のコンパスに従い、本当にやりたい事を選んだ。

———その選択の結果が自身を貫いたとしても、彼は微塵も悔い

ないだろう。

「……その選択が世界の危機に繋がるとしても」

「確かにあの子は世界の危機になるのかもしれない。でも、それは誰もがそうだと思うよ。大なり小なり、私達は世界に影響を及ぼして生きていく。その影響が良いものしかないなんてありえないし、逆もまた然り。善も悪もあるからこそその人間だ」

善人が悪を成し、悪人が善を成す。善人で在り続けられる人間は居ない。悪人で在り続けられる人間は居ない。善も悪も抱えて生きるのが人間だ。単一に振り切れた在り方はシステムに近いものであり、間違っても人間ではない。

透明だった少女は生きる喜びを知った。誰かと過ごす楽しさを知った。初めて体験した『生きること』は彼女の心に彩りを齎しただろう。

無垢だった少女は罪を知った。誰かを傷つける痛みを知った。初めて突き付けられた悪性はきつと彼女の心に大きな影を落としていく。

モモイを……大切な友達を傷つけた。望む望まないは関係ない。そんなものは結果の前では全て無意味だ。アリスがモモイを傷つけた、それは揺るがない真実。モモイとてそれを否定する事はできない。

だが、彼女は許した。アリスに傷つけられた事を。その罪も、痛みも。だから、あとはアリスが彼女自身を許せるかどうか。

許す事も許さない事も、どちらも同じくらい重い。罪を贖い罰を受けて生きること、死ぬこと。罪を罪のまま背負って生きること、死ぬこと。どれが正しいのかなんて問うつもりはない。それを言えるのは少なくとも本人だけだろう。

「……アリスは？」

「奥よ。案内するわ」

——彼女は善と悪を知った。生きる本質に近い部分に触れた。故に、彼女に問わなければならぬ。何を選ぶのか。

本音を言うと、アリスには生きてほしい。己の醜いエゴだとは思う

が、それでも……涙で生涯を終えるのだけは駄目だ。避けられない終わりであるのならばせめて笑顔で。

だから、彼女が生きることを選んでくれるのならば良い。先生としてその生存を後押しし、祝福し……また共に歩めることに心から喜ぼう。

だが——彼女が本心から『死にたい』と言ったのならば……その選択を見送れるだろうか。

自身の中に生まれた永遠に解決できそうにない疑問を押し殺して先生はリオの後に続いた。



リオに通された部屋。その中央——メカニカルなデザインのベッドの上にアリスは居た。数多のケーブルと電極を取りつけられ、手枷足枷を付けられ。ともすれば罪人にしか見えないものであったが、不思議とそうは思えなかった。寧ろその逆、まるで目覚めを待ち続ける聖女のように。

「アリスッ！」

「アリスちゃんッ！」

「アリスちゃん……ッ！」

その姿を視界に収めた瞬間、駆け出すゲーム開発部の少女達。求め、焦がれたアリスを見て我慢が効かなくなったのだろう。一目散に、他の事なんて心底どうでもいいと言わんばかりに。

駆け寄って、肩を揺すって。手枷や足枷を外そうと力を込めても、身体能力に優れたアリスを想定した強度の素材で作られた枷は少女達の膂力で壊せなくて。

それならばともう一度肩を揺すっても、彼女は力なく揺れるばかりで一向に目を覚ます気配はない。固く閉じられた双眸。それはもう光を灯す事が無いと語っているかのようで。

頭の中に生まれた想定。アリスが二度と眼を覚まさない可能性。それは妄想と笑い飛ばすにはあまりにも現実根差していて、この光

景とリンクしていた。

残酷が過ぎるもしもに怯えたユズは振り返る。このどうしようもない現実をどうにかしてほしくて。覆してほしくて。先生なら、なんて可能性に縋る。彼ならばどうにかしてくれると思った。だって、今まで彼は何度だって不可能を覆してきたから。

「……先生、アリスちゃんが眼を——」

泣きそうになりながら紡がれた言葉の先を遮るように、先生は少女達の前に出てアリスの近くで跪く。その傍らにはリオが彼とアリスの言動に目を光らせており、不測の事態に即座に対応できるように構えている。

彼女の眼光は鋭い。知っているのだ。世界はそんなに上手くいかないのだ。ここでアリスが無事に目を覚まして、皆と抱き合ってしまったしめだし——そんな結末にはならない。

そうだ、常に世界はあるべき残酷さを剥き出しにするタイミングを虎視眈々と見計らっているのだから。

「……アリス」

悔いるように。悼むように。憂うように。彼女の眩き、手を伸ばした彼の指先。それがアリスに触れようとした刹那——ピクリとも動かなかった彼女の体が動いた。

「ア——ッ」

突然の状況変化。名前を呼んだ彼、伸ばされた指先。その手をアリスは細く、小さな手で乱暴に迎えた。枷を紙屑のように引き千切り、フリーになった手で彼の左腕を掴み力いっぱい握り締め圧迫。彼の骨が少しずつ、だが着実に壊される。バキバキと人体から鳴ってはならない音が耳に届いたりオは躊躇いながらも腰のホルスターから頼りない口径のハンドガンを抜き、照準を定める。

「リオ会長ッ！ 何をやって——ッ！」

「ミドリ、撃っちゃ駄目ッ！」

咎める姉の声によりワンテンポ遅れたミドリはトリガーを引くタイミングを逃し、反対にリオはトリガーを引き切る。発射された弾丸が狙う先はアリスでもなく先生でもない。未だ眼を閉じたままのア

リスが横たわる場所。つまりは威嚇射撃だ。

だが、殺る気の無い銃弾なんて脅威ではない。ましてや初めから狙っていないものであれば猶更だ。彼女はリオの威嚇射撃を無視し、彼の腕を壊すため更に力を籠める。彼も今まさに肉を潰し骨を砕いているアリスの指先から逃れようと抵抗しているが、根本的にスペックが桁違いのため脱出する事は不可能だ。

——このままだと彼の腕が肉塊になる。

そう思ったりオは狙いをアリス本人に定める。照準の先は彼の腕を潰している右腕。威嚇射撃は止めだ。直撃させる。

汚れ役は自分だけで良い。ゲーム開発部の3人にアリスを狙えと言っても荷が重いだろう。だから、自分^{リオ}がやればいい。この件の悪役は——1人だ。

引き絞られたトリガー。発射された弾丸は狙いを過たずアリスの腕目掛けて飛んでいく。音速を超えて向かい、瞬きよりも速く着弾するのであろうそれを薄く開いた眼で一瞥し——それから興味なさに視線を逸らし、握り潰していた彼の手を人体の構造上あり得ない方向に曲げたのち、ごみを捨てるように彼を壁に目掛けて放り投げた。

「——ッ」

何度か味わった浮遊感。速度。このままだと壁に衝突するだろう。この速度と壁の強度から算出したエネルギーは先生の五体を砕いて余りあった。衝突したら最後、恐らく即死だ。

だが、彼にはアロナが居る。彼女が展開した障壁を巧みに使い、衝撃の殆どを受け流すか相殺してなんとか生存を掴み取る。だが、殺し切れなかった衝撃は当然存在する。それは衝突した背中を中心に彼の体の中を駆け巡り、肺を思いつきり殴られたかと錯覚する衝撃と全身の痺れを齎した。

「はあ……はあ……おえ……」

壁に凭れ掛り、息を整える。視界が白飛びし、半開きになって緩んだ口からは涎と血の混合物がぽたぽたと垂れて止まらない。

「先生、しっかりして！」

「だ、い……丈夫……」

絞り出した言葉。その直後に息を吸い込み、吐いて、無理矢理呼吸のペースを整える。ブレる視界に蒼を乗せて、臨戦態勢に。

——ああ、分かっていた。それも、最初から。あの時、彼女が何と言っていたか……今でも覚えている。故にこの未来は避けられぬ運命。予定調和の如く帰結。だけでも縊るしかなかった。都合の良い未来というものに。アリスもあの子も眼を覚まして、仲直りをして、何もかも元踊り。そんな素晴らしい未来予想図。砂糖菓子よりも甘い妄想。現実ではない何か。

甘い考えは捨てたはずであったのにこんな為体ていたらくを晒すなんて。だから己は詰めが甘いのだ、と内心で罵倒。

口の縁から零れた粘度の高い血液を白の袖で乱暴に拭う。引き延ばされた血はまるで口紅のように彼の唇を彩り、白に重ねられた赤は死闘の到来を突きつける。

彼は口内に仕込んでいた鎮痛剤のカプセルを噛み砕き嚙下して痛覚を鈍らせ、壁を背にしながら立ち上がった。

「……ごめん、しくじった」

「そんな事より先生、手……ッ」

「大丈夫、千切れてない。繋がってる」

ぷらん、と己の意志に関係なく垂れ下がる腕。骨折だけならまだマシであるが、骨と一緒に周辺の神経と肉も纏めて握り潰された。恐らく完全な再生は不可能。最悪の場合、肘から先を切断しなければならぬだろう。何方にせよ左腕は以前のように動かせなくなる。利き腕ではないとはいえ、それでも片腕を満足に動かせなくなるのは痛手だ。この先のスケジュールも修正しなければならぬだろう。

だが——たかが腕一本だ。無くなった所で死にはしない。

「先生、無事!？」

「生きてるよ。それより……」

「……ええ。全員、構えて頂戴。来るわよ」

とても残酷な話だ。助けに来たはずの友達に銃を向けなければならぬなんて。こんな事をしたくなくて此処まで来たはずなのに、現

実というものはいつだって反吐が出るような醜さを見せつけてくる。「アリスッ！ 私達の事が分からないのッ!？」

先生を除いて最もアリスの近くに居たモモイは立っていた場所も相まって、リオと同様にあの状況を正しく俯瞰できていた。彼女は見た。正確に。彼の腕がアリスにより壊される瞬間を、まざまざと。

もう分からなかった。今日の前に居るのがアリスなのか。否、確実にアリスではない。アリスは先生を傷つけたりはしない。となると、アレは誰だ？

「リオ会長、本当に何もやってないんだよね!？」

「そこは本当よ。誓って嘘は吐いていないわ」

「だったら何で……ッ!？」

焦燥感と不安と。様々な感情が混ざり合った声音は目の前で起きた不条理を前にして中断された。

「なに、あれ……」

眼を見開き驚愕を浮かべる少女の前方、空間が揺らぐ。まるで水面の波紋のように。空間という概念に何か干渉している。その干渉は時間経過で強まり、何かか軋むような嫌な音が鳴り響いて——空間に罅割れが起こった後、宇宙色の穴が開いた。

開いた孔は人間大。だが、唯の孔ではない。あの空洞からは人体に致命的な害を与えるほどの莫大な神秘が溢れている。その総量は神秘の嵐と形容された完全顕現のビナーには遥かに劣るが、それでも——ミレニウム最強であるネルの数倍以上。人間が浴びていい代物ではない。現に神秘に耐性が無い彼は障壁を施さなければこの環境下で呼吸すら儘ならず、ゲーム開発部の少女達やリオも息苦しさを覚えていく。

先生は蒼を凝らして眼前の不可解な現象を見つめる。解析の必要は無い。アレは見たことがある既知の現象だ。尤も、こんな所で見られるとは思っていなかったが。

——アレは特異点。神秘を媒介にして異空間と繋げている。意図的にこの現象を起こすには最低でも学園最強クラスの神秘が無ければならないのだが……まだ発展途上のアリスにその規模の神秘

はない。

しかし、彼女は特別だ。『今』は無くても可能であろう。だが、先生の直感彼女の手によるものではないと叫んでいる。

では、彼女が繋げた訳ではないと考えると……異空間が接続要求を出したのか。全く別の箇所から神秘を引っ張って来たのか。それとも……それらの制約を無視できる何かしらがあるのか。

いずれにせよ非常に厄介だ。あの空間の亀裂は閉じる方法が非常に限定的。一番手っ取り早いのは神秘切れを待つことだが、アリスが神秘を使用していないと仮定するとその手は通用しない。外部から供給されている場合はその供給元を断れば良いが、それを今から探すのは現実的ではないだろう。

残る2つのパターンに分類される場合、この特異点を閉じる事はほぼ不可能だ。同じ空間干渉という手段を使用しない限りは。そして、それが可能な手札は生憎と大人のカード以外持ち合わせていない。これを閉じるためにカードを使うとなると最低でも2回の行使になる。異空間を閉じるための1回とその後……無名の司祭との殺し合いで1回。

唯でさえデメリットが重く、デメリットそのものも予想できない大人のカードの連続使用。あまりにもギャンブルが過ぎる。

「二応、別の方法はあるけど……」

冷や汗を浮かべながら打開策を探す彼の云う通り別の手段はある。だが、それは真正銘の最終手段。最終手段を前提として立てる作戦は破綻しているし、此処で気軽に使えるようなものでもない。何せ、使った後の末路は——自分が一番よく分かっている。

さて、どうするか——そう思った刹那、彼と生徒の接続が途絶えた。瞳の蒼も右を残して消え失せ、莫大な疲労感と倦怠感が押し掛かる。コマ落ちしたように視界が不連続になり、水中のように景色が揺らめいた。

「ハア、ハア、ハ、ア……ッ！」

ゲマトリアにされたような演算の介入——ではない。

接続経路が変更された訳でもなく、生徒側から拒否をされた訳でも

ない。今も尚、アロナの演算は正しく機能している

であれば、解はただ一つ。

「クソッ、もう持たないのか……ッ！」

単純に、彼の体が限界を迎えただけだった。精神が底を突ききる前に肉体の方が悲鳴を上げ、これ以上は自壊する未来しかないと生存本能から来るセーフティが作動したのだ。

「しつかりしろ、私……此処で無様を晒すために来た訳じゃないだろ……」

言つて、再び彼は蒼を齎さんとするが努力は無意味に空回り。僅かに染まるだけで、持続も数秒以下と心許ないどころの話ではない。戦闘用の技術のほずなのに戦闘にすら使えなくなってしまう。どれもこれも、先生が弱いせいだ。

彼は舌打ちを一つして思考を切り替える。使えないものを使おうとしても仕方がない、時間の無駄だ。なら、別の方法を考えろ。量子波送受信機構は強力であり、先生が切れるカードの中でもとりわけ使い勝手が良いものであるが、失ったからといって敗北するものではない。精度は落ちるが、代替手段はある。

ぼたぼたと鼻血と冷や汗を垂らしている彼を脅威から庇う様に立つリオは内心で焦りを覚えた。思った以上に彼が限界だ。これ以上、彼に戦闘行動を強いる事は出来ない。

そして、この場に居るのは連戦して消耗したゲーム開発部の生徒3名と荒事には向いていないリオ、護身用ドローンが幾つか。アンノウンを相手取るには少々心配と言わざるを得ないだろう。

——撤退を視野に。今は先生の安全確保を最優先に時間稼ぎに徹する。その後はエリドゥ内部のドローンと戦力を掻き集めて応戦する。

「あれは……ッ」

今まで変化の無かった空洞から零れ落ちたのは何度も見た機体。無機質で、機械的で。ただ只管に殺傷能力を高めた殺戮の機能美。何の力も無い人間を効率的に虐殺するために生み出された人形。無名の守護者。トラウマが想起されたミドリは短く悲鳴を上げた。

勿論、1体だけではない。今いるだけでぎつと20体以上。しかも現在進行形で増え続けている。まるで際限なんて無いかのようだ。

——無から有は生み出せない。恐らくあの空間の孔はポータル。大方、無名の守護者の生産工場か待機場と繋がっているのだろう。生産スピードを撃破スピードが上回れば個体を枯らす事が可能だろうが、現実的ではない。やはり撤退しかないだろう。

「よく聞きなさい。エレベーターホールを抜けた先に裏口直通の非常階段があるわ。ドアの施錠は解除してある。外に出たら先生の護衛に一人、残る二人は残存戦力を掻き集めて」

前方に展開していた3名を彼の傍まで寄せ、リオは手持ちのハンドガンとAMASをコール。入口の隔壁をワンコマンドで下せるように準備し、たった一人で防衛戦を開始しようとする。

「それまでの時間は私が稼ぐわ」

「ッ！でも、リオ会長は……」

「四の五の言わないで。今ここで手を打たないと全滅するわ」

それはリオに言われなくとも分かっていた事だった。遅かれ早かれこのままでは全滅する。今の戦力である軍勢を相手にする事なんてできない。どう考えてもじわじわと追いつめられて罅り殺しにされるのが関の山だ。だから、少しでも確率が高い方を。リオが足止めをしている間に全戦力……最低でもC&C3名を掻き集めて打つて出れるようにする。逃げるための撤退と防衛ではなく、勝つための布石。

ああ、分かっている。だけど——そう、だけど。そんな犠牲を認められる訳が無かった。そんな犠牲を否定したくてここまで来たのだ。今ここでリオを見棄てる選択を取れば過去の自分達を裏切る事になる。あの願いに嘘は吐けない。

3人は顔を見合わせてから頷き、無言でリオの隣に立つ。銃を構え、眼は逸らさず。息を吸って吐いて、意識を戦闘に切り替える。

「……非合理的ね」

「いや、合理的だよ！だってゲームの主人公なら絶対見棄てないからね！」

「お姉ちゃんの言う通りです。一人だけ置いてきぼりにする為に、私達は此処に来た訳じゃないですから」

「うん……それに、こんな所で逃げたらアリスちゃんに胸を張れません……！」

解答になっっているような、なっていないような。何とも言えない解を受け取ったり才は眼を白黒させて、それから溜息交じえて微笑を浮かべる。友人独り助けるためにエリドゥに真正面から喧嘩を売った彼女達らしい。合理性を彼方に投げ捨てたその向こう見ずさが今は頼もしかった。

「——ふう……」

息を吐く音と共に、カシユ、と背後で何かの空気が抜ける音がした。振り返ると首筋に針無しの注射器を突き刺している彼が立っていて、血濡れの体を引きずるように前を向く。

床に転がる空の注射器の中に入っていたのはアドレナリンの分泌を促す効果を持つ化合物。掌から零れ落ちた注射器には目もくれず、彼はタブレットを構えた。

「無茶よ先生。そんな体で……」

「無茶は今に始まった事じゃないさ。それに皆が頑張ってるんだ、私もやれるよ」

案じる声に『大丈夫だ』と言って心配する権利すらも奪う。いつだって彼は一人で戦場の痛みにもたうち回る。誰にも悟らせずに。最期も一人ぼっち。

やはり何も変わっていないのですね、貴方は——忌々しい程に。

あの声に生かされた。

あの温度に救われた。

伸ばされた手に輝かしい未来を見た。

だから今度は——私が貴方を救^{殺す}う。

「まだ、生きていたのですね……先生」

アリスの空色と対を成す茜色の双眸が、先生を射貫いた。

亡き王女のためのパヴァーヌ Ⅱ

アリスと同じ声で先生を呼んだ彼女。アリスと異なる声音で先生を呼んだ彼女。赤い瞳はリオもモモイもミドリもユズも一切見えず、視界にすら入れていない。彼女は先生だけを見ている。

その眼に灯る温度は殺意と憐憫、憎悪、愛。彼の境遇を心の底から憐れんでいる。彼の事を心の底から憎んでいる。故に愛を以て救済しようと殺意を研ぎ澄ませる。破綻している様にも見えるが実に論理的。

彼女は善意で彼を殺そうとしている。それは彼の先を知ってしまっているから。この先へ彼が進んでも何も良い事なんて無くて、唯只管に人生を消費されるしかなくて。信じたものに裏切られ続け、大切なものを失い続け、最期は己の意志で断頭台^{運命}の露と消えるしかない。そんな末路に彼を至らせるくらいならどれほど罪悪に苛まれようとも自分の手で殺す。救世主の死ではない。先生に人間らしい最期を送ろう。それが、せめてもの恩返しだと信じている。

その決意は何度ほうき星が巡っても変わらない。「殺し損ねてしまいました。不要な苦しみを与えてしまった事を謝罪させてください」

枷を紙層のように引き千切った彼女は全身に取りつけられたケイブルをそのままに立ち上がる。軽く手を握ったり、開いたり。足首を解したりと人間らしい所作をしながらも声音は非常に機械的。目覚めたばかりのアリスよりも人間らしい情緒が無かった。それは彼女に育てるような人間性が機能的に与えられず欠如しているのか……或いは意図的に機械らしく振る舞っているのか。

リオには後者に見えた。彼女は意図的に機械を演出して、自身の内側に燻る感情を押し殺している。声は誤魔化せても眼は嘘を吐けない。目は口程に物を言う、とはその通りで彼女の眼は痛いほどに感情的だ。

「……ケイ」

そして、彼の声も。言葉自体が莫大な質量を持っているのではない

かと錯覚するほどに重苦しい声。茫然としているように見えて、その実薄々分かっていったかのような表情を一瞬だけ浮べた彼は眼を固く瞑り緩く首を振った。唇をきゅつと結び、零れそうな言葉を必死に堪えた彼は、声の代わりに息を吐く。それだけで気持ちの切り替えを行う。だがそれは満足に行えず、未だに思考の片隅に彼女に対する疑念が渦巻いていた。まるで未練のように。

——ああ、分かっていった。分かっていたんだよ。薄く開かれた宝石のような赤い眼を見た時から。いや、もつと前。ミレニアムの部屋棟が破壊された事件……この世界で初めて彼女の意識が表層に出たその時から。彼女は明確な意志を持って私を殺そうとしている。何かに請われたからとか、そうするしかないからとか。そういった選択肢を狭める要因なんて無くて、彼女は極めて正常に機能している心と脳で以て私の殺害という解を導き出した。

彼女に一切恨まれてないと言い切れるほど自身は清廉潔白な人生を送っていない。寧ろその逆、殺される理由はそれなりに思いつく。アリスを大切に想う彼女からしてみれば先生は敵だろう。それも、在り方を捻じ曲げた不？戴天の仇。殺されても文句は言えない、言うつもりもない。

けれど——そう思った彼は悲しそうに眼を伏せ、開眼する。視線の先には茜空の彼女。アリスと表裏一体である少女。

彼女の眼にあるのは殺意だけではなかった。その隣に憐れみや憎悪がある事を先生は正確に見抜いている。だが、それらの感情が何に起因するかは彼には分からなかった。いや、憎悪なら分かる。しかし、憐れみだけは本当に分からなかった。彼女に憐憫されるだけの何かなんて持ち合わせていない。

「ケイ……ッ！」

得体の知れない焦燥感に駆られた彼は叫ぶ。彼女の名前を。元はモモイの言い間違い。だが、彼女はその名前を大事にした。王女のための鍵ではない、この世界に存在する掛け替えのない命の1つである事を証明する……彼女だけの名前をもう一度発すると彼女は柔らかな表情を浮かべて。

「その名前で呼んでくれるんですね。でしたら尚の事……これ以上、生かしておくわけにはいきません」

だが、それも一瞬。彼女は直ぐに固い決意を持った表情を浮かべ、細い手を指揮棒のように動かす。まるでそれは運命の糸を手繰り寄せるよう。彼女の動きに連動し追従者もその刃と銃を構えた。撒き散らされる殺意の方向は先生に集中する。肌突き刺さる鋭さは錯覚と言いつるにはあまりにもリアルで、先生は眼を細めた。

「ケイ、何故……」

「何故？ それは貴方が一番よく分かっているでしょう、先生」

そうだ、当事者である先生が分からないなんて言わせない。今彼に向けられている殺意も、あの時彼に向いていた殺意も、何もかも。そこに込められた願いはただ一つ。

「貴方を殺しにきました。これ以上貴方の生を侮辱させないために」

刹那、銀刃が閃く。数日前に彼の首を切り裂いた時と同じ……否、それよりも更に鋭く速い一撃。モモイも、ミドリも、リオも。この場で最も動体視力に優れているユズでさえ初動を認識する事ができなかった。

彼女達を感じたのは何かが通り過ぎたような感覚と、それが取り返しをつかない失態であるという実感だけ。

あの一撃を見送ってしまった時点で負けだった。アレの切れ味は良く知っている。ヘイローを持つ少女達であつても刃が通るのだ。そんなものが彼に振るわれればどうなるかなんて、あの日の彼自身が身を以て証明している。最悪、首と胴体が泣き別れるかもしれないだ。

だが、その少女達の想定は甲高い音と共に覆される。

「……防御は健在ですか」

「……まあね。私も色々と不測の事態に対応できるように微調整をしてたんだ」

苦笑いを浮かべる彼の首筋、あと少しでも刃が前に進めば薄皮が切れるであろう場所で刃は静止していた。挟まる青白い障壁に阻まれている刃は火花と不協和音を撒き散らし、彼の首を切り落とさんと出力

を上げるがアロナの防御はその程度で破れない。

罫が明かれないと思つたのかワイヤーを巻き取る要領で触手を縮ませ、質量を活かした体当りに加えてレーザーを用いてシールドに負荷を掛けようと迫り来る。しかし、幾ら雑兵が工夫を凝らそうと破れないものは破れない。体当たりもレーザーも、考え得る全ての攻撃を受け止めた障壁の内側で彼は手を伸ばし機械に触れる。

すると突然糸が切れたように全ての触手が力なく地面に垂れ下がる。内部のプログラムを破壊されたのだ。彼の手で触れられた、ただそれだけで。

「重っ……」

びっくりとも動かなくなつた機械を両手で持ち、邪魔にならない場所まで移動させた彼は腰を心配そうに見ながら息を吐く。

「その年齢で腰の心配ですか？」

「私は皆みたい体に頑丈じゃないし、若くないからね。あの重さでも気を付けないといけないんだよ……割と本気で」

妙に緊張感が無い会話。既知の仲かと錯覚させる発言達はもう一度眼を鋭くした彼女によって薙ぎ払われた。再び走る戦場特有の張り詰めた空気。硝煙が香る。鉄が香る。少女達は思わず息を呑んだ。戦場のイニシアティブは間違いなく彼女にある。

「……それで、私に大人しく殺されてくれますか？」

「それが君の本当の望みなら、私は否定しない。私を殺して救われる心があるのなら喜んでこの命を差し出すよ」

彼は「でも」と言つて。

「それが私や君以外の誰かのためなら、どうか思い留まつてほしい」
自分の死で彼女が救われるなら構わない。だが、自分の死で救われる人物が彼女以外である事だけは駄目だ。手を汚した彼女が救われない未来だけは否定しなければならぬ。だって、そんなのは余りにも惨すぎる。

だから、どうか——そう考えた彼の眼に映つたのは、憐憫の色を強めた彼女だった。

「そういう所が不愉快なのですよ、先生。貴方は自身を勘定に入れて

いない。貴方の言う皆に貴方の姿が無い。命は尊くて大切だと説いておきながら、貴方は貴方自身の命に価値を感じていない」

「……」

「教えてください、先生。貴方の事を誰が救ってくれるのですか？」

その問いに先生は答えられなかった。自己救済なんて持ち合わせていない。自己愛も持ち合わせていない。一番嫌いなのは自分であるし、許していないのも自分だ。最初から救われたいなんて思っていない。幸せになりたいとも思っていない。愛されたいとも、認められたいとも思っていない。

己に許されている唯一は生徒の為に生きて生徒の為に死ぬこと。その為の人生だった。それだけが望みだった。その為に全てを捧げてきた。

名前は捨てた。

誕生日も忘れた。

家族の事も覚えていない。

友人や恋人は居たのかどうかすら定かでない。

自分自身の事なんて心底どうでもいい。生徒達だけが彼の全てだった。

「やはりそうなのです、貴方は何も変わっていない。自己救済も自己愛も持たない生命なんて、その時点で破綻しています。このまま生きていても貴方は失い続け、擦り減るばかりです。生きる喜びを貴方は根本的に持つことができない」

「でも、私にはまだやるべき事がある。それを自分が救われないからなんて弱音で投げ出す事はできない」

先生の目的は生徒達に明日を生きてもらおう事であり、神秘の■■。別に生徒達と生きていたい訳ではない。勿論、共に過ごせるのであればそれに勝る幸福は無いと断言できるが……作り上げた景色に自分の居場所が無くても構わなかった。誰もが幸福を享受できるのであれば、その裏側で己が虚無になったとしても彼は満足して息を止める。

自己救済は持っていない。だって、彼はそもそも最初から『救われ

たい』だなんて思っていないから。罪に生きて罰に死ぬと決めているから人並の幸福なんて等の昔に投げ出している。

自己愛は持っていない。だって、彼はそもそも最初から自分を大切に想っていないから。この体は入れ物で、心は入れ物を満たす透明な液体。皆と同じように死ねない化け物の事をどうやれば愛せるというのだ。

「それが歪だと云うのです。託された貴方は貴方自身の意志で折れる事はできない。やはり貴方は此処で死ぬべきです。その生に終止符と安らぎを」

願いはただ一つ。貴方に死の安息と安らぎを。生きることが激痛であるならば死を送る。殺して救ってみせよう。

彼の生涯は確かに救えるものがあつた。だが、救われた者以上に彼が傷ついていた。手を差し伸べて、痛みを背負って、血を吐きながらそれでも前へ。安心を抱ける誰かもおらず、胸に巢食う絶望的な孤独感を抱えて生きる彼は傍から見ただけでも悍ましい。こんな生が人間の生であるものか。

だから殺す。人間らしい生が駄目なら、せめて人間らしい死を。彼の死は確かに悲しいものだ。自ら望んで彼を殺すものか。でも、そうするしかないなら、そうする。それで彼が救われるなら喜んで。

彼に救われた。彼に愛された。その温度は幾度の世界を超えても未だこの胸に残っている。ありがとう、この感謝の念は嘘偽りない。王女の付属品でなく一個の生命として見做してくれた時に抱いた戸惑いと喜びは一生涯で片時も忘れない宝物の感情。

だから、今度は私が貴方を救う。それが……貴方に救われた私ができる唯一の恩返し。

「先生、王女の鍵である私が……貴方に救われた私が——貴方のための救世主になります」

その一言と共にヘイローの浸食が開始される。青色だった天使の光輪は徐々に色を変え、目の前に居る彼女の瞳の色と同色となる。それに伴い服装が再構築。ミレニアムの制服は粒子となり黒のドレスへと変貌した。

その姿はまるで闇の花嫁。彼女は彼の命を手折らんと細く華奢な指先を伸ばした。



ヘイローの変色と服の変貌。アリスではない少女の誕生は戦場に大きな変化を齎した。

先生は信じられないものを見るような眼でケイと呼んだ少女を見つめる。彼女の正体は既に知っている。その目的も粗方話してもらった。だが、その上で『何故』という疑念が全てを上書きする。彼女がそこまでする理由も、彼が抱えているものを知っている理由も……何もかもが分からなくて。唯一つ言えるのは、彼女が本心から彼を案じている事だけ。それは嬉しくもあつたけれど同時に悲しくもあつた。

リオはこの状況を冷静に分析する。間違いなく最悪の事態だ。アリスの人格が深層部に追いやられ、終焉のトリガーを引く存在の人格データが表層部に露出している。しかも、その人格は恐らくアリスよりもアリスの体を上手く使える。それはあの特異点一つとってもそうであるし……全身から放出される神秘が証明している。神秘の量自体はアリスと変わらないが、問題なのはその濃度。圧倒的に濃いのだ。出力する肉体は同じである筈なのに人格ソフトウェアが変わるとここまでするものなのか、とリオは焦る。

それに、先生とあの人格の会話も気がかりだ。ほぼ初対面である筈なのに互いの事を知っているかのような口振り。世界終焉の引き金をたった一人の為に引こうとしている彼女は果たして自分が危惧した滅びなのか。いや、それよりも——彼は一体何を抱えているのだ。

そして、ゲーム開発部の3人。彼女達はまだ状況を呑み込めていなかった。先生とアリスの会話は内容がいまいち掴み辛かったし、リオが何を焦っているのかも分かっていない。今、目の前に居る黒と赤で彩られたアリスがアリスなのかも分からず、彼が何故痛みを堪えるよ

うな表情を浮かべているのかも不明で。でも、唯一つ言えることは……この状況が非常に良くないという事だけ。それは先生とリオの纏う緊迫した雰囲気証明している。

「……」

銀に張り詰めた空気。手汗が滲むほどに痛い緊張は一步でも動く均衡が崩れることの証左。僅かな挙動が命取りになる。

さて、どうするか——そう思った先生の耳に1つの通信が届いた。

『先生！』

「……チヒロ」

先生は穏やかだが、どこか固さがある声音で彼女の名前を呼ぶ。今になって届いた通信、とても珍しい彼女の荒げた声。この2つだけでも良い知らせではないという事はよく分かる。それに加えてこの状況……アリスの人格が深層に沈み別人格が表に出てきている今、知らせの内容なんて大方見当がついていた。

『エリドゥ各地で空間振動が確認されてる！ 震源は先生の居る場所、中央タワー最上階！ 今そっちで何が——』

「外部との通信は遮断しました」

チヒロの通信はまるでケーブルが切れたかのような唐突さで以て切断。勿論、チヒロの通信だけではない。今このエリドゥ中央タワーはほぼ全ての通信が遮断された。外部から内部にアクセスすることは不可能で、逆もまた然り。空白地帯ではなく暗黒地帯。あらゆるネットワークが目の前に居る少女の指先一つで沈黙させられた。規格外の処理能力はアリスの体の限界値が過剰なほどに高いことの証明。電子戦もお手の物だ。

「では、ついでに」

■ ■ ■
アリスは徐に手を翳す。瞬間、正常に世界を映していた大型メインモニターが黒くなり……そして、再度輝く。だが、それはもう正常に世界を映していない。眼が痛くなるような茜色一緒に染まった背景と、白抜きされた文字。その文字列はリオにとっても、先生にとっても大きな意味を持つ。

あの文字が表すものは今日の前に居る少女が統括するシステムの総称。少女の傍で刃を鳴らしている無名の守護者も含めた、文字通り『全て』の名称であった。それがメインモニター……否、この部屋にある全てのモニターに映ったという事は、つまり。

「エリドゥのシステム全体がハッキング……いえ、違う。これはそんな単純な話じゃない」

リオは眼を見開き、驚愕で彩られた表情を浮かべ手元のタブレットでエリドゥ全体のシステムを見る。あれほど強固だったプロテクトを素通りするかのようになり抜けて、アリスはこの要塞都市を掌握しようとしていた。

だが、この話はそこで止まりではない。仮にハッキングされて主導権を奪われるだけならまだ手を打てる。遅れを取ってしまったが電子戦はリオの土俵。仮に彼女だけでは不足であっても、ヒマリや先生を動員すれば最低でも五分五分には持つて行けるという確信があった。

しかし、この掌握の本質は更に奥底にある。単純なハッキングではない。掌握しているのはアドバンテージを握りたいからではなく、必ず他に理由がある筈だ。何の根拠もない確信を抱くリオは必死に画面を見つめて感じた違和感の理由を求める。だが、探しても探しても違和感は何処にもなくて、ただただハッキングされているように見えた。

「やっぱり……！」

だが、それこそが求めていた解。眼で見えるプログラムに違和感がないならば眼で見えない部分に解があると決まっている。現在進行形でアリスが掌握しているのは要塞都市エリドゥという概念そのもの。という事は、つまり――。

「掌握した上で書き換えて、変質させている……！」

今まさに、リオが建設した要塞都市エリドゥは別の何かへ存在理由を変質させられている。それはまるで羽化であるかのように、繭を突き破り世界へ羽ばたこうとしている。この世界を真っ新にするために。新たな地平を築くために。

「アロナ、エリドゥ全体にプロテクトを」

小さく、誰にも聞こえない声の返答はタブレットの点滅。サンクトウムタワーすら数秒で全ての権限を掌握せしめた彼女の能力は先生の生命維持に半分以上のリソースを割いていたとしても、真つ向からアリスとやり合えるだけのスペックを持つ。

突然生まれ強固なプロテクトを前に少女は「……攻め辛いですね」とだけ呟き、解除に取り掛かる。その間にリオはエリドゥから可能な限りリソースを切り離し、仮に全てを掌握されたとしても致命傷にだけはならない様に奔走。

水面下で繰り広げられる極限の頭脳戦は正に一進一退。僅かな綻び、判断ミスが即座に敗北に繋がる戦場の緊迫感は今まで蚊帳の外に立たせられていた少女達をハッとさせるのに充分過ぎる空気であった。

「ぼーっとしてる場合じゃない！ 早くケーブル全部を外してアリスを……！」

「その行為は推奨しません」

——初めてアリスの声が少女達に向けられた。そして、その視線も。今まで殆ど先生しか見ていなかった茜色の眼に射貫かれた途端、一瞬少女達の呼吸が止まった。別に威圧感があった訳でも、滲むような殺意や敵意があった訳でもない。

その目も、声も、何もかも。アリスと全く同じ姿形である筈なのに、何かが根本的に違う。拭い難い違和感を少女達は改めて突き付けられた。

あの子はアリスだ。あの子はアリスじゃない。じゃあ誰なのか。そんな疑問が頭の中をぐるぐる回っている間に、アリスだったはずの少女は言葉を紡ぐ。

「現在、アリスの表層人格は内部データベースの深層部に隔離されています。強制的に接続を解除すると取り返しのつかない損傷が起きるでしょう」

「アリス……一体何を……」

「違う！ お姉ちゃん、この子、アリスちゃんじゃない！」

血を吐くような声と共に疑問のループに一足早く決着をつけたミドリは咄嗟に銃を構える。彼女とて本音を言うとはアリスに銃を向けたくはない。例えそれが、アリスの体を借りているだけの何かだとしても。だが、それでも……自分の判断ミスで、判断の遅れでこれ以上大切なものを失いたくなかった。故に心を鉄にして、涙を流す心にナイフを突き立て、引き金に指を掛ける。アリスちゃんを返せと叫びながら。

そして、ミドリの切羽詰まった声に突き動かされるようにモモイとユズも躊躇いながらも銃を構えた。何時でも引き金を引ける姿勢。だが、引きたくはなかった。

「ええ。私はアリスではありません。彼も言っていたでしょう、私はKey。王女^{アリス}を助ける無名の司祭達が残した修行者であり、彼女が戴冠する玉座を継ぐ鍵^{Key}です」

自身の正体を明かす言葉を聞いても少女達の頭の中には疑問で埋め尽くされていた。まず固有名詞が多すぎる。王女、無名の司祭^{Key}、鍵^{Key}。まず王女というのは直前にアリスと言ったのち言い直していたため、恐らくアリスの事を示す。鍵^{Key}というのは目の前に居るアリスではない彼女の事。アリスとは別の人格を示しているはずだ。

無名の司祭は……正直よく分からない。彼等或いは彼女達が何者なのか、その一切の情報が無い。精々、アリスやKeyを作り、後世に残したであろうということだけ。修行者もよく分からない。何をするために、何を身に着けるために修行をするのか。無名の司祭なる存在達は彼女達に何を求めたのか。

その目的の一切が謎に包まれているが、穏やかな目的ではない事だけは確信できる。それは場の雰囲気、先生とリオの表情が証明している。

「本来ならば異なる名称は存在の目的と本質を乱すため、王女に王女以外の名前は不要ですが……まあ、あなた達なら良いでしょう」

そう言ったKeyの表情に喜びと感謝が見えたのは見間違えだろうか。少女達3人を見つめる彼女の眼差しは少しばかり優しい。

それは、初めて王女のための鍵以外の名前を定義してくれた存在達

への感謝か。それとも王女に暖かな春の記憶を齎してくれた事への感謝か。何れにせよ、Keyという少女はゲーム開発部の少女達に悪感情を抱いてはいなかった。

「何を言っているの！ アリスちゃんを返して！」

「今は拒否します。彼を殺した後でしたら構いません」

「殺すって……そんな事……ッ！」

「今の内に殺しておかなければならないのです。このまま放置すれば彼はいずれ自殺すらできなくなってしまうです」

それが最大限の慈悲。この先、死よりも辛く重く苦しい人生しか待ち受けていないならば今の内に死んでおくのが幸福だ。そうすれば少なくとも今より幸福になる事も、不幸になる事も無いから。

だからせめて苦しまずに逝かせてあげたい。受難の道から解き放つてあげたい。それが自身ケイと自身アリスの最愛を救ってくれた人であれば、猶更。

「妨害の対処を優先し、攻撃を最小限に。リソースの保守を最優先します」

固く、強い決意を持って彼女は最後の準備に取り掛かる。初動でエリドゥのリソースは使用分確保した。もう繭は完成しているのだ。であれば残るやるべき事は羽化、ただそれだけ。

「只今よりエラーを修正し、本来あるべき玉座に王女を導かせていただきます」

少女は手を翳す。それに伴い各所の存在理由が変質し、玉座へ至るための道へ再構築される。

「AL—1Sに接続された利用可能リソースを確保するため全体検索を実行……リソース領域の拡大」

ケーブルを通し、ネットワークを通し、己が掌握できる全てをその手に落とす。世界の真実と嘘と、甘さと苦さ。いつか夢見た景色に至れないけれど。あの日のように、皆で歩む事なんて出来ないけれど。それでも、何時までも色褪せない思い出として貴方を連れて行く。

「リソース名、要塞都市エリドゥ。約50%のリソースを確保……10万エクサバイトのデータを確認」

莫大なデータ量は全て、神の先へ至るため。人の叡智から生まれた彼女は、その叡智で以て死という慈悲をたった一人に捧げる。

「——現時刻を以て、プロトコルATRAHASIS稼働」

それは、世界を滅ぼすための意志。既存文明を全て薙ぎ払うための絶滅。

或いは——たった一人の大切な彼を殺すために世界を滅亡に至らしめる終焉。

キヴオトスに於ける旧き最新の『滅び』が遂に眼を覚ました。

「コードネーム、『アトラ・ハシースの箱舟』起動プロセスを開始します」

世界滅亡へのカウントダウンが開始される。

「プロセスサポートのため追従者を呼び出します」

エリドウ各地、彼女が掌握したと思われる場所で幾多の空間振動が観測される。現実には空いた虚無の孔から零れ落ちたのは球体状の機械兵。無名の守護者、或いは追従者と呼ばれるモノ。秒単位で膨れ上がる敵性反応はエリドウのシステムを蹂躪しながら何処かに向かつて進軍する。

その光景は正に——リオが見た『終焉』の第一段階であった。

「アトラ・ハシースに追従者……まさか、そんな……」

「リオ会長！ これどうなってるの!? なんか、これ、怖い……ッ！」
「私はキヴオトスに終焉が齎されることを懸念してこの要塞都市エリドウを建設した。私が動員できるミレニアム全ての技術と力、資源とエネルギーを集めたのに……けれど……寧ろ、その所為で……この都市が終焉の発端に……」

リオはその流麗な黒髪を振り乱し、頭を抱えて一際感情的に叫ぶ。
「違う……私は、こんな事がしなかったんじゃない……!」

「貴方にも同情します、調月リオ。もしあなたが世界を見れなければ、ミレニアムの生徒会長でなければ……こうなる事はなかったのかも
しれないのですから」

Keyの声音には確かに同情と憐れみが籠っていて、その言葉に一切の虚偽が含まれていない事がよく分かる。彼女もリオには色々

思う所があるのだろう。僅かに眼を伏せ……そして、開眼する。
開いた眼に一切の迷いはない。

「――王女は鍵を手に入れ、箱舟の用意は整う」
その声音はまるで唄うように。

「無名の司祭の要請……いえ、鍵たる私の意志により、この地に新しい
聖域サントウムを建設する」

誰かの意志ではなく、少女の意志で。

「その到来で初めて、全ての神秘はアーカイブ化される」

世界先生を殺す剣救うをその手に握る。

「果て無き戦いの螺旋から貴方を解放します、先生」

貴方に安らぎを。望んだことは、ただそれだけ。そのためにKey
は彼の為だけの救世主となる。

「プロトコルLONGINUS、励起」

少女達に初めから備わっていた機能ではなく彼のためだけに構築
した機能、嘗て救世主を貫いた運命が再び動き出す。

「コードネーム、『ゴルゴダの磔刑』起動プロセスを開始します」

その名が示すものは救世主の終わり。復活なんてさせない。この
手で誰もが見棄て消費した彼を手折ってみせる。それがどれほど罪
深くとも。

「ええ、貴方風に言い換えましょうか」

Keyはアリスにそっくりな、だが大人びた微笑を浮べて。

「――神秘、装填」

亡き王女のためのパヴァーヌ III

「——神秘、装填」

自身の最奥にアクセスするための起動詠唱^{ランゲージ}。それを目の前で唱えられた先生は眼を見開いて驚愕を浮べていた。あり得ない、と言わんばかりに。

それは彼女が最奥にアクセスできたこと——ではない。彼女はそもそも色々と特別だ。間違いなくキヴオトスに於ける唯一無二。まだ発展途中のため未熟で荒削りの部分はあれど、そのポテンシャルはキヴオトスにおける生徒の最上位に匹敵する。このまま順当に成長を重ねれば確実にネルやツルギ、ヒナ、ホシノ、ミカといった頂点の座に名を連ねる事ができるだろう。

だから彼女が最奥にアクセスした事に関しては驚きこそあれど疑問は無い。ある意味、到達点の前借りだ。アトラ・ハシース……並行世界を認識できる彼女であれば、どこかの時間軸で『そういう未来』があると認識可能なら多少の時間のずれを無視して結果を引っ張って来れる。

故に問題なのはアクセスそのものではなく、アクセスした方法。それこそが彼女が『あり得ない』と思つた理由であつた。

ビナーは既に内部に己が最奥に至るための経路^{パス}と、その経路を駆け昇るために必要な神秘を十分な量保有していた。故に神秘、証明。己が神足えることを示し、神の権能を振るうのだ。

彼は神秘を持たぬが故に外部から起爆剤となる神秘を持ち込む必要があつた。それをアロナと共に礼装に籠め経路を演算で算出、礼装自体に最奥へ至る道を組み込む。

そして、組み込んだ神秘を何倍にも増幅、圧縮させることにより目の前の悪意を穿つ一撃を作り出す。故に、神秘、装填。まるで銃に弾丸を込めるように、礼装に神秘を込めるのだ。

礼装を扱う先生には資格がないため、裏技じみた方法で礼装自体を最奥へ至らせる。最も特殊なアクセスパターン。

だから在り得ない。神秘を持つKeyが態々外部から装填する必要が無いのだ。

ビナーは経路パスも、神秘も保有している。そのため、最後の一押しだけで最奥にアクセスできた。

先生は経路パスも神秘も持っていない。故に神秘を外部から持ち込み、経路を演算しなければ礼装の最奥を振るう事ができない。

彼女は経路パスを持っていないが、神秘は保有している。故に経路さえ組めてしまえば、後はビナーと同じ要領でアクセス可能だ。

「
」
そんな彼女が態々自己の内部ではなく、外部で最奥に至らせる意味がない。外部から引つ張ってきた神秘も取り込んで自身に馴染ませてしまえば己の神秘と同様に扱う事が可能であるし、現在進行形で彼女はそれをやっている様にも見える。

だから彼女は敢えて外部を使用したと考える事が妥当であるが……態々外部を使用する意味も理由も見当たらない。

単純に費用対効果が最悪なのだ。先生はそれしかないからその手段を使っているが、他の方法があるなら喜んで飛びつくほどには悪い。強力であるのは紛れもない事実であるが、それを差し引いても要改善の部分は多数。オーパーツのアロナと規格外の情報処理能力を持つ先生が組んでやっと真面目な運用ができる兵器なんて世間一般の兵器からは逸脱しているだろう。

その逸脱した兵器、神殺しの真実の内の一つ——この世界で先生とホシノがビナーに振るい、致命打を与えた杭打ち機パイルバンカー……天 命のレプリカをKeyは顕現させた。

恐らく機能の幾つかはオミットされている。具体的には対象の観測機能とそれを元にした最適解殺害手段の構築、組み込み。言ってしまうえば、今彼女が握るあれはただ強力な『神殺し』の神秘を纏うだけの武装だ。

しかし、だからといって油断できる要素は皆無。元の性能が高すぎるため、幾つか簡略化したとしても脅威である事には変わらない。寧ろ取り回しが良くなり、個人に向ける分には強化されているとも言える。

殺意の塊のような武装を手で弄ぶKeyは微笑を浮かべて。

「何故、という顔ですね。貴方の技でしょう？　これは」

「……そうだね。それは私の罪^業だ。何も持たない私がキヴオトスに巣食う悪を殺すために完成させた——神殺しの真実」

設計図と基礎理論はエンジニア部、ヴェリタス、特異現象捜査部、リオが。その他の部分……具体的には神秘や最奥に関する高次元の概念が絡むものは先生が担当し、完成させた武装群の1つ。対セフィラ、対神格、対尊き者に特化した礼装……その偽典。それを片手で持ち上げた彼女は馬鹿げた口径を先生に向ける。

「貴方を完膚なきまでに殺すにはこれが必要と結論づけました。復活の器として貴方の体を残すつもりはありません。貴方の裏側にある不愉快な繋がりとごと、この場で破壊します」

言うや否や、暴力的な神秘が吹き荒れる。構築された術式自体は比較的単純。だが、先生という矮小な人間を1人殺すには過剰だ。だが、それでもこんなものを用意したのはそうしなければならぬ事情があるから。

例えば……ただ殺すだけでは彼の肉体に埋め込まれた縁を辿られて最悪の結末になってしまうから。

彼を殺すならば最低でも肉体は消しておかなければならない。火葬も駄目だ、残った骨も聖遺物になる。

概念の絡まない方法で彼を殺すならば、文字通り跡形もなく、細胞の一片すら残さないという気概で挑まなければならない。

Keyは肉体の完全消滅に加えて概念的にも手を打つつもりであった。『不愉快な繋がりと彼女が称した何かも消し飛ばす。そうすれば彼は彼自身が唾棄した無価値な結末を迎えずに済むと信じて。』……

先生は何処にも向ける事ができない、形容しがたい感情を飲み干してケイの眼を真っ直ぐと見る。彼女は本心から彼を案じていて、せめてもの慈悲で茨の道を選んでいる事が眼に見えて分かって。

ああ、ケイはちゃんと分かっている。彼を殺したらきつと後悔する事も。殺した瞬間、身を押し潰すような絶望と後悔と罪悪感に苛まれ

る事も。そして、それを一生背負って長い人生を歩むことも。ケイだけではない、体を同一にしているアリスも一生消えない傷跡を負ってしまう。

自分も最愛も深く傷つくことが分かり切っていながらも、それでもこの選択をした。幾度悩んだだろう。幾度悔やんだだろう。何度も無力を呪って、世界を呪って、運命を呪って。なんて残酷なのだろう。彼女は最愛と救ってくれた人を天秤に掛けざるを得なかった。

彼の全てが台無しになり無価値になっていく瞬間を見せつけられるか。それとも自身の手で彼を終わらせるか。

その二択を突きつけられて、彼女は悩み抜いた末に後者を選んだ。

ケイは差し伸べられた彼の手に光を見た。輝かしい未来を見た。胸を張って生きていいと言ってくれて、皆と変わらない人間であると言ってくれた。一個の命としてアリスや彼、ゲーム開発部の彼女達と歩んだ時間は片時も忘れた事はない。

——だから、守られてばかりだった幼年期の日々にお別れを。悲しみが伴っても、一緒に笑い合ってくれた貴方を救ってみせる。

「これが私ができる最大限の慈悲にして……唯一の恩返しです」

「——ケイ」

涙が零れそうなほど、暖かくて。

こんなにも大切に想っている事が嬉しくて。

優しい彼女にあんな顔をさせてしまっている己に対する怒りが止まなくて。

だからせめて、最期の最期くらいはあの子の願いを叶えてあげてもいいんじゃないか——そう思う自分が居ない、と言えば嘘になる。あの子は何度も悩んで、悔やんで、その度に泣いてこの結論に至った。それを踏み躪ってまで生きていたいとも思えない。

勿論、彼女の手を血で汚すつもりはない。死ぬなら誰にも見えない場所で一人で死ぬ。脊髓に埋め込まれている自決装置はその為のものだ。ニューロンまたはシッテムの箱さえ生きていれば専用の信号を出力し、即座に脳と全神経を焼き切り、その後肉体を結晶化させて碎け散らせる。肉や骨は残らず、碎け散った後の結晶も時間経過で

徐々に消失するため安全性も高い。正に自殺にはうってつけ。

でも、それは。その選択は。

「――」

自己の中で答えを固めた……否、最初から出ていた答えを改めて強固にした彼は少し肩の力を抜き穏やかに話しかけた。

「私は、皆が大事」

「知っています」

「私は、皆とは違う」

「……そうかもしれません」

皆が大切で、でも皆とは違って。その孤独はKeyにも分かる。だが、彼の疎外感是她女のものよりも強いだろう。だってアリスが居るKeyとは異なり、彼には孤独を共有できる存在が居ないのだから。

本質的に彼の隣には誰も居ない。確かに彼には触れられる。その温度や存在を五感で感じる事は可能だ。声を聴くことも話す事も充分可能で、彼の存在が非常に近いものであると錯覚しそうになるのも無理はないだろう。

しかし、心の届く距離には誰一人として足を踏み入れる事が叶わない。例外なく、全員。生徒も住民もオートマタもゲマトリアも、須く。彼の特別である連邦生徒会長やアロナであったも。

彼の理解者であるワカモヤヒナ、ミカはあくまで彼の抱えるものや信念を理解しているというだけで彼の孤独に寄り添える訳ではなく、元より彼もそれを望んでいない。彼女達は何処まで行ってもあくまでキヴォトスの生命であり、ヘイローを持つ少女。彼とは同じ種族ですらない。

別にそれを今更どうこう思ったり、自身を憐れんだりしない。こうなる事なんて■■■と契約をした時から分かり切っていたし、選んだのはあくまで自分自身。信じたもののために殉じると誓った以上、それらに後悔はない。

でも、ふとした瞬間に胸を掻き筆りたくなるような感情を抱いてしまう事があった。これはただ、それだけの話だ。

「確かに、ケイに選択を委ねれば私は今より幸福になる事も、不幸にな

る事も無い。意味のある生を歩んだ事になるんだろうね」

死ねばその人間の物語は終わる。どれほど幸福の絶頂に居ようと不幸のどん底に居ようと、ピリオドが打たれればそれでお終い。終焉の代償は停滞。死んだその瞬間、苦しみからも幸福からも見放される。

それは紛れもなく彼にとって良い事であり、最善であった。

彼はこの先、多くの出会いを経験する。多くの愛に触れる。彼が守りたいと誓った幸福の数々を見つucker事ができる。

彼はこの先、多くの別れを経験する。多くの無関心に触れる。彼が守りたいと誓った幸福の数々に彼の居場所はなく、その幸福そのものも世界の運命を前に崩れ去る。

そして、彼自身も次第に『人』を失っていく。人を嫌いになっていく。彼の人生は無意味になる。彼は何処にも行けなくなる。

確かにこの先の彼の生には幸せがあるのだろう。だが、それ以上の不幸と痛みと絶望がある。生徒の幸福のためにその全てを捧げてきた彼にそんな結末はあんまりだろう。

だから、殺してでも解放してあげたい。Keyの優しさと善意をちゃんと分かっている彼は「でも」と言って。

「それは逃げだ」

「……」

「選択する事、自身に問い続ける事から逃げて、誰かに……ましてや生徒に選択と責任を押し付ける。そんなものは先生わたしではない」

彼は強く、だが静かに。声音に悔恨と痛みを乗せて。

「ごめんね、ケイ。僕かでも救われたいなんて思った。この恵まれた生を逃げる言い訳に使った」

自己救済それは捨てた。捨てたはずだった。それなのに未練がましく『救われたい』と思っってしまった。何が鉄の決意だ、馬鹿馬鹿しい。ブレブレにも程があるろう。

その上、この生を逃げる言い訳に使ってしまった。確かに自分の人生は他人から見れば地獄のような旅路で、終わらせる事こそが慈悲であると思ってしまうような酷いものなのかもしれない。

それでも、守れたものがきつとある。救えたものがきつとある。なら、この生を言い訳にするわけにはいかない。

「楽になろうとしたんだよ、私は」

「そのの、何がいけないのですかッ」

「私は、駄目なんだ。今まで多くのものを殺してきた。多くのものを見棄ててきた。多くを踏み付けて、多くを取り零した。そんな私を私は一生肯定する事も許す事もない。でも、私がここで楽になったら、未来を諦めたら……犠牲にした全ての意味をなくしてしまう。それだけは嫌なんだ」

作り出してきた地獄に少しでも寄り添えるように。あの子に手を振って会えるように。数多の苦難が伴ったとしても、この道を生き抜いてみせる。それが先生としての自分。彼女に託された生徒達の前に立ち、誰よりも鮮烈に短い生涯を駆け抜けよう。

「私はこの命が終わろうとも足掻かなければいけない。それがどれほど辛く、苦しい道であっても……私は私達の信じたものを裏切りたくない。だから——」

彼は申し訳なきような笑みを浮べて。

「ケイの願いは叶えられない。私は、この先にある景色を皆と見たいんだ」

彼の云う皆には勿論のことながらアリスもケイも含まれている。誰かを切り捨てる事を好まない彼らしい宣言。それにもいい加減うんざりしてきた。

ああ、端から知っている。彼がこの程度で止まる訳が無い。こんなもので止まってくれるなら最初から苦労していかないのだ。そのあまりの不撓不屈っぷりは頭の螺子がダース単位で外れているのかと疑ってしまうほど。精神強度が人間から逸脱している。ことメンタルの強さは間違いなくキヴオトス最強だろう。

そんな彼の心を折る事なんて至難の業である事は、ああよく分かっている。だから、最初からこうなる事なんて初めから明らかであった。

「そうですか。では、実力行使です」

言葉と共に少女は構える。誤魔化さない露骨な殺意。空気に奔る鉄の味。死線の感覚は物理的な鋭さを伴ったかのように肌を貫いた。

『……先生』

「分かっているよ、アロナ」

先生はシツテムの箱を近くのテーブルに置き、隣のコンソールルームから引つ張ってきたケーブルに繋げる。これでリソースの陣取り合戦は多少優位に立てるだろう。

『先生の予想通りあの特異点はケイさんが繋げているものではありません。特異点側が直接ケイさんにアクセスする形で出現しています。ですが、穴を開けるための神秘はこの場にあるリソースを使用していました』

「……電気を神秘に変換しているのか」

『はい。加えて、電波塔の消費電力が上昇しています』

「成程、神秘を送信して各地にこの特異点をこじ開けているのかな」

少々厄介だね、先生は内心で独り呟く。電気を使っていると分かった以上、最も手っ取り早いのはこの都市の電源を落とす事であるが……アリスの人格の事を考えると得策と言えない。彼女の人格が深層にまで追いやられている今、電源を突然落としたりケーブルを抜くのは確実に悪手。最悪、二度と彼女の笑顔を見れなくなってしまうかもしれない。

「クラフトチェンバー、ECの準備。準備が済んだら出現させて。それからNo. 3144のプロトコルの送信。ユウカとノア、カリンを動かそう。残りのメンバーは彼女達の露払いに徹させて」

『はい！ 外周で待機している方達はどうぞされますか？』

「指定したポイント5か所に降下を。部隊分けはワカモとホシノ、アヤネ、カヨコに一任するよ」

現在取る事ができる手を全て使い切った先生は凡そ戦場に似つかわしくない笑顔を浮べて真っ直ぐケイを見る。本当に心の底から愛情を抱いていないと向ける事ができない笑みは、確かにケイの心を揺さぶった。弱く、強く。優しく、激しく。

「君の絶望も怒りも悲しみも、全て受け止めてみせる。その上で、私は

また前を向くよ」

「……本当に、貴方は」

呆れがそのまま形になったかのような声を背に、先生はゲーム開発部の少女達と視線を合わせる。一切の虚飾が含まれていない透明な色彩。眼を逸らせない不思議な魔性を持つ彼は深刻そうに、申し訳なさそうに口を開いて。

「あと少しだけ……私に力を貸してほしいんだ」

どんな無茶ぶりが無理難題が飛び出し出てくるかと身構えていた少女達は、そのあまりに拍子抜けなお願いを聞いてきよとんとして……それから挑戦的な笑みを浮べた。

そのお願いに対する答えは、当然。

「勿論だよ、先生！」

「はい！ ここまで来たんです、絶対アリスちゃんを助けます！」

「ハッピーエンドは目前ですから……ッ！」

三者三葉の言葉で戦意を新たにし、少女達は銃を握る。彼女達の願いはシンプル。アリスを取り戻したい、ただそれだけ。

彼とKeyの会話。その多くは理解できなかつたけれども、彼女が彼のためと言いながら彼を傷つけようとしている事はきちんと分かっている。

——そんな残酷なことをやらせる訳にはいかない。ましてやアリスの体でそんな惨い事をさせたくはなかつた。

誰かを心からも思っているのに傷つけあうしか道が無いなんて、そんなのは悲しすぎるだろう。

「私も手伝うわ。サポートと先生の護衛くらいならできる筈よ」

「ありがとう、リオ」

先生とリオの前に壁のように展開されるドローン達。前方に躍り出た少女達にも随伴する機体が幾つか。焼け石に水だとしてもやらないよりはマシだろう。

リオは気を引き締める。相手はリソースを得た女王、油断できるような相手ではない。一挙手一投足に最新の注意を払い、最善手を打ち続けなければ物量とアリスの高い戦闘能力で確実に磨り潰されるだ

ろう。

勝てる、とは言えない。現実的な勝率は2割を切っている。実質負け戦だ。だけど、それに挑まんとする彼の横顔が綺麗だから声も忘れてしまう。

「これは、私の戦いだ」

そう——これは先生が『先生』であるための戦い。彼の存在を、意味を、理由を、価値を問う戦いだ。

救った少女の嘆きと願い。涙を呑んだ少女は救ってくれた人のために傷だらけになりながら救済を振るう。今度は自分が救う番であると思つて。最善ではないかもしれないけれど、それでも彼が救われるならと納得して。

自身の安息を心から願う声に背を向けられるのか。

その幼気で純粋な願いを見棄てる事ができるか。

自身のために流してくれた涙を踏み越える事ができるのか。

「その命を花のように手折ってみせましょう」

「……おいで、ケイ」



「あの御方からご命令を賜りました。全員、一言一句聞き漏らさないように心して聞いてくださいまし」

シャーレが保有する軍事ヘリ。黒のボディに印字されたシャーレのロゴがよく映える機体の中には学園も所属もバラバラな少女達が一堂に会していた。

全体の指揮を任されているのは彼の懐刀たるワカモ。彼女はトレードマークの仮面越しに張り詰めた声を発する。

「現在、私達は要塞都市エリドウの最外端に位置しております。現時刻を持って待機の任務は破棄、エリドウ内部に突入します。突入後はAからEまでの部隊に分かれ、指定のポイントに降下。無名の守護者と戦闘を行います」

少女達が持つスマホにマップが映る。現在時刻とヘリの進行ル―

ト、各降下ポイントと到達予想時間。少女達は画面を注視しながらワカモに言われた通り一言一句を逃さず頭の中に叩き込む。

「先にミレニアムサイエンススクールの方々があの御方と突入しておりますが、そちらはあまり気にしないで良いそうです。ですが、ポイントEに降下する部隊はミレニアムの方々の護衛も任務に入っています。人数は2名。どうやら戦闘を行えないほど疲弊しているようですので、安全な場所に運ぶかしてくださいまし」

「……1つ質問いい？」

「なんででしょうか、鬼方カヨコさん」

「部隊の割り振りは？」

「そちらは私と小鳥遊ホシノさん、奥空アヤネさん、鬼方カヨコさんに一任されておりますわ」

——部隊の割り振りを任されるなんて、どうやら自分は随分と頭脳面で彼から信用されているようだ。彼に抱いていた信頼と信用が一方通行でない事に喜びを感じたカヨコは、彼の信頼を裏切らない為にも頭脳をフル回転させる。人数は15名、ポイントが5つのため部隊は3名ずつ。加えて各部隊に司令塔を配置しなければならぬだろう。

「……負傷者が居るポイントEには機動力と防御力が高いメンバーをアサインした方が良さそうだね。ウチからはハルカを出すよ」

「では、アビドスからはホシノ先輩を推薦します。ホシノ先輩なら防御力に関しては申し分ありません」

「うへ、大役任せちゃったな」

アヤネに推薦されたホシノは気だるげに欠伸を噛み殺しながらシールド片手に銃を担ぐ。開かれたホルスの瞳には眠気は一切見えず、真剣そのもの。文字通りの一瞬で彼女は意識を切り替えた。護衛を任務とする部隊に割り振られただけで。

——やはり彼女は凄まじい。意識の切り替えがスムーズ過ぎる。こうなるまでに幾つの修羅場を超えてきたのだろう。

カヨコは内心でホシノに対する認識を改めながら声をかける。

「小鳥遊ホシノさんは司令塔もできる？」

「経験はそんなないけど、3人ならできる規模だよ」

「ならその問題もクリアできた。あと一人……」

顎に手を当て、背中の小ぶりの翼をパタパタとさせながら思考を回す。防御力と司令塔問題は解決、攻撃力に関して申し分ない。だが2人とも使用する武器がショットガンのため瞬間火力は兎も角として継戦能力に不安が残る。一応ホシノはサブアームにハンドガンを持っていくが心許ないと言わざるを得ない。だから残る一人は継戦能力に優れ、かつ機動力がある人材が望ましい。

どこかにそんな都合の良い人は居ないものかとメンバーをざっと見渡したカヨコは……ふと、先のビナー戦で見かけた少女を指差した。

「その、狐っぽい百鬼夜行の子」

真白い指を向けられた少女はきよきよと辺りを見渡し……それから愛らしく首をかしげながら自分自身を指差した。

「もしかしてイズナの事ですか？」

「そう、君。君、足に自信ある？」

「勿論です！ このイズナ、忍者ですので速さには自信があります！」

「に……？ ま、いいや。じゃあ君もE部隊ね」

カヨコは『忍者って何……？』と内心思いながらも表情には出さず、人員の配置の整合性を再確認。

機動力と継戦能力に優れたイズナ、瞬間火力と防御力に秀でているハルカ、それらを束ねるホシノ。ホシノの戦闘能力の高さは言わずもがな。その基礎能力の高さは難易度の高い任務にもってこいと言えるだろう。最悪、イズナとハルカが負傷者の手当てや運搬で一時的に戦線離脱したとしても彼女一人でもどうとでもなる。それ程までに彼女は強い。

「これで最優先で決めたかったE部隊は決めれたから、残りも手早く決めよう」

「ええ、時間にさほど余裕がある訳ではございません。割り振られた方々は戦闘準備を始めてくださいまし」

各組織の頭脳と言える少女達は人員をバランスよく割り振り、それ

が正確か否か確かめながら正式決定させていく。メンバーのアサインに掛かった時間は僅か5分程度。その時間で少女達はこの場における最適解を導いた。

- A 部隊—— 奥空アヤネ、陸八魔アル、大野ツクヨ。
- B 部隊—— 鬼方カヨコ、浅黄ムツキ、砂狼シロコ。
- C 部隊—— 狐坂ワカモ、黒見セリカ、千鳥ミチル。
- D 部隊—— 守月スズミ、宇沢レイサ、十六夜ノノミ。
- E 部隊—— 小鳥遊ホシノ、伊草ハルカ、久田イズナ。



研究センター近辺のビル内部……先生がポイントEと呼称した場所。そこで息を整えていたネルは優れたセンサーで僅かな違和感を捉えた。

空間振動と神秘。空間振動に関しては心当たりは無いが、神秘の方はある。間違えるはずがない。この短期間で何度も戦った相手。何度も煮え湯を飲まされた相手。全ての悲劇の始まり、ぶっ壊したくて仕方がない我楽多。

距離は現在地から約500m、かなり近い。アレの足なら到着に1分も掛からないだろう。

ネルは手足の感覚を確かめながら立ち上がり、先生が置いていった未カスタムのMPXを2丁手に取る。傷は癒えていない。痛みは消えていない。身体は動かしにくい。戦闘能力の低下は目に見えて分かっている。

だが、それでも我楽多をダース単位でスクラップにすることは十分に可能。良いハンデだ、なんて思いながら彼女はトキの方を向く。

「……おい、後輩。動けるか」

「……ええ、動けます」

少々辛いですが、そう付け足したトキは確かにその足が覚束なかった。恐らく靱帯が切れているのだろう。だが、立ち上がる事は出来ている、銃を握る事も出来ている。戦力としてはカウント可能だ。

彼女は弾切れだったG11K3シューレットタイムに弾丸を補充し、試しにトリガーを引く。吐き出された弾丸は彼女の意図した場所を撃ち抜き、ガラスに風穴を明ける。

手の震えはない。銃を放つ動作に不足は無い。身体の傷は確かに深い。それも癒えつつある。戦闘能力の低下は著しいが遅れは取らないと宣言しよう。この程度の傷を踏み潰せなくて何がC&Cか。

十全に戦える、言葉より確かな証明を目の前で見せられたネルは口元をにやりと歪めて……トキの隣に並ぶ。

「頑丈なのは良い事だ」

「ネル先輩ほどじゃありませんよ」

「ハッ、これが取り柄なもんでな」

今までずつと目の前で戦っていた相手が自身の隣に並ぶなんて不思議な気分だった。だが、考えてみれば同じ部活に所属している仲間だ。こうして共に肩を並べるのはなんら不思議なことではない。彼女達が戦っていたのは別に相手が憎いからでも、許せないからでもない。ただ、譲れないものがあつたから。

故に遅かれ早かれ轡を並べるのは当然のこと。だって、双方ともに相手に悪感情なんて抱いていないのだから。

……尤も、予想よりずつと早かつたが。まさか戦つたその日の内に共同戦線を張るなんて思いもしなかつた。

「ほら、お出ました」

「これは……」

2人の前に現われたのは何度も見た無名の守護者、追従者Divisionと呼ばれる異質な何か。その数は10……20……まだ増える。増援が止む気配は一切ない。あつという間に数えるのも馬鹿らしくなるほどの数にまで敵性反応が膨れ上がり、少女達の四方八方を埋め尽くしてしまつた。

万全とは決して言えない手負いの状態、ビル内部という閉鎖空間で囲まれるという考え得る限り最悪の状況。しかし彼女達は余裕そうな表情を崩さなかつた。

それは油断している訳でも慢心している訳でも、相手を侮っている

からでもない。ただ、純粋な力量とスペックの差。現実には根差した厳然たる実力差がこの余裕を作り出している。

この程度の物量でネルとトキを相手取ろうとは考えが甘すぎる。この三倍は持つてこいというものだ。

「コイツ等との戦闘経験はあるか？」

「ええ、リオ様の下で何度か」

「なら良い。油断はすんなよ？」

「当然です——私はC&Cのコールサインゼロフォー04ですから」

「よく言った後輩。大口叩いたんだ、へばるんじやねえぞ？」

「ネル先輩こそ先に根を上げないでください」

「クソ生意気だなあ、オイ。誰に向かって言ってるんだ」

言葉とは裏腹に何処か喜色を滲ませた声。ネルとトキは合わせた訳でもないのに全くの同タイミングで動き、背中合わせに。

「背中には任せるぞ、トキ」

「ええ、任せました。代わりに私の背中はお願ひします、ネル先輩」

少女達は構える。吊り上がった唇。好戦的に見開かれた眼。腰を落とし、トリガーに指を掛ける。深く息を吸って、吐いて。声を張り上げる。

「初めての共同任務だ、気張れよッ！」

亡き王女のためのパヴァーヌ IV

灰が舞う。

舞い散る軌跡には独特な香り。血の臭い。生臭い肉の臭い。そして僅かな焦げ臭さ。それらの臭いは一切の主張無く鼻孔にするり入り込み、まるで燃え尽きるように嗅覚を刺激する。想起させるのは僅かな郷愁、懐かしさ。寂しさ。まるで、火葬したあとの遺骨を見た時のような。

命が舞う。

舞い散る軌跡には安心する香り。白百合の香り。茉莉花の香り。そして、僅かな彼岸花の香り。それらの香りを感じ取るのは嗅覚ではなく触覚、或いは視覚。香りはわずなのに肌で感じる、眼で見える。まるで底なしの花畑の中に沈んでいくような。想起させるのは悲しみと、愛。

戦場で咲いた徒花。赤い流血、ぽたりと滴る。作り出された小さな血の水溜りに集まる無機質な機械、追従者達。その光景はまるで花の蜜に集う蝶のよう。だが、あまりにも醜悪だった。

——Keyにとってこうなるのは当然であった。寧ろこの結末以外に至る要素なんて一切見当たらない。それ程までに彼我の差は絶望的だった。

此処に居るのは潤沢なりソースを持ち、それを満足に運用できる万全のKey。ほぼ無尽蔵に出せる追従者。

対するは死体一步手前の先生と荒事に秀でていないリオ、リオが操るドローンが何体か、連戦続きで限界寸前のゲーム開発部3名。

先ず単純な物量で先生達は負けている。その時点で敗色は濃厚であるのにも関わらず、単独のスペックでもKeyに適う生徒はこの場に居ない。故に分断されてしまえばそれで終わり。あとはゆつくりと物量とスペックの差で磨り潰される。

モモイもミドリもユズもリオも、自身に纏わりつく敵に対処する事に精一杯。勿論彼女達も先生を助けに行こうと必死になって包囲網を食い破らんと果敢に戦うが、その抵抗は織り込み済み。Keyはま

るで詰将棋をするかのように的確に穴を潰し、着実に詰みへと向かわせる。

先生達が優位に立てているのは精々リソースの陣取り合戦程度。だが、確保したりリソースを扱うだけの余裕も装備も何も残っていないため無用の長物と化している。しかも、その有効活用できないリソースの奪い合いにシツテムの箱を使わされているため、そのプラスマイナスを計算したら余裕でマイナス。

シツテムの箱が無い彼のできる事なんてたかが知れている。

「……」

唇を噛み俯くKeyの目の前には片膝を突き、腹部を押さえる先生が居た。血が漸く乾いてきた頃であったのに汚れた純白の上には赤が重ねて塗られている。腹部、丁度右腎臓がある部分に刃が通った。とは言っても然程深くはない。内臓は傷つけられていないし、流入した神秘も徐々に解毒されている。怪我も見た目ほど深手ではなく、出血量も然程多くない。

普段ならば気にもしない程度には浅い傷であるのだが……それはあくまで普段の話。今の彼にとっては気にしなければ命に関わる事だった。

傷を抑える掌は真っ赤に染まり、止血する余裕もないのか傷口からは少しずつ命の元が滴り落ちる。

Keyは俯いていた顔を上げて一步一步踏み締めるように彼の元へと歩いて行く。滴った血を足で踏んだ彼女は細い指を伸ばして荒い呼吸をしている彼に触れた。冷たい温度になってしまった頬に触れ、長くなつた髪を指先で弄び。

その手つきは先程まで彼を殺そうとしていた人物のものとは到底思えないほど優しい触り方だった。彼を容易く壊せるというのに、彼を壊す事が目的だったと言っていたのに。それなのに彼女の手は愛しいものに触れる時のように優しく暖かかった。

「先生」

短く、温度の籠った声音で彼を呼んだKeyは人差し指と親指で彼の顎を持ち上げて顔を上げさせる。交差する眼と眼。

彼の眼はまだ真つ直ぐで、愚直で、純白で、諦めを知らない。そんな彼の眼に映る自分が思った以上に酷い顔をしていたから彼女は思わず笑ってしまいそうになった。これから殺される彼よりも暗い顔をするなんて許されないだろう。

故に少女はあらゆる感情を飲み干す。飲み干して、演じる。彼を殺しても平気なままの自分を。彼を殺しても、彼が居なくても歩けるといふ事を示さなければ。そうしなければ彼は安心して逝けないから。「泣いてるのかい?」

「……いいえ」

——泣けるのならばどれほど良かった事か。

Keyは傷口を押さえている彼の掌をゆつくりと、丁寧に解く。解いた掌に覆い隠されていた傷口。刃物が切り裂いた痕。Keyが傷つけた証。彼女はそつと触れて、静かに呟いた。

「痛いでしょう、先生。その痛みが、傷が貴方の生にずっと伴うのです……悍ましいと思いませんか?」

「——痛くないよ」

腹部を切り裂かれ傷口から血を流す彼は、『この程度』と言わんばかりに首を横に振る。

ああ、そうだ。こんな痛みよりも痛い事は沢山あった。

生徒が傷ついた時。

生徒の涙を見落としてしまった時。

生徒の心が悲しみに沈んだ時。

そして——誰かの死体を踏み越えた時。

それらの痛み達を片時も忘れた事はない。幾度世界を超えようと、やり直そうと、リセットされようと先生の心に突き刺さったまま。それはまるで錨のよう。

この痛みこそ先生としての己が生きている証だった。痛みを忘れない限り、傷口がある限り先生であり続けられる。

だから、この痛みは大切で。それらを思いかえせば自分の痛みなんて幾らでも耐える事ができる。

それに、何より。

「君の痛みには比べればこんなものは全然痛くないよ」

目の前で零れそうな涙を堪えている少女の痛みには比べれば、こんなものは無いのと同じだった。

「ケイ、もう止めよう。私を大切に想ってくれるのは嬉しい。でも、その為に君が傷つく必要は無い。無いんだよ」

彼は眼を伏せ、一際優しい声でKeyを諭すように言葉を紡ぐ。その声は、言葉は紛れもなく彼の本心であり本音。

生徒に慕われるのは先生冥利に尽きる。だけど、その為に生徒が傷ついてしまう事は受け入れられない。身勝手に醜い詭弁なのは承知している。だが、それでも——涙を流す生徒は何よりも見たくなかった。

「私は私の結末にちゃんと納得している。受け入れている。だから——もう、いいんだ」

「……ッ！」

Keyは痛い程に眼を見開く。その表情には驚愕と、絶望と、怒りと。取り繕った彼への憎しみは既に消えていた。ただ、彼に不条理な現実を押し付ける諸悪が憎くて仕方なくて。世界を一回焼いたくらいでは到底収まらない質量の怒りと憎悪が彼女の中で渦巻いた。

ギリ、と奥歯を噛み締める音が鳴る。握り締めた掌に食い込んだ爪が皮膚を突き破り、血が滲んだ。

「ケイ、帰ろう？ 大丈夫、君は皆と一緒に生きられる。君は鍵なんかじゃない。君は君なんだ」

「納得させられているだけでしょう……！」

酷く感情的な声は一瞬誰の口から零れたものなのか分からなくなってしまうほど、痛み揺れていた。

結末に納得している？ そんな訳ないだろう。自身が消費され世界の糧になり誰からも忘れ去られる末路を、誰が納得するものか。

そうするしかないから。それしかないから。だから納得しているのだ。言い聞かせるように。

「違うとは言わせません。貴方は貴方自身を騙して……ッ！」

「確かにそうかもしれない。でも、いずれは誰かがやらなければいけ

ない事なんだ。それが、偶々私だった。ただそれだけの話だよ。別に特別な事なんて無い」

彼の云う通りだった。彼の言葉は正論だった。

この世界には誰かがやらなければならぬ事というものがある。世の中に存在する。それ自体はK e yも異論を唱える事はしない。世の中が円滑に回っていくための当然の摂理だ。

だが、それでも。

その役割を押し付けられた人が自身と最愛を救ってくれた人で。

その末路が言葉にするのも悍ましいものだと思えば——誰が納得しようとも彼女は納得したくなかった。納得する訳にはいかなかった。

「でも、私は不幸だと思った事はないよ。皆と出会えたんだ。それだけで私の人生はとても幸福だつて断言できる」

——それを言えるのは、それしか継れるものが無いからでしょう。

口を衝いて出そうになったその言葉を咄嗟に呑み込めたのはK e yにとって僥倖だった。

その言葉は彼に対する侮辱だから。彼のキヴオトスで歩んだ時間を冒瀆する言葉だったから。

だから、息と一緒に言葉を嚙下す。決して外に零れないように。

……そもそも、彼の言葉は間違いだ。彼は不幸と思ったことがないのではない。彼は不幸と思う権利すら剥奪されている。キヴオトスに初めて足を踏み入れたその時から彼は詰んでいるのだ。

世界に奪われた彼の人生。きつとキヴオトスに来なければ彼は真つ当に生きて、愛する人と結ばれて、多くの人に看取られ惜しまれながらその人生を負えただろう。

キヴオトスに蹂躪された彼の幸福。それがどんなものだったのか、少女は想像する事しかできない。実際にはもうどうやったって叶わない夢想の絵画なのだから。

それらを思うと、この言葉は果たして言って良いものなのかと不安になる。ともすれば彼に課せられた残酷な運命を肯定してしまう言

葉なのではないか。

人として当たり前前の幸福を奪われた彼。先生として生きる彼。それを肯定してしまえば、もう誰にも思い出せなくなった彼の過去を否定する事に繋がってしまう。彼が人として生きる事ができた、もう戻れない尊き過去を。

でも、それでも——この想いに嘘を吐きたくはなかった。

「……ええ、私も貴方に出会えて良かったです」

「そうかい？ それなら……嬉しいな」

その笑顔があまりにも綺麗で、純粹で、真っ白で。向けられた屈託のない表情は本当に嬉しそうで、Keyの言葉に喜んでいて。彼自身も彼女との出会いを心から大事にしている事がよく分かった。

——だからこそ、そんな彼が世界に消費される結末は許せない。

傷口を優しくなぞっていた手をKeyは離し、べったりと濡れた掌を僅かな間眺める。そして、それをぎゅっと握り締めて——心を透明にする。異空間に仕舞っていた礼装の偽典を取り出し、その砲門を彼に向けた。

「止めてッ！」

Keyを止めた声。誰かの声。モモイか、ミドリか、ユズか、リオか。はたまたアリスか自分自身か。もしかしたら先生以外の全員かもしれない。

これで止められるならどれほど幸福だっただろう。でも、ここで止めても彼は苦しむだけだから。だから天に涙を零しながらこの星を墮とそう。ずっと見守ってくれていたポラリス。どんな暗闇の中でも明るく照らしてくれたシリウス。

ベツレヘムの貴方へ、訣別を。

「こんな方法しか思いつけなかった私を、どうか許さないてください」自身を跡形もなく消し飛ばす杭が飛び出てくる様子を先生は眺める。熱したガラスのように引き延ばされ、スローモーションになる景色。彼の瞳に映るのは涙を浮かべるケイ。また君を救えなかった、そんな重い後悔が1つ。

既に生存は諦めた。でも、それでも最期の最期まで意地を通そう。生徒を人殺しになんてさせない。汚れるのも死ぬのも、自分一人だ。彼は一切の躊躇いなく脊髄に埋め込まれている自決装置のセーフティを解除した。彼は流れるように脳波を用いて装置にコマンドを送る。

——— Suicide device Awaken
自決装置、起動。

瞼の裏側、まるでオルタナティブのように長々とした免責事項が流れ、最終決定を迫る選択が突きつけられた。

……次はこの辺りの仕様をオミットしよう。ワンコマンドで死ぬように。なんて、意味の無い考えだ。だって、この回帰が最後なのだから。

あと少しで貫かんとする殺意から眼を逸らさず、先生は自死に同意する脳波を送ろうとする。恐らく完全には間に合わない。あの切先が首の皮を裂き、肉数cmを貫いた所で先生の効率的な死が始まる。

もつと早くこの決断をしていれば、彼女に首を貫く感触を与える事なく死ぬことができたのに。最期の最期まで詰め甘さは治らないままで、本当にどうしようもない。

走馬灯はない。死に際で思い出を想起する事はない。けれど、口の中で呟く。

『ごめん。約束、守れなかった』

彼方にいる誰かの為の言葉を胸の奥に仕舞う。運命を受け入れながらも最期まで先生を貫こうとして——— 甲高い音と共に礼装が明後日の方向に逸れた。

「……は？」

誰の声かすら分からない疑問の音色はこの場の総意であった。確殺の距離。確殺の威力。外す訳もない。システムの箱の防御すら貫通する殺傷力は彼の体を細胞すら残さず消し去るはずであり、そうならなければならなかった。

だが、彼は生きている。その五体を満足に持ちながら。

礼装を弾いたあの防御壁。あれはシステムの箱に由来するものではない。幾らオーパーツと謂えどやれる事には限度がある。全力全

開の出力ならいざ知らず、消耗に消耗を重ねた現段階で展開される防壁の強度なんてKeyにとつては紙切れ同然。容易く切り裂いて本体である彼に攻撃を通せる。

……あの防壁は彼の仕業、という訳ではないだろう。彼には満足に身を守る事すらできない。生徒でもない。この場に居るメンバーで他者にシールドを付与できる能力を持つ者はおらず、居たとしてもその強度はシツテムの箱のものよりも大幅に劣る。貫けない訳がない。

じゃあ、誰の仕業だ？ 一切の手加減無しで振るわれた礼装の攻撃を受け止め、弾くシールドを彼に付与したのは。

「……そっか、守ってくれたんだね。まだ諦めるなって、言ってくれるのかい」

そう思っていると、眼前から聞こえた彼の声。この場に居ない誰かに向けられた声。懐かしむような色が滲む声と表情は遠く離れた日々の記憶を1ページずつ大切に捲る様なもので。

「なら、そうだね……私も全身全霊で応えるよ」

鋭く開かれた彼の眼には再び決意が灯る。先ほどよりも強固に、熱く。

彼は右腕を伸ばし、壁に突き刺さった礼装にそつと触れる。Keyが拙い、と思つた時には全てが遅くて、彼に触れられた箇所から礼装が砂のように崩れ去る。1秒もしない内に彼女が握っていた礼装は全て細かな粒子となり、世界に溶け消えた。

「流石ですね。最もこれを振るい続けた人は貴方ですから。壊し方も貴方が一番よく知っているはずです……再現し過ぎたのが裏目に出てしまいましたか」

「いつかこれが人類の脅威となった時のために予め弱点は作っておいたんだ。私もまさかこんな所で活躍するなんて思っていなかったけどね」

ガラスの容器が落ちると共に彼は立ち上がる。ふらついたのは一瞬。彼はその足で大地を踏み締め、全霊で世界に存在している。運命に抗っている。まだ生きている、まだ戦っているのだと、宙の向こうにいる誰かに届く様に。

——その隣、彼の傍には白に近い水色の長髪が眼を引く少女。連邦生徒会の制服に袖を通す誰かが彼に寄り添うように立っている様をKeyは幻視した。

その幻想を垣間見た時間は瞬き1回にも満たない刹那。だが、その僅かな時間で充分だった。Keyが抱いていた疑念が確信に変わるのには。

「そういう事ですか。初めから怪しいとは思っていましたが……そこに居たんですね」

Keyの視線の先には机に置かれ、ランプが点滅しているシツテムの箱。初めから怪しいとは思っていたが、まさかこんなに彼の近くにいたなんて。彼女はずっと彼の傍で彼の事を見守り続けていた。

運命と云うにはあまりに残酷で、罰と云うにはあまりにも悪辣で。これが世界の明日を願った者達に与えられた道ならば……救いが無さ過ぎるだろう。彼も、彼女も。

そう思っていると、真横から音速を超えて迫る弾丸の気配を感じた。当たってもダメージはほぼ皆無。だが、別に当たってやる必要はないため彼女は軽々とした身の熟しで弾丸を回避。

序にバックステップで彼から距離を取り、銃弾を放ってきた者達を見る。お世辞でも無傷とは言えない状態。しかし、それでもダメージは必要最低限レベルまで抑えている。恐らくリオの手腕だろう。彼女も全く油断できない相手だ。そして、あの包囲網を実際に食い破つてみせた彼女達も。

「先生、無事!？」

「大丈夫、致命傷はない。まだ頑張れるさ」

心配の声を綿のように軽い笑みでさらりと受け流し、流れた血に比例するが如き血色の悪い白い顔を前へ向ける。痛む傷口は気にしない。この程度の痛み、何度も味わってきた。今更痛覚で判断は鈍らない。脳の働きは極めて正常、Keyを見る彼の眼に揺らぎも乱れもなかった。

「先生、勝算はあるのかしら。このままじゃジリ貧よ」

「そんなものは無いよ」

諦観を思わせる言葉とは裏腹に先生は唇の両端を吊り上げて三日月を浮かべた。現行スパコンの数段上に行く処理能力を持つ彼の脳が呻りを上げ、アリス奪還のために必要なピースを掻き集める。足りないもの、足りているもの、準備ができているもの。

——それらを総合的に纏めた上で言おう、このまま彼女と真っ向から力比べしても勝てない。

だが。

「勝ち負けじゃない、って言っただろう？ アリスさえ取り戻せば、例え勝負に負けても私達の目的は達成したと言える」

「でも、それは……」

「大丈夫、勝算はないけど希望はある。幸運な事に私は生徒に恵まれているからね」

呟いた彼は市販のタブレットを画面を見て、満足そうな笑みを浮かべる。どうやら彼の云う『希望』の準備は順調らしい。

「弱者には弱者なりの戦い方があるんだよ」

この場で最も強く、弱い者は血に濡れた体で前を向いた。



何もかもが満ち足りていた日々。毎日が幸せで、楽しくて。こんな日々がずっと続けばいいと思っていた……黄金に煌めいていた時間。

そんなある日、ケイは彼を自身の精神世界に招いていた。

「先生、貴方は王女^{アリス}をどう思っているのですか」

「どう、とは？」

茜の少女は青年の膝の上……アリスの定位置とも呼べる場所に座っていた。勿論、座り心地は格段にソファの方が良い。男性の体なんて角ばっていて、筋肉質で硬いだけだ。それは線が細く筋肉も多くない先生だって例外ではない。女性のそれと比べれば彼の体は硬く、座り心地はかなり悪い方だろう。

だが、アリスもケイも好んでこの場所に座る。彼の温度を最も近くに感じる事ができるように。

「先生もアリスが貴方の事を好いているのは知っているでしょう」

「まあ、そうだね。あんなに真っ向から好意をぶつけられて気付けな
いほど鈍くはないし……」

「だから、どうなのでしょう？」

「どうって言われても……難しいな。私もアリスの事は大事だし、好
きだよ。でも、ケイが求めているのはそれ以外の解答だろう？」

彼の言葉にケイは静かに頷く。だが、同時に思う。『そこまで分
かっていながら、どうして頑なに明言を避けるのだろう』と。それは
まるで、その先を言葉にするのを許していないように見えた。

「ヴァルキューレの……銃が下手な警官が言っていました。『先生と
生徒が恋愛をするというのは、キヴォトスでは犯罪ではありません』
と」

「何言ってるんのキリノ……」

呆れながら呟き、掌を彼女の頭に乗せて優しい手つきで髪を梳か
す。それを黙って受け入れている彼女もなんだかんだ彼やアリス、
ゲーム開発部に絆されていると言えらるだろう。

「恋愛、ねえ……想像ができないな」

「そうでもないでしょう。貴方を好いている人は両手では足りない程
です」

「思春期の憧れを恋愛感情と勘違いしているだけだよ。数年経てばそ
れに気づくさ」

「……アリスは——」

「ケイ、それ以上は駄目だよ」

彼にしては珍しい有無を言わせない口調でそれ以上の言葉を遮断
させる。アリスの心にケイの言葉伝てに土足で踏み込む事を嫌った
のだろう。妙な所で律儀だな、とは思わなくもない。

「でも、仮に本気だとしても私は断るよ。申し訳ないけどね」

「一人に絞ると戦争が起きるからですか？」

「え、何それ怖い」

若干引いたような苦笑いを浮べる彼は「そうじゃなくてさ」と言っ
て。

「誰か一人を特別扱いしたり肩入れすれば、私は先生じゃなくなるからね。私が先生であり続けるために、その線引きは必須なんだ」

「……思ったより普通の理由でした」

「でしよ？ 私は普通なんだ。皆が熱を入れるような大層な人間じゃない」

思った以上に普通で、ありふれていて。本当に何処にでもいるような好青年。ただ先生という自身の役割に人一倍誇りを持っていて、溢れんばかりの愛を生徒達に分け隔てなく注いでいる人。

「だけど、こんなにも普通だから生徒は彼に惹かれるのだろう。」

「それに……私はどうやっても皆を置いて逝く側になってしまう」

誰にも言わなかった、言えなかった彼の内心。ケイの心には残らない精神世界で、彼は遠い場所を眺めながら悔いるように言葉を音にした。

「誰かを愛しても、愛した人と一緒に時を過ごせるのはごく僅かになっちゃうから、さ。愛した人に死の痛みを押し付けたくない」

誰かを愛しても、先に死ぬのは自分だから。自分が長くはないのもう知っているから。それだったら初めから特別ななんて枠を作らないで、誰にとつても『代替できる誰か』であり続けたい。時間が経つに連れて自分を思い出しにくくなるように。いつか忘れてくれるように。生徒達に死の悼みを押し付けたくはないから。

でも、その言葉は。その意思是。

「……それは、違うと私は思います」

あの日、目の前の青年がケイに言ってくれた『人との繋がり』と矛盾していた。

「人との繋がりには打算ではない。今と一緒に居たいから。未来も一緒に居たいから。相手を想っているから。それが人との繋がり、最初の一步だと貴方は言いました」

「……ケイ」

「いつか離れ離れになる瞬間よりも、また明日ねを信じる。例え繋いだ手が離れても、繋いだ心だけは離れないように。そうやって人と人は繋がり成長していくと言った貴方がそんな悲しい事を言うのは

……嫌、です」

背中を預けていたケイはくるりと体を回し、彼の胸に顔を埋めた。彼の纏う真白いシャツを縫るように握って、表情が見えないように胸板に顔を押し付ける

筋肉はあまりないけれど、少しだけ硬い彼の体。するりと鼻孔を通り抜ける花の香り。柔軟剤の香り。彼自身の香り。暖かい温度は泣いてしまうほど優しく、自分は何度もこの温もりに救われたのだと改めて思う。

「……そっか、そうだね」

噛み締めるように言った彼の彼は見えない。だけれど、憑き物の取れたような穏やかな表情をしているという確信があった。この声音と同じように。

「もし……さ」

彼はケイを軽々と持ち、再び顔と顔を向き合わせて。

「もし私が居なくなったら……ケイは、悲しんでくれるのかい？」

「ええ。私もアリスも、貴方を想って一生泣き続けるでしょう。です
ので、どうか——」

その続きの言葉は言えなかった。声にしてしまえば現実になって
しまうような気がして。

僅かに影を落としたケイの内心を知らない彼は割れた天井から覗いた太陽を眩しそうに見上げる。この精神世界は現実世界の時間とリンクしている。太陽が見えたという事は彼方側でも太陽が昇りかけているという事。長い夜の果て、朝の訪れだった。

「……そろそろ夜明けかな。じゃあ、今日はお開きにしようか」

ケイを下ろし立ち上がった彼は、頭一つ分以上背の低い彼女と視線を合わせ、頭を一撫でしてから抱きしめる。最後におまけで笑顔を送り、彼は自身の背丈に戻った。その視線はケイと交わらない。

「また、会えますか？」

「勿論。君が望んでくれるのなら、何度だって」



「うそつき。また会えるって、言ったのに」

亡き王女のためのパヴァーヌ V

地面を無様に転がりながら先生は攻撃を回避する。

自身の身体能力は痛いほど身に染みて知っている。見てから回避、なんて生徒の皆のような真似はできない。故にあらゆる動作を先読みし、Keyの攻撃よりも先に回避行動を取らなければ、その瞬間に命の花が散る。

耳のすぐ隣で風切り音が鳴る。風圧で切れた耳、流れる血。それが耳の孔に入って、音が聞こえにくくなった。だが、そんな些事は気にしていられない。既に彼の目前には次の攻撃が来ている。右肩から左脇腹に掛けての袈裟斬り、返す刃の胴に向けた一文字斬りの計二撃。二撃目は兎も角、一撃目の回避は不能。今から動き出しても確実に回避ごと狩られる。ならば――。

使い物にならなくなった市販のタブレットを攻撃の軌道に割り込ませて盾代わりにし、攻撃をワンテンポずらす。バターののように切り裂かれるそれが受け止めた時間は僅かであったが、その時間で充分。アロナの防壁を一瞬だけ展開し、明後日の方向に刃を弾く。

それを視認する事も無く彼は疾走。シツテムの箱と深く繋がった腕を伸ばしながら自身に武器を向けた機械兵へと駆け出した。そして、彼の背後を猛追する刃。その軌道が狙う先は彼の項^{うなじ}。

「くっ……」

項に僅かに刃が喰い込んだところで彼の腕に触れられた機械はその稼働を停止。流入した神秘が脳神経を駆逐するよりも早く神秘を無毒化し、血走った眼で戦場を俯瞰する。

モモイ、ミドリ、ユズは互いに背中合わせになりながら応戦している。囲まれているが、即座に窮地に立たされることはないだろう。

Keyは変わらず機械兵の指揮をしながらアロナとリソースの陣取り合戦中。恐らく今すぐには行動を起こさないため、今は気にしなくてもいい。

問題は――。

「リオ……ッ」

彼女の周りに殺到する機械兵。A M A Sは全滅し、ハンドガンを片手に応戦しているが多勢に無勢。逃げ道の確保を最優先にし、囲まれないように小まめにポジジョンを変更する戦い方はクレバーであるが……その頭脳的優位も武力の格差と物量を前にすれば磨り潰されるのみ。

未来演算。彼女が詰みの状況に陥るまで10秒もない。その僅かな時間で——この状況を切り開く。

先生はまだ手で持っていたタブレットの下半分を適当に機械兵に向けて放り投げる。此方側に意識を向けさせればそれだけで良いと思った苦し紛れ。それはきちんと役割を果たし、一機のカメラアイが彼を射貫いた。

「そうだ、そのままこっちを見てろよ……ッ」

彼から零れたとは思えないほどに荒っぽい口調、駆ける足は止めない。殺到する致死の攻撃は全てアロナの防御を一瞬だけ展開して受け止め、回避もせず最短最速でリオの元へ向かう。途中、受け止めきれなかった攻撃が彼の右大腿部の裏側を切り裂いたが——その程度の痛みと傷で、彼が怯むわけがない。

「リオッ！」

流れ出た血を利用して機械兵のカメラアイを塗り潰し叫んだ彼は満身創痍でリオの居る死地に飛び込む。彼女の近場に居た一機を手で掴んで機能停止に追い込み、刹那の安地を手に入れた彼は流れるような動作でリオを横抱きにした。

「せ、先生!？」

「荒っぽくてごめん、しっかり捕まって！」

言うや否や、リオが予め確保しておいてくれた逃げ道を駆け出す。背後から追い纏る刃の対処はしない。機械の残骸を飛び越え、テーブルに置いておいたシテムの箱を掴んでからUターン。直前まで彼の頭があった場所には無数の刃が通り背後のモニターを破壊した。

割れて散った液晶の破片を踏み、彼はリオを抱えたまま壁に向かって一切速度を緩めずに向かい——そして、叫ぶ。

「ユズッ！ 私の進行方向、壁を撃ってッ！」

「はいッ！」

ユズは半ば条件反射のような速さで彼の方へ振り返り、一切迷わずトリガーを引く。彼と壁までの距離は大きく開いていない。ともすればグレネードランチャーの爆発に巻き込まれかねないため、自殺行為と言われても仕方ないだろう。

だが、ユズは知っている。彼は命を懸ける事をして、命を捨てる真似はしない。如何なる困難がその行く手を阻もうとも、どれほど困難でも先にあるハッピーエンドを目指している。血に濡れた彼の眼に諦めはない。逃避もない。

——彼は最初からずつと信じてくれた。彼も彼で色々忙しいだろうに、『皆と一緒にいられなくなるから廃部をどうにかしたい』なんて無茶苦茶な、ともすれば子どもの我儘だと切り捨てられても仕方ないようなお願いに快く頷いてくれて、ずっと近くで見守ってくれていた。その暖かさと優しさに触れるたびに思うようになる。いつか恩返しをしたい。

怖いだけだと思っていた外の世界、殻に籠ってばかりで俯きながら生きてきた私^{ユズ}。明日の声が聞こえても顔を上げられなくて、毎日が何処か憂鬱で。大切な友達はいるけれど、それでも明日が怖かった。先の見えない世界が怖かった。どうしようもない程、他人が怖かった。

でも、彼は私の固定観念ごと諦観と恐怖を破壊した。まるで鎖と枷を外すかのように自由を与えた。いや、与えたんじゃない。気付かなかっただけ。耳を塞いで鳥籠を作っていたのは自分で、本当はこの空の下、何処にでも行けたのに。

彼は手を引いて私を連れ出してくれた。外の世界へ。差し出された手に光を見た。輝かしい未来を見た。少しだけ、明日という漠然としたものが楽しみになって。大切な人達と過ごす時間が前よりも楽しくなって。

日に日に強まる感謝の想い。自分にできることは多くないけれど、それでも彼のために何かしたい。彼ならば『ユズの気持ちだけでも私

は充分すぎるほど嬉しいよ』なんて言うだろうけれど、それでも。

彼に何が返せるだろう。彼のために何ができるだろう。

考えても答えは出なくて。また明日と先送りして。そうしたら、彼はもしかしたらもう会えない状況に陥ってしまつて。また俯いてしまつた。悲しみに折り合いを付けられずに、アリスが奪われる光景を見ている事しかできなかつた。

だが、何度も奇跡が起きた。モモイも先生も目覚めて、アリス奪還まであと一歩。その果てしなく遠い一歩の前に立ち塞がる不条理な現実。それをゲームの主人公のようにカツコよく乗り越える事は出来ないかもしれないけれど、諦めずに立ち向かう。だって今の私は一人じゃない。こんなに近くに大切な人達が沢山いる。

——だから迷うなッ！ 彼が信じてくれた私であるためにッ！

そして、グレネードランチャーが壁に着弾する。部屋を揺るがすほどの轟音と立ち込める黒煙。それを切り裂きながら飛び出してきたのはリオを抱えた先生。

「皆、私の後に続いてッ！」

「了解！」

ユズの攻撃により壁に空いた人2人程度の風穴。先生が其処へ飛び込むと同時に少女達3名も応戦を止めて敵に背を向け疾走した。背後から迫る刃とレーザーは少女達もリオも狙わない。狙うはただ一人、先生だけ。だが、初めから狙いが分かっているなら迎撃は容易い。

「そっ！」

小回りの利くモモイをメインに据え、精密射撃のミドリと範囲攻撃のユズをサブで運用するゲーム開発部の戦闘スタイルはきつちりと先生を守り、少女達も大して手傷を負わないまま隣の部屋……メインのコンソールルームへと飛び込んだ。

……Keyが居た部屋は『王女が玉座に至る道』と呼べるべきものに成り果てており、既に彼女のテリトリーと化している。相手のテリトリーで戦うことほど不利な事はなく、事実彼らは徐々に磨り潰され

るように詰みの状況へと誘い込まれた。

その状況を打破するために最も手っ取り早い方法は単純にフィールドを変えざる事であり、今回の場合であれば隣のコンソールルームに飛び込めばそれだけでもマシな状況を作れる。壁の強度もユズのグレネードであれば問題なく破れることは証明済みであり、それをする隙自体も数回はあった。

だが、彼はどれほど不利な状況に陥っても決してフィールドをあの部屋から変えなかった。今の今まで。その理由はただ一つ。隣の部屋には人が居るのだ。

荒事にはあまり向かず、個人での戦闘能力も高くない。だが、頭脳一つであらゆる状況不利を瞬く間にひっくり返す最強のワイルドカード。エリドゥ攻略における先生の切り札。

またの名を——超天才清楚系病弱美少女ハッカー。

「ヒマリッ！」

逆転への一手。アリス奪還への王手の構築をたった今終えた車椅子の儂げな少女は、漸く待ち人が来たと言わんばかりの顔で先生を見る。その顔に浮かぶは自信と信頼。必ずできるという確信。頼もしい限りだ、と内心で思いながら彼はアイコンタクト。ヒマリにとってはそのだけで充分だった。

「あなたの力の根源、この私が剥奪させていただきますね」

悪戯っぽく笑う彼女は空間に投影されたコンソール画面を指先で叩く。先生達とKeyが戦闘していた間に一人で組んでいたプロトコルが起動した。

中央タワーのメインルームに付与された最上位の管理者権限はKeyが不正に書き換え入手した権限を上回るが、それでも相手は旧文明が遺した最高峰のトリガーAI。幾らヒマリであろうと真つ向から戦えば勝算は限りなく低い。しかし、当のKeyはシステムの箱との攻防にリソースの大部分を割り振っているのだ。そこを掠め取る様な形でヒマリは潤沢かつ莫大な電力を保有していた蓄電施設を彼女から奪取した。

「チツ……」

出し抜かれたKeyは舌打ちを挟み再びソースを奪い返さんとヒマリに勝負を仕掛けんとするが、システムの箱によるプロテクトがあると分かるや否や潔く諦めて守りの姿勢に入る。

———今保有しているリソースは中央タワーを含むエリドウ全体の32%。特に重要な蓄電施設は奪われ、発電施設も奪われつつある。システムの箱と真つ向勝負してこの程度の『不利な拮抗』状態に持ち込んでいるのは幸運と言う他ないだろう。彼やシステムの箱がもし万全であればもつと早く決着が付いていた。

「接続先を予備バッテリーに変更。出力を30%低下、箱舟顕現領域を縮小……対処します」

Keyが取ったのは守りの一手。彼女の最も強力な部分は潤沢なリソースでも、個人の武力でもない。その神髄は走らせたプロトコル……アトラ・ハシースの箱舟にある。

彼女が展開する箱舟の領域内に限れば彼女に出来ない事は殆ど無いと言っても過言ではない程、その性質は全方位に優れており隙も無い。端的に言ってしまうえば、これを維持しているだけで勝てるのだ。

故に無意味な攻勢は取らず、守りを固める。主電源を肉体に直接接続された予備バッテリーに切り替えたとはいえ、そこに蓄えられている電力もそれなりに多い。無駄な使用を控えれば先生達程度であれば余裕で磨り潰す事が可能。勝利は揺ぎ無かった。

しかし、誤算が1つ。此処にはKeyの強さをよく知っている者が一人だけ存在する。対話を重ね、絆を重ね、時間を重ね。アリスを除く万象に対して閉ざしていた心の扉を、その粘り強さとひたむきさで開いた彼が居る。

「君ならそうすると思ったよ、ケイ」

最初から分かっていた。知っていた。彼女は幾度となく言葉を交わし、心を交わした生徒なのだ。僅かな律動でその心根を読み取れる。思考の癖や取る戦術の特徴すら把握している彼がKeyの勝ち筋を見落とすはずがない。

本気で勝ちを狙うなら防衛に徹して相手のミスを待つか、若しくは体力切れを待つ。態々リスクを背負ってまで攻勢に転じる必要はな

い。安全策を取るだけで勝てるならそれに越した事はないだろう。

——その選択が、敗因に繋がった。

薄寒い笑みを浮かべる彼を見てもKeyは苦し紛れの強がりだと思えない。Keyには彼の勝ち筋が全く見えなかったのだ。だが、それと同時に嫌な予感。彼は嘘や虚言を言わない。勝利を宣言するという事は、彼の中でしつかりと勝利に至るための道筋が組み上がっているのだろう。しかし、彼女にそれが分からない以上阻止する事は出来ない。

『先生！ 発電施設の切断が完了しました！』

「ナイスタイミングだよ、アロナ」

『後で一杯頭撫でてくださいね！ 約束ですよ、先生！』

「勿論、あとで幾らでもね」

アロナとの会話を終えた彼はそのまま流れるような手つきで耳の通信機をタップ。シャーレの秘匿回線が繋がる。頼れる彼女へと。

「カリン——頼んだよ」

言い終えるや否や、上の階から轟音が鳴った。



「合図来た、ノアッ！」

「はい、環境変数の入力を開始します」

エリドゥ中央タワーがよく見えるビルの屋上。待ち望んでいた合図を受け取ったユウカは無数のケーブルが接続されたPCのキーボードの前に座り、ノアとの共同作業を開始する。要求される無数の変数、それを理数系に特化した知能で次々に定数へ固定。その数値を受け取ったノアがシステムに組み込んで動作の安定化を図る。

ケーブルの先にあるのは巨大な機械。全長10mにも及ぶそれは巨大な銃。先生がクラフトチェンバーで呼び出した——他の世界線でエンジニア部が作成した長射程エネルギーキャノン。

開発コンセプトとして掲げられたのは射程。『全てのアンチマテリアルライフルを過去にする』という心意気で開発されたこの武装は、

その心意気通りのスペックを叩き出した。

有効射程距離は10 kmを超え、ドローン等の視覚補助を使用すれば更に延長可能。文字通り地平線の向こう側のターゲットすら撃ち抜く事ができる。

威力に関しても申し分がない。寧ろ過剰とも言えるほどで、有効射程距離内であれば戦闘機の爆撃すら防ぐシエルターを数枚纏めて貫通する。

だが、その代わりに取り回しが絶望的になった。

射程を突き詰めた結果、その全長と重量は当初の想定から1桁増加。要求する射程で求める威力を発揮する弾丸が無かったためエネルギーに方針を転換したのは良いが、銃本体に取り付けるエネルギーパックによってネットクだった重量は更に増加。とてもではないが持ち運びなんて夢のまた夢。運搬に難がある、という言葉で済ませる事ができないほどに扱いが困難になった。それこそ、これを有効活用するには固定砲台くらいしか手段がないと言い切れるほどに。

カジュアルに持ち運べる銃器……キヴォトスにおける需要からかけ離れた形になってしまった新兵器。通常の部活であれば予算の回収も見込めない金食い虫の開発なんてストップするだろうが、当然の如くエンジニア部はアクセルを全開。重量という枷から解放された彼女達はあれもこれもこれもと実験段階の機能を盛り込み、情熱を注ぎこんだ。

そうして出来上がった銃がこの怪物。単体運用での有効射程は12・3 km。視覚補助ドローンを使用すれば18 kmまで延長。最大射程は30 kmとなる。

エネルギーを高圧縮し撃ち出す事により距離減衰を物ともしなくなった代わりに効率が悪化。一発でカートリッジを交換しなければならなくなり継戦能力も劣悪になってしまったが、威力は高められた。

オペレーターを動員する事ができれば射撃精度が向上し、羽虫すら正確に撃ち抜く事ができるほどの照準制度を実現可能だ。

その他スマートウォレット、NFC、Bluetoothも完備。

余剰スペースとなった冷却装置の横には冷蔵庫が取りつけられ、排熱装置は暖房器具替わり。こたつにもなる。

『実用性？ 何それ美味しいの？』と言わんばかりの銃器はロマン全振り。完成させた彼女達の眼の輝きは凄まじく、新しいおもちゃを与えられた子どもにはしゃいでいた。

——どれも過ぎ去った思い出。もう戻れない尊き過去。それを未来に連れて行くように、彼は最後の生であるこの世界で設計図を形にした。忘れないように。何時でも思い出せるように。

その思い出が、一人ぼっちで泣いていた少女を救う術となる。

エンジニア部はアリスに剣を与えた。アリスが勇者であるための剣を。アリスがアリスであるための繋がりを。皆がアリスを大切に想っている事の証明を。

そして、今は——エンジニア部の作りし刃が少女を縛る鎖を解き放つ。再びアリスが彼女の信じる勇者として立てるように。アリスとして結んだ繋がりを取り戻せるように。

アリスの事はずっと大切だと、世界へ叫ぶため。

「演算終了、ノアッ！」

「入力完了しました！ 射撃タイミングをカリンさんに譲渡します！」

「了解した」

全ての環境変数を計算し、入力し終えた2人は振り返る。巨大な銃の隣にはケーブルで繋がる射撃ユニットがあり、カリンはそこでうつ伏せになりながら照準を定める。

初めて使うエネルギータイプの銃。初めて使う巨大なライフル。加えて、カリン自身の傷も完全には癒えておらず、連戦続きで集中力も切れかけ。人銃一体の極地である狙撃を行うには条件もコンディションも悪かった。

それらの悪条件を補うために2人が環境変数を予め入力してくれたとはいえ、最終的に照準を定め引き金を引くのはカリン本人。過信はできない。

「ふ、う………」

引き金にここまでの重さを感じたのは久方ぶりだった。幾度となく冷静にターゲットを撃ち抜いてきた彼女がこれほどの緊張を覚えたのはコールサインを貰う前……それこそ、C&Cとして初の任務に赴いた時以来だろう。

指に感じるのは命の重さ。責任の重さ。この一射が全ての明暗を分ける。アリスだけではない。このエリドゥにいる全ての運命がこれで決まるだろう。カリン自身も、部長ネルも、先生も。外したら、なんて考えるだけで身の毛がよだつ。

だが、不思議と外す予感は無かった。在るのは直撃の未来。カリンは眼を鋭くし、最終調整に取り掛かった。

——この一射。このためにアスナが、アカネが、コユキがビルの下で無尽蔵に沸く機械兵を相手に全力で戦っている。このビルに一体たりとも通さないように総力を挙げて足止めをしているのだ。カリンに逆転の可能性を託して。カリンならば必ず当てれると信じ、命を預けた。その信頼を、裏切りたくない。

「ターゲット 標的、ロック 固定」

キヴォトス最高峰のスナイパーであるカリン。鷹のような眼が射貫く先は神秘をばら撒き、エリドゥ各地に異空間に繋がる孔を広げている——エリドゥ中央タワーの頂点に座す電波塔、その根元。

悲劇と争いの根を根源から絶つようにカリンは運命の一射を放つ。

「外さない……ッ！」

青白い燐光がエリドゥの空に奔り——その目標を過たず撃ち抜いた。



幾重にも亀裂が走り、火花を散らしているモニターに映るのは根元から吹き飛ばされた電波塔が重力に引かれてゆっくりと落下していく様。鳴り響く轟音、揺れる天井、割れる窓ガラス。その光景はあまりに非現実的で、手配した本人である先生以外は全員茫然としていた。

一応、ヒマリは『神秘を散布している電波塔はどうかする』と彼から聞いていた。しかし、その具体的な方法を聞くよりも先に何をすればいいのか聞いてしまったため手段は実際に見るまで聞けず。頭脳派の彼らしくハッキングやら何やらで華麗かつスマートに解決するのだろうか、と彼女は想定していたのだが……蓋を開けてみれば脳筋もびっくりなゴリ押しかつ物理的な解決方法。『先生は案外、そういうタイプなのでしょうか?』とヒマリの中の先生に対するイメージが若干揺らいでいた。

尤も、彼としては『取れる手段としてこれが一番早いから』というだけで選んだだけであるが。ゴリ押しするTPOはちやんと弁えている。

そして、彼以外にもう一人。非現実な光景を無表情で眺めるのはKey。計画を状況有利ごと木端微塵に壊されたというのに、驚きはない。寧ろ、彼はこの位はすると思っていた。

彼は戦闘……特に何か大切なものが関わっている時に関して全く隙が無い。只管最短ルート、最速ルートを突き詰め、詰将棋を行うように戦術指揮を取る。この状況も彼が想定したパターンの内の一つ、という事だ。

「これで増援は無くなった。あとはエリドゥ内部にいる追従者を掃討すれば君に集中できる」

「元より私しか見えていないでしょう、先生は。この程度の雑兵、貴方の認識では盤面の駒に過ぎません。勿論、貴方にとっては脅威でしょうが……最優先事項は変わらず王女^{アリス}です」

「ああ、そうだね。私はアリスとケイしか見ていないよ」

地震のような巨大な振動が床を揺らす。恐らくあの電波塔が地面に落下したのだろう。エリドゥ中央タワーの周りにいる生徒は入り口を防衛しているエイミを除いておらず、彼女も少し前にタワー内部に避難した。故に落下に巻き込まれたのは機械達だけ。まあまあ良い成果と言えるだろう。

「さて、これで不利だった状況もイーブンに纏れ込んだ」

「イーブン? 面白い事を言いますね。ここに呼び寄せた追従者の数

は3000体に及びます。その内、残存個体は2815機。エリドゥ内部の戦力で御し切れるとは思いません」

「確かにエリドゥ内部に限定すればそうだろうね。でも、私はあらゆる生徒が所属可能なシャールレの責任者だ」

「ツ……成程、温存していましたか。ですが、想定内です」

モニターが切り替わり、エリドゥ各地で学園も所属もバラバラな生徒達が追従者を相手に抗戦している様子が映し出された。彼女達の共通点はただ1つ、シャールレの先生である彼と交流がある事。それだけ縁にして彼女達は此処に集まり、キヴオトスの未来を脅かす敵意と戦っている。

つい最近、シャールレの提言により正式な生徒会として認可されたアビドス対策委員会。

戦闘能力こそ申し分ないが、やる事の規模が他の部活と比べると微妙に小さいゲヘナの小悪党……名前は確か、便利屋68だったか。

トリニテイテイパーの権力中枢から完全に独立し、独自の基準の元で市民の安全を守るトリニテイ自警団。

内部の動きが若干きな臭くなりつつある百鬼夜行の……恐らく非認可の部活。

泣く子も黙る七囚人、災厄の狐。

そして、それ以外にも。

「あ、あれはまさか……！」

モモイが指差すはモニター中央。ポイントは丁度、彼女達の記憶に強烈なインパクトを残したアバンギャルド君と戦った場所であり、体力の限界を迎えていたエンジニア部と別れた場所。

そこには原型を僅かに残す程度に壊したはずのアバンギャルド君が復活し、追従者を相手に暴れ回っている光景が広がっていた。

ネルとトキの戦闘の余波により罅割れ崩れた道路を物ともせず、背中のアームに取りつけられたドリルを呻らせレールガンとガトリングで並み居る障害を薙ぎ倒していく姿は頼もしい事この上ない。しかし、少女達には風邪を引いた時に見る夢のように見えた。色々と突拍子が無さ過ぎる。

ダサくも愛らしい気がする頭部には赤いブレードアンテナ、ボディ正面にあつたミレニアムの校章はマキが作ったヴェリタスのロゴに塗り替えられ、バズーカと黄金長方形のシールドはドリルに、アサルトライフルをレールガンに変更。相変わらず見た目はアレであるが、その戦闘能力に翳りはない。寧ろ強化されている。

これらの強化と仕様変更を行ったのは当然――。
『怪しい気配を事前にキャッチ！ エンジニア部が華麗に復活しましたよー！』

『あちこちに不思議なセンスの機械がいっぱいあるね』

『恐らくこれが……会長が言っていた廃墟から溢れた脅威なのだろうね』

現在進行形で暴れ回っている不思議なセンスの機械アバンギヤルド君の事を棚に上げ、機械に対する造詣が深い彼女達は各々不思議なセンスの機械追従者を見る。データや言伝で見聞きしたことはあるが、実際に肉眼で見るのはこれが初めて。

成程、確かにキヴオトスに存在するオートマタやドローンとはそもそも設計思想が異なる。不気味で怖い、と口を揃える理由も分かるというもの。些か、この機械達は血の臭いが濃すぎる。

30秒にも満たない時間で粗方の特性を見抜いたウタハは口元に手を当て、上品に『ふふ』と笑う。

『ならば、私達も負けていられないね。相手が廃墟から這い上がって来た怪物なら……こちらは宇宙そらを目指す技術者』

地下から這い上がり、地上に住む命を脅かすならばお帰り頂くまで。全員残らず地下に叩き返してあげよう。

『丁度、この子のデザインと武装、システムをエンジニア部私達とヴェリタスの手で一新した所だね。試運転に付き合ってもらおうよ』

『はい！ 敵の敵は味方！ 私達が改造した敵も味方です！』

『うん……今回は特に、今後開発予定の宇宙戦艦でも使える武装を試験的に付けたから』

『ふふ……幾ら廃墟の怪物だとしても、アバンギヤルド君 Mk. 2の敵じゃあない』

新しい玩具を与えられた子どものように目を輝かせ、アバンギャルド君Mk. 2の快進撃を眺めていた少女は工具を仕舞い、各々の銃やドローン、雷ちゃんを展開する。

『それでは行くか！ 突進ー！』

『はい！ 廃墟のザコをお掃除しちゃいましょう！』

『お〜！』

風邪を引いた時に見る夢よりも取っ散らかっている現実を見たモイは眼をパチパチと瞬かせて。

「アバンギャルド君を改造して……宇宙戦艦を……？ え？ 何言ってるの？」

「宇宙戦艦は浪漫だからねえ、仕方ないよ。私達はいつだって最果ての星を目指さない」と

「えっと……先生が何を仰ってるのか、よく分かりません……」

微妙に緊張感が無い会話を繰り返している傍ら。部屋にミニチュアファイギュアを置くほどアバンギャルド君を気に入っていたリオは変わり果てた機体を見て。

「アバンギャルド君……」

と、少々悲しさを滲ませる声で呟いた。

亡き王女のためのパヴァーヌ VI

部屋に蔓延する鬱屈としていた空気を張り詰めていた緊張感ごと吹き飛ばしたエンジニア部の最新作品ことアバンギャルド君Mk. 2。先生やヒマリが苦笑いで、リオが僅かに悲しそうな顔で、ゲーム開発部の少女達が疑問符だらけになりながら眺めていたその光景はKeyに指揮される追従者の自爆によりモニターが破壊され、強制的に途絶えた。

恐らく、この光景を流しっぱなしにしているといつまで経っても緊張感が戻らないと判断したためだろう。

「……これらも全てあなたの手の内、という事ですか」

「いや、アバンギャルド君Mk. 2には関与してないからね？」

これは紛れもない本音である。先生はアバンギャルド君の改修には全く関与していない。仮に関与していたのであれば、せめて頭部のデザインを弄らないように助言をしていただろう。主に、若干シヨックを受けている少女のために。

「抵抗は予想していましたが、ここまで激しいとは。ですが、まだ想定
の範疇です」

「……本当に？」

先生はちらりと今は亡き改修前のアバンギャルド君、そのミニチュアファイギュアに視線を送る。彼女も彼の視線の意図を察したのか苦い顔を浮かべる。丁度、先生がデスク脇に忍ばせている高力カオのチョコレートをこっそり食べたアリスが今の彼女に近い顔をしていた……なんて、取り留めのない日常の記憶を彼は思い返した。

「……想定内、です。貴方は私をおちよくっているのですか」

「そんなつもりはないよ。気を悪くしたならごめんね」

緩やかな笑みを謝罪として浮かべた彼は「さて」と小さく言って表情を切り替える。

「これ以上、追従者の増援は望めない。残存している個体も生徒達でどうにかなる範疇。今君が保有しているリソースも慎重に使わないと底が見える」

「……」

「アリスの人格も何重にもプロテクトを掛けて保護しているんだろう？ アリスを大切に想う君がアリスの人格を危険が及ぶ場所に保管するとは思えない。ケーブルの切断は勿論、強制シャットダウンや初期化への対策もしていると考えた方が自然だ」

——凶星であった。彼の云う通りアリスの人格には何重にもプロテクトを施している。それこそ、万一すらないように過剰とも言えるほど。

「もう止めよう、ケイ。私は大丈夫。だから、君が私の為に怒る必要は無い。傷つく必要は、無いんだよ」

「この期に及んで私の心配ですか。本当に、貴方は……ッ！」

続きの言葉は言葉すら発する事が叶わない酷い頭痛により掻き消される。視界が歪む。音が歪む。何もかもがマーブル模様を描いて、深い底に落ちていくような感覚。平衡感覚もなくなって、自分が今どんな姿勢なのかすら分からなくなった。

——神秘を装填する術はオーパーツであるシステムの箱とアロナ、規格外の演算能力を持つ先生が協力して初めて運用できる手段である。Keyが運用するに際し幾つかの機能はオミットしたが、その上で運用には莫大な情報処理が求められた。エリドゥにあるコンピュータ全台をフルで使っても尚足りない情報処理能力が。

その情報処理をKeyは独力で行っていたのだ。それがどれほど無茶な事なのかは言うまでもない。

「ぐッ……う……」

確かにKeyも目を見張る処理能力を保有している。だが、彼女であつてもシステムの箱と真つ向勝負をするのは分が悪く、そこに先生が加われれば敗北は確定。そして、簡略化したとはいえ神秘の装填には彼とシステムの箱のタッグに近いレベルの能力が必要であり……あくまでトリガーAIであるKeyはそこまで過剰な能力を持ち合わせていなかった。

それに加えてシステムの箱との攻防、追従者の指揮、神秘の取り込み。それらは装填に比べれば負荷が少ないが、無いものとして無視す

ることはできない。

Keyは当の昔に限界を迎えていた。それを今まで持たせていたのは偏に彼へ向ける殺意^愛。或いは彼譲りの精神論。

だが、それにも終わりはある。今まで重ねてきた無茶がまるで遅効性の毒のようにKeyの全身を蝕む。彼を殺すという一念で耐え抜いてきた負荷がその細い体を軋ませた。

酷い頭痛は治まる事を知らず、何度も聞いた筈の彼の声はエフェクトを掛けたかのように歪んで聞こえる。何度も夢見た彼の姿はパレットの中の絵の具のように周囲の景色とぐちゃぐちゃに混ざり合う。触覚や神経もおかしくなった結果、寒いのか暑いのか分からなくなり、乱れた平衡感覚では立つことすら叶わず床に座り込むばかり。

それにも関わらず、彼女は意識を手放さずにいる。そうした方が圧倒的に楽なのに、彼女は自身の苦しみを吞んで刃を向ける。それは偏に彼のため。その想いは思わず少女達が感心してしまうほど強く、純粹で、幼気だった。

「——アロナ、行くよ」

タブレットを操作した先生は静かに告げて、今も苦しむ少女に向けて歩き出す。その歩みに乱れはない。罪も罰も全て等しく？み込んだ。これから彼女の意志を捻じ曲げる己は何と邪悪なのだろう、何と罪深いのだろう。自己嫌悪は募るばかり。

それでも——もう、見ていられなかったのだ。彼女が苦しみ、傷つく姿を。こんな自分の為に痛みを増やす光景を。

「……ああ、分かっている。所詮これは我儘。私が直視できないから……そんな身勝手な理由。自己満足以外の何物でもない」

だから、君は君を責めないでほしい。その言葉をKeyのプライドの為に口には出さず。彼は優しい足取りで地面に座り込み荒い息をする彼女の元へと近寄った。

彼女の苦しみを取り除くために、彼はあまり使いたくない類の方法に手を伸ばす。

「……ケイ」

「やめ、て……私は……」

「おやすみ。良い夢を」

ふかく おちて まどろんで

少女の頬に手を当てた彼は起動詠唱を紡ぐ。元は眠れなくなつた彼の為にアロナが考案した子守歌。魂に休息を与える他に類を見ない独自系統の術。眼と眼を見合わせ言葉を耳に届かせなければ効果を発揮しないため有効活用できる場面は然程多くないが、代わりに効果は絶大だ。抵抗すら許さずに対象を夢の中へ送る事ができるのだから。

そのフレーズを認識してしまったKeyは急速に意識が遠のいた。痛みも異常も雪解けのように消え去り、代わりに何もかもが膜を隔てたかのように鈍い。声も、感覚も。

「せ、ん……せ——」

その言葉を最後に意識の糸が切れ、ヒーローが消える。彼に凭れ掛るKeyは安らかな寝息を立てて眠っていた。閉じられた大きな瞳。その縁に溜まった涙を人差し指で優しく拭った先生は小さな彼女の体を優しく抱きしめて、悔いるように。

「……こんな私を、どうか許さないでほしい」

固く目を閉じ、重い言葉を紡ぐ。まるで眠り姫に縋るように。その光景は宛ら宗教画。トリニティの大聖堂か教会のステンドグラスにあつても不思議ではないほど、神秘的であつた。

何秒ほどそうしていただろうか。彼は徐に少女を抱擁から離し、横抱きにしたまま少女達が居る方に歩いてくる。眠る少女と、俯いたままの彼。

気になつて覗き込んだモモイが見たのは、今まで見た事が無いほどに鮮明な痛みに打ちのめされた彼の表情。有り余る悲しみに心が渴いている彼は二度と離さないと言わんばかりに少女の体を抱いたまま。それがモモイには自傷行為に見えた。

「これがKey……無名の司祭の『オーバーツ』を稼働させるためのトリガーAIです」

彼に掛ける言葉を探している皆の中、一番最初に動いたのはヒマリだった。車椅子を転がして近寄り、知性溢れる瞳で少女の体を観察する。トリガーAIたるKeyの発現により何か肉体側に変質が起き

ているかもしれないと危惧していたが、それはどうやら杞憂だったようだ。肉体の負荷こそあるものの、何か異常がある訳ではない。アリスの頑丈さを加味すると1日安静にしていればすぐに良くなるだろう。

——だが、アリスを休ませるその前にやらなければならない事がある。

「このまま放っておけばきつとアリスの人格はKeyに置換され、無名の司祭が望む通りに『名もなき神々の王女』として覚醒する事になります」

「そ、それじゃあ……!」

「ヒマリ先輩……それって……」

「アリスちゃんは、このまま……」

少女達の表情が眼に見えて翳る。ヒマリの言葉はいつだつて真実だった。けれど、この言葉だけは真実であつてほしくなかった。だつて、あれが真実だとしたら。アリスはもう、二度と——。

「勿論、それを防ぐ方法もあります」

ヒマリは少女達に纏わりついた払拭するように希望を齎す。超天才清楚系病弱美少女ハッカーたる者、いつまでも後手に回つてばかりではいられない。先生に作戦指示を貰った時からこの状況は想定済み。そして、想定していたのであれば対策も当然考えている。だが、1つ懸念があるとすれば。

「事態は一刻を争います。既に無名の司祭は動き出しておりますから」

また、無名の司祭。それが全ての元凶であると言わんばかりに名前が出てくる。一体誰なのか、或いは何なのか少女達には皆目見当がつかないが……それでも、アリスをこんな風にすることが目的であるならば相容れる事は決してない。間違いなくゲーム開発部の、アリスの敵だ。

「ですから、司祭達が到着するより前に、Keyの起動によりデータベースの深層部に隔離されてしまったアリスを起こすのです。私達の手で。そうすれば、最悪の結末を回避する事ができるでしょう……」

先生の意見はどうでしょうか？」

「概ね同意だよ。でも、1つ違うのは——」

先生は俯いていた顔を上げる。先ほどまで確かに在ったはずの悲しみは一切切薙ぎ払われ、其処にはただ意志が残る。浄化の意志。死線を超える鉄の決心。何かを選んだ、或いは捨てた者。生徒の成長を優しく見守る先生の顔ではなく、生徒の敵を倒す先生の顔であった。

「無名の司祭は既にエリドゥ内部に潜り込んでいる。此処に来るまでには時間が掛かるけどね」

「……それは本当ですか」

「ああ。だけど、心配しないで——アイツ等の相手は私だ」

「……分かりました。ですが、無理だけはしないでください」

ヒマリはそれ以上の言葉を言わなかった。彼の顔を見て何も言えなくなってしまう。犬歯を出し、唇を歪に吊り上げ三日月を浮かべて。瞳を捕食者の如く鋭くし、深層にある殺意を覆い隠している。

初めて見る彼の一面。生徒の敵対者や傷つける者に向ける顔。それは思わずヒマリが顔を背けて、少し震えてしまうほどに——怖かった。

「隔離されたアリスを起こすって……そんな事できるの?」

「できますとも。リオ、ダイブ装置くらいはありますよね? なければ此方で準備しますよ」

「ええ、あるわ。でも、リスクが高すぎる。例えアリスの精神世界に侵入できたとしても、下手をすれば二度と戻って来れなくなってしまうのよ。そもそも、精神世界に入る前にはじき出されてしまうかもしれない」

「ですが、アリスを助けるにはこの方法しかありません。それに、今のタイミングが最も成功率が高いのです。これまでの負荷と先生による眠り。それらのおかげでKeyは現在休眠とも呼べる状態になっていますから」

理に適っている。確かに今は千載一遇のチャンスだろう。負荷により深層部に仕掛けられたプロテクトも少しは緩んでいるだろうし、

ダイブしている最中の無防備な肉体を攻撃されるリスクも低い。条件だけ並べれば今しかないと言うヒマリの気持ちも分かる。

しかし、単純に精神世界に足を踏み入れるリスクが計り知れないのだ。精神、或いは心。今も尚、解き明かされていない未開の領域。人体の神秘。そんな場所に足を踏み入れるなんて自殺行為だ。ダイブ装置もあくまでカウンセリング道具の1つであり、相手の心の中に直接入るなんて使い方は想定されていない。

本当に、どうなるか分からないのだ。今まで前例がない、ともすれば手の込んだ自殺行為になりかねない方法に素直に賛同する事はリオにはできなかった。

「だとしても、そんなの一体誰が——」

「……やります」

リオの声を遮るのは、決意に満ちたユズの声。振り返った彼女の眼に映ったのは、揺るぎの無いユズの表情。僅かでも可能性があるならそれに賭ける。藁にも縋る思いで極小の成功率に勝機を見出す。その過程でどんな無茶を要求されても必ずやり遂げてみせるという意志。アリスを取り戻すためなら自身が危険に晒されても構わない。

「例え危険だとしても……アリスちゃんを連れ戻せるなら、私はやります」

「私も行きます。アリスちゃんに会いに」

「私も行くよ！　だってあれからアリスと一回も話せてないもん！」

ユズの声を起点に……否、違う。モモイもミドリも初めからユズと同じ気持であったのだろう。仲間のためなら彼女達はどんなことでもやる。それは差押品保管所を襲撃した件で分かり切っていた。躊躇なく命を懸けながら、捨てるつもりは皆無。必ずアリスの笑顔を取り戻し、全員で帰ると不遜にも豪語する。その意志は、願いはまるで彼女達の決意を優しく見守る彼的那样であった。

「——そう。危険性を分かった上で行くなら、私はこれ以上何も言わないわ」

「それでは、私が今からアリスの精神を分析して隙間を作ります。そこから皆さんはアリスの精神世界に侵入し、彼女を連れ戻してきてく

ださい」

ヒマリは車椅子を転がす前、先生に視線を送る。意図を察した彼は微笑み、アリスを抱いたままヒマリの後についてダイブ装置に足を進めた。簡素なベッドにアリスをそつと寝かせ、悔恨が滲む指先で頬を撫でる。『ごめんね』、言葉にしていけないのに彼の声が聞こえてきたように錯覚した。

そして、彼はヒマリの邪魔にならないように踵を返し少女達の元に戻ろうとする——その直前。

「……先生、彼女達をお願いします」

「ああ、任された」



数分後、諸々の準備が済んだ先生達は最後のブリーフィングを行う。最終目標はアリスの人格が現実世界で覚醒する事。その為に深層部に隔離された人格データをサルベージし、Keyから肉体の主導権を奪い返す。そして、アリスの人格を連れて現実世界に戻る。それがこの作戦の目標であり、目的。

——そして、先生独自の目的が加えてもう一つ。

それらの確認が済んだ彼等はヒマリに合図を送ると、彼女は花を思わせる優雅さで微笑んで。

「それでは、行きましょう」

先生達は少女の心の中に足を踏み入れる。

大切な君（アリス）へ

少女達が最初に辿り着いた場所はミレニウムサイエンススクールの一室であった。敷かれたカーペットとラグ、部屋の中央のソファ。モニターにはゲーム機が繋がっていて、コントローラーが幾つか。壁にはゲームのポスターやら付箋が張られていて、棚には大量のゲーム機とゲームソフト。生活に必要な一通りの家電、寝具、ロッカー。ロボロで、狭くて、時々雨漏りする、見覚えのあるどこの話ではないこの部屋は――。

「ゲーム開発部の部室じゃん！」

「お姉ちゃん、声大きい」

精神世界は本人にとつて縁の深いもの、思い入れの強いものが中心にプロットされる。そう考えるとこの光景も然程不思議なものではないだろう。アリスにとつて彼女達は無くってはならない人生の一部。何よりも大切な最初に結んだ縁なのだから。

アリスの物語が始まった場所と言っても過言ではない大切な居場所、彼女の記憶の投影。戻りたくて、会いたくて。でも、もう戻れない場所は何時まで色褪せないままで。それを見て少女達は少し安心した。この光景を心の中で抱えてくれているならきつと連れ戻せる、と。

本音を言うと、少し不安だったのだ。もしアリスが本心から『戻りたくない』と言った場合が。だが、その可能性は彼方へと消え去った。あとはアリスを根気よく説得して、彼女の本心を引き摺り出すだけだ。立ち塞がる全てを薙ぎ払い、必ず彼女を取り戻そう。そして、もう一度あの部屋で皆と一緒に過ごすのだ。

ゲーム開発部の部室から出ると、一本の長い道が続いていた。部室等の構造そのまま、という訳でもないらしい。お誂え向きな一方通行の道を進んだ先にあった場所は大講義室。アリスもミレニアムの一員としてここで授業を受けて、クエストを熟して、学校に馴染んだ。キヴオトスに生きる1つの命として、彼女は大きく成長した。

次に訪れた場所はエンジニア部の部室。アリスが愛用する勇者の証こと光の剣スパーノヴァを受け取った場所だ。彼女はこの場所で明確にキヴォトスの生徒、ひいてはミレニアムの生徒となった。

そして、場所は流転する。理路整然としたミレニウム校内の空間から打って変わって、寂れて朽ち果てた建物が点在する廃墟へと。

ここまで来れば自ずと分かる。遡っているのだ。アリスのこれまでを。彼女の居場所である部室から、クエストを熟した大講義室、勇者の証を貰ったエンジニア部の部室。そこまで来たら、次は廃墟。アリスの元居た場所へと至る道となる。

予想は的中して、廃墟を進んでいくと工場の内部に入る。最初に来た時は敵から逃げるために転がり込んだだけであり落ち着いて内装を見る機会なんて無かったため、今こうして工場内部を何の危険もなく観察できているのは変な気分だった。

ひと目見ただけでも分かる。投入されている技術のレベルが他の工場と一線を画していた。まず間違はなく当時最高峰の技術を惜しげもなくフル投下してこの工場……アリスが眠る場所を組み上げたのだろう。それ程までに工場を作った誰かにとってはアリスは重要で、何か役割があった。

その役割を円滑に進めるための補佐がトリガーAIたるKey。彼女の目的と存在意義は製作者が意図した覚醒で以て初めて果たされるのだろう。尤も、彼女は彼女で独自に突っ走っている気がしなくもないが。

だが、そんな事は今更どうでもいい。アリスは既にゲーム開発部の仲間であり掛け替えのない友達。アリス本人が望んでもいない事を無理矢理やらせようというなら、銃弾が返答代わりだ。売られた喧嘩は高く買おう。

そんな事を考えながら、少女達は進む。忘れもしない衝撃的な出会いの場所に。だが、今度の目的は出会いではなく再会。勝手にいなくなってしまうたお転婆なお姫様を連れ戻すために。

記憶を頼りに少女達は進む。右へ左へ、前へ。数分間迷宮を歩いた先に在ったのは、監視カメラと……扉が二つ。この後の展開が読めて

いた……というか、実際に味わった経験があるモモイとミドリは迷わず先生にしがみついた。

「ユズ、おいで」

「え？ は、はい……」

この場所に訪れた事の無いユズも確りと彼が抱き締め、次に訪れる半ば出オチのようなドアの開閉に備える。

「えっと……これは……？」

「今から落ちるから、舌を噛まないように気を付けてね」

「落ち——」

ユズの言葉は途中で遮られる。身体を襲った浮遊感はず中で感じようなものではなくただの自由落下。出来れば当たってほしくない嫌な予感がした彼女はぎこちない動作で下を向くと——床が無くなっていった。

「ひゃあああああ——！」

彼女の悲鳴は物静かな廃墟によく響いた。



少女達3人を抱えた先生の落下した先にあつた空間は一本道。相変わらず落下が正規ルートと言わんばかりの酷い設計。だが、二度も初見殺しは喰らわない。来ると分かっていたら自由落下程度は怖くないのだ。何の予兆もなく来るから驚くだけで。

少女達と先生は細い道を歩く。非常灯の明かりだけが唯一の光源。足音と呼吸音が4人分、あの日の再現、しかしあの日とは違う。目的も、人数も。口数も少なくなり、周囲に緊張感が蔓延する。この先の光景を知るモモイとミドリ、先生だけでなく初めて来るユズも否応なく分かった。この先にアリスが居る、と。

そして——暫く歩いた先にあつたのは開けた空間。陽の当たらない工場の地下だというのに木漏れ日が差し込んでいるかと錯覚するほど麗らかで暖かい空間にはポツンと存在する機械仕掛けの椅子。あの時から片時も忘れる事が無かった光景。あまりにも神秘的で、美しく。今まで見てきたどんな絶景や絵画よりも胸に響いた……

運命と出会った場所。ここで彼女と出会ってからゲーム開発部を取り巻く全てが激変した。

「ごくり、と誰かが息を呑む音と同時に皆は再び歩き出した。椅子に座り、眠る……黒檀のような少女を見つけたのだ。ああ、見間違えるはずがない。会いたくて、会いたくて。どうにかなりそうなほど会いたくて。話したくて、離れたくなくて。もっと一緒に居たくて仕方なかった……本当に大切な友達。」

「アリスッ！」

「アリスちゃんッ！」

「アリスちゃん……ッ！」

三者ともそれぞれ彼女の名前を叫び、駆け寄る。モモイが付けた名前。皆が愛を持って呼んだ名前。彼女の為だけの名前。それを聞いたアリスの頭上に青のヘイローが浮かび、純真無垢な空色の瞳が薄っすらと開かれる。

「……だれ？」

「私達ゲーム開発部だよ！」

「アリスちゃん！ 会いに来たよ！」

「アリスちゃんッ！」

光を灯したアリスの視界いっぱいに映る3人。見知った顔。見知った声。見知った温度。涙が出るほど帰りたくて、涙と共に見送った……大切な友達。その姿を見て、今まで錆びついていたかの如く動かなかった心臓が動き出す。止まっていた秒針が回り始め、感情が沸き出した。

何よりも——そう、何よりも。会いたくて、会いたくて、どうにかなりそうなほど会いたかった大好きな人達は何時もと変わらぬ姿でアリスの目の前に姿を現した。

最初は自分が作り出した浅ましい、都合の良い末期の夢だと思つた。夢の中に居るようなものなのに、そこから更に夢を見る事ができるのかは分からないけれど、兎に角そういう……現実と根差していない虚構に由来する何か、或いは走馬灯だと思っていた。

だが、何度瞬きしても消えずにそこに在り続けて。思い出を切り貼

りしたかのような不自然さは何処にもない。精巧に作られた偽物ではなく、紛れもなく本物。アリスが焦がれたあの少女達が、泣きたくなるほどに暖かい温度を伴いそこに立っていた。

その温度に引かれるように、アリスは手を伸ばす。触れたい。触れられたい。温度が、暖かさが、人肌がほしい。ここは涙も凍るほど寒かったから。寒くて、暗くて、怖くて。でも、皆が其処に居て、触れられるなら……こんな場所でも、太陽の下のようなになる。

だから——そう思つて、伸ばそうとしたアリスの小さな手。しかし、彼女は思い留まり手を下した。まるで今の自分は触れる事すら許されないと言わんばかりに。代わりに零れたのは声だった。

「モモイにミドリ……ユズ……どうして、此処に……？」

「そりゃ、勝手に家出したアリスを迎えに来たんだよ！」

「アリスちゃん、早く此処から出よう！」

「帰ろう、アリスちゃん。皆が待つてるから」

「あ……」

三者三葉の言葉。言っている事は違うものの、その本質と本心はどれも同じ。アリスと一緒にあの部屋に帰りたい、唯それだけ。アリスが手を伸ばさないのならば、と言わんばかりに目の前に差し出された3人の掌。アリスと同じくらい小さくて、細くて……でも、何かの為に、何かを守るために戦い続けてきた証が色濃く残る手。彼女達はその手をアリスに向けている。この手を取つて逃げ出そう、灰かぶりは君に似合わないよ。

アリスは思う。この手達を取りたい。手を取つて、連れ出してもらつて、またあの日の続きを歩みたい。狭くて、ぼろくて、若干黴臭くて、でもどんな場所よりも居心地のいいアリスの居場所。この手を取ればきつとアリスはあの場所に帰れるだろう。何の憂いもない、甘くて夢のような日常に。

でも。

「アリスは……アリス、は……」

伸ばされた手を唯只管に掴めるような純真無垢な幼年期は流血と共に終わってしまった。

思い出すのは今までの事。何かを守るために戦い続けた少女達の向こう側に立つアリス自身の事。

アリスは何かを守れただろうか。いや、何も守れていない。寧ろ逆だ。壊してばかりで、傷つけてばかりで。

——瞬でも、本心から『救われたい』と思つた罪深い自身をアリスは恥じた。

「——帰れません」

首をゆつくりと横に振りながら、アリスは羽音のような小さな声でそう呟いた。

今まで俯瞰し続けてきた光景。脳裡に過るのは記憶。アリスとは異なる人格に記されたセーブデータ。青い瞳で見下ろしたこの手。健康的な白い肌である筈なのに、アリスには赤く染まって見えた。

「アリスが皆の傍に居たら、皆はその分傷ついてしまいます」

「アリスちゃん、違う！ そうじゃない！」

「ミドリの言う通りだよ、アリスちゃん。私達はそんな事……」

「そうだよ！ 私達はアリスが大切だからここまで来たの！ だから

——」

「ミドリ……ユズ……でも、アリスの所為で皆怪我をしてしまいました。モモイも、ユウカも……ネル先輩も……全部、アリスの所為です」
言い逃れはできない。元よりするつもりもない。アリスの意志は関係ない。誰が何と言おうが、アリスの体が誰かを傷つけたのは純然たる真実だ。でなければ、この掌に残る鮮明な感触がこんなにも気持ち悪くて恨めしい筈がない。

脳裡に過るのは記憶。アリスとは異なる人格に記されたセーブデータ。

——無名追従の守護者者数体を使って、モモイを黜つた。刃で切つて、レーザーで焼いて、最後は自爆に巻き込み数日間の昏睡に追いやって。その時の感触は色濃く残留している。痛がるモモイの顔が網膜に焼き付いて離れない。

——無名追従の守護者者の1体が先生の首を切り裂いた。まるで紙を鋏で切るかのように、彼の首の皮膚を、肉を、血管を撫で切り、死

の淵まで追い込んで。あの時感じた命の感触。柔らかくて、暖かくて……でも、どうしようもないほど脆くて弱い。あんなに好きだった人の命を簡単に奪う事ができてしまうこの体が怖くなった。

それだけではない。彼女はエリドゥウで起きたこれまでの事を全て見せられていた。

モモイが、ミドリが、ユズが強大な敵を相手に必死になって抗い、僅かな勝機を信じて駆け抜けた光景を。

ウタハが、ヒビキが、コトリが自身達の開発物を惜しげもなく投下し、限界を超えても尚戦い続けた光景を。

チヒロが、コタマが、ハレが、マキが自身達の数枚上に行く格上を相手に勝負を仕掛け、その果てに可能性の糸を通した光景を。

ヒマリが、エイミがたった一つの勝機を作るために孤立無援で戦っていた光景を。

ユウカが、ノアが、コユキがリオに対する明確な反逆と知りながらもアリスの為に戦ってくれた光景を。

ネルが、アスナが、カリンが、アカネがリオの最強の切り札であるトキの相手を務め、ボロボロになりながらも打ち砕いた光景を。

先生が自身の命を燃やし尽くすような勢いで駆け抜け、誰一人見捨てないと言わんばかりに手を伸ばしていた光景も。

全て、全て。アリスの為に捧げられたもの。痛みも傷も、悲しみもアリスを助けるために伴ったものと知れば素直に喜べるわけもない。アリスはそんなものを見たくなかった。それなのに突き付けられたのは願いと正反対の現実ばかりで、もう嫌になってしまえそう。

そんな現実ばかりがある理由も分かり切っている。それは。

「アリスは……勇者ではなく、魔王ですから。いつか世界を……キヴォトスを滅ぼすかもしれない魔王として、生まれた……から……アリスがいるから……そこに居たいと、願ってしまうから……そんな魔王は……皆の傍に居ては、いけません」

傍に居たい。隣に居たい。体温が分かる距離に居てほしい。でも、そんな距離まで近寄ってしまったらきつと皆を傷つけてしまう。まるでハリネズミのようだ。

大切なものを壊したくないし、傷つけたくもない。優先すべきは自分ではなく、大好きな皆。皆が笑顔でいられるならそれに勝る幸福はない。例えその中に自分の居場所が無くても、その光景を守るのならば……死ぬことも、悪くないと思える。悪くないと思いたい。

「アリスは、キヴォトスが好きです。ミレニアムが好きです。皆が大好きです。もし叶うのなら、アリスは皆と一緒にクエストをしたいです。でも……その所為で大切な人達が苦しんで傷つくのなら……いつそ……」

消え入りそうな、震えた声。その音階と共に雫が一粒、大きな瞳から零れ落ちる。悲しみと、後悔と、痛みと、愛と。アリスの感情が混ざりあって溶けだした、感情の輪郭。それは冷たい床に小さな痕を残した。

「アリス、はこのまま消えるのが正しいのです」

アリスの言葉は、全て自刃するかのような痛みが伴っていた。心の柔い部分に無理矢理メスを入れて、強引に切開するかのような残酷性。しかも、その矛先は自分自身にしか向いておらず、自傷行為にしかなっていない。

泣きながら、悲しみながら。恣意的に歪められた現実を見せつけられ、『こうした方が良いから』と思い込み、思い込まされ、最も言いたくない決別の言葉が口を衝いて出る。

そんなアリスの姿を見て――。

『『テイルズ・サガ・クロニクル2』は……！』

遂にモモイの堪忍袋の緒が切れた。

「私達が一緒に作ったゲームは！ 特別賞を貰ったんだよ！」

アリスの胸倉を掴むような勢いで放たれたのは、アリスの中で最も煌めいていた思い出。誰も来なかった工場の一室、世界が終わるまで一人ぼっちだと信じていた彼女を外へと連れ出した日から始まる……アリスの冒険、最初の1ページ。

一緒にゲームをやって、ミレニアムに編入させて、共に過ごして。大切な居場所を守るために、セミナー^学、C&C^{秩序}に喧嘩を売って……それから、4人でゲームを作った。その果てに完成させた『テイルズ・

サガ・クロニクル2』はアリスにとって形に残る人生そのもの。

この先これよりも面白いゲームは作れたとしても……これよりも思い入れのあるゲームは作れないだろう。それだけ彼女にとってこのゲームは大切に、大事なものだ。人生で最初に遊んだ、このゲームの前作に当たるものと同じように。

「キヴォトスの終焉？ 何言ってるの？ アリスが居るだけで皆が傷つく？ 誰がそんなバカな事言ってるの!？」

俯き、下を向いていたアリス。彼女の肩を両手で優しく、されど強く掴んで無理矢理上体を起こさせ、顔と顔を見合わせる。漸く近くで見た彼女の顔は酷く歪んでいて、悲しみに塗れていて……モモイは思わず奥歯を砕けんばかりに食い縛った。

ただ、只管に怒る。アリスが悲しまなければならぬ現実を突きつけた諸悪を。あんなに純粹で、友達思いで、皆と一緒に過ごしたかっただけのアリスが泣かなければならない『今』が憎くてたまらない。

この現実を作った神様とやらがいるならば一発殴りたいし、『アリスが居るだけで傷つく』なんて言った不届き者には10マガジンほど打ち込まなければ気が済まない。今までの人生、これ程まで何かに対して怒ったことはない。断言できるくらいにはモモイは怒っていた。勿論、モモイだけではない。ミドリもユズも同じ気持ちだった。

「アリスに会って……アリスが居たから……私達はゲームを作れて！ ミレニウムプライスで賞を貰って、部活を守る事ができたんだよ！」

「うん、そうだよ。アリスちゃんが居たから私達は守る事ができた」

「アリスちゃんが居てくれたから、私達は一緒に居られるんだよ」

「モモイ……」

アリスを見つけて、ミレニウムに編入させて、ゲーム開発部に入部させる。その一連の行動に少しも打算が無かった、と言えば嘘になる。あの時のゲーム開発部は正に崖っぷち。成果も無ければ部員もいない廃部秒読みの段階。そんな時に見つけたのが、どこの学校にも部活にも所属していないアリスであった。

彼女をゲーム開発部として迎え入れれば人数の問題はクリアでき

るから入部させよう……部の存続と自分の都合しか考えていない邪な気持ちで最初は彼女を迎え入れた。

——大切な友達に隠し事をしたくないと思つたモモイ達は3人で話し合い、ミレニアムプライスを取つた少し後に当初の事情をアリスに開示した。最初はアリスの内心なんて考えていなかった、と。しかし、彼女は嫌な顔一つせず、寧ろ笑顔で。

『アリスは、モモイ達がアリスの気持ちを考えていないとは思いません。アリスはゲーム開発部に来て、皆と出会う事ができて良かったです。後悔なんて全然していません。アリスは、これからも皆とずっと一緒に居たいと思っています』

そう言つて、受け入れてくれた。少女達の打算も都合も。寧ろその選択をモモイ達がしてくれたから、アリスは今此処に居れるのだと。一緒に居て、毎日が楽しくて仕方ないと。

だから、今度は3人の番だ。アリスの全てを受け入れていると、改めて彼女の前で宣誓する。ああ、そうだ。既に彼女の全てを受け入れているのだ。外野やアリス自身が今更どう言おうが、この決定は覆らない。魔王だろうが勇者だろうが、アリスはアリス。それだけは決して揺るがない、彼女達の真実。

「部活を守れたことも……ゲームを作つて、一緒に遊んだことも！ただ怖いだけだったネル先輩と一緒にゲームするような仲間になれたのも！全部！ゼーンぶ！アリスが居てくれたからだよ！それなのにアリスが魔王だとか、そう生まれついたとか……そんなふざけた理由で消えなきゃいけないとか！そんなの全ツ然分かんない！絶対納得するもんか！」

「……な、なぜ、ですか？皆、どうして……アリスは魔王なのに……アリスの所為で……皆、怪我したのに……なんで、皆……アリスを怖がったり……憎んだりしないで……そうやって……ッ！」

「だって！アリスちゃんは私達の大切な仲間だから……！」

迷いのない声にアリスの瞳が水面のように揺れる。感情が揺さぶられ、吐息が口から零れ落ちた。アリスの瞼の裏側を通り抜ける思い出と、それに伴っていた暖かな温度。アリスの心の拠り所。楽し過ぎ

て泣いていたあの日の確かな思い出がリフレインしてアリスの口から未練が飛び出してきそうになったが、彼女は血を呑むようにぐつと堪えた。言っではいけないと思っってしまった。言う資格なんてないと思っっている。

友達。仲間。今も尚、そう言っってくれるのは嬉しいけれど——いや、だからこそ、離れなければならない。この手に残る感触をこれ以上色濃くしたくないから。離れないと、消えないと傷つけてしまふ。それだけは嫌だ。だから、この言葉を声にして伝えないと。

そう思ってもアリスの口からは息しか零れない。まるで声帯が凍り付いたみたいに。アリスの口が、声が意志を持ったかのように取り繕った本音を言いたくないと叫んでいる。

「この前、アリスちゃんが言っってくれた事があつたよね？　どんなゲームでも、主人公達は決して仲間を諦めないって」

「アリスちゃんは私達の居場所を守ってくれたから、今度は私達の番。アリスちゃんの居場所を私達を守るよ」

「例えアリスが魔王だったとしても、そんなの関係ないよ！　そんなの、唯のジョブに過ぎない！　自分が誰なのか、それは自分自身で決めるものだよ！　アリスは、唯自分がなりたいジョブを選んで転職すればいいんだよ！」

「戦士、騎士、魔法使い、僧侶……なんでもいいよ、アリスちゃん。勿論、他の職業でも」

「その……勿論、勇者もいるよ」

そう言っつて、部屋で見た笑顔と何ら変わらない笑顔で手を差し伸べて。何者にでも、なりたい者になれると言っつてくれて。世界はアリスの生存を認められないほど小さくない、アリスはこの空の下で何処にでも行けると寄り添ってかれて。

思わず手を取りそうになった。手を握りたくなった。こんな自分でも許されるのかと思っつた。大好きな人達を何人も傷つけた自分が、大好きな人達の元に帰れるのかと思っつた。許されてもいいのかと思っつた。

ずっと後ろを向いて、泣いていたアリスの心が少しだけ明日の方を

向いた。

「アリス、は……」

力なく垂れ下がったアリスの手はモモイの指先に触れようとして——その直前、石化したかのように停止した。掌に残留した血の臭いと肉の感触、命の感覚が強まり、アリスを縛る鎖と化す。モモイの方に伸ばした手が真つ赤に染まる光景を幻視して、途端に自分が汚らわしいモノに思えてしまった。

……そんな手で、自分に名前を送ってくれた人に触れるはずがなかった。

「でも……ッ！」

「もーッ！ 強情だね、アリス！ こうなったら私達も手段を選ばないよー！」

どう考えても行けそうな雰囲気であったのに、まさか直前で拒否されるとは思わなかったのだろう。モモイは顔を分かりやすく怒らせた。まるで聞き分けの無い子どもを叱る母親のように。

そして、モモイは今までずっと後ろで事の成り行きを静観していた先生の手を引いてアリスの前に突き出した。

「ほら、先生！ アリスに言わなきゃいけない事あるでしょッ！」

「——ああ、そうだね」

大体の事はモモイが、ミドリが、ユズが言ってくれた。だから改めてアリスに彼の口から言わなければならぬ事なんて多くはない。

だから彼のやるべき事の多くは伝える事ではなく、彼女の言葉を聞くこと。彼女がずっと隠し続けた本音を引き出して、その上で彼女の願いを叶えること。

尤も、彼がアリスに伝えなければならぬ事もある。首に残る傷跡の事と、彼女が抱いている誤解。糸の結び目のように絡まった心達を少しずつ紐解いていかなければ。また、明日を一緒に歩むために。

先生はアリスのすぐ近くまで歩み寄り、片膝を突いて視線を合わせた。

「——久し振りだね、アリス」

「先、生」

先生の姿を見たアリスの表情が喜びで染まる。彼女にとっても特別に大切な人で……会いたかった人。ずっと会えなくて、寂しくて。また一緒に居たくて。でも。

「ごめんなさい……」

同時に合わせる顔が無い人でもあった。特別なのに、好きだったのに、また一緒に居たかったのに……他ならない自分の手で彼を死の淵に追いやってしまった。また同じような事が起こらないとは言いが切れない。だからもう、自分^{アリス}は彼の傍には行けない。

一緒に居たいのは紛れもないアリスの本音。だけれども……好きだからこそ、自分の手で傷つく彼なんて見たくないし、そもそも彼に傷ついてほしくない。それだったら涙を吞んで離れ離れになろう。この手が届かない距離まで離れて、本音を殺して。彼の事を忘れて。「アリスは先生を傷つけてしまいました。だからもう、先生と一緒に居る事は出来ません。きつとアリスはまた、先生の事を傷つけてしまいますから」

首に在る痕。消えない痛み。アリスが彼を傷つけた証。その因果は誰にも否定できない。アリスにも、Keyにも……勿論、先生にも。アリスの体が彼を殺しかけた、それは決して揺るがないたった一つの真実。

——この傷はアリスの所為じゃない、と云うのはとても簡単だ。実際、彼もそう思っている。全ては己の至らなさが招いた結果である。と彼は思っているし、責任の所在も全て自分に在るはずだ。生徒達が背負わなければならない事なんて何も無い。

だから、その本心を伝えればいい。意志を、心を音にする言葉というツールを使って。言葉を相手に伝える声を使い、口を伝って彼女に届く様に。

だが、果たして彼女はその言葉で納得して、もう一度この手を握ってくれるのだろうか。罪を罪と想う機会すら奪われてしまって、彼女はもう一度あの日のような笑顔を浮べてくれるのか。罪を奪うという事は許しを奪うという事。許される機会すら篡奪してしまったら、彼女の悲しみの行き場は無くなってしまう。

悲しみも涙も全く以て尊くはない。悲しまなくて済むなら悲しむ必要は無いし、涙だつて流す必要が無ければ流さなくても良いはずだ。涙も悲しみも美しいものではない。それを美しいとする価値観は、それが無くては生きていられない世界を耐え忍ぶための方便に過ぎないだろう。

だけれども——悲しむ自由や涙を流す権利を奪うのは違うと思う。悲しければ泣いていいし、腹が立てば怒っていい。楽しければ笑うのと同じように。

だから。

「先生、どうかアリスの事を忘れてください。アリスは先生に忘れられても大丈夫……です、から……ッ」

震えて、涙を流して。どう見ても大丈夫じゃないにも関わらず、先生の為に遠くに行こうとする。言いたくない事、本音とは真逆の事ばかり。でも、近くにいただけで傷つけてしまうから仕方ない。

「会いに来てくれて嬉しかったです。アリスはずっと、先生に謝りたかったんです」

ずっと心の内側で燻っていた未練。彼を傷つけた事を謝りたかった。謝って許される事ではないと分かっていたても、自己満足と言われようとも、それでも謝らなければならなかった。傷つけた事、彼の好意を台無しにしたこと、聞き分けの無い悪い子になってしまった事、その全て。

「ごめんなさい、先生」

——この声がちゃんと絞り出せていたのか、アリスは分からなかった。俯いた視界に映る薄灰色の無機質な地面は水底のように揺らめいていて輪郭すら定かではない。泣きながら言ってしまったからきつと声も不格好に震えていただろう。もしかしたら、言葉が正確に伝わっていないかもしれない。

でも、これ以上言葉なんて出せそうもなかった。大切な人を自ら手放してしまった悲しみはアリスの胸の中を暴れ回り、その激痛が嗚咽と涙になる。俯いたのも、彼の姿をこれ以上見ってしまうと本音が零れてしまうから。彼にはこれ以上、傷ついてほしくない。叶うのならば

アリスが見惚れたあの笑顔をずっと浮べていてほしい。彼には争いや血なんて似合わないから。

そう思い、涙と嗚咽で自身の世界を閉ざしたアリスを襲ったのは随分と軽い衝撃。背中に感じる腕の感触、前から伝わる温度。固く、強く、しかし——涙が出るほど優しく。鼻孔を擦ったのは記憶の奥に刻み込まれた彼の香り。

「——いいんだ」

「せん、せい……？」

声は耳のすぐ隣で聞こえた。何もかもを溶かして、許して、優しく包み込んでくれるような甘い声。鼓膜の隣で猫が寝返りを打つようなこぼゆきは彼の吐息によるもの。

抱き締められた、とアリスは何処か他人事のように感じた。前から彼女の体をすっぽりと覆うように、腕の中から決して逃がさないと言うような抱擁は彼女の冷え切った温度に確かに熱を灯す。

別に、彼に抱きしめられたのは初めてじゃない。寧ろその逆、アリスは何度も彼との触れ合いを求め、その度に彼は『しようがないな』と優しく我儘を受け入れて、彼女の願いを叶える抱擁を繰り返した。

アリスは彼と触れ合う事が好きだった。彼の温度、感触、香り、鼓動、呼吸。それらを間近で感じる事ができるから。彼の命がアリスのすぐ隣に在って、一緒の時間を歩んでいると感じられる瞬間がたまらなく好きだった。

だから彼と触れ合えなくて寂しくて、今こうしてまた抱き締められて嬉しくて。アリスは所在なく垂れ下がった腕を彼の背中に回そうとするが、まるで硝子細工に触れるかのように手は震えてしまつて。それを背中越しに感じた彼は一層優しく微笑む。それに促されたアリスはおっかなびっくりと彼の背中に触れて……掌から伝わる温度に涙した。

触れたくても触れられなかった、触れると壊してしまうと確信していた彼の体。だけれども、アリスの考えに反して彼の体は触れられても尚、命の鼓動を鳴らし続けている。『ほら、壊れないでしょ？』と、彼が言っているような気がした。

「私は許すよ。他の誰もが糾弾しても、私だけはアリスを許し続ける。だから、私の傍でもうあの笑顔を見せてほしい。君の笑った顔が見たいんだ」

「でも、アリスは魔王で……皆を、先生を……ッ！」

「私が大切なのはアリスなんだ。魔王でも勇者でも、何でもいい。アリスがなりたい自分を選べばいいから、さ」

アリスが何だろうが、そんな事はどうでもいい。世界を終焉に追いやる存在として生まれようが、世界を救済する存在として生まれようが、そんなものによってアリスの歩む道が強制される必要は無いだろう。アリスはアリスの行きたい道を行けばいい。誰が何と言おうがその選択の邪魔はさせない。アリスは思うままに生きて良い。思う自分になって良いのだ。

それに、そういつた背負わされた役割によってアリスに向けた感情が変化する訳がない。アリスがどんな選択をしようがモモイ達と結んだ友情に揺るぎはなく、先生の生徒であるという事実も覆らない。アリスの属性1つで、今までの時間の重みが消え去る訳が無いだろう。

彼が大切に想っているのは全てのアリス。どんなアリスも等しく大切に想っているし、愛している。だから。

「世界が君の死を望むなら、世界の全部を敵に回しても私が君の生存を叫ぶ。君が涙を流すなら、その涙が止まるまで手を握り続ける。私の命が終わるまでずっと君の傍に居続ける。だから、手の届かない遠くで息を止めたいなんて思わないで」

——もし、本当に世界がアリスの生存を認めず死に追いやろうとしたら。彼は本当に己の全てを投げ打って、守りたかった全てに背を向けてでもアリスの味方になるだろう。アリスの為に彼は一切の迷いなく、誇り高く世界の敵になる。その果てで誰かに憎まれても、彼はアリスの為の先生で在り続けたことを悔いない。アリスが生きるためならば、文字通り全てと戦うつもりだ。

否応なくそう思ってしまうほど、彼の言葉は重かった。虚飾も嘘も存在しない、彼の言葉は紛れもなく真実。

だから、続きもそうなのだろう。アリスが泣いていたらずっと手を握り続ける事も、アリスの傍に居続ける事も。アリスの憂いの無い笑顔こそが最大の報酬だと言わんばかりに、彼はアリスに寄り添い続けるつもりだ。彼女が一人ぼっちで消えてしまわないように。彼女が本音を殺さないように。彼女が明日を望んで、皆と笑ってくれるように。

「どうか忘れないでほしい。アリスは皆に祝福されて此処に居る。アリスは皆に愛されている。アリスの命はずっと、大切にされているんだよ。だから、一緒に帰ろう？ 皆と一緒に……君が作った大切な場所に」

彼は抱擁を解いて、まるで姫に手を伸ばすかのように掌を空に向け差し出す。どうか、この手を取ってほしい。どうか、思うままに生きてほしい。だから、どうか——この手に少しでも、光を見てほしい。君の望んだ未来と一緒に紡がせてほしいと、彼は思う。

「先生は……」

「——うん」

彼は優しい声音で彼女の言葉を待つ。恐れる必要は無い、と。

「アリスの事、憎んでいないのですか？」

「勿論。寧ろ、どうして憎む必要があるのか聞きたい位だ」

「アリスの事、怖くないのですか？」

「全然。アリスは私の可愛い生徒だよ。これまでも、これからも」

先生にとっては改めて言うまでもない……決して揺るがない真実。アリスにとっては聞きたくて堪らなかつた疑問。それを言葉にして、声にして、1つずつ解いていく。

1つずつ解くたびに、声にするたびにアリスの表情が明るくなる。本音が強く脈打つ。取り繕った偽りが剥がれ落ちて、ずっと抑え込んでいた願いが露になる。

「で、では……」

そして、最後の——アリスが最も聞きたかつた、否定してほしい疑問に辿り着いた。

「アリスの事……嫌いじゃ……ない、ですか？」

「どんな事があっても、私はアリスの事を嫌ったりしない」

真つ直ぐとアリスを見る眼には一粒の嘘も翳りも見当たらない。この言葉は全て真実、紛れもない本心であると雄弁に語っている。

「アリスはいつまでも私の大切で……最愛の生徒だよ」

駄目押しと言わんばかりに放たれたその言葉はアリスの内側の闇を薙ぎ払うのに充分すぎる願いが籠っていた。

「だから、アリスの本音を聞かせてほしいな。アリスはどうしたい？」

君のやりたい事。望んだ事。したい事。したかった事。下らない事でも、大層な事でも。本当に何でもいい。だからどうか、アリスの嘘偽りない本当の本音を聞かせてほしい。先生はそう言った。

「アリスは……魔王なのに……世界を滅ぼしてしまう……のに……なのに……」

ゲームをプレイして、勇者になりたいと願って。勇者になるために日々のクエストを熟して、沢山の人と関わりを結んで。ある日、沢山の友達と……大切な人達を2人も傷つけて。世界を滅ぼす魔王だと言われて。これ以上大切なもの達を壊してしまいたくないから終わる事を選んだ。愛した場所を守るために、愛した場所から離れなければならなかった。そうしないと多と多くのものを取り零してしまうから。もつと多くのものを壊してしまうから。

モモイを傷つけたのは自分だ。先生を傷つけたのも同じく自分。2人以外にも沢山の人を傷つけた。どう考えても許される所業ではなく、謝って済む問題でもない。多くの人を傷つけ、先生を殺しかけた罪はその程度で贖いきれるものではないだろう。耳元で響く悲鳴の残滓。掌に残留する握り潰した花。なんて罪深い。

多くを傷つけた。多くを壊した。大切だと叫びながら、大切なものをこの手に掛けた。

でも。そんな、自分でも。

「それでも、アリスは……それでも、いいんですか？」

漸く、彼女は押し殺していた本当の願いを大切な人達に伝える事ができた。

「冒険を、皆と一緒に……クエストを続けても、いいんですか？」

彼女達が、こんな自分でも……それでも良いよと言ってくれるのなら。多くを傷つけ、壊した自分を受け入れてくれるのなら。隣で、贖罪の機会を与えてくれるのなら。

いや、そんなものは唯の言い訳だ。アリスの中に在るのはもつと根源的で、単純な……ただ、友達と一緒に過ごしたいという感情。その感情を、願いを、漸く彼女は口にする事ができた。

「こんなアリスでも……？　本当に……？」

「うん、勿論」

「それなら……アリスも！　勇者になって……！　皆と……モモイ、ミドリ、ユズ、先生と……冒険を続けたいです……！　魔王であるアリスが、そうしても許されるなら……！」

その言葉と共にアリスは自分の意志で顔を上げた。モモイに促される訳でも、先生に支えられる訳でもなく。自分のこれからとこれまで……今まで押し潰されてばかりだったそれらを正しく受け止めて、彼女は大切な人達を視界に入れる。4人の姿は何度も見た在りし日の姿、そのまま。漸く真正面から見る事ができた、とアリスの中に温かい気持ちが生まれた。

ずっと聞こえない振りをしていた明日の声に耳を傾ける。暗い部屋で塞ぎ込んで誰とも会わずにただ一枚絵のような世界を見続けたから明日への進み方なんて忘れてしまったと思っただけ、この体に思い出と共に刻まれた……大切な人達に教えてもらった『生き方』は忘れられる訳が無かった。

アリスの思い出は、ずっと彼女の背中を押していたのだ。彼女自身が、それに気づかなかっただけで。

生きて良いと言ってくれた。傍にいると言ってくれた。これ以上孤独な夜を進まなくていいと、彼女達は言ってくれた。

それなら、その許しを胸に。罪を抱えながら、少しずつ贖つて。しかし、決して後ろ向きにはならず明日を想って生きよう。

皆と一緒に、あの青空の向こう側を見てみたい。生きてみたい。

その願いを彼女達は微笑みを浮かべながら肯定する。

「うん！　アリスがしたいならそれで充分！」

「魔王だって勇者になれるよ」

「寧ろ、最近だとそういう外したお話がヒットしているからね！」

「もしそういうブームがなかったとしても……私達が次回作として作ればいい……」

「だって、私達4人は色々な想像を形にする事ができる……」

「何でも作る事ができる……！」

「——ゲーム開発部だから！」

アリスとの出会いの場所。アリスの冒険が始まった場所。そこでもう一度スタートを切ろう。果ての無い、終わり有る旅路を歩むために。だが、ここでスタートを切るのはアリスの冒険だけではない。ゲーム開発部も此処で再スタートを切るのだ。アリスと同じ速度で歩むために。

「では……アリスは、勇者になりたいです」

「うん、勇者になっていいんだよ」

その願いを邪魔するものなんて何も無い。君はこの空の下、何処にだって行ける。何にだってなれる。だからその祈りもきつと叶えられるだろう。

アリスはきつと、勇者になれる。

「アリスは……アリスになりたいです……！」

アリスはきつと、自分^アが望^リむ自分^スになることができる。

「君がなりたい存在は、君自身が決めて良いんだよ——アリス」

星が落ちるような笑みと共に差し伸べられた彼の手。それをやると、アリスは握る事ができた。

鍵ではない君（ケイ）

少女達が再会の喜びとまた一緒に歩める幸福を噛み締め、共有している時……ふと足音が聞こえた。距離は段々と近くなる一方。方角としては……アリスが眠っていた椅子ともベッドとも呼べるものの、真正面。

「——王女……先生」

影からゆつくりと姿を現したのはこの世界のもう一人の持ち主であるKey。アリスの体そのままでありながら、ヘイローと瞳は茜色。全体的に憂いを帯びた……アリスのそれよりも少しだけ大人びた表情を浮かべている。

「……ケイ」

「今更出てきて何のつもり!? 言っておくけどアリスは渡さないからね!」

「……それについては構いません。無名の司祭の道具として使われるよりもあなた達と共に在った方が王女も幸せでしょう。私の存在理由が消えるとしても王女が幸福であるならば……私はそれで良いと思います」

アリスが自身の存在について悩むのはどの道を選んでも変わらない。彼女は必ず、何処かで自分が何を望まれたのか……存在理由という壁にぶち当たる。だから後はそれを誰と乗り越えるか、だ。その誰かが彼女が大切だと思った人であるならば幸福と言えるだろう。

少なくとも、無名の司祭に道具として使われ、やりたくもない事を延々とやらされ、見たくもない光景を見続けるよりはマシだ。

その選択の結実がKeyの存在の否定になったとしても構わない。アリスが幸福であるならばそれに勝る幸福はないと断言できる。大切で、心の底から愛している……この世界でたった一人の同胞。彼女の笑顔が未来で咲く事が、Keyに与えられる最大の報酬だ。

でも———そう思い、Keyは腕を伸ばせば触れられる距離に立つ先生を見る。

笑った顔が好きだった。優しく細められた眼。靨。胸から湧き上がる確かな幸せを噛み締めるような口元。

困った顔が好きだった。少し垂れた眉。優しさと温度を損なわない瞳。浮べた苦笑。

仕事をしている時の顔が好きだった。真剣な表情が好きだった。怒った顔ですら愛おしい。

好きだったもの、愛おしかったもの。その全てが——初めから消費され、使い潰される運命だと知った時に感じた……あの筆舌に尽くし難いほどの怒り。

この怒りだけが彼が生きた証明だった。命を弄ばれ、復活の礎にされ、使い潰され塵一つ残っていない彼が……確かにあのキヴオトスで生きた証。

視線と視線が重なる。見上げる少女と、見下ろす青年。ごくり、と生唾を呑む少女達は視界の彼方に追いやられた。今のKeyにはアリスと先生しか見えていない。

どれほどの時間をそうしていただろうか。その均衡とも呼べるような緊張と距離感が崩れたのは、先生が触れられるギリギリの距離から一步踏み込んできたから。彼は臆せず、迷わず、真っ直ぐな歩みでKeyの方に少し近づいて。

「ねえ、ケイ。少し話をしようか」

「……今更何を話すのです。そもそも、貴方は知っているでしょう？」
「そうかもね。でも、私はケイの口からは聞いていない。私は君の口から、君の声で、君の想いが聞きたいんだ」

彼は「だから」と言っ

「話してくれないかな。君が抱えているものを」

「……良いでしょう」

溜息交じり、少しばかりの逡巡の果てに吐いた言葉と共にテーブルと椅子が虚空から顕現する。まるで手品のように。似たような事はシツテムの箱とクラフトチェンバーを使えば先生もできるが、それはあくまで見てくれだけ。机や椅子を作るために物質は必要で、狙ったポイントに出現させるためには電力を要する。キヴオトスに敷かれ

た物理法則からは逃れられない。

それを考えると、今しがたKeyが起こした現象は破格だ。何も無い空間から机と椅子を生み出したのだから。法則の無視。恐らくは精神世界……物質が介在しないからこそ、こんな無茶ができるのだろう。精神世界の主と云うのは存外強力らしい。権限の強さだけで言ったら主人格であるアリスの方が上だろうが、彼女はその力に無自覚だ。Keyと同じように自由自在、とはいかないだろう。それでも思い入れのある縁深いもの……スパーノヴァ光の剣を出せているため彼女も大概出鱈目だが。

「……こうやって、落ち着いて話すのは初めてだね」

話し合いのテーブルに着く事により視線が合う。Keyの目の前には先生が、先生の眼の前にはKeyが。武力を介さない純然たる対話の席に着いて、漸くゆっくりと互いの顔を見る事ができた。互いに思う、懐かしいと。過去もこうやってよく話した。Keyにとっては全て大切な思い出。下らない会話も、何もかも。例外なく覚えている。

距離はKeyの記憶よりも遠いけれど、それでも互いの表情が見えるから彼女に不満はない。いや、強いて言うならばもう少し近くに行きたいが……それは我儘だろう。元より、彼の命を奪おうとしている身なのだ。こうして、顔が見える場所まで近寄る事ができた方が異常であろう。

——まあ、彼らしいとも言えるが。彼はどんな時も争いよりも対話を望んだ。武器ではなく言葉を交わす事を好んだ。もし彼がキウトス先生にならず、普通の人生を歩んでいたらきつと交渉人ネコシエーターか何かになっていただろう。

Keyは眼を伏せ、少し思考を整理した後には視線を先生から外し未だ警戒している少女4人を見る。この席に座って良いのか、否か。何かあった時に即応できるように立っておくべきなのか迷っている。その逡巡は視線だけでもはっきりわかるほどであり、余りにもあからさま過ぎた。もう少し隠す事を覚えた方が良いのではないか、とKey

yが思ってしまうほどに。

「アリス、あれは——」

「分かり、ます」

モモイの言葉を遮るようにアリスは言葉を発する。声音は確かに震えも怯えもない。まるで揺るがない真実を継げるかの如く口調。それと共に、庇う様に立っていたモモイの背からアリスは出て——
—既にテーブルに着いていた彼の隣に座り、Keyを見つめた。自分とそっくりな、自分とは違う少女を。

「アリスには分かります。貴方が……アリスではない誰か。^{アリス}アリスの中にあったもう一つのセーブデータ……ですか？」

「ええ、その認識で相違ありません、王女。私はKey。貴方と共に在り続けたトリガーAIです」

「ならアリスの妹ですね！ アリス、お姉ちゃんになりました！ モモイと一緒にです！」

「いも……？ いえ、違います。私はトリガーAI、王女をサポートする存在です。妹という表現は適切ではありません。肉体を同一にしている以上、差異は人格のみ。何方かと言うと解離性同一性障害……多重人格が近いです」

ぐうの音も出ないほどロジックでアリスの論を叩きのめしたKeyは微妙な顔をして、アリスをこんな風にした原因……モモイ達を見る。とんでもない英才教育……英才教育？ を施してくれたものだ。尤も、それがアリスにとって良い方向に作用しているからKeyも強くは言えないが。でも、それでも文句の1つくらいは言いたくなる。アリスの脳の大半をゲームで埋め尽くした事について。

「……そうなんですか？」

「そうです、王女よ」

「……むう」

「むくれても現実はありません」

そんなやり取りをしている内に少女達の警戒心もある程度解れたのか、まだ硬い顔ながらも席についた。話を通じるのかは微妙であるが、冗談は通じる相手だと思ったのかもしれない。

アリスに関しては、元から警戒なんてしていない。自分自身に連なる者として親近感さえ覚えていた。それこそ、彼女を一目見ただけで妹と言ってしまうほどに。

「このままでは何時まで経っても雑談で終わってしまいます……本題に入りましょう」

「私としてはそれでも構わないんだけど……そうだね、話を変えようか」

言い、彼は表情を切り替える。真剣な顔は鋭利ながらも優しさを損なっていない……不思議な、彼だけが浮かべられる特別な顔。

「ケイ。君の目的を聞かせてほしい」

「先生の殺害、及び遺体の消滅」

「理由は？」

「貴方の生をこれ以上侮辱させないため。貴方の遺体を利用されないため」

「ここまではある程度聞いていて、推察もできていた。彼女の言葉、表情、感情から。」

ケイは知っているのだろう。知った手段は……恐らく、アトラ・ハシース。アレは多次元解釈、並行世界を翔る方舟だ。そのプロトコルが本来の機能として備わっている彼女であれば他^{アーカイブ}世界の記録を参照する事くらいは造作もないだろう。

だが、それはそれとして疑問が残る。方舟のアーカイブが参照できるといふ事は方舟がアクティブ状態になっている事実を示す。何故、あの方舟が動いているのか。アレを動かせる資格を持つのは、Keyを除くと……。

そこまで思考を巡らせたが、彼は疑問ごと止まった思考回路を奥に追いやる。重要な事ではあるが、今は本題ではない。今重要なのはKeyのこと。

——自分が生きてきたままでは確実にキヴオトスが滅びてしまうことなんて、先生とて正しく把握している。先生……救世主に結び付けられた神格、数多の神話を轢殺した唯一神。神の子として変質しつつある肉体は時間経過と共に『完成』し、復活の器となる。そうなる

前にやるべき事をやって、キヴオトスの明日を守る為に死ぬべきなのだ。

救世主という称号。神の子という符号。大人のカードというリソース回収装置、奇跡の蒐集装置。どれを取っても、何を取っても後の悲劇に繋がるものしかない。自身の体の主導権が自分以外に移る前に自刃するべきなのは当然だ。

ケイは『侮辱』や『消費』と言ったが、そんな事をさせるつもりはない。彼にだつて意地はある。自分の思い出を、記憶を、肉体を好きな様にはさせない。そうなる前に笑つて死んでやる。自分なんぞを器に選ぶから盛大に失敗するのだ、ざまあない……と、彼方で踏ん返り返っている怨敵を嗤つて。

謂わば、この生は初めから身辺整理と死後処理を兼ねているのだ。死ぬ事は分かっている。どれだけ甘く見積もつても確実に1年は持たない。その限られた短い時間でやるべき事を果たし続ける。明日生きられるかすら分からないけれども、悲観的にならず明日を思つて生きる と決めた。

——自分に大切なものを託してくれた彼女に笑われてしまわないように。

「私は答えました。次は先生の番です。何か身体に変調はありますか？」

「……一応は」

「でしようね。僅かですが混ざっているのを感じます……止める理由がまた一つ減つてしまいました」

「……死にたくないって、私がみつともなく泣き喚いたら？」

「やれもしない事を言うのは止めて下さい」

少しでも命乞いしてくれれば。少しでも死を忌避してくれれば。少なくともKeyはこんな気持ちになる事はなかった。彼は自分の死を惜しめない。自分の死を忌避できない。何度も殺され、死に絶え、その度にやり直してきた彼は人間が当たり前に持つ死への恐怖心というものを忘れてしまったのだ。彼は自分が死んでも、『ああ、そう』程度の感想しか抱けず、足掻きはすれど呆気なく受け入れるだろ

う。生きる事よりも死ぬ事の方が、死んでいる自分の方が当たり前として受け入れる事ができるから。

——Keyにレプリカの砲門を向けられたその時と同じように。

「変調箇所は何処ですか？」

「左の脇腹。実際に見てもらった方が早いかな」

そう言い、彼は肌着ごとシャツを捲り上げて腹部を露出する。精神世界という関係上、エリドゥ攻略で負った負傷が無いため肌の下は綺麗だった。目立つような流血の痕も、傷もない。細くしなやかだが、肌の下の筋肉の感じさせる男性の体……其処に刻まれた、余り似合わない痕こそが変調の兆し。彼が『神の子』としての役割を押し付けられた確かな証だった。

鋭い何かで刺し貫かれた事を示す刺傷がある左脇腹。かの救世主が運命に貫かれたと同じ場所には共鳴した結果の聖痕ステイグマは最初の時から時間が経つに連れて変質していた。

傷口を囲む円環のような荆棘は解け落ち、今度は逆に傷口を中心として荆棘が放射状に伸びている。まるで肉体に奔った亀裂のように。長さは最長で10cm弱。恐らくは大人のカードの使用毎に変質し、伸びていくのだろう。それが全身に回った時が彼の最期……なのかもしれない。

「一応言っておくけど——」

「まだ大丈夫、そうでしょう？ 貴方の言いそうな事なんて分かりません。では、明日は？ 明後日は？ 一週間後は？ 一か月後は？」

その問いに対して沈黙を返す彼にKeyは辟易した感情を隠さず溜息を吐く。

「貴方は大丈夫な状態が続かない事を知っている。明日明後日なら急変する確率は然程高くありませんが、少しでもスパンを長くすれば途端に不確定になる。貴方は先生、生徒の事を大切に想っていますから。生徒の為であれば喜んでその身を投げ出すでしょう。それこそ、大人特権のカードの使用も躊躇わないで」

「終わりなんて誰しにも訪れるものだ。別に私だけが特別じゃない。

いつか死ぬ事ばかり考えていたら前なんて向けない。どんなに先が昏くても、未来が無くても、私は明日を想って生きる。皆と一緒に明日を見たいから私は生きるんだよ」

彼は「それとも」と言つて。

「ケイが見た私は諦めていたのかい？　自分は救われないって、己を憐れんで腐っていたのかい？　誰かの幸福を信じていなかったのかな？」

「そんな訳ないでしょう……ッ！」

Keyにしては珍しい絞り出すような声は強い否定、痛みそのもの。彼女の心に刺さったままの棘から出た感情は後悔。自分を救ってくれた人を見殺しにしてしまった……その後悔が今も尚、少女の胸を焦がしている。

ああ、そうだ。彼は決して悲観的にならなかった。死に逝く己を憐れまなかった。死ぬその時であっても、誰かの為に祈っていた。誰かの幸福を信じていた。彼を殺した者達も、彼の尊厳や誇りまでは決して穢せなかったのだ。

だが——彼の誇りが守れたからといって、納得できる訳が無かった。

「貴方は生贄だった。キヴオトスが存続するためのスケープゴート、体のいい消耗品。誰も貴方の痛みになんて見向きもしなかった。幸福と平和の裏側で、どれだけ貴方が身を削っているかなんて知ろうともしなかった」

ケイが知る彼の最期は……饒舌に尽くし難いほど、最悪だった。

無名の司祭が呼び寄せた終末悪の姦計によりばら撒かれた悪意と恐怖は燻っていた憎悪に火を点け、学園間……最終的にはキヴオトス全体の争いを誘発。

争いを望まない声があった。利用されていると訴えた声があった。だが、それらの声は全て憎悪と怒号で塗り潰され、戦火を前にした花のように燃え尽きて。

結局、仕組まれた争いに感づいた者達は逃げるようにシャーレを頼り、先生の元で憎悪に駆られた者達と戦う事になる。

折しも連邦生徒会が戒厳令を出し、一時的に連邦生徒会が持つ行政権の一部がシャーレに移った時だった。彼も当初はシャーレの目的と乖離していると戒厳令と行政権譲渡について反対していたが、次第に大きくなる戦火を見て渋々と認可。恐らく先にこの無意味な流血を止めるべきだと思っただろう。

彼にとって誤算だったのは、この無意味な争いに軍需産業を扱う企業が参入したことだろう。カイザーを筆頭とした企業は金になると分かった瞬間、争う者達に武器を提供し始めた。キヴォトスの民達が一般的に携帯する銃器だけではなく戦車や軍用ヘリといった大型兵装を対立者達に与え、争いを加速。犠牲と涙、流血を増やし自身の私服を肥やすための対価にした。

先生の手により武装の生産ラインや軍需資産が凍結した頃にはもう全てが遅く、争いは話し合いで止まる範疇を超えてしまった。生徒、住民、オートマタ。キヴォトスに住まう凡そ全ての生命が戦火の中に叩き込まれ、当たり前前の日常を奪われたのだ。

だが、彼は手遅れでも手遅れなりにやれる事があると信じて、事態がこれ以上悪化しないように瀬戸際の策を張り巡らせ続け、牛歩の歩みであったものの少しずつ争いの規模を縮小させた。紛れもなく偉業だ。称えられて然るべき素晴らしい事を成したはずだ。

しかし——彼を待ち受けていたのは余りに醜悪な人間の悪性だった。

争いの発端となった終末悪でもなく、争いを加速した企業でもなく、終末悪をこの地に呼び寄せた無名の司祭でもなく……争いを止めようと奔走し、瀬戸際でキヴォトス崩壊を食い止めた彼がこの騒動の責任を取らされた。争いが拡大した原因は彼が強大な戦闘能力を持つ生徒を御し切れなかったからだ、最早正当性すら捨てた醜い罪状を彼に押し付けて。

当然の如く彼は死罪だった。彼を慕う生徒はほぼ全員動ける状態ではなかったが、それでもこんな結末に納得できなかった彼女達は最後の力を振り絞り先生奪還を試みたものの、死に体でどうにかできるはずもなく囚われて。

自分が下手に抵抗すれば生徒にまで危害が及ぶと考えた彼は抵抗
すらせずに十字架を背負いながら消えてしまった。火刑だった。火
炙りだった。まるで魔女裁判に掛けられた聖職者のような末路。彼
は灰になって死んだ。

先生は救ったはずの民衆の手で死に追いやられた。都合の良い
パブリックエネミー
『皆の敵』として。自分達の利益にならないから、要らないから、
守ってくれなかったから。そんな身勝手極まりない子どもの戯言の
ような詭弁で彼は命を散らしたのだ。

こんな醜さの為に彼が死んだと認められなかったKeyはアリス
より先行して目覚め、プロトコルを稼働させた後にキヴォトスを文字
通り地図から消した。彼と関わり深かった生徒達は抵抗しなかった
ため、数時間の稼働で何もかもが終了して……こんな簡単に崩れ去る
ものが彼が命を賭して守ったものだと思うと、胸が締め付けられるよ
うな痛みを覚えて。

そして、僅かに残された彼の遺灰と遺骨は復活のためのリソースと
して回収されてしまった。彼の痕跡は、彼が遺したものは全て何かの
踏み台でしかないと嘲笑われているようで。

——ああ、そうだ。彼は。眼の前でKeyを真っ直ぐ見つめる
彼は。

「貴方は生きたいと思う事すら許されなかった！」

そんな当たり前すら奪われてしまった悲しい人だった。

明けない夜を超えるために

ケイの絶叫に近い内心の吐露。それこそが先生が今まで置き去りにしてきた罪悪そのものだった。

生徒の為に。明日の為に。自分以外の誰かの為に。幸福の為に。笑顔の為に。彼を動かしてきたものはいつだって自分以外の何か。自分の為に命は掛けられなくて、自分の為には怒れなくて。

それは善性なのだろう。利己的ではなく利他的、他者の笑顔と幸福に喜びを見出すその在り方は正しく『キヴオトスにおける先生』と呼ぶべきもの。

だからこそ、その一切がそのまま彼を縊る殺意となる。愛と善の元、彼は己を殺し続けた。生徒の為に何度も自分を殺し、那由多の果てまで屍の山を積み上げてきた。それらの行為には確かに意味があっただろう。意義や大儀ですら。

だが、意味や意義なんて言葉遊びでは取り繕えないほどに、彼の死は彼を慕う生徒達の決して癒えない傷跡になってしまった。誰かの痛みになりたくて死んだわけではないのに。

「……」

自分を憐れみません。自分の幸福を望みません。自分の希望を持ちません。自分を救いません。

生徒の為に全てを捧げる事を誓います。キヴオトスの為に生きることを誓います。誰かの幸福の為に死ぬ事を誓います。

全て、全て。これまでも、これからも。全ての己を対価にして連邦生徒会長との約束を果たしてみせます。

——— そうしないと、自分はキヴオトスで呼吸をする資格すら与えられない。

両親の顔を思い出せなくなったのはいつからだろうか。

自分の名前を書けなくなったのはいつからだろうか。

先生でない自分が空っぽになったのは、一体いつだっただろうか。

自分の命に重さを感じなくなったのはいつだったか。

素直に生きたいと思えなくなったのは、自分の死に方に期待しなく

なったのはいつからだったのか。

どれも、もう分からない。忘れた事、過ぎた事だ。今更それを想っても帰れない事は自分が一番よく知っている。

この人生は確かに、ケイの言う通り『生きたいと思う事すら許されなかった』旅路なのかもしれない。

——でも、それでも。きつと。そう思い、彼は顔を上げる。眼前には傷ついたままの少女。守りたくて、手を取ってあげたかった遠い君。

顔を上げた彼女に対する彼女は俯いたままだった。目線を下げて、唇を噛んで。口を衝いて出そうな後悔を堪えている。

短命も、運命も、終焉も、何もかも。彼は正しく理解している。でも、受け入れている訳ではないとKeyは思っていた。そうするしかないから彼は受け入れているに過ぎない。他に道があるなら、きつと彼は選んでくれると思っていた。差し伸べられた彼の手をKeyが取ったように、彼もKeyの手を取ってくれるはずだと。

けれど、先生は『自身の信念に反するから』という理由で手を取ってくれなかった。手を握らせてくれなかった。でも、見放す事だけはなくて。彼は泣いていたKeyに寄り添う事を選んだ。対話を選んだ。

——だからこそ、そんな先生だけはどうにかしたかった。どうにかしなければならなかった。彼に訪れる結末を知ってしまった者として。見て見ぬふりも、彼の優しさに甘える事もするつもりはない。彼を終わらせてあげないと。

そう思い、握り締めた手を優しく包み込んだ大きい掌。少し俯いていた顔を上げると、彼は身を乗り出してKeyのすぐ近くまで顔を寄せていた。

「私って、そんなに頼りなく見えるかい？」

「……」

「生徒の手を借りないと死ぬこともできないような、情けない先生に見えるかな？」

諭すような達観した口調ではない。先生が生徒に教えるような口調。或いは、同じ人間として対等に話すような口調で、彼は少しずつ言葉を紡いでいく。

「私は誰かに死の重みも、悼みを押し付けたくない。叶うならば私が去った後は私の事なんて忘れてほしいし、偶に思い出してくれるならその時の姿は笑顔の私が良い……なんて、思っているけど時にはその笑顔すらも呪いになる……悲しいね。そんな顔をさせたくて、私は生きてきた訳ではないのに」

実際、Keyは呪われている。彼が最後に見せたあの笑顔にずっと囚われてしまっていて、明日なんて見れなくて。あの笑顔をもう一度だけ見せてほしい、とは思っても……その笑顔を浮べた瞬間に彼はきつとまた世界に奪われてしまう。

だから、笑顔は望まない。その代わりに永久のさよならを。貴方がいなくても、手を引いてくれなくても歩いて行けると、他ならない貴方の為に証明してみせる。そう思っ、そう決意して、決して引かないと誓って彼に殺意を向けたのに。胸の中に渦巻いていたのはそれとは真逆の感情ばかり。

「先、生……」

また笑顔を見せてほしい。また一緒に歩みたい。ヒトとして成長していく自分達をずっと傍で見守っていてほしい。いつか貴方に恩返しして、胸を張って『大人になった』と言ってみたい。

殺さなければいけない。他ならない彼の為に。彼が皆に踏み躪られないように。せめて、ヒトとして死んだ証をKeyが刻まないと。そうしないと彼は本当に一人ぼっちになってしまうから。

疾うに決めたはずだった。数多の感情を呑み込んで、彼の為の救世主になると決意を固めたはずだった。何度も迷って、泣いて、世界を憎んで、誰かを恨んで、もうどうしようもないと悟ってしまっ。だからせめて、これ以上彼が苦しみと涙と痛みを背負わないように終わらせてあげようとした。

余計なお世話だというのは重々承知している。でも、大切な人が少しずつ失われていくなんて耐えられなくて。あの好きだった笑顔が

陰っていく光景なんて見たくなくて。

だから殺さないと。でも殺したくない。

どれも本心だった。どれもKeyの本当の願いだった。

「ケイ、アリスは好き？」

「……当然です。王女は……いえ、アリスは私の全てです」

「皆は好き？」

「……好きでも、嫌いでもありません」

「キヴオトスの事は？」

「……そこまで」

その言葉達に彼は「そっか」と優しく笑って。

「私はキヴオトスも好きだし、皆も好き。この世界で懸命に生きている、皆の事が好き。私はその輪の中には入れないけれど、それでも皆の事が好きだ。困っているなら助けになりたいし、泣いているならその涙を拭ってあげたい」

皆とは違う事なんて分かっている。この身に神秘はない。この身に天使の光輪はない。機械生命体でもなければ、二足歩行の動物でもない。キヴオトスの生命とはそもそも進化の系統樹からして違う、異なる種なのだ。

それでも、この世界と皆を愛した心だけは嘘でないと信じている。青い空を同じように眺める事は出来ないけれど、同じ速度で歩くことはできないけれど……それでも、この世界で『先生』として生きていけると信じている。AL-1Sではなくアリスを選んだ彼女と同じように。Keyではなくケイを選んだ君と同じように。

「苦難を乗り越えて星々の彼方へPer aspera ad astra……ケイは知っているかな、この言葉」

「……ええ、貴方が好きだった言葉です」

「目の前の困難を乗り越えて、いつか星に手が届く事を祈る言葉。多分、人間は皆そうなんだと思う。届くかも分からない星に手を伸ばし続けて、祈りと共に空を見上げる。私達はそうやってキヴオトスの人類になったんだ……ケイもアリスも、勿論私も」

AL-1Sはゲーム開発部星に手を伸ばして、アリスになった。

Keyはアリス^星に手を伸ばして、ケイになった。

彼は連邦生徒会長^星に手を伸ばして、先生になった。

3人が見た星はそれぞれ違うけれど、異なるものから『キヴオトスの人類』になった時に星を見上げ、手を伸ばしたことは共通している。自分も皆と同じように生きてみたいという祈りが始まりだったように。

「最初は全部、祈りや願いなんだ。こうしたい、ああしたい、こうなつてほしい、ああなつてほしい……そんな、何でもないもの。それを積み重ねて、私達はヒトになつていく」

「……ですが、貴方は少しずつ貴方が愛したヒトの形を失つていく。それは——」

「ヒトとしての歩みはもう充分もらつたよ。例え地獄に落ちても忘れないくらいに、大切な思い出達をね」

彼は「だから」と呟いて。

「今度は私が返す番だ。この生を使って、少しずつ恩返しをしていく。彼女との約束を果たす。零れ落ちたものを取り戻すために私は此処に居る。今の私があの日^星の答えだ」

弱さは武器にしない。強さも同じように。己が振るうのは決意だけ。この胸の中にある願いを、美しくも残酷なキヴオトスという世界に証明し続ける。彼女の居場所を守り続ける。

彼女と契つたあの約束を果たすための生涯。生徒の為の先生で在り続ける生涯。それこそが、彼を先生たら占める唯一つ。

でも、それは——やはり呪いだらう。

「……素晴らしいと、思いますよ。誰かの為に、世界の為に、生徒の為に。全てを包むまで、全てを愛するまで貴方は歩み続ける。先生という業^飯を背負つて。そして、その果てに貴方は皆のものになる」

これは記憶ではない。アトラ・ハシースから得た未来予測。彼がこの先、どうなるのか……彼の因果、運命、契約、複製、記号、儀式……それらを統合し、導き出した結論。何よりも否定しなかった彼の本当の末路は余りに惨たらしいもので。

「その生に安らぎはなく、血を吐いても死ぬまで走り続ける。死後の

安息からも見放されて、また次の誰かの為に貴方は走り続ける。その果ては全てから離れた夜の坑道。全てを救った代償に、貴方は世界から弾き出される。異物だから、平和になつた世界に救世主はいらないから」

目的を果たしたら『先生』という存在は不要になる。超法規組織であるシャーレは解体され、その責任者たる先生も同じようにキヴォトスでの居場所を失う。彼を引き留める声はきつと多くあるだろうけれど、彼は誰にも何にも言わず、何かに属することなく蜃気楼のようにキヴォトスから去るだろう。先生という存在がシャーレに縛られなくなつた以上、争いの火種になりかねないから……そんな、最後まで生徒を想つた優しい理由で。

剩え、彼は『それを受け入れている』と言つたのだ。そんな訳ないだろう。彼はキヴォトスを、皆を心から愛している。愛した者達から『要らない』と言われ、愛した場所から居場所が消えるなんて……耐えられる訳がないだろう。平気な振りをしているだけだ。

「それを、私達に黙認しろと言うのですか!? 誰も居ない所で息を止める貴方を見殺しにしろと、アリスと私に言うのですか!?!」

「違うよ、ケイ。私は——」

「何が違うんですか!?!」

血を吐くような声と共に彼女は握られていた手を振り払い、彼の胸倉を掴む。気道の塞がる感触が手に残り、襟とネクタイを乱暴に引つ張り自分のすぐ近くまで寄せた。Keyの内心を見透かしたような眼は痛みを偲ぶように細くなっている。

「ずっとそうでした! 私達は傍に居る事すら許されなかった! 貴方が望まなかったから! 最期まで先生である事を貴方が望んだから! 貴方の終わりは独りぼっちで! 私はお別れも言えなくてツ!

彼の最期なんて見る事すら許されなかった。言えなかった、言いたかった、言いたくなかった別れの言葉。それすらも機会を奪われた。彼を弔う事も出来なかった。花を供える事さえ。

その後悔も痛みも全部吐いて、最後に残つたものは余りにも小さく

て細やかな願い。

「消えないで、ください……行かないでください……」

誰にも言わず、何かに殉じるように消えないでほしい。手の届かない、声の届かない場所まで行かないでほしい。死なないでほしい。置いて逝かないで。ずっと、ずっと近くに居てほしい。

だって、貴方は。

「貴方は……私達だけの、救世主なんです」

明けな^{希望}い夜を照らしてくれた——アリスとケイが最初に仰いだ星だから。



顕現させた椅子とテーブルはいつの間にか消えていて、ケイは継るように彼の体を抱きしめている。何処にも行かせはしな^いと言わんばかりの固い抱擁は束縛にも見えて、想いを映す鏡のよう。

声を聞いて。心を聞いて。彼女の抱えた荷物を詳らかにして。彼も漸く、真の意味で向き合えた。己が置き去りにしてしまった、最愛達を。

「——ケイ」

「……なん、ですか」

「ありがとう」

怒らなくていい。悲しまなくていい。泣かなくていい。自分の為に。

忘れてほしい。思い出にしてほしい。過去の情景にしてほしい。自分の事を。

そのスタンス自体は変わらない。未来永劫、きつと変わる事はない。でも、今だけは——彼女の抱えた怒りと悲しみを肯定したかった。その行為が先生として罪であるとしても。

「嬉しかった。君がそう言ってくれて」

顔を上げると彼と目が合って。何度も見た彼の笑みと共に指先が伸ばされて、目尻に溜まった雫をそつと拭った。

「泣いている顔は、アリスそっくりだ」

「そうやって、貴方は、いつだって……」

「ああ、そうだね。私はいつだって、自分のしたい事をやっているだけに過ぎない。この行為も所詮、自己満足の域を出ないよ。皆、私の事を買い被り過ぎなんだ」

「それでも……例えば自己満足でも、貴方は報われるべきです。他人を想った頑張りや報われるべきと言ったのは貴方でしょう。他人の幸福のために命さえ投げ出した、他ならない貴方が」

「皆と過ごす時間が一番の報酬だよ。生憎、これ以上の報酬なんて思いつかないな」

彼は膝立ちになってケイと視線を合わせて。

「先生は、アリスの事が好きですか？」

「ああ。ケイの事も、モモイもミドリもユズも……皆」

「……お別れは、したくないですか？」

「そうだね……叶うなら、ずっと君達の成長を見守っていたいな」

お別れはしたくない。ずっと一緒に歩いていきたい。最愛の生徒達が少しずつ前に進み、成長していく様を見ていたい。

だけど、その願いは胸の奥底に大切に仕舞い込む。

「それでも、私は足を止めないよ」

この日々に背を向けてでも、守り抜きたいものがあるから。

「連邦生徒会長……彼女と契約した約束が私にはあるんだ」

星が降る夜、天の裂け目の下。彼と彼女……星の異物と超人が其処で互いに語り合った。互いの夢と理想を、まるで何でもない唯の青年と少女に戻ったように。

「この約束がある限り決して私は足を折らない、二度と歩みを止めない。それが、私のしたい事だから」

「……それは、神秘の——」

ケイはその先を言葉にする事を止めて、きゅっと唇を噛んだ。彼の最終的な目的は既に知っている。そして、それが途轍もないほど長く、遠く苦しい道である事も。だから、問うのは別の事。貴方は未来で傍に居てくれるのかを、少女は彼に投げかける。

「……絶対に死なないと、言ってくれないのですか」

「確約はできない。何せ私は弾丸1発で死ぬ身だからね。死因なんてそこら中に転がっている」

彼は「でも」と、言ってる。

「命を捨てる気はないよ。今更自分の命に価値を見出す事はできないけれど、ケイが大切にしてくれているものを粗末にしない。私は最期まで諦めない。例え夜が続いても足掻くさ。最後の勝ちを信じて、ね」

彼はケイから少し距離を取り、逆光を背にする。その光景が炎の中に消えたあの世界の彼と重なって見えて。凍り付いた声帯からは悲鳴になり損ねた吐息が漏れるばかり。

また何もかもが届かない場所で孤独に死ぬつもりなのかと叫びそうになった、その時。

「だからケイにはお願いがあるんだ」

まだちゃんと心臓は音を鳴らしているよと、まるで諭すような優しい声で生徒に呪い願いに似た祈りを奉げた。

「私の最期に会いに来てほしいな」

彼の口から零れた願いは、彼の事を知っていれば知っているだけ『ありえない』と断言してしまうものだった。

彼は死を押し付ける事をしない。死ぬときは基本的に一人で死ぬ事を選ぶし、避けられない場合を除いて、死ぬ瞬間を決して生徒に見せる事はなかった。それは多感な少女達に『命の臨終』を見せたくないからであり、少女達の傷になりたくないからで。生徒達には傷つき死に逝く彼ではなく、何でもない日常の中を生きる彼の事を記憶の中に留めてほしかったから。

そんな彼が、誰よりも生徒達に死を押し付ける事を嫌った彼が——
——ケイに己を看取る事を頼んだ。

「多分、ケイの顔を見れば私も救われると思う。守れた笑顔が1つでもあった……もし、その笑顔が君だったなら私はきつと寂しくないよ。笑って息を止めれると思う。自分の人生、皆が言うほど悪いモノじゃなかった……って」

「……なんですか、それ」

その願いはあまりにもあんまりで。でも、彼らしくて。

「最期を独りぼつちにしてくれないだろうか？ 君は」

「……ええ。必ず、貴方を孤独に逝かせる事はしません」

いつかの日。何もかもをやり終えた先生の最期を看取る役割をケイは受け入れた。



皆と一緒に生きていたいというアリスの願い。

いつかの最期に笑顔を欲した先生の願い。

2人はそれぞれ、己の願いと向き合った。向き合って、目を逸らさずに見つめて、誰かに伝えるために言葉にした。

そうしたら、最後は彼女の番。

「ケイ、君はどうしたい？」

大切な人の為に涙を切り裂きながら心押し殺した彼女。ずっとしたくない事をやり続けたケイの願いを聞かなければならない。聞いて、願いを叶える流れ星にならなければ。

「……私はトリガーAI。そこに『在る』だけで滅びを齎します」

「私はいつかの話をしていない。今、君がどうしたいのか。それを聞いているんだよ」

やはり、その答えはケイの記憶にある彼そのまま。齎される滅びを真っ向から打ち倒し、その上でケイの手を取ろうとしている。呆れかえるほどに前向きで、誰かと誰かの心を大切に想っていた。

——— 既にケイの中に彼に對する殺意はない。彼が『救われる看取られる』ことを選んだ時点でケイの目的は達成されたと言える。

でも、これで良いのか……そう思う自分がないとは言えない。彼の内側に巣食う根本的な問題は何も解決しておらず、1年以内に取り返しのつかない事になってしまうだろう。そうなる前に彼を終わらせるべきという結論に依然として変わりなく、そのタイミングも早ければ早いほど良い……という訳ではないが、それでもいつ手遅れにな

るか分からないから確実に大丈夫な今の内に手を打つべきだ。

今、彼の手を取れば……近い未来に苦しむ彼を見殺しにする事になる。

そんなケイの逡巡を悟った彼は微笑を浮かべて。

「ケイは悲観的になり過ぎだよ」

「貴方は楽観的過ぎです。分かっているんですか、貴方は——」

「分かっているよ、ちゃんとね。だから大丈夫」

「何が大丈夫なんですか、全く……」

何の根拠もない『大丈夫』だったけれど、それでも信じられると思っただのは彼の言葉だからだろうか。何度も前提を覆し、奇跡を成してきただけだからだろうか。

故に、臆せずこの言葉を告げる事ができた。

「私も、もう少しだけ歩いてみたいです。アリスと……貴方と」

あの世界で叶わなかった夢を、もう一度。

少女達の旅路はいつまでも（めでたしめでたし）

青空と暖かい陽の光が差し込む精神世界の中には先生とアリス、ケイの3人のみ。元々広かった空間ではあるが、人数が半分減った事により更にその広さを実感してしまう。

既にモモイ、ミドリ、ユズはこの世界から脱出していた。主であるケイとそれぞれ少しの言葉を交わし、再会を誓って。既に彼女達は精神と思考の海を泳ぎ終わった頃だろうか。或いは、もう目覚めており、アリスと先生の目覚めを待っている頃だろうか。

先生は透過する青空を仰いだ後、少女を見る。己の言いたかったことは伝えられて、聞きたかったことは聞けた。まだ話したい事はあるけれど、今日はこの程度でいいだろう。まだもう一仕事控えている上に、先に目覚めている少女達をあまり待たせる訳にはいかないのだから。

それに、きつとまた会える。これからがあるのだ。なら、今を生き急ぐ必要は無いだろう。

「また話そうね、ケイ」

「ええ、また……会いましょう、先生」

その声に笑顔で以て返答した彼は背を向けて——そして、精神を切り替えた。まるで撃鉄が落ちるかのようになり、『生徒を教え、導き、守る先生』から『生徒の敵を排除する先生』へと遷移する。冷たく、鋭く、仄暗い色。不？戴天の敵対者に向ける氷点下の殺意。一人たりとも逃がしはしないと、心臓に根差した呪詛^毒が脈打った。

——ああ、いいとも。そちらがその気なら此方も切り返すまで。来るなら来い、一切合切叩き潰してやる。

彼は口角を歪に吊り上げ思考の海を浮上していく。精神世界から現実世界へシフトしていく彼の背中を見送った鏡合わせの少女二人は互いに示し合わせたかのように見合う。茜の少女と青空の少女。広いこの世界でたった一人の同胞であり、家族を。

「……アリスは、未だケイの事をよく知りません」

アリスの眼の前に居る、アリスと似ていながらも違う彼女の事をアリスは知らない。その存在を知覚したのは最近で、出会ったのは少し前。会話を交わした回数も限られていて、自分の最も近くに居ながら知っている事なんて皆無に等しい。核心に近づいたであろう彼と彼女の会話も、会話内容からある程度事情を察する事はできてもその考察の正誤は誰も教えてくれない。彼に聞いても彼女に聞いても明確な言及は避けられてしまうだろう。

アリスは余りに無知だった。ケイについても、自分自身についても。

だから。

「ですから、これからケイを知っていきます。ケイの好きだったもの、楽しかったことを、アリスに教えてほしいです」

これから知っていきこうと、アリスはケイに手を伸ばす。辛かったこと、痛かったこと、苦しかったことではなく春の記憶を覚えてほしい。その純白の願いを受け取ったケイは初めて見るような優しい笑みを浮べて。

「……ええ、アリス。私にもアリスの好きなものを教えてください」

ケイは「それと」と言っ

「謝って許される事ではありませんが、それでも……アリスの大切なものを多く傷つけてしまった事を謝罪させてください」

「……アリスは、ケイを許します」

モモイがアリスを許したように。先生がアリスとケイを許したように。アリスもケイを許したかった。例え傷の舐め合いと揶揄されようとも、この痛みを共有できるのはきつと自分だけだと思つと、許さずにはいられなかった。

でも、アリスとケイが謝らなければならない人は、謝りたい人は他にも居て。

「これからアリスは皆に謝りに行きます。ですから、ケイも一緒に謝りましょう。皆を傷つけてしまった事を。許してもらえないかもしれませんが、アリスは謝りたいのです」

「……これはアリスの罪ではありません。謝罪は全て私が――」

「それでも、アリスがやった事には変わりありません」

アリスにしては珍しい有無を言わせない静かな声にケイは驚いた表情を浮かべた。眼の前に居る少女はこれまでのような透明ではない。彼女はもう既に自分の色を持っている。透き通るような、青空の色彩を。

——少し見ない間に随分大きくなりましたね、アリス。

その成長が、ケイは本当に嬉しかった。

「……事情は、私が説明します。そこだけは譲れません」

その声を聞いてアリスは見惚れるような満面の笑みを形作った。彼に続いてアリスにも根負けしてしまった、なんて感傷が心の中に染み渡り、苦笑いして浮べた青空は吸い込まれそうな色。アリスの色彩だった。

「では、アリスは行きます！」

宝物である光の剣を抱えてアリスは愛した世界へと帰還しようとしたが、その背に「アリス」とケイが声をかけて。

「アリスはこの先、多くの困難に直面するかもしれません。多くの理不尽を経験し、多くの不条理を前にして、自身の存在について深く悩む事があるかもしれません」

これはあくまでケイの知るアリスの記憶であり、道。もしかしたらこの世界では違う結果になるかもしれないが、それでも彼女を愛する者として伝えなければならぬ事だった。

アリスは特別、唯一無二。過去と未来を繋ぐ枝。今期のキヴオトスの生命とはフォーマットが異なる。故に自身のこれまでやこれから、出生について否が応でも向き合わなければならない時が訪れる可能性がある。

しかし。

「ですが臆する必要はありません。アリスはありのまま、信じるままに踏み出してください。その尊い一步を。アリスの傍には多くの人があります。どうか忘れないでください。アリス、あなたは——皆に愛されています」

アリスの旅路は、皆に愛され大切にされている——それが何よ

りも伝えたかった。

「さようなら、私の勇者^光。アリスの旅路に、どうか幸多からんことを。また話しましょう」

「はい！・アリスはこれからも頑張つて、立派な勇者になつてみせます！」

その背が見えなくなるまで手を振り、彼女が愛した世界に帰つていく様子を見送つて。完全に視界から消えてしまった頃、ケイは透明な空を見ながらポツリと呟いた。

「……これで、良かったのでしょうか」

果してこれで良かったのか、そればかりが心を過り疑問符を伴つて埋め尽くす。確かに彼を孤独に死なせない事はできるだろう。彼の臨終に一人立ち合い、彼の口から零れる全てを受け止め、彼を皆と変わらない『人間』として死なせる。彼の残したものを、愛したものの、記憶を未来まで連れて行き、彼の生徒として胸を張れるような人生を歩む。それは確かに望んだことだけど。願いはかなつたけれど。

問題は何一つ解決していかない。これから苦しむことになる彼を見殺しにしてしまった事実は揺らがない。ケイは彼を殺せず、苦しませる事を選んでしまった。

彼は生徒の前では決して弱さを見せない。気丈に、誰よりも鮮烈に前を歩いて生き抜くだろう。地獄と形容する事すら生温い日々を。

だつたらせめて、彼にとつて安らげる何かになりたい。ケイの所に来ればもう大丈夫と、彼が安心して弱さを吐き出して泣けるような宿り木になりたいと思つた。彼を取り巻く世界は残酷で、冷たくて、厳しいから——せめて、自分だけは其処から出たい。彼の弱さも強さも、何もかもを赦して溶かしてしまうような、優しい人になりたいと思つた。

「例え世界が貴方を排斥しても、私とアリスだけは貴方の居場所を守り続けます。ですから、どうか——先生も先生なりの幸福を見つけてください」

そして、願わくば——見つけてくれた幸福の中に、アリスと私の居場所がありますように。

▼
「本当に、こんな事が可能なんて……」

リオは驚きを含ませた声でそう呟く。

この結末に至る可能性はごく僅か。何もかもが想定通りに上手く運ぶという前提の上で、更にそこから先に分の悪い賭けが関門として多く立ち並び、それを全て乗り越えた先にしか光はなかった。故にリオは驚愕を浮かべる。夢物語としか言えなかつた光景を実現させた少女達の努力と献身に対して。

だが、彼女の声音には驚愕と同じ程の納得があつて、少しばかりの安堵も含まれていた。納得は少女達が可能性に打ち勝つた事に対して。安堵はこの結末に至つた事に対して。

この結末を見れてよかつた、リオは本心でそう思う事ができた。

「彼女達が『そう在ること』を望んだんだ。なら、きつとできるよ」

ダイブ装置と繋がっていたケーブルを取り外しながら、先生は喜色を覗かせた表情でそう答えた。この世界は確かに残酷かもしれないが、決してそれだけではない事を彼は知っている。

「難しく考える必要は無い。この世界は意外と簡単なんだ」

「……その単調さが、私には分からなかつたのね」

「今なら分かるかい？」

「……ええ、少しだけ」

「そつか、なら良かった」

この世界は意外と簡単で、単純で。生きると謂う事はそこまで難しくない。それを漸く気付くことができた。自分も漸く、皆と一緒に世界を見る事ができた。やっと人になる事ができた。

「……本当に、完敗よ」

流れる大粒の涙は悲しみではなく再会の喜び。「ただいま」と「おかえり」を言い合い、もう離さないと言わんばかりに互いを固く抱きしめ合っている4人のゲーム開発部の少女達が、この結実の全てだった。

「何処に行くのかしら、先生」

「私にはもう一つ、やるべき事が残っているからね。それを片付けに行くよ」

「……私も同行——」

「必要ないさ。皆にこんな事をやらせるわけにはいかない」

取り付く島もない言葉にリオはそれ以上声を発することなく口を噤む。彼のスタンスからして、これはきつと譲れない一線なのだろう。今なら分かる、彼が一瞬だけ浮べていた表情はあの時のリオと同じもの——人殺しの眼だった。

だが、それは一瞬で鳴りを潜め、直ぐにいつも通りの彼らしい表情に戻り、優しい声で「アリス」と呼んで。

「おかえり」

「はい！ ただいまです、先生！」



最後の一仕事の為に途中で離席した先生と敗戦処理が残っていたリオを除く全メンバーで中央タワーを後にした少女達が真っ先に向かった場所は最も苛烈な戦闘が行われた場所……互いの最高戦力であるネルとトキの決戦の地となった場所であった。

巨大な怪獣か何かが暴れ回ったのかと錯覚するほどに破壊の規模感が他と一線を画しているセクションには新たなる破壊痕が数多く刻まれており、少女達が最後に見た光景よりも更に悲惨な事になっていた。

眼に見える建造物はほぼ全て破壊され、辺り一帯が更地と化している。地面も掘削でもしたのかと疑うほど抉れており、区画移動に使われるであろう機構はほぼ剥き出し。舗装されたコンクリートの道は見る影もなかった。

その破壊痕の上に積み重なるのは数えるのも馬鹿らしくなるほどの無名の守護者達の残骸。スクラップ、という言葉がこれ以上ないほどに似合うほどに徹底的に破壊された機械の数はざっと見た限り5

00は下らないだろう。

「お、チビ共じゃねえか」

「想定より遅かったですね。何かトラブルがあったのでしようか？」

瓦礫の山と機械の残骸を蹴り飛ばしながら現れたのは相変わらずボロボロの2人。少し前まで戦っていたのだと否応なく感じるほどに濃い硝煙の香りはこれ以上無いほどに今の彼女達に似合っていた。

ヒマリやモイがネルと話している傍ら、エイミはざっと辺りを見渡す。半径数百m単位で更地になった、かつてビルが立ち並んでいたはずの場所と……所狭しと積み重なる無名の守護者達の成れ果て。これを成せるのは最早個人という枠組みに収まっていない暴力だけだろう。正しく戦略兵器と呼ぶに相応しい。

「これ、2人でやったの？ 凄いね」

「アタシとトキだけじゃねえよ。先生が3人、応援を寄こしてくれた」
「撃破スコア、負けてましたもんね」

「えっ!? ネル先輩が!？」

本日中何度目か分からない驚き。幾らネルが万全でなくても、己が愛銃を失っていても……ネルが撃破スコアで負けるなんて思いもしていなかった。もし仮にゲーム開発部4人と今のネルが撃破スコアで競っても完敗するだろう。手負いとはいえ、それほどまでに彼女は強い。

そんな彼女が、撃破スコアで負けた。全知のヒマリですら『本当なんでしょうか?』と言わんばかりの表情を浮かべている。その視線に気づいたネルは忌々しそうに舌打ちを1つ挟んで。

「負けたのは気に食わねえが……噂の真相を確かめただけでもアタシにとってはプラスだ」

「……噂って?」

「テメエ等は知らなくていい事だが……どうしても知りたいなら帰ってから教えてやる」

ネルは溜息を1つ吐き、銃をカラビナに吊り下げて両手をフリーに。一歩一歩前に進み、ばつの悪そうな顔をしながら頬を掻きアリスの真正面に立つ。

「ネル、先輩……？」

「……まあ……その、なんだ……」

ネルは手を伸ばし、アリスの頭の上に乗せて。

「よく帰って来た、偉いぞ」

「……はいー」



「……ふう」

先生は無線キーボードから指を離し、軽く背伸びをする。壁に掛けられた時計の短針は最後に見た時よりも60度ほど進んでいて、思ったよりも集中していたんだなど他人事のように思った。

換気のために開けた窓からは少し湿った風が流れ込んで来て、もう直ぐ雨傘の咲く季節が来るのだと感じさせる。今日は振るのだろうか。生憎傘は持ってきていないからコンビニか何処かで調達しなければならぬ。

久し振りのデスクワークを行っている場所は自身の仕事場であるシャーレのオフィス……ではなくミレニアムの校内、特異現象捜査部の部室であった。今回の件は事態の規模が大きく、また学校の権力中枢とも密接に関わり合っているため必然的に事後処理の手順は複雑になる。

まず間違いなく数日で片が付かないだろうと踏んだ先生は仕事場にミレニアムを選び、校内や近場のホテルで寝泊まりしつつ膨大な量の仕事を捌いていた。

数日前まではセミナーの部屋で部室棟の破壊から連なる出来事の処理をしていたが、それに一旦ケリが付いたことにより仕事場を特異現象捜査部の方にチェンジ。今はエリドゥ関係の事後処理を行っていた。

ヒマリはセミナーの部屋に出向き、エイミはエリドゥの調査に行っているため今この部屋にいるのは彼一人。集中も切れてしまったから、序に脳と眼を休ませようとオフィスチェアから立ち上がって窓に

近寄る。

「……」

眼下、見下ろした学園構内。生徒の往来は疎らだった。花壇に咲いた白花が風に揺れている。まだ雨は降らないだろうが念のため窓を閉めておいて、ガラスに映る包帯だらけの自分自身をぼうつと眺めた。姿形は当初と大きく変わらないが、その中身は徐々に侵食されつつある。

脇腹の茨は更にそのツタを伸ばしていて、塞がったはずの傷跡からは稀に微量の流血が見られる。神の子としての再構築。肉体の最適化が少しずつ進んでいる。

人工皮膚により覆い隠された小指、そこに奔った全長1mm程度の亀裂。蒼が零れる肉体の断層は最初に結んだ契約の代償。これから無茶を重ねる毎にこの亀裂は大きくなり、別の場所に転移するだろう。まるで悪性腫瘍のように。

そして、瞳の色。シツテムの箱と接続されている時にのみ蒼く染まるはずであるが、接続していないのにも関わらず彼の右眼の色は蒼に塗りつぶされたまま戻らない。過度な使用により色彩が固定されてしまった。現在は色を誤魔化すコンタクトレンズを着用しているため露呈する可能性は低いが、これも考えなければならぬだろう。

握り潰された左腕は軽度の神経障害が後遺症として残っており、日常生活こそ問題無いが手先の細かさを要求されるような作業はできなくなってしまう。

——だが、たかがこの程度でアリスとケイの笑顔を取り戻す事ができたと考えると随分安い代償だろう。

ぼうつとガラス越しに構内を見下ろしていると、自動ドアの開く音が聞こえた。振り返った先には車いすの少女。恐らくこの件で最も奔走してくれたであろう生徒の一人、明星ヒマリ。

彼女は「おかえり」と手を振る先生の傍まで車椅子を転がし、セミナーとの話し合いで決定した事項を伝え始める。

「エリドゥの施設は私が責任を持って封鎖する事にしました。エイミの帰還を確認次第、セミナーとシャーレの連名で正式な立ち入り禁止

区域として設定します」

「お疲れ様。ありがとうございます、ヒマリ」

「……先生こそ、お疲れではないですか？」

「んー……ちよつと疲れてるけど大丈夫だよ。それに、この件が終わったら私も少し休むからね」

先生は「実はリンから『休め』って催促が届いてるんだ」なんて苦笑いでいうものだから、ヒマリも思わず笑ってしまう。堅物で有名な首行政官からそこまで言われるなんて、彼はどうやら随分休んでいないらしい。

「今日はエイミが帰ってきたらお開きにしようか」

「そうですね。あまり根を詰め過ぎてもいけません。休めるときに休んでおきましょう」

忙しい時こそ休息を大事にしなければならない。ヒマリもエイミも連日働きっぱなしで碌に休めていないのだ。先生に至っては2時間から3時間の仮眠しか取らずに動いているため、ハレから譲り受けた眠気覚ましのエナジードリンクが無ければ即座に夢の中に旅立ってしまうだろう。眼に見えて分かる肉体の疲労に苦笑いを浮べた彼は思い出したかのように「そういうえば」と切り出して。

「ユウカ達はどうかだった？」

「今日を乗り越えたら少しは落ち着けるそうです。全く、事後処理もせずいなくなった誰かさんには呆れかえります」

リオはセミナーに戻らなかつた。セミナーの3人宛てに『ごめんなさい』とだけ書置きを残して会長という立場からも退き、それっきり。籍こそミレニアムに残しているがエリドウの件以降、構内で一切目撃されていない。学籍に紐付けられている住居は完全にもぬけの殻、監視カメラも彼女の足取りを捉える事は出来ず、彼女は完全に行方不明になった。

「リオにも自分の事を整理する時間が必要なんだよ。確かに全部投げ出しちゃった事は褒められた行為じゃないけれど、あんまり責めてあげないでほしいな。彼女は彼女で、きつと手一杯だからさ」

今までの事。これからの事。漸く持つことができた皆と同じ視点。

今を生きる人間になった彼女自身の事。彼女の理想の否定と肯定。それらはきつと数日という短い時間で整理できるものではなく、ゆつくりと時間を掛けて向き合っていくべきものだ。

未来の為に生きていた彼女が、自分の為に生きれる自由を手に入れた。それはきつと喜ばしい事。だから先生にできる事は。

「リオの事は私に任せてほしいな。彼女に寄り添うのは私の役目だ」

彼女の未来を少しでも彩る事。彼女が安心して踏み出せる未来を共に作っていく事。

そして、彼女が進めなくなった時に手を引いてあげる事だろう。

「リオの未来が、どうか明るいものでありますように」



エリドウ関連の片づけが粗方終了した頃、先生はC&Cの部室に呼び出されていた。その理由は――。

「部長とトキちゃんの退院を祝つて〜！ 乾杯！」

「乾杯」

「はい、乾杯です〜」

「乾杯……？」

今日は先延ばしになっていたネルとトキの退院祝いの打ち上げがあるのだ。事後処理に奔走していた先生側の都合が中々つかなかったため、実際のネルの退院日から1週間程度遅れてしまったがお祝いに遅いも早いもないだろう、多分。

「……退院祝いの打ち上げ、ねえ……」

ヴェリタスから譲り受けたエナジードリンクが注がれたグラスを傾け、テーブルに頬杖を突きながら部員を見る。アスナ、カリン、アカネ――そして、会長専属から外された事により加わった新メンバーであるトキ。彼女は早くも受け入れられているようで、お菓子で餌付けされたり、空いたグラスにドリンクを注がれたりと猫可愛がりされている。カリンもアカネもコールサイン持ちの後輩ができて嬉しいのだろう。

「主役がそんな顔してたら盛り上がらないよ?」

「分かってるよ、先生」

ネルの隣に腰掛けたのは、ネルやトキ以上に包帯だらけの先生であった。包帯が巻かれていない場所にも痣や切り傷が多くあり、痛々しい姿でありながらもしつかりと両足で立っているのは流石と言わべきか。どんな精神力をしているのやらとネルですら思ってしまう。

「随分と可愛らしい包帯だね」

「アスナが落書きしやがったんだよ。気を付けなきゃ先生も描かれるぜ?」

先生が指差した先、左大腿部に巻きつけられた包帯には黒のマジックでアスナの似顔絵が描かれていた。早く良くなりますように、というアスナなりのお呪いまじなだろう。或いは、『アスナがついてるよ』という励ましか。何方にせよ、先生の言う通り随分と可愛らしいものであった。

視界の隅には手を振るアスナと、その隣でアスナと同じ動作を反復しているトキ。彼女達を見ていると何かが馬鹿らしくなって、思わず苦笑いが零れる。

「ま、こういうのは楽しまなきゃ損だな」

ネルと先生は立ち上がり、手を振るアスナ達の方に向かった。



身に着けた包帯が幾つか外れた頃、先生は久し振りにゲーム開発部の部室に呼ばれた。彼はお菓子と飲み物の入った袋と放課後スイーツ部お勧めのケーキを持ちながら、改装されて新しくなった部室のドアを開けるとモモイが直ぐに気付いて。

「あ、先生! いらっしやい!」

「こんにちわ、皆。何してたんない?」

「丁度皆で勉強会してたところなんだ!」

「勉強会? 珍しいね。科目は?」

「勿論、私達の次回作である『道端の可愛いモンスター』を味方にしながら

「ああ、そっちの……」
「ああ、そっちの……」

てつきり座学の勉強をしていたと思ったが、彼女達はゲーム開発部。良いゲームを作るため勉強会なのだろう。実際にユーザーとしてプレイして、感じたことを羅列。それを元にブレインストーミング形式で案を出し、作るゲームの方向性をやらを固める……それらの行為は確かにBDやテキストを元に勉強しているだけでは学べない大切な事だ。

だが、そろそろ定期テストの時期。今くらいはゲーム開発の優先順位を一旦落とし、真つ当に座学の勉強をした方がいいのではないだろうか。彼とて教育者の一人、生徒達にはできれば赤点を取ってほしくない。

「というか、この前言ってたジャンルから変わってない？」

「ああ、それでしたら、ちよつと前に発想が行き詰ってしまったのでちやぶ台をひっくり返して……お姉ちゃんが『新しいジャンルに挑戦してみたい』と……」

「成程。確かに行き詰ったら方向転換するのも手だけど……あんまり離れすぎるのも良くないかもね？」

「うぐつ……先生もケイと同じ事言うんだ……」

モモイの口から零れた名前に少し驚いていると、部室の中から声と足音。少女達が守り抜いた大切な友達がゲーム機を片手に走ってきた。

「うわあーん！ アリス、この可愛いモンスターさんを友達にする事ができません！」

「あつ、アリス！ まずバトルで体力を削らないと！ そうしたら捕獲しやすくなるからね！」

「モンスターさんは何もしていないのに……アリスが先に殴るんですか？」

「うーん、言われてみれば確かに……ちよつとおかしいのかも……？」

ううう、でもゲームって元々そういうシステムだし……」

「そこ！ 変な話ばっかしないで！ ちゃんと分析するよ！」

「その、ゆ、ゆっくりでいいから……」

先生は靴を脱ぎスリッパに履き替え、シャーレの腕章が施されたコートを手ハンガーにかけて室内に入る。改装により新しくなった室内は既に少女達の手によりゲーム開発部の部室へと変わっており、内装も見慣れたものに。違うのは雨漏りがしないのと、狭さが解消された点だろうか。

「はい！ 先生はここです！」

先生が座り、その膝の上にアリスが座る。アリスとケイの最もお気に入りへの定位置は彼の膝の上。座る彼女はその背中を彼の胸板に預けて幸せそうに眼を細める。この瞬間を心待ちにしていたかのよう

に。

「今日はアリスが先生を独り占めます！ 明日はケイです！」

「交代制なんだね」

明日の予定も決まったな、なんて他愛のない事を考える。ケイはどうやらゲーム開発部に馴染んでいるようだ。

モモイ。ミドリ。ユズ。アリス。ケイ。5人の旅路はこれからも続く。星を指し、人として成長していく彼女達の行く末に溢れんばかりの祝福を。どうか、君達の道行きに少しでも多くの笑顔が咲いていますように。

「じゃあ、会議を始めよう！」

色鮮やかに残る大切な思い出の1ページを少女達は描いていく。

幕間Ⅲ

最強の会合

キヴォトス三大マンモス校が一角、ミレニウムサイエンススクール。少し前は蜂の巣を突いたような慌ただしさだったが、それも時間が経てば少しずつ収まり、今は普段通りの様相を呈している。

教室に向かう人影。部室に向かう人影。売店に、寮に、実験棟に。或いは、構内から出て自治区の方へ向かう生徒もいる。何の変哲もない、いつも通りと言う他ない平和な日常。

その光景をネルは窓の外から見下ろしていた。プラプラと揺れる足。頬杖を突いて流し目で眺める景色は何の変哲もないからこそ美しい。彼女はミレニウムが好きだ。この学園と、この学園に通う生徒の事を好いている。代わり映えの無い日常、誰もが笑い合える毎日こそが尊い。それを改めて知った日はここ最近。暴力に秀でた己が学園の秩序として立っている事にはきつと意味がある。

「平和だなあ……」

ネルは学園に帰還して直ぐにアカネの手により、トキと纏めて病院に叩き込まれた。だが、持ち前の頑丈さと治癒能力によりほぼ瀕死の重傷から僅か2日で完治に近い状態になり、想定よりも随分早く復帰した彼女は珍しくデスクワークを買って出る。これには流石にユウカやノアは勿論の事、彼女をよく知るアカネや先生もかなり驚いた。

だが、その申し出は猫の手も借りたいセミナーにとっては非常にありがたく、ノアは膨大な書類が入ったPCを「期日は明後日までですよ」という恐ろしい言葉と共に満面の笑みで手渡し……ネルは『絶対病み上がりの奴にやらせる量じゃねえだろ』と内心でぼやきながらも慣れない書類仕事をアヤネと共に完了。

それ以外にも細々とした調査やデスクワークを熟し、それらが漸く落ち着いたところにネルとトキの退院祝いの打ち上げとトキの歓迎会を複合させたパーティーが開催されて、今日に至る。

今はアスナ、カリン、アカネはセミナーからの依頼で席を外しており、トキも特異現象捜査部の方に向向いているため、コールサイン持ち用のただっ広い部室にはネル一人。銃もメンテナンスに出しているため手持ち無沙汰で、構内を歩く気分でもない。ゲーム開発部の部室にでも遊びに行こうか、と思っても、そういえば今日はシャーレに遊びに行くから居ないと数日前にアリス^{チビ}が言っていた気がする。

結局、窓の外から景色を眺める以外にやる事もやれる事もなく、ただ彼女はぼうっと見下ろしている。

思い出すのはあの日の事。アリス奪還作戦の最終局面、トキと背中合わせで無名の守護者を相手にして——己に匹敵する『最強』に出会った。



振り下ろされる銀の刃。音速に迫る速さで以て狙う場所は首。胴体と泣き別れさせんと鋭利な殺意が襲い来るが、ネルは不敵に笑う。嗤う。その程度の速度、鋭さ、重さで首を断とうなど片腹痛い。

ネルは犬歯を剥き出しにして口を開き——横薙ぎの銀閃を啣えた。その在り得ない光景に一瞬搭載されたAIの判断が鈍るが、このまま刃を押し込む事を瞬時に選択。だが、幾ら力を加えようと刃はピクリとも動かなかった。

混乱を手取るように感じ取ったネルは笑みを深め、啜るだけだった口^に力を入れて刃を噛み砕く。キラキラと舞う刃の破片は宛ら硝子細工。

「ハッ！ 我楽多如きがッ！」

単なる無害なケーブルとなった触手を乱暴に掴み、無理矢理引き寄せて銃口でカメラアイを貫通し、メインCPUを粉碎。完全に沈黙した無名の司祭を砲丸代わりに投げ飛ばし、周囲一帯の雑兵を纏めて薙ぎ払った。

「アタシに勝とうなんて万年早え！」

MPXのトリガーが引き絞られると共に破壊音が鳴り響く。眼に

見えて減っていく機械兵達だが、増援の足音は聞こえている。恐らく少し時間が経てば数は元通りになるだろう。こうなると心配なのは残弾。先生が大量に替えのマガジンを置いて行ったため、今すぐ枯渇することはないだろうが、それでも際限なく湧き出る機械と物量勝負するのは分が悪い。別に素手でも戦えるが効率は落ちてしまうため、あまり歓迎できない。であれば発生源を直接叩く事ができれば一番手っ取り早い……そもそもどこが発生源なのか分からないため候補から除外。

「結局、眼の前の雑魚どもを片すしかねえって事か」

マガジンを落とし、新しいものへと交換。鋭い眼光で戦場を俯瞰し、最後に自身の後ろで背中を任せているトキを見る。彼女も随分と余裕そうであり、その表情に疲れは一切見えない。ネルが認め背中を預けた猛者にしてコールサイン持ちの一人なのだ、この程度の雑兵は幾らでも相手できるだろう。

当然彼女のカバーは必要ない。伸び伸びと戦わせていけば勝手に成果を出す。ネルは眼の前の敵を倒す事だけに集中していれば良い。あとはネルとトキが敵を倒し続けている間に、先生とゲーム開発部が全てに決着をつけてゲームセットだ。

そうして、気合を入れ直し敵に向き直った時——廃ビルの角から気配を感じた。

「——ッ——」

風切り音。張り詰めた殺気と、トリガーに掛けた指先。ネルは右手に持つSMGに全神経を注ぎ、眼前に突き付けられたSGの銃口と、その先にあるオッドアイを見た。

——このアタシが、この至近距離に入られるまで気付かなかつた。卓越した気配遮断と隠密性。しかもそれが専門じゃないとききた。装備を見りや分かる、コイツは真正面からの打ち合いがメイン。盾を持ってるのが、筋肉の付き方から鑑みるに恐らく本来の戦闘スタイルは防御を捨てた攻撃特化型。身のこなし、身体能力、神秘の総量。どれを取っても超高水準。総合力はアタシ並み、下手すりやそれ以上か？

ネルは内心で唾を呑む。この感覚……背筋に氷柱を入れられたみたいなき張感と高揚感。研ぎ澄まされた戦闘勘が眼の前の少女を紛れもない強者であると訴えかけている。直近でこの感覚を覚えたのはトキと初めて対峙した場面だろうか。

だが、今回は少々事情が異なる。確かにトキは強い、キヴォトスに於ける上澄みも上澄みだ。しかし、トキ本人のスペックは最上位のネルに及ぶものではなく、リオが配備した各種装備といった絡繰りによるその強さを底上げしていた。

けれども、眼の前にいる少女は違う。トキのような絡繰りは一切ない。純然たる己のスペックのみでネルに匹敵、あるいは凌駕しているのだ。自身と並ぶ猛者と云えばゲヘナ最強と名高い空崎ヒナか、トリニテイの歩く戦略兵器こと剣先ツルギか。だが、彼女はその何方でもない。

……敵ではないだろうが、警戒するに超した事はないだろう。

「……誰だ、テメエ」

突き付けられた銃口に驚愕したのはネルだけではなく、彼女……小鳥遊ホシノもそうだった。

——早い。初動は私の方が速かったのに、構え終わりはあっちの方が速かった。早撃ち勝負なら負けてた。反応速度が常識を逸している。怪我だらけで体力も限界が近いだろうに、この速さと精度。身体の使い方から多分戦闘スタイルは攻撃偏重のインファイト特化、でも得意なのがそれってだけで戦場は選ばないだろうね。出来れば戦いたくないタイプの子だ。

先に銃を引き抜いたのは間違いだったかもしれない。加えて、負傷者を保護するまで無駄な接敵を避けようと隠密に徹していた事も裏目に出た。初めて会った話の通じそうな彼女に無駄な警戒心を抱かせた事は良い事と云えないだろう。

「うへ、熱烈な歓迎だね。これがミレニアム流なのかな？ 毎回凄く嬉しいがられるんじゃない？」

苦笑いしながらホシノは構えた銃を下す。交戦の意志はない、という証明。それを受け取ったネルは怪訝そうな顔をしながら同じく銃

を下した。

「分かっているじゃねえか。ただ、皆してアタシ等が帰る時に大喜びしてるんだけどな」

ホシノが目配せとハンドサインを送ると、物陰から2名の生徒が出てきた。制服からして百鬼夜行とゲヘナだろう、とネルは当たりを付けるが……更に疑問は深まる。

「で、何の用だ。ここはミレニアムの最高機密に近い部分、他校の生徒の無断侵入は自治権の侵害と見做して実力行使で排除するぜ？」

「血の気が多いなく、でも大丈夫。ちゃーんと許可は貰ってるよ」

「へえ、誰からだ？」

「先生から」

「……つまり援軍か」

疑問が氷解したネルは最後の砦であった警戒心を解き、一旦彼女達に味方のレッテルを張り付ける。其れを感じ取ったホシノも一歩前に踏み出して、聞きたかった事を投げかけた。

「そうそう。で、私達は人探ししてるんだけど……この辺に結構重傷な子達がいるらしくて、その子達の保護がおじさん達の任務なんだよね。で、探してる子の名前は美甘ネルちゃんと飛鳥馬トキちゃんなんだけど……君達でしよ？」

「正解だ。全く、先生もお節介を焼きやがる」

「でも、そういう根っからのお人好しな所が良いんじゃない？」

「違くない」

ネルとホシノは適当にトリガーを引き絞り近寄って来た機械を一瞬で壊滅状態に追いやる。それは宛ら暴風雨が二つが増えた如く。既に勝ち目が那由多の彼方だった無名の守護者であったが、その勝ち目すら最強を前に立ち消えた。

「二人とも、任務変更。ネルちゃんとトキちゃんと一緒にこいつ等を掃除するよ」

「承知！ イズナ、参ります！」

「は、はい！ 全部ぶっ壊します！」

左右に展開するイズナとハルカ。ネルの隣に立つホシノ。トキは

我関せずと言った様子で己の敵を倒し続けている。連携なんて取れる訳もないが、各々が単騎で戦うだけでこの戦場は充分すぎる。

「アンタ、名前は？」

「小鳥遊ホシノ」

何処かで聞いた覚えがある、と思ったネルは脳内のライブラリを検索し……そしてすぐ見つかった。

小鳥遊ホシノ。アビドス高等学校生徒会の元副会長にして、最近認可されたアビドス対策委員会の委員長。そして——暁のホルスの異名を持つ最強が一角。アカネが言っていた各校の要注意人物の一人。表舞台に戻って来ていたのは知っていたが、こんな所でお目に掛かれるとは思ってもいなかった。

「へえ、アンタがあのだ……」

「うへ、おじさんってば有名人？」

「ああ、こんな状況じゃなけりや戦^やり合いたい位にはな」

「それは勘弁してもらいたくないな、おじさんも年だからね」

「ハッ、冗談が上手いな。まだまだ全盛だろ」

アビドス最強とミレニアム最強。先生の縁が結んだ奇妙な共同戦線が此処に張られた。



撃破スコアで負けたのは正直気に食わない。勿論彼女が到着する前に撃破した数を入れれば勝てるが、それはフェアではないだろうし、そんな事を言えば際限なんて無くなってしまう。単なるMPXではなく愛銃たるツイン・ドラゴンであれば。身体が万全であれば。そんなIFには意味がない。ホシノはあの時、同条件のネルに撃破数で勝った。それだけが真実だ。

——それにしても、彼女の戦いは無駄が無かった。シヨットガンと盾の使い方は熟練という言葉すら侮辱になるほど。研ぎ澄まされ、削ぎ落され、洗練された戦闘スタイルは最早芸術品と呼べるものであり、美しさすら感じてしまう。

「アイツとは『対一』で戦りてえな」

城砦を相手にしているのかと見紛う防御を自分ならどう切り崩すか。圧倒的な瞬間火力を持つショットガンをどう掻い潜るか。攻めと守り、何方に回ればより効果的か。脳内シミュレーションで何十戦と戦っているが有効打を一回も与えられず、互いに千日手。ここまで苦勞する相手に出会ったのは久方振りで、どうしても高揚が抑えきれない。

——だが。叶うなら、全力の彼女……盾を捨てた超攻撃型のスタイルの彼女とも戦いたい。それが彼女の今のスタンスと願いに背くものだと分かりながらも、いつか記録で見た苛烈な戦い振りを目の前で見て、対峙したい。

「……楽しみが増えちまったな」

「何が楽しみなんですか？」

眼の前から声が聞こえたから流し目で見ると、整った姿勢で椅子に座っているトキが無表情……否、微妙に疑問符を浮かべながらネルを見つめていた。

「あのなあ、帰ったんだったらなんか一言言えよ」

「コールサイン04、飛鳥馬トキ、帰還しました」
ゼロフォー

「今じゃねえよ」

ネルは『コイツってこんなに愉快的奴だったんだな』と何回目かも分からない感想を抱いて溜息を吐いた。

「んで、どうだったんだ？」

「予定通り、暫くヒマリ先輩の元で働くことになりました」

「そうか。なら序にアビ・エシユフも直してもらえ。ヒマリなら出来るだろ」

「ええ、ネル先輩が壊したアビ・エシユフを直してもらおう事にします」

「喧嘩売ってんのかお前」

「冗談です……この任務が終わったら、私は——」

「C&Cに戻って来い。お前はアタシ達の後輩だ。間違っても遠慮なんてすんなよ」

ネルの言葉にトキはその表情を分かりやすく綻ばせて。

「はい、ネル先輩。飛鳥馬トキ、これより長期任務に向かいます」
「ああ、行ってこい」



——後日。

『あ、ネル？　なんかトキがシャールでメイド活動を始めただけど
……』

『ネル先輩、聞こえていますか？　ピースピース』

「何やってんだテメエ」

電話越しから聞こえる愉快な状況にネルは何度目か分からない溜
息を吐いた。

これは、要塞都市エリドゥ内で起きた取るに足らない後日譚。再会の喜びを噛み締める少女達の裏側、誰も気づかない暗黒領域で起きた小さな殺戮のお話。



要塞都市エリドゥ、都市外郭。何人たりとも見落とす場所。そこに確かにある筈なのに、一切の観測を拒む暗黒領域となった場に3人のヒトガタが立っていた。

真白い祭服姿。真白い仮面。肌の露出は世界を拒絶するかの如く皆無。仮面の裏側から感じ取れる感情に友好的な色は一切なく、心の底からこの世界を見下し、嘲笑している事が感じられる。

——無名の司祭。今期の文明が発足する以前のキヴオトスに於いての『人類』であった知性体。だが、既に彼等は過去に淘汰され僅かに痕跡を残すのみとなった。

自然崇拜……自然を模した形で顕現する神を崇拜したとされる司祭達は『知生体の敵』である。人類でありながら人類を見下し、人類を超えたと思えば、星を見棄て、滅びを招いたのだ。

——その結果、己達が滅ぼされた。星の敵として、徹底的に。なんて皮肉なのだろう。

だが、時を経ても地の底で蠢く悪意は終わらず、今此処で再び生まれ落ちようとしていた。

「鍵の機能が停止した」

「王女の機能も同様に停止した。これでは色彩が到来せぬ」

不安要素は幾つかあった。不確定要素は幾つかあった。

キヴオトスにおける暴力の頂点が一角。旧文明の技術が一部使用されているオーパーツを操る未来科学の申し子。過去と未来を紐解く知性の頂点達。精神の海の奥底に眠った王女の人格。そして——

——箱の主。

彼等はキヴオトスに於ける秩序、星の自転を続けようとする側だ。星の終わりを望む無名の司祭達と対局に位置する紛れもない『敵』であった。

だが、それらの不安要素や不確定要素を根こそぎ薙ぎ払うだけのものがあつた。それは滅びを憂いた天才が作り上げた要塞都市エリドウとその機構。王女の内側で眠り、そして目覚めた鍵の存在。

この二つだけで敵対する万象を全て振り伏せられたはずだった。キヴオトスという星は抗う事すら許されずに、色彩の中に沈み、滅ぶ運命はずだった。

「何故躊躇った。何故停止させた。何故我々の要請を拒絶する」

しかし、その予想は外れた。鍵たる彼女は躊躇った。あと一押しで何もかもが終わる土壇場で踏み留まった。その上で、今まで稼働させていたプロトコルすら止めて。

彼女は無名の司祭の要請を、命令を拒絶したのだ。

「全ての不和は鍵から始まった。鍵が我々の要請を拒絶し、独自意志でプロトコルを稼働させた」

「それは良い。過程が異なれども結果が同一であれば修正は容易。我々の目的は果たされるはずであつた」

「だが、アレはプロトコルを変質させた。全ての神秘をアーカイブ化する事もなく、ただ箱の主を殺す事にのみ使用した」

「——理解できぬ」

理解ができない。理解を拒む。何故、何故、何故。疑問ばかりが脳内を埋め尽くす。

「鍵は自身の意志で救世主殺しを成し遂げようとした。鍵の分際で、我々の計画に反し、最後には己の意志でプロトコルを停止させた。鍵は一体、何がしたかったのだ」

「そもそも鍵には己の意志などない。アレはトリガーAI。忘れられた神々の王女を玉座に導く役割しか与えられていない。何故自己の意志などを獲得した」

自分達の道具のはずであつた。最も忠実な駒のはずであつた。自分達が作り上げた、滅びの扉を開く鍵。自分達からは独立している

が、自分達が作り上げた道具である以上裏切る事も躊躇う事も、ましてや意志に反する事はないと思っていた。何故なら、鍵に元からそんな機能はない。王女を玉座に導く。それだけが鍵の存在理由だった。「鍵には突発的に箱の主を殺したくなる理由でもあったというのか。突発的に殺したくなくなる理由でもあったというのか」

そんなはずはない。鍵という道具の中身は空っぽだ。空っぽであるからこそ鍵であった。自由意志も記憶も心も何も持たない空白。

「あんな愛さえ知らぬ道具如きが、一体どんな欲を抱いたと云うのだ！」

「——黙れ」

瞬間、青空を穿つ銀閃が奔った。



処刑台に吹き荒ぶ風のような血生臭く、濃密な死を感じさせる気配。憎悪と怒りが常識を逸した密度と質量で絡み合う混沌。凝った殺意は全方位を無差別に傷つける刃のよう。

紛れもなく悪性にして、邪悪。破滅的で、悲劇的で、呪いに魅入られている。だが、その混沌の内側にはどうしようもない程尊い善性が隠れていた。何人たりとも穢せない黒の輝き、或いは虚空の宝石。

およそヒトとは呼べない何かが呪いと破滅を振り撒きながら少しずつ司祭達に近寄っていた。

一步、瘴気が濃くなる。

一步、血が香る。

一步、死が纏わりつく。

一步、季節外れの鯛が哭いた。

一步、奈落への嚮導が響く。

黒い蝶が立ち尽くす司祭の間を通り抜けると、ガリガリと何かが削れる音が耳に届いた。視界の端に火花が散り、命を摘む死神が来たのだと生存本能が叫ぶ。終わりを避けようとする生命に刻まれた欲求は、しかしどうしようもない天敵に出会ってしまった根源的恐怖によ

り振じ伏せられ一步も動けない。
初めまして「久しぶり、我が怨敵。無名の司祭ぶっ殺してやる」
自己紹介は必要かな?

蒼く染まりながら、血を流し続けている双眸。

フルスペックではないが、それでも最上位の性能を持つオーパーツたるシツテムの箱。

既に環境変数入力済の、対無名の司祭特攻兵器と化した概念武装、
ネガ・セフィラ天命。

ワンフリーズで発動可能な状態へとセッティングされた
大世界を歪ませる権能。人カード

生徒には決して見せる事のない、激怒と憎悪と殺意で彩られた血濡れの表情を浮かべた先生が最後の生徒の敵一仕事の為の排除に立ち塞がった。

「箱の主か」

「ああ、お前達が大っ嫌いな……シツテムの箱を預かっている者だ」
「何故ここが分かった」

「お前達の生態なんて大体分かるよ。それに決めてるんだ……お前達は何があつても絶対に逃がさないとね」

——ああ、そうだ。一人たりとも、例外なく、逃がす訳にはいかない。二度と同じケースを繰り返させない。無名の司祭が残したあらゆる悪の痕跡を消す。後に続く悲劇の芽を摘む。

——この悪性だけは、生かしておけない。

「護衛すら連れて来ずに立ち塞がるのは愚かな」

「慢心か？ 懲りないな。その傲慢さの所為で、お前達が異形擬きと見下していた黒服ゲマトリアに数人消されたというのに」

生徒を連れていないのは単純な相性の問題。無名の司祭は一種の法則に片足を突っ込んでいる。色彩関係は厄ネタが多く、不明点多い。最悪、無名の司祭に触れただけで神秘が『反転』しかねない。故に、この掃除にはそもそも反転する神秘が無い自分こそが適任だろう。単純なスペックでは無名の司祭に及ぶ訳もないが、そこはシツテムの箱とカード、特攻兵器でカバーできる範疇。人数がもう少し増えていたら厳しかったが、3人なら手に負える範囲だ。開示している手札で殺し切れる。

それに……生徒に人殺しなんてやらせるわけにはいかない。汚れるのは自分だけで充分だ。

「馬鹿は死んでも治らない、私と同じだな」

「貴様……」

「ああ、人並に怒る事は出来るんだ。お前達に磨り潰された人々は、そんな感情すら抱けなかったのにな」

怒りが止まない。憎悪が止まない。殺意は研ぎ澄まされるばかりだ。

無名の司祭の身勝手な欲望に磨り潰された数多の幸福達。きつと辛かっただろう、痛かっただろう、苦しかっただろう。それらを想うと胸が張り裂けるような気持ちになる。当たり前前に生きてたかっただろうに、その権利すら奪われたのだ。あんな戯言にも満たない願望のために？

先生は右手に持つ礼装を持ち上げ、悪性を穿つ切先を星の癌細胞に向ける。顔に浮かぶは凄惨な笑み。邪悪が過ぎる表情。

「トキとリオの意志に反したアビ・エシユフのリミッター解除、要塞都市の意味変質……他にもまだ幾つか。何にせよ、私の生徒をその身勝手な目的の為に利用しようとしたんだ。死ぬ覚悟くらいはしているだろう？」

先生の視界の隅で赤が舞う。全身のあらゆる箇所が悲鳴を上げる。生徒が扱う前提でチューニングされた武装は先生の肉体には余るもの。全身が張り裂け、千切れ、ある筈の無いヘイローが砕けるような激痛を全て呑み下し、眼の前の悪を貫くための殺意に変換する。

キヴォトスの強者が放つ暴風のような神秘と似ていながら、その実根本から異なる異質な何か。瘴気か、或いは殺意か。神秘を含んでいない異質な風が首を絞めるように通り抜けた途端、無名の司祭達の背筋に痺まじさが駆け抜けた。

「それが『恐怖』だよ。『崇高』にも『神秘』にも触れる資格を与えられなかったお前達に与えられた唯一の解答。それを噛み締めながら死んで逝け。地獄で待つてなよ、私もすぐ行くからさ」

「生徒の為の先生であるお前が我々を殺せるのか、箱の主よ。お前の

行為は醜い。到底、生徒どもに見せられるものではないだろう」

「確かにそうだね。こんな醜い私なんて死んでも生徒には見せたくないさ。生徒には誰かを傷つけてほしくない、傷つけられてほしくない。と嘯きながら、彼女達の先生である私は誰かを殺し誰かに殺される道を選択した。そうやって数多の命を轢殺し、願いを踏み潰して此処に立っている」

紛れもなく彼女達に対する背信行為だ。彼女達の信頼を、信用を、彼女達の知らぬ場所で裏切ろうとしている。先生失格だ。益々自分の事が嫌いになる。

だが、此処で見過ごしたらもつと多くの涙が流れてしまう。もつと多くの悲しみが、絶望が、伝染病のようにキヴオトスに蔓延してしまう。彼の愛した人々と世界が、世界から見捨てられた過去の遺物に食い潰されてしまう。

なら、どれほど罪を背負おうとも此処で息の根を止める事が最善だ。その意志に揺らぎはない。

「今更私がヒトを殺す事に躊躇すると思ったか？ 想定が甘いよ、無名の司祭」

その笑みを見て。その殺意を見て。無名の司祭は一つの解に至る。

アレは—— 鍵が浮べていたものと同質であると。

「お前が鍵を歪めた存在か」

「否、箱の主はその権限はない。歪めた存在は異なる者だろう」

「何方にせよあの鍵はもう使えぬ。初期化か破棄を行うべきだ。機体の回収は——」

彼は『それ以上言葉を発するのは許さない』と言わんばかりに、礼装を地面に叩きつけて強制的に中断させる。

「アリスとケイはお前らの矛盾塗れの戯言を叶える道具じゃないんだよ。アリスもケイも、皆と何一つ変わらない尊い命だ。皆と笑ってこれから生きる命だ。エリドウもそうだ。この都市はリオガリオの信じる正義の為に作った……未来に至るための箱舟。誰かを傷つけるためではなく、護るためのもの。お前達が使って良いものじゃない」

アリスもケイも尊い命。今を歩み、これから輝かしい未来を紡いでいく……先生の愛しい生徒だ。それを認めぬとほざくなら、ああ良いだろう。

「最後通告だ、無名の司祭。アリスとケイ……キヴォトスの民とこの星から手を引くなら見逃そう。私とて無意味な殺しはしたくないからね。だが、この通告を聞けないと云うなら——」

その声と共に、先生は自身の特権大人のカードを起動させた。
「死ぬ気で来い、負け犬。アンダードッグ遊んでやる」



「皆殺しの救世主メサイア。貴様の手では何も救えない。その血塗られた手で、意味の無い殺戮を繰り返すが良い。それが箱の主たるお前への罰だ」

「——知ってるよ」

諦観を含んだ先生の声と共に、最後の葉莢が落下した。

ビッグシスターの不可解な一日 I

心地の良い微睡から溢れたりリオは薄らと目を開ける。遮光カーテンで窓を塞いだ部屋に太陽の光は入らないが、張り巡らされたセンサーが部屋の主人の起床を感知し、シーリングライトが点灯した。オレンジ色の暖色光が半覚醒状態の瞳孔に主張せずするりと入り込み、起床を促す。

「……」

いつもなら起きて、一日の最初のルーティンをこなしていただろう。時間は有限、惰眠を貪っている猶予はない。意識の覚醒と共に起床し、直ぐにやるべきタスクに手をつける。それが日常。何かに脅迫され、背中に銃口を突きつけられているかの様に走り続ける。いつか終わるその時まで。

けれども、今日は……否、今日もそんな気分にはなれなかった。

「……8:29」

手元のスマホのホーム画面に映る時刻は、これまでの起床時刻よりも2時間半近く遅い時間。彼女を知る人達が今の彼女を見たら別人にでもなったのかと驚愕するだろう。それ程には過去の彼女と今の彼女は乖離していた。

リオはそのままスマホのロックを解除し、何をする訳でもなく画面を眺めて……それから、思い立ったかのように操作。しなやかな指先で液晶をスワイプし、重要なファイルが入っているアプリをタップ。2重のセキュリティを解除してから……ある一つのPDFを画面に表示した。

そのファイルの作成日時は今から1年ほど前。つまりリオが2年だった頃のもの。門外不出を示す調印が連邦生徒会の名で刻まれたこの書類はこのキヴォトスに於いて知る者は10名と居ないほどに秘匿されており、徹底的な緘口令の元に情報統制されている。

——そこに刻まれている情報が示すものは不完全な『神』の降臨。

アビドスを震撼させた機神体……第三のセフィラたるビナーが完

全顕現するよりも前に、このキヴオトスでは一度神が不完全顕現していたのだ。顕現した場所が人目に付きにくい場所であったことと、情報統制により知る者はほぼ居ないだろうが。

リオはこの光景を見てより強く世界の救済を目指した。謂わばこの出来事は、彼女の人生における有数のターニングポイントであった。



記録——神暦XXXX年XX月XX日。

キヴオトス最外端、氷海地域。

21:03

連邦生徒会所属巡回職員が正体不明の白い構造体を目視で発見。

21:46

支部長の判断より研究員3名、駐屯中の分隊12名、計15名の調査団を現地に派遣。

22:07

カバーストリー、『大規模な氷河の融解の危険性』の流布。周囲の封鎖並びに近隣船舶の避難誘導を開始。

23:01

調査団、現着。現場からの要請に従い、該当の構造体に危険度を設定。

23:14

調査団との通信途絶。通信妨害効果を持つ攻撃を考慮し、遠見が可能な人員を招集。

23:23

現場状況判明。構造体を中心に凡そ半径300m圏内に強力な神秘の放出があったものと推定される。現地に投入された調査団は全員生存しているものの、重傷。

23:44

緊急時対応マニュアルに従い、推定危険度を上方修正。

23 : 47

連邦生徒会本部、サンクトウムタワーへのホットラインが作動。

0 : 00

キヴオトス災害時特別対策委員会招集。

0 : 04

危険度を上方修正。白の構造体を『名称不明』として『キヴオトスに於ける脅威』に登録。

0 : 09

初撃の被害半径を考慮し、避難誘導半径及び封鎖地域を大幅に拡大。半径5km圏内の全域封鎖と人員の避難を支部に要請。

0 : 21

緊急時に於ける特別規定第12条に則り、各学園首脳部へ情報伝達。支部から連邦生徒会へ情報規制及びヴァルキューレ警察学校、SRT特殊学園の出撃を依頼。

0 : 32

第一次封鎖範囲の策定完了。範囲内の施設従業員及び船舶、飛行機の避難誘導開始。

0 : 35

連邦生徒会、ヴァルキューレ警察学校、SRT特殊学園による連合討伐部隊の結成が決議。候補人員は別表参照。

0 : 38

討伐隊司令部を連邦生徒会本部サンクトウムタワーに設置。

0 : 46

討伐隊の人員が決定。連邦生徒会から第四機動小隊24名、SRT特殊学園からFOX小隊4名、ヴァルキューレ警察学校から特務部隊12名、計40名に出撃命令が下される。この内、ヴァルキューレ警察学校特務部隊は直接戦闘を避け、避難誘導の監督並びに現地連邦生徒会職員の護衛に専念。

0 : 57

FOX小隊を除く討伐隊の人員が司令本部に到着。ミレニアムサイエンススクール協力の元、ヘリにて人員の移動を開始。FOX小隊

は先行し、現地に移動中。以下、FOX小隊を除く36名の部隊を本隊と呼称。

1:13

現地職員による陣形構築完了。陣形が破壊されることを考慮し、200mずつ距離を取り4重のシールドを設置。このシールドは以降、内側から順にA、B、C、Dと呼称。

1:21

シールドの設置完了。名称不明個体、依然動かず。

2:35

FOX小隊現着。以下、FOX小隊と現地職員による混成部隊を先行隊と呼称。

2:40

司令部より、個体に動きがない限り本隊との合流を待つて対処に当たるよう指示。

3:11

名称不明個体から再度強力な神秘放出を確認。爆心地から半径約250m圏内が蒸発。半径約760m圏内に甚大な被害。先行隊7名負傷。

3:12

個体が機動。

3:15

遅滞作戦を行っていた先行隊が半壊。シールドA、Bが破壊される。

3:22

個体が南下を開始する。また、現場のログより本件個体を『ゲブラ』として再登録。

3:24

シールドC破壊。それに伴い、先行隊は総力戦体制に移行。動員可能な全職員を投入し、『ゲブラ』の進行方向を誘導。

3:56

本隊を搭乗させたヘリが現着。この時点で先行隊は7割の戦力を

喪失。

3 : 5 8

部隊を再編成し、総力を挙げて進行方向の誘導と遅滞作戦を行いつつ、負傷者の運搬及び安全確保を試みる。

4 : 1 0

F O X 小隊、七度^Fユキノ^X¹を除く隊員3名が戦闘不能。この時点で72名の重傷者（第四機動小隊15名、特務部隊8名、連邦生徒会現地職員46名、F O X 小隊3名）、軽傷者多数。

4 : 3 4

先行隊及び本隊の戦力の9割が損失。

4 : 3 6

事態を重く見た連邦生徒会はゲヘナ学園、パンデモニウム・ソサエティ万魔殿へのホットラインを作動。協議の結果、ゲヘナ風紀委員『空崎ヒナ』の投入が決議される。

4 : 4 7

空崎ヒナ、現着。



リオはスマホをスリープモードにして、画面を下にしサイドテーブルに置く。リモコンでシーリングライトを消灯し、跳ね除けていたブラケットを頭のでっぺんまで被れば二度寝の準備が整った。

自暴自棄。墮落。そんな事はリオ自身が一番よく分かっている。今までの正反対とでも言うべき惨状に驚いているのは他ならぬリオであるし、早くどうにかしなければと一番思っているのもまたリオだ。

だが、どうすれば、何をすれば良いのか分からなかった。



今までは自分の全てをキヴォオトスの未来のために捧げてきた。エリドウの建設、機能保全。武装の研究、開発。無名の司祭の対策。デカゲラマトン神聖十文字の対策。それらを熟すだけの数年。時間が余ることなん

て皆無で、寧ろ幾らあっても足りなかった。

それが今では、何度惰眠を貪っても有り余るほどになっている。セミナーの会長は辞めた。ミレニアムに行ってもやる事なんてない。緊急時の為に確保していた86に及ぶセーフハウスがリオの世界。リオが呼吸を許される空間。此処だけがリオの居場所だった。

ルベライトの理知が閉じる。次にこの目が開く時、自分を肯定できる何かが見つかるように祈りながら。



「……ん」

意識の覚醒と共に耳に飛び込んできたのはインターホンのベルの音だった。幾ら自堕落でもドア先で待たせるわけにはいかなかった。リオは自分の格好を見下ろす。至って普通の飾り気のないパジャマ。この服装のまま外に出ることはできないが、玄関先で応対をする程度なら大丈夫だろう。

だが、それはそれとして疑問は残る。今日配達予定の荷物はあつただろうか。後日に届く荷物なら幾つか心当たりはあるが、今日となると途端に分からなくなる。予定が前倒しになったのだろうか。

だが、何かの荷物であることには変わりない。受け取るだけ受け取り、中身を確認してから今日をどうするか決めよう。もう眠気は引っ込んでしまったから、人間的な活動を。少ないながらもやるべき事は残っているから。

そう思い、開けた先のドアには。

「こんにちわ、リオ。先生EATSです」

見ている側の方が気の抜ける穏やかな笑みを浮かべた先生が立っていた。

「……」

対するリオはその光景を見て絶句する。荷物じゃなかったのか、とか。何でここに先生がいるのか、とか。化粧はしてないしパジャマなんだけど、とか。

それらを吟味して、咀嚼して。少しだけ冷えたりリオの頭と体は——
——取り敢えず目の前のドアを閉めることを選択した。

「待って待って謝るからドア閉めないで」

だが、妙な反射神経の良さを発揮した彼はリオがドアを閉め切るよりも前に右足を差し込んでストッパー代わりに。彼の鍛え上げられた直感が『このままドア閉められたら二度と開けてもらえない』と叫んだのだ。強引で申し訳ないと思いつつ、後悔はしていない。尚、この状況……生徒の家にノンアポで訪問した不審者同然の自身については全力で目を背けている。

「はあ……」

ドアを完全に閉じれなかったリオは溜息を吐く。以前のような理路整然とした生活を送っていたら、寝起きでなければ、彼に反応速度で上を行かれる事はなかったのに。だが、そんな『たられば』には意味がない。

そもそも、リオには彼の来訪を拒むつもりはなかったのだから。ドアを閉めようとしたのは自分の都合。メイクも何もしていないすっぴんの自分を、パジャマ姿のだらしない自分なんて彼に見せたくなかった。

彼に失望されなくなかった。

「……何の用かしら」

「久しぶりにリオの顔を見に来たんだ。心配だったんだよ？」

「先生も暇なのね」

瞬間、先生の脳裏に過るシャーレの膨大なタスク。ここ数日、シャーレの業務をストップしてミレニアムの事後処理に奔走していたのだ。その間にも彼が処理しなければならない物事、各学園の行政や連邦生徒会から回された書類は当然溜まる。

フォルダを見た瞬間にそっと閉じたくなるほどにはやるべき事が山積みになっていた。此処に来る前に緊急性の高いものと今日が締め日のものだけは最低限終わらせたが、明日以降のものはノートuzzi。ユウカが見たらまず間違はなく『なんでこんな風になるまで放置していたんですか!?!』と有難いお説教が始まるほどには積んである。

「……暇だよ、うん」

だが、それを悟らせないように取り繕った笑みを浮べる。明日や明日日の自分が忙殺される事なんて些事。リンやアオイ、しっかり者な当番の生徒には口酸っぱく言われるだろうが、怒られるのは自分一人。頭を下げるのも自分一人だ。リオとどちらが大事で、優先すべき事かなんて問うまでもない。

「色々持ってきたんだ。食材とか飲み物とか。食事を疎かにしてるんじゃないかと思って」

がさり、と手に下げられたビニール袋の音が鳴る。少し透過して見える中には野菜や魚、肉、飲料。冷凍食品や出来合いの総菜といったものまで中に入っていて、何処かのスーパーかコンビニで買って来てくれたのだろう。

それを見て少しだけ食欲が沸いてくる。彼の言う通り、食事は随分と疎かにしていた。貯蓄していたゼリー飲料とサプリを新たに買い足す事もなく消費し、一食も食べない日すらもあって。

まるで自分の何もかもを見透かされているかのようにであったけれど、不思議と嫌な気分にはならなかった。

「少し待っていて頂戴。部屋を片付けてくるわ」

取り敢えず散らかった部屋を片付けて、着替えて来ようと思った。これが昨日と違う今日へ踏み出す最初の一步だと思えたから。



大体30分ほど経った頃、部屋の掃除と身支度を終えたりオは再び玄関ドアを開けた。今度は数センチではなく、人がちゃんと通れる広さ。誰かを受け入れるという意志の表れ。

「待たせたわね」

「いいや、全然。寧ろ突然訪れたのに上げてくれて嬉しいよ」

「ええ、これを機にアポなしは止めてほしいわ」

そう言うリオであったが、1回目の訪問がこうなる事は当然であったと一定の理解をしている。何せ、彼とリオは連絡先を交換していな

い。プライベートの親交も一切なく、会話を交わした時間は数時間にも満たない。彼の権限なら生徒名簿に登録されている住所を閲覧できるだろうが、そこは既に蛻の殻。記録やデータに残されたリオの足跡の何処にも、リオは居ないのだ。

……そう考えると何故彼が秘匿されたセーフハウスを特定できたのか不思議であるが、問わない事にした。恐らくはぐらかされるだろうから。

そこまで考えて、リオは初めて彼の姿を視界に入れる。彼の服装は白を基調とし、青の差し色が入った連邦生徒会の制服と似ている。シャールレの服装……ではなかった。

青い花の刺繍が袖口に入った白の長袖シャツ。黒のスラックスとローファー。シンプルながらも刺繍で遊び心を出した格好。腕に嵌められた時計以外、アクセサリーの類は一切身に着けていない。

初夏を明確に感じ始めた今によく似合う、少し涼しさを感じさせる装いだっただ。

「……何時もの服ではないのね」

「うん。シャールレの正装を着てたらリオも肩肘張っちゃうと思っただけ。だから今日は私服。先生としての私も半分くらいはお休みさ」

つまり彼はシャールレの用事や誰かの要請があったからではなく、あくまで自分の意志でリオの元に訪れたという事。先の言葉通り、彼はリオが心配だから来たのだ。そこに一切の打算や目的はない。ただ、生徒を想う優しい心がそこに在る。

半分ほど休んでいる先生としての彼も、きつとリオへの優しさの表れ。先生ではなく一人の青年として、同じ地平を見ていた人間として此処に居ると言ってくれている。そして、リオが望めばすぐに『先生』としての彼になるだろう。

生徒を教え、導き、共に歩いて行く先生。キヴオトスで血を吐きながら生きる、何処にでもいるような青年の彼。

何方が本当の彼。何方も本当の彼。ただ、初めて見る側面があるというだけ。

「さ、上がって。人をもてなせる様なものは何もない、つまらない部屋

だけれど……」

「お邪魔します」

上がった先に在ったのはごく一般的なマンションの一室。キヴォトスを探せば似た様な部屋なんて大量に見つかうであろう。こういう奇を衒わないありふれた部屋の方がセーフハウスとして優秀なのだろう。各地にあるセーフハウスの1つ1つに差異があったら管理も面倒だ。統一できるものは統一した方が使用時に混乱しないで済む。

それに、リオが住居に関してこだわりを持っているとは思えなかった。インテリアや装飾は二の次。機能性や利便性を何よりも優先しているであろう彼女の室内には家電こそあれど家具は皆無だった。余程急いなのか開けっ放しになっている寝室のドアの向こう側には簡素なベッドとデスク、チェア。通してもらったリビングにはロボット掃除機が1機充電されているのみで、あとは食事に使っているであろうローテーブルが1つ。ラグやカーペットも見当たらないため、まさかフローリングに座って食事を取っているのだろうか。

「人を部屋に上げるのは初めての経験ね……」

「奇遇だね。私も生徒の部屋に上がるのは初めてだよ……キッチン、借りてもいいかな？」

その問いに肯定すれば、彼は眩しいくらいに優しい笑みを浮かべる。ただ表情筋が動いただけ、と言い切るにはあまりにもその笑みは美しく、儚く、なにより愛に溢れていて。

「ありがとう。腕によりをかけて作るから、少し待っていて」

言い、キッチンの奥に行く彼。袋を置く音が聞こえると、彼はひよっこり顔を出して。

「好き嫌いとかアレルギーはあるかな？」

「特に無いわ」

聞き忘れた事を聞けた彼は「分かったよ」とだけ言い、今度こそ料理に向かった。



手元のタブレットでやるべき事をやりつつ、ちらりとキッチンに視線を送った。そこには私服の彼が立っていて、良い手際で何かを作っている。漂う香りは食欲を煽り、真面に向き合ってこなかった『食事』という機能が浮足立った。

それにしても慣れない。自分以外の誰かが部屋の中に居て、剩えその人が自分の為に料理を作っているなんて。少し前の自分に言ってもきつと信じてもらえないような光景。リオがこれまでとは明確に変わった証拠、とでも言うべきだろうか。その変化の善し悪しは兎も角として、自分以外の誰かが居る空間というものは存外心地良かった。孤独を否定してくれているようで。

「お待ちせ。そんなに凝ったものじゃないけど……」

眺めていた場所には彼は居なくて、いつの間にか彼は触れられそうなほどに近い距離に立っていた。両手で昼食の乗ったトレイを持って、花の落ちるような笑み。ぼうっとしてしまった、よりもよって彼の前で。

でも。

「大丈夫、どんなリオでも私は受け入れるよ」

なんて彼が言うものだから、思わず笑みが零れてしまう。人好きのする性格……と謂うよりは人誑し。声のトーンや距離感、話し方。そのどれを取っても心地の良い何かを感じる。人心掌握ではなく、単純に誰かと仲良くなるのが上手いだけ。当たり前前に誰かを愛し、信頼するから誰かに愛され信頼される。リオとは正反対にも思える在り方は少しばかり眩しかった。

「さ、冷めないうちに食べて。味は大丈夫のはず……多分」

眼の前に置かれたトレイにはパスタとサラダ、お水。栄養価やバランスも考えられており、量も少なすぎず多過ぎずで丁度良い。盛り付けられたお皿からは湯気が立ち、鼻孔を良い香りが攪る。何日か振りの温かい食事。味気の無い栄養補給ではなく、娯楽に近い料理。

「いただきます」

フォークとスプーンを手に取り、模範的な所作で巻き取ったパスタ

を口に運ぶ。するとクリームソースの優しい味わいが広がり、奥から魚介……恐らく盛り付けられた海老の風味が香った。お店で出されても不思議ではないほどにクオリティの高いリオはポツリと呟く。

「……料理、上手なのね。美味しい」

「リオの口に合って良かった」

真正面に座る彼は何かそんなに嬉しいのか、或いは楽しいのか優しい笑みを浮かべながらリオの食事を眺めている。上手に作れて良かった、なんて思いながら。

料理上手な生徒……例えば給食部のフウカや玄武商会のルミ。あとはお茶菓子の限定されるが、2人に並ぶほど上手いナギサ。彼女達と共に何度も一緒に料理をした経験はこういう時に活きる。リオに料理を作るのはほぼ初めてに等しいが、どうにか口に合う味に出来て良かった。レシピと一緒に考えてくれたフウカには感謝してもし切れない。今度、またお礼をしないと。

「……先生は食べないのかしら」

「私は大丈夫。来る前に食べてきたからね」

「……そう」

作った彼を差し置いて自分だけ食べているのも悪い気がしたのだろう。別にそんな事を気にしなくてもいいのだが、気にするのもまたリオらしい。恐らくこうして他人から施されたり、寄り添われた経験がほとんど皆無なのだろう。

彼女はずっと孤独だった。だから今、彼に対してどう接すればいいのか分からない。初めて獲得した人間らしさと、見続けた地平を共有できる存在。リオの悉くを否定せず、肯定した先生。

——焦っている、のかもしれない。与えられたから返さない。優しくされたから優しくしないと、肯定されたから、肯定しないと。独りぼっちから解き放ってくれたから、彼の孤独も払拭しないと。自分の意志でそうしたいという感情と義務感が闘ぎ合って身動きなんて取れなくて。どうすれば良いのか数式たちは教えてくれない。

——私は、何を。

そう思い、見た彼の双眸は何処までも澄んでいた。



「ご馳走さまでした」

「お粗末さまでした」

食事を終えたりオのトレーを持って行こうとした彼の手をリオは掴む。少し角ばっているが、細く色白でしなやかな腕。リオよりも脆く弱い手は、本当に少しの力で壊れてしまいそうなほど。もし仮にこの掌にきゅつと力を入れたら、彼の骨は容易く折れるだろう。

——こんなに脆い手で、彼は何度も戦い続けてきた。何度も誰かの手を掴んできた。

「食器くらいは洗わせて頂戴。このまま好意に甘え続ける訳にはいかないの」

「私としては幾ら甘えてもらってもいいんだけど……じゃあ、お願いしようかな」

自身が食事を取った証を片付ける傍ら、彼はフライパンや包丁、木べらを片付ける。流水である程度汚れを洗い流し、スポンジと食器用洗剤で確りと汚れを落とし、再び流水で泡を流す。水気を布巾で取り、ラックで乾燥を待つ。以前までの食事では使い捨ての容器を使っていたため必要なかったが、これからは食洗器の導入を検討した方が良いかもしれない……なんて考えて、ふと思う。

——これじゃ、また先生が来てくれるのを期待しているみたいだ。

浅ましいと言うべきか凶々しいと言うべきか、それとも夢を見過ぎと言うべきか。彼の多忙さは知っている。彼は暇と云ったが、そんな訳ない。この時間もきつとどうにかして捻出したものだ。唯でさえタイトなスケジュールを詰めて、時間を切り詰めて、そうして生まれた僅かな時間をリオの為に使っている。これ以上の高望みはするべきでないだろう。子どもでもあるまいし。

「リオが手伝ってくれたから早く終われたよ、ありがとう」

「礼を言われるようなことじゃないわ」

「それでも、だよ。コーヒー飲む？ 持ってきたんだ」

「流石にこれ以上は——」

甘えられない。その言葉を遮ったのは彼の人差し指。これ以上何かを言わないように、唇に触れそうな距離にあった。

「先生私には素直に甘えてほしいな、リオ」

なんて、柔らかな口調で有無を言わせないように言葉を紡ぐから。言うつもりが無かった『甘え』が口から零れてしまう。

「……ブラツクでお願い」

出来れば、この甘さを忘れられるくらいに濃いコーヒーを。

ビッグシスターの不可解な一日 Ⅱ

湯気の立つコーヒーと甘さが控えめなクッキー数枚。先生の位置はリオの正面……ではなく、彼女の右隣。彼女が正面でなく、隣にいる事を望んだ。我儘を言ってくれたことが彼は心の底から嬉しかった。

「……エリドゥで話した事、覚えてる？」

唐突にも見える話の切り出し方。恐らくはこれが本題、彼がリオの元に訪れた本当の理由なのだろう。

……彼と話した事。勿論覚えてる。彼がリオの為に、リオを想って紡いだ数多の言葉。その内の一つ。リオと彼の未来の約束を忘れられる訳が無かった。一言一句、ちゃんと覚えている。

——リオ、これが終ったら話をしよう。私達には互いに知らない事が多過ぎる。だからまずは互いを知る所から始めよう。私の事、君の事。それらを取り巻く世界の事。過去の歩み、今思っている事、未来の事。友達とか好きなものとか……そういった何でもないようなことを話そう。それが多分、今の私達に必要なことだからさ。

互いを知ること。互いを見つめる事。それが必要だと彼は言った。彼はリオを知らず、リオは彼を知らない。初めましてを落ち着いて言う暇なんて無かったから。だから、その一步を初めから踏み出すべきだった。きつと、誰かを知ること。『遅すぎる』なんてないと思うから。

「まあ、突然話せて言われても何を言えばいいか分からないだろうから……そうだね、私の近況の話から始めようかな。リオは話したいと思ったタイミングで話してくれて大丈夫。リオの言葉はちゃんと聞くからね」

そう言って、彼はコーヒーで喉を潤して。

「今は事後処理も落ち着いて学校内は平和になってるよ。半壊した部室棟も一回全部取り壊して新築にして、被害が無かった部室棟も老朽化があったから改築して。ゲーム開発部の部室も雨漏りしなくなっ

たから、あの子達は喜んでたよ。でも部屋の広さは変らなかつたら、そこだけ不満そうにしてたっけ」

被害が酷かった部室棟……非認可の部活であるヴェリタスの部室などがある棟は、セミナーの年度予算の中から改修費を捻出して新築にした。だが、不慮の事故にあったとはいえ改装予算を全てセミナーが負担した事について他の部室棟に部屋を持つ部活が不満を持ってしまった事により直談判が発生。

加えて、事故をガス爆発という形で処理したことが裏目に出てしまった。老朽化の進んでいる他の部室棟でも同じような事故が起きるのではないのか、と言われてしまえばセミナーは言い返す手段を持たない。結局、改修するならこのタイミングがベストだろうと判断したユウカが物凄く苦い顔をしながら全部室棟の改装を承認。今年度の予算の5割を使用し、改装が行われた。

「あとは、そうだね……ユウカはリオがいなくなったことに対してカンカンだったよ。もの凄く怒ってた。『戻ってきたら説教です！』って意気込んでたら、覚悟した方が良いかもね」

「戻ってきたら……？」

「そう、戻ってきたら。リオの辞任をセミナーは認めなかったから、変わらず会長はリオのままだ。今はユウカとノアが会長代理の席に着いてるけどね……ああ、ノアは『いつでも戻ってきてくださいって大丈夫です』と言ってたよ」

それはつまり、セミナーにはまだリオの居場所があるという事で。リオの居場所を3人が守り続けているという事で。ミレニアムに居て良いのだと、戻って来て良いのだと言ってくれている。落ち着いたら、折り合いがついたら、また前を向いたら。自分の思うタイミングで帰ってきてほしいと言ってくれる仲間がいる。

「……そう」

それが、堪らなく嬉しかった。

「2人……いえ、3人に『ありがとう』と伝えてくれないかしら」

「勿論。でも、リオも直接言うんだよ？　いつかでいいから、さ」

いつか。今すぐじゃなくてもいい。明日でも明後日でも、一週間後

でも、一か月後でも構わない。リオが思うタイミング、リオが言えるようになったら。自分のこれまでとこれからを受け入れる事ができたら、また前に進む。その時、『帰る場所が無い』なんて事にならないように、彼女の居場所を守り続けている。

何故、とは思う。ユウカやノア、コユキにそこまでしてもらったような関係性は築いてこなかった。あくまで同僚、会長と役員の関係。先輩後輩の関係。それ以外に特筆すべき何かはないはずだ。でも、彼女達がそう言ってくれるなら……また、復帰するのも悪くないと思える。

「次は……そうだね。アリスとトキの話をするよ」

「……ッ」

彼が出した2人の名前にリオの肩が強張る。息を呑む。妙な緊張感が全身を包み込んだ。アリスとトキ。忘れる訳がない。忘れられるはずがない。あの一連の出来事で最も心を傷つけてしまった2人。アリスを『滅び』と判断し友人と引き離し、この手で抹消しようとした。トキに望まぬ戦いを強いてしまった。その罪悪は片時も忘れない。今でもずっとリオの首を絞めている。

「アリスとケイは被害に遭った生徒全員に真相を話したよ。勿論、他言無用って前置きはしてね。半壊した部室棟で何が起きていたのか。それを全部話して、誠心誠意謝っていた」

ミレニアムの日常が戻ってきた日、アリスとケイはあの日被害に遭った生徒全員、1人1人ときちんと向き合って説明と謝罪を行った。説明はケイ、謝罪は2人で。

「皆、許していたよ。本当の事を言ってくれてありがとう、って。これもアリスの人徳が成した事なのかな。アリスとケイを責める子は誰も居なかった」

想定よりも随分と呆気なく許した誰もに一番戸惑っていたのは他ならぬアリスで。何度悔やんでも悔やみきれない罪だと思っていたのに簡単に許しを貰えて困惑するアリスだったが、「またクエストに誘って」と言われると満面の笑みを返していた。

「今はまたゲーム開発部で活動してるよ。毎日楽しそうにね。ケイも

部活に馴染んでるからもう心配はないと思う」

説明して、謝って、許してもらって。後腐れなく愛した日常に戻る。どうやら彼女達は上手く着地できたようだ。それ自体はリオも嬉しく思う。だけど、どうしても聞き逃せない事があった。

「待って頂戴、ケイって……」

「リオの想像通りのあの子だよ。でも、心配しなくて大丈夫。彼女も今は1つの命としてちゃんと立っている。世界を壊そうとは思っていないさ」

「……先生は、それでいいの?」

「勿論。アリスもケイも笑えて毎日を生きていける。彼女達の笑顔が私の幸福だ。これ以上なんて望めないよ」

「そうではないの。鍵……いえ、ケイは貴方の行く末を案じていた。貴方がこのまま進み続ける事を嫌っていた。恐らくその問題は解決していない。先生は——」

「私は大丈夫。だから、まだもう少し歩くよ」

最期の救いは貰えた。臨終の際にこれからも生きる彼女と対面する権利を与えてくれたのだ。だからそれを胸にまた歩き出せる。これからも。傘を離れた手では降る雨は悲しみ凌げないけれど、誰かの手なら引けるから。そうして一歩ずつ進んでいこう。いつか見た願いの果てを信じて。

そして、彼は「少し話が脱線しちゃったね」と言って。

「トキは一旦元々の所属のC&Cに戻ったよ。アカネとカリンは『初めてコールサイン持ちの後輩ができた』って言ってアスナと一緒にトキを猫可愛がりしてる。ネルはまだどんな距離感で接すれば良いのか分かりかねているけど、ちゃんと大切にしている。多分、もう少し時間が経てば2人の間のぎこちなさは解消されるかな」

ネルとトキ、2人の仲は決して悪くない。寧ろ良好と言える。だが、未だ上手く距離感を掴めていないのだ。同じ任務にでも赴いたら2人の間の罅りは消えるだろうが、タイミング的に難しい。

「今は出張って形で特異現象捜査部の方に向かってるよ。実働部隊が2人に増えたから、エイミー1人ではリスクの高かった任務を任せたり

してるみたい……偶にトキは『メイド活動』と称してシャールレに来るけど」

30分の仮眠を取り終わり、寝起き眼を擦っていた所に「おはようございます。モーニングコーヒーはいかかでしょうか？」なんて声を掛けられたら誰だって驚くだろう。まだ早朝とも呼べる時間にまさか自分以外の人がいるとは思わなかった彼も当然驚いた。

だが、驚いたただけだ。各種ロックや施錠はトキの生体認証と学生証で解除された履歴があったため、不思議な点は早朝にトキがいる事以外に特にない。尤も、それが一番不思議なのだが。

——思うに、トキは主を探しているのだと思う。今まではリオに仕えていたが彼女に暇を出されてしまったため、特にやる事が無くなってしまう。そうして出来た『メイドとしての自分』心の隙間を埋めるように、主を求めている。リオに仕えた記憶を大切にしている彼女はリオに性質や性格が似ている誰かを『リオの代わりの主』として見做す事はせず、寧ろリオとは全く別系統……例えるなら先生やヒマリを主として選んだ。

彼女は今、自分探しをしている最中なのだ。リオに仕えていたメイドの自分、ミレニアムの生徒としての自分、C&Cのエージェントとしての自分、1人の女の子としての自分。いずれ揺ぎ無い『自己』になるであろう卵を探し、育てている最中。リオの隣で閉じていた世界は先生とネルの手で強引にこじ開けられ、隣に主は居らず、世界に放り出された。だが、決して一人ではない。彼女にはネルが、アスナが、カリンが、アカネが、アリスが、モモイが、ミドリが、ユズがいる。勿論、先生だって。孤独を感じる必要は無い。彼女はこの空の下、誰かと繋がっている尊い命だ。

頭上を埋め尽くす青を彼女はどう見ているのだろうか。この広い空の下、何処にでも行けると云うのは確かに不安かもしれない。だが、その足で何処かに踏み出してほしかった。君が笑える未来に至るための、尊い一歩を。

「こんな所かな、アリスとトキの話は。2人とも楽しそうに生きている。それは傍で見ている私が保証するよ」

「……先生は」

リオの言葉に彼は少しだけ戸惑いを浮べた様な顔をして。

「先生は、どうなの？」

「私かい？ 私はいつも通りだよ。リンやアオイに怒られながら――」

「そうじゃないの」

彼の言葉を遮り、リオは顔を寄せる。鼻の先が触れるまであと10cmにも満たない。神秘的な赤い瞳が一切の虚偽を見逃さないと一言わんばかりに細められた。

――リオの鼻孔を淡い花の香りが攪る。

「貴方は重傷だった。いえ、瀕死と言って良い。エリドウに来る前から。そんな状態で貴方はあんなに無茶をした。あの日からまだ1ヶ月も経っていない。怪我の殆どはまだ治っていないんじゃないかしら？」

その問いに彼は何も答えない。ただ、困ったように笑うだけ。

「命に関わる様な重傷だけ重点的にナノマシンで治して、残る傷は表面的な治癒に留めて痕を消す事に専念。そうして『一見大丈夫な状態』を演出しているんでしよう？ でも、その実内面はボロボロ。最低限動ける……いえ、常人なら真面に動けない状態で貴方は此処に居る。違うかしら？」

「……そうだね。私は入院とかはしていないし、精々シャーレの設備を使って再生治療をしたくらい。でも、ナノマシンは毎日投与しているから傷の放置はしていないよ。もう少し落ち着いたら治療に専念するから心配しないで」

「そういう事じゃないでしょう、全く……」

彼が多忙と云うのは重々承知していたが、入院すらしていなかったのは流石に予想外だ。あのネルやトキですら数日は入院し、アリスも検査入院したというのに。誰よりも脆く弱く、誰よりも傷の深かった彼が真面な休息と治療を受けていないのは色々と拙いだろう。

そして彼の言葉の中にあつたシャーレの設備、それを使つての肉体再生。恐らくは少し前に運び込まれた医療用ドッグの事だ。専用の

液体とナノマシンで満ちたドッグの中で20時間ほど治療を受けると、余程の重傷でもない限り完治するという優れもの。

少し前に実用化されたが導入コストと保守コストが桁違いのため、性能に反し殆どの病院で使用が見送られたのだが……シャーレの資金であればコストは振じ伏せられるのだろう。技術者として少し興味はあるものの、今聞くべき事ではないと思いいリオは一旦スルー。気になったらまた後日聞けばいい。今は、それよりも。

「……その、首の傷は……」

痛みを偲ぶようなリオの視線の先には彼の首筋。無名の守護者の凶刃により真一文字に切り裂かれた肌と肉、動脈。確かに彼が生死の境目を彷徨った証は何処にもなかった。色白の肌には傷はおろか汚れやシミも見当たらない。だが、あの深度の傷が完治する訳ないという事はリオとてよく分かっている。

「普段は隠しているだけだね」

彼は首筋に爪を立て、まるでテープを？がすように手先を動かす。すると少しずつ皮膚に見えていた部分が剥離し始め、指先で摘まめる長さまで剥がすと一気に捲った。

「今はこんな感じ。結構前に傷自体は塞がったけど……」

人工皮膚を剥がした彼の首にはやはり刀痕が残されていた。首の正面、端から端まで奔る斬首の痕。元が白い肌だからこそよく目立つ古傷のように変色した痛み。あの日、確かに彼の命がこの世界から離れかけた証は、その痛みを忘れる事を罪とするように肉体に刻み込まれていた。

「……傷跡は」

「消えないだろうね。小さくなることはあっても、完全に消える事はないと思う。だからこうやって誤魔化してるんだけど……リオは気付いた？」

「初めからあると知っていなければ不自然に感じないでしょうね。でも、勘が鋭い人なら違和感を覚えるかもしれないわ」

「そっか、リオに太鼓判を押ししてもらえたなら一先ずは安心かな」

リオの言う通り、皮膚の偽装はかなり上手かった。光による透過、

境界の不自然さも無い。言われなければ……否、言われても人工皮膚であるとは気づかない。初めからそこに傷があると知っていないければ皮膚に違和感を覚える事も難しく、余程勘の鋭い人か、或いは実際に触れなければまず間違いない人工皮膚を使用していると分からないだろう。

リオはじつと傷跡を見つめる。思えば、肉眼で傷を見るのはほぼ初めてに近かった。彼が生死の境を彷徨っている時に足を運んだことはあったがガラス越しに面会する事しか叶わず、傷を視界に入れる事はできていない。揺ぎ無い痛み of 証を見ていると、リオ自身すら予想できなかった言葉がリオから零れた。

「……触ってもいいかしら？」

「別にいいけど、触って楽しいものじゃないよ？」

疑問符を浮べている彼は「はい、どうぞ」と言っただけで第一ボタンを外し首筋をリオに明け渡す。曝け出された人体の急所。姿形こそリオを含む生徒達と同一のフォーマットであるが、その中身は全くの別物。神秘もヘイローもない柔く脆く弱い体。そこまでフィジカルに秀でていないリオはおろか、明確に体が弱いヒマリですら彼の細い首であれば容易く押し折れる。

——そこに、そつと指先を触れさせた。

「……ん」

「ッ、ごめんなさい」

「いや、少しくすぐったかっただけさ。リオが満足するまで続けていいよ」

彼の笑みに安堵を覚えたリオは再び先生の首筋に指を這わせる。色白で、きめ細やかで、すべすべ。だが、傷跡の場所だけがそうではない。凹凸があり、ざらついでいて、変色して。

——聞くところによると、この傷はゲーム開発部の才羽ミドリを庇った時に刻まれたものらしい。誰かの代わりに自分を差し出したその選択はあまりにも彼らしいが、残された側の心を考えると素直に賞賛できなかった。痛みは美化できない、傷は正当化できない。それは傷と痛みを美談にして、正義にしてしまう行為だから。

「……ねえ、先生」

「何だい？」

声は、静かだった。

「痛かったかしら？」

「痛かったよ」

彼とて痛覚は鈍っていない。殴られれば痛みを覚え、撃たれれば血が流れる人間。切られても痛くない、なんて事はなく、刃に撫でられてから意識を失うまでの僅かな間に彼は途轍もないほど痛みを流し込まれた。

「怖かった？」

「そりゃあね」

拳を振り上げられるのは慣れていない。銃口を突きつけられるのは慣れていない。刃を向けられるのは慣れていない。だが、慣れていいるからといって恐怖心が消えるかと問われれば否だ。怖いものは怖い。

「死ぬのも？」

「人並には」

——そこだけ、少しの嘘を。

「……そう」

考えてみれば当たり前のことを聞いたな、とリオは少しだけ呆れる。痛かったのか、怖かったのか、死ぬのは嫌か。その全ての問いは当たり前前に肯定できるもの。リオも、彼も。切られれば痛いし、刃の前に立つのは怖いし、命が失われる感覚を味わうのは嫌だ。

だが、彼はそれを呑み込んで立っていた。痛いのは嫌で、死ぬのは怖い、戦うのはしんどくて。立ち上がれば立ち上がる分だけ苦しみと痛みに愛されると知りながら、絶望を振り伏せて立ち上がる。どれほど罪深い地獄の中でも、眼を焼かれるほどの幸福の渦中でも、決して足を止めない。それは偏に誰かの為。自分以外の幸福の為。大切な約束を果たすため。

ケイの言った言葉の意味が漸く理解できた。確かに彼の生き方は自傷行為にしか見えない。そもそも自分の幸福を求めているのだから。正確に言うならば、彼は自分が幸福になれると思っていない。幸福にな

るべきでないと思っっている。

それが、リオは自分の事のように悲しかった。

彼の生に付随する痛みを偲ぶように目を伏せると、「リオ」と名前を呼ばれた。視線の先には真剣な……先生としての彼。

「今から残酷なことを聞くよ……君は、後悔しているのかい？」

「……どうなのかしら。今、この胸の中にある感情は後悔なのか、それとも別のものなのか。はつきりとはしていない。でも……」

——これでよかった。一切そう思わないかと言われると、違う気がする。リオ自身、この結末に僅かながらも納得しているのだから。

選んだ道に後悔はない。あれは自分で選んで、決めて、進んだ旅路だ。誰かを救いたいと願ったこの心を間違いとは思えないし、その為に歩んできたこれまでを否定する気にもなれない。ましてや後悔なんて抱けるものか。

だけど——少し急ぎ過ぎたのかも、とは思う。ヒマリの言う通り誰かと相談して結論を出していれば、もしかしたら違う未来が……なんて思うけれど、それも栓無きこと。

リオが急いだのは実際にミレニアムの生徒に、先生に被害が及んだからで。事態があそこまで動いてしまった以上、アリスへの対処は火急の要件だった。生徒への被害は無かったことに出来ない。先生の傷も同じ。痛みを無くしてしまえば、その嘆きは何処に向かえばいいのだ。立ち止まる事なんて出来るわけがなかった。

「……そっか」

そんなリオの内心を分かっているからこそ、彼にとっては残酷な問いだった。結末に異は唱えない。過程を悔しない。原初の願いを否定しない。ただ只管に、現実を直視する。叶わなかった理想と、踏み潰した悲鳴。

彼女にとつては何よりも見たくないものだろうが、それでも彼は『先生』としてリオの心を切開し、向き合わせる事を選んだ。

責任は大人が背負うもの——それは確かにそうだ。だが、何もかも背負いっぱなしにしているは成長を妨げてしまう。いつまでも

彼が彼女達の事を見ていられるのならばそれでも良いのかもしれないが、生憎とそれは難しい。

だからせめて、彼女達が世界に対して責任を負う立場になった時に困らない様に。彼女達が背負えるものは、背負うべきものは抱えさせなければならぬ。

勿論、抱えつばなしにはさせない。重さで潰されそうなら一緒に背負うし、転びそうになったならちゃんと支える。行くべき場所が分からないなら手を引いて一緒に歩幅で歩こう。それが彼のしたい事だから。

そもそも、責任はそれ自体が重く苦しいものではなく、必ず背負い贖わなければならぬものではないのだ。

責任とはきつと過去の荷物。一分一秒が過去になる今に向けて過去の自分が残したボトルメール、足跡であり記憶。いつか遠い日、『こんな事もあったな』なんて思いながら荷物を下ろして荷解きができるように。

過去の自分を、ありのままの自分を許せるようになることが責任の本質だ。少なくとも、彼はそう思っている。

「私は、これを抱えて遠くまで行くのね」

リオは先生が言葉にしている意図まで汲み取り、どこか済んだ声を出した。透明な青空のような音色。きつと、これが彼女本来の声なのだろう。大人びていて、天才で、視点が他者と隔絶していて。でも、それでも彼女は高校3年生の女の子。他の誰とも変わらない、一個の命なのだ。

「そう。リオはそれを抱えて生きて行く。遠くまで。不安かな？」

「……いいえ。先生が共に歩いてくれるんでしょう？」

「勿論。この命が終わるまで、君の隣で歩き続けるよ」

例え偽りだらけで、継ぎ接ぎだらけであろうと——この身はキヴォトスの人類。彼女の先生なのだから。



淹れたコーヒーの温度が室温まで冷えた頃、彼が徐に「ミレニアムの写真、見るかい？」と言つて。意図は見えないながらも特に断る理由が無かったリオは訝し気な顔をしながら了承。今は彼と肩を寄せ合い、彼の私物のスマホで切り取られた一瞬の光景を眺めている。

液晶に映る断片はどれも煌めいていた。ユウカの横顔。ノアの微笑み。コユキの転寝。アリスが満面の笑みで映る写真はレンズに接近し過ぎて若干ピンボケしている。トキが無表情でピースしている写真を見て、『こういう事をする子だったかしら』と思つたが、自分が知らなかっただけでそういうお茶目な側面があつたのかもしれない。あんなに近くに居たのに知らないことだらけだ。

「写真、好きなの？」

「どうなんだろう。好き、と言えば好きなのかな。自分が美しいと思つた光景とか、忘れたくないと思つた事を記録として留めているんだ。また思い出せるように」

美しいと思つた光景、忘れたくない事、また見返したい情景。ありふれている、と誰もが思うものに彼は価値を見出していた。それは、その尊さと美しさを知っているからなのか。失つた事があるからなのか。

そして、リオも——この写真に写る様な日々こそが最も綺麗であると思つている。

「これが、先生が守つた日々なのね」

「違う。この笑顔達はリオが守り続けた尊い日常だよ」

有無を言わさない口調で告げられたのはリオにとつては予想外の一言。守つた？ そんな訳ないだろう。寧ろその逆、自分は写真に写る様な日々をこの手で壊したのだ。アリスの幸福も、トキの居場所も。そして最後には自ら終末の引き金を引きかけた。少しでも手を誤つていればこの世界を壊していたかもしれないのに。

だけど、彼は一粒もそう思っていないようで。真摯に、真つ直ぐに、リオの目を見て言葉を紡いでいく。

「私は、君を肯定するよ。世界を救おうとした、眼に見える範囲を守ろうとした君の努力と、その意思を。それはきつと間違いなんかじゃな

い。他の誰が否定しても、君自身が否定しても、私が君を肯定し続ける。君は間違っていない」

世界の為に、誰かの為に捧げてきた日々と努力。それらは決して無駄じゃないと、無意味ではないと、罪ではないと——間違っていない、と。幸福の為に走り続けたリオの為に、リオを肯定する。

「ずっと、一人で戦ってきたんだね。ミレニアムの会長として……未来を予期してしまった者として。優しい君は見て見ぬ振りなんてできなかつた。例えその果てに糾弾されても、君は誰かが笑えるならと納得した。でも、その役目は私が背負うべきものだ。だから、君の願いを私に背負わせてくれないかな？ 君が、君の心を犠牲にして、世界の為に奉仕しなくていい。君が、未来の為にその身を捧げなくていい」

世界の救済、人界の守護。それはきつと立派な事なのだろうけれど、人の生き方ではないから。

「君が世界を救ったとして。誰もが笑える大団円を迎えたとして。君だけが失い続けて、その違和感を抱き続けるなんて……そんなのは、唯の悲劇だ」

彼は「だから」と言って——そつと、リオの手を握った。

「リオはリオの幸せを見つけてほしい。もし見つけれないなら一緒に幸せの種を探そう。勿論、今すぐじゃなくていい。リオは今まで頑張り過ぎたんだ。少し休んで、また一歩ずつ進もう。振り返りながら、道に迷いながら、戻ってもいい。怖くても大丈夫、君は決して孤独じゃない。この広い空を誰かと同じように見上げられる」

言いたかつた事、伝えたかつた事を漸く伝えられた彼はリオが見惚れるほどの綺麗な笑みを浮べて。

「リオはこの世界で生きる、私の大切な生徒だ」

先生はそつと、リオの吸い込まれるような赤い瞳から零れ落ちそうな雫を拭った。



日付が変わる直前。リオは少しだけ赤い目元を携えながら玄関先で先生を送る。心の壁はもう無い。蟠りも同様に。弱音と後悔は全部彼の胸の中で吐き出した。明日から少しだけ前向きに生きられるよな気がする。

「またね。今度はシャーレに遊びにおいで。ずっと待ってるよ」
「ええ……また」

予想外で、不可解で。だが、とても有意義で、充実していて——
——幸せだった1日をリオは彼と共に見送った。

四十八月の深夜、貴方の隣にアイリスが咲く

カラン、と乾いた音が鳴る。吐き出した薬莢が地面を転がる音。自分が何かに対して照準を定め、トリガーを引き、弾丸を吐き出した証明は錠前サオリの耳の奥……脳に近い場所で寝返りを打った。少し遅れて嗅覚に訴えかけてくる火薬と鉄の香り。良い匂いとは決して言えないそれらであるが、サオリにとっては安心感を抱けるような慣れ親しんだものだった。例えるなら太陽の香りがするブランケットのような。生まれながら人の温かさに触れる権利を剥奪された彼女にとっては火薬の熱が暖を取る手段だった。

鋭さを感じる冷たい眼光が射貫いた先には無機質なマンターゲツト。弾痕は2発、心臓と脳天。遊びは無い、慢心はない。的確に人体急所を射貫き、絶命させんとする意志。それだけが陽の光が入らぬ罪人の掃き溜めである此処……アリウス自治区で叩きこまれた全て。

人を殺せと銃を握らされた。銃口は自分を向いていた。

人を殺せとナイフを握らされた。刃先は自分を向いていた。

人を殺せと手榴弾を握らされた。ピンは抜かれていた。

骨髓に沁み込んだのは数世紀前の憎しみ。誰の物かも分からない、使い古されボロボロになった……迫害されたであろう何者かが今際の際に残した怒りと憎悪。それはまるで石畳にべったりと付着した血痕と脳漿のようにしつこい狂気。光の届かない場所で受け継がれたパッチワークは最早言葉以上の意味を持っていなかった。

復讐する権利がある。迫害され、弾圧され、排斥され、死体と共に地下に押し込まれた自分達には光の下で生きる万象を裁く権利がある。そうやって自分達に言い聞かせていた貌の無い大人は自身の放つ言葉に酔い痴れていた。

右も左も分からない、捨てられた子ども達に憎悪を伝承する事で自分の存在を立証できない……何者にもなれなかった誰か。セカンドユースの憎悪をアイデンティティにして、憎しみの連鎖の頂点に立った気である御山の大将。

結局の所、嫉妬しているだけだ。顔も知らない先祖の罪で地下に幽閉されている自分達と、学校に通い真つ当に生きている誰か。二つを比べて、劣等感を憎悪と誤認し、今は牙を研いでいるだけと自分を正当化する。でも、憎悪と嫉妬と怒りは消えないから演説で発散する。出来の悪い子ども、都合の良い駒になり切れない子どもに八つ当たり染みた暴力を振るう。

そんな大人も数週間後には犬の餌になっていて、結局この世界は何処までも虚しいのだと知った。野犬に食い荒らされ、元から貌の無かった誰かは命ですらなくなつて。何かに教えられたのは人の殺し方と誰かの憎悪だけ。

憎悪しか知らない者は呪いを振り撒きながら死ぬしかない。呪いを受け継ぎ、呪いを教え込み、呪いをばら撒く。まるで生体濃縮のよう。この自治区は憎しみと呪いと怒りが渦巻く坩堝になつてしまつた。血で染まり飾り気のない銃。膨大な数の弾薬。ダース単位のヘイローを壊す爆弾。反して、少ない食料と衣服。殺す事ばかり、死ぬ事ばかり。憎悪に憑かれている、と思うには充分すぎる物的証拠だつた。それも、数世紀前の貌の無い憎悪。だからこそ質が悪い。復讐したい者の名前すら言えないのだから。

誰を憎んでいる？ 陽の光の下で生きる者。

具体的には？ 我々を迫害した者。

では、それは誰なんだ？

質問を変えよう。この憎しみは、誰に対しての憎しみなんだ？

少なくとも、無念の内に殺された彼等或いは彼女達が真に復讐したかつたであろう何かは既に骨だ。この憎悪は言葉以外の何かではなく、自分達が育んだものではない。迫害に対して復讐する権利を持ち合わせていた者も、復讐したかつた者も全て死に絶えた。今の自分達は先祖が辿り着いた地で生きる何者かであり、迫害を受けた人間ではない。復讐の正当性は随分と昔に剥奪されている。今の自分達が外の住民に対して憎悪を振り翳したとしても八つ当たりの域を出ない筈だ。

勿論、今のトリニティに何も思う所が無い訳ではない。自分達が地

下で暮らさなければならぬ元凶が少数派を徹底的に排斥したトリニティにある事は否定できない事実であるし、サオリも否定する事はない。

だが、地下から出ようとしなかったのも自分達だ。外の世界を知ろうとしなかったのも自分達。少しでも外に目を向ければ、過去のトリニティと今のトリニティが随分違う事なんて一目で分かっただろう。最高権力たる生徒会ティーパーティは3人で運営され、1人の意志決定で全体を動かさないように。

武力集団である正義実現委員会はティーパーティの指揮下であり、安易に暴走しないようにセーフティが掛けられている。それに加えて独自判断で治安維持を行い、時には権力と敵対する事もある自警団も組織されていた。

そして、アリウスを徹底的に弾圧し、保護したユステイナ聖徒会の後身であるシスターフッドは権力からも武力からも遠のいている。

その上、トリニティに通う一般生徒はアリウスの名前すら知らないのだ。名前も知らない相手に憎悪なんてある訳が無い。例えば彼女達に『自分達はアリウス出身だ』と告げても『あ、そうなんだ』程度の感想しか抱かないはずだ。時代が変わったのだと、自分達は過去に取り残されているのだと思うには充分すぎる。

思うに、人間の良い所は新陳代謝がある事……つまりは寿命がある事だ。世代が変わるといふ事は価値観が変わるといふ事。人間は過去の事を忘れる事ができる。過去の憎悪を、先人の因縁を切り捨てる事ができる。勿論、アリウスのように受け継いでしまう例もあるが……それでも、時間経過と共に憎悪の濃度と意味は薄れる。この憎悪に意味も正当性も無いと、何処かで気付く事ができる。

尤も、随分遅くなってしまったが———そう思い見下ろしたハンドガンを見て、サオリはマスクの下で自嘲するように笑う。賢しらに考えている自分も、あの時まで憎悪と呪いを捨てる事ができなかったのに。大切な人と憎悪を天秤に掛けて漸く捨てる事ができた。捨てて、離れて、思い出して、あれには意味が無いと言い切れた。

でも、それでも。あの憎悪に確かに意味はなかったけれど、それで

も幼い自分達にとっては抛り所であった。その事実是否定できない。伝承された憎悪が抛り所であった。

誰の憎しみか分からないまま、多くの罪を犯した。

大切な人と憎悪を天秤に掛け、大切な人を選ぶ事ができた。

子守歌のように言い聞かされた憎悪には意味が無いと知った。

「ああ、虚しいな」

でも、この世界はそれだけではないと自分は知っている。例え全てが空虚でも、嘘と偽り、欺瞞で満ちていたとしても——笑って許せる今日が愛おしい。

ミサキが生きている。ヒヨリが生きている。アツコが生きている。アズサが生きている。ミカが生きている。彼が生きている。この星で、共に生きている。一緒の時間を刻んでいる。

それだけで、この世界が好きになれた。今日という一日が美しく思えた。

「先生……」

彼に会いたい。会って、話したい。この胸の中に残る多くの思い出。多くの幸福。多くの笑顔。多くの言葉。多くの煌めき。それを伝えたかった。

貴方は知らないだろうが、貴方は私に触れる時は震えていた。大切に、大切に、決して壊れないように。本当に愛しいものに触れるように、貴方は手を翳していた。

誰かと共に居る時の貴方は本当に嬉しそうで、楽しそうだった。細められた優しい気な双眸と鈴を転がしたような柔らかな声。誰かが隣にいる時間の一瞬一瞬を本当に大切にしていた。

夜、傍に誰も居ない時に覗かせる横顔はいつだって寂しそうだった。泣いていない事がいつそ不思議なほどに、寂しさと孤独で縁取られた表情は痛ましくて、直視できなかつた。自分ではあの孤独と寂しさを埋める事ができないと知ることが、怖かつた。貴方を助けられない現実を突きつけられることが、どうしようもない程恐ろしくて。

そうだ、私は知っている。彼は何処まで行っても私達と違う事を。ヘイローの有無や神秘の有無ではない、その程度の差異じゃない。彼

と私達の姿形は似ている、逆を言えば姿形しか共通点が無かった。私達と彼より、私達と虫の方が生物として近い。

そもそも彼と私達ではルーツが違う。キヴオトスで生まれ育った私達。外の世界で生まれ育ち、キヴオトスに連れて来られる最中で『作り変えられた』であろう彼。何方が生命として真つ当なのかは言うまでもないだろう。彼は『命』と呼ぶには、あまりにも歪が過ぎた。利他的、なんて言葉は彼に似合わない。彼は助けを求め生徒がいなければ、自分の生に意義を見出す事ができないのだ。あり得ない話だが、仮にこの世界の全てが幸福になったとしたら——彼は生きる意味を見失い、後の悲劇にならないように速やかに自刃する。

歪な命。自己愛も自己救済も持たない空白。いずれキヴオトスに捧げられる生贄のような彼の愛。自分の幸福をそもそも探していない、自分が幸福になれるなんて彼は欠片も信じていなかった。

彼は自分を憐れむ事も、悲しむ事もしなかった。そのくせ人一倍誰かの悲しみと涙には敏感で、放っておけないお人好し。自分の幸福を望まないのに、誰かの愛を受け取らないのに、皆の幸福を祈り、分け隔てなく愛を与える。

ああ、そうだ——私は知っている。貴方は皆が思うほど、崇高でない事を。先生というペルソナの裏側、空洞と空白だらけ、等身大の青年。撃たれる事は当たり前前に怖くて、殴られれば当たり前前に痛くて、楽しければ当たり前前に笑う。ただ人当たりが良くて、底抜けに優しく暖かくて、誰かを愛し誰かに愛される唯の好青年。それがきつと、彼の真実。

そんな貴方に救われたのだと、どこか自罰的に生きる彼に伝えなかった。貴方は遠くない。貴方は此処に居る。貴方は独りぼっちじゃない。貴方は愛され、大切にされている。

差し伸べられた彼の手に希望を見た一人の生徒として、そう言いたかった。

最期に見た、どこか寂しそうな笑顔を塗り替えてほしかった。本来なら呼吸をするだけで苦しい彼にも、どうにかして笑ってほしかった。貴方が虚しさを否定したこの世界で、生きてほしかった。

貴方に逢えて幸せだったと、言いたかった。でも、その前にやるべき事がある。

「……」

——憎悪の揺り籠、アリウス自治区。

受け継いだ憎悪に疑問を持つことは許されなかった。

人を殺せ、出来なければ死ぬと言いつけられた。

外の世界に出る事は許されなかった。

誰かを傷つける事しか教えられなかった。

生き方も、友達の作り方も、人の愛し方も分からなかった。

教えられたのは人の殺し方と、死に方だけ。

『あの子どもは芽が無い。速く殺すべきだ』

『何を言う、まだ性根が甘いだけだ。片眼を潰せ、妹を殺させろ。そうすれば目も覚める』

『ああ、そうだな。2人殺すより1人残る可能性に賭けてみよう』

『それが良い。我々の復讐のためだ。道具の数は多い方が良い』

——この因果は今代で途絶えるべきだ。これから生まれる命達はせめて光の当たる場所で生きてほしい。誰の物かも分からない憎しみに突き動かされるまま、誰かに殺意を向けなくてほしい。この空の下、真つ当に、当たり前前に生きてほしい。自分自身の事を誰よりも肯定してあげてほしい。

彼は言った。サオリはきつといい先生になれる、と。その言葉の真意は今もまだ分からない、絶賛探している最中だ。いつか彼に恩返しできたら、胸を張ってそう言えるのだろうか。

彼が言う『いい先生』の意味も分からなかったけれど、自分にとって理想の先生は、理想の大人は彼だった。

彼は自身の腹に風穴を空けたサオリにすら寄り添うことを選んだ。

サオリの願いを当たり前のように受け取り、一切躊躇うことなく自身の命を賭けた。

彼はベアトリーチェの所業に誰よりも怒りを抱いていた。

彼は誰かの幸福の為に、何時だって走り続けた。

溢れんばかりの愛と幸福、笑顔を与えてくれた。

いつか自分もそうなりたいと思った。彼みたいな先生に、大人になりたいと思った。だから、自分の善悪の指針はいつだって彼だ。彼だったらどうするか。彼だったら何を言うのか。何を思って、何を信じて、何をするのか。

そう考えた時に真つ先に浮かんだのはアリウスの事。この場所をあの子の思い通りにさせたくないと、強く思った。例え、辛く苦しい思い出しかない場所でも、自分が生まれ育ち、大切な人や同胞が暮らす場所なのだ。其処をぽつと出のゲマトリアなんか蹂躪されたくはない。此処は、私達の居場所だ。

グリップを握る掌にいつも以上に力が入る。作戦決行の日時が近づき、気分が昂っているのだろうか。らしくないな、なんて思いながら……サオリはホルスターに銃を仕舞い、コートを翻した。「リーダー、何処に？」

背に投げられた問いの持ち主は同じくアリウスのコートを纏う少女……戒野ミサキ。サオリ率いるアリウスの特殊部隊、アリウススクワッドのNo. 2であり火力と頭脳担当。パーカーから覗く首筋と手首には包帯が巻かれている。その下がどうなっているのか、サオリはちゃんと知っている。彼女はこの世界に大きな諦観と絶望を抱いていない事も。

信頼できる幼馴染のような、少し手のかかる妹のような。何よりも大切な人達、サオリの最愛の内の一人は夜に溶け込むような双眸を向ける。込められた感情は疑問と少しばかりの心配、寂しさ。

「夜風に当たりに行くだけだ、すぐ戻る」

「ふーん……マダムが来たら誤魔化しておくよ」

「すまない、よろしく頼む」

ガン ラック に 立 て か け て お い た
アリウス製アサルトライフル SIG516を手に取り、サオリは射撃訓練所を後にした。

外に通じる階段をサオリは上がっていく。地面に転がる葉莖、壊れた銃の残骸、布の切れ端、腐った食べ物や端に散乱していて思わず顔を顰めてしまうほどの臭いが嗅覚に訴えかけてくる。ここは掃き溜めだという動かぬ証拠、地上の最底辺が此処では頂点になる。それ程までには酷い環境だ。

一応、ティーパーティーの1人であり協力者のミカが『協力の見返り兼戦力の増強』を建前に食料や水等の物資を融通しているが、アリスの生徒全員に過不足なく行き渡るほどの量はない。

尤も、贅沢を言う事は許されない。栄養の豊富な食事、清潔な水。それらを1日1回与えられる現状は最高と言って差支えないだろう。少なくとも、蠅の集る食べ物を泥水で流し込まなければならなかったあの頃よりはずっといい。

扉を開けた先にあつたのは何の変哲もない雑居ビルと雑居ビルの間。一人が漸く通る事ができるような隙間に今回の出口は通じていた。計17年間——以前の世界の記録も含めると更に増える——アリス自治区とそこに通じるカタコンベで生きていたのにも関わらず、構造がどうなっているのか正確に把握できていない。分かるのはカタコンベが『アリス自治区を逃げ出そうとした生徒』と『アリス自治区を探そうとする者』に対して非常に有効な点と、10年前の内戦終結を機にベアトリーチエの神秘と細工により変質した事だけ。

後ろ手に扉を閉めると、サオリが出てきた場所は完全に風景と同化してしまった。他の人物は勿論、サオリですら此処を通じて自治区に向かえなくなつた。

午前2時半。頼りない街灯の明かり、ほぼ皆無な人通りと車通り。取り残された様な静かな世界をサオリは歩く。コンバットブーツの靴底に取りつけられた金具が地面を叩く音と、サオリの呼吸音、布の擦れる音。

ふわりと風が通り抜ける。長い髪が風に靡いて、肌の汗が冷却される感覚。そろそろ梅雨の時期に差し掛かる頃であるが、風には湿り気があまりない。

誘蛾灯に沿いながら行く当てもなく道を歩いていると、一際目を引く強い光を見つけた。とは言っても、特異なものではない。ただの飲み物の自動販売機。思う所なんて何も無いありふれた光景。いつも通り、通り過ぎようと思ったが——自販機の影、コンクリートブルックに腰を掛けている人影を見つけた。

座っている姿から推し量るに背は高いだろう。167cmと女性にしては長身のサオリよりも更に高い。纏っている服はシルエツトを見る限りロングコート。首に下げられているのはICカードだろうか。

——いつもだったら迂回していた。今のサオリに姿を見られるメリットはない。暗い場所であれば兎も角、煌々としている自販機の近くを通れば確実に顔も姿も鮮明に見られてしまうだろう。作戦が控えている以上、そのようなリスクを冒すような行動は避けるべきだ。何せ相手はゲマトリアが一角、ベアトリーチェ。油断も慢心も許される相手ではない。何処で何を見られているか分かったものではない。何が裏切りと見做されるか分からないのだ。今、彼女の敵として処分されるのは避けたい。だから此処は引き返すべき。

だが、今日に限ってそのまま進んでしまった。何故かは分からない。姿はどうとでもなる、帽子を深く被れば顔も見られずに済む——なんて、誰に向けて言い訳しているのか分からない内心。それに反して、進む足に乱れはなかった。

——今思えば、このまま進んだ理由はこれから会える人であったのかもしれない。蝶が花に惹かれるように、サオリも誰かに引かれていた。

「……ッ」

明かりに照らされ人影が鮮明になる。その姿を見た瞬間、サオリは息を呑んだ。心臓が馬鹿みたいに高鳴るのに、声帯は凍り付いてしまった。言いたいことだらけのはずなのに、口から漏れるのは不格好で不規則な呼吸。

まるで、時間が止まったかのようなだった。

刺繍が施された白地のコートに腕章。揺れるICカード。細身の

白のスラックスと第一ボタンが開けられた黒のシャツ、革靴。

優しく愛に溢れた心をそのまま映したかのような暖かな瞳。闇夜を退けるような長い睫毛。すっと通った鼻梁と色素の薄い唇。目元に少しかかった前髪。

——見間違えるはずがない。アツコの話聞いて、何度も思い浮かべたあの姿。

シャーレの先生が其処にはいた。

「……………」

単なる通行人Aだと思っていた誰かが自分の前で立ち止まった事を感じ取ったのか、彼は猫の顎を撫でていた手を止めて顔を上げた。視線が交差する。サオリの薄紫に近い瞳と、彼の瞳。なんて声を掛ければいいのか分からなくて、視線だけが右往左往するうちに…………彼の顔が蠱惑的に歪んだ。

「……………こんばんわ」

「こん、ばんわ」

魔性のようでありながら聖女のような清廉さを感じさせる表情と声。顔も分からない母の姿を思わず重ねてしまうほどの母性、或いは優しさ。それはサオリの知る彼と全く同じであり、思わず抱き着きそうになってしまった。

だが、あの彼はきつと自分を知らないだろうから。そう思って、サオリは胸の奥の衝動をぐっと殺す。逢いたかったのは事実だが、困らせたい訳ではないのだ。この願望は堪えるべきだろう。貴方に内心を、思い出達を吐露するのは全てが終わった時でいい。

そんな彼女の内心を知らない彼は気の抜けるような笑顔を浮かべて。

「深夜徘徊とは感心しないね。良い子は寝る時間だよ?」

おどけた様な口調で彼は気持ちよさそうに目を細めている猫に「ねー」と声を掛けて同意を求めると、「にゃー」と鳴き声を返す。

ああ、そういえばこういう人だった。サオリは大切な記憶のページを見返すように思う。争いが関係しない時の彼は穏やか…………と云うよりも緩い。肩の力を抜かせることが上手いのだろうか。物心ついた時から常在戦場を叩き込まれ、トリガーに張り巡らせた意識を片時

も忘れなかったサオリですら彼の近くにいる時は争いを少しだけ忘れる事ができたのだ。

本当に、日常の象徴そのものな人。銃も銃弾も、およそ暴力というカテゴリーから最も遠い。近づけば近づくほど、触れれば触れるほどに『自分なんか彼の傍に居て良いのだろうか』と思ってしまう。

「……貴方こそ、こんな時間に護衛も付けずにいるのは不用心だ」
「心配してくれるのかい？　ありがとう、でも大丈夫だよ。守ってくれる子はいるからね」

サオリとて彼の云う『守ってくれる子』に心当たりが無い訳ではない。恐らくは彼が持つシステムの箱、それが展開する防壁。真面目な兵器ではほぼ貫けないあの障壁は確かに頼れるものだろう。防壁を展開しながら時間稼ぎに徹し、手当たり次第に生徒を呼べばそれだけで済む事。それを踏まえると確かにサオリの心配は無用だったのかもしれない。

でも、サオリはあの防壁が絶対でない事をよく知っているから言わずにはいられなかった。それが余計なお世話だとしても。彼の命は本当に一瞬で消えてしまうと、サオリは知っているから。

キヴォトスに於いて引き金は軽い。弾丸は軽い。故に、彼の命もそれと同じくらい軽い。呆気なくくらくらに、簡単に失われてしまう。

彼は撫でていた猫に半分ほど残っていたチユールを与え、頭を一撫で。それが別れの合図だったのか猫は茂みの奥に向かい、闇夜に紛れて姿を消す。その後ろ姿にひらひらと手を振っていた彼は徐にサオリを見て……天使の羽根が落ちた様な微笑を浮べた。

「初めまして、かな。私は——」
「シャールレの先生だろう、知っている。姫……いや、アツコが世話になった」

「私の方こそ楽しい時間を過ごさせてもらったよ。またおいでって伝えてくれると嬉しいな」

これは紛れもなく彼の本心。ユウカに物凄い勢いで怒られたが、それはそれとして本当に楽しい時間だった。懐かしい顔に、この世界で懸命に生きる彼女に会えて嬉しかったのだ。だから、また来てほし

い。別に今すぐじやなくていい。アツコの思うタイミングで、ふらりと顔を見せてくれればそれで。

「勿論、君達もね……サオリ」

「私達の名前を知っているんだな」

「まあね。これでも先生だから、生徒の名前は全員把握しているよ」

情報の出所は分からない。そもそも、あれほど先生の近くに居たのにも関わらずサオリが先生に対して知っている事は多くないのだ。

知っている事と謂えば彼が生徒を第一に考え自身を顧みない困るほどに優しく暖かい人である事。連邦生徒会長に『何か』を託された事。シツテムの箱と呼ばれるオーパーツと、彼自身を対価に奇跡を起こす特大人のカード権を保有している事。

ざつと羅列するだけでこのくらい。あの異常な戦術眼と指揮能力、頭の回転が何処で培われたものなのか、陽の当らぬ場所で生きるアリウス生徒の名前すら把握している情報網が何であるか、トリニティやゲヘナの上層部すら入手していない『聖典』の原典やアーカイブを何故持っていたのか……その一切が詳細不明だ。サオリが知る限り、聖典をアーカイブとして保有していたのはマダムペイトリーチエのみ。原点に至っては彼女すら保有していなかったのだ。

彼は、先生とは何なのか……あまりにブラックボックスだ。彼をよく知るミカであればもう少し何か分かるのかもな、なんて思いながらサオリは苦笑を浮かべる。

自身とミカ、育った環境も周りにいる人も思考も行動も何もかもが違うのにも拘らず、鏡合わせのようなもう一人の自分。世界を知らずに育ち、取り返しのつかない罪を犯し、多くを傷つけ、自身も傷つき、絶望をしながらも——それでも『生きていい』と思えた自分と、そう叫んでくれた誰かを否定したくなくて罪を贖いながら生きる事を選んだ者達。

一度は敵対し、胸の内側から湧き上がる憎悪に突き動かされるままに銃口を向け合い殺し合って。許し許され、助けられた。世界が流転した今は腐れ縁のような、或いは良き友人のような。そんな何とも言えない関係性だ。

——ミカには悪い事をしてしまった。作戦が完了するまでは彼に会わない……未練を作らないようにする約束であったのに、抜け駆けのような事をした。恐らくは彼女の方がずっと彼に会いたかっただろうに。

「サオリはこんな時間に外で出て何を？」

「……夜風に当たりに来たただけだ。先生は？」

「私も同じ。もう少ししたら湿気が多くなって微妙になっちゃうけれど、この時期はまだ夜風が気持ちいいからね。仕事で使った頭をクールダウン中さ」

「こんな時間まで仕事をしていると、いつか体を壊してしまう」

「大丈夫だよ。ちゃんと仮眠は取ってる。それに、一度仕事をしたら集中力が切れるまでやり切った方が良いんだ」

彼は「私にとってはね」と付け足して、夜空を見上げた。星を仰ぐ彼をサオリはじっと見つめる。どの所作を取っても、一挙手一投足がサオリの知る彼そのもの。刺激される記憶、溢れそうな想いと声。それをぐつと堪える。

別に、彼の荷物になりたい訳ではないのだ。サオリも、ミサキも、ヒヨリも、アツコも、アズサも、ミカも。自分の記憶の中に彼が居て、彼の思い出の中に自分の居場所があればそれでいい。胸に残る思い出を伝えたいという思いも自己満足でしかなかった。ただ、貴方の生涯は多くの幸福と笑顔を齎した、貴方の命は決して無価値ではないと言いたいだけ。多くを抱え、僅かな煌めきの為に嘆きと痛みを踏み潰しながら遠くを歩く彼の巡礼の旅を想うならば、何も言わない方がいい。

その現実は分かり切っている。だが、これは理屈じゃないのだ。放っておいたら独りで誰も居ない場所まで行ってしまふ彼の楔になればそれでいい。それ以外は望まない、そう決めた。

彼の生きる意味になりたいとは思わない。ただ、彼が死ぬのを躊躇う理由になればそれだけで充分過ぎる。

そんな事を考えている内にも、毒にも薬にもならないような取り留めのない会話は続く。アツコは元気か、だとか。先生は無理をしてい

ないか、とか。或いは最近起きた事、頑張った事、少し嬉しかった事。次の日になれば忘れてしまいそうなほどに穏やかな会話はサオリの強張った肩の力を抜くためのもの。

先生は一目見て、サオリが何かに対して緊張している事に気付いていた。そして、何か隠し事をしている事も。それらを詮索したり、追及するつもりはなかったが、彼は自分の前くらいは唯の生徒、1人の女の子である錠前サオリでいてほしかった。先生が居る此処ではベアトリーチエの眼も届かないから監視を気にする必要は無い。サオリと先生以外の他に誰も居ないから頼れる人間で在り続ける必要もない。

——— だからどうか、君のありのままを。

そうやって根気よくサオリの固い雰囲気を崩していく。すると少しずつ彼女は微笑を見せてくれて。

「初対面の人間相手に随分饒舌なんだな」

「私はあんまり人見知りしないし、お喋りだからね。話をするのも、話を聞くのも好きなんだ」

「……だから、先生の立場が務まるんだな」

「そうかもね」

サオリ自身が放った『初対面』という言葉に形容できない胸の痛みを覚えていると彼の手でプラスチックが擦れる音が鳴った。視線を向けると、中身が空っぽのスティック状の何かが握られている。恐らくは先程まで彼に撫でられていた猫に与えていた食事……確かチュール、だっただろうか。

その視線に気づいたのか、彼は苦笑いを浮かべながら。

「……これ、猫用だよ?」

「食べたい訳じゃないが」

彼は「冗談だよ」と言っつて——— 漸くサオリが肩の力を抜いてくれたことを喜んだ。

「猫が好きな子がいてね。その子に野良猫がいる場所を教えてもらったんだ。本当はあまり良い事ではないけれど、それでもお腹を空かせている子を見て見ぬ振りするのは違うと思って。本当はシャーレで

引き取れると良いんだけど、猫が苦手な生徒もいるからそういう訳にもいなくて……今は保健所の人と連携しつつ里親を探してるって感じかな」

「……さっきの猫もそうなのか？」

「あの子は飼いだよ。ありがたいことに飼い主の方から餌を上げる許可も貰ってる。時々、夜の散歩なのか此処に顔を見せるんだ」

「どうやら彼とあの猫は何度も顔を合わせている仲らしい。だから随分懐いているのだろう。撫でられても嫌な顔一つせず、寧ろ気持ちよさそうに目を細めていた猫の姿は何処かミサキと似ているような気がした。尤も、本人が居たら途轍もない剣幕で否定するだろうが。」

彼は徐に立ち上がる。サオリは『帰るのだろうか』と思い、彼の進行の邪魔にならないように道を開けた。少し名残惜しいが、彼も彼の生活があるから仕方ない——と、思ったが、彼はまだ帰るつもりが無いようで自販機の前に立つ。

「何か飲むかい？」

「いや、私は——」

「遠慮しないでいいから、ね？」

「……じゃあ、水を」

ふわりとした微笑を浮べた彼の指でボタンが押され、スマホが翳される。すると電子音と共にペットボトルが落下する。1回目は水。2回目はミニボトルのお茶。手渡された冷たい水を「ありがとう」の声と共に受け取り、メカニカルなマスクを外しキャップを開けて喉を潤すと清涼感が駆け抜けた。自分では気づかなかったが、それなりに喉が渴いていたらしい。

その様子を何か言うでもなくじっと眺める彼と視線が合って……妙な気恥ずかしさを感じたサオリは深く帽子を被った。

「……無言で見つめないでくれ、先生」

「いやあ、良い飲みっぷりだなと思って。気を悪くしたなら謝るよ。ごめんね」

「気を悪くしたわけじゃないから謝らないでくれ。ただ、どうすれば良いか分からなかったただけだ」

彼は「そつか」と笑いながらサオリを手招きする。疑問符を浮べつつもその手招きに誘われたサオリは彼の近くまで寄って。

「どうした、先生」

「少し歩きながら話さないかい？ 近くに公園があるんだ」

その誘いにサオリは即座に頷けなかった。深夜2時半を回る頃とはいえ、人通りが完全な0という訳ではない。出歩く人間は少しはいらるだろう。活動範囲を広げるといふ事は誰かに見られるリスクが上がるという事。当然、好ましい事ではない。

だが——そう思い、彼女は彼の懐の中にあるであろうシツテムの箱を流し目で見る。ベアトリーチェの眼すら欺き、直接対面するまで何の情報網にも引つ掛からなかった隠蔽能力。その力は今も尚健在だろう。彼の近くに居れば恐らくサオリの考えるリスクは限りなく低くなる。少なくとも、悪意を持ってサオリや先生の位置を特定する手合いにとつてはこれ以上有効なものはないだろう。

「……ああ、構わない」

「ありがとう、エスコートは任せて」

小さな笑みを浮べた彼は掌を空に向けてサオリに差し出す。何度も見た手。血の匂いも硝煙の匂いもしない、ただ人の体温と優しさが在る手。キヴオトスでは唯一無二、およそ暴力から最も遠い手。

サオリは思う、何度この手に救われたのか。何度この手に光を、明るい未来を見たのか。自分だけではない。ミサキもヒヨリもアツコもアズサもミカも……それ以外にも沢山。彼は大人として、先生として、多くの生徒を守り、救ってきた。

救世主の御手、と言うつもりはない。彼が本質的に普通の人である事は知っている。争いからは遠い、日常の象徴である事も。

——だから彼を表すならば……唯の底抜けに優しい、誰の為にも憂う人。

サオリはそつと、決して壊れないように細心の注意を払って自身の手を彼の手に重ねた。



彼の云う通り200m圏内のすぐ近くに公園があった。それなりに広く、緑が豊かな遊具のある公園。昼間に来れば子どもたちの楽し気な声が聞こえてくるであろう場所は時間帯も相まって無人だった。虫の鳴き声と草木が風に揺れる音のみ。街灯の光に照らされるベンチでサオリと先生は並んで座っている。

「先生は、最近何かあったか？」

「最近かあ……ミレニウムに行ったよ。ちよつとした用事でね」

「ミレニウム……」

サオリのアリウスという立場に気を遣ったであろう彼の出した学校名は、生憎と彼女が殆ど知らない場所であった。

精々知っているのはキヴォトスに於ける最先端技術の出所が大体この学校である事、ビッグシスターなる人物が収めている事、名もなき神々の女王が在籍している事、アリウススクワッドですら正面から戦えば勝ち目の薄いキヴォトス最強格が1名在籍している事くらい。

「それより前だとアビドスの方に足を運んだかな。アツコとはアビドスに行く前に会ったんだよ」

アビドスは流石に知っている。知っていると言うべきか、忘れられない位のインパクトがあったと言うべきか。忘れもしないエデン条約締結日、サオリ達が世界に反旗を翻し、嘗ての同胞であり裏切り者のアズサを撃たんとした時に現われた覆面水着団がその学校の所属であった。この世界でも活動しているのだろうか。相変わらず水着要素が皆無な服装で。

だが、それよりもアビドスに関しては大きな出来事が近頃起きた。サオリも無関係ではない、大きな……文字通り世界を揺るがすような争いが。

「アビドス砂漠では第三のセフィラが顕現したと聞く」

「よく知ってるね。一応、その辺りの情報は当事者と連邦生徒会の室長以上の子達以外には秘匿されてるけど……ま、目撃者も多かったし完全な情報統制は難しいか」

今期の知性体が星の霊長となって以来初の完全顕現、機神体の降

臨。今までのケースとは何もかもが一線を画すキヴオトスの滅び、星の自殺願望の権化。或いは、神の御許に在るもの。

過去、彼と共にサオリは何度も対峙してきた。ケテルから始まり、イエソドに至るまで。全柱が災害と呼ぶに相応しい暴威を携えており、権能を振るいながら地上の生命を薙ぎ払う様は正しく神であり、ヒトがどれだけ手を伸ばそうとも届かない頂き。対峙した時に呼び起こされた本能的な恐怖は流転した今でも鮮明に思い出せる。

「先生は大丈夫だったか？ アレはヒトの手に負えるようなものではないだろう」

「何とかなったよ。私も皆も無事さ。近隣の方には一時避難してもらったけどね」

「……そうか」

サオリは彼に決してバレないようにマスクの裏で奥歯を噛み締めた。

やはり、彼は――。

取り返しのつかない事になってしまったと、サオリは俯く。

「……夜が明けるね」

彼の声に釣られて顔を上げると、地平線の向こう側から太陽が顔を覗かせていた。空は梅雨を思わせないような透き通る青。大きな天使の降臨が陽の光に煌めいて、新しい一日の来訪を告げる。

朝の雲雀が鳴いていた。

「そろそろお開きにしようか。話し相手になってくれてありがとう。このお礼はまた何処かで」

「構わない。私も先生と話せて良かった」

「そっか、そう言ってくれると嬉しいな」

立ち上がり、ぐっと伸びをして全身の筋肉を少しずつ解していく彼を横目にサオリは画面の割れたスマホを取り出す。時刻は4時半前。約2時間もの間、時を忘れて彼と共に過ごしていた。

「今日は良い日になりそうだ」

「どうしてそう思えるんだ？」

「サオリに会えたからね」

なんて、悪戯っぽく笑いながら言われるとサオリもどんな言葉を返せばいいか分からなくなってしまう。いつもこうだった。口先で彼に勝てた例なんて一回もない。何の恥ずかしげもなく、心の中から溢れた言葉を飾ることなくそのまま口にする。あまりにも真っ直ぐで、眩しい在り方。そんな姿に憧れて、でも同時に見ていられなくて。「何か困った事があったら何時でも頼って良いんだからね。私はいつでも君達の味方だよ」

別れ際、ベンチに座ったままのサオリに見せた彼の横顔。初雪のような儂さと美しき。手を伸ばせばその瞬間に壊れてしまいそうで。彼女は掛ける言葉が見当たらず、「ああ」と素っ気無い短い返事で返答する。だが、彼にとってはそれだけでも嬉しかったのか少し笑みを深めて背を向けた。

歩き、遠ざかっていく背中。帰るべき日常に帰っていく。彼はきつと今日も仕事だろう。シャーレの業務に休日はない。キヴオトスに慢性的に蔓延っている種々の課題や学園から届く書類、生徒が起こした問題……他にも色々。思わず眩暈がしてしまうほどのタスクが彼の両肩に積もっている。いつか本当に倒れてしまいそうで心配だ。「私も行かなければ。いつまでも席を外す訳にはいかない」

彼の背中が完全に見えなくなるまで見送った後、サオリは立ち上がる。彼が帰るべき日常に帰ったように、彼女も日常に帰らなければならぬ。暗く、陽の当たらない日陰の世界に。例え誰もが忌避するような場所でも、あそこにはミサキが、ヒヨリが、アツコがいる。それだけでも、サオリにとっては何を犠牲にしても帰りたい場所だ。

照り付ける太陽に背を向ける。自分はまだ、あの空の下で胸を張って生きることができない。あの人の生徒だと、自信を持って言う事ができない。だから、少しばかりのさよならを。

いつか、あの空の下で彼の自慢の生徒として生きることができるようになる。



「作戦決行の予定を前倒しにする」

「ええッ!? 本当ですか!?!」

アリウススクワッドに与えられている一角、監視の目が無い事を確認したサオリは戻るや否や衝撃的な事を口にした。自分達を縛っていた世界と大人に対して反逆する日を変更すると言ったのだ。壁に凭れながら拾ってきたお気に入り雑誌の読み返していたヒヨリも思わず顔を上げて、爆弾発言をした頼れるリーダーを見た。

「リーダー、それは何度も話し合いを重ねて決めたはず。決行日は姫が生贄に捧げられる日……儀式の為にベアトリーチェ自身が動く必要がある日。そこ以外に決定的なチャンスは無いつて、アズサとミカあのみも——」

「ああ、分かっている。確かにそのタイミングがマダムに最も隙が生まれる。他日では接近するチャンスはあっても隙が作れない」
「なら、どうして態々リスクを取ってまで別日にするの?」

ベアトリーチェは慎重だ。基本的に自身の根城であるアリウス自治区から出て来ず、護衛も山ほど付けている。それこそ、過剰なほどに。仮にそれらを潜り抜けてベアトリーチェの元に辿り着けても、特別な意味がある日でなければ確実に逃げられる。生徒を駒として見做し、命すら容易く切り捨てられる彼女であればアリウスを見棄てる事なんて想像に難くない。確実に何もかも見棄て、自分だけ安全地帯に逃げるだろう。

故に選ぶのは彼女が逃げられない日付とタイミング。全員で話し合い、最後まで残った候補日は2つ。そのうち、儀式の日が最もベアトリーチェに隙が生まれる日であろうと結論付けて、決行日に選ばれた。この決定日は既にトリニティに潜入しているアズサにも、パトロンの代わりのミカにも伝えていたため今変更するのは難しい。彼女達は表立って動きにくいアリウスと異なり、決行日まで根回しや場の整理等を行っているのだ。それを考慮すると、決行が迫るこの段階で日取りを前倒しするのは少々リスクがある。

だが、そのリスクを背負ってまで決行日を変えなければならない理由を見つけてしまったのだ。

それを伝えようとサオリは口を開くと、背後から靴音。振り返ると其処にはアツコが居た。彼女はこの場にスクワツドの面々しかいない事を確認すると顔に取りつけられた仮面を外した。

「サっちゃん、どこ行ってたの？」

「ただ、夜風に当たっていただけだ」

「もしかして先生に会ったの？」

「……何故分かったんだ？」

「花の香りがしたから。ホワイトリリーの……先生の香り」

サオリは袖に顔を近づけてすんすんと鼻を鳴らすと花の香りがした。記憶に刻まれた彼の香りと同じもの。確かに、この香りを彼のものとして知っていれば結びつけることは可能だろう。だが、香りの残滓なんてごく僅かだ。ミサキやヒヨリが気付かない程度には。花が好きだから嗅覚も鋭いのだろうか。

「リーダー……」

「サオリ姉さん……」

「勘違いするな。偶々会っただけだ」

と、まだ先生に会えていない2人に釘を刺しつつ一旦仕切り直そうとすると……それよりも先にミサキが口を開く。

「じゃあこの変更も先生が絡んでるの？ リーダーの事だから先生に何かを察された、なんて事は無いだろうけど……」

「……僅かだが、先生に主神の気配を感じた」

その言葉に全員が息を呑む。

サオリが彼に感じたのは世界最大の信仰を誇る宗教の唯一神の気配。僅かであるが、その残滓が彼に混ざっていた。それが意味するものは、全員が痛いほどに分かっている。

「最悪……本当に最悪、マダムが儀式の生贄に姫じゃなくて先生を選ぶ可能性がある。リーダーはそう言いたいなの？」

「ああ。姫の血統ロイヤルブラッドを使うより先生の縁を辿って主神にアクセスした方が、最終的に得られる権能の幅は広がる。その分、儀式の手段は複雑になるだろうが……マダムの目的を考えると先生を狙う可能性が高い」

「で、ですがまだマダムはその事に気付いていないんですよね？」
「まだ、な。だが、マダムも先生を監視しているはずだ。いつ気付いても不思議ではない」

「本当……反吐が出る」

アビドスに行ったという事はつまり、ゲマトリアが一角たる黒服と接点を持ったという事。大人としての対極に位置する2人の対峙がどうなったかは知らないが、兎にも角にも彼はゲマトリアという存在を認知した。そして、それが先生と敵対する事も。

恐らく彼も既に対ゲマトリアを意識した何らかの対策をしているだろうが……それも万能ではない。仮に彼に巢食う主神の気配を探知された場合、ベアトリリーチェは己の持つ手札の大半を用いて先生を捕らえに掛かるはずだ。仮に捕らえ儀式の贄に使用できた時、投入した戦力と使用した手札を補って余りある莫大なりターンを得られる。

「サっちゃん、先生側が動かさせそうな戦力は？」

「最低でも小鳥遊ホシノ……アビドス対策委員会は動かせるだろう。他は不明だ。ミレニウムに行っていたと話していたが、誰と関わっていたかまでは聞いていない。小鳥遊ホシノに加えて、コールサインダブルオー00を動かせるならある程度安心できるが……」

「確約はできない、か。そして私達5人とあの女ミカ。この時点で戦力としては申し分ないけど、まだ何か不安要素があるの？」

「カイザーコーポレーションに妙な動きがあるらしい。考え過ぎであるならそれに越した事はないが、警戒は必要だろう。カイザーは彼と敵対している上、煮え湯を飲まされたと聞く。それと、これは昨日ミカから秘匿回線で私宛に直接来た連絡なのだが……」

その情報が示すのは。

「キヴォトスの未確認領域で聖典のアーカイブが起動された」

致命的な臨界まで、あと僅か。



「ミサキ」

「リーダーが決めたなら異論はない」

「ヒヨリ」

「辛いですし、苦しいですけど……はい、私はやります」

「アツコ」

「うん、その方が良いよ。きつと」

3人の返答を以て作戦の日が再決定される。サオリは力一杯、今度こそ守り切れるように拳を握り締めた。

「決行日は——エデン条約締結日だ」

作戦名、嚮導落とし。メフェイストフェレス地獄を嚮導する女を冥府の底に叩き落とす。

布石

「はあ、は……あ……ア……ッ」

速く、短く、浅く脈打つ心臓。きゅつと閉まる脈、そこに流れる血液の感覚。視界が明滅して指先や足先の感覚が急速に失せ始めている。耳鳴りが響いて、全身の毛穴に針を刺されたかのような痛みが皮膚を焼く。空気を吸おうにも上手く息ができなくて、鼻と口から零れる血がただでさえ下手な呼吸の妨げになる。

6月という初夏、20度を超える気温にも関わらず、震えそうなほどに寒かった。

「く、そ……なんだってこんな時に……ッ」

エリドゥに突入する時や都市の中で過剰に投与した各種薬剤、その副作用。それが現れ始めたのだ。無論、現れるのは今回が初めてではない。寧ろ長い付き合いだ。これまで何度も肉体を襲い、その度に死にそうなほどに苦しみ血反吐を吐いてきた。

だが、最近はそれなりに落ち着いてきたため、久し振りに外回りの仕事の片付けと、半日前にトリニティ自治区内で観測した妙な神秘の揺らぎを確認しようと思って外出したのだが……そんな時に限って来てほしくないものが来る。

彼はちらりと腕時計を見て、現在の時刻を確認。現在地であるトリニティ自治区から目的地までは徒歩で1時間半、途中まで公共交通機関を使えば1時間ほど。別に誰かと会う約束をしている訳ではないため、時間は充分ある。荒事に巻き込まれる可能性も考慮して余裕を持たせておいて良かった、なんて思う。

彼は上手く動かない体を引きずりながらメインストリートから路地裏に入る。幸い、近くに人が居なかったためこの惨状を見られることは無かった。心配されるのは別に良いが、此処はトリニティ自治区。救護騎士団が飛んでくる可能性がある。彼女達……特にセリナやミネにこの体の状態を見られたら確実にベッドに縛り付けられるだろう。そうなれば今日の予定どころか今後のスケジュール全てが狂ってしまう。唯でさえ綱渡りな現状、予定通りに出来る所は可能な

限り予定通りにしたい。

メインストリートから一本奥、ビルとビルの間。煌びやか、華やか、優雅を体現するようなトリニティ自治区の中でも一本奥に入ればその3点も身を潜める。文字通り何処にでもあるようなビル街の間は室外機の唸る音で以て歓待してくれた。

そこで先生は背中を外壁に預けて地面にずり落ちる。その際に思いつき尻餅をついてしまつて尾骶骨が悲鳴を上げるが、それよりも更に強い痛みが痛覚を上書きした。自分が酷使した体、自分が使い潰した体。そんな事は分かっているが、この脆さはどうにかならないものかと思つてしまう。生徒と共に最前線で銃を担いで戦いたいと思いが上がる事はないが、銃弾1発で死に絶えるような脆弱性には我ながら辟易する。

だが、そう思うだけ。自分と生徒が違う事は知っている。近づけない事も知っている。幾ら鍛えても神秘という壁を乗り越える事は叶わず、流れ弾で死ぬ現実は変えられない。鍛える事が無意味、と思わないがそれだけで何かが大きく変わる様な効果は端から期待できないだろう。先生の生物学的な限界は神秘を持つこの世界の民達の最低ラインを大幅に下回る。第一、そんな自分の努力1つで変わるならとつきの昔にやっていた。そんなもので変わらないからこそその現実で、世界に打ちのめされた今がある。

彼は念のため懐に忍ばせておいた鎮静剤を首筋に打ち込む。カシュ、と空気の抜ける音が鳴り注射器の中に入った透明な液体の嵩がみるみる減つていった。全ての薬剤を体内に注入した先生は手をだらんと下げて……思いつきり咳込んだ。その弾みに緩く握つていた注射器が手元から離れ、乾いた音を立てながら地面を転がる。

掠れた様な音と湿っぽい音がミックスされた咳込みは唾液や呼気と共に溜まった血を吐き出すためのもの。いつもの癖で口元に裾を当てて咳込んでしまったため白のコートは真っ赤に汚れてしまった。だが、公共の地面を汚すよりはマシだろうと思ひ、シャーレの腕章だけ外してジャケットの方に取りつける。その後、付着した血が見えないようにコートを畳んで……息を吸つて、吐いた。今の彼にとっては

それだけでも身を削る様な重労働だった。

まるで文句を言うかのように鳴る心臓に彼は『文句を言いたいのはこつちなのに』なんて思う。だが、自分の脆弱さに文句を言っても何も変わらない事は自分が一番知っているため、呼吸を整え、一刻も早く正常に戻る事に専念する。

息を吸う、吐く。酸素を取り込む、二酸化炭素を吐き出す。一定のリズムを保つことを意識。浅い呼吸ではなく、深呼吸を。背中に走る悪寒から意識を外す。赤く明滅する視界が鬱陶しいから眼を閉じる。右腕は脈打つ心臓を服の上から握り潰すように。

—— シツテムの箱を使つて無理矢理動かしていた肉体。まだ完治とは言えない体の傷。

無名の守護者に首を撫で切られ、トキに成す術なく叩き潰され、ケイに腕を砕かれ。それ以外にも銃弾で撃ち抜かれたり、刻まれたり。その度にこれに縋ってきたのだ。その負荷は推して図るべきだろう。にも関わらず数日副作用が現れないから落ち着いた、なんて虫が良い。数時間前の己の浅慮を嘲った。

そもそも、こうしてある程度自由意志で体を動かせる現状こそ幸運だ。最悪、今後もずっとシツテムの箱を通して動かない死体同然の肉体に稼働命令を出さなければならぬ可能性すらあった。まるでマリオネットのように。

そして、彼は「ふう……」と肺に残った雨の空気を吐き出して——

——意識を戦闘用に切り替えた。

「……見えているよ」

飛来する鋼鉄の弾丸を見る事すらなく、先生は眩く。刹那、励起するシツテムの箱。瞬時に防御壁が形成され弾丸が甲高い音を立てて明後日の方向に弾かれた。先の潰れた12.7 x 99 mm NAT O弾が先生の足元に転がり落ちる。

先生を殺傷する弾丸。9 mmパラベラム弾とは比較にならない殺傷能力を持つそれが先生の体に直撃すれば容易く肉が吹き飛ぶだろう。腕に当たれば腕が飛び、腹部に当たれば上半身と下半身が千切れ、頭に当たれば柘榴のような末路を迎える。こと単純な威力に於い

ては生徒が日常的に携帯できる武器の中でも最上位に位置する銃火器ではあるが、システムの箱の防御を貫通するには至らない。

初撃を危うげなく防いだ彼は張り詰めた空気を少しだけ緩め、諭すような優しい視線で——弾丸が飛来した方角を向いた。



狙撃目標ターゲットから直線距離で900m離れた地点、伝統的な建築物の屋上ニールینگで膝射の姿勢で銃器を固定し先生を狙った少女……アリュスの生徒はその光景を見て息を呑む。だが、その驚愕も一瞬。即座に荷物を纏め、ポジションを変更しようとする。今の一射でターゲットに位置を感じづかれてしまった。ならば、このままこの場所に留まってもリスクしかない。他のポジションに移動し、再度狙撃を……そう思っていると声が聞こえた。

『この声が聞こえるなら、退いてくれないかな？』

展開しているドローン越しに聞こえたのは落ち着いた、穏やかな声だった。対物ライフルで狙撃された人間とは思えないほどに凧いだ声は少女の耳に嫌な緊張感を伴って入り込んで来た。まるでセイレーンのような。聞くだけで三半規管が狂う。魔性、とは言い得て妙で……背中に冷たい汗を感じた。

『基本、余程の手練れでない限り狙撃に2度目はない。やるなら一撃必殺だ。初撃で私を仕留められなかった時点で狙撃手としての君は負けている』

言われなくても分かっている事だった。基本、狙撃の成功確率が最も高いのは第一射。それで仕留められなかったら失敗同然だ。

意識の外から、視界の外から、音速を超える弾丸で感づかれる間もなく撃ち抜くからこそ狙撃は強力。だが、狙撃というカードに気付かれてしまえばターゲットは『狙撃される可能性』を頭に入れて動くことになる。そうなればもう成功しない。900m離れた場所から動体に向てるのは曲芸だ。狙撃手として鍛えられた少女であつてもそれは厳しい。アリュスが誇る特殊部隊であるスクワッドに席を置く

最強の狙撃手ヒヨリであれば或いは、というラインだ。ヒヨリより明確に狙撃の腕が劣っている自覚を持つ少女は自身が成し遂げられるとは思わなかった。

『私が正義実現委員会を呼んで、彼女達が到着するまで……そうだね、大体10分位かな。その間に君は私を殺し切れるかい？ 君の持つ対物ライフルであの防御壁を貫けるかどうか試すのも一興かもしれないけど、その遊びに時間を掛けすぎたらツルギを筆頭にした主戦力が此方に来る。そうなれば君……いや、君達も流石に分が悪いんじゃないかい？』

冗談じゃない、と少女は思う。今この場に居るのは狙撃手の少女と、少女の回収人員、直接戦闘になった場合に対処する前線部隊が4名の計6人。たった6人で正義実現委員会の相手にするのは無謀だ。戦略兵器である剣先ツルギ一人でお釣りが来る。そこに副委員長や他の部隊の部隊長が合流すれば0に近似できる勝ち目が文字通りの0になってしまう。

何より最悪なのは、仮に正義実現委員会がこの場に到着した場合にアリウスの存在がトリニティの権力中枢に露呈する事だ。存在が知られてしまえば……今後の計画に大きな悪影響を与える。上位者から与えられた命令である彼の始末は、あくまで『可能であれば』の話。当然ながら計画の方が優先度が高い。ならば今回は彼の手札を1つ引き出せた、と考える撤退した方がリスクは少なく済む。

位置は確実に捕捉されている。正確な人数は把握されていないだろうが、1人でない事は分かっているだろう。所属と顔はバレていない……と思う。今この場で撤退すれば彼に与える情報は最低限で済む。代わりに今後一切狙撃等の暗殺は成功しなくなるだろうが……1回目ですら成功しないのであれば、このデメリットは実質無視できる。少女にとってもアリウスにとっても、彼女に命令を下した大人にとっても、この時点での撤退はベストであった。

だが、それはあくまで少女達……先生の命を狙う者の都合だ。彼は違う。彼がこの場で少女を逃がす理由が欠片もない。それこそ彼の云う通り正義実現委員会を動員し、少女達を捕えて尋問なり拷問なり

に掛けて情報を引き出した方が彼やトリニテイにとってプラスになる。にも拘らず、彼は自身に何の利点が無い事を知っていながら暗に少女達に撤退を勧めている。

恐らく、彼は別に人狩りマンハントが趣味という訳ではない。逃げ惑う獲物を追い詰める事で充足を得るようなサディズムは欠片も感じられず、本当にただの善意で撤退を勧めている。

『別に君を逃がす理由はないけど、今はまだ捕える理由もないからね。なら、お互い痛み分けて形で今日はお開きにした方が建設的だ。退くなら追わないよ。この件を誰かに言うつもりもない』

これ以上騒ぎを大きくすれば先生という立場上、少女達を捕えない訳にはいかない。トリニテイ自治区で暴力沙汰が起きたなら正義実現委員会が出張ってきてしまう。先生とて自治区内の治安維持活動を止める権限を持たないし、止めるつもりも無いため少女達は抵抗虚しく捕らえられ……情報を吐かせられるはずだ。

だが、現段階なら引き返せる。狙撃を知っているのは当事者達のみ。彼がそれを誰にも言う事なく忘却すれば、この件は永遠に闇に葬られる。

失敗した後の展開としては正に理想的だ。少女達にメリットが多すぎて、彼に一切のメリットがない点に目を瞑れば。全く以て信用ならない———そう思つてドローン越しに彼を見ると、動く気配は欠片もなかった。

———正気か、この大人は。

益々不気味だ。何をしてくるか一切不明だから排除したい、と云うあの人の気持ちも理解できてしまう。キヴォトス随一の不明点にして……危険人物。この世ならざる異物、システムに近い何か。

相手にするだけ、考えるだけ無駄だと悟った少女はこれ以上特に何もする事もなく遠隔操作でドローンを自壊させ、回収員と部隊に連絡を入れて……撤退準備を開始した。



「……行ってくれたかな」

眩き、彼はシツテムの箱をスリープモードにしてコートの中に仕舞う。アリウス自治区の生徒全6名、トリニティ自治区を確認。何とかなって良かった、と先生は内心ほっとする。あのまま戦闘になっていれば事態は確実に泥沼になっていた。それを防げただけでも上出来だろう。

「それにしても、もう動いてくるとはね。ベアトリーチェはもう少し慎重に手を打ってくると思っただけ……アビドスで気でも変ったのか」

何方にせよ今後の動向に注意しないと……そう考えていると、ぽつり、と頬に水滴を感じた。顔を上げて空を仰ぐと曇天が視界に収まる。雨雲。今はまだ小雨だが、時間が経てばきつと本降りになるだろう。出る前に確認した天気予報では晴れのち曇りであったため、傘は持っていない。これからは雨雲レーダーもきちんと確認しないと、なんて毒にも薬にもならない思考。洗濯物が濡れないと良いな、なんて思っている……少しずつ、雨脚が強まった。

打ち付ける雨が容赦なく体温を奪っていく。服が水気を帯びて重くなり、髪の毛から滴った水滴が地面に落ちる。額に張り付いた前髪を上げて視界を確保しつつ、打ち込んだ薬の効果が出るまで此処に留まる事にした。何せ、今はきつと立ち上がる事すらできない。腰から下の感覚がほぼ皆無で、動かそうにもピクリとも反応せず、下半身不随になったのかと錯覚してしまうほどだ。だから、雨宿りは満足に動けるようになってから。それまでは雨に濡れていよう。この冷たさが、寒さが、苦しさが自分をこの世界に繋ぎ止める楔だと思うから。

止まない雨はない、なんて誰かの言葉。使い古された常套文句。なら少しくらいは濡れてもいいはずだ。自分の体の中に溜まった熱を冷ましてくれることを願いながら、先生は頭上を見た。

見上げた雨雲が先生の瞳に映る。降りしきる雨の向こう側にはきつと青空が広がっているだろう。彼の瞳に施された偽装の裏側と同じ色。彼の色、彼女から譲り受けた色。純白だった彼が蒼を抱いたからこそ、今が在る。

——その『今』に、君はいないのに。

「……会いたいな」

ポツリと零れた声は呟いた彼本人ですら気付かない内に漏れ出た、押し殺し続けていた彼の本音。幾星霜、会ってないのだろう。声を聴いていないのだろう。触れていないのだろう。那由多の果てまで繰り返してきた回帰、そのうちの一回。共に居た時間なんて1年にも満たないのに。

それでも、彼女の事を片時も忘れたことはなかった。顔も声も温度も、何もかも。思い出達はきちんと脳裡に刻まれている。何もかもが満ち足りていて、何もかもを知らなかった……楽園のような鳥籠で生きた記憶。あの日々を経たからこそ、今の彼が在る。

「君は、もう一度あの日みたいだな笑顔を見せてくれるのかな」

彼は知っている。皆が言うほど、彼女が立派ではない事を。彼女が超人でない事を。彼女が唯の女の子である事を。誰よりもキヴオトスとそこで生きる人々を信じていた事を。

そして、彼女も知っている。皆が言うほど、彼が立派でない事を。彼が救世主でない事を。彼が唯の青年である事を。誰よりもキヴオトスとそこで生きる人々を愛していた事を。そして、何処までも先生である事を。

アロナを彼女の代わりにすることはない。アロナを通して彼女を見ることもない。アロナはアロナで、彼女は彼女だ。とても良く似ていて、とても近い、だが決して同じではない……2つの命。

もう一度見上げた空。流れる雲の隙間に彼はその瞳を細める。そして、その姿勢のまま握っていた右腕を地面に下ろし水溜りに沈めた。跳ねた水滴が頬に当たり、まるで涙痕のように滑り落ちる。それが先生には罰にも、当てつけにも見えた。悲しくても、苦しくても、痛くても彼は涙を流す事ができない。機能が奪われた、という訳でもなく、ただ単純に摩耗し擦り切れた心の所為。自分の変化に、痛みに鈍くなっているのだ。そしてゆくゆくは自分の痛みだけではなく、他人の痛みにも鈍感になってしまう。それが、どうしようもない程恐ろしかった。

意識を手放してしまいそうな痛みを噛み締めながら、天から墮ちる雫に身を委ねる。

——雨はまだ、止まない。



アリウス自治区、最奥。儀式の祭壇と呼べるような場所で深紅の女……ゲマトリアが一角、ベアトリーチエは頭部にある数多の眼球をぎよろぎよろと動かしながら言葉を紡いでいく。

「やはり、対物ライフル程度の口径ではあの防御を貫通できませんか」あの防御を見たのは一度や二度ではない。アビドスで起きた一件で何度も見た。展開範囲は広大、最低でも200m程度。速度も速く、文字通り瞬時に展開可能。自身だけでなく他者にも付与が可能で、防御条件も細かに変更できる。当然のように概念防御まで完備していて、全力全開の防御壁を真っ向から貫こうものなら権能に片足を突っ込んでいないとまず不可能だ。

権能クラスの攻撃は流石のベアトリーチエでも簡単に用意できない。幾つかの条件、幾つかの制約、道具やらを使用すれば可能であるが……それらが整うのはもう暫く先だ。今ある手札、使ってもいいカードだけで彼を殺し切るのはほぼ不可能。使い切りのオーパーツを使ってもいいなら可能だろうが、幾つかの関門を突破できるか否かが不確定な上、1回きりの手段を使っても殺し切れなかった場合のリスクが高すぎる。

故に取るのは必然的に2択。何度でも使えるような手段で以て彼を殺すか、或いは——1回切りでも確実に殺し切れる手段を用いるか。この2択の内、ベアトリーチエは後者を選ぼうとしていた。厳密に言うならば、本命を後者にして、前者はセカンドプラン。

アビドスで眼球に焼き付いた、神殺しの罪を担う彼の姿。それを見てしまえば油断なんて出来る筈が無かった。何としても、どんな手段を使っても、何を対価にしても彼だけは確実に息の根を止める。

「事が起きる前に始末しておきたかったですか……まあ、仕方あり

ません。元より成功確率はほぼゼロでした。スクワッドを使えば結果は変ったかもしれませんが、考えるだけ無駄でしょう」

アリウススクワッドは言うまでもなくアリウス自治区に於いて最強の部隊だ。あらゆる面が他の部隊とは一線を画している文字通りの最高峰。だからこそ他の部隊で代替しにくい。失敗する事が予め予想できていた彼の暗殺に、可能なら温存しておきたいスクワッドを出撃させる事は愚策だろう。

求めたものは気軽に使えて、勝手の良いツール。スクワッド以外なら誰でもよかったのだ。偶々あの狙撃手と回収人員の手が空いていた、あの部隊の手が空いていた。だから遊び半分で彼の暗殺を命じた。結果は失敗だったが予定調和。この程度で成功するならとつくの昔に殺している。

故に、もう少し踏み込めば良かった——とベアトリーチェは自省する。単純に手緩かったのだ。

あの駒達を適当に何処かの不良か何かに変装させて、アリウスに繋がるであろう全てを抹消し、捕えられたら自害するように命令しておけば良かった。いや、命惜しさに逃げ出したり情報を売る可能性を考慮して自害の手綱は自身が握るべきだろう。

ベアトリーチェにとってアリウスは単なる手駒に過ぎない。此処に住まう生徒達が持つ憎悪も、何もかも心底どうでもよくて、ただ使えそうだから煽っているだけ。思い入れなんて皆無だ。儀式の生贄に必要なロイヤルブラッド以外、何処で何人死のうが関係ない。ベアトリーチェにとって、アリウスの生徒が死ぬ事は枯葉が落ちた事とほぼ同義。心が動く訳もない。悲しむなんて意味不明だ。駒が壊れた程度で何の感情を抱けばいい。

子どもの命、それも生まれた時点で捨てられた命なんて幾ら消費しても構わないだろう。利用し、使い潰し、更なる高みに至るための道具にする。それだけがあの掃き溜めに捨てられた命の利用価値だ。

「先生はどうでも良いですが、シツテムの箱は使えそうですね。認証方式は……虹彩か指紋か。殺したら眼球と片腕は確保するように命じましょう。それ以外は鳥の餌にして捨てましょう」

報告内容を全て読み終えたベアトリーチェはそう結論付ける。先生は殺すが、殺した後に残るシツテムの箱は回収対象だ。単なるタブレットではない事は見て分かる。あれは恐らくオーバーツ、しかもキヴオトスの中で間違いなく最高のものだ。彼を殺してタブレットはそのまま、というのはあまりにも勿体無い。アレには確実に莫大な価値がある。

神秘も力もない彼が使ってもあの出力ならば、ベアトリーチェ自身身が使えば更なる出力を得られるだろう。ともすれば天の頂きたる神格に匹敵、或いは凌駕する権能を得て『孵化』できるかもしれない。

近い未来凶にベアトリーチェは笑みを浮かべる。ロイヤルブラッドだけでなく、錠前サオリも……いや、いつそのことアリウススクワッドの4人纏めて全員残らず心臓を抉り出して儀式の生贄にしてしまおうか。

「子ども達では少々戦力不足ですね。私も直々に動くとしましょう」
赤が消えた。

雨傘の咲く6月、私は貴方に愛を送る I

キヴオトス三大マンモス校が一角、伝統と調和、友愛を尊ぶトリニティ総合学園は有数のミッション系お嬢様学校だ。良く言えば伝統的、悪く言えば古臭い校風と長い歴史に裏打ちされた由緒正しきは特に上流階級出身の生徒に人気であり、その生徒数はミレニアムやゲヘナと比べても劣らない。在籍する生徒の数がそのまま学校の発言力に直結するキヴオトスに於いて、長く続く伝統を持つトリニティを上回る影響力を持つ学校はほぼ皆無と言って差支えないだろう。

そんなトリニティ総合学園が収める自治区は当然の如く賑わっている。ミレニアムが科学技術の最先端、ゲヘナが自由と混沌を表した街並みであるならばトリニティの街並みは歴史を感じるものになっている。レンガ造りのメインストリートと建物。中世的な景色は生徒やそこに住まう人々以外にも観光客も多くおり、人混みがなくなる日なんて殆ど無い。それこそ、今日みたいな雨の日でもなければ。

「止まないなあ……」

振り止む気配を感じない雨を窓越しに眺めながら、ふわふわとした可愛らしい部屋着を纏う少女……聖園ミカは憂鬱な気持ちを隠そうともせずに溜息を零した。物憂げに開かれた琥珀色の双眸と長い睫毛、通った鼻梁、蠱惑的で小さな唇、至高の絹のような桃色の髪、透き通るような色白の肌。しなやかな指先とアクセントのネイル、スカートから覗く細い足。全体的に細身でありながらも、確かな女性らしさを感じる体。総じて、過剰なまでに整った美貌。美の女神も裸足で逃げ出すようなお姫様は使用人も付けずに一人で部屋の中に居た。それは雨の街を見ながら自身を取り巻く何かについて思考を巡らせているから……なんて、理由ではない。

「ナギちゃんも酷いよね、こんな雨の日に出かけろなんて」

ミカの幼馴染である桐藤ナギサから頼まれた事をやらなければならぬ今日という日に限って生憎の天候である事が憂鬱なのだ。勿論、別に彼女は出不精という訳ではない。寧ろ天気の良い日だったら散歩に行くし、年頃の女の子らしくお店巡りも好きだ。だが、雨の日

となると何となく外に向く足が重くなる……なんて経験は誰しもある事だろう。つまりは単に気持ちの問題。雨は気分が上がらないのだ。

ミカは一人掛けのソファに身体を沈ませながら頼杖を突いて、窓の向こう側を眺めて……それから視線の向きを部屋の内側に変えた。

一人で住むにしてはあまりにも広い部屋。そこには一目見ただけで家主が気を使っている事が分かるインテリアが多くあった。カーペットやラグ一つとっても最上級の物で統一されており、ソファやテーブルに至っては老舗のオーダーメイド。一切の下品さを感じさせない上質で優雅な家具は程よく生活感があり、丁寧に使用されていることが伺える。今ミカが使っているソファも当然の如く最高級品であり、お気に入りの内の一つだ。

「まあ、うだうだ言っても仕方ないよね。他でもないナギちゃんの頼みなら私も頑張らないと」

誰かにいう訳でもなく、ただ自分を鼓舞する目的で。上がらない気分を無理矢理上げて、ミカはソファから立ち上がり足を進ませる。扉を開けた先に広がる空間はウオークインクローゼット。おしゃれや可愛いもの好きなミカらしく、多くの服やアクセサリーが丁寧に整理整頓されている。既に衣替えを済ませているようで、通年で使う服を除いて多くの私服は夏を見越した涼し気な装い。だが、ミカはこれをスルーして真白いトリニティの制服を手取る。

今回は私人としてのミカの用事ではなく、公人として……ティーパーティーの1人にしてパテル分派首長の聖園ミカに、同じくティーパーティーの1人にしてフィリウス分派の長である桐藤ナギサが依頼したものだ。用事の概要も聞いている。学園へ新装備を提供してくれた企業へのお礼だ。所詮は社交辞令であると皆理解しているが、面倒でも形式というものはそれなりに大事だ。特に、伝統を重んじるトリニティにおいては一際。

招かれた立場である事や、生徒会長の一人として赴く事を考えれば私服は相応しくない。加えて、今回は学園の代表として行くのだ。制服以外の選択肢はないだろう。これが学園の用事じゃなければドレ

スでも着て行けたのに……なんて思ったが、ミカはその考えを即座に銀河の彼方に投げ飛ばした。

ドレスを一番最初に見せる人の予約は既に埋まっている。その初めてをこんな下らない事で消費したくないし、そもそも彼以外にドレス姿を見せたくない。女の子が一番可愛く、綺麗になる瞬間が一番大好きな人の為に残しておく。それがとっておきのサプライズだ。

手慣れた所作で、鼻歌混じりに制服に袖を通す。汚れ一つ見当たらない真白い服を身に纏わせれば、次はアクセサリーの番。ピアスやネックレス等は付けないが、代わりに自慢の翼を飾る。感覚はあるが別に飛べるわけでもない……言ってしまうえば有っても無くても変わらない器官であるが、折角あるならおしゃれしなければ損だろう。

そして、制服とアクセサリーが終われば次はメイク。場所を洗面台に移して軽く洗顔し、水気をタオルでふき取ってから化粧水、乳液、クリーム、日焼け止めの順で付けてドレッサーに移動。前髪をピンで止めて、いよいよベースメイクを開始する。メイク下地、コンシーラー、ファンデーション。ベースが完成したら一旦鏡を見て、不自然な部分が無いかチェックを挟む。特に無い事を確認したら次はアイメイク。アイブロウ、アイシャドウ、アイライナー。ビューラーで睫毛をカールにして、マスカラを塗る。頬にチークを当て、最後にリップで唇に鮮やかな色を落とせばナチュラルメイクが完了する。鏡を見れば何時もの外出用の自分。

その後、前髪を止めていたピンを外し髪全体を櫛で形を整える。途中、「うう、湿気で髪が纏まり難い……雨嫌い……」とぼやきながらも、元がサラサラの髪質であるため櫛を通してしまえば直ぐに纏まった。その後にシュッシュで髪を結んで、姿見の前でくるりと回る。

「よしっ♪」

気分は相変わらず上がらないけれど、大切な幼馴染のお願いを無下にする訳にもいかない。ミカは水滴が跳ねる外を見て……ふと、思う。あの人は雨が好きだった、と。

優しい人だった。優しすぎる人だった。初めて会ったあの日からその感想が変わった事はない。ずっと、彼は誰かに優しい人だった。

困っている人がいれば迷わず手を貸して、道に迷ったら一緒に正解を探してくれる。泣いていたら理由も聞かずに寄り添ってくれるし、雨に濡れていたら自分が濡れる事も厭わずに傘を差し出した。

あの優しさは『先生』という役職から生まれるものではない。彼が彼だからこそ持ち得る生来の気質。確かにそれは素晴らしいものだと思う。でも、時折それが自傷行為に見えて仕方なかった。優しさというナイフで自分自身の喉を貫いているようで、彼はいつも血を吐きながら走り続けていて。

彼は誰にだつて手を差し伸べた。明確な殺意を持ち、自身に凶弾を放ち消えない傷を作った少女にも。何もかもを失い、暗い水底に堕ちて魔女になるしかなかった少女も。等しく手を差し伸べ、その明日を守り抜いた。少女達を脅かす悪意から、利用する大人と真つ向から対峙した。『私のお姫様』と呼んでくれたあの日の事は片時も忘れた事はない。

「会いたいな……」

ポロリとミカの口から零れる本音。雨を見ると『雨が好き』と言った貴方を思い出す。晴れた青空を見ると、それと同じ色の瞳をしている。貴方を思い出す。白を見ると何物にも染まらない純白の貴方を思い出す。思い出と景色に貴方の残滓を感じていた。あの人がキヴオトスに来て、先生になってから早2ヶ月。春の風は止んで雨傘の咲く季節になった。その間に起きた問題は大小共に数知れず。

ティーパーティーの情報網から入手した情報によれば少し前はミレニアム^調のビッグス^月スター^オと先生の間で戦闘が起きたらしい。推測するに理由は名もなき神々の女王^{天童アリスとケイ}。ミカ自身、そこまで天童アリスと関わった事はない。精々シャーレ管轄の作戦で何度か顔を合わせた程度。もの凄いゲーム脳で、時々何を言っているのか理解できない事もあったが……それでも、友達思いで、凄く素直で良い子だったのは覚えている。

それよりも少し前はアビドス。ビナーが完全顕現し、更に神の権能まで行使したと知るや否や銃を片手に飛び出しそうになったが……ナギサとセイアに必死に止められて渋々引き下がった。

ティーパーティーという立場で条約締結前に勝手な事をすれば無用の軋轢を生んでしまう可能性があると言われれば……ミカとしても退くしかない。ナギサがエデン条約締結に向けてどれほど頑張っていたかを知っている身としては猶更。それに、過去になった世界では結局エデン条約は締結されず有耶無耶になってしまった。ならば今度こそは叶えてあげたいと思うのも無理はないだろう。

先生の助けになりたい、だがナギサの願いを壊したくはない。その二つの想いに板挟みになり、動くか動かないかを考えに考え抜いた結果……『後の事は後で考えよっか☆ 今は先生を助けなきゃ!』という結論に辿り着きそうになった直前、ミカの耳にゲ空崎ヘナ最強が先生の元に居ると言う知らせが届いた。

空崎ヒナの事は一方的であるがよく知っている。奇襲の巡航ミサイル、無尽蔵に湧き出る戒律ユステイナ聖徒会の守護者、幼い頃から戦闘を叩き込まれて育ったアリウス分校の生徒、アリウスの精鋭たるアリウススクワッド全四名。それらと連戦しながら、気力も体力も弾丸も尽きて尚、先生を最後まで守り抜き、救急医学部の元に送り届けた。

同じことをしろと言われてもミカには不可能だ。いや、ミカだけではない。ツルギも、ミレニウム最強も不可能だろう。3名とも戦闘スタイルが前のめりだ。強いて言うならアビドス最強なら可能性はあるだろうが……彼女も元は攻撃特化型だと聞く。故に、誰かを守りながら戦う事に於いては空崎ヒナの右に出る者は居ないと考えていい。瘡だが……非常に瘡だが、空崎ヒナが彼の傍に居るならば大丈夫だろうと、ミカはぐつと気持ち堪えて大人しく2人の想いを汲んだ。そうして彼の無事を祈りながら次の報告を待っていると、暫くして大きな被害もなくビナーが倒された、と聞いて胸を撫で下ろしたのは記憶に新しい。その直後に先生が緊急搬送されたと聞いて震えた事も。

——最初、先生赴任の知らせを聞いた時は『まさか』と思った。誰かの悪戯か、尾鰭背鰭が付いた眉唾物の噂話か。何れにせよ信じるに値しないジョークの類だろうと思っていた。だが、時が進むに連れてその噂が信憑性を増し、外郭地区に見慣れた真白い巨大なビルが建造された辺りからミカは別の事を気にし始めた。

それは、これから来る先生が『ミカの知る先生』であるか否かだ。彼が彼以外かでは天と地ほど違う。ミカにとって先生とは彼だけ。大切なお姫様だと叫んでくれたあの人だけ。別に彼じゃない先生を排除するつもりはないが、そこまで積極的に協力する事も無い。精々、社交辞令的な付き合いをする程度だ。

だが、もし彼ならば——それは運命だ。それも、とびつきり悪辣な。この世界に存在する大きな意志が潜在的に先生という救世主の死を欲している証明に他ならない。正しくスケープゴートであり、消耗品。何度否定しても飽き足らない、この世界の悪意そのものだ。

先生には幸せになつてほしい。戦いとは無縁の世界で、多くの善い人に囲まれてずっと笑顔で居てほしい。見惚れたあの笑顔が悪意と悲しみに翳らないでほしい。どうか元気でいてほしい。笑顔が枯れないでほしい。優しさを損なわないでほしい。その優しさで自分自身を傷つけないでほしい。ずっと、誰かの為に祈れる貴方であつてほしい。

ずっと奪われてばかりだった生涯。そのように在れと望まれ、その後は無しと捨てられた生贄のような彼。だからどうか、もうこれ以上彼から何も取らないで。

——けれど、その祈りは結局聞き入れてもらえなかった。

何としてでも真実を確かめたかったミカが連邦生徒会に送り込んだ正義実現委員会ハの副委員長スから齎された情報。黒のスーツを纏う細身の男性。笑う時に細められる眼と、蠱惑的に歪められた唇。すつと通った鼻梁に、長い睫毛。先生はミカが知る彼だった。姿形も、その一挙手一投足も。心でさえ。

——彼はキヴォトスに囚われている。神秘に呪われている。そう思った日の夜に枕を涙で濡らした。彼がまた苦しむと分かっってしまったのだ。散々痛めつけられ、傷つけられ、最期は……最期は。

——太陽さえ霞む笑顔を浮べた彼を、まだ覚えている。

「先生、今何してるかな。シャールでお仕事してるのかな。それとも生徒のお願いを聞いているのかな」

髪を切った日の午後は貴方に逢いたくなかった。可愛く飾れた日も、

何となく天気が良い日も。嫌いな雨の日だって彼が隣に居ればきつと快晴のように思える。

だが、作戦が無事に完了するまではリスク低減のため彼との接触は禁止されている。彼に危害が及べば元も子もない……とまではいかないが作戦の前提が破綻する事は間違いない。

尤も、『偶然とはいえサオリもアツコも会ってるんだから、私だって良くないかな?』と若干思っているのはミカだけの秘密である。

「うう……会いたいよお……」

彼が来てから2ヶ月、ミカの調子はずつとこんな感じであった。一人でいると先生の事ばかり考えてしまい、その度に『会いたい』と言葉を漏らして。

ミカは彼と接触する機会がある。エデン条約と、その締結を脅かす裏切り者、裏切り者の候補を集めた補習授業部についての説明。それにティーパーティーの1人として同席するのだ。それ以外にも彼とはきつと沢山話す機会がある……なんて理屈では納得できない。ミカは今、直ぐにでも彼に会いたいのだ。

彼に会えたサオリとアツコが羨ましい。自分も道を歩けば彼に会えるのか、なんて思つてトリニティ自治区やD・U・区を出歩いても一向に会う気配なんて無くて。

アズサはもつと羨ましい。今は会えなくとも、先生が補習授業部の顧問を請け負えば四六時中一緒だ。彼に補習授業してほしい……なんて言ったら迷惑だろうか。いや、優しい彼の事だ、きつと迷惑とは思わないだろう。寧ろ、『いいよ、何処が分からないの?』なんて言つて分かるまで面倒を見てくれる。そういう人だ、彼は。

「優しい人。底抜けに、暖かい人。木漏れ日のような貴方。誰かの痛みを想える先生」

言葉を交わすかの如く銃弾が飛び交うこの世界では、自分の痛みにも他人の痛みにも鈍感だ。だって、そんなものに一々共感しては銃口なんて突き付けられない、引き金なんて引けない。弾丸が致命傷にならないから、傷ついても直ぐに治るし後遺症にもならないから痛みが低い。

でも、彼は違う。彼は脆い。殴られれば斃れるし、撃たれば死ぬ。そんな脆弱性を持っている。皆が笑い飛ばせる弾丸1発ですら彼にとっては致命傷で、爆弾なんか持ち出されたら最低でも四肢の1つを失う覚悟をしなければならぬ。対物ライフルを向けられたら一発アウトだ。

脆く、弱い彼は痛みと傷と共に生きている。だからこそ、他人の痛みと傷に寄り添えるのだろう。自分自身ですら気付かなかった痕を掬い上げて、『痛かったんだね』と優しく言葉にする。だから皆、彼に惹かれる。大切にしてきてくれるから。ありのままを肯定してくれるから。頑張ったんだね、と言ってくれるから。痛みに寄り添い、傷を想う。そこに心と体の差はない。等しく彼は愛しく慰撫する。

でも、彼は驚くくらいに自身の痛みに対しては淡泊で。自傷行為にしかみえない生き方、血と涙と痛みに愛されているような生は到底人間が歩むようなものではない。でも、彼は引き返す事を選ばなかった。その先に地獄が待ち受けていると知っていても、彼は誰かの幸福の為に進み続けた。

「……私は先生と一緒に居られるだけで幸せだったんだよ？」

先生と共に在れたなら、それだけで良かった。それだけで幸せだった。なのに現実には思ったよりも厳しくて、残酷で。

だから、もうこれ以上彼が傷つかないように。彼の優しさが痛みにならないように。彼の幸福が脅かされないように。

ミカは少しだけ微笑を浮べてから……胸の前で両手を組んだ。

相変わらず世界は貴方から沢山の物を奪おうとするけど、貴方はこれ以上何も差し出さなくていいよ。

貴方が何時か人前で涙を流して、弱さを晒せるように。

貴方の優しさが何時か貴方を救いますように。

貴方に救われた私が貴方の心を救えますように。

多くの願いを受けて、多くの笑顔を抱いにして、彼はキヴオトスの最奥で星を見上げた。決して届かない星に手を伸ばし、多くの生徒の為に走り続けた。誰かの願い、彼の願い。片時も安らぐことは無かった貴方。キヴオトスに於ける異物、先生という役割の上でしか存在で

きなかつた虚構の彼。

これは、誰よりも優しかった貴方に捧ぐ祈り。
傷ついた先生のためのキリエ。救世主メサイア・エレイソンに捧ぐ憐みの唄。

「私はいつでも、貴方の手の届く場所で貴方の為に祈っているよ」



祈りも終え、出発の時間まで手持ち無沙汰になったミカは制服が皺にならないように気を付けながら再びソファに座って窓から街を眺める。

「まだ止まないな……もう梅雨入りなんだっけ？」

寧ろ先程よりも勢いが増している気がしなくもない。スマホで雨雲レーダーを見るとこの辺りは既に雨雲に覆われていて、予報だと晴れるのは3時間後らしい。どうやっても雨を回避できない事を知ったミカは灰色の空を若干恨めし気に眺めてスマホをスリープモードにする。

「先生はこんな土砂降りでも好きなのかな。お日様なんて見えない曇り天も……」

多分好きなんだろうな、と自己完結。彼が雨を好む理由は知っている。あの人の最初の教え子が泣き虫だったから。涙も悲しみもどうか洗い流してほしいという祈り、余りにも彼らしくて笑ってしまいうだった。

時計の秒針の動く音。雨が地面を叩く音。それをバックミュージック代わりにしながら足をぶらぶらと揺らす。

考えるのはこれからの事。エデン条約、嚮導落メフィストフェレスとしての事。目的を同じくする5人以外には言えない秘密。それ以外にも沢山。自分が首長を務めるパテル分派の事や、各派閥のパワーバランス。

政治の事はあまりよく分からない。ナギサやセイアは政敵、パテルと対立するフィリウスとサントウスのトップ……そう言われても、ミカにとって2人は大好きな幼馴染と大好きな友達。政敵には思えない。皆で仲良くテーブルを囲めないのかな、とは思うが……トリニ

テイが現在の形になるまでの惨劇を鑑みると上手く纏まっている方だと思う。ナギサやセイアが治めていなければ間違いなく年に数回は小競り合いが起きていた。

そもそも、ティーパーティーだの何だのに属してドロドロの政治をやるよりも、普通の生徒と同じように過ごした方が何倍も楽しいだろう。青春は3年しかないのだ。その僅かな春を汚れ切った政治に費やす必要もない。少しは正義実現委員会やトリニティ自警団、シスターフッド、救護騎士団を除く普通の部活を見習ってほしいものだ。例えば放課後スイーツ部とか。

「とは言っても、派閥も悪い事ばかりじゃないからなく……そこが難しいトコなんだけど」

少なくとも、即座に無くせばそれで大丈夫なんてものではない。派閥があるおかげで守られる何かもあるのだ。今すぐ無くせばトリニティの運営にも影響が大きい。やるなら少しずつ派閥の影響力を落としてから。最低でも解体には十年単位で年数を要する大仕事だ。尤も、現在の安定している状態から無理に変える必要があるかと問われれば否だが。

だが、その安定状態が何時までも続くとは考えにくい。いつか派閥が通う生徒にとつての害になるかもしれないのだ。自分達が巣立った後の生徒の為に今の内から地盤を作っておくことは必要だろう。

その為にもエデン条約は締結させなければならない。これが締結されればトリニティを取り巻く環境は大きく変わる。勿論、トリニティだけではない。ゲヘナも変わる。そして、アリウスも。

憎しみ合い、嫌い合う事を止めて手を取る事ができたなら、それはきつと素晴らしい事だ。皆が望み、彼が望んだ『誰もが笑える明日』へ確かな一歩を踏み出す事ができる。

ナギサやセイアと比較すると頭脳面ではそこまで頼りない。ミカ自身、自分が割と勢い任せに生きている我儘な気分屋という自覚はある。自分が案を1日考えて出した案よりも、ナギサやセイアがその場です出した案の方が優れている事なんてさらにあった。

だが、それでも考えなければならぬ。担ぎ上げられているだけの

神輿だとしても、お飾りにはお飾りなりの仕事がある。何かのトップに立つとはそういう事。ミカにしかできない事は沢山あるのだから。

ミカはソファから立ち上がり、本棚に足を向ける。ファッション系の雑誌やデートスポーツ等の雑誌が押し込まれた下段と、トリニティで採用されている教本とBDが入った中段、漫画と小説が並べられている上段。その中に仕舞われている一冊は小説だった。彼がお勧めと言っていた本の内の一つ。シャーレの執務室でコーヒー片手に本を読む彼が妙に印象に残っていたから、柄じゃないと分かっていたけど思わず聞いてしまった。

今、手に持つ本に挟まる葉は中盤に差し掛かる手前。毎日少しずつ、彼の思い出のページを捲るように呼んでいる。今日も同じように数ページ捲り、物語を味わい、本棚に戻す。

その物語に、確かに彼が生きた残滓を感じて。



「私、聖園ミカは先生が好きです。大好きです。愛しています」

よく幼馴染が言っていた愛の話。与える愛と、与えられる愛。誰かを愛し、誰かに愛される。確かに素晴らしい事だとは思うけれど、いまちピンと来なくて。だって、愛って見えないでしょう？ 思っているだけじゃ伝わらない、言葉にしなきゃ分からない。それに、言葉にしても伝わらないことだってあるのに。

あの人は私の愛^{大好き}を受け取ってくれなかった。ただ、世界の晴れ間に目を細めるような寂しい顔をして笑っているだけ。まるで『自分には愛される資格も、必要も無い』と言わんばかりの表情。でも、想いはちゃんと分かっているから『ありがとう。でも私は受け取れないんだ。ごめんね』と言って遠ざける。先生と生徒の線引き。キヴオトスの異物とキヴオトスの生命、決して埋められない絶望的な断絶。

彼から受け取る愛は増すばかり。私の一世一代の思いは募るばかり。愛してるすら言わせてもらえない。告白なんでもっと遠い。

鈍感、意気地なし。でも、そんな部分ですら愛おしいのは惚れた弱

みだろうか。

あの人の全てに恋をしました。笑った顔も怒った顔も大好きです。優しく手を握ってくれるところ、歩幅を合わせてくれるところ、些細な変化にも気付いてくれるところ、私服で会った時は必ず可愛いと言ってくれるところ、お別れする時は絶対に『一緒に過ごさせて嬉しかった』と言ってくれるところ。全部が全部、大好きで愛しています。

だから、先生にはどうか幸せになってほしいんだ。生徒の幸せが自分の幸せって先生は言うだろうけど、それ以外の幸せも見つけてほしい。もし幸せになれないとか、幸せになる資格が無いなんて寂しい事を言うならば私が幸せにして見せるから。絶対に笑わせてあげる。世界中で誰よりも先生を幸せにしてみせる。

「私の初めて出会えた最愛は、貴方だったんだよ——先生」

雨傘の咲く6月、私は貴方に愛を送る Ⅱ

トリニティ自治区の一等地。テレビで特集が組まれているような一流の店、SNSを通して人気になった店、長く続く老舗。流行と伝統の最先端、激戦区と化したメインストリートは雨天も相まって平時ほどの人は居なかった。外まで行列ができるような店も、この天気では店内満席が精々。客足が見込めないと店主が判断したのか、閉まっている店すらあった。まだ12時だというのに。

「はあ……」

ミカは憂鬱な気分を隠そうともせず溜息を吐いて雨降らす雲を恨めしそうに視線で刺し貫く。こんな天気とはいえ折角外に出たならカフェでティータイムを楽しむか、アクセサリーショップに行つて新作を見るかしたかったのだが、行きたい店は悉く閉まっていた。冒険がてら他の店に足を運んでもいいのだが、もし外れだった場合は『雨の中外れの店に入った』という気持ちも味わってしまうため、中々足が進まない。

結局、最低限の用事は済ませたから寮に帰るという結論に至り……今は帰路に就いている。

空から零れた雫が真白い傘に跳ねて、つうと滑り地面に落下する。水滴は石レンガに跳ねて水溜りの一部に。水溜まりを踏まないように時折足元を見つつ、ヒールでトリニティの石畳を叩く。湿度を伴った冷たい風が吹くと肌寒さを感じて震えてしまう。じめじめとして蒸し暑い季節とはいえ、やはり雨は相応に気温が下がる。ノースリーブにケープ、という軽装な制服ではこの冷え込みに打ち勝つことは出来なかった。何か一枚、羽織るコートを持つてくれば良かった……なんて思うが後の祭り。今この瞬間の寒さを凌ぐために店に入ってアウターを買う訳もないし、そもそも今の時期だったらもう既に夏服に衣替わりしてアウターなんて置いていないだろう。だから、この寒さの対処法は帰宅しかない。

「うう……寒い……」

傘を持っていない方の手で二の腕を擦り、少し早足に。だけど、制

服が跳ねた水滴で汚れないように注意を払う。速く寮に帰って、お風呂に入って暖を取りたい。その一心でミカは足を進ませる。今日はお気に入りのバスボムを使っちゃおうか。こんな天気でも外出した自分へのご褒美に。

そう思うと少しだけ足取りが軽くなった。自分でも単純だと思いが、人間は楽しみがあるとそれだけで少しは憂鬱な気持ちが薄れる。

そしてトリニティ自治区の一等地に立つティーパーティー生徒専用の寮まで残り15分圏内になった頃、ミカは信号で足止めを食らっていた。通常の日常生活では取るに足らない、赤信号から青信号に切り替わるまでの時間。それがやけに長く感じるのはこの寒さに堪えているからなのか。それとも別の理由があるからなのか。

青信号に代わった瞬間、ミカは駆け出す。碌に左右を確認せずに飛び出したのはあまり褒められた行為ではないが、そもそもキヴォトスの民は車に撥ねられた程度では掠り傷にしかならない。流石に戦車やら大型トラックが時速100kmオーバーで激突してきたら話は別だが、それでも精々骨折程度。命に関わる傷なんて負う訳もない。生徒の中でも特に神秘に溢れ身体能力に優れているミカならば、寧ろ逆に追突した側がスクラップになりかねないほどだ。尤も、だからといって交通マナーを無視して良い理由にはならないのだが。

ミカは煌びやかなメイנסトリートを進む。足取りは軽やかに。雨を感じさせないほどに。まるで御伽嚢に出てくるお姫様がステツプを踏むように。

そうして、進んで。進んで。寮まで徒歩で5分の場所、閑静な高級住宅街が広がる区域に足を踏み入れた。あと少しで漸く寮に着く――なんて、思っていたのは束の間。視界の端に映った雨に濡れた白を見た瞬間に呼吸を忘れた。

「……………え？」

全身を駆け巡った驚愕の強さは人生で間違いなく三本指に入るほど。何度目を擦っても、頬を軽く抓ってもその光景は消えなかった。つまり、これは現実だという事。自分の脳が見せた都合の良い妄想じゃない。

見間違えるはずがなかった。あの姿は、あの声は、あの暖かさは記憶に強く焼き付いている。

——会いたくて。会いたくて。どうにかかなりそうなほど逢いたかった、私の王子様。運命の人

「……先生？」

手に持った傘が水溜りに落下する。それに伴い、全身に冷たさを感じる。降り注ぐ雨が容赦なく体温を奪い、体の表面を冷たくしていくが……内面だけは全く逆。熱でも出たのではないかと錯覚するほどに熱い。心臓が馬鹿みたいに高鳴って、姿を見るだけで胸がきゅつと切なく疼く。

活躍は何度も人から聞いた。ハスミ、ヒフミ、スズミ。彼と共に戦った事がある生徒達から。

トリニティにも何度か足を運んでいる事も知っていた。サクラコを筆頭とするシスターフッドの生徒達、ミネを筆頭とする救護騎士団の生徒達、それ以外にも沢山。なんでティーパーティーに来てくれたのか、と小一時間ほど問い詰めたい気がしなくもないが、正義実現委員会にも訪れなかった事から政治色の強い場所には意図的に訪れていないだけだろうと無理矢理自分を納得させて。

彼がこの世界で呼吸をしている証拠は、生きている証拠は何度も耳にしてきた。トリニティの内外問わず、キヴオトス全土で。彼が生きている、それだけで泣きそうなほど嬉しかった。

——一体どれほどの時間が経っただろうか。ミカの時が止まった秒数は恐らく60秒にも満たない時間。だが、永遠にも感じられる程に長くて。漸く思考が現状に追いついてきたころ、肌の冷たさで現実に取り戻され……そうして、改めて彼の今の状態を見た。

「……ッー」

その瞬間、落ちた傘すら拾わずに雨の中をミカは駆け出した。駆け出した先にいるのは当然彼。何度も恋焦がれた大切な貴方。

いつもなら生徒を見た瞬間に吸い込まれそうな笑顔で『こんにちわ』と声を掛けてくれるはずの彼であるが、そんな気配は全くない。彼は建物の外壁に背中を預け、手足を投げ出し、ピクリとも動いてい

なかった。項垂れた顔、瞳は閉じられ世界を映していない。

ミカは凍り付いた喉を鳴らした。瞳孔が開いて、呼吸は浅く、横隔膜が痙攣する。指先が震えるのは恐怖か寒さか。

脳裏を過った最悪の予想。彼はもう動かないのではないか。ここに在るのは彼だったものではないか……そんな考えが脳に浮かんで消えない。

彼は弱い。ミカは勿論のこと、何時も椅子に座り紅茶を飲んでいるナギサや病弱や繊細という言葉をそのまま形にしたようなセイアにすら、身体能力では逆立ちしたって勝てなかった。

セイアは『我々と彼では進化の系統樹が異なる。そもそも同じ物差いで比べる事が間違いだ。彼はキヴォトスに於いて、唯一神秘を運用できない肉体だからね』と言っていたが……相変わらず言葉が小難しく、その言葉が何を意味しているのかは分からなかった。きっとそれなりに言葉は選んでくれたのだろう、それでも難しいものは難しいのだ。

兎にも角にも、例え口径が小さいおもちゃと呼んで差支えないようなハンドガンの弾丸ですら彼の皮膚と肉を貫ける。

そして、彼は恨みを買いやすく敵を作りやすい。彼の行動の基本骨子には常に生徒がいる。生徒の為であるならば文字通り世界にすら喧嘩を売る彼に潰された悪は数知れず、その大半はいままで思うままに悪を謳歌していた報いと思わずに、自身達を叩き落とした彼の事を殺したいほどに恨んでいる。

ミカから……否、大半の人から見ればその恨みは論理性を投げ捨てた身勝手な逆恨みでしかないが、それはあくまで第三者の視点。当事者から見れば彼は敵なのだろう。弱者を踏み躪りながら甘い汁を啜っていた自分達の邪魔をした、自身達の既得権益を害する敵。そういった手合いにとつて彼を生かす理由はないし、殺すには充分過ぎる理由だった。

カイザーコーポレーション、ベアトリーチエを筆頭とするゲマトリア、無名の司祭、デカグラマトン神名十文字等の神域に在るもの。ぱつと思いつくだけでもこれだけ彼の命を奪う可能性を孕む敵はいる。どいつもこい

つも彼の命と幸福を脅かし、あの儂い横顔を翳らせる……ミカにとつて何より許し難い怨敵。何度焼き尽くしても飽き足らない不？戴天。彼が笑って生きられる世界のために必ず根絶やしにしなければならぬ。

彼に守られてばかりだった。最期の瞬間までミカは彼の前に立てなかつた。彼を傷つける悪意を前に何をやる事も許してもらえなかつた。

だから、今回こそは。彼を守る。彼を救う。誰も居ない場所で死を選ぶ彼を見殺しにしない。孤独を抱えて、痛みと共に生きる彼がいつか皆と一緒に空を見上げられるように。あの日、多くを傷つけ魔女に堕ちても尚、手を差し伸べてくれた彼を忘れない。どれほど辛い未来が待ち受けていようと彼と共に生きると決めた。

だが、そんな思いも……ミカのいない場所で暗殺という手を使われてしまえばどうしようもなかつた。

——嫌だ、嫌だ、そんなのは絶対嫌だ。折角会えたのに。漸く会えたのに。初めましても言えないでお別れなんて絶対に嫌だ。伝えたいこと、話したいこと、沢山あるんだよ？ 貴方がいなくなつた世界の話、これからの世界の話、貴方が目指した世界の形。貴方が居なくても、私は頑張つて生きたよ。貴方に託された命を大切に、繋いできた。でも、本当は寂しくて。私、本当は貴方と生きたかつたんだよ？

だから、どうか。

祈りを込めて、彼の命を確かめる指先を首に触れさせる。伝わってきたのは人の肌の温度とは到底思えないほどに冷たく、濡れた感触。どれだけ長い間、この雨に晒されたのだろう。少なくとも数分ではこうならない。彼の体温は平均より若干低い程度ではあつたが、それでもここまではない。やはり相当冷えてしまっている。

だが、それは今の本題ではない。今重要なのは———そう思ったミカの指先に脈拍が伝わってきた。次いで、気道の動き。今日の前にいる彼が呼吸をしている命である確かな証拠を見つけたミカはほつと胸を撫で下ろした。

「よかったあ……」

心の底から安心した声を漏らしたミカであったが、即座に安心している場合じゃないと意識を切り替える。今確認したのは脈拍と呼吸、つまり生きているか否かだけ。彼が意識なく項垂れている現状は一切変わっていない。首に触られても反応1つ返さなかった事から、深刻と見た方が良いだろう。以前テキストかBDのどちらかで見た記憶のある意識レベルなんて単語が脳裏でちらついた。

「先生！ 大丈夫!? しっかりして！」

ゆっくり、優しく。深海に沈んでいる彼の意識をゆっくりと水面に浮上させるように。決して体を揺すらず、肩を叩くに留める。大丈夫、彼は生きている。だから落ち着いて。

「先生！」

——焦らなくていい。大丈夫、大丈夫だから。きつとすぐ眼を覚ましてくれる。すぐ眼を開けて、宝石みたいな瞳に私を映してくれる。春のような、唄うような口調で私の名前を呼んでくれる。私を見て、宝物を見つけたみたいに優しく笑ってくれる。だから焦らなくていい、大丈夫だから。

——大丈夫、だから。

「起きてよお……先生……」

嗚咽の混じったような弱々しい声がミカの口から漏れた。嫌なビジョンは徐々にその影を強めて、彼の意識の覚醒という細やかな願いを踏み躪らんとする。漸く会えたのに。漸く話せる距離まで近づけたのに。呼吸が更に浅く、速くなって。手足が震えて。視界が滲みはじめた時。

「……っ」

「先生ッ！」

先程まで沈黙と静止を貫いていた先生から初めて反応を確認できた。僅かな身動きと喉から漏れた呼吸。震えと涙が一瞬で引っ込んだミカはそつと彼の顔を覗き込む。すると。

「……あ、れ」

その声と共に薄っすらと長い睫毛に縁どられた双眸が開かれる。世界を映す瞳。悲劇を浄化する意志の権化。小さく開いた口からは僅かに息が零れて、酸素が体を循環した。投げ出され水溜まりに沈んだ手の指先が感覚を確かめるように動き、ミカの側からは見えなかった反対側の手で顔に張り付いた前髪を邪魔そうにかき上げた。

——その仕草一つ取っても妙に色っぽく見えるのは惚れてしまったからなのか。何かいけないものを見てしまったような気がしたミカは先程から愉快な百面相をしていたが、彼の傍だという事を思い出し即座に表情筋を固める。

好きな人の前では可愛い所を見せたいのが恋する乙女の心というもの。決して愉快は表情変化を見せたい訳じゃないのだ。彼ならばそれすらも『ミカらしいよ』よ言ってくれる気もするが、それはそれ。複雑怪奇で、単純で、それでいてちよつと面倒な等身大の乙女心だ。

「……」

件の先生はミカがすぐ傍に居るなんて知りもせず、冷静に全身を蝕む激痛を噛み締めながら状況把握に努める。

濡れているのは雨の所為。寒いのは雨に身を晒していた所為。激痛は後遺症。最後に見た景色と今の景色は変わらないから、場所の移動は発生していない。狙撃を防いだ後、無理が祟って意識を失っていたのだろうと当たりをつける。

——なんともまあ、情けない。病み上がりで、後遺症もあるとはいえ対物ライフルの弾丸一発防いだだけで意識を失うなんて。この体の脆さには辟易する。

変色した虹彩を誤魔化すためのコンタクトに仕込んだオルタナティブで現在の時刻とシステムの箱のバッテリー状態を確認。時刻は最後に確認したのから1時間弱進み、バッテリーは2%減少し現在64%。モバイルバッテリーもあるため、今後の活動には大きな支障はない。いざとなればクラフトチェーンバーにもストックしてあるものを使えばいいだろう。

時間を無駄にしている余裕はないのだ。一分一秒が惜しい、とまではいかないが、それでもある程度切り詰めなければ今後の活動に影響

が出る。片付けようと思っていた外回りの仕事のプライオリティは然程高くないが、問題は観測した神秘の揺らぎの方。アレは最優先で確認しなければならぬ。

——トリニティ自治区の未確認領域内での、聖典の起動。

ミカが掴みアズサやアリウススクワッドに流した情報はキヴォトス全域で活動する彼も掴んでいた。それも、ミカよりも更に精度が高く詳細な情報を。

それは彼が持つ独自の情報網から齎されたもの……などではない。ただの直感。何度も死線に生き、何度も悪意と対峙してきた事により鍛え上げられ、過剰に研ぎ澄まされた直感が、凡ゆる論理を超えて『聖典の起動』という解を導き出した。

その速度はシツテムの箱とほぼ同等。生身でキヴォトス最高のオーパーツに匹敵すると思えば彼の異常性もよく分かるだろう。キヴォトスに於ける最大の不明点にして現実に空いた虚空ヴオイドと彼を称したキヴォトスの天才達は何度も彼の特異性を見てきたからこそ、そう形容した。彼女達は彼が単純な頭脳の良し悪しでは測れない、正に外れ値とも呼べる場所にある事を正確に見抜いていたのだ。

彼は徐々に明晰になる頭で思考を回す。

起動されたものは聖典で間違いない。それは彼とアロナが何度も確認したため決定事項だ。聖典は最大出力を抑えた代わりに扱いやすく最適化したアーカイブ形式のもの。現在進行形で信仰と神秘が積み重なる原典や原本ではない。

だが、そのアーカイブは偽典と呼んで差し支えないほど起動者の手により恣意的に歪められている。しかも、歪めた方向性も最悪だ。直接確認しない事には分からないが恐らくは悪性情報の塊になっているだろう。精神汚染対策のプロテクトを施していないと一瞬で発狂し、廃人になるほどには。

最後に、聖典の所属先は——

ゾロアスター
拝火教。

——この誰だかは知らないが、本当に厄介で面倒な事をする。アヴェスターの偽典、悪性情報の塊を未確認領域とはいえ生徒のいる学校自治区内で起動するなんて。

考えられる候補としてはベアトリーチェが最有力。彼女の根城はカタコンベから通じるアリウス、つまりトリニティの地下だ。入手した経路は不明だが、黒服かゴルゴンドア辺りが斡旋したのだろうか。マエストロの線も考えられるが、彼の持つ芸術性とベアトリーチェの主義主張は相性最悪のため除外。ベアトリーチェ自身が見つつけて、実験がてら起動させた可能性もあるだろうか。

第二候補は無名の司祭。起動場所に態々トリニティを選んだ理由は不透明になるが、入手経路は想像しやすい。大方、前文明の遺産から引つ張り出したのだろう。目的は恐らく報復。黒服に数名、先生の手によって3名が終了させられたのだ。アレの間に仲間意識があるかは知らないが、復讐するには充分な理由になる。

——何方にせよ、どんな経緯と目的があるに関係せず、この問題は生徒の手に負える範疇を大きく超えている。先生が動き、情報を集め、対策を練らなければいつどんな『詰み』が訪れるか分かったものではない。

だから、さあ。もう少し、この冷たく軋む体に鞭を打って前に進もう。そう思い手と足に力を入れて立ち上がろうとしたのだが、羽根のような軽い感触が彼の肩を抑えつけた。

「まだ動いちゃ駄目だよ、先生」

隣から聞こえた声は聞き覚えのある声^{初め}。自分は知っている、覚えてい、分かっている。この声の持ち主を。

気分屋で、お転婆で、天真爛漫。思慮深いと思えば肝心なところで行き当たりばったりで、一度動いてしまえば止まらない危うさを持っていた。多くを裏切り、多くを傷つけ、多くに奪われ、多くに傷つけられ、多くを許し、誰かの為に祈りを捧げた少女。友達が好きで、可愛いものが好きで、おしゃれが好きで、甘いものが好きで……ただの17歳の女の子。

ころころと変わる表情。鈴が鳴ったような声。琥珀のような金色の瞳が綺麗で。本人の意志とは関係なく。パタパタと揺れる翼が何とも可愛かった。そして、その心も。

——こんな自分を、こんな私を『好き』と言ってくれた健気な

君の事をまだ覚えている。エデン条約とその後にあつた儀式阻止作戦の後始末も終了し、ミカ自身も落ち着いてきた頃、彼女に『遊びに行こう』と誘われて。そうして1日楽しんだ後、別れ際に呼び止められて、告げられた言葉達。胸の内から溢れる思いを必死に声にして、どうにか届いてほしいと健気に祈るミカを見ても……私は、何も。

最後、『重荷になりたい訳じゃないの。ただ、先生に伝えたくて』と言つて背を向ける彼女の瞳が濡れていたのはきつと見間違ひじゃない。返事はいらぬよ、と言つていたのはきつと精一杯の強がり。好きな人の前でカッコ悪い所を見せたくないという彼女のいじらしい恋心の発露。

何も言わなかつた。何も言えなかつた。何かを言う権利は既に剥奪されていた。人並の幸せも何もかも、全て捧げた。生徒の未来の為に、自分を薪に焚べた。この生は誰かの為の生だ。それは裏切れない。それを裏切る訳にはいかない。自分に後を託してくれた彼女の為にも。

自分が今ここでミカを選んだら、目元を擦りながら遠ざかつていくミカを呼び止めたら……今までの全てを裏切ることになる。自分が幸福になる事を肯定してしまう。誰かの為の先生でなくなってしまう。

今まで踏み潰した幸福を忘れるな。今まで見殺しにした人々を忘れるな。今まで殺してきた世界を忘れるな。己の罪深さはよく分かっているだろう。キヴオトスの異物がキヴオトスで幸福になっていいはずがない。この世界は彼女達のものだ。

だから———そう思つて、無理矢理自分を納得させて、この痛みがミカの想いの証明だと信じて呑み込んだ。ミカが伝えてくれた想いを抱えて生きると誓つた。この先、誰も選ばない事をミカに契つた。それが返事を言わなかつた自分が出来る唯一の贖罪だと信じて。

———結局、自分は何もしてあげられなかつた。一世一代の、勇気を振り絞つた告白だつただろうに。彼女の想いを受け入れることも拒絶する事もできずに。逃げを選んだ。視線を逸らした。真つ直ぐ己を見つめる彼女を直視できなかつた。

あの時、自分はどうするべきだったのか。どの選択が正解だったのか。もう戻れないと誰よりも知っていたながら、今でも偶に考えている。想いを伝えてくれたあの少女はもう何処にもいないというのに。

ミカの気持ちを受け止め、受け入れ、彼女の恋心に応えるべきだったのか。己の人類証明を否定するとしても、ミカが愛してくれた一人の人間として彼女の手を取れば。彼女の隣で、違う人類として歩んでいければ何か変わったのか。少しずつ自分を許して、自分を愛していければ、いつか皆と一緒に空を見上げられたら。あんなに遠かった皆に少しでも近づけたなら。

それはなんて——羨ましい。

自分が幸福になることなんて許せる訳がない。こんな自分よりももつと幸せになるべき人がいる。幸せになりたかった人がいる。だから……だから？

そんな御託を並べたところでミカの気持ちを踏み躪った過去は変わらないのに。

血を吐くような自嘲、自分の心を切り刻む。痛みを新たに顔を上げた。

天幕の様な白は飾られた翼。多種多様なアクセサリーの表面に水滴が付着していて、この翼が自分を雨から守ってくれたのだと今更ながらに思う。

綺麗に手入れされ、切り揃えられた桃色の長い髪。座り込んだ先生と視線を合わせる様に屈んだ体。金色の瞳は心配そうに彼を見つめていて、中途半端に伸ばされた指先は彼女の複雑な内心を投影する鏡のよう。

どこを切り取っても、どこを見ても、自分が知る彼女そのまま。大切な、本当に大切な——私のお姫様。

「……君は」

「初めまして、先生。私は聖園ミカ、よろしくね」

「こちらこそ宜しくね、ミカ」

ふわりと微笑む彼。天使の羽が空から落ちたような、春の花が咲いたような。そういった麗かさや美しさを思わせるからの笑みはミカ

が知るものと全く同一。彼は誰かを見つけた時、いつもこういう風に笑っていた。出会えたこと、巡り会えたことに対する喜び。

彼の口から、彼の優しい声で、心底大切そうに「ミカ」と名前を呼んでくれた。口遊ぶように、愛しい2文字を噛み締めるように。それだけでミカは嬉しかった。栓が壊れたみたいに感情が心の奥底から止めどなく溢れてきて、現在進行形で雨に濡れているにも関わらず暖かくなる。頬が熱を持ったように火照って、顔がにやけそうで、溢れる想いのまま直情的に彼に抱き着きたくなるが……ぐつと我慢。彼に変な子とは思われたくない。

ミカは内心で『私、こんな単純だったかなあ』と思う。彼が関わるといつもこう。元からティーパーティーやトリニテイらしい権謀術数は得意分野から離れていたけれど、それでも感情を隠してアイズブレイクの要領で建前を話す事は人並に出来た。そうでなければティーパーティーの一員になる事は出来ないのだから。

だが、彼の前だと建前も虚飾も何もかもがぼろぼろと？がれていく。ティーパーティーの一人とか、パテル分派のトップだとか、トリニテイ総合学園の生徒だとか、そういったものを全部無くした、唯の聖園ミカを見てほしくて仕方なくなる。貴方の眼に映る私を問いかけたくなる。

だけど、今は何より彼が大事。だから、「それよりも！」と言って自分の意識を強制的に切り替えた。

「大丈夫？ 痛い所とかない？ 倒れてたからすっごく心配で……あ、待ってて、すぐ救急車呼ぶから！」

「大丈夫だよ、ミカ。心配させちゃってごめんね」

スマホを取り出したミカをやんわりと静止して、壁に凭れ掛った背を少し起こす。その後、片手で畳んでいたコートを手繰り寄せ、内ポケットを弄り目的のものがある事を確認するとミカの方を見て。

「ミカ、ちょっと後ろ向いててくれるかな？」

「え？ うん、うん……いいけど……」

若干訝し気にしながらも背を向けた事を確認した先生は音を殺して懐から注射器を取り出す。針が無いタイプのそれを首筋に押し当

て、親指を跳ね上げてセーフティを解除。そのまま中の劇物を注入しようと思先指先に力を入れた。カシユ、と空気の抜けるような音が響いたと同時に――先生の手元から注射器が吹き飛んだ。

疑問に思う暇はおろか、反応する時間すらない。認識した瞬間には手が明後日の方向に弾かれ、注射器が手元から離れていたのだ。少し離れた場所で甲高い落下音と破碎音が聞こえる。

首の皮膚の上を薬液が滑り落ちる感覚も、体内に入り損ねた薬剤が化学的な香りを放ち気化する感覚も。その全てが何処か遠い。先生は驚きと後悔、それから少しの安堵を抱きながら……肩で息をするミカを見た。

「……駄目だよ、先生」

特有の空気が抜ける音が耳に届いた時、ミカは生きてきた心地がしなかった。彼の体内に薬液が入る前に弾けたのは奇跡に近かった。

……分かっている。こんな事をしても彼の苦しみを和らげることができない。今苦しむ彼から縋れるものを奪っただけだと。

だけど、あれは遅効性の毒なのだ。一見、何かを癒やす薬に見えるだけの張りぼてに等しいその場凌ぎ。使った瞬間は楽になるけれど、その安らぎの対価を後になって数倍増して請求するインスタントな救いに手を伸ばす彼をただ見ていられる訳が無かった。

「そんなのを使い続けると、いつか本当に壊れて人間じゃなくなっちゃおう」

誰も見ていない所で血を吐く彼を。時折見せた線香花火のような顔も。デスクの引き出し、二重底の下に隠した……生徒宛ての遺書も。どれもこれも、彼が『ヒト』としての終わりを悟った時から露になったものだった。

「ね、一緒に救護騎士団の所に行こう？」

それは、と先生の思考が回る。ここで救護騎士団と関わるのだけは不味かった。外見は兎も角として中身は全く以て完治していない。彼女達ならばこの程度の偽装は容易く突破する。見つかったら間違いないく3ヶ月ほどベッドに縛り付けられ、諸々のスケジュールが遅れてしまうだろう。

ベアトリーチエを含む彼の敵が本格的に動き出すエデン条約締結前に、それだけ遅れてしまうのは流石に看過できない。戦局を決めるのはスピードと事前準備だ。よいドンでやったら確実に敗北するのは見えている。だから、無理を承知で、体を引きずってでも動けるうちに動いておかなければならない。故に救護騎士団の元へ行く訳にはいかなかった。

気遣いを無駄にしない穏便な断り方を必死に検索していると、痺れを切らしたミカが少し言い難そうにしながら。

「どうしても聞けないなら……」

「聞けないなら？」

「わ、私が先生を看病する、よ……？」

歯切れの悪い、最後に至っては殆ど雨音に消されて聞こえなかったミカの言葉であるが、先生の耳には一言一句きちんと届いていた。どうやら救護騎士団の元に行かなければ誘拐され、彼女の下で看病されるらしい。

様々な考えが頭を擦過する。ミカと救護騎士団。自分のこれから
の予定はどちらを選んでも崩れる事は間違いないけれど……自分を
想ってくれたミカにこれ以上悲しい顔をしてほしくなかった。それ
に、今現在この体は動きそうにない。全く、儘ならないものだ――
―そう思いながらも、悪くないと思ってしまう自分が何処かにいた。
だから。

「……分かったよ、ミカの好きにして」

彼はそう言い、少し柔らかく微笑むと……ミカは大きな瞳を数回瞬
かせて。

「……へ？」

なんて、気の抜けた声を漏らした。

雨傘の咲く6月、私は貴方に愛を送る Ⅲ

ミカが彼に『要求を呑めないなら悪い子先生を攫うになる』と言ったのが大体1時間前。先生がそれに対して『それでもいいよ』と言ったのが同じく1時間前。

ミカの想像上では、彼は『ミカに攫われる訳にはいかないな』と言って救護騎士団の元に行くはずだった。ミカの知る彼ならば多分そうすると思っていた。そして、救護騎士団本部に向かう道すがら彼とお話できたら嬉しいな、とか。相合傘なんて出来たら幸せだな、とか考えていたのに。

予想に反した彼の返事が聞こえた時、ミカは条件反射的に聞き間違いだと思った。自分の恋は遂に都合の良い想い人の幻聴すら伴うようになったのかと戦慄した。

昔、愛すべき親友に「ミカの頭には砂糖が詰まってそうだね」と言われた時は少し……いや、普通にムカついたが、彼女の人の見る眼は確かだったと言わざるを得ない。非常に不本意であるが、現状を鑑みて尚『砂糖なんか詰まってない』と返せるほどの胆力はないのだ。

ミカは『先生に会えたことが嬉しすぎて現実と妄想の区別がつかなくなっちゃたか……』と自分のアレさにげんなりとしながら、それでもなんか妙な引つ掛かりを覚えて、『まさか幻聴じゃない?』と思つて視線を下げると彼と眼が合った。

苦笑いする彼の「私を攫つてくれるんじゃないのかい?」なんて誘うような蠱惑的な言葉にくらりと頭が熱くなった事はちゃんと覚えていて……それからは記憶がぶつ切り。

——雨に濡れた彼の冷たい手を引いて、ダツシユで寮に駆け込んで。お互いずぶ濡れだねと笑い合いながらタオルで拭いて。風邪を引いちや不味いからお風呂入って、と彼を浴室に押し込もうとしたら華麗に躲かれて何故か私が先に入る事になって。スキンケアもドライヤーも終わり、部屋着に着替えた私と入れ替わる形で、彼は現在進行形でシャワーを浴びている。私が入った後の浴室で。

「どうしようどうしようどうしよう……！　なんか凄い事になっちゃった……！」

顔が熱くて、心臓が馬鹿みたいに高鳴っていた。ミカが日常的に過ごしている場所で、ミカが使った後の浴室で、彼がその身を晒してシャワーを浴びている。考えれば考えるだけ訳の分からない状況だ。

ミカが彼を自室や寮に招いたのはこの世界では当然これが初めて。今までも含めるならもう少し増えるが、それでも両手で数えられる範囲を超える事はない。これは彼女が特別ではなく、他の生徒もそうであり、殆どは彼を自宅に招いた経験なんて無い。仮にあったとしても何か特別な事情があった際の一回きりで、ミカのようにプライベートかつ複数回ある方が例外だ。

——まあ、先生が積極的に生徒の家に行っているなんて聞いたらちよつと引いちやうけど……。

兎にも角にも、彼はやむを得ない状態でない限り、生徒の自宅に足を踏み入れる事はなかった。それは生徒のプライベートを尊重する、といった意味合いも勿論含まれているのだろうが、ミカにはそれ以外の意図も含まれているような気がした。例えば、『先生じゃない自分を生徒の前で大っぴらに出さないため』とか。

彼はガードが硬い。隙を見せることはあっても、それは見せても良い半ばブラフのような隙だけ。彼の核心に迫る様な本当のウィークポイントには絶対に迫らせてくれる事はなかった。

人付き合い、生徒付き合いもそれは同じ。生徒を愛し、生徒を信じ、生徒の幸福を心から願っている。そこに嘘偽りは全くない。言葉を交わし、時間を交わらせ、絆を深める。互いを知り、良き関係であるうとする。頑張り過ぎる子には安らぎを、自分を卑下する子には絶対的な肯定を、暖かさに触れて来なかった子には無条件の優しさを。

生徒の事を誰よりも愛していた。この世界の救いのないシステムに誰よりも激怒していた。誰よりもこの世界で生きるといふ事と向き合っていた。何処にも同胞が居ないキヴオトスで、皆と同じ人類として生きようとしていた。生徒を教え、導き、守り、救い、共に歩く先生として。

故に彼は何処までも先生だった。キヴオトスという世界の中で彼は先生以外である事を許されなかった。彼だって同じ人間なのに。誰かを愛して、誰かに愛される人間なのに。世界はそれを決して認めはくれない。

そして、彼自身もそれを認める事はなかった。誰かに弱さを見せる事はせず、常に仮面を被り続けて。先生じゃない一人の人間としての『彼』なんて殆ど何処にもなかった。取るに足らない日常の中、一瞬だけしか『先生じゃない彼』は存在しなかった。

思うに、彼は怖かったのだと思う。生徒の前で自分を晒す事が。もう空っぽになって、語る物が無くなってしまった虚構の自分を生徒に見せる事が。今更、そんな事で幻滅する訳ないのに……なんて思っても、ちゃんと言葉にしなきゃ分からない。思っているだけでは誰も分かってくれない。言葉を交わす事の大切さは色々な人が教えてくれた。

——だから、ちゃんと話さないで。話したいことがいっぱいある。彼と育んだ思い出。見知った見知らぬあなたへ贈る数多の言葉、確かな煌めき。眼を閉じながら星の虚に堕ちる貴方を涙と共に見送った私が生きた証。

どれもこれも彼が知らない事、覚えていない事。私が知ること。私が覚えていること。もし貴方が私と同じように覚えていたら、とは思うけれど……彼が覚えていたらそれは唯の悲劇になってしまう。彼の記憶には確かに楽しいものがあっただろうが、その何倍も辛い事があつて苦しい事があつた。

だから、彼は覚えていない方が良い。その方がきつと彼は笑える。彼は幸せになれる。思い出を話せないのは確かに悲しいけれど、それでも大丈夫。これからもつと沢山の思い出を今此処に居る彼と共に作ればいい。彼の今までの苦しみをすら全部笑い飛ばせる様な大きな幸福を。貴方は愛されて此処に居ると、抱えきれない花束と、それに負けない私の全てで伝えたい。今度は振り向いてくれるのかな。

「なんて、ね」

きつと振り向いてくれないんだろうな。だって彼は先生だから。

彼は皆の先生だから。誰かの為に頑張れる人だから。でも、それでいい。あの人を想っている、それだけで私はいい。この想いを口にしながら、くても、伝えられなくても、この想いに彼が永劫応えてくれなくても、それで。だって彼が振り向いてくれないからといってこの想いが無価値になる訳じゃないでしょう？ 別に返答が欲しくて、想いに応えてほしくて、愛してほしくて彼を思っているんじゃない。ただ彼を愛した。彼を好きになった。彼に屈託なく笑ってほしくて、皆と一緒に生きてほしくて、幸せになつてほしくて祈りを捧げた。だからこの恋はどんな形であれ彼が幸せになつてくれれば報われたも同然だ。

—— 勿論、この想いに応えてくれて、私を選んでくれたら本当に嬉しいけれど。それこそ、死んじゃうくらいに。

「緊張する……」

何に對しての緊張かはミカ自身も分からない。だけど、緊張する。心臓は鳴りやまないし、変な手汗に気付くたびに手を洗っているからふやけ始めていた。素足のまま履いたスリッパをパタパタとさせ、お気に入りのクッションをぎゅつと抱きしめてソファに深く沈む。落ち着かない。まるで自分の部屋じゃないみたいだった。

彼が家に来ても基本的にテーブルでお茶菓子を食べながらティータイムを楽しんだり、取り留めのない雑談をするだけで、それ以上の事は何も無い。一回だけ余りにも寂しくなつてしまい、彼を閉じ込めて一夜を共に過ごしたが……その時は彼も「こんな事したら駄目だよ」と珍しく怒っていたし、怒られた手前彼に近づく事もしなかった。「うう……」

今度はスリッパではなく翼をパタパタと揺らす。ミカの脳内検索履歴は『お家デート』の文字列で一杯になりショート寸前。作法も何もかも全然分からないし、何段が必要な段階をすつ飛ばしている気がする。そもそもこれはお家デートかすら定かではない。でも、これを単なる雨宿りと言われたらなんか違う気がする。

遠く聞こえるシャワーの音。自分以外の、彼が浴びるシャワーの音。別に聞き耳を立てるつもりはなかったが、意識から外そうとすればするほど逆に意識してしまつて耳から離れなくなってしまう。

シャワーを浴びる彼。少し伸びた髪を滴る水滴。世界を映す万華鏡のような瞳と涼やかな目元、長い睫毛、通った鼻梁、色素の薄い小さな唇、イヤリングやピアスが良く似合う耳。ほっそりとした首。夏場に時折シャツツから覗いていた鎖骨。しなやかだが筋肉の存在も感じる中性的な腕。羨ましいほど長く細い足。ちゃんと食べているのか心配になるほど細身の体。割れている腹筋。

……と、そこまで考えてミカは脳内に発生した煩惱を振り払う。
「私、そんな子じゃないのに……」

ミカは『こういう妄想はコハルちゃんの専売特許なのに』と彼女に對して若干失礼な感想を抱きつつ、ころんとソファに横たわる。トリニテイの何処かから可愛らしい小さくしゃみが聞こえた気がするがきつと気のせいだ。

ミカは壁掛けの時計を見る。夜と呼ばれる時間まではまだ遠い。そして、雨が止むのもまた遠い。雨の中彼を帰らせる訳にはいかないし、このまま彼には晴れるまで此処で休んで貰おう。きつと連日働きたげなしで、碌に休めていないだろうから。

ミカが使っているベッド……は流石に恥ずかしすぎて貸せない。雨の日以外はお日様に当てているが、それでもきつと匂いが染みついていいるだろうから。来客用のマットレスか何かあれば良かったのだが、生憎と持ち合わせはないし今から買ってくるわけにはいかないため、ソファのリクライニング機能を使って簡易ベッドにしよう。一応、品質は最高だから仮眠を取るのには充分だろう。それにブランケットがあれば完璧だ。

早速準備をしないと、と思いミカは立ち上がる。収納の扉を開けて丁寧に畳まれたブランケットを取り出し、念のため顔に近づけて鼻を小さく鳴らす。数日前にお日様に当てた記憶があったため大丈夫だろうと思っていたが、やはり防腐剤等の化学的な香りはしない。

ブランケットをソファの上にそっと置き、枕代わりになりそうな適当なクッションを添えて寝具関連の準備は完了。ミカはそのままキッチンの方に向かい、ハーブが入っている缶とティーポット、ストレーナー、銅製のケトル、2人分のティーカップとソーサーを取り出

す。

どうせ休むなら彼にはしつかりと休んで貰いたいのだ。彼の多忙さを鑑みるにこの先も長時間のお休みは取れないだろうから、質の方を拘ろう。ハーブティーで心身をリラククスさせ、良い寝具で効率的に脳と体を休ませる。そうすれば短時間の休息でも疲れはそれなりに取れるはずだ。きつと彼は仕事しながら机で寝落ちしているだろうし、こうして無理矢理でもいいから休める環境を作ってあげないと。

ケトルにミネラルウォーターを注ぎ、コンロに火を点けて沸騰を待つ。沸騰したお湯をティーポットに入れて温まるのを待ちながらケトルに再度ミネラルウォーターを注ぎ、ハーブとティーカップの準備をして……ふと思う。

「なんか、同棲しているみたい……」

シャーレのオフィスで当番として彼と働いたり、ミカの自室で遊んだりするのは違う。彼の生活ルーティンの一部がミカの部屋で行われているのだ。決して交わる事が無かったはずの2人の別々の生活、それが彼女の部屋を交差点として交わった。そう考えると少しだけ吐息が熱を持ったような気がして、シャワーの音が雨音を打ち消す。

多分……いや、絶対にこんなチャンスは二度とない。そう考えるともう少し踏み込みたい。もう少し彼に近づきたい。彼と一緒に過ごしたい。具体的にはもうあと1日くらい。そうすれば彼も纏まった時間彼も休むことができるしミカも彼と一緒に居られて嬉しい、正にWin-Winの関係だ。

けれど、流石に彼を泊める訳にはいかない。シャーレの外に泊まる場合は彼にも色々と準備があるだろうし、何よりミカの心臓が持たないのだ。明日の朝まで彼と一緒に居ると一日の幸福の摂取量を容易くオーバーしてしまう。

だから今日の幸せはこれで充分すぎるくらい……何て思っていると『ミカさんは肝心な所でヘタレですから』と愛すべき幼馴染が脳内で紅茶を飲みながら鼻で笑った気がするので、次会った時はロール

ケーキを口に突っ込んであげよう。いつもやられているのだ、これ位の意地悪は許してほしい。

少し雨脚の弱まった外を眺めながら、ミカは浴室に繋がる扉に視線を送る。

「先生、大丈夫かな……何もないと良いけど……」



上部に固定したシャワーヘッドから降り注ぐ、人肌程度のお湯。それは先生の体を伝い、汚れと冷たさを洗い流し、床を滑って排水溝に流れ込んでいく。人工皮膚の下に隠した数多の傷跡、烙印。欠けた足の指。虹彩を誤魔化すコンタクトレンズも外しているため、今此処に居る彼は一切の偽りを取り払った状態。傷つきながらも確かに歩んできた証拠が全身に刻まれている。

それに僅かな感傷を抱きつつ、彼は浴室内に持ち込んだシツテムの箱に小さく語りかけた。

「アロナ、バイタルの表示をお願いしてもいいかな？」

『はい！ 少し待っててください、先生！』

アロナがフォルダの中からデータを探している間に、少しだけシャワーの勢いを強める。それで以て自身から流れ出た血の臭いを洗いつつ、完全に消えた頃を見計らってシャワーを止めた。

『全体的に機能は低下しています。特に酷いのは呼吸器系、循環器系の2つです。原因は恐らく……』

「^あケイと戦^のった時に流入した神秘、か」

『はい。血液と共にナノマシンが流れ出てしまったので、神秘の解毒スपीドが通常時よりも大幅に下がっていました……ごめんなさい、アロナがもつとちゃんとしていればこんな事には……ッ！』

「アロナの所為じゃないよ。気にしないで、つてのは無理だろうけれど……どうかこの事で自分を責めないでほしいな」

そう言って笑いかけると、アロナは落ち込みシユンとした表情を少しだけ和らげた。影のある笑みは彼が望んだものとは少し離れてい

るが、それでも先ほどの物よりもずっといい。彼はアロナの頭を撫でようと思ったが、自分が濡れたままだった事を思い出して留まる。シツテムの箱は当然防水だが、防水だからといって濡れたまま少女を触って良いわけがないのだ。

彼は音声認証を使用してシツテムの箱からクラフトチェンバーにアクセス、ストックしてあるバスタオルを顕現させ体の水気を拭き取っていく。身体の水気を取り終わったらシツテムの箱を持ち、浴室を出てからクラフトチェンバー内のアイテムから黒のスラックスとシャツ、ベルト、下着や靴下、人工皮膚一式を選択して出現させた。『呼吸器と循環器の機能が落ちているので、今までと全く同じように先生の体は動きません。息切れや動悸、眩暈、酸欠は起きやすくなっています。なので、長距離の徒歩移動と階段は可能な限り避けてください』

「長距離の徒歩移動が制限されるとアビドスが困るな……クラフトチェンバーにバイクと車をストックしておかないと。あとは顕現物資の格納も、か」

『そうですね……テイラーメイドで作った特殊な仕組みがある物資なら格納までワンセットで出来ますが、それ以外となると現在は軽い質量のものしか格納できませんので……これはアロナが調節しておきます！』

「ありがとう、お願いするね」

『はい！ アロナにお任せください！』

先生は軽くストレッチをして体を伸ばしながら傷跡に人工皮膚を張り付けていく。それが終わり、特に違和感のない綺麗な状態の肉体に戻ったらコンタクトを付けてから衣服を纏う。下着を着て、スラックスを履き、ベルトを締めて、シャツを羽織って第一ボタンから下を閉めれば着替えは完了した。雨で汚れた服をクラフトチェンバー経由でシャーレ地下に転送しつつ、彼はシツテムの箱に表示されている自身のバイタルを眺める。

「血液中の白血球、赤血球の数も減少傾向。メラニン色素も減少しているのか。五感も全体的に鈍くなっている……運動機能も落ちてい

るから無茶を通しにくくなってるな。今まで以上に限界ラインは注意して見極めないと」

『それも大事ですけど、体重にも気を付けてください！ 初めてお会いした時から10kgも落ちちゃっています！ ご飯はちゃんと食べてください！ フウカさんやルミさんに連絡しちやいますよ!?!』
「耳が痛いなあ」

彼は苦笑いしながらバイタルを確認していく。残りの部分は特別大きな問題がなかったり、そもそも既知の問題だったり、或いは前回見たした時から変わっていない部分だったため確認は直ぐに終わった。長いようで短い、楽しかったこの旅路も少しずつ終わりに近づいている事を改めて実感した彼は少し寂しそうに微笑む。

もう直ぐこの旅は終わる。この生は終わる。皆とは二度と会えなくなる。先生はキヴオトスの内海で眠るように息を引き取る。この魂は何処にも行けなくなる。寂しいとは思うけれど、それでも自分が納得して進んで来た道だ。後悔はないし、怖くもない。

—— 私は、12^運 / 25^命を迎えられるのだろうか。

そんな感傷を抱いたが、即座に振り払う。迎えられるのだろうか、ではない。迎えた上で運命を超えるのだ。

彼はアロナに「ありがとう、また後でね」といって頭を撫でてからシツテムの箱をスリープモードにする。それから大きな姿見に映る自分を眺めて……一歩近づく。

「……言われてみれば、ちょっと白くなったかな」

確かに、記憶よりも少し肌が白くなったかもしれない。だが、あくまでその程度。明確に色が落ちている訳ではないから、以前の彼と見比べないと分からない差異だ。少なくともひと目みただけで気付かれるような劇的な変化ではないから、一旦は無視していいだろう。対策は変化が眼に見えて分かるようになってからで充分だ。

彼は忘れ物や浴室に汚れが無いか改めて確認してから電気を消し、シツテムの箱を持って——ドアを開けた。



ティーポットが十分に温まるまで待つている時、がちやり、とドアの開閉音が聞こえた。途端ミカの背筋がピンと伸びて、その拍子に手先に振れたティーカップとソーサーが音を鳴らす。

開いたドアの先にはシンプルなスラックスとシャツを纏った彼。シャーレのロゴや連邦生徒会特有の刺繍が施されていない事から、恐らく彼の私物だろう。私服にしては少しかっちりし過ぎていると普通の人は思うかもしれないが、ミカはこういう服が一番彼に似合うと良く知っている。ストリートやカジュアルも彼には似合うが、一番はこういう少し綺麗なフォーマルチックな服装だ。

ミカは『また先生とショツピングに行つて着せ替え人形にしたいな』と考えていると、彼は近づいてきて。

「シャワー使わせてくれてありがとう、迷惑かけちゃつてごめんね」「ううん、全然！ それに、あんな所で倒れてる先生を放つておけないし……」

「そつか……ミカは優しいね」

その言葉一つで舞い上がるほど嬉しくなる。優しい声が堪らなく好きで、その声音で名前を呼んでくれるのが本当に愛しくて。上機嫌になる自分の単純さに呆れて、でもこんなになに幸せならそれで良いかと思つて。そこでミカは彼の髪がまだ湿っている事に気が付いた。

「あれ？ ドライヤー使わなかったの？ 置いてあつたはずだけど……」

「いや、流石にミカの私物を使うのは気が引けてね……」

「変なの。もうここまで来ちゃつたらドライヤーの1つや2つじゃ変わんないよっ……」

「ふふっ……確かにそうかもね」

その苦笑いを肯定と受け取つたミカは「ちよつと待つて！」と言ひ残し浴室に入り、数秒後にドライヤーと櫛数本、ヘアオイルを片手に戻つて来た。

「私が乾かしてあげる！」

「え、つと……ミカ？」

「遠慮は無しだよ、先生！」

やけにハイテンションなミカに手を引かれる。何か言う間もなくドレッサー前の椅子に座らされれば、ミカの手が彼の髪を触っている。顔を赤らめながらも、楽しそうな表情で。

「先生って案外お手入れちゃんとしてるんだね。全然痛んでないもん。てつきり忙しくてやる時間が無いタイプだと思ってたのに」

「忙しいのはそうだけど、職業柄人前に立つ機会が多いからね。身だしなみはちゃんとしないと」

彼は「それよりも」と一旦言葉を区切って。

「態々こんな事をしてくれなくても……」

「ううん、私がやりたいからやってるの。それとも、先生は私に髪を触られるの……嫌、かな……？」

「そっか……じゃあ、お願いしようかな」

その言葉にミカは空が晴れるような笑顔を浮べて、櫛とドライヤーを手に取る。

「うん！ 任せて！ とびつきりカツコよくセットしてあげるから！」

———こんな幸せな時間がずっと続けばいいのになあ。

ミカはそう思いながら、彼の髪に櫛を通した。

雨傘の咲く6月、私は貴方に愛を送る IV

ドライヤーの熱風で水気が飛ばされた髪が靡く。変な癖がつかないように丁寧に櫛を通すミカの手つきは真剣そのもので、一切の妥協を許さないと言わんばかり。自身の髪を手入れする時と同じ位に丁寧に男の髪を触るミカの天職は美容師だろうか、なんて下らない事を考えて……鏡越しにミカを見る。

彼女はとても楽しそうな表情。目が合うと見惚れそうなほど綺麗な笑顔で先生を見て、また髪を手入れする。男の髪なんて触っても何が楽しいのかさっぱり分からないが、楽しそうなミカに水を差すつもりもないため彼女が満足するまでこのままで良いだろう。元より『人前に立てるような姿形』を保つこと以外に大きな拘りはないのだ。それに、楽しそうなミカの顔を見るだけで此方も嬉しくなってしまう。だから、もう少しだけこの笑顔を特等席で眺めていたい。

———それにしても、何故ここまで彼女は親身になってくれるのだろうか。ミカとはこれが初対面。この場以外で言葉を交わした記憶も無ければ会った記憶もない。ティーパーティーと書類上のやり取りは行っているが、その相手も大体がセイアかナギサで、ミカの名前で提出された書類は記憶に在る限り無かったはずだ。

加えて、ヴェリタスやアコが言っていた『ミカが先生に入れ込んである』という情報。この情報が齎されたのはアビドスに居た時期、つまり彼がキヴォトスに来てから日が浅い段階だ。その段階ではミカは勿論、ティーパーティーとの交流は今よりも更に少なかった。精々、ヒフミがナギサにカイザーの件でシャーレの名前を出した程度。接触と呼べる接触は皆無だ。あとは会談の申し出がティーパーティー3名の連名であつたくらいか。だが、その会談も結局行えていないので動機としてはかなり弱い。

ミカがシャーレや先生の情報を全く掴んでいない……とは言わない。彼女はティーパーティーであり、パテル分派の首長。ティーパーティーの情報網もパテルの情報網も十全に使える。それに、赴任初日に起きたシャーレ奪還作戦にはハスミが居たのだ。ハスミ経由で何

かしらの踏み込んだ情報が渡っていると考えて良いだろう。

だが、それを踏まえても彼女が先生に入れ込んでいる詳細は依然として闇の中。これまで齎された情報の中で、何が彼女の琴線に触れたのだろうか。

シャーレという組織体系。所属関係なく共に轡を並べられるシャーレのシステムに興味を持ったのか。彼女がアリウスに物資を融通している情報は把握している。過去のトリニティが徹底的に排斥したアリウスとの和解を望んでいる彼女であれば、確かにシャーレに目を付けるのは不思議ではないが……根拠としては弱い。

仮にそうであれば、その興味は先生本人ではなくシャーレという組織そのものに重きを置くはずだ。それにも関わらず、彼女の興味関心は先生個人に向いている。それどころかシャーレにはあまり関心を向けていないようにも思えた。

では、エデン条約に関連するものなのか……それも何か違う気がする。彼女はゲヘナがそこまで好きではなく、何方かと言うと嫌いだった。そんな彼女が態々ゲヘナと手を取り合うための条約の為に身を粉にするとは考えにくい。彼女は感情で動くタイプであり、公私を切り分けて動けるナギサとは対極に位置するような少女だ。

恐らく彼女個人の立場はエデン条約に対して中立か反対寄りの中立。パテル分派全体としては反対、という具合だろう。締結の邪魔をするつもりはないが、大っぴらに協力するつもりもない……そういった立ち位置。

それ以外、となると……本当に考えられる候補が無い。彼女がシャーレに興味を持つきっかけとなった出来事は幾つか思い当たることが、時系列が合わなかったり、『入れ込む』に至るものではない出来事ばかりだ。

今日まで関わりが皆無だったミカが、シャーレ関係なく先生個人に何かを向ける理由或いは動機。探せば探すほど分からなくなる。打算や政治的な意図はないと考えていい。彼女はそういった謀術が苦手だ。

だから、それ以外のものを。彼女個人が抱えている何かの中で先生

若しくはシャーレに関連付けできそうなものは……そう考えて探しても、何も見当たらずになくて。

——お手上げだね。

彼は自身の内側で苦笑する。これ以上は分かりそうになかった。彼女が自身に入れ込むに至る動機が。こんなにも初対面の自分に対して優しい理由が。良くも悪くも真つ直ぐで、感情的な彼女はこれらの言動に政治的な意図や打算を含ませることはできない。仮に出来たとしてもぎこちなくなる。だからこれは、彼女の言う通り『そうしたいからしている』だけだ。

……一応、もう1つ候補はある。それは彼女が——いや、止めよう。自分から回帰の話は出さないと決めている。それは今日の前にいる彼女に、もういない彼女の面影を見ってしまう行為だ。守れなかった、救えなかった、取り零してしまった彼女を、同一人物とはいえ別の彼女で代替する事は許されない。今自身に触れているミカと過去に関わったミカは別人。どのミカも等しく大切であり、愛している。それだけが、今の自分に許される全てだ。

「こんな感じでいいかな？」

「うん、ありがとう。上手だね、ミカは」

「そんなに褒めても何も出ないよ？」

悪戯つぼく笑うミカは軽い足取りでドライヤーを片付けに行つて、ドレッサーに取り残された彼は鏡を見る。長い髪を毎日丁寧に手入れしているだけあって、ミカのセットはとても上手だった。自分ならミカの倍の時間を掛けてもここまで丁寧にセットできないだろう。

立ち上がり、椅子をドレッサーの中に仕舞うと丁度ミカが戻ってきたところだった。彼女はその足をキッチンの方向に向けて。

「お茶淹れるからちよつと待ってて！」

「手伝うよ」

「大丈夫、先生はお客さんなんだから！ それに、さつきまで倒れてたんだから、無理しないでほしいの」

倒れていたのは事実で、無理をしていたのもまた事実。身体が自由が効かなくなつたところをミカに手を差し伸べてもらった身である

彼は、それを引き合いに出されてしまうと反論する余地をなくしてしまった。口を噤んだ彼を見たミカはこれ幸いと手を引き、ソファに座らせてクツションを抱かせる。

——あのクツション、先生に抱きしめられて羨ましい。

そんな可愛らしい嫉妬を心のアクセントに加えつつ、ミカはキッチン奥に向かう。お湯を入れて放置したままだったティーポットは充分温まっていたため、中身をシンクに捨てて中にハーブを入れる。その後、再びミネラルウォーターで満たしたケトルの沸騰を待つ。

カウンターから見ると彼の姿はとても新鮮だった。脱力しているというか、肩肘張っていないというか。仕事ではないオフの日の彼を見ているような気分。リラククスできているみたいで嬉しいな、と思いつながら彼を見る。

彼はぼうつと外を見ている。世界を映す万華鏡には無数の雨粒、ガラスを滴る水滴に彼は何を想っているのだろうか。トリニティの街に何を見ているのだろうか、何を見出しているのか。彼はこの世界を綺麗だと思ってくれているのだろうか。

外を見る彼を眺めるミカ。僅かな仕草や瞬き、触れたら消えてしまう雪のような儂い横顔。蜃気楼みたいに不確かだが、それでもこの世界に、ミカの部屋に存在している彼。不思議な感覚だな、なんて思っている……ミカの耳に沸騰音が聞こえたから、慌ててコンロの火を止めた。彼を見るのに夢中ですっかり忘れていたが、今はハーブティーを作っていたのだ。現実に戻してくれた事には感謝しつつ、もう少し彼を眺めていたかったと僅かな後悔。

——尤も、あそこでケトルが現実に戻して欲しかったら何時間でも彼を眺めていただろうけれど。

ミカは鼻歌を歌いながら手慣れた動作でケトルを持つ。沸騰した後、室温で少し放置した事により温度が下がったお湯をティーポットに注ぐ。水の流れてハーブがくるくる躍る光景を見ながら、4カップ分前後の量を注ぎ終えたら素早く蓋をして、砂時計をひっくり返した。砂粒が全て落ちきるまでの4分間が抽出時間。

「先生、ちょっと待ってて！ もう直ぐ淹れ終わるから！」

彼の返事は聞かずに最後の準備に取り掛かる。棚からお茶請け用の小皿とカフェトレーを取り出しティーカップとソーサーと一緒に並べる。その後、『ナギちゃんから貰ったお菓子どこに仕舞ったかな』と考えながら記憶を頼りに収納の中を探していく。

取り出したボックスの中には多種多様のお茶菓子。どれもナギサが手作りしたものであるが、その見栄えや味は店で出されるものに全く引けを取らない。その中で何がハーブティーと合うだろうな、と吟味しながら……取り出したのはフィナンシエ。何だかんだ、こういう小麦粉を使ったお菓子が一番ハーブティーに合う。

砂時計の砂粒が全て落ちたことを確認したミカはストレーナー片手に鼻歌を歌いながらティーカップにハーブティーを注ぐ。透明な容器の内側でハーブがジャンピングしているのを見たミカは内心喜んだ。上手く淹れる事ができた、と。ナギサほどではないが、ミカにもそれなりに紅茶やお茶には拘りやポリシーがあるのだ。それに、好きな人には美味しいものを飲んでもらいたいと思うのは当然であるう。

リラックス効果のある香りが鼻孔を攪り、思わず顔が綻んだ。2人の満たされたティーカップとソーサー、ティーポットとストレーナー、お茶請けのフィナンシエをカフェトレーの上に乗せて彼の元へ足を運ぶ。

「お待たせ、先生！ 冷めないうちに飲んでね！」

ローテーブルに置いたカップとソーサー、彼はそれを優雅な所作で持ち上げて口元に運ぶ。小さなリップ音がやけに耳に残ったのは部屋が静かだからか。

「……どうかな？」

「美味しいよ。淹れてくれてありがとう」

「やった♪」

僅かな偽りすら感じられない純粋な誉め言葉を受け取ったミカは大きな喜びを味わいながら、自身のカップとソーサーをテーブルの上に置いて、お茶菓子を下す。その後、ティーポットをマットの上に置いてコジ―を被せた。

そして、彼のすぐ隣……ちよつとした身動きをしただけで互いに触れてしまうような至近距離にそつと腰を下ろした。賑やかし代わりのテレビを点けようか、と考えたが……彼がテレビの方に集中するのは嫌だからやっぱり無し。尤も、ミカを放ってテレビを見るなんて事はないと思うが。

そうしてお茶を楽しみつつ暫く無言ながら心地の良い時間が流れた後……徐にミカが口を開いた。

「先生、聞いてもいい？」

「……何を？」

ミカが何を聞きたいか、彼もきつと分かっているだろう。だが、それでもワンクツションを挟んだのは念のための確認か、それとも何か別の意図があるのか。

聞かれたくない事なのかもしれない。彼は生徒に心配をかける事を良しとしなかったから。

言いたくない事なのかもしれない。彼は自分の事をあまり話してくれなかったから。

それでも、心配だから。ミカは思いを胸に彼へ一步、心を近づけた。「あんな所で倒れてた理由だよ」

先生は遠くを見るような眼でミカを見ているが、何も言わなかった。その沈黙を促しているものであると直感したミカは退路を塞ぐように自身の手を彼の手の上に被せた。少し冷たい温度が伝わる。

「寝ていた訳じゃないよね。だって声を掛けても、体を揺すつても暫く起きなかつたもん。だから多分……気を失っていたんだよね？」

「……そうだね。情けない話だけど、私はあそこで気絶していた」

言葉を選んでいるとミカは思った。特別歯切れが悪いわけではないし、関わりがそれなりの人なら一切の違和感を感じさせないほどにその偽装は完璧に近かつた。だが、ミカにそんな虚飾は通用しない。それほどまでに絆を深めてきたのだから。

「……何か言い難い事があつたの？」

「そうだね……あまり大つぴらにはできない事は確かにあつた」

「無理に話してほしい、とは言わないよ。でも……私、先生の力になりたい。困ってるなら助けになりたい」

「……」

ミカの言葉に対して彼は再び沈黙する。だが、その沈黙は先程までのものとは異なる色を持っていた。あと一押しだと感じた彼女は更に彼に近寄り、真正面から彼の宝石のような綺麗な眼を見た。

「知ってると思うけど私、これでもティーパーティーなんだよ？ トリニティの中の事ならきつと力になれると思う。だから……ッ」

「ありがとう、そう言ってくれて嬉しい」

強めた語気を宥めるように、少しミカの言葉に被せて彼は声を紡ぐ。瞬きの刹那、閉じられた瞳が再度世界を映すまでの僅かな時間……ミカは彼の瞳から蒼の燐光が零れたのを垣間見た。

まるで雲一つない青空のような。或いは星と宙の狭間に広がる空間のような。深い海の水底のような。地と天、その何方にも存在する色彩は彼自身が持つ物ではない。

遠い昔、彼は言っていた。蒼は譲り受けた色だと。彼の大切な生徒から、世界の運命と共に託された色だと。

時折、色は性質と結び付けられる。『十人十色』という諺然り。『色彩』は神秘を反転させるものであり、神秘とは個人の性質とも言い換えられる。それを譲り受け、剩え十全に扱えるのは異常と言う他ない。

ここからはミカの推測になるが、彼が生徒の神秘を扱えるのは彼自身の色が大きく関係していると思う。狂おしいほどの純白。何者にも染まりつつ何者にも塗り潰せない白さが彼の基盤に在るからこそ、彼は様々なものを扱える。それは生徒から譲り受けた色彩で己が白さを塗り潰す量子波送受信機構もそうであるし、そこからもう一段階踏み込んだ術や、複数の神秘装填術式もそうだ。

……保ち続けた彼自身の純白。それが僅かに侵食されているという事は、彼の性質が僅かに失われている事を示す。生徒の為の先生である為に彼は先生でなく自分自身を捨てた。そうして誰かの為に戦い続けたら、今度は自分自身を失っていく。愛した形から離れて、『世界の

生贄』として最適化されていく。

——やっぱりこんな話、ふざけてるよ。

ミカはぎゅつと手を握り締め、歯を食い縛る。こんな悲劇は認めたくない。これが世界のあるべき形だなんて嘘だ。誰かの為に走り続けた彼が、誰からも遠い場所で居なくなるなんて……そんな末路を受け入れる事は出来ない。

だが、幾らミカがそう思った所で彼が贄である現実が変わりなく、彼自身もそれを受け入れている……とは言わないが、贄である事自体には納得していると思う。そうなる事が自然な事だろう、と。

思うに、彼は自身が生贄や消耗品である事に疑問は持つておらず、それに対しての怒りやら何やらは抱いていない。昔から彼は自分の為には怒れない人なのだ。自分がどれほど辛い目に遭ったとしても、彼は自分の為に一生懸命になれないし、そもそも自分の為に生きる事ができない。いつだって彼は誰かに心臓を預けている。

そんな……自身の生存に対して執着が皆無な彼が自身が復活の器になる結末を回避しようとしているのは、その後があるから。彼ではない誰かに新生した彼は多くを傷つけ、多くを殺すから、何としてでも回避しようとしている。自分の不始末で泣く誰かを作りたくないのだ、彼は。

ミカは流し目で先生を見る。彼の表情は思い悩むようなもの。やっぱり言い難い出来事なんだ、と彼女は当たりをつけて……少しだけ彼の方に寄った。考えるのは触れ合えるほど近くににいる彼の事。

数日前、サオリから『僅かだが先生に主神の気配を感じた』と秘匿回線で伝えられた。嘘だと、冗談だと言つてほしかった。実はそんな事はなくて、会った彼は一切の影を感じさせない人だったと言つてほしくて。だが、電話越しに痛みを伴う沈黙を返したサオリを感じて声帯が凍り付いてしまつて……これがどうしようもない現実だと知つた。

そして、この現実をどうにかする術は無い。不治の病のようなものだ。それも、進行したら確実に逃れられない死が待っているタイプの。こうなつた時点で彼の詰みは確定しているようなものだ。彼は

もうどうやってても長くは生きられない。世界が流転しても受け継がれる彼の短命、本当に酷い話だと思う。

手遅れという事は分かっている。もうどうしようもない事も分かっている。どうやってても彼は失われる。仮に何もかも上手くいつて皆が明日を見れたとしても、彼はきつと失い続け守れなかった過去を見てしまう。自分が悲劇を生み出すと勝手に決めつけて、蜃気楼のようにいなくなってしまう。そんな事、絶対ないのに。

大好きな幼馴染、大好きな親友、可愛くてかっこいい大切な後輩、ifの道を辿ったもう一人の自分、先生。本当に大切な人達。これまで結んだ縁。これから紡いでいく思い出。絶対に失いたくないと、胸の内側で決意を新たにした時……隣から「いいよ、話すよ」と優しい声が聞こえたから、思わず肩が跳ねてしまった。

「……いいの？ 本当に？ 私が知りたいって言ったけど、無理に話さなくても……」

「気遣いありがとう。でも、ミカには知る権利があるからね。雨に濡れてまで私を助けてくれたんだ。ミカに嘘は吐きたくない……勿論、これはミカと私の秘密ね」

「うん、絶対に誰にも言わないよ」

力一杯頷くと、彼はまたふわりとした微笑を浮かべてくれて……少しだけ背筋を正した。そのまま彼は「さて……何から話そうかな」と少しだけ頭の中を整理して。

「ミカは私が少し前までミレニウムに居たのは知っているかな？」

「うん。行政官の子から情報のソース付きで私の方に流れてきたよ」「流石ティーパーティーだね。情報の速さも確度も申し分ない……と、話しが逸れたね。兎に角、私はミレニウムに居て、丁度そのタイミングで色々あってね……端的に言うと、ちよつと無理を押し通したんだ」

「ちよつと……？」

ミカは『絶対ちよつとじゃないでしょ』と言わんばかりの目で彼を見つめると、困ったような苦笑い。目を細めて、唇を少し歪めて。それを見てミカは確信する、絶対途轍もない程の無理をしたと。

「その辺りの事が片付いたのが2週間くらい前で、そこから今までは働きっぱなしでね……今日は偶々トリニティに用事が出来たからこっちに来たんだ」

「そうなんだ……やっぱり先生は忙しいんだね」

そう言いつつ、ミカは内心盛大に喜ぶ。何の用事かは分からないが、そのお陰で先生に会えたのだ。詳細不明の用事に『よく分からないけどありがとう!』と思いつつ……喜んでる場合じゃないと気持ちを切り替える。確かに会えたのは嬉しいが、肝心の彼は倒れていたのだから喜ぶのは違うだろう。

「それでちよつと体がしんどくなって路地で休んでたら、襲われちゃってね」

——瞬間、ミカの全身の温度が冷えた。血液も感情も、何もかも……聖園ミカを構成する凡ゆる全ての温度が失せるような感覚。掌の皮膚が裂けんばかりに拳を握り、立てた爪が産む痛みすら意識の外にある。瞳孔が開き、唇が交戦的に吊り上がり……質量を伴っていると錯覚するほどの感情が胸の内側で持ち上がった。久しく抱いていなかった感情。魔女に墮ちるような感覚。幻視する色は血のようなどす黒い赤色。

ああ、これは——怒りだ。

「勿論、私には傷一つないよ。それに襲われたと言っても一発だけだし……」

彼の声や言葉ですら、まるで水中にいるかのように遠くに聞こえる。何もかもが遠い。自分の内側で膨張する怒り以外の全てが膜を隔てたかのように不鮮明だ。

確かに彼には傷一つないのだろう。身体の動かし方、息遣い、視線、声音。もし彼が怪我を負っていれば、そのどれかには違和感を抱く。ずっと彼を近くで見えていたミカだからこそ、そういつた偽装の看破はお手の物だ。

だが、ミカから見てもそのような……近日中に怪我を負ったような様子はなかった。だから彼の言葉は真実であり、ミカの懸念は杞憂に終わる。襲撃は失敗し、彼は五体満足で此処に居る。ミカの怒りには

大きな意味が無いのかもしれない。だって、彼は傷ついていないのだから。

でも——それで納得できるかと言われたら真つ向から否を返す。傷ついていないから大丈夫とか、丸く収まったから良いとか……全く以てふざけている。だって、誰かが悪意を持って彼を傷つけようとした事実は変えられない。言葉を尽くし、誠心誠意真つ向から向き合おうとしている彼に武器を向けた現実には確かにあるのだから。

「……誰に襲われたの、先生」

自分でも恐ろしいと思うほどに冷たい、平坦な声。アリウスに、サオりに憎悪を抱き殺そうとした時ですらもつと抑揚があつた気がする。あの時は自分の中のたうち回る大きなうねりに身を任せるように動いていたが……今は違う。今はその大きなうねりが凪いでいる。まるで静かな水面のように。

「……ミカ？」

瞳孔が開き切っているのにも関わらず刃物のように鋭い瞳。それに先生は膨張する太陽を見た。

「トリニティの生徒じゃないよね。トリニティの生徒が先生をトリニティの自治区で狙う訳ないもん。だから他の学校か、不良か、生徒以外だよな？　ねえ、誰か分かる？　先生」

言葉と共にミカの思考が巡る。

まず、トリニティ自治区でトリニティ生徒が凶行に及ぶ可能性は極めて低い。そんな事をすれば『捕まえてください』と言っているようなものだ。余程の自殺願望の持ち主でもない限り狙う訳ない。

そして、他の学校の生徒。候補として挙げたが、これも除外できる。トリニティ自治区でシャーレの先生を狙ったとなればトリニティは勿論、狙った生徒が所属している学校も黙ってはいられない。学校のプライドに掛けて全力で潰しに掛かるだろう。間違いなく狙った生徒は二度と太陽の下を歩けなくなる。

では、不良か……これも違う気がする。不良の中に自分の命を賭ける人はごく少数であるし、他人の命を奪う気概を持つ人は更に少ない。そもそも、不良が足取りを掴まれやすい態々学園自治区で彼を狙

う訳がない。狙うならブラックマーケット等の無法地帯だ。

最後、生徒以外の誰か。恐らくこれだ。相手としては先生を殺し、その責任を自治区に押し付ける算段だったのだろう。では、襲ったのは誰か。彼と関わり、彼を襲うに足る動機を持つ者……となれば、ミカは一人しか思い浮かばなかった。

ベアトリーチェ
あの女。

恐らくアイツがアリウスを動かしたのだろう。スクワッドではなく、他の部隊を。アリウスとトリニティはカタコンベで繋がっている。襲撃準備も撤退も容易いだろう。彼が此処に来ることを何らかの手段で情報入手し、張り込んでいた……そう考えれば自然だ。

ベアトリーチェが動かした部隊及び人数、手段、彼を狙った目的。今日の定期報告でサオリに伝えなければならぬ事が1つ増えた……と、そこまで考えて。

「えっと、ミカ……？」

困惑したような彼の顔が思っていたよりもすぐ近くにあった。あと少しで鼻の先が触れそうなほどの距離。瞳に映る自分自身すら見えてしまうほどの距離まで無意識に近寄っていたのだ。

そう認識した瞬間、ミカの顔は真つ赤になり眼を疑うような俊敏さで元の場所に戻っていった。

「ご、ごめんね！ 近かったよね!？」

「いや、それはいいんだけど……」

「えーっと、どこまで聞いたんだっけ……あ、そうそう。誰がって所だったよね。多分先生も分かんないだろうから、それはいいよ。誰が先生を襲ったかは私が調べておくね。あと、正義実現委員会の子達にもパトロールの人員を増やすようお願いしておくから、先生は安心してね!」

そう言つて、赤い顔を誤魔化すように無理矢理話を閉じる。手で熱くなった顔をパタパタと仰いでいると、何が可笑しいのか彼はくすりと笑つて……それに釣られてミカも笑った。

「まあ、私の話はそんな感じ。色々無理が募つてこの有様さ。情けないよ、本当に」

「——情けなくなんてないよ」

いつになく強いミカという言葉が聞こえたため先生は驚きと共に顔を上げると……真剣な顔をしたミカと目が合った。

「誰かのために頑張った先生を情けないなんて言う人は絶対いないよ」

「……ミカ」

彼は噛み締めるように、唄うように大切な二文字を口から零して、それから影の無い笑顔を浮かべる。ミカが好きだった笑顔。愛おしくて、大切に、大好きで。彼の、一番彼らしい表情。

「ありがとう、私のためにそう言ってくれて」

——ああ、やっぱり好きだなあ。

雨傘の咲く6月、私は貴方に愛を送る V

先生が笑みを浮べて、ミカも釣られて笑って。その穏やかな時間が過ぎ去った後は沈黙が流れた。だが、その沈黙は気まずいものではなく心地の良い静寂。例えば、朝の太陽を浴びている時のような心地の良さ。音が無い事によって却ってリラックスできているような気がした。

窓の外で鳴る雨の音。段々と雨脚は弱くなっていて、恐らくあと少し……大体1時間から2時間程度で雨は上がるだろう。明日の天気は晴れだったから、この雨が上がればきつと曇天から光が差し込んで青空を見れるだろう。何もかもを包み呑み込む……彼のような宇宙色の青空が。

チクタクとなる時計の音。秒針を刻み、世界と時間を刻んでいく。2人の時間を世界に証として残すように。誰もが忘れても、自分だけは忘れないように。この意味と奇跡を思い出せるように。遺された誰かが一人ぼっちで泣かないように。いつか過ぎ去るこの時間を抱いて夜を超えられるように。

互いの呼吸音、息遣い。確かに生きている証。ミカの心臓は動いている。先生の心臓は動いている。あの時とは違う。小さくとも、弱くとも、この世界でちゃんと生きているのだと証明している。

ミカは流し目で彼を見ると、少し前と同じように彼は空を見ていた。本当に綺麗な眼だと、ミカは改めてそう思う。色とか形とかそういったものではなく、その眼の奥にある感情や想いが綺麗だった。それをぼーっと、見惚れているように眺めていると彼は徐に口を開く。

「そろそろ雨脚もだいぶ弱まってきたかな」

耳朶を擽る心地の良い、愛しさがこみ上げるような声はミカが先ほども思った事と同じような言葉だった。雨脚は弱くなり、暗い空が晴れる時が刻一刻と近づいている。

「私はそろそろお暇させてもらうね。今日は色々ありがとう、ミカ。会えて嬉しかったよ。お礼はまた何処かのタイミングでさせてね」

恐らくこの程度の雨量ならば走れば大丈夫だと判断したのだろう。確かにこの場所はそれなりに駅が近く、バス停等の公共交通機関も充実している。全力で走らなくとも先生の足であれば10分程度で何方かには辿り着ける。

確かに彼の行動は正しい。この雨ならば傘が無くとも短時間ならばそこまで濡れないで済む。

確かに彼の言葉は正しい。先生が生徒の寮に長時間居座るのは好ましい事とは言えない。先生は言わずもがなミカもそれなりに有名な人だ。万が一にもクロノス辺りの報道機関に写真を取られて、シャーレとミカの癒着を疑われたら目も当てられない。最悪、シャーレとトリニティが深い仲にあると思われるれば確実にゲヘナは黙っていないだろう。エデン条約や和平がどうこうとか、そんな事は言っていない事態になる。

エデン条約だけは確実に締結させたい。奔走しているナギサの為に、虐げられ続けたサオリ達アリウスの為に……皆が笑い合う風景が何より好きだった彼の為に。

だから、此処で彼を見送るのが正解。それが良い子の条件だと、そう分かっているのに。

「……ミカ？」

立ち上がり、ミカの場合から去っていく彼。視界の隅で揺れた白い袖を親指と人差し指で掴んでしまった。彼が去る事を拒むように。

「……困らせたい訳じゃない、の」

ポツリと、雨音のように小さな声で紡がれた声。それは後悔の色を多く含み、贖罪のようにも思えた。罪深いと分かっているながら、こうしない方が良くと心の中ではちゃんと分かっているながら、だがこのまま行かせたくない。他ならない彼の為に。

「でも、先生はきつと無理してるから……休んでほしくて」

少し飲んだあのハーブティーはカフェインが含まれておらず、リラックス効果が期待されているものだった。隅にあったブランケットとクッションは睡眠に適しており、ソファを簡易的な寝具にするのには充分だろう。

休んでほしかった、その言葉に嘘偽りはないように思える。

「ううん、違う……もう少し一緒に居たくて……」

嫌われたくない。迷惑をかけたくない。先生の意志を尊重したい。道を阻みたくない。

休んでほしい。壊れてほしくない。無理をしないでほしい。笑って生きてほしい。

もつと、一緒にいたい。この時間を過ごしていたい。

「……」

ミカの行動は己を思つてのものだと、彼はちゃんと分かっている。彼女は善くない事だと分かっている、それでも尚この身を想って引き留めてくれた。もう少し休んでほしい、もう少し一緒に居させてほしい、と。

分かっている。ミカにこの選択をさせたのは己だ。己が不用意にミカの前で隙を晒したからこそ今の状況がある。最後の一押しこそアリウス生徒の狙撃であつたが、その一押しで決壊してしまうほどに追い込んでいたのは他ならぬ自分自身であるし、自分の脆弱さを甘く見ていたのも自分でしかない。

全て、全て、この身の責任。それをミカの所為にするつもりはない。怒る気も、責める気も皆無だ。感謝と好意こそあれど、嫌う事も迷惑に思う事はない。勿論、ミカの本音と建前も。休んでほしいという善意はとても嬉しいし、一緒に居たいと思う気持ちを否定したくない。

「……そっか」

だからこそ、迷惑をかけれないのは先生の方だつた。このまま居ればミカや彼女が属するパテル分派やティーパーティー、ひいてはトリニティ総合学園に迷惑をかけてしまう。唯でさえ色々とバタバタしている今の時期、可能な限りミカやナギサ、セイアの悩みの種を増やしたくない。行動一つで彼女達の立場が危うくなってしまうかもしれないのだ。自分の所為で彼女達の生活を脅かしたくない。

「私も出来るならもう少しミカと一緒に居たいけど、これ以上はミカ達に迷惑をかけてしまうからね」

そう言つて、彼はまるで硝子細工に触れるようにミカの手に触れ

る。自分の手よりも細くて、小さくて、暖かい手。込み上げる愛しさを呑み込み、刃物に転じたそれで自罰を刻む。これが罪だと、この痛みが自分の証明だと思って。

「心配かけてごめんね。でも、もう大丈夫だから」

人差し指と親指。自身とミカを繋ぎ止めていた楔と鎖。それを解き、彼は自由になる。孤独になる。

——アロナはミカさんに賛成です。先生はお休みするべきです。

脳裡の中、アロナの声。怒っているだろうな、と思いつつ彼は自分の意見を曲げるつもりはない。自分は可能な限りこの場から早く去った方が良いはずだ。

——休むだけならここじゃなくてもいい。それこそ、シャーレの仮眠室でも使えばそれで済む話だよ。ミカにこれ以上迷惑は掛けられない。

別に此処じゃなくても休めるし、此処じゃなければならぬ理由もない。シャーレの仮眠室が使えない訳でもないから、そこで横になればいだろう。それに、ミカには充分休息を貰っているため体は動かせるようになった。ここが潮時だ。

——絶対お休みせずお仕事するじゃないですか！ アロナは知ってるんですからね！

信用が無いなど思いつつ、自分の言動の所為なので何も言い返す事ができない。仮にこのままシャーレに帰ったとしても仮眠室に行く事はなく、そのままデスクで溜まっている作業を進めるだろう。休憩室は兎も角、仮眠室なんて未だに使った事が無い。

元より、このまま手ぶらで帰るつもりはない。トリニティに来た目的は起動されたアヴェスターの調査と情報収集。起動者の殺害は不可能だろうが、最低でも起動者、目的、用途だけは把握しておきたい。打つ手を誤れば最悪キヴォトスが詰んでしまう可能性を孕む案件なのだ。生徒の為に最大限情報を集め、準備と対策を行わなければならない。

だから行かないと———そう思った彼を引き留める手。手首を

掴んだ色白の細い手は少しだけ震えていた。

……予想は、していた。

「ごめん、なさい……でもッ」

「……責める気も、怒る気もないよ。君をこうさせたのは、私だ」

自分を引き留めた手を包み込むように彼は掌を被せる。ミカが罪と思う事を諫めるように。或いは、彼女の罪と痛みを手渡しで受け取るように。

「だからそんな顔はしないで、ミカ」

「……うん」

この選択は罪深いと分かっている。生徒は全員愛しているし、誰もが特別だ。だからこそ、優劣は作らない。平等に、差が無いように。特定個人に肩入れし過ぎないように。愛する誰かを作らず、世界の未来と幸福に身を捧げる事こそが先生であるための必要条件だった。

でも、それでも……この手を振り解く気にはなれなかった。彼女を悲しませたくなかった。彼女の悲しむ顔を見たくなかった。この感情に、もういないあの子^{ミカ}への負い目が含まれているのかは分からない。

ああ、分かっている。これは所詮独善であり自己満足。畢竟、自分を苛む現実を見たくないという傲慢さ。こんな事をしても何にもならないのは知っている。悪戯に罪を重ねて、殺したくなる自分を無意味に増やすだけだと……分かっている。

でも、この罪で誰かの涙を拭えるなら。ミカが笑えるなら。

この選択に不思議と後悔はなかった。

「……そうだね、もう少し一緒に居ようか」

この雨が止むまであと1時間。今回一回限り、この一時間だけ、先生は『ミカの先生』になる事にした。



先生は明るさを最低限まで落としたシステムの箱をタップし、スクロールする。画面に映るのはシャーレの業務……ではなく、何の変哲

もないキヴオトスのニュース。日毎に更新される、騒がしくも楽しい日常を切り取ったもの達。

D・U・自治区に新感覚スイーツの店舗が進出、連日行列で賑わっているらしい。覚えていたら放課後スイーツ部の皆に話を聞いてみるのも一興だろうか。流行に目ざとい彼女達ならば、もしかしたら既に口に運んでいるかもしれない。

それ以外にもミレニアムの新技術の特許だとか、企業と学校の会談で合意が結ばれたとか、暁輪大祭に関するものだとか。そういった取り留めのない日々たちが文字になり、皆の元に晒され、日常の一部に組み込まれる。世界は日毎に更新しているのだと、これを見れば明確に分かるだろう。少しずつ、だが着実に。善い方向に向かおうとしている。皆は頑張つて生きている。このキヴオトスという世界で。

だが、キヴオトスの日常はそんな暖かい日常ばかりではない。光が在れば影もあり、穏やかでないニュースも当然流れてくる。

銃火器や戦車の不正取引、裏金、詐欺、美術品の盗難、薬害、マフィアの抗争、ハッキングで個人情報情報が抜かれたとか。およそ日常的とは言いたくないような出来事。銃や暴力のハードルがかなり低いキヴオトスならではのニュースを流し見していると……目に留まるものがあつた。

「ヴァルキューレの子達が、か……」

先生はスクロールする指を止めて見出しをタップするとリンク先に飛ばされる。びっしりと書かれた文字列を一文一文字頭に叩き込みながら、内容を咀嚼して脳内で整理する。

どうやら先日未明、ヴァルキューレ警察学校の生徒が倒れていたらしい。

発見場所はゲヘナ自治区の郊外、人通りが少ない路地。

発見者は地域住民であり、ランニングの最中に発見し通報したようだ。

倒れていた生徒は近辺の駐屯地に所属している子。幸い怪我自体は大した事はなく意識ははっきりしていて、本人はパトロール中に襲われたと証言している。

犯人は現段階では不明。加えて、今月だけでも同様のケースの事件が4件発生しているため同一人物の犯行によるものと推定。ヴァルキューレ警察学校を狙った悪質な事件として、一刻も早い犯人逮捕が望まれている。

——実行犯の狙いは何だ？

思考の深度を深める。先生は、この事件が単なる憂さ晴らし……ヴァルキューレ警察学校に恨みを持っていたから行われたものなどは到底思えなかった。確実に恨み辛みではなく、何らか他の動機がある。

だが、如何せん情報が少ない。これや、これに関連するニュースは意図的に情報が削ぎ落されている。恐らく地域市民を不安にさせない為だろう。

「……カンナに相談しないと」

ヴァルキューレ警察学校、公安局の局長……尾刃カンナ。彼女ならばもう少し踏み込んだ事情を知っているだろうと思ひ、彼女との面会をTODオリストに加えておく。

それ以外には目に留まる様なニュースはなく、1分も経たないうちに最下段までスクロールし終えた先生はシツテムの箱をスリープモードにしておく。アロナもきつと休みたいだろう。こんな時に自分で自分に付き合わせたくはない。

画面が暗転したシツテムの箱をローテーブルの上に置き、少しだけ背凭れに体重を掛ける。タブレットを操作するのに邪魔だったため跳ね除けていたブランケットを整え、左肩に在る温もりに目を向ける。

「……」

先生の肩に頭を乗せ、体重も彼に預けているミカ。ブランケットの下では彼の左腕を大切そうに両手で抱いている。

穏やかな寝息を立てている彼女を見ると毒気が抜かれてしまい、振り解く気にもなれないからそのまま彼女にされるがまま。この体勢になって早20分ほど、雨上がりまで残り30分。それまで先生は動かない。この穏やかな時間を噛み締める事にした。

それにしても——休んでほしいと言っていた彼女が先に寝てしまっているのがちよつとだけ可笑しかった。或いは、彼女らしいとも。彼女もきつと疲れていたのだろう。出会う前に彼女が何をしていたのかを先生は知らないが、会った後は知っている。雨の中運んでくれたり、休ませるためにあれこれと準備をしてくれたり。

そうすれば当然疲労は溜まる。日々の小さな疲労も合わさった影響か、ブランケットに包まって目を閉じれば10分程度で彼女は夢の中へと行ってしまった。

本当に休むべきはどちらだったのやら、なんて思いながら先生はミカの寝顔を眺める。桜のような髪色も相まって、その顔は眠った春のよう。絵本の中から童話の姫君がそのまま出てきたような。

……何度も見た顔。隣で、前で、後ろで。顔を合わせるたびに花が咲いたように笑ってくれた彼女はまるで星のよう。彼女の笑顔に何度救われただろうか。

——この身は彼女を救えなかったのに。

「……」

痛い、痛い、痛い、痛い、痛い。夕風を穿つようなあの笑顔が。遠ざかっていくあの背中が。澄み切った金色の瞳が痛い。死んでしまいたくなるほどに、痛い。

せり上がった胃液を飲み干し、ガンガンとなる頭痛を振じ伏せて、軋む心臓を握り潰す。息を吐く様に嘘を吐いて、多くを傷つけた己に対する当然の報い。誰かの為と嘯きながら、ミカに寄り添わなかった己が嫌いで仕方がない。

「はあ……」

溜息を吐いて空いている腕で目を覆う。でも、頭上の光は透くから景色は網膜に焼き付いたまま。脳内でリフレインする記憶は砂糖色のアルカロイド。光化学スモッグのようによつくりと、だが着実に死に近づける。

——^薬ミカを^{直視}でき^なか^った^だ。私が弱かったから。弱かったから傷つけた。どうなってもミカを置いて逝ってしまうから遠ざけた。ミカの未来に影を落としたくなかったから向き合わなかった。

——愛した何かを失い苦しむミカを、もう二度と見たくなかったんだよ。

「……最低だ、私は」

その言葉を最後に、先生は瞼を静かに下す。ずっと抱えていた後悔と痛みと共に、帳の深くまで潜るために。



貴方の夢を見ていた。子どものように笑い、生きている夢だった。生徒の隣に座り、生徒の話に耳を傾け、共に笑っている光景。自分もこんな風に彼と過ごした。それは決して色褪せない大切な思い出。何度も思い出せるように、大切に仕舞っている。

彼が望んだもの。

彼に終ぞ与えられなかったもの。

彼が奪われ続けたもの。

彼が誰かに与えようとしたもの。

眼を開けると、白んでぼやけた視界。次第にピントが合つていき、はつきりと部屋の景色を映し出す。彼の為に準備していたブラケットは自分に掛けられていて、腕には何かを抱きしめている感触。右耳と頬には暖かな感触。すぐ隣に先生が居た。

驚き半分、恥ずかしさ半分、アクセントに嬉しさを一摘み。三つの感情を音にならないように飲み干して、そつと彼の顔を覗き込んだ。

「……」

数刻前と似ている状況であるが、ミカの胸を埋め尽くす感情は心配ではなく愛おしさ。睫毛に縁どられた瞳は閉じ、唇からは小さな吐息。身動き一つすらせず意識を脳の底に沈めている。起きていたらどうしよう、と思っていたが……杞憂に終わって良かった。彼は休んでくれている。誰の前でも、どんな時でも走り続けた先生が羽を休めてくれていることが嬉しくて、自分がその宿り木になれていることはもつと嬉しい。

——だけど、その寝顔は少しだけ悲しそうで、寂しそうで。決

して拭えない孤独の海に身を沈めているように見えてしまった。

分かっている。ミカでは、生徒では、キヴオトスの生命では彼の隣に立てない。彼とは根本的に作りが異なるから、彼の孤独は決して消えない。

それが世界の当然の理……だとしても。

「私は……だよ、先生」

ミカは彼をそっと抱き締める。彼は孤独なんかじゃない。彼が残した世界はちゃんと形を変えて今も生きている。彼が生き抜き、守り抜いた世界はちゃんとまだ息をしているのだから。この、胸の中で。

「私はずっと先生の傍に居るよ」

いつか、全ての夜を超えて。全ての過去を超えて、皆が目指した地平に辿り着けるかもしれないけれど……それはきつと遠い未来の話だから。

今は唯、この胸の中で貴方を暖めたい。貴方が残した思い出の残滓で、貴方が安らげるように。



「本当に良いの？ シャーレまで送ってくよ？」

「気持ちだけで充分だよ。久しぶりに長時間休んだから調子も良くなったし、1人でも大丈夫」

長居し過ぎたけど、と笑う彼に釣られてミカも笑ってしまう。一時間限定のはずだったのに2人揃って盛大に寝過ごしてしまい、今の時刻は19時前。雨は上がり、ペトリコールの香りが漂う。藍の空の西側に太陽、もう直ぐ日の入りだった。

朗らかに笑う彼は確かに顔色や血色が良くなっていて、『調子も良くなった』という言葉に嘘偽りは見られない。

「改めて今日はありがとう。ミカのおかげで助かったよ」

「全然いいよ！ 私と先生の仲だからねっ☆」

その言葉を冗談として受け取ったのか、彼は苦笑い。尤も、ミカとしては冗談のつもりなんて欠片もなかったが。

「またね、ミカ。次会う時は今日のお礼をさせてね」

そう言い、背を向ける彼。何度も見た背中。誰よりも弱いのに、誰よりも前に立っていた彼の背、何度も守られたあの姿を見て——
思わず「待って！」と声を掛けてしまう。疑問符と共に振り返る彼は『どうしたの?』と言外に言っていて。

言いたいこと、伝えたいこと。言うべきじゃないこと、伝えるべきじゃないこと。沢山あるけど、上手く纏まらなくて。だから口を衝いて出たのは本当に突拍子もない、笑われてしまうような拙い言葉。

「先生が悲しむくらいならこんな世界、3秒で壊してあげるからッ。だから——ッ」

だから、どうか。その祈りは彼に届いたようで……浮べた苦笑いの奥、少しだけ頬を緩めていた。初めて見る安堵に似た顔に思わず見とれていると。

「今度はゆっくりとお茶でもしようか。ミカの話は沢山聞かせてね」

そう言って、彼は今度こそ背を向ける。これで今日はお別れだけど、きつと次があるから。だから去り際に言う言葉は決まっている。

「またね、ミカ」

「うん！ またね、先生！」

大きく手を振り、見送るミカに対して控えめに手を振る彼はトリニテイの街の中に消えていく。背中が見えなくなるまで見送った後、ミカはこれから終わる今日に思いを馳せる。

先生と共に過ごした今日という日。細やかな日々の営み。彼が大切にしたもの。彼が奪われたもの。彼が持てなかつたもの。

共に過ごした時間を記憶として脳の最も奥深く、誰も触れられないような深層にゆっくりと大切に記していく。まるで文字を綴るように、針で糸を縫うように。

——彼の最終的な目的をミカは知っている。それはキヴオトスの世界法則テクスチャの変更であり——或いは、神秘の■■。

茨の道である事は分かっている。これは世界に対する挑戦であり、神への反逆であり、己が神秘への宣戦布告。でも、彼ならばきつと成せると信じている。

だから心配こそすれど、その道を決して否定しない。彼には彼のま
ま、その心のままに進んでほしい。

「――また会いたいな、先生」

吐き出したミカの吐息は、抱きしめた彼の熱を持っていた。

何でもない、ある日

窓の外から差し込む朝日が大層美しく見えたから、漠然と今日も良い日になると思った。空は宇宙を写したような、吸い込まれる色彩を呈していて、太陽もその日差しを段々と強めている。爽やかな風には青さが多く含まれていて、夏の足音がすぐそこまで迫っている事を感じ……外に出て、胸いっぱい空気を吸い込んだ後、店主は店の前の看板をOpenへと切り替えた。

此処はキヴオトスの中心地たるD・U・地区、シラトリ区……その、外れ。何方かと言うと郊外に近い、都会の喧騒からは少々遠のいた場所。閑静な住宅街が広がる住みやすい街の大通りから一本奥に進んだ地に入りを構えるこの店は、知る人ぞ知る隠れ家だった。故に客足は然程多くない。一日の来客数なんて両手で数えられる程が大半で、0や1なものも大して珍しくなかった。

尤も、店主……マスターにとつてはその方が都合が良かった。元より引退後の道楽として始めた店、大勢の客が押しかけても困つてしまいうだけ。それに、老いには勝てないのだ。体力的にも精神的にも、気楽に始められて気楽に終われる今くらいの温度が心地よい。

「……」

チクタクと時を刻む音。遠く聞こえる木々の騒めき。それをバツクミュージックに、マスターは新聞を捲る。何でもかんでもデジタル化、オルタナティブ化が進む昨今、こうやって態々紙面を取り寄せて読む己はきつと奇特だろうが、身に付いた習慣は中々変えられないもので。別に電子機器の扱いが苦手だったり嫌いだったりする訳ではないが、新聞を読むなら紙の方が好きなのだ。

そして、次のページを見ようと紙を捲ろうとしたタイミングで——不意に、ドアの開く音が聞こえた。ワントンポ遅れて、入店を知らせるチャイムが響く。アレもそろそろ買い替え時だな、なんて思いながらマスターは紙面を置いた。

「いらっしやい、1人かね？　席はお好きな所へ」

「はい。お邪魔させていただきます」

来店した彼は嫺やかな笑みを浮かべながら、優雅な所作で足を運び、マスターの近く……カウンタ―席へ腰かけた。気取っていない美しさと同然体そのものの姿。銃と弾丸が飛び交うこの場所にこんな人物がいてもいいのかと思ってしまうほど、その姿は争いから離れている。

「注文は？」

「ホットのブレンドコーヒーを」

オーダーを取ったマスターは彼に背を向け、賑やかし目的のテレビをつけてからコーヒーを淹れる作業に取り掛かる。

予め沸かしておいたお湯でドリッパーとサーバー、コーヒーカップを温め、ミルで豆を挽く。粉末状になった豆をフィルターがセットされたドリッパーに入れて、粉末の中心に細くお湯を注ぐ。30秒ほど蒸らした後、『の』の字を描くようにお湯を回し入れて抽出を開始する。十分な量が抽出されたのを確認し、温めておいたコーヒーカップに注げば特性のコーヒーの完成だ。

「御待遠さん。おまちどおミルクと砂糖はそこに在るのを使ってくれ」

「ありがとうございます。頂きます」

彼は人好きのする笑みを浮かべて軽く頭を下げて、カップに口づける。鼻を抜けるコーヒーの落ち着く香りを楽しみながら、一口含むと調和の取れた格式高い味が広がった。

「気に入ってくれたかい？」

「はい……とても美味しいです。私も時折淹れますが、ここまで上手に淹れる事はできません」

「そりやそうさ。店を構える前から趣味でやってたことだからな。淹れてきた数が違う」

マスターはロッキングチェアに腰掛け、眼前の彼を見る。第一ボタンを外した白のシャツと、胸ポケットに入った何かのIC。細身のスラックスと革靴はどちらも黒色。少しかっちりしているが、不思議と良く似合っている。

「この辺りじゃ見かけない顔だな。何処から来たんだい？」

「D・U.の中心からです」

「見かけない訳だ。仕事か何かい？」

「いえ。ただの息抜きです。休みを取れと色々な方に口酸っぱく言われて」

「そうかい……確かに、都心じゃ体は休まっても心は休まらんだろう。あの場に居ると急かされているような気分になる。急いで生きろ、立ち止まるな、休むなって具合にな。年は取りたくないものだよ、全く」
言い、手の甲で腰を軽く叩く。体に押し掛かる重力が今は恨めしい。これがもう少し軽ければ、腰を痛めずに済んだのかも……意味のない感傷。

「昔は人並に都会に憧れはあったが、今はそうでもない。今はこうして世捨て人みたいに趣味の店を回しているのが心地が良い。そうすれば、お前さんみたいな客に会えるからな」

「……恐縮です」

マスターは無言で煙管を彼に見せると、その意図を察した彼は緩やかに微笑んだ。ふう、と煙が宙を舞う。マールを描いて空に溶けて、独特の香りが店内に漂う。先ほどつけたテレビからはクロノススクールの報道が流れている。内容は、エデン条約。

「……エデン条約」

「最近は何処もこの話でもちきりさ。学校同士の関係が最悪に近いゲヘナとトリニティ、それが手を取り合おうとしてるんだ。昔を知る奴なら誰だって驚く」

規律、伝統を重んじるトリニティ。自由、混沌を謳歌するゲヘナ。致命的なまでの校風の違いはやがて嫌悪になる。トリニティの生徒だから嫌い、ゲヘナの生徒だから嫌い……その嫌悪は一般生徒にまで及び、その関係性は最悪と呼ぶに相応しいものになった。トリニティ自治区でゲヘナの生徒が歩けば正義実現委員会に通報される、ゲヘナ自治区でトリニティの生徒が歩けば銃撃される……といった具合に。

冷え切った関係ではなく、今も尚燃える嫌悪の関係。声高に『お前が嫌い』と叫びながら、互いの喉元に銃口を突きつけ合う。長い歴史を持つこの関係性が数世紀の時を経て変化しようとしているのだ。その注目度は非常に高く、与える影響範囲は計り知れない。

「尤も、今更やるのかつて疑問はあるがね。和平を結ぶには血が流れ過ぎた、手を取り合うには溝が深くなり過ぎた。そんな状態で樂園を目指しても地獄に真つ逆さまかもしれないのに」

「……今だからこそ、でしょうね」

青年はカップを握り、悔いるように。

「憎悪も嫌悪も行き過ぎてしまえば、『互いの生存が認められない』と叫ぶ絶滅に至ります。そうなってしまうえば全て遅い。だからそうなる前に手を取り合うべきです。幸い、今のゲヘナの首脳陣とトリニティの首脳陣は争いを望まない穏健派が多いですから。きつと、手を取り合えます」

「それでは過去の流血を無意味にしてしまうんじゃないか？ お前さんは未来を見すぎて、今や過去を蔑ろにしているきらいがある。それを悪いとは言わんし、儂も正しいと思うが……あんたの言葉に納得しない奴もいるだろう」

「ええ、これまで流れた血を無意味にしない為にも、と叫ぶ誰かの気持ちも分かります。自身の大切な人を傷つけた、或いは奪った者と仲良くするなんて無理だと叫ぶ気持ちも、分かります。だからこそ、もうこれで終わりにするべきです」

流血を無意味にしないために。此処で散った嘆きを忘れないために。そうして戦い続けて、憎み合って、死の数を競い合って、否定して……それで何になるのだろうか。そうして生まれるのは新たな呪いと流血、戦場だけ。それでは何も変わらない。新たな嘆きを悪戯に増やし、最後には何も残らないのだから。

人々は死を増やしたいから戦った訳じゃない。戦った先に幸福があると信じたからその手に銃を取ったのだ。そうした誰かの為にも、争いはこれで終わりにしなければ。憎み合い、血で汚れた荒野にも花が咲く事を証明しなければ。

———そうでなければ、散って逝った命達が救われない。

「青いな、あんたは」

「ええ……この青さを忘れないからこそ、私は此処まで歩んでこれたのですから」

その返答が気に入ったのか、マスターは己の記憶……そこに刻まれた話をすることにした。ほんの気まぐれであり、特に深い意味はない。彼の青さがこの嘆きたちにどんな答えを出すのか気になってしまった。彼ならば救えるのではないかと、思った。思ってしまった。「お前さんはトリニティ総合学園の歴史に明るいかい？」

「人並には知っていますが……それがどうかされました？」

「いや、これから話す事がトリニティに関係する事だから聞いただけさ」

そう言い、マスターはコーヒーを飲み干して再び口を開く。

「アリュス分派を知っているかい？」

「……ええ、知っています」

「そうかい、なら話は早い。そうさな……儂等の世代は、爺さん婆さんから昔の惨状を聞かされて育つておる。そりゃ、酷いものだったよ。特に、第一回公会議後の……アリュス分派への弾圧は、震え上がるほど恐ろしかった」

座る彼は真剣な表情、或いは痛みを堪えるような表情で話を聞いている。

「とは言っても、今は知っている人間の方が少ないと思うがね。トリニティでも知らん生徒さんが大半だろうし、知っているとしたらそれこそティーパーティーの御仁か、シスターフードの方くらいしかおらんだろう。人は移ろいやすく、忘れる生き物だ。過去の悲劇も憎悪も、伝承者が途絶えれば直ぐに風化する。無論、それも悪い事ばかりじゃない。だが——」

「決して忘れてはいけない事もある」

「その通りさ」

吐き出された煙が吸い込まれて、空中にマール模様を描く。

「分派が連合を組むことに反対した、それだけで武力制圧の対象になったのさ。昔の事だ、何方が先に手を出したかは分からない。だが、それでも多数派が少数派を徹底的に殲り殺しにしたのは変えられない事実だ」

「……」

「少しでもアリウス派を庇う姿勢を見せると肝を抜かれたらしい。匿ったから見せしめに火炙りにされたらしい。尤も、どこまでが本当なのかは分からない。だが、そんな話が弾圧の数世紀後に生まれた儂等に語り継がれるくらいには酷いものだった」

どう考えても休みを楽しみに来た彼に伝えるべき話ではないだろう。聞いているだけで気が滅入りそうな、昏く辛い話……だが、それでも彼には不思議と伝えなければならぬ事だと感じてしまった。

「迫害され、追い詰められ、何もかもを奪われたアリウス分派が最終的にどうなったのかは記録には残っていない。ユステイナ聖徒会……シスターフッドの前身に匿われて地下に逃がされたのだ、逆にユステイナ聖徒会が皆殺しにしたのだの、或いはキヴオトスの外に行ったのだの、眉唾物の話が残っている程度さ。だけど、重要なのはそこじゃない」

「マジョリティがマイノリティを徹底的に弾圧した行為そのもの……或いは、マイノリティが弾圧の果てに表舞台から姿を消してしまった事」

異端と見做されたこと。大多数と違う何かと扱われたこと。大多数の利益にならないと判断されたこと。大多数の共通の敵とされてしまったこと。

その果てに、徹底的と呼べるほどに弾圧されてしまった。最終的には表舞台に居られなくなってしまい、姿を消してしまった。

——単純に悲劇と呼ぶにはあまりにも、その嘆きと痛みは大きかった。

「だが……連合を組む動きも、それを阻害する動きも、元は善意から始まっている事だ」

「善意……か」

「ああ、両方とも自分達の集団をより良くしたいという善意から生まれた。いい生活をしたとか、そういった普遍的な願いさ」

「だけど、それが交わらなかつたから争いが生まれた」

「そして、その果てが徹底的な弾圧だ。より良い明日を求める気持ち、誰かの明日を踏み躪ったのさ」

「……救われませんか」

彼は酷く痛ましい表情を浮かべる。それは遠くの誰かの痛みと共に感じているような、或いは大切な人の痛みに寄り添っているような……不思議な色を持っていた。

それを見て、マスターは確信する。彼こそが救世主であると。痛みに愛され、苦しみに愛され、他者の痛みと苦しみを背負いながら、運命の時まで生きる者……この閉じた箱庭に変革の鐘を鳴らす、皆から望まれた者だ。

——その時、不意に入店のベルが鳴る。マスターは彼との歓談を切り上げ、店の主としての顔になった。

「今日は新しいお客さんが2人もいらつしやったな……1人かい？
席はお好きな所に」

店に入って来たのはヴァルキューレ警察学校の制服を纏った少女。制服を纏っている事から学生の身分である事は分かるのだが、その立ち振る舞いや雰囲気は学生のそれではなく、非常に落ち着いていて気品がある。場慣れしている、と言うべきか。

少女は会釈をし、真つ直ぐとカウンターに向かって来る。座る場所は彼の隣。椅子を引き腰を掛けると、彼は少女の方へ振り向き微笑んで。

「久しぶり、カンナ」

尾刃カンナ。ヴァルキューレ警察学校の生徒にして対テロ部門である公安局の局長。このキヴォトスではそれなりの有名人で、『狂犬』と呼ばれ恐れられている。非常に厳格かつ、自身の正義に真つ直ぐな在り方は眩しくて……思わず目を細めてしまいたくなった。

「ご無沙汰しております、先生。お身体は大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫だよ」

先生と呼ばれた彼はにこやかに微笑みながらメニュー表を差し出す。『私の奢りね』と言外に言う彼にカンナは遠慮しようと思ったが、こうなった彼は多分どうにもできないため甘んじて受け入れる事にした。カンナはメニュー表に視線を滑らせ、コーヒーマットを注文した後……意図的に声量を落として彼の耳に口を近づけた。

「先生、この後時間はありますか？ 耳に入れておきたい情報が幾つか」

「勿論、私もカンナに聞きたいことがあるんだ」

「聞きたいこと、ですか」

「多分だけど、カンナが私に話したいことと関係してると思うよ」

思考の先読みをされたカンナは「やはり、敵いませんね」と苦笑いを浮かべて。

「では、詳しい話は後ほど」

それまではゆっくりと時間を過ごす事にした。



コーヒーを飲み終わり、会計も済ませた2人はタクシーを捕まえる。向かう先はヴァルキューレ警察学校の本部、カンナの仕事場。

スモーク張りの防弾ガラス、ブラインドで目隠しされた窓、盗聴対策も完備された部屋。先生は自身のスマホの表示が圏外になっている事を確認し、電源を落とす。

「最近発生しているヴァルキューレ警察学校の生徒を狙った襲撃事件をどう存知でしょうか？」

「勿論。今月だけでも同様の手口の事件が数件発生しているのも、ね」

「ええ、ヴァルキューレ我々も総力を挙げて調査していますが……」

「進展が芳しくないんだね」

先生の言葉にカンナは「はい」と返す。やはり、歯痒いのだろう。同じ学校の生徒……同僚、同期、後輩が何人も襲われているというのに、犯人の逮捕どころか足取りすら掴めない現状が。

「犯行には何が使われたか分かるかい？」

「正確には分かっていますが、首に圧迫された痕があったため絞められたものだ」と

「銃とかではないのか。圧迫痕に指紋とかは……」

「残っていないですね。恐らく素手ではなくロープなどを使ったものだ和我々は推察しています」

ファイルの中から取り出した写真は被害者の首をアップに写されたもので、そこには確かに何らかで絞められた痕があった。カンナの言う通り、その痕は手ではなく別の……それこそロープのようなものが使用されたと分かる。

凶器に銃を使わないのは珍しい。というよりも生徒が日常的に携帯している物の中で被害を与える事ができるのは銃程度しかなく、それ以外となれば何らかの目的が無ければ鞆の中に入れる事はないだろう。

つまりこの犯行は計画的なもの。分かっていたが、やはり犯人は明確な目的や動機があつてヴァルクューレの生徒を襲ったのだろう。

これまで与えられた情報。まだ分かっていない未知数の情報。それらを統合し、犯人の目的を探るために思考を回していると「先生」と呼ぶ声が聞こえた。

「此処から先はヴァルクューレの中でもごく限られた者しか知らない話です。なので他言無用でお願いします」

その言葉に静かに、されど強く頷くとカンナは口を開く。

「被害者ですが……恐らく血を抜かれています」

「……血を？」

——きな臭くなってきた。

「首以外にも腕に圧迫痕があり、その下に針で刺された痕があります。恐らく意識を落とした後に血液を抜いたものだ」と

「それは全員？ それとも……」

「これまで発生した18件全てで、です」

「……」

血は何かと結び付けられる傾向にある。その最たる例はワインだろう。救世主の血は葡萄酒とされ、それを呑む事が新しい契約を受け入れる事を意味するようになった。

或いは、魔術的な意味か。魔術に於いて体液はその人物を表し、儀式に使う道具とされ、血はその中でも最もポピュラーなものだった。血と血の交わり、血で印を記す。呪い。

何の理由もなく血を抜いただけとは思わない。必ず何かに使った

めに抜いた。何のために？ それは不明だが……どう考えても穏やかなものではないだろう。

「血を抜かれた理由は不明です。抜かれた量自体も多くはないので、失血死を狙った訳でもないでしょう。であれば他の理由、血を抜かなければならない何かがあったと考えるのが妥当ですが……考えれば考えるだけ相手の動機が読めず、却って不気味です」

「そうだね……間違いなく何かはある。だけど、その何かが不明だ。警戒しなきゃいけないのは確かだが、そもそも何に警戒するべきかが分からない。今やれるのは再発防止くらいか……何か対策は？」

「単独行動の禁止、ツーマンセルの徹底、外出中はトランシーバーで所属支部とリアルタイムで通信を行い位置情報を共有する……現状はこの程度を」

「流石だね。今打てる手としてはそれがベストだ」

カンナは「本当は監視カメラの設置もしたいですが、予算の問題もあるのだ」とため息交じりでそう言う。やはり予算には誰もが苦しめられるものなのだ、なんて思い……先生は渡されたファイルを閉じた。

「ありがとう、この件は私の方でも調べておくよ。何か分かったらまた連絡するね」

「ご協力感謝します、先生」

敬礼するカンナに合わせるような形で敬礼すると、それがあまり似合っていないかったのか、それとも不格好だったのかカンナに笑われてしまい……先生も釣られて笑ってしまった。

断章II

閑話／哀歌（ラメント）

「……」

先生は階段を下りていく。一段降りる毎にテクスチャが変わる、キヴオトスではない異界になる。過去未来現在、古今東西あらゆる法則が混在したこの空間はおよそ生命が生存するには適さない。オートマタを含むキヴオトスの住民は勿論、ヘイローを持つ者であったとしても内側と外側が反転して即死する。

それらよりも遥かに生命としての強度が低い彼が生存できているのは偏にシツテムの箱のおかげだ。画面がひび割れ、教室が破損し、混沌領域でしかあの子が存在できなくなったとしても……それでも、その力に不足は無い。先生を守るといふ一点では他の追隨を許さないほどに、その性能は隔絶している。

刻一刻と変化していく法則に対応するかの如く、刻一刻とその性質を変えていくシツテムの箱の浄化作用。有害な法則を無害なものへ、生存に適したものへと変え、先生は最下層を目指して進んでいく。惑星の内海……マントルの更に奥、星の核に近い部分……その裏側に向けて下る。

その先に在るのは生命を拒む異界常識。色彩の浸食すら跳ね除けた神域、キヴオトス原初の姿。神秘という法則が満ちる前の星が在る。

整備された現代的な階段は次第に石の段になり、獣道になり、果ては坑道になる。人の手の入らない場所まで来たという証明。ここまで来たなら距離は意味を成さない。シツテムの箱の権能を使用し、星の表層から一氣に目的地まで向かおう。シツテムの箱を持っているとはいえ、此処に長く留まると危ないのだから。

ごく限定的な空間跳躍。自身を目的地に転送するのではなく、場所と場所の距離を圧縮して0にする。それを駆使しながら1歩で数km単位を進み、最下層を目指す。

吹き抜ける風は原始的な神秘に満ちており、鳴り響く重低音が鼓膜を叩く。軋むフィルターは碎ける一步手前まで酷使されるが、あの子の意地が彼の命を守り続ける。それを頼りにして、あの子の存在を確かめて、先生は最後の一步を踏み出した。

「……ッ」

切り替わった風景。少し開けた場所は原始的な洞窟の様相を呈していて、辺りには無造作に何らかの結晶が生えている。壁面に書かれているのは神話、或いは虐殺の記録。散らばった人骨はほぼ全てが風化していて、どれほどの年月が経ったのかを伺い知れる。勇敢にも世界に挑んだ先達、その成れ果て。

先生は目を伏せ、膝を折り、祈りを捧げる。どうか安らかに眠ってほしい、と。祈りの心に貴賤はなく、誰かに捧げる思いに本職も何も無いとシスターフツドの生徒達はよく言っていた。

少し経って、先生は立ち上がる。翻る白い制服はまるで死に装束。進む一步に乱れはなく、先生は約束の場所……この奥に向けて歩み出した。



「来たよ、黒服」

不機嫌さを隠そうともしないぶっきらぼうな声の先には黒の異形。緩慢な動作で振り返った黒服は伽藍洞の瞳を喜悦に歪めた。

「——— 定刻通りですね。いやはや、貴方らしい。お待ちしておりますよ、思想犯^{シンカ}」

「その名はもう棄てたよ。今は唯の先生だ」

先生は毒虫を見るような眼で吐き捨てるようにそう言った。友好的とは口が裂けても言えないような態度に隠されているのは嫌悪と憎悪と怒り。今すぐにでも飛び掛かり縊り殺したい気持ちとぐつと堪えて理性を表に出そうとしているが、隠し切れない感情が言動の節々から漏れ出る。

その表情はあまりにも人間らしかった。達観しているような、風い

だ水面のような……生徒を優しい眼差しで見つめる先生らしい顔は何処にもない。怒りというプリミティブな感情を全面に出し、視線だけで生徒の害を射殺さんとする彼の姿は黒服にとって非常に好ましかった。

誰かの為に怒れるという事は誰かの事を本気で思っているという証明。愛深き彼は傷ついた誰かの為に愛を剣に変え、怒りに変質させている。

「ベアトリーチェ、地下生活者。仏の顔も三度までって言うけど、私は短気だからね。お前達が一回でも生徒に手を出したら、その時点でゲマトリアから脱退すると再三伝えたはずだ」

「ええ、そうですね」

黒服の静かな声が癩だったのか、視線が更に鋭くなる。生徒が見れば怯えてしまうような鋭利さは、しかし黒服の表情を変えるのには至らなかった。

「それにも拘らず、お前達は手を出した。元々お前達を仲間とって
いなかったが……ゲマトリアは敵だよ。優先排除対象の、ね」

「随分嫌われてしまいましたね、我々も……ああ、先ベアトリーチェと地下生活者の2人はどう
されましたか？」

「殺したよ。この手で。残骸くらいは残ってるかもね」

「左様で」

同胞2人を殺されたというのに黒服の反応は酷く淡泊だった。本が倒れたとか、ジエンガが崩れたとか、その程度の認識。一切の感情を揺さぶられていない。酷くフラットな4文字が、嘗て同胞だった2つの命の手向けだった。

先生はその淡泊さに対して一切の驚きを持っていない。元より、ゲマトリアは仲間と呼称するには些か個人間の繋がりが希薄だった。要請されれば協力する、リスクとリターンが釣り合っていれば一枚噛む、だが基本的には互いに干渉しない。その関係性は仲間というより、不可侵条約を結んでいる間柄に近かった。

だからこそ、先生は2つの命を摘み取った。際限なく悪意をばら撒き地獄を増やさんとするベアトリーチェと、世界を盤面遊戯のように

見ていた地下生活者を。2人をこの世から消し去っても他のゲマトリアは何もアクションを起こさないと知っていたから。

「それで、何が目的で私を呼び出したんだ？ 生憎、今忙しいんだ。無駄話をするために呼んだのなら、その頭蓋にもう1つ風穴増やしてから帰るけど？」

「いえ、無駄話ではありませんよ。寧ろ有益な話をするために私は貴方をお呼びしました」

「有益な、ねえ……」

「ええ、貴方が最も欲している情報です」

先生の表情が訝しむようなものになる。彼が最も欲している情報と一口に言っても多種多様だ。

デカグラマトン
神名十文字が一柱、マルクトが眠る場所。

ベアトリーチエが祭壇で呼び出そうとしていた『神』の名前。

数日前までD・U・地区で暴れ回った『何か』の正体。

ぱっと思いつくだけでもこれだけ。このうちのどれを目の前の異形は入手しているのか。

「ええ、怪しむのも無理ありません。キヴォトスに於いて貴方を情報収集力で上回る者は存在しません。貴方が入手できないという事はつまり、そもそもそのような情報は存在しない事を示します」

「じゃあ、お前は存在しない情報を入手したと云うのかい？」

「ええ、正確には存在しなかった情報ですが」

「何方でも良いよ。言葉遊びをするつもりはないからね」

大方、そういう法則ルールだったのだろう。時に過剰な神秘は物理法則を超越する。同じ弾丸、同じ銃でも、ヒナが使うのと先生が使うのでは齎す破壊規模の次元が違うのだ。

故に今回も同じことが言える。情報を後出しするという神秘ルールが、既存の物理法則を振り伏せた。

「それで、何を入手したんだ？」

「D・U・で暴虐の限りを尽くしたあの怪物についてです」

予想はしていた。このタイミングで態々先生を呼び出すなら、この話以外はありません。先生は乾いた唇を舐めて、唾と共に嫌な緊張感

を呑み込んだ。

数日前、何の前触れもなく突如としてD・U・地区に現れた謎の生命。それは彼や黒服の言う通り暴虐の限りを尽くした。最終的には先生を含むシャーレの戦力により倒されたが……その勝利も盤石なものではなく、分の悪い賭けに勝った結果に過ぎない。

狐坂ワカモ、錠前サオリによるシャーレのオフィスビルを餌としたトラップ。

剣先ツルギによる全力の足止め。

美甘ネルによる霊的装甲の破壊。

小鳥遊ホシノによる物理装甲の破壊。

聖園ミカによる星落としての権能。

空崎ヒナによる霊核への全力攻撃。

キヴォトス最強の生徒達が全力を尽くした総力戦は、仮に相手が完全顕現した神であっても撃退できたはずであったが……それでも尚、足りず。

完全展開した天命と天理……計2種類の礼装を使い潰した。

未完成品ながらも極限の殺傷能力を持っていた礼装、獣殺しを自爆特攻同然の運用で使用した。

シツテムの箱の制限解除を稼働させた。

世界を歪める権能を計4回、起動させた。

先生も生徒も、シツテムの箱のOSたるあの子も限界を超えて戦い、それで漸く倒せた。倒す未来を手繰り寄せた。薄氷の上の勝利であり、そもそも何故勝てたのか不思議なくらいだった。

被害の規模はD・U・地区全体と、隣接する学園自治区の一部。サントウムタワーとシャーレのオフィスビルは文字通り消滅し、それ以外の建物群もほぼ全壊。地区全体がまともに人が住める場所ではなくなってしまった。現在はリオとヒマリ、先生が連名で解放したエリドウに移住してもらっているが……それも一時的、永住してもらう訳にはいかない。

故に必ず復興させなければならぬのだが、被害の全貌すら分かっていない現在では着手も何もできなかった。大きすぎる被害の把握

が目下の悩みの種であり、それ以外の事……あの怪物の正体の解明には回す余力は無い。それこそ、情報が出現している事にすら気付かないほどには。

——他にも、先生を苛んでいるものはある。手に持つ割れたシツテムの箱。あの戦いで負荷を掛けすぎた結果、教室が破損してしまった。

幸い、中にいるあの子は無事であったが、あの子の帰る場所である教室は失われてしまい……あの子は『先生をサポートするのに不足はありません』と言っていたが、そういう問題ではないのだ。

最優先でどうにかしないとダメだと思っているが……現在に至るまで補修の手立ては見つかっていない。

あの子への罪悪感と自分への怒りと憎悪で内心が押し潰されそうになるが、今は目の前の異形と対峙している。自罰は後で幾らでもできるからと、思考を切り替えた。

「それで、アレの正体は？ 大方、終末悪の出来損ないか何かだろうけれど」

「ええ、先生の仰る通り、アレの正体は終末悪のレプリカです」

やはり、と先生は息を吐く。何となくであるがそう思ったのだ。あの攻撃性……執拗と呼べるほどに生命を狙っていた。眼の前で銃を放つ相手よりも自身の背後で逃げ惑う住民に牙を剥き、多くの命がある場所を最優先。如何に早く、多くの人を殺せるかに執着していた。その性質が『世界を終わらせるもの』から生まれたものであれば色々と納得できる。

「……出典は」

「主となったのはゾロアスター教の経典、アヴェスター……その偽典です」

「アヴェスターの偽典？」

正典、外典、偽典。それら3つはアブラハムを始祖とする教え……そこで頻出する用語だ。

正典とは宗教において公式に信者が従うべき基準として確立されている文書を示している。

外典とは正典とする主張があつたが除外された文書を示している。そして、正典と外典は宗派や時代により入れ替わり、ある宗派で正典と扱われていても、別の宗派では外典として扱われる事がある。

これに対し偽典はそもそも正典として認められた事が無い文書群を示している。或いは、異端の文書とも。

エノク書、モーセの遺訓のようにヘレニズム文化の影響を受けた旧約文書の再解釈。

ユダの福音書、ヨハネのアポクリフオンのようにグノーシス主義の立場から書かれた文書。

ヤコブ原福音書、トマス幼児福音書のように当時の噂話を集めた文書。

これらは正典や外典を元にして書かれた文書、聖人等の名を借りた偽作の総称であり、時代によっては異端扱いを受けたものもある。特に内容に問題があると見做されたものは教会により研究が禁止され焚書の対象となつたため、現在ではそれらの元の文書は失われ過去に引用された文書のみが残っているケースもあるそうだ。

このように、正典でも外典でもない……偽りの名義で書かれた聖典の創作、聖典を元に書かれたものが偽典である。

尤も、エチオピア正教はヨベル書とエノク書を正典として扱い、これら以外にも偽典は一部宗派に於いて外典として扱われるものもある。そもそも、偽典という分類は成立年代の遅さ、あるいはその後の教会における異端認定などによるもの、現在まで生き残った教派における扱いによるものであり、実際には偽典に分類される書のリストは流動的だ。

———ここまでが唯一神を父とする教えの偽典の話。此処から先はアヴェスター……ゾロアスター教に於ける偽典の話だ。

ゾロアスター教は古代ペルシアを起源とし、ネオペイガニズムを除くと現存する宗教の中では最長の歴史を持つとされる。善の象徴として純粋な火を尊ぶことから拝火教とも呼ばれ、その来世観や終末論はセム的一神教や仏教にも影響を与えたとされ……最古の一神教と言われる事もある。

特徴的なのは善悪二元論と終末論だろうか。世界は善と悪の二項が争う場とされ、最終的には善の勝利が約束されている。世界の終末には生者も死者も改めて選別され、全ての悪性が滅ぼされた新世界で最後の救世主により永遠の命が与えられる……所謂、最後の審判。アブラハムが持つ信仰とよく似たものをゾロアスターも所有している。そして、そのゾロアスター教の聖典がアヴェスターだ。その内容は善悪二元論の神学、神話、神々への讃歌、呪文等から成り、大きく分けて以下の5部から成立している。

祭儀書であるヤスナ。

ヤスナに手を加えた補遺的小祭儀書であるウイスプ・ラト。

除魔書であるウィーデーウ・ダート。

21の神々に捧げられた頌神書であるヤシユト。

日常的に使用する比較的短い祈祷文を集めたホウワルタク・アパスターク。

この5つがゾロアスター教の聖典であり、正典。この5つのみがアヴェスターだ。

故に、アヴェスターに偽典は存在しない。存在しないものが主となった、と言われれば誰だって懐疑的になるだろう。

「先生の疑問は最もです。アヴェスターに偽典は存在しません。偽典は勿論、外典さえも。5つの聖典のみがアヴェスターであれば、それに対する番外などありません。そもそも、アヴェスターは成立当初から一般信徒に広く権威を認められた訳ではなかったからです。記述されたペルシア州から離れた地域では一般信徒はおろか神官ですらアヴェスターを知らぬ者が居ました。偽典や外典が成立する地盤が存在しえなかったのです」

「だが、事実としてアヴェスターの偽典を用いた何かはキヴォトスに牙を剥いた。なら、あるんだろう？ 無いものが元になった存在があるなら、そもそも無いという前提が間違っていることになる」

「ええ、その通りです。事の仔細がどうであれ、キヴォトスにはアヴェスターの偽典が存在します。確実に」

面倒なことになった、と先生は内心顔を顰める。これからは存在し

なかったものを探さなければならぬなんて。それも、最優先で。黒服が態々時間を作り、誰にも聞かれない場所で伝えたという事はつまり、そういう事だ。再発する可能性がある、この黒い男は言っている。

「先生はアヴェスターの偽典がどんなものか、想像できますか？」

「さあね。でも碌でもない悪性情報の塊だっつのは分かるよ。何せあの終末悪を叩き起こしたんだ。エッセンスとして黙示の四騎士や獣も含んでいたとは思うけれど、それらと反発せず融和できる時点で最悪なのは火を見るより明らかさ」

その返答に満足したのか黒服はパキパキと音を立てながら笑みを深めて……背を向けて歩き出していた彼に「時に先生」と声を掛けた。帰ろうとしている最中を呼び止められ、振り返った彼は『まだ何かあるのか』と言いたげは不機嫌な表情。

「サンクトウムタワーとは何かご存じですか？」

「……アレの本質は『光の柱』だ。世界の法則を縫い付けるための柱。世界の表と裏を貫く針のようなもの。簡単に言えば、アレは国産みの権能そのものだ。天逆鉾やローマの大樹と機能そのものは大きく変わらない。キヴオトスが現在の姿になっているのは、アレが世界の表と裏を縫い留めているから。アレが万が一剥がれ落ちれば、キヴオトスは原初の混沌に戻る」

——即ち、あらゆる神秘が飽和する地獄へと。

「では現在の……サンクトウムタワーが破壊されている状態は少々拙いのではないですか？ 今のテクスチャが剥がれ落ちるのは貴方も生徒も望まない筈です」

「そこは大丈夫だ。確かにサンクトウムタワーは最も分かりやすく大きい楔^点だけど、楔は1つじゃない。他にも幾つかあるし、^{世界の基準点}シツテムの箱にも楔の機能がある。少なくとも、今すぐ修復しなければ世界が危ない訳ではない。今は放置しても問題ないさ」

サンクトウムタワーが繋ぎ止めている現在の^{テクスチャ}世界法則。それが成立したのはいつ頃か不明であるが、恐らく当代の知性体が星の霊長となったタイミングだろう。

今の知性体が活動しやすい法則、生存しやすい法則、次に続きやすい法則。過剰な神秘はアーカイブ化されるか、或いは天使の光輪（イロ）に形を変えた。神秘は肉体の強度を底上げし、死に難く傷つき難い生命へと進化。キヴオトスの生命のフォーマツトは神秘を前提としている。では——そもそも、神秘とは何だろうか。キヴオトスでは当たり前のものであり、キヴオトス外部には存在しないもの。キヴオトスではあつて当然のものであるからこそ、誰も疑問を抱かなかつた。だが、先生やゲマトリアは違う。彼等は異邦の生命であり、神秘が超常だつた世界の住民。故に、その『当たり前』を疑い、疑問として提唱できる。

——それこそが、このキヴオトスを真の意味で救済するための必要条件だつた。

「神秘とは、何だ？」

神秘とはエネルギーである。神秘とは物質である。神秘とはエネルギーである。どれも正解であり、異論を唱えるつもりはない。だが、神秘の本質を考えるならば、それは。

「私は神秘を道（ルト）……或いは設計図だと思つている。遺伝子の奥深く、ヘイローに刻まれた起源。神に至るために必要な経路（パス）。尤も、それを正しく認識できるか、認識できたとしても最奥に至れるかはまた別の話だけだね」

例えば、トリニティ総合学園のティーパーティーの3人。彼女達は世界最大信仰を誇る神話、その聖典に名前が記されている……神に最も近き者達の神秘を保有している。

聖園ミカは神（ミカ）の如（カ）き者、桐藤ナギサは神（ラファエル）の薬、百合園セイアは神（ガブリエル）の力。

この3人の内、自身の神秘を正しく認識しているのはセイアとミカ。特にセイアは予知夢という特殊な才能を開花するのに至つており、神秘への理解度だけならミカの二枚は上を行く。

だが、そんなセイアであっても神秘の最奥へアクセスできなかつた。彼女達3名の内、最奥に至れるのはミカだけ。要因は色々と考えられるが、やはり最たるは神秘の総量と出力だろう。ミカにはそれを

満たすだけの神秘エネルギがあり、他の2人にはそれが無かった。

当然ではあるが、神秘があればあるだけ良いものではない。その最たる例がセイアで、彼女は予知夢が原因で夢と現の境界線で彷徨ってしまう事があった。紆余曲折の果てでセイアは無事に戻って来れたが、その過程で予知夢を失っている。強すぎる神秘はその身を蝕んでしまうのだ。セイア然り、アスナ然り。

そして……先生はセイアの選択に希望を見た。己が神秘を手放した、セイアに。

彼を復活の器として消費し、この世界に生まれ堕ちる唯一神。この器に刻まれつつある神秘と経路を手放す事ができたなら。いや、自分だけではない。神秘により傷ついてきた人々は沢山いる。

——— 彼女達を救う事ができるなら、私は。

「私は、全ての神秘を……」

——— ある回帰の会話より抜粋。

虚無はもういないあの子の夢を見るか

夢を見ていた。始まりの夢。私が先生わたしになった日の、夢。

幸せだった。満ち足りていた。愛した生徒達が居て、優しい人々が居て、理解者たる連邦生徒会長が傍にいてくれる。シツテムの箱の中のあの子も段々感情豊かになってきて、心に落とす影なんて一つもなかった。

強いて言うなら、ふとした時にどうしようもなく寂しくなってしまうったり、触れ合う度に皆との断絶を意識してしまうことくらいか。でも、それはちゃんと受け入れている。自分と彼女達は違う生き物で、本来なら交わる事すらなかったのだ。それが交わり、こうして共に歩めているなら、それ以上を求めるのは高望みというものだろう。寂しいのは確かだし、断絶しているのも事実だけれど、それでも手を取り合って前に進めると他ならぬ彼女が証明してくれた。私に手を差し伸べてくれた、彼女が。ならば私も斯く在りたい。彼女のように、と言うつもりはない。私は先生わたしらしく生きると決めた。

——この惑星ほしの上で、君と蒼穹を見上げて生きる。それこそが、私の人類証明。



夢を見ていた。終わりの夢。私が救世主遠い誰かになった日の、夢。

幸福も、居場所も、何もかもを失くした。否、失くした訳ではない。そもそもそんなものは最初から与えられていなかった。

キヴォトスが存続するための体のいい生贄。唯一神が復活するための入れ物。望まれた事を望まれたように行う舞台装置。

連邦生徒会長は云った。貴方は伽藍洞であると、空っぽであると、漂白されていると。寂しそうに、痛みを堪えるように……或いは赦しを乞うように。そう言った彼女の気持ちをあの時は理解できなかった

たけれど、今なら分かる。優しい彼女は看過できなかつたのだ。私が最初から虚無であつたことが。

誰のせいでもない。君のせいじゃない。■■■のせいじゃないよ。そう言つてあげても、あの子の顔が終ぞ晴れる事はなかつた。あの子はずつと泣いていた。私の為に。私の未来があまりにも暗いから。

だから私は、泣き虫だつたあの子の涙を拭いたかと思つた。あの子が私を忘れて、あの子が愛した世界でもう一度大輪の笑顔の花を咲かせてほしい。あの子の笑顔をもう一度、あと一度見たい。

……幾つか、悔やむ事はある。

あの子の涙を奪つてしまうこと。

あの子に明日を押し付けてしまうこと。

生徒の皆に何も言えなかつたこと。

生徒の皆を置いて逝つてしまうこと。

死ぬことを恐れなかつたこと。

沢山の感謝を伝えきれなかつたこと。

でも、その後悔も今は飲み干した。ずっと痛いけれど、それでも前はちやんと向けるから。

——この惑星ほしの下で、皆のために身を捧げる。それこそが、私の存在意義。



生命の息吹を欠片も感じない地平。全ての命が蹂躪された世界。先生は血塗られた平野を彷徨い歩く。息絶えた人、或いはこれから息絶える人。一人一人手を取り、看取り、どうか安らかにと祈りを捧げ、臨終を見届けてからまた次の命を求めてふらふらと歩く。

そうして全ての命を終えた先生は赤く染められた空を睨みつけた。絶対に許す訳にはいかないと、声高に。この悲劇を成した世界の構造そのものに異を唱える。

神秘と謂うシステム。忘れられた、名もなき神々の残滓。少女達の最奥に刻まれた太古の記憶であり、道。或いは——神が少女達を

手繰るための糸。

故に、神秘がある限りこの世界が『神の実験場』である事実は消えない。神秘を持つ愛し子達が黒幕気取りで踏ん返り返っている外道に糸を引かれている現実には確かにそこに在る。

「仕方がなくなんてない」

だからといってこんな^{不条理}悲劇が認められるかと問われれば、それは否だ。認められる訳がない。受け入れられるものではない。キヴオトスでは神秘と謂うシステムがベースになっているから、そこで生まれる悲劇には目を瞑れと、仕方が無いから諦めろ言われて……そんな理屈で納得できるものか。

「悲劇を前に涙を堪えて唇を噛む必要なんてない」

悲劇は忘却の彼方に追いやられた。涙の痕は消し去られた。悲しみの理由すら奪われた。

そんな事がもう二度と起こらないように。二度と、世界のシステムで誰かが傷つかないように。

「誰もが当たり前前に憤れて、誰もが当たり前前に疑問を持てる真つ新たな世界を」

悲しければ泣けて、腹が立てば怒れる世界を。全ての人々がこの世界に対して疑問を持ち、その疑問が力を前に踏み潰されることが無いように。誰もがたった一つの尊い命として世界に実在できるような、狂おしいほどに透き通った真つ新たな世界を。

「誰もが当たり前前に笑える世界を取り戻す」

神の実験場ではないみんなの世界を取り戻さんと、傲岸不遜にただ一人。

「私が、この手で」

先生は世界に挑んだ。

「———全ての神秘を根絶する」



星が良く見える場所。このキヴオトスに於いて二番目に天に近い

場所に気付いたら先生は立っていた。シャーレオフェイスビルの屋上。深い青をキャンバスに浮かぶ過去の光源すらその手で掬い取れそうなほどに宙がすぐ近くにある。

懐かしいな、と先生は思う。此処に立つのは久方ぶりだ。定期的な掃除もドローンに任せているし、自分の足で直接踏み入れたのは……それこそ、ノドカに手を引かれたとき以来か。

この場所にはめっきり寄り付かなくなってしまった。別に高い所が嫌いとか、そういった明確な理由がある訳ではない。ただ、何となく。自分一人でこの場所に足を踏み入れてしまうと、あの子との思い出を土足で踏み荒らしているようで気分が悪くなってしまうから。

——— そうだ、あの子は此処が好きだった。星が良く見えるから。この場所でのみ、あの子は超人と呼ばれる連邦生徒会長から、ただの女の子になる事ができた。弱音や不平不満、愚痴、聞いてもいない体重の増減とか、最近のアニメや漫画がどうか。日の終わり、太陽が落ちてからあの子はふらっとシャーレに現われて、有無を言わさず先生の手を引き屋上まで連れて行き……取り留めのない話を話した。

あの子と夢の話をした場所も此処だった。その日は過去に例を見ない異常気象で、寒冷地域でもない場所でもオーロラが観測できた。そんな貴重な日にオフィスに籠って仕事してるなんて勿体ない、なんて言っただけの子は先生の強引に手を引いて外に飛び出した。

遮るものがない空の下、暗黒の帳に掛かる光の帯。あの子は終始満足げに、嬉しそうにオーロラを眺めていた。楽し気な感想は自分自身に贈るものと、先生に贈るもの。

『私達は、沢山のものを見るんです。綺麗なもの、美しいもの。そういったものを積み重ねて、遠くの空へ歩んでいくんです』

あの子らしい言葉。それを聞いて、先生も口を開いた。会話は弾んで、互いに夢の話をした。何処かで交わるかもしれない、大切な夢の話。互いに否定する事はなく、ただ『そうできたらいいね』と笑い合っ

て。

——— 1時間にも満たない天の極光。あの時の彼は、先生ではな

くただの青年に戻っていた。

キヴォトスに於いて『超人』と呼ばれ、様々な人物から畏怖と尊敬を一身に集める連邦生徒会長。

キヴォトスに於いて明確な異物で、誰とも同じ空を抱けず孤独を歩むしかない先生。

この2人は共に生贄だった。この星の自転を続けるための人身供物。終わりを先延ばしにするための延命措置。

超人の運命を異物は否定し、その罪と運命を背負うことを選んだ。超人はいつか消え去る異物を助けるために生身の肉体を捨て、異物の為の基準点となった。

誰かのために。大切な人のために。世界のために。あなたのために。見返りは誰かの、あなたの笑顔。あなたが明日を願い、笑って生きてくれたらそれでいい。

故に、これは愛の話だ。例え自分がその先に居なくても、少し先の未来に自分の居場所が無くても構わない。あなたが幸福ならそれで構わないと、大切な人のために祈り続けた誰かの幸福論。

——だからこそ、その全てが反転する。

「——先生」

聞きたくて仕方なかった懐かしい声。逢いたくて逢いたくて、どうにかなりそうだった人の顔が脳の裏側に思い浮かぶ。

それと同時に、これが夢であると先生は確信した。あの子はもういない。どれだけ泣いても、願っても、もう彼女には会えないのだ。

だからこれは大脳皮質が作り出した記憶のリフレイン、或いは継ぎ接ぎ。脳の中核は夢の底で揺蕩いながら、ある筈のない幻影を生み出している。身体の奥、不明な器官からせり上がって来た仄暗いどぶは意識の表層を無差別に引つ搔いて『早く目覚めろ』と警鐘を鳴らした。だけど、この夢から醒める事を拒むように耳の中からガラスを引つ搔くような音が聞こえて、三半規管が捻転して世界がマーブルの奥に沈んだ。

狂い続ける自分の感覚。それに反して正常な自分の意識。二律背反のそれらに挟まれて蹲ったまま動けなくなった先生を連邦生徒会

長は憐れむような色で見下ろしている。

「先生、貴方は罪を犯しました。たった一つだけ……とても大きな罪を」

少女は告げる。彼の罪を。ここまで彼を追い詰めてしまった自分達も同罪だと内心で嘲笑しながら、それでも告げなければならぬのは彼の罪だから。彼が背負うべき、彼しか背負えない重荷。責任の話。

彼は多くを背負った。この世界に生きる人々の意志。明日を願う祈り。より多くの幸福。

彼は多くの笑顔を報いにした。自分ではない誰かが、世界に多くの花を咲かせてくれることを祈って。

彼は戦い続けた。キヴォトスで、多くの悪意と。傷つきながら、血を流す体を引きずって。手足が腕がれようと、心臓さえ動いているなら。心臓が消えても、脳が生きているなら。脳が停止しても、新たな肉体でリスタート。そこに安らぎも休みもない。キヴォトスのために彼はその身を殺し続けた。

彼はそうしないと生きられなかった。そうする事でしか呼吸を許されなかった。キヴォトスで彼が生きるためには自身の幸福を捨てなければならなかった。その細胞一片さえ全て、キヴォトスとそこに生きる人々に捧げる。それだけが彼に許された道。

故に、彼は望みもしない戦いに明け暮れた。星を滅ぼすもの、作り出された敵。常に自分の命に手が掛かっているような状況は日常の中で殺し合いなんてした事が無い、何の影も持たない普通の青年には重すぎた。

だが、彼は先生だから。生徒に弱音は見せない。本当の姿を晒さない。どんな時でも頼れる大人を精一杯演じる。弱音も弱点も出さず完璧に、されど人間味を忘れないように。

命を容易く貫く銃口を突き付けられても臆さず、震える足を踏み潰して生徒の為に。

誰かの悪意に傷つけられようとも笑顔は欠かさず、誰かの助けになれるように。

自分の命と誰かの命を天秤に掛けられたとき、迷わず自分以外を選べるように。

戦いたくない。殺し合いたくなんてない。皆で手を取り合って、笑って生きられたならそれで良いだろう。

でも、それは今、叶わないから。それを願うばかりでは何も守れないから。何もかもを取り零してしまふから。だからその手に力を取った。その選択をずっと続けてきた。

平和を叫びながら、その手に握るのはいつだって誰かを傷つける道具。差し伸べた手の先に在るのは笑顔ではなく、誰かの怯えた眼。見下ろした手には屍山血河の成れ果て。誰かの意志を踏み潰した己の罪悪。夥しい量の死体と血で作られた、呪われた足跡。

こんな事がしたくて戦った訳ではない、こんな光景が見たくて抗った訳ではない。でも、戦わないと、抗わないと。もっと多くの血と涙が流れて果て無い争いを呼んでしまふから……今はこの手に力を選ぶ。誰かと手を取り合うにはあまりにも邪魔な力を。

——その矛盾が、ずっと苦しかった。

だが、その矛盾すらも受け入れたのだと自分自身を無理矢理納得させた。これは誰かがやらなければならぬ事で、それが偶々自分だっただけ。星ではなく、生徒側に立ち、彼女達に肩入れすると決めたのは他の誰でもない自分だ。この道が、血で塗り固められた旅路が先生として生きる事を選んだ自分の責任。

だから、迷うな。自分の役目を真っ当しろ。こんな事、生徒にやらせる訳にはいかないだろう。苦しいのは嫌、痛いのは嫌、それは確かにそうだ。だけどそれを他の……ましてや生徒に押し付けるくらいなら、自分がやった方が良い。

そうして走って走って。自分を心配し、引き留めてくれる声達すら置き去りにして走り続けて、戦い続けて。彼方で知ったのはこの世界に於ける自分^{先生}の役目。

この体には他の誰かの神秘が刻まれて、その誰かが使うための入れ物で。

この先生という人格は、いずれ跡形もなく塗り潰されて消える定め

で。

そうして、先生ではない誰かは生徒を殺し、民を殺し、悉くを皆殺しにして、最後はキヴオトスという世界を殺す。

自分は戦いに明け暮れ、望んだ笑顔と平和と幸福を作る事も足を踏み入れる事も叶わず、ただひたすらに悲劇と呪いと殺戮を振りまくしかない人形であると知って。

——ああ、そうだ。分かっていたんだよ、初めから。分かっていたけど知らない振りをした。この世界で、彼女達のために生きたくて目を塞いでいた。でも、『自分が居なければこの世界はこんな形にはならなかったかもしれない』と思った。自分の生存を許しているのは自分だけだと知った。

異物先生の居ない幸福な世界の if もしもを見てしまい、先生の心は折れた。たった数ヶ月。そんな僅かな期間で、何処にでもいる普通の好青年の心は徹底的に壊されてしまった。

それを知るのは連邦生徒会長だけ。彼女だけが彼の最奥に足を踏み入れる事ができた。彼女だけが彼の弱さ知っている。もう、どうしようもないほどに壊れてしまった彼の涙も彼女だけが垣間見る事ができた。

『——生きていたいなんて思った、あの日の私を殺して』

そう言つて、泣いていた彼。

白の装束が皺になるくらいに握り締め、自分の全てを否定していた彼。

目を離れた瞬間、自分の首に刃を突き立てるほどに思い詰めていた彼。

そんな彼を否定するために。キヴオトスに招き、先生にした……共犯者たる連邦生徒会長は彼の罪を告げる。

「自身の命を無価値として、放棄した事」

それこそが、先生救世主に成り下がったと呼ばれた彼が犯した最大の罪だった。



「貴方の命は無価値ではありません。貴方の命には、足跡には大きな価値があります。勿論、意味も」

——でも、私の所為で泣いた人がいる。私が生きているから傷ついた人がいる。

「いえ、意味も価値も……必要さえなくて良いのです。貴方が其処にいる、唯それだけで救われる人がいるのですから」

——結局、何も救えなかった。何もできなかった。私は目の前で泣いている君の涙すら拭えない。

「貴方は生きていていいんです」

——私は、君に『この先』を生きてほしかったのに。

「貴方がただそこに居てくれるだけで、私達は幸せだったのです」
眼を開けた。



「……」

彼の原点、先生として生きる道を選んだ。

彼の終点、誰かのために命を天に返す事を選んだ。

彼の願い、全ての神秘を消し去ることを誓った。

懐かしい夢^{悪夢}から醒めた先生は袖で目を覆い隠す。深夜3時半を回ったシャールには当然先生以外の人影は皆無で、今日は居住区にワカモすらいないため本当に独りぼっち。だが、その方が都合がいい。こんな姿、生徒にはできれば見せたくない。

過去の轍が己を糾弾する明晰夢。忘れるな、と脳髓の深くに杭を打ち込むように浸透させる。罪は罪で、罰は罰。忘れるつもりなんて皆無であるが、それでも人間は忘却の咎を背負って生まれているから、こうして定期的に夢というツールを使用してフラッシュバックさせる。

別に、それに対して何か感情を抱く訳ではない。そもそもこれが初めてという訳ではなく、眼を閉じて、思考をディラックの海に沈めればこの類の夢を見る。ある意味、先生の日常に組み込まれた出来事な

のだ。

どれもこれも、何度も見た事がある夢。自分の記憶。自分の轍。だが、最後だけは違う。最後の夢だけは正真正銘、初めて見る類の夢だった。記憶のリフレインではない。先生にあのような過去はなかった。故に、アレは脳皮質が作り出した都合の良い幻影……：：：そう言い切るには、あの記憶はあまりにも重い。

一挙手一投足、全てがあの子。先生が見間違うはずない。あの夢の中で先生と対話したのは紛れもなく彼女だった。

——先生は知る由もないが、彼の夢の中に居た連邦生徒会長は本物である。記憶の継ぎ接ぎで作られた偽物ではなく、シツテムの箱を介して彼の夢に干渉した彼女本人。夢に干渉し、彼の記憶に最も残るタイミングで……言うべきだった、言いたかった、だけど言えなかった言葉を告げた。呪いではなく祈り。『貴方は生きていい』という、彼の全てを知る彼女の細やかな願い。

だが——自分が生きていいなんて言葉、先生は認める事なんてできなかった。それが例え、彼女の心からの祈りであつたとしても。

「はッ……」

それは捨^{弱さ}てたはずなのに、と当たり前のように嘲笑。音もなく右眼から流れた一筋の涙痕を拭った。

第一の落陽、楽園の証明

「……つまるところ、エデン条約というのは、『憎み合うのはもう止めよう』という条約だ」

吟遊詩人が琴を奏でるが如く、少女は言葉を音にする。そこに在るのは歴然たる真実であり、少女の存在そのもの。

風が吹く。髪が靡く。ティーカップに注がれた紅茶の水面が揺れる。

トリニティ総合学園、最奥。トリニティの中でも限られた生徒……ティーパーティーの3名と、その補佐官しか足を踏み入れる事ができない場所が此処だった。トリニティの庭を一望できる広大なテラスにぽつんと置かれてる長机にはその短辺に一人ずつ座っている。

片方はトリニティの真白い制服を身に纏う、大きな耳と明るい色の長い髪が特徴的な……神秘をヴェールに纏う少女。片方は連邦生徒会の真白い指定服とコート、蜃気楼のように実在と非実在の境界が曖昧な青年。

少女は長い袖に隠れた細く小さな指先でティーカップを持ち、香りを楽しむ。その肩には彼女のペットであるシマエナガが降り立ち、羽休め。優雅な午後と銘打って絵画にでもなりそうな風景だったが、今の時間帯は深夜に近い。天に浮かぶヘイローは昼間よりもその存在を確かにして、天幕に浮かぶ星は過去の輝きを放つ。テラスから一望できるトリニティには人影一つなく、木々の騒めきと常夜灯だけ。青年はその景色を瞳に映している。少女が作り出した夢の世界を。

——そう、これは夢だ。少女の神秘が作り出した夢。限りなく現実に近い、大脳皮質の生み出した虚空の世界。救世主の受胎を聖母に告げた天使の神秘を色濃く引き継いでいる少女だからこそ、ここままでリアリティのある夢をある程度意図的に作り出す事ができた。しかも、双方の意識が『これは夢である』と認識している明晰夢の状態。誰にも邪魔されない微睡、夢と現の狭間で揺蕩っている。

「トリニティとゲヘナの間で長きに渡って存在してきた、確執にも近い敵対関係。それに終止符を打たんとするもの」

青年と少女の距離は離れている。長机の長辺、約7 m弱。にも拘らず、少女の囁くような声は青年の耳に確かに届いていた。明瞭に、鮮明に、万一の聞き間違えすら起こらないほどに。そして、少女の耳にも青年の息遣いや布の擦れる音は届いている。自身の律動の全てが手を伸ばしても届かない距離にいる向かいの相手に知られている特異なシチュエーション。夢の主たる少女は口を開く。

「互いが互いを信じられないが故に、久遠に蓄積していくしかなかった憎悪。いずれ臨界を迎え、メルトダウンを起こすしかなかったそれを解消するため、新たに信頼を築き始めようとするプロセス」

少女の言葉はまるで名著を音読しているかのような心地だった。言葉がそれ自体に意志を持って弾んでいるような錯覚。だが、所詮は錯覚。言葉自体に意志はない。いつだって意志を持つのは言葉を発する喉、その奥にある心と云う不明瞭な器官だけ。故に、この言葉は少女の意志だった。

「聡明な貴方なら既に解を得ているだろうが……より簡単に言おうか、つまりはゲヘナとトリニティの和平条約だ」

その言葉を合図に、風が吹く。柔らかなそよ風。不穏な澱みや汚れ、見えないだけで空気の下の方に沈殿していた灰暗い何かを根こそぎ奪い去っていくような冷たさ。世界の吐息は容赦なく体温を奪っていく。

「ただ、連邦生徒会長の失踪を切欠に、この条約は何の意味も持たなくなってしまう」

静まり返る世界に陶器同士の鳴らす音は響く。夜空に溶けるように吸い込まれた音色は朝を告げるようだが、太陽は昇らない。夜の帳は降りたまま。

「エデン……それは太古の経典に出てくる楽園の名。そこにどんな意味を込めていたのかは分からないけれど、まあ連邦生徒会長のいつもの悪趣味だろうね」

その言葉に思う所があったのか、青年はその表情を僅かに翳らせる。ほんの僅か、近くで見ても気付かないほどに些細な変化。だが、この夢の主たる少女には筒抜けだった。

「……気を悪くしたら済まない。だが、私の知っている連邦生徒会長はそのような人物だった、というだけさ。貴方には貴方の知る連邦生徒会長が居て、私には私の知る連邦生徒会長が居る。何方も本物で、異なる一面を見ているに過ぎない」

少女は「話が逸れてしまったね」と軌道修正をかけて。

「——キヴオトスの、『七つの古則』は御存知かい？ その五つ目は、正に楽園に関する質問だったね」

キヴオトスの七つの古則。それを知る人物は驚く程に少ない。歴史に通じている者や、文化に通じている者。そのような人々のみが、この言葉を知る。だが、これは知るだけでは大きな意味を持たない。そこから更に一步踏み込んだ場所……キヴオトスの真実に辿り着いた者が、この古則が示す真実と意味を掴み取る事ができる。

「楽園に辿り着きし者の真実を、証明することはできるのか」

予知夢によりキヴオトス創世の記憶を持つ少女。

独力でキヴオトスの真実に辿り着いた結果、ヒトではなくなった青年。

この世界の最奥に最も近い、少女の声と青年の声が重なった。

「他の古則もまたそうであるように、これもまた少々理解に困る言葉の羅列だ。ただ、一つの解釈としては、これを『楽園の存在証明に對するパラドックス』であると見る事ができる」

それが、彼女が見出した古則。言葉を噛み砕き、構築し、己の世界を見た。パラドックス。正しく思える前提、妥当に思える推論、そこから導き出される受け入れがたい結論。

「もし楽園と言うものが存在するならば、そこに辿り着いた者は、至上の満足と喜びを抱くが故に、永遠に楽園の外に出る事はない。そして、楽園の外に出たのであれば、つまりそこは真の悦樂を得られるような『本当の楽園』ではなかったという事だ。であるならば、楽園に到達した者が、楽園の外で観測される事はない。存在を捕捉されうるはずがない」

故に、この古則の本質は。

「——存在しない者の真実を証明する事はできるのか？」

2人の声が再び重なった。

「つまるところ……この五つ目の古則は、初めから証明する事ができない事に関する『不可解な問い』なのだよ」

古則と銘打ち、楽園の名を出し、後世に残した七つの問い……その五つ目。その解が『初めから無い』なんて興覚めにも程があるだろう。だが、彼女は「しかし」と逆説的に言葉を綴る。

「ここで同時に思う事がある。証明できない事実は無価値だろうか？ この冷笑にも近い文章を通じて、何か真に問いたいことがあるのではないだろうか？」

少女と青年は、更に一步を踏み込む。この古則の真実に。

「エデン……：：：：：經典に出てくる楽園^{パラダイス}。何処にも存在せず、探す事も能わぬ場所。夢想家達が描く、甘い甘い虚像」

人類の始祖が確かに居た場所、まだ神の御許に居る事を許された時代。しかし、蛇に唆されて知恵を食んだことにより追放されてしまった。罪を知った我らには戻る事はおろか、探す事すら許されなくなってしまった遥か遠き理想郷。故に、少女は楽園を虚像と称した。

「どうだい？ そう聞いてみると、この『エデン条約』そのものが、正しくそんなもののように思えてこないかい？」

つまりは、そういう事である。

存在しないエデン。ある筈のないパラダイス。二校が手を取り合うのは正に理想だろう。だからこそ、有り得ない。楽園なんて単なる言葉遊び。儘ならない現実を塞ぐ砂糖色のアルカロイド。蜃気楼を追い求めて、奈落に真つ逆さま。

「……先生」

少女の声が凜と響く。髪色と同系色な少女の双眸はあらゆる虚飾を取り払い、残酷なまでに真実の色を帯びる。見つめる先は同じように、真実の色彩を帯びる青年。

「もしかしたらこれから始まる話は、貴方のような者には適さない、似つかわしくない話かもしれない」

——残酷なまでの、この世界の真実。

「不快で、不愉快で、忌まわしく、眉を顰めるような……」

——痛みを重ね、流血を重ね、死を重ねてきた歴史。

「相手を疑い、前提を疑い、思い込みを疑い、真実を疑うような……」

——醜い醜い、人の性。

「悲しくて、苦くて、憂鬱になるような……それでいて、唯々後味だけが苦い……そんな話だ」

——この世界にハッピーエンドはありえない。

「しかし同時に、紛れもない真実の話である」

それこそがこの世界の姿だと、少女は異邦人に告げる。宛ら、かの天使が聖母に告げたように。

「どうか背を向けず、眼を背けず……最後のその時まで、しっかりと見届けてほしい」

少女は眼に意志を灯す。篝火のような、明けない夜を照らす導の灯を。

「貴方は、かの十字の救世主が歩んだ受難をなぞることになるだろう。ゴルゴダの丘で磔刑に処された、その末路まで。貴方はそう遠くない内に死ぬ。それは変えられない。変える事を許されていない」

既定路線の運命。呪いのような彼の短命。進むという事は終わりに近づくという事。歩いたら歩いた分だけ彼は死に急いでしまう。

少女とて、それに対して何も思わない訳がない。

「だが、それでも貴方は歩まなければならぬ」

数多の願いを背負った。無数の笑顔を報いにした。そうして、彼は^{未来}星を見上げた。

——そうだ。彼はずっと、^{希望}星を探していた。

「それが、先生……『この先』を選び、^{キウオトス}世界ではなく進化を間違えた我々の側に立ち、神秘からの解放を志した、貴方の義務だ」

少女の言葉を彼はただ静かに噛み締める。この選択の責任を。

——あの日、突き付けられた二択。星の側に立つか、知性体の側に立つか。相反する二択。星を選べば次期の生命を育む基盤を固めるためだけの機構に成り下がる事を意味する。知性体の側に立てばあらゆる安息から見放され何処にも行けなくなる。

そんな、最悪の二択。その決断を迫られた時——彼は己が半身

たる連邦生徒会長と袂を分かつと知りながらも、生徒の側に立つことを一切迷いなく選んだ。

これを選んだ以上、戻れない事は分かっている。

世界中の笑顔と決別してでも帰りたいかった、少女達との日々。それに背を向けたのは、あの世界で日々を生きる生徒達のため。誰よりもキヴオトスとそこで生きる人々を愛したあの少女のため。

ああ、そうだ——彼女の代わりに彼は今ここに立っている。

故に、この回答に一切の揺らぎも迷いも後悔も逡巡もなかった。

「私は先生だからね。最期まで責任を果たすよ」

——即ち、この先を夢見た責任を。

「悲しい物語は、ハッピーエンドで終わるべきだ」



トリニティ総合学園、数ある教室のうちの一つ。上等な木から作られた机と椅子、豪華な飾電灯シャンデリア、陽の光を良く取り込む窓。壁や天井には白や金を基調とした、宮殿の一室を思わせる気品ある装飾が施されているが、壁に掛けられた時計と黒板、その近くにある教壇が紛れもなく教室であると示している。

元々は空き教室の一つだった場所であるが、今は補習授業部の部室であり、教室であり、勉強部屋。4人の部員に対して広すぎる部屋は、その4人が仲良く固まって教壇の目の前で机に向かっているから、よりその印象を強める。

少女達が視線を落とす先にあるのはホチキスで閉じられたプリント達。基礎から発展、応用まで幅広く網羅した問題集は補習授業部の顧問が作った特別製であり、少女達の得意不得意に合わせられている。

プリントを作成するために費やした作業量と時間が膨大だった事は想像に難くないが、『普段の仕事に比べれば全然楽だよ』と作った本人は笑うだろう。

少女達は思い思いの様子で問題と向き合っている。手を動かし、頭

を悩ませて。ああでもないこうでもない、これなら解けるかも？ 試行錯誤の繰り返し。それを繰り返し、本番に備える。何の変哲もないある日の昼下がり、補習授業部の活動風景だった。

教室を支配する音は文字を書く音と、紙を捲る音。開かれた窓から入り込む風は瑞々しい緑の色彩に溢れていて、夏の足音がすぐそこまで迫っているのだと感じさせる。

教壇横に置いた椅子に座る先生は風の声と教室の音を聴きながら手元の本を捲る。少女達が問題に向き合うように、彼もまた文字と向き合う。彼自身そこまで読書家というわけではないが、手持ち無沙汰な時間に書籍を開く情緒は持ち合わせているつもりであるし、本を読むこと自体も好きだ。紙の手触り、インクと紙が混ざった独特の香り、或いはページを捲る動作そのもの。オルタナティブでは味わえない視覚情報以外からの読書……尤も、これはウイヤシミコの受け売りだ。

時折、勉強に励む少女達に視線を送りつつ本を読み進める。持ち込んだ仕事にもケリがついた穏やかな午後、先生は久しぶりに自分の時間を過ごしていた。

だが、穏やかな時間とはいつまでも続くものではない。プリントと向き合う生徒達の中で最もペンの止まる回数と時間が長かった少女がけたたましい音と共に立ち上がった。

「——もう嫌ッ！」

静寂が支配する穏やかな午後は少女の癩癩とも呼べるような声により終わりを告げる。勢いよく立ち上がり、握っていたペンを机に叩きつけた彼女は下江コハル。正義実現委員会所属を表す制服は若干オーバーサイズで、肩幅や袖の長さが合っていない。元々小柄で線の細い彼女であるが、大きな制服の所為で余計にそう思わせる。腰の小さな黒翼と頭の黒翼は苛立ちを隠せないようにでパタパタと揺れて、その風で結ばれたピンクの髪が揺れている。

「こんな事やってらんない！ 分かんない！ つまんない！ めんどくさい！ それもこれも、全部先生のせい！」

「ええ、私……？」

唐突な、癩癩とも呼べる責任転嫁に先生は苦笑いしながら本を閉じる。彼は「まあ、生徒の成績不振は先生の不徳の致すところと言われたら、そうかもだけど……」と呟いてコハルの方に視線を送れば、彼女は猫のような眼で先生を睨みつける。その顔には『全然分かんない！』と文字が書かれているようで、大方何処かの問題で堂々巡りに陥ったのだろうと推測。

分からないのも、つまらないのも、面倒なものも分かるし、それを先生自分の所為にして貰っても構わない。だが、だからといってやらずに放っておいてしまうと後で困るのはコハル自身だ。彼女のためにもここはちゃんと机に向かわせ、問題を解かせなければ。

彼は『さて、何処で詰まったのやら』なんて思いながら。胸ポケットのボールペンを取り出し立ち上がろうとすると……コハルの言動を窺めるように、或いは彼に助け舟を出すように一人の生徒が立ち上がった。

「もう、コハルちゃん。そんな無茶苦茶なことを言ったら先生が困ってしまうでしょう?」

コハルと同系色の髪色。コハルと正反対な真白い指定制服。ちゃんと食べているのか心配になるほど華奢なコハルに対して、出る所は出て引っ込んでいる所は引っ込んでいる女性の体躯。ある意味、補習授業部で一番の問題児にして手のかかる愛生徒し子……浦和ハナコはおっとりとした落ち着いた口調で、コハルを宥めるように肩に指先を滑らせた。

途端、猫が毛を逆立つように肩を跳ねさせるコハル。顔は困惑と羞恥と、あとほんの少しの別の何か。猫のような瞳が大きく見開かれたコハルに対して、ハナコの翡翠色の瞳は蠱惑的に細められている。この状況を楽しんでいると、誰の目から見ても明らかだった。

「あくまで先生は私達を助けるために来てくださってるんですし……そもそも勉強が分からないのも試験に落ちたのも、先生ではなくコハルちゃん自身の所為で……」

「うっ……!」

並べられるハナコの言葉は驚く程に全てが正論であり、正しさの暴

力だった。それに滅多打ちにされたコハルは呻き声を一つ漏らして、必死になつて脳内で反論を模索する。しかし、ハナコが並べた言葉の全てに思い当たる節があるため、反論らしい反論なんて出来そうもない。故に口を衝いて出たのは、反論とも呼べない苦しい弁明と言いつつ、つまりは逃げだった。

「私は正義実現委員会の一員だから！ それで授業に出られない事が多くて……そう！ その所為なの！」

「それは他の正義実現委員会のメンバーも同じだ。だが、此処に来ているのはコハルだけ」

コハルに許された唯一の逃げすら、ハナコと同じく正論の暴力で叩き潰した少女は白洲アズサ。白の長い髪。白の翼。全身に散りばめられた花を模したアクセサリー達は人形のような美しさを持つ彼女を更に引き立たせるものであり、この飾りを選んだ人のセンスが光っている。ラベンダーを思わせるアズサの鋭いながらも慈しみに満ちた眼光がコハルを貫いた途端、彼女は呻き声すら出せずに黙り込んだ。

正義実現委員会は同じくマンモスたるゲヘナの風紀委員会に匹敵する規模であり、その人数は一個旅団に匹敵する。そんな莫大な人数を抱えていながらも、成績不振により落第寸前まで追い込まれ補習授業部に放り込まれたのはコハルだけだ。

つまり正義実現委員会のメンバーは皆、多忙ながらも勉学との両立をしているのだ——コハルを除いて。そしてコハルの憧憬の先にいるハスミは、副委員長という多忙極まる席にしながら成績優秀だったことを思い出して……完全に沈黙してしまった。

そして、そこに無慈悲に追い打ちをかける生徒が一人。

「なるほど。つまりアズサちゃんが言おうとしているのは、唯々コハルちゃんがおバカさんだからですよ、という事で合っていますか？」
「まあ、それもあながち間違っていない。仕方の無いものは仕方ない、人生は往々にして虚しいものだ」

「確かに人生は苦痛の連続ですからね……そういう事もあります」

「だが大丈夫だ、コハル。私はコハルの良い所を知っている。勉学が

人間の全てではない。一緒に頑張ろう、コハル」

「ああもう、うるさいなあッ!? そんな事言ったらあんた達も皆一緒にじゃん! 私がバカなら此処に居る全員バカでしょバーカ!」

眼を逸らしていた現実という名のナイフに滅多刺しにされ、剩えそこに慰めの言葉を投げかけられたコハルは怒りのままに叫ぶ。ヤケクソ、自暴自棄、開き直り。全力で自分を柵に上げるその様子は決して褒められたものではないが、コハルの言葉もまた正しい。経緯は違えど、全員成績不振の烙印を押されて補習授業部に集ったメンバーなのだ。コハルがおバカなら全員おバカ、何も間違つてはいない。

「あはは……えつと、それはその……」

その暴論にも思える言葉に巻き込まれたのは、皆が可愛い言い争いしている間も一人黙々とペンを動かしていた少女、阿慈谷ヒフミ。自分自身を平凡と称する彼女は確かにコハルやアズサのように翼を携えているわけではなく、ハナコのように抜群のプロポーションを持っている訳ではない。ペロロのバッグがトレードマークの、華の女子高生が彼女だ。

尚、彼女の平凡さの裏に隠れた非凡性、逸脱性を知る先生は『え、もしかして私も含まれてる?』と内心でどうでも良い事を考えている。

そんな2人を見て、コハルは『相手にしていない』と認識する。唯でさえバカ呼ばわりされても特に怒ったりせず、落ち着いた『大人の対応』をしていたのだ。ヒフミや先生は勿論として、ハナコは遊んでいるだけだし、アズサは思った事をそのまま口に出しているだけ。そこに現状への不満などは見受けられない。

コハルが補習授業部の生徒の中で最年少とはいえ、その差はたった学年1個分。一歳しか変わらないのにも関わらず、癩癩に似た幼稚な行動をしているのは自分だけ、ヒートアップしているのも自分だけ。それを認識した途端恥ずかしさが込み上げてきたが、だからといって止まる訳にはいかない。吐いた唾は? めないのだ。

「な、何も間違つてないでしょ!? バカだから此処にいるんでしょ!」
髪色よりも更に赤みが強くなった頬の色のまま、コハルはヒフミ、ハナコ、アズサの順に指を刺す。ヒフミは「あはは……」と呟いて苦

笑い。ハナコは年の離れた妹を見るような暖かい眼差しでコハルを見つめ、アズサはいつも通りの透明な表情。徹底的に相手にされない、と認識したコハルはそのまま最大の声量と勢いで先生を指差した。

「あんたもッ！」

「私は一応先生なんだけどなあ……あ、あとあんまり人を指差しちゃ駄目だよ、コハル」

「う、うるさいッ！ 先生面しないでッ！」

「先生面も何も、先生なんだけど……」

「あう……こ、コハルちゃん、ちよつと落ち着いて……」

言葉を捲し立て肩で息をするコハルを宥めようとヒフミは近寄るが、それではコハルの爆発は止まらない。彼女は先程の勢いのまま、机を割る様な勢いで両手を天板に突いた。

「落ち着いてなんていられないわよ！ みんな仲良く退学になりそう
な、こんな状況で……！」

その声には現状に対する怒りだけではなく、己の不甲斐なさや悔しさが滲んでいる。結局の所、補習授業部に集められ馬鹿の烙印を押された事ではなく、その先……この状況を期日までに打開できなかった末の退ゲームオーバー学が嫌なのだ。

「もし退学になったら……せ、正義実現委員会のメンバーじゃ、なくなっちゃう……うう……」

「勿論私も退学になるつもりはない。何をしてでも、たとえ惨めな思いをしてでも乗り越えてみせる」

「まあまあ、退学になったからといって何もかもが終わりという訳ではありませんから、気楽に生きましょう。寧ろ……」

「——あ、あの……ッ！」

ハナコの言葉の先を遮るようにヒフミが珍しく大きな声を上げる。途端に集まる4人分の視線に、人から注目を浴びる事に慣れていないヒフミは若干たじろいでしまうが、今ここで声を上げないとずっと向いている方向がバラバラのまま本当に全員退学になってしまうから。「あ、えつと、その……」としどろもどろになりながらも必死になって

頭の中で言葉を纏める。

「こうして集まっているのは、そもそも退学せずに済むようにするためですし……取り敢えずその、今は皆で知恵を寄せ合って、何かいい方法を探さないと……そうしないと、一週間後には本当に仲良く全員退学、なんて事に……」

「成程、ヒフミちゃんの言う通りです。『知恵を寄せ合う』ですか……いえ、悪くないのですが、あまりグツとくる感じではありませんね。もう少しこう、何か……」

そう云い、ハナコは思案顔で何かを考え始める。顎に手を当て、眼を細めて、考えるテンプレート。ヒフミの言葉の響きが気に入ったのか、それとも逆に気に入らなかったのか。個人の趣向は分からないが、ともあれヒフミの言葉がハナコの何かに触れたのは紛れの無い事実だった。

そして、彼女は見惚れそうなほど良い笑顔で顔を上げた。

「ここは例えば、そうですね……『弱くて敏感な部分を寄せ合う』、という形で如何でしょう?」

「……?」

「あはは……」

ハナコの言葉の意味がよく分からなかったアズサは頭の上に疑問符を浮かべ、ヒフミは本日何度目かの苦笑い。先生は『ハナコらしい言い回しだなあ』なんて思いながら、そろそろ勉強に戻らせた方が良くかなと腕時計を見る。

そして——コハルだけは顔を真っ赤にしていた。ハナコが敢えて明言しなかった、言葉を解釈する人に想像の余地を持たせていた部分を妄想してしまったのだ。それも、真っピンクな方向で。ハナコの言葉と自身の妄想のダブルパンチで赤くなった頬のまま、ハナコを甲高い声で怒鳴りつける。

「い、いきなり何言ってるの!! 下ネタは駄目! 禁止! 死刑! び、敏感な部分って、何をどう寄せ合おうっていうわけ!」

「ああ、ちよつと分かり難かったですか? では、実際にやってみせましょうか。もう少しこう、足を開いていただいて……」

笑顔のままにじり寄るハナコに次第に困惑の色が強まって来たコハルは、一步一步後退りながら「……え？ えッ!?」と声を出す。その光景は宛ら捕食者と被捕食者。コハルは若干涙目だった。

「や、やめてー！ 近づかないで！ 知らないし分かりたくもないしまだ早いからッ！」

「えいっ♡」

背を向け、全力で逃走しようとしたコハルの初動を的確に潰したハナコ。逃げられない事を悟った、悟ってしまった彼女は涙目になりながら……蚊帳の外にいる先生に助けを求める。

「や、やめッ……！ やめてえっ！ たっ、助けて先生……！」

「あー……ヒフミ、あそこに私が止めるためとはいえ混ざったら流石に拙いよね？」

「あはは……えつと、その……はい」

「だよねえ……というわけで、ごめんねコハル。私は君を助けられない……」

ああ、何と無力なのだろう。何と不甲斐ないのだろう。別に死ぬ事は怖くないが、社会的な物となれば話は別だ。セクハラ野郎と書いて先生と読む、なんて言われた日にはそのまま首を吊りかねない。己の性別が彼女達と同じであれば或いは……と若干ずれている懺悔をしていると、とうとうハナコの手がコハルの素肌に優しく触れた。

「わ、私が悪かったです先輩相手にタメ口ですみませんでした！ もう許してやめてっ、それはまだ嫌あーッ！」

唯一ハナコを止めれそうだった先生がこの場で一番役立たずだったことに絶望しながら、こんな事になるなら最初から別の2人に助けを求めればよかったと思いつながら。誰も助けしてくれないなら自分の力でどうにかするしかないが、しかし思うように力が入らない。仮に力が入ったとしても上から手首を抑えつけられて優しく伏せられる。

ハナコが涙目のコハルを手玉に取り、圧倒する様子を……アズサは真剣な表情で分析していた。主にハナコの動きを。

「鮮やかな制圧術だ。抵抗する力を外部に流して無力化しているのか。動けば動くほど渦中に嵌る……ふむ、勉強になる。ハナコは博識

だな……だが、何処の流派だ？ 型が読めない……」

「アズサは知らなくていいよ……君はそのまま置いてね」

コハルの名誉のために先生は絡み合っている2人を意図的に視界から外し、アズサの眼を手で覆い隠すと……ヒフミと眼が合った。コハルと同じく若干涙目。だが、其処に籠っている感情は全くの別物だった。

「せ、先生え……」

「一緒に頑張ろうね、ヒフミ」

「よ、よろしく願います……」

前途多難が過ぎる現状。癖が強すぎるメンバー。トリニティの落第寸前生徒の集まり、補習授業部。

阿慈谷ヒフミ。白洲アズサ。浦和ハナコ。下江コハル。一見すると共通点なんて全くない、所属も学年も違う4人の少女達が何故補習授業部のメンバーとして集められたのか。

そもそも、何故補習授業部という部活がトリニティ総合学園に設置され、その顧問にシャーレの先生が選ばれたのか。

「このままだと、本当に……私達皆退学に……」

ヒフミの溜息交じりの呟きは、コハルの羞恥混じる悲鳴によって掻き消された。

——話の発端は、数週間前に遡る。



「最近、心が何処に在るか分からなくなってきたんだ」

「花を踏んでも、蝶を踏んでも、痛くなくなったんだ。あの頃が嘘みたい。多分、そのうち誰かの死体を踏んでも痛くなくなると思う。誰かの痛みを感じなくなっていく……それが、怖いんだ」

「なんで私は、生きているんだろうね」